


AC Zokuzoku gunsho ruiju
145
G857
v.3

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

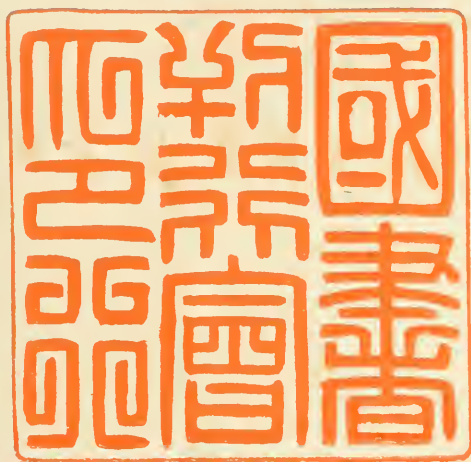


Digitized by the Internet Archive
in 2009 with funding from
Ontario Council of University Libraries

續六群書類從

第三

AC
145
G857
v. 3



續々群書類從第三

例言

一本輯は、史傳部の第二として、常德院畫像贊并序以下、傳記の類に屬するもの二十二種、史料戰記の類に屬するもの八種を收む。

一常德院畫像贊并序は、足利九代將軍義尙の事を記せるものにて、作者は、南禪寺主僧周麟なり。周麟は、當時の人にて、嘗て等持院にありし時、屢々義尙を見たること文中に記せるを以て其正確なる傳とするに足るを知るべし。周麟永正十五年寂す。本編内閣所藏寫本翰林葫蘆集によりて收む。

一細川頼之公祠堂記は、法皇外記の撰者僧元策の作なり。史料編纂係本に據りて收む。

一加藤光泰貞泰軍功記及び曹溪院行狀記は、舊大洲藩祖の事を記

せるものにて、原本は右大洲曹溪院の所藏なり。作者を知らずと雖も、同寺の僧などの記せしものならん。

一尊語集抄は、舊徳嶋藩祖蜂須賀家政以下三代の言行を記せるものにて、史料編纂係寫本に據る。

一立齋舊聞記は、舊柳河の藩祖立花宗茂一生の事を記せるものにて、南溟矢野氏所藏本を底本として、内閣本及び帝國大學圖書館本によりて誤字を校訂す。後の二本は平假字交り文にて記し、卷數を上下の二に分つ。所々脱字脱文あるを以て、本書の誤字疑文を悉く正す能はず。

一事語繼志録は、松平信綱の事を記す。本會所藏本を底本とし、内閣本を以て校訂す。されど猶ほ通じ難き箇所あるを免れず。

一紀侯言行録は、舊和歌山藩祖徳川頼宣の事を記せるものなり。内閣本を底本とし、黒川本を以て校訂す。但し兩本行文及び卷別け

を全く異にす。黒川本十卷あり、恐らくは、前者原本に近きに似たり。但し總目錄及び毎條の見出しは其闕く所なるも、便宜の爲め、黒川本によりて補ひたり。

一 吉備烈公遺事は、舊岡山藩主池田光政の言行録にして、藩儒湯淺元禎の撰なり。黒川本を底本とし、内閣本を以て校訂す。是も兩者全く行文を異にし、本書の類本としては別に得る能はざりしを以て、誤字疑文を其まゝ存せる所多し。

一 土津靈神言行録は、舊會津藩祖保科正之の事を記せるものにて、黒川本を底本とし、帝國圖書館本を以て校訂す。二本各得失ありて、黒川本は脱漏多く、圖書館本は誤字多し。今理義の通ずる所によりて是正し、一々これを文下にことわるに及ばず。

一 桃源遺事は、水戸黃門の傳及び言行録にして、帝國圖書館本に據りて收む。本書世に類本多しと雖も、多くは略本にして、卷尾編纂

者三木幾右衛門等の名を署せず、文章辭句また改竄を経たるものに似たり。本輯採る所は、蓋し編纂當時の原本に近きものにて最も精密なり。但し書中を按ずるに、最初の二卷は本文にして、後三卷は附録なるべし。然るに普通世間の本及び本書の分ち方にては、第二卷の後半のみ附録なる觀あり。思ふに後人の漫に卷分けをなせるものならん。

一宗長居士傳は、足利季世の俳人柴屋軒久庵の行實を記せるものなり。撰者如松子福住道祐は、種々の點より、黒川道祐と同人には非ざる歟と迄は考へつきたれど、猶ほ確證を得ざるを以て多少疑念を懷き、是を三上博士に質せしに、博士より「如松子は群書類從中豫章記の奥書などにも見ゆ、松本愛重君の話に、林崎文庫本に黒川道祐の自筆本あり。その判にて又福住とも云ふことが知れる云々。」との答を得て、本書は、かの雍州府志の作者として名高

き、黒川道祐の作なることを確め得たり。茲に兩博士の厚意を謝す。

一惺窩先生行狀は、林羅山の撰、羅山林先生行狀は、羅山の季子讀耕齋靖の撰なり。兩書流布版本の文集に採る。

一舜水先生行實并略譜は、水戸の儒臣今井弘濟と安積覺との合撰なり。史料編纂係本によりて收む。

一貞慧傳は、大織冠藤原鎌足の子、僧貞慧の傳なり。家傳上鎌足傳の末に、別に傳ありとあるもの、蓋し是れにして、實に千餘年の珍書なり。作者は詳ならずと雖も、文中の趣を以て察するに、高麗僧道賢か、若しくは當時を去ること遠からざる人の、道賢の談を基として、其初めに數行の文を附せるものならん。貞慧、日本紀には定慧に、鎌足傳には定惠に作れり。通音なればなるべし。奥書に弘法大師御筆云々とあるは、大師押勝を誤りたるものなること論な

師事すること十餘年、博學通ぜざるなく、遂に大徳の域に達す。著書頗る多し、嘗て屢々宮中に召されて、後宇多上皇の爲めに經を講ぜりと云ふ。本書世に傳はるもの稀なり。京都妙心寺所藏本を借り得て茲に收む。蓋し亦珍本なり。

一存覺上人一期記は、本願寺第三代の法主覺如の長子存覺の事を記せるもの。編者は其子なりと云ふ。存覺は、嘗て異義者として破門せられしことあり。眞宗の偉僧にして、其著六要抄は、眞宗の御本書と稱する。教行信證文類の注釋にて、眞宗に在りては、文類に次ぎて有名にて且つ必要のものなり。流布版本によりて收む。

一普照國師年譜は、黃檗山の開祖隱元の行實にして、上下二卷より成り、上卷は、支那に於ける其半生にて、其門人性日の撰に係り、下卷は、渡來後示寂に迄る記事にて、門人性派の撰する所なり。

一楠木合戰注文は、前田家の藏本にて、本編は、黒川氏の右本を映寫せるものに據れり。

一忽那一族軍忠次弟及び忽那嶋開發記は、伊豫忽那嶋なる忽那氏の藏本なり。史料編纂係本によりて收む。

一瑠璃山年錄殘編は、遠江敷知郡大福寺の藏本なり。南北朝の頃より、應永年中に至るまで、寺中の行事をあらゝ記し、文中往々世間の事に及ぶ、蓋し當時住僧等の見聞せる所を記し置けるものなるべし。大學史料編纂係本によりて收む。

一天野山金剛寺古記寫は、同寺所藏の經背に記し置きたるものを書き集めたるもの、以て史料に供すべし。但し半程より後は、寺僧の後年書き加へたるものと見ゆ。史料編纂係本を收む。

一續南行雜錄は、水戸の儒臣佐々宗淳、元祿年中藩命によりて南都に至り、春日若宮社司等の家に就きて採集せるものにて、代々の

にせり。

一本輯は、南溟矢野太郎氏専ら編纂校訂の任に當られたり。

尙ほ材料撰擇の際、博士田中義成氏より有益なる助言を得たり。
茲に其厚意を謝す。

明治四十年九月

續々群書類從第三史傳部

目錄

常德院畫像贊并序	一
細川賴之公祠堂記	四
加藤光泰貞泰軍功記	七
曹溪院行狀記	二四
尊語集抄	三一
立齋舊聞記	
卷之上	三七
卷之下	七三
事語繼志錄	
卷上	一一五

卷下 一五五

紀侯言行錄

卷上 一九二

卷中 二一二

卷下 二三三

吉備烈公遺事 二四六

土津靈神言行錄

卷之上 二六〇

卷之下 二七七

桃源遺事

卷之一上 二九七

卷之一下 三〇七

卷之二 三二四

卷之三……………三二九

卷之四……………三四九

卷之五……………三七二

宗長居士傳……………三九二

惺窩先生行狀……………三九五

羅山林先生行狀……………四〇〇

舜水先生行實并略譜……………四一五

貞慧傳……………四二六

行基年譜……………四二八

弘法大師弟子傳

卷上……………四三八

東寺第二世實慧僧都傳……………四三八

和州室生開山堅慧大德傳……………四四二

東大寺泉隣大德傳……………四四三

高野山東南院開山智泉大德傳……………四四三

元興寺泰範大德傳……………四四五

和州超昇寺開山真如親王傳……………四四六

城西高雄山第二世真濟僧正傳……………四四七

城南深艸貞觀寺開山真雅僧正傳……………四四九

和州牟漏寺真泰大德傳……………四五一

東寺圓明律師傳……………四五二

西山神護寺忠延大德傳……………四五二

卷下

城西海印寺開山道雄僧都傳……………四五三

嵯峨法輪寺開山道昌僧都傳……………四五四

金剛峰寺第二世真然僧正傳……………四五六

洛東禪林寺開山真紹僧都傳……………四五七

城州小栗栖法琳寺開山常曉律師傳	四五八
真際法師傳	四五八
真境法師傳	四五八
真體法師傳	四五八
攝州六甲山神咒寺如意后尼傳	四五六
弘法大師餘光分	四六一
大法師淨藏傳	四六五
圓照上人行狀	
卷上	四七六
卷中	四八六
卷下	四九五
存覺上人一期記	
卷上	五〇六

卷中 五一

卷下 五一六

普照國師年譜

卷上 五二一

卷下 五三五

楠木合戰注文 五四八

忽那一族軍忠次第 五五七

忽那嶋開發記 五五九

瑠璃山年錄殘編

卷上 五七二

卷下 五七六

天野山金剛寺古記寫 五七九

續南行雜錄

祐茂記抄……………五八九

祐春記抄……………五九五

祐世記抄……………五九六

祐植記抄……………五九七

祐辰記抄……………五九八

祐維記抄……………五九八

祐園記抄……………六〇六

祐文記抄……………六〇八

祐磯記抄……………六〇八

祐範記抄……………六〇九

古曆寬元三年四年
建長元年三年……………六一〇

二條寺主家記拔萃……………六一〇

南京地方寺社故事本題名元所無今爲便
宜一括下記數件名之

春日社司

六一七

興福寺諸堂間數

六一八

大和國中廻文次第

六一九

諸末寺別當等事

六二〇

南都七鄉事

六二〇

興福寺總末寺

六二一

春日社領并興福寺領

六二一

大乘院日記目錄

第一

自治曆元年
至應永卅二年

六二三

第二

自應永卅三年
至寬正六年

六四五

第三

自文正元年
至文明十五年

六六二

西征日記

六七六

田邊城合戰記

六八六

續々群書類從第三史傳部目錄終

續々群書類從第三

史傳部 二

常德院

贈大相國一品
悅山大居士畫像贊并序

古之君子天下者、一代之間必有二三英主而起焉、漢承百王之弊、高祖撥亂反正、至孝武、乘時豐富、宮室之修自、此日盛、末年海內虛耗、盜賊並起、昭帝初立、匈奴和親、百姓休息、而以童稚之年、辨霍光之忠、可謂明矣、然壽二十二、享國不永、惜哉、唐至玄宗、稱太平、後陷祿兒亂、肅宗反、復二京、以迎上皇、可謂賢矣、然在位歲七年、惜哉、宋至神宗、勵精求治、而惑於宰臣、卒成禍亂、哲宗繼立、宣仁垂簾、儒臣進講、以致元祐之治、然壽二十五而止、惜哉、吾日域、天皇統御不肯蹈土、而垂拱於九重之

上、故授錢將軍、安、定六十六州、權準皇家、郡國稱臣、非僭也、吾等持仁山起於關東、握天下於馬上、以立洪業、寶篋瑞山繼統、鹿苑天山遵業、修文、勝定顯山、晉廣善山相繼而立、咸惠並施、以至慈照喜山、寬正六年乙酉冬十一月二十三日、元子、生于泉州太守之宅、是號常德悅山、母曰、從一位藤原富子、而喜山領鈞軸者四十餘年矣、承平日久、號令時寬、則亂必生、應仁元年丁亥、洛中大亂、東西瓜裂、于時悅山公年三歲、育于營中、文明元年歲在己丑、公甫五歲、出受諸侯百官之禮賀、貞宗朝臣輔之、義等保傳、九歲元服、天皇授征夷大將軍、蓋喜山請代之、擇日參內、父子拜前後、榮莫以加焉、公試乎射御、自然合度、又試和歌、即賦一篇、爲喜山之壽、文武之器見於茲矣、公在營中也、陣勢以固、黨逆挽弓者、皆歸其心矣、丁酉之冬、敵壘不攻皆降、洛中按堵如故、公十五歲、始行押字、代喜山領天下事、而將軍家代々入正覺之門、於是頂戴衣盂、癸卯之春、開東閣會、集吾禪林能詩者、公武之間善和歌者、併四十人、兩々合評、而公歌與橫川詩相對、一時文戰也、公一夕夢見、後京極攝政詠和歌曰、此一篇以爲自

贊、夢中記其辭、覺而檢家集、果有焉、因命畫工圖彼像、使亞相雅親書其辭於其上、攝政乃中古以歌鳴于本朝者也、公幼精于此藝、而有神助、可知也、書法特妙、一時能書者亦鮮能及、翹館畫閣、命雅久宿禰講論語、又召兼俱卿講神代記、因知日月之始乎吾國、故禮神雅謹、丙午之秋、大將拜嘉命、政行朝臣、糾儀官禮甚習、都人縱觀之、長亨元年丁未秋九月十二日、事于江州、討不庭也、丁亥喋血京師以來、王風委地、將威不振、公慨然有澄清海內之志、而自將伐之、躬被戰袍、樹旌旄、羅弓矢、三軍皆從、觀者塞塗、父老以手加額曰、真大將軍矣、遂以於叡山之下、十月進兵渡湖、賊徒逃去、屯軍以索之、此一舉不出於造次、先是召釋某記室、令講孝經、曰、大孝者揚名顯親、公聞此言、而心誓不可不再回將門之威柄、京之等持有勝軍像、此乃仁山開國之初、塑以爲子孫將來歸依、而冑劍與光缺焉、出師之日、速令修之、其志可射矣、軍中有間、復召某記室、講左氏傳、文武兼修、罕見其比、戊申之冬、公方不豫、至春病篤、己酉三月二十六日薨、軍中、親書和歌二章而遺、壽二十五、嗚呼惜哉、

天下聞者哭之慟、天皇謚大相國、哀榮交臻、去年命工造地藏像、而令乳姆已下女伴各出妝鏡、以鑄法器、又令繪彌勒、臨易簪而像成、至是咸謂、公預知大限、薨後數日家人夢、公告曰、我有和歌、奉寄大夫人、若有和章、必置之我靈前、大夫人疊和二章、俱上軸以掛公像側、又夢告人曰、爲我運轉大藏經、故當小練日、有大法會、公中日毅然、以武事自任、而復嗜和歌、崇信佛者、口慈驗矣、抑公行實、以吾觀之、要非今人、求之古人、可也、尊母內助、傾心講筵、似哲宗也、合諸侯以不辱父命、似肅宗也、明以照姦、似昭帝也、一身以當三君、可謂英主矣、其若敬佛、昭哲二君之所不敢、唯肅宗參禪有焉耳、彼則年過知命、公未及而立、知有此事、不可希有乎、天假之齡、而當軸者有日、則仁山天山之業、立可復焉、天奚不佑吾日本乎、子俗姪尙氏、自公五歲而事之、語予曰、吾君天縱、生知諸藝、無資於學、而有大度喜施、服玩寶器、有顧而寓目者、乃賜之、其言之詳矣、予今措贊詞、竊比於班彪作元帝傳贊、爲不誣焉、其髮毛之黔然、眉宇之秀然、著袞冕之巍然、以爲可得而見歟、

則漢乎其無言、以爲不可得而見歟、予嘗承之等
持官寺、故歲之抄首、或府中之有慶、皆從諸老之後
而賀之、適得望見英姿、猶在目旁、弗忘、決非庸
工之所可髣像也矣、謹述贊曰、

惟公間出、乙木酉雞、如鳳之至、非桐不栖、紅顏綠
髮、青瑣紫泥、入相出將、風翮霜蹄、江州首事、萬馬驕
嘶、關中塞外、坂東鎮西、欲大有爲、來蘇望霓、一朝
星落、孤城雲迷、軍皆縞素、壯士慘悽、歸葬于洛、雨紉
淒々、痛入萱背、涕流桃蹊、我心無及、天意亦奚、晨
香夕火、常德招提、

城州路葛野郡衣笠山
故管領四國大將軍細川源賴之公祠堂記

寓地藏禪院 元策撰

本朝自神武至今上而百十有一葉、其間治亂興廢、皆在陛下執政之所系、而至神器禪受之際、終無他姓之迭興而叛其帶礪之誓、此故宋太宗謂宰臣云、日本國尙存古道、中國自唐季分裂、世數尤促、朕孜孜救理、卿等宜盡心、毋令日本國獨享福慶、其歆美如此、中古顯德帝賞源賴朝閔閔之功、委政柄於柳營、傳至三世、北條平氏從而承之、九世而絕矣、爾後上無囊括之權、下有并吞之勢、關中瓦崩、海內塵起、干戈交戰、雌雄相角、於是源尊氏一呼奮振、而豪傑風靡、至數年而天下拱手、光明帝褒稱其勞、使補故賴朝之舊職、尊氏薨而義詮紹之、貞治六年義詮欲病而殂、世子義滿生在襁褓、時論以遺輔擇一人而爲急、營下僉議謂、右馬頭賴之實文武全才、輔託良臣者乎、襲飾先朝貞永貞應之舊典、政譽久有令聞、況近年潰破清氏邪黨、四國悉歸麾下、願殿下召此

人、敦囑遺託之命、何慮之有、粵遣使於讀府徵之、賴之乘傳而來、義詮扶起而慰諭遠來、且指幼君謂賴之曰、我今爲公與一子、亦指賴之謂幼君云、爲汝與一父、遵諭之教、勿違々々、又授賴之以武州之封及管領職矣、自爾輔佐義滿、以天下爲己任、進正人、擯佞臣、且使有文才者從侍左右、從容匡導之、舉世稱眞良傳也、考公之姓源氏、名賴之、參河人也、其先經基王元子、鎮府將軍滿仲十二世胤也、父讀州刺史刑部大夫賴春、建武觀應之間、聲績不彰、大宮之軍死子忠、賴之公以其蔭管海南軍機、所謂細川家號者、其祖義季之所建也、公天資聰明、剛毅卓犖、雖古賢良多所不推也、從遊者未嘗覺其機密、知者常惜不下坐雞刀之地、與天下之人共此仁風、雖然剝壁豐刀豈久蝕塵土哉、聿膺公選、忽傳樞軸、是以政權歸公門、庭如市、公亦不負委裘顧命、歸譽幼君、責過于己、故藩侯州牧皆無不畏伏矣、又有贈公政府賀章者、有智中水鏡自然明、又權衡政府化條明等之句、遠近傳爲實錄矣、應安三年、公自督諸軍、退治南海逆賊、拔數城、四州管内一掃而治、公退而嘆云、臣罔下以寵利、居中成功、

我日夕省之、遂乞骸骨、歸讀府矣、嘉慶中、義滿公外議、如詣嚴嶋神祠、枉道入讚州、訪公政府、問以天下庶務、且竭三顧之情、公不獲已耳、諾公命、越歲入洛、義滿使氏信慰勞、且委以總轄樞機大小兵權、是故芻蕘兒童、皆誦管領盛德功業矣、明德二年、山名氏清等爲亂、遠近響應、十二月廿八日、欲圍輦下、皇都紛擾、公同弟京兆賴元等將家、龍猊虎角之輩、左袒而戰、同晦日、氏清敗死于內野、其黨亦無噍類、義滿振旅而還、諭諸將云、今日之事實出不意、幸賴諸將之力、但管領兄弟忠功之所致也、其賞在等差、明年壬申、公六十四歲、少示所惱、三月二日、淹爾卒、臨瞑絕之際、遣弟賴元、遣啓義滿、而致區々忠誠、義滿驚且泣曰、嗚呼國家如何、天之毀吾之股肱民之耳目、奚其速邪、後三日葬、神柩於西山谷之地藏院、義滿及碩臣鉅卿、擗踊徒跣而執紼者、以萬指數矣、義滿不歸、台駕於柳營、直館鹿苑寺齋居、手寫梵經一部、賻送緇衣、以資冥福矣、公舍人三嶋氏某、不耐哀慕、割腹爲殉、誠君臣之感遇、一時爲希有也、嗚呼公之爲人也、赫々而如孤輪之當空、浩々而似滄溟之接流、氣壓宇宙、威振夷狄、風霜其操、鐵石其心、

擁幼主於危疑之際、完神器於分崩之餘、常存小心翼々之勤、粉骨碎身、風櫛雨沐、竭忠盡節、因此關中久無戈矛之姦、塞外專事來援之務、總公之力也、加之公餘之暇、特歸信於釋氏、固佛法金湯、魔壘障、故義堂信禪師曰、執政得一人、而後佛氏之法與矣、帝者之業樹矣、如武州公、文武全才、痛惜師法之弊、而公選之僧史、十科之中預一科者、無山林、無城府、皆徵而起之、可謂博而公也、公之言又曰、吾從先考賴春公、聽天龍國師劇談、佛法頗達、真乘、遂能死生如一、臨事不懼、而先考竟死于忠、吾亦知委身以事君國、師化導之力也、終問道於國師弟子宗鏡禪師、密乘禪觀所得頗多、是以剏地藏院於衣笠之山、爲報佛恩之道場、晚削髮、號桂岩居士、常人機鋒俊逸、祛縛釋粘、有宿德耆師之所不及、大夫人玉淵獨處一方、築法性尼院、專學淨業、因此無嗣、養弟賴元爲子、悉付家務、平素蔬食淡飯、終日超々然、揮塵談玄、聊有裴休龐蘊之風、一夕公夢寐之間、有一神人作舞唱曲云、百伊志登百伊志加里登於毛伊志仁加衛須々々々毛百伊志記如那、於是初覺家運之悠永、寔公之至誠、彌綸天地、感動鬼神、若

非_ニ聖賢位中來者_一、焉建_ニ此大德、嗚呼盛哉、余偶守_ニ公墳寺_一、有_レ人或訪及_ニ公之事蹟_一、則茫然無_ニ言之可_レ答、乃自_ニ公仙去_一已往、至_レ今二百六十餘歲、其聲藉甚、其跡寂寥、於_レ是會萃_ニ諸家文藁之所_一載、及日錄小說等班_ニ々于耳目_一、而略序_ニ大槩_一、孔子曰、寡言而行以成_ニ其信_一、余志乃在_ニ于此_一者也、承應三甲午歲、三月辛卯朔、笠山江岳元策誌、

加藤光泰貞泰軍功記

光泰

姓は藤原、氏は加藤、家紋蛇目上り藤、其先祖を尋ねれば、左大臣魚名六代孫、利仁將軍苗裔、左衛門大夫加藤光貞の後胤、權兵衛尉景泰の嫡男也、母は濃州の人、其姓氏詳ならず、光泰名は作内、初の名乗景教、後從五位下に敘し、遠江守に任せらる、天文六年丁酉、美濃國厚見郡今泉村橋詰の庄に生る、世々此庄に居て七十貫の地を領す、一説に當家は安房國を領知す、其後北條が爲に房州の居城を没落せられ、夫より代濃州に住すといふ、光泰男ぶり大にいかめしく、勇力人に勝れたり、初濃州に於てかつひさといふ人に仕ふ、かつひさは姓氏不傳、或説に美濃國齋藤右兵衛大夫龍興に仕ふと云、龍興を初かつひさといひしや、兩説詳ならず、かつひさ平信長公と合戦の時、光泰黑纓を掛、扇子の指物をさし、城外へ打出、武勇を振ふ、此體信長公御覽被成、感じ給ひ、後豐臣秀吉公へ御物語に、去る比かつひさと合戦の時、城兵のうち黑

纓に扇子の差物さし働たる士あり、若討死やまつらんと、度々御噂にて、甚惜ませ給ふ、扱かつひさ没落の後、光泰彼地をさり、江州に蟄居するを、秀吉公聞召招寄られ、此由を信長公へ仰上られ、則秀吉公御披露にて、光泰始て信長公へ御目見す、其時信長公仰にて、光泰を秀吉公へ下さる、自是秀吉公之臣となり、度々軍功を顯し、腰母衣隨一の士に撰ばれ、武威を異國まで振ふといへり、

元龜二年九月、江州淺井備前守長政、越前朝倉左衛門督義景に一味して、信長公に敵對せし故、信長公仰として、秀吉公江州長濱の城を守給ふ時に、同州横山に砦を築き、人數を口口て是を守らしむ、光泰此一人なり、淺井七郎、亦尻新兵衛尉を大將として、不意に城を責しむ、敵多勢ゆへ、味方皆々門より内に引入れて城を守る、光泰一人鎗を取、進み出力戦す、敵數十人はを圍む、中にも淺井が家頼野一色頼母、此時助七といふと、太刀討にて強く戦ひ手を負ふ、左の膝口痛手なれば、既に危く見えし時、竹中半兵衛尉重治門を開き助け戦ふによつて、敵引取光泰死をのがる、此時深手なれば歩行難叶を見て、光泰家人寺嶋戸市郎勝政

後藤藏人十左衛門といふ、肩にかけ城に歸る、此手によつて歩行常ならず、少しちんばになるといふ、此恩賞として、於同國北郡の内磯野村、知行七百貫、與力十餘人を光泰に賜ふ、此時大橋清兵衛其頭なり、清兵衛元祖市右衛門は、信長公に仕へて三萬石を領す、光泰清兵衛を家老とす、

天正七年乙卯、信長公仰にて、秀吉公大將として、播州別所小三郎長治御退治なり、此時秀吉公仰觸らるゝは、此度の軍に、病人又は手負たる者は、其郷里にとまりて農業を致し年貢を納むべしと也、光泰は横山の戰に手を負ひ歩行不_レ叶になれども、田里に残て徒に匹夫と共に居るべきやと思ひ、其旨を請ふて先驅す、別所氏藝州毛利右馬頭輝元の味方なるゆへ、毛利家の兵、高砂の浦より兵糧運漕して三木を救ふ、時に輝元中國七箇國の大主なり、秀吉公思召には、三木の城をば攻べからず、兵糧の道を塞ぐべしとて、光泰に仰付られ、蛸草といふ所にて、兵糧の道を押へしむ、蛸草は三木と高砂との間なり、光泰寢食を忘れて防し故、城中糧盡て、同八年庚辰正月、長治以下自害して落城す、此軍功によつて、於播磨國、知行五千石

拜領す、一書に、三木籠城三年の間度々合戰あり、在所々隣國に於ても光泰分捕高名數度に及べりといふ、

同八年庚辰、嫡男作十郎貞泰生る、成長して左衛門尉後左近大夫に任せらる、一書に、天正九年辛巳七月、秀吉公因幡國鳥取の城を攻んとて、彼城の東なる高山其名を摩尼帝釋山といふ所に、本陣を定め給ふ、寄手の次第、西の方には中村孫平治、山名大藏大輔、小寺官兵衛、木村常陸助と、光泰向ふといへり、

同十年壬午六月、明智日向守光秀謀反を起し、信長公を弑す、此時秀吉公は、毛利輝元を攻て居給ひしが、此變を聞召、早速軍勢を引歸給ひ、城州山崎表にて明智と合戰の時、光泰高山右近大夫友祥と先に進み、戰ふて敵を破る、此時光泰、明智が物頭、江州の住人長原安藝守と鎗を合て、長原を討取、安藝が首は牧村兵部に遣す、其頃、兵部秀吉公の御勸氣を蒙るゆへ、此首を以御免許を得度由所望に依て遣すと云へり、

同十一年癸未、秀吉公柴田修理亮勝家御退治、壹江國柳瀬にて御合戰御勝利なり、光泰御供し、能鐵炮の者を用ひ、自身鎗を合て甲首を取る、家臣も多く戰功有

り、此時秀吉公濃洲大垣より一騎がけにて御出馬被
成、一柳市助直末後伊豆守と、光泰、兩人馬上にて御
供す、此合戦光泰直末軍奉行を勤む、同二月十一日、同
州志津嶽近邊へ押出、備左の如し、

一番 堀久太郎秀政、 二番 長濱衆、

三番 木村小早太盛昌、
堀尾茂助吉晴、
木下將監利綱、

四番 前野庄左衛門長治、
加藤作内景教、
網兵衛長政、
助直末、
柳市

五番 生駒甚助近世、小寺
官兵衛孝高、明石與
四郎金友、木下勘解
由左衛門利匡、大垣
半右衛門正貞、山内
伊右衛門一豊、黒田
甚吉長基、

六番 見好孫十郎秀次、
中村孫平治一氏、

七番 羽柴小一郎秀長、 八番 筒井順慶、

九番 赤松治郎、峰須賀、
彦右衛門正勝、
伊藤掃部介祐時、

十番 赤松綱治郎秀範、
神小田半左衛門通清、

十一番 長岡與三郎忠興、
高山右近友祥、

十二番 羽柴御次丸、
仙石權兵衛秀久、

十三番 中川瀬兵衛清秀、 十四番 大岡秀吉公御旗本、

合戦御勝利に依て、天下の權威秀吉公に歸す、依之
光泰を丹波國周山の城主に仰付られ、一萬七千石拜
領、在任少しの間、所務に及ばず、此城は、前廉明智日向
守光秀居城なり、丹波國より江州貝津へ所替、領知同

斷、此所にも在任年を越ざる故所務に及ばず、

貝津より同州高嶋へ所替二萬石、在住の年數詳なら
ず、高嶋は、前廉織田七兵衛尉信澄居城なり、此所在住
の内、小牧御陣の時、尾州犬山の城在番を勤む、在番中
兵糧として、右之外三千石城近邊に於て下さるとい
ふ、一書に、天正八年の比より、播州姫路の城在番を
勤め、一萬石を領す、同十年壬午六月上旬、信長公京
都本能寺御滯座の節、明智日向守光秀反逆して、潜に
押寄弑し奉る、此時秀吉公備中より不_レ移_二時日_一馳上
り給ひ、光秀御退治なり、其砌光泰御供にて、粉骨を盡
し挑み戦ひ、山崎表にて、野瀬の丹波といふ士を討取、
直に此首を實檢に入れしかば、秀吉公御感不_レ斜、又同
日申の刻、近江士長原某を伏見狼谷にて鎗付、此首
は外より所望によつて遣すといふ、扨明智滅亡の後、
同月下旬に、光秀領分の内、丹波國周山の城を請取、制
法等堅く申付、同十月より近江國貝津と高嶋兩城に
三年の間在番を勤むといへり、

天正十二年甲申、秀吉公尾張内大臣織田信雄公と中
惡くなり給ひ、秀吉公尾張を責て犬山の城を落し給
ふ、此時信雄公は小牧山に在陣なり、秀吉公犬山御

進發によつて、犬山の城在番を光泰仰付られ、此時軍功あり、一書に、同三月秀吉公信雄公と鉾楯の初、秀吉公坂本にて、江州濃州勢州の蜂起を心掛給ひ、四方の手遣を仰付らる、勢州へは、蒲生飛驒守氏郷、筒井順慶、長谷川藤五郎、羽柴左衛門督秀政、日根野兄弟、多賀新左衛門尉に、一柳市助直末と光泰を指添在陣せしむ、又長久手合戦の時、二重堀に砦を構へ、人數を差置る、其人々には、長岡後細川と改む越中守忠興、并日根野兄弟、木村常陸介、長谷川藤五郎と、光泰、其外は略す、右の輩在陣す、同五月朔日、小牧を攻るべしと、前日より支度仰付られ、諸軍其用意の處に、二重堀の諸將、殿可仕旨仰出され、早々美濃へ引入給ふ、扨二重堀の諸將引取衆、一番神子田半左衛門、二番日根野備中守父子、同彌次右衛門、三番光泰、四番長谷川藤五郎、五番木村常陸介、六番長岡越中守也、其餘は略す、光泰家頼玉井庄介信好、布の羽織に、墨にて逆半月をかき、朱冑に耳を立、栗毛の馬にのり、朱柄の鎗を持、下り立力戦すといふ、長久手合戦に、秀吉公の先手、池田勝入、森武藏守長一等利を失ひ、其上諸士も多く討る、されども残る勢八萬騎に餘り

たれば、今一度合戦して勝負を決すべしと、手分を定め給ふ、東西と中軍と三ッに備を分給ふ、時に東備の内に光泰を仰付らる、外は爰に略す、

東之備左

木村隼人 佐千五郎

加藤年丙子

神子田半左衛門 六百

日根野備中守 千五百

常陸

北崎源太左衛門 七百五十

池田孫八郎 三百五十

多賀新左衛門 三百

合六千

長谷川藤五郎

右二

中三

長岡越中守

高山右近

左二合五千三百

右四

中川藤兵衛三千五百 高留孫八郎千
 長濱衆三千 蜂屋出羽守千五百
 木下半左衛門七
 德永石見守四百五十
 小川孫一郎二百五十
 合六千二百
 左四合四千五百

秀吉公御判

丹羽五郎左衛門長秀

同十三年乙酉、秀吉公越中佐々内藏介成正御退治、此時光泰御供にて軍功あり、
 近江國より美濃國大垣へ所替、知行四萬石拜領、外秀吉公御藏入二萬石、并國侍兩人預る、右御禮とし

て京都へ參勤之時、秀吉公の御前にて、光泰一言の誤を申上御勘氣を蒙る、其故は、今度御加増拜領に付、多くの侍召抱ゆるにより、御藏入も御望なきよし言上す、秀吉公聞召、以の外御立腹にて、預け置れし藏米迄自分の家來に宛行ふの段、其仕方不宜、以後出仕停止するの旨仰付らる、光泰謹而申上るは、全預け給ふ御藏入を家人に遣せしには候はず、自分の祿を私の爲に不蓄、悉く遣せし事にて候、言葉のあや申違へ候と、種々申上れども御聞届なく、秀吉公の御事大和大納言秀長卿へ御預となる、此時光泰家頼は、在々所々へ蟄居すといふ、秀長卿より知行一萬石光泰に下され、和州郡山に住居す、一年餘ありて、同州秋山の城に於て、二萬六千石、一書に、一萬六千石とあり、秀長卿より下さる、此城は、前廉伊藤甲斐守居城なり、
 光泰秋山在城數年の後、秀吉公御宥免の仰を蒙り、於江州佐和山二萬石下され、從五位下遠江守に任せらる、一書に、同十二年甲申、光泰濃州大垣に在城、領知四萬石也、其頃飛驒國に武田勝頼の殘黨有しによつて、御退治の爲軍勢を遣さる、此時石田治

部少輔三成先陣を望む、光泰進み出申けるは、今度の合戦大軍に候得者、若輩者の先陣偏に危く存候間、某に被_レ仰付_一被_レ下候様にと申請ふて發向す、此故にや、治部少輔憤を含み、讒言を申上るに_レより、光泰歸陣の後御勘氣を蒙り流浪に及ぶ、大和大納言秀長卿に懇意によつて、和州へ立越、宇多郡に蟄居す、其後三年を経て、秀吉公の御免を蒙り、先年熊野・揆の時討死ありし伊藤甲斐守居城同國秋山の城を拜領し、知行三萬石を賜る、同十五年丁亥、從五位下遠江守に敍任せらる、翌年近江國佐和山の城在番を仰付らるといへり、

同十八年庚寅、秀吉公小田原御退治の時、光泰三州岡崎吉田の兩城、并駿州府中の城在番す、一書に、小田原御陣之節、秀吉公の仰によつて、一柳伊豆守直末と光泰と、豆州山中の城を攻落す、此時伊豆守討死すといふ、然れども山中落城の節、光泰は岡崎吉田并駿府の城を守る事分明なり、山中落去に付て秀吉公より下さる御書所持す、其文左の如し、

急度染筆候、中納言山中城へ今日廿九日取掛、即午刻乘崩、城主事は不_レ及_レ申候、餘討捕、其外返

打不_レ知_レ數候、然者明日朔日宮根山の峠へ爲_二陣取置_一、小田原向可_二手遣_一候條、落去不_レ可_レ有_レ難候、尙追々吉左右可_二申聞_一也、

三月廿九日 秀吉公御朱印

加藤遠江守との

同年小田原降參の後、光泰近江國より甲州へ所替、領知二十四萬石、金山共一圓に下され、甲斐國主と仰付らる、一書に、異説を考ふるに、右に在るすの外、光泰軍功數度といひ傳れ共、記錄悉不_レ傳故詳ならず、備中國すくも山の城攻にも、光泰御供し働ありといふ、光泰甲州入部の時、行列旗と差物と甲と帶して人數を押へし、一番備加藤、本名一柳、信濃守光吉、二番備大橋清兵衛、三番加藤圖書光定、圖書は光泰の弟なり、家臣となつて家老職を勤む、四番旗本、五番惣馬廻也、さて仕置掟等いひ付、家中の面へ料理を與ふ、廣間にて、今日は上座下座の差別無しとて、嫡子貞泰、一男光直を、諸士の下に着座させ、自分一人上座に居れども、諸士の膳据へ仕舞て後、膳にすはり、引物は必自身に引_レ之、六百七十の家士六日程に相濟といふ、

一書に、同國郡内の城を加藤信濃守光吉に預け、光吉住て四萬石を領すといふ、光吉は元一柳氏なり、光泰室の甥なるゆへ、光泰初養子とする、依之加藤と改む、其後貞泰出生に付、信濃守退て貞泰に譲り、自臣となる、貞泰禮敬する事賓客の如しといへり、

文祿元年壬辰、秀吉公朝鮮國御征伐なり、此時光泰家老に、侍五六十騎相添差出すべき旨仰出さる、され共光泰願ひによつて自身御供す、

同年、朝鮮王敗軍して、加勢を大明に請ひければ、大明同心して、援の兵を多く差越す、此由秀吉公聞召、重て軍兵を遣さる、光泰其一將に仰付られ、軍兵千人を連て赴く、一書に、加勢として、増田右衛門尉長盛、石田治部少輔三成、大谷刑部少輔吉繼、後吉隆と改む、前野但馬守長康と、光泰とを遣さる、軍略法令此五人に仰付らる、扱諸軍出船の時、家康公船の邊に來り給ひ、異國の旅行を勞り慰め給ひ、且軍事を仰談られ、別を惜み歸らせ給ふ、又一書には、秀吉公肥前國名護屋に御在陣の時、加藤主計頭清正、小西攝津守行長より使を差上、高麗の都を攻落候得ども、都より奥に敵

大勢起るよし聞候に付、責入むと存候得ども、味方小勢故叶ひ難し、御加勢を下さるべきの由言上す、秀吉公聞召、早速御渡海可被成候由仰出さる、といへども、家康公并加賀大納言利家卿達而御諫により、御渡海暫御延引なされ、加勢として右五人を遣され、高麗都の軍法御仕置、共に五人に仰付られ、外に木村常陸介、羽柴藤五郎は、釜山海より都迄の道路在番して遣さるといふ、同年加勢の諸軍朝鮮に着し、京城にて先達て渡海の諸將と會合し軍評定あり、皆曰、大明の加勢既に加はる間、先諸軍を釜山浦に引取、謀を運らさば、其功あるべしといふ、時に光泰進み出申けるは、大明の加勢の來る事は、前廉より存知の事なり、何ぞ今更これを恐れむ、釜山浦は此所を去る事數百里なり、若し諸軍を釜山浦に引取ば、京城を敵の爲に取られむ、左あつて何の面目かあらむ、諸將の曰、兵糧續くまじ、光泰又申けるは、兵糧なくば砂を喰はむ、三成が曰、人如何して砂を喰ふべきやと、光泰笑て申けるは、砂を喰ふ程の様子えらすや、然ば某一人を留て歸れ、我若生て本國に歸らば、各の談合の實を秀吉公へ申上べしといふ、此詞に依て諸將終に京城を引取事

を得ず、自_レ是三成長盛吉繼等不和になるといへり、一書に、此時加藤清正小西行長は、都を備前宰相秀家へ引渡し、夫より廿日路程奥へ責入しに、行長は清正を捨置都へ歸るによつて、清正計奥に滞留す、然る所に、大明國より加勢として、數萬騎寄來る風聞により、三成長盛諸將へ對談し、明の大軍都へ押寄、同防がたかるべき、何も釜山浦へ引取然るべしといふ、光泰他の返答を待す、進み出申けるは、主計頭を捨置引取事本意ならず、清正が一左右を聞屈引取べし、若各同心なくば、某跡に残り清正を待受べしといふ、三成が曰、兵糧續べからずと、其時光泰砂を喰ふの言を出し、かかる柔弱の相談、某は其意得難しとて、其後は三人と軍事を談せず、され共光泰が一言によつて何も引取難し、都に越年すといふ、又一書に、文祿元年七月上旬、光泰を高麗陣中の御目代に可_レ被_レ遣間、潛に甲府發向可_レ仕に付、仰出さるゝによつて、手勢の内、近習の勇士僅に百騎計召連、肥前國名古屋に着す、秀吉公御對面あるべしとて、早速御前へ被_レ召出、御盃三獻過ての後仰には、今度高麗にて、敵大軍を以後卷するに付、味方少し臆すると沙汰あり、可_レ然加勢を可_レ差

越_二旨、主計頭清正より注進するによつて、御自身御渡海可_レ被_レ成候得共、先其方被_レ遣候間、粉骨を盡し、遂_二本望歸朝仕候は、御取立可_レ被_レ成旨御懇の仰、辱く謹而御請申上、釜山海へ渡海なり、此所より廿日路を経て、朝鮮の都に着陣す、此時宇喜多宰相を始として、諸將會議あり、石田三成申けるは、此頃元良蛤^{オランダ}の軍勢十萬餘騎にて、かせんはつの此方に陣をとる、扱又川より向の地には、かくなみと朝鮮兩國の軍勢とも二十萬騎にて陣を張り、釜山海と都の間を取塞ぎ、日本の往來を留て兵糧詰になる、其外方々通路不由なり、味方の勢は七萬六千餘人、兵糧を積るに、僅一月を過し難し、兎角惣軍を釜山浦迄引立、濱の手に要害を四五箇所程に丈夫に構へ置、日本より兵糧の道筋自由にて、味方の軍兵疲れずば敵多勢なり共、輒く討捕む事手のうちにあり、清正返答には、諸勢粉骨を盡し攻取たる都を捨て、敵多勢也とて、一戰にも及ばず聞逃にせむ事、口惜次第なり、其儀ならば、名古屋へ注進して、上意次第に可_レ致といふ、治部聞_レ之、上意を待迄の兵糧は、何方より歟來るべきと申ければ、光泰進み出、兵糧なくば砂を喰むといふ、三成曰、砂

が喰はるゝ物かとありければ、光泰又曰、砂の食様御存なきやとあらゝかにいひ放し、其座を立といへり、同年冬、秀吉公より光泰へ御書下さる、其文左の如し、

猶以寒天之時分、辛勞被_レ思召_二候條、小袖二遣し候、尙以朝鮮之様子有様に注進無_レ之付て、被_レ仰出_二候御仕置も無_二首尾候様に成候、向後は、善惡共に有様を言上、猶就_二其表之義被_レ仰

含_レ被_レ差遣熊谷牛次要垣見彌五郎_二候、尙兩人可_レ申候、

一釜山浦より都迄傳之城主并小西陣所迄之間傳之城、丈夫に相構、兵糧蓄可_レ有_レ之候、來年三月必被_レ成_二御渡海_一、一揆原悉撫切に可_レ被_レ仰付_二候、其間之儀、面々在城之所堅固に仕可_二相待_二候、於_二様子_一は、熊谷垣見に被_レ仰含_二候、

一在陣面々船共悉此方へ慥奉行相濟に差越候、御兵糧爲_レ可_レ被_レ遣候、か子共も在所へ被_レ遣候、相休のか子御扶持御兵糧追々可_レ被_レ遣候、若船をおしみ其方に殘置候は、高麗をあけて走らんとしたくみに哉、其段は不_レ可_レ成候、皆々可_二申聞_二事、

一鐵炮、同玉藥、割付被_レ遣候、此藥は、手前に拂底

故、無_二了簡_一時、可_レ被_レ出之旨、小西并船手の者共へ可_二申聞_二事、

一小西手前肝要之儀に候間、都之儀は要害丈夫に仕、備前宰相愼み、在城候而、増田石田加藤大谷前野、此五人者共は、一人宛替々小西手前へ見廻候而、可_レ入會_二候段、唐人共取掛候ば、城中堅固相拘可_レ有_レ之候、被_レ取出_二候而、少も越度仕義候ば、可_レ爲_二曲言_一事、

一去六月既に可_レ被_レ成_二御渡海_一處、右申留付不_レ及_二是非_一、被_レ爲_レ付_二異見_一、無_二御渡海_一候而、御渡海思召候、來春は、八幡大菩薩必々被_レ成_二御渡海_一、急度可_レ被_レ仰付_二候也、

十一月十日 秀吉公御朱印

加藤遠江守とのへ

同二年癸巳正月、明の軍勢果して押寄る、光泰戦むといふ、諸將同心せず、堅く要害を守らむといふ、光泰再三合戦を進む、時に立花左近將監宗茂、後飛驒守と改む、光泰の言を感じて、合戦は吾願ふところなり、我まず先驅せむといふ、小早川左衛門佐隆景も、尤と同心して、先陣せむといふ、爰に於て諸將不_レ及_二異

義、此時光泰掛り太鞍を打、進んで戦ふ、明兵多勢なれば、味方の騎敵の百騎にあたる、討死手負大半に及び、軍甚危く見ゆる、時に立花宗茂横鎗を入れて突くづす、此いきほひに、小早川隆景立花宗茂力を合せて戦ふ、依之、明兵夥敷討れて敗北す、首を斬る事三萬八千餘人、光泰武名於爰顯る、一書に、大明より大勢を催し、都近邊を責來る由沙汰あるによつて、正月廿四日、物見として、前野但馬守長康より二十騎、光泰より二十騎、朝鮮の都より三里餘り出て窺ひ見る處に、大軍山々に充滿の由を注進す、さらば合戦始むべしと、小早川隆景に相談し、先手を頼み遣す、隆景返答は、柳川侍従は先手の大將候間、彼方へ軍法を仰遣さるべしと申來によつて、先陣の教令柳川侍従へ申渡す、同廿六日、都より四里程出て、柳川先手の勢にて、唐人を不殘追崩す、此戦始終光泰一人の采幣なり、其後奥より清正朝鮮の王子を生捕都へ歸着す、王子を光泰請取て警固す、光泰其外諸將は、釜山海まで引取、主計頭は都に止り暫滯留すといふ、又一書に、安南府の砦を攻落すべしと、諸將評議して、石田増田大谷等に談し、二萬の勢にて、川向のこなたなる高山に押登

る、先虚實を探るべしとて、増田右衛門尉長盛の陣の前に、光泰備を立て居けるが、母衣の者十四五騎物見に出しける、これを見て同く備を立たる、木村常陸介、長谷川藤五郎秀一、我先にと母衣の者を十人計づつ遣しける、道にて此者其先を爭ひ、我後れじと逸足を出し、進んで柵際にひた／＼と付けるを、城中には寄手を引受むが爲、態と靜りかへつて音もせず、寄手の諸勢是を見て、城兵早落失たると思ひ、我先に高名せむと、下知を待す、數萬の寄手柵際迄攻登り、外曲輪の柵を既に打破らむとする所を、城中の射手散々に射る、一書に、此時光泰馬前に、敵二人半弓を持て向ふ、時に光泰家臣加藤兵太本名吉田是を見て、透間もなくはせ付、右之敵一人を討取り、手をおひながら、今一人の敵を討取らむとする所に、城兵大石大木を投掛々々、透間もなく防ければ、寄手こらへかね、一度に崩れ立て谷底に落重る、諸大將是を見て、加程迄責かゝつたる城を、此儘引取にあらずとて、自身采幣を振り、透間もなく攻寄て、外曲輪を打破れ、一足も後へ引べからず、進め／＼と下知すれば、士卒是に力を得、矢石をおそれず、手負死人を乗越攻登つて、難な

く外曲輪の柵一重引破て押入れど、城兵爰を破られ
じと、内の柵より射出す矢に射立られ、寄手猶豫する
所を、本陣より切て出、外曲輪へ押出す、追出せば込
入、又押出し、二三度ももみ合しが、終に寄手外曲輪へ
退く、今一攻新手を以て責くづさばこらへず落城に
及ぶべけれども、日も早申の刻に至り、味方手負死人
多く、上下疲れし故、先引取と下知して、諸將段々に
引取る、城兵爰を討留むと附募ひけるを、殿の兵返し
戦、其上王城に残つたる小早川隆景小西行長已下打
出、備を待しに依て、城兵急に引取は、何も王城へ歸
陣なり、翌日諸將^{居候}外侯を遣し、城の様子を伺せければ、
城兵一人もなく、夜の間に開城府へ引取ける、昨日寄
手外郭を攻破し時、城中の弱兵等過半崩れ立、南大河
に溺れ死する者其數を去らずといふ、又一書に、正月
廿六日、明人と合戦の後、開城府川より東へは明兵い
です、都の三里計西に一城を構へ、朝鮮人^{をカ}もして明兵
へつなぎの城とす、小早川隆景、黒田前野但馬守と、
光泰、并三奉行、二月十三日押寄是を攻、二三の郭を
攻取、本城は堅く守つて不_レ落、十七日城自焼して退
散す、此城下に番船五十艘掛置しが、此舟もみな退去

といふ、又一書に、晋州の城攻取べしとて、光泰と細川
越中守忠興、長谷川藤五郎秀一、木村常陸介、已下七
人發向すと言ひ、

朝鮮和談成就して、諸將歸朝之節、西生浦といふ所に
て、石田等光泰と和睦せむとて、宮部兵部少輔長房が
所にて酒宴を催す、其夜光泰歸宿の後、俄に病を請、
血を嘔て遂に卒去す、此日文祿二年癸巳八月廿九日、
御年五十七歳也、皆鳩毒にて殺せると疑ふ、一書に、
八月廿八日の夜、和睦の爲に光泰を宮部兵部少輔が
驛舎へ招き參會に及び、吸物にて酒を出す、其夜歸宿
の後俄に病をうけ、翌廿九日卒去すといふ、光泰末期
に及び、五奉行之内、淺野彈正少弼長政へ、自筆に遺
狀を書いて遣す、此書故あつて、七代孫左近將監泰衡家
に傳ふ、其文左の如し、

我等事、如_ニ御存、此中相煩候に付、種々養生仕候得
共、終不_レ得_レ驗相果申候、然ば甲斐國之儀かなめの
處其上御國^邊とし、作十郎若年之儀に候間、被_ニ召上_ニ
御近所へ被_ニ召遣_ニ候様に被_ニ仰上_ニ可_レ被_レ下候、何
様某世忤事頼入申候、誠御國被_ニ下御用にも立不_レ申
かやうに相果申事無念に存候、併是事と存、不_レ及_ニ

是非二候下略、

八月廿八日

御名光泰在判

淺野彈正殿參る

遺骸を、家人等打寄、西生浦の近地に火葬し、藤田九郎右衛門文範其骨を取て、日本に歸りて是を葬むる、法名曹溪院殿剛園宗勝大居士、光泰卒去の由、秀吉公聞召、甚なげき惜しみ給ふ、光泰の室は、一柳藤兵衛女、二男四女を生む、光泰骨を、領地故に、甲州山梨郡板垣村善光寺の境内に葬る、

文祿三年、貞泰は美濃國黑野へ所替の時、光泰骨を取分、善光寺の弟子を添、黒野にて菩提所を建立して、右の僧を住持とす、慶長十五年、貞泰伯耆國米子へ所替、又骨を持參し、米子に菩提所取立、則曹溪院となづく、元和三年、貞泰伊豫國大洲に所替、又大洲に菩提所を取立つる、玄孫遠江守泰恒代に、光泰遺骨を厚唐櫃に納、其側に石碑を建る、碑文は、曹溪院住持南傳和尚の作也、其言左の如し、

曹溪禪院開墓之碑

人各祀其祖、重其形生之始也、粵加藤氏藤原泰常公、收拾於先祖考曹溪院殿剛園勝公大居士之遺骨、

營_二柳靈石、安_二置禪刹、蓋據其家系、稽_二於前大守光泰公之爲_二人、神機秀發、志節豪雄、曾勵_二出塵之業、且事_二報國之忠、絕代文物、萬古徽猷、恭承_二嚴命於西生浦、有_二汗馬功、難易細評、見_二危授命、決_二勝運籌、其智也不_レ減_二於良平、其勇也欺_二瞞賁育、可_レ謂_二奪_二三軍之師、馳_二聲九州之牧、視_二其所_レ以_二人、焉_レ度哉、匹夫匹婦知_二其威名、嗚呼時耶命矣、反_二師未_レ歸身先死、想夫懷思_レ死_レ節、天罪_二此良人_二乎、誠有_レ以_二耶、我乃祖達磨大師數逢_二毒手、傳法得_二人終化去、此公之罹_二鴆疾、卒亦然、頓兵剡銳、履信重義、功勳威烈、偉哉盛矣、一百年餘、雖_二年垂遠邈、世不_レ乏_レ賢、箕裘能學、器水相傳、是以稱_二此公_二爲_二始祖、今也泰常公、事_二死如_二事_二生、今茲命_レ予勒_二其碑文、予雖_二不敏、不_レ獲_二辭、漫點_二鼠毛、聊記_二大概、後之覽者、恐是墮_二淚、豈不_レ起_二信于此_二哉、經中有_二明文、一人發真歸元、此十方空皆悉消殞、信哉是言也、所謂、慎_レ終追_二遠民德歸_二厚矣、銘曰、

武林英傑

絕類出倫

母意母必

有義有仁

智勇兼備

孝慈兩純

須稱始祖

可謂忠臣

埋骨原上

擇名北辰

鐵石懷抱

雪月精神

能知進退

更辨僞真

笑羅褒富

樂顏子貧

處彼異域

嘗此苦辛

錫爵世祿

德行日新

追憶遠諱

慕蘭芳蘼

嗚呼可贖

人百其身

時元祿九丙子年八月廿九日

指月山蒙釋氏南傳記

甲州善光寺之光泰墓石は、六代孫遠江守泰古、元文四年己未の冬、其墓石五輪の上の石を改め作る、是は四年の後、寛保二年壬戌、光泰百五十年忌によつてなり、其石に刻む文左の如し、

公爲_ニ甲斐國守_一也、朝鮮之役、將_レ兵在_ニ釜山浦_一、以_レ病卒、實文祿二年癸巳八月廿九日也、群臣奉_レ櫃歸_ニ甲斐國_一、葬_ニ善光寺境內_一、公諱光泰、封_ニ遠江守_一、佛謚、

曹溪院殿剛園勝公大居士、

距_レ今百四十七年、

塋域頗損壞、乃差_ニ有司_一、命修_レ之、

元文四年己未十一月九日

六代孫豫州大洲城主

從五位下遠江守藤原朝臣泰古謹誌

光泰よく片鎌の鎧に達す、又道に志て論語孟子の二書を讀む、片鎌の鎧、着する具足、并論孟の二書、子孫

貞泰

傳へて秘藏す、冑太刀の疵あり、論孟の二書朝鮮本なり、常に懷中し手なれたる故、家臣朝鮮より携へ歸るといふ、論孟二書の箱外題は、貞泰手蹟なりといふ、さきをあと跡をさきへとたてかゆる

人數つかひそはらひのきなる

さきはさきあとを跡にてあとよりも

ちくくくのくをくりひきといふ

光泰の嫡男、初作十郎、後從五位下に敘し、左衛門尉に任じ、其後改て左近大夫將監に任ぜらる、天正八年庚辰、江州磯野村に生る、母は一柳藤兵衛女といふ、其説詳ならず、文祿三年甲午、貞泰十五歳、甲州より濃州黒野へ所替、四萬石を領す、此故は、父光泰、石田三成と不和なるによつて、三成秀吉公へ讒言申上るより、光泰軍功空敷なり、甲斐の國二十四萬石をも召上、家督減少仰付らる、秀吉公の明智にて、倭人石田に惑され給ふ事、誠に可_レ惜事なり、黒野在住の内、從五位下左衛門尉に敘任せらる、一書に、此所住居十七年といふ、

慶長二年戊戌、秀吉公御他界あり、同五年庚子、石

田三成等謀反を起し、秀吉公の御子秀頼公の仰と偽り、諸大名を催し、濃州關原に出陣す、家康公御征伐也、此時石河備前守貞清居城、尾州犬山の城在番に、貞泰向ふべき旨、三成下知すれども、貞泰石田に恨あるにより、關東の御味方となり、弟平内光直を人質の爲江戶へ遣す、後家康公より、美濃國大野郡公卿村に於て、三千六百石光直に下され、其後光直從五位下敘し、遠江守に任せらる、諸貞泰謀を廻し、城主貞清をして城を明退しめ、度々飛札を以て家康公へ言上す、御感悅の餘り御書數通を下さる、其文左の如し、

就其元難説、出陣延引之由尤候、彌岐阜中納言殿有相置等肝要候、猶加藤太郎左衛門可申候、恐々謹言、

七月廿日 御諱御判

加藤左衛門尉殿

被入レ念、使者殊平内病中候之處、被差越之、祝着候、其元氣遣察入候、近日可令上洛候之間、可御心易候、猶永井右近大夫可申候、恐々、

八月三日 御諱御判

加藤左衛門尉殿

今度平内雖病中候、被差越、懇意之段不淺候、彌無如在候者、尤可爲祝着候、猶大久保十兵衛可申候、恐々謹言、

八月七日 同斷

加藤左衛門尉殿

兩通之書狀令披見候、然者、前廉首尾無相違忠節之段、感悅之至候、今日三日小田原令出馬候、急速其表可爲着陣候、彌其元可被入情儀肝要候、恐々謹言、

九月三日 同斷

加藤左衛門尉殿

竹中丹後守殿

切々被入レ念來狀祝着之至候、殊犬山之儀、其方以才覺、早々相濟候事、令満足候、將亦先手へ參陣之由尤候、今日到清見寺、令着馬候間、頓而其表可爲着陣候、猶期其節候、恐々謹言、

九月五日 同斷

加藤左衛門尉殿

右御陣之節、井伊兵部少輔直政、本多中務大輔忠勝へ被遣御書左の如し、

此者加藤左衛門尉長教者候、然者、犬山へ左衛門尉相籠候に付、様子之儀候て遣候、猶其地羽左兵令ニ相談、可レ然様才覺尤候、猶口上可レ申候、謹言、

八月十二日

井伊兵部少輔との

本多中務大輔との

右御陣之節、幕府之諸將より來る書狀左の如し、

追而申候、此度之飛脚、一段の(な力)るものにて御座候間、重而は人を御座らみ可レ被ニ仰付ニ候、以上、

就ニ其陣雜説、御出陣被ニ相延ニ候由、被ニ仰越ニ候、尤之由、即返事被レ進ニ候、不レ及ニ申候得共、無ニ御油斷ニ岐阜へ被ニ仰合ニ候へと、懇に申候、隨而平内殿御煩、御養生次第御下待申候、内府も一段懇に被レ申候、爰許之義、昨日十九日、武藏守出陣被レ申、明日廿一日、内府出馬之旨、萬事追而可ニ申入ニ候間、早申入候、恐惶謹言、

七月廿日

加藤左衛門尉様

人々御中

加藤太郎左衛門

兩度之御使者、殊平内殿御病中之處、御出陣、一段祝

着被レ申候、將又爰許之様子、丈夫に被ニ申付、近日上洛之事候間、其御心得可レ被レ成候、次政宗向ニ會津出陣、白石之城被ニ責落、數萬人被ニ付取、物主魁被ニ生取ニ之由注進候、此口之儀、萬事可ニ御心易、如何様罷上、萬々可レ得ニ御意候間、不レ能ニ具候、恐惶謹言、

八月三日

加藤左衛門尉様

人々御中

永井右近大夫直勝

猶々、中納言以ニ書狀ニ可レ被ニ申入ニ

上方着到ニ付而、御使者被レ入ニ御念ニ候通、委細中

候得共、路次中如何候間、以ニ書狀ニ

納言ニ爲レ聞候、遠路早々被ニ仰達ニ候段、祝着被レ存

不ニ申入ニ候、其様御心中之通、具御使

候、具ニ自ニ拙者ニ相心得可ニ申達ニ之旨、被レ申事候、

如ニ御覽、中納言へ可ニ申聞ニ候、以上、

委曲儀、口々可レ被ニ申達ニ候間、不レ能ニ具候、恐惶謹言、

八月三日

加藤左衛門尉様

酒井右兵衛大夫忠世判

貴報

内々道中筋、岐阜昨日乗落候、然處、爲後卷、治部少輔先手之者共、江戸川端迄差出候、即一戰および追崩、悉打果候、早々内々如筋目可引退候、此通駿河衆へも申遣候、可被成其心得候、恐々謹言、

八月廿四日

井伊兵部少輔直政判

竹中丹後守殿

加藤左衛門尉殿

關 長門守殿

人々御中

態申入候、然ば大柿城中々、苅田に罷出候間、稻葉甲斐守殿、貴所爲押うしき村ほんてん村兩所に御在陣可被成候、不_レ及_レ申_レ、其御精を被_レ出、夜侍等被_レ仰付_レ尤候、恐々謹言、

九月三日

羽左衛門大夫正則判

羽衛左衛門照政判

本多中書忠勝判

井伊兵部少輔直政判

加藤左衛門尉殿

稻葉甲斐守殿

貞泰、關東の御先鋒井伊兵部少輔直政の指圖に應じ、犬山を立て濃州に發向す、家康公同國赤坂に御着陣、貞泰彼の地に至り御目見す、此時仰によつて同州本田に陣して大垣の押へとする、本田は寺西備中守定持居城なり、

關東御勝利によつて、家康公直に江州佐和山へ御出、貞泰御供す、此時稻葉右京亮貞道と貞泰兩人、江州水口の城を責べき旨仰付られ發向す、城主長束大藏大輔正家明退く故合戰に及ばず、夫より攝州大坂まで御供し、大坂に於て御暇下され、黒野に歸る、偕三成以下を京都にて誅し給ひ、天下悉關東に歸けり、

同十五年庚戌七月十九日、黒野より所替、伯州米子の城主となり、加増の地二萬石下され、本知合て六萬石也、此時改て左近大夫將監に任ぜらる、同十六年辛亥、嫡男五郎八泰興生る、從五位下出羽守に敘任せらる、

同十九年甲寅冬、大坂御陣之時、貞泰と松平本名松井周防守康重、岡部内膳正長盛等と、天満口に發向す、貞泰先渡なり、扨和談成就して、何も國に歸る、一書

に、冬御陣の時、貞泰江戸御城御堀普請の御手傳を勤め在府し、夫より直大坂へ發向す、寄口瀑の内榎の渡り、諸勢より早く渡し、次に長柄川を渡し、天満口へ向ふと云り、此御陣に、貞泰大坂より家臣加藤圖書光定へ遣す書の寫、

一書申候、

一一昨晦日ながら河越申候所に、敵天満を自燒いたし、大坂へ引籠申候、付而則天満へ押寄申候、我等手前之仕寄之儀、天満橋より二町計り上にて候、今迄は、上下無何事之間、可心安候、下略、

十二月二日

左近大夫貞泰判

加藤圖書との

元和元年丁卯、夏復大坂御陣あり、貞泰と松平本名池田武藏守利隆と、同じく神崎口に陣す、傳に曰、貞泰謀を進め、陣を張らむとする時、松平武藏守の軍士貞泰の備の前に進む、此時家臣加藤主馬光尙、武藏守の本陣に至り、直に申上度事ある由をいふ、武藏守對面あり、時に主馬近々と進出で、御人數御閑下さるべしといふ、武藏守同心にて早速人數をひらかさる、是に

よつて貞泰先陣なり、主馬遙に座を下り、早速の御許容忝由を申述る、武藏守其容貌の逞しきを感じあり、時甚だ寒し、酒一ツといふ、近習の者大杯を持來り主馬に遣す、主馬仰忝由をいひ、引受く三杯のむ、武藏守尙又其意氣のすさまじきを賞して亦ちいらる、主馬不辭退、再飲之、依之見れば、武藏守と先陣を爭ふも亦冬陣の時なるべしといへり、一書に、夏御陣の時は、貞泰中嶋口に向ふ、落城の後御暇下され、米子へ歸るといへり、同三年丁巳、伯州米子より豫州大洲へ所替、領知前に同じ同六年庚申、大坂の城普請御手傳を勤む、正月にはじまり、八月に成就す、一書に、同八年壬戌三月十三日、貞泰妻子江府へ引越すといふ、然れども貞泰室の墓石大洲にあれば、骨を大洲へ葬りしにや、此説詳ならず、同九年癸亥五月廿二日、貞泰病て江戸に卒去す、行年四十四、同所淺草海禪寺に葬る、法名大峰院殿英叟雄公大居士、貞泰室は、但州岩城之小出播磨守吉政女也、二男四女を生る、貞泰ひとり仁愛深くして、節義を重んじ、武事に達し、就中馬藝に長じ、八條北國馬の名主屋代左近將曹の高弟、埴原次郎左衛門尉倡線を師として、無明一卷抄の

曹溪院行狀記

秘傳を得たり、道に志篤く、政事怠らず、賞罰正して、士民を惠む、又暇日には、詩を賦し、歌を詠じ、連歌を好み、志を風雅に遊しむといへり、幼年の頃より家康公の御懇志を蒙り、常に御館に召れ、秀忠公貞泰と共に手蹟を學び給ふの士益御懇篤を得といひ傳へり、秀吉公の仰を蒙り、貞泰新に濃州黒野の城を築き在住す、

山州伏見の城に於て、貞泰始て秀吉公に御目見の時、又光泰石田三成等と不和なる故に、御旗本の諸臣彼輩にへつらひ、御前へ誘引する人なし、貞泰殿中といひ、若年といひ、甚だまよふ、時に山本嘉兵衛尙則是を見て、自ら伴ひ出で、御目見の式を整ふ、大坂落城の時、尙則没落す、貞泰舊恩を感じて招くといへど、尙則老年を以て辭するにより、隱居の料を與へ、其子三郎兵衛則兼を臣下となすといへり、

右系圖并二代之軍功、家傳書、又は家臣所持する所の書付等にくはしく有しといへども、知れて記ざる事多し、依て予不才なりと云へ共、世々の記録をさぐり、爰に記して一冊となすもの也、

寛延四年辛未二月九日

光泰遺骨ヲ甲州エ持歸リシ時、城中ヲ遠慮シテ、先善光寺本堂エ入、住持共ニ守護シ、後日嫡子貞泰、并ニ諸士共ニ附從テ遺骨ヲ葬ムル墓ヲ築キ、高サ五尺ノ石碑ヲ立ル、其銘ニ曰、

曹溪院殿前遠州大守剛園宗勝大禪定門於ニ于朝鮮國釜山浦ニ逝矣因レ茲彫刻一軀以伸ニ供養者也

右ハ墳墓ノ石牆高クシテ、石碑ノ上ニ六角ノ堂アルヨシヲ云ル也、又其後遺骨ヲ禪宗指月山曹溪院ニ葬ル、貞泰甲州ヨリ濃州黒野エ所替ノ時、光泰遺骨ヲ取分、善光寺ノ弟子差添來テ、黒野エ葬ラシメ、其後伯州米子ニ於テ、光泰孝養ノタメニ一字ヲ建立シ、曹溪院ト號ス、九嶽和尙ヲ開基トス、豫州大洲エ所替ノ時、此地エ移シテ世々菩提所トス、

元祿九年丙子、玄孫遠江守泰恒代ニ、光泰遺骨ヲ石ノ唐櫃ニ入、曹溪院ニ葬ムル、其側ニ石碑ヲ建ル、當住南傳和尙之作也、其銘ニ曰、

曹溪禪院開基之碑

◎南溪云、原文多ニ誤字、以ニ軍功記ニ比較相互訂之、

人各祀其祖、重其形生之始也、粵加藤氏藤原泰常公、收拾於先祖考曹溪院殿剛園勝公大居士之遺骨、營窆靈石、安置禪刹、蓋據其家系、稽於前太守光泰公之爲人、神機秀發、志節英雄、曾勵出塵之業、且事報國之忠、絕代文物、萬古徽猷、恭承嚴命於西生浦、有汗馬功、難易細評、見危授命、決勝運籌、其智也不減於良平、其勇也、欺瞞賁育、可謂奪三軍之師、馳聲九州之牧、視其所以人、焉廋哉、匹夫匹婦知其威名、嗚呼時耶、命矣、反師未歸身先死、想夫懷忠死節、天罪此良人乎、誠有以耶、我乃祖達磨大師、數逢毒手、傳法得人終化去、此公之罹鳩疾、卒亦然、頓兵剄銳、履信重義、功勳威烈、偉哉盛矣、一百年餘、雖年垂遼邈、世不乏賢、箕裘能學、器水相傳、是以稱此公爲始祖、今也泰常公、事死如事生、今茲命予勒其碑文、予雖不敏、不獲辭、漫點鼠毛、聊記大概、後之覽者、恐是墮淚、豈不起信于此哉、經中有明文、一人發眞歸元、此十方空皆悉消殞、信哉是言也、所謂慎終追遠、民德歸厚矣、

銘曰

武林英傑 絕類出倫 母意母必 有義有仁 智勇兼備

孝慈兩純 須稱始祖 可謂忠臣 埋骨原上 撐名北辰
鐵石懷抱 雪月精神 能知進退 更辨僞眞 笑羅褒富
樂顏子貧 處彼異域 嘗此苦辛 錫爵世祿 德行日新
追憶遠諱 慕蘭芳藹 嗚呼可贖 人百其身
維崑元祿九丙子稔秋八月廿九日

指月山蒙釋氏南傳記

其後元文四年己未ノ冬、六代孫遠江守泰溫代、甲州善光寺光泰墓石五輪ノ臺石ヲ改作ル、是ハ壬戌ノ歲寛保二年、光泰百五十年忌ニヨツテナリ、其石ニ刻ム辭ニ曰、

公爲甲斐國主也、朝鮮之役、將兵在釜山浦、以病卒、實文祿二年癸巳八月廿九日也、群臣奉檣歸甲斐國、葬善光寺境内、公諱光泰、封遠江守、佛諡曹溪院殿剛園勝公大居士、距今百四十七年、塋域頗損壞、乃差有司命修之、

元文四年己未十一月九日

六代孫豫州大洲城主

從五位下遠江守藤原朝臣泰古謹誌

一書ニ曰、光泰ヲ和睦ノタメ石田三成招キケルヲ、光泰ノ諸臣諫テ、毒殺ノ事アルベシト堅ク止ム、光泰曰、我モ豫メ此事ヲ察スルト雖、今往ズンバ武門ノ瑕

瑾タリ、毒死ハ我覺悟ノ前也トテ、八月廿六日、彼ノ會ニ趣シガ、果シテ鮒魚ノ吸物ニ鳩毒ヲ加フ、即日ヨリ惱ミ甚シク、廿七日廿八日ハ既ニ危急ナリ、光泰病中加藤清正ヲ待シニ、廿七日ノ晚景、清正釜山浦ニ歸リ、直ニ光泰ノ病ヲ訪、光泰大ニ歎ビ、予思ハズモ姦人ノ爲ニ毒殺ニ遭リ、我士卒忿怒シテ石田ガ陣所ニ討入ントス、然レドモ三成ヲ討タリトモ、予ガ命遁ルベキニモ非ズ、敵地トイヒ、同士卒トイヒ、甚以テ然ルベカラズ、足下堅ク是ヲ止メ、且死後ニ我諸勢ヲ率テ、息作十郎ニ與ヘタマワレト懇ニ託シテ、八月廿九日終ニ卒去ス、清正ハ遺言ノ如ク、光泰ノ人數ヲ率ヒテ歸朝シ、貞泰ニ引渡セシト云リ、

或時、伏見ノ城ニ於テ、秀吉公、光泰エ御料理ヲ賜リシ時、手自ラ引物ヲ被_レ下ケレバ、光泰頂戴ニ立ケルガ、先年江州横山城ニ於テ負タル膝口ノ疵惱ミ有テ、足不自由ナル儘、膳部覆シテ、飯羹座上ニ散亂ス、此體ヲ見テ、公ノ近臣微笑シケルヲ、秀吉公御覽アツテ怒リ玉ヒ、光泰ガ足ノ不便リナルハ、武門之崇敬スベキ事ナリ、汝等愚ニモ笑フタル物哉ト甚ダ御叱リアリシト也、

家説ニ曰、光泰勇アリ、大ニイカメシク、勇力人ニ超、將帥之器アリ、ヨク片鎌ノ鎗ニ達ス、又道ニ志シ有テ、平日論語孟子ノ二書ヲ讀ム、片鎌ノ鎗倒韓鎗ト號ス、着スル具足ハ、桶皮胴總、小寶黑漆、絲、黃唐茶、貫、黑塗、角、頭巾形太刀ノ痕アリ、朝鮮迄帶スル刀劔、刀ハ二尺三寸五歩、千手院重弘作也、脇差ハ、一尺五寸八分、關兼定作也、并ニ論孟ノ二書、朝鮮本子孫傳テ秘藏トス、論孟二書之外題ハ、貞泰ノ手跡也、

大峰院殿英叟雄公大居士略行狀

元和三年丁巳、台命有テ、伯州米子ヨリ、豫州大洲エ所替、領地前ニ同ジ、六萬石也、

大洲城ハ、往昔從四位下宇都宮薩摩守豐房、元德二年己巳三月、伊豫國之職ニ任ゼラレ、元弘元年辛酉十月當城ヲ築ク、代々此城ニ居住ス、宇都宮遠江守豐綱ニ至テ、毛利家エ降參シテ、此城沒落ス、其後大野山城守直昌、其弟菅田、本名大野、右衛門大夫大伴直之、暫ク居城トス、天正十三年乙酉、大閤秀吉公此城ヲ戸田民部少輔氏繁ニ賜フ、領地六萬石也、異說ニ、三萬ト石云フ、氏繁朝鮮ニ於テ病死後、慶長年中、藤堂和泉守高虎、同國宇和嶋ヲ領シテ當城ニ移ル、同十四年己酉、脇坂中務少輔藤原安治ニ賜ヒ、同淡路守安元相續、元和三年丁巳、加藤左近

大夫貞泰ニ賜テ、世々此城ヲ領ス、

家説ニ曰、貞泰人トナリ仁愛深クシテ、節義ヲ重ジ、武事ニ達ス、中ヅク馬術ニ長ジ、八條北國馬ノ名主屋代左近將曹之高弟、埴原次郎左衛門ヲ師トシテ、無明一卷抄ノ秘傳ヲ得タリ、道ニ志シ篤ク、政事怠ラズ、賞罰ヲ正シテ士民ヲ惠ム、又暇日ニハ詩ヲ賦シ、歌ヲ詠ジ、連歌ヲ好ミ、志シテ風雅ニ遊シメケル、

明和九年壬辰、貞泰百五十回忌ニ當テ、大雄山海禪寺貞泰墓石ノカタワラニ石碑ヲ立、其文曰、

加藤左近大夫將監貞泰、幼名作十郎、初諱光長、敍ニ從五位下、任ニ于左衛門尉、後改ニ焉、甲斐國主、遠江守光泰之嫡子、生ニ於江州磯野村、母者一柳氏之女也、豐太閤曾責ニ三韓、大明救ニ韓、再遣ニ精兵、光泰其一將也、震ニ威于三韓、石田三成妬ニ其功ニ而鳩ニ焉、於ニ西生浦卒矣、末後裁ニ書記ニ于淺野長政ニ曰、甲州者要害之國也、貞泰幼而恐未ニ能ニ保焉、移ニ封而願ニ倍^{倍カ}近侍ニ焉、長政歸而訟ニ此旨、因ニ茲僅於ニ濃州黑野ニ封ニ四萬石、築ニ城而居焉、三成叛矣、貞泰通ニ志於東照神君、以ニ弟光直ニ爲ニ質、神君賜ニ書而賞ニ節、貞泰從而赴ニ關ヶ原、大與ニ嶋津氏戰而有ニ功、一統之後、増ニ賜ニ二萬石、移ニ

于伯州米子城、合領ニ六萬石、大坂之陣、爭ニ先渡ニ河、振^レ武拔^レ城、其威其勇、不^レ讓ニ先考、又以ニ台德君之命ニ賜ニ豫州大洲城、到^レ今遞代領^レ之、長子出羽守泰興受ニ其采地、次男織部正直泰分ニ封一萬石、元和九年癸亥五月廿二日、於ニ江州第二卒矣、行年四十四、葬ニ于大雄山海禪禪寺、今茲明和九年壬辰五月廿二日、當ニ于百五十回忌、略誌ニ其顛末、以建ニ廟外ニ者也、

六代孫豫州大洲城主朝散大夫加藤上總介泰衍

謹誌焉

圓明院殿月窓公

加藤出羽守泰興、左近大夫貞泰嫡男也、幼名五郎八、敍ニ于從五位下、任ニ出羽守、隱居而號ニ月窓、慶長十六年辛亥、伯州米子ニ生ル、母ハ小出播磨守吉政之女也、

加藤家傳

山崎闇齋製

加藤作內、諱光泰、美濃人、世家橋詰庄、領其地七十貫矣、光泰形貌魁偉、勇力兼人、出仕關白豐臣秀吉公、公時爲平右府信長卿將、元龜中、塞北朝倉氏、近江淺井氏、相與起兵、右府令公守近之長濱城、城橫山、戍之、二氏來攻、諸士衛營、光泰執鎗前出、奮擊力戰、敵數十人圍之、被疵輪九死、竹中半兵衛尉衝突救之、光泰得脫、於是賜賞地七百貫與力十餘人、別所氏據播州三木城、右府遣公征之、公出師令云、有疾暨疵者、止州里、任民以事、而以時徵其賦、光泰意謂江北之戰、予雖傷膝爲跛、豈比肩庸夫哉、固請前驅、播州爲安藝毛利氏唇、故恐其亡齒寒、由高砂浦致轉饟之助、公以爲勝算、莫如絕糧、教光泰居蝟草、遮其甬道、光泰捍之、而城中餉盡、別所氏自殺、天正八年庚辰之正月也、公乃賜采地五千石、同十年壬午、明智氏殺右府、公方攻毛利氏、聞變即還、決勝於洛南山崎、光泰隨之、縱殺賊酋長原某、癸未、公與柴田氏大戰、近州柳瀬、克之、光泰從之、能用銳手、自接鎗獲甲首、尋而軍國大權入公

掌握、公加獎光泰、爲丹波州周山城主、封戶一萬七千石、累遷近州貝津城、領知如故、又移同州高嶋城、增封戶領二萬石、甲申、公與尾張內府平信雄卿有郤、公攻尾州、拔犬山城、卿屯小牧山、公進向之、使光泰守犬山、公與卿諸和、而光泰從美州大垣城、增封戶領四萬石、代官知二萬石、乙酉、公伐佐氏、越之中州、光泰隨行有績矣、其後偶失言、公前遭貶、屬公弟大和大納言秀長卿、卿與之食邑一萬石、歲餘在同州秋山城、與二萬六千石、居數歲、公下宥命、移近州佐和城、賜二萬石、彼從五位下、任遠江守、庚寅、小田原之役、公令光泰守三州岡崎吉田兩城及駿府城、小田原降而封于甲斐國、壬辰、公遣兵擊朝鮮、々々請救大明、大明許之、公聞而加兵、光泰爲其一將、以三千人行、石田治部少輔、增田鮮一會日本諸將于京城、諸將僉議、暫班師釜山浦、而運籌策、則功可成乎、光泰曰、明兵之援、曷驟懾之、且釜山浦距此數百里、若班師、則敵又收此地矣、而可哉、諸將云、兵食弗可繼、光泰曰、糧絕則食沙而已、諸將無語、石田曰、人豈食沙哉、光泰笑云、食沙

底樣子未_レ知乎、然則留_二子一人_一而去、我儻得_レ生歸則陳_二吾人商量於殿下_一、諸將終_レ不能_レ班_レ師、石田增田大谷銜_レ之不和矣、明兵果來挑_二我軍_一、光泰欲_レ戰、諸將欲_レ堅保棲、光泰彊_レ之、立花左近曰、吾所_レ願也、小早川肯_レ之曰、吾其先驅、諸將無_レ其辭、光泰鼓_レ衆敢戰、一以當_二百_一、死傷相半、最爲_二危急_一、柳川橫馳_二擊之_一、立花小早川戮_レ力乘_レ之、明人大敗北、斬首三萬八千餘顆、光泰功名於茲乎籍甚乎、講和成將_レ歸_二日本_一、到_二西生浦_一、石田等欲_レ下與_二光泰_一和解、宴_二于宮部兵部少輔所_一、宴罷就_レ疾、明日永逝、蓋_レ鳩_二殺之_一爾、文祿二年癸巳八月二十九日也、行年五十有七矣、光泰娶_二一柳氏_一、生_二一男四女_一、長男諱貞泰、稱呼作十郎、季男諱光直、稱呼平內、四女、一適_二竹中氏_一、一適_二冷泉院_一、一適_二石河氏_一、一適_二加藤氏_一且午、◎南溪云當作_二甲午_一、貞泰十五歲、國除遷_二美州黑野_一、領_二四萬石_一、敍_二從五位下_一、任_二左衛門尉_一、夫光泰生前之功如_レ彼、而死後胤子之報如_レ此何也、勲之也、公之智而惑_二志於倭人_一、亦不_レ曾有_二致_二子服力_一操_二董孤筆_一者、可_レ惜也耳矣、慶長三年戊戌、豐臣公薨、庚子、石田挾_二公子秀賴卿_一、令_二諸侯_一陣_二于美之關原_一、源家康公自將討_レ之、石河備前守守_二尾之犬山_一、石田令_二

貞泰屬_レ之、貞泰通_二於源公_一、遣_二舍弟光直_一質_二于江府_一、石河遂退聽、貞泰略定_二犬山_一、屢飛_二羽翰_一、以達_二其事_一、情、公悅_レ之、辱_二華檄兩封_一、旣而貞泰應_二源軍先鋒井伊兵部少輔之指麾_一、發_二犬山_一、向_二美州_一、公着_二美之赤坂_一、貞泰謁見、迺禽_二屯州之本田_一、拒_二大垣城_一、公大破_二關原_一、直抵_二近之佐和山_一、貞泰從行、公遣_二稻葉右京亮_一與_二貞泰_一攻_二同州水口城_一、城主長束氏不_レ戰而遁、公入_二攝津難波城_一、貞泰隨而往焉、公擒_二石田等_一反接、載_二檻車_一、徇_二于京路_一戮_レ之、而天下歸_二江府_一矣、庚戌、公命_二貞泰_一爲_二伯州米子城主_一、益_二封戶_一領_二六萬石_一、改任_二左近將監_一、庚寅之冬、有_二難波之軍_一、貞泰、及松平周防守、岡部內膳正等、向_二天滿口_一、貞泰爲_二之先渡_一、和議成、公振旅而還、乙卯之夏、復_二軍于難波_一、貞泰與_二松平武藏守_一同陣_二神崎口_一、城陷而軍散矣、元和三年丁巳、公嗣大將軍秀忠公、命移_二豫州大洲城_一、封戶如_レ元、癸亥五月二十有二日、貞泰罹_レ病不祿、享年四十有四矣、弟光直敍_二從五位下_一、任_二遠江守_一、貞泰娶_二小出氏_一、生_二一男一女_一、長男名泰興、稱呼五郎八、次男名直泰、稱呼織部、女嫁_二細川氏_一、光直娶_二本田氏_一、生_二一男_一、長名泰直、稱呼與_二父同_一、次名利景、初稱作內、後呼_二平右衛門_一、直泰娶_二

小出氏、泰直娶_二本多氏、泰興十二歲、見_二于大相國秀忠、
公大將軍家光公、其翌年貞泰卒、台命城主知縣如_レ父、
寬永元年甲子、敍_二從五位下、任_二出羽守、泰興先室岡
部氏生_二一男_一而亡矣、今室戶澤氏也、男名泰義、幼稱
龜之助、長呼_二右馬助、庚辰、十二歲、見_二于大將軍、承
應二年癸巳、敍_二從五位下、任_二美作守、爲_二太田備中守
堦、玆歲萬治三年庚子、余在_二江府、泰義欲_レ傳_二家聲、
需_二筆於余、余賞_レ之、且言曰、今也父子共_二爭_一
○南溪按事歟大君幕下、其能樹_二忠功、則子葉孫枝家榮罔_レ朽矣、作_二加
藤家傳_一、

尊語集抄 一名明德嘉言錄

一蓬庵様常ニ被_レ仰ニハ、賞罰ヲ左右ノ手ニ握リ、間ヲ扱サズ不_レ行シテハ、數多アル侍ヲ被_レ召仕フ事難_レ成由シ被_レ仰、又人ニ物ヲ取セント思フニ、晝夜ノ差別モ無ク、思寄タル時、早速ヤリタルガ能キト御意有_レ之事、

一頃餘程御病氣ニ被_レ成ニ御座ニ候節、忠英様江戸ニ被_レ成ニ御座ニ、公儀ニ御願被_レ仰上ニ、俄ニ爲_ニ御見舞ニ御歸國被_レ成候處、蓬庵様仰ニハ、御奉公ノタメ參勤被_レ成御事故、御國御乗船ノ節、御一生之御暇乞被_レ成候ト思召上ハ、御對顔被_レ遊ニ不_レ及御事也、片時モ早ク御歸府被_レ成、御機嫌御伺ヒ可_レ然思召由被_レ仰進、御逢ハ不_レ被_レ成趣申傳タル事、一或時久敷御鷹野ニ御越不_レ被_レ成、今日ハ天氣も能ゆヘ、近江へ御越可_レ被_レ成と也、小鷹少々御借用被_レ成度旨、忠英様へ被_レ仰達、依_レ之ハイタカ之内ニ而隨分宜敷を、早速申付候様ニ被_レ仰出、其日田宮表へ御越被_レ成、鶉二三羽取ければ、御機嫌に

て、辨當遣ひ可_レ申との御意にて、御茶辨當より御焼飯御出させ被_レ遊被_レ召上ニ、御供之面々も相休み候へとの御意ニ而、御小性共思ひ／＼に腰桶取出シたべる躰を御覽被_レ成、其方共が飯物を入る器ハ何といふものぞと御尋被_レ遊候へ、腰桶と申物之由言上すれば、皆々果報成事ども也、野合迄も箇様に結構なるものにて腹中を繕ふ、我等ハ所々の陣に出、具足の綿がみなどへ、紙に包みてはさけ、終に箇様之物は見たる事も無_レ之也、冥加と存るやうにと御意被_レ成、御焼飯被_レ召上ニ、鶉ハ數多取たるも同然、最早御歸可_レ被_レ遊とて、御歸駕被_レ成候由之事、

一御氣色惡敷御草臥被_レ遊御様子ニ付、西御丸へ忠英様爲_ニ御見廻ニ御出被_レ遊處、御臥具殊の外危抹なる御様子ニ付、早々巻物ニ而御夜着蒲團被_レ仰付、爲_ニ御持ニ被_レ進候處、御心入不_レ淺思召、御禮被_レ仰達、右御臥具御床ニ被_レ置、御召シ不_レ被_レ成、御家老中始メ御機嫌伺として罷出、面々ニ御吹聴御満足被_レ遊也、乍併阿波守義者、大名ニ被_レ生付一事なれば格別之義也、我等におゐては小身に生_レ付、終ニ箇様

之夜着蒲團に臥たる事も無_レ之、冥加を存じ、其儘置候事と御意被_レ遊旨、誠に尊き御賢慮也と、古き者共奉_レ感候事、

一于蘭盆ニ者、御書院ニ竹を御つらせ被_レ成、紙を小さく御切せ、處々御陣の節致ニ御供、討死抔仕候御家來之名御書せ、右竹ニ張並べ有を、十徳を被_レ召、御數珠御手ニ御持、御立向ひ被_レ遊、どここの御陣處ニ而骨折たると、夫々被_レ仰、一禮宛被_レ遊御通り之由、古き者共内海彌五太夫抔とも語り傳候由之事、
至鎮ノ子

一忠英様御年若之節、御朝寢被_レ遊候、西ノ丸御本丸へ御入ニ付、先達而蓬庵様御入と被_レ仰達有_レ之、御起上り被_レ遊、朝御膳被_レ召上所へ御出、御對顔之上御咄ニ、只今龍王之下にて、誰が捨たる哉書たるものを御拾ひ被_レ成候なり、讀て見よ、御伽之者ニ被_レ仰聞、御指出被_レ成、讀ければ、

もの、名も處によりて更りけりそちの朝飯こちの夕飯、此狂歌何奴が讀けるやと被_レ仰、御難談にて御立被_レ遊由、その已來、忠英様御朝寢不_レ被_レ遊旨、古き者語り傳へ候事、

右之節、御側ニ罷在御狂歌讀ハ武藤休甫也、蓬庵

様被_レ召連候と云、

一忠英様御年若之比、御家來仕の惡敷有_レ之故に、御家老中西ノ丸へ出仕いたし、右の趣被_レ申上ければ、蓬庵様仰ニ、若キ時ハ右様之もの也、異見も急ニハ仕間敷との御意にて、指て更る御言葉も無_レ之也、良過て忠英様江戸表へ御越被_レ遊、前廉に西ノ御丸へ御入被_レ遊候節、蓬庵様御居間に被_レ遊ニ御座候處へ、忠英様御入と御案内ヲ告來る、蓬庵様御出合被_レ遊、直ニ御書院へ御同道被_レ遊、障子御開かせ被_レ遊ければ、御庭ニ犬夥ク眠りて伏居けるを、蓬庵様御大音にて犬めくと被_レ仰、御聲ヲ聞、右之伏たる犬皆々不_レ殘御庭の外へ逃出るなり、其跡にて拍子木を御打被_レ遊ければ、雀數多飛來る、忠英様御覽被_レ遊、扱々能御なつて被_レ遊たると仰ければ、蓬庵様阿州へいつぞいふべきと存たる也、人仕に心付られ候様に有_レ之たし、鳥類畜類さへなつくれば、如_レ此人儘ニ成事也、人として憐愍を加へ、威義を以教給ふならば、忠義いたさずといふ事可_レ有哉、心懸ケ專一之義と被_レ仰に、其後忠英様御家來ニ御心ヲ付られて召仕れけると也、

一蓬庵様常々人之苗字御呼被_レ遊、内海十左衛門御小性ニ被_ニ召仕_一候、朝御膳過極而餅を被_ニ召上_一、或時内海_ノと御呼被_レ遊故、御前へ罷出候所、是へと被_ニ仰出_一故、御膝際迄參りければ、小豆餅御楊枝ニ指せられ、手を出せよと御意故、手を出せば、右之餅を御入被_レ遊被_レ下故に戴きければ、最早夫ニ而能シ、若キ者ハ大食ヲ仕るものなれば、また可_レ遣と思ふ處ニ小食なり、喰ねハ無_ニ是非_一、自身喰より外なしとて被_ニ召上_一、其後廿日程過、又朝御膳過餅被_ニ召上_一ニ、内海_ノと被_ニ仰出_一、罷出ければ、前廉之通り此度ハ手引キ不_レ申居候得バ、まだ所望か、自分給ると被_レ仰故、内海手持不沙汰ニ而漸御前ヲ退キけると也、

一蓬庵様御入湯被_レ遊時分、御春中摺_レと被_レ仰折節、御湯殿番參違居合不_レ申故、淺田龜之丞、隱居して虎溪と云、青山角兵衛、後又右衛門と云、兩人居合、御春中ヲ摺、湯ヲ汲懸ければ、殊外御悦び被_レ遊、其方達ハ老人ヲ大切ニ思ひ被_レ申ければこそ、箇様之仕合、禮可_レ申様なく、過分千萬、何をがなと被_レ仰、御納戸ニ有_レ之御召古シ之革之御足袋御取出し、いかにも古びたる片一

方御持出_ルてなり貴見當りたる程にとて被_レ下、其後六十日程過、兩人を被_ニ召出_一、先頃遣したる足袋は如何仕たる哉と被_ニ仰出_一故、早速宿より取寄指上ければ、御納戸より右之革足袋の連_レヲ御出し被_レ遊、ためつすがめつ御合セ御覽被_レ遊、兩人ヲ被_ニ召出_一、先頃之足袋之片一方御尋出被_レ遊とて、内へ金子三拾兩宛御入被_レ遊被_レ下候と也、

一蓬庵様或夜不_レ圖岩田監物、貳百石取、岩田甚五右衛門先祖、召出、其方に加増百五拾石遣す也、加増可_レ遣と思へば、早速遣したるが好き也、志シても其方不_レ計子細_{出脱カ}來れば、志シ空しくなる故に、夜中なれども被_レ遣由御意被_レ遊、追付江戸御用之御使者被_ニ仰付_一、右御使者仕廻歸ければ、蓬庵様先頃其方に遣候加増、我等小氣成故に、此度足して遣と御意ニ而又百五十石被_ニ下置_一、前後三百石御加増被_レ下由、淺田三溪物語り也、

一蓬庵様江戸御留主之内、廣瀬某、名不分明、知行五百石、此士御側ニ被_ニ召仕_一處、始而御留主中御横目役被_ニ仰付_一、御歸城已後、御留主之義一卷ニ書記シ指上候所、翌日封之儘ニ而御返し被_レ遊、後御側衆へ御

意被_レ成候は、横目と言ハ人ヲ制禁ニ一偏也、惣而人之行跡内外全ハ無_レ之、主人之害に不_レ成義者咎ニ者不_レ及方と思召、たとへば田之上の鹿のをどしを仕たる如くにて、夫婦いさかい迄横目聞やうニ而者、勉方わからぬ義と思召由にて、廣瀬御意惡しく成、後ニ御暇なして御國立退出、淺田三溪物語也、一澁谷安太夫此時長井、海部郡御代官相勉候處、百姓ども十一箇條之訴紙面相認メ指上ル、蓬庵様御取上御覽被_レ遊、密ニ安太夫を被_レ召出、件之訴紙面御見せ被_レ遊、被_レ仰は、此十一箇條之品、若返答之義無_レ之バ、早速是より逐電可_レ仕、則金子百兩可_レ遣、尤妻子之義は氣遣ひ不_レ可_レ仕、城へ早速呼取り可_レ預り置_一也、又言譯立事ならば可_レ致_二僉議、其方が忠心能存るゆへ如_レ此なり御意、是非可_レ申上_一やうも無_二御座_一候、御僉議可_レ被_レ下ならば申披有_レ之也と申上ル、依_レ之早速御僉議之上、百姓共負ケと成、皆磔に被_レ仰付、此後安太夫且暮難_レ有と申上、落涙仕ける事、蓬庵様御逝去後、安太夫追腹仕けるも、就中此一儀によると也、

一 至鎮様御機嫌能時、御居間ニ而御酒宴有、諸士近習

外様之御撰なく、御城へ出入する士は、不_レ殘被_レ召出、各大酒になれば、何_レも存寄次第に、藝を被_レ仰付、御酒宴終に至而、踊れ_一と御意ニ而、一統ニ踊る、其節御床或ハ御上段ニ御飾り被_レ遊御道具、踊之紛_レに取て戻るに、重て御尋もなし、是故に御存シ不_レ被_レ遊と何_レも存ける、或時御居間に而御酒宴有_レ之時、踊と御意也、孰も踊ければ、御秘藏之御香爐御床ニ出し有_レ之けるを、御手自御取置被_レ遊、諸人、扨々日頃御道具取歸候事能御合點被_レ遊と恐ける也、

一 至鎮様御生_レ付御肥被_レ遊、御面色黒く、御せひ高く、朝六ッ時御起被_レ遊、御居間へ御出、御雙方之御肌御ぬぎ、御手水被_レ遊ける、其節早御家老衆も被_レ出、取次ヲ以御機嫌奉_レ伺時、御意ニ者、能_レこそ早々被_レ出ける、追付可_レ被_レ遊ニ御逢_一也、急成用事有_レ之哉と御尋被_レ遊、急御用有_レ之旨申上れば、御手水之内御逢被_レ遊、又急用無_レ之と申上ければ、御手水被_レ遊上ニ而御逢被_レ遊、御用濟申上ければ、料理被_レ仰けるや否と御尋之節、未だ不_レ給と申上ければ、御相伴被_レ仰付、御料理一汁二三菜ヲバ不_レ過、尤時

によるべし、右御刃濟早速御家中諸士御城へ罷出程之面々は、如圖之御座敷に列居仕罷在ければ、間々唐紙障子ヲ開かせられ、何れもと御言葉懸る、毎朝右之通ニ被遊けるゆへ、外様之諸士も毎朝志次第ニ御目見ニ出、退出支度仕候而へ、又登城して御廣間ニ咄罷在ニ、外様之諸士ニ而も不圖被召、弓馬劍鎗炮有之類ハ勿論之儀、基雙六鞠或は音曲之類、歌道儒道佛道神道軍法茶道之類に至る迄、其人々の相好品被仰付、御覽被遊事を、御不斷御樂み被遊也、

或時益田因幡取次ニ而、江崎隼人と言士被召抱、其比夏之事成けるが、澁染之太布御帷子を被爲

御居間之圖

御家老中 出仕 御座敷	諸士一統ニ 相詰御座敷 末席ニハ御 歩行迄列居
御居間	
御次	
御勝手之方	

召、基を諸士ニ被仰付、御腹這被遊御覽被成節、益田出て、被召抱候處之江崎罷出候、御目見可被仰付哉と申上、至鎮様御聞被遊、江崎爰へ呼出せと被仰、則罷出候處、至鎮様御起直りも不_レ被遊、江崎隼人と御言葉被下ゆへ、江崎頭を下ゲける、次而御意も無_レ之、下城之上益田方へ行申けるは、野子義御聞及之通り、外々々高知行ニ而招がるれ共、當國の太守様御良將之聞有_レ之ゆへ錄々構す相望み罷出候處、案ニ相違し、禮義不案内之御大將也、可立退と存_レ共、士之一度懇望して御家中へ早速立退事世上之聞も不_レ可然存故、此段御語申也、そもく名をも人に知らるゝ士被召出、始而御目見に、袴も不_レ被召、其上基盤ニ御あざとを持せられ、腹這ニ成御脚を延され、疊をばたくと御脚ニ而御拍子取被遊、御言葉被懸事、無禮とや言ん法外とや言ん、苦々しく立腹す、益田聞て御立腹尤也、乍去三十日計猶豫有て、先明朝々登城して様子を被見べしと言、江崎も乍不興ニ其意に任せける、然るに萬事仁道の御仕置、諸士之思ひ付し御家風と見へる、江崎又益田方

へ行て、先日は龜忽無禮之過言迷惑千萬也、此御仁德之仕置ニ而者、中々他國之高知行所望ニ無_レ之、御國ニ脚を留度存ると言けると也、此義者、稻田益水物語り之由、稻田丈山子に語りける也、

私ニ、右之咄賀嶋冬知ニ物語りすれば、或程老人之咄ニ度々聞しに少シモ無_レ相違有_レ之通之由、被_ミ召置_一士之名ハ聞及ばざれ共、右様之至鎮様御行跡之一卷は、何れも聞傳同然之咄にて、隨分慥成のへ爰ニ記すもの也、

一忠英様御側衆ニ被_レ仰ハ、奉公人大小ニよらず可_ニ心得_一事あり、早し惡し大事なし遅しよし大事ありと預じめ心得べし、惣じ而主人の命を蒙らば、先づ其儀を辨じ置ニ、若シ早過る事道遅く其用を勉たらば、能く_リてと言事有_レ共少しも大事なきもの也、或は登城に早過て、待久敷ためらへども、是又大事なし、又遅くする事も其理ニ叶ふとあれども甚々危し、然者何事にも早き事に越度はなしと可_レ知と御意有_レ之なり、

一忠英様江戸へ御出被_レ遊時分、其年々翌年迄御遣ひ銀御衣服類御國之御物入まで悉く御聞被_レ遊、御手

帳に御留置、毎事御思案被_レ遊しと言傳ふ、

一忠英様田安御門臺御手傳之時分、御普請爲_ニ御見分、大猷院様御成被_レ遊、忠英様御目見、其節賀嶋主水山田豐前長谷川越前へ御直ニ御意有_レ之ニ付、右之御賀として直孝掃部頭様を忠英様へ御狀被_レ進内、右御文段有_レ之由、長谷川伊豆貞信右御狀所持之由、中尾半左衛門勝興に語りけると也、

一田安御手傳之無_ニ間も江戸大地震なり、忠英様田安御門臺之安否見せに被_レ遣ける、諸人殊外感じけると也、

一忠英様御代、裁許御奉行六ヶ敷、公事難儀之時は、會所ニ而御料理被_ニ下置、苦惱仕し連御鷹の雁鴨被_ニ下置、尤吟味濟み裁許御奉行早速登城し、御直ニ様子つぶさに申上、御直に御口き被_レ遊ゆへ、公事一卷ハ、御家老中にも知れざる事多く有り、

一忠英様御代御在國之内ニハ、極て一兩度宛於鶴間組頭仲間惣頭仲間之嫡子共御料理被_ニ下置_一候也、一至鎮様歌道にも御志深く、花下紹巴ニ御出逢被_レ遊時之御發句に、「香もうつれ花の下行春の水」と被_レ遊ける、御秀才今ニ至りて感じ奉る也、

立齋舊聞記卷之上

一高橋主膳兵衛鎮種入道紹運ノ嫡男左近將監統虎ハ、統虎ハ宗茂始名、紹運ハ宗茂實父、永祿十二年己巳八月十三日ニ、筑前國岩屋ノ城ニテ誕生アリ、岩屋ノ城ハ、在三笠郡、母ハ齋藤兵部大輔鎮實ノ女也、後號宗靈院是也、其生稟強健ニシテ、乳哺ニ滯ル處ナカリケレバ、竟ニ病ニ冒サレ給フ事モナク、肥牀五調ニシテ、四五歳ノ比ニ至テハ、尋常ノ七八歳ノ兒輩ヨリモサカシク、能モノヲ宣フコト壯夫ノ如ナルコト多シテ、聞人舌ヲ鳴スコト度々ナリ、既ニ六七歳ニ至玉ヒテ、相撲ヲ好ミ、十歳計ノ兒ヲ取倒シ給フコトイト事モナク安カリケリ、長ジ給フニ從テ、聰敏穎悟ニシテ、辯舌口才ナルコト、遙ニ衆人ニ抽デ給ヒケレバ、アツハレ大將ノ器量ヲ具シ玉フ物哉ト、人々感ジ奉ラズト云事ナシ、

一天正四年八歳ノ時、見物ノ事有テ其場ニ出テ物ヲ見給フ最中ニ、群集ノ人ノ中ニ諍論出來テ刃傷殺害ハナハダ狼藉タリ、其場ニアリツル貴賤男女大

ニ騷動周章シテ方々ニ逃走ル、統虎公ヲ介抱シタル輩モ、此幼年ヲ具シ奉テ其所ヲ立去ントス、統虎公少モ恐玉フ氣色ナクシテ宣フハ、今日ノ見物ハ是ニテ事終ルヤト問玉ヘバ、介抱ノ者答申ハ、唯今怖敷騷ノコト出來候、加様ノ處ニ幼年ナドハ御座シマサヌ物候ト申ケリ、統虎打咲給ヒ、汝等ガ周章タルコトノオカシサヨ、此方ハ彼ガ合手ナラチバ、何シニ讐ヲナスベキゾ、假令イカナル怖敷コトノ出來ルトモ、爭カ見物ヲ過サデ立退ベキトテ、更ニ動轉ノ氣色モマシマサズ、兎角スル間ニ騷動モ靜リケレバ、諸人モ立回テ見物ス、斯テ統虎公ハ事終テ歸ラセ給ヒケリ、今イマダ幼稚ノ時ヨリ物ニ動轉シ不レ給フコトヲ、人皆是ヲ感ジ奉ラズト云事ナシ、

一天正六年十歳ノ時、父紹運公重科ノ者ヲ萩尾ト云者ニ課テ討シメ玉ヒケリ、統虎公其事ヲ聞給ヒ、萩尾ヲ呼デ宣フハ、神妙ニ仕タリト聞テアリ、何トカシツルト其次第ヲ問給フニ、萩尾答テ申ヤウ、然々ノ所ニテ彼者ニ行合、後ロヨリ唯一太刀ニ仕タリト申ケレバ、統虎公神妙ナリト賞美シ給フ、傍ナル者申ヤウ加様ノ仕物ハ後ロヨリハ仕安キモノニテ

候ト申ケレバ、統虎公是ヲ聞召テ、前後ノワケハ不
レ知、勝タルコソ手柄ナレ、敵ヲ討ニ討安ヲ置テ、討
ニクキ事ヲシテ仕損ズルハ時ノ宜ニ非ズ、係ル詮
ナキコトヲ云者ハ、吾成人ノ後軍セン時妨ニ成ベ
シト、長シヤカニ教訓シ給ヘバ、彼者赤面シテ罷立
ニケリ、

一十二歳ノ時、小鷹ヲスエ玉ヒ、同ジ年比ノ童ヲ餘多
召ツレラレテ出テ遊ビ給シ時、狂狗吼カ、リケレ
バ、供ニアリケル童ドモ恐駭テ逃走ル、統虎公ハ少
モ騒不レ給打通リ給ヒシニ、彼狂狗大ニイカツテ走
カ、ルヲ、飛チガエ、刀ヲ拔テムネ打ニシタ、カニ
打給ヘバ、狗ハ恐テ逃去ス、頓テ刀ヲ鞘ニ收テ通リ
玉フ、紹運公是ヲ聞召テ、統虎ニノ玉フハ、汝刀ヲ
拔テ防ク程ナラバ、何ゾ不レ斬ヤト宣ヘバ、統虎公
打笑テ、太刀刀ニテハ敵ヲコソ斬候ベケレ、狗猫ナ
ドヲ斬トハ承ハラヌ物ヲト宣ヘバ、紹運公涙ヲ浮
ベ、最器量ニ見エタリ、才智逞シテ普通ニアラズ、
成人ノ後其才ニ誇ルコトナカレ、ト教エ給ヒケリ、
一天正九年十三歳ノ時、紹運公出陣シ玉フコト有シ
ニ、イザヤ統虎モ出陣セヨカシト戲レ宣ヒケレバ、

統虎公畏テ答玉フハ、仰ナクトモ御供仕度候ヘド
モ、イマダ働健ナラズ、斯テ敵ニ逢ナバ云甲斐ナキ
死ヲ仕ルベシ、今一兩年モ過候ハバ、一方ヲ承テ罷
向ナントゾ宣ヒケル、是ヲ聞人々、思慮フカク尋常
ナラス、智慧ニテマシマスト感ズル者モアリ、又白
地ノ者ハ、幼少ヨリ心後レ玉ヘル口惜サヨト嘲ル
者モ多カリケリ、其比ノ風俗無智ニシテ、ウハ氣ナ
ルコト是ヲ以料リ知ベシ、統虎公カ、ル器重アル
コトヲ立花ノ戸次道雪聞傳エテ、是非ニ於テ養子給
ラント乞給ヘドモ、紹運公ハ更ニ許容ナカリケリ、
一天正十二年十六歳ニテ初陣ナリ、抑大友宗麟、去ヌ
ル年日向川合戦ニ討負玉シ後、筑前ニ秋月宗像ノ
一黨、肥前ニ龍造寺筑紫ノ人々、蜂起シテ、筑後筑
前ノ間ニアラユル大友一味ノ城々ヲ攻取ント、所
所ニ於テ合戦止時ナシ、宗麟勢ヒ漸ク衰エヌレバ、
是ヲ鎮ントスルニ力不レ及、然ルニ筑後ノ國ノ住人
間注所治部太夫ハ、秋月ニ心ヲ合セ旗ヲ舉ルヨシ、
宗麟聞玉テ、筑後ノ者ドモ敵トナルハ、手元ノ大事
是ニ過タルコトナシ、急ギ間注所ヲ討平ヨトテ、枅
網入道宗歴ニ三千餘騎ヲ相添テ差向ラル、斯テ間

注所ガ楯籠ル井上ノ城ニ押寄テ攻戰フ、此城旣ニ落ベカリシニ、秋月種實三千餘騎ニテ後詰シケレバ、朽網前後ノ敵術計ウシナヒ、圍ヲ解テ引退キ、筑後川ヲ隔テ對陣ス、高橋紹運戸次道雪是ヲ聞テ、兩旗ヲ以テ朽網ニ力ヲ合セ、秋月ヲ討ント出陣シ玉フ、係ル處ニ豊後府内ニ謀叛ノ者出來ケレバ、宗麟駭キ朽網ヲ豊後ヘ呼返サル、紹運道雪是ヲ聞テ、本意ナク中途ヨリ歸ントシ給ヒケルガ、徒ニ歸陣スルモ殘多シ、秋月ガ所領嘉摩穗波ノ郡ニ打出亂妨セントテ、所々ヲ放火シ押通レドモ、秋月出アハザレバ合戰モナシ、旣ニ引入ントシ玉フ處ニ、秋月五千餘騎ヲ卒シテ跡ヲ蹈ントス、紹運道雪ハ三千餘騎ヲ引マトヒ石坂マデ取テ返ス、此時統虎初陣ナレバ、有馬伊賀ト云物馴タル剛ノ者ヲ統虎公ノ介錯トシ、百五十騎ヲ相副ラル、天正十二年十一月廿四日ノ事ナルニ、紹運一千餘騎ヲ卒シテ坂半ニオリテ敵ヲ待テヒカヘ給フ、道雪ハ一千餘騎ヲ小松ノ蔭ニ引隠シテ扣ヘ玉フ、統虎公花ヤカニ出立テ、鞍カサニ立アガリ下知シ玉フハ、敵旣ニ近付タリ、我ニ從フ者共ハ此方ニ來レト喚テ、紹運ノ陣ヨ

リ三町計ヲ隔テ取ントシ玉フ、介錯ノ有馬申ヤウ、御計ニハサルコトナレドモ、紹運公ノ御陣ト間ヲ隔ラレシコト詮ナクヤ候ハン、敵大勢ニテ候ヘバ、押隔ラレン時此小勢ヲ以爭カ叶ハセ給フベキト、荐ニ是ヲ制シケレバ、統虎打咲テ、敵大勢ナリトテモ何程ノコトカ有ベキ、紹運ト一所ニアランニハ、我ニ從フ者ドモ紹運ノ勢ト一同ニカケ引シテ、我下知ニハヨモ從ハジ、理ヲ曲テ唯我計ルニ任セヨトアリケレバ、有馬感涙ヲ催シテ、度々軍ニ馴タル者ダニモ係ル思慮ハ有マジキニ、今年ヤウヤク十六歳ニ成給テ、始テノ戰場ニカ、ルユ、シキ下知ヲシ玉フコト、天性ノ武者ト云ツベシ、我命ヲ長シテコノ殿ノ壯年ノ器量コソ見マホシケレトゾ呟キケル、然ラバ御下知ニ任セサフロウトテ、百五十騎ヲ引分テ一隊ノ陣ヲトル、去程ニ敵ノ大勢サシモ嶮シキ石坂ヲ息ヲモツカズ攻上ル、統虎是ヲ見給ヒ、旣ニ驅ントシ給フ處ニ、有馬伊賀ハ統虎公ノ前ニカケ塞リ、大將ハカヤウノ時サキ驅ハセヌ物ニ候トテ、推留テ備ヲ設ク、紹運ノ勢ハ敵ヲ箭比ニ近ヅケ、見下シニ弓鐵炮ヲ一度ニドツト放カクル、敵

散々ニ打立ラレヒルム處ヲ、紹運喚テ懸リ給ヘバ、秋月ガ先陣七百餘騎タツ足モナク坂ヲ下リニマクリ落サレ、秋月ガ二陣千餘騎喚テ上ル、紹運是ニ駈合テ相戰フ、統虎時分ハヨキゾ懸レトテ、百五十騎打テカ、ル、敵ノ後陣是ヲ見テ、大勢ツバイテ攻登リ、前後揉合セ火出ル程ニゾ戰ケル、統虎ニ近付敵ヲ有馬カケヨセ、三騎マデ討取シガ、額ニ薄手負眼ニ血入テ防衆タリ、係ル處ニ秋月ガ郎等堀江備前ト云者、長刀ヲ横ヘ近ク者ヲ薙倒シ、統虎ヲ目ガケ打テカ、ル、統虎是ヲ見給ヒ、箭取テツガイ能引テヒヤウト放ツ、アヤマタズ堀江ガ長刀ノ柄ヲ射削テ、餘ル箭弓手ノ腕ニシタ、カニ立、堀江是ヲ物トモセズ、長刀カシコニ投ステ、統虎ニ走リカ、リ押並テムズト組、統虎力モ強カリケレバ、堀江ヲ取テフセ、チットモ働サズ、有馬萩尾ハナキカト喚リ給ヘバ、萩尾大學カケ合、堀江ガ首ヲバ取テケリ、斯テ敵味方入亂テ勝負モイマダ見エザル處ニ、道雪一千餘騎眞下リニ喚テカ、リ玉フ、是ヲ見テ秋月勢囂ト敗テ引退ク、紹運道雪急ニ追掛、大勢ヲ討取給ヒケリ、此時道雪ハ紹運ニ向テ宣フヤウ、

御邊ハ男子二人ヲ持玉ヘリ、統虎ヲバ兼テノ所望ニ任テ此入道ニ給ルベシト、理不盡ニ請玉フ、紹運思案シ玉フハ、今九州ノ有様ヲ見ニ、大友ノ滅亡近ニアリ、薩摩ニ嶋津、肥前ニ龍造寺、中國ニ毛利、是等ノ大敵四方ニアリ、其外藩裏ノ小敵計ルニ遑ナク、是ヲ鎮ントスルニ謀ナシ、近年ニ至テ宗麟邪法ニ迷倒シテ、政道皆邪路ナレバ、終ニハ亡ビ玉ベシ、吾道雪ト心ヲ一ニシテ、九州ヲ治シニ可レ恐者アラバコソ、統虎ガ爲トイヒ、其家ノ爲ト思ヒケレバ、サシモ寵愛ノ嫡男ヲ道雪ニ約諾シテ立花ヘ送り玉フ、道雪最愛ノ女子オハセシヲ統虎ノ妻トシテ、重代ノ讓ヲ授ケ、悅給事限ナシ、

一天正十三年、道雪紹運ハ黒木ノ城ヲ攻ント兩旗ヲ以テ打圍ミ玉フ、敵一千餘人楯籠テ是ヲ防トイヘドモ、道雪紹運強ク攻給フニ依テ、城敗レ黒木兵庫討レ訖、隆信ハ黒木ガ後詰ノ爲ニ、江上三郎ニ五千餘騎ヲツケテ筑後ノ福嶋ヘ指出ス、道雪少モ不レ恐、同國下妻山門ノ郡ニ打出コ、カシコ放火シ、高良山ニ打上テ陣ヲ張ル、筑紫草野江上ノ軍勢道雪ト合戰スルコト度々ニ及ブ、大友ノ宗徒ノ勢ハ敵ノ

大勢ナルヲ見テ、次第ニ落失、道雪紹運ノ勢計リ殘リケル、此時統虎ハ薦野三河ト云フ者ヲ介錯トシテ立花ノ城ノ守禦タルノ處ニ、秋月種實密ニ勢ヲ出シ立花ノ城ヲ攻取ント押寄ル、城ニハ此由ヲ聞テヨリ騒動スルコト夥シ、統虎公薦野ニ宣ケルハ、秋月ナレバトテ恐ルベキニ非ズ、道雪此城ニマシマサズ、統虎ハ若年ナリ、城ヨリ出テ戰コトハヨモアラジト敵ハ大キニ油斷シテゾ有シ、今宵逆寄ニ夜討シテ追散セト下知シ給フ、薦野承テ小勢ヲ以テ大軍ニ當ランコト危キコトニ候ヘバ、唯是ニテ防ガンコソ可然候ハント申ケレバ、統虎聞召、合戰ハ時ノ運ニヨリテ可_レ勝ニモ負、亦ハ可_レ負ニモ勝コト常ニアル習ナリト聞テアリ、運盡ナバ是ニテ防トモ利アルベカラズ、此計ヒ否ト存ゼラル、ニ於テハ、汝達ハ此城ヲ守ラレヨ、某若輩タリトモ行向テ追散サントゾ伺リ給ケル、薦野制スルニ不_レ及、三百餘人ヲ引卒シテ行向フ、其道三里ヲ急ニ打テ押寄ケレバ、案ノ如ク敵大キニ油斷シテ、一戰ニモ不_レ及敗北ス、是統虎公十七歳ノ秋ノ事ナリ、其後ハ敵ヨリ此城ヲ攻ントスルコトハ無リシカド

モ、大勢ヲ以テ道雪ノ所領ニ攻來リ耕作ヲ妨、在所々ヲ放火シテケレバ、統虎公是トセリ合給コト止コトナシ、其度ゴトニ統虎公ヨク計ヒ給ヘバ、一度モ不覺ヲ取玉フコト無リケリ、

一斯テ道雪公紹運公ハ、筑後國高良山ニ在陣シテ、四方ノ敵ヲ縮メテオハシケルガ、道雪ハ老境トイヒ、其上多年ノ軍勞ニ依テ、身軀衰ニ筋力憊レテ病床ニ臥玉ヒケルガ、次第ノニ弱リ玉ヒ、天正十三年九月十一日ニ、高良山ノ麓比野村ニ於テ行年七十三ニテ空敷成セ給ヒケリ、紹運公ハ飛鳥ノ翅ヲ隕シタル風情ニテ、歎キ玉フ事譬ヲ取ベキ様モナシ、此事統虎ニ告奉リケレバ、悲歎ノ泪ヲ袂ニ餘シ玉ヒテ、無_ニ爲方_ニアリサマナレドモ、亂世ノ習トテ甲冑ヲ以テ喪服ニ替、三百餘騎ヲ引卒シテ高良山ニ行向ヒ、道雪公ノ御死骸ヲ取テ立花城ニ歸リ玉ヒヌ、二ノ丸ノ西南ナル梅力嶽ニ葬リ歛メ奉リテ、當城ノ弓矢神トゾ拜ミ給ヒケル、サレバ此人弓矢ヲヲ取テ堅ヲ破リ利ヲ碎キ玉フコト、天文ノ始ヨリ天正ノ今ニ至ルマデ、百戰百勝ノ功ヲ立給コト、仁義ノ勇ヲ專トシテ、忠信ノ心内ニ不_レ怠シテ、血氣

ノ妄勇ニ非レバ、上下ノ人々哀惜シテ是ヲ悼マヌ
ハナカリケリ、

一天正十四年、嶋津義久武威盛ナルニ依テ、九州大半
ハ嶋津ニ從フ、然ルニ高橋紹連戸次統虎ハ義久ニ
不レ從、筑紫廣門今ハ高橋ト一味シテ嶋津ニ叛ク、
各々城郭ヲ堅固ニシテ、關白秀吉公ノ西征ヲ相待
處ニ、義久件ノ三城ヲ攻取ント、大軍ヲ起シテ既ニ
筑前ニ發向スト聞エケレバ、統虎公ヨリ紹連公ニ
申送り玉フハ、嶋津近日當國ニ向フ由其聞エ候、彼
ハ大軍味方ハ小勢ナレバ、戰トモ利ナク防トモ敗
ルベシ、假令戰フニ至テモ無下ニ淺間敷キ死ヲ仕ラ
ンヨリハ、此方ヨリ敵ニ先ジテ命限リノ合戰ヲセ
バヤト存ルハ如何ト云送り玉ヘルニ、紹連是ヲ聞
玉ヒテ、誠ニ敵ニ味方ヲクラブルニ、九牛ガ一毛ナ
リ、サレドモ軍ハ勢ノ多少ニヨルベカラズ、唯運ニ
依テ利アリ、敵大勢ナリトモ無下ニハ爭テ討ルベ
キ、詮ナキカ、リ軍シテ名ヲ流ス勝負ヲセンヨリ、
唯敵ヲ待テ尋常ニ防戰テ勝敗ヲ運ニ任スベシ、武
者ノ身命ハ惜ムニタラズ、義名ヲ不レ失ヲ以テ本ト
ストゾ、返答シ玉ヒケル、然レバ去ヌル比、秋月種實

手ダテヲ以テ秀吉公ニ從フト詐リ、紹連ニ一味シ、
其次男彌七郎ヲ取籠置ケルヲ、杉山山城水原半介
ト云二人ノ者ヲ遣シ、秋月ヨリ守護ニ付置タル輩
ヲ戲謀テ、彌七郎ヲ奪取テ立花ノ城ヘ落シケル、後
ニ高橋主膳正統増改直次、ト云是ナリ、統虎ハ立花
左近將監宗茂ト改メ給フ、宗茂公立花ノ城ヲ堅固
ニ構エ兵糧澤山ニ用意シ、タトヒ如何ナル大敵數
ヲ盡シテ向ヒ攻ルトモ、ナドカ輒ク落ベキト、一族
ノ輩十餘人、相從フ侍ニハ米多比三左衛門、新田掃
部助、奴留湯藏人大夫、薦野三河守ナド云一騎當
千ノ兵ドモナリ、恩願ノ輩ニハ、小野、十時、山本、
安東、由布、佐伯、高野、櫻井、後藤、森下、堀、石松
・ナド云者ヲ始トシテ、度々ノ高名其名ヲ顯ス兵百
五十餘人、其勢都合一千七百餘人、義ヲ鐵石ヨリ
モ重ンジ、命ヲ毫毛ヨリモ輕ズル精兵、心ヲ一ニ
シテ楯籠レバ、假令百萬騎ヲ以テ攻ルトモ、可
レ落城トハ見エザリケリ、去程ニ嶋津修理大夫義
久五萬餘騎ヲ指向テ筑前ニ亂入シ、岩屋立花兩城
ヲ攻ントス、宗茂公使ヲ岩屋ヘ馳テ申玉フハ、御城
サセル要害ノ地ニ非ズ、寶滿ノ城ハ無雙ノ要害ナ

レバ、彼城ニ移リ籠ラセ給テ可^レ然ヤト申玉フ、紹運公アザ咲テ、運強キ時ハ死地ニ入テモ不^レ死、運極リヌレバ生地ニ在テモ遁ニ所ナシ、此城ヲ出テ僅ノ要害ヲ頼トモ必勝ノ理ニ非ズ、秀吉公ノ援兵ヲ相待トモ何ノ年月必ト云期ヲ知難シ、干戈ノ勢力健ナル時強敵ニ向テ義ノ爲ニ死ンコト、豈心ヨカラザランヤ、敵既ニ城下ニ近ヅキタリ、由ナキ詮義ニ怠リテ敵ノ謀ニ落ベキニ非ズ、ワレ人ノ死近キニ在トゾ返答シ給ヒケル、宗茂公是ヲ聞召テ洄ヲ流シ、セメテノ心ヤリニ日比如何ナル前途ヲモ見ハテント云兵共アマタ呼テ宣フハ、紹運ノ死期近ニアリ、吾死期モ又不^レ遠、年來人々ノ忠心元ヨリ忘ル、ニ非ズ、吾若此度連ヲ開テ目出度カラニ於テハ、ナドカ人々ノ恩ヲ報ゼデハ有ベキ、我既ニ敵ノ爲ニ命ヲ殞ニ於テハ、共ニ黃泉冥路ノ旅ニ赴ン時手ヲ携テ參候ヒナン、然レバ唯今岩屋ノ城ノ旦夕ニ迫レリ、イヅクニテ功ヲナスモ同ジ事ナレバ、此内三兩人岩屋ニ至リ紹運ノ前途ヲ見届テタベカシトゾ宣ヒケル、其座ニアリ合人々、我行ン人行ントテ、其爭ハテモナシ、宗茂公仰ケルハ、サ

ノミ大勢ハ詮ナシトテ、野上七郎、原田主馬、同次郎、菅生彈正、合志玄番、村尾彌源次、竹迫小次郎、世戸口六郎、吉田右京、後藤新五兵衛、後藤太兵衛、竹迫五郎兵衛、西山織部、甲斐勘解由、同新助、井手七郎左衛門、森善兵衛、黒野出雲、同源三郎、日高甚八、木田右馬介、工藤彌兵衛、青木九介、若杉藤九郎、泉原右京、野村彌介、神志奈彌三郎、加椎甚助、麻生民部、已上精兵二十九人ヲ岩屋ノ城ニゾ籠給ヒケル、此外石松源五郎使^ニ于岩屋^ニ而不^レ歸討死、斯テ岩屋ノ城ハ薩州ノ多勢ニ圍マレ、終ニ保コト不^レ能シテ紹運公切腹シ玉ヒケリ、宗茂公此ヨシヲ聞召テ、元ヨリ期スル處ナレバ今更駭クベキニアラズ、敵ハヤガテ當城ニゾ向ンズラン、左モアラバ思ノマ、ニ軍シテ死ヲ蚤クセント待玉フ、薩州ノ大將嶋津兵庫頭ハ、岩屋ヨリ此立花ニ攻寄ルト聞エシカバ、城中ノ手當堅固ニ掟テ玉ヒ、宗茂公更ニ動轉ノ氣色モマシマサズ、嶋津ガ勢ハ立花ニ押來リ、遠卷ニシテ使者ヲ以テ申ヤウ、今度岩屋ノ城ヲ攻落シ又當城ヘ向候事ハ、宗茂ニ對シ全ク遺恨ヲ存ル子細ナシ、九州コトハ、薩州探題ノ下知ニ從フベキノ處ニ、當國ニ於テ岩

屋立花ノ南城我意ヲ立ラル、ニ依テ、下知ヲ加ヘ
ン爲罷向ノ處ニ、紹運其旨趣ヲ不_レ得無題ニ楯ヲツ
カル、ニ依テ、力ナク攻落シ申處ナリ、當城此義ヲ
納得シ給ヒテ降參アラレ候ニ於テハ、向後隣交ノ
約ヲ堅ク定テ人數ヲ引取候ベシト、扱ノ懸タリケ
リ、宗茂公ハ聞召、是返答ニモ不_レ及トイヘドモ、又
道理ヲ云ワクマジキニ非ズトテ、返答シ玉フハ、薩
州探題ノ下知ニ從テ降參ヲ可_レ致ノ旨、曾テ納得ニ
不_レ及候、ソレヲ如何ト云ニ、去々年大友宗麟上洛
アリテ、關白秀吉公ニ禮ヲ述ラレ、彼御下知ニ從ハ
レシ時、筑前ヲ御公領所ト定メラレ、一國ノ支配ヲ
高橋紹運立花道雪兩人ニ仰付ラレ訖ヌ、道雪死後
ニ某若輩タリトイヘドモ、其名跡ヲ相續シテ皆舊
例ヲ承繼、關白秀吉公ノ御下知ヲ守リ奉ル處ナリ、
然レバ今關白殿ヲ捨テ薩州ノ下知ヲ承ハラシコ
ト、武士タラン者爭デカニ君ニ仕ル無道ヲセンヤ、
殊ニ紹運此義ヲ存ルニ依テ、堅ク守テ切腹ニ及候
上ハ、某今更存命シテ汚名ヲ世上ニ傳ントハ努々
思モヨラヌ事ドモナリ、元ヨリ待請タルコトナレ
バ、急ギ城下ニ攻ヨセラレ候ヘ、命ヲ限防戰テ、其

後潔ク切腹シテ紹運冥路ノ供ニ追付奉ラント、思
極タルコトナレバ、別ニ思案モ候ハズトゾ、返答シ
給ケル、其後兩度手ヲ替品ヲ替テ扱ケレドモ中々
返答ニモ及バザリケレバ、兵庫頭申ケルハ、今ハ中
中扱ニ及ブベシトモ不_レ覺、此上ハ攻カ、ルニテゾ
有_ン、乍_レ去暑氣ノ時分ヨリ今ニ至テ永陣ニ士卒勞
シ、其上岩屋ニテ討死多ク、殘ル兵モ皆大小ノ手負
ナレバ、此勢兵ヲ以テ此堅城ニ攻カ、ラバ、軍勢大
カタ討死スベシ、ソレニ城ヲモ落シ不_レ得、惣ナル
コトヲシテ夜ニ紛レ引ンヨリハ、唯今引取ニシク
ハナシトテ、近所ノ在家少々焼捨テ、八月廿四日陣
ヲ拂テ引退ク、宗茂是ヲ見玉ヒ、薩摩ハ引テ歸ル
ゾ、若者ドモ足輕ヲ召連行テ追拂ヘ、ソレヲ如何ト
云ニ、薩摩ニ城ヲ圍マレ一戰ニモ不_レ及、人數ヲ引
ニモ、連ヲ開キ命ヲ助リタルヲ悅テ、何ノ手ダテモ
無リシナンド、世上ノ口ニカ、ランハ、無念ノコ
ト、思ナリト宣ヘバ、老軍皆此義最ト感ジタマ
ツリ、追懸リ透間モナク揉立追崩ス、薩州ノ勞兵思
ヒカケヌ事ナレバ、散々ニ驅立ラレ立足モナク北
テ行、立花勢ハ分捕少々シテ、小勢ナレバ長追セ

ズ、ヨキ沙ニ引返シケリ、此事秀吉公聞シ召シ御感
ノ書ヲ成レケル、書曰、

去月廿四日對ニ安國寺黒田勘解由ニ書狀到來披閱
候、仍薩州輩敗軍之刻相付人數敵數十人討捕之
注文上置候、一々加ニ披見一候、誠以粉骨無ニ比類
候、然而其方事忠節儀候之條、新地褒美等可レ被
仰付ニ候間、下々ニ此由申聞、彌相勇可レ勵ニ忠勤
事專一候、猶近々差ニ遣人數一候間、本意不レ可有
レ程候、委細黒田勘解由安國寺兩人可レ申者也、

九月九日

秀吉公

御書判

立花左近將監とのへ

斯テ宗茂公宣フハ、案ノ外ニ敵引取ニ依テ、紹運公
ノ弔合戰モセズ、又居ナガラ手モオロサズ大難ヲ
遁レタリト、人口ニ及ニ口惜サヨ、爰ニ高鳥居ノ城
ニ星野中務楯籠リテ立花ノ押ヘヲナス、岩屋既ニ
落城スレバ、立花一手計ト思侮テ油斷ヲシテゾ有
ラン比、意氣ヲ討テ、責テ紹運公ノ孝養ニ報ゼント
テ、八月廿五日一千餘騎ヲ卒シテ、巳ノ刻計ニ高鳥
居ニ推寄ル、先陣ハ小野和泉、薦野三河、三百餘人
ヲ卒シテ身命ヲ投チ圍ノ内ニ攻入、所々ニ火ヲ放

テ焼立ル、折節風烈ク吹立テ、餘煙八方ニ散テ燃上
レバ、敵ノ大勢心ハ猛ク勇トイヘドモ、防キ兼テゾ
見エニケル、大將星野中務同民部少輔兄弟ハ、身ヲ
不レ惜戰ケレドモ不レ叶、終ニ討レケリ、頭書云、大將星
次郎兵衛
討ナリ、同廿七日此有様ヲ秀吉公ニ注進ス、秀吉公
ハ不レ斜悦ビ給ヒ、御感ヲ成ル、御書曰、

去月廿七日對ニ安國寺黒田勘解由宮木入道ニ書
狀、并首注文、今日十日披見候、今度其表ハ嶋津
相働候之處、味方之城地二三箇所手もろく相果
候條、其構之儀無ニ心元ニ被ニ思召ニ候、輝元元春隆
景其外人數追々差遣候處、立花城之儀無ニ別條
相抱之儀さへ、對ニ殿下ニ忠節無ニ比類ト思給之
處、去廿四日敵引退候刻、足輕を相付數多討果儀
手柄之上、重而高鳥居東西責敗、城主星野中務大
輔、同民部少輔を初、其外不レ殘數百人討捕首之
注文到來候、誠紛骨段中々不レ及ニ申候、是以後儀
ハ聊爾なる働之儀可レ爲ニ無用ニ候、人數追々指
遣、其上輝元元春隆景兩三人一左右次第殿下に
も被ニ出馬、九州逆徒等悉可レ被ニ刎首ニ候之條、得
其意ニ尤候、然者爲ニ褒美ニ新地ニ廉可レ被ニ仰付ニ

間、突鎧高名仕忠節輩に可令ニ支配ト、彌成勇候之様可申觸ニ事專用候、委細安國寺黒田宮本兩三人可申候也、

九月十日

御書判

立花左近將監とのへ

今度嶋津、殿下へ成ニ御敵、九州之逆徒等引具罷出、味方城二三箇所相果候處、其方立花城在之候而、大軍被ニ請留、抽ニ粉骨ニ付而、嶋津敗北之由、殊高鳥居責崩、星野一類其外一人も不殘刻首之由注進、誠以無ニ比類ニ手柄共候、但天下之面目不レ過之候、來春者可レ有ニ御動座ニ候之間、新地等爲ニ褒美、何之國にて成共可レ被ニ仰付ニ候、仍太刀一腰國俊、鬘斗付、鐵炮藥貳百斤、并縫物羽織遣之候、彌可レ勵ニ忠節ニ事尤候、併被ニ出ニ御馬嶋津御退治不レ可レ有レ程之條、聊爾之勵有レ之間敷候、委細森勘八森兵吉可レ申者也、

十月十一日

御書判

立花左近將監とのへ

去程ニ秀吉公ノ命旨ニ依テ、四國中國ノ軍勢數萬騎近日下向スト聞エケレバ、宗茂公イヨ／＼力ヲ

得給ヒ、サラバ岩屋ノ敵共ヲ追チラシ、紹運公ノ追善ニセント、一千餘騎ヲ引牽シテ岩屋ノ城ニ向ヒ玉フ、去ル比コノ城破レテ後、薩摩ヨリノ下知トシテ秋月種實人數五百ヲ籠置ケリ、城中ニ是ヲ聞テ、稠シク構エ深ク謀テ、守禦ノ備全ケレバ、可ニ攻入ニヤウモナカリシニ、宗茂密ニ人ヲ城内ニ忍バセ火ヲ放サセケレバ、頭書云、小野理左衛門十八歳ノ時、臨ミテ城ヲ谷ニ飛、猛火忽燃上ツテ城中煙ニ迷フ處ヲ、ヨセデ一度ニ唾ト攻入ケレバ、暫モ不レ支討ル、者數ヲ不知シテ手モナク城ヲ攻取ケリ、宗茂若年ナリトハイヘドモ、籌策スグレテ賢カリケレバ、小ヲ以テ大ヲ碎キ寡ヲ以テ多ヲ討アリサマ、天下ニ其名ヲ舉ベキ良將ナリト、人舉テ賞美セリ、

一 秀吉殿下ハ薩摩ノ嶋津ヲ征伐アラシメ爲ニ御下向マシマス、トイヘドモ、遠國ニ大軍ヲ出サル、ノ條、其事容易カラザル處ニ、月日ヲ經ケル、其内ニ九州ニテ殿下ノ救ヲ待シ城々皆嶋津ニ畏服シテ旗下ト成ニケリ、大友ハ頭ヲサシ出ス術モナク、高橋ハ討死シ、今殿下ノ御下向ヲ待奉ル城トテハ、立花ノ一城計ナリ、然ルニ天正十四年ノ秋、仙石權兵衛尉長曾

我部元親等ヲ豊後ニ下シ、大友ノ加勢トシ玉ヘドモ、勝ホコリタル嶋津ガ大勢ニ仕付ラレ、可レ勝一戰ニモカケ負タリ、是ニ依テ毛利右馬頭輝元、吉川駿河守元春、小早川左衛門佐隆景、赤間ガ關ヲ越テ押渡トイヘドモ、互ニ守リ合テ勝負モナク其年モ打過ヌ、翌年ノ春殿下御馬ヲ出サレ、三月十五日長門國赤間關ニ御着陣アレバ、先陣ハ豊後國ニ入込タリ、殿下御營陣ヲ豊前ニ移サレ、岩屋城ヲ一時攻メ落シ玉ヘバ、秋月種實降參ス、是ヲ初トシテ九州ノ武士ドモ威風ニ恐テ靡キ從フコト、殘ル草葉モ無ガ如シ、爰ニ立花左近將監宗茂ハ、遠境ノ敵ヲ退ケ、近隣ノ寇ヲ碎テ、固ク籠城シ緊ク守テ居玉ヒシガ、二千餘騎ヲ引卒シテ殿下ノ軍門ニ詣シ玉フ、頭書云、天正十五年四月五日秋月ニ宗茂公參陣ナリ、殿下宗茂ヲ近ク召テ、今度九州ノ逆徒等、嶋津ニ組シテ猛威ヲ振フニ依テ大亂トナリ、民庶手足ヲ措ニ所ナシ、然ル處ニ宗茂若年ニシテ寇ヲ退ケ、事故ナク城ヲ守リ、御下向ヲ待請ルコト、忠義何カ是ニ過ンヤ、然ニ高橋入道ハ殿下ニ對シ奉リ岩屋ノ城ニテ無雙ノ勦ヲナシ終ニ戰死ヲ遂シコト、尤忠義比類ナシト云フベシ、近日ニ嶋

津ヲ討亡ボシ、汝ガ憤ヲ休セラルベシトゾ仰ケル、宗茂御意ノ辱サニ感涙袖ヲ濡シ、此君ノ爲ニ身命ヲ投ンコト塵芥ヨリモ輕カルベシトゾ思ヒ給ヒケル、斯テ殿下宗茂ニ仰ラレケルハ、汝大功ヲ立テ勞アリトイヘドモ、今此征伐殊ニ大事ト思召ル、汝ハ九州ノ案内者タルベケレバ、薩州ノ先陣ヲ可レ仕トアリケレバ、宗茂畏テ申上ラル、ハ、某庭弱ノ微身ヲ以テ係ル大事ノ先陣ヲ承ルコト、弓矢ノ面目何事カ是ニシカンヤト、恐入テ申上給フ、即今度御味方ニ參ル人々五千餘騎ヲ相副ラレ、手勢ト合テ七千餘騎ヲ從ヘ、薩州ノ先陣ニ進ミ玉フ、信アレバ德アリ、陰德アレバ陽報アリトカヤ申スナル、宗茂公内ニ武勇忠信ノ氣怠ラザレバ、外ニカ、ル榮耀名譽ヲ發シ給フ、難レ有カリシ良將ナリ、
一薩州ノ嶋津ハ殿下ノ大兵ヲ引請テ可レ防ヤウ非レバ、合戰ニモ不レ及、旗ヲ卷冒ヲ脱テ軍門ニ降リケレバ、殿下御氣色快然アリテ、太平寺ト云所ヨリ大軍ヲ班シ給ヒケリ、斯テ筑前箱崎マデ御歸陣有テ、諸將ノ恩賞ヲ頒行レケルニ、筑後ニ於テ四郡ノ所宗茂公ニ宛行ハレテ、梁川ノ城ニ入給フ、其折紙ニ

曰、

今度依_ニ忠節、爲_ニ御恩地_一、筑後國山川郡三潞郡下妻郡三池郡合四郡之事被_ニ宛行_一訖、但三池郡之事、對_ニ高橋彌九郎_一可_ニ引渡_一、并三潞郡内百五拾町三池上總介相_ニ渡之_一、右兩人爲_ニ與力_一致_ニ合宿_一、自今以後可_レ抽_ニ忠勤_一之由候也、

天正十五

六月廿五日

立花左近將監とのへ

一天正十五年ノ秋、肥後一揆騒動ス、其起リヲ尋ルニ、佐々陸奥守ニ肥後一國ヲ宛行ハレシニ依テ、國中ノ地侍ヲ佐々ガ下知ニ相付ントス、國人ハ殿下ノ御朱印ヲ頂戴スレバ直參ナリ、佐々ガ支配ニ付ベカラズト云、佐々ハ我領國ノ内ナレバ手ニ付ンコト勿論ナリト旨ルニ因テ、所々ニ楯籠テ騒亂ト成訖ヌ、其中ニ有動大隅守腹ヲスエカ子テ、佐々ガ構シ平山ノ城ヲ取圍ム、佐々大ニ駭キ、大勢ヲ卒シ有動ヲ討ントシケレドモ、國中ノ溢_レ者多勢有動ニ從テ楯ヲツクニヨリ、輒ク討取コトヲ得ズ、然レバ有動ニ圍レシ平山城中ノ者ドモ兵糧盡テ餓ニ及ブ、佐々はヲ歎テ城中ニ兵糧ヲ籠ントシケルヲ、

敵却テ其糧米ヲ奪トル、前後左右ノ國人皆敵ト成テ、是平治スルコト佐々ガ力ノ及ブ處ニアラズ、兵糧ヲ込ントスルコトモ再難_レ叶テ、救ヲ鍋嶋ニ求ム、鍋嶋七千餘騎ヲ卒シテ彼地ニ來リ兵糧ヲ込ントス、有動是ヲ見テ打テ出、散々ニ攻戰フ、鍋嶋一戰ニカケ負、郎從多ク討セ、糧ヲ入ルニ不_レ及引退ク、此事殿下ノ遠聞ニ達シケレバ、宗茂ニ下知シ玉フ、御書曰、

急度申遣候、肥後表之儀一揆少々令_ニ蜂起_一、隈本へ通路さほりを成候由候間、其方堺目之儀候間、相_ニ催人數_一、早速罷立、隈本へ入相候而、陸奥守令_ニ相談_一、一揆可_レ成敗_一候、此節之間不_レ可_レ有_ニ油斷_一候也、

九月七日

立花左近將監とのへ

佐々既ニ難儀ニ迫リテ宗茂ニ救ヲ求ム、又殿下ノ御下知旁以テ無_レ據仕方ナレバ、急ギ人數ヲ出ントシ玉フ、宗茂公近キ比梁川ノ城ニ移テ、諸事ノ雜務執行シ折節ナレドモ、公命默止シ難ク、領分所々ノ要害ニ人數ノ手當丈夫ニ構置テ、手勢僅ニ八百餘

騎ヲ卒シ、肥後國南ノ關ニ至リ、爰ニテ有動ガアリ
サマ、又ハ糧ヲ込ル道程委ク聞スマシ給ヒケリ、斯
テ兵糧ヲ調エ揃テ發向スル、宗茂公八百餘騎ヲ三
手ニ分チ、先陣ヲ以有動ガ城ニ攻カ、ル、敵是ヲ防
ントテ散々ニ戰、其間ニ二陣ニ兵糧ヲ持セテ通シ
ケレバ、事故ナク押通ル、敵是ヲ見テ、スハヤ戲謀
レケルハト云程コンアレ、城ヲ明テ打テ出、縱橫ニ
遮リ留ントス、宗茂公三百餘騎ニテ後陣ニ進ミ給
ヒケルガ、少モ不騷追拂々々靜々ト糧ヲ込テケリ、
餓ニ及シ城中ノ人々、偏ニ酒魚ノ水ヲ得タル思ヲ
ナシテ悅ヲナスコト限ナシ、初ハ只大勢ヲ以スト
イヘドモ、直ニ通ラントスル故ニ利ヲ不_レ得、宗茂公
ハ敵ヲ攻テ其透間ヲ窺フ故ニ利ヲ得タリ、知策ノ
巧拙、從兵ノ剛弱、天地懸隔ノ有様ナリ、去程ニ有動
ハ宗茂公ニ謀ラレ、敵城ニ糧ヲ得セシムルコトヲ
安カラズ思ケレバ、谷々峰々ニ逆茂木ヲ引掛テ、其
勢三千餘騎ニテ宗茂公ノ歸路ヲ相待ケリ、宗茂公
ハ敵大勢ニテ相待ト聞玉テ、サテハ時刻ヲ移サバ
敵イヨ／＼募ルベシ、透間ヲアラセズ押寄テ打破
リ通レトテ、取テ返シ給ヒケリ、爰ハ謀計ヲ以スベ

シトテ、人夫三十人計先ニヤリテ、タバカリテ謂セ
ケルハ、今日宗茂此所ヲ押通ルベカリシガ、敵大勢
ニテ相待ト聞及ビ、隣國ノ加勢ヲ得テコン通ラメ
トテ、今日ノ歸陣ヲ止ラレタリト云セケレバ、敵方
ニ是ヲ聞テ、サゾ有ラン、今日ハ通り得ジトテ、油
斷シテアルヲ見スマシ、宗茂急ニ押寄、少モタメラ
ハズ懸リ給ヘバ、敵大キニ騷テ、三箇所ニ扣タル
敵、其二箇所ハ一戰ニ不_レ及敗レタリ、サレドモ後
陣ノ敵一千餘人弓鐵炮ヲ揃テ待懸タリ、宗茂公八
百餘騎少モ猶豫セズ押寄、一矢射違ル程コンアレ、
兩軍亂合テ鋒ヨリ火ヲ出シ追上セ追下シ、六七度
ガ程戰タリ、宗茂公斯テハハカ行ベシトモ思ハズ
トテ、我勢ヲ五ニワケテ縱引通ル、敵付慕ヘバ追拂
追拂、少モ不_レ亂打通ル、有動術ヲ替テ精兵五百ヲ
スグリ、道ヲ替テ宗茂ノ前路ニサシ廻シ、勢ヲ伏テ
待居タリ、宗茂公大敵ヲ挫キ玉フトイヘドモ、猶モ
怠ナク前後ノ軍兵ヲ下知シテ引給フ處ニ、有動モ聞
ユル大將ナレバ、先陣ヲヤリ過シ、宗茂ノ二陣ニ會
釋モナク打テカ、ル、勇ミ來ル勢ナレドモ、思モ寄
ヌコトナレバ、アハヤト思處ニ、サレドモ駭ク氣色

ナク靜々ト備ヲクリ直ス、宗茂公大音聲ヲ揚テ、何程ノコトノ有ベキゾ、一人モ不_レ殘討取テ通_レ者共ト下知シ玉ヘバ、相從軍兵三百餘人、少モ不_レ騷打テカ、ル、宗茂公生年十九歳、色白ク長高キガ花ヤカニ出立、黄瓦毛ナル馬ノ太ク逞キニ黑鞍置テ、居長タカニ乗カ、リ、辨舌ハ明ナリ、四方ヲ睨テ下知シ給ヘル有様、アツハレ大將ヤトゾ見エタリケル、比ハ九月中旬ノ事ナレバ、吹來ル風モ冷カニ、

十月上旬イ

勇ヲ得ス、ミニ進テ戰タリ、敵モ身命ヲ不_レ顧、ヲメキ叫デ戰フ聲、山ニ響キ谷ニ應ヘ、天地震動シテ夥シ、敵ノ大勢羽武者ニハ目ヲカケズ、如何ニモシテ大將ヲ討ントテラヒケレドモ、内田市正、十時源兵衛、立花次郎兵衛ナド云者ヲ始トシテ、究竟ノ兵二十餘人、大將ノ馬ノ前ニカケフサガリテ、爰ヲ前途ト相戰フ、敵ノ方ニモ戸上蘆原鹿子木福嶋ナド云名ヲ得タル兵三十餘人、鋒ヲ揃テ打テカ、ル、中ニモ大知豊前ト云者、花ヤカニ出立、大長刀横ヘ、鹿毛ノ馬ノ太ク逞キニ乗タルガ、我ニ劣ラス若黨二十餘人左右ニ立テ、雜兵ヲバツト蹶チラシ、宗茂ヲ目ガケ打テカ、ル、森下備後、同内匠、戸次治部、原尾

宮内ナド、大將ヲ討セジト懸塞テ戰タリ、是ヲ見テ有動ガ一族八十餘騎、眞下リニ喚デカク、十時攝津、同新右衛門、同傳右衛門、石松安兵衛、安東五郎右衛門ナド云者懸合テ、命ヲ限リニ相戰フ、宗茂公モ自ラ相當テ六騎マデ切捨玉ヒケリ、中ニモ有動下總ト名乗テ、一丈餘ノ鎧ヲ以テカケヨセ宗茂公ノ弓手ノ腕ヲシタ、カニ衝タリケル、物々シヤト鎧ヲ搔カナグリテ引ヨセ、鞍ノ前輪ニ押付頭切テ捨玉フ、斯テ敵味方互ニ息ヲモツガズ攻戰ニ、敵ハ新手、味方ハ今朝ヨリ入替ル勢モナク、其上長途ヲ打テ戰慄クル兵ナリトイヘドモ、下知シ玉フハ良將ナリ、働者ハ精兵ナリ、ナジカハ少モ臆スベキ、千騎ガ百騎、百騎ガ一騎ニナルマデモ、互ニ可_レ引軍トハ見エザリケリ、係ル處ニ殿ニ打ケル小野和泉、先勢合戰危シト聞テ、二百餘騎諸鎧ヲ合セテ馳來ル、先陣ニ打ケル由布上總、十時但馬、二百餘騎ニテ取テ返シ、敵ノ左右ヨリ打テカ、レバ、有動ガ軍兵是ヲ見テ叶ハジトヤ思ケン、散々ニ亂テ引退ク、味方ノ勢勇ミ進テ追カケ、爰カシコニ追詰テ討程ニ、有動大隅ハ萬死ヲ出テ落行一生ニ遇タ

此時者法親長者ニ而當下ト云

リケル、宗茂公下知シ玉フハ、暫下居テ憊レヲ休スベケレドモ、若黃昏ニ及デ、敵又立直スコトアラバ、案内シラヌ所ニテ難儀ナランハ必定ナリ、此競ニ引ヤトテ、靜ニ打テ行處ニ、南ノ關ノハヅレ大田黒ノ城ニ、有動ガ黨類五百餘人楯籠リテ宗茂公ヲ待カケタリ、宗茂公ノ先陣二百餘騎此所ニ望ム時、城ヨリ大勢打テ出、箭ヲ放コト急雨ノ如、サシモニ進ム軍兵追拂テ通ラントスレドモ、難所ナレバ進ミ難ク、是ヲ避ントスレバ道モナシ、進退歩ヲ失ヒ、的ニ成テ箭ニ當リ命ヲ殞者多カリケリ、宗茂公聞召、鞭ニ鐙ヲ合テ馳付、敵ノ有様ヲ能々見玉ヒ、城コソ無下ニ淺間ナレ、此敵ニナイロヒソ、直ニ攻上テ城ヲ敗レト下知シ給ヒケレバ、先陣二百餘人甲ノ鉢ヲ傾ケ、城ヲサシテ攻上ル、出張タル敵ヨリ横矢ニ指取引詰サン、ニ射タリケレドモ、是ヲ屑トモセズ攻上レバ、横箭ニ防タル敵ノ勢皆城ニ引入ヲ見テ、得タリ賢シ願處ノ幸カナ、付入ニ攻入レトテ、小野和泉十時攝津三百人、喚キ叫ンデ攻上ル、先陣由布上總主從二十餘人眞前ニ進デ、此城ヲ枕ニシテ死ヤ者共トテ、屏逆茂木ヲ乘越々々攻入ケリ、敵モヤタ

ケニ防トイヘドモ、一ノ圍ヲ攻破ラレ、詰ノ丸ニ引籠ル、宗茂公ノ軍兵力ヲ得テ、三百餘人攻入テ同音ニ鬨ヲ作ル、城中ノ騷動限ナシ、サレドモ大將大和越前五十餘騎ニテ打テ出ル、味方大勢カケ合テ追上セ追下シ火出ル程ゾ戰ケル、越前ハ殘少ニ討ナサレ、門ノ内ヘ引返ス處ヲ、池部龍右衛門懸寄テ引組押エテ頸ヲ取テケリ、大將既ニ討レケレバ、殘ル軍兵或ハ討レ或ハ自害シ、一人モ不レ殘討レケリ、天正十五年九月七日ノ酉ノ刻計ニ、宗茂公ヲ始トシテ相從フ兵ドモ、鎧ノ毛ヲ千入ノ紅ニ染ナシテ、勝鬨ヲ執行ヒ、筑後國北ノ關マデ事故ナク歸陣ス、今度有動ガ謀叛ニ依テ、國中ニアル逆心ノ者ドモ一味シテ、其勢三千餘騎究竟ノ要害ニ依テ籠リ居ケレバ、佐々是ヲ退治センコト思モヨラズ、糧ヲサハ味方ノ城ニ込得ザリシニ、宗茂公僅八百餘騎ヲ卒シテ、輒ク兵糧ヲ込ルノミナラズ、多ノ敵ヲ亡シ、構ヲ破ルコト七箇所、合戰スルコト十三度、一度モ後レヲ取不レ給、敵ヲ討コト六百餘人ナリ、味方モ百四十餘人討死シ、宗茂公ヲ初テ疵ヲ被ル者五百餘人也、斯ル勦ハ秋津洲ノ中ニ於テ可レ有レ類トモ不ニ

覺エ、猛威ヲ振シ有動モ宗茂公ノ勇力ニ碎カレ、家ノ子郎等多討セ、其外ノ軍兵ハ討散サレヌ、一舉ニ肥後一州治リケル、宗茂公ノ武勇ノ程コソユ、シケレ、殿下コレヲ聞召テ下シ給ル御書曰、

今度有動付城へ兵糧差籠候刻、遂ニ一戰ニ敵數多討捕之由、黒田勘解由森壹岐守注進被ニ聞召ニ候、雖下レ始ニ于今候手柄候ニ誠粉骨奇特思召候、追々可被加ニ御褒美ニ候、猶黒田森壹岐守可レ申候也、

十月廿二日

立花左近將監とのへ

斯テ九州事故ナク治リシカドモ、肥後一州ハ殘黨ココ彼ニ隠レ居テ、治平ノ政道ヲ妨ケリ、佐々ハ武勇ノ聞アル者ナレドモ、文ニ愚ニシテ國ヲ治ルノ器量ナク、一國平均ノ政道ヲナスコト不能トテ、殿下大ニ怒リ給ヒ、國守ノ器ナキ者ニハ國ヲ與フベカラズ、其上海蠻ノ邪法ヲ行トイヘバ、旁以大國ヲ守ラシムベカラズトテ、天正十六四月上旬ニ佐々ヲ召上セ、終ニ誅シ給ヒケリ、其後淺野彈正少弼ヲ肥後ニ下シ玉ヒ、一揆ノ輩ヲ搜シ求テ、一々ニ罰シ玉フ、阿蘇ノ神主モ一揆ノ徒黨トテ召捕テ殺シケリ、

一揆ノ棟梁有動大隅ハ、去年立花宗茂ニ打負散々ニ成ケルガ、猶モ敗軍ノ勢ヲ集メ國中ヲ亂サントス、サレドモ殿下ヨリノ上意ニハ、怨讎ノ心ヲ翻サバ本領安堵子細アラジト戲謀レ、降參シケルヲ、殿下ノ見參ニ入ントテ、安國寺相具シ豊前小倉マデ連行ケリ、道ニテ隙ヲ窺ヒ討ントスレドモ、有動スグリタル逞兵八十召具シケレバ左右ナク討事ナラズ、既ニ小倉ニテ明日出船スト云其夜ニ、事ノ實ヲ聞付有動手ノ者ニ云觸テ、所々ニ火ヲ放チ切テ廻ル、安國寺ハヤウ〜ニ遁テ船ニ打乗落タリケリ、有動ハ方々ニ働ケルヲ、黒田ノ侍大勢ニテ打出ケレバ、遁ル方ナク一人モ不レ殘或討レ或自害シテケリ、有動ニ心ヲ合シ隈部ヲバ淺野召連テ上リケルガ、梁川ノ城ニ來テ宗茂公ニ憑ケレバ、宗茂聞玉ヒ、彼ヲ討事安カリナン、對面ニ事ヨセ手利ノ若者ドモニ指殺サスベシト宣フニ、淺野イカバ思ハレケン、唯大勢ヲ催シ追討アルベシト申サレケリ、宗茂公イヤ〜詮ナキコト、人數ヲ損センハ無益ナリトテ、侍十二人ヲ討手ニ定メ、我身ト淺野ハ二ノ曲輪ノ櫓ノ上ニ居ラレケル、枹隈部方方ニ對面ス

ベキ由云ヤリケレバ、隈部怪クヤ思ケン、百五十人ガ中ヨリ究竟ノ侍撰出、二十餘人召具シ來リケリ、此隈部政利ハ、但馬守親永ガ次男ニテ、西ノ古賀ニ在ケレバ、家號ヲ西古賀トモ申ケリ、比ハ五月廿七日ノコトナルニ、雨一通リシテ空モ晴タルニ、巳ノ刻計ニ政利主從廿餘人ニテ出來ル、既ニ三ノ曲輪ニ至ル處ニ十二人ノ討手出向テ云ヤウ、宗茂上意ヲ承テ討候ト辭ヲカケ、透間モナク打テカ、ル、政利ノ方ニモ牧野辻長谷川本庄落合ナド、日比名ヲ顯ス兵ドモ、少モ不_レ騷切結ブ、政利ハ勇力ノ聞エ隱レナカリシ者ナレドモ、此比相痛ルコト有テ勵コト不能、其マ、ソコニ討レケリ、其外二十餘人ノ者ドモ一人モ不_レ殘討レケリ、討手ノ十二人モ死スル者ハ只一人、其外皆手ヲ負無_ニ比類_一勵ヲシタリケリ、淺野是ヲ見テ僅十二人ヲ以テ二十餘人ヲ討取コト、希代ノ勵哉ト賞美シテゾ上ラレケル、殿下委ク被_ニ聞召_一、今日本ノ若侍、弓箭ヲ取テ立花ニ超ル者アラジト、御感不_レ斜トゾ聞エケル、

一天正十七年殿下關東ノ北條征伐事畢レバ太平ノ世ト成テ、上洛マシ_一ケルニ、五畿七道ノ諸大名小

名各上洛シテ、秦平ノ功ヲ賀シ奉ル、宗茂公ハ殿下東征ノ時ハ九州ノ鎮護トシテ在城タリシガ、此度上洛シ、同ジク慶賀ヲ述奉ラル、殿下御座近ク召レテ、汝累年戰功莫大ナルニ依テ、去年肥後ノ國ヲ宛行ントセシ處ニ、汝ガ家人等辭退スルニ依テサテ止ヌ、今關東ヲ鎮メ一統ノ世ト成ヌレバ、四國九國ノ内ニ於テ闕國ヲ望ニ於テハ、何ノ國ナリトモ望ニ任セテ與フベシト仰ケル、宗茂畏テ申玉フハ、某御恩ニ依テ三千ノ大將トナリテ候ヘバ、イカナ_ル堅陣ニ向トイフトモ不足ナク一戰ヲ遂ベキニテ候、此上ニハ國郡ノ望モサフラハズ、唯願ハ昇殿ヲ免サレンコトコソ生涯ノ面目ナラメト申上ラル、殿下大ニ御感有テ、即四位ノ侍從ニ任ゼラレ、羽柴ノ號ヲ賜リケル、

一天正十八年二月朔日、諸國ノ大名伺候シ玉フニ、殿下家康公ニ宣ヒケルハ、今度ノ上洛ニ本多平八郎忠勝ヤ召具セラレタリトアリケレバ、折節今日はニ有合候トテ、御前ニ召出サル、殿下宗茂ヲ召レ、彼コソ東國ニ隱ナキ本多平八ト云者ナリ、宗茂ハ西國無雙ノ譽アレバ、向後心ヲ通ジテ、宗茂ハ西國

ヲ守護シテ彌忠ヲ竭シ、本多ハ家康ヲ諫メテ殿下ノ守衛タルベシ、東西ニ於テ無雙ノ者ナレバ、我前ニ於テ對面ヲユルスト有ケレバ、輝元利家ヲ始トシテ、アツハレ面目哉トゾ感ジ給ヒケル、各退出アリテ後、本多ハ殿下ノ御前ニ罷出ルコト、偏ニ宗茂ノ功ニ依テナリト思ハレケレバ、直ニ宗茂公ノ宿所ニ來リ、今度殿下ノ御前ニテ面目他ニ異ナルコト、貴殿ノ譽ニ依テナリト悅コト限ナシ、宗茂公モ大ニ悅玉ヒ、本多忠勝今年四十二歲也、殿ハ武勇ノ譽トイヒ、老功ノ人ナレバ、若キ者ノ後學ニナランコトヲ語リテ聞サセ給ヘト有ケレバ、本多辭スルニ處ナシトテ、様々ノ物語心靜ニシ給ヒケリ、宗茂公悅玉ヒ、聞シニ増ル勇者哉トゾ感ジ玉ヒケル、其後四方山ノ物語シ玉ヒ、饗應ヨキニ取ツクロヒ、事終リケレバ、本多モ喜悅シ歸ラレケリ、

一文祿元年、朝鮮國御征伐アリ、宗茂公人數三千ヲ卒シテ渡海アリ、此年宗茂公卅四歲、諸軍釜山浦ヨリ都マデノ城城ヲ屠拔テ、各王城ニ攻入、皆持口ヲ定テ守ケルニ、宗茂公ハ南大門ニ陣シ玉フ、此門ハ大明ヨリ此都ヘ入大門ナリ、然ルニ王城ヨリ乾ニ當テ五六里ヲ

隔、敵六七千騎ニテ要害ノ地ニ籠リ居、味方ノ往來ヲ妨ケレバ、都ヨリ日本勢打出テ追拂ントスルコト度々ナレドモ、嶮地ニ在テ日本勢ヲ引ヨセ、夥敷半弓ヲ射懸テ追拂フユヘ、無ニ左右ニ討取コトヲ得難ク、蜂須賀阿波守有馬修理大夫ナドモ、空ク引返シ訖ヌ、時ニ中納言秀家ヨリ、彼敵ヲ立花往テ追拂ハルベキヤト下知セラレケレバ、宗茂公其意ヲ得玉フトテ、彼所ニ行向ヒ、敵ノ在所ヲ見玉フニ、高茅村々ニ生茂リ、大石多シテ馬ノ駈引自由ナラズ、其上堀切所々ニ構ケレバ、假令敵ナクトモ難ク進所ナリ、宗茂心靜ニ見課セテ、其夜人夫ヲ多出シ、敵近キ所ノ青草ヲ刈セケル、敵是ヲ不レ知ケリ、次ノ夜宗茂公一千餘騎ヲ卒シテ、是ヲ三手ニ分テ所々ニ置、敵出タリトモ急ニ不レ可レ討、靜ニ追拂ヒ、退ク敵ニ付慕テ攻入ベシト下知シ玉フ、又前夜ノ如ク人夫ヲ出シケレバ、敵昨夜秣ヲ刈セシコトヲ無念ニヤ思ヒケン、二三千ガ程打出テ、草刈人夫ヲ追拂ヒ、跡ヲ踏テ攻來ル、マチ儲タル宗茂ノ勢、敵ヲ思フ圖ニ引請、三方ヨリ一度ニ嚙ト打テカ、リケレバ、サシモ競來ル敵トモ、一怵モセズ引キ退ク、味方はニ

力ヲ得、靜々ト追懸ケル、敵ノ大勢三度マデ返シ合テ攻戰フ、サレドモ宗茂ノ侍大將立花吉右衛門由布五兵衛ヲ先トシテ、ハヤリ雄ノ若武者ドモ三百餘人、討ドモ突ドモコトトモセズ、息ヲモツガセズ攻入バ、左計ノ難所ナレドモ、敵ヲ前ニ押立テ進ホドニ、事故ナク攻通リテ、段ナル所ニ多ク作リ並ベタル陣屋ニ火ヲ懸タリケレバ、折節風烈ク餘煙八方ニ吹覆ヘバ、六月廿七日ノ夜ノ闇ナレドモ、白晝ニ不_レ異、味方ハ是ニ力ヲ得、敵ハ煙ニ咽ビ途ニ迷ヒ、方々ニ逃散ラ、此彼ニ追詰々々討程ニ、暫時ガ間ニ七百餘人討捕テ、頸ドモ切掛サセテ歸リ給フ、係ル手柄ヲ程ヲ感ズル人ハ無シテ、猜ム人ゾ多カリケル、宗茂公ハ生得其心寛宏ナレバ、此猜ヲ聞給ヒテモ更ニ物トモシ給ハズ、

七月十六日

一同年八月七日ノ合戰ノ事、朝鮮王李_暉ハ王城ヲ去テ義州ニ隱レ居、救ヲ大明ニ乞ケレバ、明帝ヨリ祖承訓ト云大將ニ五萬餘騎ヲツケテ朝鮮ヲ救フ、既ニ平壤ノ安定館ニ來ル、小西行長平壤ニ在テ七千餘騎ニテ駈向フ、黒田甲斐守黃海ヨリ來テ行長ト陣ヲ連ヌ、秀家ノ下知ニ依テ、大友義統、立花宗茂、其

勢八千餘騎ニテ馳向ヒ、陣ヲ並ベテ明軍ニ對陣ス、
七月十六日

八月七日ノ朝、祖承訓ガ陣ヨリ史儒ト云者朝鮮ノ兵ヲ相交ヘテ五千餘騎、小西行長ガ先陣ニ押寄タリ、川霧フカク立ワタリテ、敵ヨセ來ヲモ知人ナシ、既ニ間近ク成テ、スハヤ敵ノヨセタルハトテ、行長ガ先陣木戸作右衛門一千餘人打出テ戰タリ、サレドモ味方ハ俄ノコトナレバ、勢モ四度路ニシテ揃ハズ、散々ニ打負引退ク、行長是ヲ見ナガラ救ヒ戰ニ不_レ及、黒田長政是ヲ聞テ其敵不_三遁サ_一討ヤトテ、其勢六千餘騎鞭ニ鐙ヲ合馳來リ、勝ホコリテ引返ス敵ノ中ニカケ入、散々ニ戰ヘバ、史儒痛手ヲ負、一戰ニ討負引退ク、長政進テ討處ニ、朝鮮ノ逞兵三萬餘騎起リ來テ、長政ノ勢ヲ取圍ム、是ヲ見テ史儒ガ勢取返ス、長政前後ヲ圍レ既ニ危ク少シ退キシカドモ、大友小西ハ大敵ヲ恐テ勢ヲ不_レ出、宗茂公二千餘騎味方ヲ捨ルヤウヤ有トテ、鉾ヲ揃テ切テ入、長政力ヲ得テ取テ返シ、大勢ノ中ニカケ入バ、敵ノ勢ハ左右ヨリ痛ク攻ラレ不_レ怵シテ、一度ニ噓ト敗レ引ク、退ク小西敵ノ敗軍ヲ見テ妻手ヘ廻リ追カ、リ、史儒ガ痛手負テ引カ子タルヲ討

取ケリ、少時ノ合戦ニ、立花黒田小西ガ手ニ、敵三千五百餘人討取、遂テ大明ヘ歸ル者唯十餘人トゾ聞エケル、小西如何計ヒケン、己レ一人ノ功トシナシケレバ、立花黒田ノ功ハ埋レケリ、

一今度宗茂長政行長ガ鋒先ヲ以テ祖承訓ガ軍ヲ討亡シ、大明ノ境ニ近ケレバ、爰ヲ相守ルベシトテ、小西行長ハ安定館ニ城ヲ築テ守ケリ、此城ヨリ四里日本道ヲ去テ大友義統在陣ス、次ニ立花宗茂、次ニ黒田長政在陣シテ、安定館ヨリ開城府マデノツナギトス、然ルニ明兵朝鮮ノ軍ニ利ナキコトヲ明帝聞召テ、小勢ヲ以スルコト誤レリ、重テ大軍ヲ以テスベシトテ、李如松宋應昌ト云大將ニ二十萬騎ヲツケテ朝鮮ヲ救フ、既ニ遼東ノ境ニ押來ル處ニ、此彼ニ遁隠ル朝鮮ノ兵馳加テ、其勢都合四十萬騎ニ及ベリ、文祿二年正月六日、行長ガ守ル安定館ニ押寄タリ、同八日辰ノ刻ニ城ヲ十重廿重ニ取圍ミ、楯ヲ並テ攻寄ル、城ニハ心ヲ靜メ鐵炮ヲ揃エ近ク敵ヲ押拂フ、サレドモ大勢イヤガ上ニ打重テ攻ケレバ、城中ノ兵防禦テ逆茂木一重引破ラル、既ニ危ク見エケレドモ、城中身命ヲ投テ防ケレバ、寄手若干

討レテ暫ク攻口ヲ引退ク、大友義統ハ敵ノ大軍行長ヲ圍ト聞テ恐オノ、キ、同九日ノ晩景ニ宗茂ノ陣ニ北來テ云ヤウ、行長ハ既ニ討レヌ、今ハ防トモ利アラジ、速ニ都ヘ引入玉ヘト云リ、宗茂是ヲキ、給テ、行長既ニ圍レタルト昨日黄昏ニ聞テサフラヘドモ、被レ討タリトハ未レ聞、敵ヲ不レ見シテ引取ンコト有ベクモナシ、イザ、セ給ヘ、行向テ後詰シテ敵ヲ追拂ハン、若小西討レナバ弔ノ一戦ヲナサントノ玉フ、義統大ニ不肯、此小勢ヲ以テ彼大軍ニ向フ共何ゾ利アラシヤト云捨テ、黒田ノ守ル樂川^{自前イ}ノ陣ヘト跡見モセズ落行ケリ、彼陣ニテ義統申サルハ、小西討ル、ニ依テカク引取候ヌ、立花ニモ疾疾可ニ引取ト再三申テ候ヘドモ、若氣故ニ承引セズ、今ハ立花モ擒ニナルカ、討死シタルニテゾ有ラント云、長政聞テ實否分明ナラザルニ如何トモ計ヒ難シ、都ヘ一左右ヲ告テ、其返答ニコソ兎モ角モセメト云ケレバ、義統爰ニモタマリ得ズ、都ヲ指テ北行ケリ、小西行長ハ大兵ニ城ヲ緊ク責ラレ、防禦ノ術計モ盡ケレバ、同九日ノ晩、城ヲ明テ退ケルニ、敵是ヲ知、思ノマ、ニ城ヲ出シ、此彼ニ取籠々々討

ケルニ、行長モ既ニ討レントスルコト度々ニ及ケ
レドモ、郎徒等ヨク戰テ討死シケル、其間ニ行長ヤ
ウヤウ落延トイヘドモ、敵大勢ニテ追カクレバ、行
長ガ人數ハ殘リ寡ニ成ニケリ、行長ハ馬ノ足ヲ限
リニ漸死ヲ遁テ落タリケル、立花宗茂公ハ、同十日
ノ朝敵ノ様ヲ見テ勵ント思ヒ、既ニ打立玉フ處ニ、

・續七郎後イ

舍弟高橋主膳正都ニアリシガ、宗茂敵ノ虜トナレ
リト傳ヘキ、七百餘騎ニテ馳來、宗茂公ニ行逢、互
ニ悦ビ玉フコト限リナシ、即其勢ヲ合テ三千餘騎、
安定館ヘ向テ三里計行ケルニ、馬煙ヲ立テ軍兵二三
千退甲ニナツテ馳來ル、誰ナラント見レバ行長ナ
リ、如何ニト問ヘバ、夥數大兵可レ防ヤウナシ、跡ヨ
リ續テ追來ル、其間二里ニハ過ジト云捨テゾ通リ
ケル、高橋是ヲ聞テ宗茂ニ向ヒ、小西ト共ニ引給ン
カ是ニテ一戰有ベキカ、一戰アラントナラバ、小西
ヲモ留給ヘト宣ヘバ、宗茂公聞召、敗軍ノ輩ハ有テ
モ甲斐ナシト通シヤリ給ヒケリ、宗茂公宣フハ、
此儘ニテ敵ヲ待ハ利ナカルベシトテ、三千餘騎ヲ
五手ニ分テ引カクレテ待居タリ、時刻ヲ不移サ
敵七八千村々ニ進テ追來ル、思フ程近付テ、一度ニ

噓ト関ヲ作リ、三方ヨリ打テカ、ル、亂レテ追來ル
敵ナレバ、ナジカハ怵ベキ、一戰ニモ不レ及敗北ス、
宗茂勇ミ進デ討ホドニ、暫時ニ一千餘人討取ケリ、
曳サレタル敵逃歸ケレバ、安定館ニ陣取タル敵ノ
大勢十餘里程引退ヲ、宗茂モ本ノ陣ニ歸テ都ノ左
右ヲ待玉フ、斯テ都ニ於テ秀家ヲ始メ諸將ノ計ニ
ハ、霸湘川ノ氷解ナバ人數ヲ渡スコト叶マジトテ、
大谷刑部少輔ヲ彼川ノ邊マデ指越シ、早々引取ベ
シト有ケレバ、宗茂公モ長政モ都ニ歸リ入給フ、行
長ガ敗北ハ忠ニ成テ、宗茂ノ戰功ハ沙汰スル人モ
ナカリケリ、

一 明兵行長ヲ攻落シテ勝ホコリタルヲ、宗茂一戰ノ
功ニ依テ追退ケ給フトイヘドモ、續テ攻ルコトナ
ク都ヘ引入ケレバ、敵又立ナヲシ、開城府マデ押來
テ、王城ノ倭軍ヲ攻ント議シテ、其競益強大ナリ、
敵大勢ナルヲ憑テ陣ヲモトラズ、備モ整ハザリシ
カバ、此時都ヨリ打テ出、急ニ是ヲ挫ク程ナラバ
一支モセズ崩ルベキニ、秀家ヲ始メ大友小西ガ
敗軍ニ懲テ、合戰ノ用意モナク、唯逃支度ノミヲシ
テ、進退途ニ迷ヒケル、諸將ノ評定ニハ、先王城ヲ

去テ釜山浦ニ引取、重テ日本ニ加勢ヲ乞テ、大軍ヲ以テ戰シト云モアリ、又都表ニ柵ヲフリ、惣ジテ鐵炮ヲカケ打拂シト云モアリ、其外色々ハカモ行ヌ談合ナリ、隆景アマリニ痛間敷思ヒ、秀家ニ對テ云ヤウ、敵ハ日ニ從テ競頗強大ナリ、然ルニ味方防戰ノ用意モナケレバ、誰アリテ墓々數ク軍ヲスベシトモ思ハレズ、今ニモ敵襲來ラバ難義此時ニ極ルベシ、唯々合戰ノ用意可レ然ト申玉フ、秀家はヲ聞、目ニ餘ル大勢ヲ此小勢ヲ以テ戰シニ、利ヲ不レ失ト云コト有ベカラズ、秀信大勢ニテ近日着スト聞エタリ、此勢ヲ相待、又所々ニ散在ノ勢ヲ招キ集テコソ一戰ヲモ遂ベキナレ、其内ニ敵近付バ速ニ都ヲ退キ、其後諸手ヲ合テ合戰スベシト有ケレバ、隆景聞テ此計ヒ大ニ惡ク候ヒナン、其故ハ大友小西ガ敗軍ニテ敵勝ニノリ、黒田立花一戰ニ勝トイヘドモ、速ニ引取ニヨリ、敵ハ彌勢ヒヲ増ト覺候、今亦都ヲ引退キ敵入替ルニ於テハ、其勢彌益強大ニ成候ベシ、然ラバ所々ニ在陣ノ軍勢モ、力タユミ利失ンコト必定ナリ、秀信ノ着船遠路ナレバ、何ノ日ト云コトヲ不レ知、都ヲ退テ後日ノ合戰更ニ可レ叶トモ

覺候ハズト憚ル處ナク申玉フ、宗茂公ス、ミ出テ宣フハ、兎モアレ角モアレ野合ノ一戰ニ非ンバ、アノ大敵ニ勝利ヲ得コト不レ可有レ之、其上大明人ノ思ハクヲ察シ思フニ、今明ノ大軍ヲ見ナラバ日本人ハ定テ王城ニ楯籠ルベシ、左アラバ四方ヨリ付城ヲ構エ、釜山浦ノ通路ヲ切、一人モ不レ洩可ミ討取トタクムラン、此手立ハ鏡ニ懸テ見ガ如シ、爰ヲ以テ考ルニ、日ヲ經ニ從テハ敵此方ノ小勢ヲ見透シ、四方ヘ人數廻シテ取圍ミ、手ヲ可レ合、左アラン時ハ難義目前ニアリ、今明軍遠來テ、カレ未ダワガ情ヲ不レ知、其上猛勢一同ニ集リ來コン天ノ與ル處ナレ、大敵ヲ打從ヘンハ今日ニ在、日ヲ經テ手ヲ合セバ、一手切ノ合戰ニ成テ、ウマキ勝ハ不レ可有、明兵ハ大軍ニ誇リ、又ハ平壤ノカチ軍ニ慢シ、彼ガ心ニハ日本人ヲ侮テ、一戰ニモ不レ及王城ニ可ミ引入ト思フ處ヲ引違ヘ、スルリト打向テ不意ニ出バ、大利ヲ得シコト無疑、兎角合戰ニ非ンバ大利アルマジト眼ニ角ヲ立白沫咀ンデ啗リ玉ヘドモ、誰々モ背氣色モマシマサズ、其時隆景申玉フハ、立花申サル、處最ノ至也、僉議ヲ長シテ手延ニセバ、見ガ内

ニ居負ニ成候ベシ、先ハ百萬騎モアレ、此隆景サバ
キ可レ申、一番合戦ハ他ニ讓ルベカラズト、大ノ眼
ニ角ヲ立、詞ヲ放テ宣ヘバ、三奉行モ諸大將モ、左
アラバ合戦ニ可レ極トゾ肯レケル、然ラバ先手分ヲ
シテ都ノ門々ヲ堅メヨトテ、南大門ハ黒田長政大
谷吉隆七千餘騎、西大門ハ立花宗茂高橋主膳三千
餘騎、北ノ門ハ増田長盛石田三成五千餘騎、東大門
ハ小西行長大村新八七千餘騎ニテ堅タリ、其外ノ
人々ハ遊軍トシテ、敵ノヨセ來ル方ニ相助テ合戦
アルベキニ定メラル、正月廿三日、明ノ李如松朝鮮
ノ兵ヲ合セ四十萬騎ヲ卒シ、南大門ノ外四五里^{日本}
隔テ押寄タリ、都ニハ待儲ル事ナレバ、先一手ノ勢
ヲ出シテ呼引ミヨトテ、同廿四日加藤遠江守前野
但馬守三千餘騎ヲ卒シテ敵近ク行向フ、敵五六千
打出暫相戦トゾ見エシ、前野加藤散々ニ打立ラレ、
廿餘町追立ラレ、漸ニ死ヲ遁タリ、同廿五日ニハ秀
家ノ勢八千ヲ指向ラル、前ノ敗北ニヤ恐ケン、終日
守リ暮シ、終夜篝火ヲ燒テ、空ク明ス計ナリ、同廿六
日ニ誰カ向ベキト評義アリ、隆景ノ玉フハ、今ハ立
花ナラデハ不^レ可有トテ、宗茂ニ定リケル、元ヨリ

敵大勢ナリトモ挫ンニ何程ノコトカ有ント思玉ヒ
シカドモ、敵ハ目ニ餘ル多勢トイヒ、勝誇タルコト
ナレバ、尋常ニ戦テハ利アラジト思ヒ、各々ニ申玉
フハ、明日ハ和漢ノ勝負一決ノ合戦ト思召ルベシ、
先行テ試ヨトアランニ於テハ、餘人ニ仰付ラレ、某
御免アルベク候ト申玉ヘバ、何レモ合戦ハ先々無
益ノコトナルベシト留メラル、其中ニ前野加藤ハ
一昨日ノ敗北ヲ心ウク思ヒ、立花ニモ一敗北サセ
テ面々ガ不覺ヲ補ハントヤ思ハレケン、唯一合戦
可^レ然ト勸メラル、各申玉フハ立花合戦ヲ致サレバ
急ニ告給ヘト云テ、皆々其座ヲ立レケリ、宗茂公我
陣ニ歸リ玉ヒ郎從ヲ集メ、今日ノ僉議ハ如^レ此ノ次
第ナリ、明日ハ十死一生ノ合戦ト思ヒ定タリ、皆々
モ其意ヲ得ベシトテ、夜半計ニ都ヲ打立テ、敵陣ニ
趣キ玉フ、宗茂今年二十五歳、若武者ノコトナレバ、
其日ノ出立極メテ花ヤカニゾ見エタリケル、舍弟
高橋主膳正統増モ同ク花ヤカニ出立テ、一所ニ打
出給ヒケリ、相從人々ニハ、小野和泉、立花右衛門、同
三左衛門、同吉左衛門、同兵庫、同二郎、同萬五郎、戸
次中務、同治部、由布五兵衛、同上總、同進士、十時源

兵衛、同傳右衛門、同新右衛門、同甚右衛門、丹八左衛門、薦野太兵衛、堀七郎、同越後、池邊龍右衛門、原尻宮内、安東五郎、同彌三、佐田善左衛門、石松兵衛、内田市正、同忠右衛門、高野彌源次、天野源右衛門、世戸口十郎、足達勝右衛門、屋山伊三次、小田部新助、小熊坂長範ヲ始トシテ、一人當千ノ兵共二百餘人、今日ヲ最後ト出立ケリ、ソノ外雜兵三千餘人、一筋ニ討死ト思定メケレバ、サシモノ大軍明兵モ面ヲ向フベシトモ思ハレズ、寅ノ刻ノ事ナルニ、先立テ物見ニヤリシ、森下備中十時但馬既ニ合戦スト聞エケレハ、三千餘騎ヲ三手ニ分テ押向フ、先陣ハ大將小野和泉、武者奉行立花三左衛門、七百餘騎、二陣ハ十時傳右衛門、内田市正、五百餘騎、後陣ハ宗茂兄弟二千餘騎ニテ進タリ、敵近ク成シカバ、宗茂公ハ前ニ川ヲ隔テ後ロニ森ヲアテ夜ヲ明シ玉フ、先陣二陣ハ遙ニ間ヲ隔タリ、敵ハ宵ヨリ都近ク押寄テ居タリシカバ、卯ノ刻ニハ既ニ敵味方相挑シニ、二陣ニ在シ十時傳右衛門先ンジテ討死セント匈テ、先陣ニゾ進ケル、斯テ敵五千餘騎鳴ヲ靜テ攻近ク、味方五百餘騎靜ニ懸リテ一矢射違ル程コ

ソアレ、拔連テ切テ入バ、敵七八十騎一度ニ切落サレ、咄ト敗テ引退ク、四五町追懸テ討處ニ、左右ヨリ敵七八千喚デカ、ル、是ヲ見テ敗軍ノ敵取テ返ス、味方少モ不レ騒、轡ヲ並テ駈入、鉾ヨリ火ヲ出シ、縱横無碍ニ人馬トモニ汗ヲ流シテ攻戰フ、敵ハ大勢ナレバ討ルレドモヒルマズ、天地震動シテ戰シガ、餘リニ手痛攻ラレ、竟ニ敗レテ引退ク、左右ヨリカ、ル敵一ツニナリ、味方ノ後ロニ廻リテ攻カ、ル、味方ハ入替ル勢モナク、大敵ニ遇テ戰シカバ、精力既ニ盡ケレドモ、少モタメラウ氣色ナク、取テ返シ、大勢ノ中ヲ打敗テ、後ヘツト出ケレバ、十時傳右衛門ヲ始トシテ、二百餘人討死シ、殘ル兵ドモ大略手ヲ負タリケル、斯テ二陣マデ引退キ息ヲ休メテ今一合戦ト云處ニ、敵勝ニ乗テ追カ、ル、内田壹岐、同忠右衛門、森下備中、同内匠、十時但馬、天野源右衛門、小熊坂長範以下廿四人、返合々々三度マデ近付敵ヲ追拂フ、二陣小野和泉立花三左衛門備ヲ堅シテ進ケレバ、亂來ル敵ナジカハ溜ルベキ、一戰ニ討負テ引退ク、先陣ノ軍ヲ見テ、小野和泉立花三左衛門ハ、敵退ケドモ少モアラケズ扣タリ、若追

來ラバ討取ント、敵大勢ニテ所々ニ待請テ備エケ
レドモ、味方其手立ニ落ザリケレバ、此ヲ本意ナク
ヤ思ヒケン、爰カシコヨリ敵起リ集テ、一萬計打圍
テ攻寄タリ、味方八百餘騎シコロヲ傾テ進タリ、旣
ニ間近ク成シカバ、弓鐵炮ヲ一度ニ放懸ル、敵ハ大
勢充滿スレバ、射落サレ打落サルレドモ屑トモセズ、
喚キ叫デ攻カ、ル、味方ハ無勢ナレバ一所ニ集リ
八方ニ目ヲ配テ、遠ハ射落シ近キハ切落ス、敵ノ大
勢弓手ニ靡キ、妻手ニ廻リ陰陽開闔ノ術ヲ盡シ、半
時計戰ヘドモ、味方ノ勢ハ千變萬化シテ弱ルケシ
キモナク、敵アマタ討取ケリ、中ニモ戸次治部ハ大
力ノ強弓究竟ノ手利ナルガ、眞先カクル敵廿餘人
射オトシ、矢種竭レバ近付敵ニ逢テ突落シ斬落シ、
隙ナク戰ケレバ、近付者ハナカリケリ、斯テ人々勇
ヲ振テ當リケレバ、敵終ニ弱リツ、咄ト崩レテ引
退ク、一時計ノ合戰ニ、味方百餘人討レケレバ、敵
モ九百餘人討レケリ、味方ノ兵ドモ精力憊レ、皆々
下居テ息ツク處ニ、敵ノ新手四五千騎一手ニ成テ
攻來ル、味方ノ勞兵連モ討死ト思定ル上ハ、恐ニ不
レ足トテ又敵ニゾ向ヒケル、心ハ剛勇トイヘドモ、

力弱リテ一戰ニ敗スベカリシ處ニ、宗茂公是ヲ見
玉ヒ、和泉討スナ者共ト下知シ給ヘバ、高橋主膳正
戸次中務ヲ先トシテ、二千餘騎、前ナル小川ヲ颯
ト渡シ、四五町計馳出シテ見レバ、敵味方黑烟ヲ立
テ戰タリ、味方旣ニ負色ニ見エシガ、宗茂公後ロニ
ツバキ玉フト見テ力ヲ得、駆入々々攻戰フ、後陣ノ
新手二千餘騎透間モナク懸リケレバ、敵一怵モセ
ズ、四方ヘバツト亂レ散、味方機ニ乘テ廿餘町追討
ス、卯ノ刻ヨリ巳ノ時マデノ合戰ニ、敵ヲ討コト二
千三百餘人ナリ、味方モ三百餘人討レケリ、宗茂公
ヲ始テ皆下居テ、人馬ノ勞ヲ休シニ、時シモ正月下
旬ノコトナレバ、餘寒烈シク風雪鏝ニ通シテ、軍兵
甚ダ苦メリ、宗茂公炒大豆ヲ取出シ、親ラ軍兵ドモ
ニ頒與ヘ、是ニテ寒ヲ防ベシトアリケレバ、辱ク頂
戴シテ皆寒苦ヲ忘レケリ、誠哉饘醪ヲ水ニ投ジ、流
ヲ斟デ諸卒恩澤ニ酔ルタメシモ、今此類ナラント
ゾ申ケル、其後飯ヲツカヒ酒ヲ斟デ、暫勞ヲ扶ケ
ル、係ル處ニ黒田長政大谷吉隆馳來テ、今ノ合戰大
利アリ、此上ハ疾々引取玉フベシ、人數多ク討レ殘
ル兵ドモ過半ハ疵ヲ被ルト見エタリ、敵大勢ニテ

關七郎イ

カ、ラバ爭カ叶ヒ玉フベキ、二三里引取玉ハ、都ヨリ打出ル勢モ馳付ベシト、サマヽニ諫レドモ、宗茂ハ敵ヲ追拂カ不レ然バ討死カト思定シ上ハ、更ニ可レ引處ニ非ズトテ、少モ聞入不レ給、去程ニ宗茂既ニ合戦シテ事急ナリト聞エケレバ、秀家隆景長盛三成ヲ始トシテ、各汗馬ニ鞭ウツテ馳來ル、先陣三萬餘騎ノ明兵ハ宗茂ニ打敗ラレ不レ安ヤ思ケン、如松自ラ十萬騎ニテ打出、軍ヲ分ルコト二十五段ナリ、其間三里ガ程ハ、尺寸ノ地モナク打圍タリ、後陣ニ相續ク其勢何十萬騎ト云數ヲ不レ知、味方モ五萬餘騎ニテ都ヲ出シガ、小西攝津加藤遠江以下ノ兵ドモ、頃日ノ敗軍ニ懲テ恐ヲナス輩ハ、皆半途ニ彷徨シテ未レ來、僅ニ三萬餘騎ゾ駈付ケル、宗茂ヲ先陣トシテ、軍ヲ十三段ニ分チ、兩陣次第ニ相近ク、隆景ノ先陣三千餘騎、宗茂公ノ陣ヨリ先ニ進ミ出ル、秀家ノ勢八千餘騎、人ニ先ヲセジト一陣ニ進出、宗茂ノ諸卒是ヲ見テ、先陣ノ前ヲ蹈越テ通ルハ何人ゾ狼藉ナリ、通スマジト劄ルヲ、宗茂公聞石、我一人ノ功ヲ不レ思、何ゾ前後ヲ諍ンヤ、オイテ通セトアリケレバ、秀家ノ勢爰ヲ通テ直ニ進デ戰ケ

ルガ、散々ニ討ナサレテ引退ク、是ヲ見テ隆景一萬餘騎ツバイテカ、ル、敵ノ先陣一萬餘騎右往左往ニ駈立ラレテ引退ク、隆景ノ勢競カ、ルヲ、敵十方ヨリ雲霞ノ如クニ起立テ取圍メバ、隆景ノ勢是ニカケ立ラレ、立足モナク引返ス、宗茂少モ不レ騷備ヲ堅シテ扣玉フ、宗茂都ニ入玉シヨリ今朝ノ合戦マデ、四箇度敵ニ手並ヲ見セケレバ、立花ノ笠驗ト見テ敵少シタメラフ處ニ、宗茂公ザイヲ取テ、進ヤ者ドモトテ、靜々トカ、リ、矢比ニナリシカバ、一矢射達ル程コソアレ、咄ト喚デ懸リケレバ、眞先ニス、ム敵四五百騎手モナク斬崩サレテ引退ケバ、續ク大勢ナジカハ怖ベキ、村々ニ成テ引退ク、得タリ賢ト逞兵急ニ挫ク、此ニハ二三千彼ニハ五六千六箇所ニテ支エケレドモ、一所モ不レ殘打敗ル、後陣ニツバク敵ノ勢此競ニ碎カレ不レ戰シテ敗レケリ、此敗軍ヲ見テ秀家隆景取テ返シ、相ツバキテ相戰フ、李如松眞先ニ進デ下知シケルガ、馬ヨリ落テ既ニ討ルベカリシニ、大勢立隔テ馬ニカキノセテ落行ケリ、霸湘川ノ水ノ上ヲ汗馬連リニ越ケレバ、水大ニ碎ケテ敵ノ人馬水ニ溺レテ死スル者幾千萬

ト云數ヲ不_レ知、斯テ討取タル首數一萬七千三百餘ナリ、文祿二年正月廿六日ノ酉ノ刻ニ、各勇_ニ悅テ都ヘゾ歸リ玉ヒケル、今度宗茂公ノ手ニ討取首六千餘ナリシヲ、三千二百ト記セリ、サル故ハ大谷吉隆ノ所爲ナリトゾ聞エケル、其日敵ヲ見モセヌ者ドモガ手ニ、敵多ク討取ト記シケル、頃日宗茂公ノ軍功拔群ナルヲ妬者多カリケルゾ口惜キ、此時大閣ヨリ下シ給ル御書曰、

今度大明人取出シ刻、其方事於ニ先手ニ抽ニ粉骨ニ無ニ比類_ニ勵之由、神妙思召候、依_レ之爲ニ御褒美ニ御馬一疋被_レ爲ニ拜領ニ候、猶淺野彈正可_レ申候也、

卯月十一日

御朱印

羽柴柳川侍從とのへ

如_レ此ノ御感狀面目並ナキ事ナガラ、此度宗茂公ノ勵ヲ不_レ殘聞召ル、ニ於テハ、今一際ノ御文牒モアルベキモノヲト、家中ノ面々ツブヤキケル、去ドモ其後傳ヘキクハ、秀家卿ヨリ此時ノ合戦ノヤウヲ一々委細ニ名古屋ニ御注進アル處ニ、大閣殿下ヨリ御返答ニ、小早川隆景立花侍從ハ、合戦ニ非ンバ三十萬ノ多勢ニ大利ヲ得コト有マジキト無_レ惶其

段強ク申セシコト、其所ヲ得タル思慮、不_レ始ニ今一儀ト云ナガラ、舌ヲ震感入思召候ヌ、殊ニ隆景手前立花ト揉合セ、大敵ヲ突崩シ、大明人三萬八千餘討取、殘ルヤツ原ヲ大河ヘ追沒候旨、中々心地能仕合ニ候トアソバサレタルト云沙汰ス、又此御書ノ奥ニ立花ガ兵ドモ骨折候者共銘々ニ可_レ申候ヘドモ、急候間、是又其方相心得不_レ殘可_ニ申聞ト秀家卿ヘアソバシ下サレタル由ヲ謹テ承リ奉リテ、人々申ケルハ、此度ノ合戦ハ、此以後ハシラズ、今迄ニカ、ル大合戦ハナシ、殊ニ諸大將ノ其中ニ宗茂公抽デ玉ヘル御手柄、異國マデモ名ヲ舉玉フコト、前ノ御代ニモタメシナキ事ドモナリ、此御手柄ヲ以テノユヘニ、家中ノ輩ニ至マデ、殿下ノ御詞ニカ、ルコト、侍冥加ニ叶タルコト、是ニ過タルコトアラジト、悦ビ勇マヌ者ハナカリケリ、◎以上認聞本上卷一今度宗茂公ヲ始トシテ、其他ノ人々ノ勇功ニ依テ、如松ガ大軍ヲ退ケ、都在陣ノ人々安堵ノ思ヲナシテ喜アヘリ、秀家宣ヒケルハ、大明朝鮮ノ猛勢ヲ退ルコト各粉骨ニ依テナリ、某大閣ノ命ニ依テ諸軍ヲ引卒スル惣司ナレバ、此悦ニ響應ヲ設ケ其勞ヲ

謝セントテ、二月四日在陣ノ諸大將秀家ノ陣營ニ、來會シ玉フ、滋味ヲ盡シ佳肴ヲ列テ饗宴、事終テ後様々ノ物語有シニ、黒田長政申サレケルハ、近年世ニモテハヤス鐵炮誠ニ武具ノ最頂タリ、古ニハ百歩ノ外ニ敵ヲ討コト難シト云リ、彼鐵炮ハ數百歩外ニテ敵ヲ打ニ不_レ中ト云コトナシ、況ヤ間近キ物ヲヤ、毫毛タリトモハツサジト語ラル、加藤遠江守進出デ、誠ニ希代ノ重寶是ナルベシ、今度味方ノ利トナルモ、且ハ鐵炮ノ德ニ依ナリト被_レ申、大谷吉隆是ヲ聞、所詮是ニ超ル物アラジ、某ハ向後他ノ武具ヲ不_レ求ト申サル、隆景ノ玉フハ防ニハ鐵炮ニ德アリ、破ニハ弓ニ德アリ、一ヲ以テ多ヲ捨ルハ非ナランカト有シカバ、宗茂聞テ兵具ハ所ニヨリ時ニヨレバ何ヲカ用ヒ何ヲカ捨シ、鐵炮計ヲ用意セバ雨ノ降日ト闇ノ夜ニハ軍ハナラジト啖給フ、長政聞テ、イヤトヨ鐵炮ヲ以テ軍スルト云ニハ非ズ、弓ヲサヘ貴メバ鐵炮ヲ乏スルハ非ナリトス、宗茂宣フハ、鐵炮ノ德遠キニ中ルトヤ、是計リ難シ、敵合近ク鋒ヲ打違ル程ニテモ、切損ズルハ常ノコトナリ、彼鐵炮ハ藥力ヲ以テ玉ヲ飛スレバ、遠ニ中ル

トモ憑ムニタラズ、間近シテハ一放ナラデハ放サレザルハ鐵炮ナリ、捨ニハアラテドモ、一ヲ好ハ詮ナシト宣ヘリ、係ル諍ノ處ニ、秀家立出給ヒ、各ノ戲レ物ゴシニ聞テ侍フニ、勝劣ヲ分難シ、若人々ノ慰ノ爲ナレバ、甲州ハ鐵炮、立花ハ弓ニテ、的一矢見物セントアレバ、長政モ宗茂モ論ニ不_レ足ト辭退セラル、隆景イヤトヨ、勝劣ヲ論ズルニハ非ズ、立花ハ聞及タル弓ノ名人、甲州ハ飛鳥ヲ打捨ス鐵炮ノ上手ナレバ、是非一矢所望ト申シ玉ヘバ、長政モ宗茂モ辭退ニ不_レ及、十五間ニ筈ヲ立テゾ射タリケル、大谷刑部加藤遠江ハ一定長政勝ント思ヒケレバ、勝タル方ヨリ負タル道具ヲ取玉ヘト云、尤可_レ然トテ、長政ハ常ニ秘藏セシト云鐵炮ヲ輕々ト提ゲ火繩ヅクロヒシテ指出シ、暫シ堅メテ引落ス、長政究竟ノ上手ナレバ、筈ノ耳ヨリ一寸計サシ下ゲ、二ツニ打折ル、見物ノ人々一同ニ咄ト譽ル、宗茂ハ塗籠ノ弓ノ普通ニ超テ大ナルニ、鷹ノ羽ニテ作タル雁股ニ篋取添テ、靜々ト立出、思サマ身繕シ、能引タモツテ丁ト放ツ、アヤマタズ筈ノ真中フツト射切ル、列座ノ人々射タリヤ立花ト暫シハ鳴モ不

レ靜、サシモ加藤大谷ハ苦咲シテ居タリケリ、勝負ヲ究メ玉ヘトテ長政立替テ打シガ、如何シケン中ニハ當ラデ端ヲ少シ打削ル、宗茂立出能引丁ト放ツ、始ノ矢坪ヲ少モ不_レ違射切タリ、其座ニ在ケル人入聞シニ増ル射手哉ト大聲ヲ揚テ譽ニケリ、宗茂始ヨリ約セシコトナレバトテ、長政ノ鐵炮ヲ取給ヒケル、秀家はヲ見テサラバ立花ノ弓ヲバ我所望致サントテ取レケリ、斯テ各興ヲ催シテ退出シ玉フ、翌レ五日忠州ニ敵蜂起スト聞エケレバ、秀家ヨリ宗茂ニ行向テ鎮メ給フベキヨシ申シ玉フ、宗茂ハ軍兵多ク疵ヲ被リ未ダ不_レ愈候ヘバ難_レ叶ト思ヒ給ケレドモ、辭スルニ不_レ及即向ヒ玉フ處ニ、敵退散シケレバ合戰ハナシ、暫忠州ニ居テ頃日軍勞ヲ休メ給ヒケリ、

一文祿二年、沈惟敬ト云大明ノ商客朝鮮ニ來リ、小西行長ニ逢テ日本ト大明ト和睦ノコトヲ取結ブ、是ハ沈惟敬此事ヲ調エテ身ヲ立ントノ計略ナリ、小西ハ朝鮮ノ長陣ニ退屈シテ是ヲ調ヘ日本ヘ早ク歸ラントノ願望ナレバ、子細ナク惟敬ガ相談ニ立ノリ、彼方此方表裏ノミヲ云テ和睦ノコト相調ヘ、朝

鮮王李倣ハ義州ヨリ都ニ還リ、虜ニシタル王子二人モ送リ返シ、日本諸勢ハ釜山浦マデ引トル、此和睦ノトリヤリ往來ニ、月日推移テ文祿三年ニ成ニケリ、大閤ハ小西ガ安策ヲ信ジテ和睦ノコト相調ヘ玉フトイヘドモ、サレドモ赤國ノ牧司ガ城ヲ屠拔テ其後和睦ヲ調ヨト仰出サル、其故如何ト云ニ、是ヨリ先文祿二年三月十一日、此城ヲ攻取ントテ、木村常陸介、加藤遠江守、長谷川藤五郎、其勢一萬二千餘騎ニテ押寄セケレドモ、牧司ハ勇武ノ譽アル者ニテ、逆寄ニシテ日本勢ヲ追崩ス、大閤是ヲ聞召、日本ノ耻辱ナリト常々御立腹アルニ依テ、今赤國ノ城ヲ攻ヌキ、牧司ヲ討取最前ノ意趣ヲ果シテ後和睦ヲ調ラレント仰ナリ、小西是ハ詮ナキコト哉、然ラバ和睦ノコトモ敗ルベシト思ヒ、彼方此方トシテ此事ヲ止ント躊躇スレドモ不_レ叶、秀家秀元ヲ始メ、文祿三年四月中旬釜山浦ヲ立テ赤國ニ向ハル、加藤清正、黒田長政、伊達政宗ヲ先トシテ、其勢六萬餘騎トゾ聞エケル、行長ハ己ガ安略ノ顯ンコトヲ恐テ半途ニ留リ、惟敬ニサマ_ノ僞リ語テ、大明ヘ達スルヤウハ、今度赤國征伐ノコトハ、大閤ノ命

旨ニ非ズ、諸軍ノ私意ニ起ルトゾ陳シケル、此赤國
ト云ハ、晋州ノコトナリ、朝鮮ノ繪圖ヲ兼テ寫シテ
大閣御覽アルニ、國々ヲ五色八色ニ彩リワケテ歷
覽ニ安カラシム、此晋州ヲバ赤色ニ彩リケレバ赤
國トハ申ケリ、釜山浦ニアル倭軍晋州ノ城ヲ責ル
ト聞エケレバ、明ノ大將劉綎後詰セントス、五月二
日ノ早朝ニ倭兵六萬餘騎晋州ノ城下ニ推寄ル、大
手ハ加藤清正黒田長政ヲ先トシテ秀家都合四萬餘
騎、搦手ハ伊達政宗淺野幸長ヲ先トシテ秀元都合
二萬餘騎、各攻寄テ晝夜十餘日攻ケレドモ、城中弱
ル氣色モ見エザレバ、攻アグンデゾ見エニケル、明
劉綎後詰ノタメ大兵ヲ指向ルト聞エケレバ、誰カ
行向テ是ヲ支エント評定アレドモ、我コソ往ント
云人ナシ、宗茂公宣フハ、某罷向テ見候ハント有ケ
レバ、尤可_レ然トテ毛利秀包ヲ相加テ都合其勢四千
餘騎、晋越ノ城ヨリ未申ノ方ヘ二十餘里ヲ行テ陣
ヲトル、同十三日ノ晩景ニ、劉綎ガ軍將琳虎ト云者
六萬餘騎ニテ攻來リテ對陣ス、宗茂公歩行武者二
百人敵ヘ近ク出シケレバ、敵大勢出テ追拂ントス、
少々防躰ニモテナシ引退セケレドモ、敵イカバ思

ケン追テモ不_レ來バ、タバカリ討コトナラザリケ
リ、サラバ夜討ニセヨトテ、終夜窺ケレドモ、敵意
ラザレバ可_レ討ヤウモナシ、曉方ニ成テ宗茂秀包ノ
兩勢一人モ不_レ殘引拂テ、廿四町退キ、四千ノ兵ヲ
五分テ伏置タリ、敵是ヲ不_レ知、夜明ケレバ味方
ノ引退ケルヲ敗北シタリトヤ思ケン、大勢打出、引
タル陣ノ跡ニ來リ、怪デ暫シハ用心シケルガ、驕テ
馬ヨリオリ間原ニ成テ扣タリ、是ヲ見テ味方ノ伏
兵三方ヨリ起テ攻ヨセ、関ヲ咄ト作ル、敵大ニアハ
テ、騒グ處ヲ、味方ノ勢透間モナク打テ懸レバ、敵
七八千一戰ニモ不_レ及十方ヘ逃チリ、討ル、者數
ヲ不_レ知、サレドモ敵大勢ニテ先陣ハ敗スレドモ、
後陣ノ勢ハ少モ不_レ動、鳴ヲ靜メテ進ミ來ル、秀包
一千餘騎相懸ニカ、ツテ攻戰フ、秀包戰ツカレテ
颯ト引、宗茂ノ先陣八百餘騎入替テ戰フ、森下備中
同内匠兄弟ノ者眞先ニ進テ戰シガ、内匠ガ草ズリ
ノハズレヲ筈深ニ射サセ搔カナグリテ捨ルヲ、備
中吃ト見テ手淺クバ疾々引テ退ケ、痛手ナラバ敵
ニ逢テ死子ト云、内匠云ニヤ及トテ、主從八人鋒ヲ
揃テ切テ入、備中ガ廿四人同ク驅ル、内匠顧テ思ナ

リ備中、御邊ハ身ヲ全シテ主ノ前途ニ立給ヘト云
ステ、敵ノ中ニカケ込ム、備中モナジカハ引ベキ、
一所ニ切テ入ケルヲ、宗茂公見給ヒ、森下討スナ
續ケ者其ト下知シ玉ヘバ、小野和泉丹八左衛門ナ
ドロ始トシテ、一千餘騎喚デカク、敵ノ大勢散々ニ
打負テ引退ク、内匠ハ終ニソコニテ討レケリ、敵多
勢ナリトイヘドモ一陣二陣ウチ負ケレバ、重テ來
ル敵モナシ、秀包宗茂陣ヲ堅メ、猶モ敵ヲ待テゾオ
ハシケル、晋州ニハ後詰ノ敵敗北スト聞テ、寄手ハ
勇ミ城中ハ大ニ弱リケル、斯テ清正大手ノ石垣ヲ
手立ヲ以テ毀チ攻入バ、城中ヨリ防トイヘドモ寄
手イヤガ上ニ相續テ攻入シカバ、五月十七日午ノ
刻計ニ城ハ落サレテ、大將牧司討レケリ、其比ノ沙
汰ニ、宗茂後詰ノ大軍ヲ討退ケ玉フニ依テ、此城ノ
寄手後ロ安ク、手立ヲ竭シテ責落サレシコト、畢竟
宗茂ノ武功ニアリトゾ申ケル、

一文祿四年六月ニ、大閣ノ仰ニ、立花侍従ハ歸朝シテ
大閣ノ武備ヲ勤ムベシトアリケレバ、謹デ仰ヲ奉
ハリ、宗茂公喜玉フコト限ナシ、渡海ノ諸大將多
キ中ニ、其別儀ヲ以テ歸朝スルコト、面目ノ至リ

不_レ過_レ之トテ、急陣拂シテ歸朝シ玉フ、先梁川ニ歸
城アレバ、諸將ノ面々妻子眷族、或ハ死シテ別レ、或
生テ逢フ、哀樂地ヲ替、憂喜門ヲ異ニセリ、斯テ宗
茂公諸篇ノ仕置ヲ仰置レテ、上洛ニ赴キ玉フユヘ、
漸十月十六日伏見ニ着シ玉フ、翌日歸朝ノ御禮申
上給フ處ニ、太閤御氣色殊ノ外ニ快然タリ、數年ノ
辛勞其間ノ戰功拔群ナルヲ御感アリテ、御賞美ノ
御詞不_レ淺、サテ向後ハ日本ノ不慮ヲ守禦スルノ統
侍タルベシト、直ニ御旨ヲ奉リ、面目ノ至ト辱ク御
請ヲ申上給フ、次ニ仰ニハ、近年當城ヲ御取立アツ
テ御隱居ノ地ト思召ス、立花ニモ屋敷ヲ仰付ラレ
ンノ條、早々普請ヲ致スベシ、然レバ聚樂ノ御城ニ
テ四方十三間ノ御殿一軒下シ賜ル處ナリト、益結
搆ノ上意ナリ、此御殿ト云ハ、梁行桁行同ク十三間
ノ御家ナルガ、間ゴトノ張付襖障子ハ狩野榮徳長
谷川等伯兩人ニテ手ヲツクシタル筆跡ナリ、其外
飾ノ品々言語ノ及處ニアラズ美麗ナリ、伏見ニ於
テ屋敷ヲ受取御殿ヲ引取テ、館舍ノ搆ヘモ程ナク
成就ス、其年ヨリ慶長二年ノ正月マデハ、月々御城
ニ勤仕シ給ヒ、一月ノ内ニ僅ニ三日ノ餘暇ヲ得給

ヒケリ、

一去年金吾秀秋ハ、小早川隆景ノ養子トシテ筑前國ヲ讓得玉フ、秀秋若年ノコトナレバ、山口玄蕃允ヲ指下サレテ名嶋ノ城ヲ請取ケリ、此節筑前ヲ始メ九州悉檢地ヲ仰付ラレ、其年ノ正稅ヲ悉皆御倉ニ納置テ、檢地ノ後當ル年貢ヲ給主ニ渡シ、殘米ハ御用米タルベシト定ラル、ニ依テ、當秋ノ現米ハ不殘御倉ニ納メントス、宗茂公歸朝シ玉ヒテ此由ヲ聞召シ、數年朝鮮ニ在テ粉骨摧身シ、家人等一命ヲ抛テ奉公ス、唯今歸朝ストイヘドモ、家中者其飯米サヘ乏シキ有様ハ、本意ニ非ルコトナリト太ク腹立シ給ヒシガ、伏見ニ上着アリテ其マ、長束大藏太輔ニ此コトヲ憤リ宣ヘバ、長束最至極ナリト駭テ、山口方ヘ書札ヲ以テ申送ル、其文ニ曰、

柳川侍從高橋主膳上洛に付而、御狀令ニ拜見候、十六日之曉に至而、伏見參着候、即翌日十七日御禮被ニ申上候處に、一段仕合能、於高麗數年粉骨、無ニ比類ニ被ニ思召候條、可レ被ニ加ニ御扶介旨、重疊忝御誼共に候、其上伏見にて御屋敷可レ被ニ下候、長々在陣にて家など立候事成間敷候

條、聚樂にて可然御廣門以下可被爲ニ拜領旨御誼候、無殘處仕合共に候、可易御心候、緩逗留にて爰元一見仕候ヘ被入ニ御念被ニ仰聞候、御服御道服拜領、外聞實義被ニ播ニ面目候、隨而西國御檢地に付而、羽左近高主膳領地をも、同前に御檢地之由に候、然者當所務從ニ其方被ニ相押ニ由にて、迷惑被ニ申候、出來被ニ召上候は、算用次第右兩人分者可被上候條、所務之儀押を御上由にて尤候、數年高麗在陣之上、たま歸朝候處に、肝要候所務被ニ押候事不可然候、御倉に入候ては如何と存申入候、右兩人事は不混ニ自餘ニ御懇之儀に候間、可有御分別候、恐々、

十月十九日

長 大藏

山口玄蕃殿上る

一慶長元年ノ夏、朝鮮在陣ノ諸勢歸朝スベキヨシ仰ニ依テ、六月七月ノ間ニカケテ諸大名伏見ニ至テ上リ集リ玉フ、斯テ各多年ノ苦勞ヲ休セントテ、方方ノ饗應宴會ノミニテ日ヲ送り給ヒケル、或時宗茂公ハ嶋津殿ニ招請アリテ御座アリ、御供ノ頭ニ

ハ立花三太夫參リケリ、既ニ嶋津殿ニ入セ給テ後、彼家ノ番頭四郎兵衛ト云者罷出テ、立花三太夫ニ申ケルハ、唯今園ニ於テ伊集院^{左衛門入道典簡}ト云者ヲ去子細アリテ薩摩守手討ニ仕候ヒ訖、此旨ヲ與簡召連候家頼ノ者ドモニ申聞セ候ベシ、若異義ニ及ニ於テハ不_レ殘成敗仕ルベキニテ候、然レバ左近様ノ御供ノ衆中何モ一所ニ片寄御座アリテ可_ニ給ル_一候ト云リ、御供ニ參タル人々案外ノ事ヲ聞テ、コノ返答イカバト老功ノ者行當リケルニ、三太夫不_ニ取敢_一申ケルハ、我々共參合事候幸ノコトニテ候、若討果サル、ニ於テハ合力仕ルベキコト勿論ナリトイヘドモ、何レヲ御直衆何レヲ與簡者ト分明ニ不_レ存候ヘバ、御加勢ハ成ガタシ、何方ニテモ御屋敷ノ内警固ナクテハ不_レ叶處可_レ有_一之、御指圖ヲ承テ此方一手ニテ相堅メ可_レ申ト云、四郎兵衛是ヲ聞テ念ヲ入玉フ口狀祝着申處ナリ、左アラバ玄關ノ右ノ道ヨリ裏ヘノ往來無_レ之ヤウニ御警固アリテ可_レ給ト申ケリ、斯テ事故ナク與簡家來ハ退散シケレバ靜リケリ、其後四郎兵衛此方ノ屋敷ニ來テ申ケルハ、先日三太夫殿心入ノ段ヲ薩摩守承リ、殊外満足

仕タリ、左ヤウニ差當リタル才覺ハ、老功ノ者モ迷フ事ナルニ、若キ三太夫ドノ、舉動、言語道斷ノコトバモナリ、常々左近様若キ御供頭ヲ召連ラル、ト人々存ズル處ナルニ、先日ノ仕方ニテ左近様ノ御目ガチヲ感ジ、恐ナガラ驚入候トゾ述タリケル、是ヲ宗茂公聞召、一廉ノ高名ニ准ジ思召テ、賞美シ玉フコト不_レ淺、カク人ヲ擇ミ侍ヲ撫育シ給フユヘ、ヨキ人ト世ニ呼ル、者多カリケリ、

一伏見ノ御城成就トハ云ドモ、尙モ外輪所々ノ御普請有_レ之時、備前中納言殿ノ足輕ト此方ノ足輕ト口論ヲ仕出シ強リテ、中納言殿ノ足輕一人打伏セ、當家ノ足輕モ兩人手負スレバ、互ニイヨノ、騒動シテ普請場ヲ引拂ヒ皆々歸畢ス、中納言殿屋敷ト當家トハ相向ナリ、此事ヲ中納言殿聞召、以ノ外ノ立腹ニテ、此方ヘ押寄鬱憤ヲ晴シ玉ハント匂リ給フニ依テ、彼一家ノ面々聞付、中納言殿ヘ群參セラル、其折シモ宗茂公御兄弟共ニ淺野彈正殿ヘ振舞ニ御出アリシ御留主ナリ、薩摩守義弘此由ヲ聞召、件ノ四郎兵衛ニ騎馬八人相副、足輕五十人召具シ、馳來テ立花三河ニ逢テ云ヤウ、何方ニテモ御指

圖ニ任セ可ニ相堅一ト申ケリ、又安國寺石田治部藤堂佐渡守ナド、日來入魂ナル大名小名彼は十一家ノ衆中ヨリ、廿人卅人宛加勢トシテ指越ル、當家ノ隣ハ武藏ノ内府公ナリ、本多平八使ヲ以テ申サルルハ、内府此騷ノ子細ハ御存知無レ之トイヘドモ、御邊ノ屋敷ニ於テ相替事有レ之ニ於テハ、此方屋敷ノ前ハ何者ニテモアレ通シ申マジキト仰付ラレ候、此方筋ニ於テハ御心遣アルベカラズ、内府公具足ヲ傍ニ召置レ、屋敷中ニ油斷不レ仕ヤウニトノ事ナリ、別テ御心強ク思召ルベシ、如何様ノ事有レ之候トモ、此方違變アルマジク候、左様ニ心得可レ給トノ口狀ナリ、是ヲ聞テ當屋敷中ノ人々下々ニ至ル迄、心強クゾ勇ミケル、扱又中納言殿屋敷ニハ、弓鐵炮鎗長刀ヲ持セタル人數、諸方ヨリ引切ル間モナク馳集リテ、屋敷ニ居アマリ、門外マデヒシト備エタリ、斯テ兩方ノ長屋ノ窓ヲ開テ、足輕等ハ惡口難言シテ呼叫ス、若キ侍ハ門マデ出浮テ、寄ラレヌ先ニ此方ヨリ仕懸勝負ヲ決セント、所々ニ競カカルナレドモ、老功ノ面々堅ク制シテ不レ出レ之、小路ヲ阻テ飛礫ヲ打矢ヲ射掛、騷動スルコトヨノツ

ナラズ、笈柴左門ト云ハ中納言殿ノ甥ナリ、小性一人ヲ召連ニ階ノ上ニ上リ諸方ヲ見合セ玉フ處ヲ、當家ノ京都兎角兵衛弓ヲ以左門ヲ子ラヒ射ケレドモ、射逃シテ傍ニ候フ小性ヲ只一矢ニ射殺ス、夫ヨリ彌ツノリ立テ中々靜ルベキ様モナカリケリ、此由段々ニ淺野殿ノ宴席ニ注進ス、宗茂公聞召、御兄弟イカニモ取靜メ玉ハル様子ニテ、其座ヲ立給ヒ、御兄弟打連直ニ中納言殿へ御越ナサレケリ、人々はヲ見テ申サルハ、立花殿ハ只今は來リ玉ト呟ケバ、カタエノ人々、是程ノコトナルニ何故ウカノトハ來リ玉フベキト云處ニ、宗茂公門ノ内ニサシ入セ玉フ、中納言殿ハ玄關へ出張シ下知ヲナシ玉フ處へ、宗茂公側近クツト指寄玉テ宣フハ、某ノ家頼ドモ楚忽ノコトヲ仕リ、御腹立ノ由承リ、ソノ御理リ申サンタメ是へ參リ候ト宣フ、中納言殿及ニ異儀一タル返答アラバト、左ノ方ニ宗茂公、右ノ方ニ主膳正、サテ御供ニハ十時新十郎、石松安兵衛、今村五郎兵衛、安藤津之助、池邊龍右衛門、十時攝津、十時但馬、此等ヲ初メ、日來一刀打ノ勝負ヲモ度々シテ物馴タル者ドモ老若十八人、中

納言殿宗茂公主膳正殿三人ヲ中ニ置引包テ鏝本ヲ
クツロゲ伺候ス、中納言殿ノ衆大勢出テ、御供ノ衆
サガラレ候ヘ〜ト度々叱シ退ルトイヘドモ、中
中耳ニモ不聞入、猶々詰ヨセテ候ヒケル、中納言
殿暫シハ返答モ無リケルガ、係ル躰難儀ト思召ケ
ルカ、御手前はマデ御出ニテ御理リト有ン上ハ不
レ及ニ子細ニ候、以來無禮ノコトナキヤウニ家中ノ者
ニ可レ被ニ下知ニ候ト挨拶シ玉フ、宗茂公宣フハ、御
承引アラレ候上ハ何カ此上モ候ベキ、家中ノ面々
騷動ヲ停止アラルベシ、中納言殿御諛ノ趣何モ承
ハラレ候ヒヌラント高聲ニ宣ヒ、宗茂公御兄弟打
連立歸ラセ玉ヒケリ、歸宅アリテ、方々ヨリ助集タ
ル人々ニ夫々ニ禮アリテ、皆々返シ玉ヒケリ、内府
公ヘハ御禮トシテ參リ玉フ、斯テ歸ラセ玉フトイ
ナヤ、本多平八ドノ御見舞トシテ御出アリテ、夜更
ルマデ御酒宴アリ、其後平八ドノハ中納言殿ヘモ
參リ玉ヒテ、彌御和談ノ取アツカヒ事調リ、上ムキ
ハ無事ノ沙汰ニ及ケリ、其比世上ノ風説ニ、中納言
殿此意趣ヲ思ヒ込メ、時宜ニ依テ何方ニテモ返報
アルベシト巧ミ玉フナル、又登城ノ折柄城中ニテ

手込ニシ玉ハント沙汰シケレバ、日來宗茂公ヘ心
入ノ方々ヨリ油斷アルマジキ由御内證アノレ
バ、伏見ニテモ大阪ニテモ、御登城ノ御供定數ノ
外、石松安兵衛、安東津之助、其外若キ侍、袴ヲヌキ
脇差計ニテ草履取ニナリテ參リケリ、宗茂公御下
知ニハ非レドモ、家中ノ心懸ケモ油斷ハナカリケ
リ、係レバ諸家ノ家頼ノ人々カノ輩ニ參會ノ時ニ
ハ、貴所ハイッ侍ニ成テ刀ヲ指シ候ヤラント戯レ
テ、心懸ノ程ヲ感ジケル、

一其後或時伏見ニテ、中納言殿大勢ヲ召具セラレ川
道遙ニ御出アリ、宗茂公此所ニ行合玉ヒヌ、御供ノ
人々便宜アシト思ヒ、御駕籠ヲ戻シ可レ申ヤト相窺
ヘバ宗茂公イカデサルコト有ベキ、道ヲ半分ニ分
テ昇通シ候ヘトノ玉ヘバ、眞直ニ昇通ス、中納言殿
ハ川舟ニ乘玉ハントシ給フガ、吃ト見テ、是ハ誰ゾ
ト高聲ニ御尋アリ、御供ノ人々、スハヤ大事出來ヌ
ラント思ヒ打過ル處、石松安兵衛ハ、小野七郎ガ袖
ヲ引ニ依テ立止レバ、安兵衛云ヤウ、中納言殿ノ大
勢押懸ルトモ、小路鍵ノコトナレバ、御邊ト我々鍵
二本ニテ支ル程ナラバ、何條事カアルベキト云、七

郎聞テ、ゲニサゾ候トテ、二人ハ駕籠ノ跡ニサガル、扱此有様如何シタリケン屋敷ニ聞ユルハ、宗茂公ハ中納言殿ニ行合給テ既ニ事ニ及タル由云フラセバ、立花吉右衛門、十時攝津、池邊龍右衛門ナドヲ初トシテ、皆々裸馬ニ打乗鍵ヲ引ンバメ打テ出ル、屋敷ニハ小野和泉只一人ゾ殘リケル、鍵ヲツ取走リ出タル侍七十六人ニ及ベリ、扱又舟バタニテハ、中納言殿御供ノ人々騒立赫ニ見エケルガ、中納言殿御カマヒナク舟ニテ漕行玉ヒケレバ、珍事ニ不レ及靜リケリ、其比世上ニ沙汰スルハ、中納言殿ヨキ仕方ナリ、若モ事ニ及ナバ、ヤハカ安穩ニオハシマサントゾ聞キケル、此度不慮ノ騒動ノ後、上ハベハ事モナク候ヘドモ、下ノ心ハ不快ヤオハシケン、重テ高麗陣中ニテモ、遺恨モアルヤラント覺シキ事、折ニフレテハ候ヒケリ、

一此後宗茂公ハ小野七郎ヲ召レテ尋サセ給フハ、如何様ノコトニテ駕籠ノ跡ニハ下リタルゾトアリケレバ、七郎申上ルハ、安兵衛申分加様ノ次第ニテ候ヒツレバ、其儀尤ニ存ル處ニアリ、外ニ別儀ハ無レ之下申ス、宗茂公打ウナヅキ宣フハ、其方若年

ナレバ知候マジ、彼安兵衛ガ親ヲ源五郎ト云テ、隠レナキ覺ノ者ナリ、彼ガ母モ心剛ナル女ナリ、昔道雪公ノ御代ノコトナルニ、成敗シ玉フベキ者親子三人アリケルヲ、源五郎ニ仰付ラル、三人ノ者ナレバ合期シ難カルベシ、親一人呼出シ打果シ候ベシ、子共ハ其後餘人ニ仰付ラルベシトノ事ナリ、然ルニ源五郎三人トモニ呼ヨセ、忽親ヲ切伏ル處ニ、子共兩人抜合テ切合ケルヲ、又一人切伏ル、カ、ル處ニ源五郎ガ刀鏢本ヨリ打折テ既ニ難義ニ及ケルガ、後ロヨリ彼相手ヲ長刀ニテ突通セバ、其マ、倒レ伏ニケル、即時ニ三人事故ナク打取ヌ、源五郎思ヤウ後ロヨリ突タル者ハ誰ニテカ有ツラン、手前ニ取紛レテ分明ニ見付ズ、不思議サヨト思ヒ、内ニ入テ是ヲ問ヘバ、女房云ヤウ物音騒敷ク聞エ侍ヘバ、如何ナル事ニカ有ント指ノゾキ見ル處ニ、御身散々ニ切合給ニ依テ、不ニ取敢一長刀ニテ突テ侍フト云テ、苧笥ニカ、リイト事モナゲニ苧ヲウミテ居タリケル、カ、ル事ヲ聞及ブニ、左ル剛ナル者ガ夫婦ノ間ニ出來タル子ナレバ、未ダ廿歳ノ内外ノ年來ニテ老功ノ輩ニマサリタル舉動珍重ナリト賞

美シ玉フ、彼源五郎後ニ準人ト召レケレドモ、唯源五郎ニテ罷アラント不_三承引_一、卑下ノ心モ神妙ナリ、又我代ニナリテ岩屋籠城ノ時使ニ遣シタルニ、敵取圍タル時ノコトナレバ、御返事ハ不_レ申トテモ何ノ子細カ候ベキ、是ニテ御最後ノ御供申サント云ヲ、紹運公色々ニ宣テ御歸シアラント手ヲ盡シ玉ヘドモ、中々承引ノ氣色ナカリケレバ、力不_三及_一ビ給_一、左アラバ心次第ナルベシトテ、引出物セントテ、高橋ノ名字并ニ國名ヲ賜リ、高橋越前ニナサレ、潔キ御供申ケル、加様ノ者ハ今ニ於テモ惜ク思ヒ、忘_レ不_レ給トゾ宣ヒケル、宗茂公加様ニ侍ヲ撫育シ義ヲ勵シ給フ故、命ヲ義ニ替タル諸侍他家ニスグレテ多カリケリ、

立齋舊聞記卷之下

一日本朝鮮和睦ノ事、小西行長ガ安略露顯シケレバ、太閤大キニ怒リ玉ヒ、再朝鮮征伐ノ事ヲ仰セ出サレ、慶長二年正月二月ニカケテ、日本ノ諸勢釜山浦ニ押渡ル、同四月、大明ヨリ楊鎬刑玠劉綎麻貴ト云四人、大將トシテ百萬騎ヲ卒シ來ルト聞ユ、依_レ之日本ノ諸勢ハ所々要害ノ地ニ城郭ヲ築テ永久堅固ノ策ヲナセリ、同十二月一日、楊鎬三十萬騎ヲ卒シ加藤清正ノ保ツ蔚山ノ城ヲ攻ントス、同四日ノ朝ヨリ此城ニ攻懸ル、城中ニ籠ル人々ハ、清正ノ城代加藤清兵衛ヲ先トシテ、淺野左京亮太田飛騨守等、命ヲ限リニ防ケレバ、左右ナク敗ル、事無リケリ、其後清正モ敵ノ中ヲ切通リテ此城ニ籠リ、城ヲ落サレヌヲ勝ニシテ、中々敵ヲ退ル策ハナラザリケリ、斯テ同月下旬ヨリ兵糧竭テ、難儀タリトイヘドモ爲方ナク、馬肉ヲ食シ、討死ノ明人ノ腰ニ付タル炒米牛ノ炙物ヲ夜中ニ出テ搜シ取テ、ヤウ_一命ヲ繋ギケル、然レバ釜山浦ニ此由聞エテ、色々僉議アリ

テ後詰ノ勢ヲ出サル、小早川秀秋、毛利秀元、黒田長政、其勢三萬餘騎、船路ヲヘテ蔚山ニ押渡ル、慶長三年五月四日、蔚山ノ城ヨリ北十二里ヲ隔テ船ヨリ上リ、攻カケ、戰ケルニ、楊鎬敗レテ北行ケリ、是ヨリ先正月二日ノ事ナルニ、釜山浦ヨリ四十里ヲ隔テ般舟ト云所ニ、明兵一萬餘騎ニテ來リ、郷人ヲ集メ既ニ大勢ニ及由告來ル、毛利宰相小早川、黒田ナドハ蔚山ヘ向シ折ナレバ、釜山浦モ小勢ニテ騷動スル事不_レ斜、備前中納言秀家ヨリ宗茂ヲ招テ、敵假令ヨセ來ルトモ恐ニ不_レ足トイヘドモ、更ニ油斷スベキニ非ズ、御邊ハ打廻リテ防戰ノ支度見計ハレベシト有シカバ、宗茂應諾シテ、敵大勢ナリトモ何程ノ事カ候ハシ、其能向テ一當アテテ見候ハヤトノ玉フ、秀家兎モ角モ越度ナク計ハルベシト有シカバ、宗茂立歸、二千餘人ガ中ヨリ人ヲ勝テ八百餘騎召具シ、其日晚景ニ釜山浦ヲ立テ般舟ニゾ向ヒ給ヒケル、暮ニ隨テ風烈シク吹雨シキリニ降テ、目ザストモ知ザリケリ、酒ヲ好ム輩ハ酔ニ和シテ進メドモ、酒ヲ不_レ吞者ドモハ寒風鎧ヲ透シテ身冷足曲リ可_レ進ヤウ無リケリ、軍兵ド

モ角テハ不_レ可_レ叶、夜明暖ニナリテ進玉ヘト申アヘリ、宗茂公聞召、合戰ヲバ夜ノ内ニスベシ、無勢ヲ敵ニ知セテ豈利アラシヤ、進ミ得ザラン者ドモハ是ヨリ歸ルベシト怒リ給ヘバ、軍兵ドモ是ニ勵ミヲナシ、何クニテモ死スルハ同ジ道ゾカシ、命ヲ限リニ行ヤトテ、甲ノ鏝ヲ傾ケ、我劣ジト行程ニ、夜半計ニ般舟ニ着テ、敵ノヤウヲ窺フニ、陣ノ構エ淺間ニシテ、前後モ不_レ知臥タリト覺エタリ、宗茂公下知シテ、風上ニ火ヲ放テ其先ニ切テ入トアレバ、人々所々ニ火ヲ付ル、風ハ強シ、猛火片時ニ移リ、恰モ白晝ニ異ナラズ、敵ハ是ニ目ヲ覺シ周章騷ク處ニ、三百騎咄ト呼デ駆入レバ、敵一支モセズ卿ノ子ヲ散ス如ク亂散ル、己ガ構シ堀欄ニセカレテ途ヲ失フ、大將牧務遼ハウ、免レテ行方不_レ知落行タリ、其外ノ軍兵ナジカハ以テ可_レ溜ル、チリ、ニ迷失ヌ、三萬餘ノ敵ドモ、宗茂公ノ小勢ニ挫レ敗北ニ及ケルコソ不思議ナレ、宗茂公敵ノ首五百計切カケ、生捕餘多召具シテ、釜山浦ニ歸リ玉ヘドモ、褒美スル人モナシ、莫大ノ忠戰空ク埋レケルコソ淺間シケレ、

一同年五月、明ノ大將梅栢ト云者六萬餘騎ヲ卒シテ、清正ノ守ル蔚山ノ城ニ押寄タリ、今度ハ城ノ搆モ堅固ニ、兵糧用水ヨク調テ、清正ノ勢モ一所ニ集居ケレバ少モヒルマズ防ギ戰フ、梅栢サル者ニテヨク圖テゾ攻タリケル、釜山浦ニハ所々ノ城ヲ敵大勢ニテ攻ヨシ日々ニ注進アリ、順天ノ城ヲ小西行長加藤嘉明籠リケルガ、小西ハ北テ松嶋ノ城ニ行、嘉明ハ留リテ此城ヲ守ル處ニ、去ル三月下旬ヨリ、明兵海陸二手ニ分テ順天ヲ圍ミ、遠攻ニシテ居タリケリ、松嶋ノ城ニ行長北籠タル所ニ、鄧子龍ト云明ノ大將五萬餘騎ニテ押寄タリ、如レ此所々ノ敵ニ後詰セント評議區々ナリトイヘドモ、向ヘラルベキ勢モナケレバ、竟ニ一決ノ議モナシ、宗茂公申玉フハ、評定ニテ日ヲ送モ詮ナシ、先蔚山ノ寄手ヲ追拂バ、泗川ノ敵ハ不レ攻トモ退ベシ、二箇所ノ敵退カバ、順天ノ寄手大勢ナリトモ退ルコト安カリナシ、蔚山ノ後詰ヲバ某仕ラント宣フニ、好カラント云モアリ、如何ト云モアリテ、僉議更ニ不レ極、中納言秀家ハ、伏見喧嘩ノ後ハ宗茂ト心ヨカラズ、如何ニモシテ後レヲ取セバヤト思ヒ玉フガ、蔚山ニ立

花一分ノ勢ニテ向ントノ計ヒ可レ然候、疾々ト申玉フ、列座ノ人々ハ如何ト云レケレドモ、秀家重テ宣フハ、何トモアレ立花向ハレ可レ然候、立花ハ三千ニ足ラス大將ナレバ、仕損ジテ討ル、トモ不レ惜ト宣ヘバ、宗茂公可ニ向ルニゾ極リケル、宗茂心ニ思ヒ玉フハ、アツバレ無道至極ノ秀家ノ詞ヤ、指違死バヤト思ヒシガ、爰ニテ死セバ若氣ノ致ス處ト人ハニ云レンハ口惜ト思ヒテ、ソラ聞シテ其座ヲ立、軍ノ用意ヲ調玉フ、今度ハ大勢ハアシカルベシトテ、物馴タル兵一千餘人召具シ、五月五日ノ未明ニ、蔚山ノ城ヨリ五十四里隔テ、元續ト云所ニ着テ、敵イヅクニ在ヤト尋ルニ、是ヨリ三里先ニ其勢五千餘計ニテ陣取テ有ト云、サラバ先此敵ヲ追拂ハントテ、朝霧ノ晴間ヨリ、混甲五百餘騎鳴ヲ靜テ押寄、関ヲ咄ト作ル、敵大ニ周章騒ク所ニ、鐵炮ヲ放チカケ切テ入、敵ノ大勢一支モセズ落行ケリ、宗茂公下知シ玉ヒ急ニ是ヲ追シム、小野和泉小勢ニテ長追ハ惡カリナント申ス、宗茂公宣ハ、イヤ、不レ追ハ味方無勢ナルヲ知ラレン、敵殊外アハテ、散亂スレバ、ヨモ返サジ、向ニ見エタル森マデハ追行ト

テ追セラル、敵一返モセテバ、其間廿餘町ゾ追タリケル、宗茂公ハ下居テ暫休息シ玉ヒ、サテ靜々ト十四里ヲ行テ陣ヲ取、生捕少々有シヲ繩ヲ解テ助ケ玉フ、其時人々申ケルハ、無勢ナルヲ敵ニシラレジトテ是マデ連來リ、今又此生捕ヲ助ケ返シテハ如何ト云、宗茂公宣フハ、今朝ノ合戦ニ敵敗北スル故ニ我カ無勢ナルヲ不_レ知、今ハ定テ我無勢ナル事敵ヨク知テゾ有ラン、是ヲ隱スニ不_レ及、生捕ヲ助ケ返ハ敵ノ心ヲ奪ハン爲ナリトテ、竟ニ助ケ返シ玉フ、斯テ其日モ暮ケレバ、篝火多ク燒セ、宗茂公一時計二十里ヲ行テ、勢ヲ五手ニワケ此彼ニ置、鳴ヲ靜テ扣タリ、本陣ニハ下人少々殘シヲキ、終夜篝火セケリ、足輕百餘人ヲ出シ、若敵來ラバ急ニ告來レトゾ下知シ玉ヒケル、其夜子ノ刻計ニ敵大勢ニテ攻來ル由告來レバ、宗茂公陣々ニ下知シ玉フハ、敵ノ先陣ト軍ヲ挑ムベカラズ、後陣ノ大勢來ラン時合戦ヲ始ベシ、敵ノ先陣後陣遙ニ間ヲ隔テバ、味方ノ後陣ノ勢ヲ以テ敵ノ先陣ト合戦ヲ始メ、急ニ勝負ヲ不_レ決時ヲ移スベシ、敵強クバ本陣ヲ指シテ引退ケ、イカニ戦トモ下知ナキニ餘陣ノ勢ヲ動スベ

カラズト云合テゾ待居タリ、少時在テ敵七百計出來ル、味方ノ勢皆鳴ヲ靜テ通シケレバ、敵是ヲ不_レ知押通ル、遙ニ後陣ニヒカヘシ三河嫡子立花吉左衛門百五十餘人、靜ニ勢ヲ出シ合戦ヲ始ム、敵思ヒヨラデ大ニ騷シカドモ味方ノ勢ノ不_レ進ニ利ヲ得テ桃ミ戦フ、暫ク時移レバ、敵ノ大勢勇進テ出來ル、時シモ五月上旬ノ事ナレバ、一天闇シテ敵ノ物色サダカニハ見エテドモ、雲透ニ見レバ其勢一萬ニハ過ジトゾ見エタリケル、先陣ニ合戦アリト聞テ敵急ニ進ム、味方ノ先陣二陣ハ猶モ音セズ、敵是不_レ知宗茂ノ陣ノ前ヲ通ル時ニ、鐘ヲ鳴シ同音ニ関ヲ咄ト作り、前後ヨリ切テ懸ル、敵ノ大勢思モヨラス所ヨリ打立ラレ、闇サハ闇シ途ヲ失ヒ、一支モセズ四方ヘバツト散テゾ落行ケル、宗茂公是ヲ見玉ヒ、進メヤ者ドモトテマシクラニ追懸ル、大勢ノ引立タル曲トシテ、一返モセズ此彼ニ追伏ラレ、討ル、敵數ヲ不_レ知、夜モ明方ニナリケレバ、宗茂公勢一所ニ集メ、手負死人ヲ計ルニ、僅卅騎ニハ過ザリケリ、討取首ハ四百餘人ナリ、軍兵飯ヲ認ケレバ、此競ニ進テ敵ヲ追拂ハント打立ケルガ、敵ナシ

ト怠ルベカラズトテ備ヲ堅シテゾ進ケル、蔚山ノ城ニハ此後詰向ヒタル事ヲ不レ知シテ、不思議ヤ終夜敵ノ騷事ハ、若味方ノ後詰ヤ有ト怪ミケリ、同六日ノ未明ニハ、宗茂公蔚山ノ城ヨリ十里ヲ隔テ全澄ト云所迄進ミ玉フ、敵ハ昨日ヨリ二度ノ合戦ニ手腕ク打負シカバ、軍勢是ニ懼テ騷ギ立、サシモ勇アル梅栢モ是モ鎮ル事不レ能、ハカナク圍ヲ解テ引退ク、清正是ヲ見テ敵ハ引退ゾ、打テ出デ射ヨトアリケレバ、五千餘人打テ出、追カケ〜大勢ヲ討取ケリ、斯テ宗茂公ハ清正ニ對面シ、互ニ軍勢ノ事ヲ相謝シ、又ハ後詰ノ次第ナド物語アルニ、清正宣フハ、此六七箇年ガ間御邊ノ軍功他ニ異ナリト聞シヲ、如何ナラント思ヒツルニ、今度ノ武略感勇今世ニ並ビアルベクモ覺候ハズト大ニ感シ給ヒケリ、サテ宗茂公宣フハ、是ニ候テ釜山ノ勢ヲ招キ泗川順天ニモ向ヒ度存レドモ、俄ノ事ニテ軍用モ不用意ナリ、勢ヲモ殘シ置ツレバ、跡ノ事モ覺束ナシ、近日勢ヲ卒シテ泗川順天ヘハ可レ向ニテ候トテ、同七日ノ早旦ニハ釜山浦ヘ赴キ給ヒケル、釜山ニテ例ノ倭人ドモ集リテ、今度立花ガ蔚山ノ後詰ハ、サマ

ザマニ敵ヲタバカリテ然々ノ戦モセザレバ、譽トハ云難シ、カ、ル事ニテ敵ヲ退ンハ、誰モ難キ事カハトゾ云合ケル、ウタテウノシ人口ナリ、サレバ此比ハ武士ノ風俗漸ク衰ヘ、突ヌ鎧ニ血ヲツケ、拔ヌ太刀ニテ高名スル詔ヒ者ノミ多カルニ、宗茂公ハ生得直路ニシテ、輕薄表裏ノ事ヲ嫌ヒ、人ニ遜ル事モナク、キレテ弓矢ヲ取玉ヘバ、猜ミ妬ム人ノミアリテ、大忠空ク埋レタル事、今ニ限ラヌ事ナレドモ、武士ノ家業ナレバ珍シカラズ、何ゾ譽ヲ街フベキト宣テ、更ニ心ニカケ玉フ事モ無リケリ、

一慶長三年八月十八日、大閤伏見ノ城ニ於テ薨去ナリ、此事朝鮮ニ聞エケレバ、諸大將ノ心唯闇夜ニ燈ヲ失フ風情也、御遺言ニ依テ、淺野彈正石田治部少輔二人筑前博多ニ下テ、朝鮮在陣ノ諸大將皆々歸朝スベキ由云送ラル、依レ之秀家秀元ヲ初トシ皆歸朝ヲ催サル、敵ニモ此事隠レナカリケレバ、此費ニ乘ジテ日本ノ軍兵ヲ一人モ不レ洩計取ント大軍向フト風聞ス、小西行長ハ松嶋ニ在城タルガ、機張ノ主鍋嶋加賀守ト相計リ、一同ニ歸朝セントシケリ、此心ハ無勢ニテ出船シ敵ニ隔ラレン事ヲ恐テナ

リ、サレドモ松嶋ト機張ハ海路遙ニ隔レバ、其計ヒモ不レ調シテ日ヲ送ル、係ル所ニ敵既ニ大勢ニテ近クト聞エケレバ、行長ニ力ヲ合歸朝セント、嶋津義弘淺野幸長松嶋ニ來リ給フ、行長大ニ悦ビ、各此城ニ入玉ヘ、某ハ機張ニ行テ何モ示合テ一同ニ歸朝スベシトテ、手勢七千餘騎召具シテ出船シケルガ、機張ヘハ不レ行シテ直ニ歸朝シタリケリ、義弘幸長是ヲ聞テ、カ、ル不覺人ハ無テコソヨケレトテ、清正以下ニ牒シ合セテ、所々ノ城々皆焼拂テ、心靜ニ歸帆シケレドモ、敵ハ倭軍ノ勇力ニ恐ヲナシ、慕フ事モナカリケリ、其年ノ晩秋ヨリ初冬ニカケテ、朝鮮在陣ノ諸勢皆筑前ノ博多ニ着岸セリ、一慶長五年庚子、石田治部少輔三成謀叛シテ天下ノ權柄ヲ執ントス、毛利輝元彼ニ一味シ給フニ依テ、西國ニテ味方タル人々ヲ催サル、九州ニテハ久留米ノ秀包立花宗茂人數ヲ卒シ早々上洛アルベシト觸ラレケリ、宗茂公秀包ニ談合シ玉フハ、秀賴公御幼稚ナレバ加様ノ御計ヒハ思ヒカケヌ處ナリ、必定是ハ石田三成ガ謀計ナル事疑ナシトイヘドモ、輝元ヨリ仰越ル、處ナレバ、可レ及ニ異儀ニ處ニ非ズ、先藝州ニ

至テ子細ヲ申述ントテ、秀包ト打ツレ人數ヲ引テ上リ玉フ、既ニ藝州ニ至テ、輝元ニ參會シ、秀包申サル、ハ、今度秀賴公人數ヲ向ラレ、内府家康ヲ御追討アルニ依テ、當家ヨリモ御人數ヲ上サレヌ、我々ナドモ可ニ罷上ノ旨承リ候處ナリ、因レ之某等愚案ヲ廻シ候ニ、秀賴公御幼君ノ御事ナレバ、此御企不レ可有レ之、石田治部少輔御名ヲカリテ謀計仕ル所疑ナシ、然レバ石田思ノマ、ニ軍ニ勝テ日本ノ權柄ヲ執ニ於テハ、御當家其下知ニ從ヒ給ハン事以ノ外ノ家瑾ナルベシ、某等モ三成ガ下ニ跪ンコト無念ノ至ト存候、抑當家ハ家康公ト肩ヲ並ル御家トハ云ナガラ、大閤御在世ノ時ヨリ家康ハ上首ナリ、其上秀賴公ノ外祖ノ分ナレバ、大閤ニ等ク世以テ存ル所ナリ、家康公ノ御下知ニ從ヒ給フトテモ家瑾トハ難レ申ト存ルナリ、唯々當家モ内府モ御一味アリテ、西國ヲ鎮メ玉ヒ、東西一致シテ石田ノ逆徒ヲ亡シ給ハバ、大亂ニモ成中間鋪、御家モ永久ニ榮サセ玉フベシ、御同意アラシニ於テハ、使ヲ内府ヘ遣サルベシ、左アルニ於テハ、立花ニテモ御使ニ罷越ベシト申玉フ、輝元聞玉テ、某大閤ノ厚恩ニ依テ數

箇ノ大國ヲ前々ノ如ク領シヌレバ、今秀賴ニ對シ
弓ヲ可レ引道ニ非ズ、其上石田ニモ誓約ヲ以テ申合
スル處アレバ、武將タル者何ゾ言ヲ食テ違變ニハ
及ベキ、此義ニ於テハ何ト有テモ難レ成ニ改變ニトゾ
宣ヒケル、其時宗茂宣フハ、重テ申所恐入テ候ヘド
モ、爰ニ御思案ノ不足處有レ之ト存候、其子細ハ、内
府ト申ハ日本無雙ノ大將、殊ニ軍ニ功者ナル事並
ベテ云ベキ人ナシ、是ニ仕ル諸臣皆々一騎當千ト
謂ツベシ、扱又同意與力ノ大小名皆以テ當代ノ良
將ナリ、石田ト云ハ隠レナキ柔弱表裏ノ大將ナレ
バ、往々思ツク、人不可有之、相從フ大小名ハ皆々
臆病不覺ノ人々ナレバ、軍トナラバ必定石田ハ負
タルベシ、夫ニ御一味アラバ、假令當家ノ人々猛威
ヲ振フトイヘドモ、外ノ大將柔弱タラバ何トシテ
勝利ヲ得玉ハンヤ、枉テ關東御一味アラン事可
レ然ト申給フ處ニ、輝元重テ返答ニハ、軍ハ時ノ運
ニヨル事ナレバ、必シモ強弱ヲ以テタクラベ難シ、
武士タル者ハ一言ノ契約ヲ不レ變ヲ以テ義トス、何
ゾ今更約ヲ變ジテ人ヲタブラカス事ヲセンヤト宣
ヒケリ、此日埒モアカザリケレバ、翌日暇乞トシテ

對面ノ時、秀包又申サル、ハ、昨日仰ヲ承テ候ヘド
モ、又々申上ル所ナリ、石田ニ御契約ノ事違變難
レ成トアルハ、至極ノ道理ト申ナガラ、凡武道ハ可
レ勝所ヲ取、不レ勝處ヲ捨ル、是ヲ兵道ト申スト承
候、可レ負所ヲ見ナガラ夫ニ與シ玉ハンハ兵道ニ非
ズト存候、其時宗茂申給フハ、秀包ノ申サル、處當
然ノ理ト存候、猶々御思案アラレ候ヘカシ、ト様々
詞ヲ盡サレケレドモ、竟ニ同意マシマサズ、唯疾々
上ラレ候ヘ、某モ追付罷上ルナリト有ケレバ、此上
ハ力不レ及トテ宗茂公秀包ト打ツレ上リ給フ、

一宗茂公秀包上着アレバ、頓而輝元モ上リ給フ、斯テ
後宗茂ハ時分ヲ見計ヒ、濃州ニ向ヒ玉フベシ、其間
ハ勢田ノ城ニ在城アルベシトテ、大坂ヲ打立勢田
ノ城ニ入玉フ、大津ノ城ハ京極宰相高次在城ナル
ガ、内府關東御下向ノ御供ノ名代トシテ、家老ノ山
田大炊介ヲ指下シ、高次ハ大津ノ城ヲ堅メテマシ
マス處ニ、伏見ノ城丹後ノ城ヲ攻ルト聞テ思案セ
ラレケルハ、此城ハ地ノ利惡ク遂ニ籠城難レ成、其
上人數關東ニ指下シテ、當城小勢ナレバ中々籠城
ハ叶フマジト、諸卒トモニ進心ナケレバ、一旦ノ計

策ヲ可レ用處ナリト思ヒ、三成ニ一味シ濃州ニ赴カル、彼地ニ於テ世上ノ様子ヲ見計ヒ、九月朔日引返シ、其身ハ前原ヨリ船ニテ湖水ヲ渡リ、大津ノ城ニ歸入シ玉フ、總軍二千餘騎夜モスガラ陸ヲ打テ城ニ取入、大津ノ町ヲ地燒シテ、東西ノ海道ニ柵ヲフリ、逆茂木引カケテ往來ヲ止メケリ、宗茂公是ヲ聞給テ、勢田ヨリ山越ニ飛脚ヲ立テ、大坂輝元ヘ注進シ玉フハ、京極宰相大津ノ城ニ歸入シテ籠城セラル、近邊ノ事ニテ候ヘバ是ニ向ヒ候ハンヤ、又濃州ニ罷越候ハンヤ如何ト尋玉フ處ニ、唯大津ニ向ヒ給フベキ由輝元ヨリ返答アルニ依テ、即チ人數ヲ卒シ栗津ノ柵逆茂木ヲ引ノケ、所々ノ番人ヲ追散シ、大津ノ攻口ニ押寄玉フ、此城ノ寄手ニハ、伊藤民部大輔、久留米侍從秀包、柳川豐前守、筑紫上野介、南條中務、石川掃部、増田ガ名代作左衛門、高田小左衛門、吉川元安、其外秀頼公ノ弓鐵炮ノ殿ナリ、伏見大津ハ海道ノ咽喉ニシテ、往還ノ樞要ナレバ、急ギ攻平ゲテ道ヲ開クベシトテ、築山ヲツキ井樓ヲアゲテ、大筒ヲ以テ夜日ノサカヒモナク攻タリケリ、又高觀音山ヨリ大筒ヲ以テ緊ク打

懸ケレバ、矢倉モ所々打破レ塀ハ籠ノ目ノ如クニ成テ拒ギ兼テゾ見エニケル、九月十三日ニハ諸手一同ニ攻カ、ル、宗茂公ハ人ニ後レヌ氣性ナレバ、一番ニ詰寄諸軍ヲ勵シ給フ所ニ、由布大炊介中江新八先登ヲ爭ヒ眞先ニ攻入、ヨキ敵ニ遇テ分捕ス、相續ク兵ニハ、立花五右衛門、内田監物、由布平兵衛、谷田喜右衛門坏攻入テ、敵ヲ一方ニ追縮メ、マクリ立テ、散々ニ戰ケルガ、武勇ヲ飽迄振テ討死ス、其外伊藤角兵衛、太田小兵衛、足達彌六、小玉市介、大橋才藏、安部半七ナド劣ジト攻入テ、皆其場ヲ不レ去討死ス、斯テ諸軍モ相續テ攻入バ、城中防グ手立ヲ失ヒ、三ノ丸ハ攻敗ラレ、二ノ丸ヘ引入テ、息ヲツカセズ押詰タリ、係ル所ニ、高野山ノ木食與山上人扱ヒニ取詰ヒ、様々手ヲ盡サル、ニ依テ、其事相調ヒ、同十五日ニ高次卿剃髮染衣ノ姿ト成テ下城シ、三井寺ニ入玉フ、宗茂是ヲ受取、人質トシテ臼杵新助後稱立花三郎右衛門ヲ被ニ指副、高野山ヘ送リ玉ヒケリ、斯テ宗茂公城ヲ預、本丸ニ入玉フ處ニ、十六日ニ昨日關ガ原ニテ東西ヲケ目ノ合戰アリテ、石田三成敗北スト聞ヘケレバ、如何ナル事ゾ

慥ニ聞届ケヨト宣フ處ニ、同ジ夜ニ入佐和山ノ城ヲ攻ルノ由到來アリ、宗茂宣フハ、扱ハ關ガ原ノ事實正タルベシ、爰ハ覺語アル處ゾトノ玉フ處ニ、人入申ヤウ、佐和山ノ方ニ當テ天ノ色赤ク見エ候、城ヲ焼火ノ手ニテヤ候ラント云モアヘス、彼城今日落居スト告來レバ、十七日ノ早天ニ、大津ノ城ヲ引拂テ、手勢三千ヲ引具シ給ヒ、京都ニ上リ三條寺町ニ人數ヲ立、木下肥後守ニ使ヲ以テ申玉フハ、濃州關ガ原ニテ治部少輔敗北ノ由也、殊ニ彼居城佐和山モ落城ノ由承ルニ付テ、大津ノ城ヲ引拂ヒ只今罷上リ候、此上ハ定テ大坂御籠城タルベシ、然ラバ御同道申シ某モ御城ニ入候ハント存ル故、以レ使申談ズル所ナリト云遣シ給ヘバ、肥後守以外周章ノ跡ニ見エタリ、返答ニ申サル、ハ大津ヨリ御歸陣ノ次デトシテ是迄ノ御使、其上大坂ニ御籠アルベキノ由、最ノ御事ナリ、其事ハ爰許諸事カタツケ、罷下ル分ニ議定ヲ究メ候ハ、後日ニ可ニ罷下一候トゾ返事セラレケル、此肥後守事ハ金吾中納言ノ實父ニテ、大関北ノ政所ノ舍弟ナルニ依テ、北ノ政所ト一所ニ大炊御門ノ屋敷ニ在テ、京都ヲ護セラル、ノ仕

置也、宗茂公上洛ニ依テ、京都其邊ノ人々聞定タル事ハ無レドモ、不レ斜騷動スルノ處ニ、北政所此使ヲ聞玉ヒ、以ノ外ニ仰天マシ、カチハダシノ跡ニテ禁中ヘ逃コモリ玉ヘバ、夫ヨリ京中騷立テ、目モアテラレヌ有様ナリ、肥後守ハ宗茂公ノ使ヲ聞テ、關東一味ノ改變トヤ思ハレケン、弓ヨ鐵炮ヨ、表裏ノ門内用心、馬ヨ人ヨトヒシメキ騷グ事大形ナラズ、カ、ル故ニ、使ノ往返殊外ニ時刻推移リケリ、宗茂公宣フハ、サゾアラント兼テ思設ナリ、手モト計ヲ見テ先ノ考ナク、今更ウロタヘ廻ル事ノ口惜サヨトゾ咲ヒ給ヒケル、夫ヨリ大坂ニ赴キ給フガ、彼地ニ至リ天満橋ニ人數ヲ立テ、輝元増田ヘ使ヲ以テ申シ給フハ、關ガ原ノ様子承リ候付テ、定テ御當地御籠城タルベキト存、大津ヲ引拂ヒ是迄歸陣仕候、御籠城ニ於テハ持口一所承ハラント存候間、御返答ヲ承リ、入城可レ仕候ト申送り玉ヘバ、兩人ノ返答ニ、評議ヲ究メ是ヨリ可ニ申入トノ返事也、宗茂公アザ咲テ、サゾ有ントコソ兼テ思ヒツレ、輝元定テ思ヒ當リ玉ヒツラン今評議センナド、ハ殊外ナル遲智慧カナ、連モ成マジキ事ナレ

バ道廣キ中ニ歸城シテ、本國ニテ兎モ角モ成ベシトテ、同十八日ニ大坂ヲ出船シ玉ヒケリ、宗茂公ノ御母公宋雲院殿ハ、大閤ノ御時ヨリ人質トシテ大坂ニ御座アリケルヲ、奪取テ御同道アラントシ給フ所ニ、犬子嶋ノ關所ニテ是ヲ留ントス、宗茂公大

ニ怒リテ、サル番人等一々踏殺シ急ギ下レト宣フ程コソアレ、面々カケ向テ關所ノ奴原追散シ、上下一人モ無_レ恙テ船ニ取乗押出ス、折シモ順風心ニ任セ走リ行程ニ、廿一日筑前國若松ニ着船アリ、夫ヨリ陸ヲ打テ廿三日梁川ノ城ニ歸入マシ_レケリ、一宗茂公ハ樫川歸城ノ日ヨリ、シカト籠城ノ用意シ、世間ノ様ヲ聞召處ニ、鍋嶋加賀守當城ヘ取懸ラルルト風説アリ、宗茂公宣フハ、信濃守ハ濃州ヨリ逃下テ歸城スト聞エタリ、然ラバ此方ヘ一味シテ籠城ヲ計略アルベキ處ニ、却テ加賀守此城ヲ攻メントハ、推量スル所ハ、宗茂ヲ敵ニシテ此城ヲ攻、其功ヲ云立ニシテ、内府ニ追從シ、信濃ガ罪科ヲ遁レント思フナルベシ、肥後ノ主計頭、豊前ノ如水モ、今ハ宗茂ヲ敵ゾト思フベキ、其内ニ主計ハ極メテ律義ナル者ナレバ、朝鮮以來ノ事ヨモ忘却セジ、ヨシ

ヨシ誰ニテモアレ、當城 向ハン敵ヲ相手ニシテ、イサギヨク討死スルヨリ外ハアルマジト、家中ノ物頭ドモニ語リ給ヘバ、次第々々ニ聞傳ヘ、家中ノ上下一圖ニ思ヒ窮メテ、敵ノ向ヲ相待テ、義ヲ金石ヨリモ確クセリ、

一十月十八日、所々ニ出シ置タル打廻リノ者馳歸リテ申ヤウ、肥前ノ軍勢田代表ヨリ押出スヨシ申ケレバ、十九日ノ早天ニ、立花吉右衛門様子ヲ見テ參ルベシト被_レ仰付_ル、ニ依テ、吉右衛門組半分ハ城ニ殘シ置、小勢ニテ榎木津迄打出テ見ルニ、早肥前ノ先手見エ來ルニ依テ、足輕ヲカケテオ引見ル、先手ノ足輕少々追崩シケレドモ、指テ合戦ニ取結ブ躰モナケレバ、備ヲ立テ守リ合戦中ニ此由注進申上ニケリ、宗茂公聞召、サラバ人數ヲ出シ手合ノ様子ヲ試ムベシトテ、安東五郎右衛門ヲ先手トシテ、石松安兵衛、立花三太夫、小野和泉、立花右衛門太夫ヲ立備ニシ、江上表ヘ指出サル、都合其勢一千餘騎、十九日ノ申ノ刻ニ、江上ニ至テ敵ノ様躰ヲ見ルニ、其日モ晩ニ及ビタル故ニヤ、備ヲ堅シテ働カズ、安東敵ノ備近ク打ヨセ、鐵炮少々放サセケレ

ドモ、敵騒グ躰ニハ見エナガラ、堀ヲ前ニ當テ備ヲ立、取アハヌ様子ナリ、兎角スル内ニ、短日ナレバ暮カ、ルニ依テ、夜軍ノ場ニ非ズトテ、小野和泉下知シテ、先キノ人數ヲ引取ケリ、明ル廿日ノ日ノ出ニ、安東五郎右衛門石松安兵衛二手ノ人數ヲ以テ押懸リ、合戦ヲ始メ、火出ル計戦ヒケルガ、敵ノ二備ハ忽ニ斬崩サレテ亂レ引ヲ、安東石松息ヲモツガセズ追討ス、餘リニ深々ト働キケレバ、敵ノ大勢跡ヲ取切リ、安東石松ハ討死ス、千手六之丞ハ大勢ヲ打破リ、這々引テ歸リケリ、是ヲ見テ立花三太夫一文字ニ突カ、リテ、敵ノ三備ヲ立足モナク切崩シ、是モ深入シテ討死ス、小野和泉モ同時ニ打テ懸ケルガ、脇ニ廻リタル敵横矢散々ニ射カケラレ、和泉ガ勢ハ半ヲ過テ此矢ニ射フセラル、サレドモ面モフラズ切テカ、レバ、玆ニ向ヒタル敵ノ一備忽ニ切崩サレ、跡ニ備アリシ立花右衛門太夫モ同時ニ押出シ切崩シケルガ、三太夫ガ討死セシニ依テ、敵色ヲ直シ此一備取テ返シ、右衛門太夫ガ手ニ押懸リ、散々ニ戦ケル、角テ和泉ハ深手ニ箇所ニ負、人數ハ殘リスクナクニ討セケレドモ、鏑場モ不レ去此儘爰

ニテ討死ト思ヒケル處、右衛門太夫親子ニテ、横矢ノ敵ヲ三町計追退、爰ヲ先途ト戦ケルガ、多勢ニ無勢叶フベキ様アラザレバ、右衛門太夫ハ親子トモニ討レタリ、新田平右衛門是ヲ見、一人イラツテ駆付ケルガ、連ノ盡ル所ハ流矢ニ當リテ失ニケリ、凡敵ノ勢ハ一萬餘騎ヲ十二備ニ立タルヲ、九備ハ切崩ストイヘドモ、小勢ノ味方ナレバ終ニ叶フベシトモ見エザリケリ、サレドモ和泉ハ深手ナレバ、働ク躰モナカリケレドモ、猶モ其場ヲ不レ去シテ踏留タル處ニ、立花吉右衛門驅來テ押懸ケレバ、敵崩レテ引ケル故、其時和泉ハ蒲池ヲサシテ引退ケリ、此吉右衛門ハ、昨日十九日ノ朝ハ榎木津ニ出張セシ所ニ、黒田如 waters 水田口ヨリ押向ハル、ト沙汰シケレバ、水田口ノ手當ニ向フベシトノ御下知ニ依テ、彼地ニ至リ向フトイヘドモ、如水ノ人數ハ見エザリケル所ニ、江上ノ合戦ノヤウヲ聞ントテ、外聞ノ者ヲ二人江上ニツケ置處ニ、カノ者走リ來リテ申ヤウ、江上ニハ合戦アリテ、安東ドノ石松ドノ討レ給フト申ケレバ、偕ハ此口ハ別儀モナシトテ、一騎ガケニ江上ニ駆ユキ、江上村ノ地ハヅレヨリ押

出シテ見レバ、味方ハマバラニ見エテ、敵ハ大勢シ
タロウテ押カ、ルニ行カ、リケリ、阿部彌吉、寒田
忠右衛門、二人ハ立花吉右衛門ノ與力ナリ、眞先ニ鎗ヲ合攻戰フ、カ
カル所ニ後レバセナル人數加ハリケルヲ、敵是ヲ
見テ不_レ叶トヤ思ヒケン、崩立テ引退ヲ、吉右衛門
サイヲ揚テ味方ヲ勵シ、五町計追討ス、斯テ押懸戰
フベカリケレドモ、繼ク味方ハナシ、殊ニ小勢ノ勞
兵ナレバ、今ハ此競ヲ不_レ醒引取レトテ、靜々ト引
ニケル、カ、ル所ニ宗茂公江上ノ合戰心元ナク思
召ケレバ、十時源兵衛ニ見テ參レト被仰、十時承リ
只一騎手ノ者計召具シ江上ニ行向フ處ニ、和泉ガ
引退ニ行逢タリ、和泉申ヤウ、カク深手ヲ負テ候ヘ
バ、蒲池ヲ指テ引退候、吉右衛門一人殘リタレバ、
某ガ人數ヲ具シテ行合ヘト申ニ依テ、十時夫ヨリ
急行所ニ、吉右衛門ガ引テ歸ルニ行逢テ申ヤウ、是
ヨリ引返シ今一鍵仕ラント云ケレバ、吉右衛門返
答ニ、某水田ヨリ急來テ弓鐵炮ノ者ツバカズ、其方
ニモ弓鐵炮ナケレバ、敵備ヲ立堅メタル所ニカ、
リ難シ、アレ見給ヘ敵ハ堀ヲ隔テ備ヘ、弓鐵炮透間
モナク構タリ、如_レ此ナレバ鍵ハ難_レ入シ、イサセ給

ヘトテ城中ニ引入ケリ、
一鍋嶋ハ明日必城下ニ攻寄ント用意シケル處ニ、加
藤清正ヨリ申サル、ハ、立花事某扱ニ取組候ノ間、
合戰ハ止ラルベシトアレバ、其後ハ備ヲ立テ合戰
ノ事ニ及バザリケリ、加藤清正ハ肥後ノ宇土城ヲ
請取、ソレヨリ直ニ筑後ニ向ヒ玉フガ、庄林隼人ニ
宣フハ、我筑後ニ向フ事全ク立花ヲ攻ント思フニ
非ズ、先年朝鮮ニテ蔚山ニ有シ時、後卷セラレシ一
禮ヲ此度申述ント思フ處ナリ、然レバ人數ハ召具
スルニ不_レ及、汝ハ爰許ノ人數ヲ引具シ熊本ニ歸陣
スベシ、我ハ手廻リ計ニテ向ントテ、雜兵トモニ一
千餘ニテ、十月十八日井手ノ橋迄押詰、宗茂公ヘ使
ヲ以テ申玉フハ、御邊今度不慮ノ仕合ニテ御籠城
ニ及候、定テ有無ヲ此度ト相極メラル、御存分タ
ルベシ、清正爰ヲ思案シ候ニ、御武勇ニ於テハ朝鮮
以來存知ノ事ニテ候ヘバ、御人數ニ至ルマデモ此
節一人モ活殘ントハ思ヒ候マジ、然レバ度々ノ戰
場ニ忠節ヲ勵シ候者ドモヲ、ムダ_{サカ}ト御殺シア
ランハ本意ナキ事ト存候、時節到來トハ申ナガラ、
餘リ殘多キ事ドモナリ、此度理ヲ非ニ枉テ城ヲ開

キ渡サレバ、御家中ノ面々ハ、本知相違ナク我等預
リ召抱置候ベシ、又御邊ノ御事ハ、暫ク肥後ニ御越
アツテ、御休息ト思召御在滯有^レ之バ、内府ノ御前
ノ事ハ、某涯分^{（イ）}ヲツクシ申宥メ、今度御味方ニ參候
勸賞ニ申カエテ、歸參ノ御事ヲ冀ヒ可^レ申所存ナリ、
家中ノ侍ヲ始メ雜兵ニ至ルマデノ一命ヲ繫レン
ハ、仁政ノ本意タルベシ、此儀ヲ御納得アリテ、某ノ
手ヘ御下城アランニ於テハ、本懷タルベシト理ヲ
盡シテ申越レケリ、宗茂公聞召テ返答ニ宣フハ、御
懇志ノ御使祝着申處ナリ、如^レ仰諸人ノ一命ヲ助ル
ニハ、城主切腹シテモ人ヲ助ルヲ以テ武將ノ大法
トス、然レドモ大友義統ノ如ク見苦シク因ト成テ
先祖ノ面ヲ汚サン事其所存ニ不^レ叶所也、御邊ヨリ
被^ニ仰越^ニ事ニテ候ヘバ、僞有^レ之ベシトハ存候ハチ
ドモ、此義ヲ慥ニ承届ケ候ニ於テハ、城ヲ渡シ諸人
ノ命ヲ助ケ申サント存ジ、重テ御返答ヲ承ン爲ニ、
一人相添指出シ候トテ、大林善長ヲ使ニ添テ出シ
玉フ、清正是ヲ聞、最某云後レタリトテ、善長ニ對
面シ、宗茂ノ所存最至極セリ、申後レテ面目ナク
候此段ハ能々申テ給ルベシ、何シニ宗茂ヲスカシ

生捕テ高名ニセンナド、ハ、此清正ニ於テハ八幡
大菩薩モ照覽アレ、思ヒモヨラス事ドモナリ、サル
ニ依テ、御使ニ誓紙ヲ副テ參ラセ候、此上ハ唯々御
下城ノ事冀フ所ナリト申給ヒテ、使ニ書狀ヲ副テ
歸サレケリ、善長歸テ清正ノ様子別儀アルマジキ
見計ヒヲ委細ニ申述ケレバ、宗茂公ハ納得マシマ
シテ、人數ハ城ニ籠置手廻リ計ニテ清正ノ陣所ニ
入玉ヘバ、清正ノ喜ビ譬ヲ取ニ物ナクゾ見エニケ
ル、係ル折節清正ノ陣所ニ馬ヲ取放シ是ヲ捕フル
トテ、彼方此方ト追廻レバ陣々夥敷騷ギケリ、是ヲ
誰人カ城中ニ告タリケン、城中ノ人々スハヤ大事
出來ストテ、打テ出ントヒシメキケル、清正ハス、
ドキ大將ナレバ、此騷ギヲ聞トヒトシク、宗茂公ヘ
宣ヒケルハ、只今馬ヲ取放シ是ヲ捕ヘ候トテ、陣中
騷敷候是ヲ城中ニ聞候ハ、人々不審ヲナシ騷グニ
テ候ラン、急ギ召連ラレシ人ヲ一人城中ヘ遣シ靜
メ玉ヘトアリケレバ、宗茂公最ニ候トテ、走リノ
者ヲ城中ニヤリ給ヘバ、城中ノ人々、ハヤ大手ノ門
ニサシカ、リ打テ出ントスル所ニ、此使行逢ケレ
バ、偕ハ子細ナシト安堵シテ靜リケリ、清正ノ陣モ

馬モ捕ヘテ靜リケレバ、宗茂公サスガ清正ハ物馴玉ヘル事哉ト殊外ニ感ジ給ヒケリ、斯テ清正ハ饗應様々取ツクロヒ一獻ヲス、メ、昔今ノ御物語アリテ、興ヲ催シ給ヒケリ、城ヲバ加藤美作請取ケルガ、城中ノ諸侍ニ申ケルハ、各妻子資財雜具ニ至ルマデ、如何ニモ心靜ニ御仕舞アリテ、近所ニ假ニ移リ給ハントモ、又直ニ肥後ニ御越アラントモ、心次第ニシ給フベシ、清正懇ニ申付ラレテ候ヘバ、聊疎略ヲ不レ存候、又何事ニテモ相談ノ事有レ之ニ於テハ承リ候ハントアリケレバ、諸侍ヨリ下々ニ至ル迄、辱キ事ナリトテ、心靜ニ取マカナヒ、近郷ニ移リケリ、扱美作ハ城ニ入テ相守ル、鍋嶋ノ人數ハ心モ起ラヌ合戰シ、散々ニ追立ラレ、負ハ負テアリケレドモ、大勢ノ事ナレバ、其日ノ合戰ニハ勝ホコリタル氣色シテ、佐賀ヲ指テ引入ケリ、梁川ノ諸侍大津ノ城ニテ究竟ノ者ドモ餘多討死シ、其外手ヲ負ヌ者モナク、又大坂ニテモ少々手ヲ負億タル諸卒ナレバ、此度肥前ノ奴原ヲスナリニ歸シツル事ノ口惜サヨトゾツブヤキケル、又其比世上ニ沙汰シケルハ、鍋嶋一萬ノ人數ヲ引テ、江上ニ出張シ十二

備ニ立タルヲ、梁川勢僅一千餘騎十分ノ一ノ勢ヲ以テ、敵ノ九備ヲ切崩シヌ、先手ノ大將討死シ、取捨タル旗ヲ拾ヒ取テ以後ノ證據トノ、シリ、鍋嶋ノ家ノ紋ニ定メタルハ、取テ手柄ナラズ、取ラレテハ高名ナリト心アル人ハ申ケリ、

一宗茂公肥後ニ至テ高瀬ト云所ニ御座アリケルガ、清正ノ馳走ハ中々言葉ニモ難レ述、家中ノ諸侍肥後ニ移ルハ百騎計、皆々先知相違ナク充行ハレテ棲付ケリ、其餘ハ他國ニ行モアリ、又ハ民間ニ閑ヲ求テ隱逸ノ士トナルモアリ、思ヒ／＼ニカタ付ケリ、斯テ宗茂公翌年ノ春迄肥後ニテ過シ給ヒケルガ、清正ニ宣ケルハ、此間御芳志ニ依テ心靜ニ休息シ満足此上モ候ハズ、然レドモ某暇アル遊人ニテ候ヘバ、都ノ方ヘ立越、名所舊跡見物セント存ルハ、如何トアリケレバ、清正、最ノ仰也、御心ニ任セ候處清正ガ馳走ノ一ツナルベシトテ、旅行ノ事ドモ懇ニ取マカナヒ、都ヘ上セ給ヒケリ、宗茂公ハ京都南都和泉ノ境心靜ニ遊覽アリテ、三トセノ春ヲ送り玉フガ、江戸ノ方床敷思召レ、慶長八年ノ秋ノ比、江戸ヘ赴キ給ヒ、高田ノ寶祥寺ニ忍ビテ御座ア

ル處ニ、舊識ノ大名小名聞付訪尋アリ、後々ハ忍ビ給フ躰ニモアラズ、諸大名ノ馳走ニ逢給ヒテ、彼方此方トアル處ニ、土居大炊頭取持玉ヒテ、大御所ノ上聞ニ達シ玉ヒケリ、其時上意ニハ、立花ハ先年關ガ原ノ刻石田ニ組シ候事、心ヨリ出タル處ニアラズ、小早川秀包ト共ニ輝元ニ色々異見ヲ加ルトイヘドモ、輝元同意ナケレバ不_レ及_レ力、大津ノ寄手ニ加リタル事、立花ニ於テハ無_レ爲方ニ仕合ナリ、其砌ヨリ此由ヲ聞開クニ依テ、重テ身躰ノ事可_レ令_ニ相談ト申シ聞セ訖ヌ、今更不_レ及_ニ異儀トアリテ、即被_ニ召出、奥州棚倉ニ於テ堪忍分トシテ一萬石ヲ被_ニ仰付_一ケリ、宗茂公宣フハ、今一萬石被_ニ仰付_一事努々満足トハ思ヒ給ハズトイヘドモ、先年輝元へ諫言申タル旨趣上聞ニ達シタル事、何ヨリノ本懷不_レ過_レ之トテ悦ビ給フ事無_レ限、其後台德院殿御前極メテ宜敷、御伽衆ニ召加ヘラレ、御譜第ノ人々ニ不_レ異、是ヲ如何ト云ニ、宗茂公ハ生得ノ氣風正直ヲ宗トシテ、時メク人ニ諂ヒ給フ事モナク、武家ノ古風ヲ失ヒ給ハザレバ、大樹器量アル人ト思召レケリ、殊更往昔度々ノ高名ヲ賞美不_レ淺思召ル、ニ

依テ如_レ此ナリト世以テ申觸シケリ、此故ニ慶長十八元和元大坂ノ兩度ノ御陣ニ、大樹御旗本ニ伺候シ軍事ヲ被_ニ仰出_一ル、毎ニ、軍理ノ樞要ヲ申上給ヘバ、毎度御氣色快然タリ、大坂落居シ御歸陣ノ後、立花ハ少身ニテ召仕ノ人不足タルベシ、人ヲ召抱ヨト仰アリテ、一萬五千五百石ノ所ヲ加増シ賜リ、其後元和七年梁川ノ本知十一萬餘石ヲ返シ下サル、去ヌル慶長五年ニ宗茂公梁川ニ城ヲ避給ヒテ、田中兵部大輔吉政ニ、關ガ原ノ時御味方ニテ武勇拔群ナレバ、其勸賞トシテ充行ハレ、久留米ノ城モ相加ヘテ、其領知三十二萬餘石ナリ、子息筑後守忠政相續タリシガ、元和七年早世アリテ、其世繼ナク其家斷絶ニ及ビケレバ、城地ヲ被_ニ召上_一立花本領ナレバトテ返シ付給テ歸國シ玉フ、又棚倉ノ上リ地ヲバ、丹羽五郎左衛門長重關ガ原ノ時石田ニ方人シテ流浪セラレタルヲ召出サレ五萬石ヲ充行ハレテ此地ニ入部シ玉ヒ、新ニ城ヲ築テ城地トナサレケリ、今年宗茂公五十四歳ニテ、梁川ノ本領ニ歸國アリケリ、◎以上説
關本中卷

一 同八年、嫡子千熊九十一歳ナルヲ、大樹秀忠公ノ御

前ニ於テ元服セシメ、御諱ノ一字ヲ下シ賜リ忠茂ト號、左近將監ニ任ジ給テ、御劔、左文字、一腰拜領アリ、又宗茂公ハ飛驒守ニ改メ給ヒケリ、宗茂公内ニ忠信有テ外ニ武備ヲ懈リ給ハヌ、陰德積累シテ陽報既ニ彰レケリ、老後ニ至リテカ、ル榮幸ヲ見玉フ事人ノ競望スル處コ、ニアリ、

一同十二年、江戸御城惣構ノ石垣築セラル、ニ依テ、西國方ノ大小名ニ被ニ仰付、雄子橋ヨリ内藤左馬前マデ也、大岡兵藏屋敷ノ前ヨリ、赤坂溜池ノキハ迄、堀ヲバ東國方ノ大小名被レ承レ之、唯今一統ノ治世トナレバ、武事ニ於テハ、御奉公ト云事會テ無レ之、加樣ノ普請ヲ以テ亂世ノ武事ニ准ズル、御奉公ノ第一ナリトテ、大小名ノカタゞ、精力ヲ被レ出ル、事大方ナラズ、宗茂本領安堵ノ後加樣ノ御奉公ヲ務ル處本懷ナリト思召シ、奉行ヲ撰ミ、海老名平馬允佐田清兵衛ニ被レ定テ、惣中ニ抽デ速功ヲナスベシトアリケレバ、兩人怠ラズ精力ヲ竭ス事、當前ヨリモ辛苦セリ、理リ哉、此度諸國ノ奉行惣計九百九人ノ内ニ立交リテ事ヲナセバ、尋常ニテハ難レ叶トゾ見エケル、宗茂公モ日々町場ヲ歴覽アリテ怠リ玉フ事モナシ、此町場ノ坪數ヲ知行役

高ニ割付スレバ、一萬石ニ付テハ、貳拾八坪八歩ノワリナリ、當家ノ役高モ大分ノ坪數ナレドモ、少ノ手ヅカユモナク、惣中ニ抽デ石垣見事ニ成就スレバ、大樹ノ御氣色快然タリ、

一同十四年ノ秋、肥前國嶋原ニ一揆蜂起シ、嶋原ノ領主松倉長門守ノ居城ヲ攻圍ム、又肥後國天草モ同時ニ一揆起リ、兩所ノ凶徒一同シ長崎ヲ攻伏テ一味セシメント計略ス、彼天草ハ寺澤兵庫ノ領地ナリ、兵庫頭在江戸ナレバ、留主ノ城代并ニ諸侍是ヲ靜メン爲ニ、大小ノ兵船四十餘艘ニ取乗テ、天草ニ押渡リ、本渡嶋子到ル處一揆是ヲ聞テ、長崎ヲバ暫ク闇テ、凶徒三千餘人小船ニ取乗、嶋子ニ取渡テ其不意ヲ討タリ、嶋子ニ向シ唐津ノ大將林又右衛門兄弟、一戰ニカケ負テ討死スレバ、軍勢暫モ不レ保敗北ス、一揆ハ夫ヨリ本渡ニ押懸、三宅藤兵衛ヲ追散ス、澤木七郎兵衛フミ止リ戰トイヘドモ、人數僅ニ五十餘人、鐵炮十挺、弓少々相交ヘテハ、可レ防ヤウアラズシテ、這々引テ富岡ノ城ニ籠リケリ、凶徒イヨ／＼勢ヒヲ増シ、富岡ノ城下ニ攻寄テ終日攻ルトイヘドモ、極メテ要害堅固ナレバ敗リ難シ、又

城中ニ鐵炮多ク放出スニ依テ手負死人ハ計リモ
ナク暮ニ及デ攻口ヲ引取ケリ、サレドモ陣ヲ堅シ
テ篝火燒テ夜ヲ明シ、翌日又攻カ、ル、如レ此スル
事三日ニ及ビ、城危ク見エ候ト、飛脚日々江戸ニ赴
言上ス、大樹御心ヲ腦サレ、西國ノ諸將御暇賜テ彼
地ニ馳向給ケリ、依レ之宗茂公ノ嫡男忠茂公ハ、十
一月十六日江戸ヲ御立有テ十二月六日梁川ニ着城
アリ、同七日梁川ヲ出陣アリテ、其夜肥前國三江ニ
着シ、彼地ノ様躰ヲ聞召處ニ、一揆ハ去ル三日原ノ
故城ヲ拵テ楯籠ヨシヲ聞給ヒ、同八日原ノ城下ニ
押詰玉フ、江戸ニハ一揆籠城ノ由聞召シ、大樹愈
御心元ナク思召シケレバ、宗茂ニ仰セ蒙ルハ、一揆
益強大ナルニ依テ諸大將皆指下サル、トイヘド
モ、近年治平ノ時代ナレバ事ニ逢タル人ナシ、宗茂
老躰苦勞ト思召ル、トイヘドモ、老功ナレバ指下
ルベキノ條、急ギ彼地ニ至テ若大將ニ下知ヲ加ヘ
ラル、ベシトアリケレバ、宗茂公ハ老後ノ面目此
上モアラズトテ、十二月十八日江戸ヲ立テ、急ガセ
玉トイヘドモ、寒風心ニ不レ任、翌年正月十日梁川
ニ着城アリ、同十一日人數ヲ押出シ、十二日ノ朝嶋

原ニ着玉フ、此時窄人ノ面々思ヒ〜ニ諸家ニ馳
付、ソノ中ニモ、宗茂公ノ御手ヲ頼母敷思ヒ馳集ル
人々百五十拾餘人ニ及ベリ、斯テ原ノ城大手ノ西ニ
當テ、上使松平伊豆守殿手先ニ攻口ヲ請取仕寄竹
束自餘ニ抽テ嚴重也、二月廿七日八日兩度ノ城攻
ニモ、衆ニ抽タル働ナルニ依テ、物頭ヲ始メ侍ヨリ
下々ニ至テ討死ノ者百九拾餘人、手負ハ三百六拾
餘人ナリ、始メ圍城ノ次第ヨリ、終リ落城ノ時ニ至
ル迄、首尾相應ノ軍タチ、サスガ老功ノ所業ナリト
世舉テ譽ヌ人ハナシ、

一同年ノ冬、家督ヲ忠茂公ニ譲リ隱居シ給ヒ、薙髮シ
テ立齋ト號シ玉フ、忠茂公ハ立花氏ノ元祖ヨリ十
一代ノ系譜ヲ繼玉ヒテ、器量先代ニ耻ル處モ無ケ
レバ、諸侍ハ云ニ不レ及、末々ノ土民町人ニ至ル迄、
悅ヲナス事限リナシ、抑立花ノ家ト云ハ、大友左近
將監能直ヨリ六代ノ後胤ヲ近江守貞宗ト云、此貞
宗ノ三男左近將監貞載ト云ヨリ、筑前國糟屋郡立
花山ノ城主トシテ、氏ヲ立花ト號セシヨリ始レリ、
此貞載建武四年正月十一日ノ京合戰ニ、尊氏公ニ
從テ粉骨ヲ盡シ、東洞院楊梅ノ辻ニテ結城太田判

官親光ト組デ捕メ首、其時深手ヲ被リ、同十三日終ニ空シク成給ヒケリ、家ヲツグベキ子ナクシテ、其弟宗匡ヲ家督ニ立テ、左近將監ト號シ立花氏ノ二代トス、其子參河守親直三代トス、丹後守親政四代トス、因幡守宗勝五代トス、兵庫頭鑑光六代トス、但馬守鑑載七代トス、左近將監親善八代トス、丹後守鑑連九代トス、左近將監宗茂マデハ、立花氏ノ元祖ヨリ十代ニ當レリ、然ルニ第九代ニ當リ給フ鑑連ハ戸次氏ナルヲ、立花氏ニ改メ玉フ謂レヲ尋ルニ、第七代但馬守鑑載ハ、大友ノ末葉ニテ、大友義鎮入道宗麟ニ對シテ逆意アルベキ道ナラストイヘドモ、宗麟ノ晩年ニ至テ惡逆無道ニオハシマスヲ疎ミ果テ、永祿八年ニ謀叛セラル、宗麟是ヲ鎮メシ爲ニ、大軍ヲ出シ立花ノ城ヲ攻ル事甚急ナルニ依テ、鑑載防グニ力ナクシテ、五月十八日自殺シテ城ハ落タリ、其時宗麟ヨリ鶴原掃部助由比民部ヲ此城ノ在番トス、同十二年ニ毛利元就大兵ヲ渡シ、吉川元春小早川隆景兩大將ヲ以テ此城ヲ攻ル、鶴原由比ハ小勢ヲ以テ此大兵ヲ防ギ難ク、扱ニ成テ下城シ豐後ニ歸リケレバ、吉川小早川ヨリ坂新五左衛

門桂能登浦兵部ヲ城代ニ入置テ、十月十五日吉川小早川勢ヲ引上歸國シタリ、宗麟ハ中國勢ヲ事故ナク引セタル事ヲ口惜ク思ヒ、臼杵越中守鑑速、吉弘左近太夫鑑理、戸次丹後守鑑連、三大將ヲ指向テ、此城ヲ攻シメ給ヘリ、毛利ノ城代此大兵ヲ防ニ手立ナク、降ヲ乞テ城ヲアケ渡シケレバ、戸次鑑連ヲ城代トシテ、宗依氏貞其外毛利家ニ一味ノ城々ヲ押エタリ、宗像大宮司氏貞ハ鑑連ノ兵權ニ勢ヒヲトラレ、手ヲサゲテ大友ニ和睦スレバ、其外ノ小城ハ云ニ不及皆大友ニ降レリ、依テ大友ヨリ戸次鑑連ニ此城ヲ賜リ、糟屋郡ニテ三千餘町ヲ領シ、宗像鞍手兩郡ニアラユル小給人皆鑑連ノ與力トナサシメ、瑯珂早良怡土志摩ノ郡々ノ小城ハ、皆立花ノ支城トス、斯テ元龜元年ニ豐後國南郡藤北庄鏡嶽ノ城ヲ避テ此立花ニ入城シ、立花鑑載其子左近將監親善ノ系譜ヲ繼テ、立花ト改姓アリ、立花丹後守鑑連入道々雪ト云是也、
一抑此戸次氏ト云ハ、大友能直ノ嫡男ヲ大炊介親秀トテ、鎮西ノ奉行タリ、其子賴泰ト云、賴泰ノ舍弟ヲ重秀ト云、此重秀戸次氏ノ元祖ナリ、戸次重秀ハ

赤橋相摸守重時ノ縁座ノ好ミヲ以テ、後四代頼時ニ至ルマデハ北條家ニ昵近シ、元服ノ時諱ノ字ヲ免サレ、敍ニ從五位下ニラレタリ、頼時ノ嫡男ハ右兵衛佐直冬ニ從テ元服シ、直ノ一字ヲ賜リ右馬助直光ト號ス、其後尊氏公ノ幕下ニ候シテ下野守頼秀ト改メ、從五位下ニ敍ラル、頼秀ヨリ數代相續イテ室町殿ニ奉仕シ玉フ、頼秀ヨリ六代ノ後胤、丹後守親貞入道玄心ハ、文龜元年ニ大内ト大友合戰ノ時、豊前國馬ヶ嶽ニ於テ七十三歳ニテ討死ス、其後家漸衰ヘ、豊後國鎧嶽ノ城ヲ取トメテ城主タリシガ、親貞ヨリ四代ノ後胤丹後守鑑連ニ至テ、武名九州ニ着ハレ、鎧嶽ノ城モ舊時ニ立歸ル處ニ、又立花ノ城主ニ移テ其武威益盛ナリ、氏ヲ立花ニ改メ給フトイヘドモ、元ハミナ大友ノ庶流同姓ノ門族ナリ、又宗茂公ノ實父高橋主膳鎮種ハ、吉弘左近太夫鑑理ノ次男ナルヲ、高橋三河守鑑種ノ養子トシテ、筑前三笠郡岩屋ニ入_レ也、此吉弘トイフモ元ハ大友ノ氏族ナリ、然レバ宗茂公ノ實父ニ付テモ、養父ニ付テモ、大友ノ末葉ナレバ、武具ヨリ衣服ニ至テ大友ノ家ノ装_{ホカ}蓉ノ紋ヲ用ヒ給フ、又此大友ノ上祖ヲ

尋ルニ、大織冠鎌足ヲ鼻祖トシ、淡海公不比等、房前、眞楯、内膳、冬嗣、良房、基經、忠平、師輔公ニ至テ十代ナリ、法興院關白兼家、御堂關白道長、大納言長家、權大納言忠家、中納言俊忠、大炊御門少納言光家、左衛門督光能、掃部頭齋院次官親能迄、上祖鎌足公ヨリ十八代ノ後胤也、十九代ニ當テ豊前守大友能直ハ、右大將源頼朝公ノ落胤ニテ、母ハ刀禰ノ四郎平經家ノ娘ナリ、齋院次官親能養子トシテ、諱ヲ能直ト號ス、建久六年豊前守ニ任ジ、同七年三月西國ニ下向マシマス時、母方ノ外祖四郎太夫平經家ノ號ヲ承繼テ、大友能直トゾ名乗給ヒケル、是西國ニ於テ大友氏ノ元祖トス、姓ハ養父親能ヲ承繼テ藤原ノ姓タリ、其嫡男親秀ヲ大友ノ二代トス、其子頼泰三代トス、頼泰ノ舍弟重秀大友ノ三代ニシテ、上祖ヨリ二十一代ニ當レリ、重秀ヨリ宗茂公ニ至テ十二代ニシテ、上祖鎌足公ヨリハ三十七代ニ當リ玉ヘリ、サレバ藤原ノ姓タルベキノ處ニ、能直ヨリ七代ノ後胤、式部丞泰氏舍弟氏時ハ、尊氏公鎮西ヘ御沒落ノ時御味方ニ參リ、忠節莫大ナルニ依テ、御養子ニ定メ給ヒ、御諱ノ一字ヲ賜ル

時、自筆ノ證文ヲ下シ玉フ、其書ニ曰、

新院の御氣色によりて御邊を相賴て鎮西發向候也、忠節他にことに候間、兄弟に

おゐては、猶子之儀にてあるべく候、謹言、

建武三

二月十五日

尊氏書判

大友千代松殿

是ノ時ヨリ源ニ改姓アリテ、大友末葉ノ一族ハ皆源ノ姓タリ、又大友ノ三姓ト云事アリ、能直ノ實父賴朝公ハ源ナリ、養父親能ハ藤原ナリ、大友經家ノ名字ヲ繼テ母方ノ姓ハ平也、是ヲ大友ノ三姓ト云リ、源氏ト云トモ、藤原ト云モ、其由來ナキニ非ズ、サレバ今年忠茂公ハ、立花ノ元祖ヨリ十一代、上祖鎌足公ヨリ三十八代ノ系圖ヲ受繼給フ事、目出度カリケル榮貴也、

一戸次モ立花モ大友ノ氏族ナレバ、家ノ紋ハ^{衣カ}蓑笠ヲ用ヒ來ノ所ニ、宗茂公ノ代ニ至テ、祇園守ヲ紋ニ用ヒ給フ、謂レハ、去ル慶長五年關ガ原一亂ノ時、毛利輝元ノ下知ニ依テ、石田三成ガ方人タル故ヲ以テ梁川ノ城取離レ流浪ノ客トナリ玉ヒシカドモ、關東一味ノ子細ヲ大樹ノ遠聞ニ達シケレバ、程ナ

ク召出サレ、東國ニ於テ堪忍ノ地ヲ下シ行ハレ、御旗本ニ伺候アリテ、暫ハ關東ノ住居タリ、元和七年正月ノ夜ノ夢ニ、老人祇園ノ蘇民將來ノ守ヲ手ニ持、是ヲ捧テ宗茂ニ向テ云ヤウ、御邊此守ヲ持テ本國ニ下リ給ヘト云ツ、宗茂公ノ手ニ渡スト見テ夢サメヌ、宗茂公思召ハ、今ノ夢ハイト不思議ナリ、我本國ノ祇園ノ社ニ深ク信ヲ取テアリシガ、サル故ニ天王加護ノ御告ニテヤ有ラン、夢ト云モノハ様々子細アリト云、其中ニ晝思フ事ヲ見ルハ常事也、此夢ハソレニモ非ズ、思ヒモカケス事ヲ見タルハ、瑞夢ト云モノニテヤ有ラント、其時バカリノアラマシニテ、何トナク打過給ヒケル處ニ、其春本知ヲ返シタマハリテ、其年本國ニ歸人アリケレバ、扱ハ有ツル夢ハ瑞夢ナリケリ、天王ノ御加護ノ有難サヨトテ、其後此等ヲ家ノ紋ニ定メ給ヒケリ、本國ノ午頭天王ト申ハ、筑後國瀬高ニ、祇園午頭天王ノ社アリ、昔ハ社頭殊外ナル大營ナリト見エツレドモ、遠境邊卑ノ事ナレバ、社頭大破ニ及デ淺間敷カリシヲ、宗茂公梁川入城ノ後、極メテ信仰ノ歩ミヲ運ビ給ヒ、再興ノ志ヲ發シ、本社ヨリ末社々々

瑞籬鳥居ニ至ルマデ、美麗ヲ盡テ建立シ給ヒ、毎年六月十四日ノ祭禮、十五日ノ猿樂ニ至ル迄、殘所ナク經營マシヽテ、神威ヲ輝シ玉フ事、昔時ニ百倍セリ、サレバ神ハ禰宜ガナラハシトカヤ、斯ナリテ後諸人ノ渴仰淺カラザレバ、ナドカ今納受ノ無ルベシ、第一ノ氏子ト思召テ、天王擁護ノ御眸ヲ廻サレケルカトゾ覺エケル、

一 大猷院殿ノ御代ニ替リテモ、宗茂公ハ前代ト等ク衆ニ抽デタル御寵遇ニテ、年頭嘉祥八朔立家ノ儀式ニ至テ、御譜代ノ輩ニ一列ナリ、寛永十五年下谷ノ館ニ御成アリ、宗茂公ハ武ニ逞キ而已ナラズ、其心風流ニオハシマシテ、下谷ノ屋敷諸大名大身ノ方々ニモ劣リナク、棟門嚴重ノ營作ナリ、又庭ナドモ景趣ヲ旨トシテ、山ヲ築キ石ヲ疊ミ、瀧ヲトシ水流レテ、池ノ心廣ク故ビ、ヨシアリガホナル事、達ニ上聞ニケレバ、御成ノ事ヲ仰出サレケリ、是ヨリ益々取ツクロヒ、九月台駕ヲ巡サル、ニ及デ、饗應心ヲ盡サレケレバ、御氣色殊外ニ快然タリ、此時ノ賀儀トシテ、粟田口則國ノ御脇指ヲ下シ賜リケレバ、時ノ面目子孫ノ重寶ナリト、古代ノ按割ト同ク

秘シ藏メ玉ヒケリ、又御成ヲ祝シ奉ル驗ナレバトテ、御腰物ヲ獻上アリ、此時代ハ將軍三代ノ平治ヲ職リ玉フ御代ナレバ、御威光往昔ニ十倍シテ、諸大名御成ノ事ヲ競望スル人多トイヘドモ、中々容易ノ事ナラデ、心ニ込ル人ノミナリシニ、宗茂公ニ至テ如レ此ナレバ、皆ウラヤマズト云事ナシ、同十七年ノ冬、御鷹野ノ御還路ニ、過ニシ御遊思召出サレケルニヤ有ン、台駕ヲ寄サセ玉フニ、勸盃御心ヨク、御遊常ニ勝レテ、御氣色頗ル快然タリ、此時瀬戸ノ大肩衝ヲ拜領アリ、此肩衝ヲ宗茂ヘト思召アテガハレ玉ヒケルニヤ、御成出御ノ時ヨリ持セ玉フ、有難キ御志ト可ニ申奉、

一 立花家重代ノ按割ト云ハ、旗一流、吉光ノ小脇指、扇子一柄ナリ、抑此旗ハ、大友ノ元祖豐前守能直、建久七年三月鎮西ニ下向ノ時、右大將賴朝公ヨリ下シ賜ル御旗ナリ、白旗スソ黒上ノ白キ内ニ、八幡大菩薩ト書付アリ、是ハ立花氏ノ元祖左近將監貞載、建武四年ニ大友氏泰ノ名代トシテ上洛ノ時、此旗ヲ讓ラレテ指セタルヲ、立花家ニ代々取得テ按割トス、又扇ト小脇指ハ、同年正月十一日ノ京合戰

ニ、貞載ハ結城太田判官親光ヲ組討シ、其首ヲ取テ扇ニ居テ尊氏將軍ノ實檢ニ入ル時、尊氏公大ニ感ジ給ヒ、御差副ノ吉光ノ小脇指ヲ當座ノ褒美トシテ手ヅカラ賜ル、コノ首ヲ居タル扇ト、手ヅカラ賜リシ小脇指トヲ、代々ニ傳テ按割トス、然ルニ今度瀬戸ノ大肩衝ヲ下シ賜ル、件ノ三種ニ相加テ、文武ヲ兼タル什物トジ、子々孫々ニ傳ント、宗茂公ノ御悅ビ限リナシ、賴朝公、尊氏公、御當家、源氏ノ將軍三代ノ恩賜ヲ家珍ニ傳來シ玉フ事、今日本ノ諸大名ニタグヒ少ナカルベキ事トモナリ、

一 寛永十六年九月十三日、將軍家東海寺ニ御成アリ、宗茂モ御供タルベシト仰出サル、斯テ寺内歩行ノ時上意アリケルハ、立齋ハ老衰病患計會シテ、肢躰起居合期シ難キヨシ上聞ニ達ス、唯今歩行難儀タルベシ、此御杖ヲ賜ルノ條、此後ハ御城内ハ云ニ不レ及、御座ノ内ニテモ杖ツキ候ヘト上意ヲ承リテ頂戴シ玉フ、角テ後ハ、御座ノ間ノ次マデ此杖ヲツキ給ヘリ、同年ノ冬、酒井讃岐守ヘ御成アリ、イツモノ式ニ御相伴ニ參リ玉フ時、上意アルハ、寒天ニ及デ老躰法頭寒氣凌ギ難カルベシ、是ヲ被リテ寒

ヲ防ギ候ヘトテ、御頭巾ヲ御手ヅカラ下サレケリ、則御前ニテ被リ玉ヘバ、上意ニ一段ヨク似合タリ、向後登城ノ時御前ニテモ被リ候ヘトノ上意ナリ、誠ニ冥加ニ叶シ事トモナリ、是ヲ念フニ、壯年ヨリ家業ノ武功他ニコエ、忠心僞ル處ナカリケレバ、餘輩老後ニ香シク、今既ニ大樹ノ寵遇他ニ超タリ、其比日本ノ諸大名歷々タリトイヘドモ、御前ニテ頭巾ヲ被リ、殿中ニテ杖ツク人ハ、立齋公ノ外ハ一人モナシトゾ聞エケル、其身ノ榮貴ト子孫ノ顔面ト、類ヒノ希ナル事トモ也、

一 侍從宗茂入道立齋公、頃年ハ病腦ニ依テ、老躰マスマス衰憊シ給ヒケルガ、同十九年壬午十一月廿五日武州下谷ノ館ニテ逝去マシヽケリ、享年七十四歳ニテヅマシヽケル、廣德寺ニ葬リ斂メ奉リ、大圓院殿ト號シ奉リ、道號ハ松隱、法名ハ直ニ實名ヲ以テシ、宗茂大居士ト稱シ奉リケリ、此宗茂ト云御名ハ、本朝ハ云ニ不レ及、異國マデモ其カクレナキ武名ナレバ、今更改メ難シト候ヘケルトカヤ、

舊聞記追加

一 宗茂公ハ、立花氏ノ家督トシテ道雪公ノ御息女婚

姻アリテ、子孫相續シ、當家ノ長久ヲ計給フトイヘ
 ドモ、如何ナル事ニカ御子モ出來サセ不レ給シテ、
 此頃ノ御方早世シ玉ヒケリ、良清院ト申ハ是ナリ、
 其後矢嶋氏女ヲ納レテ、寵愛他ニ異ナリトイヘド
 モ、是ニモ御世繼出來サセ不レ給シテ寛永元年四
 月四日逝去マシマス、瑞松院春峰光森ト申是ナリ、
 此御方ハ矢嶋石見入道好菴ノ姊ナリ、然バ宗茂公
 五十歳ニ餘ラセ玉ヘバ、今ハ養子ヲシテ當家永久
 ノ計ヲナサント思召レ、高橋主膳正直次元名統増入道
 道白ノ四男ヲ養ヒ玉フ、忠茂ト申是ナリ、其後葉
 室大納言賴業卿ノ妹ノ姫君ヲ迎ヘ取セ給ヒヌレド
 モ、是ニモ又御子オハシマサズ、此姫君ハ、宗茂公
 御逝去ノ後ハ、忠茂公ノ御存養ニテワタラセ玉フ
 ガ、寛文十年五月十七日ニ逝去マシノテ、長泉院
 清譽知光トゾ申ケル、抑忠茂公ハ、慶長十七年壬子
 ニ誕生アリ、童名ハ千熊丸ト云、御母ハ岡氏、掃部
 入道道甫ノ姊ナリ、後養福院ト云是ナリ、千熊殿ハ
 襁褓ノ内ヨリ宗茂公ノ養子トシ玉ヒ、成長マシマ
 シ十一歳ニテ元服シ、元和八年左近將監忠茂ト號
 ス、宗茂公ハ飛驒守ト申奉ル、寛永十五年忠茂公廿

七歳ニテ立花ノ家督相續、宗茂公今年七十歳同十八年正月
 敍ニ從四位下、同十九年十一月、慈父ノ喪ニアヒ、明
 曆三年十二月廿七日從四位上侍從ニ任ジ、萬治三
 年五十一歳ニシテ、先考ノ稱號ヲ繼デ飛驒守ニ改
 メ給フ、寛文四年五十五歳、其多病ナルヲ以テ上訴
 シ仕官ヲ止、閏五月七日ニ薙髮シ好雪ト號シ、延寶
 三年九月十九日、六十四歳ニテ指館シ玉フ、別峰院
 忠嚴好雪大居士ト申奉ル、抑コノ内室ハ、伊達陸奥
 守忠宗ノ嫡女ナリ、此御腹ニ男女ノ御子アマタ方
 方出來サセ玉ヒ、其外ニモ御カタクアリテ、都テ
 十三人ノ御兄弟オハシマスガ、何モ繁昌マシ
 マシテ、目出度キ世理ノ幸ナリ、
 一宗茂公ノ系圖委細ノ事ハ、前編ニ見エタリトイヘ
 ドモ、今又大友襲祖ヨリノ系圖ヲ左ニ寫ス事ハ、世
 間ニ流布スル處差誤アルニ依テ如此ナリ、

大友襲祖ノ系圖

上祖
 大織冠鎌足
 三
 房前位贈大將從三
 五
 內應從二位右大臣
 贈太政大臣
 二
 不比等從二位右大臣贈太政大臣淡海公又號文忠公
 四
 眞正三位大納言
 六
 冬號閑院正二位左大臣
 嗣贈太政大臣

七 良房 從一位攝政太

八 基經 從一位攝政關白

九 忠平 從一位攝政關白

十 師輔 從一位太政大臣

十一 兼家 法興院關白

十二 道長 御堂關白

十三 長家 從二位大納言

十四 忠家 從二位權大納言

十五 俊忠 正二位中納言

十六 光家 號正(正イ)五位下少納言

十七 光能 正三位左衛門督

十八 親能 正五位下式部丞 掃部頭齋院次官

十九 初母方之外祖從四位下大外記中原廣季爲養子、

其姓中原也、後依三賴朝之命旨復三子本姓藤原、

能直

右如件也、

宗茂公ハ、立花氏ニ付テモ戸次氏ニ付テモ、大友

能直ヲ以テ元祖トス、仍テ戸次氏ノ系圖ヲ左ニ

記、

戸次氏之系圖

能直

親秀

大炊介、從五位下、法名寂秀、

賴泰 從五位下兵庫頭、丹後守、

重秀 從五位下、檢非違使、

二代 太郎掃部頭、肥前守、從五位下、元時親服ノ時、北條時宗加荷號三時親、母ハ赤橋相模守平重時女也、

三 貞直 左衛門尉從五位下、鎮西評定衆、加冠北條貞時、仍號三貞直、

四 賴時 兵庫頭丹後守從五位下、鎮西評定衆、

五 直光 改三賴秀、右馬助、下野守、從五位下、始兵衛佐源直冬加冠、仍號三直光、

六 直世 從五位下、治部太輔、高載 太郎、右馬助、

七 直繁 太郎、早世、

八 直賴 三郎、早世、

九 直親 載之甥、

十 親實 丹後守、割髮號三玄心、

十一 親貞 實修理亮親載之子、

十二 親宣 藏人、

十三 親家 常陸介、

十四 鑑連 丹後守、入道道雪、初伯耆守、

十五 宗茂

右戸次氏ノ系譜、宗茂公ニ至テ、大友能直ヨリ十

六代ノ後胤ナリ、又立花氏ノ系譜ニ付テモ十六

代也、

立花氏系圖

一代 能直

二代 親秀

三代 賴泰

四代 親時

五 貞親

六 貞宗

七 貞載

八 宗匡 左近將監、三河守、

九 宗貞 實貞載弟、

十 親直 山城守、三河守、

十一 親政 丹後守、

十二 宗勝 左近將監、兵庫頭、

十二 左近將監、鑑光
十四 左近將監、親善
十六 左近將監、宗茂

十三 或作鑑後、鑑連
十五 左近將監、丹後守、號三立齋、

右立花氏ノ系譜ニ付テモ、大友能直ヨリ宗茂公ニ至テ十六代ノ後胤ナリ、

抑能直ハ元齋院次官親能ノ養子タリトイヘドモ、母方刀禰ノ大友四郎經家ノ氏ヲ繼玉フニ依リテ、大友能直ト云ナリ、經家ノ妻親能ノ妻ハ兄弟ナリ、然レバ能直ノ實母刀禰ノ局ト云ハ、親能ノ妻ノ姪女ナリ、經家ハ能直ノ外祖ナリ、仍テ外祖ノ家號ヲ繼テ大友能直ト稱ス、經家系圖次、デヲ以テ誌レ之、大友經家ノ系圖

一 大織冠 不比等
四 魚名 房前
六 豐澤 下野權守、村雄
八 秀郷 世號、後藤太、從四位下、鎮守府將軍、下野守、武藏守、
九 千常 鎮守府將軍、相摸守、從四位下、
十 公備 從四位下、

三 房前
五 藤成 從四位下、伊勢守、
七 村雄 從四位下、河內守、
十一 文行 從四位下、左衛門督、

十二 元イ 公充 從五位下、相摸守、
十四 經秀 從五位下、刑部丞、
十六 遠義 從五位下、筑後守、

十三 從五位下、左衛門督、經範 右馬介、兵庫頭、
十五 秀遠 從五位下、民部丞、
義通 波多野次郎、右馬允、
秀高 河村三郎、從五位下、
經家 波多野四郎、

經家(註)子 上野國利根郡、依稱ニ利根四郎、依ニ賴朝命旨ニ改姓、號ニ大友四郎太夫平經家、
右如レ件、

一 昇七拾二本、
但組々ノ昇ハ頭々ノ紋ナリ、

三拾六本 旗本

具足、黒ク前後ニ金ノ日ノ丸二、
刀脇指、銀ノサヤ袋、
弓小手并股引、茜木綿、
脚半、カチン、

一 弓九拾一張
三拾七張 御旗本

具足、前後ニ金ノ日ノ丸二、

指物、二本シナイ、上半分白下黒、

弓小手并股引、茜木綿、

脚半、カチン、

一 鐵炮 三百五拾挺

内

百拾四挺 御旗本

トチラン、口藥入、玉袋、火繩、

具足、前後ニ金ノ日ノ丸二、

指物、三本シナイ、上半分白下黒、

弓小手并股引、茜木綿、

脚半、カチン、

一 鍵六百四拾本 長二間半 上三尺黒塗、中木地、
下三尺黒塗、金具赤銅、

内

貳百九本 御旗本

帷子、腰以上淺黄、腰以下朱染、裾等ホコラカシテ、

道服、カチン腰輪違ノ紋、(マハリ二尺繁クツケ)

脚半、カチン、

一 使番 十二騎

六匁七尺ノ母衣黒ク金ノ丸五拾(但一ツニ付薄二)

金ノ馬鎧、

一 騎馬 貳百拾騎

内

八拾貳騎 御旗本

一步行立 千貳百四拾貳人

内

三百三拾九人 御旗本

總合貳千六百拾九人

一大馬幟ノフスマ 一小馬幟二種幣

一幕ノ紋寄カ蓑蓑 一番差物三本シナイ

右如レ件也

關白秀吉公ヨリ宗茂へ被レ下御書、前篇ニ少々寫

レ之、サレドモ猶殘ル所有レ之ニ依テ、補入スル事

如レ左、

一大友義鎮入道宗麟ノ末年ニ至テ、武威衰へ、近隣ノ

旗下皆々下知ニ不レ從、嶋津ノ強勇ニ歸服ス、是ヲ

鎮ントシ給ヘドモ、宗麟ノ手ニ難レ及ニ依テ、關白

殿下ヲ賴奉ラントテ上洛ヲ催サル、依テ探題職ヲ

嫡子義統ニ讓リ玉ヒ、宗麟ノ道號ヲ宗滴ト改メ、天

正十二年三月ニ上リ玉ヒケリ、先堺ニ至テ、妙國寺

ニ宿シ宮内卿法印ヲ憑玉フ、宮内卿取持テ其事調

出仕アルベキ由ヲ申サル、ニ依テ、卯月五日大阪へ

出仕アリ、先宮内卿私宅ニ至リ、午ノ刻ニ登城アリ、關白殿御氣色勝レテ能オハシマシ、種々御馳走アリ、日ヲ經テ後御暇下サレ下國ノ時、九州分國ノ御仕置等被ニ仰付、其時ノ國分ニハ、豐前豐後筑後三箇國ハ大友支配トシテ諸城主ヲ下知スベシ、大隅薩摩ハ嶋津支配、筑前ハ御公領ニ被ニ召置、高橋紹運ハ立花道雪預リ支配スベシト仰出サレタリ、自レ是九州ノ小城時思々ノ心ニテ、大友ニ對シ謀叛シ、嶋津モ彌騷ギ出タリ、同十四年宗茂公ノ代ニ成テ、使者ヲ以テ關白殿御氣色ヲ窺フ時ノ御書ニ曰、就ニ今度宗滴上洛、九州國分之儀委細申含差下之處、爲ニ禮儀言上、殊ニ太刀一腰并濟々到來、被ニ悅思召ニ候、依ニ嶋津返事之趣、成ニ其意、様子重而可ニ申下ニ候、然るに今籠城之由、辛苦無ニ是非ニ候、殿下無ニ御如在ニ思召之條一着之間、彌無ニ油斷ニ堅固之行專ニ候、猶黒田勘解由可ニ申候也、

秀吉公

七月十日

御判

立花左近將監とのへ

對ニ黒田勘解由宮木入道ニ七月九日之書狀到來候、抑九州之事帶任目貫藝薩江如ニ下知之所、義

統輝元令ニ承伏ニ以ニ和合之儀、馳走尤神妙候、然而嶋津事到而、筑紫領内相働、於レ今在陣之由、無ニ是非ニ候、此旨最前義統注進之條、則毛利小早川吉川等越ニ關戸、義統令ニ相談、急度可レ被レ行由申含、黒田勘解由宮木差下シ候シ、定而油斷不レ有候、此上敵不レ逃敷ハ、輝元注進次第追々差ニ遣人數、其上秀長秀次を始可ニ相勸ニ候之條、彼返徒等可レ加ニ伐罰ニ候、然者兩人依ニ忠節ニ望等之儀可ニ申付ニ候、味方中申談、聊無ニ越度ニ様ニ調義專一と、宗滴義統へも具被ニ仰下ニ候之條可レ得ニ其意ニ候也、

八月三日

御判

立花左近將監とのへ

高橋主膳入道とのへ

七月廿八日書狀今日到來、加ニ披見ニ候、

一從ニ其方ニ注進之條、八月廿五日差ニ遣黒田勘解由宮木兩人、早毛利右馬頭先勢罷出之由申越候、其上自身右馬頭吉川小早川兩三人、當月十六日出馬之由申越候事、

一兵糧玉藥之儀、さきぐ、無レ之候は、可レ遣由、黒

田宮木兩人堅申付候事、

一此頃雖ニ在洛候、其表之儀被ニ聞召、今日大阪へ還御候、然者右馬頭小早川吉川先勢其城へ相移、嶋津不ニ引退ニ様に懸留可レ有ニ注進ニ候、其次第一騎懸なされ、則時可レ被ニ討果ニ候、八幡大菩薩少も非ニ虚言ニ候間、堅固之覺悟肝要候事、

一四國中國之人數爲ニ先勢ニ追々申付候間、頓可レ有ニ着陳ニ被レ得ニ其意、人數可ニ尋請ニ候、聊爾成勵無レ之様專要之事、

一忠節此時に候條、堅固以ニ覺悟ニ可レ伺ニ本意ニ之儀案之内候、少も油斷有レ之間敷候、猶兩人可レ申候也、

八月十四日 御判

立花左近將監とのへ

此次、薩州勢田引退刻、足輕ヲ付追討仕ル時ノ御感書有、前ニ出、次ニ高鳥居星野ガ城乗敗リ、星野ノ兄弟討捕時ノ御感狀有、前出、

一宗茂公籠城アリテ節義堅固ヘ事、又ハ此砌勵ノ次第一々ニ殿下被ニ聞召、黒田宮木安國寺三人ヘ下サレタル御書ニ、御賞美アラレテ、九州ノ一ツ物トア

ソバサレタリ、又ハ籠城難義ノ砌、星野ガ城ヲ討取玉フ事、嶋津筑紫九箇國ヲ治メタルヨリモ、立花左近將監ニハ面目ノ至ト被レ遊タリ、然レバ九州第一ノ武將他ニ讓ル處ニ非ズ、即三人ヘ下サレタル御書寫シ留テ支證トス、

立花左近將監對ニ兩三人ニ注進狀、於ニ大阪ニ被見ニ候、此節薩州之者共罷出、味方之城數二三箇所相果候條、其城之儀無ニ心元被ニ思召ニ候之處、相支候儀さヘ對ニ殿下ニ忠儀無ニ比類ニ思召之砌、高鳥居切崩、星野中務太輔、同民部少輔を始、數百人討捕、首注文到來、天下之覺不レ過レ之候、誠九州之一物に而候、何様何之國成共、一稜新地可レ被ニ仰付ニ候間、立花家中之者共ヘも能々申聞、自今已後聊爾成勵無レ之様に可ニ相達ニ者也、

十月三日 御書判

黒田勘解由とのへ

宮木入道とのへ

安國寺

於ニ今度其表ニ粉骨之至、被ニ聞召届ニ候、然者、仙石權兵衛、長曾我部、其外四國衆、門司表江令ニ渡

海可_レ及行由被_二仰出_一候、此節候之間、彌無_二越度_一様可_レ抽_二忠節_一事肝要也、

十月三日 御朱印

立花左近將監とのへ

九月廿一日之書狀、今日於_二京都_一披見候、

一筑紫主膳居城ヲ取返候由申越候、尤之仕合候、右仕立惡敷様相聞へ候之處、今度彼居城を手に入忠節あるべき由、尤も念を入、人數兵糧玉藥已下安國寺と令_二相談_一、可_レ然様可_二申付_一事、

一龍造寺色と立候は、丈夫に人質已下於_二相下_一者、元春隆景渡海尤候、輝元ハ門司ノ要害へ有登假ちかき城與手寄まかせ被_二取卷_一可_レ然候哉、嶋津事させる儀有間敷と思召候、其子細は、今度嶋津相勵して、やせ城二三箇所以_二調略_一召置、星野を入置、其砌も嶋津存分の様相心得退候所に、從_二立花_一罷出、星野もち候城乗崩、星野を初、不_レ殘劔首候、嶋津筑黒九箇國を治たるよりも、立花左近將監には面目之至候歟、又嶋津ぞくい付なる働をいたし、星野が劔首させし事は、嶋津弓矢之失_二面目_一之儀、又は心中之程相見へ候之間、

武篇かたさせる義有間敷事、

已下九箇條御下知アリ、於_二此書_一非_二當用_一、依略_レ之、

十月三日 御書判

安國寺

黒田勘解由とのへ

宮本忠兵衛入道とのへ

此次ニ、嶋津敗北星野沒落爲_二御褒美_一、國俊太刀并鐵炮藥縫物羽織下サレタル御感書アリ、前_二出_一、

今度其表堅固相抱付、遣_二内書_一之處、爲_二禮儀_一、同名彈正忠差上遣候、依手前自身不_二上洛_一段聞召候、仍太刀一腰、國吉到來候、悅思召、度々如_二仰聞_一、毛利小早川吉川長曾我部仙石已下可_二相勵_一事間、彌示合可_レ令_二粉骨_一事專_二一_一候、猶黒田勘解由可_レ申也、

十月十七日 御書判

立花左近將監とのへ

先度森兵吉吉田勘八兩人差遣之處、色々令_二馳走_一由、其表之儀堅固申付候様子、兩人懇_二書上_一候、神妙被_二思召_一候、嶋津豊後江令_二亂入_一付而、

此刻龍造寺殿下江可_レ致_ニ忠節_一由候而、色立候由、然間阿波淡路備前美作其外人數差遣候、其表彌無_ニ越度_一樣_ニ肝要候、猶兵吉勘八可_レ申候也、

極月二日

御判

立花左近將監とのへ

此次ニ、梁川拜領ノ折紙アリ、前ニ出、

次ニ、有動大隅ガ一揆ヲ追討ノ御感書ニ通アリ、前ニ出、

次ニ、朝鮮ニテ大明人ト於_ニ南大門_一合戰ノ時ノ御感書アリ、前ニ出、

二月二日注進狀趣、加_ニ披見_一候、抑今度大明國之人數都表江押寄候處ニ、其方先陣付而、家中之者共討捕首注文到來、上_ニ覽_一之候、誠無_ニ比類_一、勳神妙ニ思召候、彌此已後可_レ抽_ニ軍忠_一、事肝要候、猶木下半介可_レ申候也、

卯月三日

御朱印

文祿二巳年

羽柴柳川侍従とのへ

多賀豐後所持之正宗刀到來候、一段無類候間、則被_レ成_ニ御指刀_一候、寔秘藏不_レ斜候、尙淺野彈正少弼可_レ申候也、

極月十三日

御朱判

羽柴柳川侍従とのへ

今度關白不届子細有_レ之付而、高野山ニ被_レ遣候、其外無_ニ別條_一候間、不_レ可_レ有_ニ機遣_一候、猶民部卿法印、石田治部少輔、増田右衛門尉、長束大藏太輔可_レ申候也、

七月十日

羽柴柳川侍従とのへ

宗茂公ノ武功朝鮮陣中ニ於テ他ニ讓ル處ナキ支證ニ、他家ノ感書ヲ左ニ誌ス、抑小西行長ハ、明軍ニ遇テ仕付ラレ、是ニ懲テ南大門口ノ合戰ニ都ヲ出ルトイヘドモ、中途ニ徘徊シテ不_レ來、宇佐美民部ト云武勇ノ者ヲ隆景マデ使シテ、明軍ノヤウタイヲ聞ントス、宗茂公勇ヲ振フテ明軍敗績スルノ時、此民部少輔高名ヲ究メタルニ依テ、隆景是ヲ感ジテ書ヲ投ゼラレシ、其狀ニ曰、

正月廿六日朝鮮都於_ニ南大門口_一、大明衆十餘萬取詰、當手一組馳向、及_ニ一戰_一候處、其方事爲_ニ行長使者_一加_ニ當陣_一、捨_ニ一命_一之竭_ニ粉骨_一、殊以立花宗茂も立合、俱に相働、乘入組打、高名頭貳、隆景直

ニ見及候而然候、即攝州江も申達候、委細使者者鶴飼新左衛門可申候謹言、

文祿二年二月朔日

小早川隆景判

宇佐見民部少輔殿

此時秀吉公ヨリ宇喜多宰相殿ニ給ル感狀ニ
曰、

正月廿六日の飛札、二月七日到來、先以大明より其國殿亂を爲被大明人百萬騎を引卒令出張、去月八日に小西要害を採破、同月廿六日都表江近付、小早川隆景、柳川侍從、毛利大藏少輔等、挑合戰勝負逼々に成により、其方目利を以軍法を破鍵を入、即時追崩、大明人三萬八千餘討取申由にて戰功不可勝計、誠不補助者、隆景立花討死し、都に至而押詰籠城之跡に成りなば、後卷之加勢重而可進に、大切成忠儀莫大に覺候事、

一三人之奉行共、今度合戰を留候義、似合たる存分とは乍云、不_レ及_ニ是非_一事に候、向後も左様に臆病成下知をば被_レ用問敷事、

一 小早川隆景立花侍從は合戰に非ずば三十萬騎の多勢に大利を得事有間敷と無_レ憚其段強而申せ

し事、其所を得たる思慮、予_レ今不_レ始義と云ながら、舌を震感入候、隆景手前立花と採合大敵を突崩、大明人三萬八千餘騎討取、殘奴原大河江追放候旨、中々心地能仕合と、重而隆景并立花方へ感狀遣可_レ申候、先々其方相心得、能々可_レ申候、隆景并元康秀包兄弟三人家來、又立花が兵共、骨折者共、銘々に可_レ申候へ共、急候間、是又其方相心得、不_レ殘可_レ申候、扱々唐人めに一鹽付候而満足難_レ盡筆紙一候以上、

二月八日

御朱印

備前宰相殿

右從_ニ關白殿_一御感狀共如_レ件、遺編之書共出在_レ之_ニ又々可_ニ書加_一也、

一 前篇_ニ所謂大猷院殿御代_ニ替リテモ、宗茂公ハ前代ト同ク、衆_ニ抽タル御寵遇ト云々、

右台德院殿ノ御代ニハ、宗茂公又ハ、丹羽五郎左衛門殿ナドハ、御相伴ノ衆ト世ニ云フラシ、公方諸家へ御成ノ時ハ、必御相伴ニ罷出、又ハ日々登城アリテ御伽ヲ勤メ給ヒケリ、大猷院殿御代始ニ成テハ、日々御登城アリトイヘドモ、指控ヘ玉ヘル様躰ナ

ルニ、或時御登城ノ砌、前代ノ例ヲ思召ニヤアラ
ン、御心安キ御様子ニテ、夫ヨリ後ハ前代ニモ超テ
ノ勤仕ナリ、其最初ノ事ノ様子ヲ、立花壹岐守ヨリ
柳川ノ諸老ニ告知セタル書札ノ趣ヲ爰ニ誌ス、
追而致ニ啓上ニ候、大殿様御事、今月四日被_レ成_ニ御
登城ニ候處ニ、其日ハ諸侍大名小名之間六十人餘縁
重之儀被_レ仰出、此むこまうとよしみ中百四五十人
程御禮被_ニ申上ニ候砌にて候故、暫殿様御見合被_レ成
候へば、箇様之刻縁重無_レ之上にて、堪忍如何ニ被_ニ
思召、御歸可_レ被_レ成と思召候處ニ、從_ニ御前飛驒
守、急可_ニ罷出ニ候由、御内所かたみかよひ口より口
爲召候付而御前江御伺公之所、上様御直ニ被_レ成_ニ
上意ニハ、暑キ事ニ而ハなきかと成_ニ御意ニ候、
如_ニ上意ニ當夏ハ殊外之暑氣ニ御座候得共、節かは
り故か、夜前よりちと冷敷罷成候由、御申上候へ
ば、又息災そうに見へ候由、上意之間、其儀にて、當
夏ハ水をさいく給申、就中瓜出來候而是を被_ニ
下置ニ候而より取分息災ニ御座候と被_ニ申上ニ候へ
ば、達者だてのいけんをきけと、御機嫌能御笑被_レ
成候而、御咄もすみ申候へ共、右之御禮衆之御事

多さうに相見へ候に付而、ひそかに御前を御立被_レ
成候而、御廣間迄御退キ被_レ成候處ニ、松平伊豆守
殿、是は今之御代無雙之出仕ニ而も此人を御使に
て、飛驒守御用之事候間、殘可_レ申由御託之間、暫御
堪忍被_レ成候所ニ、又伊豆守殿をして被_ニ仰出ニ候ハ、
今日者御取紛之義共有_レ之候、御隙明候迄ハ老躰待
長ク草臥可_レ申候間、明日誰をもさそひ候はで可_ニ
罷出ニ由就_ニ上意、翌五日に御祇公候處ニ、奥之様ニ
通可_レ申由被_ニ仰出ニ候、いつも出御之御座之間より
三間程奥、不斷之御座之間江被_ニ召出、御前ニハ、土
井大炊頭殿、酒井讃岐守殿、井伊掃部頭殿計被_ニ召
置ニ候而、飛驒守儀達者に候て若者だてにて候へ
共、年齢も能、古き事をも覺たる人に而候間、御心
易御伽自然之事御談合物語をも可_レ被_ニ聞召ニ候間、
今よりは節々、誰にも不_レ搦心易御内所より伺公可_レ
申由、殊外様ニ入者にやかに忝被_ニ仰出ニ候、誠冥
加難有御誼共、其上此御座敷へ被_ニ召出、外聞之至
忝由申上候、いまだ此間を不_レ見かと被_レ成_ニ御意ニ
候、大炊頭殿いかでのぞき爲_レ申義可_レ有_ニ御座ニや
と御申候、上意には、古き物語方々にて粉骨を盡候

様子共、少々かやうの物語候へと被_レ仰出_一候間、五十年已來之儀は覺候儀も御座候へども、目度御代にて左様之義も心に捨申にてやとなへ失ひ、何を可_二申上_一様も無_二御座_一由御申上候へば、又若者だてにて、五十年とは百年程之義は覺候はんものをと、被_レ成_二御意_一候、大閤已來之備軍法は大形いかやう成作法共に而候かと、被_レ成_二御意_一候事、

一此中自然之咄に事に合たる者に御向被_レ成候へば、我得たる武者之いけん計を申上、御心遊に可_レ成様なる筋をば一圓に不_二申上_一由御尊被_レ成、兼而殿様能御存知之儀と、其上色々御簡慮はやく、さきく_一に御氣のしほり申上様にて候間、一圓に左様之物語たま_一遠慮多き御やうすに付而、中返を一筋かろく御申あげられ候と聞え候、

一太閤以來之合戦は、其前にはかはり一圓に備かたがたの義も無_二御座_一、大底大軍にて押詰々々はかをやられ候間、中々小勢之國せり合などの様にも無_二御座_一候、めきく_一とはかをやられたると見へ申候、
一九州之陣之様子はと被_レ成_二御意_一候、其儀は大友義鎮九州六箇國をしき、其頃宗麟と申候、日向邊件之

隱居所と立可_レ申との儀にて、彼國へ人數を遣し治可_二申行_一仕候處に、彼國人等と大友人數、耳川と申所にて遂_二一戰_一、大友人數負申により、大友弓矢おくれめに成たり、嶋津國勢を催罷出、九州亂國に罷成候、

一飛驒守親をば紹運と申候、養父をば道雪と申候、紹運爲には宗麟嫡子義統は妹婿之儀に候、道雪儀豊後より出たる者に御座候付而、大友一等に九州弓矢を取立申候、然所に紹運は筑前岩屋と申城にて打死仕候、道雪も隣國之途中にて病死仕候、大友儀嶋津懸負、居城を逃て豊前めうけん殘士へ立退申候、其砌飛驒守儀はと被_レ成_二御意_一候、拙者儀は立花城に罷有候、其時分敵は誰ぞと被_レ成_二御意_一候、九州八箇國之者共責申候、九年之間籠城仕罷有候、立花に嶋津付城を仕、豊後へ通申付而、彼付城を踏つぶし、城主下々を不_レ殘打果し、首共大閤へ爲_レ持登候付而、太閤より、黒田右衛門佐祖父勘解由、森壹岐守、其外中國衆之人數を加へ、大友には、仙石權兵衛、長曾我部、被_二指越_一付而、不慮に立花一城もちさへ、大閤御下向を待請申候、上意には、九

之間八箇國之者共責候處に、安隱奇特と被_レ成_二御意候、然其時分は國々せり合に付而、敵も身に入不_レ申候、不_レ然は少もさへ申筈にては無_二御座候、

一九州之弓矢之作法はと被_レ成_二御意候、此年月御家に罷成_在御當家にて粉骨功者衆物語承候處に、昔權現樣遠參に而之御せり合、甲斐信玄などが樣戰陣之様子、皆九州邊へ戰、いづれも及_レ承候、同斷に而御座候、

一高麗之合戰之様子はと被_レ成_二御意候、高麗之儀は、備かたぐ法度已下、取分大明者心もたけく見え申候、城を責申にも、死たる味方を蹈越楯につき、堀之狭間より顔ヲ入、其儘打死仕候程、けなげには御座候とみえ申候へども、一圓に手にき、不_レ申候、半弓計之働に候故、中々淺間敷様子、日本之合戰にくらべ申やうなる義は無_二御座候、心易相手にて御座候、殊外寒き所にて御座候、就_レ夫一ッ被_レ下、習今は上戸之處成物には罷成候由御申候へば、殊外御機嫌にて、御笑被_レ成候間、大炊頭殿被_二申上候は、下地から器用に御座有たると見へ申候

とて、御座敷賑ひまほにのり申候由に御座候、先爪を出し振舞候様にとの上意にて候、其後飛驒守は天守をばいまだ見申間敷候間、皆同心して見せ候へと御誂に而候、大炊頭殿、讃岐守殿、掃部頭殿、案内者にて、御仕合能御見物にて、様々御懇にて御歸被_レ成候、掃部頭殿も御天守は初而御覽じ候と聞へ申候、兩日御祇公にて、諸大名うらやみ褒美不_二大形候、昔頼朝公之御時、熊谷次郎直真被_二召出候而、武者談議被_二聞召候以來、天下取之御前にて、武勇之道御問被_レ成候儀是が初たるべく、冥加者果報者と、御譜代衆も_{大イ}上方侍其褒美不_レ淺、御年寄衆其外より、御狀御見舞かずくの御事にて、金銀知行にかへがたき武道之上譽れ、是にまかじと、御沙汰迄にて長々敷御座候得共、各様へ御おらせ申度存、乍急使はしく及_レ承候十分が一、令_二啓上候、皆様へ不_レ殘御物語可_レ被_レ成候、恐惶謹言、

七月八日

立花壹岐 帷子

矢嶋石見様

由布美作様

十時雲齋様

山田勝兵衛様

十時與左衛門様

由布孫左衛門様

十時三彌様

一寛永十五年寅二月廿七八日兩日、於有馬城二揆成之時、立花家中手負討死之覺、

手負

池邊勘解由

堀六右衛門

櫻井角左衛門

谷田六郎兵衛

竹迫權右衛門

曾我頼母

曾我七郎左衛門

薦野金右衛門

清田權左衛門

相田又左衛門

薦野五郎右衛門

十時與次兵衛

佐田正九郎

十時久左衛門

十時内匠

侍大將
十時三彌助

益子六郎左衛門

赤堀太郎兵衛

森九郎左衛門

山田清左衛門

矢原太郎左衛門

友野太郎左衛門

戸次正左衛門

江上茂左衛門

森喜兵衛

十時喜平二

小串藤内

番頭
小田部土佐

同隼人佐

米多比七郎兵衛

立花孫之允

谷川十介

小林作太夫

佐田市兵衛

原吉左衛門

長江内藏丞

安武新五兵衛

菟原治部

小野作左衛門

大石四郎左衛門

水原八郎左衛門

米多比三左衛門

番頭
清田大膳

垣田二郎左衛門

伯耆太郎兵衛

同
立花奎之助

渡邊伊左衛門

海老名喜兵衛

小野彦之進

川瀬市郎兵衛

駒原庄左衛門

山本勘左衛門

佐伯藤左衛門

阿部二郎左衛門

侍大將
立花壹岐

坂卷仁右衛門

木崎源兵衛

番頭
古屋宮内少

川岸吉太夫

能澤半兵衛

瀨戸口市兵衛

中村二郎左衛門

松岡安兵衛

矢野六左衛門

足立兵左衛門

川津權左衛門

討死
右手負合六拾六人

吉弘善兵衛

物頭
十時吉兵衛

侍大將二番手
立花三左衛門

物頭奉行役者
由布孫左衛門

物頭
十時吉兵衛

物頭
小田原又左衛門

物頭
佐田清兵衛

物頭
小野掃部

十時主馬

藤田彌市右衛門

渡邊次郎右衛門

坂本兵之助

橋爪新五兵衛

內山田清右衛門

安東善右衛門

安東太郎左衛門

岡田久右衛門

石田忠左衛門

綾部藤兵衛

車田作左衛門

大和甚右衛門

疋田四郎右衛門

竹迫五郎兵衛

川津十左衛門

山家彌助

問注所七右衛門 吉弘彌兵衛

右討死合貳拾七人

家中馬乘討死

岡田傳左衛門 明石四郎次郎

浦田作左衛門 江上半介

林權八 置輪清左衛門

森六兵衛 高野五郎介

生田彌兵衛 米多比八兵衛

篠原庄左衛門 石井八右衛門

池野三右衛門

合拾九人

足輕井弓之者戰死

釣田二郎左衛門 吉田七左衛門

小方諸兵衛 已上四人小頭也

足輕弓之者共二六拾七人

右合戰死七拾壹人

雜兵死人貳拾七人

又內若黨井小者死人五拾人

右戰死合上下共二百九拾四人

手負物頭番頭井諸侍合六拾六人

同足輕弓之者共二合八拾貳人

雜兵百五拾八人

同又內若黨井小者合六拾五人

總都合五百五拾五人內手負三百六拾一人討死九拾四人

右同時屬立花家御手二千人働之覺

高名石疵

石疵

石疵

分捕石疵

首捕

鏈疵二箇所

高名首取石疵

石疵

首取合捕石疵

鏈疵二箇所

長刀甲二當

高名

石疵

石疵

鏈疵三箇所

山上彌四郎

舟橋庄左衛門

太又右衛門

佐々木清左衛門

雨森六左衛門

中嶋彌五左衛門

福瀨二郎左衛門

神尾武手右衛門

稻生市左衛門

野間角左衛門

篠原半左衛門

杉浦清兵衛

酒井久左衛門

寺田角左衛門

三浦五郎左衛門

高名石疵

鐵炮疵

高名

高名石疵

石疵

分捕鏈疵石疵

高名首二ツ

分捕石疵

能働但不_レ出_二書付_一

同働

右同

働之様子不_レ出_二書付_一

戰死

分捕

分捕鏈疵

鏈疵

右同

分捕

鏈疵二箇所石疵

鏈疵石疵

平山傳兵衛

松本權兵衛

安村吉兵衛

長井與左衛門

長岡彌兵衛

池村佐左衛門

松本勘左衛門

久保與十郎

嶋田介右衛門

同勘左衛門

同彌左衛門

山口傳兵衛

齋藤三郎左衛門

石原勘右衛門

岡崎佐次右衛門

前田忠左衛門

同八左衛門

野々村仁右衛門

人見伊織介

小倉九兵衛

分捕

長刀疵

石疵

分捕

分捕

戰死

分捕

分捕

石疵

分捕石疵

鏈疵

石疵

分捕

分捕

右同

渡邊外記

中村七郎右衛門

高木七郎兵衛

大塚九郎左衛門

南彌五兵衛

同八兵衛

吉武孫兵衛

山内彦右衛門

小森平兵衛

相場四郎右衛門

伊關孫九郎

丹羽惣太夫

星野市郎左衛門

高品惣兵衛

山岸平之丞

古川市兵衛

永尾七郎右衛門

寺嶋六兵衛

詫摩權左衛門

同長五郎

分捕

矢部七郎左衛門

右同

中黒道隨

右同ニツ

同牛之介

分捕

三枝喜内

公方家

同

分捕

片桐武右衛門

鈴木九郎三郎

片山次兵衛

石疵

關屋市郎右衛門

同三郎兵衛

鈴木角太夫

畔柳内藏介

安東半兵衛

同左衛門

伴左近右衛門

新庄二郎左衛門

稻生吉右衛門

相田八左衛門

川村傳右衛門

鐵炮疵

分捕

黒川彦右衛門

分捕

伊藤八郎右衛門

分捕弓疵

和田勘兵衛

分捕

富永孫三郎

戰死

有地數馬介

鍵疵

山口權左衛門

戰死

山口善四郎

同左兵衛

富岡仁右衛門

柴村左近右衛門

同左兵衛

松尾勘左衛門

齋藤九郎右衛門

分捕鍵疵

許斐權佐

分捕ニツ

森孫左衛門

分捕石疵

飯尾德菴

分捕

杉本次郎作

分捕

小笠原半之丞

公方家

石手數多

田嶋新左衛門

分捕石疵鍵疵

岡本八左衛門

右同

山口半左衛門

山口四郎左衛門

山口四郎左衛門

分捕

山口四郎左衛門

勳能
 石疵
 分捕石疵
 鏹疵石疵
 分捕石疵
 分捕
 分捕
 分捕
 分捕
 鏹疵
 分捕鏹疵
 勳能
 兩日勳能
 鏹付
 右同
 右同
 喧嘩ニテ死
 分捕
 右同
 右同

關屋彌市右衛門
 保津半之允
 後藤奎左衛門
 高尾彦太夫
 高科惣兵衛
 井關孫四郎
 關屋源五右衛門
 多賀傳兵衛
 小池助之丞
 古川市兵衛
 兒玉傳兵衛
 竹越勘左衛門
 中嶋五郎左衛門
 川村傳右衛門
 野村與右衛門
 松波八左衛門
 豐田久兵衛
 片桐儀右衛門
 青木權十郎
 豐田二郎兵衛

右同
 分捕鐵炮疵
 敵兩人討捨鐵炮疵
 分捕
 右同
 右同
 勳能
 鎗付
 勳能
 兩日勳能
 勳能
 右同
 右同
 敵討捨
 分捕深手負
 勳能
 鏹合手足石疵
 鐵炮疵
 石當ル
 戰死

川合源三郎
 嶋川彌市郎
 羽田十太夫
 東儀左衛門
 平井作介
 水谷左近右衛門
 宮川金兵衛
 瀨川又右衛門
 伴太左衛門
 水谷次右衛門
 加藤傳左衛門
 山本權兵衛
 上村佐太右衛門
 宮崎佐次兵衛
 井戸十太夫
 丸岡新六郎
 岡谷又兵衛
 磯崎猪右衛門
 公方家
 牟禮萬五郎
 村上七郎左衛門

戰死

働能

已上合百參拾七人

彦坂三左衛門

堀七郎兵衛

立花家士所持之書也

元祿貳己巳歲十二月於府寫之

事語繼志錄序

語曰君子疾沒世而名不稱焉嗚呼吾先君河越侯沒世而百年于今矣其言行風姿朝野稱述焉翦燭爲大夫之美談者十而二三則及公好事者每著述稱英雄幾決捷悟之類矣夫公生有淑質事猷廟忠信謹厚勤勞政事夙夜不怠嚴廟時尙莘莘用心於天下一言一語顯然理矣一行一止泰然寬矣猶徵先王之法自百歲之下私窺公操雖未暇讀書尋道吾必謂之學以其左袒論焉國初時因循戰國之弊蒙大恩者殉葬臨其君喪不死者爲不忠爲不義於茲乎忽飲鳩斷腹殉死者幾人乎是皆股肱之臣也公在猷廟之朝奇遇超衆人一時帶封侯之印以關天下之政大恩萬萬至大喪之事當時欲殉葬者中公等而哭泣悲哀雖過人終喪無殉死心或詰之曰當殉葬而否非陋則不忠乎公聽之曰先世忠臣若死誰受襁褓之託以擁幼君乎迨嚴廟禁天下殉葬之事到于今受其賜矣公身任安危之寄豈可避小嫌而輕死哉秦賦黃鳥惜子車氏之三子仲尼曰始作俑者其無後乎雖木偶亦惡象人然況用人乎不仁不義無自是太甚者是公之萌芽仁及後世之爲大者也公實爲大河內氏大河內氏者其先爲源武庫賴政當時平氏亂王道賴政欲誅

之事發覺與高王通於宇治而自殺後豆州源賴朝既應高王之命盡討諸平氏賴政公屬事雖不成實促群雄之心猶子房一擊哉此餘德流後裔公餘慶垂于今矣予結髮時予傳與村保之至述孝弟忠信乃曰始封君始封君一時保之携一冊來曰始封君之言行一二記以題事語繼志錄取孝子繼志請事此語也予安左右年久矣保之卒後上第災收燼得此書雖周環焚亡不忍更改保之手澤依然以紙帛漆焉糊焉備不朽之事以置案上焉

寶曆九屠維單闕黃鐘日

吉田世子信禮序

事語繼志錄

昔吾始封君少小顯捷悟之名而言行模楷于人茲有宦游少年間公室老成人曰君之爲人予嘗粗聞之其詳予未聞之今也可得而聞乎曰可夫始立身揚名至恢開世家之基非唯敏捷之智已興於忠孝立於克勤者是其天性也雖然且加趨庭之訓與好問之力也已載侯家譜錄備矣雖備手不關國家事則闕如故今唯採所存于口碑而陳之不知其真僞如何雖然吾亦世其祿者豈不知分之而語子乎嗟夫吾君少小出事忠朝孝家其事弗遑枚舉纔告一端餘可以推知已王父最老其在左右寢必不安自爲三角枕以警猷廟爲世子時試銃不發爲火熄投旁而銃口向身君起而蹴之丸方外出傳侯宮臣大感稱焉其少時之敏捷如此及長經濟之能軍旅之術人孰上焉寬永間討天主賊也所咸知奉闕外命在三千里外謀慮之與朝廷合實如符契談何容易嚴廟爲嚮子時則荷于伊周之任見信於上下慶安有賊則立擒擊或令自殺明曆有災則不授兵登陣豈非與古人爲徒乎適西京則銷銅佛鑄以爲刀幣其益于民不亦大乎臨終養母者勸曰唱佛名對曰常日不朝猶以爲不盡今則唯其情奚遑爲唱於是宦游子曰入則相出則將斯君在

焉保之在側謹而聽此尙竭其餘論退而次錄而意訓吾世子君豈又它求因此遂得此始封君則足矣迺上諸世子君伏願日事斯語以繼祖考府君之志長有克肖之風故題事語繼志錄辭則從俗欲易讀也是編者微意焉耳矣

寬延戊辰八月十六日

與村保之謹識

事語繼志錄上

○信綱公ハ慶長元丙申年十月晦日或曰廿九日ニ誕生シ玉フ、大河内金兵衛久綱公ノ御嫡子ニテ、御母公ハ深井藤右衛門好秀或曰資正ガ女ナリ、其幼名始ハ龜千代君トゾ申ケル、後ニハ長四郎君ト名ヲ更メ玉ヒシ、其御生長勇健ニマシ一テ、殊ニ御幼少ノ時ハ、千萬人ニ勝サセ玉フ氣サキニテゾマシ一ケル、在郷ニテ生長シ玉フユヘ、野邊ヘ出玉ヒテ鳥ナドヲ追マワサセ玉フ勢ニテ、垣ナドノ竹ノ中ヲ走ラセ玉ヒ、振袖フリソデノタモトヘ竹ノサキノ入タルヲモ御覺ヘナク走ラセ玉フユヘ、御宿ヘ歸ラセ玉ヒテモ、御袖ノナキトイフコトヲ知シメサバリキ、下部ノ者野邊ヘ出テ是ヲ見ルニ、二間バカリノ竹ノサキニ御袖ノカ、リアルヲ拾ヒテ歸リヌ、カヤウノ事モアレバ必アヤマチモアルベシトテ、母君ノ仕置トシテ龜千代君ヲトラヘ押フセ玉ヒテ、小灸ニテハキクマジトテ、灸ヲ大クシ玉ヒ、シヤウモンニ數々スヘサセ玉フ、其時ノ御齡ワヅカニ五六歳ニナラセ玉ヒケレドモ、ヨク覺ヘマシ一テ、御歳タ

ケサセ玉ヒシ比、此事ヲ母君ヘ宣ヒ、キツキ戒ヲナサレタルト戯ラレ仰セケレバ、母君モコマラセ玉フトゾ、女性ナレドモソノ母君ハ百人ニ勝レ勇ヲ好セラレ、御子達ヘモ手痛キアヒシラヒヲナシ玉ヒシ、小田原落ヲチノ時ニ、母君、了清、其次庭松院、是ハ横濱十郎右衛門祖母ナリ、其次長壽院、是ハ伊奈右衛門ガ母ナリ、此三人一腹ナリシガ、イマダ若年ナレバ、ソノ母公ハ、三人ノ女ノ子ノタモトヘ帶ヲ引通シ、ソノ端ヲ母公ノ腰ヘ結付ラレ、汝等ヨク一キケ、武士ノ子ハ女人トテモ男子ニ劣ヲトルベキニアラズ、敵ノ手ヘ渡シテハ無念ナリ、敵ノ近ヅカバ汝等ヲ先ヘ突殺テ其後ニ自害ヲセンニハシカジト、切齒ヲシテ退カケルトカヤ、了清ニモ其御心アル御女性ニテアリシ、又御四歳バカリノ比ニモアリシニヤ、雞ヲ好ミカハセラレ、卵ヲウミタルニヨリ、小者ヲ番ニ付玉フトコロニ、卵ノ減ヘリタルユヘ不審ニ思ヒ玉ヒツ、御心ヲ付サセ玉フトコロニ、番ノ小者ノ取テ喰タルニヨリ、番人ニ付タルモノ、盜喰シハ一入不届ナリ、重テノ見セシメニ彼ガ喰タル事ナレバ咽ノドヲ痛メシカルベシ、首ヲク、レトテ、索ナワニテ結セラレツルガ、アマリツヨクシメケレ

バ、夫ニテハ息絶^{イキタ}ベシ、卯ヲ喰タル科^{トカ}ニテ人ノ命ヲト
ルベキニアラズ、死ザルホドニク、ルベシ、然ドモ解^{ホドク}
コトアルベキトテ、封印ヲ付サセ玉ヒ、一日置レツ
ツ、重テカヤウナル心持スベカラズト戒メ玉ヒテ、索
ヲ解セラレタルトゾ、又松平右衛門大夫正綱公ハ、御
祖父秀綱公ノ御次男ナリシガ、御當家ノ御先祖松平
信光公ノ末子備中守ノ後胤、松平甚左衛門正次ノ御
養子トナリ玉フ、是三河十八松平ノ内ノ長澤ナリ、此
正綱公ハ御叔父ナレバ常ニ多クハ彼館ニマシ〜ケ
ル、御幼少ナガラ智慮ノヒラカルベキ端ニヤマシ〜
ヌラン、正綱公獨座ノ處ヘ行セ玉ヒ、私コソ願ヒ申上
度事アレト長四郎君宣ヒケレバ、夫ハイカナル事ニ
ヤト問セ玉ヒシニ、別儀ニモアラズ、某ハ御代官ノ外
様^{サマ}モノ、子ニテ口惜クコソアレ、恐ナガラ御苗字ヲ
下サレ御養子ニナラセタキ旨ヲ宣ヒケル、正綱公打
笑ヒ玉ヒテ、流石幼ナキ丁簡ニテ何トテ本名ヲ捨テ
我養子ヲバ望ムヤラン、最不審ク尋テ玉ヒケレバ、重
テ願ヒ玉ヒケルハ、本名ニシテハ上ノ御近習叶ヒガ
タシ、御養子ニ成申ホドナラバ、若ヤ御座近ク御奉公
モ成ベキヤト、斯ハ存ズルト、最オトナシク宣ヒケル

ヲ聞玉ヒテ、正綱公不便ガラセ玉ヒ、サアラバ養子ト
スベシ、但シ父母ノ方ヘモ達シテ後ニコソ、苗字ヲバ
彌許サメト、挨拶マシ〜ケルニ、長四郎君マツ此段
ヲワガミヨリ兩親ヘ今宵早速申遣ストテ、今日ヨリ
シテ松平ヲ名乗申セバ、爰モトニコソ宿ラメトテ、其
夜ヨリ直ニ正綱ノ宅ニ止宿シ玉ヒケル、正綱公ハ兩
親モイカバ思ヒ玉ハン、勸メテコソトオモハルベケ
レト宣ヒケレバ、モハヤ申遣シタリ、今日ヨリシテ松
平長四郎ゾト悦ビ玉ヒケル、コレ信綱公ノ八歳ニナ
ラセ玉ヒシ時ノ事ナリ、カ、ルコト、台聽ニ及テ、サ
スガ右衛門大夫ガサヤウニ不便ニ存ズル者ナラバ、
召仕ハセ玉ハントテ、其翌年大猷院様御誕生ニテ、竹
千代君トキコヘサセ玉フ御方ヘ、御小性ノ列ニゾ入
仕シ玉ヒケルトコロニ、台德院様上意ニ、竹千代様ノ
御重寶ニ成ベキモノト御目利アレバマヅ御ツカヒコ
マセ玉ヒ進セラルベシトアリテ、則御ツカヒナサレ
シトナリ、凡御小性ノ列座ニ仕フマツルニ、御用ニテ
召ル、ニハ何事ニテモスベテ座次ノ順ニ應ズル御作
法ナレバ、各其定メヲバ守リナガラ、皆若輩ノ集リナ
レバ、我儘ヲフルマヒテ御次ヘ出テ休ガチナレバ、長

四郎君常ニ其闕ヲ補テ詰所ヲ退事ナク、毎度詰越御用ヲ承リ玉ヒケルニヨリ、上機根モノヨト御目ニトマリケルトゾ、又或時御大奥へ御劔ヲ爲ニ御持、御夜詰過テ丑ノ刻時分、長御廊下ノ幽暗所ニ御劔ヲ持テ伺候シ玉ヒケル處ニ、表へ出御ノ時分ニ、長四郎君假寢居士ヒケル所ヲ、御劔ヲ引取セ玉ヒテ御持歸リアレバ、長四郎君ハ誰トモ覺ヘズ知ズ、フト目ヲ覺玉ヒツ、ヤルマジキトテ追カ、リ、台徳院様へ取付セ玉フニヨツテ、公ニテマシマニナリ奇特ナル小兒カナト御感ナ、メナラズ、此心一生放ナト殊ノ外ノ御褒美アリシ、又或時台徳院様御秘藏ノ屏風御次ノ間ニアリツル處ニテ、長四郎君ヨリ年マシノ衆中ト戯玉ヒ、夫ヲ打ヤブリ玉ヒシニ、出御ノ節コレヲ御覽アリ、何者ノワザゾ、御次ノ間ニヲイテカヤウノ事何トテ仕リタルヤト御意ナレバ、戯タル衆ハ詞モナクテ居ケルニ、長四郎君十歳バカリノ事ナレドモ、私シカクノ事ト小聲ニナツテ御側ナル衆マデ申上サセ玉フヲ御聽アリテ、能ゾ正直ニ言上仕タル者カナト却テ御褒美ニテ、サリナガラ重テタシナミ申セト上意アリシトナリ、又長四郎君幼少マシケル時、御城ニ寢

宿シ玉フ時、葵ト申女付テ參リタリ、大カタ時々ノ飯ヲスキト喰キリ玉フコトナク、汁ヲカケラレテモ皆マデ喰ラズ、御召ナリテ御前へ出サセ玉ヒ、御用シマヒ歸ラセ玉ヘバ、冬ナドハ飯已ニ氷リテ外ニハ飯モナケレバ、湯ニ漬サセ喰ルコト度々ナリキ、夏ハ蚊帳ヲツラセ玉フコトナク、夜更マデモ御奉公ナサレテ行倒ニモ寢イラセ玉フヲ、朝倉筑後守殿見イダサレ、サテ笑止カナ蚊ニクハレ玉ハントテ蚊帳ヲ引カケラレタリシ、後マデ其ヤウナルコトヲ覺サヘ玉フニヤ、朝倉黨ノ衆へハ御心ヲ添サセ玉ヒケルトナリ、或時御臺所ニテ飯ヲ喰玉フ、是十歳前後ノ時ニモアリケルカ、其時ノ御老中酒井古雅樂頭殿、土井大炊頭殿、青山伯耆守殿、其外歷々アラレケル所ニテ、召セラル、ト聞メシ、箸ヲモナゲステ膳ノ上ヲハ手越走リテ御前へ出玉フ體ヲ正綱公見玉ヒテ、宿所へ歸ラセ玉ヒ、長四郎君ヲ呼セラレ、今日御臺所ニテノ爲體ヲ見玉フニ、サテ尾籠ナル形勢カナ、思フテモ見ラレヨ、雅樂殿始御老中歷々座シ玉フ中ニテ、前後不辨フルマヒ詞ニ絶ヘタリ、不禮千萬ナルト悲ミ泪ヲ流玉ヒテノ教訓ナリキ、長四郎君謹而宣ヒケル、御

意至極ニ奉_レ存候、外ヨリハ不禮トモ見ヘ可_レ申候ヘ
 ドモ、今日ニ限ズイットテモ召サセラル、時分ハ、他
 ヒラモ見_ラレズ、誰ノ側ニ居玉フモ思ヒモ出サレズ、
 少モ早ク罷出度奉_レ存ノ心バカリニテ、御前ノ儀ヲ一
 心ニ大切ニ奉_レ存ノ外無_ニ他念_一イソギ玉フ旨ヲ宣ヘ
 バ、正綱公大キニ悦ビ玉ヒテ、夫ホドニ君ノ御事ヲ大
 切ニ奉_レ存候哉、御影間_{カゲラ}クナキソノ心ニテハ、必定立
 身仕リ、御用ニ可_レ立トテ、感涙ヲ流サセ玉ヒケルト
 カヤ、又江戸葭原古ハ夥シクシギリテ、ヨシキリトイ
 フ鳥多クアレバ、稻葉古丹後守殿ト御伴アリ、十歳バ
 カリニナラセ玉フ時ニ、人數多ツレラレ、カノ鳥ヲト
 ラセ玉ヒ、夕陽西ヘ傾ク時分ニナリ、老功ノ者ドモア
 ガラントスルニ斗ヲ失ヒ、日暮テ御城ヘ入セラレガ
 タケレバ、イカバアラント皆々アケレケルニ、長四郎
 君ノ宣フハ、日ノ入ハ西ナリ、御城西ノ方角ナレバ、
 日ノ入ヲ目アテニシテ出ラレヨトアリツレバ、各一
 同ニ感ジテ、ソノ下知ニ隨ヒ、ナンナク出玉ヒ、御城
 ヘ入セ玉ヒケルトナリ、又十歳バカリニナラセ玉フ
 比ニモアリシニヤ、御殿ノ屋上_{ヤネ}ノ瓦_イヅキノ間ニ雀ノ
 巢ヲクヒ、子ヲウミタルヲホシク思召ケレドモ、晝ハ

人目モアルユヘ、上リ玉フヲ遠慮シ玉ヒテ、晝ノ内ニ
 瓦ヲカゾヘ、幾メニ雀ノ巢アリト考置玉ヒテ、夜ニ入
 屋脊ヘ上セ玉ヒ、瓦ヲカゾヘ、其所ヘ御サガリアレ
 バ、案ノゴトク所タガハデ雀ノ子ヲトラセ玉ヒ、ウレ
 シク思召イソギ下玉ハントシ玉フ所ニスベラセ玉
 ヒ、箱樋ノ中ヘ落入玉フニヨリ、ツリ金物キレテ、樋
 ハ庭上ヘ落ケル、ソノ響ヲビタバシク聞ヘケル、御仕
 合ヨクテ樋ノ中ニ入セ玉ヘバ、アヤマチハシタマハ
 ザリキ、御殿ドヨメキ渡リ、是タバゴトニアラズ、誰
 ゴ出テ見ヨト詮議マチ_ナナルユヘ、難義シタマヒ、
 マヅ御縁ノ下ヘシノビ玉ヒ、内ノ様子ヲ聞セラル、
 所ニ、女中衆恐テ出ベシト申モノナカリケル所ニ、御
 中居ノ内ニ器量モノアリテ、イツニテモアレ、カヤウ
 ナル時分ハ我コソアラヌト匂テ、提灯ヲ持出テ是ヲ
 見ルニ、御殿ノ樋オチタリ、別ノ事ナシト云テ、早々
 内ヘ入タルユヘ、嬉ク思召テ、内ノ鳴音_{ナリオト}ヲ密ニ聞セ玉
 フ、何ノ沙汰モナキユヘ、ソト戸ヲアケ内ヘ入セ玉
 フ、其後大御臺様御意ニハ、御殿ノ樋ツリ金物ニテツ
 リタルニ落ベキヤウナキニ、タバ事ニアラズトテ高
 僧貴僧ニ被_ニ仰付_ニ御祈禱アリシニヨツテ、思召ハ我

ユヘナルニ、上々様御氣遣ニ思召ル、ヲ、我何ヤウノ
死罪ニ被^レ仰付^ト云トモ、君ノ御ナヤミアル事ニ、是
ヲイカデ隱シ置ンヤト思召、女中衆ヲ頼マセ玉ヒ、春
日殿マデ申サセ玉ヒケル處ニ、早々御臺様御耳ヘ達セ
ラル、所ニ、サアラバ何ノケチニモナキト御安堵ナ
サル、ナリ、幼少ナル身ニテハ一入申上マジキ所ニ、
君ノタメヲ大切ニ奉存ル眞實アリ、汝ガ身上ノ義ヲ
思ハズ、萬人ニ勝レタルモノニナルベシ、竹千代様御
爲御重寶ナル御人ニナリ申ベシ、然バ一入後ノ爲ヲ
思召ケレバ、コラシメニ袋ヘ入ヨト御意ニテ、イタハ
シクモ袋ヘ入ラレ、殊ニ符印ヲ付サセ置レケルユヘ、
女中衆寄合イタハシノ長四郎殿哉、咽^{ノド}ハ渴玉ハズヤ、
飢ハナキカ、大小便ノ用モアルベシ、イカバザトイ、
テ、涙ヲナガシ啼^{ナカル}衆中モアリト聞ヘケル、ソノ時袋ノ
内ヨリ各夫ホド思召イタハリ玉フカヤ、シカラバ此
方ヨリ申ニアラバ、クルシカラズンバ、袋ノ縫メヲ解
テ御出シアリテ用ヲ叶ヘサセ、又入玉ヒテ縫セラレ
置玉ヘカシト宣ヘバ、サテ〱年オイテモ及ヌコト
ヲ申玉フ者カナトテ、頓^{ヤガデ}ホドキ食物ナドヲアタヘツ
ツ、又入テモトノゴトク綻^ハ縫ヒ置レケル、ヨク〱

コラシ
懲メ玉ヒ御タイホウタテナサレテ免シ玉フトナリ、
又御殿ノ隅柱^{スミバシラカモ井}鴨居ノ上ヘ御上アリテ、繩ヲ下テ女中
衆ノ通ラレケルヲ、夜中引タヲシ笑ヒ玉フヤウナル
ワルサヲモシ玉フトナリ、又御臺所前ノ石垣ノ鼻ヘ
出玉ヒ何ホド跟^{カト}力、リタルヤト同ジ年比ノ御小性衆
ト吟味合ナドシ玉フトナリ、又御祖父休心翁ト七ノ
間ノ座布ニ御寢起ナシ玉フ、十一二歳ノ比トカヤ、休
心翁ノ御孫ナレバ、冥加ニ叶ヒワザモヨカレカシト、
嘸^ナヤ思召ツラン、殊ニ實儀ノ勇力アルヲ見玉ヒテ、イ
カバカリカ大切ニコソ仕玉ヒツレ、其休心翁ノ御舉^{フル}
動タバ人ニアラズ、其比時メク出頭ノ老臣達ヲ七人
迄目相シ玉ヒ、長四郎君ヘ是ヲヨク合點セラレヨ、長
生アラバ一人モ外マシキゾ、見ヨト宣ヒシ所ニ、休心
翁御存生ノ内三人歟身躰ツブレタルヲ、アレヲヨク
見テ知ト仰ケル、殘ル四人モ皆宣ヒシニ差^{タガハ}ザルナリ、
七人ノ内一人ハ咄シ玉ハズ、所謂其人ハ本多上野殿、
大久保石見殿、古田織部殿、伊奈備前殿、福嶋大夫殿、
大久保相摸殿ナドニテアリシ、此衆ノ内、或人ハ人ノ
生立^{ソダツ}ヲ押レシ身躰潰^{ツブル}ベケレドモ、イカニシテモ又御
奉公ヲ晝夜大切ニ務メラレケルユヘ、此天理イカデ

カナクナリ申ベキヤ、跡カスカニナリテ殘ルベキト
宣ヒシ、案ノゴトク十分一ノ身軀ニナリ申サレ今ニ
續コレアリシ、或ハ道理アレドモ、一人ヲ斬戮シテ百
人ヘ響、タスクル事モアルニ、我儘シタリトテ時ヲモ
カヘズ、百所ニテ百人殺シ玉ヒタル類ヒアリ、或ハ奢
ノ重疊シテ身軀ノ破滅モアリ、或ハ茶湯ノ和尙トシ
テ人夫ヲ惱セ、袖ズリノ松ハ八王寺ヨリ不來シテハ
ナリガタキヤウニイヒ、人足ニ骨ヲ折セ取寄セ、燒鳥
ニハ足ノ長キガヨシトテ、ケリニナクテハトイヒ、是
ヲ求メ、掛物茶入茶碗ノ具、大和ノ物ニテモ成マジキ
ニアラザルヲ、夫ヲ持ザル者ハ客ヲ請ル事モ耻カシキ
ト思フヤウニ、心ニ滿ルハ誰ノ所爲ゾヤ、皆以テ和尙
ノ口ヨリ出テ人ヲ惱ス報ノ彼和尙ヘキセズバアルベ
カラズ、然トキハ身軀潰ベシ、茶湯トイフハ隱居ナド
シテ、隙人ノ心ヲ清クシ、心氣ヲヤスメントテ茶ノ湯
ト云コト拵ヘテ、吸茶ヲシテ心ヲ樂ミ、親ミヲモウク
ル爲ナルニ、奢ヲ求メ、人ニモ浦山シガラスルハ何ノ
謂ゾヤ、何モカヤウノ類ヒナレバ、ヨクノ心得シテ
忠功ヲモヨクシ、孝行ヲ仕テ、慈悲ヲ面ニシテ、ヨキ
家頼ヲ持ベシ、善惡心ヨリ生ズルナレバ、油斷スベカ

ラザル旨、カヘス御咄アレバ、カヤウナル談儀ノ
節ハ、挨拶ナクシテハ無念ニ思ヒ玉ヒ、三角ナル枕ヲ
拵ヘ、深ク寢入玉ハザルヤウノ工夫シテ眞實ニソミ
祖父ノ談議ヲ聞玉フ、寒夜ニハ夜長キ時分祖父ノ小
用ニ出玉ヘバ、幼稚ナレドモツト起テ戸ヲアケタテ
シテ、祖父寢玉ヘバ裾ヘ衣類ヲカケ、足冷ザルヤウニ
シ玉フ、十歳バカリノ人ノ教ヘラレズ斯アルハ、其御
志ノ類ナキコトヲ推テ知ベシ、爰ヲ思フニ、休心翁ノ
名、人トシテ幼少ノ孫ヘノアシラヒヨリ起レルモノ
ナリ、又長四郎君幼マシケル時ニ、或人ノ相シテ
イヒケルハ、行末善人ニナラセラレバ、日本ニ隠レモ
ナキ希ホドノヨキ人ニナラセ玉ハン、サナクバ隠レ
モナキホドノ惡人ニナリ玉ハント申ケルトナリ、
○長四郎君十五六歳ノ比久々煩ハセ玉フユヘ、御拜
領ノ御切米ヲ差上養生仕リ御奉公申上度旨言上マ
シマシケル所ニ、緩々ト養生仕ルベシ、御合力米モ其
儘拜領イタスベキ旨仰アレバ、則在郷ヘ御引込マシ
マシテ、鷹ヲツカハセラレ、野山ニテ氣ヲ散ジ玉ヒケ
ル、其前御息災ノ内食事ヨク喰リケルユヘ、皆人長四
郎殿ノ食餌ハ雪霜ナドノ消ルゴトクニ進ミ申ト云ニ

付、ソレニノラセ玉ヒ覺ヘズ脾胃ヲ損サセ玉フト仰
ラレシ、是ニヨリ鷹ノ肉アテガヒノヤウニ、病鷹ニハ
糊餌ヲ飼、コ、ロヨクナレバ骨ヲタ、キマゼソバロニ
アゲサスルナリ、其ゴトク程ヨク覺ヘ玉フ時ニ、秤ニ
テ飯ヲツモラセ玉ヒ、十粒二十粒ツバ増玉フヤウニ
ナサレ、快氣シ玉ハンソノ時分ニ、却テ御本復アルベ
キ躰ニモナク鳥ナキナド惡ケレバ、タ、リ事ヤト母
君氣遣セ玉フニヨツテ鳥ノムラガル方ヘ人ヲ遣シ見
セ玉ヘバ、死馬ニ鳥ノ付タルヲ見テ來リケルヲ母君
ヘ告サセラレ、安堵ノ思ヒヲナサシメ玉ヒケル、孝行
モ他ニ殊ナル人ニテマシ／＼ケル、御本復アリテ明
日御奉公出サセ玉ハント思召ケル夜ノ御夢想ニ、大
猷院様御上段ニマシ／＼タル所ヘ出サセ玉ヘバ、上
意ニハ久々相煩ヒトヲノキ申トテモ、御心ニカハラ
セラル、事はナケレバ、少モ氣遣ナク前方ノ通リニ
ジツヲ仕ルベキ旨仰セ出サレ、御手自御召アソバシ
タル御服ヲ頂戴マシ／＼ケルト見玉ヒケルガ、御出
仕ノ當日、其夢ニ少モ違ナカリシ、幸ハ冥加ニ叶ハセ
玉フ御人ナリトゾ、又大猷院様御鐵炮稽古場、只今會
根源左衛門ガ後ノ土手ノ邊ニテアリシ、其時分ハ今

ノヤウニナク、近藤勘右衛門ガ屋布ノ後ナドヲ通ラ
セ玉フヨシ、足輕ドモノ居屋布ノ境ノ垣モ宛相ナル
躰ト見ヘシ、御供ノ衆モ大勢通り、勘右衛門所ノヨキ
雞ヲ貰セ玉フ、サテ御鐵炮場ヘ出御ニテ鐵炮ヲ放サセ
玉ヒタルニ、虛炮シタルユヘ、藥込ヤウアシキユヘニ
ヤト上意ニテ、傍ニ置セラレタルガ、折節別ノ事マシ
マシテ失念アソバシケルヤ、フト筒口ノ方ヘ御身向ハ
セ玉フ、其時長四郎君ハ病後ユヘ、御前遠ク扣ヘサセ
玉ヒツルガ、走リカ、リ御筒ヲ足ニテ蹴ノケ玉ヒシニ、
ソノ、チ火ウツリ丸ヌケタルナリ、各奇特ナル事ト
肝ニメイジ感ジケル、是ニヨリテ青山伯耆守殿傳老臣
タルユヘトリアヘズ長四郎君ヲ旁ヘ招テ、只今ノ舉
動詞ニ絶タル忠節ナリ、御家人數萬人アリトイヘドモ
及ガタカルベシ、彌以テ身ヲ全フシテ長ク忠功ヲ盡シ
玉ヘ、類ヒナキ人ナリト泪ヲウカベ褒美シ玉ヒシトゾ、
又御寢所ノ御次ノ間ニ御用心ノタメニ臥玉ヒタルニ、
後指ノ心ニ出入ノ戸ヲ足ニ踏ヘ臥サセ玉フトナリ、
○何比ニテカ有ケン、大猷院様眩暈ヲ煩ハセ玉ヒシ、
ソノ折節日光御造營アリケルユヘ、上様ノ御機嫌ヲ
見合テ、其造營ノ事ヲ度々奉行衆御前ヘ出テ伺ハレ

ケレドモ、御神前ノ反橋ナレバ、渡リヨキヤウニテハ見分アシク、又渡リニクキホドニツモレバ往來ナリガタキナリ、此事ヲ申上ラレシ、サレドモ埒明カチ、ヨホド御退屈ニ見ヘサセ玉フユヘ、長四郎君其比ハ伊豆守信綱公ト申ケルガ、聞カチテ仰上ラレケルハ、サシ玉フ扇子ヲヒラキ、是ハ三ツ合テ丸ク御座候、コノ反カゲンニ可レ仕ヤ、是ホドニ可致ヤト、扇子ヲ一間ツツタ、ミヒラキ伺ハセ玉ヘバ、其位ヨシト上意ニテ、則時ニ橋ノカウバイ相極リ、御機嫌ノコル所ナシ、是頓作ユヘ、ヨキ譬ヲ申上玉ヒ、上ニモ御機嫌ヨク、奉行衆モ悦ビタルト、御次ニテ聞人感ジケルトナリ、或ハ是二ノ丸廊下橋ノコウバイトモ云、或ハ西ノ丸ヘ成セラル、時、ソノ御道筋ノ堀ノ橋作り直サレントシ玉フ時トモ云、イヅレ眞僞ハシレチドモ、是ゾ上意ニ叶セ玉フニヤ、其日則五百石ノ新恩ニ浴シ玉フト聞ヘシハ、是ヤ御出身ノ初ニテ、段々御加恩ヲ得玉ヒツ、七萬五千石マデニナリ、侍從ヲ經サセ玉ヒ、天下ノ老臣第一ノエラビニテ、御養父ノ名ヲ揚玉フノミカ、御實父母人悦ヲナサシメ玉フゾ、即天命ヲヨク盡玉フ人トイフベシ、此大河内ノ松平ノ根源ハ、源

三位頼政卿ノ末葉ニテ、紋所ハ浮線綾三ツ蝶ノ舞テ用ヒ玉ヒケル、信綱公ヲ以テ此松平ノ總領家ニ仰付ラレシユヘ、實子方ハ次男ニ成ニケル、三ツ蝶ノ形ハ開キタル扇子ニ似タルユヘ、一ツハ扇子ヲ開キテ身ヲ立玉ヘバ、旁又三ツ扇子ヲ用ルトモイフ、長澤松平ノ紋ハ笹リンドウナリトカヤ、又大猷院様御病氣ノ時分、俄ニ御灸ヲナサルベシト仰セ出サレ、藁ミゴヲアゲヨト御意アレバ、御小性衆畏リ奉ルヨシニテ、藁ミゴヲ相タヅテラルレドモ、御城中ノ事ナレバ、俄ニ無レテ、御春屋御賄ノ方ヘ申遣シケル、其内ニ遲キトテ御セキナサル、御機嫌少シ損タルヨシヲ信綱公聞セ玉ヒ、ソレハ何ユヘト御小性中ヘ尋サセ玉ヘバ、シカクノ様子ヲ述ラル、夫ヲ聞玉ヒテ宣フハ、御疊ノアタラシキガイカホドモ有レ之、ソレヲ切サキ見ラレヨト仰ケレバ、實ニモトテ則アタランキ御疊ヲ切サキ、即時ニ藁ミゴヲ取出シ、御用ヲ相達セラル、トナリ、又同御代俄ニ御朱印ヲ押ル、事アリシ時、總ジテ御朱印ヲ押ニハ、紙ノ下ニ木綿ワタヲ敷押チバ印肉付ニクシ、然レドモ急ニハ木綿ワタナキユヘ、既ニ町ヘ申シ遣スベキ所ニ、信綱公聞セ玉ヒ、ソレハ御納

戸ニ長崎ヨリ來ル御道具ヲツメタル木綿ワタアルベシ、是ヲ取出シ申サレヨト宣ヘバ、則タヅテタクサンニ持參リ、是ヲシイテ御朱印ヲ押ケレバ、殘ル所ナシ、マコトニ人ノ心ツカザル所ニ如此トナリ、又御主殿ニテ蚊多クシテカヤノ木ヲハヤクタカセヨト上意アレドモ、急ニハ有カテ何モ何ト仕ルベシヤトバウマヒノ所ヘ、信綱公參リアハセ玉ヒ、上意ヲ聞テ、早ク御納戸ヨリ碁盤ヲ取出シ割テ燒ラレヨト宣フ、其ゴトクニシテ早速間ニアヒ御感アリシトナリ、○大猷院樣或時御夜詰ノ比、鷹ノヲキ繩ノヤウナル夥シク長キ絲ヲ卷タル物ヲ、コノ長サイカホド有ベシヤ、急ニ積テマイレト仰出サレ、則御小性衆御細工部屋ヘ持參イタサレ、イロ／＼ツモリ見ラケレドモ、限リナキ長キ絲ヲ卷タルモノナレバ、中々即時ニハ知ガタシ、御前ヨリハインガセ玉ヒ迷惑仕タル所ヘ、信綱公參リ玉ヒ、ソノ積リニテハ即時ニハ成ガタシ、安キ事アリトテ其絲ヲ^{ヒロ}尋ヒロイテ、此絲目ヲカケ、其重サヲ以テ、カノ大マキノ目ヲ貫目ニカケ、算盤ニテ積リ、ソノ長サヲ申アゲケレバ、即時ニ埒明、御機嫌ノコル所ナシ、又日光御成ノ時分、酒井讃岐守殿ヘ

道中御用ノ御書モノ御番割等ノ卷物渡シ玉ヒ、此通リ只今總ヤウヘ數卷相調觸^レベシト上意ニ付、讃岐殿御表ヘ持出ラレ、御右筆衆大勢アリトイヘドモ一卷ヲ寫シ申ス事ナレバ、急ニハ調ガタク、何ト仕ルベシヤト、御右筆衆ヘ御申シアレドモ、御右筆衆モ智慧ニ及ハズ、兎角ノ御挨拶モナシ、讃岐殿アセリ玉ヒ、御前ノ御用モ頻ニテ、何トカト御思案アリシ所ヘ信綱公通ラセ玉フヲ見カケラレ、何トゾ豆州ヘ頼ミタシ、御用ニテ御前ヘモ早ク出申シタシ、何トゾ／＼トアリケレバ、信綱公何トゾ仕ヤウモアルベシ、マヅ御前ヘ早々御用ヲ達シ玉ヘ、書モノ、義ハ心得玉フト宣ヘバ、頼ミ申ス過分トテ奥ヘ入ラレケル、其時御右筆衆ヲ數多呼ビ玉ヒテ、卷物一枚ヅ、ハナシ、相印ヲシテ一人ニテ二三枚ホドヅ、書セテ續合セベシ、手ノ違タル分ハ苦カラズト仰アレバ、ソノゴトクニシテ即時ニ右數卷ヲ書デカシ、按合マデスミテ渡シ玉ヘバ、酒井氏コトノ外感ジ、淺カラズ悦喜アリシトゾ、○御本丸カ西ノ丸ニテカノ事ナリシ、御能ヲ仰付ラレシ時、俄ニ屏ヲ掛サセ申ベシ、植込^{ウエグミ}ノアナタ見ヘスキアシキユヘ、急ニ白土屏ニイタセト上意ニテ、奥ヘ

入セラレ、一時アマリノ間ニテ出御アリシニ、最早白土ノ屏カケサセ玉フ、是ハ方々ノ御矢倉多門ノ土戸ヲハヅサセ立並カスガイニテ鑑ニテシメサセ玉フトナリ、又二ノ丸御庭ノ中ニ大石アリシ、或時大猷院様御鷹野へ成ラセラル、日ニ還御前ニ此石ヲ屏外へ出サセ、砂ヲ敷置申ベシ、御シナヒ打ノ場ニナサレベキアヒダ、ハヤク今日中出來置ヤウニ、阿部對馬守殿へ仰セ付ラル、ソレユへ早速破損方ノ奉行衆ヲ呼テ相談アルハ、表へ出シナサレベキヤ、御人足ハイカホドモ成ベキ事ナレドモ、御橋モ損ジ、或ハ御屏ヲ取セ、御石垣ヲ崩シ、假橋ヲカケンヤ、然バ御屏急ニハカケ直シニク、アルベシ、コレヲバйкаアルベシヤト取々ノ了簡ニテ一決セザリシ所ニ、信綱公退出シ玉フトテ、平川口ヨリ出玉フユへ、幸ト對馬殿申サレケルハ、カヤウノ上意ニアレドモ何トモ分別ニ及ビ難キユへ、破損奉行衆へモ談合イタシタレドモ難レ及、何ト致シ方モアルベキヤ、ワザトモ申度存ズル所ニ、幸ニ通り玉フユへ申スナリ、其儘サシ置テハ、手前ノ不調法ハトモアレ、御機嫌ノ程迷惑仕ル、何トゾ御了簡頼入ナリトアレバ、信綱公取アヘズ何トゾ夫ハ仕

方アルベシト答ヘ玉ヘバ、サアラバ御申付給レト對馬殿宣ヘバ、又答玉フニハ、コナタヘ仰付ラレシ事ヲ指出テ申付ル義イカバアルベシヤト宣ヘバ、其段ハ私ナラザルユヘ頼ミタルト申上レバベツノ事アルマジヤ、イヅレノ道ニモ御機嫌ヨキヤウニトコソ存ジ奉マツレ、一向ニ頼ミ申ス、人足繩車シユラナドハ何ホドモ出サセ申スベシ、呼寄近所ニ置ナリ、砂モ急ニ取寄オクベシト、最前早申付タリ、其段ハ御手ヲツカセマジキト宣ヘバ、サアラバトテ大石ノ際キヲ深々トホリ申セト宣ヘバ、手々ニ石ノキハラホルユヘニ、一時ノ内ニ數百ノ石皆々埋込、砂ヲモ布テ掃除マデ相濟トナリ、對馬殿大方ナラズ悅テ禮アリシ、既ニ還御夜中平川口ヨリ入御ニテ、御挑灯ニテ御覺ナサレ、其所ニ對馬守罷在バ、サテ、早ク掃除マデ仕リ御快ク思召ルナリ、是伊豆守ニ頼ミタル物ニテヤト上意アレバ、其通りタル旨御請アレバ、サヤウニアルベシト御笑アルトナリ、其石今ニ御庭ノ土中ニアルヨシ、此格言末々承リ傳テ、箱根檜木坂ノ巨石カシノキ往來ノ爲ニ難義ナル分ヲバ、或ハ埋或ハスリキラセナドシケルモ、是ヲ摸シタル事トカヤ、又一年大坂ノ御天守へ雷落鹽硝ハ

子ケル、時二十人計リシテ持ホドノ大石ヲ御天守ノ二重目ヘハ子上タリ、是ヲ下スニ夥シク造作カ、リケルユヘ、奉行衆イロ／＼ツモリケレドモ落着セズ、其比信綱公上使トシテ上リ玉ヒケレバ、此由申サレテ伺ヒアレバ、答ヘ仰アリシハ、ソノ石ハ石截キリヲアゲテ碎々ニ切テヲロサセヨト宣ヘバ、則其通リニイタシ、手間モ入ズ、暫時ノ間ニ石ヲクダキ下シケルトナリ、又朝鮮國ヨリ來朝ノ馬藝上覽アルベキ旨、俄事ニテ八重洲岸八町ノ地ヲ馬場ニ相定テ、後先ノ境ニ違土居ヲ築立ルヤウニト御普請奉行ヘ仰付ラル所ニ、明日ノホド、アリテ、少モ日數ナケレバ、遠所ヨリ土ヲ持連ハコビツキタツテ築立ル事叶ヒガタク、龍口端ニテ掘テ土ヲトラバ、其跡ノ目ニカ、リ宜カルマジキ、殊ニ晴場ナレバ見苦シカルベシ、イカバアラントアリシヲ、信綱公宣フハ、和田倉ノ内ニ御材木積置アイダ、是ヲ以テ組立テ、其上ニコマヒヲカキ、壁ノゴトク塗テ、其上ヘ芝ヲ付サセベシ、是ニテ二三日ノ内ニハ芝モアシクハ成マジキト差圖シ玉フユヘ、早速其通リイタシ、間ニ合テ人々感入ケルトナリ、或ハ町中ノ籠作リニ仰付ラレテ、長サ一丈許高サハ馬場土手ノ積リ

ヲ以テ數百千籠ヲ拵サセ、段々ニ並ベテ其籠ノ上ニ芝ヲフセケルトモイフ、イヅレ夫ヲ手本ニシテ、後々ノ曲馬アリシニモ馬場デキタルトナリ、

○禁中御普請アリシ時、御座間ノ天井縁ヲ、白木ト塗木トハ御入目過半ニチガヒタルニ付テ塗セベシト信綱公宣ヘバ、奉行人申サル、ハ、天子ノ御頭ノ上ハ漆ウルシヲアゲザルモノト承リケルト挨拶アレバ、サラバ御冠ハイカバト宣フニ付テ、皆人尤トアリテ塗縁ニナリケルナリ、又大猷院様ノ御代御天守建直シノ時分奉行中ヘ御吟味アル、其時信綱公ノ宅ニテノ事ニテ有ケル、奉行中呼セ玉ヒテ相談マシ／＼ケル、鈴木修理木原内匠等申シケルハ、御天守ノ白壁度々雨風ニ落修復イタシガタシ、シカルユヘイカホド土落テモ見ザルヤウニ、下塗ヨリ白土ニテ塗オイテハ、右ノ破損ツクロハズシテ見ベカラズ、然ルニ是ヲスリテ寒暑ニ逢テモ損ゼザル子リ土ノツヤ是アリヤト尋玉ヘドモ、シカト致タル證據ナキ子リ土ノ法バカリナリ、其時ニ信綱公宣フハ、火事コレナシトモ御天守ノ御破損大カタ當年時分ニ當ルベキヤト存ジ、二十年前

ヨリ此心アリテ、チリ土ノ法ヲ吟味セシメ、五品コシ
 ラヘ、其比ヨリ今日マデ寢間ノ前ニサラシ置ケドモ、
 此チリ土ノ法ハ損セズヨシトテ張枕木トノチリ土ノ
 形ヲ五ツ奉行衆ノ前ニ出シ玉フ、則此法ヲ以テ御天
 守ヲヌレバ、其後御天守ノ破損ナシトカヤ、一説ニハ
 御天守ノ白壁毎度風ニタ、キ落シテ、修復ノ足代以
 下取シタ、ムル事見苦シキヲ、信綱公見玉ヒテ下知
 シ玉フニハ、荒ウチノ下壁ヨリ白土ヲ用ヒヨ、ダトヒ
 少々落テモ崩レモ見苦シカラジトゾ申付サセ玉ヒケ
 ル、又紅葉山御佛殿煮土塗ニ仰付ラレケレドモ、昆^{ヒタ}
 雨露ノ度ニ艶色ハゲヌ、是モチヤンヌリ然ルベシト
 アリテ、少キ木ヲチヤンヌリニイタサセ玉ヒテ、居間
 ノ前ノ木ニカケ置テ試玉ヒ、其内ニ格別ハゲザルチヤ
 ンヌリアルヲ以テ塗セ玉フ、ヨツテ紅葉山御修復後
 今ニ損セザルナリ、少ノ事ナガラ其御志シ忠義タダ
 ヒナシト諸人申アヘリ、又御城中所々ノ忍ビ返シノ
 鐵釘一本ノ代金貳分ヅ、ト御鍛冶西市元申カケニケ
 ル、信綱公ハ聞セ玉ヒテ、イカニ御城ナレバトテ法料
 ナキ事カナ、奈良物トテ下々ノ指所ノ脇差、是ハヤ
 キバモアリ、少シハ鍊^{ヒタ}タルモノニテ釘ヨリ御用心向

ニモ宜シク、一腰ノ眞劔百匹又ハ十匁、是ヲ釘ノ代ニ
 用ラレヨト怒ラレテ、鐵モノ、代以下本當ニ極リケ
 ルトゾ、又西ノ丸御普請ニ付、地形一間モ二間モ所ニ
 ヨリ三間モ其一モ引セラル、事アリ、尤大木數々ア
 レバ、夫ヲ枯ザルヤウニ大事ニシ根ヲ包マハス事ムヅ
 カシク手間入事ナリ、其時分御手傳上杉彈正殿ヘ仰
 付ラレ、米澤ヨリ人數大勢來リツレドモハカ行ベキ
 ヤウナカリケルユヘ、信綱公ヲドケテ宣フハ、遠國ヨ
 リ御人足呼ル、事急ニハ成ガタシ、然バ御奉公ナガ
 ラ御大義ニ存ズルナリ、領分河越ホド近クアレバ、御
 用ニアラバ四五千モ其上モ人足ヤトハカシ申スベシ
 ヤト其家老共ヘ宣ヘバ、サテ〱忝ナキ御事奉存ル
 ナリ、御イソギノ御普請ニアレバ、滯リテハ不調法千
 萬ノ義ナリ、日用ヲヤトヒ申ス事ハナレドモ御城中
 ノ義ナレバ願慮スクナカラズ、御辭退スベキニモアラ
 ズト申ケレバ、サアラバ今日ニモ人足遣シ申スベキ
 カト宣ヘバ、成マジキト存ズルヤ、家老ドモ打笑テ、早
 速御人數御自由ニ呼セ玉フ事ヨト申ニ付、常々申付置
 手ノ下ヨリモ成^{モトアリ}申サウニ有^レト御笑ヒ、サアラバ
 各所望ニツキ一言ニテ人數ヲ數多進スベシト宣ヘ

バ何モ頭ヲ下ゲ御挨拶申タル、上杉ノ家老末々ノ奉
行ニ至ルマデ御普請場ノ事ナレバ大勢頭ヲアゲ信綱
公ノ御顔ヲ守リ罷在、ソノ時仰ラ、ルハ、逆モ地形ヲ
引セラル、事ナレバ、御樹木ニハ手付ケ申サレズ、傍
ノ土ヲ引申スベシ、サアラバ木ノ根ハ自然トアラハ
レ申スベシ、夫ヲ包ミ倒シ申テ何方ヘナリトモ指圖
ヲ請ウユルニハシカジト宣ヘバ、家老始歷々ノ奉行
人一同ニ感ジ奉リ、異口同音ニシテ悦ビアヘリ、御指
圖ノ通りニ仕ツレバ、是幾萬人歟ノ人足ヲ助ニナリ、
殊ノ外ハカモマイリタルトナリ、又御殿ノ井戸御屋
形ノ間ニテ入ザルユヘ埋ヨトアル相談ニテ、破損方
ノ衆コガヲ取、石垣ヲトラシナド、アリケルユヘ、重
テ御用ニ有ベキモハカリガタシ、其上土ニテ埋バ堅
リカチ申ベシ、所ニモ寄ベキ事ナリ、栗石ニテ埋サセ
ヨト信綱公宣フ、其通りニ仕ル處ニ、果シテ其後年隔
テ其井戸御用ノ時分誰モ覺ヘザリツルガ、此所ニ井戸
大方アルベキヤ掘セテ見ヨトアリツレバ、案ノゴト
ク前方ノ井戸アリテ再御用ニ立トナリ、何事モ今日
ノ事許ニアラズ、遠キ慮リヲナシ玉フト皆人感ジ奉
ルトナリ、又下谷町筋ニテ道奉行衆ヲ立テ大勢ノ

町人へ何角ト御成前ノ道ノ義ニ付水道ヲ二筋通シ申
セト申サレケレバ、地壘ヲ惜ミ一筋ニテモ水ハキ申
ストテ、トヤカクト手間ヲ取テ居ラレケル所へ、上野
道筋見分トシテ信綱公通セ玉フトテ是ヲ見玉ヒ、各
ハ何ヲ云玉フトアレバ、シカ／＼ノ趣ヲ申サル、ニ
ヨリ、町人百許モ出テイロ／＼ニ申スニ付、ソノ内ニ
テ頭立タルモノヲ廿人許呼出サセ玉ヒ鼻ヲ塞申セト
宣ヘドモ、町人合點仕ザルニ、指ニテ鼻ヲフサガサセ
玉ヒテ、氣ツマリ迷惑ニアリヤト宣ヘバ、難義仕ルト
申スニヨリ、指ヲ一ツ取ベシト宣フユヘ御意ニ隨ズ、
殘ル指モ取度ヤト問セ玉ヘバ取申度ト望、ソノ時殘
ラズ指ヲトラセ玉ヒ、夫デハイカバアルヤト宣ヘバ、
サテ／＼緩々ト仕リタリ、暫ノ間息タユルヤウニコ
マリタルト御挨拶申上ル、其節水道モ其心得セヨト
宣ヘバ、シバラク埒明申サズ、ツカヘテ合點セザル輩
皆々同心シテ一筋ト二筋ノワケヲ得道仕リ、早速埒
明、道奉行衆大キニ悦バレケルト美濃部一學咄申サル
ルトナリ、一説ニハ、旅籠町ノ下水道ノ水道三ツアル
ヲ二筋塞キ一筋ニ仕度ト、其所ノ名主ヲ始メ願ヒ申
トモ云ナリ、又西ノ丸御普請ノ時分、御老中始御側衆

ナド殘ラズ見分ニ出玉フ時、草履取ヲモ召連ラレザル所ナリ、折節雨後ノ事ナリキ、手ニトリテ御覽ナサル、事アリケルニ、雨ユヘ杖ノ先モ穢テ此置所ナク何モモテアツカヒ、トヤカクヤト他ヲ見合セ玉ヘドモ、杖ノ置所モナク、ソレヨリ先ヘ通り玉フ事アリツルニ、信綱公ハ袴帶ニ杖ノ柄ノ方ヲ指セラレテ、御腰ニ納メ玉フ、ソレヲ何モ見習ヒ、其通りニナサレケルトナリ、カロキ事ナガラ御心ノ働キヲ龜井伊豫守殿見テ感ゼラル、トナリ、此節御手傳ナルユヘ此場ニ在合シ右ノ家頼ノ物語ナリ、又酉年大火事ニ御城焼失ノ砌リ、御老中御城廻リ御巡見アリ、所々ノ様子書ツケニナサレケル時大手ノ邊ニテ硯水ナシ、ソレ水ヨトアリシ節、カナタコナタ見廻リケレドモ、燒アトノ事ナレバ奇麗ナル水ナシ、其時信綱公仰ニハ、アノ御堀ノ水トレトアリケレドモ、御堀深ケレバ急ニ取ベキヤウナシ、亦仰ニハソノ鎗ノ石突ヲ御堀ヘ入ベシ、ソノ雫ハ硯ノ水ホドハ澤山アルベシト宣フユヘ、奉行衆何カシ御尤ナリトテ御堀ヘサシウツムイテ鎗ノ柄ヲ入トラントシケル時、亦仰ケルハ、脇差鞘バシルベケレバ、脇差ノ反ヲ廻シ申ベシト宣ヘバ、畏ルト

テ脇差ノ反ヲ廻シケレバ、鞘バシル心ナク、心安ク水ヲ取ケル、水ヲ見出シ玉フサヘアルニ、脇差ノ鞘バシル事マデ心ヲ付玉フ事、誠ニ何事モ殘ル所ナキ智慧ナリト人ハ申シキ、又同年ノ事ナリ、火事後御作事ノ時分、御本丸所々ノ水溜マヘヨリ鉛ニテアリケルガ、火事ニトロケタルニヨツテ、此度ハ唐金ニテ仰付ラル、高サ四尺、長サ五尺、厚サ七寸、其數八ツナリ、シカルニ鑄師御入目ヲ夥シク申ケレドモ、是ヲ貫目掛ベキヤウナケレバ、此段ヲ信綱公ヘ奉行衆申サレケレバ、ソレヲ聞玉ヒ、ゲニハサヤウナルベシ、先入次第ニ申付ベシ、貫目ヲ以テ末ニ算用アルベキヨシニテ、奉行衆丁簡ハナケレドモ、先ヅ其通りニ致サルル、然ル所ニ信綱公宣フハ、水溜桶ヲベツ臨時ヲ申付ベキトノ事ナリ、奉行衆皆々オモハル、イラザル物ヲ一ツ御申付アル事何タル義ヤト當分丁簡ニ及バサリケレドモ、臨時ヲ申付ラル、サテ御普請終テ御勘定ノ時分、カノ唐金ノ入目鑄師夥シク申上ル、是ヲカケ見ベキ膝ナシ、奉行衆申サルハ、内々豆州ノ此儀ニ付一ツ餘計ヲ御申付アルユヘ、何トゾフクミモアルベキトテ、此儀ヲ信綱公ヘ伺ル、ソノ時宣フハ、其爲

ニ餘計一ツ申付ルナリ、タカ子ニテクダ／＼ニ切テ貫目ヲカケ手間ヲツモリ申サルベシト宣ヒケレバ、則其ゴトクニ致シ見レバ、貫目シレ、ヨク明ラカニ見ヘ、鑄師貫目ノ僞ナク、後ツモリケレバ、彼臨時一ツタ、キテモ、前方鑄師申セシヨリ御徳トナルナリ、奉行衆モサテコンカヤウノ義アルベケレト思ヒシトテ、肝ヲツプシ申サル、トナリ、

○二ノ丸ニテ火事ノ節、御小人衆屋脊へ上リ見テ、火事ハ遠キト呼リシラセタレバ、大目付兼松總州ヨクゾ火事ハ遠ト申上タルト褒美アリシユヘ、夫ホド譽ラルベクハ遠キ火事トイハデト仰ラレケル、少々ノ事ニテモソツノナキ御詞ト感ジ申ト御小人ノ咄シケルトナリ、又大猷院様御代御臺所ヨリ失火、御城殘ラズ焼失ス、其時火急ナルニ付、奥方女中衆大勢西ノ丸ヘ御移シナサレ度旨上意アレドモ、女中衆ノ事ナレバ、御殿ノ内西ノ丸ヘノ道筋同道ノ人スクナク御アグミナサル、所、信綱公御前ヘ參リ玉ヘバ此由イカガナサルベキヤト上意アル、則時ニ御請ニ仰上ラルルハ、畏リ奉ル、サヤウニ思召ル、ナラバ御奥方ヨリ西ノ丸マデ御道筋御疊ヲ一々裏返し布テ參ラル、ヤ

ウニ仰付ラレ尤ニ存奉ル、サアラバ道筋疑アルマジキト仰上ラレケレバ、御機嫌ニテ早々奥方ヘ仰遣サレケル、信綱公ハ大勢人ヲ召連玉ヒ、早速御疊ヲ裏返しアレバ、誰道引モナシニ、女中一人モ惑ズ西ノ丸ヘ即時ニ退玉フナリ、上様ニモ殊ノ外ナル御機嫌ナリ、聞人サテ／＼文殊トテモ此上ノ智慧ハアルマジキト申合ヘリトゾ、一説ニハ、御本丸御臺所ヨリ失火ノ時、當番ノ御方ノ御供御徒ノ衆其外御用アリテ御奥ヘ深クカケ入ケルヲ、公見玉ヒテ出入ニ道ニ迷ヒ申スベシ、所々ノ疊ヲハ子返し目印ニ致シ然ルベシト指圖アリ、シハヤ御殿ヘ火移リ火急右ノ御方々歸リ出ル時、件ノ目印ナキニオイテハ、中々出ガタカルベキニ、御頓智ノ印ユヘ滞リナシトナリ、右ノ節出御ノ時上意ニ、富士見御藏ニ入置タル見物ノ御道具ドモ日本ノ寶ナリ、焼失ナキヤウニ取出サセヨト信綱公ヘ仰付ラレ、御藏ヨリ取出シ、西ノ丸ヘ運行時ニ宰料ヲ付テ遣サレヨカシト脇ヨリ申ケレバ、其儀ニ及バジ何者ニナリトモ持セツカハセ、日本ニサヘアレバヨキト信綱公下知シ玉ヒシ、終ニ一品モ紛失ナキユヘ、後日ニ何モノノ御度量ノヒロキヲ感ゼシトナリ、又

其比御本九炎上ノ時分出御ナサル、朽木民部殿歟岡田淡路殿歟ニテアリシニヤ、其段ハ承リ失念セリ、奥方女中焼死申スベシ、不使ニ思召サル、誰ゾ參リタルヤト上意ノヨシ、伊豆守罷越スト其人申上ラレケレバ、サアラバ焼死セ申マジ御心易ク思召トノ御意アルヲ承リタルト、三好丹波殿ノ咄シ申サル、トナリ、又明暦三年丁酉年正月十八日十九日、御城中諸大名ノ屋布御旗本并町中家悉ク炎上、公方様ハ西ノ丸ヘ移ラセ玉ヒケル、其翌日殿中ニオイテ御老中ニ向ヒテ去御方宣フハ、今度ノ大火事は只事ナラズ、火事ト許思召レルナ、各御油斷ニテアルベシ、早速宮根碓氷小佛峠へ人數等差ツカハサレ然ルベシトナリ、其時信綱公挨拶シ玉フハ、如レ此ノ火事何カ度モ出來申スベシ、只何モ火ノ用心第一ニナサルベシト宣ヒケル、ソノ御調モ不レ違、毎度ノ火事ニモ異變ハナキユヘ、最前仰セ立ラレケル御方御後悔タルベシトノ、其十九日御城炎上、江戸中焼失最中ノ時、御譜代大名へ公ノ仰渡サル、ハ、火事ノ様子ニヨリ、公方様イヅレノ御殿ヘカ成セラルベキ間、總御曲輪外ソコト御指圖ニテ遣シ置ル、元ヨリ西ノ丸御座所トハ相定リ

タレドモ、自然ノ御警固ノ爲ナルベシ、其品トナク斯仰渡サル、ギ深キ御智謀ト皆人唱ヘ奉ルトナリ、大火事ノ其翌日、關東中在々所々ヘ相觸ラル、ハ、今度江戸ニオイテ大火事出來、御城マデ焼失致ストイヘドモ、少モ別條コレナシ、カヤウノ節ハ幾度モ出來申スモノナレバ、聊モ氣遣ヲ致サズ、當作ヲ油斷ナク仕付ルヤウニト、御使ハ小十人組ノ與力衆ヲ遣サレシ、コレニ依テ諸民承リテ安堵致シ、農業ヲ懈怠ナク相勵ミケルトナリ、同大火事ノ翌日、水戸黃門卿ヨリ御老中へ御内談ナサル、事有トテ御招請ノ旨趣ハ、今度ノ火事ノ體心元ナク思召サル、義也、然レバ紀伊殿尾張殿ハ國元遠方ナリ、吾等ハ領分近ケレバ隱密ヲ以テ少々人數召寄指置申スベキ間、自然ノ時分ハ仰付ラル、ヤウニ何モ相心得ラレ給ルベシト水戸卿宣ヒケレバ、參上ノ御方々何モ然ベク其意ヲ得奉ル、去ナガラ今日ハ伊豆守ハ殿中ニ相詰參ラザルユヘ、明日召寄ラレ、右ノ通り仰聞ラル、ヤウニト御挨拶ノヨシ、次ノ日信綱公參リ玉フ處ニ、右ノ趣ヲ宣ヘバ、此儀昨日何モ然ルベキ旨申上ル事一向合點參ラザル旨仰ラレシニ付テ、賴房卿はハ何タルオモハク

ニテサヤウニ申サル、ヤ、御手前一人各別ノ挨拶ノ由宣ヘバ、今度ノ火事天災ニテ、自今以後幾度モ失火ハ仕ルベシ、天下ノ氣遣ナル儀ハ聊モコレナシ、第一諸色拂底高直ニナリテ、諸人ノ迷惑此時ナレバ、何トゾ江戸人數減少ノ御仕置然ベキ所ニ、御隱密ニ御人數ヲ召寄玉ハバ其隱レ有マジ、サアラバ宇都宮古河岩付忍笠間土浦小田原ソレト聞及次第、イカサマ子細アルヤト忍々ニ人數ヲ召寄ナバ、江戸ノ居住ノ諸人難義ノヤウニナルベシ、御事サヘ欠申サズハ、御當地ニ差置ル、衆ヲモ御居城ヘ遣サレ御尤タルベシト信綱公仰ラル、ニ付テ、右ノ發企ヲ相止玉フ、其以後當地ニ詰ラル、諸大名御暇ヲ遣サレケルユヘ、遠國波濤マデコトク安堵シ、其上江戸ノ潤トナリ、殘ル所ナキ御仕置ノヨシ長崎奉行ヨリモ此段委細ニ信綱公ヘ申來ルトナリ、

○西ノ年ノ大火事以後モ、度々火事アリケルユヘ、火ノ本ノ制禁ツヨク仰付ラル、此故ニ信綱公家中モ火ノ本ノ法令嚴シク申付玉ヒ、先番所ノ莢ヲ堅ク停止致シ玉フ、折フシ屋布裏ノ上藏番ノ者、蛇カラニ火ヲ求メ忍テ莢ヲ吞テ、番所ノ壘ヲ少シ焦テケリ、目付ノ

衆是ヲ見出シ、則上ヘ訴ケレバ、立腹マシ、既ニ斬罪ニ仰付ラル、其後暫ク御思案アリテ仰セラル、ハ、下々ハ一度二度コラシメタルトテモ其ホド過ヌレバ其事ヲ忘レ又大事ヲナスモノナリ、去ニ依テ深キ罪科ハ磔ニシ、或ハサラシツナドスレバ、其後ハ久シク惡ヲナス事ナキモノナリ、サアリトテ御城近キ屋布ノ内ニ肆ベキヤウナシトテ、其比切支丹ノ目明シ右衛門作ト云油繪ノ上手ニ申付玉ヒ、火ヲ盜ミ莢ヲ吞テ壘ヲ焦シタル體タラク其旁ニ成敗ニアヒタル形ヲアリト板ニカ、セ、屋布ノ内ニテ人多ク往來スル所ニ立置テ見セシメニシ玉ヒケリ、又其年ハ知ラズ、其大火事前、後ノ事ナルベシ、信綱公ノ宅ヘサル浪人松ノ枝ニ言上ノ書付ヲ結付來テ申ハ、今時火事出來ト申セバ大燒ニ燒ルハ道理アリ、是火事ノ制度アソバサル、トイヘドモ、町中ニテ聞ザル事アルヲ、仰付ラレヤウニヨリテ夫ヲ用テ大燒アルマジ、御尋ニオイテハ忠節ノ事ナレバ申上ベシト大事ラシク詞ヲカザリ申ス、信綱公宣フハ、御爲第一ニ奉レ存申上度トテ罷越段神妙ナリ、何事ニヤト尋テ玉ヘバ、時ニ浪人申上ルハ、總ジテ火事ト申セバ何方ニテモ諸道具

ヲ退、或ハ女子妻子ヲ片付申ストテ家ヲ拾置是ニカ
カルユヘ飛火ノ付タルヲ消申スモノ一人モコレナ
シ、此ユヘニ飛火大キク成レリ、マヅ火ヲ消申スヤウ
ニ仰付ラルレバ、火大ニ成マジキト申上ケレバ、其時
宣フハ、大モ小モ足弱ク退タキ事ハ同ジ義ナリ、殊ニ
町方ノモノドモハ無人ニテ一入足ヨハ退ガタシ、然バ
幼少或ハ老人ナドハ火事ノ度ニ死コト多カルベシ、
焼死ニモ構スヤウニトノ御仕置ヲヨキト存ズルヤ、
仰付ラル、ニオイテハサヤウニモナルベケレドモ、
御慈悲ナクテハ諸事ノ御仕置立ガタシ、此段ハ何ト
存ズルヤト仰ラレケレバ、其浪人詞ナクシテ退トカ
ヤ、又或浪人信綱公ノ御宅ヘ參リ訴訟アル旨ヲ申ス、
何事ニヤト尋テ玉ヘバ、近年火事繁ク出來イタスユ
ヘ、火消ノ御役人歷々ヘ仰付ラレ、御尤ナル義ニ存ジ
奉レドモ、與力同心其外御扶持方御物入莫大ノ義ニ
コンアレ、拙者工夫仕リ、江戸中ノ火事ヲ御請合申
上テ、火ノ盛ニナキ内ニ、早々消留申スベシ、御扶持
方百人扶持拜領仕ラバ難ナク消留御目ニ掛ベシ、サ
アラバ御旗本ノ歷々火消ノ御役ニ成玉フ公儀ノ御造
作ハ莫大ニテ、人モケガイタシ、御失墜多クアルベ

キ間、私ニ仰付ラル、ニ於テハ有難存ジ奉ルベシト
申上ケル時、爰ノ道ヲトメ彼ニ關ラスヘナド仕ルヤ
ウノ義ヲ申上ケリ、其時信綱公コノ浪人ガ申ス詞ヨ
リ早クサキヲ合點シ玉フ、ソノ浪人ニ宣ヒケルハ、ソ
レハ御調法ナル事ナレドモ、其消ヤウノ手立ヲ聞ズ
シテハ尤ト申シガタシ、其様子ヲ申上ベシト仰セケ
レバ、其時浪人畏ルトテ則火ヲハヤク消ス段々ヲ申
上ケル、勿論火ヲ消ス段々ハサモアルベシ、然ルニ江
戸中大名小名御旗本妻子多クアレバ是ヲ退ルニ往來
込合人多ク焼死申スベシ、サアレバ何ノ益ナシ、其所
ハイカバ工夫イタスヤト宣ヒ、其外イロノ難間ド
モヲ仰セカケラレケレバ、一言モ御答急ニ成ズシテ
色々思案ヲ廻シ見ケレドモ及バザル事ユヘニ、赤面
ノ體相見ヘケレバ、是ヲ見玉ヒ、猶セリカケ宣ヒテ、
最早火事急ニ焼サカリ、ハヤ方々ヘ飛移リタルガ、
手立ハイカニノトセリカケノ宣ヘバ、彼浪人赤
面シテ彌詞ヲ出ザルユヘ、其時仰ラル、ハ、サヤウニ
手スルキ事ニテ火ヲ消事ハ叶ヒガタシ、早々罷立ベ
シトアレバ、浪人面目ヲ失ヒ、其座ヲ退テ二度訴訟ヲ
ヤメケルトナリ、信綱公ノ分別ハ不_レ及_レ申シテ、答話

マデモ凡人ノ不^レ及事ト諸人舌ヲフルヒケルトナリ、右ノ火消ノ訴訟人對話以後ニ内證ヘ入玉ヒ、彼火消ノ理屈ヲ段々語リ玉ヘバ、或人申サル、ハ、貴公ノ理屈ニアヒテハ、誰モ御返答ハ成マジ、彼モノモ案ジタラバ了簡モ出ベシト申サレケレバ、信綱公仰セラルルハ、勿論人ノ分別ニハオソクシテヨキモ有トイヘドモ、ワレラゴトキノ分別ハ即時ニナサデハ叶ヒ難シ、譬バ唯今火事出來シ、イカバ消ント伺フ時ニ、工夫シテ申ベシトアリテハ、其内ニ火大キクナル、又只今喧嘩ヲ致シタル時、是ハイカント尋ヌルニ、分別シテ後ニイハント申テハ、當分ノ埒明申ベキヤ、御用人ノ分別ハヨカレアシカレ、即時ニ了簡ナクテハ、役ニ立申サザルト宣ヒケレバ、聞人尤ト感ジケル、

○上野仁王門ノ下町屋多クアリシ、其節火事ヒタト打續テ、失火シテ方々燒ケルユヘ、御老中御相談ニテ、兎角仁王門ノ下町屋ヨリ南風ニ失火ナラバ、第一權現樣御宮ヘ近シ、脇々ヨリ失火ニテ御宮ナド燒失セバ、其火ヲ出シタル町人モ御科ニ逢ヒ申サデハ叶ハズ、旁以町屋ヲ引池ノ端ヘ所替サセ然ルベシト相決シ町奉行衆ヘ仰渡サル、仁王門前ノ町人ドモニ申

シ渡サル、其月ノ十七日ニ信綱公御宮ヘ參詣 玉ヘバ、總町人訴訟ニ出、久々有付タル地ヲ離、面々造作ヲ仕ルユヘ、身體皆相成、サレバ隨分火ノ本堅ク仕ルベキナレバ、前々ノ通り御慈悲ニ差置レ下サル、ヤウニト訴訟申スユヘ、信綱公段々理屈ヲ申分テ聞サセ玉ヘドモ合點仕ラズ、ヒタト訴訟申ス、其儀ニ少モ取アヒ玉ハズ、皆聞ベシ、灸ヲ致シ身ノ養生ヲ致スベキヤ、當座ウマキ毒食ヲ喰テ命ヲ捨申スベキヤ、早ク申セノト宣ヘドモ、其段ノ御答ナクテ、訴訟ノ義申ニ付テ、訴訟ハ聞届玉フ、マヅ此事ハイカニノト宣ヒテ、大カタ御宮ノ邊マデ町人ドモ大勢付訴訟申ス、度々今ノ答ヲ申セノトヒタトセツキ 玉ヘドモ、町人ドモ聞入ズ、其時折フシ山本道句トテ世上ニ人々モテハヤシケル御庭作リノ坊主アリケル、コレモ此節信綱公ト一度ニ御宮ヘ參詣イタシケルユヘ、道句申上ケルハ、夫ハ誰モ灸ヲ致シ身ノ養生ヲ仕ルベシ、當座毒食ヲ喰テ口味ヨキトテモ誰カ命ヲ捨申スベキヤ、町人ドモ其通りニテアルベシ、皆々カヤウニハナキカト町人ドモニ向ヒ道句申セバ、總町人イカニモ其通リト申ス、其時信綱公宣フハ、サキヨリイフハ夫

ナリ、當座造作ユカズトテモ、火ヲ出シタラバ命ヲ失
ヒ申スベシ、是毒食ナリ、又當分迷惑ニアリトモ、池
ノ端ヘシサラバ、縦ヒ火ヲ出ストモ、通例ノ御作法ニ
テ別成コトアルマジキナリ、近キタトヘハ是ナリト
申玉ヘバ、町人ドモ承リワケ、則詞ナクシテ二度訴訟
申サズトナリ、下々能聞入申タトヘナリト諸人感ジ
ケルトナリ、又何レノ年カ信綱公御上京ノ節、道中
大井川ニテ、河越ノ者ドモ御訴訟申ケルハ、洪水ノ時
ニ川越仕ル義難儀ノ事ナレバ、向後船渡リニ仰付ラ
ル、ヤウニ仕度ト願ヒケレバ、夫ハ入ザル願ヒナリ、
末々思ヒアタルベシトテ、一向其願ヒヲ取上玉ハズ、
程ヲフルニ隨テ嶋田金谷ノ者共申スハ、兩所トモニ
田畑少キ所ニテ、只此往來ノ川越賃ニテ渡世イタス
ナリ、若以前願ノ節ニ舟渡リニ仰付ラルレバ、兩所ト
モニ餓死ニ及ベキニ、行末ノ事マデ御見通シテ、カク
ナシ玉フ事ヲ有ガタク感ジ奉ルトゾ、

○御成ノ時分、御駕籠ノ御脇供ノ時ニ、町ニテ御駕籠
ノ左ノ方ヘ近タト何人トモナク馳寄テ、御目安ト云
テ御駕籠ノ内ヘ書タル物ヲ投入タルヲ、即時ニ左ノ
手ニテントザマニ拂ヒ玉ヘバ、目ト鼻ノ間ヲシタ、

カニ打セ玉ヒケレバ、彼者倒ケル、如此信綱公少モ御
油斷ナカリケルト皆人感ジケルトナリ、或時隅田川筋ヘ
御鷹野ニ成セラル、節、御機嫌惡シキコトアリテ、御
馬上ニテ急ギ還御アソバサルニ付、御供ノ衆大方ツ
ヅキ申サバル處ニ、信綱公勝テ達者ナリケレドモ、通
町ノ邊ニテハ御續ナサレガタカリシハ伊豆守カナル

ゾト宣ヒ、町屋ヘ投込ミ玉フトナリ、又同所ヘ御成アリテ
還御ノ節、御舟ニ召テ龍ノ口ヨリ御上リ、舟端ヨリ陸
ヘ御飛アリケル處ニ、少シ濕所ニテ御足ヲ濡サセ玉
ヘバ、阿部對馬殿羽織ニテ御足ヲ拭申スベキト心付
ケル處ニ、ハヤ信綱公ハセ出玉ヒ、羽織ヲ脱持テ御足
ヲ拭ヒアゲサセ玉フ、カヤウニヨキ所ヘ心付テモ、伊豆
殿ヨリ遅クナルト、是モ對馬殿ノ圓覺院ヘ御咄ノヨ
シ、圓覺院ノ親類對馬殿ニ奉公シテ居ケルユヘ心安
ク申シ聞ラルト承ルナリ、又千壽筋隅田川ヘ御鷹野
ニ成セラル、節ニ、雲雀多ク捉セラレ、則御鷹場ノ御
殿ニテ、此雲雀焼ベシト仰付ラレ御急ギアレドモ、大
圍爐裏ニ夥シク炭ヲ熾立ケルユヘ、火氣ツヨケレバ、
手アツク少ノ間モ雲雀ノ串ヲ持堪テ焼ガタシ、阿部
對馬殿奉ハリニテ、其外ノ御老中モ手々ニ焼串ヲ持玉

ヘドモ出來カチタル處へ、信綱公參リ玉ヒ、何事ゾヤト尋玉ヘバ、御同列ノ御方シカ／＼ノ由ヲ申サセ玉フエ、我等モ助ケ申スベシトテ、折節側ニ多ク積置タル木具ノ櫃ヲ取玉ヒ、ソレニ穴ヲ開ラレ、雲雀ノ串ヲサシ通シ、鏝ニシテ燒玉ヘバ、御手少モ熱ナキユヘ、後ヨリ燒玉ヘドモ、ハヤク燒出來、御前ヘアゲ玉ヒケレバ、皆々申サル、ハ、常々ノ御奉公ヲモ豆州ニ負マジキト存ゼラレドモ、深キコトハ申スニ及バズ、假初ノ事ニモオクレタリト、御同列若年寄衆御出頭人肝ヲツブサル、ト對馬殿ノ圓覺院ヘ物語リアルトナリ、○大猷院様麻布ヘ御鷹野ニ成セラル、トテ、久保町ノ御堀ニテ、駝ヲ御鷹ニテ御アハセナサル時、駝蘆ノ間ニ隠レ出ザレバ、礫ヲ打テ追立ヨト上意アレドモ、折シモ町ニ砂ヲシキ、礫ニ成ベキ石一ツモナカリケレバ、イカバスベキト御徒頭方々走り廻リ尋チラル、時、信綱公來リ玉ヒ、イカバ鳥ヲ追立申サズヤト宣ヘバ、シカ／＼ノ由ヲ申ス、ソコニテ信綱公仰セラル、ハ、サヤウナラバ肴店ニ蛤多クアリ、ソレヲ礫ニ打ト宣ヘバ、則是ハ上々ノ礫ナリトテ、ソレヲ打テ駝ヲ追立テ其時御舉ニテ鳥ヲ合セ玉ヒ、殘ル所ナキ御機嫌ナレ

バ、人々感ジ奉ルトゾ、サテ町人ヘハ即時ニ信綱公蛤ノ價ヲ下サレケルトナリ、又葛西筋ヘ御鷹野トシテ成セ玉フ、時ニ信綱公ヨリ鶉ヲ三千歟放シ玉ヒ、伊奈半十郎ハ千放サレケルトカヤ、上様御存ジナサレ、渠等ガ御機嫌ヨキヤウニト存ジ奉リ放シタルト御聞アレドモ、御鷹取ハ面白ク思召ル、旨上意アリシト承ル、是時相應ト存ジ奉ルト人申シアヘリ、又或時御鷹野ニ成セラルベキトテ、御供觸明六ツニ揃ベシト仰出サル、折節其刻限天カキクモリ、又シノ、メノ明ハタヌ内ナレバ、雨トモサノミ分ザリシニ、重テ仰出サルルハ、今日少シ成トモ雨降バ御成延引アソバサルベシ、空ノ景氣ヲ見届テ申上ベキ旨上意アリケレバ、御次ノ衆承リテ、外ヘ出テ見ケレバ、少シモ／＼濕ルヤウニモアリ、又降トモ知ガタキニヨリ、此御請申上ガタク、トカク詮義區々タル所ヘ、信綱公參リ玉ヒ、何事ゾ詮義イタサル、ト申シ玉ヘバ、シカ／＼ノ由ヲ申サレケル、其時信綱公脇差ノ鞘ヲ縁ヨリ外ヘ出シ、暫クアリテ燈ノ影ニテ見玉ヘバ、鞘ノ上ニコヌカノヤウナル露浮タリ、則霧サメ降タル旨ヲ申上ラレヨト仰セアレバ、申上ル人安堵シテ御請ヲ申上ルナリ、寔

ニ假初ノ事ナリトイヘドモ、大勢ノ集リテ了簡ニ及
バザル處ニ頓作ナル義ナリト皆人感ジケルトナリ、
○大猷院様一年ムレイ野ニテ御鹿狩アル時ニ、御書
院番御小性組其外御番衆御徒衆ニイタルマデ組々ア
マタ出ルナリ、上意ニ郷列卒ヲツレ、深野ニ入、一同ニ
手ヲ揃へ、枯野ノ鹿ヲ御前御立塲北ノ方へ追出シ申
ベキ旨上使ヲ以テ仰渡サルレバ、兩御番頭始皆謹テ
承リ御請申上ラル、其後數多ノ衆相談致サル、處ニ、
武士ノ分ハ人々ノ下知シテ引付手ヲ揃ヤウニモ致ス
ベケレドモ、大勢ノ人數ナレバ、長々ケヨリ高キ枯野
ニテ、相印モ見ヘカ子、主人ヲモ見出シ申マジキナ
リ、マシテ郷人バラ東西ヲ辨ヘズ、數萬ノ人數ヲ請取
テ、北へ一同ニツレ出ル事ハ成ガタク存ズルナリ、北
ト思テモ後ヘ戻モノモアルベケレバ、磁石ヲ持トイ
フトモ成ガタシト仰ケレバ、御請ハ仕タレドモ、御氣
色ニ合ザル時ハ御機嫌損ベシ、自分々々ノ迷惑ハ必
定タルベクアレドモ、夫ハ是非ナキ事ニテ、第一御機
嫌ノホドイカバト寄合談合評定ニ及ドモ、兎角手ヲ
揃フヤウニハ成マジト議定シテ、アキレハテ、居ラ
レタル所ニ、御使ニ參リ玉フ體ト相見ヘ、中乘ニノリ

テ信綱公野ヲ横筋違ニ通り玉フヲ、御番頭衆見付テ、
幸ノ事アリ、伊豆殿此儀ニ於テハ急ニ了簡モアラシ
トハオモハザレドモ、斷リ申タル上ニテハ、御前ノ儀
ハ實ニ心ヤスシ、イザヤ斷ベシトテ、五六人番頭衆馬
ヲハヤメ乗出シ、ヤガテホド近ク追付、此由カクト高
聲ニ申サレケレバ、御用ニテ急グト宜ヒナガラ、空ヲ
打仰テ日輪ヲ見テ、時ハ九ツ日中ナリ、御立塲ハ北ナ
レバ、總列卒ニ面々ノ顔ヘ日ヲ當ザルヤウニ背ニ日
ヲ負テ是ヲ矩ニ日陰ヲ目仰ニシテ人數ヲ押サセラレ
ヨ、サアラバ數萬ノ者北ヘ出ベシトイヒステ、通り
玉フ、時ニ御番頭始大勢ノ衆中忝モ又耻シクモ思ヒ
ナガラ赤面シテ、差圖ノゴトク下知シテ、サスガニ廣
キ枯野ノ内ナレドモ、一人モ散ズシテ北ノ方御立塲ヘ
鹿ヲ追出シ、御機嫌殘ル所ナシトゾ、番頭中ハ口ヲ一
ツニシテ、豆州ハ人間ニテハ是ナシ、頓作ナル義誠ニ
孫子吳子孔明ナリトイフトモ此上ハアラジト感ジ申
サレケルトナリ、其後此事ヲ或人信綱公ヘ尋申セバ、
サヤウノ事モアリツルヤ覺ズト宣ヘバ、其人猶以テ感
ジ奉ルトナリ、又或時シヤクシ野ヘ御鹿狩ニ成セラ
レシ節、其所ニ至ラセ玉ヒ、御馬上ナリ、御同勢御後

近ク鳴リ働キ相聞ヘルトイヘドモ防ガタキヲ見玉ヒテ、皆折シカセベシト再返上意ニ依テ早速折シケバ右靜ルナリ、サテ御馬立場マデ成セラル、以後御目付御使番ノ者ドモ馬ヲ引付、御側近ク罷在ベシト召セラル、處ニ、御近邊ニ有合申サレザルユヘ、此義ヲ信綱公ヘ仰付ラル、處ニ、其儀マデモ及ブマジ、何ヤウニモ下知相成ヤウニ申付置タル旨仰上ラレケレバ、疊ノ上トハ違フユヘ召寄置ベシト再返上意アル所ニ、信綱公再三同前ノ御請ニテ、少々御氣色モ宜シカラザレバ、御近邊ノ御供ノ衆モ笑止ニ存ジ申ス、然ルニ御目通間二町餘ホド御先ニ御狩場ノ境ニ白幡赤幡二本ヲ隔テコレヲ立ル、其幡動搖ノヤウニ相見タリ、赤白ト入替^{シジマ}鎮リ申ヤウニ申付ベキ旨信綱公召出サレ仰付ラルレバ、畏テ承リ、六十間ホド步行シテ腰ヨリ采牌ヲ拔、手ニ持テ御前ノ御先ノ御旗ニ向ヒ、采牌ヲ一振フツテ、又御前ノ方ヘ向ヒ一禮ナサレ、サテ旗ノ方ヘ向ヒ、二三返采牌ヲ振セラルレバ、イカニモ鎮ルト兩方ヨリ相見ユルナリ、夫ヨリ御前ヘ御歸リ御一禮アレバ、又御後^{アト}ノ人數ヲモ下知致セト上意ニ依テ御後ノ方ヘ信綱公御越アル、其時井伊掃部頭召出サ

レ、只今ノ伊豆守容躰ヲ見ツルヤト上意アレバ、掃部殿御請ニハ、第一名將ノ御ツカヒ立ガラト申シ、其身ノ働キトイヒ、感ジ奉ルノ旨仰上ラレケルトナリ、○井伊直孝掃部頭殿ノ近藤語石老ヘ咄サレシハ、大猷院様ヘ我等度々申上シハ、堀田加賀守松平伊豆守掃部頭罷在內ハ、天下ノ義御氣遣ニ思召サレマジキ旨言上ニ及ツルガ、加賀守殉死仕ルヲ御存ジナガラ、御留ナサレザルハ、天下ノ御仕置、御幼君ノ時ハ、伊豆守仕ルニ害ニ成ベシト思召タルニテアルベシト近藤語リ申サル、トナリ、又或時掃部殿ハ、信綱公ノ御事ヲ褒美シテ申サル、ハ、豆州ハ只人ニアラズ、小身ナレバ大人數ヲ取扱ヒ申サルベキヤウモナシ、其上大坂御陣ノ時分ハ若輩ナレバ其義ナキ所ニ、此度西國一揆ノ時ノ働ヲ考ヘミルニ、大人數ヲ手ニ握、西國中ノ大名ヲ心ニ吞込、御威光トハ申シナガラ、責口ノ人數討死モ少キヤウニ下知シテ、一揆ドモ討亡申サル、ソノ段々ノ様子ヲ存ジテハ、思慮大ナル勇士ナリ、五十萬石許ノ身軀ニテ、外様ニ置テハ、夜ノ目モ寢ラレザルホドノ氣遣ナル人タルベキト申シ玉ヒケルトゾ、

○寛永十四丁丑年秋比、九州肥前ノ國高來郡嶋原城主松倉長門守領知ノ内有馬村ノ百姓等、切支丹宗門ヲ再興シ、悉ク徒黨ヲ結ビ、在々村里ヲ放火セシム、又肥後ノ國天壽ハ寺澤兵庫頭領分ナリ、其百姓モ右徒黨ニ組シテ有馬村ノ原ノ古城ヲ修築シテ其城ニ籠ル、其仕置トシテ板倉内膳正石谷十藏ヲ遣サル、處ニ、惡黨増進ノ注進アレバ、重テ同年十一月廿八日信綱公征討ノ上使仰セ蒙セラレテ、朱采幣御具足御馬御金等拜賜シ玉フ、且戸田左門氏鐵副使ヲ仰付ラル、尤卽刻左門殿御暇下サレ、濃州大垣ニ到リ、夫ヨリ彼地ヘ進發ナリ、信綱公并御嫡輝綱公ハ、相共ニ十二月三日江戸出馬シ玉フナリ、尤早速進發ハ故實ユヘ、其旨仰立ケレドモ御許シナケレバ、責テ三日ノ支度ト猶仰上ラルレバ、ソレモアマリ急ナリトテ、五日ノ支度ト仰付ラレ玉フトナリ、御人數騎馬五十三人、乗掛ノ士卅七人、步行侍百人、都合雜兵共ニ千三百人ナリ、其外御家中ニ付テ參ル浪人七人ナリ、信綱公道中險岨トイヘバ、自ラ士ニ先テ步行シ玉フテ勞ヲ同フシ玉ヒ、宮根ナドニテモ尤步行シ玉フトナリ、此節御從行或御留主ヲ仕ル者御定アル處ニ、何某道中マ

デ御後ヲ慕テ參リ、是非々々御從行ニ召連ラル、ヤウル願ヒケレドモ、以テノ外ニ呵シ玉ヒ、先達テ御定アル所ニ、其御軍法ヲ破ル段不届ナリ、嚴ニモ仰付ラルベケレドモ、御宥免ヲ以テ永ノ御暇ヲ下サレシハ、是御憐愍フカキ事ナリ、江戸ニ於テ白紙ノ御朱印五枚御頂戴アル、是公用ノ爲ニテ、別シテノ御威光ナリ、正月三日嶋原ノ渚ニ御着、此所ニテ元日原城總責ノ時、板倉内膳殿討死ノ由ヲ聞召サル、是ヨリ陸地ヲ有馬ヘ御越ナリ、同四日未ノ刻總勢ヲ輝綱公引率シ玉ヒ有馬ヘ着セ玉フ、夜ニ入テ雨降ルユヘ、其夜ハ葛籠ヲ左右ニ置、乗掛ニ乗タルヤウニシテ罷在ベキ旨御意ニテ其通り致ス、此日ノ飯支度ナラザルユヘ、上下トモニ生米ヲ嚙テ湯ヲ吞テ居ルトナリ、六七日此兩日ノ内ニ小屋出來ル、是雨ニモ蓋ヲ張ズ、士ニ後テ食シ玉フトカヤ、先手仕寄場番ヲ改トシテ信綱公使番夜廻リ始ル也、馬廻リ侍一人、差添此二人ツヅニテ、宵番ハ陸、曉番ノ一人船ニテ海手ヲ見廻リ、大江ノ濱ニテ出合、宵番ハ歸リ、曉番人陸ヲ改終テ歸リ、夜明兩番ノ者信綱公ノ前ヘ出テ、着到持參ニテ子細ヲ申上ルナリ、長陣ニテ諸勢困窮ヲ見及玉ヒ、折節江戸ヨ

リ上使來ルニコト寄テ、信綱公ノ假屋ヘ諸大將ヲ召寄、永々在陣迷惑タルベシト思召ル、旨上意ノ由ニテ諸軍勢ヘ扶持方下サル、都合拾萬六千人餘、但シ百石四人扶持ノ積リナリ、此趣江戶ヘ言上シ玉フ處ニ、江戶ヨリモ件ノ思召ノ由ニテ御扶持方下サル、旨奉書到來、然ルニ途中ニテ行違フナリ、則右ノ趣上聞ニ達シケル處ニ、御心ノゴトクナル仕ヤウトテ殊ニ御感不_レ斜シトナリ、信綱公三萬石ノ高ニテ千五百人扶持ナリ、戸田左門殿ハ十萬石ノ高ニテ四千八人扶持ナリ、二月廿八日總攻ノ御内談相定タル所ニ、前日ノ廿七日不意ニ出丸ヨリ乗入、總軍前後左右差別ナク總攻總乘ニテ二九小屋放火ユヘ、賊徒コラヘガタク、皆本丸ヘ逃入、本城ニテ堅固ニ防グユヘ、本丸ヘ攻入事指ツカヘケル、サテ信綱公左門殿ハ總大將ユヘ、御人數トモニ二三ノ丸ニ備ヲ立玉フ、諸軍ヨリモ御本陣ト申ケル、ソノ時輝綱公ハ信綱公ノ御目ヲ忍セラレ、上下七人纔ノ御供ニテ、本丸ノ間マデ御越アリ、寄手薄キ所ヲ御見分ナサレ、即土居ヘカケ上リ玉フ、御供ノ衆御留申ケレドモ御承引シ玉ザル處ニ、信綱公御覽ジ付ラレテ、何トテ御拔掛ナサル、ヤ、早々歸

リ玉ヘト酒井三十郎ヲ御使ニツカハサレケレドモ、歸ラセ玉ザルニ付、又岩上角之介ツカハサル、仰越ルハ、其方少ノ手疵ナリトモ蒙リテハ、御自分ニモ御乗込討死ナサルベキ思召ナレバ、必ズ歸セラル、ヤウニトナリ、コレニ因テ是非御歸リナサル、ヤウニ角之介申上、御具足ノ左ノ御袖ニスガリ付テ留申セバ、怒ラセ玉ヒ、御脇差ニ御手ヲカケサセラレテ、過半拔セラル、處ニ、御側ヨリ御手ヲ押留申ス、サレドモ角之介御袖ヲ放シ申サズ、イヅレノ道ニテ御用ニ立ハ同ジ事ナレバ、アソバサレベシトシコロ鏢ヲ傾テ頸ヲ御前ヘ打傾キ申ス内ニ、御先ヘ拔掛仕タル御家人共見付奉ル、亦御後ヨリ驅付テ、無體ニ輝綱公ヲ中ニ取廻シ、ワリナク御供仕リ御歸ニ赴カセ玉フ、其後追々御使、殊ニ井上筑後守殿マデ出迎ヒアリテ歸ラセ玉フヤウニト仰ラレ、漸々暮前ニ及テ、御備場ヘ歸ラセ玉ヒケル、時二十八歳ニナラセ玉ヒケル、夫信綱公ハ武門ノ御冥加ニ叶セラレタル御人ニテ、殊ニ御忠節ノ勤メ勝レ玉ヒケルノミナラズ、御孝行フカク、御慈悲アサカラザルシルシニヤ、此御代前後ナキ戰場ヘ此度カクオモムカセ玉ヒ、殊ニ御名代ノ大將軍ヲ

御承リ、西國へ御發向ハ、武士ノ美目ニアラズヤ、三萬七千人コモリタル原ノ城ヲ、斯御乗取セ玉ヒタルノミナラズ、二月廿七日總攻ノ夜先手ノ細川殿始メ、其外ノ衆ヨリ使者ヲ以テ、本丸乗取レバ、御小屋へ御退陣ナサルベシ、只今敵ノ漏ザルヤウニ、柵マデ付サセ、穴小屋ニ殘リタル賊徒ヲ申付ウタセ申スベシ、御氣遣アルベカラスト申シ越ル、コレニ因テ御返答ニハ、右一々御聞届ナサル、ナリ、然ドモ油斷スベキニアラザレバ、柵ヲ付テ何モ一宿アルベシ、地方ニモ二ノ九ニ一宿致スト仰越ル、ナリ、此御働ノ手柄ヲ場ト申スヨシナリ、一己ノ者ノ手柄トハ各別大成事ナリ、本丸ニ二萬計モ敵ノ殘リ居申ベキ處ニ、大將分ノ衆小屋々々へ引取レタラバ、殘リノ衆中モ同意タルベキ所ニ、本丸ヨリ若夜討ニ出バイカッ有ベキヤ、サアラバ前代未聞ノバハタラキニナルベキニ、微妙ノ將智ヲ得玉ヒシ御人ト心有衆ハ申アヘリ、夜明廿八日細川殿ノ手ヨリ本丸ノ家ニ火矢ヲ射掛燒立テ、同日巳后刻本丸搦手ヨリモ黒田家ノ衆乗入テ討殺ス、其外大手方々ヨリモ諸勢乗入テ午ノ下刻悉ク落去ナリ、信綱公左門殿元ノ所ニ御備ヲ立ラレテ、落去ノ注

進ヲ聞届テ、勝鬨ヲ執行ヒ玉ヒテ、未后刻御退散ナリ、先手ヨリ使者差越サレタル衆ヨリ又繼舟ヲ以テ本丸ヲ廿七日ニ乗取タル旨ヲ江戸へ言上ニ及バレケルユへ、御悅ナサレテ、堀田加賀守殿ヲ十萬石ノ高ニナシ下サル、モ此節ト申スナリ、上意ニハ伊豆守左門注進ナキハ、兩人共ニ討死仕リタルヤ、御不審ニ思召ケルトゾ、翌日兩人ノ御方ヨリ注進ノ書狀到來ユへ、御安堵ノ御思ヲナサシメ玉フトカヤ、此節ソノ狀ノ上書ノ肩ニ石筆ニテ落城中候ト信綱公カキテ差上ラルユへ、文箱ヲ披キ御覽アレバ、其マ、御機嫌殘ル所ナキトナリ、サスガノ才智アル御老中ニテ、カノ露布ノ義ニ叶ヒ玉フナリ、尤賴朝ノ時代梶原平三景時ニテモ、是ホドニハ有マジキト申シ合リ、後日ニ信綱公宣ヒケルハ、右廿七日ノ夜御退陣ナサレ、本丸特堪タル事ヲ聞召テ、又翌日出陣シ玉バヲカシキ事ニテアルベキニ、其夜ヲ明シ玉フ事ハ、一代ノ分別仕當タルト宣ヒケルトナリ、右翌廿九日ニ信綱公ハ御家中ノ者ヘ仰渡サレケルハ、此度總攻ニ付テ拔懸仕タル者共アリト相見ルナリ、者頭物奉行シカト仕タル役人等參リタラバ、仰付ラレヤウモアレドモ、大方若キ者共、其上

先手ノ軍法破レテノ事ナレバ、憎ハ思召ズ、若又若キ者モ先ヘ不レ參者共苦ニ存ズル事モアルベケレドモ、敵出ナバ御側ニ在ル者共コソ御用ニ立ベケレ、先ヘ參ラサルハ是御奉公ト思召ル、ユヘ、苦勞ニ存ゼザルヤウニト仰出サレケレバ、是ヲ何モ承リ、安堵仕ルナリ、名將ノ御意ノホド皆感ジ合ルトナリ、此度鍋嶋信濃守殿ノ手ヨリ不意ニ乘入テ軍法ヲ破ルトカヤ、夫ニ付四月四日豊前國小倉城下ノ開善寺ニテ太田備中守台命ヲ述終ルノ後、イマダ諸將列坐ノ時ニ、信綱公中座シ玉ヒ、鍋嶋殿ヘ向ヒ、今度御軍法違背ノ事、御參府ノ節ニ屹度其旨承ベキ旨斷リ玉ヒケルトナリ、五月十一日江戸ニ歸着シ玉ヒ、十五日御目見濟テ、其後西國ニテ此度ノ働ノ事御吟味アリケル所ニ、鍋嶋殿神原等ハ、靈社ノ起請文ヲ捧テ其過失ヲ陳謝シ玉フニ付、先信綱公左門殿ヘ鍋嶋神原ガ事共御内意アリテ、兩人望ミアラバ申上ベキ旨上意アレバ、則兩人御閑談アツテ御請ヲナシ玉ヒケル、其後鍋嶋殿ハ閉門、神原飛驒守殿ヲバ押コメラレタルナリ、○有馬ヨリ御歸陣マシ、テ、御家老共ヘ信綱公宣フハ、此度御供ノ者ドモノ内、拜借金無法ニ數多イタ

スモアル段ヲ聞セラル、心立放埒ニシテ其意地イカバニ思召ユヘ、嚴勘定仕ラセシト御意アレバ、其時妻木求馬申上ルハ、御意之趣ハ至極御尤ニ存ジ奉レドモ、右者共無事ニ罷歸レバコソサヤウニモ仰付ラルレ、若此者共殘ラズ討死仕ラバ、何レヨリシテ勘定イタサセ申サンヤト押返シテ申上ケレバ、公暫ク默シテマシ、ケルガ、サテ仰出サル、ハ、皆無算ニシテトラスベシトゾ御意マシ、ケル、諫言ヲ用ヒ玉フコト、石ヲ以テ水ヘ投入ルゴトクニテ、寔ニ漢ノ高祖ニモ劣ザル御氣質ト皆感ジ奉ルトカヤ、其比右ニ付テ御定アリテ、御家中ノ者百石ニ付テ金一兩ヅツ是ヲ路金ト號シテ毎年差出シテ御納戸ヘ預ケ置ベシ、其當人共ノ大義ノ入用アラバ夫ヲ渡スベシ、併ムザト仕ルマジ、サヤウニナクテ面々手前ニテハ、金子除テ用心ニ貯置ガタキモノナリトテ、右ノ通りニ仰付ラレシナリ、若其者御暇等下サル、事アレバ、其金ヲ御返シ下サル、事モアリシハ、御廉直ナル御事ナリ、其妻木求馬ハ、元來毛利家ノ陪臣ナリケル、信綱公ヘ仕ヘ奉リテ、御廣間ニ勤メケル、或時公御廣間ヘ出サセラル、節、諸士ヲ一見シ玉ヒケルニ、ワケテ其

人ノ容躰御目ニトマル事コソアリツレ、夫ヨリ御取立ナサレテ、御家老ニシ玉ヒ、既ニ千五百石下サレケル、其後毛利家ノ古主ナル者出府シケレバ、其段申上テ相越テ逢度旨願ヒケレバ、本ヲ忘レザルハ尤ナル事ナリ、然ラバ土産ヲ下サルベシトテ、品々拜領シテ古主ヘ參リテ右ノ段ヲモ述ケレバ、古主モ夫ヲ聞置事モナリガタク、其段毛利殿ヘ申達ケレバ、今ハ誰アラン伊豆殿ノ御奔走ノ者ナレバ、等閑シガタシトテ、使ヲ以賜物アリテ、其後毛利殿ヨリモ御直ニ公ヘ御挨拶アリケルトゾ、イヅレ衆人ノ中ニテ御見立ホドアリテ、寔ニ妻木モサルモノニテゾアリケル、昔誰策ガ行隊ノ間ニテ呂蒙ヲ見識シニモ劣ザル御事ト聞人ハ稱シ奉リス、

○或時大猷院様上意ニハ、伊豆守ゴトキモノヲ今一人御持ナサラバ、御世話ハヤカルマジキト毎度仰アリシヲ承リシト、三好丹波殿ノ信綱公ノ事ヲ感ジ咄シ玉ヒシトナリ、又信綱公ハ、何事モ才智ニ達シ、誠ニ切ル處ハ江トナルト云ハ此公ノ御事ナリ、何事ニモ一事一物一色ナリトモ滞リ玉フ事ナシ、ヨツテ或人ノ信綱公ヘ申サル、ハ、サテ、何事ニ行當リ玉

フ事ノ少モコレナク、千萬ノ事モ夫々ニ御挨拶アルハ、サリトテ廣大ナル儀、人間ノ及申ス事ニナシト譽申サレケレバ、則ソレニ答テ宣ヒケルハ、コレ皆一ツトシテ一分ノ了簡ニアラズ、御名將ノ御教ナサル、事ナリ、此伊豆守モ人ナリ、御自分ニモ人ナリ、天下ノ人皆人ハ人ニシテ九分十分過半違フ事ナキモノナリ、カヤウニ皆々ニモ我等ハ不思議ノモノト申サル、ハ、皆此ナス事ナリトテ、兩足ヲマクリ、足ノ甲ニ大キナル跪カシマコ眠マドノナス事ナリト仰ラル、其ユヘイカントイウニ、我等ノ親大河内休心松平右衛門大夫ハ、權現様台德院様ネンゴロ懇ニ召仕レテ、段々ノ義ヲヒタト語リ聞セラレ、ソノ上ニ自分ニモ幼少ヨリ此親達ノ側ニ晝夜ヒタト付居テ、實ニ寒暑ヲ厭ハズシテ、側ニ丸寢ニイタシ、段々ノ義ヲ聞ケレバ、今以テ別ニ不思議ナル事モナク、皆聞置タル事ノ品ヲ少宛替タルモノマデナレバ、其掟ヲ以テ天下ノ者ヘ返答イタセバ、終ニ格別メヅラシキト云事ヲ聞ズ、ツク、ト考見ルニ、古今トモ二人ノ用所ハサヤウニ懸隔カハリタル事ハナキモノニシテ、似タル似ヌカノ物ナリキ、サレバ聞置功ヲ今役ニ立マジキヤウナシ、其上大猷院

様御名將ニテ、御理屈ドモヲ聞置テ如レ此シ、誰モコ
ノ如ク跪胝ノアタルホド情ヲ出シ聞置バ、ミナ智者
ト成ベキモノナリ、タゞ人ハ功ノミト宣ヒシ、誠ニソ
ノ理尤ナル儀ナリ、古ヨリ知ノ至ルコトハ物ニイタ
ルニアリト、又問コトヲコノムト云ハ、則如レ此ノ御
人ヲイフベシ、

○信綱公常ニ月代ヲ剃玉フニハ、カギハヨリスリテ、
後ニ中ヲ、ソラセ玉ヒケル、或時心安ク出入ノ人間ヒ
申ハ、イカナレバ常ニカクハシ玉フトゾ尋子ケレバ、
不審尤ナリ、月代ノ中ハ急ギテ剃ギヨ、スレナクテモ
クルシカラズ、カギハト云モノハ念ヲ入ズシテハ見
グルシキモノナリ、我等ゴトキ御用人ハ、急ギ召セラ
ル、時、カギワヲサヘ剃置バ、中ハサツト成トモスリ
ヌレバ間カケザルニヨツテ、如レ此セシト宣ヒケル、
一説ニハ、髭月代ヲ剃ベクハ、髭長クバ先ソレヲ剃ベ
シ、其後ニ月代ヲ中ヨリ剃テ、キワヲ剃タルガヨシト
宣フトモ云、イヅレカ其説ヲキガタシ、又信綱公御登
城ノ時分ハ、袴ノ紐ヲシメ、出サセ玉フヲ度々見
申スナリ、御退出ノ時分ハ、少々用ヲモ御城ノ部屋ニ
テ達シ玉ヒ、御後ヲ見返リ玉フト見聞セシ人申傳ヘ

シ、右衛門大夫正綱公宣フハ、マレ人乗ル時ハ、袴ノ
腰ヲ當々モ出タルガヨキナリ、歸ラル、トキハ袴ヲ
ハヤク取ル心ハアシキトアリシ御詞ヲ用ヒ玉フモノ
ニヤトシル人ハ申アヘルナリ、又信綱公ノ寢間ノ作
リヤウ世間トカハレリ、世ノ人ハ一オクニ寢間ヲ作
リケルニ、夫トチガヒ、居間ノ後ニ作り、オウヘヨリ
入テ休ミ玉フヤウニ常ニシ玉フ、表方ニモ戸アリテ
錠マヘアリ、コノユヘハイカニト尋ヌルニ、夜中御城
ヨリ御用申來ル時ニ段々ニ申ツギテハ遲シテ間カケ
ルユヘ、居間ヘ其狀ヲ持參シ、戸ヲ敲申セバ、其マ、自
分ニアケテ表ヘ出ルニ近シ、其上煩ナドアル時ニ、表
ノ方ヲ錠ヲヤシ申セバオウヘニナリ、又醫師以下ニ
逢ヒ玉フ時ハ、奥ノ方ヲ錠オロシ、表ノ口ヲアケヌレ
バ、表トモナルヨシニテ、居間ノ後ニ押付テ寢間ヲ
拵、ツ子ニ其所ニ臥玉フハ、是ミナ忠心ノフカキ所ヨ
リ出ル事ナリ、忠義勇ノ武士トハ若斯ノ御人ヲコン
申サメトイヒアヘリトナリ、又獨寢獨起ヲ仕モノハ
ヨケレドモ成カ子申スト宣フトナリ、又身持ハ小金
ヲツカフヨリモ青銀ヲツカフニ所帶アルベシ、少々ノ
義ニハ油斷シテツカヒ過シ申ナリト御教ナサル、ヨ

シ、又或人身持ヲ教ベキトテ、手足ヲ横木ヘ取付セ置
 ヲ、是ニテ金持ヤト申ツレバ、成ホド身持ノ教ナ
 リ、足ヲ片々放セト云ツレバ、師匠ノ指圖ニシタガ
 フ、又足ヲ放セトイフ、其後手ヲモ放セトイフ、夫ニ隨
 ヒヌレバ、今一ツノ手ヲモ放スベシトイヒツルアイ
 ダ、サアレバ命ヲ失ナリ、ウツケニスルヤト腹ヲ立テ
 ヲリタリ、其時師匠口ヲ圓、一ツノ手ヲ放シヌレバ死
 ルト思フゴトクニ定置テ、金ヲ遣ハザルヤウニト教
 ケルト御咄ナサル、トナリ、又京ノ大佛ハ銅ニテア
 リケルガ、強ニ銅ニテナケレバソノ利益ナシトイフ
 コトニ非レバ、則是ヲ鑄銷シテ錢ヲ造シメテ、國家ノ
 用ニナサシメ玉フハ、是豪膽ノ器量ナキ人ハイカデ
 カナシエンヤト世舉テ心アル人ハ稱セルナリ、
 ○人ノ目相ヲシリタルヤト宣フニ付、少ハ存ジ申ベ
 キ事ナレドモ私式存ベキヤト、或人答ヘ申上ラレケレ
 バ、是ヲ承リ置ベシ、相口ニテ呼ニ遣スベキカナト存
 ズル人ノ參ラレバ、サテト悦シク思フ人アリ、
 又見廻シタル人アレバ、入ザル時參ラレタルト思ヒ
 顔ヲモシカムル人アリ、何ゾ用事ヲ思ヒ出シ、イヅレ
 ヲ被官ニシテ抱ベキト存ジテ見レバ、能ゾヤ參ラレ

タルト伽ニモ成ベキト思フ人ハ、三人扶持トモタレ
 ン事ハイヤニナリ、ムツカシヤト思フ人ハ、家來ニハ
 ホシク、餘ホド合力スベキト思フモノナリ、是ニテ察
 スベキ旨ヲ宣ヒケルトナリ、又公儀ノ御家人ヲ御目
 相アル事、我ヘ親キトテ取立申ベキニアラズ、我ヘア
 シ、トテ君ノ御用ニ立ベキ人ヲ押カスムベキヤウア
 ルベカラズト仰ラレケルユヘ、サヤウニアルベキ事
 御尤ナル御義ト申セバ、又モコレアリ、親類タリトイ
 フトモヨキモノアラバ取立申スベキヲ、イヒニク、
 ヒカヘ置ベキハ、是モ同ジ曲ナリト宣フ、ソノ時輝綱
 公仰ラレケルハ、公儀ノ御家人トテモ細御僉議アリ
 テハヨキ人ハアリカ子申スベシ、一ツ二ツノ事ノア
 シクアラズバ、大カタニ御僉議アレト宣フヨシ、此
 一ツハ勇氣、二ツハ貪欲ノ事ナルベシトナリ、又或人
 目相シテイフ、出頭メサル、ナラバ、大猷院様御代目
 出度アルベキアイダ、伊豆殿御奉公ノ品目付所ニテ
 ト申タルヲ承傳ヘタルト時人申ケルナリ、又阿部古
 備中守殿ノ信綱公ヲ目相シテ云フ、白及ノ上ヲ走ル
 ゴトクナル御奉公人ニテアルユヘ、只今ニモヤ身ヲ
 御打アラント存ズル處ニ、御出頭ツノリ申コト奇妙

ナル御人凡慮ノ外ナリ、酒井讃岐守殿ハ膠ノアル御奉公人ニテ身ヲ御打ナキ筈ナリト御申シアルヨシ、御心得ニモ成ベシト存ゼラレ、是ヲ仰セ達セラレテ、サテ備中殿ハヨキ人ト申ス由ナレドモ、拙者ハ見申サズ、參會シテモ見知申スベキ私ニテモナキト、其聞タル人申上ラレケレバ、ヨキ人ニコソアレト許ノ御挨拶ナリシトナリ、

○御目付ノ心持ヲ知タルヤト宣ヘバ、イカバ致シタル事ニヤト相尋ラレケレバ、信綱公仰出セラル、ハ、隨身ノ装束ニオヒカケヲ存タルヤ、鍋取公家ノ事ナリト仰ラレケルニヨリ、オヒカケノ事モ存ジ申ズト申上ケレバ、隨身ハ禁裏方ノ目付ト云フ者ナリ、他ヲ見ザル追懸ナリ、其心ナキ輩ハアヤマチナリト仰セラレシトナリ、又自然ト不_レ言シテヨキ目付ヲナサルルハ、御續ノ内ヘ御家來ノ聞ヤウニ、家中ノ儀目ニカカルコトアラバ、申キケラレヨト頼ミ仰ラレシ事はナリ、又上京シ玉フ節ニ、久野表ニテ榊原越中守殿御馳走ノタメ大綱ヲ下ヒカセラレケル處ニ、小魚マデ網ニカ、リ引上タルユヘ、越中殿家老朝倉新右衛門指出テ奇タイナル事ナリ、網ノ目ノ人モクバルホド

ナルニ、小魚マデカ、リタルハト申上タレバ、ヨクゾヤ心付申ス、夫天下ノ御仕置モカクソアレト宣ヒシトナリ、又天下ノ御仕置ハヒケ籠_カヘ入テ口ニ符印ヲ付タルガヨキト或時仰ラレシトナリ、又御仕置、四角ナル器ヘ物ヲ入テ摺心得シテヨシ、丸キ器ヘ物ヲ入テ摺ハ、國ヲ破ノモトキノ由宣フトナリ、是ハ彼ニ遺ル乘_{イナタバ}アリ、此ニ滯セル穗_ホアリ、コレ寡婦ノ利トイフ心ト同ジト時ノ人感ジアヘリト、又或人申上ケルハ、御城中出入所ハ御門々アリテシマリ殘ル所ナケレドモ、只一箇所シマラザル所アリ、御用心向イカバト伺ヒケレバ、夫ハイヅクゾト信綱公御尋アリケレバ、龍ノ口通リノ御堀末一石橋ノ川口ノ上シマリナク、舟ノ通用アレバ、夜中ハイカバト申上ル、成ボト上ニモ御心付レテノ事ナリ、ソレ天下ノ御用心悉クアマリニ嚴過テハ却テ人モ損ジ失亡アレバ、ワザト一箇所許ハ闕置ル、事ナリ、然ドモ一向捨テ開ヲクニハアラザルコトナリト宣ヒケルトナリ、或御役人御伺ヒアルハ、御小人ノ羽織アマリナガクアレバ、御城ヨリ盜ミ物ヲ其羽織下ニ隠シ出シテアシケレバ、羽織ヲ短モヤ仰付ラレンカト申ケレバ、信綱公聞玉

ヒテ宣フハ、夫盜物ヲ出シヌルモ皆カロキ御家人ドモナリ、魚物類ヒノアマリ物ヲ持出テ妻子等ニ喰サセ度シテスル事ナレバ、思ヘバアルマジキ事ニモナシ、然ルヲ羽織ヲ短セバ、イトゞ見ヘテ見苦シカルベシ、ヤハリ長クシテ然ルベシト宣ヒケルトナリ、又ウナギサンヤ深川御番衆中參ラレ、公儀ヨリ舟ノ内改仰渡サレ、相守ルトイヘドモ、目ノ前向ノ堤ヲ御法度ヲソムク輩通ルナリ、見ナガラ通シ申事快ザル事ナリ、此段イカバアルベキヤトカ、リノ役人ヨリ伺ヒケレバ、時ニ忠義ヲ能ゾ申サル、去ナガラ仰渡ノ通リ、舟ノ内ヲ肝要ニ改申サルベシ、公義ノ御仕置カヤウナル趣ニテハト相心得ラルベシト御挨拶ナサル、トナリ、

○阿部忠秋豊後殿宣フハ、何事ニヨラズ評議シ言コト毎度伊豆殿仰セラル、事ハヤシ、自分ナドハ後申ナリ、一向又了簡ナキニハアラチドモ、二ツ三ツノ内ニイヅレニセント思ヒ決斷シカチタル内ニ申サル、ヨト、我了簡ノ内ナリト、其頓智ノホドヲ譽玉フトナリ、又信綱公宣フハ、大槩ノコトハ舟ノ行違フ内ニモ了簡仕出スベシ、コレイヒガタキ事ナレドモ、務テ恒ア

ルヤウニスレバナリト、御心易キ方ヘ仰セラレケルトナリ、又紅葉山御宮ヘ御社參前、御老中御先ヘ御越アリテ、御成ノ節少時ツクバヒマシ／＼ケル時分、カヤウナル砌ハ跟ニ石ヲカヒタルガヨキト宣ヘバ、豊後殿御弟子ニ成申スベキトテ其通リニナサル、少ノ事ニテモ能事ヲナサル、ト皆人申サル、ナリ、又雨露ノ下ヲ通ル時ハ、腰ヲカバメ身ヲヒキクナシテ通ル事ハ人並ノ事ナリ、如レ此ノ所ニテハヤリ脊ヲソラシテ通ルベキナリ、コバミスレバ濡ハ脊中ヘ雨露數多アタルト宣フナリ、物毎ニ如レ此ナルコト多シト聞人申ケルトナリ、又股立タカク取タルガヨケレドモ、シム濕道ノ時サヘ高クトレバ遠慮モアルナリ、年比又御役ニモヨルト宣フヲ承ルト聞人申サル、トナリ、又二尺七寸ノ刀ヲ帶玉フヲ御舅井上主計頭殿御異見ニ長ク見ユルノヨシ申シ玉フ、御心入ナリト思召、其後ハ終ニソレホドノ刀ヲ帶玉ハズ、何モ見申スヤスリハカシタル朱鏐ヲ打タル刀ナリ、小男ニモマシマサ子バ帶コナシ玉フマジキニアラサレドモ、舅ノ思ヒヨラレタル異見ユヘ、御用ヒナサル、ト咄サセ玉フトナリ、又賢者ハ引サマニモ伐テ退申モノト仰セラ

ル、ナリ、又御若キ時宣フ、自然ノ事アリトモ討果シタル死骸ノ體ノ聞テ吟味セヨ、一足モ引マジキモノヲト仰セラル、御年ヨラセ玉ヒテハ、終ニサヤウナル義ヲモ宣ハズト人申ケル、又天方備前殿ト御挨拶ヨカリツルガ、其備前殿果シニ參ラル、ヲ聞セ玉ヒ、後ヨリ乗付サセ玉ヒツルト酒井因州ノ咄ナリキ、又京極安智翁子息ノ不孝ナル旨ヲ申上ラル、此節信綱公ノ御宅ヘ參ラレテ御逢ヒアリ度ヨシ仰セ入ラル、ソノ比安智翁ニハ狂氣メキ血勇ノ沙汰モアリケレバ仰セラル、タトヒ安智イカヤウニ働キアリトモ、我膝組ホドニ手詰ハ働カセマジト宣ヒテ其通リニ御膝組ニテ會釋玉ヒテ返サセ玉フトナリ、或御方御縁組ノ不調ノ事アルヲ、此方ヨリ御違變アルトテ御恨ミガマシキ沙汰ヲ聞セ玉ヒテ、其御方御宅ヘ招カセ玉ヒ、此方ヨリ御違變ノ事ハナキ處ニ、右ノ通リナルハイカバナル事ニヤト其段吟味アレバ、却テアナタニ聞違アルニ決シ、其時彌サヤウナルヤト御問詰アレバ、其通ニテアヤマリ玉フヨシニテ事スミケルトナリ、此節輝綱公モ次ノ間ニ扣サセ玉フトナリ、又御徒衆喧嘩仕ルトテ月番ノ頭又後先ノ頭三人相談ヲ

極メ參ラレ、兩人ノ手所カヤウノ趣ト申サル、ユヘ、取アヘズ定テ手所ヲ改玉フヤト尋サセ玉ヘバ、承リタルマデニテ見申サ、ルハ不調法ナリトテ歸ラル、是ラモ心得ニ成ベキ事ナリ、歷々ノ御役人衆モ手ヲ取申サル、ナリ、又其昔松平忠宗陸奥守殿ノ供先ヲ御旗本ノ新組體ノ者割ケルヲワラセテ引纏ケル、遁レテ出ントスレドモ出サズ、兎角スル中ニ、日比谷ノ館マデツレ行テ、頓テ馬場ニテ切セラル、此事ヲ彼支配ノ役人則信綱公ヘ申立テ、陸奥守ヘ御手當ヲゾ願ヒケレバ、聞モアヘズ同役中相談マデモナシ、サヤウノ事申サル、ホド旗本ノ疵付ベシ、此道理各ヨクヨク考ラレヨ、小身ニテサヘ有ベキニ、陸奥守ガ押テ通ランハ二三町モ先ヨリ見ヘ申スベキ事ヲ、ウカウカトシテ供先ヘ行カ、リ、先供ヲ割タル破家者は一ツ、引包行バトテ行事モ陸奥守ガ宿所ヘノサト行タル淫者は二ツ、トカク通ヌモヤウト見ヘバ相手ヲ取テ死スベキニサハナクテ、打首ニセラル、マデ油斷シタル臆レモノ是三ツ、カ、ル者ハ御城ニ召仕レテ專ナシ、是ラノ誤アリナガラ申立タリトモ上ニ御承引アルマジ、又思フテモ見ラレヨ、伊達家ハ天

下ノ大名、ソノ忠功尤多シ、輕キ新組武情ト等ク御仕置有ベキヤ、伊達トテモ御家臣ノ上ニハ貴賤格式モ有事ゾ、殊ニ供先割タルハ許ザル法令、嚴仰セ出サルルコトコソナケレドモ、天下ノ通例ナレバ、上ヨリハ御構ナシ、ソノ者ノ子共カ弟アラバ、父ガ敵ト稱シテ陸奥守ヲ討タランハ、大孝大勇ノ者ナルベシ、隨分テラヘト申付ラレヨト宣ヒシト、古キ人ノ口碑ニアル事ナリ、

○大猷院様御代殺害人東叡山ヘ掛入タルヲ、公儀ヨリ御出シアレト頻ニ御斷ナリトイヘドモ、御許容ナキユヘニ、大僧正ヘ信綱公宣フハ、カヤウナル重罪ノ者ヲ御成敗ハ諸人ノ爲ナレバ御出シ然ルベシ、若御引ナキニ於テハ、自今以後、日光山東叡山ノ兩所ニテ惡人アリテ欠落モノナドアル時、公儀ヘ御斷リアルトイフトモ、一切構ヒ申マジケレバ其御心得ナサルベシト仰セラルレバ、其理ニ服シテ滯リナクソノ者ヲ出シ返サセラル、トナリ、

○由井正雪江戸ヲ欠落仕タル時ノ義ニテヤアリシ、ソノ伴ヒ立退タル者ノ筋目々々御僉議ニ付、百人ホドモ有ベキヤ、其者ドモ信綱公ノ御宅ヘ召寄ラレ、御

穿鑿ナサル、節、他ヨリ各申スハ大勢ノ者ドモ御吟味ノ内、何方ニカ置セラルベキヤ、誰ニカ預玉ハンヤ、數多ノ者ドモ何トカト申アヘル處ニ、一々ワケヲ聞セ玉ヒ、ソノ親類ドモノ行衛マデクハシク請證據ヲ立テ御カ、セ置、ソノ後仰セラレケルハ、何レモヨク承ルベシ、先ハ別條ナケレバ放シ遣サルナリ、重テ御尋ノ義アラバ早々罷出ベシ、遲參ノ輩モアラバ御咎メカルクトモ死罪ニ行ベシ、日本國中何方ニ居申ストモ御尋アルベケレバ忍ベキヤウナカルベシ、汝等ガタメ廣ク差置ル、事悅ベシ、疾々退散セヨト仰セ渡サルユヘ、大勢ノモノドモ悅テ召サセラル、時急ギ出ベキ旨畏ル段ヲ申上ルナリ、是廣キ御取扱ヒナルトテ聞人感ジアヘルトナリ、又其比ニヤ黨ヲ結ブ告ノ有テ吟味ノ最中、信綱公ノ近臣ノ内ニ、其張本人ノ事承リ出シタリ申シ達ベシト伺ヒケルヲイハセモ果ズ、先ソノ事ヨリモ急ギ事アリ、汝モ供ニ出ベシ、先ノ家ニシテ聞事アルベシ、急ギ供者出ヨト、自分モ支度シテ出ナガラ、酒井空印夜中ヨリ腹中以ノ外ニテ存命不定ナリ、急ギ各彼亭ヘ參ラルベシト右筆ニカカセ雅樂殿以下ノ御同列ヘ觸出サセ玉ヒテ諸人ノ聞

ヤウニ、サテ限リアレバ空印モ病死セラレシヨト云ナガラ、馬ニテ牛込ノ酒井ガ山莊ニ行向ヒアリテ、列坐ノ上其臣ヲ呼出サセ玉ヒ、我等ガ家來注進申ストイヘドモ、謀叛徒黨ノ義イカデ私トシテ承ルベキト存、イマダ子細ヲ承ハラズ、何レモヘ態ト御亭主病氣ト申入タリ、サラバ委細申セトテ卽坐ニ口上ヲモ書トメサセ、則其惡黨ドモトリ得ラレケリ、是深キ了簡アル事ヲ、早速ニ空印病氣見廻トイヒナシケル捷知、庸人ノ伺ヒシルベキ器量ニアラズト人々感ジケルトナリ、又丸橋忠彌ハ、右ノ正雪ガ一味ノ者ニテ一方ノ棟梁タリ、渠ハ十文字ニ名ヲ發シケルガ、其性輕忽ナルトイフ事ノ聞ヘアレバ、夜陰ニワザト忠彌ガ家ノ四壁ニ人ヲ配リ、二階ノ戸口ニモ人ヲ置テ、大竹ヲヒシガセ、火事ヨ／＼ト呼バラセケル、忠彌近火ゾト心得、二階ヨリ覗ク處ヲ踏込カラメ捕ケルト云フ、是信綱公ノ下知シ玉ヒ、兩町奉行ヲ遣シ搦捕セ玉ヒケルトゾ、又右ノ忠彌ガ惡事ノ節、其黨何某ガ外孫ニ若原平之丞ハ、忠彌ガ黨類斬罪ニ付、幼少ナガラ已ニ死刑ニ極リケルニ、彼外孫ナレバ死刑ニハ及マジキ歟ト信綱公御同列ト御相談アレバ、外孫幼少ニテ其謀ニ

預ザルユヘ死刑ニ及ブベカラズトノ事ニテ、平之丞ハ死刑ヲ免シ玉フトナリ、ソノ由井正雪ト云ハ、紺屋ノ子ナル者ナリケルガ、遠キ昔ノ楠ガ末流ノヤウ申シナシテ人ヲ感ジ世ヲサハガサント謀ケル、ソノ正雪駿河國ニゾ旅行シテ、荷札ニ紀伊大納言殿ノ家頼ノヤウニ見セカケ、ルトカヤ、然ドモ自害シケレバイカナル事ト知ル人モナカリシニ、謀書ニコソ有ケヌ、紀伊頼宣卿ノ御判形トテ既ニ披露ニ及シトカヤ、是其大納言家ヘ直ニコソ承合スベケレトテ信綱公行玉ヒケル、サテ亞相ノ御判形ノ一通ヲ取出シ、眞僞ヲ御直ニ糺シ奉ランガ爲ニ持參申タリ、世ニイタヅラ者アリテ如レ此ニ謀書シテ御難題ヲカケントハカリタルガ、其御判形御覽有ベシト御膝本ヘスル／＼ト差寄タル御勢ヒ、眞ノ忠烈顯レニケレバ、頼宣卿ヲ始メ奉リ、御家司詰合セタル人々愕然ト驚キ玉ヒケル、然レドモ其氣色正シク御存知ナキ御様子ト見テ、殊ニ信綱公面ヲ和ゲ玉ヒテ、此書ハ謀書ニコソアラシヅレ、カ、ル所平日ノ御黒色トハ大キニ違ヒ侍ナリ、カヤウノ反古ハ燒捨ベキモノトテ卽座ニ引破リ、只判形ナドハ、御身近ク召仕ル、人々ニモ御油斷ナキ事肝

要ニコソト挨拶ナガラ申サセ玉ヘバ、賴宣卿ノ仰ニ此判形ノ書イサ、カモ覺悟ナシ、然レドモ判形アル上ハ貴殿案ノゴトク、近習ノ者共向後ハ油斷成ガタシト御扈從中ノ詰テ居ル邊ヲ見ヤリ玉ヒケルニ、加納某トヤ云若輩成人御縁ヘ立ヨト見ヘシガ、御目通ニテ切腹シテゾ失ニケル、實ハ此人ノシリタルニアラザレドモ、主君ノ御難義ヲ一身ニ蒙リ誤リタル體ニ見セ申ニケル、サテ信綱公ハ仰セラル、ハ、世上靜謐ノタメ、其家モ無別條ノ爲、カタク御異心ナキ御誓詞アソバサレベシト義氣ヲアラハシ述玉ヘバ、サスガノ賴宣卿ニテ尤トテ、則誓詞ナサレケルトナリ、夫ヲ請取セ玉ヒ、御歸リユヘ、自世ノ風説モ忽シヅマリケルトナリ、是智勇ナクハイカデカカクアラシヤト世舉テ是ヲ感ジアヘリト、一説ニハ酒井空印ノナシ玉フトモイヘリ、

○慶安四年大猷院様御他界アレバ、其恩ヲ厚ク蒙リケル御方殉死アリケレバ、酒井讃岐守殿信綱公此御二人モ殉死シ玉フベキ所ニ、サナキトテ其此色々沙汰スルヲ、少モ事トモシ玉ハズ、忠臣ノ二君ニ仕ヘズト云ハ他姓ノ事ゾ、先君ノ御恩ヲ蒙ラヌ臣ヤアルベ

キ、皆々御先代ノ御恩深ク御取立ノ者ナリトテ、一分ノ名ヲ以テ悉ク御供申サバ、幼君ヲバ誰カ守護申ベキヤ、我々死ニタラン弊ヲ伺フ奴原ノ申ス事ヲ、眞ノ志アラン人ハ諱思フベキ事ト宣ヒシトカヤ、右御他界ノ節、ソレ御他界成トイフホドコソアレ、奥方上下ノ女中同音ニ涕泣シケルガ、大手マデ響渡リシ、制シケレドモンレヲモ聞入ズ、ヨツテ信綱公此サワガシキヲ、イデシジメントテ、老女中一兩人招キ密ニ申シ玉フハ、今若君御幼年マシマスユヘ、御他界ヲ江戸諸大名ニ隠シ申ゾ、謀反ノ輩出來テ御城ヘ取掛ルナラバ、各一人モ助リ玉フマジ、サタナシノトオドサレテ、忽ニ啼聲トマリタルトゾ、

○大猷院様御忌日ニハ、諸大名御旗本毎月上野佛殿ヘ參詣イタサル、ナリ、折節盆ノ内ノ事成ケルニ、御城過八時、信綱公御佛殿ヘ參詣アリテ御拜ノ後、御佛殿當番ノ御徒頭衆ヘ仰セラレケルハ、温氣ノ時分御番御大儀ナリ、今日ハ參詣ノ衆多ト相見ヘ、御佛前ノ手水石ノ水悉ク減タリト挨拶マシケル、御徒頭衆モイカニモ御了簡ノ通り、參詣ノ衆コトク多クアリケル旨御答アリケル、信綱公下向ナサル、ト、

御徒頭衆ト出家衆連立、手水石邊へ參ラレテ見ラレ
タレバ、水コト^ハク減ケルユへ 出家中サへ此義ニ
コ、ロモ付申サレザル處ニ、豆州ノ御不審ニ付見出
シタルハ、誠ニ假初ノ義ナガラ、手水ノ水ニテ參詣ノ

衆ノ多少ヲ計リ玉フ事、兎角ツチノ人ニアラズ、提才
智ナリ、是ヲ以テ計レバ、イカヤウノ事ニヤ目ヲ附玉
ヒテ、人ノ内證ヲ見ラル、事ノアラントアリテ、面々
出家衆ニ至ルマデ、自分ノ裝束ハアシクハナキカ、御
挨拶イカバ有ケルヤト申サレヨトノ外ナル慎ミニナ
ルトナリ、誠ニ一言ノ事ニテ、諸人ノ心ヲモ勵シ玉フ
事良臣ナリト 皆人感ジケルトナリ、又イヅレノ時ニ
カ紅葉山御宮へ 信綱公御參詣ノ比、高野都道入申上
ケルハ、神前へ草踏皮ヲ上ル事イカバトイヒケレバ、
サテハ革類ハ神前憚リニヤト御返答アレバ、尤ノヨ
シ申ス、ソノ時神前ニアル御管絃ノ太鼓ヲ指サシ、是
ハイカニト宣ヘバ、トカクノ御挨拶ナキユへ、御一笑
ナサル、トナリ、一説ニハ、或夜出入ノ衆申サル、
ハ、紅葉山ノ御宮ニハアレホドケガレヲ 改メサセ玉
フニ、鹿ハイヅレノ神モ嫌セ玉フユへ、猶以テ御宮ニ
ハ御忌ナサル、カト存ズレバ、御神前ノ太鼓モ馬ノ

皮、神主ノ直垂ノ紐^{ヒモ}モ鹿ノ皮ニテアルハ、合點ノ參ラ
ザルコト、申サレケレバ、信綱公宣フハ、サレバコソ
太鼓ニハ撥^ハアタリ申スト宣ヘバ、聞人詞ナクシテア
リシトカヤ、

○信綱公常ニ茶ノ湯ニテモ、謠舞ニテモ、碁將碁類一
色モ、數寄コノミ玉フ事ナシ、每度隙ノ時分ハ、出入
ノ心安キ衆ヲ集メ、色々理屈咄ヲナサレ、或ハ公事沙
汰ノ事ヲ問答批判シテ、慰トシテ日ヲクラシ玉フ、分
別ハ申ニ及バズ、卽座ノ答話ハ殊ノ外ニ達者ニマシ
マシケルナリ、或夜御出入ノ衆問ヒ申スハ、總ジテ人
ノサカヤキヲ致ストイフ事ハ合點ノ參ラザル事ナ
リ、頭ラヤキタル事モナキニ、サカヤキト申スヤトイ
ヘバ、夫ニ返答ハナクテ宣フハ、料理ニ芹ヤキトイヘ
ル事アリ、是モ煮テ用ルモノナレドモ、セリヤキト云、
是ハイカニト仰ラレケレバ、皆返答ナクシテ、御理屈
ニアヒテハ文殊モ成リ申マジト笑テ過ヌ、サカヤキ
ノヒラキハナラザルトイヘドモ、負ハ致サレズト申
ス沙汰ナリ、

○或時鎌倉ノ光明寺ヲ召テ、京都智恩院へ轉住ヲ仰
付ラル處ニ、預光明寺ノ念願ハ、増上寺へ轉任仕度コ

トナレバ、此仰付ラレヲ心外ニ思ヒテ申サレケルハ、
縦ヒイカヤウナル罪科ニ仰付ラル、トモ、右ノ御請
ハ仕リガタキ旨ヲ述ラレケレバ、サアラバ流罪ニ仰
付ラルベシ、夫ニテモ御請ハ難レ成歟ト信綱公間セ玉

ヒケレバ、中々ノ事ト申サル、ナリ、然ラバ右ノ段
ヲ上聞ニ達スベシトテ其座ヲ立セ玉ヒ、ヤウク一
問二間ホド御越アリテ、直ニ御立歸リアリテ、光明寺
ヘ仰渡サル、ハ、公裁ヲ相背申ス段自由ガマシキ事
ニ不届ニ思召ル、ユヘ、嚴モ仰付ラルベケレドモ、御
看免ヲ以京都智恩院ヘ流罪ヲ仰付ラル、旨仰渡サレ
ケレバ、光明寺モ兎角ノ詞モナク、畏リ奉ル旨アツト
御請申上ケルトナリ、御提智ノホドヲ皆人感ケルナ
リ、又隱元禪師ノ異國ヨリ渡リケル時、公儀ノ御歸依
ニ付、宇治ニ於テ黃檗寺ヲ建立ナサレ、寺領モ相應ニ
御寄附ナシ下サルヤウニトアリケレバ、信綱公ソノ
地ヘ御越アリテ、見分ノ上ニ御究メ下サルベキヨシ
仰出サレテ、其後公上京マシマス序ニ宇治ヘ御越ア
リ、隱元ヲ御同道ニテ高キ所ヘアガラセ玉ヒテ、アノ
所ヨリ此所マデト目ノ及ダケノ目印ニテ寺領付サセ
玉フ、此仕方ヲ隱元譽申サルハ、日本ハ小國ナレドモ、

カ、ル度量ノ廣キ人モアルカナト申サル、トナリ、
右御附ナサル所御指圖ノ詞ヲ聞テハ大ナレドモ、其
地分内限リアリテ、サホドニテモ寺領ハ廣カラザル
トカヤ、

○大猷院様御代、増上寺ニ於テ萬部ノ御法事アリケ
ル時、信綱公御奉行ナリ、聽衆裏門ヨリ出入ノ御作法
ニテ、讀經ノ内日晝ニ及ビ聽衆ノ者入替ナリ、或時門
外マデ詰掛ル人數アマリ多キユヘ、門ヲ開キ入時必
ズ倒臥テ怪我死人モアルベキハイカバ仕ルベキヤト
御番衆ハ信綱公ヘ相伺レシ所ニ、サアラバ今日聽衆
ヲ町口表門ヨリ出入筈ノヨシ群集ノ者共ヘ申聞ラル
レバ、御下知ニテ諸人承リ、後ヨリ順々ニ表門ノ方ヘ
退行ナリ、半ニ至テ裏門ヲ押開キ、聽衆ヲ入ラル、ニ
付テ、少モ混亂ナク、表門元來不_レ入ユヘ、追々裏門ヘ
立歸リ、出入タヤスカリケル、其後ノ萬部ヨリ御經一
卷切ニ聽衆入替、人數斗_ト舛_ズヲ仰付ラル、是又信綱公
ナサレ始ルトナリ、又嚴有院様御代、上野ニ於テ大猷
院様一回御忌ニ、萬部御執行ノ時、讀經ヲハリ、出家
衆退散ノ比、主人ハ小者ヲ見付ズ、又小者ハ主人ヲ見
出サズ、互ニ混亂ノ體ヲ信綱公御覽ナサレテ、下リ口

ヨリ先へ長ク筵ヲ布ベシト御下知アリテ、ソノ供ノ者兩方ヘワカレ罷在見申スユヘ、込ヤヒ申サズトナリ、御頓智ノ御下知ヲ何モ奉レ感トナリ、

○大猷院様御前へ御老中殘ズ召出サセラレ仰出サルル趣ハ、切支丹宗門ハ、代々御制禁ナサル、トイヘドモ、イマニ至リ斷絶ナケレバ、自今以後ハ杖ヲツカセベシト仰出サル、何レモトカクノ御挨拶ナキ所ニ、信綱公御尤成上意ノヨシ御請ヲ仰上サセラルレバ、皆々退去アリテ今ノ上意何トモ合點參ラザレドモ、伊豆殿御合點ト相見ヘケレバ、何レモ御前ヲ罷立ナリト仰セラルレバ、信綱公私モ御同前ナレドモ、唯今マデハ宗門轉ズレバ御タスケナサル、ナリ、自今以後ハコロバセズシテ御セイバイヲトグラレバ、御法度相立ベキカト思召ル、ヲ、杖ヲツカセベシト仰出サルルカト奉レ察ヨシ仰セラルレバ、此儀尤ト何レモ合點マシマスヨシナリ、又慶安二年己丑六月廿一日ノ晚、江戸大地震、御城郭大名小名ノ營作并民屋等ニ至ルマデ悉ク及ニ大破ナリ、依レ之日光山御宮御寶塔イカガノ旨思召サレ、次飛脚ヲ以テ承リ申ベキ段仰付ラル、時ニ、信綱公御前ニ於テ、御山搖崩申サバ格別、

サナクバ破損アルマジキヨシ仰上ラル、所ニ、何ト存ジテサヤウニ申ゾト上意アレバ、信綱公カサ子テ言上ニハ、念ヲ入造立仕レバ損ゼザルモノト相見ヘタリ、古ノ大地震ニモ御天守并塔ナドハ敗壞ハ仕ラザルナリ、御寶塔ノ御地形ハカクノゴトク念ヲ入テ築立サセ申スユヘ破損ハアルマジク存ジ奉ルナリ、相輪椽ハイカバアルヤノ上意アレバ、ソレハタシカニ見分仕ラザルユヘ御請申上ガタシトアリテ、其後日光山ヨリ御宮御廟塔聊モ別條ナシ、所々ノ石垣ハ崩タル旨ニテ、相輪椽ハ七八寸ホド斜申スト申來レバ、最初ノ頓作ノ御挨拶悉ク首尾合タル事ト聞人感ジアヘリ、又或時御數寄道具ノ御藏へ、信綱公ハ坊主衆ヲ召連ラレ、御道具ヲ取出サセ玉ヒ、退出ノ節御道具入タル藏ニ符印ヲ付テ出ベキ時ニ、折節印判モナク、坊主衆イカバ仕ルベシヤト申セバ、其儘白紙ニテ符印ヲ付、其符印ノ端ノ切タルヲ持歸テカサ子テ出ス時、其切端ヲ持出テ引合セベシト卽座ニ仰セラルルナリ、ナニ事ニヨラズ、御頓智ノホドヲ何モ感ジ入トナリ、又或年極月晦日雪降出シ、明日ハ元日御出仕ノ前、鐵御門ヨリ内御玄關マデ道通リノ雪明朝掃除ナ

リ兼申スベシ、イカバ仕ルベキヤトリノ區々ニ申ス處ニ、信綱公コレヲ聞セ玉ヒ、道幅ニ筵ヲシカセ置テ、降溜タル雪ヲ筵ノ儘ニ運取、アトラシキ筵ヲシキ替ベシト御下知ニテ悉ク事調ヒ申ストナリ、此例今ニ存スルトイヘリ、

○大猷院様増上寺へ成セラル、節、御佛殿ニ於テ伊豆守召出ラレ、破損ノ所修復申付ベシト仰付ラルレバ、畏リタル旨御請ナサレケレバ、破損ノ所御供ノ衆中見付申サ、ル處ニ、信綱公早速ノ御請ハ不審ナリト何モ申スナリ、御堂ノ軒瓦三ツ損ジケル所ヲ日影ニテ上覽アツバサルモノト後日ニ推量ヲ仕ルナリ、信綱公モ是ヲ疾ニ見付玉フト相見ヘケルユヘ、其儘上意ノ趣ニ通ゼサセ玉フ、御目モ御心モ勵セラル、事ト何モ感入ヨシ、増上寺ノ出家衆直談ヲ承リ傳フトナリ、又大坂ノ橋ノ公儀御修復仰付ラル、ハ、殘ラズ高欄ヲ付ベキ旨信綱公下知シ玉フ、夫ヨリ以後ハ皆高欄アルナリ、是ニテ怪我モナシト云ナリ、又或時公宣フハ、新屋布等又ハ屋布替アリトモ、先井戸ニ心ヲ付テ、キヨラカニナスベシ、神佛ヲモ身ヲモ清ムルハ水ゾト仰セララル、又水道ヲ能ツカマツレト宣フ、又

番所モ四方正面八方正面ヲ心得アリテト宣ヒ、其作リヤウ人ノクツロギナドノ義ヲモ教ヘサセ玉フ、又屋作モ表裏ヲ心得セヨト其趣ヲ御教ヘナサルナリ、

○寛永年中武州川越ノ邊ノ松ニ蟲ツキテ葉ヲ喰テ木ヲ枯スコト夥シ、領分ノ百姓コレヲ告ス、信綱公聞玉ヒ、其蟲ヲ悉ク採テ壺ニ入ベシ、一壺ノ價ヲ何ホド、イフ員數ヲ定メ、百姓ニ仰テコレヲ採シメ玉ヒシニ、ホドナク採ツクシケリ、其數百ノ壺ヲ土中ニ埋サセラレ、三年ヲ經テ其壺ヲ掘テコレヲ見レバ、壺中皆松脂ニ成シユヘ、世舉テ是ヲ感ズトナリ、又忍ヨリ川越ヘ御所替ノ節、御領分ノ寺社ニ前領主ヨリ付ラル、除地ノ分ヲバ悉ク先取上サセ玉ヒテ、其後別ニ改メテ右ノ寺社ヘ前ノ如クニ除地ヲ付サセ玉フ、ヨツテ其寺社共別シテ御領主ノ御恩澤ヲ深く存ジテアリガタカリケルト申傳フ、又御領分中ヨク地力ヲツクスヤウニ地方役ヘ仰付ラル、ニ付テ、其土地相應ナル物ヲ仕付テ、何事ニモ事ヲ闕玉フコトナシ、譬バ朝鮮粟到來スレバ、其種子ヲ川越ヘツカハサレテフセサセ玉フ、又西參河正綱公ノ御領地植地村ノ近所ノ菱池

ノ菱ノ種子或ハ蓮ノ子ナド取ヨセ玉ヒテ蒔サセ玉フ
類ナリ、夫正綱公宣フハ、人ホドアダナルモノハナ
シ、事ヲ闕マジキ物ニモカク事多シ、譬バ蓼ト云草ハ
人ノ多ク食スル物ニテ、夏秋ハ日々ニ不_レ入シテ不_レ
叶モノナルニ、屋布ヲ持ナガラ、蓼ヲ一ツ作ル事ナ
クシテ事ヲ欠ノミナリ、歌ニ、ウエテ見ヨ蓼ノソタ、
ヌ土ハナシコ、ロカラコソ事ハカキケレト古歌ヲナ
ヲシテ仰セラレシ、其志ヲ信綱公ハ實ニ繼ガセ玉フ
ト知ル人ハ感ジ奉ルトカヤ、

事語繼志錄上終

事語繼志錄下

○大猷院様御上段ニマシマス時ニ、堀田加賀守殿ハ
出ラル、トテ、御前ヲ見奉リ、御目通りニテ御前ヲ見
ラレズ、手ヲツキ御時宜ヲ仕リ通ラル、ナリ、信綱公
御前通り玉フ時ハ、御目通りニテツクバヒ、御前ヲ少
シ見窺ヒ拜シテ通ラセ玉フ、何モヨキ事ニヤ、度々カ
ヤウニアルヲ見タルト輝綱公咄シ聞サセ玉フトナ
リ、又信綱公御城中口ノ御門ノ内ニ御入ノ時分、夜ノ
明ザル前ニ御成ニテ、御門サシテアル節ハ、暗所ニ手
ヲ土ヘツキ頭ヲサゲ居玉フヲ、他ヨリ見ラレタル人
感ジ申サレケルハ、カゲヒナタナケレバ、御出頭ツノ
リ申スベシ、彼遽撥ガ昏行ヲ以テ節ヲ變ゼズトイヒ、
亦獨立影ヲ慚ザルトイフニ同ジト譽ラレケルトナ
リ、又竹橋ノ内ニテ乗物ノ下アルヲ、岡野氏ノ遙ニ見
ラレタルニ、二三十間乗物ヲ昇玉ヒテハ下ニ置セ玉
フコト幾度トイフコトモナキユヘ、イナ事カナト存
ズル處ニ、豊後守殿對馬守殿御同道ニテ、竹橋ノ内ヘ
入セ玉ヒ、夫ヨリ御三人一同ニ御連枝方ヘ見廻セ玉

フ、岡野氏感ゼラル、ハ、定テ先ヘ御出アリテ待セ玉フ、内供ノ衆長クツクバヒ勞ント思召ユヘニヤカクナシ玉フラントニモカクニモ萬ニ御心付カレタル慈悲アル御智慧ト申サレケル、或年ノ冬雪降ケル朝ニ土屋平三郎殿來ラル、其時公宣フハ、何ゾ用アリテ參ラル、カト仰セケレバ、御見廻ニ來ル由平三郎殿答アレバ、公又宣フハ、用アラバ格別ナリ、此雪ニ何ゾヤ供ノ者ヲ勞シテ來リ玉フハセンナキ事ナリト仰セケレバ、御城退出ヨリ來レリ、ワザ／＼參ラズ、ツイデナル由答アリケレバ、又宣ヒケルハ、サヤフナラバ猶々從者コバヘ勞ベケレバ、早々歸ラルベシ、センナキ事ヲシテ從者ヲ勞シ玉フナト教訓ナサレケルトナリ、此御一言ヲ以テ、萬事御自分ノ事ヲ推テ知ベシ、夫公常ニ御用ノ外ニハ他出ナドニ中々從者ヲ假初モ勞シ玉フ事ナク、下ヲイタハリ玉フ事別シテ切ナリケルトカヤ、或時信綱公宣フハ、上様ニテモ大名ノ潰ヨカシナド、ノ御一念モアラバ、冥加盡申スベシト仰セラルトナリ、

○或時夜咄ニ學文ノ咄アリ、其比小幡勘兵衛トテ武田流ノ兵法ヲ御旗本中ヘ教、是ヲ講ザルモノナシ、又

熊澤次郎八ト云牢人ニ陽明派ノ學ヲ勸ル人アリ、是モ殊ノ外時行テ、志アル人ハ學ザルモノナシ、因テ信綱公宣フハ、人ノ心皆飛越テ、自分ノ事ハ差置、人ノ事ヲ批判スルモノナリ、ソレハ一ツモ身ノ益ニアラズ、口オヲ聞タルマデノ事ニシテ、結句人柄ノ惡クナルモノナリ、サレバ信玄ハ尤名將タリトイヘドモ、終ニ天下ヲトリタル人ニアラズ、忝モ東照宮ハ、古今ノ御名將ニテ、今ニ於テ御子孫御繁昌、天下泰平ナル事本朝ハ申ニ及バズ、異國ニモ珍シキホドノ御名將ナリ、此御名將ノ御仕置御法度ノ儀ヲヨク習ヒ守バ、當世ノ御用ニ立ベシ、入ザル信玄ノ兵法ヲ學テ益ナキ事ナリ、惣ジテ人毎ニ異國ノ戰ヒ、日本ニテモ久シキ戰ハ、太平記類ノ事ハ面々シリタルモノ多シ、ソレヨリ近キ權現様御一代ノ御戰法ヲバ大方ハシリ玉ハズ、是皆我事ヲ捨テ遠キコトヲシリタガル類ナリ、信玄ノ兵法ヲ習ヒ聞ンヨリハ、權現様ノ御武略ノ事ヲ聞ベシ、四書五經ヲキカンヨリ、御代々ノ御家ノ御法度ヲシリタル人ニ聞玉ハバ、差當リテ身ノ德トナルベシト常ニ仰セラレシ、尤ナル儀ト諸人感入ケル、大學ニモ致知格物トテ、コトニイタルノ外學問トイフモ

ノナシト皆人申シアヘリ、又信綱公宣フハ、遊藝ハ申ニ及バズ、文武ノ藝ニテモ好トイフトキハ又弊アルモノナリ、タゞヨキホドニスベキナリト仰セケル、是夫臧ト穀トガ共ニ年ヲ亡スノ弊ヲ含テ宣フト聞人ハ感ジ奉リス、毎度公御隙ノ時分ハ、出入ノ心安キ衆ヲ集メ、色々理屈咄ヲナサレ、或ハ公事沙汰ノ事ヲ問答批判ヲ慰トシテ日ヲクラシ玉ヒ、或ハ問フ事ヲ好ミ、尤下問ヲ耻玉ハズ、或時宣フハ、當世老中奉書ノ判ナドヲ、半時ホドカ、リ見事ニスリ立ルナリ、世上ヲ情考ルニ、是ハ御用人ナドノ判ト云ベカラズ、タゞ一筆ニサラ〜トスヘヲホベキモノナリ、イフ心ハ、急ナル時ハ、馬上ニテモ矢立ノ筆ニテモサラ〜トスヘベキ事ナリ、ソノ上ニスリタル判ハ、似スルニ似セヤスシ、一筆ノ判ハ墨イロ恰好本人ノ判ノゴトクハ成マジキ事ナリト宣ヒケル、誠ニ是ハソノ理ノアル事ト人感シアヘリ、

○上様蛤ヲ御好物ニテ召上ラル、貝ノ内ニ砂アリテ御料理人迷惑致シケレドモ、力ニ不レ及義ト申ス時、信綱公聞セラレ、砂ナキヤウニハ安キ事ナリト宣ヒ、則蛤ヲ取り籠力綱ノ内ニ入テ、海ノ中ニ土ヲ放テツ

ルシ置ケバ砂ナシト宣フユヘ、早速ソノ通りニ申付ラレケレバ砂少モナクテヨシ、誰モ申スベキ事ナガラ、平生ノ人ノ及バザル義ト申アヘルトカヤ、或時信綱公御對客アリテ松平出羽守殿御出ナリ、此人日比御懇ナリキ、此日殊ニ寒カリケレバ、出來合料理ヲ進スベシ、幸ヒ領分崎西ノ雜魚汁申付タレバ、是ヲ進スベシト宣ヘバ、成ホド夫ハ宜シカルベシトテ、則御膳出ル、何ヤラノ燒物等許ナリ、サラ〜雜魚汁宜シ、領分ノ隱岐ノ蛸ナドガ中々及バザル味ト、出羽守殿仰セラレテ賞味シ玉フ、是ヲ承リタル御次ノモノ申シケルハ、出羽様ニモ御アワセ仰ケル事カナト申シテサバヤケケル、其時公宣フハ、其蛸ハ名物ト承ハレバ此雜魚ナドガ中々一ツニハ申サレザル事ナリト宣ヘバ、出羽殿申サル、ハ、若蛸御望ニモアラバ進ベキカト宣フ、望ナレドモ

其内

タマハレト宣ヘバ、安キ事ナリ、幸ヒ取寄置タルアレバ明朝進スベシトテ、蛸五六十モタセ差コサル、トナリ、此節御次ノ者モ右ノ蛸ヲ拜領シケルトナリ、如レ此御無造作ナル御事ナリ、

○或時信綱公御宅ニテ、皆々打寄色々ノ咄アリテ、上

戸ハヨシ下戸ハアシキト云アヘルヲ、信綱公聞セ玉ヒ、何事ニヤト尋玉フ、シカ^レノ様子ヲ申シケレバ、惣ジテ上戸ハ好ザル事ナリ、下戸ハヨシト仰セラルル、ソコニテ箱崎小市トイヘル町人、上戸ニテ有ケルガ申ケルハ、是非下戸ガヨキニモアラズト存ジ奉ルナリ、寒中ニテ凍ナド致シタル時、酒一ツ飲テ身ヲアタ、メタル時分ハ、又上戸ニシクベカラズト申ケル、其時仰セラレケルハ、各ノ御子息達ヲ上戸ニナシ度オモハル、ヤ、又ハ下戸ニナシ度オモハル、ヤト問セ玉ヘバ、何モ下戸コソト申サレシ、サレバトヨ上戸モクルシカラ子ドモ、實ハ下戸ヨシト思ハル、ト宣ヒケル、ソコニテ信綱公ヘマタ小市申上ケルハ、御意ニテハアレドモ、上戸ノヨキ事ヲ御存ジナシ、タトヒ只今火事出來シ、急ニ御供ニ出ラル、ト申ス御方、腹中徒然ニシテ俄ニ何ゾトアラバ、酒ハ走リナガラモ用ヒテソノ用タリ申ベシ、外ノ食事ハ喰申内ニ間カケ申ベシト申シケレバ、信綱公仰ラル、ハ、然ラバ旅立ニ路次中酒許ニテツバクベキヤ、其上急食ニ糲燒タル餅ナド懷中ニテハカツユル事ナシ、其上酒ハ酔トイフ損アレバ酒ヨリ食マシナリト宣ヒケレバ、小市

詞ナクテ退クトナリ、一説ニハ、酒上戸ノ衆ト信綱公御同坐ニテ、御咄ノ興ノ上ニテ、伊豆守殿ニハ萬端一ツトシテオロカナル義ハマシマサ子ドモ、御酒ヲ飲ユヘ上戸ヲ嫌ヒ玉フ、是バカリハ御疵ノヨシ申ストアル御方宣ヘバ、御手前ニモ眞實サヤウニ思召ナラバ、御誓言ニテ承度ト信綱公御挨拶ナサレルバ、中々誓言モ安キヤウニ申シ玉ヘバ、サアラバ神文ヲ以テ御手前ノ子息方ヲ皆々上戸ニ致シタシ、下戸ニハ致シガタシ、此差別ヲ承度ト仰ラレケレバ、眞實ハ下戸ニ仕度ト御一笑アルヨシ云ツタフ、又箱崎小市ト申ス法師上戸ニテ、常ニ酒ヲ吞醉タケ、ル、公ハ上戸ヲ嫌ヒタマフユヘ、常ニ出入ル人モ酒ヲ吞事ヲ顧慮^{オモヒ}イタシケルニ、或時小市以ノ外座布ニテ酒ヲ吞小歌ナドウタヒケル、其時公宣ヒケルハ、イカニ上戸ニテモ年寄サヤウニ大酒イタシタラバ、病身ニモ成申スベケレバ、ヒラニヒカヘバシト仰セラレケレバ、小市申ハ、私ハハヤ極老ニテ子共ハ御影ニテ皆々仕付申セバ、今ハ思ヒ殘ス所ナケレバ、一盃吞申セバ何事モ存ゼズ、是コソ樂ミナレ、縦相果申シテモハヤヨキ比ニテ、年ハ七十ノ餘ニ成申ストイフ、其時其言ニハ一向

取合玉ハズ、汝ハ子ヲフビンニ存ルヤト宣ヘバ、イカ
ニモ其通りナリト申ス、ソコニテ宣フハ、其方ハ親ア
リツルヤト、小市申スハ誰トテモ親ノナキ事アラ
ンヤトイヒケレバ、公宣フハ、其親ハ其方ヲフビンガ
リケルヤト尋サセ玉フニ、小市申スハ、私ハ子ドモノ内
ニテイカイ愛子ニテアリシト申ス、ソコニテ公宣フハ、
汝ハソノ恩ヲ何トモ不レ存ヤト仰セラルレバ、小市申
ハ、人間タル者イカデ親ノ恩ヲ忘レ申スベキヤ、イマ
ニ於テ存ジ出シ申セバ涙ヲ流シ申スト申上ル、ソコ
ニテ公宣フハ、サレバトヨ、ソノ方親ハサゾヤ其方ヲ
ブヒンガリツラン、親ハ死デモソノ志ハ殘ルナリ、ソ
ノ方親ソノゴトク大酒ヲ吞ヲ悦ビ申ベキヤ、當分眼
前ニ親ナキトテソノゴトク影クラキ事ヲ致スヤト宣
ヘバ、小市至極シテ盃ヲ持除テ、以來大酒仕ルマジ、
オロカニテ親ノ恩ヲワスレ申ス、御意ニテ思ヒ當レ
リト申上ル、公ノ才智各別成ユヘ、名譽ノ理屈ヲ宣ヒ
テ道ニ叶ヒ玉フト皆人感ジ入ケルトナリ、又何レノ
時ニヤ、信綱公ヘ出入ノ箱崎小市元來大酒ニテ、酒癖
アリテ一盃吞バ顔ヲシガメナガラモ又吞ケルヲ、誰
ニテヤ有ケン申サル、ハ、サヤウニ目ツラヲシガム

ルハクルシクテ斯セラル、ヤ、ソレホドニアリテ酒
ヲ吞ハ益アルマジトイヒケレバ、小市申ケルハ、ソノ
シガムルホドニアラザレバ心ヨカラズト申シケレ
バ、又ソノ人申サル、ハ、味ヨク覺ユルニイカデ顔ヲ
シガメンヤナド、云テ、センギ半ノ所ヘ信綱公出玉
ヒテ、何事ゾト尋玉ヘバ、ソノ人公ハ酒嫌ヒ玉ヘバ幸
ト思ヒテ、シカ／＼ノヤウスヲ語リ玉フ、其時公仰セ
ラル、ハ、小市申シケル言コレ斷ナリ、我等上戸ニア
ラザレバ酒ハ吞ザレドモ、サヤウニ有ベキ事モヤト
思フ、其子細ハ差味ヲ喰フニ辛ガナマカラケレバ心
ヨカラズ、ヨケレバ必ズ鼻ヲトリテ涙ヲコボス、又
ソレホドニアラザレバ味ヨカラズト宣ヒシハ、誠ニ
假初ノ事トイヘドモ頓作ナル斷ト、一座ノ面々肝ヲ
ツブシケルトナリ、

○或牢人ノ娘十五ニ成ケルヲ、又或牢人ノ方ヘ媒ア
リケルニ、其比ハ娘ハ母許アリケルガ、母ノ方ヘ十七
八ニナル有德ナル牢人アレバ遣スベキヤト申セバ、
サアラバ年ヨハイモヨシ、一人ノヒザウ娘ナレドモ、
勝手モヨクバ一入ナレバ遣スベシト申シ合テ、其後
承リ合スレバ、翌ノ年比三十許ト申スユヘ、サヤウニ

テハ口違フユヘ遣スマジ、有徳ナリトイフモ實シカラズト申テ、母同心仕ラザルユヘ、媒人サヤウニアリテハ難義ナリ、有徳ナルコトハ僞ナシ、コレノ證據アリ、娘ノ年十五ナルニ三十ノ賀ヲ年寄ト申スベキニアラズ、一向遣シテクレヨト申ス、隣家ノモノマデ呼アツメ色々ニ申ニヨリ、此上ハ皆々モ御取扱ヒアレバ遣スベシト議定シテ、日限マデ相定ムル所ニ、賀ノ年三十五ニナリスト承リ出シ、セメテ一バイモ違ヒタラバ遣ベケレドモ度々年増申セバイカサマヨキ事アラジ、後家ニテ居ルユヘアナヅリケルト相見ヘタリ、フツト遣スマジト申キリケルニ付、下ニテ濟カチ、雙方評定所ヘ出テ論ジ申ス、其時土井大炊頭殿出ラレ斷ナサル、節ナリ、各評定ノ面々モ斷レベシト大炊殿モ仰ラレ、少時無言ニテアリツルガ、ソノ時分公事ノ斷ヲ承リ申セト上意アリテ、信綱公モ列座シ玉ヒケルガ、御顔色ニコトナサレ御斷モアルベキ體ニ見ヘ玉ヘバ、大炊殿ハ信綱公ヘ斷テ見玉ヘカシトアリケルユヘ、イカバアルベケレドモサアラバ申テモ見申ベキヤトテ、母ガ申ス段一々相聞ヘ道理至極ナリト宣ヘバ、賀申スハ私年ヲ隱シ申ス義少モナ

ク、縁組相究リテトヤカクトアリテハ面目ヲ失ヒ申ス、媒人ノアヤマル義ハ私ノ咎ニアラズ、御聞分下サルベシト申上ル、夫ニモ御構ナク、トニカク有付度ハ娘ノ事ナレバ、御肝煎テ遣サルベシ、最前モ申ス如クセメテ年ノ齡一バイモ違ヒタラバ遣スベキト申セバ、彌サヤウナラバ御心アテアルユヘアナタコナタト口違ヒテハ肝煎モナサレガタキト宣ヘバ、母申ハ終ニ私ノ方ニテ口ノ違ヒタル義ナシ、賀ノ方ニテトヤカクト肝煎口ヲ替ケルト腹ヲ立申ス、最前ヨリ御申シノ如ク道理ニテアレバ手形ヲセヨトテ、娘ヨリ歳一倍モ違ヒタル分ニテハ有付申ベシト、母ニカ、セ取セ玉ヒテ、其後肝煎人ヘヨク有付度テ歳ヲ色々ニ申スヤ、其段ハ不調法ナリ、男モ此上ハセハシク存ゼズ、五年待申スベシ、母ヘモ十五歳ノ娘五年待テバ二十歳ニナリ、賀ノ年三十五ナレバ五年過レバ四十ニナレバ、今少ノ事ナルユヘ相待ベキ旨斷玉ヘバ、大炊殿始メ各感ジ、彼母モ道理ニ詰テ五年ヲ待兼テ頓テ祝言トゲタルトゾ、媒人大ニ悦ビ申出、信綱公御斷コレラガ事ノ始ノヨシ申傳フナリ、或町人ノ女房離別仕ル處ニ、ホドナク其町向ガハノ

町人ノ妻ニ呼ムカヘタリ、其以後ニ元ノ夫ノ宿ノ前ニ張文ヲ仕ルナリ、其趣ハ此者ニ意趣アレバ火ヲ付申ベキトノ文言ナリ、打ツバキ兩三度ニ及ビタルユヘ、大屋左右ノ隣五人組申スハ、其方義終ニ不届ナル事尤惡キ義モナケレドモ、カヤウノ張文ハ一町ノ迷惑ナレバ宿ヲカヘラレヨト大屋申ス、此者申ハ、何方ヨリ意趣エベシトモ覺ナケレバ、宿替マジキヨシ達テ申スニ付テ、大屋評定所ヘ訴訟ニ出ル、因テ店借ノ其者モ召出サレテ御僉議ナサル、此者何ニテモ子細ハナキカト信綱公尋子玉ヘバ、數年店ヲ備置タレドモ終ニ惡事モナシ、近比女房ヲ去申ス、其妻ヲ向合ノ扇屋ガ妻ニ呼取申スヨシ申上ケレバ、ソコニテ宣フハ、右ノ張文ハ此者自身仕タルト思召ナリ、サテサテ智謀ノ深キ者カナ、サナキカト圖ニ當テ仰セラ、ユヘ、名譽ナル御意ヲ彼者大ニ驚キ、則白狀仕ルニ付テ、サアラバ向ノ扇屋ヲ其所拂ヒ申スベシト仰付ラルレバ、忝キ御事ト其當人ハ申ニ及バズ、大屋近隣ノ者共マデオソレ悦入タルトナリ、又御旗本ノ同心ノ方ヘ、旦那寺ノ出家ヲ父ノ忌日ニ非時ニ呼ケル、此僧ハ人モ存ジタルホドノ僧ニテ、御番頭ノ内ニモ

兵法ノ序ナドヲモカ、セラレタルユヘニ、人ノ存タル僧ナレドモ、同心ノ下女ヘ女難ノ事アリトテ、同心屋布ノ裏ニテ彼僧ヲ同心斬殺シケル、ソレニヨリ評定所ニ於テ阿部對馬守殿ヘ仰付ラレ、御僉議アル處ニ、同心申スハ、彼僧旦那寺ノ事ナレバ、下女ヲ折々使ニ遣シケル處ニ、何角ト御ナブリアルヨシ、或夜彼僧シノビテ下女ノ寢屋ヘ參ラル、ニ付、戸ノ開闔ノ聞ヘケルユヘ、盜人カト申テ起出ケル處ニ、アワタバシク誰トモ知ズ戸ヲアラ、カニ開テ足ハヤニ出タルユヘ、ヤルマジキトテ刀ヲ拔追懸ツレバ、ヒタ延ニ逃行ユヘ、盜人ト申シナガラ追カケタレドモ、一言ノ挨拶モナキユヘ紛モナキ盜人ゾト存ジ、曇タル暗ノ夜ニテ一入クラサハクラシ、足ハヤニ延行申ニヨリ、取ニガシテハイカバト存ジ、及ビガ、リニ後ヨリ斬ツルガ、何方ヘアタリタルハ知ズ、盜人倒ツルユヘ鳴ヲ立テ、盜人ヲ斬フセタルゾ出合ヨトイヒツレバ、宿ヨリハ申ニ及バズ、隣近所ノ傍輩ドモノ家々ヨリモ、挑灯松明ナド指出シ、是ヲ見ルニ日比頼ミタル旦那寺ナルユヘ、驚轉仕ツレドモセンカタナク、宿ヘ歸リ改ツルニ、年若キ下女申ハ此上ハ是非ナシ、アリヤウニ申

上ルナリ、御使ニ寺へ參レバ、何ノ角ノト戯^{オドケ}ヲ御住持仰セラル、其後夜更忍デ寢屋へ御越アル時分盜人ヨトアリツルユへ表へ逃出ナサル、ト申スヨシ申上ルユへ、彼小女ヲモ御呼出シロヲ御聞、又同心中ノ口ヲモ聞セ玉ヘドモ、別義ナキニヨリ、右ノ段對馬殿言上ニ及ビケル、其比節々御成アリツルガ、何ト思召サレケルニヤ、阿部豊後守ニ僉議仕ルベシト仰渡サル、因テ豊後殿僉議シ玉ヘドモ、替義ナキユへ、其後松平伊豆守ニ穿鑿仕ルベシト上意アレバ、信綱公御内談ニテ親^{サシキ}キ衆中へ仰セラル、ハ、今度仰セ付ラルル公事ノ斷ハ、ムヅカシキ趣キナルハ、豊後守吟味スベシト仰渡サレケレドモ、別ノ義ナキニヨリテ伊豆守ニ穿鑿セヨト上意ナリ、我等承リタレドモ兩人ノ衆ノ尋ラル、ニ替義モアルマジ、若^{モシ}又別ノ筋問ヒ出シタラバ、兩人ノ衆ノ前モアルナレドモ、其段ハ仰ノ上トカクニ及バズ、イカバアランヤト宣ヒケリ、サテ評定所へ出席ナサレ、彼同心并下女出タルヲチラト御覽アルヨリ、ハヤ埒ヲ御合點ナサレタルト相聞ヘ申スナリ、彼下女年ノヨハヒ十二三ホドニモアルベキヤ、ソレニ鐵漿^{カネ}ヲツケ眉毛ヲヌキ袖ヲトメ

申スナリ、主人ノ同心ヲ他へ遣サレテ、サテ下女ニ仰セラル、ハ、御天守ノ蛭^シ吻^フヲ見申スヤ、何モ魚虎ト御尋アレバ、中々見申スト申ニ付、魚虎ハ金ナリ、上様ハアノ御家ノ下ニマシマス、數々御家多ク光リ耀コトナリ、ヨク〱思案致シアリヤウニ申スベシ、申上ズバ腹ニテ火ヲ燒、ツラハ、ギ火ヲ付、其外背ヲ割テ鉛^{ナマリ}ヲトカセ入、水間湯問息絶^{イキタヘン}トスレバメイヨノ樂ヲアタへ、殺シモヤラズカギリナク問ヌレバ氣絶^{キセツ}シ、終ニハ申サセズトイフ事ハナシ、其上ニ汝ガ父母兄弟末類マデ串ニ御サ、セナサルナリ、又ハヤク有ヤウヲ申スレバ最前聞セ玉フゴトク、金ヲ澤山ニ御貽^{タカス}アレバホド〱ニ隨ヒ御褒美ニ金下サレヌレバ、父母兄弟眷屬マデ榮申ス事ナリ、能聞、サテ鐵漿^{カネ}ヲ付眉毛ヲヌキ袖ヲトメケルハイツノ事ゾト御尋アレバ、則御挨拶ヲ申ス、其日ツモリ出家殺シタル以後ノ事ナリ、彌作リ事ト思召、サマ〱イタキトヒジヤウノ事ヲ詞ヲ盡シ玉ヒ仰セ聞ラレ、スナヲニ申セバウカム事ヲモ御申シ聞セ玉ヘバ、小女忽ニオチテ、御出家ヲ招請申シ、馳走仕リ非時ヲ進ジ、潔^{キレイ}ニ仕リ、水風呂ヲ立置テ入玉ハンヤト申ツレバ、忝^{ハッ}トテ袈裟^{ケサ}衣ヲトリ、

首ニカケラレタルカキ袋ヲ折釘ニカケテ湯ニ入ラレ
ツルユヘ、ソノ内同心袋ヲ探テ見ルニ、小判七八兩モ
有ツルユヘ、是ニ心アリテ一入馳走シテ酒ヲス、メ、
夜更ルマデ何角ト云テ、酔テ枕ヲ出テ眠ラセ、御泊リ
アレナド、申ス、サヤウニモ仕ルベキト申サレ、寢入
ラレル内ニ、金ヲ取御出家ヲシメ殺シ、私ニモ金ヲ三
步クレラレ、又モトラセベキアイダ必々カクコソ申
上ベシト、前方ノ通ヲヨク／＼申シフクメシヨリ、對
馬守樣豐後守樣御尋ノ時分、其通りニ申ツルナリ、只
今伊豆守樣仰セラル、ヲトクト身ニシミ、忝モオソ
ロシクモ存ジ奉リ、有ヤウニ申上ルナリ、命ヲ御助ケ
親其事何ヤウニモヨキヤウニ頼ミ奉ル旨申上ルヨシ
ニヨリ、彼同心御呼出シ、汝ヨク聞、カロキ者トイヘ
ドモ御扶持人ナリ、御三代奉公仕リタル者ガ何角カ
クシタラバ一入ミレンナル義ナリ、斬罪ニアヒ申ベ
キハ別シテ面目ナキ事ナリ、此上ハ有ヤウニ申上ル
ナラバ切腹ヲ仰付ラル、ヤウニ申上ベキ由申シ聞サ
セ玉ヘバ、忝キ仰セナリ、父ノ日殊更旦那ノ出家ヲ殺
シ物取仕ル事冥加ツキ、忽ニ天罰ヲ蒙リ申スト、面目
ナキ義ナガラ作り事ニテ物取ニ殺ケルト明白ニ申

上ル、其後切腹仰付ラルトヤラン承ル、コレニヨリテ
大猷院樣大キニ御感アリケルトカヤ、
○京都ニ於テ濟下宗ノ寺號ハ何トカヤイヒシ、其寺ノ
住持遷化ノ遺跡一老二老ノアイダヘ相讓ノヨシ申置
ル、所ニ、後住ノ裁判ヨリ先立テ寺閣大破ニ及ビケ
ルニ、檀方ノ合力ニ叶フベカラザルユヘ、當寺ノ什物
眞壺ノ茶入或ハ釜ヲ代替テ修復セシメ、成就ノ上後
住ノ沙汰ニ及ベシト、寺中相談半ニ、一薦二薦ト諍論
アリ、下ニテスミ申サズ、諸司代ヘ訴ヘ申タレドモ、
斷キカ子テ江戸下向、其比ノ寺社奉行ハ安藤右京亮
殿松平出雲守殿ニテ、夫ヘ申上ラレタルガ、スミカ子
右ノ段上聞ニ達スル所ニ、伊豆守ニ承ルベキ旨仰出
サル、ニ付テ、或日評定所ヘ出席、右ノ出家衆出テ初
中後ノ次第一々言上、雙方證文ドモ指出ス、信綱公聞
セ玉ヒ、公事ノ是非ハ立ラレズ、各ノ師匠ハ道心アリ
ヤト尋玉ヘバ、中々得道經釋超過イタシ、内典外典ニ
モクラカラズ、カクレナキ僧ニテ人ノ存タル人ナリ、
手跡マデヨク、詩文ニ於テモクラカラズ、此御一座ノ
衆中ニモ御存ジノ御方モ有ナンナド、居タケ高ニ
成テ申ス、其時公宣フハ、各ハ大キナル虚談ニテア

リト仰セケレバ、コハ存ジ寄ザル御意ナリト御挨拶申ス、ソコニテ公宣フハ、師匠得道超過ノヨシニアルナラバ、糞杖瓶^{フンダウビン}一ツモアルマジニ、先條ノ茶入釜財寶アルハ更ニ得道ノ僧トハイハレマジト仰セケレバ、其時僧達アザ笑テサヤウニ思召ハ、ツレトナドノ假名^{カナ}雙紙ニ記置タル趣ヲ御覽ナサレタルト相見ユルナリ、吉田兼好ハ捨身行者ノ申タル事ナリ、我宗ノ流儀ハ釋尊ノ說法ニテ、在家繁昌ノモウケニ相空愚癡無智ノ衆生濟度ノ爲ニ、堂塔伽藍ヲ構ヘ威儀ヲ正シテ、一切ノ衆生崇敬致スヤウニ仕ル事專要ナリ、此段ハ御存ジナサレザル儀トイヒケレバ、列座ノ評定衆モ伊豆殿御返答モナルマジ、兼好ガ詞ヲ仰セ述ラルル事サテ、入ザル義ト少々笑止ニ相見ケル所ニ、聊モ動轉ノ氣色マシマサデ、ソノ方ナドハ祖師ヲ專一ニ崇敬カト御尋アリケレバ、御尋マデモナク釋迦達磨代々ノ祖師ノ教ヲ守ズシテ何事カ崇ビ申ベキヤト御返答申上ラル、ソレハ必定カト再仰セラレケレバ、御疑ニ及バザル旨ヲ御挨拶ナリ、然バ本來無一物ト云ハ祖師ノ面目ニテハナキヤ、衆生濟度ノ爲ニ財寶ハ入マジキハイカニト宣ヘバ、其僧共一言ノ

御返答ニ及バズ、コレニ依テ先住ノ遺財ハ三薦ニ相讓ベキ旨ヲ御裁判ナリケレバ、出家衆前方イヒツノリ、勝ニノリ居タケ高ニテアリツルガ、俄ニ頭ヲ下ゲ色ヲ青クシ、サテモノ、面目ナキ事ドモヲ申タルモノカナ、京都ヨリ江戸ニ至リ此御僉議セサル所ニ、伊豆守殿ノ御意ニ得心仕ルナリ、當時伊豆殿御事ハ御名人ト上方ニ於テモソノカクレナク承リ及ビスレドモ、マノアタリニ承リ、カヤウノ事トハ存ヨラズ、出家ノ身ニテ面目ナキ事ヲ理運ノヤウニ存ジ、ハルト御當地マデ下タルト後悔仕ルト、落涙シテ一同ニ申ヌ、手ギハナル合點ノ仕ヤウト一座ノ衆中モ感心ナリ因テ右京殿申サル、ハ、公事ツカヘタリ、モハヤ出家衆退出アレト申玉フ、時ニ公仰セラル、ハ、最前ノ茶入釜ノコト落着ナキ物ハ、中ヨリトレト世話ニマカセ公儀ヘ差上ルヤウニト仰セ渡サル、出家衆退出ノ砌リ寄付ニテ右京殿ヘ願ヒ申サル、ハ、伊豆殿御斷承リ届ケ、憚リナガラ御尤ニ存ジ奉ルナリ、一薦二薦ノ者ハ跡目仰セ付ラレザルハ其通リニアレドモ、重寶ヲ召上ラルレバ寺退轉仕ルアイダ、是ハ下シ置ル、ヤウニト達テ詫言ノ時ニ、右京殿申サル、ハ、其

段聞ワケタレドモ、只今はヲ伊豆殿へ申サバ機嫌アシク有ベキナリ、幸明朝御用アリテ彼宅へ我等相越ナリ、其時分皆モ參ラルベシ、自分ヲ送リテ出ラル、時、伊豆殿へ玄關ニテ成トモ直ニ願ヒ申サルベシト挨拶ユヘ、其ゴトク翌朝出家衆申出ラレケレバ、公聞分玉ヒテ、右ノ品ドモ下サレケル、此度ノ斷何レモ感入ケルヨシ、右京殿ハ吉良殿へ御物語ナサル、ヨシ、吉良殿ノ物語ヲ承リタル人ノ咄シヲ聞テ書載申ストナリ、又或日蓮宗ノ公事ニ及ブ、毎度寺社奉行衆へ相詰、色々訴訟申アゲ、レドモ、雙方入組タル事ドモアリテ、中々ハカユクベキトモ見ヘズ、徒二年月ヲ送りケルユヘ、彼出家退屈シテ信綱公へ參テカクト申上ル、色々利口ヲ申ケレバ、ソノ時仰セラル、ハ、天下ノ御役人ハソレゾレノ品カハリ其ワカチアリ、ソノ訴訟ノ事ハナニトナク寺社方ニテ埒明事ト宣ヘドモ、出家聞ワケモナク毎朝詰申ニヨリ、或時公ハソノ出家ニ對談致シ玉ハントテ、御用場へ呼入玉ヒ、對面アリテ宣ヒケルハ、貴僧ノ宗體ハイカバト問セ玉ヘバ、勿論法花宗ノヨシ答ヘ申ニヨリ、然バ開山ハ日蓮上人ニテハナキヤト宣フ、其通リノヨシ申上ル、ソノ

日蓮ノ前ニテハ念佛ヲ申サル、ヤト宣バ、出家申スハ念佛ニテハナク題目ヲ唱ヘ申スト答フ、公重テ宣フハ、佛ハ一體ノ事ナルニ、何トテサヤウニ念佛題目ヲワケテトナケルヤト宣フ、出家申ケルハ、本ハ一心一佛一體ニテアレドモ、其源ノ日蓮上人ノ教ニテ題目ヲ唱ヘ申スト答フ、公宣フハ尤承リ届タレバ、立派立派ニテ其念ジ申ス手筋アリ、出家ハ承リ、サヤウニテアリト申ス、ソコニテ公宣フハ、貴僧ノ公事ノ訴訟モ其通リナリ、寺社方ハ日蓮宗、老中ハ淨土宗ノミナモトナリ、上様御一人ノ仰ヲ守リヌレドモ、ソレノ役人アリテ其手筋ヘ申入ザレバ、百度申テモ叶ヒガタシ、貴僧ノ申サル、ハ淨土宗ノ方へ參リ題目ヲ唱ヘラルゴトクニテ、向へ通ジ申サバルナリ、以來ハ御出フツト無用ト宣ヘバ、彼出家詞ナクシテ再ヒ參ラザルトナリ、

○或牢人背タル事アリテ、江戸ヲ御拂ニナサル、趣ヲ、評定所ニ於テ上意仰セ渡サル、彼者謹デ命ヲ御助ケ有ガタク存ジ奉ル旨、泪ヲ流シ申上、然ドモ江戸ヲ御拂ヒナサレテハ命ヲツナグベキヤウナケレバ、アハレ仰ヲ承リ切腹仕度旨ヲシキツテ言上ニ及ベ

バ、ソノ時信綱公宣フハ、^{アミガサ}編笠ハナキヤトアレバ、サ
 テサテ忝事カナトテ則立退申スナリ、彼牢人譽ヌ人
 ナシトナリ、或時何ヤラノ公事ノ節、評定所へ信綱公
 御出座ノ所ニ、人買ノ訴人アリケル、其男ノ言舌サハ
 ヤカナル事流水ノゴトクナルノミニアラズ、ソノ風
 俗サスガ凡ニ超テ、殊ニ絲髮ニテ、其上スグレテ齒ノ
 シロカリケレバ、公宣フハ物言マデタゞ人ニテナク、
 齒マデモ至テシロキハト宣ヘバ、彼者ハヤクモ聞テ
 申上ケルハ、御意トモ存ジ奉ヌ、是ハ生付ニテアル段
 ヲ申スニ付、側ナル御方モ入ザルコトヲ宣フト思召
 サル所ニ、公宣ヒケルハ、シカラバ其方ガ髮ノ形モ生
 付ニヤトアレバ、其者忽ニ詞屈シケルトナリ、如レ此
 少シ當話ニモ妙ニマシ〜ケルト、

○或時御書院番衆ノ内、百姓地頭ヲ訴人シ御番所へ
 出ルユヘ、色々ソノ御番衆百姓ニ異見ヲ申サレケレ
 レモ聞イレズ、後ハ公儀へ出ルナリ、ソノ時彼御番
 頭衆ハ信綱公方へ參ラレ、右ノ段々ヲ述ラル、ハ、此
 百姓ノ訴訟ハ、免ヲツヨクコトニ地頭ノアタリアシ
 ク困究イタシ迷惑ナリトノ申分ナレドモ、是ハ同郷
 ニ相給モ多クアリテ、地モ皆ト同ジ地ノ事ナルニ、然

ルヲ取ワケテ色々トツゲ事ヲ申テ僞リヲ申上ル、百
 姓ノ事ニアレバ、是ハニクキ義ニ存ズレバ嚴ト仰付
 ラル、カ、又ハ御地頭ニ下サレバ、百姓ノ事ナルユヘ
 死罪ニハ及バス、申フセ痛差置申マデ成ト申サル、
 公聞セ玉ヒ、色々理屈ヲ宣ヘドモ番頭衆達テ右ノ事
 ヲクドク申サル、ユヘ、公ハ其公事ノ事ハ差置玉ヒ、
 折節庭ヲ中間ドモ大勢掃除致シ有シ砌ナレバ番頭衆
 へ公宣フハ、アノ中間ドモ皆百姓ナリ、定テ徒者モア
 ルベシ、イヅレカ徒者タラン御目利アレト宣ヘドモ
 何トモ目相致スベキヤウナシ、何カ徒モノニテ有ベ
 キヤ何トモ目相ナラズト申サル、公仰セラル、ハ、
 今度ノ公事百姓ハ徒モノニヤト御尋アリケレバ、イ
 カニモ徒モノナリトアル、其時タトヘバ慮モアレ
 ドモタゞ今御申シアル事はニ同ジ、子細ハアノ中間
 ノ内ニ徒ナルモアルベケレドモ、顯レザレバ夫ト申
 シガタシ、其如ク貴殿ノ御組ノ人仕置相給人ト地モ
 一ツ免合モ一ツニアレバ、究テ同ジ事ナラントハ存ズ
 レドモ、先アラハレテ出タル訴ナレバ、此人ヲ申サレ
 ン事ヲサゲスミ申スナリ、地モ同ジ地免モ同ジ免ナル
 處ニ、ワケテ訴人ニ出ル事ニアレバ、何トゾ子細ナク

テ相叶ハズ、上様ニハ天下ノ民百姓マデ仕置ヲロクニ思召サル、ニ、御穿鑿ナクテハ仰セ付ラレガタシ、先並多キ人ニテモ御組ノ衆ヘ指出セバ、是ハアラハレタル事ナリ、今申ス如クアノ中間ノ内ニ徒モノアリテモ、アラハレザレバソレトナラザルナリト仰セラレケレバ、ソノ番頭衆強テ願ヲ申ス事モナラデ退キ玉フトナリ、又或時番頭衆四五人シテ、其組ノ屋布願ノ儀ヲ信綱公ヘ申サル、ユヘ宣フハ、皆書付致シ御序ヲ以テ窺ヒ申ス事ナレドモ、色々御用ノ義段々アリテ、イマダ、御屋布ノ願ノ書付ハ御前ヘ出シ申サズト宣ヘドモ、ソノ番頭衆申サル、ハ、是ハ餘ノ御屋布願ト違ヒ、由緒有モノニテ格別ノ事ニアレバ、少モ早ク御耳ニ達セラレ下サル、ヤウニ、少シ御情出シ下サル、ヤウニトクドク申サル、其時宣フハ、カヤウノ願ハサズ御申シアル事迷惑タルベシ、定テ隙ヲカキ玉ヒテ我等ガ方ヘモ切々御出アリテ、我等ガ機嫌ヲモ伺ヒアリテ、漸々御申シアルベシト宣ヘバ、イカニモ仰セノ通り毛頭違ヒ申サバルト答アレバ、其時宣フハ、我等儀ハ御手前トハ傍輩ナリ、ケリヤウ御威光ヲ以テ上ト下トニナリ居レドモ、元來傍輩ナリ、

夫サヘ其如ク氣ヲ兼玉フ、我等儀ハ御主人ヘ申事ナレバ、イカホド窺フヤト存ゼラルゾヤ、御推量アルベシ、油斷ナキニハ如此書付懷中致スナリトテ、鼻紙袋ヨリ願ヒノ書付ヲ取出シ見セラルレバ、至極シテ重テセツキ申サレザルトナリ、是モ理ニ詰リ如此シ、總ジテ信綱公ヘ御用ヲ申スニ、一ツトシテアダナル事ナシト人々申サレケル、

○大猷院様御代、或ガツソウノ浪人少々學文ナド仕タルト見ユル者、御旗本衆ニカ、リ居タルガ、天下ノ御仕置御爲ニモナルベキヨモ事ヲ工夫仕タル由訴ヘテ、御扶持方ヲモ拜領仕ルベキト存ズル體ニテ、信綱公ノ御宅ヘ相越、忠義ヲ申上度旨述ル、彼モノ利口ヲ表ニ立テ申ス、先一箇條ハ、上様ニハ御運ヲ御存ナサレズ、毎度ノ御成ニ五町拾町先ヲモ人ノ往來ヲ御留ナサル、ユヘ、病人醫師等ノ用事其外急用、或ハ月迫ニ及デ用事ヲ相達スル者、并諸商人アマタノ人民迷惑カギリナシ、御眼前許ノ御拂ヒアラバ大キナル御慈悲ニモナルベシ、如此何ト御用心アリテモ天災ハ御ノガレナサレマジ、御慈悲ダニアラバ市ノ中ニ立セ玉フトモ災ヒ來ルマジナド、申ケルユヘ、信綱公

宣フハ、上様ハ御運命ヲヨク御存ナサレタルワケヲ承ハレ、夫御鷹野ニ成セラレ御供ノ衆ヲモ御下ゲ、一兩人召ツレラル、カ、或ハ御一人モ御鷹ヲ居^ス玉ヒ御翁セナサル、ヲ知ズヤ、サヤウヤル時分數ノ間木ノ陰ナドヨリ鐵砲ニテモヲラヒ奉ルナラバ、ナドカタマラセラレベキヤ、是御運ヲヨク御存ナサレタルシルシナリ、サテ御成御通ノ時分アナタコナタ人止仕ルヲ仰セ付ラルト存ズルヤ、タトヘバ我等知行川越ノ百姓ドモ不案内ノ輩、御成ノ道筋ヘ卒爾モアリテ御機嫌ヲ損カシ申シテハ不調法アル義ナレバ、出ザルヤウニ申シ付ルナリ、大切ナル上様ノ事ナレバ、手々ニ土ノ上ヲ撫^トデ刺^トモナキヤウニ仕リ、御通ナサル、節ハ手ヲ並テモ其上ヲ御成アソバサルヤウニ敬ヒ申マジキヤ、カヤウニ人々大切ニ思ヒ奉ルユヘ、諸人オノヅカラ御馳走申タテマツルニ、ソレヲ知ズヤ、ソレ闇夜ニ幽カナル燈ヲ取テ用ヲ達スルトキ、又ソレヨリ蠟燭ナドヲ以テ物ヲ見ル時ハ、アキラカナレバヨロコバシカラズヤ、彼者尤ノヨシ御挨拶ヲ申ス、又ソレヨリ白晝ハ猶ヨカラシカ、中々ノ儀ト御請申上ル時、然レドモ日天ノ光リ大キナル恩德ナレバ、最

前ノ燈ヲ得テ悦ブホドニモ諸人ハ思ハザルナリ、サテ上様ノ御恩ト云ハ、往古亂世ノ時ハ、天下ノ諸人起居動靜安キ事ドモ時モナキ節アルナリ、然ルニ權現樣以來天下安穩ニ治セラレ、世上帶紐ヲ解、安泰ニ送ル事歴然ナリ、是日天ノ光リヲ輝御恩ト同然ナリ、此事ヲ存付ル者ナク、上様折節御不例ノ御養生トシテ方々成セラルレバ、御氣色御快然ノコト御養生ニ成セラル、事ニ、面々何ホドノ迷惑ニテ用所ヲ闕トモ、聊クルシム事ニハアラザルベシ、又御眼前バカリ往來ヲ御止ナサル、事尤ノ様ニハアレドモ、天子公方ヨリ以下國主城主平士其品々ニ應ジテ作法アリテ、縦ヒ五町十町御先ヲ通ル者乗打等仕ルニオイテハ、刑ニ行ズシテ叶ハザル事ナリ、遠キ所ヲ防グト云モ人ヲ亡サバルタメナリ、大人ノ道ハ小人ノ心ニ及ブベカラザルユヘ、如^レ此ト信綱公宣ヘバ、サテノ御意ノ段々承リテ感ジ奉ルノ旨申上ル、サテ金銀^{ビツ}鐸ヲ以テ用ヲ調ル事何ノ益モナキ事ナリ、百兩千兩ヲモ手ノ内ニ持ヤウニ紙札ヲ以テ用ヲ調ヘ、金銀ハ土藏文庫ニ納置テ然ルベキト、牢人申上ケレバ、公宣フハ、ソレハ人ヲ殺ス基ナリ、金銀ヲ似スル事ムヅカシク、細工

道具モ入テ忍テシガタキ事ナレドモ、ヤ、モスレバ似セ金スル者アリテ罪科ニ行ハル、紙札ニセル事容易シ、常住ニ惡人誅罰ノ隙モアルマジキゾ、其方ハ金言妙句ヲ言上スベキホドノ人ナラバ、光リモサシテ人ニモ知ルベキニ、今マテ何トテ沙汰モナクテ有ツルヤ、彌陀如來釋尊ナドモ御光アリト宣ヘバ、ソノ牢人申上ルハ、玉ニアラザレバ磨ベキ方便ナクテ光リ生ズベキヤウナシ、時ニモ逢ザレバイカバ仕ルベキト申セバ、我ナラバ光リヲ放ベシト仰セララル、時ニ、彼者申ハ、サヤウナラバ御光リヲ見申タキト申セバ、ヨクコソ所望仕ルモノナレ、只今光リヲ見セベシ、ヨク見ヨト宣フユヘ、目ヲハナサズ、信綱公ヲツクヅクト見レドモ、光リヲモ見出サズ、因テ早ク見申度ナド、申ス、其座ニ大澤右京殿モ居ラル、是ハ御セツバニ詰リ玉フカト奇意ノ思ヒヲナシ申サル、處ニ、イマダ見申サズヤ光リ見ヘザルヤト信綱公仰ラルレバ、一圓見ヘ申サズト云時ニ、其方ハ何方ニ居申スヤト尋玉ヘバ、御旗本衆誰ノ長屋ニ罷在ルト申ス、公宣フハ、副口ダテヲ申セドモ、是上ト光ルヲ知ラズシテ、何トテ今期來レルヤト仰ラレケレバ、御執權ユ

ヘニ忠節ヲ申上ベキ爲ニ參上仕ルト申ス、ソレハ光リアレバコソ來レルモノナレ、公儀ノ御影ヲ以テ、異國マデモ伊豆守共名ノ聞ヘスルハ、是光リタルニテハナキカト宣ヘバ、一言ニモ及バザルナリ、因テ茲御家來神保次郎左衛門ヲ御ツケ宿所ヘ遣サレ、亂心體ノ者ユヘ宿仕ラレタル御直參ノ衆迷惑ガリ、其後ハ外ヘモ出シ申サレザルト承ルナリ、

○御出入申ス町方ノ者ヘ、學文者ニナリヨキモノトイハレ度ヤト問セラレケルニ、彼者人々ニヨキモノナリ申度ナリ、學文ト申モヨキ人ニナリ度ユヘナリ、何十人學文シテモナラザルコト、申上レバ、只今ニモ其方心次第ヨキ人ニ致シトラセベシ、必定申スヤウニ仕ルベキヤト宣ヘバ、アサ笑テ是ハ奇ナル義ヲ仰セラ、モノカナ、早ク善人ニナサレ下サレベシト申スユヘ、堅ク口ヲ御固アリテ彌ソノ義成ベキナリト宣ヘバ、彼者ハ戲ツ、イマダヨキ者ニ成申サズ、早ク成度ト申スニヨリ、其時シメシ玉フハ、汝心ニアシキト思フ事ヲスベカラズ、ヨキト思フコトヲ行ヘヨト御授玉ヘバ、感心シテサテ、御尤ナル事ナリ、然ドモ是ハ成マジキトテ、御口込ニアイタルト、稻葉泰

翁老へ咄シタルト申スナリ、又御私領ノ百姓、信綱公ノ御前へ罷出タル時宣フハ、昔ヨリ申傳ニ、蓬萊ノ嶋ナル鬼ノ持タル寶、カクレ装、隱笠、打出ノ小槌、延命袋ト云コトアリ、此譯ヲ存シタルヤト御尋アレバ、其詞ハ承リ得タレドモ、其譯ハ存ゼザル由ヲ申上ル、サテハ秘事ナレドモ、御相傳ナサルベシトテ宣フハ、縦バ雨降ノ時ナド諸人農業ニ出ザル時、近隣ノ者ニモ隱装笠マデ着シ田畠耕コトナリ、打出ノ小槌トハ鉄ナリ、如レ此人ニ隱レ忍ビテカセギタレバ富貴トナル、寶ハ心ニ任セ有德ニテ渡世イタサバ命モ長カラシコト延命小袋ナリ、此ユヘ疎^{ホソカ}ニ存ゼズシテ耕作ニ情ヲ出ベキ事第一ナリ、カセグニ貧乏オヒツカズト申ス由ヲ仰セ聞サセラル、何モ謹^{コソビ}デ感^{チヤクト}シ奉リケル、又或時信綱公宣フハ、座頭ノ倒タルヲ見タルカト御尋アリツレドモ、オボヘザルユヘ、思出ストテ卒爾^{チヤクト}ハ御答申ガタクテ居タルニ、何ト仰セラル、其時終ニ見ズト申セバ、目明ノ倒タルハイカニト問セ玉フ、是ハトリアヘズ見申スルト申上ケレバ、ソレニテ合點スベシ、萬此心得セヨト仰セラル、ナリ、或時信綱公出入ノ老人參リ、折節庭へ出玉フニ、彼老人モ杖ニテ庭

へ出タリ、信綱公宣フハ、杖ノツキヤウニ大事ノ心得有ケルトイフハ、杖ノ便リニセザルモノナリ、子細ハ其杖ヲ思ハズ折コトアリ、又冬寒地ノ氷タル時杖スベル事アルモノナリ、其時ハ大キナルアヤマチアルモノナリ、サルニヨリテ物シリサグルタメツキテ、力ニセザルモノナリ、總ジテ身ノ上ニモ同ジ、何事ニヨラズ丈夫ニ人ヲ頼ハ頼ニ思ハザルモノナリ、大事小事アルモノナリ、又ハイカヤウノ時其人ニ遠^{トホウ}ザカル事モアルモノナリ、ソノ時ハ必ズ頼ミキレテ十方ヲ失フモノナリ、此上第一ニ我丁簡ヲタシカニシテ、ソノウハベノ事ヲ頼ムモノナリト宣フ、誠ニ智者ハ何事ニ付テモ格別ナモルノト聞人感^{チヤクト}シケルトナリ、或時信綱公ノ前ニテ御家老出テ用ヲ辨^{チヤクト}シケルニ、御心ニ入ズヤ其通ヲ再返其御家老ニ仰セラレケレドモ、一圓通ゼズ、ソノ時宣フハ、汝ハ謠ヲシリタルヤ、其時ソノ人赤面シテ答ザレバ、立付テ御尋ニヨツテ、存シタルト申セバ、又宣フハ觀世太夫ガ諷ガ耳ニ入ト面白キヤ、地謠ノ諷ガオモシロキヤト問セ玉ヘバ、ソノ時御家老申ハ、觀世太夫ガ謠オモシロキト申上ル、時ニ仰セラル、ハ、汝ガ物申コト是ナリ、謠ハ縦ヒ高砂ヲ誰

ガ謠テモ高砂ナリ、節ノ善惡ニテオモシロキト面白クナキトガアリ、其節ト云ハ音聲ノ高下ツメユルメヤハラグルト強キト、其文句ニ因テ次第ヨク云ヲ節トイフ、其謠ノ本マカセニ謠テハ面白カラズ、ソノ如ク此理屈ハ誰ガ前ニテモ同ジトテ、主ガ心ニ申タキ事ヲ直ニ云テハ通ゼザルモノナリト宣ヘバ、其人至極シテ退トナリ、

○大猷院様御代、或御譜代ノ若キ大名衆ニ歩キヤウノ目ニカ、ル人アリ、信綱公近付筋ナル人ニテアリシユヘ、度々親類衆マデ異見宣ヒケレドモ、ナヲラズ、又或時右ノ親類衆ヘ異見ヲ申サル、其人申サレケルハ度々申聞セケレバ、其者モ忝ガリ申セドモ、生付ノ足ノ付ヤウアシク、ソレユヘアノゴトクナリ、度度ノ御心入ナレドモ直申サズ、迷惑仕ルヨシ述ラルル、其時公宣フハ、サヤウニテハナシ、上様ニハ人々ヲ近ク召仕セラル、事ナク、タゞ御見分計ナリ、夫ト云ハ朔日十五日節句々々少ノ間ノ事ナリ、能大夫ニモイカホド力足ノ付ヤウ手ノツキヤウノアシキアルベシ、ヒタト稽古スルニヨツテ見苦シキ事ナシ、又弓ヲ射ルニキツテウトイヘル腕アリ、見苦シキト

テ、添木ヲ結或ハ腕ヲ敷テ夜々臥トイタセバ、曲リナリニヨクナル事アリ、如レ此稽古折々イタサレナバ、少ハ見ヨク成ベキニ、心ガケウスキユヘナリト宣ヘバ、親類衆モ感ジ入テ、至極ナル御吟味ト申サレケルトナリ、又或時嚴有院様御幼少ニテ、少々御病氣ニマシマシテ、御老中一人宛御城ニ御泊リアリシ、其刻或人信綱公別シテ代々此人ニ念比ナル筋目マシケル、此人年比三十計ニテアリシ、御前近ク御奉公相勤ラル、人ナリ、其人少シ用アリテ奥ヨリ表ヘ通り申サ、時、信綱公御夜詰ノ内傍ニ睡テ居玉ケル、彼御近習衆ニ宣フハ、御用ニテ通ラル、ヤ、亦自分ノ用ニテ通ラル、ヤト尋玉フ、其人申サル、ハ、自分ノ用ニテ罷通ヨシヲ述ル、時ニ又仰セラ、少用ニ立玉フカト宣フ、其人サヤウニテモナシトアリケレバ、然ハ語度事アルユヘ此所ヘ參ラル、ヤウニト宣フユヘ、則彼人ハ信綱公ノ側ヘ寄申サルレバ、其方事御親父ヨリ代々筋目アリテ如在ニ存セザルナリ、御奉公ヨク致サル、ヤウニト申玉フユヘ、忝ト一禮ヲ述テ退ベシト致サルレバ、今少シ語リ申サレヨト宣フユヘ、常ノ咄ト心得居止申サル、此人五六萬石取り御譜代衆

ノ三男ナリ、此ユヘニ信綱公仰セラル、ハ、其方前々御親父ノ在所ニ居ラル、時分ハ年幾ツ許ナルヤト尋ラルレバ、十二三歳ノヨシヲ申サル、ソノ時仰セラ

咄トコソ存ジタレ、サテモノ格別ノ義ト、唯身ニシミワタリ、一生ヲスレガタキ事ナリト、後ニ人ニモ語レケルトナリ、

ル、ハ、鷹ヲツカヒアソビ申サレタルベシ、ソノ鷹匠ナドニ上手アリツルヤト尋玉ヘバ、其人答ヘ申サルル何々ト申ス鷹匠上手ニツカヒ申スヨシヲ申サルル、又宣フハ、在々ノ晝休ニ百姓ノ所寺ナドヘ參ラレ辨當ヲツカヒ申サレシナラン、大方定リテ有ベシ、其亭主ニ馳走ノナキモアルモアルモノナリ、覺ヘラルルヤト尋玉フユヘ、イカニモ其通リト答ヘ申サル、其人モサテ、自分ノ用アルニ、入ザル長咄イタサル、ト存セラレナガラ、是非ナクモ請答ヘ、色々致サル、ナリ、其上ニテ宣フハ、ソレニテ御奉公ノ義ヲヨク得道仕ラルベシ、子細ハ其方若輩ナリトイヘドモ、其如ク鷹匠ノ上手又ハ晝休ヲ存ジナガラ今ニ覺ヘラル、ナリ、上様ト申御人ハ、御誕生アソバサレテヨリ天下ヲシロシメサル、事ナレバ、マタ平人ヨリ猶御覺ヨシ、タゞ今御幼少ナリト油斷イタサル、トモ、後ハ御覺ヘアルベケレバ、必々油斷致サレザルヤウニト、是異見ニテアリト申サルレバ、彼聞人只今マデハ

○嚴有院様御元服大納言ニ任ゼラレ玉フ時、紅葉山御社參有ベシ、着座ノ御三家ノ卿相殘ラズ供奉有ベシト仰ニ依テ、此上意ヲ執事老臣ノ御方白書院ニシテ披露シ玉ヒケルニ、紀州大納言賴宣卿申サセ玉フハ、上意ハ畏リ奉リヌ、是ハ各ヘ相談申ナリ、新大納言ノ供ヲ大納言ノ仕ル事苦シカルマジキヤ、有職ノ古實ハ不案内成ユヘ間ル、トムツカシク宣ヒケル、流石ノ職事以下返答アグマレシニ、信綱公早速ニ挨拶シ玉フハ、今日別而公方家御怡喜ノ餘リ御三家ヲモ御同道アルベキトノ思召ニコソト申サレテ、首尾ヨク御社參事スミケル、供奉ト同道トハ詞ノアヤマリ、扈從ノ公卿、着座ノ公卿、豫參ナド、申品々、ソノ後江戸ニシテモ下々マデシル事ニハナリニケルトナリ、又嚴有院様前方御庖瘡無レ恙アソバサレ目出度義ナリトアリテ御能仰付ラレ、諸大名御旗本御振廻アリ、御能見物仕ルヤウニト仰出サル、コレニ依テ御見物御座布コトノ外込合申ベシトアリテ、御縁ガハニ毛氈ニテ道

ヲ付、是ハ物頭是ハ御近習ナド、アリテ、板札面々ノ座布ニ大目付衆クバリ置ル、處ニ、大御番頭ヨリ上座ニ大目付ノ張札アリ、大御番頭衆以ノ外立腹シテ、殿中ニテ既ニ云コトニモ成ベキ様子ナリケレバ、御目付衆御老中ヘシカハ、ノ様子申アゲラル、御老中御相談アリケレドモ、ハガシタル札ヲ其通リニシテモ置ガタク、本ノ如ク張玉フ事モナリガタク、色々詮義區々ナル所ヘ、信綱公參リ玉ヒ何事ニヤト尋玉フニ、シカハ、ノヨシ御同列申玉ヘバ、ソノ時仰ラル、ハ、此事御僉議アルベカラズトテ、則大目付衆ニ仰渡サル、ハ、總ジテ目付衆ハ座布ノ上下アルベカラズ、其爲ノ御目付ナリ、方々ヲ見廻ル役ナレバ一所ニ定ムベカラズ、或時ハ老中ノ上ニモ着座致サルベシ、又或時ハ下座ヘモ下リ申サルベシ、定リタル座トテハ有ベカラズトアリケレバ、大番頭衆大目付衆雙方申分止ニケリ、誠ニ差當ル才智澤山ナルユヘ、如レ此アリタル義ヲモ即時ニヤミスト、諸人譽ザルハナシ、○大猷院様御代、禁裏ヘ御用ニテ遣サル、歸參シ玉フ時、天子ノ御樣體ヲ御尋ナサレタルニ、御顔色御裝束御シヤウゴンノ様子、一々ニ信綱公申上玉ヘバ、少ノ

内ニヨク覺タルモノカナ、何トテト上意アレバ、謹テ其由ヲ申上サセ玉フハ、天子ノ御前ヘ三度マデハ罷出ルヨシ承ルニ付、最前ハ御顔色ヲ伺ヒ奉ルナリ、其次ニハ御裝束ヲ見申ス、三度メニハ御座布ノ體ヲ伺ヒ申スナリ、縦バ小壁ニ籬ニ菊、天井ニ菊ノ繪アリナド、ノ事細ニ申上玉ヒシ、是ヲ思フニ、少ノ内トテモ自然ノ事アラバ御顔色ヲ見知申ベキハ内裏ナレバ、誠ノ忠臣ノ御働ト申スベキヤ、天子ニモ伊豆守儀ハ大猷院様一ノ臣下ト聞召レタルカ、目ノ内タゞモノニハアラジト仰ノ旨、此ハ公家ノ取沙汰ノ由、石川丈山ノ咄ニテ承ルナリ、此丈山ハ板倉家ヨリノ御ツバキ輝綱公ニアリシ人ナリ、又萬治三年子八月十一日、信綱公ハ東福門院ノ御所ヘ所司代牧野佐渡守ヲ伴ヒ參上シ玉ヒ、表御對面所ヘ伺公ナリ、佐渡守ハ同座アイヲ隔テテ列ス、時ニ東福門院ノ御所ヨリ御使トシテ右衛門佐懷紙ニ拾一箇條ノ御目錄ヲ持參、仰ヲ宣テ曰、ソレ天下ノ御仕置例モアル間、ヨクモコソアランズレドモ、御幼君ニマシマスユヘ、御心元ナク思召ル、ナリ、且ハ御當家ノ事、能ガ上ニモ御代長ク御榮ヘナサル、ヤウニモ思召ル、御事、御女性ニマシマストイヘドモ御

筋目アレバイカバカリカ御大切ニ思召シマジキヤ、故ニ御不審ニ思召ル、義ドモアル處ニ、此度御仕置トシテ罷上旨御聞ナサレ、幸ト御尋アンバサル、事ナリト演説ナリ、信綱公謹デ承リ玉ヒ、御目錄ヲ頂戴シ拜見シ玉ヒ、一々コレニ答ヘ申玉フ、御簾中ヘ法皇御幸、東福門院御同所ニテ御簾中サメキワタリ、局女侍ニ至マデ見聞ス、則高聲ニ言上シ玉フ、右衛門佐一言ニ及バズ至極尤ト同ジテ、御簾中ニ入セラレ、御感ノ餘リニ宸筆ヲ染ラレ、御製ノ懷紙ヲ下サル、トナリ、此一條ノ御目錄ハ見申サズ、コレニ依テ宣旨ユヘ綾小路殿牧野佐渡守殿并ニ禁中附ノ衆ヘモ相尋ラレケレドモ、知力ヲ申ナリ、信綱公終ニ仰セラレチバ彌シレズ、ソノ取沙汰分明ナラズトイヘドモ、大方如此ニモ有ベキヤト記ス、其一豐國御造營ノ事、其二ニ國々神社佛閣御造替遅引ノ事、其三ニ浪人多事、其四ニ伊勢洪水江戸大焼大坂天守雷火ノ事、其五ニ御扶持被レ下度衆ノ事、其六ニ御訴訟品々ノ事、其七ニ御旗本御救被レ成事、其八ニ奢難レ止事、其九ニ死罪流罪御追放御預ケ之事、其十二米穀高直過下直過ル事、其十一ニ町人農人困窮ノ事、右ニ付テ信綱公御請ノ御挨拶是

モ分明ナラズ、取沙汰ニテ記ス、左ノ通り、其一豐國明神ハ秀吉ノ御事、此ハ御仕置ニ依リ佛ニマツリ替、沙門ニ御預ニテ大佛殿ノ側ニ御石塔アリ、然ル上ハ御建立ト云事コレ有ベキヤ、其二ニ國々神社佛閣ハ國土城主申付レバ、其守護造營アルベケレドモ、大社ニ及デハ公儀ヨリナサシムル御事ナルユヘ、一度ニハ仰付ラレガタシ、段々ニ斷ズ御造營アル義ナリ、其三ニ浪人多キハ、其主人家來人々ノ違ナリ、君ヨリ大身小身或ハ社家或ハ出家士農工商ソレト、ニ御恩澤ヲ宛行セラルレバ、カタハモノニ至ルマデ男女老少トモニアリ付ニタヨラストイフ事アルベカラズ、其上ニ難ニ逢ベキハ己ガ違ナリ、其四ニ神社佛閣ノ御敬ヒ御信仰ウススキニヨツテ死人アルニテハコレナシ、目出度御事ニテ御代ツバカセ玉ヒ、亂世ニコレナキユヘ人多クナルヲ、御仕置正シキ上ニ、自然ト人ノ滅ズルハ天ヨリノ御惠コレ有ユヘナリ、其五ニ給人衆ヘ御扶持下サル、儀ハ、仰次第申上ベキナリ、其六ニ下ノ願等御訴訟ナサル、儀ニ於テハ、相濟申ニテモ有ルベケレバ、何時モ言上ニ及ブベシ、然レドモ恐レナガラ申上テ相調ハ、諸人數々御訴訟申上ルニテ有ベキ

アイダ、是ハ御取上是ハ御取上ナサレマジキトハ仰ラ
レニク、コトノ外ノ御世話ニナルベクト存ジ奉ル
ユヘ、イカバ有ビキヤ、其七ニ御旗本御救ヒノ事、時々
品々絶ヘズ仰付ラル、ナリ、其八ニ奢ノ義、年々此御
仕置絶ヘ申サバル事、其九ニ死罪流罪御追放御預ケ
人ノ事、公儀ヨリ御仕置ニヨツテ自然ト隠レベキヤ
ウナクアラハレ出テ自害ヲ仕ルニコトナラズ、コレヲ
惡ミコレヲ恐テ諸人貪欲ヲ去リ直ニ住スル事ナレバ、
御慈悲ニテマシマス、其十二米穀高直過下直過ルハア
シキニ似テヨキナリ、倚テハ絶タルガ如シ、ソノ内時
相應ニ御仕置アンバサル、義ナリ、其十一ニ町人農
人困窮ノ事、御旗本ノ武士人欲ヲ去リ奢ラザレバ、オ
ノヅカラ町人農人クツログベシ、コレニ因テ此御仕置
朝暮仰付ラル、ナリ、右ノ拾一箇條ノ内五六箇條ハ咄
傳テモ應ヤウ知ベキナリ、其外ハ是等ニテモ有ベキ
ヤト、口條ヲ集メ合ンガ爲コレヲ書セシムルナリ、一
説ニ、或時公御上京ノ節、御見送リトシテ林道春翁參
ラレケレバ、御出カケニ道春ニ御尋ナサル、ハ、異國
ナドニテ聖代ニモ凶年アリヤト、其時申サル、ハ成
ホド帝堯ノ時九年ノ洪水アリ、湯武ノ時ハ早アリト

答玉フナリ、其後京都ニテ、關東ノ御政事ニ付十一箇
條ノ勅問有ケル、其内ニ近年打ツギ凶年ハ、是關東
ノ政事ニ僻ゴトアルユヘノ事カトナリ、其時信綱公
取アヘズ勅答アルハ、傳ヘ承ル、帝堯ノ時ノ九年ノ洪
水、又湯武ノ時ハ三年ノ旱魃アリテ、諸民苦ミタルヨ
シ、聖代スラ如シ、然ルニ當時少々ノ凶年ト申セ
ドモ、關東ノ政事ノ僻ゴト、バカリハ申サレマジト
仰上ラレケレバ、サスガナル勅答ト御稱美アリシト
カヤ、最初道春翁ヘ御尋ノ事モ聊カナルヤウナリシ
ニ、カク御當話ノ間ニ合セ玉フ御勵キヲ、皆人感ジア
ヘリ、

○嚴有院様ヨリ誓詞仰付ラル、ニ付、信綱公ノ宣フ
ハ、御好ミノ誓詞ヲ忘レテハ面目ナキ義ナリ、コレニ依
テ懷中仕ル、各經文謠平家舞ナドヲ忘レジト覺ルヤ
ウニ、我ハ御好ミノ誓詞ヲ覺ルナリ、然ドモ懷中ハ落
シモスベケレバ、掛硯ヘモ入テ置ナリ、是モ燒コト有
ベケレバ土藏ヘモ入置ナリ、何ト思フゾヤト御咄ナサ
ル、思ナガラ此事ヲ思フニ、小家大家ニヨラズ主人
ノ爲ヲ思シ人ハ主君ノ仰カクコンアラメト思召レシ
トナリ、或時阿部豐後殿ノ事ヲ何方ニテ信綱公仰セラ

レタル事ニヤ、重キ御臣下ナリ、大方ノ人ハ公儀ノ御用達セラル内ニモ、自分ノ爲ヘヒバクヤウナル事モアルニ、公用ニ付毛頭終ニ自分ノ爲ヲ顧ラレザル御人、大切ナルイサギヨキ仁ナリト宣ヒケル、又或時井伊掃部頭殿ノ出仕ノ時分、御右筆部屋ノ御縁頼ヲ通ラレケル、其比信綱公少々煩セ玉ヒ、御病後出仕ナサレテ其所ニマシ〜ケル前ニテ、掃部殿立留リ下ニ座申サル、ハ、御氣色御快氣珍重ニ存ズルトアレバ、先日ハ御使者下サレ忝存ズルト信綱公挨拶シ玉フ、其時御氣根ヨキ御人ナレバ、今少モ煩ハセ申サデト掃部殿御申シユヘ、何トテサヤウニ仰セラル、ト公御挨拶ナサルレバ、イヤ氣根ヨキユヘト掃部殿御申アル、其時引込罷在リテハ御用差支申ト公宣ヘバ、掃部殿訶ナクシテ奥ヘ通ラレケル、御次ニテ聞レシ衆中御兩所ノ思召ヲ批判シテ、掃部殿御心ノ内ハイカバアリツルヤ、手ヲ取ケルト笑ヒ申サルヨシ、其體御互ニ不興ノヤウニモナク、戯ノヤウニモ聞ヘズト、見聞シタル衆ノ咄ナリキ、

○每朝信綱公ノ宅ヘ見舞ノ衆多キ折節ノ事ナルニ、地震ヨホドユリケリ、此地震ニテハ定メテ早々御登

城アルベキヤト申サル、人アリシ、其時小性ヲ呼セ玉ヒ、御居間ノ水桶ノ水コボレタルヤ見テ參ルベシト仰セラル、其人則見テ參リ、水ハコボレ申サバルヨシヲ申ス、然ラバ地震ニ付テノ御登城ナサレマジキナリト宣フ、其時或人申サル、ハ、タゞ今仰付ラル、御居間ノ水コボレタルヤト御尋ノ儀ハ、イカバ仕リタル事ニヤト申サレケレバ、ソコニテ答ヘ仰ラレシハ、總ジテ地震ユリタル時イカホドノ地震ニハ登城然ルベシトノ義計^{ハカラ}ヒ難ニ付テ、其爲ニ常ニ居間ノ前ニ水桶ヲ置テ、御城ニテ地震ユル時宅ヘ歸リ、今日ノ地震イカホドニヤトアル義ヲ相尋ヌレバ、水ノ動キヤウ是ホドノ位ト申ス、夫ニテ御城ニテノ地震ヲ考ヘ、是ホドニテハ登城然ベキトノ義ヲ試置^{タメシ}ナリ、コレニ依テ只今水ヲ見セニ遣スナリト仰ラル、實ニハ地震ノホドライ知ガタキモノナルニ、働セラル、智慧ナリト、其人ゴトニ感ゼラレケルトナリ、又或時柳生但馬守殿兵法ノ名人ニテ、既ニ將軍家ノ御師範トシテ大ニ鳴申サル、ナリ、殊ニソノ比大猷院様劔術御好、一向ソレニカ、ラセ玉フニ付、御諷諫ノ心ニヤ、但馬殿ヘ信綱公仰ラル、ハ、足下ニハカクノ如ク劔術名人

ナリ、然レドモ是匹夫ノ勦ニテ一人ノ敵ナリ、夫天下
國家ヲ御シテヨク治ルヲ以テ大人君子ノ兵法トイハ
シナレバ、我ハ其人ニハアラザレドモ、足下ニハ勝
申ベキカト宣ヘバ、サスガノ但馬殿ユヘ早クモソレ
ニ感ジテ服サレヌト聞人申ケル、夫說劍ノ理ニ聞ニ
會玉フ御詞カナト評シアヘリ、

○或人ノ信綱公ニ申サレケルハ、御旗本ノ何某、器量
ト云筋目トイヒ、其人ガラ殘ル所ナシ、何ヤウノ御役
ヲモ勤ベキ人ノ、不幸ニシテ外様トナリ、小身ニテク
ラサル、ハ惜事ナリト、人々モ申スト物語ナレバ、ソ
ノ時御挨拶ニハ、仰セ尤ナレドモ、人ハ命ト云事アリ
テ、招テ來ラズ求メズシテ幸アリ、此ユヘニ我等モ小身
者ノ子ナリトイヘドモ、時ノ幸ニヨツテ天下ノ御用
ヲモ達スルハ是皆命ナリ、近クタトヘヲ取ニ、侍ノ肝
要ト頼ムモノハ腰刀ナリ、又刀ノ肝要ハ目釘ヲ以テ
第一トス、ソノ第一ニ頼ム目釘ハ、貴人ノ目釘ニテモ
竹ユヘ少モ價ノスルハナシ、又目貫ハアリテモナクテ
モノ物ナリトイヘドモ、大ニ代ノ致ス事、是幸不幸ノ
證據ナリトイヘリ、聞人得心シテヨキ譬ナルニヨツ
テ爰ニ記スナリ、又或人不審シケルハ、大名ハ國ヲ拜

領シ常ニ安樂ヲノミ致スニ參勤ノ時モ上使ナド遣サ
レ、御暇ノ節モ時服金銀等ニ至ルマデ下サル、ナリ、
御旗本ハ常ニ御奉公繁ク苦勞ヲモ致ス、又何事アリ
テモ御用ニ立ハ御旗本ニ過ズ、然ルニ大名ヘ御馳走
ハツヨク、御旗本ヘハサヤウニモナキ事、逆ナルヤウ
ニ存ゼラル、ナリ、是イカバ仕タル事ニヤトザレ事
ヲ申ケレバ、則信綱公取アヘズ仰ラレケルハ、サレバ
トヨ、大名ヲ人ゴトニ願フハソレナリ、去ナガラ大名
衆ヲテノゴトクニ常ニ御懇意ニナサレテモ、ソノ代ニ
大キナル役アタリ、或ハ御普請カタクコトノ外御ツ
カヒナサレ、又軍旅ノ事アリテモ何方ゾ一口大キナル
御用ヲ仰付ラル、ナリ、就レ夫御馳走アソバサル、ナ
リ、タゞ人ノ幸不幸ニテアルナリ、只人ハ生付アルモノ
ト見ユルナリ、近キ事ニ譬アリ、人々ノ腰ニサス刀脇
差ハ一代一度ノ用ニサス事ナリ、サレドモ十人ノウチ
九人ハ其用ナクテ過ス、シカレドモ秘藏スル事大カ
タナラズ、又小刀ハ日夜ニ役ニ立トイヘドモ、サシテ
馳走スル事ナシ、ソレニ同ジモノナリト仰セラル、ト
カク假初ノ事ニモ理屈ニ人ニ負レザル人トテ、諸人
舌ヲ振ヒケルトナリ、又壽命院ト申ス醫師ノ信綱公

ノ方へ別シテ出入イタサル、コノ壽命院理屈ナル人
ニテアリシ、或夜咄シニ參ラレ、色々ノ咄シアル上ニ、
壽命院申出サル、ハ、當御代ヨリ御城ニ醫師ノ御番
仰付ラレ、勤番仕ルナリ、急病人在時ノ爲ニテアリヤ
ト申サルレバ、信綱公宣フハ、其方申サル、通りナリ、
總ジテ腰刀ヲサスニ同ジ、一代入用ナル事ハ稀ナレド
モ、自然ノ爲ニ面々腰ヲ離サズ指ナリ、ソレニ同ジ事
ナリト仰ラレケレバ、ソノ時壽命院申サル、ハ、其腰
刀ハ錆シテ置モノナリヤ、又研磨テ帶モノニヤ、定テ
研磨テ帶申スベシ、醫師ハ常ニ方々病人療治ヲ仕ラデ
ハ醫ノ道不功ニナリ、腰刀ノ錆タルト同事ナリ、然バ
一日一夜ヅ、相詰ルニ付、疱瘡産後大病又ハ急病ニ
ハ人モ頼ミ申サレバ、療治少クナリ、オノヅカラ下
手トナリ、錆腐申スベキナリ、サアレバ御用ニ立ガタ
シ、カヤウノ所イカゞ思召サル、ヤト申ス、信綱公其
事ニハ一圓返答ノ取合ヒ玉ハズ宣フハ、醫師衆ノ御
番ハ一月幾日當ヤト尋ラレケル、壽命院申ケルハ十
人仕リテ勤ルユヘ三日宛ナリト申ケレバ、ソコニテ
宣フハ、サレバ一月ノ内廿八日ハ非番ニテ、療治致サ
レバ、三日計ノチタバハ合セザル分クルシカラズ、總

ジテ刀脇差モイカニタシナミテモ、三百六十日皆チ
タバアハセヌレバ、ソノマ、金スガレナマクラモノト
ナルアリト仰セケレバ、壽命院詞ナクシテ退クナリ
ト、又或夜信綱公ノ御宅ニテ、夜咄ノアル砌、或人申
サレケルハ、トカク人ハ物ヲ申サバルガヨシト存ジ
テ、宿ニテ覺悟シ罷出レドモ、人前ニテハ長咄仕レ
バ、オボヘズ入ザル事ヲ申スナリトアレバ、信綱公宣
フハ、誰モ其通りナリ、去ナガラ稚子ノフリツバミト
申モノ見玉フヤ、淺草觀音山王門前ニ、砂糖曲物ノヤ
ウナルモノニ兩方ヲ赤キ紙ニテ張、其内へ小豆粒ヲ
入手ニテフリタレバホンヒン／＼トナリ申ナリ、夫
ヲ見玉フカ、ソノ如ク、人ノ腹中ノ内ニ何ゾ一理屈持
居ヌレバ、ナラズトイフ事ハナシ、其理屈ナキ人ハ小
豆粒ノナキ道理ナリ、其理屈アル人ハ必云モノナリ
ト仰ラル、定ニ一理屈アルモノハ、トカク物イハザ
ルハナシト宣フ、ヨキタトヘナリト、皆々批判シ、面
白理屈ナルユヘ爰ニ記ス、
○或時信綱公少シヤミ目ノヤウニ煩ヒ玉フ、其比本
覺トイヘル目醫師常ニ出入致シケルユヘ、此藥ヲサ
シ玉フ、早速快服マシ／＼テ、モハヤ登城モナサル、

節、本覺ニ宣フハ、大方眼病ハ癒タリ、然レドモ此寒氣
ニ外ヘ出レバソノマ、泪出ナリ、又少ノ風ニモ泪グミ
ケルト宣ヘバ、本覺申ケルハ、夫ハ上ノ目ノ能ナリ、上
ノ目ハ常ニ涙グミ寒暑ニ必ズ泪コボシ申ナリ、是血
氣ノヨキユ、ニ如レ此トイヘバ、其時宣フハ醫師ノ事
ハシラザレドモ、萬事ハ一理ナリ、考ルニ上ノ目トア
ルハ泪モコボレズ乾モセザルカ上眼タルベシ、マタ
涙コボル、ハカハカンヨリハマシナリトイヘル事ナ
ルベシ、但目ノ道ハ格別ナルヤト申シ玉ヘバ、本覺サ
テサテ目ノ上中下ヲ今日初テ心得申タルトテ退キ
ヌ、又武藏野ノ傍ニ百ニ餘レル百姓アリ、此百姓若キ
時ハ朋友ト中ヨク一人トシテ惡ムモノナク、人ニ親マ
レ近里ノモノマデ是ヲ聞及ビニ寵愛シテ、隠レナキ
人柄ノヨキモノナリ、其比何ヤラン用事アリ江戶ヘ
來ル、此者ハ信綱公ノ御知行近クノモノナレバ、御同
列ヘ此ヨシ御咄アリケルハ、上下ニヨラズオシナベ
テ人ノ譽ルモノハ希ナリ、ソノ上百歳マデニアマレ
ル長命身ノ養生モイカヤウニカ致ツラメ、御慰ニ聞
玉フベキヤトアレバ、御同列尤トアリテ、御城歸リニ
信綱公ノ御宅ヘ立寄玉ヒ、彼老翁ヲ呼出シ玉ヒ、長命

養生御僉議アル、ソノ上ニテ其方事百姓ト申ナガラ
人ニ勝^{スレ}テカハユガラレヌルヨシ、是手柄ナル事ナリ、
總ジテ常々人ハノ應對用法イカニ致シケルヤ、具ニ申
セトアレバ、何モ替リタル儀ハイタサズト申ス、又御
尋ニ入ザル事ヲ卑^ヒ下イタサズ、御尋ノ上ハ申スベシ
ト仰セラル、彼老人申ケルハ、何事モ存ゼザレド
モ、只人ハダテヲ仕ザルガヨキト申上ル、其時皆々仰
セラル、ハ、ダテト云ハ若キ時ノ事ニテコソアレ、ハ
ヤ四十トモ過スレバ、ダテト云事ヲスルト云事アル
ベカラザルニ、在郷ナドニテイカデソノ如クダテヲ
致スベキヤト宣ヒテ、何モ笑ヒ玉フ、時老翁申ケルハ、
イヤトヨ其儀ニアラズ、ダテト申事ニ子細アリ、總ジ
テ御歷々ニハ御歷々ダテヲナサレ、人ヲ戒メナサル
ルナリ、若ハワカキダテヲ致シ、老人ハ老人ダテヲ致
シ、利ヲ持タルモノハ利ヲ持ダテヲ致シ申スナリ、是
皆人ノ惡ム所ニテアルユヘ、タバソレダテヲ致サバレ
バ、物毎ニ人ノ氣ニ碍^{サハル}コトナシト申セバ、何モ尤ナル
儀トアリテ感ジ玉フ、誠ニ田夫ノモノト申ナガラ、イ
カサマノ道理ニテ人ニモヨクイハレケルト、是ヲツク
ヅク考ルニ、定ニ何ニ付テモダテハ皆アシ、一言ニ

テ萬端事ニワタル事サスガ人ノ譽ルホドアリト、聞人上下云アヘルトカヤ、如レ此ノ事マデモ信綱公御心付ラレ聞メシケルトナリ、

○或時信綱公へ神尾備前守町奉行ノ時參ラレ、何ヤラ科人ノ事ヲ被レ申テ拷問致スベキカト申サルレバ、信綱公一圓挨拶シ玉ハズ、彌僉議ヲ詰ラル、ヤウニト許宣フ、備州歸リ申サル、後ニ、信綱公へ出入致サル、衆ノ不審申サレケルハ、備前守科人拷問ノ事ヲ申上ケレドモ其御挨拶ハナク、僉議ヨク詰ラル、ヤウニト宣フ事心得ガタシト申サルレバ、ソコニテ仰セラル、ハ、總ジテ罪人ノ拷問致ストイフハ、奉行ノ耻ナリト宣フ、問人夫ハイカバノワケトアレバ、又宣フハ不僉議ニテ吟味ノ届カザルユヘ拷問ナリ、穿鑿ニテソノ埒明トキハイカデカ拷問ニ及ベキヤ、必竟奉行ノ才智ナクシテ僉議ノツマラヌヨリ拷問ハ起ルナリ、サレバ拷問ハ奉行ノ耻ナリト宣シ事ヲハジメテ存ジケルナリ、發明ナル事ユヘ爰ニ記ス、

○金銀吹替ノ事町人ドモ度々相願ケレドモ、信綱公取アゲ玉ハデ宣ヒタルハ、大切ノ日本ノ寶ニテ慶長ノ比如レ此定メ置セラル、タトヒ今ニ至テ上ノ御利

德アリトテモ、國家ノ寶ヲ容易是ヲ吹替ラレヨヤトナリ、又御度量アリテ豪膽ナルコトハ、京都ノ大佛ヲ鑄消テ錢ニサセ玉ヒ世上通用サセ玉ヒシハ、夫唐ノ淫祀ヲ焚シ狄仁傑^{デキシケツ}ニマサリタルナサレカタト、時ノ人ニモ心アルハ感ジ奉リケル、又御家中ノ者ドモ伊勢參宮等ヲ願ヒケルヲバ、御取立ナサレズシテ宣ヒケルハ、外ノ佛神へ參リタノムヨリ、面々ノ先祖ノ祭ヲスルト又我へヨク奉公セバ、必ズ天ノ報德スミヤカナルベシト宣ヒシヲ、聞人御尤ナル法言カナト申シアヘリ、

○大猷院様御代、上意ニハ、誰家ニハ何ト申ス武功ノ者アリ、今モ居ル歟ナド、御側衆ト毎度御咄ナサレタルユヘ、オノヅカラ諸大名モ武ノ心ガケ強シテ名アルモノ士ヲ抱ラレケルヲ其比ノ御奉公ノヤウニアリシ、然ルニ信綱公ハナサレカタ義アルユヘ歟、天下ノ士ノ祿ヲ望ズシテ御家へ來ルモノ諸家ヨリ多カリシト世上ノ取沙汰ナリキ、又柳本五郎左衛門ヲ召抱ラレシ節、ソノ前ヨリ三田五郎左衛門ト申者アリキ、柳本ヲ召抱ラレケルニ付、三田ハ名ヲ更ベシト氣ヲツケ申タル人アルユヘ、三田ハ名ヲ更申ベキカト

伺ヒケレバ、古參者オトヒ縦小身ナリトモ新參者ニ對シテ
名ヲ更メル事然ルベカラズ思召ナリ、柳本ニ名ヲ更サ
セ申ベシト、信綱公宣フユヘ、奎之丞ト更メケルトナ
リ、如此物每筋ヲ立サセラレシユヘ、皆人其義ヲ慕
ヒ申トナリ、又或時淺羽孫兵衛幼少ノ節、御側ニ相勤
ルユヘ、信綱公御閑所ヘ入セラレル時、御刀御鼻紙袋
持セ差置ル、御鼻紙ノ間ニ御大切ノ書モノアルヲ
引出シ見ケル處ヲチラト御覽ジツケラレ、ソノ書付
ヲ見申スヤト御尋アレバ、成ホド見申スヨシヲ申上
ル、サスガ正直ニ申セシユヘ其通リ御容拾ニテ、誰ニ
モソノ趣ヲ申マジキト御意ナサル、然ドモ、ソノ御書
付ノ趣ハ何カ御穿鑿最中ノ事ユヘ、若漏テハアシキ
ユヘ、密ニ仰セ付ラレ隱シ御目付ノ如クナル者ニ宣
フハ、孫兵衛ニ出會テ何トナク世間咄シヨリイヒカ
ケテ、何トゾ語リオトシ右ノ書付ノ趣ヲ承ルベシ、孫
兵衛モシカクサズ物語セバ、フビンナガラモ大切ノ
事ナレバソノマ、討捨申ベシト御内意アレバ、夫
ヲ奉ル人其通リニイタシ、問オトサントスレドモ中
中發言セチバ、ワザト遠廻トウマシニ此方ヨリ口ウヲ承リ
カケ、レドモ、少モソラシラザルヤウスニテ、イハ

ザレバ其趣ヲ右ノ人申上ケレバ、然ラバ夫ニテヨシ
ト公仰ラレケル、何事ニテモ公ノ事ヲバ御大切ニナ
サレ、卒爾ナキヤウニ御吟味アリケルトナリ、又或時
深井藤右衛門御奏者番役仰付ラル節、其同役ヘ御直
ニ信綱公御意ナサル、ハ、藤右衛門事ハ訣アルモノ
ユヘ役義申付ルナリ、皆モ心付テト御頼ノヤウニ仰
アレバ、此御意ヲ承ル同役相心得テ、新役ナガラモ藤
右衛門ヲ上座ニ置ケルトナリ、又長坂十左衛門ト云者
アリ、是ハ長坂平右衛門ガ兄ニテ、同氏三十郎ガ爲ニ
ハ祖父ナリ、十左衛門父ハ因幡ト申テ、大河内金兵衛
秀綱公ノ御姉聲ナリ、其緣アルユヘ十左衛門ヲバ信綱
公御懇ナサレシニ、御勝手マデモ罷越テ御機嫌ヲ伺、
御咄等致スホドノ事ナリ、十左衛門ガ主人ハ鳥居左京
亮殿ナリ、其比死去ニテ子息ナキヨシナリ、モシ妾腹
ニテモ子ナキヤト公義ヨリ御尋アレドモ、其儀アリテ
彌ナキヨシニ付、其領廿四萬石召上ラレテ家斷絶ナ
リ、其節十左衛門ニ公御尋ナサル、ハ、鳥居殿ニハ御
國元ナドニハ彌御妾腹ノ子息ナドハナキヤ、此度家
斷絶ハサテ、殘念ナル事ト宣ヘバ、其時十左衛門
御挨拶申上ルハ、國元ニ妾腹ノ一男兒アリ、シカレド

モ、生付不具ナリ、殊ニ與方ヘモ沙汰ナキユヘ、子息ナ
 キ旨相立申ナリトアレバ、夫ハワル遠慮ト云モノナ
 リ、御不具ハイカヤウナル生付ニヤト御尋アレバ、チ
 ンパンヨシヲ申上ル、夫ハ苦カラザル事ナリ、其方早
 早在所ヘ行テ、同道ノテ來ルベシト仰ラルニ付、十左
 衛門早速相越同道イタシテ信綱公ヘ御目ニカケシ
 ハ、夫ホドノ子息アルヲ申立ズ、皆ガ油斷ナリト宣ヒ、
 マヅ酒井讃州ヘ相談イタシ申スベシト仰セラレテ、
 其後台聽ニ達セラル、處ニ、間モナク御目見仰付ラ
 ル、所ニ、大猷院様上意ニハ、祖父彦右衛門ハチンバ
 ニテモ伏見ニテ手柄ナル働キシテ討死ヲ遂シモノ
 ナリ、夫ニアヤカリチンバナレバ働キモサゾアラシ
 ト、御機嫌ハナハダ宜クシテ、新知三萬二千石餘ヲ下
 サル、ナリ、畢竟是ハ信綱公ノ仁心ノ御推舉ユヘナ
 リト、又御仁心ノ末々ノ外ヘモ及ビタル事アリキ、夫
 ハ或時信綱公御上京ノ節、三州吉田ハ小笠原壹岐守
 殿御領知ナリケルガ、其年不作ナリキ、下五井邊ニテ
 稻穂ヲ取寄セ玉ヒ御覽ナサレシ、此御様子ヲ壹岐殿
 ヨリ馳走ノ役人見及テ申ケルユヘニ、其年ノ成稼ノ
 引ヲ多ク立テ、取稼ヲユルシ百姓ヘ給ヒシト、其所ノ

者今ニ公ノ御事ヲ稱シ申ストナリ、
 ○堀田上野介殿公儀ヘ御爲ノ事諫言ノヨシニテ、一
 封ノ書ヲ差上ラレテ、尤斷リナク佐倉ヘ歸城シテ、サ
 テ籠城ヲシ、天下ノ武道ノ廢ヲ興サセントノ事ナリ、
 其節御老中方仰セララル、ハ、此仕方ハ謀叛人ト申ス
 ベシトアレバ、信綱公取アヘズ、イヤトヨ是ハ謀叛人
 ニテハナシ、仕方ハ亂心ナリト宣ヘバ、夫ヨリシテ彌
 亂心ニ相究リシユヘ、三族ノ刑ナケレバ御親類マデ
 モカマヒナクテ、其領知十萬石ハ上リテ、新ニ其子ニ
 一萬石下サレケルハ、サスガ私ナキ御一言ユヘ、如
 レ此ナリシトナリ、其私ナキト云ハ、其昔上野介殿ノ
 親父加賀守殿トハ、信綱公御挨拶宜シカラザルユヘ、
 夫ヲ御含アルベキハ人情タルニ、少モサナキハ至公
 ナル御事、凡人トハイヒガタシト申アヘルナリ、又
 大猷院様御他界ノ節殉死シ玉フハ、堀田加賀守殿阿
 部對馬守殿等ナリキ、信綱公ハ人々モ知タル程ノ御
 恩ヲ得玉フユヘ、必定御殉死アラント世間ノ人モ推
 量シ沙汰シケレドモ、サナキハ深キ思召アルユヘナ
 リ、是ヲバ知ラデ、ソノ事ヲ色々誹テ落書或ハ童謡シ
 ケル、サレドモカヤウナル小節ニ少モ御貪着ナサレ

ズ、是ハ伊尹周公ノ任ヲ荷ヒ玉フユヘナリ、燕雀イカ
デ鴻鵠ノ志ヲシランヤト云ニ同ジト、心アル人ハ感
ジ奉リヌ、其後ヨリシテ殉死ノ制禁新ニ出シトカヤ、
是又尤ナル御事ト人皆申アヘリ、又久綱公御逝去ノ
節御忌服ニテ信綱公引込マセ玉ヘバ、伊豆守ハ右衛
門大夫ガ子ナレバ、搦ナグ出テ勤申ベキ旨上意アリ、
其後正綱公御逝去ノ節御忌服ニテ御引込アレバ、大
猷院様再上意ニハ、伊豆守ハ元來金兵衛ガ子ナレバ
搦ヒナク出テ勤ベキ旨仰アリシ、如レ此御懇ノ御事ハ
他ニ異ナリキ、又信綱公始ハ正綱公ノ養子トナリ玉
フ、然ルニ正綱公御實子ヲ儲玉フユヘ、其事ヲ辭シ松
平ノ稱號ヲモ返シテ大河内ニ改號セント其旨ヲ上聞
アリケレバ、上意ニハ其事アルベカラズ、家督セザル
ヲ以テ本意トスベシト仰出サル、ユヘ、ヤハリ松平
ヲ稱號シ玉フ、夫ノミナラズ總領家ニ仰付ラレシユ
ヘ、實子ハ二男ニ成ケル、是故ニ正綱公逝去ノ時ニ其
祿ヲ信綱公ノ心次第ニト仰出サレケレバ、則備前守
二ヘ萬二千石又紀伊守ヘ分知二千石新田千石餘下サ
レベシト信綱公言上アレバ、其通リニ仰付ル、ナリ、
○信綱公御同列ト御勤方ヲ少モ爭ヒ玉フコトナカリ

ケル、既ニ大坂雷火ニ付テ見分ニ御越ナサル、時モ、
阿部豐後守殿ト御圍取ニテ究メテ大坂ノ御用ヲ勤サ
セ玉フ、其昔井伊掃部頭殿酒井讃岐守殿板倉周防守
殿松平伊豆守殿ナド、各自分ノ中アイ睦カラザルト
皆人見ケルコトヨ、サレバ上聞ニマデ達スル者コソ
アリツレ、或時上意ニハ、老職ノ者ドモノ互ニ中ヨカ
ラス段聞召シタリ、甚ダ不忠ノ至ト宣ヒケレバ、讃岐
守申上ケルハ、我ガ御役儀相勤申ニ付テハ公私トモ
ニ睦ク仕ラデ叶ザルナリ、但ヨソ目諸人ニ我々ガ互
ニ心ヨカラヌ體ヲ知セ置テ、面々ノ非ヲ互ニ人ニイ
ハセ、又ハ大名ノ心ヨセヲモ計見侍爲ニテ、内證ハカ
クノ如ク示合セ申談ズル旨ヲ言上シケレバ、大猷院
様サコソ有ベキ事ナレ、申ス者ノ誤リナリト仰ケレ
バ、イヤイヤ申上ル者ノ誤リニテナシ、サヤウニ見ヘ
申所有ヤウニ注進仕ルハ尤ナリ、是勤カタニテトマ
デ申上ケル、其後大猷院様御他界ノ夏ヨリ、此人々水
魚ノ思ヒ猶深シテ、其色ヲ外ニアラハセリトカヤ、
○青山伯耆守殿記臆ノヨキ覺ノ人トテ皆美ケル、其
身勝タル所コソ有ケヌ、旗本小身ノ輩マデモ名ヲ聞、
其人ヲ見知ヨク能覺テ、逢時ハ名ヲ呼テ會釋セラレ

シ程ナレバ、我ナガラ物覺ヨキラ自稱ニアリシ、似セテナリカヌルト人々羨メバ、イヤトヨ物覺ハ勤テナル事ゾト申サル、ニヨツテ、皆人何トゾ習ヒ度ト所望ノ時、伯州笑ヒナガラ、意地ノキレイナルトキタナキトニアルトノ挨拶ナレバ、問シ人々はニテ猶コソ心得ガタケレド不審スレバ、御三家大名ヲバ定メテ覺ヘ玉フラン、小身トテ見アナドリ玉フユヘ、銘々ニシリ玉ハヌゾヤ、我等ハ末々マデモ人ニカハリナキ所ヲ考ヘテ、平等ニ存ズルユヘニ、ヨク覺ルナリトアレバ、皆感ジ合ケル、信綱公イマダ無官若輩ニシテ末座ニマシ／＼テ、物ヲモ宣ハズ、伯州ノ申サル、コトサラニ感ジ玉ヒタル體モナシ、流石ノ伯州ニテソレヲ見ヤリテ、イカニコシヤクニハイカゞ思ヒ玉フゾト尋レシニ、信綱公我等ハ思召ト違タルユヘニ感ジ申所ヘイマダ行立ズト宣ヘバ、然ラバ思ハク聞タシト申サル、ユヘ、皆人耳ヲスマス所ニ、信綱公ノ仰ラレケルハ、月日ヲ御存ジナサレタルベシ、其外ノ星ノ名其座列トモニ悉ク覺ヘ玉フニヤト尋テ玉ヘバ、イカデ總星ノ名ヲ極メシルベキ、天文ノ家ニテダニ細ナル星ヲバ粟散斛ナド、コソ承レ、ソレ猶員數分明

ナラズ、マシテ一段ニ名ヲシルベケンヤトアレバ、サテハ各モサヤウニ思召ル、ヨナ、伊豆守ゴトキハ、縦ヘバ御三家大名ヲバ其數スクナク大身ユヘ、月日五星廿八宿ノゴトク覺ルニ便リアレドモ、小身衆ハ天ノ星ノ數ヨリシテ猶多カルベシ、イカデカ覺ラルベキ、生得ノ氣質伯耆殿ノヤウニ記臆ヨキ人ハ自然ニ覺マデヨキト見ヘタリ、イカニ仰ラレテモ我々意地ノ清濁ニハヨルマジキト申ニゾ、サスガノ伯州閉口シケルトゾ、或時箱崎小市申ケルハ、私事當年モ莫大ノ損ヲ仕ルナリ、總ジテイツトテモ德ヲ仕ルベシト手ニ握リタルヤウニ存ズル事モ、毎度損ノミニ致ス段、兎角貧乏神ヲ澤山ニ持申スユヘカト申ケレバ、總ジテ信綱公常ニ假初ニモセツバヲ慰トシテ利口ヲ仰セラル、事好ナルユヘ、取アヘズ宣フハ、其方ハ貪乏神福ノ神ヲ見知リタルカト問玉ヘ、バ小市申上ルハ、夫ハ人間ノ目ニ見ヘヌコトナリト申アゲ、レバ、重テ仰ラル、ハ、歴然ニ二ツノ神常ニ人ノ家ニ住シテ離レヌモノナリト宣ヒケレバ、小市申ケルハ少シ承度ト申上ル、サレバトヨ、面々ノ志ヲ福神トモ貪乏神トモ云ナリ、ソノユヘハ奢心アルハ分ニ過ルヲナシ、或ハ入

ザルキヒタテナド致シ、又ハ不吟味不穿鑿是ヲ貪乏
神トイフト目ヲ付ベシ、サテ又末社ハ女房家來ナド
ト云モノナリ、此モノキヤウタテヲ致シ、主人ノ事ヲ
無沙汰ニ致シ、不情實ヲ致ス、貪乏神末社ナリト思ヒ
テ此所ヲヨク常ニ見付テ、早ク貪乏神ヲ捨或ハ教ヘ
テ福ノ神トナシテトイタサバ、追付仕合モヨカルベ
シト、貪乏神ノ裏ミナ福神ナリト目ヲツケベシ、是ホ
ド歴然アラハレテアルコトヲシラザルユヘナリト宣
フ、當座ノ理屈ナリト申セドモ、面白コトナリ、コ
ロアル人ハ皆書ナドイタシ置ケルトナリ、又信綱公
總體コト輕ク無造作ニナサレタル、御大名方其外御
役人方ヲ御振廻アルニモ、大方當日ニ御約束ナサレ、
殿中ヨリ御用人方ヘ御書ニ仰セツカハサル、タト
ヘバ退出時分誰殿參ラル、筈ナレバ、今朝到來ノ鯛
ヲ何ニスベシ、何某ヨリ贈ラル、肴ヲ何ニセヨト書
付テ、御宿ヘ差越玉ヒ、御客御同道ホドニテ御退出ア
リシトナリ、右ノ書付等小島助左衛門方ナドニハ今
ニアルナリ、又品ニヨリテ重クモナサル、事アリシ、
夫ハ松浦壹岐守殿ヘ御百様御婚禮ノ御支度ニ御乗物
仰付ラル、處ニ、積リヨリ金子高ノ多クカ、リ申サ

子バ宜クモナキヨシソノカ、リ御役人申出テ、イカ
ガ仕ルベキヤト伺ヒケレバ、信綱公宣フハ、夫女ノ子
ノ入用ハ婚禮ノ節ガモハヤカギリナレバ、我等身上
相應ニイタシツカハスベシ、物入ヲイトヒテハ出來
カヌル事モアルベケレバ、夫ヲ心得テ丈夫ニ見苦シ
クナキヤウニイタセ、婚禮入用ハ二度ナキモノナレ
バト宣ヒシト申傳ナリ、

○進喜太郎殿ハ大納言局ノ甥ナリ、其局ハ東福門院
様ヘ御付ナサレシ女中ナリ、此局或時江戸ヘ下リテ、
御使ノ事モ畢テ、申上ラレケルハ、モハヤ年モ寄スレ
バ重テハ下リ申マジ、此度ガ御暇乞ノヨシ申上ケレ
バ、大猷院様上意ニハ、シカラバ何ンゾ願モアラバ心
置ナク申上ベキ旨仰出サル、時ニ局申上ルハ、何モ願
ハナキヨシ申上レバ、願忌^{モリヨ}ナク申上ベキ旨再應ノ上
意ナルユヘ、サアラバ申上ルナリ、甥一人アリ、イマ
ダ幼稚ナレドモ此者御草履取ニナリトモナサレ、御
ツカヒ下サル、ヤウニ御願ヒ申上ケレバ、夫コソヤ
スキ事ナレ、早ク其者ヲ江戸ヘ下シ申ベシト上意ア
リシ、其後喜太郎殿下ラレケル節、カタノゴトク幼稚
ナリケレバ、上意ニハ伊豆守ニハ子共數多持ユヘ取

扱ヒ上手ナランナレバ御預ナサル、ナリ、ヨク人トナ
リ申ヤウニ致シトラセ申ベキ旨仰アレバ、則御請ア
ツテ御子達同前ニナサレ、扇子御紋ヲ召物ニモ付テ

御生長ナサレ、後ニハ御知行千石拜領アルトナリ、又
有章院様御代、秋元但馬守殿仰ラレケルハ、我等事信
綱伊豆殿外戚従弟ナルユヘ、幼少ノ時ニハ大方彼御
宅ヘ常ニ參リテ諸事御教訓ヲウケ、嚴有院様御幼稚
ノ節ノ仕方ヲ見及ビケルユヘ、當時公方様御幼稚ナ
レドモ御政事ノ間ニアハセ仕ル事モ、偏ニ彼人ノ御
影ナリト稱シ申サレケルトナリ、又大御所様ハ紀州
ヨリ御本丸ヘ入セラル、ユヘ、以前紀州家ノ御事ニ
付テ、信綱公ノ御心入ヲ仰出サル上意アリト、世舉テ
沙汰シアヘリ、又河越ハ御舊領ユヘ、今以テ其百姓町
人マデ古老ハ、信綱公ノ御德惠ノ殘アル事ヲ申出テ
猶慕ヒ奉ルトカヤ、又常憲院様御幼稚ノ節、アナタノ
御爲ノ事ヲ仰上ラレテ、末々天下ノ御後見モアソバ
サルベキ御身ナレバ、御愼ナサル、ヤウニト仰ラレシ、
果シテ、後ニハ天下ヲシロシメシケルユヘ、信綱公ノ
御事ヲ上意モアリケルトナリ、一説ニハ神龍院様ヲ御
用ヒアソバサルベケレドモ、御病身ユヘソノ代リト

シテ右京大夫様ヲ御登庸ナサル、ヨシ上意有ケル段
專ラ沙汰アルナリ、如レ此御子孫ニ及ブ御德ナリト、
人々申シアヘリ、

○或時信綱公、御三人ノ御子達ノ列居シ玉ヒケルヲ
御覽ナサレ、仰セラル、ハ、上座ニ居タル男ハ何事ト
モイハバ一廉ノ御用ニ立申ベキ者ナリ、下座ニ在男
ハ疊ノ上ノ御奉公ヲヨク仕リテ一流ノ家ヲモ興申ベ
キ者ナリ、中座ニ居タル男ハ何トモイヒガタキ者ナ
リト宣ヒケルトナリ、果シテ末々御身持等ニ至マデ
皆御見立ノ通りナリケルトナリ、所謂上座ハ輝綱公
ナリ下座ハ信興公ナリ、中座ハ信續公ナリ、又嚴有院
様日光御成ノ節、輝綱公御供ナサル、ナリ、其行列遅
速猥リニナキヤウニト兼テ御供ノ者ヘ仰付ラレケル
處ニ、度々行列滞リケルユヘ、何事ニカト御尋アレバ、
南與三兵衛御先乗リニテ度々用事ヲ達シニ下馬仕ル
ユヘナリト申セバ、是ヲ輝綱公聞セ玉ヒ、夫モ程ノア
ルベキ事ナリ、斯アルコトハアマリナル義ナリ、サヤ
ウニナキヤウニ仕ルベキ旨又々仰付ラル、其後與三
兵衛馬上ニテ物ナドマデ喰ヤウニシテ見苦シクアル
ユヘ、行列目付是ヲ制シケレバ、下リ申マジキ旨仰付

ラル、ユヘ如レ此シ、飢テハ何ノ役ニモ立マジキヤト申テ中々其差圖ヲ用ヒザルユヘ、其段申上ケレバ殊ノ外御立腹マシ〱テ、其後歸ラセ玉ヒ、右ノ趣ヲ信綱公ヘ仰ラレテ、與三兵衛ヲ下サルベシト宣ヘバ、ソノ時信綱公仰ラル、ハ其與三兵衛事ハ猫ト思ヒ堪忍スベシ、其謂ハ常ニ猫ハ意地ムサキモノニテ何ニテモ喰物ニハ口ヲツケヌハナケレドモ、又鼠ヲ取ニハ一物ナリ、ソノゴトク與三兵衛モ何ニゾノ時ハ必一物ナルベキモノナレバ、夫ニ免ジテ堪忍セラレヨト宣ヒシト申傳フルナリ、

○信綱公御病氣指詰リ、既ニ大切ナリシ時、御嫡輝綱公ニ仰セラシ、ハ、大猷院様當上様アソバサレケル御自筆ノ物ヲ取出シ、新シキ、藥罐ノ内ヘ詰ヨト御差圖アリテ、則御眼前ニテ輝綱公ヲシテ詰サセ玉ヒテ、我等見ル前ニテ焼ベシト宣ヒテ、火ヲウチ焼セ玉ヒ、烟收ルト等、ソノ藥罐ノ蓋ヲ麻ヲ以テ緘^{カラ}ゲ、自分ノ封ヲ付玉ヒ、我死ナバ此ヤクワンヲ頸ニカケ埋ベシト仰付ラル、又御内役人ドモ不^レ殘支配ノ帳ヲ持參スベシト仰付ラレ、其帳ニ相違ナク帳面ノ通り相濟トカ、セ玉ヒ、其下ニ御自分ノ印判ヲトクト押玉フテ、役人

ドモヘ渡サセ玉フユヘ、御逝去後ニ一人トシテ科人ナカリケルトナリ、又御病氣大漸ラル、時、養母ナル御人宣ヒケルハ、最早何事モ入ラズ念佛ヲ御失念ナサレマジ、御本復アレバ、是祈禱トナルナリ、又死後ニハ後世トモナリ申スト仰ケレバ、則信綱公答ヘ宣フハ、少モ念佛ヲ申ベキ心入ナシ、ソレハイカニト申スニ、私義ハ御重恩ヘツシテ身ニアマリヌル者ナレバ、常ニ御奉公ヲ勤メ足リ申サズト寐臥ニモ存ズルユヘ、今以テ其通りナレバ御奉公々々トハ唱申スベケレドモ、念佛申スベキ心ノ隙ナシト宣ヒケルトナリ、寔ニ忠孝タグヒナキ人ナリト、聞人感涙ヲ流シケルトナリ、公御逝去シ玉フ翌日、御出入御坊主阿部豐後守殿ヘ參リケレバ、伊豆殿御宅ハイカバト尋玉ヘバ、其人答ヘ申シケルハ、昨日マデ門前ニ市ヲナシヌレドモ、今朝ハ引カヘ殊ノ外寂^{サビシキ}體ニナリ申ス段ヲイヒケレバ、ソレハ人ノ上ニアラズ、誰モ明日ハ斯ナリトイヘドモ、ワケテ其人ヲ思フト豊後殿仰ケレバ、是公ノ遺愛トイフモノ乎、其比或人箱根路ヲ通ケニル、其邊ニテ馬^{ウマ}御申ケルハ、御歷々ノ衆御死去ナルベシトイフ、其人問ヒケルハ、イカバ心得テカクハ申

ゾトアレバ、馬御又申ケルハ、一兩日以來ハ日ノ色
 アシ、トイヒケル、其後其人江戸へ來テ聞バ、信綱公
 御逝去マシ〜ケルトナリ、御一生ノ御忠節ヲ思へ
 バ、寔ニ天ニモ感通シ玉ハン者歟、其比何事ニテモ好
 事アレバ、皆信綱公ノ仰セラレタル事、或ハカクナサ
 レタル事ト世舉テモテハヤシ稱シ奉リケル、是ヲタ
 トフルニ天下之美ハコレヲ舜禹周孔ニ歸ストイフガ
 ゴトシ、又近ク譬ヲトルニ、刀ナドノ無銘モノニテ勝
 レテ出來タルハ、ミナ正宗類ノ上作トナルニ似リ、
 如レ此人ニ信ゼラレ玉フ事ハ、御天性トハ申セドモ、且
 ハ努力ヲ爲^{ナシ}玉フヨリ興起スル者乎ト人々感ジ傳フル
 トナリ、

紀侯言行錄序

爰有真如隱子者住江南隨無庵之沙彌也與我累年之荆識也其爲壯年俱仕官而接眉宇於晨昏一日來茅齋我告彼曰先君南龍院公者近世英雄殊絕之人主也濟世惠民勃興儒佛匡舉技百藝續絕起廢招士謙遜下于人我嘗聞黃髮鯢齒之人此公出襁褓之中有渥注之才我世祖東照宮之鍾愛拔群兒之中老將本多忠勝中書 榊原康政式部大輔與加藤清正山名禪高畠山入庵佐々木賢長六角承禎二俱男中務少輔語曰公子常陸介殿者有凌雲覆世之量後來必入大海而起龍萬丈之波濤者也聽人信服矣宜乎果然矣一生言行駭人感世之譽誠欲有所爲之主也輔佐三代柳營者五十餘年于翼載于藩屏靡不當家萬里長城者焉雖然值昇平世不能遺芳名於萬世者爲遺憾焉薨之後天偏惜彼仁惠英才皆墮淚於峴山之碑嗚呼一代之言行不可不記焉仍俾彼隨無庵沙彌粗筆記公之一生佳言善行曰號大君言行錄藏之佛座下拈香拜誦而尙增懷舊遺愛之淚云爾

壬戌春正月

烏有先生題

紀侯言行錄目錄

卷上

- 一 賴宣君生質穎敏常ならざる事
- 一 紀州の御家は尾張と萬事御同格之事
- 一 大纏の事附玄ないの事
- 一 大坂夏御陣御先手御願の事
- 一 茶臼山御陣の事
- 一 賴宣君江駿河にて百萬石可被進と御内證極りし事
- 一 賴宣君佛が原の能御稽古の事
- 一 藝州廣嶋への上使安藤右京進江賴宣君被仰之事
- 一 福嶋家の浪人大崎村上眞鍋等の士御抱被成候事
- 一 二條の御城へ行幸の事附辻固の事
- 一 大小性間宮久彌御手討の事附高井伊織諫言の事
- 一 賴宣君御自身銚物被成候事附那波道圓諫言の事
- 一 大高源右衛門重高が事
- 一 江戸參勤の節勢州松坂より御渡海之事

附 松平三郎兵衛諫言の事

一 紀州江御下向の節依ニ風波ニ佐谷廻り被レ成候事

一 賴宣卿名高き勇士共御賞翫被レ成候事

一 横田大學が事

一 藪三左衛門青柳傳三郎強弱之事

一 大明國鬪亂の事附鄭芝龍日本江加勢を乞ふ事

一 左京大夫賴純主へ御讓物の事

一 遠山某が事

一 公方家御茶會の事

一 紀州入口多き事

一 年頭の御禮元日一等に御請被レ成候事

一 落合十郎兵衛三月木練の大梯を獻せし事

一 御家中の士掛物調候に付御吟味の事

一 上々米の事

一 御參勤前に神社佛閣參詣被レ成候事

一 和歌の浦御遊宴の事

卷 中

一 日光御社參野陣小屋取りの事

一 湯崎浦にて鯨船の事

一 賴宣君御判ト者占ひし事

一 赤坂御中屋敷水道埋樋の事

一 安藤帶刀直治が孫千福丸が事

一 宇治の御堀端高塘の事

一 賴宣君御幼年より御眼力勝れ給事

一 賴宣君御家中の諸士へ恩惠深き事

一 町野宇右衛門が事

一 山中作右衛門が事

一 千宗左が事

一 國主たる君他方にて飲食心得有るべき事

一 軍法韜の事

一 由井正雪叛逆の事附紀伊侯の御疑晴るゝ事

一 賴宣君御書物日光御寶殿へ密に奉納被レ成候事

一 尾張殿病氣大事に付紀伊侯不時に參勤の事

一 酉年大火事の事附御國米三千石獻上御願ひの事

一 御城炎上の節公方様御機嫌御伺の爲め御登城の事

一 御鷹野の事

一 尾張大納言殿不快に付賴宣君御異見の事

一 細川三齋所望に依て御茶の湯の事

一 權現様より御拜領被レ成候虛堂の墨跡の事

一 小堀遠州作の石燈籠の事

一 賴宣君御無馬の事

- 一 上野台徒の僧御見舞の思召首尾の事
- 一 小笠原右近大夫より壺胡錄贈られし事
- 一 賴宣君七山御鹿狩之事
- 一 岩出にて川狩の事附佐渡與助が事
- 一 今村小兵衛といふ算勘者言上に付御評議之事
- 一 坂口作兵衛が事
- 一 佐竹義宣家臣戸村十太夫が事
- 一 有田山楊梅狩の事
- 一 長尾勘兵衛が事
- 一 高野山學侶行人騷動の事
- 一 冬野村追鳥狩の事
- 一 賴宣君姊川合戰御物語の事附石野傳市御叱の事
- 卷 下
- 一 嶋原の一揆黒田の陣へ夜討の事附山中作右衛門一番鎗之事
- 一 賴宣君御足へ進上の犬喰付し事
- 一 宮地久右衛門が事附碁盤繪圖の事
- 一 紀州井原町大水道の事
- 一 賴宣君加納五郎左衛門に御意被_レ成候事
- 一 堀田九郎右衛門大阪陣首帳の事

- 一 御家中陪臣陣羽織の事
- 一 嶋原一揆蜂起の時御城にて紀伊侯御了簡の事
- 一 嶋原の凶徒城より夜討に出候に付賴宣君察智の事
- 一 賴宣君勢州白子にて御鷹野の事
- 一 賴宣君藤堂大學頭領分にて御鷹野の事
- 一 久野丹波守宅へ被_レ爲_レ入賴宣君御茶の事
- 一 村上彦右衛門義清武者奉行被_二仰付_一事
- 一 賴宣君御隱居の事
- 一 御隱居大纏の事
- 一 和歌の浦近邊新田開發止させ給ふ事
- 一 紀州は入口多く守禦六ヶ敷國と云事
- 一 賴宣君詩歌の事
- 一 賴宣君竹本丹後守宅にて御能被_二仰付_一事
- 一 玄猪御祝儀の事
- 一 安藤帶刀直清逸物の早馬求めし事
- 一 原田權之助が事
- 一 賴宣君諸國浪人共へ御慈惠の事
- 一 光貞君柔御稽古の事
- 一 御家中儉約沙汰に付御意の事

紀侯言行錄上

賴宣君生質穎敏常ならざる事

東照宮御子孫多中に、常陸介賴宣君をば其の御器量天才にして、唯尋常之御生質に而無^ニ御座^一候所を御父御覽じ被^レ付、御寵愛不^レ淺して、台徳院殿にも、尾張義直と賴宣君をば、天下の左右の固と可^レ被^ニ思召^一旨堅ク御遺言たるにより、江戸御旗本と尾張紀州は御三家と號し、三家一杼の御高家たり、然るに賴宣君五歳六歳の御時分より、東照宮之御膝本に御座候而、文武の御物語を聞給ひ、其頃は佐々木中務少輔賢永、^{六角義賢入道}、^{承禎の三男也}、^{昌山義春入道}、^{前能登國主、上杉謙信養子、}山名豊國入道禪高、^{前因幡國主}、山岡道阿彌、^{江州勢田城主}、三好丹後守、城和泉守、堀丹後守、以下武功の輩御伽に相詰、公家には日野大納言輝資入道唯心、水無瀬親具入道^{興イ}一齋、其外南光坊天海、金地院傳長老、林道春、御前に有て公家武家文事武備の御咄し、扱は貞觀政要の講談四書史漢等の評論、平家物語、太平記、東鑑、偕は孫子三略六韜の要語の御咄シ、朝夕之御慰、太公望、張

良、孔明、馬援、亦是郭子儀、李靖などの傳、和朝にては、源賴義、義家、賴朝、泰時、時賴之昔の御咄に而有しを、賴宣君御幼少より被^ニ聞召習^一、文武の御事は不^レ及^ニ申^一、詩歌茶道亂舞の道迄も、其吟味を被^ニ聞召傳^一し御事なれば、近代無雙の明君と天下にて譽參せしも理也、東照宮天下御一統の後、御年七拾に餘、御他界迄、毎日御馬を召、御鐵炮三發づ、御弓は的卷藁を定て被^レ遊、武門の御務有しを、賴宣君御幼少より御覽じ習ひ、武の道須臾も無^ニ御油斷^一、武藝は不^レ及^ニ申^一茶道は古田織部正重勝、織田長益入道有樂、能亂舞は觀世黑雪今春太夫に奥義を御聞成しかば、一として味事なし、常々御近習の輩にも、士は人の司也、物に偏寄すべからず、物にかたよるは愚人の業也、

武士の櫻狩して歸るには

やさしく見ゆる花胡^{フナ}籙^ハかな

此歌の心に身を持べしと、常々御えめし也、

紀州の御家は尾張と萬事御同格の事

慶長十九年十月朔日に、京都板倉伊賀守勝重より、大坂城謀反のよし早馬にて注進す、此日は觀世三十郎に定家の紐解き海士の泣かゝり檜垣の大事習事を

東照宮御自身御教可_レ被_レ成に付、御舞臺の支度前宵より松平右衛門大夫正徳_{松平伊豆守信綱}父に被_二仰付_一、御子様方も皆御能の御役人にて御詰被_レ成候、其朝時雨降込御舞臺濡申候を、右衛門大夫下知して拭て、板の乾を待候所へ、大坂の御謀反の早馬到來、其狀箱を潜に御前へ出、人を拂申上候、上總介忠輝君、尾張義直君、賴宣君、阿鶴君、水戸賴房、其外御小性皆三の間へ退申候、賴宣君計は京都よりの注進を内膳正申上候を無_二心元_一思召、指足を被_レ成、御障子の此方に御立聞被_レ成候付、大坂御謀反の次第内膳正申上候をはやく御聞被_レ成候、是も殘の御兄弟様より御勝被_レ成たる故也、御陣觸有て、尾張様には、頭黒に白_キ葵の丸付たる御旗五本、御纏は白_キ御紋付たる朱の大四半也、金の笠の御馬印、二ツ引の御幕被_レ進御用意の爲め駿府御立、尾州迄先達而御越也、賴宣君にハ、黒_キ御紋付たる白旗七本、中黒の御幕、御馬印は柴田勝家が馬印見事に被_二思召_一候とて、金の御幣被_レ進候、七本の御白旗は、秀忠將軍家と御同意の御事也、尾張の御母儀阿龜殿は、御前へ御出御訴訟には、無_二御情_一事被_レ遊候、右兵衛殿ハ御兄に而候に色品之替りたる御旗を

被_レ進御弟の常陸介様へは江戸の將軍様御同意七本の白旗を被_レ進候事、去とは無_レ曲に奉存候、常陸介様へ七本の白旗を被_レ進候程ならば、御兄にて候得者、右兵衛殿へ可_レ被_レ下事にて候と泣くとき御恨被_二申上_一候得者、東照宮御顔色違被_レ仰候は、武家には惣領の庶子、庶子の惣領といふ事有り、我嫡子岡崎三郎信康生害之後には、二男なれば、越前黃門秀康嫡子に可_レ立事なれ共、同腹の弟なし、常陸は一腹の弟阿鶴是あれば、天下の惣領は常陸の害也、右兵衛も常陸介と兄弟なれば、格は同事にて勝劣なし、此故に慶長十一年八月十一日には、義直は右兵衛督從四位下、賴宣は常陸介從四位下に敍爵たり、同十六年三月廿日に、右兵衛督も常陸介も、參議中將從三位に補任す、是を以見れば、右兵衛常陸が家に勝劣なし、然ども阿鶴を弟に持候得ば、惣領式は常陸也、箇様の譯を不_レ存女の差出たる事を申上候と御呵被_レ成候、後々賴宣君仰には、尾張の家と此方とは牛角にて勝劣なし、然るに皆々尾張の家を愛て物毎を心得る事沙汰の限り也と御叱也、我家は天下の御隱居後、駿河を相續いたし候得者、尾張は不_レ及_レ申、江戸に相替事無_レ之候と可_二

心得内意也、

大纏の事附えないの事

大坂御陣前に、賴宣君大纏は、朱の六幅懸の四半に白キ丸也、賴宣君御物語ニ、權現様御意には、四半折懸に紋付シは、上の横手の方へ紋の上りたるが恰好よし、我が白丸の朱の四半も、白の丸殊之外上へあげて紋を可_レ書旨權現様御差圖より出來候て、淺間の社にて四半を張せて見たるに、白丸上へあがりたるにて、殊之外見事也、權現様には數々の旗印御覺被_レ成、恰好を御鍛練也、家中之紺地四半金の丸も上へ上て附べしと御意也、其時我持弓筒六組の白えないに朱の餅の紋の小旗も長七尺也、是は權現様十人の御鐵炮頭のえないの尺を寫したる也、以來寸尺を不可_レ違と御意也、御先乗物頭、或ハ軍者のいふを聞、足輕のえないの尺長過たりと申候を御聞、廣の御殿御門番に出たるを、御出被_レ成候御召候て、先乗同心のえないの尺長過たりといふもの有よしあれば、權現様十人の御鐵炮組白えないの寸尺を寫したる也、權現様御定の寸尺を長過たりとの批判推參と御呵なり、

大坂夏御陣御先手御願の事

大坂御陣四月末に、二條御城へ將軍様御入被_レ成、權現様御相談にて、大坂表御手分御定有、賴宣君十四歳なれ共、御前へ御出被_レ成、御先手被_レ仰付_レ被_レ下候得と御望被_レ成候、權現様御機嫌御尤成所望なれ共、大坂表ハ將軍先手致され候へば御氣遣なし、大和紀州和泉、河内の地土共、皆秀賴へ一味し、寄手の後より可_レ被_レ懸様子なれば、後陣心元なし、尾張と其方と永井右近安西組は後に控へ、跡より敵を可_レ切崩との御意也、賴宣君も無_レ是非御退出也、扨五月七日大坂へ西御所様御發向被_レ成、權現様御跡備安西組永井右近直勝、押續き尾張様、其次の備賴宣君、扨同勢惣小荷駄也、平野堤にて尾張様は御下馬被_レ成、兵糧腰附御つかひ被_レ成、緩々と御芝居被_レ成候ニ付、常陸様に芝居に御下敷被_レ成、緩々と御座候處に、御歩行者小野田長兵衛豐田文四郎古老のもの也しが、兩人一所に居て、今日は御先手必定大合戰可_レ有_レ之に、箇様にふらめき罷在殘多事哉トつぶやき候を賴宣君御聞、兩人の者申處尤ニ思召、尾張の備を乗越、大坂へ御推シ可_レ被_レ成と被_レ仰候、松平八郎左衛門等申候は、功者にて候間、朝比奈惣左衛門に了簡御尋候へ

とあり、則惣左衛門を召、今日先手にては必定鍵合と
つもる者有如何と御尋被^レ成候處に、惣左衛門返事
に、今日は御合戦は有間敷と申上る、兩人の御步行者
聞て、惣左衛門一代に首二ツ三ツ取たるとして、何の
了簡可^イ有^レ之哉、今日先手に鍵可^レ合に殘念と申候、
暫して跡につゞき惣小荷駄數千疋尾張様常陸様御備
五拾計脇を先へ〜と押候て乗越參候を賴宣君御覽
被^レ成、拾四歳と申せ共、天才の大將なれば、人々に被^レ
仰候は、小荷駄合戦勝負に不^レ入物なるに、先へ〜
と急は先手軍に勝て陣着により、荷物急ぎ呼越ト
見へたり、必定先手には軍有て陣取に附と見へたり
とて、惣左衛門を召此段被^レ仰候に、惣左衛門承り、い
や左様にては有^レ之間敷候、先之御合戦は有^レ之間敷
と申候處に、赤纒掛たる武者二騎尾張様御備へ乗込、
高聲にて何事歟申とひとしく、尾張様衆一萬計騒ぎ
立て先へ乗立行、彼赤纒眞先に乘來り候をみれば、山
上彌四郎内藤長助也、馬に白沫かませ、纒の出しも折
懸り御備へ乗込、大御所様上意には、御合戦始り候間、
早々御乗被^レ遊候へ、喜多見長五郎間宮、左衛門を
御使に被^レ進候に何とて御遅參被^レ成候との上意也と

申上ル、賴宣君聞召もあへず左も社有んと思つれ、無
^レ詮評義して遅たり、只急げ〜と御ざいを振らせら
れ、御馬を御乗出し候故御人數前後一ツに成て、田も
あせも不^レ論、大坂指て乗立ル、賴宣君御口乾キ、御馬
上より水をくれよと被^レ仰候へ共、誰も聞ものもなか
りしに、黒き羽織着たる步行士馬柄杓に濁水を汲て
差上候、賴宣君御手に取上ゲ候時、彼歩侍御鎧の草摺
ヲとりて、私ハ正木庄兵衛^{後三浦長門守}入道定鑑ト號が家人梅原五
左衛門と申者にて候、能御覺へ被^レ成候へと兩度迄申
上ル、^{此者紀州にて、三浦定鑑御茶を上候}
^{詢、御前へ被^レ召出、時服拜領す、}

庄兵衛名之事并梅原事時服相違左之通也、

一定鑑儀駿河にて被^レ召出候ハ慶長三年也、此節
名は正木勝兵衛といふ、其後上意を以、本名三浦
と改、先祖の者長門守に成也、諸太夫任官は大坂
御陣之後也、

一慶長十三年に知行二千石御加増被^レ下、都合五千
石也、御朱印今に有り、是も三浦長門と有^レ之、然
れば大坂御陣之節の名、彌三浦長門也、

一梅原に御羽織被^レ下置候は、寛文十年戊九月也、
大坂にて定鑑家來梅原五左衛門と申者、黒キ單

羽織に金箔にて蘿菊ささげを付たるを着し水を上候
躰、目はしのき、たるものと御覽被_レ成と常に爲
時へ御難談被_レ遊、五左衛門が子某爲時家に有_レ之
段を被_レ聞召、則陽山御殿へ被_レ召出御目見へ
被_レ仰付、御羽織被_レ下置候也、

茶臼山御陣之事

諸茶臼山下へ御乘着成に付、安藤帶刀黒地の折懸に
金の打板之紋の指物にて乗向、殿ハ何とて遅御越候
や、面白事御座候つるに、早々御駈着御手柄被_レ成候
ハで残念に候、山の上に御所様御座被_レ成候間、御對
面候へと被_レ申候に付、御近習の輩馬より抱下し申候、
帶刀馬も強乗候と見へ、汗かき洗馬の様に見へ申候、
帶刀も馬より下て、賴宣君之御手を引、茶臼山へ上る
に、大坂城殿主の焼を見んとて、上下茶臼山へ上らん
とするを、板倉内膳正重昌金の抱半月の赤纒懸竹杖
にて扣き下し候處へ、帶刀は賴宣君の御手を引、内膳
を呼懸常陸介殿なりそこのき候へと申候得者、内膳
も腰を屈め禮義する、偕亦賴宣君ハ、茶臼山へ御上り
候得者、權現様は床机に御腰を被_レ懸、將軍様ハ敷皮
ヲ敷被_レ成御座候、其所へ賴宣君御出候得者、權現様

御覽被_レ成、合戦有たるに、今に成て參候哉、遅しと被_レ
仰候、賴宣君取あへず、是を存じてこそ二條の御城に
て御先を望候に、夫をば御許容不_レ被_レ成、後陣に御置
被_レ成、遅しと有_二御詞_一は上意とも不_レ存候と御恨被_レ
仰上候權現様御こまり被_レ成、仰等の誤り也、其方
之道理也と被_レ仰候、賴宣君は今日手に御合不_レ被_レ成
を御無念に思召、頻りに御落涙なされ候を見て、松平
右衛門太夫正綱諫申候ハ、今日御手に不_レ被_レ合と申
ても、左様に御せき被_レ成間敷候、御幼少に御座被_レ成
候得者、行末長く、御一代の中には箇様之事ハ幾度も
御座候て、御手柄可_レ被_レ遊候間、御せき被_レ成御落涙
被_レ成間敷と御諫申上候得者、賴宣君御涙を御拭、右衛
門太夫をはたと御睨、何を右衛門は申ぞ、我が十四歳
の事が亦有かと被_レ仰候得者、權現様急度御居直り、
常陸殿只今の詞が鍵にて候と御譽被_レ成候由、萬治元
年戊七月廿四日江戸御中屋敷之御座之間にて加納大坂陣の事
五郎左衛門直恒布施佐五右衛門重紹物語致し、御前
伺公之輩に聞せ候、賴宣君にも兩人能覺へ候との御
挨拶にて、後被_レ仰候は、賴宣御先手致候ハ、家中之
士共鍵を合高名致候者多クて、其身果候共其子孫殘

り、家の飾りにて可_レ有ものを殘多事と御意再三也、此時賴宣君御物語に、兩御所様御前へ諸大名追々に被_レ參、御勝利の御祝儀と銘々の手前の働を申上候、其中に畠山入庵^{イナ}はへ〜と召候、入庵御前へ近ク參今日の御勝利思召儘之御事目出度儀にて御座候と御祝義申上候得者、權現様ハ入庵が籠手差候を御取、入庵亦勝候へとの上意也、是ハ關ケ原御勝利亦今日之御勝利を被_二仰出_一たるならんと、賴宣君御物語也、

賴宣君へ駿河にて百萬石可_レ被_レ進と御内證極し事

大坂落城之年之冬、駿河國に百萬石添、賴宣君へ御讓渡、權現様者三嶋の近所泉頭といふ古城之跡を御隠居城に可_レ被_レ成由御繩張有、江戸より土井大炊頭利勝御使にて御祝儀を被_レ進候、其内に年も暮、元和二年に成て無_レ程權現様御煩付御他界にて此事止候也、其後此儀を御殘多事也、權現様今三年御存生なれば、賴宣君を百萬石之大身に可_レ致を殘多事と養珠院様ひたと被_レ仰候へば、安藤帶刀此方の殿百萬石は過候と計挨拶申候、帶刀御詞少く尤成申分也と賴宣君御

物語也、帶刀名言を大猷院様御代に至て諸人感じ候と也、

賴宣君佛ヶ原の能御稽古の事

元和二年正月織田常眞公^{前尾張内大臣と號}江戸へ年頭之御祝儀に御下候とて、駿府へ御立寄三四日御逗留、權現様御馳走、御能有_レ之、賴宣君へ佛ヶ原を被_レ成候へ見物可_レ被_レ成と常眞公御所望、賴宣君未佛ヶ原相傳不_レ被_レ成ニ付、權現様御殘念に被_二思召_一佛ヶ原を御習被_レ成候様にと被_レ仰、常眞公は翌日江戸へ御歸被_レ成候也、正月廿一日に權現様は田中藤枝へ御鷹野に御越被_レ成候、御留守の内に佛ヶ原を御習被_レ成候様にと被_二仰置_一候故御稽古被_レ成候、正月廿四日に田中にて權現様御煩付被_レ成、二三日過て駿府へ御歸被_レ成、御病氣殊之外重キニ付、御子様方宇都の谷迄御迎に御出被_レ成候、御簀之内より常陸は佛ヶ原を習請候哉と御尋、中々成就仕候と被_二仰上_一、權現様御意には、氣色本腹次第佛ヶ原見物可_レ被_レ成と被_レ仰候、其後御氣色重り、終に御能も無_二御座_一、四月十七日に御他界也、賴宣君は是を御殘多思召、紀州へ御入部、和歌の御宮御建立之後彼事を思召不_レ忘、九月十七

日に臨時の秋祭被_レ仰付、毎年御神拜能不_レ怠、初メ二三年は毎度佛ヶ原を被_レ仰付、去程に此九月十七日之御神事、能は御國末々萬歲迄も無_レ退轉_一筈に御定被_レ成候、其後御目付熱一郎太夫其外へ被_レ仰渡_一候、

藝州廣嶋への上使安藤右京進へ頼宣君被_レ仰之事

元和五年の秋、福嶋左衛門大夫正則流罪也、台徳院様は御在京にて、廣嶋城受取には毛利甲斐守秀元、時幸、相也、

本多美濃守忠政、安藤右京進重長、加藤左馬介嘉明を始、中國四國の軍兵共、船手は御恩土の瀬戸口、陸は

備後の笠岡より取寄候、安藤右京進は京都より罷下候、其節六月酷暑の最中なれば、毎晩伏見より尾張様水戸様御同道にて、頼宣君船にて、淀川へ船にて納涼之御遊也、安藤右京進京を立候日も、淀川へ船に而御三人御出御遊被_レ成候、御座船三艘もやひ候て御酒宴之節、伏見の方より飭立候、川舟十艘下りけるを、廣嶋進發の輩と御覽じ被_レ付、舟のもやひを解せ、尾張様水戸様之御舟を漕除ヶ彼飭船へ漕寄御覽ずれば、安藤右京進船也、頼宣君と見奉、舷へ出手をつき被_レ申候、頼宣君被_レ仰候は、此度は大儀に被_レ存候、乍去

廣嶋落去程有間敷候間、追付歸路待入候、偕て福嶋左衛門大夫は、能侍を餘多抱持候間、其内にて覺名高侍を抱申度候間、幾人にて肝煎給候へと御頼被_レ成、右京進畏存候旨御請申上候、其後右京進被_レ申は、頼宣君は當年十八歳にこそ御成被_レ成候に能武士をほしきと思召候御心入は、只尋常の大將にては無_レ之候、權現様の勝れて御愛子なりしこそ理なりと感涙をながされけると也、

福嶋家の浪人大崎村上真鍋等の士御抱被_レ成候事

廣嶋落去關國となりければ、紀州の淺野但馬守長晟を遷封られ、紀州へは頼宣君を御遷被_レ成候而、紀伊中納言殿と申奉る、廣嶋浪人大崎玄蕃允長行、村上彦右衛門尉義清、真鍋五郎右衛門貞成、三人上意にて被_レ召抱、其冬三人へ御茶被_レ下候に、大崎玄蕃には頼宣君御手前にて御茶被_レ下候、彦右衛門五郎右衛門には茶道千賀道圓手前にて茶を被_レ下候を兩人憤り候は、玄蕃允には御手前にて被_レ下、我々には茶道の手前にて被_レ下候事心外也、御暇可_レ申と憤りけるを御聞被_レ成、玄蕃は備後國鞆の城主にて福嶋家の家老也、

其わかは可_レ有事なるに、いな事を申候と御内意、
兩人承伏シ、御尤の事と静ル也、

二條之御城へ行幸の事附辻固の事

寛永三年丙寅之秋、台徳院様大猷院様御上洛、二條御城へ行幸なり、天下の諸大名辻固壹萬石ニ間口何程と割有て被_ニ仰渡、御三家は御家老二條御城へ出て間割之書付を請取、紀州よりハ安藤帶刀直次水野淡路守重良二條御城にて辻固の書付を受取、伏見へ歸、御前へ出其段申上ル、尾州ハ六拾壹萬石にて御座候故辻固之町間は程、御家は御知行高少々故辻固之町間は程と申上ル、賴宣君被_ニ聞召、夫ハ違たり、左様之相違之書付受取るものかと御機嫌不_レ宜、帶刀ハ少も違不_レ申間割知行高に仕候と有、賴宣君被_ニ仰候ハ、帶刀淡路守共覺ぬ事を申物哉、知行高之間割は外之大名之事也、尾張と我家は牛角の格式也、此故に官位初の敍爵より少將中將參議中納言に被_ニ任も同日同刻、

慶長十一年八月十一日、尾張義直右兵衛督從四位下中將任ズ、紀伊賴宣常陸介從四位下中將任ズ、慶長十六年三月廿日、義直賴宣一度ニ參議ニ任ズ、中

將如_ニ元、元和二年七月十九日、義直賴宣兩殿一度ニ權中納言ニ任ズ、寛永三年八月十九日、尾張紀州の兩殿一度ニ權大納言從二位敍任ス、

殊に我家は七本の葵の丸之白旗を被_ニ下、江戸柳營の御旗に全ク無_ニ相違、然者行幸の辻固の間割は知行高に不_レ依、尾張と我家は同邊の筈也と御諛有しかば、帶刀も道理に被_ニ詰、涙をはら_ニと流し、老耄故たわけを盡し候、辻固の間割取直し可_レ參候、只今二條之御城へ參候とて立候、賴宣君被_ニ仰候は、兩上様御前にて究候書付如何可_ニ取直哉と被_ニ仰候得ば、帶刀物も不_レ申、二條へ登城申て打出候を、水野淡路は、我等も參らんとて引添て出けるを、帶刀指留、淡路守若氣に而候、二條之御城にて殿之思召の通り間割仕直シ不_レ申候ハ、我等儀は二條御城にて自害可_レ仕候、其時貴殿は殿を同勢して二條御城へ切込可_レ被_ニ討果と有しかば、淡路守相心得候、御心安候へとて伏見に残り候、帶刀二條御城へ着候得ば丑之下刻也、行幸前三日の事なれば、御老中も終夜之公事にて、皆皆起居被_ニ申候、帶刀被_ニ參候得ば、土井大炊頭利勝、青山大藏少輔幸成酒井備後守忠利以下見被_ニ申、帶刀殿

ハ何とて御出候哉と有ければ、辻固の間割違、紀伊國殿に不審うたれ、道理に詰り亦參候、間割仕直し給り候へと有、御老中間割の違は有之間敷と有、帶刀申すは、尾州紀州之家は同位同格之筈にて、官位共に勝劣なき事を打忘、他之大名並に知行高の割付之書付受取散々被_レ叱參候、誠に負たる兒に川の淺瀬被_レ教たとへにて候、早々割直し尾州同前に書付御渡候得と有、御老中皆々被_レ申候へ、既に兩上様御意にて究候間、此度は致難く候、重而之大禮之時には此方心得候と被_レ申候得ば、帶刀大の眼をいからし、將軍の屋形へ天子の行幸程の大禮大儀可有哉、此時に家の格式尾張に劣ては生甲斐なし、是非共割直し給はれと思切たる氣色にて、各の料簡にて仕直し候事成不_レ申は、兩御所様御前へ我等可_レ罷出候、各も被_レ出候へとて、則兩御所様御前へ出、帶刀段々被_レ申上候得者、兩御所様被_レ聞召、紀伊國被_レ申様尤至極也、辻固之間割尾州同前と被_レ仰度候、帶刀悦喜無限、御前を退出するとして、廊下にて御老中に向て望叶候而大慶不_レ過之候、若叶不_レ申候へ、紀伊國を黒土に致候半と淡路守と申合候に、扱々満足申候とて伏見へ被_レ歸、

行幸の辻固尾張と同前にて、紀州も尾州も一度に従二位大納言に上り給ふと云々、兩上様を始、御老中方も、帶刀が氣しきに被_レ爲_レ驚給ふ云々、

大小性間宮久彌御手討の事附高井伊織諫言の事

大小性間宮久彌罪科有て、賴宣君御叱被_レ成、御鷹野よりの御歸時分御通被_レ成ながら御叱候て御入候跡にて、久彌恐て舌振致し候を、殿目に御覽被_レ成、久彌め口をゆがめ嘲候、八幡大菩薩遁さぬと被_レ仰候て御返し被_レ成候に、久彌も左の手にて脇差を御跡へ鞘ながら投、頭を延罷出候を、御腰物にて拔打に唯一打に御成敗被_レ成候、山本圖書助代の御腰物を上ゲ、血刀を受取參らする、賴宣君御顔色御眼血をそゝざたるところにて、御近習皆々に向て立せ給ひて、久彌が不届を手討にしたるは、道理か非道か、皆々申上候へとの御意也、皆々頭を地に付ケ、恐ぬ者なし、皆一同に御尤千萬と申上ル、其中高井伊織一人は肯の顔にて頭を上て罷在候を御見答、するく御立寄、皆々我道理とて承伏したるに、己が顔は尤と思はぬ顔也、我無理か申上候得と御問詰被_レ成候へ、伊織承り、久彌

罪科勿論に候得ば、御成敗の段は尤至極に奉_レ存候、然ば誰に成共被_二仰付_一、御成敗可_レ被_レ成御事候、尤武將の御身にて御座被_レ成候得ば、戰場にては御自身御手を下され候段勿論にて候、平生の御時に、官中納言位從三位に至り給ふ御身にて、御手討被_レ遊候事禁裡へ奉_レ對御不禮御不義不_レ過_レ之候、只御家運之御末と奉_レ存候と申もあへず、涙をはら_レと流し、無_二御勿躰_一御事と申上候得ば、賴宣君道理に御詰り、奥へ被_レ爲_レ入て、後伊織を御召、汝が先刻諫言候處道理至極也、自今以後手討は堅致間敷候と御誓約有て、夫より御一代御手討なし、寛永元年甲子二月廿五日日光御子向、大桑の御旅館にて松平久七郎康信と高井伊織喧嘩に而討果ける也、賴宣君殊之外惜み給ふ、主君の爲には身命を捨、奉公の誠を盡しけるもの也、先年間宮久彌手討せし時之忠節之諫言無比類_二稀成武士なりしを、さても残念なる事也と、子を御尋有しに、妹一人有て男子なければ、花井が子を聲名跡ヲ被_二仰付_一、高井五左衛門と號し、伊織が跡を相續被_二仰付_一候、

私云、伊織が祖父高井助八郎は、今川氏眞の家臣に

て、氏眞方々流浪の時分、隨分忠功をいたし、奉公相勤候、長久手の合戦前御家へ御預にて、權現様へ御奉公長、久手合戦に手に不_レ合、高名無之_二付_一、助次郎殊の外無念がり候と御聞被_レ成、權現様御意には、主君氏眞に附隨ひ、流浪艱難之奉公仕候段、忠切不_レ可_二勝計_一候、今日之合戦之手に合たるより、氏眞への奉公が手柄也と被_レ仰候、其助二郎子助兵衛、其子伊織也、

賴宣君御自身試物被_レ成候事附那波道圓諫言の事

市川甚右衛門尉清秀宅に而御自身御試物被_レ成候、腰帶と異名の有備前長光の御刀に而立袈裟を御切被_レ成ニ水もためず切て、其まゝに而立たるを、柄にて御突被_レ成候得者、二ツニ成倒申候、御前之上下一同に噓と感申候、賴宣君も御機嫌にて、那波道圓ニ御向、異國ニも加様之利劍有_レ之やと御尋有、道圓承り、なかなか異國にも利劍數多御座候と申上ル、賴宣君重而箇様之手つまきゝて人を切に妙を得たるも異國も有_レ之哉と御尋ニ、道圓答テ申上候ハ、人を能切候者異國ニも御座候、賴宣君夫は何と名を申たると御尋、道

圓承り、夏桀王般の紂王と申惡王にて、人を害し我が慰ニ致候、大惡人にて、惣而人を害し殺生を慰に致候ハ、禽獸の業ニ而、人間にてハ無之候、其上罪人を切候ハ、異國ニ而ハ屠者と申、穢多の業にて候と申バ、賴宣君御顔色替り、御城へ御歸被_レ成、夜ニ入道圓を召れ、汝が申所道理至極せり、向後自身の試物堅クすまじきと被_レ仰、道圓が忠言を不_レ淺御感_レじ被_レ成けるとぞ、

大高源右衛門重高が事

或時大高源右衛門尉高重御意ニ背き、御殿へ召、強ク御叱被_レ成候、我不仕合にて善き人を持ぬ故、何事も間ニ拔_レル事多し、とかく人が無と御悔候を、那波道圓聞て、御自身のめくらにて人を御見知られぬ故也、外様古參新參を不_レ論、人を御見立被_レ成候ハ、智者も勇者も如何程も可_レ有_レ之候、此御家ニ人がなしと被_レ仰候ハ、御目がねの不_レ明故也と申候趣御聞被_レ成、尤至極成事を道圓ハ申候、尤至極〜と再三御感被_レ成候、御悔之御様子也、

江戸御參勤之節勢州松坂より御渡海の事附松平三郎兵衛諫言の事

江戸御參勤之時、勢州松坂より御渡海有_レ之時、大風

大浪ニ而御渡海成がたく、諸人色々留申候へ共、賴宣君是非御渡海と有る時、番頭松平三郎兵衛忠尚進出、色々御諫言申上、若無_レ御承引御渡海ニ極り候ハ、我等儀者弓矢八幡も御照覽候へ、腹を十文字に切可_レ申と申上候處、賴宣君も被_レ成_三御了簡、御渡海を被_レ止、桑名へ御廻り被_レ成、熱田御渡海ニ而御下向被_レ成候處に、池鯉鮒ニ而松平三郎兵衛御迎ニ罷出御覽被_レ成、何とて御先へ參り候哉、御尋ニ、三郎兵衛申は、松坂ニ而御渡海を達而止參らせ、我等も陸を御供いたし廻り候へバ、此三郎兵衛が大風大浪を恐れ御渡海を止申候ニ當り候とぞんじ鯨船ニ乗、昨日の風波ニ松坂より參州吉田へ渡り申候て、是まで參御迎ニ出申候、殿様の御渡海を止候て、我等渡海不_レ仕は、男ハ成申間敷と申上候へ者、聞人驚歎し感せぬ者なし、賴宣君には兎角之御挨拶なく御通被_レ成、後日ニ密ニ御腰物を御手自被_レ下、其上御料理御手前にて御茶被_レ下候、御内意ニハ、箇様之事を大に御感被_レ成候而ハ、外の者はニ習て不慮に犬死いたし、士を殺す事可_レ有との御遠慮也、深き御思案也、

紀州へ御下向の節依_三風波佐谷廻り被_レ成候事

此後江戸より御上之時、大風にて吉田御渡海不_レ叶、熱田の宮に御着被_レ成候得共、風波彌強、中々御渡海不_レ叶、御船出し候事不能成と申候付、御家老衆色々申上候へ共、是程の風波ニ船の出ぬといふ事や可_レ有、是非船を出せと御怒被_レ成候、三浦長門守爲時者、御次之間ニ而大高源右衛門重高を呼て、其方何とぞ申上止_ン申候へとあり、大高申候ハ、各御申上候て無_ニ御承引_一候を、我等の分として何とて可_ニ申上_一と、何れ共達而申上候得との事にて、大高は御前へ出候得者、源右衛門が顔は何哉覽可_レ言つら也、何と申ても出船はとまらぬと被_レ仰候、大高申上候は、御召船の出されぬと申事にては無_レ之候、御船は丈夫也、水手は勝_レ申候、何たる風波にも氣遣は無_レ之候、然共御座船出候共、御供舟不_レ宜、水主共勝不_レ申候故、御供舟出シ難くと申事ニ御座と申上ル、賴宣君被_レ仰ハ、左候ハ、我乗替の船尾張殿よりの馳走ニ出候、丈夫なる關船ニ士共計乗せて出船せよ、輕キ輩は是ニ殘し置候へと御意也、大高申候ハ、大身歷々御供ニ而渡海可_レ仕候ニ、外樣輕キ者共舟惡きとて残り候者ハ壹人も御座有間敷候、縦海上にて沈死候共、殿樣御渡

海被_レ遊候ニ、風波惡きとて残り候てハ男は成申間敷候、左候得者はハ罷成間敷と申候、賴宣君被_レ仰候ハ、左候ハ、能船ニ直參之者大身小身不_レ殘乗せて供させ、家中又者雜人バ宮に殘シ候得と被_レ仰候、大高大音上_テ御意にて是は猶成申間敷候、主人々々に此大風大波に船を出し、殿樣御供にて渡海いたし候ニ、又者雜人と申ても、紀州の水を飲候もの共は、皆剛の者共にて候得ば、壹人も宮ニ殘申間敷候、破れ船に乗て主の供いたし、皆海中にて相果可_レ申候得者、是ハ猶成不_レ申事と申上ル、其時御機嫌直り、實ニ汝が申ごとく、我家中之もの共又者雜人迄も臆たる者は有まじ、左候得者、此風波にて人數を損じては勿_レ躰なし、佐屋へ廻り、川船にて下り候半ト御意也、御渡海ハ不_レ被_レ成、佐屋へ御廻り被_レ成候、惣而人之諫言を申上候をよく御聞入御用被_レ成候事、縦バ漢高祖唐太祖にもおとらせ給はず、常々御意ニ、智臣勇士を用ハ其申事を御聞入、我用ニ立候得者、御家中人の智慧分別ハ、我壹人之分別と成也と常々被_レ仰けると也、

賴宣君名高き勇士共御賞翫被_レ成候事
賴宣君ハ、常々權現樣御前ニ被_レ成_ニ御座、五六歳之御

時より、權現様の智臣勇士を御寵愛被_レ成候而、他所之者共亦ハ浪人迄も、御音信に御小袖御金御酒御茶を被_レ遣、御懇意之段を能御見及被_レ成候而、大功を樹は、善キ人を不_レ持しては不_レ叶事と思召、他家中の覺名高者をも縁を以て御音信被_レ成、若他所より使者な

どに參り候得者、御前へ被_レ召出_テ中々御念比也、去程ニ、大崎玄蕃、村上彦右衛門、眞鍋五郎右衛門、水野次郎右衛門、同小右衛門、川村内匠、田中玄蕃、玉上玄蕃、千本權右衛門、赤垣周防、大山修理、小鶴五郎左衛門、渡邊安藝、關根織部、喜多村孫之丞、堀田右馬允、數三左衛門、杯名有侍共、を被_レ召出_テ事不_レ可_ニ勝計、中國ニ而ハ、三刀屋監物、野尻奎助、關東者五畿内北國四國の名士共被_レ召抱_テ候輩尤多し、此時分ハ、天正文錄年中の方々の兵亂ニ名を顯し候輩無_ニ際限、高濱彈正、東役彈正、日野隆喜などは奥もの也、皆覺之兵共也、此節大坂兩陣の稼手首尾などは申立ニ成事にてなし、平塚五郎兵衛、後四郎左衛門、山田八左衛門、後何右衛門、中村五兵衛、中川權右衛門、水卷左次右衛門、鹽川信濃、村瀬作右衛門、宇佐美造酒之助、齋藤加右衛門杯は、皆大坂御陣ニ手柄高名有けれ共、さして覺え申立にては

不_レ被_レ召出_テ、中川水卷鹽川など能書と有事_ニ可_ニ被_レ召抱_テ候、只賴宣君には、覺有侍亦是筋目の武士をば如何程も被_レ召抱_テ候て、御懇ニ被_レ召仕_テ候故、皆身命を捨て、御用に立んと勵ける、

横田大學が事

關東者ニ横田大學は、權現様御懇意の兵也、元來は一城の主也、沒落して上杉景勝ニ奉公、關ヶ原御陣起り候時分に伊奈圖書御使ニ而、此度沼田を退ク、奥州へ御働被_レ成候間、裏切手合仕候得と上杉家中の侍共へ御内意被_レ仰通候ば、山上道及、上州山上城主上泉主水、横田大學、宇佐美民部、越後琵琶嶋城主、宇佐美駿河守の子壬生刑部左衛門、前田慶次郎、加賀大納言、利家從弟才伊豆守、小田切所左衛門事岡左内を初、貳拾人餘り御書を被_レ下、何れも權現様御書を頂戴致し候得共、景勝手ニ属し、侍たるもの後闇ク、裏切杯ハ不_レ罷成_トて御返事不_ニ申上_テ候を、權現様御無與ニ思召、其後景勝少身被_レ成、米澤へ被_レ引越、大半浪人仕けれ共、右御書の御請不_レ申輩は、御旗本御奉公望候得共不_レ被_レ召出_テ候、され共大坂御陣と有ル時、此浪人之輩大坂へ駈籠候哉と思召けるが、權現様南光坊大僧正へ御意には、上杉浪人之山上道及、横田大學、

宇佐美民部、友町大膳は、何方ニ居候哉と御尋被_レ成候、僧正被_レ申は、山上道及ハ病死仕候、横田大學ハ出羽_{ヘイ}下_リ居候、宇佐美民部ハ中氣心ニ而本國越後ニ引込罷有候、友町事は不_レ存と申上ル、上意ニハ何れも此輩ハ勇士名高き者共ニて、江戸將軍ニ奉公させても尤なる輩也と御意_也を、賴宣君御幼少ニ而御聞置被_レ成、大坂御陣濟て、板坂卜齋を召、横田大學を被_レ召抱_レ度思召之間、伊達政宗ハ奥州衆にて候間、大學手前之事聞候得と被_レ仰付_一候、卜齋申上候は、政宗は私夫程心安ク無_ニ御座_一候、柳生但馬守は政宗と無_ニ一心易候間、但馬守に尋させ候半とて、其段申達候へ者、政宗返事に、横田事は戰場ニ而人も存たるものなり、壹萬石計ニ而堪忍致候て、我等も抱度候得共中々それには合點仕間敷候、覺の場_合ハかさ有兵ニ而、千貳百二千の大將に成度く合戦の勝負致し、他の城をも攻落し、敵に戦城を被_レ攻候事も、野際_合之合戦も數十度手柄有_レ之ものニ候、乍_レ去一代之中鎗を突高名は不_レ致、常々申候は、小瀬美作守、安田上總介、鮎川與五郎、宇佐美民部、友町大膳などが手勢に先立自身鎧を突高名組討致し、度々手を下し候事、一切我等は同心

に不_レ存候、外之衆は他人ニ而候得者、得不_レ申候、我等妻の兄ニ而候故、宇佐美民部ニハ節々其段申候、自分之稼を致候事非_ニ太刀打_一候べき、我等若き時に、步行武者を壹人鎗に而突伏、家來に首をとらせ申、我等は先ハ乗拔參候事一度御座候、是もおもへば大將物主の不_レ入事仕候と後悔に存候と申を、我等家人大條尾張桑折點_丁聞て語り申候、大學はかさ有覺の武士に而候と政宗被_レ語候、柳生但馬は卜齋へ被_レ申、卜齋則賴宣君へ被_レ申上_一候、此時常陸介殿と申て十四歳にて御座候得共、御器量の御素性故御聞届被_レ成、大學を何とぞ御抱被_レ成度候間、其方才覺調儀仕候得と御相談有を、安藤帶刀立聞て、何事を卜齋が御合手ニなり御相談候哉と申ニ、賴宣君何とぞ横田大學を抱度思ひ卜齋ニ相談と被_レ仰候得バ、帶刀叱聲ニ而何知行が有て侍を御望候哉、ならぬ_一と被_レ申候て奥へ被_レ通候に付、横田を御抱被_レ成候事不_レ叶して後々迄御殘念ニ思召候よし、十四歳などにて箇様之事ハ中々凡人とは不_レ見候、此段板坂卜齋直咄しを、中井太郎兵衛、布施三説聞候而人ニ語り候、大學大將の器量有を御聞、他ニ異に御所望ニ思召候哉、後宇佐美造酒助

を御家ニ被_レ召寄_レ之後、橋本ニ而御目見へ仕候砌も、其方が伯母智横田大學は、勝_レたる剛之者と及_レ聞候、其方は對面したるか_レと御尋、造酒之助承り一族故ニ切々逢申候、青木新兵衛ニハ逢不_レ申候と御尋、關ヶ原前會津籠城之時逢申候、拙者十一二歳故、爾と覺不_レ申候と申上候へば、已前此方へ抱候半と呼候へ共、半之丞といふ子に離、ふかく愁歎し剃髮し、芳齋と名を替、京都黒谷へ引込、此方へハ不來、永井善左衛門ハ、參州譜代衆抱に才覺いたし候内に、將軍様へ歸參いたし候が、是ハ海野兵左衛門が伯母智ニて、其砌ハ能者共世間ニも多かりしと御意也と申とかや、只名士勇士を御好の御心深かりしとかや、

茲三左衛門青柳傳三郎強弱の事

砂丸馬場ニ而御馬共をめしける砌、時雨降來り、南の出シ櫓へ御入、雨の時間を御待、其内堀の方の矢間より百軒長屋の前の海道を通ル往還を御見物被_レ成御座候處ニ、青柳傳三郎といふ御小性立純子の袴く、り股立にて、羅砂の雨羽織、數寄屋足袋高木履ニ、下人ニ長柄の傘さ、せ通ける、其跡より數三左衛門通けるニ、跳ニ而返シ股立、木綿羽織ニ手笠さし、步行

者十貳三人眞黒ニつれ通けるを御覽被_レ成、御近習ニ被_レ仰ハ、三左衛門ハ細川越中守ニ幼少より被_レ使立、萬事見習し故、あの甲斐くしさを見よ、貳千石取て居る身がはだしにて、毛綿羽織手笠差、歩行之者共ハ鬼の子之様成を大勢つれ通たる利發さよ、あれこそ武士なれ、小切米之青柳傳三郎がく、り股立、數寄屋足袋高木履ニ、長柄の傘さしかけさせ、扱々鈍なる仕形哉、人之善惡にて、使立候もの賢愚が知れると聞バ、青柳が仕形ハ我耻也と被_レ仰けるとぞ、

此青柳傳三郎は、此已後盆の踊の場ニ而喧嘩して立退、行方不_レ知、

大明國亂の事附鄭芝龍日本へ加勢を乞事

本朝後光明院の御宇正保元年、賴宣君四十大明の思宗皇帝の崇禎十七年ニ當ル、前より大明の朝政衰へ、諸國亂れ、陝西の李自成、李自成の一黨を闖踏天ト號是ハ天をふみやぶるといふ心也、一揆の名に用張憲忠、此一黨を亦阿南の李岩など前々より謀反し、西安府を攻破り、夫より北京皇城へ攻入しかば、防戰不_レ叶、天子思宗皇帝も三月十九日ニ樓仙栢山といふ所ニ而自縊て崩御成、大明國大ニ亂しかば、南京の守護史可法ハ御一家福王を取奉り、南京へ入奉り、天子と

仰ギ、遼東の吳三桂ハ韃靼國ヘ行、十萬の加勢を請、山海關より攻入ル、四月廿九日ニ北京を取復ス、李自成ハ打負て陝西ヘ落行を、吳三桂追討ニ討行、其跡ニ而韃靼の加勢逆心し、北京の都を攻取て大清の世と改め、韃靼の數萬南京ヘ攻入、福王を生捕、史可法は討死、大明彌亂ければ、福建の鄭芝龍ハ天子の御一門唐王を天子ニ取立奉り、韃靼と合戰勝負あり、され共大敵故、鄭芝龍が下司の崔芝といふもの計ニ而、商人の林高といふものを使ニて長崎迄差越、日本の加勢を乞候ヘ共、大猷院様虚實を御疑被成御許容なし、翌年正保二年ニ、鄭芝龍書簡を日本ヘ指越、天子唐王の勅使ニ黃真卿といふ官人貢物を爲持、大明國を出けるに、風惡船破損する故に、小船ニ而貢物并鄭芝龍が書簡を長崎迄指越、段々の道理を述、様々^{其外諸役人等イ}と日本の加勢を乞、是ニより大猷院様も御三人并老中^{家イ}之外様大名被^{家イ}召寄、大明國よりの旨を被^{家イ}仰聞、御相談區々也、御無用と申族もあり、亦異國より日本ヘ加勢を乞事本朝の面目なれば、御加勢尤といふもあり、御三人^{家イ}ヘ御相談之時、賴宣君被^{家イ}仰上候ハ、中華より加勢を乞事本朝の御威勢四海の光輝なれば、諸浪人を被^{家イ}集候ハ、數

十萬可^レ有^レ之候哉、それに西國中國の大名小名も指加可^レ然候、さて公方御身寄ニ而ハ、西方ニハ我等壹人ニ而御座候間、惣大將ニ被^{家イ}仰付^{家イ}候は、大慶不可^レ過^レ之可^レ奉^レ存候、大軍を引卒し、大明ヘ攻入、日本の手並を見せ可^レ申候と御老中迄御願望の事被^{家イ}仰入、扨紀州ヘも陣用意被^{家イ}仰越、眞鍋眞入齋宗白ハ、以前朝鮮征伐之時、大明勢と度々合戰せし覺有れば、御供ハ可^レ被^{家イ}召連^{家イ}との事也、眞入ハ秀吉公の御代ニ朝鮮國ヘ渡り、數年大明勢と戰、戸を異國ニ不^レ留殘念存候處ニ、珍敷御沙汰を承候、年寄候得共、御出馬の御供致し、老の波を起し、異國ニて討死可^レ仕事老後の思出でニ御座候と申上しかば、賴宣君御機嫌也、然共御加勢之事止候也、

左京大夫賴純主ヘ御讓物之事

御二男左京大夫賴純主ヘ、天下の名物、大坂肩衝寧一山の一行物の御懸ケ物、其外武器には竹中が一之谷の冑を始て、名物共多ク御讓被^{家イ}成候、渡部若狹守直綱申上候ハ、權現様より被^{家イ}爲進候天下の名物共は、御嫡家ヘ御讓り被^{家イ}成事と世にも申候由尤也批判と存候、御庶子ニ御重寶御持武器ハ各別、茶の湯の道具ハ

御出シ可_レ被_レ成御客無_ニ御座_一候と申上ル、賴宣君御笑被_レ成、左京小身なれば已來中納言殿之金銀之合力無心ども可_レ有_レ之候、其時只所望難_レ成、此刃物か道具を質物ニ入、金銀借り候ハ、道具ハ惣領家へ戻り、左京手前の足りニ可_レ成と思ひ、不相應之道具なれ共讓_リ候と被_レ仰、御笑被_レ成共、是も御尤なる事とぞ、

遠山何某が事

遠山の某ハ、筋目と申、才智と申、何役ニ被_ニ仰付_一候も器量有人品也、蘆川十休取成を申上ル、賴宣君御答なし、三度目ニ被_レ仰候、我前ニ出て物いふほどの輩遠山を譽ぬはなし、皆々能奉公人と譽_ルメ才休_イにて心得候へ、世の人ニ偏_イニ譽らるゝ人は、一癖有ものか大惡人なり、釋迦_イも老子孔子さへ、世人ニ或ハ被_レ譽或ハ被_レ惡、世間一偏ニ被_レ譽遠山は、輕薄諂の大徒もの也、忠義の人ニあらず、或ハそしられ、或ハ被_レ譽ニよき者有者也、孔子の衆の惡_レ之必察_レ焉、衆の好_レ之必察_レ焉、或ハ其衆阿黨比周して好する事有、或は其人獨立て不祥にして惡まるゝ事有、毀譽共ニ不可_レ不_レ察と宣へば、人に被_レ誑て能人と思ひ惡人と

不可_レ思、是大將の心を可_レ附處也、

公方家御茶會の事

公方大猷院様之御時、御三家を御召、御茶の會有、上意ニハ、各天下の守りニて被_レ居候故、箇様に泰平の代ニ而賴母敷思召よし被_レ仰ければ、尾張義直卿御返事ニ、我之儀ハ御草履を取候ても御奉公無_ニと志候と御申候、賴宣卿御申上候ハ、我等儀ハ何様ニも御草履ヲ取御奉公ハ成申間敷候、何事ニ而も出來候ハ、一方の御固ニて人數を下知し、一廉の御奉公ハ可_ニ申上_一候と被_ニ仰上_一ければ、公方様にも御感心の御色顯れ、天下の稱美となり、問人毎ニ賴宣君を恐れぬハなしとぞ、

紀州入口多き事

或人紀州ハ口々多して、此口へ手當の人數遣してハ、御人數不足と申上候得者、賴宣君御笑被_レ成、我武威盛ならば百口とても不_レ苦、敵恐れて紀州へ手出し不_レ致、我威衰候ハ、一口ニても防戰なるまじと、國中萬人を和服させ、武威を丈夫ニするが、要害の第一なりと被_ニ仰遣_一候、

年頭の御禮元日一等に御請被_レ成候事

或時御病氣ニテ、年頭の御禮を一度ニ御請難_レ被_レ成、長袴ハ元日、半袴ハ二日に御請被_レ成可_レ然と年寄中申上候ニ、賴宣君被_レ仰候ハ、士ニ上下の差別わけ隔不_レ可_レ致、長袴半袴を元日皆出仕させ、一人宛の禮を請候事病後難_レ叶、惣禮請候と諸士ニ申聞せ候へとて、上下不_レ殘元日出仕せしに、則御出有て、中之間より表迄御廻り、禮を御請被_レ成候故、半袴の輩忝がりけるとぞ、

落合十郎兵衛三月木練の大柿を獻せし事

惣而御吟味強有_レ之ハ、落合十郎兵衛伊政も秋より大和柿をたくはへ、納樣を鍛練し、冬を過し春ニ到て唯八九月の柿のごとく新敷有けるを臺ニつみ、粉川の御屋敷へ持參し、仲間の桑山二郎右衛門亮政、一説澁谷市右衛門とを以進上せし所ニ、賴宣君御覽成一切御稱美なし、十郎兵衛などは番頭を申付れば、軍用の品ニハ心を盡し、組子をなづけ、人馬を持詰候而、唯今にも急用ニ立ル心がけ、偕ハ國境へ人數を可_レ出道筋、諸事萬端武道を心がけてこそ可_レ有ニ、此柿ニ心を盡し我にくれんと精を出事なへの用ぞ、箇樣之事ハ代官さては庄屋などの致候事也、攀遅が稼を學_{稼は耕}作之事、と問たれ

ば、孔子の老圃年寄の百姓農人之事に不_レ如と耻しめ、小人也と禁給ひき、我家番頭をもするもの、心懸る所違たりと散々御叱、此柿を披露仕たる桑山も同穴の狐也嗜候へと御意ニ而、桑山落合赤面して罷立けるとぞ、

御家中の士懸物調候ニ付御吟味の事

三百石取士が、代金三兩ニテ懸物を買求けるを御聞被_レ成、無用の費を致候とて、村上與兵衛通幸を召、此段目付共申渡吟味せよと被_レ仰出、與兵衛ハ御目付中を呼、此御意ニテ御吟味ニ而書付て被_レ申上に、但其書付我等ハ受取指上ゲ間敷といふ、御目付穿鑿するに必定也、名前亦かけ物の様子も書上ル、賴宣君重而人馬兵具武道の嗜ハ有か無かと御尋、御目付致_レ吟味候得者、馬も常よりハ能馬、物具下人丈夫ニ持、武道の心懸よき事不_レ大形、此儀を書付指上候得者、賴宣君御顔色やはらぎ、武道の心がけさへ有れば、其上に懸物茶の湯の慰もにくからぬ事也、亦他國の客も來ルに、床になにもかけず、縦懸るとても三社の託宣も懸られぬ物也、一ツは家中の外聞なれば、墨跡繪賛の物も求たるも不_レ苦、乍_レ去過ぬ様に〜と御意ニ而事濟候也、

上ケ米の事

御勝手不如意ニ而、家中知行四つ物成の上を御借り被レ成候時、萬事儉約可レ仕と被レ仰出レ候得共、人馬之減少之沙汰なし、諸士迷惑仕候間、人馬減少之義被レ仰付レ候得と奉行申上ル、賴宣君被レ仰ハ、人馬ハ其儘持詰さすべし、人馬を減ジ候もの出目ニ而勝手之便ニすれば尤なれ共、人馬をへらさせ候ハ、その出目ニ而己が内證の奢を向々ニ可レ仕事鏡に移が如し、四つ物成の上を指上人馬を持候得者、奢度共不ニ罷成一事也と被レ仰候、三年目ニ御赦免可レ有と被レ仰出レ候時、今二年其儘被レ召上レ候ハ、御勝手ニ能候と奉行申上ル、御意ニハ三年と定たる所少シも不レ可レ違、其子細ハ明日ニも合戦ニ及時、士足輕迄も一命を輕じ働候へ、手柄次第に御加恩御褒美可レ有之下知する、時ニ諸人承り、上ケ米三年ニ而免すべしとの約束も僞なれば亦是も僞ならんと諸人存候而ハ、下知も不レ聞一大事を取失ふ所也、僞をいへば天道にそむく、春夏秋冬の節紅花黄葉の次第天に僞りなし、天下ニ生るゝ人倫、なんぞ天道にそむかんと被レ仰、上ケ米御免有けるとぞ、

御參勤前に神社佛閣へ御參詣被レ成候事

江戸御參勤にて御立可レ被レ成前日ニ、栗林日前宮伊太祈曾紀三井寺玉津嶋矢の宮岡の宮へ御參詣有ける路次ニ而、御供ニ參候吉見喜左衛門申上ルハ、殿様御信心者ニ而被レ成ニ御座レ候と下々申候、明日江戸へ御立被レ成候に、方々佛神へ御參詣被レ成候事、さて御信心者哉と我々も存候と申上ル、御意ニハ、汝等江戸へ下ル時、諸人ニ暇乞ニハ不レ廻かと御尋、吉見承り、如何にも暇乞ニ廻り候と申上ル、御意ニハ、我今日城下の佛神へ廻ルも同事也、國の守護は此賴宣ニ上より被レ仰付、士農工商并僧俗共ニ勸善懲惡の仕置を致し國家安全を專とす、社稷を守ル國中の神佛ハ、亦國土を守り給ふ道なれば、賴宣ハ公方へ參勤之爲、明日江戸へ罷立候留守中、諸寺諸社の佛神達ニ、國中ニ風雨水火之災無レ之様ニ守り給へ、來年罷登可レ申候御暇乞ニ參詣仕候との事也、信心ニ而可レ有様なしと被レ仰ける、

和歌の浦御遊宴の事

紀州新吹上の砂山を平し、平地となし、諸士之屋敷割を被レ仰付ける、初御二男左京大夫賴純を御同道ニ

而、和歌浦へ御越之序ニ、新吹上屋敷地を御見分あり、高松へ取付、松原邊ニ御駕を被_レ立、屋鋪割御見分有、其日和歌浦ニ而終日御遊宴之筈ニ而、其日晝前ニ御女中十餘人御跡より可_レ參旨被_ニ仰置_一ける、其朝はやく御出ニ而、左京殿も御遲參ニて、御跡より急ギ御越有、唯今眞鍋五郎右衛門屋鋪前へ御出候處ニ、奥方支配之役人承り違、御女中同道ニ而關戸路へ懸り、西之方を和歌の方へ通ル時、賴宣君御覽被_レ成、御機嫌不_レ宣して、左京大夫殿ニハ夫より御歸可_レ有との御使ニ、望月治左衛門を召の御馬ニ乗せ、左京大夫殿之此方へ向て御越候を留ニ被_レ遣候、左京大夫殿頓智發明の御事故、西之海道の女中乗物を御見付被_レ成、はや御遠慮ニ而御駕を止御思案有ル所ニ、賴宣君御駕前より望月が早馬ニ而乗來を御覽被_レ成、はや御推察有て跡へ引返し御歸宅有ける、其所へ望月乗付御歸被_レ成候得との御意と申上ル、左京殿御歸宅の所ニ望月參り、御歸被_レ成候へとの御意ハ、和歌へ御供被_レ成よとの事と思召、亦引返し此方へおもむかせ給ふ、賴宣君御覽被_レ成、始左京ニ夫より歸宅せよとの口上を左京が心得て歸る所へ申聞ざる故、此方へ歸れとの

事かとして、亦此方へ參候、あれ止候へと御意ニ付、朝倉十左衛門丹羽長兵衛、彼是三人追々ニ留ニ被_レ遣候故、左京殿ニハ亦和歌山の方へ御歸也、其時望月を御叱被_レ成、此方へ左京ニ不_レ可_レ參、夫より歸れとの使を請取、左京が歸ル所へ申渡故、左京聞違ひ、亦此方へ參たる也、望月めあれ程機轉なく鈍ニハ生れ付たるらん、夫ニ付使番ハ大事のもの也、昔より天下の將軍も事を闕は使番也と申傳へしは尤也、一往二往ニ而使者之役ハ難ニ申付と再三被_レ仰けり、遊山翫水の中にも、文武の道暫も忘給ふなしと聞人感じける、

紀侯言行錄中

日光御社參野陣小屋取りの事

或年公方家日光山へ御參宮被_レ成けるに、御三家不_レ殘御供也、賴宣君ハ大桑ニ御宿陣也、宿中狹して野陣ニ小屋を御懸ケ紀州の惣人數宿せし時、水野監物忠吉乘廻し、諸大名之小屋を見廻り歸て、日光山之御宿坊ニ而申けるハ、年來奥深ク紀州を存候に、大桑の小屋取を見て、紀州ハ人なしと初而見下ゲ候、小屋取の法に違たる事不案内成事共也と嘲笑、土屋忠兵衛聞て後日此段を加納五郎左衛門直恒ニ語る、直恒是を申上候得者、賴宣君からくと御笑被_レ成、監物甲州流之軍法を習、種々の口才を申けるよな、監物己が小家中の小屋取と、我五十萬餘之小屋取とハ天地の違也、井の内の蛙管ニ而天を伺ふのたとへなりと大ニ笑給ひけり、此旨を忠兵衛聞て、亦監物に申ければ、監物還て耻けるとぞ、

湯崎浦にて鯨船の事

田邊湯崎の御構の前に、四五百艘の鯨船を集られ、其

組其手の相印を定め、小旗を銘々思々に拵、貝を以相圖を定、日々夜々に鯨をみる度に船をはせ引、さながら船軍ニ異ならず、此段詳に江戸へ聞へ、御老中何れも紀州御城付に向て、大納言殿ニ者湯崎と云所ニ而船軍の鍛練ならしを仕給ふと上聞ニ達し候、此事如何と被_レ相尋、御城付早速江戸御年寄御用人ニ達し、二ツ印御飛脚之湯崎へ申來りければ、早速賴宣君御披見ニ入、此事如何可_レ有と有、三浦長門守爲時渡部若狹守直綱いづれも一同ニ、とかく鯨船の御遊興を御停止御尤と申上ル、賴宣君仰ニ者、此度江戸の注進にて、此遊びを停止せば、是船軍の稽古ならしと可_レ謂、不_レ停して船遊して亦咎めあらば、舟軍の稽古ニハ非ずと云わけして濟事也、少も不_レ可_レ止と被_レ仰ける所へ、和歌山より加納五郎左衛門參著せしかば、江戸の旨を被_レ仰聞けるニ、鯨つきの御舟遊び曾而御止不_レ可_レ有候、御止あらば船軍之御ならしを被_レ成たるに可_レ成、不_レ相替、前々通ニ可_レ被_レ成と申候へバ、賴宣君の思召と一途にて、彌鯨船之遊び有けれ共、公儀より別條もなかりける、

賴宣君御判ト者占ひし事

山崎之普明院とて、曆道之名師亦判の占の妙を得たるもの有、紀州より御使ニ京へ參ルものニ、御家老番頭の判形、左ニ賴宣君の御判を取ませて持せ遣し見せけるニ、普明院曰、此判ハ出家ならば大僧正か國師判、俗ならば貴人高位の判也、但其本人の居たる直判ニあらず、賤敷もの、寫シ居たる判也、然共ことの外ニ貧なる判也と占、彼御使京より歸り、此段申上ルニ、殿之御判形を貧なる判と占たるは占の相違也と笑ふ、賴宣君のいはく、占は上手也、此判は近習小野木長十郎ニ寫させ直の判にてなし、亦貧なる判と占ふ事猶以占の當りたる也、我身東照宮之御子ニ而、數箇國を可ニ領知一身が、僅ニ五拾萬石餘不足の祿ニ而居るは貧なる所也、普明院ハ占の名人哉と被レ仰ければ、聞人感じけり、

赤坂御中屋敷水道埋樋の事

江戸之赤坂中屋敷へ玉川の水を埋、樋ニ而取廻されけるニ、水おもふ様ニ不レ來、奉行役人色々仕けれ共快水不レ來けるを、賴宣君聞召、御好ニ而桶を曲尺ニ而餘して續せられければ、水ことの外來りける、其圖ニ、

樋

安藤帶刀直治が孫千福丸が事

安藤飛驒守直治ハ、父帶刀直次ニ無レ替名臣なりしニ、不幸にてはやく病死いたし、其子千福丸ハ、幼少ニ而有しが、漸成長し、御仕置をも見習候へと有ける砌、御近習の面々を召、千福が素性ハ、一手の大將にもなり、國家の仕置も父祖の跡を續べきものと世上ニ而ハ沙汰するか亦何と申候と御尋有、何も千福生れ立よく、一廉御用に可レ立ものと取沙汰仕候と申上ル、其時賴宣君御手を合られ、天を御拜有、さて〳〵我冥加ニ叶、千福左様ニ生立候はん、家老の子共愚ニては、我手足を失ひたるも同前也、千福が生立能ハ我仕合也と御機嫌不レ少候、

宇治の御堀端高塘の事

宇治の元寺町の御厩前より小笠原與左衛門屋敷迄の土堤ニ並木の松あり、元は淺野幸長取立られしを、其

此所ニ而五六寸餘シ横、故ニ水せきかへり、殊之外流れ來ル也、是水ニ勢を付たるものなり、

後御入國已後彌高ク被_レ築上、御垣を被_レ仰付、犬をも土手へ不_レ上様ニ被_レ仰付、此土手には賴宣君御工夫有し所也、江戸にて和歌山の繪圖を立花左近宗茂眞田伊豆守信幸貳人老大將ニ御見せ被_レ成、要害の御異見御尋有ければ、兩大將共ニ此堀端ニハ土手を被_レ成候と、被_レ申上ければ、賴宣君聞召、我工夫を仕當たりと御満足有し也、是を聞置たる歷々の老人ハ語ける、近年ハ町人共此堤を被_レ下候ハ、堀平グ其跡を町屋ニいたし、借宅ニ可_レ仕と願を上しが、誰か昔之事を聞置たる老人きゝて、此土手ハわけ有不_レ可_レ崩とて其事止けるとぞ、然其近年ハ竹垣をも取、堤の上幾筋も道付、川取の通り道ニなり、堤も次第ニ崩けるをみて、昔之事を知たる老人ハ、時うつり事替り行事を涙をながしなげきけるとぞ、

賴宣君御幼年より御眼力勝れ給事

賴宣君御幼年より御眼力世に勝れ、一度御覽候人をば、五年十年二十年後ニも御覺被_レ成候輩紀州ニ而も他國ニても幾人といふ數なし、また問者忍びの輩を能御見知わけ被_レ成、路次ニ而も亦御能見物數千人の中ニ而も御見咎被_レ成御穿鑒有ニ、果して御國を伺忍

びもの聞の輩也、亦御女中を京都より被_レ召抱候ニ、必諸大名へ奉公に行て暇出戻りたる女を撰て被_レ召抱、國々の様躰を御尋問被_レ成候、二六時中御心を被_レ附、一度公方家へ大節之御奉公を被_レ成、御忠功を被_レ勵との忠義之御心がけ懈る事なかりし也、

賴宣君御家中諸士へ恩惠深き事

此君平生人を懷シ事を第一ニ思召、縦バ五節句朔望の出仕日ニも、先御近習之人を廻し、御廣間其外の御座敷大勢出仕充滿したる末座人陰に、誰々詰居候と有事を御聞、さて御出被_レ成、朝ニ諸人へ御對顔、其時分相應之御意有、多勢群集之中、末座人の陰ニ居たるもの、名を御呼、其身相應之御意有之ニより、末々の輩者御目見仕候事を悦、人陰居候而も殿様ニハよく御覽被_レ成候と心得出仕之日ニハ貴賤群集をなす、奥方ニ被_レ成御座候時、表使の女中衆表よりの左右イホを請候、御士衆皆出仕ニ而候と申上ル、賴宣君聞召、御袴を召御出被_レ成御目見を請給ふ、或時女中衆表へ士共出仕致シ居と申上ル、殊之外御叱被_レ成、果報の善惡ニ而大身小身となり、主となり家人となれり、何も名有ル歷々の士、源平藤橘を始、氏姓正敷輩也、

向後御士衆と可^レ申候御教被^レ成けるとぞ、

町野宇右衛門が事

町野宇右衛門は、肥後國主佐々陸奥守成政が家來也、
天正十五年八月、肥後の山鹿の有動大隅守と隈府の
隈部但馬守一揆を起し、國中大半一味致シ大亂、成政
出馬し合戰止時なし、就中八月十二日ニ成政出陣の
留守ニ而、阿蘇の大宮司一門滿永金牛田尻長野下向
◎下向二字異本作下田
相片志田田宮津森内野、小嶋ニ而四萬計一撥起し、成政居
城隈本へ取懸、外構三之丸二之丸迄攻取候、十二日の
曙より未之刻迄六度の鎧御座候、道家次右衛門、遠藤
助右衛門、阿波鳴戸之助、伊藤平樂寺、岡田庄五郎、
織田信雄卿之家臣、尾州星崎城主岡田長門守舍弟ニ
而、後將監と號當時江戸御幕下岡田將監祖父也、大木織部、小
谷又右衛門、宇佐美民部等、右之鎧を仕候ニ付、成政
大ニ褒美、感狀をくれ申候、右町野宇右衛門ハ、其時
十五歳ニテ小性なりしが、道家と宇佐美が鎧下ニ而
もき付の首貳ツ討取候、成政殊之外感じ申候、成政切
腹の後、木村伊勢守所へ小性ニ而奉公、伊勢守寵愛不
淺、天正十八年之秋、伊勢守六十一萬石ニ而奥州葛
西へ入部之處ニ、佐沼より一揆起り、國中大亂之砌、
町野宇右衛門十八歳ニ而中々無ニ比類一働也、翌年の

秋九の戸城攻之砌ニ、蒲生氏郷于時會津宰相と號、手元ニ而亦宇
右衛門強き働有、伊勢守御勘當知行被^レ召上^ニ候砌、宇
右衛門浪人、方々に渡り奉公して主人ニ被^レ構、久々
浪人ニ而在京、寛永の初主人の構詫言濟、紀州を望、
眞鍋五郎右衛門貞成方へ來り、知行七百石ニ、鐵炮足
輕三十挺ニて被^レ召出候一へと、眞鍋肝煎ニ而吉川甚
五兵衛を以申上ル、賴宣君被^レ聞召、内々聞及たる兵
也、早々可^レ被^レ召抱一と有しを、安藤帶刀直次彦坂九
兵衛光正申候ハ、御家之御作法ニて、初より物頭ニハ
不^レ被^レ仰付一候間、先七百石ニ而出、以來其足輕御預
ケ可^レ被^レ成と被^レ申候、宇右衛門ハ正直成武士ニて、
眞鍋に向て、只今ハ松原隱岐守定勝藤堂大學頭高次
よりも可^レ被^レ召抱一肝煎人御座候、され共御家柄を大
望ニ存參り候間、何とぞ直ニ足輕を預り申度と有ル
ニ付、眞鍋度々帶刀九兵衛方へ參相談有、此事ニて手
間取日數經ル中ニ、松平土佐守忠豐家ニ居ル樫井内
藏允と、備前の新太郎光政之家人井尻是非之助方よ
り、眞鍋方へ書狀を越、町野宇右衛門が、奥州妙の城
九之戸ニ而の働を委細書狀ニ而申越候、其狀を眞鍋
五郎右衛門則御前へ指上ル、賴宣君何とぞ町野を

可_レ被_二召抱_一と有共、足輕之事埒不明、宇右衛門申候ハ、たとへ御家先約ニても、我等むねニ不_レ合候得者、只今御家へハ不_レ出候、七百石ニ足輕三十人ニて候へバ、御家へ罷出候、無_レ左候へバ、不_二罷成_一とて、宇右衛門ハ紀州を引拂、大坂まで出ル、二三日過て藤堂大學へ千石ニ足輕三十人ニ而有付由、宇右衛門狀を眞鍋方へ越ス、一年計過て、宇右衛門が武功之證據狀檉井内藏允井尻是非之助方より越候を、眞鍋方へもらひニ越申候、京極若狹守忠高之内ニ而、關澤半左衛門も宇右衛門が働の證文を和州新條の桑山左衛門佐家老足達兵庫方迄越候を、足達方より紀州の小笠原治右衛門方迄届候て、治右衛門方より眞鍋方へ届ル、是をも宇右衛門承及、津より眞鍋方へもらひに越候、實者藤堂大學内意也、町野が飛脚をば眞鍋方ニ置、蘆川甚五兵衛方へ町野に働の證文共取ニ越候事三通共ニ、御返し可_レ給候、宇右衛門方へ遣シ可_レ申と申遣候、甚五兵衛則其段達御尋候へバ、賴宣君御意には、町野が事抱度おもひつれ共、足輕之事ニて事不_レ調、近頃殘多思召候、御一代之内ニハ、何とぞ町野を御家ニ可_レ被_二召出_一御意願ニ候間、其時之爲に三通之證文ハ懸

硯ニ納置候、眞鍋方へ返シ遣し候事ハ被_レ成間敷と被_レ仰候、甚五兵衛も名士勇兵を御好被_レ成候御心入を奉_レ感、落涙ニ及、則眞鍋ニ申聞候得者、眞鍋も感申候、左候ハ、其趣を委細ニ書、我等名付ニして狀を給り候へ、其狀を町野が方へ可_レ遣候有、甚五兵衛思案して、其段も私ニ難_レ成とて御内意を伺事濟候故、右之御意之わけを狀ニ認、眞鍋宛所名前にて、甚五兵衛相渡候付、其狀を飛脚ニ渡し、津へ戻し候、宇右衛門も賴宣君の御意之忝さニ不_レ覺して涙ニむせび、大學頭へ甚五兵衛狀を出し候へば、大學披見して、檉井井尻關澤が證文も不_レ入、此蘆川が書狀、紀伊大納言殿の御詞ハ、町野武邊之第一之規模也と被_レ申て、大學ハ家老藤堂采女ニ向て、紀伊國殿こは物ニて候、何としても名大將也、隣國なれば、明日ニも事出來候ハ、むつかしき人也と被_レ申しけり、

山中作右衛門が事

秀吉公龍臣、山中
城守長俊が末子、

或時御登城之砌、山中作右衛門見ニ出罷在候を御通被_レ成、山中と被_レ召候を、作右衛門ハ、常の御詞と存候而、頭をさげ御禮致候へ者、式臺之所より亦名を御呼參り候へと御意を御小性申

次、作右衛門其儘座を立て小走り致し、追付申候へば、
はや御駕ニ召、御門の方へ御出ニ付、作右衛門跳ニ而
御白砂へ飛下り、御駕へ追付候へ者、御顔を被_レ出、作
右衛門が脇指計ニて懸付候を御覽被_レ成、山中刀を指
て參られと被_レ仰候、作右衛門かけ戻りながら、仇持
候との御心付ニて刀を指參り候へと難_レ有御意と申
ながら刀取て指、清水谷ニて追付、麴町貳丁目迄御駕
ニ附參り、夫より御暇被_レ下、御屋敷へ歸候、若侍五人
御附候、戻し被_レ成候其内、御上屋敷前ニ而山中家人
七人計持鍵共ニかけ着、夫より五人之衆を御戻シ、作
右衛門ハ御中屋敷へ歸り候、箇様ニ御心付たる故、諸
人の心懸も尤深し、其後作右衛門ニ御尋ハ、汝が古主
織田常眞信長公ニ男ニ而、正二位内大臣信雄公也、祇園の祭見物、町屋棧敷
の向に、尾張水戸我等も棧敷取見物せしニ、佐々木梅
心生駒長兵衛常眞の供ニ而近從せし作法中々見事
也、ことに十八九歳の小性生駒主水也が常眞の刀を持、左
の後に詰たりしが、其刀の持様さてく見事成故、後
後も尾張殿とハ申出したりしと御意也、

其刀の持様如何様ニて御座候哉奉_レ伺候得と、皆々
松下佐五之丞ニ申けれ共、佐五之丞遠慮せしか不

奉_レ伺殘多事也、

千宗左が事

此君御智勇飽迄長_ジさせ給ふニより、御一言ニ而さ
へ人の心を感動させ、忝心入骨髓ニ徹する様ニ有し
事度々也、或時水戸黃門頼房卿尾張亞相光友卿御同
道ニ而、不圖御見廻、緩々と御咄之次ニ而、御兩殿被_レ
仰候ハ、松の木臺は天下の名物ニて、權現様より紀
州は御直ニ御拜領と聞及候、遂ニ見不_レ申候間、一覽
御所望有、頼宣君安き事と御請、大事之道具座上ニ而
見せ候半ハ不骨ニ候間、茶の湯ニ而可_レ懸_ニ御目と
て、俄ニ御書院ニ而御茶の會有り、千宗左罷出、松の
木臺ニて御茶を點じ候、御會濟みて頼宣君被_レ仰候
は、此茶道ハ天下中興之名人千利久が曾孫ニて、名を
バ千宗左と申、勿論茶道の達人ニて候、御兩所ニも御
見知給はり候へ、茶道ニ而ハ天下の名家也と被_レ仰候
得者、水戸尾張御兩殿ニも御氣色あらたまり、扨々及
_レ承候、如_レ仰茶道にてハ天下無雙の名家ニて候、始而
對面本望之由御挨拶、宗左も一座の面目忝次第存候
ニ餘り、涙を押かね退出仕候、亦岩手ハ御越之砌、去
若者御供ニ而御駕之先へ立候、脚半草鞋のはき様惡

ク御駕の内より御覽御笑被_レ成候得者、吉見喜左衛門聲をかけ、脚半草鞋のはき様惡_ク候、不心懸なる次第ニ候と叱ければ、賴宣君御氣色替り、やあ喜左衛門、あのもの、先祖代々城主大身也き、其子孫ニて草鞋步行立の奉公仕たる事なければ、不調法成筈也、乍去大將も下り立て下知する事有れば、草鞋をはきつけたるがよしと被_レ仰ければ、彼若者忝事ニ身に餘り、感涙ニむせびけるとかや、假初ニも人をなつけ思付様ニ被_レ成かけゝる也、二代目の菅沼九兵衛其時之御膳番ニて、御駕の際ニ御供して、此御意を聞て、後後迄も物語せし也、九兵衛其時ハ、喜右衛門と申たりし時也、

國主たる君他方にて飲食心得有るべき事

國主の身ニてハ、一門兄弟の方ニても、むさと料理を食シ、湯茶を不可_レ飲、兄弟の中ニ而も毒を飼ふ事有、必々其用心第一也、兄と弟と母別なれば、從弟は兄ニ毒害の心はなけれ共、弟の母の所爲ニて毒害する事あり、朝晩にも其用心肝要也、弟のかたへ振廻杯ニ行ても、猶以毒の氣遣肝要也、女は貴賤共ニ拙ものニて、後の吟味なく、毒を飼ふもの也、心附べき第一也、此

故に國主は外ニ而ハ不及申、兄弟の方ニ而も無差と飲食不可_レ致、大將の一大事の心掛也と度々御意也、

軍法韜の事

或時軍法者脇指の韜ニ引出シを仕込、壹步判の金子を並入たるを、軍法韜と名付て指上たり、賴宣君御覽被_レ成、扨々重寶成道具也、秘藏之事なりとて御納被_レ成候、亦炬火を幾品もくゝり指上ル族も有、いづれも御賞翫被_レ成候故、其指上候輩ハ、君の御信向御用と心得たり、或時相公光貞君ハ軍法韜炬火を御見せ被_レ成候而御笑被_レ成、一國の大將の身ニ而、脇指の韜にからくり入たる金壹步判が用ニ可_レ立か、是ハ小身者步行者杯の可_レ然もの也、炬火も時ニ者可_レ寄成共、義經の三草山を取越ける如く、道中の在家共ニ火をかけて、其明ニて大軍を推たる大炬火に勝ル物なし、軍法韜亦炬火杯我が見て役ニ不_レ立といへば、重而兵器を拵て指上ル者なし、重寶ニ思顏ニ而居る事大將の心得也と被_レ仰聞_ニ候也、惣而道具ニ不_レ寄、主人の心ニ叶様ニ倣人ハ致し、氣ニ入様ニしてだます物也、一人言亦致シ候事を實と不_レ可_レ信用、外の沙汰を聞合、念を入、たまされぬ覺悟專一也と御意也、

由井正雪叛逆の事附紀伊侯の御疑晴るゝ事

慶安四年四月、公方大猷院様御他界之七月、於江戶浪人由井正雪叛逆を企、紀伊大納言卿の仰と稱シ、御判形を似せ、謀書を認つゝ、浪人丸橋忠彌、芝原又左衛門以下數百人徒黨し、御鐵炮の藥藏奉行河原十兵衛是ニ組し、其節埋火ニ而遠より火を指、徒黨人ハ船ニ而沖へ推出し、鐵炮の藥火を入て、江戸中を一炬に焦土となさんと工み候處ニ、徒黨の中ニ林理左衛門、奥村八左衛門、同七郎左衛門心替致シ、松平伊豆守信綱、大澤右近大夫基清へ詔へ、逆心露顯し、丸橋芝原又左衛門を始、徒黨等大形彼ニ召捕、大將由井正雪駿府宮の町ニて、櫻屋太郎右衛門方ニて自害しけり、扨紀伊大納言卿の御直判の御書數通召捕浪人共方より公儀へ出ければ、御老中いづれも是ハ一大事の起けるとて、皆晝夜の相談密談有て、兎角紀伊國殿を御城へ奉レ呼、此狀共を見せ參せ候ハ、實告知可レ申候間、其時様子惡ハ直ニ御城ニ而紀伊國殿を可レ奉レ捕として、屈強の兵共數拾人御城の便宜之所ニ隱置、御登城を待所ニ、尾張中納言光友卿水戸中納言頼房卿御登城有、御老中則紀伊國殿隱謀ニ而、浪人共ニ被レ遣候直

判之狀數通を懸ニ御目ニ如何可レ有とかたづを吞で被ニ申達けるに、尾張殿ニハ、何條紀伊國殿大事を思立ニ、浪人の力を可レ被レ頼哉、是則謀書ニて可レ有と御申、水戸殿ニも此狀ハ必定謀書ニ而可レ有之と御申候へ共、上下只思案ニ不能、手ニ汗をにぎる、頼宣君御登城被レ成、御着座有しかバ、井伊掃部頭直孝、酒井讃岐守忠勝、松平伊豆守信綱、此度諸浪人叛逆隱謀之次第申達候處ニ、阿部豐後守忠秋伴の狀數通を披露しける、大納言殿判形顯然たり、頼宣君彼狀を不レ殘御披見有て、御顔色打解被レ仰候ハ、扨々目出度御事ニて御座候、最早御氣遣無之候、其子細ハ彼徒黨人等外様之大名を判を似せ謀書致候ハ、三代の御恩を忘れ、若氣違候而逆心を企て候かと御疑も可レ有御座候歟、我等判を似せ、逆心とたばかり候上ハ、上の御氣遣ハ少も無ニ御座候、左候得者無事ニ事濟申候、御幼少之公方様ニ而、御疑も御座候ハ、私只今御國を指上ケ思召次第ニ可レ被レ成候、左候得者少も御氣遣無ニ御座候、扨々天下安全の基にて、めで度事と御喜悅之色見へ御挨拶被レ仰ければ、尾張水戸御兩殿も、御老中も一同に不レ覺感ジ被レ申候ハ、大納言殿

之忠義眞實を感じ、且ハ智勇剛強雄辨を譽ぬ者なし、古今絶類の名大將と上下舌を振ひける、讃岐守豊後

守伊豆守を始、如_レ仰紀伊様なにしに御叛逆之御企可_レ被_レ成哉、御判形を似せ候段一入重罪之輩ニて候、皆刑罰可_ニ申付_一と有し所ニ、頼宣君左候ハ、其中ニ慥ニ見ヘ候、年壯之者四五人ハ、被_ニ助置_一候得と被_レ仰、是ハ重而御吟味之御穿鑿之爲也、是ニ而天下之諸人彌紀伊殿之御智慧を感じける、御三人御退出被_レ成、御老中も皆御城中口より退出有、先ヘ井伊掃部頭、其次酒井讃岐守、阿部豊後守、松平伊豆守、同道ニ而被_レ出けるニ、酒井讃岐守ハ、跡より掃部殿ヘ、只今紀伊殿の挨拶御聞候哉と被_レ申ければ、掃部頭立留り振廻り、あれにてこわがる事ニ而候と被_レ申ける、此時之次第天下の貴賤上下、頼宣君を恐れ感せぬものばかりけり、

頼宣卿ハ、百姓町人出家山伏にも、内々ニ而御懇意を被_ニ成置_一、其輩國々ニ有しかバ、珍敷事をば必早ク御聞候、正雪隠謀之儀御判を謀書致候事も、駿州狐崎邊の眞言坊主に御懇之者有_レ之候間、七日前ニ吉見喜左衛門方ヘ參、渡邊若狹守直綱ニ直談ニ注進しける故、

前方ニ御聞被_レ成けるなり、一國の大將は、國々ニ箇様之者を拵置給ふべき事也、

頼宣君御書物日光御寶殿ヘ密ニ奉納被_レ成候事大猷院様御他界之砌、頼宣君ハ熊野之牛王之裏ニ起請文を御書、御血判被_レ成、黒塗之箱ニ納、日光御寶殿ヘ密ニ奉納、當公方様ヘ奉_レ對、未來ニ到而も不忠不義被_レ成間敷との御文言也、是を誰も知ものなし、萬治二年之春日光社僧中松平伊豆守信綱ヘ不圖物語有しかバ、上聞ニ達シ、御老中相談ニ而、日光より江戸ヘ取寄、箱より取出披露有ニ、公方様ヘ奉_レ對、不忠不義仕まじとの御契約御起請文なりければ、公方様者申ニ不_レ及、御老中もさて、大納言殿箇様之御心入ニて候を、今迄ハ疑申候而氣遣仕候き、古今無類の御忠節とて被_レ感、其年在江戸十年目ニ、御歸國の御暇被_レ遣ける也、

尾張殿病氣大事ニ付紀伊不時に參勤の事

大猷院様御代、慶安三年の春ハ、頼宣君御在國の所ニ、尾張大納言殿御氣色大事ニ及候由公儀よりも申來、内々ハ四月末ニ江戸御參勤之筈ニ而候得共、尾張殿御氣分無_ニ御心許_一ニ付、三月ニ御參勤有度と被_ニ仰

遣、尾張殿所勞も段々驗氣ニ候間、縦路次迄御出候共、紀州へ御歸、兼而被^レ仰出^レ候通、四月末ニ御參勤可^レ有との上意也、是ニより見付より御歸國可^レ有之所ニ、公方出頭人中根壹岐守自筆にて、早々江戸へ御下り可^レ被^レ成との公方様御内意也と申來り候、奉書之趣と壹岐守書中と各別之事故、御相談にて三日見付ニ御逗留也、色々御密談之所ニ、渡邊若狹守直綱申候ハ、是ハ御進退大事之儀ニ而候、上よりの御難題と存候、乍^レ去我等之存候ハ、中根壹岐守自筆の書面者内證也、奉公ハ天下の大法也奉書を不^レ用、内證ニ付御勤候ハ、御越度ニ可^レ被^レ成、只公道の奉書ニ任せ、先御歸被^レ成候得と有しかば、賴宣君尤と御同心ニ而、紀州へ御歸候段、御旗本ニ而も内々感じけるなり、後承候得者、此時壹岐守内意ニ而御隨ひ御參勤候は、必定御大事ニ可^レ成様子也とぞ、

酉年大火事之事附 御國米三千石獻上御願の事
明曆三年丁酉正月十八日より江戸大火、同十九日ニ御城炎上、嚴有院様ニも西之御丸へ御移被^レ成候刻、紀州より御扶持方米三千石船ニ而品川ニ着岸有^レ之候を、公方様へ當分御藏米焼失之間御獻上可^レ有旨渡

邊又右衛門を以、松平伊豆守迄御申上候、此時も紀伊國殿逆心ニ而、江戸放火と申沙汰專ニ而、公方家ニ而も御氣遣有^レ之候、右之糧米御獻上之儀御願被^レ仰上^{候ニ付上下}被^レ下安堵仕候由、

御炎上の節公方様御機嫌御伺ひの爲め御登城の事

右御城炎上之節、公方御機嫌御伺として、御中屋敷より御上屋敷へ御越候ニ、賴宣君御上下御襟綿常之通ニて御越、則尾張様へ御入候ニ、尾張中納言殿ニハ、御革羽織立付ニ而、御中門の内ニ床几ニ被^レ成^ニ御座、御鎧冑も笈ニ入候を中間ニ負せ、中々いかめしき御様子之所へ、賴宣君御上下襟綿ニ而御入候得者、殊之外ニ見へける、尾張様ニも公方様御機嫌伺可^レ被^レ成とて、賴宣君御同道ニ而御出候刻、賴宣君ハ尾張殿之御玄關ニ御上り、加納九十郎原作阿彌を召候而、御上下御小袖ぬかせられ候得バ、下に革羽織立付をめし御入候を、尾張御家中衆見被^レ申候而、さてもくくと感ぬ者なし、尾張様御同道ニ而中々焼申候を、尾張様ニも只事とは不^レ思召、御様子ニ而是ハ如何なる事ニ而候哉御疑敷御有様ニ而候、賴宣君ニハ御殿守を御

見上被_レ成、此殿守御作事ニ而最早久敷成候間、御立直し可_レ被_レ成時節也、炎上も不_レ苦と御物語ニ而、御門前へ御越候半と被_レ成候ニ、御堀端ニ公方之御物頭弓鐵炮ニ而立堅メ、御通りを推んとの様子に見へ候時、御先へ參り候原田市十郎牧野傳左衛門參樣不_レ宜とて大音ニ而御叱被_レ成候、御氣色御眼の光、あたりを拂てすさまじかりけるに、公儀の物頭衆も其御いきほひニ恐て、皆かしこまり、一言申ものなかりける、市十郎傳左衛門が御先へ立し躰あしくハ無_レ之候へども、公儀の物頭衆御兩殿を通シ申間敷躰を早々御見察候而、原田牧野を大音ニ而御叱候御勢を以、御威光を御見せ被_レ成、御通可_レ有御謀なりとかや、

御鷹野の事

寛永年中御在國の砌、松江西之庄へ御鷹野ニ御越候而御歸之節、湊の東半_{（東）}が前ニ御船着御上り被_レ成、其節六月時分春麥を筵ニ干ならべ、わづかニ通路明たるを御覽被_レ成、町人百姓の年中のかてを干たり、供之者共ニ踏べからすと再三御制被_レ成候故、御目付野本彌太夫已下其旨を下知して、一人置通し終り、少も麥を不_レ踏けれバ、町人百姓手を合、御慈悲御仁惠を

忝奉_レ存候、御目付共御仁惠ハ聞もたまれ申間敷とて、御城ニ御供いたし參候と、御家老列座之所ニ而、右之段々申述、百姓町人共忝がり候處を申達候得者、御家老何も奉_レ感候ニ、水野淡路守重良ハ更ニ不_レ感、今日殿之仕方我等ハ同心ニ不_レ存候、左樣之細かなる事御申候ニより、下々の奴原殿の内帛を見て馬鹿ニ致し候、國の主之御通りならバ、麥をも取入砂をもり水を洒馳走可_レ申處ニ、何ぞや麥を干候而、御通道の障りを成候事言語道斷也、夫を左樣ニ御痛候段、我等は尤とは不_レ存候、國の主の御慈悲ハ左樣之事ニ而不_レ可_レ有、夫ハ無差としたる御仕方也と被_レ申候を、御目付共則達ニ御耳ニ候、賴宣君被_レ聞召、淡路守が申所一々道理至極せりと被_レ仰、御僉儀有て夫より五日めに湊惣中水主米を御免被_レ成けり、君も君たり臣も臣たりと皆感じけるとぞ。

尾張大納言殿不快ニ付賴宣君御異見の事

寛永十一年甲戌の夏大猷院樣御上洛之節、尾張大納言殿へ被_レ仰候ハ、江戸へ歸候時、名護屋城ニ御立寄御休足可_レ被_レ成と被_レ仰出候、尾張樣御満足ニ而、俄ニ御成之御殿御作事夜を日ニ繼で被_レ仰付候、其時

江州佐和山城ニ而公方様思召ニ不^レ叶品有^レ之候而、御用心之御思案、於^ニ井伊掃部頭直孝^一も、既ニ身上滅却可^レ有様子之所ニ、直孝之仕形よく被^ニ思召^一、直事濟、か様之事ニ而公方家ニも御思案出來、京より江戸へ御歸候砌、最早名護屋へ御成被^レ成間敷かと被^ニ仰出^一、尾張様ニ者數日之御用意もいたづらニなり、天下の外聞を失ひ、尾張ハ立ぬと思詰給ふ、賴宣君ニ御私語ニは、此度之儀天下之外聞耻辱をかき候間、尾張ニ籠城いたし、安否を極め可^レ申と御申候、其年ハ尾張様御參府之筈、賴宣君ハ京より御歸國之筈なり、賴宣君ハ尾張殿御心底を被^ニ聞召^一、御涙をはらくと御流し、無^ニ勿躰^一思召立ニ而候、御自分と我等は天下之固メニ權現様御遺言被^レ成候ニ、左様之思召立中々道理ニそむき申候、名護屋御成之止候も、定而佐和山之事より御用心と聞へ候、只何とぞ江戸へ供奉被^レ成、可^レ爲^ニ御尤^一と御諫め被^レ成候得共、尾張様ニ者兎角尾州ニ御引籠御一戰ニ思究め候との事也、賴宣君被^ニ聞召^一、必定思召極候ハ、御籠城の御手立不^レ可^レ然、縦御籠城共、尾州一國ニ而日本六十五箇國御引受御利運可^レ有哉、兎角御謀反ニ被^レ極候ハ、被^レ成様可^レ有

レ之、下臈の諺ニ、毒をくらはハ皿を舐と申、思召立程ならば、大功を被^レ顯候様ニ可^レ被^レ成候、公方家尾張を御通過候時分、名護屋より惣人數を御つれ、追討ニ被^レ成候得、其時我等ハ勢州より吉田へ乗渡し、御自分と力を合追打ニ致し候ハ、今切白須賀近邊ニ而ハ、公方を討止可^レ申候、在京之歸り足、上下油斷之旗本勢何萬候共、手足ニもかゝり申間敷候、不意を被^ニ追討^一候者、一舉ニ大功を立、天下の落去一日ニ定るべし、若致損打負候ハ、御自分と我等と討死を遂、枕を並べ可^レ申候、然るニ名護屋ニ籠城ニ卷詰られ、詰腹切給ん事ハ末代迄之耻也と御眼をいからし座を扣て被^レ仰けれハ、尾張様も道理ニ被^レ詰、玄はくと被^レ成、尤至極ニ存候、我等は當人ニ而滅亡無^ニ是非^一候、咎もなき貴殿をやミくと打死させ、兩家をつぶし、權現様御遺言を水ニは仕間敷候間、堅思止ルと有けれハ、賴宣君も御喜悅不^レ淺、公方様ニハ江戸へ御歸城、賴宣君ニ者紀州へ御歸國、尾張様ニ者名護屋へ御歸城、皆程過て江戸へ御參府、御登城御目見候得者、大猷院様御氣色替り、尾張ニ者參勤延引可^レ有歟ニ聞候ニ、はやく下り被^レ申候、若延引ならハ、鳴海口迄直

ニ迎に可_レ參と思候つると上意なりけるとぞ、

細川三齋所望に依て御茶の湯の事

賴宣君御若年の砌、立花左近將監宗茂、細川宰相忠興入道、直田伊豆守信幸、伊達中納言政宗と、節々御參會也、或時細川三齋老御暇被_レ下、西國へ被_レ下ける前、渡邊一學直綱ニ御申候ハ、紀州様ニ者虛堂の墨跡不動斬の御懸ケ物ハ、天下の名物ニ而、權現様より御拜領と承り候、内々拜見仕度念願ニ而打過申候、此度歸國仕ニ年老至極也、身再び參府も不定ニ存候、あはれ此度彼墨跡拜見仕度と被_レ申候、一學歸りて此旨申上候得者、安き間之事と被_レ仰、日限を究、三齋老を御數寄屋へ御招請なり、虛堂の墨跡ハ御懸不_レ被_レ成、清拙正春之墨跡を御懸被_レ成御茶湯有、賴宣君御手前ニ而御茶被_レ點、其時三齋へ被_レ仰候ハ、虛堂之墨跡御所望ニ付安き御事と申、今日申請候へ共、其懸ケ物者此者へ持參不_レ仕候、其段申候ハ、御出有間敷と存、虛堂を可_レ懸_ニ御目_一と偽りを申候、近頃殘念ニ候と被_レ仰候、三齋重而拜見可_レ仕と被_レ申、御書院ニ而御對話、緩々と有_レ之、御歸候時、渡邊一學ニ彼虛堂之墨跡を御持せ被_レ出候、一學ハ黑書院と白書院之間の廊下杉

戸之際ニ而、彼虛堂の御懸ケ物を箱より取出シ、箱の蓋をあげ其上ニ置て、ひさまづき待居、三齋御通候時ニ、御口上を申出候と三齋もつくはひ被_レ申、一學申ハ、先日之御口上ニ、此御掛物御覽被_レ成度候、御年寄、重而之御參府不定ニ思召候との御詞、いま_一敷被_レ存、重而幾度も御參府候様ニ祝入、態と懸物を不_レ懸_ニ御目_一候、追付御息才_{（才方）}ニ而御參府之節可_レ懸_ニ御目_一と存、如_レ此ニ仕候得共、御覽じ候御望ニ而候得者、書院ニ懸ケ先可_レ懸_ニ御目_一之由被_レ申、是へ持候而出候と一學申候得者、三齋も忝事身ニ餘り、感ニ堪被_レ申ハ、若き御身ニ而、か様の御心入ハ、御禮兎角不_レ被_レ申上候、此上者御賢慮之ごとく、幾度も參府可_レ致候、其節重而御懸物拜見可_レ仕候とて取て戴き、御歸候つるよし、翌年三齋老參府、虛堂之墨跡をかけ、三齋御招請候而、御茶湯有けるとなり、

權現様より御拜領被_レ成候虛堂の墨跡の事

御老中紀州御城付へ被_レ申候ハ、紀州様ニ權現様より御拜領之虛堂墨跡拜見仕度と所望ニ付、日限を極め御中屋敷へ御招請也、中く_一りへ御名代三浦長門守爲時迎ニ罷出候、扱御老中御數寄屋へ入給、賴宣君ニ

も御數寄屋へ御出可^レ被^レ成とて黒書院迄御出被^レ成候得者、彼虛堂之墨跡ハ箱より出シ違棚ニ有、賴宣君御驚被^レ成、御道具奉行鴨居善兵衛千宗左を召、何とて虛堂の墨跡ハ懸ぬぞと散々御叱被^レ成、善兵衛千宗左取違、外之御懸物を御數寄屋ニかけたれば、今更無^ニ爲方、賴宣君則渡邊若狹守直綱御使に而、御老中へ被^レ出候趣ハ、御所望之墨跡者、權現様御手自拜領致候得者、初より懸候事無^ニ勿^ニ躰ニ存候間、何れも御入候て後、大納言殿自身被^レ懸候半爲、いまだ懸不^レ申候、然共何れも御出迄素床ニ致置候段も如何と存、外之懸物かけ置候、只今大納言殿自身可^レ被^レ懸候と若狹守申達候得者、御老中一同ニ御尤千萬と被^レ申候、若狹守は茶道參床之懸物はづし候得と申候と、千宗左矢筈竹を持、床之懸物はづし候と、賴宣君左ニ虛堂之墨跡、右ニ矢筈竹を御持御出被^レ成、御自身御床へ墨跡御懸ケ被^レ成候、其首尾よき事申も中々なり、其頓智發明古今無類之事哉と、皆感せぬものなし、

小堀遠州作の石燈籠の事

御隱居可^レ被^レ成五六年前ニ、酒井讃岐守入道空印、此方御城附ニ向て、大納言殿ニ者、小堀遠州作之石燈籠

御所持と承候、拜見仕度と所望也、賴宣君御機嫌ニ而、庭之模様を作り替候へとて、公儀之御庭作山本道勾鎌田庭雲を御呼、御庭之作直有、御庭出來、石燈籠を立る日、千宗左病氣ニ而不^レ出、千賀道味も指合有て不^レ出、道勾庭雲彼石燈籠をみて、小袋の日形月形の窓狹ク、當世ニ合不^レ申候、ひろげ候ハ、可^レ然と有、承りの役人蔭山宇右衛門石工を數人呼寄、火袋の窓を道勾庭雲指圖の通りニ鑿り廣げて、石燈籠を立て歸る、其晚石燈籠立候段宇右衛門申上候付、賴宣君御出御覽被^レ成ニ、火袋の窓をほりひろげ候を御覽付、大ニ御驚、是は何たる事を致候と御尋、蔭山承、道勾庭雲指圖にて候と申上ル、そこにて大ニ御氣色替^{イテ}り、奉行ハ何の役ぞ、彼等が申とて、何とて此方へ不^レ伺^{イテ}、大事之古石燈籠疵付候へバ、最早用ニ立ぬ捨り物也、さてく惜き事かな、遠州の指圖之窓を道勾庭雲ほりひろげ候事、不届不調法申も愚也、空印へ約束はしたり、何とかすべきと御叱、宇右衛門め己ハ何の爲ぞと、既ニ御腰物ニ御手被^レ懸候へバ、宇右衛門は貳拾間程しさり、頭を地ニ付、赤面して罷在候、賴宣君御目を被^レ塞、良暫御意被^レ成、加納五郎左衛門直恒

を召、扱々大事之道具ニ疵を付捨たり、我此前御上洛供奉之時、小堀遠州ニ此石燈籠を頼候時、物者貳ツがよしとおもひ、其時ニツ頼、壹つは此地へ下シ、只今捨り燈籠なり、今壹ツの燈籠は、紀州粉川の別業竹藪之内ニ、蘚をつけ古さんとおもひ入置たり、取寄て此度空印を呼候間ニ可レ合かと御相談、五郎左衛門承り、扱々遠き御思案ニて、貳ツ被_レ仰付_一置れ候物哉、鯨船にて水手を撰押切せ候ハ、成程手ニ合可_レ申とて、則早道之御飛脚を以紀州へ申遣、鯨船に石燈籠をつみ、水手を撰、晝夜のさかひなく推ける程ニ、海上風波穩ニ、石燈籠無_レ恙八丁堀ニ着岸、千宗左を被_レ遣、車ニつみ、御中屋敷へ取寄御覧有ニ、貳十餘年林之内ニ而雨露ニうたれ、苔むし古びたる事千年を経たるがごとし、則御庭ニ立たるニ、前の燈籠ハ物之數ニてもなし、御機嫌不_レ斜、長門守、若狹守、五郎左衛門、左五右衛門、千宗左、千賀道味迄も、君之御智慧遠き御思案を奉_レ感、皆感涙を流しける、空印御招請候ハ、此燈籠を見被_レ申、空印も其珍物を深被_レ感、御茶の湯も一入興有けると也、

頼宣君御無馬の事

宇治の馬場ニ而御馬を召けるニ、駈之中ニ而御頭巾を風ニ而吹落けるを、中ニ而御取かへ鞍ニ御直り、直ニ駈召けるを、御供の上下皆一同ニ奉_レ感、其日者松野惣太郎ハ不_レ出、其三日過て、亦馬場へ御出之時、吉見喜左衛門は、松野惣太郎に向ひ、先日御馬を召候ニ、駈之内之御早業其方ニ見せ申度候ひき、扱々奇妙之事共也と語り聞せければ、惣太郎聞て、殿様いまだ御馬上前方ニ被_レ成_ニ御座_一候、隨分能召候得共、御鍛練いまだ足り不_レ申候と申ければ、頼宣君御氣色替り、惣太郎ニ其譯御尋被_レ成候ニ、惣太郎申上候ハ、權現様者海道一二番之御馬上之名人ニ而渡らせ給ふニ、小田原御陣之時、秀吉公之御先手として、惣ヶ原を御押被_レ成候、丹羽宰相長重、長谷川侍從秀一、堀左衛門督秀政ハ、日金越を小田原表へ推寄、嶺筋を通ルとて谷際を見下ニ、家康公御押被_レ成候、御旗御馬幟を見て皆々推前を見物致候、爰ニ一ツの谷川ニ細橋有、御人數此橋へ行懸り渡事不_レ叶、橋之上下を皆歩行にて越申候、權現様ハ御馬ニ而橋之爪ハ御着候、山の上より三人之大將達見付、家康公ハ無_レ隱馬の上手也、細橋を被_レ渡を見物せよとて見る所ニ、橋爪ニ而

馬より下給ひ、御馬ハ橋より貳拾間計上之方を舍人四五人ニ而牽渡し、權現様者御歩行之者に被_レ負給て、橋を御渡被_レ成候、山之上三大將之軍兵共皆笑ぬ_ハなし、家康は馬之名人なるが、あの橋を越事不_レ成、人ニ被_レ負て被_レ渡けると、人々どよみ笑けるを、三人之大將大ニ感じ、家康卿者あれ程之馬上之名人とは知らざりし、馬上之功者ハ危き事ハ曾而せぬもの也、ことに御陣前身をかばひ危事したまはぬは、近代の功者哉と感入譽被_レ申候、是ヲ考候ニ、殿様ひたとあぶなき早業を被_レ成候ハ、馬不功と申ければ、申上_イけれハ頼宣君大ニ御感被_レ成御書留被_レ成候而、掛硯へ御入被_レ成候と也、

上野台徒の僧御見舞の思召首尾の事

上野之台徒の僧中御見廻申候、其前ニ御旗本衆御見廻、御吸物之支度仕候内ニ、其御客退出、其跡ハ上野衆被_レ參御吸物と有時ニ、初ニ調味したる魚類之御吸物を出、頼宣君蓋を御取被_レ成候得者魚類也、則蓋を被_レ成、僧衆ハ被_レ仰候ハ、庭前ニ草_{コイ}出候、生るを料理ニ出し候、尤不_レ苦とは醫師も申候ハ共、食事不_レ入事ニ候、はやく小性共その吸物取替候へと被_レ仰皆々引ける、其跡より精進之御吸物出候也、其機轉少事といへ

共及所ニ非ず、

小笠原右近大夫忠政より壺胡錄贈られし事

御約束ニ而、小笠原右近大夫忠政より、壺胡錄矢繰なと箱ニ入、封印して被_レ進上、使者濫多見與左衛門と云者也、早天ニ御玄關ニ參ル、當番の番頭渥美源五郎出合、大納言殿夜前長座被_レ致、未休被_レ居候間、目醒候而御口上申聞、御道具も見せ可_レ申候、先御使者ニハ御歸候へとて與左衛門を歸し、其旨四ツ時分ニ源五郎奥之番關茂兵衛を以達し、彼道具ハ請取置候と申上ル、茂兵衛は表使之女中を以此段申上候へ者、右近殿使を通候へ、御對面可有と被_レ仰出候旨、茂兵衛渥美ニ申聞候へバ、源五郎申スハ、先ニ申上候通、右近殿使者ハ今朝歸申候と申、茂兵衛また表使之女中ニ其段申上候得者、亦御意ニ者、右近殿使者を書院へ通候へと被_レ仰出、源五郎不_レ思儀ニ思ひ、先刻度々申上候通、使者ハ今朝戻り申候と申上ル、亦御意ニ使者を通し候へと被_レ仰出、源五郎ハ茂兵衛取次之仕様惡敷故也と、既ニ相論する時ニ、傍ニ布施左五右衛門重紹居けるが、目を睡思案し、源五郎ニ向て、さて〱御念入候御思案ニ而候ものかな、凡夫之及事ニ而なし、

其子細ハ右近殿秘藏之道具なれば、使者を呼付、其目前ニ而箱の封印を御切可^レ被^レ成爲ニ、使者を通シ候へとの數度之御意也、早々右近殿使者を呼ニ遣可^レ然と有、源五郎も肝をつぶし、早道の者を遣し、早々呼ニ越候、右近使澁多見與左衛門早々參候付、其段申上候得者、黒書院へ通し、御對面被^レ成、使者の目前ニ而、箱に付たる右近殿之封印を御切、其封を使者ニ御渡し、さて道具御一覽被^レ成て箱ニ納め、御封印ニ而使者ニ御渡被^レ成使者歸リ候、渥美源五郎あきればて手を拍て、殿様の御高察、我等如き凡夫之及所ニ而なし、左五右事ハ幼少より御奉公被^レ申上候故也、中々御智慧も及所ニ而無^レ之と申けり、

賴宣君七山御鹿狩の事

御若年之時分、七山御鹿狩被^レ成、御家老大身小身不^レ殘御供也、御取被^レ成候雉子雁鴨を御料理被^レ成、皆皆へ被^レ下候所ニ、大崎玄蕃允長行父子、村上彦右衛門義清父子、眞鍋五郎右衛門貞成、九鬼四郎兵衛廣隆、大藪新右衛門、藪三左衛門、安藤忠兵衛を初、御譜代新參の老幼之輩は、皆腰付の飯を取出シ、御吸物御酒頂戴仕候、安藤帶刀、水野淡路守、久野三郎左衛門、

三浦長門守ニは、御膳被^レ下候、渡邊一學、牧野金彌を始、御小性立之大身ハ、面々ニ辨當食籠を持せける、賴宣君兼而御察被^レ成、壹里計之道筋ニ詰番を御置、辨當食籠をおさへ、壹ツも通し不^レ申候、是をバ不知、若き大身之面々御吸物出候前ニ、辨當食籠を尋候へ共、曾而見へ不^レ申候故、皆飢疲^レたると也、已來こらしめの爲、御尤なる御事也、

岩出にて川狩の事附佐波與助が事

近年岩出^{トイ}にて、川狩之御遊之時、一説、和歌山御城下、御下屋敷前、若者共ニ水を被^レ游、佐波與助水練不調法ニ而、沈とする事度々也、水野十太夫小舟ニ而乗有しが、與助不^レ叶は舟ニ取附と申候を被^レ聞召、十太夫之たわけめ、士ニ左様之事を申候ものか、不^レ成は取附と申を、士たるものが死るといふ共、船ニ可^レ取附一か、たわけたる事として、惜士壹人殺し可^レ申ぞや、同詞にて、與助舟ニ取付て、休候得と可^レ申事を、十太夫のたわけめと被^レ仰ける、御吟味之段委細なる事也、

今村小兵衛といふ算勘者言上ニ付御評議の事今村小兵衛といふ算勘者、御勝手之爲ニ、御家中諸士之知行之内を可^レ召上^一と考申上ル、御家老兩頭奉行

を召て御僉儀有て、御意ニハ、さのミ是ニ而家中之諸士勝手痛申間敷と小兵衛申候、如何と御尋、三浦長門守を始御尤と申上ル、大形相究所へ、加納五郎左衛門罷出る、御意ニハ箇様々々の事を可ニ云付と問給へバ、年寄共尤と申候間、是ニ可極と被仰出、五郎左衛門頭を振て、中々無勿躰事ニ而御座候、必々御無用ニ可被遊と留申候、賴宣君被仰候へ、何と可有哉、亦御尋、長門守承、小兵衛申上候様ニ被成御尤と申上ル、其時五郎左衛門ハ、長門守ニ向て、其方眞實御尤と奉存候と誓文を立候へと申候、長門守亦面被致、無言ニ而、御一座まづまりかへれば、賴宣君はやく御賢察有て、重而僉議すべしと被仰、御座を立て奥へ入給ふ、御使を以、此度之儀、下々迷惑可仕候間、御止被成候と被仰出候、翌朝加納五郎左衛門直恒を召、其方申事尤至極ニ付、此度之事止ニする所なり、さて其方ニ異見する事有、如何ニ道理を申候共、我口間似をする家の大臣をバ、昨日之様ニ顔之皮をむくやう成あて事ハ不申もの也と仰けるとぞ、

坂口作兵衛が事

坂口作兵衛ハ、方々ニ而度々の手柄高名之事有、淺野

彈正少弼長政家ニ而ハ、小田原陣之時、忍岩槻ニ而、龜田大隅守と立合勵立、福島掃部方ニ而ハ、於駿府御城大手口ニ、而主之仇を打、箇様之事共ニ付、御家へ四百石ニ而被召出、紀州ニ而病死、其段達御耳、跡目無相違忤源助に被下、御家老役ニ而、源助ハ大たわけニて罷在、中々御奉公成申者ニ而ハ無之候間、知行御滅被下候様ニと申上ル、御意ニハ源助が生付ハ、我も能知、父之跡目無相違くれたり、家中ひろければ、たわけたる子持たる者多からんニ、源助ニ知行滅くれ候ハ、家中之上下たわけたる子持たる者を見、最早行末知たり、奉公しても一代きり賴母敷はなしと心をはなし候はん事必定也、亦たわけたる源助ニ無相違亡父之跡をくれよとは、惣家中のたわけたる子持たるもの、さても頼もしき事也、是にてハ一命を捨奉公せんと思付べし、其段をおもへバ、作兵衛が跡を無相違くれ、纔之事ニ而諸人ニ被思付所大き成徳分也、跡目をへらし、纔之得分を取、諸人に思はなされんハ、大なる損也と被仰候よし、

佐竹義宣家臣戸村十太夫が事

萬治二年四月、松平出羽守直政御取次ニ而、佐竹義慶

之家老戸村十太夫を御中屋敷へ被_レ召寄、御前ニ而大坂冬御陣今福口ニ而、佐竹義宣と木村長門守重成後藤又兵衛年房と一戰之仕第を御聞、并_ニ御所様より被_レ下候御感狀を御拜見被_レ成、鳴野今福之繪圖を戸村ニ御見せ、合戰之次第御尋被_レ成、繪圖之書付をバ宇佐美左助よみ候而、戸村物語之上ニ而、始て御感狀を御書院之上座ニ而、卓之上ニ而御拜見被_レ成、さて日も晚ニ成御座中くらく成候付、繪圖も書付見へかねニ付、御縁近へ繪圖を出し、明りを請候而書付をよませ、十太夫物語申上ル事濟候時、十太夫ハ縁頼末座ニまさり、頼宣君も敷居より二間計上座へ御まさり候而御座被_レ成候時、戸村最早退出仕候として御暇申上候、御意ニハ、老人長座退屈可_レ仕候、菅沼九兵衛戸川甚五兵衛を召、十太夫ニ酒を出せと被_レ仰付、扨御感狀を御返し可_レ有と有時、御書院真中初之御座敷ニ御感狀有て、只今之御座迄ハ、三間計間有、御小性御近習皆戸村が後へ廻り詰候而、物語を聞て罷在候、彼御感狀を取續人無之、御腰物持て松下左五之丞壹人罷在候、宇佐美左助罷在て御感狀を取次、御前へ指上候、戸村へ御返し被_レ遊候ハ、取次可_レ申と御前近畏り

罷在候得者、御感狀を御手ニ被_レ持、如何ニ十太夫、知行亦是財寶を子孫ニ譲り候者は世ニ多候、箇様之御感狀を取子孫へ譲り實とせさする人は中々稀也、其方ハ弓矢之冥加ニ叶候士也と御譽再三之中ニ、左助面を兩度御覽故、左助も心ニ如何とぞんじ立退、錦いろり之間之杉戸之外へ出、手をつき畏り居候へバ、頼宣君ハ菅沼九兵衛を召、御感狀を御渡し、戸村十太夫ニ御返被_レ下、十太夫も退出仕候、翌朝加納五郎左衛門、布施左五右衛門兩人承り、左助を呼、御意として被_レ申渡ニハ、昨日佐竹殿家來戸村十太夫被_レ召出、御感狀御拜見事濟、御返可_レ被_レ成時分、初御拜見之座より御前迄之御感狀取次指上候段勿論尤と思召候、御前より戸村へ御返し被_レ成候取次ハ、年若き者ハ不相應ニ被_レ思召候、殊ニ御所様御感狀に而候得者、番頭より下之者ニ而ハ如何ニ思召候故、其方面を兩度御覽被_レ成候ニ心付立退候故、九兵衛を召御感狀御渡、首尾無_レ殘所候キ、其段心付立退候段、奇特千萬ニ被_レ思召候、向後も萬事心懸嗜無_ニ油斷_一御奉公可_ニ申上_一候、依_レ之御褒美被_レ下候として、御召之御紋之時服を被_レ下候、五郎左衛門左五右衛門被_レ申候ハ、昨日之次第

中々御譽被_レ成候而、向後能々心得可_レ申候、名將之御奉公申上候は、只大形之心付に而無_レ之候へば、御見限を蒙り候ぞ、先以昨日之首尾は、一般之儀と譽被_レ申候よし、

有田山楊梅狩の事

有田郡庵之御殿ニ御逗留之時、楊梅さかりニ付、女郎衆御近習御供ニ而、有田山へ御越被_レ成候、御先乗長尾與六左衛門勝年ハ、御供之沙汰もなく候故、番所御門前へ罷出、御出之節御目見へ仕り候得者御覽被_レ成、長尾當番かと御意、與六左衛門頭を下_レげ御禮申上候へば、御意ニハ、楊梅熟し盛之由、郡代致_ニ注進申に付山へ越候、其方も召れ候半づれ共、今日などの遊山翫水ハ、女や小性醫者詩歌の輩を伽につれ候故、其方ハつれ不_レ申候、其方ハ亦つれ候時節が有ぞ、馬の足之はやき所へ其方などを一番につれねばならぬ也、今日者さびしく共留守せよと被_レ仰、御通被_レ成候得者、長尾も餘り忝く、涙せきあえず、其夜通夜感涙を流しけるとぞ、

長尾勘兵衛が事

與六左衛門が父長尾勘兵衛一在者、藝州東條之城主

長尾隼人佐一勝が末子也、隼人者士之中之人參と權現様御譽に逢たる侍大將也、子勘兵衛は若年ニ岐阜攻にも手ニ合、嶋原一揆之節上使御馳走に而、才外記丸竹老丸といふ關船參時、市川甚右衛門清長と同西國へ參候而手に合、それより前方ニ勘兵衛を御使番に被_レ仰付、病者ニ而歩行ニ而御駕の御供成かね、御使番御免之願申上候得共、二三年も御免不_レ被_レ成候、達而願候得者、水野淡路守承りて被_ニ仰渡一候ハ、病氣故願之通御使番御免被_レ成候得共、御使番之指物ハ無_ニ御免一候と御意也、諸人御意を奉_レ感候、其以後病氣ニ而御目見ニも出不_レ申候所ニ、或時勘兵衛子久三郎御城へ御番ニ而罷有候へば、御通被_レ成候迎、如何ニ久三郎、其方父勘兵衛氣色ハ如何と御尋被_レ成候、久三郎頭を疊に付、老父儀病氣爾々無_ニ御座一候、夫故御目見ニも不_ニ罷出一迷惑仕候と申上る、賴宣君御機嫌よく、勘兵衛も先年嶋原之様なるいそがしき事出來候ハ、氣色も透とよく可_レ有_レ之候、得たる事ニハ氣色もよく成候もの也と被_レ仰御通被_レ成候、久三郎罷歸、父ニ申聞候へば、忝がり感涙をながしける、

高野山學侶行人騷動の事

以前高野山學侶行人公事之節、安藤右京進上使ニ高野山へ被_レ參、殊之外騷動、大形高野可_レ被_レ攻かと風聞之節、安藤帶刀在所田邊に在城せしを、夜通ニ被_ニ召寄、三浦長門守爲時、渡邊若狹守直綱、加納五郎左衛門直恒被_ニ召集、毎日の御相談有しニ、久野丹波守宗俊ニ者一言も不_レ被_ニ仰合ニ候故、丹波守大ニ憤り、田邊より帶刀直時をば被_ニ召寄、晝夜御密談有ニ、我等ニ者一言不_レ被_ニ仰合ニ候、無_レ曲御仕形にて候間、何事も出來候ハバ一番に高野山へ取懸可_レ申と次物見段々置て支度せられける、然共事謐りければ、後日ニ密ニ御意ニハ、其方丹波守は、何事ニ而も致かねまじきもの、獨立可_レ仕と思立候故、何事も不_レ被_ニ仰聞ニ候、帶刀事は御旗本より御目かねにて御貫被_レ成候故、何事ニ而も能上ニもよかれかしと思召て、此度之事も色々指南せし也、其方は我指圖に不_レ及、可_レ致所ハ可_レ致者と存候ニ付、一言も不_ニ申聞ニ被_レ仰候得者、丹波守忝事身ニあまりたる様子也とぞ、

冬野村追鳥狩の事

大雪の降ける時、庵原冬野村に雁鴨多候由鳥見之者注進、俄に御出被_レ成候、久野丹波守、其時ハ三郎左衛

門と申せし時、御供ニ被_ニ召連ニ候、木綿番鳥股引ニ而出候、風雪甚、前後東西も見へねバ、中嶋の惣福寺の縁へ御駕をあげ、雪の霽を待候得共、雪ハ頻に降ければ、御供の衆寺の庭ニ並居たる輩、皆頭上も一身も綿を戴たるごとく罷成、上下凍たる時、久野三郎左衛門御駕の側へ參り、風寒大雪ニ而御機嫌ニ障り可_レ申候、下々もことの外疲申候間、今日ハ御城へ被_レ爲_レ入、明日之事ニ可_レ被_レ遊候哉と申上候へバ、御意ニハ三郎左衛門申ごとく、成程尤也、可_レ歸と被_レ仰、中嶋より御歸被_レ成、三郎左衛門宅ハ吹上なれば御暇被_レ下、鹽道之渡しより歸宅也、賴宣君ハ御歸宅堤に御懸御歸被_レ成候へバ、冬空のならひ、雪も止雲晴風も止暖氣なり、日も暖になりしかバ、有見喜左衛門つぶやけるは、三郎左衛門不_レ入事申上、御歸被_レ成候、今日冬野村へ御越被_レ成候ハバ御物數に而可_レ有候ニ、殘多しとくり返しくり返し申ければ、賴宣君被_ニ聞召ニ、追付天氣よくならんとおもひつれ共、三郎左衛門おもひより謀故歸るもの也、家老の申事ハ主君もよく聞入用るものと諸人ニ知らせ置バ、明日何事も有て、諸口ニ敵をうけ、一方ハ我向ひ、一方ハ者二千三千を預

ケ家老をつかはし候時ニ、家老の下知がきくもの也、其得分ハ百千之雁鴨よりハ大切なりと御意也、

賴宣君姉川合戰御物語の事附石野傳市御叱の事

石野傳市御供先ニ而、姉川御合戰之御物語を承に、朝倉孫三郎景鏡が家人武者二騎、權現様を目ニかけ乗込來り切てかゝり候、御側ニ加藤喜助天野三郎兵衛罷在、拔合二騎の敵を切止る、其首の口之内ニ一足無間地獄と書たる札を含たり、さても強き兵ニ而候しと御物語也、傳市承り、其輩ハ朝倉近習歷々ニ而可_レ有_レ之かと申候得者、俄ニ御氣色替り、やあ傳市承れ、大剛ハ近習外様歷々下々ニ不_レ可_レ依、近習計が大剛ニ可_レ有_レ子細なし、若シ其方が今の辭を若き者共答かゝり候ハ、何と返答すべき、卒爾なる事共不_レ可_レ申と御叱也、

紀行言行錄下

嶋原一揆黒田の陣へ夜討の事附山中作右衛門一番鎗の事

先年嶋原一揆之時、二月廿一日之夜、城より一揆三千餘ニ而、黒田右衛門佐忠之陣へ夜討するに、其夜之廻り番岩神角之助、尼子八郎兵衛、此兩人ハ松平伊豆守信綱家人、山中作右衛門友俊行逢と鍵を合る、山中作右衛門十文字の鍵ニ而一番ニ打入、敵壹人突伏、角之助見たるか_レと詞を懸ル、岩神見たりといふ、山中先じやぞと詞を懸ル、岩神も鍵打入而壹人鍵付、山中ニ詞を懸ル時、山中作右衛門岩神角之助鍵者大形一度ニ合れ共、詞をかけ先じやと斷る間、兎角山中一番鍵といづかた共なく披露ニ、此後に御叱ニ而、御歸國之砌、例之通御家中不_レ殘御迎ニ田井之瀬へ出る、九州へ參手ニ合たるものニハ、それハに御詞懸ル、山中作右衛門者新參者、殊ニ其以前勢州郡奉行する故御見知り不_レ被_レ成、御詞懸り不_レ申、御歸城十日計過て、牧野金彌承候て、作右衛門を二之丸へ召、是者其日御旗之蟲干ニ

て、二之丸へ御上り被_レ成たる也、作右衛門遲參致シ、二之丸之御玄關前ニ而御目見仕る、御城山之坂を御供ニ被_レ召連、嶋原夜討之次第を御尋、其時者其方一番鍵ニ而有しが御聞候と御意、作右衛門承り、岩神角之助と拙者鍵は一度に打込、勝劣はさのみ無_ニ御座候と申上ル、御臺所門ニ而作右衛門ハ殘る、賴宣君ハ御門之内へ一足御蹈込被_レ成時、先刻も申通ニ、岩神よりは其方鍵ハはやく候つるよし、一番鍵よと被_レ仰候、作右衛門全私一番ニ而無_ニ御座候、一番鍵との御意之御返事得申上間敷と申候へば、賴宣君立返らせ給ひ、先といふ詞が有ニと御睨被_レ成候、後日ニ御物語に、山中者いな事を卑下致し候、鍵は一度ニ合_テかし、先の詞有ル上者、一番鍵ニ究り候と御意也、

私云、作右衛門事、先日江戸より紀州へ御歸城之節、御詞不_レ被_レ懸事を如何と作右衛門可_レ思かと思召、二之丸ハ參、御目見仕候得者、御意ニ者、先ハ歸國之時分者、見忘詞を不_レ懸候其後も呼て嶋原之事可_レ尋とおもひしか共、今日權現様より被_レ下候御旗蟲干之節候故、態と祝て今日呼被_レ仰也、其夜打者、二月廿一日、江戸へハ廿六日に知申候、廿八日

之御登城之時、諸大名御旗本迄賴宣君御通ニ指つどひ、此度御家來山中作右衛門一番鍵致シ、嘸御機嫌ニ可_レ被_レ思召候事ニより御歡申上候故、殊之外之御機嫌なりと云々、

賴宣君御足へ進上の犬喰付し事

此以前逸物の犬をひかせ、進上する者有り、兼而御聞及被_レ成候ゆへ、御庭へ引入させ、御覽被_レ成、荒き犬故元之主之犬牽が引ニも才領_{ササ}の步行者付て御庭へ出ル、御縁ニ御立被_レ成、是へ引て參れと被_レ仰、御縁鼻へ引付ル、步行者御小性衆へ向ひ、此犬殊之外人に荒く候と申候を御構なく、縁鼻ニ而此犬者獵き、にて可_レ有よき顔がまへなりと、御足ニ而犬の頬を御なで候得者、其犬大にはへて、御足ニ咀付候を、御足直に犬のどへ蹈入させ給ふ、犬はのどに足をつき込れ、散散吠て尾をしいて逃除、是より賴宣君を彼犬見ては恐れていつて尾をしきたるなり、此時御足を御引候ハ、咀切可_レ申候を、直に犬の口よりのどへ踏込給ふ其はや業、剛強たとへむかたなし、御若年之時、伊達政宗御出、大きに酒宴して被_レ歸候を、御座ながら御暇乞有しを、政宗立返り、此政宗程の者を御座なが

御暇乞は無曲候、御立被_レ成御送り候得と頼宣君之御手を取て引立奉るを、頼宣君伊達政宗の足を取て一間程御なげ被_レ成、政宗どふとなげられ、大笑致し退出せしと也、また鹿狩之時、手負猪駈來るを御鐵炮ニ而御打候ニ、立消致し候と猪直ニ懸り候所を、御鐵炮を猪之股合へ入、御後ニすくひ投ニ被_レ成候、箇様之はや業如何程も有_レ候よし、

宮地久右衛門が事附碁盤繪圖の事

宮地久右衛門九郎太郎と申せし時より、鐵炮を鍛練し、算勘妙を得、智才拔群の器量を御覽じ、御取出し奉行職に被_ニ仰付_一候、其上頼宣君御工夫を以、碁盤之圖と申繪圖を被_レ成、五色七色八色に彩色、御領分之惣高を舉ゲ、めを四ツ五ツ六ツ七ツと究メ、第一御家中知行扶持切米、第二ニ江戸御參勤上下之入用金、第三在江戸中ニ入用、第四所々の御普請御作事、第五御武具御馬之入用、第六所々御臺所入、第七御鷹野御能御宿鷹野、箇様之品々をわけて、御普請御作事可_レ有時者、外之入用を減、亦御加増御金可_ニ被_下一年者、亦御普請御用事を被_レ止、あなたこなた入金融通せし故ニ、御勝手ニ増減之手品有て、惣而の御身躰すわり

て、御勝手に御詰被_レ成候事會而無_レ之、御一代御自由御座候事、御工夫之碁盤積りの故なりと、久右衛門入道物語致しけるとかや、

紀伊井原町大水道の事

井原町の北より、西の海邊迄大水道を被_ニ仰付_一、大形首尾致候時分、御在江戸より宇佐美左助を召而、江戸へ罷下り候、御普請奉行加納角兵衛佐野平藏者左助を招き、大水道首尾よく出來候次第を見せ、江戸ニ而御尋有_バ可_レ致_ニ言上_一と申合しかば、左助江戸ニ着、御前へ出けるに、御國中大小事之儀御尋、果して大水道之事御尋、左助見及候通と角兵衛平藏申候通致_ニ言上_一候、其時左助ニ被_ニ仰聞_一候者、大水道ニ付、柴薪の船の運送よく、嘸新吹上の上下悦らんと被_レ仰、さて汝ハ獅子といふ獸を知たるか、此獅子者獸の王ニ而、一度啼バその聲の聞ゆる所百獸ふるひおそるといふ、獅子にまさる猛獸なし、然共此獅子己が栖ニ者數千丈の峻の岨に穴を掘て臥とかや、獅子をくひ殺べきけどもの外になければ、用心ハすまじき事なれ共如_レ斯、天下ニすぐれたる大將も、城塙者堅固ニするもの也、傳聞武田信玄者、自分の勇ニ自慢し、甲州ニ堅

固の要害居城なかりし故、勝頼代ニ信長公に被_レ取懸_二二日之防戰不_レ叶、山中へ落退てやみく_一と滅亡せしなり、北條氏政者、勝頼ニ者武勇劣たれ共、小田原籠城し、秀吉公貳拾六萬之大軍を引受、四月より七月迄持こたへしハ要害之故也、然るニ家中の奴原の中ニ、大納言殿吹上ニ堀を掘せ要害をめさるハ、さ

也、茶道能猿樂遊山翫水之事ならば、うかと聞事も可_レ有、武士が武道をうかと聞たるとハさても珍敷事也、不思議なる答は、宇佐美駿河守が子孫ニ似合ざる言なりと、事々敷御叱被_レ成候けるよし、

頼宣君加納五郎左衛門に御意被_レ成候事

でも不器量なる大將なり、大將者城を出、野合戰ニ而功を立てこそ可_レ有ニ、貳萬の大將之身ニ而、敵を城へ引受ては、運者被_レ開まじきと嘲笑輩、其名苗字も人員迄も我等ハ聞まじきや、雲雀が鶴の心は知まじ、推參成ル奴原哉とおもへども、夫程の事を申も、外の奴原の小歌三味線女小性のをどりのみニ而居るよりハましなりとおもふて、とがめもせぬなり、因_レ利制_レ權兵家の妙所なれば、時ニより敵國より軍定はなき事也、此度水道普請を嘲る輩ハ、皆部屋立の歷々なりとして、後ハ御機嫌よかりける所ニ、其次ニ御家之鎗奉行が長柄足輕之事を申立候儀者、其方も其沙汰聞たるかと御尋、左助畏りて、誠ニ承候得共、うかと承り、慥に覺不_レ申候と申上候得者、俄に御氣色替り、弓矢之家ニ生れ、武士が武道之事をうかと承り候とハ不審

陽山ニ而加納五郎左衛門直恒ニ御意被_レ成候者、惣而大將も士も物にかたよぬ者なれば、御子孫方へも其段申上候へ、佛法にも敎家禪家有、尤儒道佛家之わから有り、何れにも深妙の旨有、武道ニ者城攻籠城野合戰夜討小路軍之品々有、其外弓矢鐵炮馬上鍵劍術把手柔ニ至迄、皆利と事と事理一躰の妙ニ至る所有、去程に大略之雜事にも、能猿樂のなぐさみ、茶道蹴鞠歌道立花之翫、みな人世の事にして、壹ツもかけてハ不_レ可_レ叶、よくこそなく共、少ニ而も可_レ學、茶道を不_レ知者他ニ行馳走のもてなしニ而先茶の湯なり、それを不_レ知ハ不骨ニ而、さながら下臈立ニ見ゆる、亦能囃子を不_レ知ハ、縦バ能の咄しをするにも、はじめは芭蕉ニ而、二番めハ善界、三番めニ者なにやらん、鬼の出たるなど、申族多し、人之笑を得なかつち也、殊に歌道を不_レ知ハ、歌物語ニわけもなき片言を

はなし出し、一座の嘲になれば、弓馬武藝といふに不及、何事ニても知りてわるき事なし、去共人間の癖ニ而、一方へかた付たがり、武道の心がけ有バ、其外を不_レ知、亦花奢なる道を好ものは、弓馬之第一之事ニうとし、何事もかたよらぬ人之道なり、此段を御子様方へ申上候得と御意也、

堀田九郎右衛門大坂陣の首帳の事

以前頼宣君不寐の御病氣にて、古參新參の古兵共番代り番代り毎夜御伽ニ相詰しニ、堀丹後守直寄が家より出たる士堀田九郎右衛門當番ニ而御夜詰ニ出ル、頼宣君ハ大坂御陣ニ而堀丹後守手前之高名帳御出し、去方より指越候、丹後手前の大坂陣の首帳なり、是を見よとて九郎右衛門前へ御投出し、此高名帳ニ其方が名はなしと被_レ仰、九郎右衛門帳を致_ニ披見_ニ、如_レ仰名前無_ニ御座_ニ候、但是は何も知らぬもの、書立候帳ニ而御座候、丹後守前ニ而認候本帳を取出し差上、私一生之中ニ、只今御見せ被_レ成候、首帳を反古ニ致し可_レ懸_ニ御目_ニと申上ル、其後江戸番濟て、九郎右衛門が休足ニ紀州へ歸ル、大河内奎左衛門と代る、九郎右衛門江戸を立て、小田原ニ一宿せし所へ、江戸赤

坂御中屋敷より御用達連判ニ而早飛脚之狀箱夜半時分ニ到來、九郎右衛門驚起て披見するニ、其狀ニいはく、依_レ仰申入候、先日於_ニ御前_ニ、大坂表堀丹後守手前高名首帳御見せ被_レ成候、其方名前無_ニ之候故、其段被_ニ仰聞_ニ候得者、本帳を取出し、此帳をバ一代之内ニ反古ニ致し可_レ申と申上候き、其後丹後守手前に而之本帳御尋出し候所ニ、其方高名之名前慥ニ有_ニ之_ニ付、此本帳を被_ニ下置_ニ候所也、はじめの帳も差添被_レ下候、如_ニ本懷_ニ反古ニ可_レ仕候旨御意ニ而候故如_レ此候との文言ニ而、本帳ニ初之帳を添被_ニ指下_ニ候、九郎右衛門忝事骨髓ニ徹し、思召過分至極なる次第ニ而、涙をながし聲を立て泣候而、漸御返事くれぐ_レ御禮を取次迄申上、則初之帳ハ國へ歸、いづれもへ見せ候而火中仕候、是より九郎右衛門一心に御恩を難_レ有奉_ニ存候、御吟味御意之段々、御名將ニ而被_レ成_ニ御座_ニ候と難_レ有奉_ニ存候よし、

御家中陪臣陣羽織の事

去軍者の存寄にて、御家中又者之陣羽織之事を申上、其者の好ニ而、淺黄毛綿の袖なし羽織出來す、殊之外見苦敷、なか_レ着用難_レ成様子、田屋菊右衛門、淡輪

新兵衛蘆川權太郎など申候と有事御耳ニ達シ、先其通ニ而置べし、紀州家中又者羽織ハ簡様とて、何事も有時敵方より似せて着用し、忍など入たる時此方ニ者彼羽織無用ニ致シ、敵よりの紛ものを可ニ撰出壹ツの方便の本ニもなる事也、且ハ大軍ニ對し羽織を着せぬものなりと、立花左近眞田伊豆物談なりと御意也、此後又者の羽織は、次第ニ無用ニなる也、

嶋原一揆蜂起の時御城にて紀伊侯御了簡の事

嶋原蜂起の時、御三人御登城、大名御旗本功者之面々登城有、尾張大納言様御意ニ者、何物々しや百姓之分ニ而何程の事可_レ有、蹈つぶして手間取間敷と被_レ仰候、頼宣君は、左様ニ而無_レ之候、古の諺にも、外の百人を以、内の壹人を難_レ鬭と申候、貳萬計の兇徒等死切て楯籠しを、手ひしぎには成かね可_レ申候、ことに天草富岡城攻本渡合戰の仕方、嶋兒者垣ニ而の勢くばり、唐子表より陣拂之鉢、嶋原にてハ瀬付合戰、三江杉谷表の兵、糧爭之鉢、百姓計の仕方とは不_レ存候、如何様御手間入可_レ申候と被_レ仰候、尾張様ニ者紀伊國殿の亦むつかしき挨拶被_レ申候、何事之可_レ有之、一々ふみ殺し捨可_レ申と有時、眞田伊豆守信幸被_レ申

候ハ、軍の儀ハ左様ニ者無_レ御座候ものニ候、昔亡父安房守昌幸御意ニ違、權現様より御譜代歴々壹萬五千ニ而信州上田城へ御取懸被_レ成、我等者二十三歳ニ而、父安房守先手致し候、一戰ニ討勝、御人數を加賀川迄追討ニ四百計首を取申候、御譜代歴々の鎧の推付を見申候、其時之様子尾張様御家老成瀬隼人可_レ存候、拙者一了簡ニ者、紀州様御意が御尤と奉_レ存候と被_レ申候へ者、尾張様ニ者事之外御せき彼_レ成候様子也、

嶋原の凶徒城より夜討に出候ニ付頼宣君察智の事

寛永十五年二月廿一日、城より夜打出候而、黒田忠之手先を攻破、家老黒田監物、石、^{壹萬}其子黒田佐左衛門、其外數十人被_レ打取、黒田市正吉田壹岐手負、明石權之丞被_レ討ければ、上意ニ而御三人御登城、御老中不_レ殘登城ニ而、嶋原夜打手強仕候段上意也、尾張水戸御兩殿ハ何之御詞御挨拶も無_レ御座候ニ、頼宣君御顔色よく、追付落城可_レ仕候、目出度吉左、右之注進ニ而候と被_レ仰上候、大猷院様も御考有けるか、御納得之様子ニ而被_レ成_レ御座、果して七日目ニ落城し、早打之御

注進有ければ、紀伊國殿ハ神智妙慮之大將なりとて、天下ニ而沙汰せしなり、

賴宣君勢州白子にて御鷹野の事

藤堂大學頭高次ハ、隣國ニ在城し、紀州方之善惡を目にかけ、何事も有バ松坂白子ハ可ニ取敷」と人にも申候を御聞被_レ成、父和泉守高虎度々公儀ニ讒訴致候を御覺候、或時鶴鷹野ニ白子へ御越御物員有て御歸之時、大學領分ニ畠中ニ芝山有て風景能所有、是ニ而御物員の鴨を御料理被_レ成、御休可_レ被_レ成と有、御供ニ而歷々今二里餘御越候へバ御領分ニ而候、爰ハ大學領分ニ而如何と申候を御近習申上候得者、なにと大學が領分ニ而ハ休ぬものかと御尋、芝山之前後左右ニ百姓共ひしと罷立候、如何と申候へば、御機嫌損じ、その大學何共おもはぬなり、皆々ハ大學をはかり候、大學が領内ニ而飯を喫て可_レ見とて御幕うたせ御料理暮頃迄御滯座なり、津領之百姓共御幕あたりへハ申ニ不_レ及、皆鍬を地に置頭を下ゲ罷立候ニ、御意ニハ、大學を皆々はかかることおかしけれ、大學如何共おもはぬと再三御意被_レ成を百姓共承り、此後藤堂家老共へ申通候ニより、津ニ而も事之外氣遣申候

よし、

賴宣君藤堂大學頭領分にて御鷹野の事

二三年過、亦白子へ御鷹野ニ御越、大學領をも一遍ニ御鷹つかはれ候ニ、或在家之内ニ、鎧四五本乘馬四五疋見ゆる、御樂込之者參り尋候へ者、津之大學殿より、大納言様御鷹野被_レ成候間、何ニ而も御用可_レ承とて士五人附置被_レ申候といふ、此旨立歸御用人ニ申候得者、即時達ニ御耳ニ候、何條大學が我用を達せんとて馳走ニ人を可_レ附置哉、如何様之様子と窺とて、賴宣が様子見せニ出したるものなり、きやつばら一人も不_レ殘打殺せ、餘すな打取とて御馬めし候得者、御供衆色めき渡で、我一ニ打立けるを百姓共見付て、追々に告ければ、藤堂が出したる士共五騎、あはてふためき藪をくぐり、堤陰をたより、這々にげて命からぐ_ニ而津へ逃けり、御弓ハ矢をつがひ、御鐵炮の皆火繩を付て、十町計追候故、重而御鷹野ニハ顔出しもせざりけり、

久野丹波守宅へ被_レ爲_レ入賴宣君御茶の事

久野丹波守宗俊方へ壺の口切ニ被_レ爲_レ入候前日ニ、因州松平相摸守光仲より御相談之義ニ而、荒尾志摩

守參着す、達ニ御耳ニ明朝久野丹波守宅へ御入被_レ成而直ニ御相伴ニ可_レ被_ニ召連、但久野之家ハ、昔より武邊

を專に致し、數寄道具ハ所持致間敷候、荒尾ハ他家の者ニ而晴なり、渡邊若狹守所持之三幅一對硯屏筆架之軸之物拂子晚鐘まで借候へと有て、若狹守より道具參候、さて御入被_レ成候、御相伴ハ、荒尾志摩守向日了二軒之御會席御膳濟御手水被_レ遊、御茶の時亭主丹波守手前なり、兼而千宗左ニ習置候へ共、武藝のみニ而手馴ざれば、手前前後ニなり、丹波守も迷惑之跡見へ、志摩守了二も笑止ニ存候時、賴宣君熟々と御覽被_レ成、荒尾ニ御向、いかに志摩承れ、此丹波守ハ先祖代武邊之家ニ而、當家之大切之忠臣之家なり、祖父丹波守者八千五百石之身上ニ而、よき士を過分ニ扶持したり、大坂ニ而冬御陣ニ者三宅惣右衛門松平紀伊守と久野丹波守ハ駿府之御留守也、夏陣ニ者我等ニ加屬被_ニ仰付候ニ、黒地ニ朱之ニツ雁金の折懸の指物ニ而、屈強の混甲五七騎、鐵炮弓其外一備黒山を見るがごとく有りしなり、左候得者家癖ニ而茶道などの遊藝ハ不調法なり、兎角丹波守茶道を渡邊大學ニ賴候へと被_レ仰、勝手より大學出で、丹波守に替り御

茶を點じ上候、丹波守忝存、顔色ニ顯候よし、了二直談なり、

村上彦右衛門義清に武者奉行被_ニ仰付二事

其以前村上彦右衛門義清ハ、惣軍之武者奉行被_ニ仰付候、江戸へ聞へ、御城中ニ而、御旗本歷々集り、紀伊國殿ニ者新參の村上彦右衛門ニ惣のざいを御申付候よし、御譜代古參ニ軍功の兵多きニ、渡り奉公致候彦右衛門ニ武者奉行御申付とハ心底之知れ申候智慧ハなき人なりと評判せしを、久世三左衛門頭をふり、いや／＼各の料間は天と地との違なり、智慧有過テ不仕付と可_レ謂、その子細者、御譜代古參の勇士を指置、新參の村上彦右衛門惣のざいを御申付被_レ成候ハ、大なる謀略にて、天下之諸浪人を可_ニ引付手段也、紀州ニ而古參新參を不_レ撰、よきものなれば、大役に御申付候とて、末賴母敷主也と、諸浪人ニ可_ニ思付謀也、さて／＼權現様之御目がねの御愛子哉、油斷ならぬ人なりと申ければ、一座皆尤と感じけるよし、

賴宣君御隱居の事

御隱居所御作事、繩からげ手塗の壁なり、御意ニハ人

ハ死を知を達人とす、六十ニ餘り萬事之謀をするハ自身を不_レ知なり、身を不_レ知して人を知る事不_レ可有と御意也、御隱居所御新宅へ御移徙、御祝之御能被_二仰付_一候、早朝ニ隱居の老人共皆々出仕す、賴宣君御出被_レ成御對面、家督を中納言殿に譲り申様ニ隱居する事のできたき事也、此後ハ皆々と茶を飲て遊山に日を可_レ送と御機嫌也、布施三説進出、如_レ仰かゝる目出度事無_二申計_一候、乍_レ去田屋菊右衛門、淡輪新兵衛、其外古人共ハ、御殘多奉_レ存候、一度御ざいニ而御下知之事を拜見不_レ仕、是のみ殘念ニ奉_レ存候と申上ければ、賴宣君御機嫌よく御笑被_レ成、老人共が左様ニ申候歟、さてく尤なる事也、乍_レ去大坂兩度の御勝利ハ、權現様御隱居之後ニ而有つるハと御意被_レ成候、一座之老人一同ニ御尤と甘心し、三説ハ卒爾を申上、赤面を被_レ致けると云々、水野小右衛門直談也、

御隱居大纏の事

關根亦_{ヌイ}左衛門渡邊六郎左衛門ハ、御隱居御旗奉行ニ被_二仰付_一候、亦左衛門申上候ハ、御旗者五本大中黒、御馬幟ハ五色の御幣ニ究り申候、大纏は何と可_レ被_レ成と奉_レ伺候得者、御聞被_レ成、まといハ中納言殿ま

とひを我等も可_レ守候へ者、此方者不_レ入、帶刀對馬丹波長門同所ニ先を可_レ致、何事之候は、帶刀對馬丹波長門ニ先者させまじ、何時も乗越して一戦し、手並を見せ候半ま、大まといハ不_レ入候と被_レ仰候、

和歌の浦近邊新田開發止させ給事

或時新田開之場所を見立候事有、和歌の浦近邊、其外方々七八箇所繪圖ニ致し、奉行之外役人御前へ持參致しける、賴宣君御覽被_レ仰けるハ、我勝手之便ニ宜とて、名有池を埋、名有山を掘崩し、田畑ニ致間敷候、殊に二十一代集の歌に入、名寄ニ書載たる名所舊跡をば、堅いろふべからず、末代ニ至て、紀伊大納言が新田を開き、利欲之爲に、歌の集に入詩文ニ載たる名所舊跡ニ、新田の田畑ニ致たりとても愚蒙の人ニ而有けるよと、末代ニ我を嘲り、耻を後代ニ殘し、萬人の笑ニならん事、掌を指がごとし、必々名木を伐り、名有池を埋み、名所舊跡新田ニ致候事努々不_レ可_レ仕と急度被_二仰付_一ける、先年布代の松の枯候時も、ことの外御惜_ミ被_レ成、様々の藥を被_二仰付_一候、何とぞ枯候はぬ様にと種々被_二仰付_一候也、去ニより度々役人を被_レ遣、御領分の名所共を穿鑿有て、其跡の絶ぬ様ニ

被_レ成ける、

紀州は入口多く守禦六ヶ敷國と云事

或軍法者の謂、御國境ニ口々多、山越の道多、此手札を致ミるに、御人數中々足申まじきと申上候得者、賴宣君能考、奇特ニ思召候との御挨拶ニ而、其後被_レ仰候ハ、我武勇の盛なる時ハ、隣國のともがら當國へ仕懸る事ハ思も寄らず候得者、境目の口々多ても氣遣なし、只一國とも治る大將ハ、自分の軍務丈夫に致し、士卒人馬之用意兵糧已下慥ニいたし、隣國に被_レ恐候様に致候得者、口々は如何程有ても其恐なしとぞ被_レ仰ける、

賴宣君詩歌の事

其以前江戸より御鷹場へ御越、箕沼の池ニ富士山水ニうつりけるを見給ひ、

賴宣卿

誰も見よ箕沼の池に影うつる

富士の高峯の雪の曙

亦伊勢國高見嶽ニ而

武士の弓矢とる名の高見山

猶幾度も越んとそおもふ

寛文十年正月江戸ニ而、儒者荒川景允字秀、號三、蘭室主人、君命ニ依而、歲旦の詩を奉りしニ、景允十七歲時なり、

庚戌元旦于時在江都

春入江城客夢中 一般生意十分濃

新正更喜歸期近 須逐陽和隨我公

和荒川景允元旦韻

賴宣卿

修道元來莫過中 新正何用淡兼濃

春風不改千秋色 首々相送十八公

又御若年の時分吉野へ御登山有て花を御覽被_レ成、終日御慰有、其夜ニ入、大雨頻ニ而、御徒然なりしかバ、連句の會有、

濱田道迪

不憶廬山雨 爲君湛百花

賴宣卿

堪掛盤谷水 對客喫新茶

其外之句略_レ之

賴宣君竹本丹後守宅にて御能被_ニ仰付_一事

賴宣君頓智神速之才世に稀にして、人の不_レ及事のみなり、船手の竹本丹後守へ御入、終日御遊宴の砌、能を竹本が太夫に被_ニ仰付_一、是ハ小春太夫が子ニ而、天

王寺の聖德太子の役人、名者庄太夫といふ、是ハ東北を被_レ仰付_一候へ者、御役者共此庄太夫ハ川原者也、はやし候事ハ御免可_レ被_レ成とてはやさず、御慰の違亂ニ成けるを御聞被_レ成、いな事を役者共申候、東北のはやしを致し候へ、庄太夫ハ東北を舞候へ、兩方面々ニ致、除きニせよと被_レ仰付_一候、事濟なり、亦先年佐竹義慶の家老戸村十太夫を召、大坂御陣今福合戦の刻、一之目防戦の時、戸村一番鎧致し、御所様御感狀ニ、青江次直の御腰物拜領、其時鎧合手の大坂方を御尋有しを、十太夫いそがしく、爾と見留不_レ申候申上ル、其時頼宣君菅沼九兵衛ニ御向、先年我方へ抱たりし山中藤太夫赤堀五郎兵衛今福の筈合たる輩なれば、十太夫鎧合手ハ此輩ニ而可_レ有と被_レ仰候時、戸村承り、私鎧合手ハ黒具足ニ銀の揚葉の蝶の立物の冑ニ而、黒段々の杜付の小旗さし、ざいはひを持候者ニ而候と申上る、此時も頼智ニ而、戸村が合手を申上候、但シ此合手ハ木村長門守組の物頭佐久間藏人といふ者也、御一代の中箇様の御頼智ハ不_レ可_三勝計_一事なり、

玄猪御祝儀の事

十年詰御歸國の翌年之十月玄猪之御祝儀、末々迄御手づから餅を取て被_レ下けるニ、其夜夥敷人數なり、御仕廻被_レ成、奥へ爲_レ入候時、三浦長門守爲時佐野良庵御供して申けるハ、今夜ハさてノ大勢ニ而御退屈可_レ被_レ成と、第一御氣色ニ障り可_レ申候と、乍憚氣遣仕候と申上ル、御意ニハ、侍共ハ此上また五増倍多ても退屈ハせぬ也、大將者人數ニハ飽ぬものなりと被_レ仰けると也、

安藤帶刀直清逸物の早馬求めし事

安藤帶刀直清若年之時分、早馬を高直ニ而求て、三正迄朝夕馳走しけるを御聞被_レ成、御前へ召、早馬を秘藏するハ馬數寄の第一なり、但早馬ハ傍輩ニ先を爭て先陣を懸ん爲ニ、是ハ一騎合の武士の馬數寄なり、國主一手の大將之馬數寄ハ、家中手勢の馬廻り共面而ニ馬を拵候様ニ、身上すりきらぬ様ニして、人馬持の多き様ニするが國主一手の大將之馬數寄なり、國主一手の大將番頭が我身壹人早馬ニ乘たり共、諸共組子馬弱て不_レ續ハ、我壹人の馬はやくても役に不_レ立、家中組子之馬をかく持様ニ下々を養育するを大將家老番頭之馬數寄といふもの也と被_レ仰聞、祐生木

庵を召、漢文帝の千里の馬を受給はざる所を帶刀ニ讀而聞せよと御意也、木庵則通鑑を持出而讀之、曰有獻千里馬者、文帝曰、亦馬旗在_レ前、屬車在_レ後、吉行日五十里、師行三十里、朕乘千里馬、獨先安之、遂不受千里馬云々、御意ニ者、帶刀是をよく聞て、よく心得よ、國主一手の大將が、我身壹人の馬數寄ハ尤とは難_レ申と被_レ仰ける、

原田權之助が事

原田權之助、或時御前へ出、今朝獨案ニ、御大將之御一言ハ大事之事ニ而候、その子細ハ、千金を被_レ下候とても、その金ニ而二ツなき命ハ捨不_レ申候、一言の御意ハ、忽ニ命を捨申候、去により御大將ハ御一言が大事也と存候と申上ル、賴宣君兎角の御意なくして時服を權之助ニ被_レ下けると也、

賴宣君諸國之浪人共へ御慈惠の事

近國他國ニ名有もの地侍、外にも内ニ而御合力被_レ下、何事も有時ハ御用ニ立んと申輩數拾人有、美濃國小栗野ニて後藤又兵衛年房が組山田外記入道して永哲といふ、是にも御内證ニ而御合力被_レ下、覺有兵故なり、伊達源左衛門正勝了念事、二男佐左衛門をも病者

と被_レ聞召、御意ニ而泉州中村自然田村に田地を御求被_レ

_レ下、成田庄次郎氏治智ニ被_レ成、岩村卜元と名乗せ御差置被_レ成候、鐵炮五十挺足輕具足指物羽織添、被_レ下ける、何事も

有時ハ御用之爲なり、勢州和州河内江州山城丹波攝州ニ、箇様之輩其數を不_レ知、もし事起時ハ江戸の御

手遣の以前ニ、公方へ一庵の御奉公可_レ被_レ成との御心がけニ而如_レ此候云々、渡邊樵庵、勳兵衛、中黑道隨、川

主殿足浪人也、市川作右衛門、二見密藏院、高野衆、和州二宮右

近、三輪采女、大河内茂左衛門、三刀屋監物、雲州衆、前御家人ニ而

御暇被_レ下、後ニ鹿兒嶋治部左衛門、上杉家など名有浪人

ニ而、皆御合力有中にも、榊原高塵へ者、榊原式部太輔康政ノ孫、榊原遠

江守康勝貳百人扶持之御合力有、龍造寺主膳ハ、御國中

ニ御隱置被_レ成、龜田大隅守へハ、内藤言之助を以御

音物被_レ遣、岡見中務結城晴朝旗本をバ澁田ニ御指置候御扶

持有、其外ハ地侍大庄屋共近國の中ニ御懇意幾人も

有、高野山者衆徒中ニも御念頃の輩多、比叡山ニハ

浴室を御建置、風呂薪料御寄進被_レ成、明日何事出來

候共、國々の手合の御行有之、其計策不_レ勝計、天下大變出來候共、五畿内近邊者御打隨、江戸公方家への

御奉公ハ一廉可^レ成^ニ御覺悟^一也けるとぞ、假初にも公
方様の御事被^レ仰候時ハ、御頭巾を御ぬぎ、御膝を御
直被^レ成候、眞實忠貞の御心入、少も怠り給ふ御様子
はなかりける也、

光貞君柔術御稽古の事

伊丹三郎右衛門直談せられしハ、光貞君御若年の時、
關口柔心がやハらを御學被^レ成、朝夕三郎右衛門其外
御相手ニ成候、或時ニ御稽古之鉢を賴宣君御覽被^レ
成、三郎右衛門を召、密ニ被^レ仰候ハ、柔捉手ハ葉武
者のする業也、大將の強ク修行可^レ爲藝ニあらず、只
大將ハ國家を治め士卒をなづけ、戰場ニ而懸引勝負
の所を晝夜工夫する所一大事也、楚の項羽ハ劍術を
學而見て被^レ申けるハ、劍ハ一人之敵不^レ足^ニ學學ニ萬
人敵^一とて、兵道之法を學び、項梁を助て、既ニ天下の
大功を被^レ顯けると也、古より大將の柔捉手を能致
し、軍ニ勝たる事も天下を取たる事も不^レ聞、則宰相
殿にも大形ニ被^レ致よと可^レ申ト被^レ仰ける、是伊丹が
直談也、

御家中儉約沙汰に付御意の事

丹羽郷左衛門御勝手之儀を申上、奉行共も御爲を大

事ニと致候由申上候へバ、賴宣君被^レ仰候ハ、諸士下
下民百姓の痛ぬ様ニ上ニ思付様ニするが御爲なり、
諸人迷惑がる事を致し御爲といふハ大きな誤り
也、大名のすりきり滅亡したるハ不^レ聞、下々諸人を
くるしめ、身上滅亡したるハ不^レ可^ニ勝計^一、能々可^ニ心
得^一と被^レ仰けるとぞ、惣而國主ハ壹人貳人の言を聞
て家と不^レ可^ニ定^一、善惡共諸人の口を聞合て決定すべ
し、佞人ハ主君をだますものなり、國中の苦ミ痛事を
も佞人痛ぬと申事有、壹人の口を信用すべからずと
度々御意なり、

此錄不知何人作也本自海善寺方丈青木氏懇望覓得之焉憚悞世之
譴責秘藏不敢出書函青木氏歿後神戶某求得之而藏于家者數年于
茲神戶歿無嗣寡妻鬻于商夫因茲得寫焉惟其此錄者梅溪李氏之作
也歟李氏老閑居于江西又海善寺者李氏墳墓之地也姑俟後生識者
云爾

吉備烈公遺事

國臣湯淺新兵衛元禎撰

臣元禎既に烈公の世家を作り、備藩典刑を録す、猶且故老の傳ふる所を輯て遺事を識し、史臣采用るを俟と云、

烈公硯箱の蓋の内に蚰嵌にせさせ給ふ語、

懈心一生、自暴自棄、舉世譽不益進、舉世毀不益退、京より伶人辻伯耆、東儀修理、窪將監三人を召て士大夫に樂を學せ給ふ、公は殊に笙を好せ給ふ、公の横笛に名けん事を中院内府通茂公に請ひ給ひしに、蘆田鶴と名けられたり、

空にかけり澤に年經て幾たひか霜の蘆田鶴聲ふけぬらん

と云る歌にとれるなり、此笛を其後辻山城守に與へ給ふ、山城守天皇の笛の師なりしかば、彼蘆田鶴天子の御ものとなりぬ、辻山城守一説に肥後守と云、何れか信否を知らず、

寛永元年甲子台徳院殿世子と供に上洛あり、公も供

奉し給ふ、同九月六日山城天皇^元院^元二條の城に幸せらる、和歌の御會ありて竹契遐年と云題を以て、公國風を獻せらる、

みねに生ふる松の千とせもとりそへて君か齡をちきるくれ竹

この頃因幡の國公の封疆たる故、峰に生ふるとはよませたるか、

三宅大遺は平安の儒者にて祿をうく、岡山に來りて公に侍せらる、京都にて何事か有ると問せ給ふ、大遺云、京極黃門の書法を贋するものありて、眞跡と價を同して人大に欺をうく、憎むべき事也と云、公暫くありて、いやとよ、必しも人の害をするにあらず、予が憎處は夫に殊なり、奸臣の智を賣て人を欺きて祿を盗む、是は賢君の贋なからんや、終には利口の國家を覆すに至り、予が國にもかゝる贋あらんやと、常に恐るゝなりとぞ仰ありける、

公未だ幼かりし頃、夜ごとに寢に入せ給ひても睡らせ給ふことなく、曉になりてわづかに枕せさせ給ふ、近侍の人々あやしみて、如何成事にや、またわづらはせ給ふ事にもや候と尋まいらせしに、まかゞ答さ

せ給はざりしに、或時改イより殊によく寝させ給ひしを、人々其故を問參らせしに、公笑せ給ひて、予父祖のかげによりて、かく大國を賜る事、分に越たりと思へり、然ば此國民を如何して治め養ふべきと、色々に心を盡して思惟せしにより久しく寝ざりき、思ひ寄たる事の有ぞ、昨日論語をよませて聞しに、君子の儒となりて國民を安ずべきと云ふ事を知りぬ、これに決斷せしうへは、前の思慮もなく寝ぬと仰ありけり、

公十四五計の御時にや、板倉伊賀守勝重に國民を治め申さん事如何心得候べきと問せ給ふ、勝重承りて、京都商賈の輩の訴を判斷のみに年月を経て、國政を行ふ事はわきまへ知らずと云れしかば、公重て、京都所司代の譽世に高くおはす、必國を治る事には先務元イあるべしと詰させ給ふ、勝重さらば可申候、角なる箱に味噌を入て丸き杓子にて取べきやうにて計ひ給ん事然るべからんと答へ申さるれば、公久敷思惟の後、心得がたく候、隅の行といきがたきを如何し候べきと仰有りければ、勝重其事にて候、東照宮に仕へ奉り、あまたの智謀勇才ありと人に稱せらる、諸

將をも見申候へ共、公のごとく年キイわかくおはして國事に盡させ給ふ人は今日初てゑりて驚候あまりにかくは申候ぬ、公の明敏必國中を隅々迄野をもちたる様にと思召ならん、大國は左はならぬものと承り傳へて只今のごとく申つれ、果して御不審の候き、國事は寛ならざれば、仁心を得がたき事にて候とて、勝重落涙せられけり、

公の御物語の時、常に仰ありけるは、禍は下からといふ諺は諷詞なり、下民の禍何とて自らなし始むべき、上たる人を道ののちしきイあらきによりてこそ、人々の非義を犯し、刑罰にかゝる事も出来るならひぞかし、禍は上からといはん詞をかへて、下からと云は、上たる人に戒る詞也、されば往昔キイより云傳へつれと宣ひける、

津田永忠左源太、十六七の頃にや、寝ず番にて居たりしに、公イモ只今の自鳴鐘は何時を打たるやと問せ給ふ、永忠承り、唯今寢入候て知らずと申す、公默しておはします、夜明て永忠が座を立けるを見給ひ、事をなすべき男なりと獨言し給しが、永忠十八の時目付職を被レ命けり、其日執政の人々公務終りて後物語

有しに、永忠末席より、此所は長嘯する所にあらずと
譏りけり、大臣たち公の御前にて、廿（歳）にも不足もの
のあまりなる事なりと申せしに、公偕者予が視る
所たがはざりき、思ふ事憚る所なく云ん者なりと思
ひたりしに、果して然なりと仰けるとぞ、又永忠御前
に參て申ことの有ける後に、彼者は馭者あしくは
國の禍をなすべき也、才は國中に獨歩せりと宣ひ
けり、

公孝經を讀せられし時、爭臣の章に及て、大臣池田出
羽池田伊賀に尤心を爰に用らるべし、予によからぬ
事あらば必諫らるべし、又各も人の諫めん事を能請
容られよと仰有しかば、一座皆感じ奉し時、中川謙叔
權左衛門、進出で只今の一言國家永久を保せ給ふべき
兆（きざし）なり、然れ共公は嚴威ありて、殊に聰明におはし
て、又痘瘡（いぼ）のあとあり、容貌甚見苦しく、眸にかゝや
きて見むきがたし、たまゝ怒り發らせ給ふ時は、一
目も見られずと人々申候、かゝる事にていかでか御
諫を申人の候べき、公先色を柔和にして、諫るものを
賞し給はし、言語（ごんご）開けて御益あるべしと申ければ、公
其直言を稱せらるゝ事大形ならず、謙叔退き出しか

ば、加世次春あまりなる申やふ哉といひしを、謙叔人
臣の職、自身（みづか）の利を思ふ爲の役たるにあらず、國家の
爲に無禮を忘れたりといひしとぞ、此謙叔は中江惟
命（高弟の弟子イ）の高弟なり、惟命は近江國小川の人、王新建の學を
講じて、江西の學と世に稱せらる、所謂藤樹先生な
り、公深く惟命を信じ給ひ、江戸述職の時は、大津の
驛に召て先王の道を諮問し給ふ、故に先生の門人多
く來り仕ふ、謙叔も其一人なり、惟命の子太右衛門も
來り仕へて長兵を司る、不幸にして世を蚤くせり、
寛永壬申清泰公（宮内大輔忠雄公事）卒去なり、公の叔父也、殊に
悼せ給ひて、

うきにそふ涙はかりをかたみにて

見しおもかけのなきぞ悲しき

とそよませ給へり、

公赤坂郡に獵（せ）し給ひ、夫より數日村邑をめぐらせ給
ひし時、ある所にて老農を集めて、終日耕作を語らせ
て聞し召し、日暮て老農共退出しけるを呼かへし給
ひ、植物の中何物が第一（にて稼穀イ）に多く得るやと問せ給ふ、各
答申けれ共怪給ふ、やゝありて、土地によりて多寡の
不同あるべし、聞及（き）たるは、異國にて芋を植て富たる

者ありと云、^{試イ}既に色々のものを植て見しに、果して芋に及ぶものなし、芋一つを植れば、大抵一升を得べし、一段に拾石を得べし、燥濕の地にもよらず、葉も莖も喰ふべきものなり、五穀に次たるものなり、汝等が不知^{イ元}の事はあるまじ、土地の不同によらんと仰有けり、

國清公^{三右衛門輝政、利隆}、與國公^{武藏守}

所に改葬あるべき御志ありしが、先國中に墓地たる山を擇れしに、三所の山を擇出す、其後今の敦士山に定りぬ、公巡視せさせ給ふ、敦士山は和氣郡和意谷の事なり、敦士山とは公の命け給ふ所なり、自ら巡視して和意谷に至らせ給ひし時萱の殊に繁茂してありけるを、案内しける百姓に夫かれと仰ありて、御刀に挿有ける小刀を抽て賜りける、^{イ元}今伊里中村源助の家に其小刀を取傳へたり、其後士大夫のために墓地を定め給ひ、儀冢山と命せらる、かの敦士山は國郡の東北にて十里餘に及べり、^{イ元}働村より其谷に入溪水・帶流れ出、これを左右に涉ること十八度、谷のありさま箱根山中に似たり、敦士山に門を設け、夫より道十八町餘屈曲して登る、道の幅一丈計もやあらん、其中央に川

石の踏石を八町の間に並たり、門の傍に公の入らせ給ふ館あり、左右に櫻の木ありて吉野山に似たりといへり、第一の高き山^豊國清公の隴にて、富鬘封あり、碑龜趺あり、李唐の禮を用らる、龜首高三尺餘、龜首西に向ふ、碑の高さ七尺餘、碑首に天祿辟邪を鐫たり、神道碑東の方に建て表の文詞を彫たり、第二の山は興國公の隴にて、夫人榊原氏合葬し給ふ、馬鬣封神道の碑あり、皆石柵あり、青き小石をまけり、第三の山に公を葬給へり、夫人合葬し奉りて馬鬣封ありて神道碑を建られたり、墓表の文詞を彫たり、公の行せ給ふこと禮により給はざることなし、

御野郡中原に公の遊覽^{イ元}の地あり、中原は旭川の傍にて、夏日暑を避給ふ時は爰に至らせ給ひ、里正の家に幕と串とを預け置せ給ひ、幕打廻し毛氈を野土^{蒿菜の上に敷}に敷せ、行厨を開きて憩はせ給ふ、今彼蒿菜の地數丈の間に牛馬を牧せず、公の憩はせ給へる地とて民共敬せり、召伯甘棠の古を思ひ出られ侍る、旭川の東岸に花畠と云所、もと清泰公備藩に封せられおはしましける時の別業に而、得月臺と名を云たりき、烈公の儉を事^{イ元}とせさせ給ひしかば、彼別業を壊りて、奇石をば皆

土中に埋させ給ひけり、

公身を終らせ給ふ迄、峻宇彫墻の好み露計もゑらせ給はず、古の聖人の訓にたがはざりき、

公鷹狩の路、伊移村にて稻を紙にて繋り合せ給ひしを、民傍にありて見しかば、如何なる故にや辨へざりしかば、有司にかくと申せしに、公聞し召、や、黙しておはせしが、させる子細もなき事也、予誤て踏倒せしかば、天民の日にさらされ雨にぬれ、千辛萬苦したるものを足にかけたれば、天道の畏しくてこそ繋置たるなり、かくせよと仰ありける、

寒夜に橋を食しさせ給ふ時、侍醫の冷たるもの如何候やらんと申せしに、やがて指置せたまひしが、後に危事も有けるよと、くり返し獨言仰けるを、侍せし女房如何なる事にやと問參らせしかば、さればとよ、先にゑかぐの事ありき、予夫計の事はゑりぬといはんとせしが、云はで止たりき、若是を云んには、是より後誰か予を諫る人のあらん、彼一言に而諫言を拒むの主となすべかりしを、云ざるは危き至極なりと仰ける、

公の東照宮に謁見ありしは、五歳の御時なりとかや、

其時劍を賜しに、御膝元近くにおはします、東照宮公の髻髪をかきなでさせ給ひ、三左衛門が孫なり、早く人とならせ給へとの仰なり、公賜る所の劍を取、するりと拙て御覽ありき、東照宮是はあやしき事よとて、御手づから劍の柄をもたせ給ひ、鞘におさめられたり、公退出し給ひし後、眼のすさまじき人ならずと東照宮仰有けり、

公鷹狩の時御食物の中に砂あり、怒色にあらはれしに、庖人御前に參り、いかでかは砂の候べき、今日は風惡敷候、御口中に砂を吹入たるべし、嗽せられ候へと憚所なく申ければ、俄に御詞を和らげられ、汝が申處道理あり、是は予が過なりとぞ仰有ける、

公下濃彌五左衛門を召て、池田伊賀を以て、櫛外記に預け置し弓足輕の中十人彌五左衛門に可預と命ぜられしに、彌五左衛門承り、新に預られなんには、十人は扱置、一人なり共辱と申べし、外記が中をわけて預られたるは、遙に外記には劣たるなり、軍旅の事外記が下に立べき身にあらすと申、伊賀側にありける、横目高木左近右衛門に、只今下濃が詞尤なれ共、先仰を奉りて後こそといひもあへず、高木いや

下濃の詞道理に候と詞鮮にとりあはす、伊賀止事を得ずして御前に參、未だ申上ざるに、公明敏にてはや察し給ひ、彌五左衛門いかに云やとありければ、玄か玄かのよし申上る、公笑せ給ひ、鐵炮足輕二拾人預けよと命られける、また誰にてかありけん、長槍（槍イ）を司るべき身にはあらず、我不肖なるを知りて命を奉るは君を欺なりと申、伊賀し（カ）れ共聞ざりければ、公聞し召、彼に程（七）なく鐵炮を預くべし、先長槍（槍イ）をいて預よと仰あり、伊賀出て進れば、高木側より我心よりす（元）まじき事を知たるに、君命なればとて請べきやといふ、伊賀またかくと申せば、即鐵炮を預られたり、彼高木左近右衛門は、使番なりし時、國城の東北川（川イ）を隔て、小性町と云ふ所の竹林にひより多かりしを、家來（來イ）をやりととらせたりけり、公御覽ありて、制禁の林に網をはる事やあると仰あり、高木此當直なりけるが、是を聞、さらば家隸は死刑なるべし、我等も腹を切べし、戰場にて討死すべき士を、小鳥にかへ給ふは殿の過なりといひしを、公聞し召笑せ給ひ、偕止み給ひけり、寛永壬申、大猷院殿俄に公を御召ありて、因幡より備前に封を移の命あり、五月廿三日公因幡を發し

給ひ、道中殊に急せ給ふ、あふつけ馬（カ）に召たもふ、此時のあふつけ馬に鋪たる鞍、今も武庫に有となん、何れの年（ニ）か述職の時、扈從の士乗かけに緋の紫ふとんを敷たるを見させ給ひ、誰人か美（伊）の至りを極たると仰ありけり、信濃守の天鵝絨の笠袋を爲（イ）持られしを見させ給ひ、大國を領する人の笠にや、珍敷事を見たと仰有ければ、其夜に卒に換られ、障泥を切て縫合せて袋となしけると也、

公常に小倉織の袴を召させ給ひ、これをぬかせ給ふ時もたゝむ事もなく、柱の竹釘にこよりを引張たるに侍臣に命じて掛させ給ふ、紫の服の數年に成りけるを、山川十郎左衛門かへんと申（元）せしに、予各にあらず尙かへず共、ありなんと仰ありて、又年經てあかつきければ、山川重て何とも申さで換たりける、衣服器物大形此類ひなりけるとかや、亦常に用させ給ふ印籠黒塗にて、象牙のくわらの帶（ハ）のあや印籠（小）の中に銀（小）のはひと入させ給ふ、今も猶閑谷の庫に残れるを見し人の語りき、江戸に而狹箱に金紋付候を持せ給ひしに、狹箱は予が着がへの衣服を入るゝ器なり、雜人に持せ行列の先にあるべうもなしとて、止めさせ給ひ

しとかや、亦偃月刀も無益なり、婦人の持すべき兵器なりとて止給ひしとぞ、泮宮に至らせ給ふ時は、必禮服をめし給ひ、必遠く乗輿を止て下りさせ給ふ、今の小島儀左衛門が門前より北へ過させ給ふ事なし、蚊帳の釣手くわんせよりに筆の軸を斷て結付させ給へり、

東照宮の閼宮を造營せらるゝに至ては、萬金を惜せ給はず、國中堤防の經營殊に力を盡し給へり、これ熊澤大夫が教を受させ給ひての事なり、惡衣服而致美乎黻冕、卑宮室而盡力乎溝洫と云給ひけん、大禹の昔に露たがふべくもあらず、

公國中の淫祠壞せ給ひし時、安仁神社は延喜式にのせたり、先王の禮典にありとて造營あり、夫より年毎に同姓の大夫を命せられて、拜禮の事始りける、

若松市郎兵衛、草加五郎右衛門、齋藤嘉右衛門三人は、大坂に而木村長門守重成に屬し、鳴野の軍に戰功ありしかば、采録を賜り召出されし、三人武功を論じて先登の前後を爭ひ訴に及しかば、御前にて判斷せらる、齋藤が先馳分明なりといへ共、木村が證書候とて出しけるに、木村は實に其時證書與られざるよ

り、齋藤が訴論然べからざるに決せらる、齋藤其朝酒を飲て無禮放言多かりし中に、御前を立出て大聲をあげ、目くらなる殿に仕へて訴に負たるよし申けるを聞し召、齋藤が無禮譴責せずは、虛亡の論長ずべしとて、嘉右衛門をば土倉市正、忤加助をば池田に預られ采邑を除かれぬ、され共剛の者なれば、用に立べき者也とて、甲冑と鎗とは武庫に納られて、其惡聲には少の怒もおはしまさうりけるとなり、

公江戸におはしまして、東叡山に參詣せさせ給ふ時、雨降りしかば、蒿菜の上にて衣服を着かへさせ給ふ事あり、諸侯には宿坊と云もの有て、それへ入らせ給ふと申ければ、それはよかりなんと仰あり、無程錄二三百石許もあたへられ候ひなんや、外の諸侯はみな然なりと申せしかば、公以の外に色をかへさせたまひ、士を養ふ天錄を何とて費せとはすゝむるぞと仰有りけると也、

東照宮廟造營は、正保元年の事なり、同三年より祭禮の大禮年々行れしが、明暦二年丙申九月十七日より、初て流鏑馬才番を命せらるゝ、いかなる人の云たりけん、因幡にて流鏑馬は伯樂のする事なりと云説の行

れしを聞し召、諸士朝して謁見の時、上泉治部左衛門を召て、東鑑流鏑馬の儀式、其姓名を高らかに讀、私黨の旗頭熊谷小次郎的持の約たるよしに及で止にけり。公の士に教給ふ此類多かりけり、また同じ祭禮の時、諸士甲冑して供奉する事を命せらる、寛文八年九月十七日、眞田將監士大將にて、公の前を過けるが、餘人は皆平伏しけるが、將監一人は^ハまかせざりしかば、側より無禮なりと云人のありしに、公將監は誰に軍禮を^{ヒキ}學びたるや、介者不拜と云事、周の代の古禮也と仰有ける、

何れの年にや述職の時、攝津國兵庫の海上にて、風あしく、浪猛にして、船既に覆らんとす、侍臣を^ハ始として必死に思定たり、船手を^ハ司りける岸藤右衛門、誠に危急迫切の時と走りめぐりて下知すれ共、風彌烈しくして、危事云計なし公藤右衛門を召て、死生有命よく心を平にして下知すべしと仰あり、公は泰然としておはしけるを見て、藤右衛門夢の覺たるごとくなりしとぞ、頓て兵庫へ漕入けるに、同所の網屋新九郎とやいひしもの、明松燃しつれて濱手へ出し故、是に力を得て、事故なく兵庫へ船をつけしなり、

公獵より歸らせ給ふ時、里正の家に人あまた集てさはがし、何事ぞと問せ給ふに、狐を追入て候に見えずと申、公聞し召、怪しきものなり、鏡を入れて見よ、化物明を遁がたかるべしと仰あり、即鏡を入れて見れば、果して梁の上にかゝり居たるが、鏡の内にうつりけり、

公の折節よませ給ふ十三經註疏、から桑にて作りたる筐二ツに入、荷はんやふになしたり、是は述職の時も携られたるなり、朱書所々あり、公の君子の儒を以自期したまへるにや、心を古の書に潜させたまへる、難有事なるべし、

公述職の時、道にて往年大猷院殿上洛有し時の事語り出させたまひ、此事誰や記憶せると仰ありしが、其時に扈從したる者なし、石川清介其事よく覺て語り候と申、さらばとて清介を召す、清介少も存候はずと申、かたへの人怪ていかにと問へば、清介公聞召所にて、われ年久しく勤仕する事懈らず、然に^ハまらせ給はざるは殿の不明なり、今往事を語り出さば殿の不明をあかすに似たり、我暗主に事ふるはいふにたらず、殿のくらきを^ハかくせし故に語らずと云しを聞し召、

公鷹狩して歸らせ給ひ、殿に入らせ給ひし時、青地三之丞今日の午芳狩得もの多かりしやと云を聞し召、をかき事を云るもの哉、子細あるべきとて問せ給ふ、三之丞承り、過つる頃鷹がりの御歸に、當直のもの倦たらんとて、其日の得ものを吸物にして賜しを、辱事と思ひ候しに、午芳のみなりしかば、さては今日も午芳がりせられしと心得候と答へ申せしかば、庖人譴られ、其日新に雁の吸物にして、當直の士に賜りける、此三之丞は、射藝に妙を得たと云ほどの者なり、寒中に的を射けるを、公御覽じて、三之丞が放れ今の見苦しきは如何なる事ぞと問せ給ふ、三之丞暮近く勝手殊の外あしく候と申ければ、公笑はせ給ひて銀子を賜りけり、

公西城に老せさせ給ひて後の事なりけん、初夏の頃螢の事物語せさせ給ふひねはは曹源按陳公郡中に仰てとらせ參らせけるに、公其取來りし事を聞し召、農民の隙なき時に、亦勞する事をさせしもの、何の樂みに成べきとて、殊に悦せ給はざりき、

寛永十年、大猷院殿向井將監忠勝に命せられて、相模國三浦にて安宅丸と云大船を造らせ、同十二年に成

て、六月江戸の海上にて、召初の儀式あり、諸公は品川の海邊に出給ふべきよしにて仰出されしかば、公其朝大夫人の召せ給ふ帷子を借らせ給ひ、それを召て猩々皮の御羽織にて出させ給ふ時、式臺に而や、久しく立せ給ひ、扇子をひらきて差上給ふに陳扇チイなり、本服の鉢よりして、あやしき事よと扈從の人々思へり、偕品川に而諸公達群集し給ひて、いかなる御饗束にやと尋らるゝに、いや少し存る旨の候と答させ給ふ、程なく大猷院殿御船に召し、諸侯の前御通ありけるに、あの衆にたがいたる衣服は備前少將なるべしとて、小船を以て御召あり、公則安宅丸に乗移せ給へば、大猷院殿御尋あり、公謹て御祝の儀式は御船中の事、臣等は陸を警固し奉ると存せしなりと答へさせ給へば、大猷院殿則御羽織くれられんやと仰有、脱て奉られしかば、酒盃を賜り、公起て自然居士の曲舞を舞せられしを、海邊の諸公見やりて驚くばかり也、夫よりして諸公直に出仕あるべしとて、品川表を退去ありけるに、供の士雜人原、遙の脇にひかへたる故、一時に寄集り騒敷事大方ならず、公かのあふぎをあげ給へる故、扈從の面々殿はあれにとて、頓て集り

ければ、公諸侯に向せ給ひ、供の人々騒動とみえ候、予が家隸を爰に残し置、予が邸士追々あつまり候はん様に申傳させばや、其内に予が邸に立寄られんや、一所に御祝に出仕し侍らんと仰ければ、皆辱よしを答られけり、公諸侯を引ともなひ、品川より龍之口の備前邸まで、諸侯歩行にて同道なり、邸に入らせ給へば、無_レ程盛饌を出して御饗應あり、是者伊木長門六拾人まへの用意を設け置しとなり、其後供の人人集りて、御悦の出仕ありけり、

諸士出仕拜謁の時、餅を串にさしたるを重箱に入て公の左右にあり、各壹人づゝ公の御前に參れば、賜りいたし、旨して退出しけり、かゝればいつも日晩に及べり、執政の人々公の倦せ給はんかと申せしを聞し召、我國せまくして、士を多く召置事あたはず、一度は士の拜禮に倦事あるを願共、叶はぬ事よと仰有けり、

承應三年甲午の秋、備前洪水に而、橋は諫筐橋只一つ残り、其餘皆流れしほどに、百姓の危難中々云計なし、公倉を發して賑濟せさせ給ひ、尙及がたかりしかば、大に患ひ思召て、とかく是予が政事の不善なるに

よりて、天の戒させ給ふ成べし、罪なき百姓の此災にかゝる事、悲にあまりありとて、寢食をさらに安せ給はざりしかば、熊澤助右衛門御前に出で、此事を議しけるに、臣に一つの策の候、江戸に參りて天樹翁主になげき申なば、捨置せ給ふべきに非ずとて、頓て直に備前を立て、かくと申されしかば、翁より公方に申こはせ給ひ、金四萬兩かし賜りしかば、是より錢にかへて、封疆を四方に運びて分ちあたへらる、政事に從ふ人の中にも、民の二度三度に及て錢米をわくる有、如何して改むべきといひしを聞召、事遅くば民共難隘いと遍かるべし、いく度なり共わがちあたへよとぞ仰ける、

山田道悦は、新進の士なりけるが、或日御前にて物語しける時、殿にはふきをきこし召ざると承り候、いかなる故にやと申、させる事もなき事とて、取合せ給はず、おし返して子細の有と承りぬ、其趣を正しく承り候ばやと、まきりに申ければ、公されば、先祖護國公の長久手にて討死ありしは、ふき島の中なりしと聞、其軍は義戰にあらざる故に、深く歎き思ふて、ふきの

うるさきなりと仰^{有イ}ければ、道悦謹て、それは殿には大なる幸と申ものに候、護國公田の中に而討死あらんには、殿には食を聞し召さで、餓死せさせ給ふべしと嘲弄しけるに公^イかへりて外の物語ありて、御咎はさらになかりけり、

公年ごとに狩させ給ひしに、泰山の狩は殊に列卒^{列卒イ}の手を別ち、士大將も相かはりて、實に周の代太閤の御志なりしと也、今の御野村水門の上に麾を立らる、備中の小侯達も、皆おはしまして觀られしとかや、此時狩終り・大雨降出けるに、御下知あつて、玉藥こみ置たる鐵炮をば、皆放ち捨候へと使者馳廻りて仰せを傳しに、岸藤右衛門承るとひとしく、足輕を並てうたせける、是は火繩を一所によせて、雨に消させざらん用意しける故なり、公則召て御感ありけるとなり、此狩の事江戸にも聞えしかば、明・年述職の後、江戸執政の面々々かるべからざる事と、人々譏せられしを聞し召、謁見の時備前にて狩にて人數の駈引を試るに、あつかひがたきものにて候、今太平の氣にふけり、士民に教なくては軍に及で棄と申、古人の訓へ候とする

事に覺候、各達も封國に歸りて狩りし給ひ試られんには、治にも不忘の戒に叶ひ、公方への忠たるべしと仰られければ、人々詞なかりけるとぞ、公新太郎様と申き、諸侯此事如何候らん、改らるべきかと物語のありし時、公其事は仰られず、近頃も江戸の町を通りしに、鍛冶に大和守、或は鏡磨もの、何の大掾など申名の候、さのみ辱くも覺候はずとぞ宣ひける、また酒井雅樂頭忠清、天下の執政として權威甚盛なりしを、公の邸中今の弓場に小書院のありて、其所に而度々御もてなしのありしに、忠清專恣なる事を仰出されて、上の御爲に大に不忠なるよし責させ給へば、忠清いはん詞なく、やゝありて少將に任せられ給ひて年久しく候、中將に任せられなん事を望ましまさば、其よしを申上べしと語られければ、公中將に進て何の御爲になり申べきや、封地をまし賜りなんには、夫ほどの奉公をばすべきにて候と仰られけり、

公西城におはしませし時、池田大學^{大學イ}黜陟^{黜陟イ}の事を申し退出しけるを呼返させ給ひ、今汝が云へる詞に心得ざる事あり、誰を何の職に叶ふべきやといひたり

しは、もし其人・よからの時イ元、されば始より疑ひ存て
決行し侍らざりしほどにやと問せ然イは申せしなりと、云開
べき爲なるべし、國の大臣は人を進めあぐるを職と
す、自ら任ずる所の職を、左様に身がナイまへしてよから
んや、汝が父伊賀守遠き慮ありて、予をも度々諫め爭
し人を進め、其職に任たるものなりき、よも汝は伊賀
が子にてあらじ、伊賀今致仕したる故に、汝若年なれ
共政を執行ふべきものと思ひたるは予が不明なり、
汝は伊賀が子なるや、誰人の子なるや、言聞すべしと
仰られ、頻に頻ニイなじらせ給へば、大學頓首して居たりけ
るが、涕泣しけるを御覽せられ、偕は伊賀が子にて有
けるか、汝がごときものに「國政をとらせるは危き事
なり、能心得よと仰ありて、内に入らせ給ひけり、後
に世に稱せられたる義雲は、此大學が事なり、

公執政の大臣伊本長門に閉門を仰付られし後、述職
に打立せ給ふ日、長門禮服して門内に待居けるが、乘
輿長門が門前を過させ給ふ時、門を開き只壹人進出
で拜謁し御留主の事前々の如く守護仕るべしと心得
候と申ければ、公は聞し召、平生の如くにと御詞かけ
られ過させ給へば、長門は宅中に入て門をさし入け

り、後に公この事を被_レ仰出、國の長臣として留守の
固の事まのあたり聞ず、かゝまり居たらんには、祿を
めし放すべきと思慮せしに、彼かしこくも出たるは、
大なる彼が幸なりと宣へり、

池田出羽足輕の卒を、造作の場所にて御歩行の者叱
りけるを、出羽怒り、御前に參り、まかゝの事虐使
仕候と申ければ、公聞し召、其事は予樓より能見たり
き、歩行の者云處尤なり、且士にあらずとも、予が法
を奉て下を下知する事なれば、其人の輕重によるべ
からず、汝が足輕をこそ罰すべけれど仰られしかば、
出羽甚色そのイをかえ退出せしを召かへされ、汝は天城へ
引退べきと思ふならん・天城へ引とらば汝が手柄サにてつくこと名なり只今討手命せしな
るべしと、あらゝかに仰_レければ、出羽退出して屋敷
に指籠居たり、はや討手を命ぜらるべきにより、殘る
公族大臣達色々多イに謝し申て、漸に事なかりけり、
公・殊に射法を好せ給ひ、御居聞の傍に卷わら有て、
弓組の士にかはるゝ射さしめらる、煩せ給ふ時も、
御障子の外に卷わらを置、弦音を聞し召、弓組二十人
を撰て麾下に備らる、是は古へ新田左中將義貞十六
騎の黨に擬せられたり、或時山川十郎左衛門を召て

百射の賭射をなされけり、公九十五筋中させ給ひ、十郎左衛門九十六筋中ければ、公弓を十郎左衛門に賜りけり、程なく又百射の賭有、十郎左衛門御相手に成けるに、公九十六筋中せ給ひ、十郎左衛門九十五筋中りければ、公笑せ給ひ、今日は予勝たり、さらば賭の弓出させと仰ければ、十郎左衛門先に賜りたる弓を出す、公是は此頃汝にあたへたる弓なり、別の弓を出すべしと仰ければ、十郎左衛門いや此外に弓はなしと申せしかば、さらば返し與ふると仰られしとぞ、其弓今に山川十郎左衛門・秘藏（秘イ）の器とす、

公國計を重き事として、時々自分問召、常に量入以爲出給ふ、且錢を鑄さしめられん事を議せらる、富國の計これより然るべきはあらずとして、其事定りけるに、錢鑄上手を、諸侯の國へは出されざるよふなりければ、湯淺右馬允を使として、京都所司代に所望ありければ許されぬ、是よりして國殊に富たりとなり、昔錢鑄し所今の錢屋敷是なり、公常に異教を排し給ひて仰ける、漢の光武帝はさばかりの人君にておはしけるに、讖緯の說に迷はれき、よく心を用べき事なりとぞ、

青地善左衛門納戸役なりしに、一年述職に従ひしに、京都にて一條家より墨跡を公に送り物にし給ひしかば、青地に命せられて、江戸にて装演させよとなり、青地頓て道を急ぎ江戸に趣、事のよしとて着せ給ふ時、床にかけ置しかば御悅有しを、山内權左衛門よき序と思ひて、加祿有べきやと申せしに、公色を正して、賞罰は重き事なり、今かゝる程の事に加増あたへなば、戰場にて大功立たる士をば、いかにして賞すべきや、青地呼とて召されけり、山内則青地を具して出ければ、公今權左衛門玄かゝ云たりし故、我玄かじか答たりき、此度は骨を折たる故、是をとて自ら外套を賜りけるとぞ、

文政五稔春後正月於柳塘館つれづれのまゝ愚子克昌に與んとて寫しぬかならずしも人々に見せんとて寫せしにはあらず

松 高 朗

上津靈神言行錄卷之上

事實

一其略曰、寬永二十年、癸未、七月四日移封奥州會津城、領知二十三萬石、八月二日發府、八日入會津、自巡郭、察諸士之居第、隨分賜之、尋而行封域、是歲免領內逋欠金三千五百兩、

一正保三年、丙戌、賜於小川庄永谷村孝子次郎右衛門米拾俵、自是每歲給老養、次郎右衛門拜賜之後、粟米數升齋之、其餘以舟運之、人問之、則云、若有覆沒之患、則恐國君之賜不達我親、故則齋之、同日免郡中逋欠負金二千八百兩餘、

一四年、又在會津、十月令領內達下情、自點檢其狀、如其情願、

一同年、冬召家長有司者、設席自點茶賜之、示官反內貨來五字、

一慶安元年、秋在江府、免會津前大守以來橫稅二萬石、

一四年是歲悉去所蓄猿樂人、禁領內倡戲之輩、一承應元年、在江府、是歲始讀朱子小學、尊崇之、

焚從前所讀老佛之書、

一同年、編輔養書一冊、以獻幕下、

一二年、是歲貸金壹萬二千七百兩餘于家中、

一三年二月二十九日、令領內士民不得私度僧、

一同年十月十八日、令曰、子訟父奴訟主、則懲創子

奴、父子相訟主奴相訟、則先懲創子奴、又云、有孝

行者可以告之、

一同年十一月十六日、遣橫目巡察鄉村、問民疾

告、

一其歲、朝鮮乞來朝之期、時西國大水、鄉邑蕩滌、老

中相議謂、使異國之人見之如何、欲暫止之、曰

天災流行無國無之、彼犯風濤萬里之險而來、豈

不我國之慶乎、何以一災之故止之乎、乃定來

朝之期、

一同年、貸金壹萬二千二百兩餘于家中、明曆元年初

置社會、

一二年九月七日、褒賞於孝子黑澤警者長薰、小平渴

百姓清十郎、給與孝養料、

一三年丁酉、正月十一日、改定軍法、令十箇條、禁五箇

條、

一同年十九日、江府大火、天守樓檣邸第市肆灰燼、官庫亦盡燒、重寶皆亡、老中憂_レ珍寶亡、而議_レ密_レ之、曰是何足_レ憂、亦何可_レ密哉、同二月有_二台命_一、賜_二金子火災之家_一、老中惜_二官金之耗費_一、靈神曰、君之金君用_レ之、實國家之大慶也、府庫之財非_二其財_一者古來有_レ之、是又可_レ知也、

一同五月二十六日、令曰、民有_二困窮者_一、即時賑給、不可_レ遲滯、

一四年夏、上杉播磨守疾病、井伊掃部頭酒井空印相議曰、以_二男新助_一爲_二之嗣_一、靈神不_レ聽、

一萬治元年十月二十一日、令_下領內增_二蓄糶糴_一以備_中飢饉及軍用_上、

一同十一月二日、明僧隱元貽_二隱費錄一部_一、靈神卻_レ之、

一二年九月朔日、江城成功、初井伊掃部頭、酒井空印、及老中、議_二江城經營之事_一、以_二天守_一爲_二今般土木第一功_一、靈神曰、城起_二天守_一近世之事、實不_レ關_二要害_一、徒備_二觀望_一而已、方今不_レ可_レ費_二國力_一、遂不_レ起_二天守_一、

一十二月二十四日、禁_レ灌_二水于寒者_一、

一是歲、又貸_二金若干家中_一、

一三年六月二十一日、岩崎助左衛門初謁、聞_二其務_一三年喪、而召_レ之出仕、

一寬文元年閏八月六日、禁_二殉死_一、是靈神固所_レ惡、而內藤源介承_二其美意_一、急請_レ禁_レ之、即使_二源介演_中禁令_上、源介乃演_レ之、而上_レ書以告_二皆奉_一承_二之_一、靈神甚喜、愜_二素懷_一、而親筆_二其喜意於上書裏面_一、以反_二賜之_一、

一二年九月十四日、以_二野州下館鷹場_一還_二上之_一、

一三年五月二十三日、於_二營府_一出_二武家法度二十一條_一、諸大名登城、列_二坐於御前_一、靈神挨拶、入御之後、令_二酒井雅樂頭演_中禁殉之旨_上、靈神嘆美曰、此垂仁孝德以來之仁政、而本朝之憲令也、

一同年七月二十五日、遣_二佐藤_{後改友松}勘十郎於會津、而命_二奉行菅勝兵衛、赤羽市右衛門、巡_二行領內_一、察_二民之窮泰_一、九十以上、無_二貧富_一與_二老養_一、且夫火葬者不孝之至、能教_二戒之_一、殺_二產子_一者不慈之至、能教_二諭之_一、及巫祝神官等、假_二妖術奇怪_一惑_二人者_一、可_レ嚴禁_レ之、凡異言異色之屬、一切追_二放之_一、

同日令云、愈守_二前令_一、務_二儉約_一、又云、行旅有_二疾者_一、

則遣醫看之、勿忽、

一 八月二十一日、復申前令、禁諸士田獵、暴苗稼、

一 十二月領內每壹萬石之地、造倉積粟、備防飢饉、

◎黑一川本
無是一條、

一 四年甲辰、正月二日、賜金于河沼郡下居合之節婦、

夫死寡居、男屢來欲犯之、婦固守不從矣、男怒欲

害而傷之、彌不肯、吏聞達公、有賜、

一 同年五月四日、會津城善軍金若干、不他用之、

一 同年八月九日、遣營勝兵衛巡領內察民情、同日

令佐藤勘十郎省領內風土、是月、南部山城守卒、

無子、有二弟、遺言云、弟皆不肖、不欲立之、願

別有台命立後、幕府召二弟云、汝等不協亡兄

之意、然惜舊家之絕、今分其地、賜仲八萬石、季二

萬石、先是、老中議以正純爲之後、靈神不肯、

一 九月晦日、定領內士民葬地于大窪山鄉原山及小山、

一 是秋令弘文學士林恕修本朝通鑑、永井伊賀守監

之、是當代盛舉也、靈神甚喜之、

一 十二月二十七日、令停追鳥獵、

一 是多大雪、令市屢采薪于大塚山鄉原山、

一 五年乙巳、八月二十四日、遣赤羽市右衛門巡領

內、察民情、

一 九月五日、靈神召成瀬主計、柳瀬三左衛門、佐藤勘

十郎、曰、聞正經在會津、飲食淡薄無所采擇

也、甚悅之、常告戒儉約、而諸士未盡能守之、

吾自謂不耽衣食、而中心猶有奸之否耶、自今

以往、吾當着纈絹、戒中門、令勿服綾羅、汝等

愈守儉約、常服紬絹、不可厭蔬糲、靈神嘗愛江

信民咬菜之語、使狩野探幽圖之、掛于座右、

一 六年丙午、八月六日、會津風土記成矣、前此靈神惜

皇代風土記之絕、遣佐藤勘十郎、遍巡領內、山川形

勢、道里、關梁、土俗、物產、戶口、民數、一一疏上之、

屬山崎喜右衛門潤色之、凡六年成矣、將以獻

幕府、推之總六十六州、欲無國不在輿圖之中、

一 九月十一日、登城、老中相語及會津風土記、皆稱

美之、

一 二十一日、令修塔寺八幡宮、建鳥居、去佛像、

同日令毀二十年來所建寺院堂宇、且異言、異色、

萬歲舞、獅子舞、諸街戲、乞食者、一切禁之、

一 十月三日、置造言者山鹿甚五左衛門於播州赤穗、

前是靈神謂老中曰、當世有造言者、是惑世誣

民之賊也、可嚴禁之、老中領之、

一七年丁未、二月十日、令修郭內諏訪社、毀佛像、去佛像、

一十二月十二日、假貸金二萬壹千餘兩于家中、因出條令、

一十一年辛亥、十一月十七日、奉土津靈社之號、吉川惟足書之、

一同日惟足上神道傳授一事二事三事四重之證明、且上靈號之說、

一同日遺書于正經曰、我之身後依靈號之儀、藏于壽穴、則足焉、友松勘十郎書之、

一是月令云、諸士死而無所歸、則宜助其葬、

一十二年壬子、正月十一日、復令、公領代官納金不可權使、同日令云、箕田弟儲金若干、備不虞、不他用之、

一四月三日令云、步卒死于江府、則宜與金葬之、死者腰刀衣類則可遺于妻子、不可漫之、

一七月令云、米納則可頒與于家中、金亦次之、

一八月五日、賀正經參府、饗于園、召井深茂右衛門、柳瀬三左衛門、友松勘十郎、及菅勝兵衛、小原十

郎右衛門、使齋院春意讀家訓、靈神每條解說教諭、

一十二月七日、使齋院春意讀朱子語類、聞其言、六十一方見得聖人一言一字不吾欺、則謂戶枝後改桃澤

某曰、大賢尙然、吾等近年有想像之見、豈不辛哉、吾所見常所語、今無以異、身後勿忘之、是夕病作、

一十一日幕府聞病甚、久世大和守來問、大和守執其手、宣台意、懇惻切至、是日正經母堂視病、正經侍

之、靈神言曰、吾沒後必勿言政事、汝能守此言、則我神永安、母堂諾、

一十五日靈神告稻葉丹後守曰、余嚮作家訓、附子臣、此外別無遺言、死後若有違之、則請質之、能爲予語之濃州、

一十八日寅下刻、終于正寢、壽六十二歲、

行狀山崎嘉作

一其略曰、靈神自幼善字讀書、聰明絕人、四歲以來所經之事、歷々不忘之、平居無惰容、進止有常度、冬不擁爐、夏不就涼、卯出于外、亥入於內、朝晡有時、食饌不豐美、既徹則講明經傳、評論

史子、其間靜坐一室、或縱觀亭上、◎五字 黑本無、或散步園中、或植花於瓶、或潑茶賜家臣、其待人也、無貴賤、一以誠、疎遠者瞻之也嚴、接之則恕、親近者望之也溫、就之則厲、道人之善、不稱人之惡、洞照情僞、而好惡之色不彪諸外、愛人之厚、未嘗棄一人也、其爲學也、初讀四書、未護其要、則留意於老釋之書、後得小學好之、從事於誠敬、而知大學之道、斥異學之非、功夫日進、無交戰之病、從伊川好學論、入明道定性書、以謂、非靜坐習敬、爭得入此道、又謂、於道無所見、雖學無益耳、因編傳心錄、以示於人矣、又玩索玉山講義、而使嘉抄朱子文集語類之說可與此相發明者、反復之、分其類爲附錄三卷、玉講之義精之如、是者未之有、而性命之說之詳至此、無復以加焉、然而未發之愛之爲仁、無迹之藏之爲智、而仁智交際之間、則其獨見默契處、朱門兩西山并九峰之外、人之所得而不識也、神道之書中臣祓者、始於兒屋命、而成于種子命、神代卷舍人親王所紀、此二書則我國唯一之傳、而不雜乎他三教之言、靈神尊信之、守五德之聚、得

八耳之通、心柱卓然、而不東以西、不南以北、所謂虛而有靈、一而無體者、其神會心得之妙、非言語文字之所及也、則親王之後、孰能與於此乎哉、其事、君也、敬之盡忠之竭、將登城、宿戒夙朝、公儀防漏洩、莫外聞、獨所著治教錄可以觀其志而已矣、又曰、靈神在高遠也、不曾求苟進、人或爲言而不爲此所動、台聽甚悅之、被封於最上、也、年未壯、施設周詳、而措置精練、入會津及不惑、則學正而德成、示人倫、教儉誠、奢遣家臣巡行封疆、脩城郭溝池之固、知山林川澤之阻、作風土記、興廢祀、毀淫祠、定神社志、仕者祿外定職料、時假貸令償債、民事不緩之、建社倉、防於水旱、行常平、使穀價不翔踴、編戶安全、不困於征斂、誨諭焚屍所子者而禁之、士民信而化之、行旅疾病有所養、或送諸鄉里、或死則葬之、凡倡優遊戲之流、異言異色之輩、不入於境焉、夫殉死之慘、倭漢振古有之、而今天下禁而止之、靈神讚美之曰、此再舉垂仁孝德二帝之仁政、實本朝之憲令也、若靈神禁火葬、則宋太祖程明道以後之善政也、其於不養子者、則

不爲漢賈父之嚴制而自止焉、

又曰、承應癸巳之冬、任中將、敍從三位、乃拜官辭位、遂敍正四位下、

又曰、寬文丙午、靈神感病、乞身而不許之、使其進退自安、適之、戊申之歲、著家訓十五條、以附屬子臣、首舉事君之義、而言下違吾志懷二心、則非吾子孫、汝曹勿從之、中言選士嚴武備、激勵風節、不可爲利害枉道理、末言下驕而失志、使士民失所、則何面目領土地乎、以致丁寧之意矣、

又曰、壬子冬十二月七日、使侍史讀語類、而聞朱子言六十一方見得透、則喜謂左右曰、大賢尙然、吾等近年有想像之見、不亦幸乎、不然醉生夢死耳、

又曰、十八日終於城南箕田邸、上自朝廷下至閭巷、莫不慨歎爲國家惜之、相弔者往來絡繹焉、令胤正經善繼其志、不作佛事、以明年春二月丁酉歸葬於會城東北盤梯見彌山矣、夏建社、請

吉田兼連安鎮之、延寶甲寅之秋立碑、

碑文山崎嘉作

一其略曰、靈神性剛正而和淳、自幼讀書、不惑年始讀小學、知大學之基、焚香向前所讀老佛之書、專攻濂洛關閩之書、用力於敬、功夫日親也、其言曰、主一無適、則存得未發之氣象、動亦定、靜又定、聖人無情而性之者、其庶幾乎、又云、程門靜座法、楊氏羅氏李氏能授受之、三子傳心錄於是乎編矣、嘗歎玉山講義之精、爲之附錄、則舉其要曰、仁之生意、親功之味、卽未發之愛、一意一理、而萬物之所、以爲一體也、又曰、智藏而無迹、識此而後可以語道體、可以論鬼神、又曰、仁智交際、萬化機軸、此合天人之道也、嗚呼可謂說約矣、知此要約者、朱門蔡季通仲默真希元之後、未有斯人也、日本神代卷中臣祓者、我道傳授之書也、靈神學之、得吉田家之傳、邇五十鈴川之流、神武向日之畏、應神秘道之敬、奉持而著之心胸之間、實弓兵政所、崇道盡敬天皇以後一人耳、其事君也、大義常存於心、念念不忘、以安世爲悅、而下一以毫欺之、恐己忠之不盡、而不欲人之悅己、其所書思對命悉燒之、人無得而知之、周公之于身、亦優爲之、欲得夷齊無怨之仁、厭聞湯武

革命之義、常言、文王至德處、孔子以來韓愈程朱發之、秦伯至德處、孔子以來惟朱子明之、夫然後天下之爲君臣者定矣、因言、事代主命本朝秦伯也、又常稱「明道愧三視」民如「傷四字」、愛「范希文先憂後樂之語」、使「侍史讀」倭漢歷代之書、察「治亂之幾」、論「興亡之迹」、考「諸地宜、質、諸時義」、編「一程治教錄」、以寓「乎其意」、其治「會津、城隍郭郭時省督課、儲「軍糧、備「兵器、作「風土記、坐知「四境、正「神社、爲「之志、廢「佛道、斥「僧寺、置「葬地、禁「火葬、立「社倉、行「常平、謹「權量、寬「租稅、制「糶糴漕運之法、聽「訟本「人倫、察「事情、遣「監司循「封內、下情上達、凶年防「之、饑歲賑「之、九十以上歲與「口養、孝子節婦賞「之、不忠不弟罰「之、窮人無「歸則給「之、旅客有「疾則濟「之、未「曾有「一人餓孀者「也、又曰、六十一蒙「土津靈社之號、壬子、之秋行「于會津、卜「壽藏於盤梯南麓見禰山、詠「倭歌以賦「其事、蓋仁以爲「己任、生無「所息、望「擴則知「所「息者歟、夫我神國傳來唯一宗源之道在「土金、而卽敬也、蓋土與「敬倭訓相通、而天地之所「以位、陰陽之所「以行、人道之所「以立、其妙旨備「于此訓、靈神達「乎

此、靈號良有「以矣、是冬歸「府、病臥「於城南箕田邸、公使國老數來、十二月十八日終「於正寢、臨終不「異「平生、惟仁義之言、而安然氣絕、壽六十有二歲也、公哀痛賻「之、諸侯惜「之、女院聞「訃甚傷、關白以下嗟嘆弔「之矣、孝子正經治「喪不用「浮屠、衣倉棺槨必誠、晦日大舉至「于會津焉、癸丑、之春三月二十七日大葬「於壽穴「矣、夏建「社請「神祇管領長上卜部兼連「安「鎮之、厥壇曰「土津靈神安鎮座「矣、延寶二年之秋鐫「石立「碑、

見禰山廟記弘文學士作

其略曰、故通議大夫虎賁中郎將兼行肥後權守源公、久鎮「會津、會登「此山、察「爲「靈區、定「壽藏之兆、寬文十二年壬子、十二月十八日、公卽「世於江府箕田第、依「其遺命「棺槨之具倣「用儒禮、護「送靈輓而到「會津、葬「於見禰山深奧之處、築「墳立「石標、乃是公所「豫定「也、公素敬「神道、潛「於心其書、究「卜部家者流之秘蘊、又曰、夫惟公者、台德大相國側室之子、而大猷贈大相國異母弟也、幼而養於信州高遠城主保科正光家、襲「其封邑三萬石、贈大相國以「懿親之故「恩眷深篤

也、寬永十一年從臺駕入洛、任拾遺、十三年丙子、之秋、移封出羽國最上城、領二十萬石、二十年癸未之秋、改賜與州會津城、復加三萬石、公就封以來、撫民而惠、施令而教、講武繕兵器、以備不虞、正保二年乙酉、四月今大君幕下初冠、公勤理髮事、轉左衛少將、慶安四年四月贈大相國不豫、彌留大漸、近召有顧託之旨、公銘心肝、謹承之、爾來當輔導之任、平章國家大政重務、位在執政上、如漢東平故事、承應二年八月幕下任右大臣、公奉鈞命入洛、十月參朝啓事、行禮且拜太上法皇新上皇東福門院、有恩賚、有獻物、畢事歸府、轉左中將、而後有可敘從三位之詔、然固辭、乃罷、明曆元年乙未、之冬、朝鮮國信使來聘、禮曹寄書、公作回簡答之、其聲名之高、匪啻蹟於闔國、聞達於殊域、可以知焉、平生奉上下存誠敬、抱忠義、且其才之敏、量之重、德行亦備、人望而畏之、懷而服之、世皆以爲併房杜謀斷兼郭李寬嚴也、及四十歲、而好讀儒書、排異端之說、專信聖賢之道、講習悅釋、工夫丁寧也、守宋儒之正說、有所發明、棄象山陽明之論、有所決斷、嘗

獻輔養編、以彰翼成調護之志、抄二程治教錄、便於政要之助、纂楊維禱心錄、而記洛閩正派之所由、演玉山講義、而加附錄、知朱學之精詳、作會津風土記神社志、不忽恩澤之所覃、皆得備御覽、暇日詠倭歌、以遺志、其餘履歷行實、非藤竹之可輒盡焉、計告所至、無貴賤無遐邇、爲國惜喪良弼、爲道患缺真儒也、公有六男八女、其一男幸松三男將監天亡、四男正純早世、第一女諱媛、適米澤侍從綱勝、第四女諱松、適加賀中將綱利、第五女諱石、適稻葉丹後權守義雅、與其姊妹皆掩粧、二男正賴爲家督、蒙蒙恩、號長門權守、任侍從、先逝、今唯良嗣與其季弟存矣、公罹憂頻々、然哀而不傷、悟三死生有命、不肯忘官事、所謂素富貴行乎富貴、素患難行乎患難者乎、助其哀者皆曰、天道無知、依公喪子何至此哉、

又曰、新廟旣畢斧斤之功、良嗣求記其事於余、懇請不措焉、余亦以其晚年願遇不淺、故不能固辭焉、古人不云乎、身既死神以靈、由是推之、則公非尋常之人、豈其不有靈哉、況此山元是所素

望也、精氣遊魂捨此何適、其建社崇之固當、嗚呼明爲人齒則爲神者、理之常也、如公則善養浩然之氣、其靈何可依形而立隨此而亡哉、至大至剛塞乎天地之間乎、然則山嵐所觸、松杉之鳴、抑其神之肅然而來格乎、果是精爽之感動乎、夫神者無方而陰陽不測、視之而不見、聽之然弗聞、何以知其所以來格、何以知其所以感動、唯其孝子之祭也、蘋蘩之薦、簋豆之設、香煙升而鬱鬯灌、禮節備而敬有餘、則昭明翬蒿悵恤神著之謂、而誠之不可揜也、易曰、鼓之舞之、以盡神、其盛矣乎、神能感之享之、則保其子孫黎民、以介景福、延寶三年乙卯臘月中旬、弘文院學士林恕之道謹記、

二程治教錄序弘文學士作

仲尼曰、用之則行、舍之則藏、其用之也、與聞國政、纔三月、魯國大治、若得其大位、則天下被其澤、而四三皇六五帝也、然不膺其運、則美玉韞匱而藏、諸其身、雖藏其教載在六經、爲萬世君師、歷朝治教錄永賴其法、則其功賢於堯舜遠矣、此是古來公論、詳言之爲贅也、頃歲會津左中將源公之輯二程治教錄、亦此之謂乎、二程夫子生

於宋之中葉、而道學純粹盛德全備、實是希世間出君子也、若遇有爲之君、則比肩并益、而伯仲伊呂也、然時君不容之、茲相以沮之、或終於外宮、或老閑散、縱雖不得志於當世、其遺書之中有補於治教者、亦是爲六經之亞匹、後世之模範、則其功非漢之內魏唐之房杜等可跋望也、世皆知二程之紹孔孟之道統、未知其治教之垂不朽、然則公之所見、豈尋常淺者之所及哉、錄成數年、寄不佞一求題其卷端、於是觀其輯錄之趣、則上篇之首載易承神道之設、上古無爲之化、堯舜二典之法、蓋是寓本朝開於神代、而神武創業、崇神守成之義乎、可以感刻焉、其餘或綱常、或禮則、或政跡、或井田、或喪儀、或祭法、或辨賢否、或論異端、條條件々雖不必立類、其敍次第非偶然者、自可見也、下篇載劄子、諫疏、講筵之奏、時事之論、經傳之說、贈答之書、悉皆無不便於治平、而可以稽古制、可以教其時、可以行後昆、若夫損益從宜、則施之於異域、移之於今世、亦不爲難乎、竊惟、本朝之神道雖秘而不公言、然與王道並行、則一而不一乎、王道使仲尼之道也、發明仲

尼之道者、二程爲最、由之觀之則錄二程之格書、以爲治國教人之階梯、則隆盛之化益厚、太平之業逾久矣、

二程治教錄山崎柯作

一其略曰、嗚呼知言也其難矣乎、二程全書所收粹言之爲書、以其名則宜莫過之者、而其實則徐必達考焉不精也、柯閱楊張兩家集、斯書非龜山之所爲、而其序亦非南軒之所作也、朝鮮李退溪亦嘗議之矣、朱子有言、胡明仲文伊川之語而成書、凡五日而畢、世傳河南夫子書、乃其略也、竊謂粹言卽此是也歟、

又曰、源太守治教錄、以易傳經說遺書外書附錄之語、爲上卷、文集遺文之言爲下卷、而不取粹言、因書厥後如此矣、

伊洛三字傳心錄序弘文院學士作

一伊洛三子傳心錄三卷、會津中將源君之所編纂也、一日辱使示僕曰、洙泗道流源遠未微、至伊洛又盛矣、伊洛多流、然得其道脉者非龜山楊子乎、楊子以是傳之於豫章羅子、羅子以是傳之於延平李子、而至朱文公、窮伊洛之淵源、而洙泗之

遠亦會同于此、程朱有功於聖學者、因其遺書外書語錄全集遍行于世、而人々粗窺之、如三子之書者、未及家々藏之、則或有不見乎、暇日使侍史讀三子之書、往々抄錄之、頗覺二程學心法之傳在茲也、心之所感不得措焉、積集爲三卷、卿其序之云爾、僕聞其高論喜其盛慮、不能固辭、聊述微志、謂聖人之學至博、然約之、則唯以傳心爲要而已、昔程子送楊子曰、道々南、則其傳程子之心昭晰也、羅能傳楊子之心、李能傳羅之心、楊維李之心使程子之心也、程子之心使聖人之心也、欲知所然、則見此三卷可知、其大槩、既舉則其餘可推而知之乎、就想、仲尼之心至孟子而著明、然曾子子思之正傳有所由來也、朱文公發揮程子之心、集諸儒之大成、亦三子的々相承之力有所預乎、宋季以來元明之間、附翼程朱之學者車載斗量、未有合纂三子之言者、則所以君之注意于此、可謂沈潛於聖學之至也、此書若廣行而朱學者追尋其所自出、又認得其所授受、則於程朱之書亦有補益者必矣、嗚呼斯道不隔東西、不限古今、前聖後聖一

揆也、苟熟練傳心之工夫、則豈啻程朱而已哉、堯舜仲尼之心亦不可牆面乎、

伊洛三子傳心錄序山崎嘉作

一洙泗學絕、而伊洛再傳焉、楊中立始從學于明道先生、受中庸之書、後卒業于伊川先生、其志以聖人爲可學而至、自勉教人以靜一體驗之法、是乃所聞於兩先生、而其本則從周子來焉、羅仲素聞諸龜山、李愿中聞諸豫章、而皆靜坐養成其德也、至濂溪之風月照乎延平之水壺、則灑々落々瑩徹無瑕矣、若夫靜坐之似禪定、則朱晦翁嘗明辨之、彼口耳之徒偏執其救蔽責備之言、而不問三子之所爲三子矣、夫三子志學立心之固、從師求道之切、後世學者之所不及、而其相傳指訣、則漢唐諸子之所不曾知也、苟非眞用居敬窮理之力、實見大本未發之中者、孰能識三子之度越諸子矣、嗟乎晦翁說夢之譏、吾曹當自省以喚醒焉、豈徒爲諸子之事而已哉、源太守反復程書之餘、看詳三氏之書抄錄之、彙爲三卷、名曰伊洛三子傳心錄、嘉讀之、窮有感焉、於斯乎序、

三子傳心錄跋山崎嘉作

一心之爲言出於虞庭、而列聖傳授之法、子思著諸中庸、所謂喜怒哀樂者、皆心之用、而未發之中、則心之體者也、中節之和、則用之行而不失其體者也、孟子傳此心法、以著七篇、所謂執中聖時君子之中庸也、四根之性者未發之中也、四端之情者中節之和、千變萬化只說從心上來、及其沒而其傳絕焉、唐之李翱雖尊中庸一作復性書、然滅情之言、釋氏之中庸、而非孔氏之中庸矣、宋之周濂溪繼絕學著圖書、其曰主靜立人極、則戒懼之謂也、其曰無欲靜虛動直、則致中和之謂也、二程受學濂溪、而遂爲諸儒倡、明道教人靜坐、伊川每見人靜坐、便嘆其善學、繇是觀之、若楊羅李三子、則可謂善學務本之君子矣、今儒者自謂學周程而未曾用一日靜坐之力也、甚者謗靜坐以爲異端、學之不講可憂也、源太守傳心錄正爲此而編也、藤子默尤重之愛之、手寫之以示余、且請一言以題厥後、予開而覽之、筆墨之溫潤、字畫之楷正、固非譟急忙迫者所得而爲也、古人云、書心書也、心盡形、君子小人見矣、可不慎乎哉、

玉山講義附錄序弘文學士作

一其略曰、玉山講義、其字數未滿三千言、然教人親切之訓備盡矣、所謂說約也、此是講義收在文集、則猶巨海之一滴大倉之一粒、故潛心着眼者鮮矣、獨會津中將源公表章之一翫味之、而稍覺有得於心、然慮若無格致之功、唯讀是已、則有急迫之失、而載講義於上頭、而參考語類文集、以演繹之、推擴之、輯爲三卷、卷中又分限類次總七卷、號曰玉山講義附錄、既成有年、有求者則贈之不_レ敢秘焉、不_レ求則不_レ必廣焉、乃是勵有志者、而不_レ誇其名乎、僕亦幸得一部之惠、而聊知其用力之深也、

又曰、竊謂、以顯貴之身、新抄纂之事、自非平生孜孜勉々好學之篤、豈可至此也、且聞語類文集之中、先儒未_レ著心漏_レ開示者、往々搜索載各條之下、則其識見之明亦非尋常之比、而所以深造自得者、不可_レ測乎、

玉山講義附錄跋弘文學士作

一不佞應會津源君之求、而既作二程治教錄伊洛三子傳心錄序、今又辨鄙言於玉山講義附錄之首、三

書共是君之所編纂也、以其道學之傳言之、則二程爲宗、楊羅李受之、至朱子而全備矣、以其爲學之次言之、則先讀玉山之講、可_レ推極知識而窮至物理、漸熟格致之工夫、則讀傳心錄可_レ實心之所_レ發而守身之所_レ生、漸熟誠正之工夫者、所以修身也、於是讀治教錄可_レ以思所以齊家治國推施之於天下、亦豈他求哉、若反復言之、則傳心錄者明明德之要乎、治教錄者新民之教乎、玉山之講者、止至善之務乎、大學之綱條其相合如此、則中庸之九經亦可_レ併按乎、然則見此三書、而可知_レ知_レ君之研覃道學之篤實而發揮也、就想三書孰重孰輕、果不可_レ偏廢焉、然傳心者、可以藏於密也、治教者可_レ以彌六合也、如講義者、散爲萬事、復合爲一理之謂乎、嗚呼玉山遠乎哉、未_レ之思也、思之則講義在焉、夫何遠之有、所以纂附錄者、所謂念茲在茲也、

會津風土記序弘文學士作

一其略曰、本朝自神武創業、百王一姓歷運不改、國郡之名自景行成務寢備、至和銅馭寓、畿內七道國郡風土之記資始、其後歷朝有損益修飾、及延

長而大成、於是六十六國之山川土產人物戶口可坐而知焉、乃與漢唐之一統同美、而上庶幾唐虞之盛、下不讓明朝之志者乎、爰追中葉、乾綱不振、干戈頻起、加以火災、而風土記亦湮滅矣、自此輟軒之使絕、而方土之言不奏、而不能再興也、然猶幸有出雲一國全存、又有豐後國之殘簡、且有一段一事之見於舊記之中者、則古之遺式雖可追尋、奈無文獻之徵何、豈不嘆息哉、

方今闔國混一、車同軌、書同文、則教令徧降、則六十餘州之風土可立而致焉、正四品左中將源君者、貴介之顯族、而武林之模楷也、封奧州會津郡城、而兼管耶麻大沼河沼三郡、常惜風土記之絕、而喜遇一統之化、而試記會津管内之疆界、風俗城主郡村山川道路土產神社佛寺墳墓人物古蹟等、爲一卷、草藁既成、申命家臣巡見管内、詳問於鄉耆、質之舊證、擇其正者、刪其疑者、如其奇事怪行、則姑任傳說、不必除之、使覽者自悟也、檢之定之、頃間淨書漸畢、一日、◎使覽者云々以下黑川本缺之招僕請作之序、僕顧其爲書、則四郡之廣、縮於一策、懸於雙眼也、蓋不勞孟子之轍、有成子長之遊之

趣、不亦幸乎、竊聞、滕國之仁政者天下可取法、橫渠一鄉之試亦可施之天下、則此管内之風土記、於五畿七道、豈不微依之乎、豈不準知之乎、君之盛慮雖不輒測焉、僕之微志無敢隱焉、云爾、

會津風土記序山崎嘉作

一其略曰、六十六國名風土記、始于元明天皇、成于醍醐天皇、夫王者、在室中、周知四方之地域邦國之要害、則賴乎圖書之存焉、此周禮大司徒之所掌、職方氏致其詳、隸於司馬、蓋秘而藏之、所以防患也、

又曰、我風土記大政官掌之、王室衰焉、官職廢焉、或放散而不收、或失亡而不補、今流落於人間、往往非其本書也、可歎而已矣、會津中將正之尋大八洲之起、惜風土記之逸、私記會津之風土、令嘉潤色其文、且爲之序、以俟國家修成之舉云、

會津風土記跋林春常作

一其略曰、在昔本朝之盛、每國有風土之記、世移時替、見存幾希、可勝而嘆哉、會津城主通議大夫虎賁中郎將源公、奉上撫民之暇、惜舊記之及闕、嘆蛩

民之易惑、頃年錄會津四郡志、名曰會津風土記、可謂繩前代之武、而濟當世之美也、書既成矣、使弘文院學士林恕作之序、事備于序中、今不贅焉、想夫、生父母之國、而不可不知其國之事也、況其受封于會津、則郡縣之事蹟、不可曲暢旁通焉、公之著眼于此、豈其翹哉、公平生修學好古、河間之聰明可追尋矣、觀風戒俗、漢家之藩輔可併按矣、民具瞻之、衆依賴之、方今一編之就、列侯同心于此、則六十餘州之記可計日而待焉、嗚呼、自積小以大、行遠自邇、譬推而言之、則公其先從隗始者乎、懿哉大哉、易曰、省方觀民設教、公其庶幾乎、命走作之跋、走雖不類、以高諭之難辭、遂書於下方云爾、

會津神社志序弘文學士作

一其略曰、本朝開闢以來、殊尊信神道、悠哉大哉高哉明哉、宗廟社稷措而不論、天神地祇天靈之垂跡鎮座於畿內七道、其見於延喜名帳者可計而知焉、其餘或外遷舊建、新者各國各郡之所祭、不知爲幾千萬社也、然或爲釋氏被掠而忘本緣、或爲新祠被奪而失舊貫、或式內之社偶存亦荒

廢難認、或邪淫之祀妄盛、而誣惑成害、其弊亦至、輿餒相混、薰蕕同器者已久矣、有志之徒豈不大大息痛恨哉、會津左中將源君、平素篤信神道、頃年遣使於其封域會津耶麻河沼大沼全郡及安積郡內、并越之小川莊、下野之塩屋郡內屬邑、而點檢所_{ツケ}在之叢祠、則數千餘宇悉尋其起緣、問其營造之遠近、督其標榜、覈封戶之公私、而其可存則存之、可除則除之、其社有故實而毀壞則改作之、其構建之地不宜而接污穢者、於舊社地之內擇處而移易之、又邑小祠多者、限各郡而定一社之尤者、以爲主神、而合祀小社於一字、倣所謂相殿之例也、其中建傍祠於社內、別祀之亦有之、皆按其土之廣狹、而便民人之所欲也、雖其所廢除亦尺地不取之、計其稅數納於社倉充修營之科、於是敘其次第、記標題、凡二百六十八社、號曰會津神社志、經三載而畢事、其示諭之丁寧有別錄在、不及費詞、志成徵序於吾儕、辱使說其顛末、原夫、建社祀神者國之大事也、率舊修廢者政之善跡也、崇宗源者本朝之禮式也、毀淫祠者良宰之明斷也、今此盛舉兼之、不亦偉

乎、君既作風土記、詳職方之實、則不忽其所守也、今又錄神社志、謹祭祀之義、則能知其所重也、○今又以下黑川本缺之推其所守所重、則庶幾治封域、其如示諸掌乎、若使神發一言、必曰會津雖舊鎮、其政惟新乎、

會津神社志後序 林春常作

一其略曰、本朝七五之神繼天立極、八百萬神各有所掌也、男女之別、父子之親、君臣之義、上下之禮於此備矣、稱神國者良有以也、然知其始立其本者幾希、因是神之明察哉、被爲胡鬼誣、或被爲巫術惑、無如之何、會津羽林源君深思遠慮、而後遣使以點視其屬內社地、尊其可尊毀其可毀、或重修之、或移易之、而所崇信二百六十八社、乃作神社志、記其顛末、我公弘文院學士徒求序于卷端、事既備矣、不贅也、嗚呼神之體無思、無爲、寂然不動者也、神之用道天下之志一成天下之務一者也、其正修齊治之間、○南溪云、上下之禮以下此黑川本缺之、今因圖書館本補間著意于茲、則聖人之道可坐而見矣、神道之大、與天地同功、與聖人同趣、與易道同理、夫所以敬神者誠也、誠者天之道也、誠之

者人之道也、源君平生事業就其所行而見之、則可謂擇善而固執之者也、然則君施治教之法、貽餘慶於後昆、天與善人、呈禎祥於國家、天人合一之理誰間然、應命作後序、

會津神社志序 山崎嘉作

一其略曰、抑天下萬神、天御中至尊之所化、而有正神有邪神、何耶、蓋天地之間唯理與氣、而神也者理之乘氣而出入者、是故其氣正則其神正矣、其氣邪則其神邪矣、人能靜謐守混沌之初、戒邪穢致精明、正直而祈禱、則正神申福焉、邪神息禍焉、豈可不敬乎哉、會津城太守左中將源正之達於我神道、舍人親王以後一人也、嘗憂胡佛雜于國神、嘆神社在于汙地、教令胤侍從正經正其管內社籍、題曰會津神社志、命嘉序其卷首、苟匪神垂冥加之人、孰知太守所存云爾、

會津神社志跋 吉川惟足作

奥州會津城主中將源正之公、學我神道有歲于此、盡一二三事之傳、而窮四重之奧秘焉、夫吾日域者、起自淡路一嶋、而萬州生矣、惜哉、歷代之古史入鹿之亂泯沒、而應仁之火燒失、其後國郡紛々而

無分、因茲源公命臣友松氏興、自頓丘、竟國行去、或求古老口授、或窺舊社緣起、自山川及草木、無不尋窮、而後會津風土記六年而漸功成、國郡分則先祭神、祭神則必建社、雖然中世以降大小神祇混雜淫祠邪神、或見移寺院、或被穢民家、恐後來悉失垂跡之地焉、於是復命氏興、令服部安休改之、粵安休竭精誠、登高山末短山末、臥雲漂流、無所不巡行、其式每郡之內擇神社舊跡清淨之地、建社、或不淨則移祀之、或繁多則併封之、或爲末社、或爲相殿、各有其品、而後拂妖怪、毀淫祠、鎮荒振神焉、其功三年而畢矣、蓋正神盛則邪神衰、邪神衰則國家平安也、願一家之善延及四方、

會津山水賦并序弘文學士作

一序略曰、通議大夫虎賁中郎將源公、以大君幕下之懿親、受封於此城、爲東北鎮護、而藩屏江府、參謨國家之大政重事、衆所仰望、民所具瞻也、然則磐梯之山可齊鶴鳴於嵩呼、豬留之水再見龜範之洛時者、可庶幾乎、若夫、仁智之樂、動靜之理、其平生所存養也、惟山之大、草木生育、顯諸仁之

謂乎、水之多、鱗介潛伏、藏諸用之謂乎、仁智兼備、則以山水、譬輔佐之才、良有以也、豈可尋常遊賞一視上哉、

賦略曰、有志者豈不遣情哉、惟雪透肌骨、清高之操可持、月到天心、本然之明不虧、雨之施兮喜恩霑之無私、嵐之觸兮知號令之所隨、鐘聲戒懶驚回、盡夜推移、鴈行序齒、感得前後肩差、漁村待夕、民產日用當爲、遠帆歸家、出處進退有時、夫天地之際無大於山水、山水不爲不多、就中此境信美、然山水之顯唯是在其人耳、二美之備也、人之有靈也、所謂太極圖三之理、照々察々不在此乎、

鎮守府將軍維茂碑弘文學士作

一略曰、越後蒲原郡小川莊巖谷邑有寺、號平寺、傳稱、維茂所建也、寺中有維茂墓、墓上古杉一株、今猶存焉、然世遠時移、無知其爲名將陳跡者、越後與東奧爲隣境、故巖谷邑隸會津城、隔一派之川、方今通議大夫虎賁中郎將源公鎮會津城、使群吏巡檢屬縣、始知餘五將軍葬于此、而欲建碑傳其勇名於不朽、而徵其辭於僕、僕不能不應其旨、夫繼絕興廢則民人歸焉、立碑表行

衆皆感慕、故生於後而追封前人之墓、或立碑或建祠者、善政之一也、

又曰、如餘五將軍亦奮勇於登時、貽名後世、則是亦非常之人也、今遇此盛舉、而一杯之廢再興、巨石之標新立、則古杉一株之青與彼岳將軍墓上之松同色、如見英雄未死之心於數百歲之下者乎、嗚呼公之封於此、率由舊章施行善政、在餘五將軍則沒後顯名之榮何以加焉、

平金吾義連碑山崎嘉作

一略曰、盛氏、其次盛興、早世而佐原氏絕矣、異姓更立、家臣相爭而國亦滅也、厥後上杉氏蒲生氏加藤氏封于茲焉、寬永二十年秋、左中將源正之封於此、來養士撫民給毫賑窮、費孝子節婦、禁殉死火葬、謹權量、寬租稅、行朱子社倉之法、嘗修會津風土記、遣家臣巡封疆、而聞義連之墓在耶麻郡、嘆曰、先封之主名將之迹、我後人之所以可圖不朽也、遂令三葬石立碑、命嘉爲之文、嗚呼是又惜絕興廢可謂偉舉矣、不肖旣與於修風土記而潤色其文、則斯命也亦不得辭、迺考其譜表其事、聊論之、

家訓

一大君之義、一心大功可存忠勤、不可下以列國之例、自處焉、若懷二心、則非我子孫、面々決而不可從、

一武備不可怠、選士可爲本、上下分不可亂、

一可敬兄愛弟、

一婦人女子言、一切不可聞、

一可重主畏法、

一家中可勵風儀、

一不可行賄求媚、

一面々不可依怙最負、

一選士不可取便僻便佞者、

一賞罰家老之外不可參知之、若有出位者可嚴格之、

一不可使近侍者告人之善惡、

一政事不可下以利害、枉道理、僉議不可挾私意、

拒人言、不藏所思、可以爭之、雖甚相爭、不可介于我意、

一犯法者不可宥、

一社倉爲民置之爲永利者也、歲饑則可發出濟、

之、不可_レ他用_レ之、

一若失_レ其志、好_レ遊樂、致_レ驕奢、使_レ士民失_レ其所、則何面目載_レ封印、領_レ土地、哉、必上表可_レ蟄居、

右十五件之旨、堅相_レ守之、以往可_レ以申_レ傳同職者_一也、

右外所_レ施_レ于管内_一之政令、最多_レ良法美意_一也、然諸吏分_レ職而各掌_レ之、藏_レ之亦不_レ贅_レ焉、若夫輔_レ養大君、參_レ謨天下之大政重事之際、雖_レ當_レ多有_レ嘉言善行、然朝廷機密之事、迄_レ今不_レ可_レ知矣、今所_レ載_レ于上卷_一者、皆成文之著者而已、

土津靈神言行錄卷之上終

土津靈神言行錄卷之下

平生

一明曆二年、丙申、嚴有幕下御歲十六、十二月十二日召_レ道春、始_レ令_レ講_レ大學首章於御前、而賜_レ御衣若干於道春_一矣、公聞_レ此事、即大悅、謂_レ其左右_一曰、幕下欲_レ聽_レ大道_一者、誠天下長久之基也、何幸如_レ之乎、顧世人謂_レ何哉、於_レ我甚慶_レ賀_レ之、贊嘆不_レ已、

一或者欲_レ獻_レ古筆_一古今倭歌集、公曰如_レ賢者筆跡、則當_レ受_レ用_レ之_一或貽_中諸子_上也、如_レ此物_一非_レ我所欲_レ也、即却_レ之、

一板倉防州自_レ京都_一來_レ江戶_一、而相_レ會公_一之次、防州語曰、湯武代_レ桀紂_一之道、在_レ京都_一每々與_レ儒生_一論_レ之、雖_レ然其道理不_レ分明_一、公謂_レ如何_一乎、公即應_レ之曰、湯武征伐之事、歷世聖賢之所_レ許也、則當_レ其義_一可_レ知矣、雖_レ然凡學問之道欲_レ明知而行_レ之而已、但吾子與_レ我輩_一者決不_レ傲_レ湯武之道_一也、幸有_レ良師_一只學_レ文王伯夷_一而已、湯武之道雖_レ不_レ知又何足_レ憂哉、防州深嘆_レ之、

一 日公語_二近侍者_一曰、今世士輩多伴_二勢威之人_一、入_二諸侯之家_一、而以下從_二貴勢之後_一、飽_中飲食之美、每有_二誇_レ人者、爾輩不_レ見乎、孟子所謂乞_二播間之祭餘_一而泣_二其妻妾_一之類也、可_レ愧之甚也、

一 公常舉_レ程子所謂自古國家所_レ患無_レ大_二於在_レ位者_一、不知_レ學之語_上而賞_二歎之_一、因戲曰、怪哉我適對_二執政之人_一、議_レ事時、說_レ仁則忤_レ耳、說_レ慈悲則不_レ忤_レ耳、不_レ可_レ不_レ擇_レ言也、

一 一日語_二文字輩_一曰、爲_二無用之言_一者、世人皆曰、都加波加仁_◎_{仁二字無}毛不_レ立之事也、汝知_二此言_一耶否、曰不_レ知_レ之、願聞_二其說_一、公曰、立_二墳墓_一之謂也、今時士大夫深習_二散樂舞蹈之事_一、而能_二其難_レ能之事_一、則專以_レ之自誇_レ人、他人亦褒_レ之者衆矣、我願_レ之、凡如_レ此之事、假令雖_レ究_二其妙_一、死後豈以_二如_レ此之類_一可_レ刻_二于塚上之石_一而留_中其名於後世乎、凡所_レ載_二于碑文_一者、忠勇學術之而已、其餘不_レ足_レ記也、

一 甲州住人松木某者、來謁_二公而語_一學問之事、曰、予竊謂、小人之心固欲_レ爲_二不善_一多矣、聖人之心亦其欲_レ爲_二不善_一不_レ異_二小人_一、雖_レ然聖人但能忍_二不善之

心_一而強爲_二善而已_一、是所_二以聖人之異_二小人_一也、其初所_レ欲_レ爲者一也、其說如何、公曰、以_レ何如_レ此耶、松木曰、見_二聖人論_二小人不善之心_一、則其察_レ之如_レ視_二其肺肝_一、其言_レ之無_レ不當也、聖人若自_レ初無_二不善之心_一、則雖_二生知之質_一以_レ何至_二此乎_一、故予謂聖人亦忍_レ欲_二不善之心_一、而強爲_二善歟、公曰不_レ然、今以_レ何論_レ汝耶、汝能圍_レ碁也、乃以_レ之喻_レ之、汝自_レ側看_二人之對_レ局_一、則拙手之著_二石皆捨_レ利而趨_レ害也、然拙手者自曾不_レ知_二其惡_一也、及_レ陷_二其害_一而後驚悔矣、此小人欲_二不善_一之喻也、巧手者自_レ初明知_二利害之分_一、則不_レ至_レ如_レ此也、何忍_レ害而強爲_二利哉、聖人自照_レ理明則雖_二自_レ初欲_レ善_一、亦明知_二小人之趣_一而已、何忍何強之有哉、松木忽曉悟而嘆_レ服其明敏而又長_中比喻_上也、

一 公之夜坐雖_二永夜_一、至_二戌之半_一、而及_レ聽_二鐘聲_一、卽急入_二臥內_一矣、一夜語_二侍坐者_一曰、吾老且病、常終夜不_レ眠而已、故若得_二一時之安眠_一、則爲_二幸也_一、侍坐者言曰、然則何迄_二夜闌_一而不_レ入耶、公曰、吾亦非_レ不_レ欲_レ之、雖_レ然吾願_レ之、若一人不_レ寢則可焉、邸中之人亦皆不_レ得_レ寢、則只因_二一人不_レ欲_レ眠_一、而使_二衆人

不眠則只是私也、凡人當可寢之時、則雖不欲眠就臥席、又當可醒之時、則雖欲眠晨起而可也、起居之節常有度如此、

一朝夕之饌隨庖人之所供也、但不適其口者不_レ下箸、雖然不_レ命烹炙之事、不_レ撰飲食之品矣、一日土岐長元來講、孟子離婁篇曾子曾元養其父必有_二酒肉_一之章、公曰、此章之旨於我獨覺不親切也、我從來無_レ求_二於酒肉之味_一、故也歟、長元應_レ之曰、酒肉者衆人之所通而欲也、如_二公之無_二飲食之欲_一者、天性之所_レ然也、可_レ謂希世之稟也、賞_二嘆_一之、

一常語左右曰、今時之士輩從執政之後、入_二諸侯之家_一而伴食、退後語人以_二其料理之善惡_一曰、某家巧而風味善矣、某家拙而風味不_レ善矣、是何爲_二士大夫之言_一耶、風俗卑陋悲哉、因舉_レ曰孟子所謂飲食之人則人賤之、又舉_レ汪信民嘗言人常咬_二得菜根_一則百事可_レ傲之語_上而慨嘆焉、

一執政之人常就_二公第_一訪事、時公之家臣及庖人設_二飲食_一、欲_レ窺_二其談_一了_レ出_レ之、然執政之人速歸、則家臣皆以爲_二遺憾_一、而謝_二公前_一也、公曰、吾聞他家以_レ饗

應執政之人、爲_二第一_一、不_レ然也、執政之人邂逅來訪吾甚悅_レ之、所以悅_レ之無_レ他、唯雖_二一言_一爲_二大君_一議_二政事_一是吾願也、不_レ暇_レ欲_レ薦_二一服之茶_一也、汝等勿_レ患_レ之、

一一日舉_レ孟子對_二梁襄王_一不_レ嗜_レ殺_レ人者能_二一_一天下之語、而謂_二待坐者_一曰、此語雖_二卒然_一之對、最爲_二親切_一也、苟爲_二人主_一者不_レ可_レ不_レ思、今列國之主雖_レ多_二善政_一、如好_レ殺_レ人、則爲_レ臣者誰歸_レ之哉、可_レ恐之甚者也、汝等思_レ之如何、聞者皆歎服、

一一日語_二侍臣_一曰、吾反聞、家中諸輩評_二吾曰_一、成_レ事而不_レ賜_二褒美_一、又於_二近臣_一者不_レ與_二飲食_一、渾無_二親愛之態_一矣、吾願_レ之、氣質之癖如此也歟、雖_レ然大抵吾以_二家中之諸輩_一不_レ敢輕_レ之、又不_レ欲_二無_二理而斷_二人命_一也、是汝等之所_レ共知也、設令_二十成_一事而十得_二褒美_一、又數受_二飲食之親愛_一、以_レ事_二一_一戮_二其身_一、則褒美飲食亦何有_レ益哉、因舉、某國主與_二某國主_一兄弟之國也、然某主屢以_二小惠_一施_二臣下_一、且細察_二臣家之貧富_一、而躬親措_二置之_一以_レ法、則可_レ謂_二有_二親愛於臣下_一也、雖_レ然群臣以爲_二煩苛_一而苦_レ之、又某主雖_レ不_レ如此、唯公而寬、則群臣反以_レ安_レ之也、是

亦汝輩之所共聞也、凡爲臣者、頻受主人之親睦、亦以爲煩擾耶、汝輩當思之、

一公雖政事、台意懇々而不已、是以諸侯無大無小、尊重愈甚矣、賜休暇而往來于會津、時途中所經過之城主領主、或斫開山隴之岩石、或設河津于樓船、或處々構茶店、或遏往還之客、或掃市井屋頭之塵、或賜魚鳥菜菓之類、而使价繁至、或令其家之老臣護館舍之邊、其奔走響應之殷、樣不可勝計也、公豫察如此、而先發駕之期、而以小簡贈示所過之城主領主曰、必勿作奔走、但設驛馬人夫、則足矣、此所堅約也、悉有返簡曰、諾、及聞其奔走之形勢、而大怒曰、吾向有約束、而既受返簡矣、方今何爲詐哉、假令他人雖詐吾必不詐矣、悉卻贈物、擯使价、且下令於從者曰、雖奴隸之輩、於所歷之城下、草鞋之類亦不可買也、其嚴厲不可犯矣、

一稱加藤朋友曰、祖父左典廐、父吏部、及朋友三代也、父祖受大祿、朋友或微也、雖然三代之中論其人品、則朋友者誠好人哉、其人品如此、何爲易大祿耶、

一謂家臣曰、無子者欲養子而立後、則當下求同姓者而養之、如無同姓、則如何矣、今俗弃同姓、而養或外姓或他人之子者、最不可也、依之、當公之世、皆守此法矣、

一夜話之次、公慨然語侍坐者曰、吾少時緣無知、而好讀六韜三略及雜書、而還以大學論語孟子中庸之類、或爲迂濶、或爲柔弱、而徒過歲月矣、今日顧之、其愚也甚哉、追悔而不可及矣、

一會津先大守蒲生氏之世、令罪人跨兩牛、以燒松入兩牛之間、則牛各驚怒而左右開避、謂之牛裂、又作大釜、其蓋穿穴、而置罪人於其中、出頭面及兩手、以木屐着其脚、以慢火熬之、火氣透釜內、則以膏油澆入於穴、觀者甚哀之、又或作大壇、植一木、以首械繫罪人、令兩手抱竹輪、而束麻草燃之、左右前後持之、焚之、罪人踴躍而死、名之謂燒松炙、公聞之曰、是皆慘酷之至也、於此命有司曰、自今以後勿行此刑、若有大罪者、當以烈火急焚殺之、如燒松炙、可謂黜殺也、又可謂弄刑也、況牛裂釜熬之刑、一切不可用矣、

一 一日賀州太守綱利問曰、父罪當_二死刑、則其子男亦被_レ截、是子領內之法也、然而不_レ知_二其當否_一也、願聞_二貴國法_一矣、公曰、吾未_レ聞_二諸國之法_一也、獨舉_二我家之刑法_一而語而已、父當_二磔罪_一、則其子被_レ斬矣、父當_二斬罪_一、則其子免_二死刑_一也、雖_レ有_二其子復_レ讎之虞_一、我不_レ管_レ之、萬一有_二不意之事_一、則是亦命也、豈懼_レ之耶、綱利君嘆_レ之、

一 公素蓄_二紀貫之筆跡_一、其所_レ書者并井筒女之所_レ詠也、其倭歌曰、加世布計波遠幾都志良奈美多都太也未與波仁也幾美加比登里由久良武、于_レ時公第四女松子將_レ嫁_二于賀州太守中將綱利_一、公以_二此一軸_一授_二松子_一曰、井筒女者貞婦也、散樂謠云、死後亦其靈魂弔_二亡夫業平之塚_一也、凡謠歌者皆妄誕事也、雖_レ然其貞女心不_レ可_レ誣是貞女之所_二以貞女_一也、是故授_レ之云爾、

一 一日語_二左右_一曰、阿部豐州者、其爲_レ人篤實也、權柄之家門前爲_レ市者、古今皆然矣、未_レ聞_二豐州門前爲_レ群也、是以當_レ知_二其人之好_一也、宣哉大猷幕下最初以_二斯人_一屬_二幼君_一矣、

一 又語曰、人遇_二朋輩之招_一、而受_二一會之饗應_一、則喜不

忘_二于心_一、而思_二我亦他日報焉_一、此心人皆無_レ不_レ有也、因_レ茲吾願_二大君之渥恩_一、則誠難_レ謝也、匪_レ當吾身日々受_二大君之饗應_一、迄_二家中諸士奴隸等_一、非_レ賜_二日大君之饗應_一耶、然欲_レ報_レ之心不_レ厚何哉、是知報_二一飯之恩_一、而不_レ知_レ報_二君恩_一者也、不_レ思之甚哉、

一 又語曰、微賤之臣漸升而居高者、或一有_レ降_二一等_一之命、則有_レ悻々然憾_二其君_一者也、當_レ反_二其身_一而思_二其初_一也、吾若自_レ初無_二升進之命_一、則今日何有_二此憾_一耶、然則令_二吾有_二此憾_一、亦非_二君恩之所_一然乎、茲念_レ之、則憾亦可_二自解_一耳、

一 嚴有幕下之世、松平作州爲_二台城本營留主_一、此時江府多_レ災、一日火延_二于營府之中_一、與平大膳、松平甲州、其餘壯年士大夫驅參、忽救_レ得之、幕下賜_二時服_一而褒_二賞之_一、作州亦雖_レ有_二其功_一、而獨不_レ預_二褒賞_一、因_レ茲其心怏々、遂屢就_二老中之宅_一、請_レ辭_二其職_一矣、官醫平賀玄純素與_二作州_一友善、一日來見之次告_二此事_一矣、公聞_レ之曰、願卿往而語_二作州_一乎、作州之所_レ受者大職也、又宿老也、作州與_二少壯之士大夫_一爭_レ功賜_二賞_一、則還甚可_レ愧也、一旦救_二火之功_一、於_二作州_一不_レ可_レ願_二褒賞_一也、此等之功、作州不_レ可_レ傲者、

則台樹先何命。此大職耶、可謂下自輕其身者也哉、必勿辭職而可也云爾、玄純往告之、作州幡然曰、聞羽林公之語、則吾甚耻之、卽敲元老執政之門、而改前過而遂止矣、

一公曰、無其人、則不如其職、如兼職、乃可也、一平居卯出于外、亥入於內、無晝無夜有公私政務之暇、則令侍史講讀聖賢之書、評論其事、研窮其理、座中不置枕、無傾側之容、常好靜坐、或解經帶、改衣裳、則退入別座、閉戶、雖褻近之輩、不得見之、入閨閣、則怡然、出閨閣、則嚴然、唯出入于閨閣正寢茶室之間、而遂不見近臣之座、況庖厨之邊乎、每出閨閣、則揚咳聲、高足音、而不窺仕輩之私、凡其容貌辭氣平生威儀之正、誰有如斯人乎、

一日蚤將登營府、而命守夜者曰、到寅則當報之、守夜者誤鐘聲、以丑爲寅而報焉、公即睡起、乃着衣裳而待晨久、然夜未明、守夜者甚恐之、而以爲其誤謝焉、公曰何傷哉、假令有誤、先于時不愈後于時耶、他日以之勿怠哉、

一公患吐血、病後雖欲喫飯、生熟之節遂不得其

宜也、侍食者罵膳夫、公從容解之曰、吾付之炊、飲者非不用心也、特用心之過者也、以平易之心、炊之還中其宜矣、膳夫聞之、令炊、果得其宜、

一公令杉田某裁贈人之書、右筆某書之備一覽、公見之、謂杉田曰、書樣甚鄙哉、杉田爲彼解辨焉、公曰凡右筆等之書樣可謂醜矣、吾每觸目生欲罵之心、然吾顧之、如此心則不彼等之非、而吾性之癖也歟、無害事理、則爲足耳、常反躬克己、而遂不言彼等之非也、雖然如今此書樣甚穢、而恰似可生蟻虱、更書而可也、

一廝役者、牽善馬而出江府歸會城、到房河渡時、此馬見船而不肯乘、廝役以手木擊之、誤打破一隻眼矣、到會城、則有司縛之下獄矣、公遙聽之曰、是所謂小過也、赦之可也、豈以犬馬之生、易人之生哉、但須敎諭他日用心之方也、速令赦之、

一承應元年、公在江府、讀朱子小學、尊敬之、焚老佛之書、同年纂輔養編一冊、而獻幕下、以呈輔養幼君之志、而後以小學句讀及輔養編、賜家老

大吏近臣等令讀之、又至晚年、編集二程治教錄、玉山講義附錄、伊洛三子傳心錄、賜各一部、亦板倉內膳正在京都時、以張希孟之所作牧民忠告一部賜公、公令某讀之曰、爲有司者當讀之書也、更乞數部、板倉氏再贈三部、於是置一部於座右、贈一部會城有司、寄一部於某、贈一部賀州太守、曰願令侍史讀之聞之也、公薨而後、以遺意獻治教錄玉山講義附錄傳心錄等之書於嚴有幕下矣、公篤信好學、故勸人亦如此矣、聞人之學道讀書則甚喜之、或人曰、己欲立而立人、己欲達而達人之謂也歟、

一公一日訪天壽院女君之第、時有一老女、與公接語之次、告耳聾之患、公曰、吾聞阿武女武多字呂果名、出於殊域之物也、食之、則能治聾也、老女曰予不知何物、又始聞其名、願得焉、公曰、吾蓄之、欲得則與之乎、老女曰賜之則幸甚也、天壽院君亦曰、冀授焉、公許諾而歸邸第矣、先是有以此果贈公、於是召家長某曰、厨中當有之、問其員數有幾許、家長某問之、厨人探之、十而得一二也、其餘散失而不知其所之云爾、家長怒曰、此

是殊域珍果也、汝不能固藏而至此、怠之甚也、達公則以汝當罪也、卽告、公曰然矣、吾願之此物雖非甘旨之類、聞有治聾之功、則爲養老輩必頻々被盜去矣、赦罪之、然向與老女有約、願遣人於市肆一試當尋求也、江府都會之地或有之則幸也、家長遣人探市井中、果得數斤而來、

一一日、內藤源介、田中三郎兵衛侍坐、而有飲酒之談、源介告曰、田中雖沈醉遂未見其亂奇哉、公曰、渠輩而若及亂、則改易之罪不可逃也、聞之者恐慄矣、田中者大臣、而平日愛之重之、然其嚴厲而不可犯如此、

一明曆二年冬、令某始講詩經集傳、及聞葛覃篇一嘆曰、文王后妃爲葛布親執其勞、而知其成之不易矣、吾適入閨門而見之、幼女戲弄初篋補綴之事、則自師姆至衆婢皆相叱曰、鄙哉何爲如此之事乎、夫男子幼而弄弓矢、女子幼而弄篋瓦者、自然之性也、今聞葛覃詩而悟后妃之所_レ以爲后妃、而又愧吾閨門無教耳、

一萬治元年正月、及聞詩秦風黃鳥篇并朱子殉葬之

論、悟不仁不知之事、戎狄弊俗之風、而又與某發明其篇中臨穴惴惴之文義、甚嘆慨而不已矣、其後寬文元年閏八月、公自禁家臣之殉死、又同三年台命禁天下之殉死矣、斯令也、顧是依公之所請、而行于闔國者也、

一 一日有改元寬文之令、公聞之曰、吾既知有此事也、然或先令而誤發言語、則是漏洩公議也、故每有年號之談、甚謹之、而吾氣鬱結久哉、今日此令出、則吾氣亦舒暢矣、公防朝議之漏洩如此、

一 公好學、每令侍史讀書、聽之甚樂矣、有俗客訪來、即令掩其書、而無嫌忌之色、以誠心接遇焉、一夕語學之次、侍坐者舉此一事而譽之、公曰然、吾舊以之爲工夫矣、當見彼川流而知其道體也、往者過、來者續、如被纏於舊心、則豈生新心哉、是與天地之化異其道、而非學者所法也、吾樂書之時、有俗客來、乃不得已而相會、然心中未能忘書、則言語應接之間、其心皆非誠實、所謂心不在焉、視而不見、聽而不聞者也、唯轉舊換新而可也、知藏而無痕迹一底、亦此意思

歟、

一 寬文九年四月公致仕、同十年四月受台命而行會津、而慰息其勞、保養其疾也、今茲本朝通鑑成矣、弘文學士自作二序草稿、而呈營府、其序中各記載酒井雅樂頭忠清、阿部豐後守忠秋、稻葉美濃守正則、久世大和守廣之、土屋但馬守數直、奉行永井伊賀守尙庸之名也、營府諸老飛羽檄於會津、附二序而受公之指揮矣、公考中華資治通鑑諸序之例、折衷其儀、斟酌其宜、而答之、

一 寬文十一年會城士人宅地處々生靈芝、大者約之徑六七寸計、小者二三寸計、其色黑如漆、其形堅如石、因老臣備進覽、上下以爲嘉瑞、同十二年夏、公在會城時、聽通鑑綱目之講、而偶當于後漢安帝元初六年豫章芝草生之文、分註曰、大守劉祇欲上之、以問郡人唐檀、檀曰、方今外戚豪盛、君道微弱、斯豈嘉瑞乎、祇乃止、講仕者以爲忤公意歟、公熟聽之、講畢時色悅氣和曰、奇哉、當抄出之、且曰、誠思、夫學貴致知、非博文何以致其知乎、又此時公好本朝神道矣、於是習其說者、動輒以神秘通妙之事獻之、左右亦多說怪誕

之語矣、凡通鑑綱目所載貴聖屏神怪之說、公聞之無不豫之色、又及政道之事亦如此、一公一日聞通鑑綱目、後漢明帝永平九年書大有年、尹氏發明曰、春秋記異不記祥、綱目災祥並記、又曰、明帝是時君德清明、政事修舉、天人交感、故獲有年之應、公曰、春秋十二公、獨桓公三年書有年、宣公十六年書大有年、皆以爲異也、孫明復程伊川孔安國春秋傳皆以有年爲異也、是春秋之本旨也、綱目取法春秋矣、而尹氏至此何誤哉、吾按、前年明帝遣使於天竺求佛道、得其書及沙門、以來啓覺端、至今流天下後世之禍、其凶災何以加之乎、宜得凶災、今乃反常、是所以爲異也、此春秋之深意、尹氏之說甚不足信矣、一公聞通鑑綱目之講解曰、吾至晚年聞此書、此大部也、至全篇不可期也、今稍至後漢篇、生前如聽了三國則幸也、隨聞而令拔其要而錄之曰、至吾子孫若欲讀此書者、唯讀此拔萃則足而已、故令錄之云爾、自周威烈王二十三年、至後漢桓帝延熹九年矣、其後病作而止也、其間公議論多所發揮、

一嚴有慕下世、高力左近、京極丹後守、及麾下士三人、或遠流、或追放矣、此數人者暴虐之著者也、此時舉世謂、其後于形^刑、或三年或五年、何加刑之遲乎、無事而迄今日幸免哉、公聞之曰、嗚呼幕下之刑法甚可慶賀也、孟子曰國人殺之者也、

一公常言、救飢饉者貴急速也、今有司僉議多端而過日月、則窮餓者既死、而不及救焉、可謂不知其法者也、因數稱莊子車轍中有紂魚、早得斗升之水、然活、雖激西江之水、迎吾既爲枯魚、之語而曰、信哉斯言也、

一山崎嘉一^一夕侍于公、公問曰、殺性覺鐘其理爲如何哉、嘉答曰、塗其覺郁則其鐘完固、公曰、此說吾固知矣、然匪當斯而已、吾思之、豈添靈威者耶、嘉顧某曰、吾子宜按之、如按出之則當呈上也、某即按之而誠得其說也、說見于朱子語類祭義之中、而與公之義吻合矣、翌旦呈上之、嘉讀之達公、而深嘆美之、

一公閒居之日、令侍史讀朱子語類、而諳聽之、或其說與我意不合、則命侍史曰、此處有疑也、顧是朱子未定之見耶、抑記者之謬耶、恐道理當如

レ斯也、所當闕疑也、當貼紙而姑置而俟後日一也、後來於別處、朱子以「前說」爲「未定之說」、而後來之說卽與「公之說」果相合也、如此之事屢有レ之、

一寬文十二年壬子、十月下旬、公疾作、十二月十八日薨矣、然其際不怠于學、令講「通鑑綱目」及「范氏唐鑑」、又令「山崎氏每朝講」解近思錄、且許「側聽者」評論其義也、十二月六日於臥內、令「某讀」延平太極之說、十二日令「某讀」朱子語類、日夜勉講學如此、

一公之疾十二日以後加增劇、然頻促家臣曰、吾恐以疾之病有妨于事務、必勿遲滯也、日月以レ使責之、

一通鑑綱目曰、趙得「楚和氏璧」、秦王請以「十五城」易之、趙欲勿與、畏「秦疆」、欲與之、恐見欺、蘭相如曰、臣願奉璧而往、城不入則臣完璧而歸、王遣之、相如至秦、既獻璧視「秦王無意償城」、乃紿取璧、遣從者懷之間行歸趙、而以「身侍」命於秦、秦王賢而歸之、又曰、秦王告趙王、願爲「好會」於河外澠池、廉頗蘭相如曰、王不行示「趙弱」且

怯也、趙王乃行、相如從、及會飲酒、秦王請「趙王鼓瑟」、趙王鼓之、相如請「秦王擊缶」、秦王不肯、相如曰、五步之內臣請得「以頸血」澠大王上矣、左右欲「及」相如、相如張目叱之、左右皆靡、秦王乃一擊缶、罷酒、秦終不能有加於趙、趙人亦盛爲之備、秦不敢動、趙王歸、楊氏曰、古之智者、以「小事」大有「以」皮幣犬馬珠玉而不得免者、至「乃棄國而逃」之、況一璧乎、雖與之可也、相如計不出此、而欲以「身死」之、可謂「失義而傷」勇矣、及其完璧而歸於趙、亦何益哉、至澠池之會、則其危又甚矣、雖勿往可也、相如爲「國卿相」、挾「萬乘之君」、以蹈「危事」、其智勇又不足重、趙使「秦不敢懦」、焉、乃欲以「頸血」澠之、豈孔子所謂「暴虎馮河死而無悔者歟」、公曰大哉楊氏之評、吾聞「相如之功」、則勇之最勝者也、於「日本之俗」誰不賞之乎、然楊氏却以爲「傷勇也」、其度量之弘、識見之高、如此、誠大儒之論哉、

一公語「侍臣」曰、五代馮道者、歷仕于「唐晉漢周」、四易「世」、其際歷「十一主」、而世々至于「大官」矣、吾願レ之、非「佞諛之巧」甚過「人者」何得此幸耶、吾朝近

代大名之中、亦代々有得寵異者、此亦馮道類也與、

一侍坐某談曰、昔明智日向守對信長、有返逆之志、竊召其家老三輩而議之、僉曰、不可也、而後召寵臣左馬助而議之、左馬助亦不從焉、日向守曰、嚮與某二三輩相議而皆不從、雖然吾志不能已也、但取決於汝之一言矣、汝謂何乎、左馬助曰、古語所謂天知地知人知也、既告二三輩、則假令雖止達于信長、必矣、然則其過不可逃也、然則與被先于彼、不如發于此也、願急發兵而進矣、於是日向守謀反之志愈定矣、當時人皆以左馬助言爲美談云爾、公聞之曰、可謂左馬助不忠不義之臣也、何有勸己之主以返逆之理哉、後日縱令露顯而亡身亦無妨耳、豈較利害乎、惜哉諫而不遏之、世人皆以爲美談、吾不許也、侍坐某亦甚愧矣、

一昔日、東照宮以安藤帶刀屬賴宣公矣、其後令土井大炊謂帶刀曰、賴宣年少也、若有謀反之心、則汝當急告之也、以此趣載于一紙之罰文、獻之可也、帶刀曰、一日爲君臣之契、則縱令幼君有

狂亂之謀、何以我君爲罪人而出之耶、萬一有反心、則可強諫之、若不肯則無奈何之何也、則從其軍、而戰死耳、何以我君爲罪人而訴之乎、一紙之罰文亦不可呈上也、東照宮聞之、感其忠矣、公評此事曰、帶刀之言可謂忠厚也、惜哉末後一言、從其軍而死、此甚不中理也、如言諫而不肯則於眼前而自殺而決不可從其軍也、則恐瑩微無瑕而已、是所以爲無學之弊也、

一列侯之中、有一旦廢寺院、追沙門、公開之曰、其志最可嘉尙者也、雖然處之方未足爲宜也、方今之世、一時廢却之、則其本寺門跡之類相率而質之、故不得已而或有再復廢地者也、是向所謂處之方未足爲宜也、須不可急迫也、以或新地或連年無住或寺僧有罪、廢之追之、則漸次可減員數、此良法也歟、

一元老執政及其子弟有台恩之辱、則就公之第二而謝之、公曰、不忘恩之所由出、則各々不可不盡忠勤、公之詞每々如此、

一明曆二年丁酉、正月、武江大火、台城及諸侯士庶之家多燒矣、淺草倉廩亦悉燒、米穀如山、而其火久不

消、營府諸老相議、將_レ命_二市肆_一出_二人夫_一滅_レ之、公曰、方今市井悉羅_二大火_一、失_二其所_一、今又徵_二人夫_一、則愈困窮矣、請博下_二令於市井_一而曰、太倉粒米火未消也、今人々亦置_レ食、許以_二自力_一隨_レ分而消_レ之、取_レ之、則顧不_レ令而諸人競集而取_レ之、火自消矣、是賑饑滅_レ火之良策矣、僉曰可也、果如其言、

一公曰、凡名言者不_レ能_二多言_一哉、董仲舒者漢大儒也、其言雖_レ多、然宋儒所_二撰採_一者只_二二語_一也、所謂道之大原出_二於天_一、又曰、正_二其義_一不_レ謀_二其利_一、明_二其道_一不_レ計_二其功_一、

一公屢稱_レ之曰、人欲非_レ性者、誠龜山格言也、

一一日偶語_二侍坐者_一曰、嘗聞松平雲州之家、自_レ古有_二佳例_一矣、每歲正月將_レ授_二具足餅_一於家中、時、於_二厨中_一椿餅甚多矣、於是家中男女入_二來其厨內_一、而各每_レ手取_二之歸去_一矣、其狀如_二爭奪_一也、這是雖_レ似_二失_一禮容、古家之遺風如_レ此矣、凡爲_二人主_一者、施_二利於下_一、其意善、如取_レ下而奉_二於上_一、其意暴也、雲州之家癖風俗之美者也、

一野州下館城外、有_二台命_一賜_二放鷹地_一、此時下館無_二城主_一、故江府麾下諸士來護焉、時城中龜豪奴隸、竊入_二

放鷹地_一而捕_レ鳥、放_二鐵炮_一、於是守_二其地_一者出而或擊_レ彼奴隸、或奪_レ彼鐵炮_一矣、城中諸士聞_レ之大怒、欲_レ酬_レ之、而有_二其企_一、依_レ是守_二鷹場_一者告_二急於江府公邸_一而請_二加勢_一、公曰此細事也、若令_二整勢備_一棒而趨_レ之、則豎子之爭、而非_二長者之所_一爲也、但撰_二士卒之點智者_一二三人_一而遣_レ之解_二辨之_一、則可_レ熄而已、吾顧_レ之、其曲本在_レ彼、然或被_レ擊或被_レ奪、而有_レ怒也、只遣_二使於城中_一從容而曰、如怒不_レ可_レ止、則告_二寡君_一、而當載_二我番人_一、以_二其頸_一贈_二于城中_一矣、雖_二幾人_一任_二其所_一請云_レ爾則可也、是不_レ足_レ驚也、家長某隨_二其命_一而遣_二二三人_一而解辨矣、城中聞_レ之還慚_レ之、且陳謝而止矣、公素不_レ願_二放鷹之逸遊_一、又悟_レ受_二其地_一而無_二益_一、而遂還_二奉其地_一而曰、嗚呼有_レ暇哉心安哉、

一嚴有幕下命_二弘文學士_一編輯本朝通鑑、永井伊賀守奉_二行之_一、公聞_レ之怡甚矣、編輯未_レ半、公請_二伊賀守_一借_二其草藁若干卷_一、令_二侍史讀_一之聞_レ之、隨_二其心之所_一適而令_二抄出_一焉、通鑑編輯全成而納_二御庫_一、人不_レ得_レ見_レ之、公謂此編者當代之盛舉也、願_レ鈇梓博行_二于世_一矣、且恐無_二類本_一而萬一有_二火災之變_一、則

奈之何、因茲數以此告老中、然未達其意、吾患之耳、

一公稱家老友松氏與以忠直潔白、而後教諭之、其言曰、處事之方公則無情、不如公而以人體之之仁也、今乃爲問學言之、汝尚勉哉、

一公至井伊老之邸第時、主人携碾茶壺自點茶供公、乃戲曰、此碾茶壺者有人袖之來贈我也、我雖固辭然強之、故受焉、誰哉有贈如此之珍器於公者耶、公曰人皆知我素不可受、故無以此試我者也、人察老之或可受、故齋來贈之而已、主人笑曰、嗚呼公之醜言又如此歟、

一與水戶相公論性曰、相公固執性惡之說、而紛々然矣、所謂夫性善者、諸賢之所從也、相公雖明敏、唯願據先賢之成說而倣工夫可也、勿建異見、

一每聞有奇方良藥、則命仕醫、或丸或散或丹或膏皆調和、而蓄之於庫內矣、如有病患者而仰望之、則不拘貴賤、應聲急命出納之者、賜之、少無吝嗇之心也、

一寬文十年庚戌、夏公致仕之暇在會津、欲察諸吏決

獄之狀、各令讀其斷案之書而聽之、偶村里中一院僧挾小刀而往將刺別院僧、別院僧見其危急、而即奪取彼刀而持之、彼僧彌怒而爭其刀、時彼僧自觸其刀而死矣、於是別院之僧知其狀之難明、而遂自引爲己之咎、速伏其罪矣、吏亦斷之將以死刑矣、公詳其狀、察其情、爲無罪而赦之、出於獄而令去、此僧退而語人曰、若微斯明君我以何免死哉、出萬死而遭一生此之謂與、初公論吏曰、凡僧等之獄大抵以僧法決之可也、殺生者五戒之第一也、禁殺一蟲之命、況人乎、爲僧者挾刀往將殺人、甚可惡也、且觸己之及而死乎、最不足惜焉、

一會津諸吏鞠問罪惡之帳籍、或百張或數百張、末後載諸吏決斷之評、而達于江府邸第、令近臣讀之聞之、隨聞而有所疑則令貼紙於其上頭、而先遇了矣、及再聞之即決之、如有疑者命會津之吏鞠問之、果如公之察矣、非苟諸吏之所及也、如此之類不可勝計、

一孔子曰、君子事君、進思盡忠、退思補過、將順其美、匡救其惡、公曰、無一時一念之不在君也、

是真西山之說也、忠愛之臣不可不如此也、深稱嘆之、

一公偶語某曰、神道中臣祓之詞與今時之文句大異、而讀中華之書者見之則似可笑矣、然吾朝上古之文字如此而已、因謂、易大畜爻辭曰、豮豕之牙、程子解之以爲不假刑法而民惡自止之義、則其理甚明而易曉也、如此之文句亦似可笑而難覺、若無先儒之明解、則誰通之乎、於是吾願本朝學神道之人、有程子之才而發明其蘊奧、解釋其文義、則其道愈明而行于世、嗚呼惜哉、

一公素聰明、且焚從前所讀老佛之書、而一潛心於濂洛關閩正流之學、工夫日積、而後學本朝之神道於吉川惟足、而盡得卜部之奧秘矣、每會惟足一公告若干之工夫、問曰、如何々々、惟足無異論、而答曰唯々而已、

一夜公語某曰、天照太神使拔素戔鳴尊手足之爪贖罪、何甚哉、凡素戔鳴之暴惡不一也、就中太神爲御田一時、素戔鳴春則重播種子、且毀畔、秋則放駒使伏田中、是最罪惡之甚者也、故至拔手足爪使贖之矣、夫舜之於象也、欲殺己

數回、然象只寇於己而已、故舜及爲天子而封之有庫而親愛焉、又周公之於管蔡也、管蔡欲亂周之天下、故誅之矣、夫食者民之所天也、害稼穡者天下之罪人也、太神之怒素戔鳴、周公之誅管蔡、其義一也、

一或人見公之次語曰、官醫某常好逸遊、遂不開藥篋、是爲如何哉、公曰、聖人不謂之乎、觚不觚、觚哉觚哉、吾亦竊曰、醫不醫、醫哉醫哉、

一易傳所謂君子所貴世俗所羞、世俗所貴君子所賤、公稱此語而嘆、

一公常好道義之談而樂之、時俗客來見而噉々、其言一不及義、且移時而歸矣、侍坐者或謗之或怒之、曰愚哉斯人、公和解曰、如汝輩棄人、則何以立人世耶、遂不見怠惰之色也、

一公曰、吾儒之教者、說仁則仁、說孝則孝、說忠則忠、說敬則敬、而始終一也、如釋之教、則譬如除算也、因指其座而言曰、欲移于彼席、則去此席矣、何與儒同道哉、

一又曰、有不孝之罪、則雖悟道之僧不可赦也、棄父棄母而已獨成佛、亦何有益耶、若吾領內有黃

藥一僧而說種種禪、捕而磔殺之一耳、

一公曰、凡養他人之子、爲己之子、則名之曰義子、亦名其父曰義父者、雖非骨肉之分、其義之所關亦由不輕也、至其祀之、則各有感格之道也、凡天地之間理與氣而已、骨肉之祭其親也、其氣爲之主、而理亦相隨、義子之祭其親也、其氣爲之主、而理亦相隨、皆所以祭祀有感格之道也、一每年春夏之交、會津城外大川、有魚相聚、小者三四寸、大者六七寸、欲產子而以沙石自憂其腹、則鱗色斑々而赤、牽其類來數千萬、擇水石得其所、而同時聚于處々之海底、土人名之曰屬魚、此時士庶日々往河邊而竊窺之、投網而掩之、一投而得數百矣、故士人與農人相爭多、於是相共約燃火繩、分時限、刻而各捕之矣、寬文之頃、公令曰、勿妄捕也、人皆以爲何至禁之耶、公謂此魚欲產子而聚于此、而悉捕之是殺胎盡物也、捕之須有時也、且士人與農人爭其利、最不可也、又於餘湖之邊、里民束笹葉而沈之水中、則鯽魚細小者多入此中、而後舉之取之、名曰笹浸、公又禁之、是亦不殺大之意也、公嘗謂、凡盡

物取之不可也、如夫鴉者、雖無用之物、是亦天地之一物也、或群聚而有害苗稼之類、則臨其時射之可也、奈何一時盡之而有下令遂其性之理乎、

一日交會之次、小出備州語曰、往來于街頭橋邊時、有饑寒窮人疲癯廢疾者、各揚乞丐之聲也、初視之則我心甚惻然矣、再視則衷心漸衰也、屢視則衷心自不生也、公曰、又有甚焉、觀刑戮者亦然、初則哀憫之心甚切、而數日之間不息也、數視之則還生喜心、愈視愈樂矣、此皆仁心之所、以亡失也、然則耳目之所觸、最不可不存操也、故君子遠庖厨者、所以預養我仁心也、

一家中士輩將立己之後、而請恣分與其祿矣、公曰、祿雖己之所受、不可輕焉、念其所由來、則不可私分之也、

一公偶令人讀王元之所作待漏院記、聞之三嘆曰、奇哉此文、吾願書之而常揭之營府之中、而令執政之人見之則幸也、

一寬文八年頃、京極丹後守與舍第某、以壘地之事相閱而不止、遂達執政、雖和解之、丹後守不

肯、於是公與井伊掃部頭相議而諭丹後守矣、掃部頭謂公曰、如此而亦不肯則奈之何、公曰何傷乎、如此而不肯是驕恣也、然則賢與吾各遣一隊騎兵、而急踏殺之耳、又何費詞乎、丹後守肯之、

一、一日公書陳法、而命長臣某令入議焉、或者妄議之曰、此條衆可從、彼條衆不可從也、長臣告之、公曰此陳法者大抵設之如此而已、我若臨軍法而指揮之、則衆雖欲不從何可令及一言之惡意耶、公嚴厲又如斯、

一、及公之治會津也、本乎人倫、正乎風俗、故子不得訟其親、如有孝子貞婦、則褒之賜之、行旅出於其塗者、有疾病則養之、有死亡則葬之、窮困而不能歸者、則救之使無失其所也、惠其民也、或設社倉而防其患、或賜老養而安之、或制所產子而戒不慈也、又四民尚焚屍習以爲常、教諭之禁止之、然又慮寺院地狹而不使瘞埋、故賜諸人葬地於三所、而遂其志也、因茲諸人自知火葬之非、又知立碑表、又會津前大守以來雖多好文字之徒、然皆不

知有正學也、及公之代、讀小學之文、講性理之書、知崇聖賢而排異端矣、及公之晚年、深信本朝之神道、遂悟卜部之奧秘、故及其薨、遺命于子臣不作佛事、自來國人始知儒禮神道者多、化之者亦有之矣、加旃以松脂石灰之類貯官庫、有欲厚葬者、則應其求而授之、是以工匠知棺槨之制、役卒亦練三物習筑埋也、凡士庶知厚葬者、自公之時始矣、又禁殉死亦先台命數歲也、如此者變化風俗之大者也、其餘不可勝計也、詩所謂周雖舊邦其命維新者歟、可謂後世國主之模範也、

土津靈神言行錄卷之下終

嘗聞麟鳳之於走飛山海之於埳瀌聖人之於生民亦類也信哉然則雖不至聖人亦類同而異者於人或有不當時異乎類者誰哉僕竊稽我中將源公貴賤大小亦雖多未見斯人宜哉沒後稱靈神也其在世嘉言善行不爲不多也公之晚年弘文林學士屢來而接語退謂藤子默曰源公之學不尋常願近習之輩記錄之則可也僕辱得侍其末席而日夜親炙焉然志淺氣惰而一字不能記又不注意於此則忘失者顧十之七八矣千悔而不及矣又僕未見聞之事幾何追思之憂其久彌失其美於是抄出於成文之中輯爲上卷又聊輯僕所見聞之平生爲下卷號曰土津靈神言行錄矣昔聞京洛學者相謂曰今天子有後光明院公家有西三條武林有源正之然則向所謂異乎類者我中將公也歟嗚呼惜哉以書卷尾

天和闕逢困敦仲春望月 橫田俊益謹跋

西山遺事敘

伏惟我先大君義公明等于兩儀量包于宇宙浩々蕩不識其津涯雖非世之所以窺測而其寬仁睿哲博覽宏辭雄略英毅威武敦烈也實存神之德容非人敢焉所謂天縱之才乎若夫尊王定公家糾異域失禮撰史而歸統於南朝讓國家遠肌膚之愛奉勅銘硯賜於備武兼文絕代名士宸翰之類也不可勝記乃如斯也公之平素所以不勤知不勉行而其孝也弟也忠信也卓見奇行聲著於天下矣由此觀之可謂天縱之才也元祿庚午之冬致仕歸鄉而退居于西山也如飲食衣服居家臣妾無異於草野之人陶々然從容于水雲之間敲推于風騷之蘊也天慙不殘一老元祿十有三庚辰十二月甲子以天年薨于西山年七十三參議公在側晝夜看護同月十二日葬于西山之北瑞龍山葬儀遵禮參議公議儒臣諡之曰義公矣都鄙聞公之喪哀慕者幾干上自天子下至以衆庶幕府命天下遏樂七日舊知交情不論於未通交際之儀者或致祭或爲佛事或作哀悼文以愁慕不止焉豈其人力之所致哉是皆集義之所爲非有至誠之漸如何得若斯矣要知固天縱之才矣焉記曰惟天下之至誠爲能盡其性能盡其性則能盡人性能盡人性則能盡物

之性能盡物性則可以贊天地之化育惜哉以公之明量不攝祿位王道彌遠有天縱之才而無天助之命何哉嗚呼時運不齊也自古然子曰道不同不相爲謀亦各從其志也美玉藏韞而黎民不被其澤命也今茲辛巳正月參議公居喪遵禮哀慕罔極使公之德業傳於永世也重命儒臣考其履歷狀其盛德安積覺中村顧言栗山成信酒泉弘等謹錄實事實行爲一本可謂孝思之至矣視其書也其文以隸書誌之也臣三木之幹宮田清貞牧野和高等竊以爲恐他日題識者難曉拆唯冀使公之遺德後來編見者之易通曉矣於是和語繕寫之且奉仕間採撫面所見聞之嘉言懿行而質之舊臣老士附卷末爲一本以號西山遺事也臣等雖潛偷追無道後人鑑斯書而有助於世教則幸莫大焉此臣等之微志也於是乎謹序

○賴房

常州水戶城主、正三位權中納言、諡威公、

從一位太政大臣家康公第十一男、母ハ太田新六郎源康資ガ女、英勝院長譽清春也、實母正木左近大夫平賴忠ガ女、養珠院妙紹日心、

賴重

讃州高松城主、小名竹丸、改ハ右京、從四位上左少將右京大夫、後稱讃岐守、老後號ハ龍雲軒源英、

女子

名ハ通、法名惠了院達心日具、許嫁松殿右大將藤原道昭卿、禮未ハ成道昭卿薨、

龜丸

早世、法名本妙院宗覺童君、

女子

名ハ萬、法名長壽院妙證日禎、嫁ハ臣太田主水源實政、

女子

名ハ捨、早世、

女子

爲ハ從一位左大臣家光公養女、稱ハ大姫君、嫁ハ加州金澤城主松平筑前守菅原光高、光高卒後爲ハ尼、號ハ清泰院法譽性榮、

光園

水戶城主、從三位權中納言、致仕而居ハ常州久慈郡太田郷西山ニ依テ稱ハ西山侯、諡シテ號ハ義公、

女子

名ハ菊、嫁ハ臣松平駿河守源康兼、康兼死後爲ハ尼、號ハ芳園院妙樹日觀、

女子

英勝院養、幼シテ爲ハ尼、號ハ玉峯院雄譽清因、住ハ相州鎌倉英勝寺、

賴元

小名丹波、後刑部大夫ニ任ス、法名眞源院靈方無外、

賴隆

初名右近、爲ハ播磨守、

賴利

小名千丸、改ハ河内、後改ハ數馬、又改ハ求馬、諡曰ハ簡良子、

賴雄

初名藤太郎、後改ハ豐後、又改ハ一學、爲ハ大炊頭、法名一法院融山圓公、

賴泰

初名左近、後改ハ左門、老後號ハ懷軒、

賴以

初名出雲、後改ハ伊織、諡曰ハ孝子、

女子

名ハ律、嫁ハ臣山野邊土佐守源義實、義實死後爲ハ尼、號ハ光耀院、

房時

初名主殿、後改ハ權之介、法名覺林院圓譽心月元正、

女子

名ハ不利、法名青松院眞譽心光誓圓、嫁ハ本多出雲守藤原正利、

重義

小名千千代、改ハ武藏、爲ハ臣雜賀孫市總積重次養子、改ハ孫三郎、後改ハ孫市、法名釋眞壽、

女子

名ハ犬、爲ハ讃岐守賴重養女、而嫁ハ細川越中守源綱利、法名本源院梅溪妙香、

女子

初名ハ藤、後仙、法名證智院法圓日惠、嫁ハ臣眞木隼人藤原景信、

女子

名ハ竹、早世、

女子

名ハ梅、法名淨雲院妙清日受、嫁ハ臣宇都宮下野守藤原隆綱、

女子

名ハ市、法名清雲院妙慧日布、嫁ハ臣酒井周防守忠經、後改ハ忠治、

女子

名ハ松、出生數日而早世、與他諸子不知前後、故附焉、

女子

初名ハ助、後改ニ奈阿、嫁臣伊藤玄蕃藤原友次、友次死後爲尼、號ニ松壽院、

賴常

讃州高松城主、小名兵部、從四位下少將

女子

右京大夫、後稱ニ讃岐守、實光園卿男、有馬玄蕃頭藤原賴利室、

賴兼

賴母、改ニ靱負、

賴章

圖書、

女子

鷹司大納言照房卿室、

賴直

玄蕃、

女子

嫁ニ臣大久保一學、

賴芳

千松、

女子

爲ニ興正寺養子、

輕久

後改ニ右衛門、早世、

賴豐

實圖書賴章男、後爲ニ讃岐守、

綱方

小名松千代、後稱從四位下左近衛權少將、實賴重之長男、早卒、諡號ニ靖伯、

綱條

小名采女、實賴重二男、

鍋千代

早世、

女子

名ハ熊、後屋簀、早世、實筑後守賴通女、

岩丸

早世、

吉孚

小名菊千代、後改ニ德川左衛門督、

女子

名ハ清、早世、

豐丸

早世、

女子

名ハ茂登、早世、

女子

名ハ幸、早世、

金松

早世、

直松

早世、

女子

名ハ蝶、改ニ道、又改ニ増、實ハ今出川菊亭右府公親末女、

輕松

改ニ友千代、早世、

右賴房公之御子、十一男十五女、合而二十六人也、

此外女アリ、名ハ虎、法名珠光院妙因日應、實ハ田代梅東之第六女也、爲ニ賴房卿養女ニ而嫁ニ臣鈴木石見守重政、賴房卿御子、實ハ二十六人也、或ハ二十七人ト云者、加ニ此女ニ故也、梅東者、養珠院妹也、

桃源遺事卷之一上

一西山公御父は頼房公第三の御子、御女子を加るときは第七の御子也

御母は谷左馬介藤原重則の女なり、谷小左衛門重代は姉也、重代老後號二寛永五年戊辰六月十日庚子、常州茨木水戸の城下、三木仁兵衛之次が家にて御誕生なされ候、威あつてまかも猛からざる御生質なり、御色白く、御像高く、御顔おもなかに、御額廣くして、兩方に角有て、目角ともいはまほしく、御目つぶくる長く、大抵の目の少し細がたに御見え候が、御見能候得ば、尋常の目よりは大きな御眼なり、御鼻柱御鼻柱とははりて高く、是や隆準とも申べきか、若き御時は、世上にて美男の聞えあり、御老後に西山に御隠居なされ候ては、御鬚髯御たて被_レ成候、御髮髭もうるはしく御堅肉也、又御寝なられ候時は、御目半眼にてすきと御とち不_レ被_レ成、とくと御ねいり候得ば御目の玉くるめき申候、また御休憩候節、御側にて聲高に物語仕候に、能御寢入被_レ成候而、私語、或はこそづき候ても、御目さめ申候、又御寢入被_レ成候

得ば、御足の指動き、ひたと御床を御うち候御寢入不_レ被_レ遊内も左様に在_レ候につき、馴奉り候者共も、御ねいり候と御ねわりなされざるとをまた取ちがへ申候、亦御力もふつうに御越え候得ども、常に御隠し候へ、御近臣ども、其程を不_レ存候、又御幼少の御時、御相手の子共どもと塀の上或は屋上の人留の外をかけ競をあそばし候に、續く者なかりき、御壯年の時は、大抵の塀をば飛こえさせ給ひぬ、また御一生の内、萬事にせわしくしき御事これなく、地震大雷大火等の節、人々殊の外動轉申こにも、終に御騒ぎ候御氣色曾て御座なく、御食事聞召候は上臈おきの如く、すぐれてぞんじやうなる御様子也、然ども御狩場又は御旅行などの時分、ことにより下々もうとみ申程のきたなき器にて飢食のむさきをも御心よげに聞しめし、是は御心見のため、又は御連枝方、および御家士どもの心をつけ申ため、旁に被_レ成候御事と皆々申候、又御思慮の深き事は申におよばず、上中下それらの人に御對し、御時宜あひも御すぐれ被_レ成、又當座の事に付ても御さし働き流るゝが如くに御座候、亦和學漢

學は勿論、諸宗の佛學、神書、醫書、算數、詩文、聯句、詩餘、和文、和歌、武藝等何によらず御存被遊候、天文、地理、禽獸、草木の名、委く御覺、或は上古衣服并器物の拵やう、もろくの武器樂器、および賤しき器物迄もいたしかたよく所存被遊候、亦御細工、御繪、御料理等も、よくあそばされ候、其外御多才の事ども繁き故是を略す、御雅名は長丸、後に千代松と御改候、御名乗光圀晉書陸雲傳云、聖德初龍興、光有大國、の御字は德亮、出書經、又觀之易の觀國之と申、後に子龍子龍二字出晉書謝靈運傳、と御改候、又日新齋と號し、又常山人と號し、或は率然子と號し、又梅里と號す、是は吳の地名也、蓋泰伯を御慕ひあそばし候故御用被成候、從五位上に敘し、從四位下左衛門督、從三位右近衛權中將を歷給ひ、賴房公御逝去、御家督御相續候て、參議に拜し、中將もとのごとし、御隱居の砌、權中納言に御任官なり、御隱居士ともあそばされ候とも申候、



御判は、五嶽の眞形圖の恒山の圖の形也、常山の號につき、常山と恒山同事成によつて御用ひなされ候、

一同八年辛未、西山公三木仁兵衛之次が門に、其ほとりの子供どもとひとつに御交御遊び候處に、眞弓山常州久慈郡、權現の社僧等覺院世人此僧を呼て天狗坊といふ、人相をよく見申候、と申者、門前を通りけるが、西山公を見奉り、此兒は平生の人にあらず、何とてかやうの所に御遊び候やと立止り不審を立申候、御母公西山公を御懷胎なされ候節、故有て水になし申様にし、賴房公仁兵衛夫婦に仰付られ候所に、仁兵衛・私宅にて密に御誕生なし奉り、深く隠し御養育仕候、就夫男壹人女貳人のみ御守りに付奉り候、此時御年四、仁兵衛が妻は初は、後陽成院帝の中宮中和(秋イ)門院に仕へ奉り、侍從とめさる、侍從が妹岡崎(岡崎安休が女)を家康公より龜君(賴房公御幼名)の御乳の人に附置れけるが、身まかりければ、家康公より姉侍從を禁裏へ奏し願はせ給ひて、關東へ申おろさせ給ひ、龜君の御方へまゐらせられ、名を武佐とめしけるとなん、仁兵衛事むささ夫たるによつて、是亦家康公伏見にて被召出、賴房公へ御附なされ候、(通書)イニ岡崎と申老女は、家康公の御局なりと有、

一 同十年癸酉、賴房卿御世繼いまだ定らざりしに、大樹家光公の上意にて、中山備前守丹治信吉家康公より賴房卿へ御附遊ばし御家老也、水戸へ下り、御子様方を撰び奉りけるに、西山公熨斗をとらせられ、備前守を爺ザイとめされ下され候、御子様方の中にて御様子御勝れ被遊

候故、備前守江戸へ登り言上いたし、御世つぎに御定り被_レ成、同年江戸へ御登りなされ候、此時御年六ツ、

一 同十一年甲戌、西山公大樹大猷公へはじめて御對顔あそばしける處に、御手づから文昌星のからかねの像を進せられ候、段々御成長に隨ひ、御文筆御すぐれ、異國までも相知れ候事、世人皆えれる所也、是を以て思へば、文昌星を進せられ候は、自然の御奇瑞歟と人々申あへり、後に武州小石川御邸の御園後樂園と號すに八角の堂を建て、件の像を御安置被_レ成候、

一 同年、小石川御後園の側、櫻の馬場と申所にて、賴房卿斬罪者仰付られ、其首を其まゝさし置せ給ひ、夜に入て西山公の御心をためし給はんがため、彼首を持參被_レ成候へと仰られ候、右櫻ノ馬場と申は、御屋形より西の方にあたり、此間四町ばかり有、道細く水流れ、木立まがりて、深山園谷のごくくはイ晝も女童などは中々至り難き所なれば、御前に相詰候老女を初め、女房達甚おそろしき事に思ひ、又は西山公の御様子いかの氣色イがあらむと手を握候所に、西山公少も御滯なく御

座を御たちなされ候、其とき賴房卿是を指て行候へとて、御脇指をまゐらせ給ふを御さし、暗夜に只獨彼所へ御いたり、手さぐりに右の首御尋、やうやく御求め候へども、御幼少故御力に叶はず、もとどりを御とり、引すりゝ、道にて二三箇所御休み御持參被_レ成候、賴房卿御喜色にて、右之御脇指を直に進せられ候、此時御年七、

一 同十三年丙子七月六日、家光公の仰によつて、西山公江戸の御城にて御元服、御名乗の字御拜領ありて、徳川左衛門督光圀と御名乗被_レ成候、此時御歳九、

一 同十五年戊寅二月廿日、西山公御具足御めし始なされ候、此時御歳十一、

一 同十六年己卯夏、西山公水を能御およぎ被_レ成候に付、賴房卿御試のため、武州江戸淺草川へ御同道なされ、西山公へこの川およぎ越候へと仰られ候て、賴房卿先河へ御打入候、西山公には少し引下り、御跡より御およぎ、さうなく御越候へば、場所は淺草川の内、三ツまと申所也、賴房卿御喜色にて、三條小鍛冶宗近御一は巴也、御一生御登城の節は、此御刀をの御腰物を進せられ候、此時分馬も御指なさせられ候、

よく御乗、諸藝御器用に被_レ遊候、此時御年十二、

〔追加〕、此時近臣にて送り奉る、元來頼房卿の御風志にはあらぬを、君あやまらせ給ひて沈み給ふならば、飛入て助奉らん本意也とぞ、藤田將監

といひ傳ふ、

一同十七年庚辰三月四日、西山公右近衛權中將御拜

廿九日イ

任被_レ成候、同年七月十一日、西山公從三位御昇進被_レ成候、此時御年十三、

一正保二年乙酉、西山公始而史記の伯夷傳を御よみ御感有_レ之、御父頼房卿の御世繼には、御兄頼重殿御たち可_レ被_レ成所に、西山公御世嗣に御たち候段甚本意ならず覺召候、自_レ是して御嫡家へ御讓被_レ成度の御存念おこり申候、此頃迄は學文は御好なされず候が、今年より御學文御精を出され候、

一同年二月、西山公御前髪とらせられ候、此時御年十八、

一承應三年甲午四月十四日、近衛前關白左大臣信尋公の御女尋子御入輿御婚姻あり、西山公は、常々御兄頼重殿御つぎに御立不_レ被_レ成、御弟の身として御世つぎに御立被_レ成候事御本意ならず思召候

故、終には頼重殿の御子を御養子になされ、御家督御譲あらんと覺召候に付、御婚禮の事猶更御本意におぼしめされず候へども、御父の命をむかれがたき義にて、御婚禮なされ候、それにつき、其夜姫君の御方へ、右のあらましを聞え置せたまひけるとぞ、此時御年二十七、

一明暦三年丁酉二月廿七日より、西山公日本の史を御撰初なされ候、神功皇后を後の列に御かゝせ、大友皇子を天子の並に御書せ、南朝を正統に御立被_レ成候類、世上流布の書には、古來より箇様には無_レ御座候、今如此御改なされ候、此時御歳三十、

一寛文元年辛丑七月、頼房卿水戸におゐて瘧疽の御うれい御大切の御様子に付、西山公夜を日について急に御下り、御心を盡され御看病あそばされ候、第八男頼泰殿は、故有て御誕生の後頼房公御對面無_レ之、然る所に、同廿九日御末期におよび、西山公達て頼房卿へ御ねがひなされ、頼泰殿はじめて御對面あらせ給ふ、同日頼房卿御逝去御歳五十九被_レ遊候、御逝去後、西山公三日御食事を聞し召れず、殊の外

哀傷なされ候、御葬の儀式等儒法にあそばされ、
瑞龍山常州久慈郡瑞龍山は、水戸より北之方行程六里、に御葬被遊、御諡威公と
申奉り候、御廟を水戸の御城内に御建、御神主を御
安置被成、四時并御忌日御慕祭等有之、玄かのみ
ならず、毎月朔望、又は臨時初物等の御供物、今に
至るまで絶えず、尤武州江戸の御屋形にも、神主御
安置被成、其時々御拜被遊候、御葬の節、諸士は
申に及ばず、威公より御呵にて塾居のやからまで、
西山公御免被遊、御道筋に並居、御柩拜し奉り候、
威公御逝去に付、眞木左京藤原景猶左京は追腹の著に、兼て極れるもの也、
山野邊右衛門大夫源義忠、田代三郎右衛門藤原吉
音を始として、其外御恩厚き者ども姓名、追腹可
レ仕覺悟之由西山公御聞及ばれ、御自身左京が宅へ
御出、達て御止メあそばし候、左京を始、右之者ど
も仰の趣とくと承候處に、其理一々御尤至極の事
に付、違背難仕、左京を始め、右之者ども追腹相と
どまり申候、其後此事上に相達、殉死之儀、天下一
統御停止也、◎左京が宅へ御出以下異本云、御忌中御みづから
左京が宅へ渡らせ給ひて、殉死は戦國よりおこ
り、葵程王がたぐひ暴悪無知の輩、奢侈食欲のあまり始しこ
にて、仁人君子の致すべきことにあらず、死せる人に益なく、生る
我に不忠也、生残りていか程か忠義を盡し、死すべき時節に身命
をすて、國の爲に義を全く名を(立て)死すなすこと武士の本意、

亡君への忠義、いかでか是に過べき令死しての益にかにぞや、も
のゑる事あらば、我が言にふたがは、誰かそしらん、もししる
者あらば、皆物まらぬ人也、無知のしり何かいと、武士の道に
事は我に任せよと、理を盡してとめ給ふ、其比の武士の風俗に
て、中にも此もの共杯が有様、死ぬべきことなどを主人にもせよ、
神にもせよ、とめ給ふとて、とらるべき者共ならぬが、其理に
風伏して、左京をはじめ、誰も
誰も一同に感歎してやみぬ、

一 同八月、西山公大樹家綱公上意によつて、江戸へ御
登りなされ、同十九日御家督御相續の前の日十八
日に、上使可有由風聞いたし候を、西山公御聞な
され、御兄頼重殿頼重殿も、西山公と御同腹也、御母堂御懷胎
の節、故有て頼重殿も水になし可申由、頼
房卿三木仁兵衛之次夫婦に被仰付候處に、仁兵衛夫婦心を合
せ、頼房卿の御母公英勝院尼公へ御内談申上候間、密に武州江戸
麴町に我家在之候間、是にて元和八年に御誕生なし奉り候、然れ
ども、曾て披露成がたき趣に付、御二歳と申時京都滋井大納言李
吉卿の御許へ送り奉り候、李吉卿御養子分に被成、ゆくは御
出家になし給ふべき由にて、十六歳迄天龍寺の塔頭慈濟院に渡ら
せ給ふ、李吉卿の御内室は、仁兵衛之次が娘也、此縁を以て、頼
重殿を彼卿へたのみ奉れり、頼重殿御事、英勝院尼公大樹家綱
公へ被仰上候、御執立進せられ候、仍之、其節家光公頼房卿へ仰遣
され候は、頼重殿を御取立あそばされ候御禮は御無用なるなべ
し、御自分には御捨候て、知り給はざる子也、をはじめ、御舍
弟の御方を御招き、頼房卿の御神位の御前に御集
め、頼重殿へ仰られ候は、明日の上使の沙汰は、我
等に家督の儀仰出され候事と存せられ候、私儀弟
の身として世繼に罷成候段、年來心に耻申候、頼房

卿御在世の時、世を遁れ申度存候得ども、父子の中
惡敷候て立去りやなど、人々評判申べきと、唯今
迄其通りに打過候、就夫、願はくは、貴兄の御子
松千代綱方を我養子に下さるべく候、若此段御承

引不_レ被_レ成候は、家督之義被_二仰出_一候とも御請
不_レ仕、直に世を遁可_レ申と餘義もなく仰けれ共、頼
重殿にも色々御詞を盡され、御承引被_レ成ざりけれ
ば、西山公はまでと思召候御色にて、御座を御退
き奥へ御入被_レ成候、其時御弟、頼元殿、頼隆殿、御
口を揃、頼重殿に仰られ候は、是非松千代を西山
公へ早々進せらるべきよし御領掌有べく候、さな

くば事大切に及び可_レ申と達て御取持被_レ成候付、
頼重殿も是非なく御子松千代殿を西山公へ御養子

に進せられ候、扨翌日の上使御察のとほり、御家督
御相續の上使也、松千代君後養子に被_レ成、且松千代君の御
弟采女君綱條にも御引とり、御連枝並にな
され、水戸にさ御家督後御家に傳り候御寶物共、多は

御兄弟の御方へ進せられ、御手前には輕き物
を被_二差置_一候、その故は、西山公には、御家督御請
被_レ成候上に御寶共は御所持可_レ有事にあらずと
思召によつて也、且頼房卿御逝去の後三年の間、頼

房卿の御仕置を御用ひ、少も御改不_レ被_レ成候、又西
山公御部屋住の時、御部屋へ不届なる致方の者共
をも、御家督の其舊惡をおぼしめさず、夫々に御召
つかひなされ候、

一同十一月十四日、御母谷氏、御名はひさ、御
法號久昌院心周日句御逝去被_レ

成候、御年五十七御遺骸水戸御城外、靖定山久昌寺初は
大山經王寺、開山は禪那院

日惠上人、中興は日隆僧正、にて御葬、厚き御法事ども有
之、其後延寶五年丁巳、御墓を瑞龍山へ御移被_レ

遊、右之御寺をも常州久慈郡稻木村へ引移し給ふ、
堂塔唐製本式に御建立、法式悉御改正、役者十坊カラヤウ
略す、物裁號
摩訶衍菴

三時勤行をなさしめ、都て俗法にあらず、大
フチカタウ黄檗寺に似たり、且談林を附給ひ、來會所化に月俸を給ふ、委く附録
に見えたり、此時御歳三十四、

一同二年壬寅十二月廿一日、西山公宰相に御任官、中
將は故のごとし、

同年、諸士の次男六十人一度に被_二召出_一、御馬廻り
と申役はじめて出來申候、此時御年三十五、

一同三年癸卯、西山公御家督後始て水戸へ御下向に
の節、御城へ御着候といなや御身を清淨、御衣冠に

て御廟御拜被_レ成、威公御逝去の砌のごとく、殊の

外御落涙遊し候、御供に參候者共も、此御様子見奉

り、皆々落涙仕候、御歳三十六、

一同五年乙巳、舜水朱先生

名之瑜、字魯環、號舜水、諸文恭

といへる大

儒、大明國の亂を避て、日本へ渡られしを、西山公

御招き御師匠になされ、道を御とひ、御師弟の禮厚

くあそばし候、此時御歳三十八、

一同六年丙午四月、諸士の墓所を、常州水戸常盤と坂

戸の兩所に被_二仰付_一、且文公家禮により、喪祭儀略

といふ書を御えらび、諸士に下され候、此時御歳三

十九、

一同七年丁未十月、吉田

日本武尊、常州茨城郡吉田郷、靜那珂郡靜村

の

祠を修造仰付られ、唯一宗源の神道に御改め、乙女

八人神樂男五人づゝさしおかれ、日月四神の幡、お

よび樂器もろゝの神寶を御納め給ひ、社僧を廢

し別寺に住せしめ、其田をもつて修復の料にはい

たし申やうにと、神職の者に被_二仰付_一候、且靜の明

神の瑞籬の邊に檜の大木あり、其本より銅のをし

で壹枚掘出し候、方二寸ばかり也、印文靜神宮と

有、諸人奇なる事に思ひ、則言上申ければ、西山公

銘をあそばし、是を祠中へ御納なされ候、

同年御家中の老人共を御哀憐、老人どもは、皆七十以上なり、城中へめし御料理被_レ下、且金銀衣服等を給り候、此とき

御年四十、

一同十年庚戌正月廿二日、世子綱方君御逝去、監曰靖伯御年

二十、此時西山公御歳四十三、

一同十一年辛亥綱方君の御弟綱條君を御世繼に御た

て被_レ成候、賴重殿の御次男迄、その初に御引取さ

しおかれ候段、深き御思慮なりけりと、此とき人み

な感じ奉り候、此時御歳四十四、

延寶元年癸丑孔子堂を水戸に御建なさるべきと思

めし候に付、江戸駒込御下やしきにおゐて假家を

立被_レ成、御家中の諸士の中にて御撰び、舜水に御

屬し祭の儀式を御習はせ被_レ成候、聖堂の小形殿堂

廊廡より門牆器物迄、不_レ殘御拵させ被_レ成候、此時

御年四十六、

一同三年乙卯正月、後西院帝より勅題にて、律詩三首

御作り、天龍寺の僧虎林方迄つかはされ御上_レ被

成候、

應_レ制賦_二雪朝遠望_一

積雪皚皚擁_二翠微_一、四山環曲畫屏圍、烏鴉點破分_二毛

色、白鳳廻翔覽_ニ德輝、最喜瑞花天上墜、豫知宿麥臘餘肥、朝來休_レ道夜寒逼、起坐遙思脫_ニ御衣、

又

朝望園林凝_ニ玉塵、臘前先報百花春、屋頭高捧素羅笠、山頂斜欹白氈巾、風拂_ニ牆陰、巧_ニ漫壁、日品_ニ陌上_ニ眩_ニ鎔銀、天恩新賜豐年瑞、四海今無_ニ凍餒民、

又

清曉登_レ樓騁_ニ眺望、乾坤同色轉茫茫、儘教_ニ臘雪埋_ニ疎影、賴有_ニ天風動_ニ暗香、士嶺千秋白鵬放、灞橋一道玉龍長、恩光襲_レ暖黃綿襖、衣_ニ被饑寒_ニ覃_ニ萬方、

參議從三位兼行右近衛權中將源臣光圀百拜

此時御年四十八、

一同六年戊午正月、兼々御編被_レ成候和文三拾卷出來いたし候よし天聽に達し給ひければ、後西院帝名を扶桑拾葉集と御つけ、勅撰に御准候、此時御歳五十一、

一同八年庚申扶桑拾葉集を後西院帝へ御上_レグなされ候、

上扶桑拾葉集表

參議從三位兼行右近衛權中將臣源朝臣光圀伏以、倬彼雲漢爲_ニ章于天、美哉山川流_ニ形於地、不_ニ資_ニ工力_ニ自_ニ有_ニ質文、是故蟹行悉曇之書亦堪_レ紀_ニ事、鳩舌侏離之語尙足_レ據_ニ情、雖_レ有_ニ作_ニ字之殊、至_ニ其言_ニ志則一、臣光圀誠惶誠恐稽首頓首上言、竊惟、今此秋津之洲、古稱_ニ君子之國、粵稽_ニ上世、唱和肇_ニ於伊弉諾伊弉冊之時、眇觀_ニ玄風、詔教起_ニ于日靈貴皇產靈之際、至若磐余彥之制令、神八井之讓辭、皆是太古之文言、猶如_ニ虞夏典謨、自_ニ豐聰出_ニ士庶知_ニ學_ニ隸楷、及_ニ大友生_ニ摺紳始肄_ニ詩賦、於_ニ是異邦縹帙插_ニ架以成_ニ雲、遂使_ニ桑城青編盈_ニ箱而供_ニ蠹、遺_ニ其近、索_ニ其遠、離_ニ其故、趨_ニ其新、文物之變更與_ニ時而升降、弘仁之間、嵯峨帝序_ニ萬葉、延喜之歲紀貫之題_ニ古今、爾後雖_ニ多_ニ捕_ニ蛇握_ニ珠人、未_ニ聞_ニ哀狐全_ニ裘者、或罹_ニ兵燹、爲_ニ灰燼、或落_ニ民間、覆_ニ醬飯、載籍淪亡、人文隕墜、臣資質前陋、學習疎慵、世生_ニ武林、唯從_ニ磬縱之事、身居_ニ幕下、豈遑_ニ編纂之勞、然思先正之嘉言等泥沙、而棄擲、往昔之懿行忍_ニ沈埋而不彰、寤寐慨嘆、廣設_ニ琴羅、拔_ニ茅遂連_ニ其茹、磨_ニ圭因缺_ニ其玷、一心一德、偕_ニ敗度敗禮_ニ而並傳、

如_レ璧如_レ金與_二無止無儀_一而同_レ什、徧探_二名山靈區_一之奧、旁求_二騷人雅士之文_一、上自弘仁、下迄寬永、篇幾三百之數、人凡一百有餘、璠璣兼收、觀感斯在、久思求_二夫斧藻、固有_レ待_二於將來_一、恭惟太上皇帝陛下、聖慮淵深、英才天縱、德輝萬世、澤霈四維、凝思風雲、深造志礪鳴之道、脫_二展宮闕、靜遊藐姑射山_一、怡_二性情於圖書_一、辨_二妍媸於氷蠶_一、臣幸遇_二聖主_一、蚤獻_二微編、輕瀆_二冕旒_一、猥蒙_二題品、微_二其顯、闡_二其幽、迥異_二稗官之陋_一、芟_二其煩、去_二其蕪、輯爲_二大成之書_一、屏灑_二中山仙毫_一、賜_二名扶桑拾葉_一、積年素望一旦獲_レ伸、伏願傳_レ世而爲_二千載之著龜_一、侵_レ梓以慰_二大方之耳目_一、臣無_レ任_二歡躍屏營之至_一、謹將_二所_レ編扶桑拾葉集、裝成_二三十卷_一、隨_レ表上進以聞、

延寶八年夏四月二十三日

參議從三位兼行右近衛權中將臣源朝臣光圀 謹上表
此時御歲五十三

一天和元年辛酉、中院前大納言源通茂卿、後西院帝の勅をつたへ給ふ、勅に應じ給ひて、詩五十首和歌五十首御上_レゲなされ候、其御詩歌事多き故これを略す、此時御年五十四、

一同二年壬戌八月廿一日、朝鮮國の三使尹趾完李彦綱村慶後武州江戸にいたる、西山公林春常方へ仰つかはされ候は、朝鮮人滯留の内、御賢問被_レ成た_二くおぼしめし候間_一、それより案内給候にとの御事也、依て春常より、宗對馬守義直の家來小山朝三と内藤左京亮の家來大高清介と兩人に、右の思召の段を達せられ候付、御家士今井小四郎正興中村新八願言并森指月、此三人を被_レ遣候處に、小山朝三および對馬の國の町人加勢五右衛門、五右衛門は、朝鮮人の通辭仕候、右兩人何角と取持にて、朝鮮の學士成琬數度參會いたし、其外醫官鄭并俊及び金指南劉以寬鄭文秀坏と申ものに對談いたし、禽獸草木并國字等の事其外仰付られ候こと共を相尋候、同九月三日右之三使より、西山公へ使者を以て品々を進上いたし候、三使より、使者につかはし候者は、首官と申候、名は朴再興十承業洪禹載と申候、此節御家士大紋布衣素襖を着し、儀式嚴重也、自_レ上使の音物の目録、

奉呈水戸公閣下

鷹子

壹連

人參

壹斤

虎皮

二張

白照布

伍匹

芙蓉香

二拾本

黃毛筆

二拾本

眞墨

二拾笏

際

壬戌九月日

通信使

印

此印文ノ字ハ
叔麟ト云字也

此目錄の認やう禮に叶はざるに仍て、三箇條の御疑問を御書、中村新八に爲レ持遣され候、新八是を學士成琬に示し候得ば、成琬披見して、同僚の學士李聯齡にもゑめし、兩人共に暫く思案の躰にて、何とも答ふる言なく、通辭五右衛門を以て申候は、是は上々官上判事の司どる事也、我等ども御返答は仕がたき由申候、新八申候は、左候は、此問を止め置れ、上々官上判事へも相談有レ之て三使へ達し、返事承度由申候へば、通辭五右衛門是は事六かしきと存候やらん、箇様の事は朝三をもつて申候様

にとて辭退仕候、夫に付、小山朝三に其段申ふくめ、件の御疑問を授候、其御疑に曰、

問

昨日三使所贈我相公之土宜、惟錄品數不具姓名、楮尾押一印稱三使所贈、見印文二字疑是尹公之字乎、古人於交際自稱名、不稱字、以爲通式、右三件竊有所疑、蓋貴國之法乎、願聞之、

桃源遺事卷之一下

扱二三日過て、新八朝三に逢て、三件の問の答いか
がと尋候へば、朝三申候は、上々官上判事へ見せ候
所に、皆々こまり申候、三使へ相達不_レ申しては、中
中御返答可_レ仕やう無_ニ御座_一候よし申候付、新八申
候は、先日申候通り、成程三使へ相達られ候儀、此
方本意に存せられ候間、とかく返答承度候、御自
分若遠慮候は、對馬守殿へ御窺候て成とも相達
候様にと申候得ば、朝三申候は、然らば三使へ相達
し御返答申上らるゝ様に可_レ仕候、左候は、名付な
くては如何と申候間、右之御疑問に新八が姓名を
書加へ相渡候、朝三是を三使へ達し、水戸侯より使
者を以て御尋被_レ成候義に候間、急度御返答可_レ有
由申述候得ば、ことの外こまり申候よし、同六日の
夕西山公御家士佐野藤右衛門忠英_{于時}を本使と
し、吉弘左介元常總裁を副使として三使へ御書簡
并銀三百兩つゝかはされ候、<sub>但し、拾分を一兩とす、一
所へ三貫目、三箇所にて、</sub>
九貫目、先例は三使へ一所に銀二百枚被_レ遣候所に、

今度は御書翰被_レ遣候につき、別に銀もつかはさ
れ候、上々官同知朴再興出會是を請取、良久しくあ
りて朴再興罷出て、三使申され候は、御念頃の御使
殊に御書翰并白銀被_レ下、忝御心入淺からざる儀に
奉_レ存候、唯今夜中取まされ候間、明日從_レ是御返翰
申上べきよし申述候に付て、藤右衛門左助罷歸り、
此旨申あげ候、右の御書翰、

奉_ニ朝鮮國通政大夫吏曹參議知製敎東山尹君使臺_一
書、嘗聞錫_ニ嶠_一欒_ニ倫_一垂_ニ之洪範_一繼_ニ好親_一仁謂_ニ之禮_一
經、貴國密_ニ邇_一_{◎異本}作通、本朝、振_ニ古祇_一_{◎異本}今講_ニ信修_一睦而
不_ニ渝_一盟倍_ニ約_一、意其檀君之關_ニ基千古荒昧_一、箕子之
遺風百世廣覃、方今使臺當_ニ持_一之節任、受_ニ專對之_一
命、山水之遙備嘗_ニ嶮艱_一、堦亭之長不_レ爲_ニ無_一勞、曩
者始觀_ニ懿範_一、極增_ニ愉快_一、然朝堂初筵未_レ飽_ニ玄論_一、
唯憾萍水一遇_ニ艱_一_{◎異本}於繼見、茲辱_ニ嘉貺多儀_一、感佩有
餘、愧罔_ニ瓊琚之報_一、然敢無_ニ交際之差_一、乃具_ニ不腆_一、
如_ニ別幅_一、伏冀亮燭、不宣、

九月六日

常山源光図

頓首

奉_ニ朝鮮國通訓大夫弘文館典翰知製敎寶湖李君使_一

臺書、鬱然紫氣望異人之過、炳焉星輝占賢者之聚、天壤之間物皆有感、人誠然矣、嚮旂旄到、都衆咸謂、黃星絳雲神龍朱草之觀也、屬者在朝堂、一挹清塵、禮典有則豈敢據鄙悃、而其藹然和氣、粹然詞容、是知弼乎中者、必彪乎外、宜矣觀者之驚愕以爲異也、夫方君子銜命、握節有至、於斯誠厚幸也、只恨不能聞玄譚奇論、而爲請著五千文字、館舍咫尺不能邂逅諸君子、把觴歌四牡、亦爲快已、承惠土宜若干、無任良荷之至、謹裁尺一、宣寄衷素、并至菲儀、聊答來意、豈無媿瓊瑤、永靡直忘也、旋旆在邇、時惟高秋、戒謹霜露、

九月六日

常山源光圀

頓首

奉朝鮮國通訓大夫弘文館校理知製敎竹菴朴君書、夫使於四方、途桑弧之初心、貌榮名于他邦、實士君子之所希也、臺下奉命不遑寧處、駟騎載驅、衝雞林之梅雨、星槎遠泛泊馬嶋之荻風、積水之環九州、煙濤難濟、征衣之互三季、寒暑既易、匪躬執掌之勞爲何如哉、將幣之日幸瞻手采、玉山瓊樹

使人恍然心醉、公庭之儀禮文有制、恨不能飮敍區々、嚮辱賜貴國土宜、實喜荷交併、爰陳芹儀、如狀、廻軫不日把袂無由、參商之別不堪瞻望之至、萬祈亮鑒、

九月六日

常山源光圀

頓首

同七日小山朝三方より中邨新八方へ狀をもつて申遣し候は、先日の御疑問三箇條三使へ達し、御返答いたされ候様にと申候所に、一つも申開く事あたはず候、あやまりの段是非に書せ候儀も如何と存候、これによつて以後通信使の禮の幣も改り可申と珍重に奉存候、又昨夜の御書翰御文章を殊の外驚嘆稱美仕候由、扱又三使對馬守義直へ談し、右の返翰をもたせ差あげ、慇懃の禮を盡し、白銀を辭退見返翰仕り、且は三問の御返答も罷ならざる間、左様の謝をも含申上べきと、既に上判事三人來り候筈に仕候處に、再使その例なきによつて相止候よし、此故に對馬守義直の家老平田隼人をたのみ返翰を呈し候、義直よりの口上に云、朝鮮人指上候事相止候得共、殊の外堅座候て、三使に申候は、御懇

意なる御書翰下され候に、對馬守家老を以ては、御返簡指上まじくとの事に候を達て相止め申候、白銀も愈納申候様に被_レ仰遣_二候は、納可_レ申候由也、三使の返翰、

朝鮮國通信正使尹趾完謹奉_二覆書于日本國參議從三位兼行右近衛權中將水戸侯源閣下、日者奉_レ對_二雅儀、寔深傾慕而公朝之會非_二私語之所、終無_二一言半辭少杼_二衷曲、迄_レ今耿耿不_レ忘、不_レ意辱賜_二華翰、寄_レ意勤_二摯、廼知誠之所_二在彼此同然、仍念閣下以_二明德茂親、協_二贊新化、仰體_二貴大君修睦之儀、推_二此心而眷_二眷於不佞、其相愛相敬之意溢_二於辭表、主復再三感荷千萬弟有_二所_二一段不_レ安_二於心者、顧此儀狀所_レ附白金三百兩、名雖_二餽贐、實係_二貨寶、古之人未_レ有_二以_レ金爲_レ幣者、蓋由_レ受_レ之者不_レ免_二貨取之嫌、而與_レ之者亦非_二使_二人安_レ心之道上故也、閣下書中有_二交際相報等語、執_二此論_レ之、於_二不佞_二宜_レ無_レ可_レ辭、閣下又必曰_二自有_二己事、固無_レ所妨、而是特循_レ常之言、襲_レ謬之事耳、在_二閣下_二則不然矣、竊觀_二閣下、以_レ禮自將、至_二於簡牘儀式之微、無_レ不_二一出_二於禮、真好_レ禮之君子、今遇_二好_レ禮之君

子、答不_二以_レ禮相勉、則焉在_二乎貴_レ相_二知心_二之道上哉、茲遣_二舌官、謹將_二送惠白金、全封還呈、惟閣下諒_二此區々之意、收納而不_レ爲_二之贖惟、則閣下所_二以_レ禮待_二不佞_二者、豈世俗厚幣相贈之比也、同轅之後嗣音無_レ階、臨_レ書悵然不_レ知_二所_レ云、伏希崇照、不宜謹狀、

壬戌九月初七日

尹趾完頓首

印

朝鮮國通信副使李彥綱謹奉_二復_二于日本國參議從三位兼行右近衛權中將水戸侯源公閣下、鄰好世篤、修聘有_レ禮、如_二不佞_二者、亦忝_二使价之列、獲_レ觀_二貴邦儀物之盛、何其幸哉、日者朝堂之會、乍接_二清範、雖_二公朝禮肅不_二敢交_二私語、河間典刑固已望_二之而心醉矣、不意茲者寵_二賜華翰、誠意懇摯、獎_二勸過隆、盥_二手披帨、悅如_二入_二蘭室接_二芝眉而展_二良觀上故也、顧不佞何以得_二此於高明_二也、弟贊用_二羔雁、固卿大夫制、綯紵相贈、古人亦有_二行之者、而貨而取_レ之、君子之深所_レ耻也、不_二但受_レ之者爲_レ傷_レ廉、抑恐有_レ傷_二於愛人_二以德之義、故所_レ餽白金三百兩、茲不_二敢領留、謹全封奉還、竊想高明亦必有_二以諒_二此心_二而恕_二其罪上

也、使事既竣、旋轄有日、山川寬闊、後會無期、臨紙不任悵惆、伏希崇炤、

壬戌九月初七日

李彥綱頓首

印

朝鮮國通信從事官朴慶俊謹拜復于日本國參議從三位兼行右近衛權中將水戶侯源公閣下、頃陪饗席獲觀模範、有拘公堂之儀、靡攄嚮慕之忱、迨席戀々恒切耿々、不料茲者辱賜華翰、辭旨既容、副以儀狀、數日又多、有以見明公不廢古人行者必贖之義、而亦可知明公仰體大君欸接隣使之意也、感激于中、鳴謝何已、弟惟橐金營產、陸賈貽誚、無處受餽、孟子有戒、今此所贖雖曰舊例、以金爲幣、實非古禮、何必循常襲謬、違古蔑禮以自速貨取之刺乎、以閣下禮將之心、而犯無處之戒、使俺等廉耻之道而有橐金之誚、則得不乖於無與無取之分、而卒不免於傷惠傷廉之嫌乎、交與之際、貴相知己、辭受之節所關不細、幸乞特諒微衷、亟恢盛量、所還儀狀俾許仍留、則固有得於交與之際、而庶無愧於辭受之節矣、使事既完、歸期已屆渡溟海、使

隔箕斗、瞻想德宇、不覺悵缺、不宜崇照、

壬戌九月初七日

朴慶俊頓首

印

同九日、御家士羽太半左衛門重道、物頭、を御使として、三使へ連名の御復簡に、白銀再びかへし遣され候、
奉復朝鮮國通信三使臺下書、辱賜復札三四讀之、不覺交梨在口、明月入懷、齒頰馥郁、胸膈洒落、而獎借甚過、恐非所以愛人之道焉、況不佞乏文才、操斧于班門、實不能無耻、何當大方之觀乎、前者所贈、是交際之儀、而木李之報也、且有行者以贖之事、承賄物封還、顧夫芹忱之心未能彰乎、抑亦非儀之情不能備乎、我竊惑焉、三使臺閣下、清廉高節過于胡質、踰乎陸績、不腆微物豈容高明傷廉之疑乎哉、況我贈非南越之裝、使臺亦非游說之徒乎、古人有以黃金爲中幣者、有其辭則皆受之、不以爲傷義、然即於無與無取之道、彼此何傷乎、望請三使臺閣下、克察區々赤心、擴充萬頃弘度、以諒交際之報、則講信修睦之禮成、相愛相好情通、千萬幸孔勿疑、伏

希_レ昭亮、回_レ宇倉卒、併呈_二三使臺閣下、勿_レ罪_二不敬、

重陽之日

常山源光圀頓首

三使御使を待せ置、御返事いたされ候、

再覆、昨者猥瀝_二鄙悰、仰_レ渙_二崇聽、謂閣下諒_二區々之意、非_レ出_二於不恭、而猶且悚惕日夕不_レ安、茲承辱_レ覆、勉諭諄勤深佩、眷愛之情出_二尋常萬々、況滿帟琳琅耀_二人眼目、重幣未_レ蒙_二收還、又獲_二此寶百明之賜、何足_二以喻_二其輕重也耶、嗚行_レ以金已有_二故事、凡諸贈遺皆不_二敢辭、而獨於_二閣下_二縷々煩_レ稟者、誠以_二閣下飾_レ躬以_レ禮、待_レ人以_レ誠、庶不_レ因_レ循謬例、以_二盡取與之道、來諭至_二以_二芹忱未_レ彰菲儀不_レ備等語、反自引_レ咎而責_レ之、以_二交際之義如_レ是、而終始固辭、則恐不_レ免_レ爲_二不恭之歸、茲用_二龜勉_二拜領、古人所謂感_レ恩則有、知_レ己則未者、正爲_二今日_二道也、秋序向_レ闌、日氣漸冷、只祝爲_レ國保重、伏希昭亮、不宣謹狀、

壬戌重陽

尹 趾完
李 彦綱

朴 慶俊

同十二日朝鮮人江戸を發し、神奈川村に宿す、西山

公齋藤平介を御使として、旅宿へ御送行の御詩并
帟一箱充被_レ遣候、

儀狀

謹具

送行詩

日本紙

壹章
柴品

奉_レ申_レ敬

參議從三位兼行右近衛權中將水戸侯源光圀

頓首拜

三使へつかはされ候御詩、

奉_レ送_二朝鮮國東山尹公使_二日本國_二歸_上

萬里勞_二來聘、三韓尋_二舊盟、衣冠皆駭矚、草木亦知_レ名、遽爾已臨_レ別、黯然不_レ盡_レ情、鄉人若相問、文物屬_二昇平、

常山源光圀頓首

奉_レ送_二朝鮮國鷺湖李公歸_二本國_二

星輅持_二使節、敦好結_二交鄰、邂逅言雖_レ異、慰勸情尙親、寄_レ詩推_二李杜、分_レ袂隔_二胡秦、今日君歸去、長爲_二遠別人、

常山源光圀頓首

奉送朝鮮國竹庵朴公之歸

雞林交際久、銜命使扶桑、盛禮復難得、良緣不可常、綠陰辭舊里、黃菊感他鄉、殘夢屋梁月、相思幾斷腸、

常山源光園頓首

右被遣候番は、備中檀番、越前奉書紙、越前卯色帋のこ、加賀染紙、伊豆桂帋修善寺帋之事、美濃帋、武儀紙美の紙の事也、武儀郡より出るによりてなり、常州水戸柔紙、此七品也、三使大悦いたし、和答を奉り、且御返禮として、各數品を進上申候、且御使者平助にも、扇子筆墨を贈て是を勞り候、三使和韻、

敬次送別韻奉呈水戸侯常山源公詞案下

薄儀來賀慶、大信豈申盟、未入扶桑界、先聞水戸名、周旋仰懿範、委曲荷深情、臨別仍相勉、但宜贊太平、

東山尹趾完頓首

敬次日本國水戸侯源贈別詩韻

海外逢知己、天涯卽比隣、一言携手地、傾蓋許心親、使節初辭粵、歸程遠向秦、新詩有餘意、百里問行人、

朝鮮國通信副使李彥綱拜稿

敬次送別韻奉呈日本國水戸侯源公詞案下、使節隱槎影、來觀日出桑、河間承好禮、交際荷非常、別意投新句、歸程指故鄉、音容從此隔、安得不同賜、

朝鮮國通信從事官竹庵朴慶俊拜藁

謹具

奉和詩一章

龍鞭黃毛筆二十柄

大折油煤墨二十笏

桃色紙三卷

青藍紙三卷

雲花紙四卷

黃菊紙五卷

奉申謝

朝鮮國通信正使尹趾完頓首拜

謹具

奉和詩一章

各色紙十五卷

大小墨二十笏

各色筆二十枚

奉_レ申_レ謝

朝鮮國通信副使李彥綱頓首拜

謹具

奉和詩一章

桃花紙二卷

黃菊紙二卷

雲暗昏二卷

青花帚二卷

雪花帚二卷

黃毛筆二十枚

大折油煤墨十笏

中折油金墨十笏

清心元二十九

蘇_{今イ}香元二十九

奉_レ申_レ謝

朝鮮國通信從事官朴慶俊頓首拜

一同年十二月後西院帝のみことのりあつて、舊記を御考、立后立坊の儀節を奉り給ふ、又詔有て、後水尾帝の御遺物鳳足硯の銘并序を御作り被_レ成候、

鳳足硯銘并序

夫硯者大道之藪澤也、聖賢漁_二筆海_一、鑒_二經典_一、騷人獵_二墨林_一、歸_二文章_一、豁然鑑_二往古_一、儼然誠_二來今_一、此莫_レ匪_二一涓一滴之餘澤_一也、斯硯太上法皇之舊物也、若州所_レ產、其色凝紫、溫潤如玉、長一尺許、闊七寸許、厚一寸三分、質存_二天生_一、不_レ加_二琢磨_一、名曰鳳足、蓋取_二諸米元章硯史之語_一也、今上聖主常置_二几案間_一、晨_二夕之_一、左_二右之_一、觀_二羹牆_一、然御愛豈在_二一硯_一、歟思在_二於孝_一耳、臣聞孝理行_二於上_一、德教加_二於下_一、萬邦靡然嚮_レ風、黎民於變時雍、天爲_レ之示_二嘉祥_一、地爲_レ之呈_二靈瑞_一、左史所_レ記、右史所_レ書、布在_二方策_一、功化永垂、豈非_レ所謂立_レ身行_レ道揚_二名於後世_一者乎哉、孟子曰、五十而慕者、是之謂_二今茲天和二年秋_一、忝勅_レ臣作_二之銘_一、臣素慣_二弓馬_一、曾疎_二鉛槧_一、臨_レ帑幾汗_レ顏、操_レ筆屢措_レ手、然而王事無_レ監、戰兢以銘、銘曰、

覽_二玄德_一、光爰止_二御牀_一、不_レ聽_二歸_{昌イ}昌_一、足履_二文章_一、磨_二民墨場_一、致_二君軒唐_一、

この時御歳五十五、

源朝臣光圀頓首拜具

桃源遺事卷之二

一同三年癸亥、後西院帝より御宸筆を給ふ、御硯の銘を御褒美遊ばされし御文章なり、

鳳足はさるあやしき器にしあらねど、故院の御硯なればとて、端溪の秀石にもかへず、爰に宰相中將源朝臣、武を備へ文を兼て絶代の名士也、よりて命じて硯の銘をゑるさしむ、文のこゝろ忠義を含み、言葉金玉の聲をなせり、これにむくふるに朕何をかせむ、唯遠く此硯をつたへて、ひさしく此文を殘さんといふ、そのことばにいはく、

つたへゆく硯の石のよはひもて

世々にのこらむ言葉をこれ

此御文言の中の武備兼文絶代名士の御句を、西山公御印文なされ候、此時御年五十六、

一貞享元年甲子、御伯父信吉殿

師小名萬千代早世

の御母秋山夫人の御墓所知れ不_レ申候處に、西山公御穿鑿被_レ成

候得ば、下總國小金村本土寺に在_レ之候、依_レ之碑を御建碑銘を御誌し、且田畑を御寄進被_レ成、御自ら

御祭なされ候、此時御歳五十七、

一元祿三年庚午、西山公役人に被_二仰付_一候は、常に難穀をたくはへ申べし、飢年には民に施し、亦豐年たりといふとも、鰥寡孤獨老廢のやからにほどこしあたへ申べしのよし、依て此時御領内を穿鑿いたし候得ば、鰥寡孤獨老廢等の男女貳百七十四人在_レ之候、則彼等に御扶持被_レ下候、亦役人に仰付られ、牛馬の病ありて用にたゝざるを養候民共には、それ_レの飼料を下され候、これよりして今に到るまで此御掟也、西山公は捨子をも度々御ひろはせ被_レ成候、

同年十月十四日、西山公御隱居、綱條公御家督御相續也、

同十五日、西山公權中納言に御轉任なされ候、此時御詠じ遊ばされ候御歌、

くらゐ山のほるもくるし老の身は。

麓の里そすみよかりける

同十一月廿九日、水戸へ御下り被_レ成候とて、江戸を御發駕あそばされ候朝、

我今年致仕歸_二故郷_一、仲冬二十九日、夙發_二江戸之

郎、臨別賦詩遣男九成、文不_レ加點信口漫道、一笑胡盧、元祿庚午冬、遁跡東海濱、致仕解印綬、縱作葛天民、盤旋廣莫野、一洗榮辱塵、昔誕首陽薇、今羹吳江蓴、三十有年來夙志忽欲伸、予去又何處不_レ知、再會辰、嗚呼汝欽哉、治國必依仁、禍始自_レ閨門、慎勿亂五倫、朋友盡_レ禮儀、旦暮慮_レ忠純、古謂君雖_レ以不_レ君、臣不可_レ不_レ臣、

右の御詩を綱條公へ御殘し置せ給ひて、そのまゝ御發駕あそばし、下總のかたへ御かゝりなされ、水戸へは同十二月四日に御着なされ、同五日より六日七日まで、此三箇日の中、御家中の諸士并其嫡子次男三男までのこらず御城へめし、御目見被_レ仰付、例よりも近く御着座なされ候て、御直に御意あそばされ候は、内々いづれも承候通、腕痛み武役をも勤がたく、其上近年寒氣の時分は、おぼえず下血漏候付、今程大樹公御清の御吟味あそばされ候節、自然殿中にて少成共不_レ計漏候義有_レ之におゐては、不調法のうへの不調法、自分には如何様とおもひ候へども、上への憚すべき様無_レ之候、左候とて度

度不_レ參も氣隨のやうに候間、此所自分にも決しがたく候段、より_レ老中へ物語申候所に、速上聞に達し、右の旨趣御聞届、此度隱居仰付られ、少將綱條に家督相違なく下され、重疊本望の儀難_レ有候、誠に存懸も無_レ之中納言に轉任、縱當職にてさへ納言まで給候事は餘り冥加恐敷うへに、隱居の以後彌以不相應に存、達て辭退申候得共、上意の上は早々御請可_レ申上、由老中頻に被_レ申候故、此上はともかくも各然るべきやうに仰上られ給り候様にと申退出申候、此趣何も先達て承り大慶に可_レ存候、隱居以後は、何方に居とても、少將の養育を請ずしてはならぬ事に候處に、別て御懇の上意にて、水戸への御暇迄下され、御茶入御鷹御馬拜領のこる所なき首尾にて、か様に近き所にて養を受候得ば、諸事互によく、誠になじみのいづれへも毎度對面すべきと一入満足申候、毋我家督拜領して、最早三十年に成候、其内家中の面々に何とぞ哀憐いたしかたもこれあるべく存候へども、次第に人多くなり、すべきやうもなく、剩近年に至り、何も困窮いたし候、然りといへども、一人として不足がまし

き儀も無之、奉公懇篤に相勤候段わすれおかず候、少將は何れも存候通、我嫡脈にて候間、早速家を譲り度と數年存じ候、此段は我等家督以前よりの存念にて、先年靖伯綱方君、を養子として世繼になし候所に、不幸にして早く卒す、されども能時分少將を養育いたし置、此度本領の通家督を譲り候、此段私事故公儀に申立なりがたし、年月を送り候所に、時節箇様におもふまゝに成候事、天命に叶ひ候と、一生の本望これに不_レ過候、自今以後少將に彌以大切に奉公相務、萬一公儀御普請等など仰付られ候は、一同に心を合せ、相務候様にいたすべく候、壹人の働きは輕きものもいたすものなり、少將を少將たらしむることは、皆諸士の心底にあり、君は舟、臣は水、水よく船をうかべ、水よく舟をくつがへすといふ譬も候間、彌たのみ思召候よし、亦諸士の忤どもに仰られ候は、少將も若く、其方共も若く候得ば、末久しく奉公仕べく候、萬一の義もあらば、馬の先にて人先に討死仕べくと、是を面目と存候者も有べく候へども、一命を輕するは士の職分なれば、さして珍らしからざる事に候、血氣の勇

は盜賊もこれをいたすもの也、侍の侍たるゆゑんは、其場所を引退て忠節に成事もあり、其場所にて打死して忠節に成る事もあり、是を死すべき時に死し、生べきときに生といふなり、然ども此所死べき所、彼所生べき所といふ事、決斷しにくきものなり、一毛ちがひても、大_レき成過になるものなり、これを決斷するものは、聖賢のをしへにあらずしては、何を以てかせんや、然れば先若きものは學問をつとめ、君臣父子夫婦兄弟朋友の五倫の道をわきまへ、篤實謹厚に相勤べきもの也、功名をたてんが爲に、治世に亂を思ふは、治平の姦賊也と仰られ候、右の御意を承り、老人は申に及ばず、若輩なるともがら迄感心し奉り、皆々涙をおとし、御前を退出仕候、

西山公其後御城下の御用屋舖に暫く御逗留なされ、夫より久慈郡太田郷の西山に御隠居を御むすび御移なされ候、依_レ之御みづから西山の隠士と御稱し被_レ遊候、御家作殊の外幽に、御召仕の男女甚すくなく、多くは病身にて、江戸等の御奉公なり兼候もの共を御召仕被_レ遊候、御隠居免も員數御定不

被_レ成候、其わけは、隱居めん少くは、少將を批判申べく候、多くは自らを批判可_レ申候、左候得ば、多少につき如何に候間、員數を定めず、年々の入目過不及なるが可_レ然こと、仰られ、員數の御定めは不_レ被_レ成候、

同年御壽藏

世上にて、逆修とて、存生の内石塔を建申候、其類なり、

を瑞龍山御先塋

の御側に御造り、歷任の御衣冠を御埋み、石をたて、御自筆にて梅里先生墓とあるばされ候、御碑陰并銘、

先生常州水戸産也、其伯疾、其仲天、先生夙夜陪_二膝下_一、戰々兢々、其爲_レ人也、不_レ滯_二物_一、不_レ著_二事_一、尊_二神儒_一而駁_二神儒_一、崇_二佛老_一而排_二佛老_一、常喜_二賓客_一、殆市_二子門_一、每_レ有_レ暇讀_二書_一、不_レ求_二必解_一、不_レ歡_二歡_一、不_レ憂_二憂_一、月之夕、花之朝、斟_二酒適_一意、吟_二詩放_一情、聲色飲食不_レ好_二其美_一、第宅器物不_レ要_二其奇_一、有則隨_二有而樂_一、無則任_二無而晏_一如、自_レ蚤有_レ志_二于編史_一、然_二空_一書可_レ徵、爰搜爰購、求_レ之得_レ之、微遜以_二稗官小說_一、撫_二實蹟_一疑、正_二閭皇統_一、是_二非人臣_一、輯成_二一家之言_一、元祿庚午之冬、累乞_二骸骨_一致仕、初養_二兄之子_一爲_レ嗣、遂立_レ之以襲_二封_一、先生之宿志於

是乎足矣、既而還_二郷_一、即日相_二攸_一於瑞龍山先塋之側、瘞_二歷任之衣冠魚帶_一、載封載碑、自題曰_二梅里先生墓_一、先生之靈永在_二於此_一矣、嗚呼骨肉委_二天命所_一終之處、水則施_二魚鼈_一、山則飽_二禽獸_一、何用_二劉伶之_一鍾_二乎哉_一、其名曰、月雖_レ隱_二瑞龍雲_一、光暫留_二西山峯_一、建_二碑勒_一銘者誰、源光圀字子龍、

此時御歲六十三、

一同四年辛未九月、久慈郡小野平村旌櫻寺に祠堂を御建、賴義義家の神主御安置被_レ成候、賴義の位階諸系圖に皆從四位下とあり、此時御吟咏被_レ遊に、朝野群載十一官府に、正四位下と有_二證據_一によつて相定る、神主御脇書遠孫光圀奉祀と御自筆にて被_レ遊候、神主御入堂の節は、御規式嚴重に被_二仰付_一、御自も御烏帽子御道服にて御着座被_レ成、導師は増井村_{久慈郡}正宗寺の雷啓和尚是を_二つとめ_一らる、且堂前に弓場を仰付られ、的興行有_レ之候、昔賴義義家奥州より歸陣の時、爰に暫旌をとめ、櫻の木の旌棹_{一説}を御挿み候得ば、活根葉を生と云、其櫻今にあり、四方にはびこれり、花白く、藥中より普賢象といふ櫻などのごとく一葩ひねり出せり、是を旌に

比して、旌ざくらと云、此いはれを以て、此所に祠堂を御建被_レ成候、此時御歳六十四、

一同五年壬申八月、攝州湊川へ佐々木三郎良峯宗淳をつかはされ、楠正成の墓を御修復被_レ成、碑をたて、石を疊み、磧をなさせ給ふ、其高さ五尺、其徑一丈、碑面には、西山公御自筆にて、嗚呼忠臣楠子墓とあそばされ、碑陰には、舜水先生兼て撰置れ候讃を御彫せ、且又碑亭をも御作らせ候、元は墓印に梅の古木これ有候へしを、その梅をば、碑を御建候節、醫王山廣嚴法勝寺の本堂のかたはらへ御うつし被_レ成候、此とき御歳六十五、◎讀を御彫せ以下異本
ひて廣嚴寺の僧千巖に附し給
ひて永く香花の料に備給ふ、
云、其側にて田畑調給

一同六年癸酉、久慈郡天神林村といふ處に、小社有所の者は、菅家の天神と覚え罷在候處に、西山公御吟味被_レ成候得ば、天神七代の神にておはしまし候、扱此社を御建立あそばされ、御自筆にて、七代天神宮と額を遊ばし、鳥居に御掛候、同十一月御潔齋遊ばされ、御衣冠にて御參詣、神供御酒御備へ、御幣を御さゝげ、音樂神樂祝詞在_レ之、舞蹈の御拜遊ばし候、

一同年、鈴木宗與と云御側醫師に仰付られ、妙藥三百九十餘方を御集め、救民妙藥集と云書物に被_レ成、板行仰付られ、御領内の民共に被_レ下候、右のおぼしめしは、山野は醫者もなく、藥もなく、藥も乏らずして、本復すべき病もうちすて差置候故、或は死、或はかたは、或は廢人となる者まゝ在_レ之候、此段を不便に思し召され、彼書を仰付られ候、此時御年六十六、

一同七年甲戌三月、大樹綱吉公の上意によつて、西山公江戸へ御登被_レ成候、然處に、御登城の節、不_レ計大學の御講釋を御所望被_レ遊候、西山公仰せられ候は、終に講釋と申義仕候事無_レ之候、唯覺え候通りをば御物語申べしと被_レ仰候て、三綱領の止於至善の所にて、周家長く天下を治め給ふ事、文王の止_ニ於至善_一給ふ故により候と、詳に被_レ仰述_一候よし、此時御年六十七、

一同八年乙亥正月、西山公御歸府被_レ成候、此年舜水先生の碑を瑞龍山の麓に御建被_レ成、御自筆にて明徴君子朱子墓とあそばされ、碑陰をば安積覺兵衛サトルに仰付られ候、覺兵衛承て是を誌申候、さて御自

ら御祭被_レ成候、是より先舜水卒去の砌、武州江戸駒込の御別荘に祠堂を御造り、神主を御安置なされ、毎年忌日に自ら御祭り被_レ成候、遺骸をば瑞龍山に御葬なされ、舜水の遺文三十卷御集め、門人光_{（先疑の帖に）}山_{（ひりて）}被_レ遊候、此時御年六十八、

（追加）義公薨じ給ひし後も、肅公祭らせ給ふ、其後駒込延焼、祠堂焼失して、水戸にて祠堂を建させ給ひ、神主をば小野宗三郎守奉りて、入堂祠堂守付置給ひて、忌日の祭今に絶す、

一同十丁丑十月より、久慈郡馬場村にて、儒臣に經書の講釋を被_二仰付_一候、民其のをしへの爲にと覺し召候、これよりさき、武州江戸小石川の御屋敷、又水戸御城下にて、諸士の爲に講釋被_二仰付_一候、若き御時は、孟子をばいかゞ覺召候や御好不_レ被_レ成候が、御老年にならせられ候ては、御用被_レ成、馬場の講釋にも、孟子を專一に仰付られ候、此時御歳七十、

一同十三年庚辰、西山公一兩年以來御煩敷、段々御食事も減少御よりはりあそばされ候、今年十月に至り御病氣殊外御重り候、此趣大樹綱吉公御聞あそばされ、綱條公急に御暇にて、驛路晝夜をわかず御下

り、御看病あそばされ候、綱吉公も西山公の御病氣を御心もとなく覺し召れ、御病躰御尋として、度々上使を被_二差遣_一、并奉書日々到來、且又御療治のため、御醫者をも被_二遣候_一、然に上使の節は、西山の御隱居所にて御受不_レ被_レ成、其度毎に西山より水戸の御城下へ御越、上使へ御對面被_レ遊候、至極御大切の御様子にて在_レ之候處に、一度も御駕籠には不_レ被_レ召、長途_{（西山より水戸へ、行程五里半）}を御馬にて御越しなされ、剩へ御城中をば御歩行あそばされ候、御杖に御すがり、漸御たどり候へども、御脇より御手などを取申事は御嫌ひなされ候、同十二月六日甲子御逝去也、御歳七十三、瑞龍山御壽藏の後へ御葬、_{（同十二日也、）}御諡義侯と申奉る、

附錄

◎異本書云桃源遺事拾遺、今按以下迄三五卷末、共是附錄歟、卷之區分似_レ失、當

一西山公御逝去の年の始つ、かた、西山の巔に勝れたる大松一木有、_{（所民此松を大黒松と云、）}枝葉繁り、緑りの色深く、千歳の後迄榮ふべき勢なりしが、故なくして不日にかれ、又仙波池_{（水戸城下）}に蓮夥敷在_レ之候處に、根を絶て一莖も生ぜざりければ、諸人如何成事にやと存

候に、後におもひ合せ候へば、是誠に御逝去の先表なりけりと、皆々存じ當り候、同じき年の夏の末に時鳥の啼けるを御聞なされ、

はとゝきすなれもひとりほさひしきに

われをいさなへ四手の山路に

と御口ずさみ被_レ成候、其節御前に伺公いたし候者共、ことの外心細く、御行末いかゞとかなしみ申候、又同年の秋長月の初つかた、松倉山久慈郡白羽村大聖院と云僧御祈禱の札を持參被_レ申ける、其包帯に、

西山やいるさの月のはかなくも

まはしやとかる庭のゑら露

又同じ心比イ

地僻無_二人訪、竚然猶樂天、排_レ愁燈火下、煎_レ病藥爐邊、眠少添_二霄永、情虛了_二世緣、曾吞駢拇恨、何不

促_二終焉、

二西山公御逝去の月十二の朔日迄は、御床につかせられず、御平生のごとく御坐敷へ御出被_レ成、御後に御

夜服等を被_二差置、御よりかゝり御坐被_レ遊候、此節伊藤七内友親、西山公御治世の時よりの老中なり、綱條公の御供にて、

西山に相詰候を、此日、朔日、西山公御前へ召出され、

御近習の人を御ゑりぞけ、二時あまり御密談あそばされ候、定て御政務のこと共を被_二仰置候義と人皆申あへり、七内落涙袖をゑばり退出仕候て、誰れ彼れに語候は、御用を仰付られ候御様子、すこしも御平生に御變りあそばされず候よし申候、その夜、朔日、中村新八願言御機嫌伺ひとして、西山へ參上仕、且申上候は、日光御門主へ御上ゲ被_レ成べきと仰られ候毘沙門堂記録出來仕候、并奥書の案文をゑたゝめ候と申上候へば、それにてよめと仰られければ、新八よみ申候所に、色々御吟味の上にて、三所御直しあそばされ、光圀曾藏一本今新謄寫の二句御入被_レ遊候、かほどの御大病の中、むづかしき儀、こまかに御吟味御直し等在_レ之候段、人皆奉_レ感候、二日より、はや御寢間より御出候事も御叶ひ不_レ被_レ成候へし、此段日御前より御寢間へ出よう事あると総は、此段日御前より御寢間へ出よう事あると総は、此段日御前より御寢間へ出よう事あると総は、女中は曾て御よせあそばされず候故、男計御看病申上候、かやうの御病氣此段日御前より御寢間へ出よう事あると総は、以の外なる砌にも覺し召付られ候は、御煩に付御末々まで相詰候もの共これ有べし、太儀に思召候間、御酒など給させ、食事等いたさせ候やうに、御近臣に被_二仰付候、御藥等も御手自めし上られ候、

御側の者ども御つかれをいたはり奉り、くゝめ候て指上候得ば、御受不_レ被_レ成候、五日には夜四ッ時過より御起坐なされ、御手を拱き、少も御くつろぎ遊ばされず、閑に御坐なされ候、御口かはき申やうに御見え候まゝ、御湯を上候へば、二口ほど聞しめし、御手を出し候まゝ、御はなかみの事と心得さし上候得ば、御取上ゲ、御口のわきにまたり候湯を御拭ひ遊ばされ候、それよりだんく御息ほそくならせられ、なかほどまづかにして、其夜丑の終明れば六日と申に御逝去なされ候、御病中一度も御うなりあそばされ候を承り候者無_レ之候、

一 西山公御隠居後、常々御はなしあそばされ候は、世の人末期に辭世と申候て、詩歌など致候、去ながら病氣の品により、さやうの事ならざるもあるべく候、我は、隠居して江戸を立候あした、中將に残し置候詩_{御詩}^{出前}が辭世なりと仰られ候、此故に御病中に御辭世あそばされざるものと、人みな申あへり、一 西山公御逝去につき、京都より御いたみつかはされ候御歌、

十首和歌哀傷

時鳥

中院前大納言通茂

雲といまきえしもおなし七十の

おいのたもとそ聞にまくるゝ

落葉

武者小路三位實信

あくときもあらし千種のもみちはを

さそふならひもうきあらし哉

寒艸

中院前中納言通躬

野邊のいろの秋は千種とみしも今

ゆめとそまのふ草の冬かれ

冬月

久世中將通清

見はやさん人もことしはなき宿の

月や時雨にさそ曇るらし

歲暮

押小路少將實岑

行としの名残にそへてまほるらし

なきかけまたふ袖のなみたも

述懷

野々宮中將定基

西山公御逝去の前五年已來御取かはし被_レ成候

うらみあれやこゝろの友と頼にし

身は五とせをあはてすきぬる

懷舊

風早前中納言實種

すゑ遠くなかれての名はとゝむとも

かへらぬ水のあはれ世の中

往事

日野頭辨輝光

はかなしなきのふのことゝみしもみな

あはれ一夜の夢の世中

無常

六條中將有慶

ありはてぬならひをえれは無數に

もるゝもつゐの夢の世の中

釋教

清水谷前大納言實業

えたふそよ鶴のはやしのいにしへも

今朝ふる雪の木々にえられて

右出題飛鳥井左衛門督雅豐卿

此十首の和歌は、内々には、勅有て御興行なされ候よし、
風聞申候、

西山中納言源朝臣かくれ給ふ由をきゝて

安藤氏かもとにつかはしける

常子女王

伏見故式部卿貞致親王の長女繁宮御方

よろつ代といのりしこともむかしにて

さためなき世そさらにかなしき

七十や三とせの暮を廿日あまり

のこりおほくもおもほゆるかな

水戸源黃門の訃音を聞侍りてよめる

清水谷前大言納實業

さくにその千さとへたつる涙さへ

おとろく袖にかけてえほるゝ

なき世までたれかえたはぬ何事も

たゝせるみちのふかきこゝろを

右の二首は、西山公御逝去の砌、御聞あえず被_レ遣候、

維元祿庚辰季冬、正四位下行左近衛權中將藤原朝臣定基、敬告_ニ故常州侯前權中納言源朝臣神靈_一、竊惟、俊傑豪邁、政治之暇、專好_ニ文學_一、慕_ニ古典_一、而離_レ俗、倣_ニ賢蹟_一、而擢_レ群、僕無_ニ奕世之親_一、未_レ通_ニ遇見_一之語、恃關洛遠斯隔、然憐_ニ僕有_ニ書僻_一、而顧問既_ニ久_一、屢辱_ニ記籍之假借_一、益_ニ於此道之博、恩亦何加焉、不_レ圖今聞_ニ屬泉之訃_一、嗟天也歟、何奪_ニ此老_一、壽_ニ哉_一、僕無_レ由_ニ往弔會葬_一、頻不_レ堪_ニ慟哭哀悼之思_一、聊獻_ニ酒菓菲物_一、薦_ニ之_一、冀神魂照_ニ鑒寸誠_一、享_ニ之_一、

元祿十三年十二月十九日

右の祭文に香一包并酒菓の料として白銀御そへ、

安藤新介爲明が方までつかはされ候、新介早速瑞龍山へ罷越し、御送なされ候^{まゝ}を、西山公の御碑前にそなへ奉り、祭文をよみ、定基朝臣の御代拜を相務候、

西山黃門のかくれ給ふを悼る言葉

舟橋前式部少輔入道常覺

自息軒

水戸の府をおさめ給ふ權中納言源朝臣、此春の頃よりなやみ給ふ事あり、いとあへしくはあらねど、物などきこしめすにうとましくし給ひて日比へぬ、秋になりてはやうくおもらせ給ふ、何くれの醫師も術を失ひ、日にそへてよはらせ給ふ、終に七十餘りみとせをかぎりにて、この曉はかなくならせ給ふ、上下くれまどひ、さはぐことかぎりなし、是をきくにもものもおぼえす、何かたにたれをかこち、誰をか恨ん、むねうちさはぎ、涙さへいづち行らん、ひれふすより外のこともし、聞からに誰によりてかかこたまし

此曉のつゐのわかれを

やうくこゝろまづまりては、さても此秋御まね

きにて、彼御山莊にまゐりて、あさからぬ御もてなし、又年月の深き御めぐみなどをおもへば、まきりに涙の落るをといめもあえず、かの時對面終るか、ながき御別となりぬること、いまさらせきあえず、とし月のふかきめくみをおもふにそ

おほえす落るわかなみたかな

十二日には、例の作法におさめ奉るよしを聞て、むなしき御からをだにまばしめす、今は此世をながくさり給ふよと思ふにいとかなしくて、ひたふるに、今は此世になき君と、わけゆくしでの山路かなしき、諡を源義侯と申奉ると聞て、思はずもかうやうの御名を今聞べき事は、月雖隱^レ瑞龍雲、光暫留^ニ西山峯、といふ御事をおもへば、せめてはたのもしく、こう光明三昧行ひて、よみちをてらすよすがとも成やせんと、佛のまへにこもりて、曉の懺法などもよみて手向奉る、折しも外面の冬がれの氣色を見れば、折ちりがほなるも、涙もよほすくさはひたり、

草も木も涙もよほすたねなれや

枯ていろなき野邊の淺茅生

いつもかの御山莊にて待よろこばせ給ひて、いともかしこくもてなし給ひしに、けふは引かへて馬鬣封のたてるすがたもすさまじくたれ、御まへに侍る者もなく、玄ばらく經陀羅尼などを手向奉りて、立さりがたく、涙もとめえぬぞわりなきや、漸日たけぬれば、松風の音さへ名残をしく聞さすやうにて、なくくかへりぬ、

苦の下いかに隔し道ならん

こたふる聲は峯の松風

春になりてうらゝかなる空も、かきくもる心ちするなり、人々もとひこねば、たゞ引數珠に涙の玉をもてくりて、あかし暮すより外の事ぞなき、軒端の梅の折をたがへぬも、誰に見よとやと思ふに、せめて折て佛に奉るとて、

色香をはおもひもいれぬ春そとは

ゑらてや梅のひとり咲らん

取わきて梅を愛し給へば、咲も待兼て奉りしに、今年は誰にかと思ふに、せめて御墓に手向奉らんと出立ぬ、

さけみまつ誰にかと折る梅の

花思はぬ山に手向つる哉

此君もとよりはかりごとを帷幄の中にめぐらし、勝事を千里の外に決し給ふべきことをいへばさら也、御いとまには、文つくり、歌などからのやまともぐして長じ給ふ、常に月雪花に心をいたましめ、えならぬ御遊などまで御心をやりてせさせ給ふ、又政を正しくし給ふ餘り、鰥寡孤獨のたぐひまでいたらぬくまもなくうつくしみ給ふ、玄かのみならず、神社佛閣の絶たるもおこし、輪魚の美を盡し、大方世に稀なる程の御本性なれば、めぐみをうけ奉るものはさらにもいはず、賤男賤女に至るまで萬歳をいのり奉りしに、かくならせたまへば、物おほゆる人ぞなき、かの御慈悲の功德、蕙子蘭、孫に及びて、ありしにかはらぬ御をきてなれば、御行末いとたのもしくこそ、

たのもしな霜の後にも色かへぬ

ときはのまつの千枝のさかえは

かほどのことさへ心もはれず、筆とることも老の身は物うくて、むなしく過ぬべかりけれど、かの御名残をしくかなしさの餘りに、心におもふ事をみ

ちかき筆に書つけ侍る、ゆめ／＼人に見すべきにもあらず、是も又讃佛乘の因、轉法輪の縁とならんかしと、朝夕のあか奉るつゝに、かの靈前にさへ

げて、ひそかに手向奉らんとなり、右の外あまた御哀悼の詩歌あれど、事繁きゆへこれをもらす、されば西山公の御德暉、常に四海の外までもかゝりやけるにや、後西院帝の御製の御前がきに、備武兼文絶代名士と御褒美あそばされ、又朝鮮國の尹趾完が詩に、未入扶桑界先聞水戸名と作れり、今御逝去のよしを聞しめしおよばれ、公卿殿上人其德を御あげ、遠く此御別れををしませられし、且むかし武家堪忍記とて、諸國の城主郡主の善惡を批判したる書物密に世に流布仕り候、其書にいはく、水戸中將光圀卿いまだ家督たらざるに依て、國家政道を^{とて}不仕、文武を專に學ぶ故、才智發明にて、道を以て治め、惠あつく、義を守てその身を正す、或は世間の譽有人を集て、自ら諸藝を學び、行跡譽高しと、かやうにかきえるし、又寛文六年夏江戸の御城の下馬に落書を立申候、其落書に曰、五聖人、水戸宰相光圀^{餘は}略之、七賢人^{姓名}略之、十惡人^{姓名}略之、たれ／＼

と書申候、かやうの眞なことにまで、五聖人とかける第一に西山公を誌奉れり、又肥前國長崎へ年々商賣に參候朝鮮人ども着船の度毎に、水戸公平安なりや否やと承候よし、

一西山公わかき御時より御學問を御好みなされ候に付、高貴の御方々は申に及ばず、下賤のものにて、も、まれなる書籍所持のきこえあれば、深く御懇望あそばし、或は金銀をつくして求給ひ、又は御家士をあなたこなたと遠國他郷へ遣され、^{多くは、佐々介三郎をつかはされ}候、半昏一行の反古までも、見分に隨て拾收せさせ給ひき、去によつて、和漢の珍らしき書物どもあまたあつまり候、西山公常々仰られ候は、書籍をふかく秘しかくし、子孫を戒て門外を出さる事、惣て鄙吝なる事也、朝廷の故實を我獨り傳て家業の資とせんや、或は又奇書を貯て名にはこらんと企んや、果は蠹魚に損せられ、没字の故帚となり、或は火災によりて一時に烏有とならん、されば往古の書籍奇聞實事これに因て氓滅し、今世に傳らざること多し、誠にかなしむに堪たり、關東關西兩地に藏置ならば、たとへ一方はめつするとも、一方は可

傳事也、我々は是繼^レ往迎^レ來の寸志ゆへ、所望する人には、少しも秘する事なく、恠む事なく、あまねく許容すごとし、此段をよからぬ事也とぞしり沙汰する人もあらんかなれども、右の寸志ゆへ、はかりなくつとめて世に傳はらんことを思ふなりと仰せられ候、且彰考館^{書物所の}號^{なり}を御立、日本の史記を御撰せ、其にも所々に御書物所を構へ、神書、歌書、禮典の類聚をはじめ、色々の書籍、編集増補或は新撰等被^レ遊候、是に依て、儒者、神道者、歌學者、有職者、天文者等、多く御かゝへ被^レ遊候、

御書物所の警曰、

- 一 會館者、可辰半入未刻退、
- 一 書策、謹不可汚壞紛失之、
- 一 羣談諍論宜最戒之、
- 一 論文考事、各當竭力、若有他所駁、則虛心議之、勿執獨見、
- 一 在席勿怠惰放肆、

一 西山公御幼少の時より、十七八の頃迄は、取わけ御實祖母養珠院殿の御方に多くは御入被^レ成、紀州卿の公達とひとつ所にまづはり給ふ、其ころ紀州の

姫君におよつゝの御方とて、^{は御從弟なり、}姫君は西山公とおはしませけるが、艷色の御容貌なり、然るに養珠院殿を始奉り、御一門の方々西山公に彼姫君をめあはせ參せ度覺し召候、されども西山公常々同姓不娶の嫌を守り、武士の命を捨て性を忍びて節義を立るは、後代の名をしむが故也、色欲におぼれて近き一類と婚合し、禽獸の類によばれんことは無念のわざ也との給ひて、左様な筋合をば、人の上をさへつまはじきをしてきはせ給ふにつき、思めしのまゝにもならず、如何せんと御内談有しに、人めだにおろそかならば、よもたゞにてはおはせじ、さあらば、後に^まか^くのこと候なれば、はなちまゐらする事は成がたしといひきこえさせ給は、西山公もえいなとの給ふ事はならじとて、御つきくの女房だちに、此旨とくと仰ふくまられ、折につけつゝひたすら西山公へ姫君を近付まゐらせられける、ひめ君は、御かたちちのすぐれさせ給ひぬる上に、御歳さへさかりの御ころをひにわたらせ給へば、たとへつよくふせぎまゐらするとも、西山公にもひまもとめてもとと思召るべき程なるに、ましてや

かくゆるがせにし給へば、えこらへ給ふまじかりけるを、同姓不娶のきらひをまもり、よく堪しのびて、終に聊のたはむれがましき御事もなくて打過させ給ける、

一 西山公御部屋すみの時分忍びて召つかはれ候女中有、淺からず覺しめし候所に、何方よりいかなるものかあしざまに告たてまつりけん、頼房公の御耳に入、御不快に思召候よし、西山公傳へ聞かせ給ひて、父の御不快に思めさるゝと聞て、たとへやる方なく不便の者なりとても、其まゝ忍び置べきにあらず、されば逆はかなきものをえほもなくいとまとらせ候事もさすがなりとて、牧野與三右衛門孝和を召れ、其方母に密に相談いたし、彼女を何方へもとくかたづけ申様にと仰付られ候、よつて與三右衛門おや子密に相談仕、彼女中を與三右衛門が妹分に仕り、御家士白石介右衛門に嫁さしめ候、頼房公御逝去後、右の女中或とき與三右衛門おや子のものに對し申され候は、御先代より筋目ある人の妻子ども常に奥方へ出入、或は折ふし御きげんうかいひに上り、又は御祝義等、或は御能

などの節、上よりめせられ、又は願によつて御目見え仰付られ候もより、有之候、左候へば、我等事も何とぞ御序を以よき様に申上、御目見被_二仰付_一候様に願申由くれぐれたのまれ候、いかにももだしがたく候につき、右のおもむき西山公へ具に申上候得ば、得と聞しめされ、寔に申所よぎなく相聞え候、たとへ願ひ申さずとても、えたく召仕しものゝ事にて候へば、なづかしくも候間、こなたより目見をも申付べきほどの事なれども、いかにも心まゝになりがたきえさいあり、その譯は、第一、父の御不快に思召候に付いとまを取せ候ものを、御逝去の後たりとて、はいかりなく目見え申付、奥方へ心やすく出いらせ候はんこと不敬の至りなり、次にはよしそのはいかりのなきにても、其方が存候通り、彼者の事は、はじめおもゝしく召仕候、えかりといへども、當時かろきものゝ妻となり候へば、目見えも今は昔にひきかへ、その夫の格式に順すべし、さあらん時女心のおろかなるまゝに、むかしはこはなかりき、かくはあらざりしと、かへつてうらみ申べきか、さればとて格式を亂し、輕きも

の、妻子を重きもの、妻子並には、なりがたし、便なくは候へども、彼に付是に付、目見え申つけにくきよしとくとがてんいたし候様に、其方申きかせ候へとて、とう／＼御目見え仰付られず候、然れども毎年四季折々の衣服、およびことにふれたる物どもたえずおくり下され、御逝去のきはまで、數十年來御懇にあそばされ候、彼女中、夫助右衛門死後がとなつて妙東と申候、與三右衛門が母は、清泰院の御乳母なり、名は牧野と申候、法名榮讃、

一 西山公御一生の内、京都などより妾をめしかへられ候事曾以てこれなく候、京都にての取沙汰にも、大名によらず、いかなる御家にも、あくまで女の品かたちをえらばせ、貳三人或は五七人拾人餘も、年々京都より女中をかへさせ給ふに、水戸の御家にかざりて、さ様な奉公人終に一人もめしかへられざるは、如何成御事に候や、不思議なる事也と、人々申あへり、

一 西山公いまだ御簾中の御沙汰もなかりしころ、御側ちかき女中に懷胎の人有ける、然るに西山公は御兄頼重殿の御子を御養子になされ、御家をゆづり候はんの思しめしゆへ、もし懷胎の者あらば、早

速水になし申べしと、兼々かたく仰られ候間、此事を聞召候はい、中々以御誕生は成べからざるを、伊藤玄蕃友玄夫婦の者婦名志は、老後號性善院、三木仁兵衛之次が女なり、ども甚以痛みなげきて、後日の思召をかへり見ず、彼婦人を病氣になぞらへ、養生のためとて我宅へ申請、西山公へふかくかくし、ひそかに御誕生なし奉りぬ、御名は兵部君頼常、後頼重君爲養子、と號せり、此段頼重殿へ玄蕃ひそかに申上ければ、其方手前にて養育仕候義成がたかるへし、我方へ遣し候へ、成長の後よきやうにこしらへ歸し申べしとて、兵部君を早速讃州高松へ御むかひ取、御そだてなされ候、此段遙にほど過て、西山公の御耳に入、ことの外御不快に覺召候得ども、頼重殿とく御引とりあそばし候上は、何とも可_レ被_レ成やうもなく御打過候、兵部君、十三歳の時なはじめて江戸へ御下りの節、西山公御えたしみの御様子かつてこれなく候ひし、

一 西山公常々被_レ仰候は、御父子の御召仕の者どもわけわけになされ候ては、各わけへだて出来る物にて候、左様の事により、父子の間うとくなるもの、よしおほせられ候て、御老後迄急度御人わけは不

被_レ成候、

一年々勅使江戸へ御下向の節、御三家の御方尾州、紀州、水戸へも御出なされ候所に、勅使の御宿へ御使者を以右の御禮相濟候事先年よりの事也、西山公此段不禮に思召、御自身右の御禮として御出なされ候、今以水戸の御家は此例也、且親王大臣御見舞の節も同じ御事也、又左様の御方よりつかはされ候御文をば、先御いたゞきなされ候て、其後御ひらき御覽なされ候、

桃源遺事卷之三

一 西山公むかしより御老後迄、毎年正月元日に御ひたゝれを召れ、早朝に京都の方を御拜し被_レ遊候、且又折節御咄しの序に、我が主君は天子也、今將軍は我が宗室也、宗室とは親類也あしく丁簡仕取違へ申まじき由、御近臣共に仰られ候、

一 西山公御旅行の御道筋、亦是御狩の先などに、わづかの禿社御坐候に御行懸り候て、御覽の爲御立寄被_レ遊候節は、必以て鳥居の内を御通り不_レ被_レ成、いつも鳥居の外を御通り被_レ成候、又何神社へも御參詣と申には、御襖齋被_レ遊、御衣冠にて御出被_レ成候、又寺社へ御入候節、其坐敷に上段御坐候へば、御身は不_レ及_レ申、御腰物をさへ上へは御上け不_レ被_レ成、上段の下のきはに被_レ指置候、其譯は神への恐れ佛への憚を思食候との御事なり、

一 西山公大風大地震の時は、日光山の役人某が許へ御文を被_レ遣、神廟の御安否を御尋被_レ遊候、勿論東叡山へも増上寺へも御人つかはされ、御佛殿御安

否を御間被_レ成候、水戸の御廟瑞龍の御墓所は不

及_レ申事也、(異本追加)其後はるか年を経て、御城よりしかやうの節は、日光への御同ひ始りけるとなん、

一 西山公若き御時より御老後まで、御精進の節は御

別間に御入朝夕の御膳一汁一菜の飧食をめし上ら

れ、役人に命して酒局を封緘せしめ、料理鹽梅にも

酒を禁じ給ひ、一切の御遊興御詩歌さへ不_レ被_レ遊

候、その御したしみの近き遠きにより、御年忌又は

毎年の御祥忌月には、或は一七日或は三日、或は宵

より精進禊齋なされ候、其節御つゝしみの堅事右

のことし、勿論御親類の御中に、御卒去の御方左

て、御忌懸り申候節は、日月の光りに御當り被_レ成

間敷ため、御一室の外は晝夜御庭へも御出不_レ被_レ

成候、且御喪中あるひは御精進の時分は、御近臣三

四人并儒臣等相詰候、曾て世上の雑談不_ニ罷成_一候、

一 御母久昌院殿の御爲に、久慈郡稻木村久昌寺に、佛

殿法堂位牌堂多寶塔方丈食堂鐘樓鼓樓垂跡堂山門

厨庫浴室等、本式の通に御建、法式御改役者を御

附、日々三時の勤行怠りなく、且法華懺法等及び音

樂まで稽古仰付られ候、又御年忌の節は、法華千部

の御法事、其外法花懺法、十輪供養、音樂和歌の披

講等、さまざまの御供養被_レ成候、又幸に御年忌の

節御在國なされ候へば、御法事中毎日御衣冠にて

久昌寺に御詰遊ばし候、(但詰日は、御束帶也、)且延寶五年丁巳十

七回忌に當らせられ候、此年西山公御在國也ける

が、御別間へ御入御禊齋、御衣冠にて一字三禮に、法

華經開結の二經共に以上十卷を、うすき板に書寫

被_レ成、段々に御重ね箱に御入、其上を黒漆に御ぬ

らせ候て、日蓮上人の正筆の題目を御寫し取、宮の

面に御彫せ、久昌寺の佛殿の本尊になされ候、且御

母堂御逝去の砌も、御忌中に法華經書寫遊ばし、御

墓の側の地を穿ち御納め被_レ成候、御三回忌、七回

忌、十三回忌、二十三回忌、廿七回忌にも、御回忌毎

に御精進の内、彼の御菩提の御爲に法華を書寫遊

ばされ候、以上七部也、此内に二七日の中に書寫し

終らせ給ふ法花經有、是をば摩訶衍葦日慈(久昌寺の塔中也、)

に、火中仕候様にとて御渡し被_レ成候を、彼僧受取

奉り、後に莊嚴いたされ、今久昌寺に納め被_レ置候、

又京都本圀寺へも、御母堂の御爲に、佛具及び樂器

等御納め、御法事の料として田畑御附被_レ遊候、(異本追加)

追加毎年十一月十四日の御祥忌日に、又右の久昌寺の近邊は、本圀寺にて法華懺法今に施す、

に三昧堂といふ山あり、此山を御開き法華の談所を御建、講堂食堂所化寮等不殘御造らせ、名高き能化を御招き、數多の所化を御扶持被成候、依之方々より所化多く集り候、是亦御母堂の御菩提の御爲也、又御誕生日には、蓮花寺日乘上人に被仰候て、別して法華經讀誦なさしめ給ふ、是は御母堂御産の時分御惱み嘸有つらんと、深く悼み思召やり給ふ御孝心の餘り也、

一 水戸御城下に心光寺といふ寺有り、此寺は萬千代殿信吉、法名淨鑑院の御菩提所也、西山公彼寺を久慈郡向山といふ所へ御引せ被成、堂塔本式の通りに仰付られ、法式等も御改正被成、且鉦鼓は本式に非ずとて、鰐口を差置れ、鉦鼓のごとく鐘木を以て打鳴らし、念佛を可申よし、是は室也上人の例也とぞ、

扱萬千代殿の御遺骨をば、瑞龍山へ御移し被成候、此節は始め萬千代殿に仕へ候士共の子孫を、御家中より御えり出し、御柩の御供仰付られ候、將又御墓所にては、右の土共に御柩を御かゝせ被成候、萬千代殿御事は、初水戸を御領し候所に、御早卒被遊候て、御子も無御座候によつて、西山公

御心を入られ、萬千代殿の御爲に彼寺を御取立被成候、萬千代殿は賴房公には御兄、西山公には御伯父也、扱彼寺を淨鑑院と御呼せ被成候、異本追加箇の檀林つうち、常州御頭の常福寺を住せしめ、寺科御寄附、兩寺兼帶なさしめ給ふ、誠に難有ためしなめなり、

一 西山公いつとても御下國の度毎に、御着城被遊候といなや、暫くの御休息もなく御裝束を改、御廟參被成候、且瑞龍山へも早速御參詣被成候、玄かのみならず、御廟參御墓參のせつは、御拜の内、毎度に御落涙被遊すといふ事なし、世上にて父母の死別ををしみ、理に過て慕歎く人も、日遠くしてはみな疎くなり、或は年月を過ぬれば、其日をだに忘んとするも有に、かく年月を重ね共、その砌の如く慕ひ歎かせ給ふ事、如何成事をば御心の中に思召出させ給ふやらんと、御供の御近臣、且はあやしみ、且は感心したてまつり候、

一 季姬君綱條公の御姪、今出川右府藤原公規公の御むすめなり、京都より御下り被成候砌、小石川後樂園の中に池有、其側に水をひかせ田を御拵へ、苗代より初め、苗をうゑ艸をぬき、養育いたし、秋刈て穂をこきのげを去り、摺白に懸て米となし候迄、一々御目に懸られ、又絲をひかせ機

を織せ御目に掛られ候、如此賤き者の平常からきめを致し候事を思召やり候へとの御事なり、

一 次城郡玉造村の中の濱濱は玉造村の内の小名也、と申處に、彌作

といふもの有、家至てまづし、父ははやく死して、母老たり、まかも腰居となれり、彌作性究て愚鈍なれども、母に仕へて孝行成事は、をさく聖賢にも不_レ可_レ耻、彌作妻と共に心をあはせて渡世をいとなみ、母を養んと存候に、其妻いつとなく病身に成て力を合する事能はず、彌作おもひけるは、斯ては母の養も却て闕こと有なんとて、あかぬ中ながら妻を去て、母と我とのみ住けり、元來田畑も持ざりければ、人の田畑を受作と云事にして作れり、扱田をすき畑をうたんとする日は、母獨家にをらしめん事を悼み、藁にて笈などのやうなる物を組み、母を乗せて負ひ、前には農具をかへ、手には母の飢渴を助んが爲、喰もの并にやくわんに茶を入て携行、其所に至ぬれば、夏は涼しく、冬は暖なる方を求て、母をおろし居て、田にまれ畑にまれ、一うね二うねうなひぬれば、母が側へ寄て顔色をうかいひ、ものいひ慰め、茶酒食事など望に任せて進_レ之、

田畑をうなひ申候、母常に酒を好み、日毎に酒を求め貯へてともしからざらしむ、家に在ては日夜心を盡せる事筆にも盡し難し、爾時延寶のはじめ、西山公此事を聞召及れ、南領へ御出の節、彌作が門に御立寄、彼ものをめし、金一すくひ左右の御手を並べ御持候て、彌作が頭の上に御さしかざし、孝行の段御褒被_レ遊、此金を以て母を心よく養申べし、此金我があたふる所にあらず、天より汝にあたへ給ふ所也とて被_レ下候、扱所の役人をめし、彌作は勝れて愚鈍なる者と聞しめし被_レ及候、此金人に奪ひとらるゝ事も有べし、汝ら能く計ひ田畠をととのへとらすべし、亦向後懇に可_レ仕よし被_レ仰付、其後儒臣に被_レ仰付、彌作が傳を御書せ被_レ成候、一 那珂郡山形村に、大串武次右衛門昌徳と云貧き百姓あり、父をば市郎右衛門と云、兄をば介内といへり、介内は眼病を相煩ひ盲目となれり、此武次右衛門幼なき時より孝行の志有り、朝には父母より先に起、夕べには父母より跡にいねぬ、歳長するに随つて、父母は申に不_レ及、兄の盲目にもます、く厚く仕へ、平常何事も父母の心に違はず、用有て遠近

によらず他行せんと思ふ時は、先父母の心をとり、顔色宜しからず見ゆる時は、用を差置て止り、顔色うち解見ゆれば、何時には歸り候はんといひて出ぬ、歸時期を不_レ違、先にて用事終らざれども、其時に到りぬれば半にして歸る、歸時は何にても調て父母へ土産を捧り、斯て武次右衛門壯年に及びければ、妻を迎へとれり、孝行の致方を妻にも懇に申合めけるに、妻も能く夫の教を守り、夫におとらず孝行を盡せり、然に父の一郎右衛門煩付、老病醫するに驗なく、神佛に祈るといへども、延べ難き命にや終に死せり、武次右衛門夫婦泣かなしめる事たとふるものなし、死後日を重ね月を越え年をふるといへども、位牌に仕ふる事尙實に生る時のごとくせり、母もや、歳老ひ齡ひ傾きぬるに付て、仕ふる事昔に倍せり、夜は床をのべて、己先臥て寐能きか寐にくきかと試、母を寐さしめ、夫婦して介抱いたし、母寐入らざるうちは、夫婦ともにねぶらず、夜中も度々母の快くいねけるや否やとひそかに伺ひ、夫婦共に一夜もいやすくせず、又母痰症に成けるが、老衰氣力なふしてまゝ、痰を吐出

しかぬる事有、其時は己が口を以痰を吸ひ出しけり、又曾て父が代の借金分に過て譲られぬれども、露太儀と思はず、母に不自由なる氣色を見せじとてなき物をも有がごとくにもてなし、足ざること隠せり、母常に酒を好みしかば、日々に酒を買ふて進めぬ、又母神社佛閣或は親きものゝ方などへ行んといへば、夫は農をさし置、妻は機をも取捨て、夫婦して母を守護し行ぬ、其道遠きか又は坂亦是澤など有て六ヶ敷所をば、武次右衛門母を負ひ女房は手を副かいしやく仕候、一々孝行の趣を述るにいとまなし、母及び兄の介内も、武次右衛門夫婦がとし頃日比心を盡し身をやつし孝行を致し候事を悼みおもひ、仕ふることゆるがせにし候へと、度度申けれども、夫婦其度毎に答けるは、有得なる身にて候はい、孝行の仕方何程も可_レ有候得共、本より貧窮成身にて候ゆへ、力に及不_レ申候、たい御心やすらかにおはしまし候やうにと存計也とて、少しもたゆむ色なく、尙更孝行深厚に仕候、母も兄の盲人も人に對すること、先夫婦が孝行を語り出て涙を流し悦び自讃仕候、聞人皆感歎せずといふ

ことなし、元祿年中西山公御隠居の後也、此事をきこし召及ばれ、北領御出行のせつ、彼家へ御立より、右の者どもを御覽被_レ成、件之趣御稱美ありて、且江戸へ被_二仰遣_一ければ、綱條公も御同様に甚御感ましまして、金銀若干被_二下置_一候、扱西山公此義をも傳に御書せなされ候、

一 那珂郡村松村に、治兵衛と言まづしき百姓あり、父瀬兵衛とて七十に餘れり、治兵衛常々父に仕へて孝心なり、元祿十二年父瀬兵衛重く惱み、終に息絶候、治兵衛泣かなしめる事理に過たり、扱しも有べき事ならねば、親類并入魂のものども打より、治兵衛が父の骸に取つきはなしかね候を、むたひに引はなち、棺に納申候所に、一時餘り過て治兵衛申候は、父よみがへり候事必定也、棺の中にて息つきの音慥に聞え候とて、玄ゐて棺をあけ父が骸をとり出しけれども、蘇生は不_レ致候、此折節西山公那かの湊へ御通り被_レ遊候が、興有事有て、彼村の龍藏院と申修驗者、所へ御入候處に、蘇生の者有と所民いひあへるを、御醫師鈴木宗與御供にて候ひけるが、いつも、御供先によらず急病あらば、御用をも指置早

速參り療治仕候様にと、兼々被_二仰付_一候故、其ま、彼家に至り藥を用ひけれ共、息もなく脉もなく、藥咽に入とも見えざりけるが、自然と藥胸中へ流れ入候哉、暫在て誠に活生せり、因て宗與立歸り、上の御藥箱より御藥共を取出し調合仕用候へば、瀬兵衛彌元氣慥に成候、治兵衛手を合宗與を拜み悦ぶ事甚し、其後宗與歸て御前へ出ければ、何方へ參候哉見えざるよし御尋有ける、因て件之趣を申上、且亦治兵衛孝行なる者故、天の恵みにて及なき御醫療に會奉り、瀬兵衛蘇生候ものと存候由、彼家へ集居申百姓ども口々に申候と御物語仕候へば、西山公被_レ仰候は、寔に我此所へ來らずんば、誰か、醫藥をあたへん、彼もの孝行の德に感じ、天我をして此所に至らしめ、汝をして彼者を療治せしめ給ふ成べしとて殊外御氣色にて、まづしき百姓のよしに候得ば、定て食物も宜しかるべからず、白米鹽噌野菜乾魚生魚等御膳に用ゆるものを以、彼に送りあたふべきよし被_二仰付_一候、役人ども承り、早々もたせ遣候、且又翌日其地御出立の節、彼家に御出立より候て治兵衛を被_二召出_一、隨分看病可_レ仕よし被_二仰

付、御手自金一包御投被下、村の役人をめし、宗與方へ病人の容體ゆだなく申越、藥取寄用させ候様にと被仰付候、此段は西山公御逝去の前のとし也、

一那珂郡野上村に、與次右衛門^{初名喜平次}と申百姓あり、

その妻の名をば安といへり、岩崎村^{野上村の同郡也}の百姓の娘也、然るに彼女與次右衛門に嫁して間もなく、

與次右衛門あしき病を引受、^{楊梅瘡にて、面皮損じ陰莖腐れ落申候、}人の

まじはりもなく、見苦しき牀に罷成候付、與次右衛門女房に對して申候は、其方事年も若く、生つきも

見にくからず候所に、箇様に廢人となり候我等に

連そひ候段、何とも痛ましき候、殊に女は老後子に

養るゝ事を頼なるに、子も出生すべきにあらず、旁

以我にそふて本意に不存候間、暇をやり候まゝ、

又如何様なる者にも嫁候へ、努々恨は無^レ之候とこ

とばを盡し申候へば、女房泪を流し甚恨申候は、

夫婦と成候うへは、いかに夫の廢人となり候とて、

見捨て他へ嫁ことや候べき、殊に老かゝまりたる

姑の在候を、重病の身として如何仕へ給はんや、是

又見捨可^レ申に非ずと申候へども、與次右衛門猶さ

らこと葉を盡し、頻に暇の事を申候へば、女房兎角のいらへもせず、既に自害せんと仕候故、與次右衛門驚き取とめ、感涙を流し、此上はとかふ言べきやうなし、足下を悼み思ふ故にこそ暇をばやり候半と申候、左あらば老母を痛り給はり候へとて、その後は暇の事申出さざりける、それよりして姑及び病夫を痛はり候事益あつく、且嫌疑をさけ貞節を守事彌堅し、與次右衛門とし久敷病氣故、段々家まづしく成て、後は下人もなく、馬も持ず、唯夫婦計になり候ゆへ、女房看病のひまゝに、女の身ながら鋤を取りて田をかへし畑をうつて夫を養育仕候、或時西山公其邊御通り被^レ成候處に、かの女房田をうなひ居申候を被^レ成御覽、女の身として田をうなひ候は非道なる主人に仕へ候者か、又は繼子などにて其親の惡みにて申付候か、とかく子細有べき事と覺しめし、御下部の者を以て御問せ候得ば、右之段を申上候、西山公一々聞召れ、御感歎なゝめならず、其家へ御立より、彼病夫をも御覽被^レ成、女房に御手自金一包被^レ下、且此段綱條公へ仰遣され候、扱彼者の田畑永代作り取に仕るべきよ

し被_二仰付_一候、斯御恵み被_レ遊候よしを承傳へ、有徳なる百姓共、感じ奉るのあまり、心々に金銀米錢等を彼夫婦へ送り候、

一多賀郡小中村の百姓權左衛門初名は八右衛門と申候伯樂仕候、が妻を、同村茂村の口同村の内笹原と申所の亦四郎といふ百姓戀慕

いたし、密々に度々何かと申寄候へ共、彼女節義を守り心を傾け不_レ申候、或時夫の權左衛門馬を牽て商の爲武州江戸へ登り候、其跡にて彼亦四郎能幸とおもひ、夜半に女房か閨へ忍び入候を、女房目をさまし、夫の刀の有しをさつと拔、また、かに切付候へば、男働えず、疊懸て切付、卽座に打留申候、此段西山公聞めし、比類なき致方とて、殊の外御感心なされ、其邊御遁りのせつ、彼夫婦をめし御目見仰付られ、御褒美を被_レ下候、御隱居後の事也、

一久慈郡金澤村の者、同郡西染むらの者と喧嘩を仕、西染村の者、多部田村水戸御領分也、下野國那須郡、の三郎兵衛と申者の家へ懸込申候所、三郎兵衛他行いたし、女房獨居申候が、彼の懸込申候者をかくし置申候、然所へ間もなく追手大勢にて走來り、かの者出し候へといかめしくの、しり候、女房少も恐れたる色な

く、棒を提出向ひ、爰元へは何者も來らず候、たとへ參り候込、懸込頼候者を出し可_レ申様あらず、況や何者も不_レ來候、若理不盡に押入さがし候て、何者も居不_レ申候はい、女の身たりといふとも其儘にては差置申まじ、覺悟してさがさばさがし候へと申候へば、追手共押入さがすことあたはず引返し申候、此段西山公きこし召、賤き者といひ殊に女の身として神妙なる致し方、常々夫の教も能候こと相知候よし御稱美遊ばされ、北領御出行之節、彼夫婦を御旅館へめし、御料理被_レ下且御金給はり候、御隱居の後也、

一那珂郡菅谷村は、水戸より西山への往還の道也、西山公或時水戸へ御出之節、彼村を御通り被_レ成候處に、かたはなる馬を、極貧なる百姓名は吉兵衛、是非なく仕ひ申候を御覽なされ、不便の儀に思召、彼ものに能馬を調へ候得込、價を多く被_レ下、右の病馬をば御馬屋へ引寄飼候様にと被_二仰付_一候、此よし民共承り、御慈悲のふかきことを感じ奉り候、御隱居の後也、

一元祿年中、遊行上人水戸へ被_レ參候節、齋藤別當實盛

がよろひ甲を持參申され候、西山公の御目に懸られ候所、御手にもふれられず、實盛は源家の士にて平家に降参いたし候得ば、武功何ほど有連も、我も源家なれば、二心の侍の武具曾て信仰にあらずと仰られ候、御隱居の後也、

一或年、三井一通と申人、御見廻として江戸より西山へまゐられ候、暫く逗留被_レ致候、折節御酒宴の興に平家を語られしに、梶原が二度のかけ也、西山公聞召終りて仰けるは、源太が見えぬをあやしみて尋しに、討死やしけんといふを聞て、平藏が泪を流しける事いかにぞや、戰場に望んで死を一途に究て、思ふ敵有らばと伺ひまはる間敷折ふしに、涙をこぼす隙の有けること不思議也、武士の勇を勵ますも子孫の爲也といふ事は又心得ず、源太に尋逢て頓て引返す事、旁以て全く私の爲に進退して、君の爲に忠節を致心底露計も見えず、我等が所存は渠とは異也、子孫を養育するは何の用ぞや、天下の大事もあらば、子や孫を引くして相戦ひ、期に望んでは皆一々に討死させ、渠等が屍をまのあたり見て笑を含み、皺腹に窓をあけ同枕に臥なん、斯もせ

ば莫太成天恩萬分が一をも報するにて有べけれと仰られ候、

一西山公御咄し序に被_レ仰候は、眞田左衛門佐信仍、幸村と言は誤なり東照宮へ御敵對仕候、其砌より千手村正の大小を常に身を不_レ離指申候由、其故は村正の道具は當家へたゝり候と申説を、信仍聞て當家調伏の心にての事也、士たる者は、平常箇様の事にも忠義を含み、眞田が如く心を盡し候事、尤に覺召候、又被_レ仰候は、石田治部少輔三成はにくからざる者也、人各其主の爲にすといふ、口にて心を立事を行ふ者、敵也ともにくむべからず、君臣共に能可_二心得_一事也、且明智日向守光秀は君を弑す大賊臣也、其根は信長公の不徳におはしましけるより出たる所也、いつの代にても其君不徳ならば、其臣に明智がごとき者出來すべし、されば箇様の大賊は、後代の君に却て徳を慎ましむる者也、又由井正雪めは大逆無道の亂賊なれば、甚にくむべきの至極也、扨如_レ是の賊有故に、國家の用心備も出來して、政道に油斷なし、彼やつめを極刑にして後、扨能いましめ也と思ひたるが能也、提婆を佛の善智識との給

へる心也と仰られ候、

一西山公御家督御相續の砌り、御家老共に御對し御咄被_レ成候は、昔或國に酒屋あり、脇の酒屋より酒ことの外能候故、諸人此酒を求む、よりて家富榮え候處に、其家に飼候犬、いつとなく人喰犬になり、酒買に來る者をひたと喰付ければ、酒は能候へども、彼犬をいぶかしく思ひ、酒買に來る者いつとなく絶て、其家貧しく成候と申事あり、其方等も能心得て、人喰犬に成申さぬやうに仕候へと仰られ候、

一西山公平常人のあやまちを多くは御見のがし被_レ成、其能を御取被_レ成候、就中若者のあやまちは御免なされ候、依_レ之左様の者共後々能人に成候者多し、常々御家老共に御咄被_レ遊候は、其方などは、生立より律義まつぼう成者を極上の人と存候や、誠の極上の人とは聖賢の事也、今の代にはなきもの也、今時生立より律義者と沙汰するに愚なる者多し、又若時うつぼう仕候者の、後に能人に成候事多し、其方共を初重役申付候者共に、若き時分多少と色品は異なる事有といへ共、うつぼう不調法一

つもせざる者有べしとおもはれず候、仍て諸士の若き者の六ぼうなど仕候義は、了簡有べき事と仰られ候、子どものおとなしきといふも、褒はやしにくし、子どもは子どものやうなるがよし、縦きびしく仕置をなすとも、心より合點せざれば益なくして、却て一生病身に成こと有と被_レ仰候、されば御側にて召仕はるゝ子共等を、己が儘にして被_レ差置候、宿々にては父母仕置を致に、御屋形にては童男童女打まじりてよどみ狂ひ、ありたまゝに振廻ふ程に、屋形をば能遊所と存候、御小性頭御女中頭等見付候へば、まかり候故、渠らをばおち候へども、西山公をば曾て恐れ申さず、心安く存候付、わるさなど仕候せつは、頭に云付てと仰られ候へば、それには痛申候、又子共ともに朋輩の大方の事をば主君へは申上ざるもの也、是朋輩の法也、と常常御をしへ遊ばし候、亦御在國の節は、諸士の惣領次男三男まで毎月朔日十五日廿八日に獨禮を仰付られ候、寔に御退屈も不_レ被_レ遊大勢の獨禮御請被_レ遊候、右の思召は、其人をも御見覺え、様子をも御覽せられ、又は御國育にて公儀馴れざるもの共に

候得ば、公儀馴候爲旁の覺しめしにて被_レ仰付_二候よし、

一西山公御目付役のもの共に、御目代の仕方色々御傳授遊ばされ候、深き思し召の由、又割物奉行又大役とも申候、とて、御世帯向の事を司り申候役人に、御咄

し被_レ成候は、上の爲と計物毎を心得、下の痛候やうに仕間鋪候、又上の爲龜末には尤致すまじき事也、兩方共に能がよき也、女色を愛し申様に心得べし、必々男色を愛し候やうには仕まじく候と仰られ御笑ひ被_レ成候、

一貞享元年八月、堀田筑前守從四位下少將正後、御大老也を、稻葉石見守從五位下越智正休、若年寄也、江戸の御城にて指殺し、石見守も

其場にて討れ候、其日は十五日也ければ、西山公も例のごとく御登城有けるが、御歸の時分、如何思召候哉、綱條公及び御連枝の御方をも御同道被_レ成、直に石見守館へ御寄、内室へ御懇に悔を被_レ仰入候處に、近き親類衆の外は誰も訪ひ申さるゝ人無_レ之候よし、筑前守は權威甚しき故にや、見舞申さるゝ人門前に市をなし候よし、

一堀左兵衛佐定良後於日光山敎四品、加増千石、大樹家光公の御厚恩

の人也、依_レ之御他界の、ち達て願を申上、日光山へ參られ、身を終迄御神靈へ誠を盡し仕へ被_レ奉候、其志を西山公常々御感なされ、別て御懇に被_レ遊候處、定良卒去のよし告來り候得ば、追善法事仰付られ、御自祭文を遊ばされ、御秘藏の御馬を施物に御ひかせ、其後寺より彼馬を御請おろし、牧へ御放させなされ候、

一中山市正信正備前守信吉嫡、隠居後風軒と號す、風軒重く相煩候處、病中西山公御見廻被_レ成、御懇意の御事共也、死後又渠が宅へ御入、七五三の膳御持せ候て、御自身右の膳を御居へ、御祭り被_レ遊、扨御歸のせつ、ゑんの柱に御書付なされ候、

きのふけふ見しやとなからものことに

あらぬさまなるこゝちこそすれ

一三木別所高之初名仁兵衛と申候、之次が子也、老後大病にて十死一生のよし、西山公きこし召、別所が宅へ御入被_レ成候處に、別所は大病故床を離れ申事も不_レ叶候を御覽被_レ成、枕元へ御着座被_レ遊、御懇に仰ども有_レ之、御懷中より小き御盃を御取出し、別所は常に酒を好み候まゝ、押付酒肴を遣し申べし、其節此盃にて少

給べ、子共へも給させ、病苦を忘れ候へと仰られ、御歸り被_レ遊候、別所は故仁兵衛之次が嫡子なれば、西山公之次が家にて御誕生なされ、養育せられさせ給ひ候、其よしみを御忘れなき故也、

一 頼房公の御代よりして忠節有者、或は筋目有もの、或は重立候役儀仕候者共の、其身死して子孫なく家斷絶仕候を、西山公御歎息なされ、せめての義と思召、その家來共を被_二召出、御取立御仕ひ被_レ遊候、松平志摩守重孝、田代三郎右衛門吉音、松平八左衛門康直等が子孫なかりければ、その家來どもを被_二召出一候、餘は略_レ之、

一 西山公若き御時より、貴となく賤となく不幸にして衰候をば、却て盛なる時よりも御懇に被_レ成候、其人々の姓名、又は其御付届のおもむきども、御深情御風雅さまぐ、惑有ことなれども、思ふ旨有て是を漏し申候、且僧俗共に輕きものまで、格式猥りに不_レ被_レ遊、亦賤き者迄御懇に仰られ候、故に人皆一筋に御大切に奉_レ存候、

一 西山公三つにならせられ候時、玄やうけんと申尼に被_レ下候御文有り、假名にて、杉原の紙に三四行に

文字數三十字計也、御名は長松と被_レ遊候、なる程あざやかなる御筆勢也、此段誠しからず思ふ人も有べけれど、英傑の御事は尋常の例とは天壤の違ひ有事なれば、不思議なる事にも非ず、件の御文は、御逝去後綱條公の御文庫に納り候、又六の御年、中山備前守信吉水戸へ下り、初て御目見いたし、退出仕候節、常々御身をはなされず、御寵愛遊ばし候青き石と白き石と貳つ有りけるを、一つ御わけ、望月庄左衛門信隆を御使として、我大事の物なれども、爺に遣る迎下され候信吉是を頂戴仕り、類ひなき御秘藏の物を御わけ被_レ下候段、情深き御氣ざし有とて甚悦候、又同年京都の吳服所松葉乗九と申者參て、昔々を語候が、私事唐へ渡候時、舟の中にて龍虎の戦を具に見申候、面白き事にて御坐候、海上より龍出て山の上に虎出向ひ、近邊四五里黒雲起り闇のごとくに成り、波は山の如くに涌上り、天地震動仕り候よし申候、其時西山公被_レ仰候は夫は、面白き事也、扱汝は何方に居候て見申候や、舟には被_レ居まじく候、見所合點ゆかずと被_レ仰候へば、乗九御返答にこまり、恐ろしき殿かな

迎、坐敷を退申候由、又いつの比か、大樹家光公御試の爲か、西山公へ御向ひ、何かほしく候やと被_レ仰候へば、鳩がほしく候よし御意遊はし候得ば、安き事也迎、鳩を多く進らせられ候由、又七つの御年、雪の日、

ふる雪かおしろいならは手にためて

小かうか顔にぬりたくそある

と遊ばし候、彼小かう後改高嶋、近江七騎の内多湖判部が女、石野八兵衛義利が妻、太郎八兵衛也と申老女は、男増りなる氣質也ければ、西山公

を能守立くれ候様にと、頼房公御介添に御頼み被_レ成候、仍日夜心を盡し御守被_レ致候、西山公御壯年の後彼老女死去也、病中の御懇意は不_レ及_レ申、死後色々追善を遊ばし、悼の御和文を被_レ遊、御幼少よりさまざま深志に被_レ爲_レ成候事を述させ給ひ、殊の外、死別を御歎被_レ成候、又御幼少の時、手の筋を相する者西山公の御手を見て、弓箭筋有と申候へば、御附々の女中此よしを聞て、かなしきことに思ひ、たち失はせらるべき由申上ければ、西山公仰せけるは、武士の子に弓箭筋は願ひても有せ度物也、是程の重寶を争か裁失ふべき迎、御承引不_レ被_レ遊

候、又御幼少の御時、頼房公被_レ仰けるは、我汝と同戦場に出んに、我手を負て倒れ伏なば汝は我を介抱せんや如何と御尋有しに、公若御手を負伏給はば、某は御身の上を乗越て敵と戦申さんと存也と答給ふ、頼房公聞めし、大に御悦喜被_レ成候、

一諸士の父母妻子兄弟重く相煩ひ候節は、早々御暇被_レ下候、又急病なるをば言上に不_レ及御家老の心得にて濟し、其後御耳に立候様にと、兼々被_レ仰付候、諸士の家多くは水戸にあり、或は江戸、或は鄉村、或は他國より御抱候士は、其父母妻子兄弟等こそここに在_レ之候、御暇被_レ下候は、遠近他國の差別なく、早々相濟申候、於_ニ于今_一此掟也、

一西山公御屋形の内にて藥室を御しつらひ、輕き醫師どもの内にてその役人に被_ニ仰付_一御藥坊主と申候、并手傳之者御附なされ、丹藥散藥丸藥諸藥酒諸藥油等色色の藥どもを毎日拵させ、又朝鮮唐阿蘭陀及嶋々より出候藥を御貯被_レ爲_レ置候、是は諸士、及び御領内の僧俗、又は御家へ御出入のもの、難_レ求難_レ得藥等相願候は、被_レ下候半との御事也、依_レ之日々色色の御藥相願申者不_レ絶有_レ之候、則夫々願の御藥

被_レ下候、於_二水戸_一も右の御藥共を評定所に被_二指置、ねがひ出候者へ被_レ下候、

一舜水先生西山公へより、御諫言を被_レ申候、事に寄日本の風に不_レ合議共の有_レ之候をも、終に御拒み争_レ被_レ成、毎に御顔色御和悦にて、能御聽納被_レ成候、又御幼年より御家老共御守の者共御異見申上候事あれば、御あらがひなく御聞入被_レ成候、

一或時御徒然の節、板垣宗膽御前に候ひけるが、獨言に、御大名と申者は各別御堪忍情の強者也と繰返し申候を、西山公御聞、夫は何としたる事と被_レ仰候へば、宗膽申上候は、されば拙者づれの賤者は、何もかも間近く差置候故、何口の用其儘足り申候、御大名と申は、夫々の役人に被_二仰付_一置候故、急に御入用の物御坐候ても、早速御用足り兼、或は二時三時も御待被_レ成候、拙者共の曾て堪忍難_レ仕義に御座候と申上候得ば、西山公實左様に候と被_レ仰時、又宗膽申上候は、是より重々奉_レ感候事御座候、其段は、主君たる人の仰らるゝ義をば、臣下共不_レ依_二善惡_一何事をも、御意御尤々と申候を、能御堪忍被_レ成候と申上候へば、西山公何とも御挨拶不_レ被_レ

成、唯御喜色の御様子にて御笑ひなされ候、宗膽は儒醫也、

一西山公若き御時より御老後迄、御家士の中にて御氣に入御心安内外被_二召仕_一候者多有_レ之候、然ども、役儀は其者の器相應に被_二仰付_一候、昔分之御氣に入候者有_レ之候を、人皆重き役儀可_レ被_二仰付_一と取沙汰仕候を、西山公風と御聞付、被_レ仰候は、沙汰仕候通何某事は我が氣に入候、乍_レ去政事の方に可_レ用器にあらず、愚なる沙汰を申候連、御笑被_レ成候、されば下々にて存掛もなき士共に、御取立被_レ遊候者まゝ有_レ之、又御氣に入候者共に、差たる官祿にも不_レ預者も數多在_レ之候、仍て西山公の御心中は何ともおし計奉り難き事也と皆申あへり、

一近藤義大夫貞久、牧野與惣右衛門孝和、三吉五郎右衛門廣元、此三人の者共、西山公の御側近く數十年御奉公仕、義大夫と與惣右衛門とは、氣質黑白違申候、或時御心安御出入の人被_レ申候は、義大夫と與惣右衛門事各別の氣質にて候處に、同様に年久く召仕れ候段、奇事御事に存候由、被_レ申候得ば、西山公被_レ仰候は、その方の被_レ申候如く、兩人の氣質各別

に候得ども、我心には何の差別も不_レ存、見被_レ申候通、年來同様に心安召仕候假令心に不_レ合方ありと

も、家康公の佛高力高力左近清長、鬼作左衛門重次、どこち

なしの天野三平天野三郎兵衛康景、三郎兵衛と唱へにくきゆへ、若三平と申ならはし候、三平と云は誤り

也、_二逆、三奉行被_二仰付_一候段御尤至極に存候、然ば

勤ても其格を守、家老奉行を初近習のもの下々の

諸役人等迄、佛と鬼とどこちこちなしとを組合せ召

仕可_レ申事と、常々存候、義大夫、與惣右衛門、五郎

右衛門事、自然と彼三奉行の氣質に相似たる様に

候段、幸と存候逆、御笑被_レ成候、依_レ之考候へば、奉

行より下々の役人まで、右の御心を用られ候と、み

なみなぞんじ當り候、

一昔江戸桃町田安の御屋形を御こぼち候、此御屋形

は各別金銀を鏤たる御家也、取こぼち候節、塵芥の

内に金銀の付たる物若干交りけるを、御掃除の者

の中にてたまかなる者壹人有_レ之、かの塵芥を掃集

儀になして箔屋が方へ遣候へば、箔や方より禮物

として存の外金子を送り候付、彼者早速右之段役

人共へ訴へ候、役人ども承り、奇特の義に存、御序

を以西山公の御耳に入候得ば、被_レ仰候は、その者

事捨るべき物を不_レ捨故に得たる所の金子なれば、

無_二相違_一其者に取せ可_レ申事也、扱其者をば以來左

様なる場所へは仕ひ申間敷由被_レ仰候て、御褒も御

叱も不_レ被_レ成候に付、役人共も如何成御心底に哉

と、色々うち寄申あへり、

一西山公御一生の間、才有者多く日夜御前に交々相

詰候、且輕薄諂媚の御挨拶申上候者あれば、其節は

御喜色の様に見え候得共、後日に御疎の色顯れ、或

は當坐に御顔色不_レ宜、或はその者御前を退候跡に

て、居残り候者どもに、何となく輕薄諂媚甚御嫌の

よし御物語等遊ばし、亦直言を申上候て、事に寄忽

御色損し、或は御叱り、或は御無言に被_レ爲_レ成候て

も、頓て御機嫌直り、御言葉懸られ、或はその者

退き候跡にて、何となく直言を御好み被_レ成候よし

の御物語どもを被_レ遊候、或は直に其者を御褒候事

も有_レ之候、

一御足輕に御入被_レ成度と思召候者有_レ之に付、足輕

大將どもへ御近習のものを以件の趣御内意被_二仰

遣_一候所に、皆々能程に御請申上候、然る所に伊藤

太左衛門祐元と申者申候は、堅く左様には罷成不

レ申候、表向より急度被_二仰付_一候は、畏候、御内證より被_二仰付_一候分にては罷成不_レ申候と申候に付、彼御近習の者甚以不快に存罷歸ける、足輕大將どもの御請どもを申上、扨太左衛門が口上具に申上、拙者身輕候をあなづり候て、右の挨拶仕候哉、たとひ拙者こそ輕候共、上意と申候に件の答は仕まじき儀と存候由申上候へば、西山公得と御聞なされ、少も御立腹の色なく、却て御機嫌にて、被_レ仰候は、其方が存念不了箇の至也、太左衛門が申所尤至極せり、その職分々々の守申事にて候得ば、左様に可_レ有_レ之事也、御喜色に覺し召候、

一西山公御隠居後、或時御心安出家衆五七人御招請被_レ成、例の御詩歌有、扨御酒宴に及て、古戦場の物語等有しに、或僧被_レ申けるは、唯今自然の義も候は、坊主あたまに甲を戴き御馬の先に進み、御用に相立可_レ申候、御家中衆は各妻子御坐候付、何としても其方へ心引れ可_レ申、拙僧などは妻子無_レ之候間、何の存殘申事無_二御坐_一候、潔く戦場へ罷出討死いたし可_レ掛_二御目_一候と思ひ入たる様子にて被_レ申候へば、御座中一同に感心申候、然る處に、馬場

左五右衛門高道は末座に罷在候が、とかくの義も不_レ申候を、西山公例の御目早にて御見とがめ御氣色變り、左五右衛門を近く召れ、其方一人何の挨拶も不_レ仕候は如何成所存にや、急度可_レ申と被_レ仰候、左五右衛門申候は、唯今の物語拙者は少も尤と不_レ存候、先出家と申は、柔和忍辱を面に仕候事に候、縦内心に左様成存念御坐候とも、口外に被_レ出候段不似合事と存候、其上我にもあらぬ武の評判可_レ有もなく存候、一日成共祿を頂戴仕候ものども、誰か妻子に引れ自然の節わるびれ申者可_レ有候哉、不案内なる御申様と存候、依_レ之何の挨拶も不_レ仕候と無_レ憚申上候、西山公とかくの仰もなく、甚立腹の御様子に付、左五右衛門は御前を罷立候、座中興さめ候へ共、とかくして御氣色も直り、重て興を催し、客僧衆夜半に被_レ歸候、左五右衛門事定而暫は御目通などへ出候儀は罷成まじと存候處に、翌朝左五右衛門を召れ、何となく被_レ仰候は、其方は病身なれば常に杖を突候半と思召候、如何なる杖を突候哉と御尋也、左五右衛門宵の事に付強き御叱りに合申覺悟にて罷出候處、思ひもよらぬ

御尋哉と乍存、御山にて鼠さし木の名也、を切、杖に仕

候と申上る、其時西山公御座を御立、おんのふれ名也、の八角に削て握り太成を御持被成、爰は山中

なれば狐狼の用心に此杖を突申べし、又人たりと

も追從輕薄なる腰拔は唯一打たるべし、秘藏して

突候へ迎被下候、依之存候得ば、宵の直言の御

褒美と相見え候、其杖左五右衛門が家の重寶に仕、

于今有之候、左五右衛門は柔術の上手也、

一板垣宗膽少年の時、申樂發樂のサルの字、の狂言を習

覺候由、風と御酒宴の節申上候者有之、西山公聞

し召、宗膽忘れ候はすばと仕候様にと、達て御所

望被成、御前伺公のもの共も、是非々と進候得ど

も、宗膽堅く辭してとうく不仕、一座も興さめ

申候、暫有て西山公仰候は、宗膽能辭て狂言不仕

候、興に寄頻に所望すとも、儒醫に似合ざる事なれ

ば尤の義也と御稱美被成、却て御喜色也、

一御夜遊御酒宴等の興有時は、詩歌或は謠或は仕舞

等は有之候得共、世俗の好申遊藝を仕候侍臣は一

人も無之候、淨るり三線歌舞妓やうの遊藝に身を

委候御家士有之候よし、御耳に入候へば、其者御

叱に合申事粗有之候、仍て世俗の好み候遊藝は御

嫌と皆人申候、御家士辻半三郎が嫡子半五郎事、

父に不似遊藝上手にして、武藝に疎かりけるが、

或年西山公御狩の節、半五郎もそこ大將に被三仰

付候所、馬に乗付不申候故、家來共手を副へ介抱

仕り漸乘申候を、西山公遙に御覽なされ、誰にて候

哉と御近習の者を被遣姓名を御聞せ、その後五三

年過て半三郎事隠居被三仰付候せつ、嫡子半五郎

に家督を不被下、半五郎も同時に隠居被三仰付、

半三郎が家督を被下候、後半三郎申候、祖父半三郎は弓の上手也、

一西山公常々被三仰候は、平生物に著せざる事人間第

一の修行也、汝らも著を離る様に心懸候へと御家

臣どもに御示し被三遊候、又被三仰候は、物毎始に聞

候事は聞直しがたき事皆人情にて、詩歌の趣向も

初存寄候事を忽ち打捨、別の趣向と致しかへ候儀

はなしにくきもの也、依之理非に迷ふことまゝ、

有之、能々可心得事也、我も隨分此修行をする

也と度々被三仰候、また御隠居後に被三仰候は、政

務の事隨分心を入候へ共、治世の中不了簡なる事

どもあり、其内に常に後悔する事三つ有と被_レ仰候、又被_レ仰候は、一生の内随分賢く立廻り候と存候へども、兩度人に小股を上られ候事有と仰られ候、

一 水戸にて、先年若き侍四五人寄合武藝稽古仕候が、皆々草臥寐轉て休候内、不_レ覺みな眠り申候、然る處に彼家へ内外心易く出入候町人ふと來り、此由を見て刀共を盜取逃去り候、其後右の者共目を覺し大に驚き、土道を失候連各覺悟仕、件の趣を認へ候得ば、西山公御聞被_レ成、誰連も寐入候内には如何様の事を被_レ致候ても無_ニ是非_一こと也、不_レ苦候よし被_レ仰出_一候、其後右の町人をば尋出し御仕置被_ニ仰付_一候、

一 先年近藤三七と申御家士亂心仕、岡本七郎左衛門^{老後號_ニ善齋_一}が宅へ踏込、刀を拔無二無三に切懸候を、七郎左衛門并其子兵七^{後改七郎左衛門}父子貳人にて、何とぞ組留んと秘術を盡し候得共、父子とも數箇所手負申候故、不_レ及_ニ是非_一三七を討留申候、三七が弟五三郎是を聞付駈來り候へども、最早朋輩ども大勢集り立隔り候故、すべき様なく相扣候得ども、兎角

討果覺悟に罷在候所に、西山公此段きこし召、三七事亂心の義、七郎左衛門父子も初は組留可_レ申と仕候得共、數箇所手負候に付無_ニ是非_一討留候なれば、和睦仕可_レ申由御扱ひ被_レ遊、七郎左衛門が娘を五三郎に縁邊被_ニ仰付_一候、依_レ之雙方和睦仕候、

一 或時御前に、板垣宗膽、森尚謙^{儒醫}なり、及誰渠相詰候せつ、西山公被_レ仰候は、世上にて氣違と申は心風と云病也、夫は病人といふもの也、今爰に病無くして五倫を亂るものあらば、夫を氣違と申べしと被_レ仰候、

一 御先代より、諸手代足輕等の、諸士に對して慮外仕候者をば討捨に可_レ仕との御定法にて御座候、然る所に、先年水谷次郎大夫といふ御家士に手代仕候者の親、道にて行合候處に、彼者次郎大夫に慮外仕候由にて、次郎大夫即坐に切殺申候、此切られ候者は年八十一に罷なり、不行歩にて大小も指不_レ申漸步行申候、西山公此段御聞被_レ成、手代等の義は討捨の定法に候得共、右のもの八十に餘り候得ば、罪有といへ共刑を加へざるとし也、縱其譯を不_レ知とも、父祖父にも可_レ仕程の老人なれば、了簡可_レ有事

成に、卽坐に切り殺し候段不届に思食候、然れども御定法の上はその通也と被_レ仰候、其後彼次郎大夫自殺仕候、自殺のしぎ色々沙汰仕候へども、實説は知れ不_レ申候、

一 先年御近習仕候庄團藏義、思召有_レ辻御暇被_レ下候、如何なる思召かとみなく、不思議を立申候所、其程すぎ或時大關族之介増真に御咄し被_レ成候は、團藏に暇取せ候旨趣は、十二三年前の夏在國の節、久慈邊へ旅行せしに、大雨のあがり故水かさ増り流水矢を射るごとく成しに、試の爲遊び越ばやと思ひ付、既に支度せしを、汝等始近習のもの共達て入らざる儀と留候へども、若き時故聞も入らず、何程の事か可_レ有とおもひ打入遊び候に、水能遊ぶもの共は我おとらじと續てうち入候に、團藏事すぐれたる水練なれば、定て人先に打入遊び可_レ申者と存候處に、左はなくして遙に陸より見物して罷在候、水の下手なる者どもは、此節一同に游がざる事尤に候、夫ともに游がんと致し候者をば我是を制し止候、汝も供にてその場に居候間覺可_レ罷在候、團藏が不_レ游して陸よりの見物は不快の事也、然共そ

の内見直し申品も可_レ有哉と、年久敷其通りにて打過候へ共、させる事もなく、行跡さへ不_レ宜候故、暇取せし由被_レ仰候、去れば團藏義その砌何の御叱もなく少も御不快の御色も見せ給はず、夫より十年餘露疎き御言葉も聞えず、御心易く御仕候て、若や御見直し被_レ成品も可_レ有かと思召候、御心長き御仁心の深き、難_レ有奉_レ存候よし、族之介申候、扨團藏が弟どもを御取立被_レ成候、是は團藏が父庄六郎兵衛が舊功をおぼしめし候故也、西山公常々重き過をば即時に御叱り等もなく、却て輕き過をば即時につよく御叱り被_レ成候事ま、有_レ之候

一 牛尾太郎左衛門とて、數十年御氣に入御側さらす召遣らる、者有_レ之候が、重過御坐候て御家臣鈴木石見守へ御預被_レ成候、俄なる事故人みな驚き候所に、後に承候へば、三年前より密々に御穿鑿有ての事也、然るを其宵迄昔に不_レ替御仕ひ候間、誰も箇様の事忤可_レ有とは夢にも不_レ存候、三年の内御詮議なされ、取つめたる御事も無_レ之候は、例の御慈悲故もしや御免可_レ被_レ成筋も可_レ有かの御心なり、太郎左衛門を御預け被_レ成候以後、御戲のやうに御近

臣どもへ被_レ仰候は、我目見せ能_レ迎必ず油斷すべからず、牛尾太郎左衛門を見よと仰られ候、

一西山公御家士の中に罪有_レ之、御追放或は閉門等仰付られ候者共も、御免後は少しも舊惡を思召さず、元のごとくに御仕被_レ成候、勿論當座の不調法等にて御叱りの者の事は不_レ及_レ申也、惣じて御仕置に被_二仰付_一候者の舊惡を、後日に御近臣共の咄し出候をば御嫌被_レ成候、その罪人はその罪にて仕置に申付候へば夫までにて事終り申事也、今其者爰になしとて、舊惡を重て申義は有まじきとの仰也、

一御家士に藤井紋大夫徳昭字文熙、といふ者有、利口にして辯論人に勝れ、其上廣く諸史に通じ候故、書籍を引て是非を決斷する事速に有_レ之候、爰を以西山公御取立老中に被_レ成候、其砌は篤實謹厚に相見え候所に、内心に忍び陰置候倭奸邪曲いつとなく外に溢れ、己に不_レ能者をば甚惡み、惡様に言上して稠敷刑罪を加へ、己に追從輕薄を致す者をば甚能様に執なし、官祿を進せ申候、依_レ之士及百姓町人に至迄大に苦み怨み憤る者多く有_レ之候、漢高祖は寛仁大度といふ、又大山不_レ讓_二土壤_一、故能成_二

其大、河海不_レ擇_二細流_一、故能就_二其深_一、など云事を談するものあれば、色を損し辯舌を振つて其語をいひ破り、唯常に赦者君子之不幸小人之幸と讃嘆して、少しも赦事有べからず、諸の小人どもを一々首を刎たらんには、國治り目出たからんと申候、斯て日を重ね年を逐て、驕慢の心盛りに成惡長し候付、西山公已事を得給はず彼紋大夫を御手自御誅し被_レ成候、西山公紋大夫を御見損ひ御取立被_レ成候段、誠に誑_レ之以_二理之所_一有則雖_二君子_一可_レ欺といへる古人の詞宜哉、綱條公御憤り深く、渠が妻子は不_レ及_レ申、親類共及び入魂の輩まで、それぐに刑罰可_レ被_レ成と被_レ仰候を、西山公咎は渠一人に留る、妻子に罪なし、もし我に敵對もやせんとの心にや、鯤は舜に誅られしに、其子の禹は舜にみや仕へして二心なかりし也、されば罪有て父の誅せらるゝに、其子のいかでかその主人を恨べき、もし渠らに討るゝ程の運ならば、外にも災にあふべし、曾以て渠らを殺給ふ事有べからず、御免有べしと達て仰られ候に付、妻子どもに御たゝりなく、親類に被_レ下、勿論親類并入魂のものどもは何の御構もな

桃源遺事卷之四

かりき、西山公は却て渠が妻子どもに御憐愍を加へられし、その頃如何なるもの、作り候や、藤井記鱒物語など、號して、紋大夫が事さまに書記たる書物ども數多有り、其書共を見るに、拙き者の作と見えて、一つとして取にたらざる事也、見る人ありとも必信用不可有もの也、紋大夫が事を爰に書しるさまほしけれ共、事繁きゆへ略し申候、所詮渠がさまを知らんと思はん人は、漢の王莽が傳を見べし、紋大夫は彼王莽に相似たるもの也、されば白樂天が詩に、周公恐懼流言日、王莽謙恭下士時、若使當年身便死、至今眞僞有誰知と作れり、紋大夫は返々王莽によく相似たるもの也、西山公御手自渠を誅し給ふことを、後人批判申義も可_レ有之歟、此段は此桃源遺事を熟覽して西山公の御平常をもつて察し奉るべし、

一 西山公の御隱居後、過去帳を作らせ給ひ、御家中にて死去り候者共の御家へ由緒筋目等御坐候者、又其先祖に名有者、又或は御身にまたしき者等、又天子親王三公をはじめ、大名高家沙門、又は御幼少の時より御老後まで知らせ給へるをば、貴賤ともに其姓名法名世壽葬地まで過去帳に御附被_レ成候、

一 西山公御隱居後、役人に被_二仰付_一、死罪の者の名を委く書付させ御取寄候て、年のをはりくに稻木村久昌寺におゐて御弔はせなされ候、其わけは、中將綱條公、は國務のやむことなく、つみある者をばその罪の輕重にしたがつて、或は斬罪磔等に申付る事也、尤其罪人はその罪を以命をうしなふことなれども、その者の後生の義不便に候故、今我が隱居の役に其冥福を救ん爲也と仰られ候、又御召料の御馬斃れ候へば、久昌寺にて御弔はせなされ候、

一 西山公被_レ仰候は、世上にて貧乏圖にて罪科に行ふこと有、本來は罪人貳人ならば圖三つ、三人ならば

闇四つ出し、幸にして死闇に取あたらず、餘り闇壹つ死罪なれば皆たすけ申筈也と被_レ仰候、按にくじの出て有り、皆死をのるゝにや、

一西山公或時御物語遊ばし候は、わすれまじき事をもわする、事有者也、爰にむかし物語のやうなる事あり、我が若き時に申といふ字をわすれ、何と思ひ出しても思ひ出されず、一日あんじてやうくおもひ出したると御はなしなされ候、

一西山公御隠居後、那珂河并仙波池水増候節、御城下の侍屋鋪まで水上り候所あり、勿論村々難義におよび申所御坐候付、其所支配の役人共も色々了簡いたし候得共、前々より水ぬきのいたしかたこれなく候所に、御思案あそばされ、新堀を兩所に御ほらせ被_レ成候、よつて其後は水はやく落て、前々のやうなる水難無_レ之候、これよりさき御治世の節も、民のたすけの爲所々に水溜を仰付られ、ひでりの時の用水になされ候、又水のとほしき田御坐候へば、遠き川より水を御まはさせ候、御隠居後西山へ御うつり候て、御門前の田を受作と申事になされ、御下部のものを以この田畑を御つくらせ、年貢は

役人の方へ御納め、田主に禮物をつかはされ候へば、餘分いかほど有やと御ためし被_レ成候所に、田畑よくみのり候得ども、年貢の分を除き田主へ禮物を引候へば、餘は幾ばくもこれなく候、是によつて田畑もたざる百姓人の、田畑をうけさくと申つくり候者をば、別して不便に思召候、或時郡奉行代官どもに、右の御物語なされ候て、以來うけ作はすまじきものなり、随分せいを出しつくらせ候へども、年貢を其方ども方へおさめ、田主に禮物つかはし候得ば、餘分これなく作たをれ候と仰られ、御笑なされ候、

一那珂湊の側に岩舟山といふ有、鹿嶋郡此山上へ天妃神と申神を初て御祀りなされ候、此神は海上風波の難を救給ふ神也、これによつて漁人どもことの外信仰仕り候、并其社頭の側に大なる行燈を御こしらへさせ、夜々燈明をかゝげさせ、海上より湊の目印になされ候、又鐘を仰付られ、十二時を御つかせ候、是も廻船并漁村の爲に被_レ成候、天祀神をば多賀郡磯原と申海邊にも御まつらせ被_レ成、且燈明をもかゝげさせられ候、

一城下の西の方に木町といふ町有、年々出火焼亡絶ざりけるを、金町と御改被_レ成候、其故は火は木より生ずる物也、水は金より生ずる物なれば、金町と唱候は、火災あるまじきかと、御頓作にて御改め候、それより以來一度も火難無_レ之候、先年奥州岩城のをなの濱の海上俄に替り高波天を洗ひ、數多の漁舟一艘も残らず打破られ候故、爰に於て男の限りは波にまづみ、たま／＼家に有男とては極老廢人の者のみにて、誠に女ばかりの漁村となれり、此時彼の木町を金町と御改め、火難これなきよしを聞及び、此濱の名のとなへ惡きゆへにや、今女のための濱となれり、あはれ西山公へ訴へ奉り、此濱の名をも改たきと、彼濱のものどもねがひ候よし、

一下總國葛飾郡小金の原、常陸への道なり、渺々として旅人道に迷ふ事あり、況や雪のあした雨の夕はさら也、西山公此事を不便におぼしめし、道の並に松を數千本御植ゑさせ候、又同國法華宗の談林香取郡飯高井中村への道に、印旛郡酒井原及び根本名原として、香取郡、東佐野村までつゞき、行程四五里ほどの廣野あり、一とせ西山公此所を御通り御覽被_レ成、是又

旅人の道にまどはんことを思しめし、道の並松多御植させなされ候、又香取郡高萩の原行程三里、へも、右の覺しめしにて、松おほく御うゑさせなされ候、又一とせ筑波山へ御のぼり候て、山上水なき所あり、參詣の者共難義仕候よしを御聞、我がゑらぬ分にて誰ぞに此所へ井をはらせ申べしと被_レ仰候が、其後いつとなく何者か彼所に井をほり申候、又御領内の民どもに古井有_レ之候には、めぐりに垣をいたし、人の落いらざるやうに仕候様にと、役人を以仰付られ候、

一西山公被_レ仰候は、世上にて味の爲とて鶏犬を殺し喰ふ事是大なる不仁也、鶏犬は人にたより、鶏は時をゑらしめ、犬は能あるじの家を守る、人それあはれまざらんや、又無病延命の術は鳥獸にならふにゑくはなかるべし、鳥獸は飢て食し、飽てやむ、慾發して淫し、慾おさまつてやむ、人に味よければ、腹の滿たる上にも食し、目にうるはしきを見れば、慾おさまつても姪す、是によつて脾胃を破り腎を損ふ、色に著し味に著すべからずとおほせられ候、此ことは委く救民妙藥集に御書せなされ候、

一江戸にて御登城の時分、御三家御列坐の節、西山公阿部豊後守御老中^也へ御對し御物語被^レ遊候は、上にて生類を御憐みあそばさるゝ事は、人を御あはれみの餘りをもつて、生類までに御およぼしの事と存候、^也かしながら過有時は人すら御仕置に仰付られ候、いかにいはんや生類の咎あるをば御殺し被^レ成まじくとや、尤とが^ハき者をば生類たりともみだりに殺し申まじき事に候、これに依て、手前の屋敷へいたづら犬參り惡事をいたし候をば、申付殺させしと御咄あそばされ候よし、

一西山公御隱居後、御山莊にて御放ち飼になされ候御祕藏の鶴あり、^{丹頂、雌雄、然るに西山の御近邊の百姓天神林村の者也、名は長作と申候、}あやまつて彼鶴を一つ殺候、此科にその者籠舍仰付られ候、尤御祕藏といひ、右のもの屹と死刑に仰付られ候半と人皆存候處に、西山公那珂湊寅賓閣^{寅賓閣は亭の名也}へ御入被^レ遊候節、かの鶴殺しを御手自御せいばい有べきよし、御目付五百城茂大夫嘉忠に仰付られ候に付、茂大夫承て是を下知仕り、彼罪人を御庭へ引出し、土壇を抱せ生けさのしかけに仕候、西山公御出被^レ遊、御刀をぬかせ

られ、彼鶴殺しがそばへ御立寄、にくきやつ哉、鶴を殺したるがよきか、是がよきかと仰候て、四五度御刀を渠が肩に御あてなされ、つと御刀を振上られ候間、あはや最期と人みな守り罷在候處に、ふと御見かへり、中村新八願言に仰候は、斯まではしけれど、此者を殺して候^レ迎、鶴も生返り申まじ、禽獸故に人を殺し候事道にあらず候まゝ、たすけ可^レ申やと仰ける、新八を始相詰候御近習のもの一同に感じ奉り、口々に難^レ有覺し召の由申上候得ば、さらばゆるす^レ迎、死刑を御なため、御追放被^レ仰付候、扱御存なき分にて役人に御さし圖ありて、御内證より、當分彼者何方へも落著候はん迄のたくはへとして、飯米路錢等くたされ候、其子細はかやうなる者は食物無^レ之候は、早速又いかやうなる惡事を可^レ仕もえれざるものなれば、當分飢申さず候様にとの御事也、扱御座敷へ御着座なされ候せつ、相詰候者共、重々御慈悲の至り言語に絶し有がたき義に奉^レ存候よし申上候得ば、西山公仰られ候は、鶴をころし候ものゝ義は、天下にも我家にも大法の刑あり、殊に西山にて祕藏して飼候鶴を敢なく

殺候段、重々の大罪甚だにくき奴、刻てもあきたらず候へ共、是は我が身ばかりにかゝりし事にて、我が腹立をさへ忍び候へば助け候ても法度の妨げにも成申まじく、人獨殺候事は大切なること也、況や禽獸のゆへに人を殺す事をやと存る念忽ち心中にうかみ候やいなや、頻りに不便になり助候と仰られ候、是等の趣は、不_レ知甚深のおぼしめし有ての御事にや、

一 西山公平常役人に被_二仰付_一候は、極罪にて死刑に極り申候ものたり共、その刑し候時にいたつて、又又必上聞に達し、其後死刑申付べき由仰られ候御心は、其上にも若御たすけ可_レ被_レ成すじもあるべきかとの御事也、依て必ず死刑にきはまりたる者も、或は日を重ね、或は月をこし、或は年を越て、斬罪磔等に仰付られ候、急に死刑仰付られ候事はこれなく候、今以かくの如し、

一 西山公御一生の内、御在國の中は、御歩行或は御馬にて御領内御旅行なされ候、御駕籠に被_レ召候事はまれ也、御衣服龜相成ものをめせられ、御膳にも成ほど輕き物を聞し召候、御旅行のせつ雨雪風霜を

も何ともおぼし召れず、御うす着にて御歩行あそばされ候、先年下總國小金村の御鷹場にて大雪のせつ、御狩被_レ成候とて、御旅館を御出の時分、御家士どもに箇様のときは酒を禁じ申もの也、と仰られ候處に、堪忍致し兼酒たべ候者共有_レ之候が、その者共醒ぎはに多は雪風に會申候、此節西山公御酒一滴も聞しめさず候、又御國元にては荒海へ度度御舟を出され、鯉釣候などをも御覽被_レ成候、且又御心見の爲海をも御遊ぎ被_レ成候、

一 若き御時、所々の案内方角御存知有べきため、忍びに御あるき被_レ成候、諸事御通曉成うち、別して地理には奇妙に御發明なりし、尤諸國の地理委細に御存被_レ遊候、常に被_レ仰候は、針一つ立て北辰をさへ考なば、異國へ渡るとも難きことはなきと仰られ候、御旅行の節はじめて御出候深山幽谷の中などにて、御案内のものに御對し、この谷をつたひ行ばその所へ出べし、あの嶺の越えばかの地に到るべし、そなたがそこに當るならば、こなたはそこに當るべし、その山は此所よりは見えまじ、その地は是よりはすこしこなたなるべし、汝はそな

たと申せども、こなたのかたにて有べしなど仰られ候に、御案内のもの舌を巻、はじめて御出遊され候て、御案内の我々にだも心えぬ所どもを、掌のうへに見る様に計り知らせ給ふこと、人間のわざにあらずとて、がを折申候、其所々事多きゆへ是を略す、

一 西山公御國元にて年始の御規式、諸士布衣素襖を着し候儀、延寶六年戊午年より御はじめ被_レ成候、小性頭以上を布衣とし、寄合指引より中山備前守組付まで素襖とし、夫より以下を上下と御定め被_レ成候、惣じて加様の義も廢たるを興じ絶たるを御繼候よし、

一 水戸にて東照宮御宮は御城の西南のすみにありの御祭禮の節は、甲

冑を帶し騎馬にて供奉の事、寛文十二年壬子のとしよりはじめて西山公被_二仰付_一候、物頭三騎廿張、鐵炮廿挺、鎗二十筋、平士廿騎充、年々御祭のせつ甲冑を帶し供奉致し候、

一 西山公山野に狩し河海に漁遊ばされ候は、畢竟治平に武を御忘不被_レ成、其上田畑を荒し都て害をなす禽獸を、時を以て御狩なされ候〔御本意なれば、

あながちに物かすに御心なかりけり、御用なれば獵師漁人に仰付らるゝがよきとぞ被_レ仰ける、すべてをだゞしくなれゝ敷鳥などはとるに忍び給はずと被_レ仰ける、まして御園生に馴給ふ魚鳥狩漁し給ふ事はなかりき、常におのが栖かとおり立心よく馴遊ぶ魚鳥驚すことさへ有まじきこと也、ましてなぐさみの爲に漁獵すべき事にあらずとの給ひし、誠に君子は庖厨を遠ざくにもおのづからかなひ給ふべき御本性也けらし、されば御園生に魚鳥の多き事、他の山林池淵に異なりける、されば〔南漢云ハ〕中之文字原本所無、而按文意似_二脫落_一、今暫取_二一本之文_一補_レ之、讀者勿_レ怪文章似_二竹接木_一、御川狩に魚を御取被_レ成候に一通り二通にて、底を盡しては網も御引せ不被_レ遊候、且延寶の始つた篠山といふ所に狩を御催しなされ候、此節は常の御鹿狩とは格別の儀にて、行列たゞしく仰付られ候、よつて御家中の諸士列をなし行をおつて、騎馬歩卒狩装束思ひゝに立奇羅美やが也、西山公御城の大手の前に御出、床几に御腰をかけ御覽被_レ成、諸士の跡より御馬にて御出なされ候、又ある年涸沼郡なり、と云入江に御船數百艘御うかめ、御自もめ

され、石崎御といふ山より鹿を追入させ、舟とも漕違々々御狩なされ候、

一鳥北山久慈郡はきはめて峻岨なる高山也、或時西山公此山の巔に御上り御遠望遊され候、始御登りなされ候道は、麓よりは遙に遠く有之候、西山公御歸りには真直に下らばやと思召候へ共、誰にもかくと仰もなく、そこらを御立廻り候様にもてなさせ給ひて、獸すら不_レ通所をふと走り下り給ふ、是を見奉りて御供のもの共、我もく_レと續て下る、其間五六町も有べし、踏とむべき所もなければ、或は飛び或は走て、君臣ともにつゝがなく忽麓に下り着ぬ、よのつねの心にては、おもひもよらざる事なるに、西山公に引れ奉りて恐るゝ色もなく下りぬる事、誠に士卒の剛劣は大將一人の心にありといふ事、此時にえられぬ、むかし源九郎義經の鵜越をば落し給ふと云事は、物語に聞傳へぬ、され共ひへ鳥越をば鹿は行通ひぬるとかや、是は獸もかよはざる所なるに、かく下らせ給ふことのいかめしさ、聞も及ばずと御供のもの共申あへり、あけ暮山を家とする獵人樵夫のたぐひまで、此段を承り舌をふるひ

驚きおそれ候、其節何某、名失念、御供に候ひしが、あゆみ失て貳町ばかりころび落けるが、躑躅の木に介けられて幸にしてとまりぬ、西山公いかにと御言葉懸られければ、是もおもしろく候と答ける、顛沛にも守りを失はざることに奇特なりと、後々迄御稱美被_レ遊候、男鉢を水戸にては、鳥北と云は、男鉢の面に有、相並て谷を隔て男鉢よりもよほどびきく、さまで峻岨ならぬ山也、所民この鳥北を古來より女鉢と云、然ば兩山共に同く鳥北の名にて、男鉢女鉢といへり、鳥北又長福に作る、一夢想の瀧は棚倉の領内に有り、奥州の地也、瀧は四十八段に落、末は久慈川に入る、源は深くして、古來魔所のよし申つたへ、人の至ること稀也、ある時西山公瀧御覽有るべしとて御出なされ候、瀧の邊へ川をわたりて行ば道近し、然れども水底皆一枚石にて筈滑に生て渡る者多分はすべり倒れ、殊さら所々に石の破目有て、深きこと底をえらず、倒者もしは其はざまへ踏込則足を折身を損せずといふことなし、去によつて皆廻り道より行て、川を渉る者はまれなり、然るに西山公此川をわたらんとし給ひしに、所の者えかじかのよしを申上、久敷所に住馴て案内存候者さへ恐れて渉り不_レ得候、ましてや案内も御存知なく御わたり遊されんこと勿體なき義也、是非に廻り

道有べきよし申上候へ共、西山公用ひ給はず、眞先に打入給へば、御供の者ども續て涉りけるに、一人も倒れたる者なく渡りすましぬ、さて瀧を御覽なされ、例の御詩歌など興有事どもにて御歸りなされ候、

一西山公へ常々御出入の出家社人等に、御酒宴の興などに度々仰せられ候は、家中の士共は自然の節はみな中將綱條公、が供して用に立べし、我は隠居の身なれば、左様のせつも此山中に物ゑづかに住し、酒飲てやかましきことをば餘所に聞べし、されども風と見物したき心出來なば、小荷駄の宰領などを望て出ることも有べし、我が出るといふを聞給は、各日比のよしみには、よも見捨はしたまはじ、さあらん時は坊主あたまを我に給ひてよと仰れけるに、何もそれは願ひ奉る所也、斯御懇に罷成奉りて、誰か一人もをくれ奉るべき、御馬の前にて花々敷打死して御目に懸り奉らんと、口々に被^レ申候、つたへ聞に士卒は將のつかふによりて剛臆定らず、軍の立様にて逃たくてもにげられぬ謀も有となれば、西山公の英偉の御器量にて指揮せら

れなば、いか様に御使ひ候はんも計がたしと、御近臣ども申あへり、

一西山公若き御時、力有者は鹿の角を引さき候よし聞召及れ、何となく鹿の角を御用の由にて御取寄候得ば、五また御座候角を差上候、御試に密に御引被^レ成候處、さけは仕らず只ばきく^〱と枝ともをれ申候、生熊源介長弼いまだ幼少にて、渠獨りそばに罷在見奉り候、

一頼房公御治世の時、御兄弟の御方御次の間に御並居被^レ遊候節、刑部大輔賴元殿長爐に御坐候鐵火箸を御取、繩に御ない被^レ成候を、西山公御覽被^レ成、御異見被^レ仰候は、大名はか様なる力業等致候はおとなしからず、ちから自慢と相見え候、重ては無用に可^レ被^レ致と御申、右の鐵火箸を御取、つと御こぎなされ候えば、本のごとく眞直に直り候を河合甚阿彌^{老後號見彌}と申御同朋、御傍の物陰より密に見奉り候、又御狩の節、御とめなされ候所の猪の鼻づらを、御手づさみに御折被^レ成候、亦御逝去の前のとし、御船にて南領より御歸の時分、たかせ舟のへさきに打申候大鐲を、御指一つ御かけ、何の手もな

く御手づさみに御ぬき、あめをねぢ候様に、二つ三つねぢり被_レ成候、御家士清水與三郎三世御前に伺公いたし、是を見奉り候、され共御力をほめ或は沙汰仕候事甚御嫌ひ故、えらぬふりにて皆々罷在候、又御老後潮來へ御出のせつ、佐々藤藏_{介三郎宗淳が嫡子}なり御座船より御供船へ移り候とて、過て海へ落候所を、西山公右の御手をのべ、藤藏が襟をちうにつかんで、かろく_と御引上げなされ候、

一 西山公自然の御用の爲に大船を御作らせ候、是は大灘洪濤をも安々と渡海仕候様にとの御心也、且又那珂の湊に於て毎冬御水主の者に仰つけられ、鯨を御つかせなされ候、此段御物入のよし、役人ども申上候得ば、水主の者共海上を鍛練仕候爲と覺召候よし、又年々武器ども多く仰付られ、御拵させ候、又御城内よりはじめて、御城近邊、及び御城外へ、貳里が間に、頼房公の御代より竹木多く御仕立候處に西山公猶更多く御仕立被_レ成候、萬一急御用のせつ遠方の竹木は御用に立かね可_レ申と覺し召候故也、とりわけ竹多く御仕立被_レ成候、_{◎異本且翠が那珂湊の御殿、其外要害に可_レ然所に、御心なつけられる事共多かりし、}が岡、およ

一 大樹家綱公御不例もつての外の時分、御機嫌伺として、御三家の御方御城に御詰遊され候所に、御老中を以急に御養君の御相談有_レ之候處に、西山公の御決斷にて早速相濟、綱吉公御養君にならせられ候よし、

一家綱公御他界遊され、綱吉公御家督御相續有て後、御嫡德松君を御代續に御定め可_レ被_レ成よし、御三家の御方へ御内意ありける所に、西山公仰られ候は、前甲府殿_{室相綱重公}、存生にて御座候へば、嚴有院殿の家綱公、御跡をば御相續有べき所に、逝去ゆへ當大樹公綱吉公、御家督御相續なされ候、左候得ば、今の甲府殿_{綱吉公、綱重公の御子}、を御養君に被_レ成、御世續に御定め、德松殿をば又甲府殿_{綱吉公、綱重公}の御養君になされ候てゑかるべく候、直に德松殿を御世續に被_レ成候義は、御尤とは不_レ被_レ申候と仰候へども、その旨御用なされず、德松殿を直に御世繼に御定め遊ばし候由、誠に綱吉公御家督の砌は、西山公へ殊の外御懇に御座候ひしが、右の御口上を綱吉公御不快に思召候と相見え、その事となく其ころよりして西山公を御うとみそめ被_レ成候よし、さればにや、何か

の事、御一生のうち、くひちがひたる事のみにて御過し被_レ成候、西山公御末期に至り綱吉公俄に御懇にならせられ候、此段如何成御事の候ひて今かやうに被_レ遊候やと人みな申あへり、

一延寶九年辛酉年七月、紀州中將綱教公へ大樹綱吉公の御女鶴姫君の御方御縁組あり、その砌御城にて御三家の御方御對座の時分、牧野備後守成貞を以御三家の御方へ御相談仰遣されけるは、姫君の御方御幼少に候間、綱教君を御城の二丸へ御入御婚禮有べきかの由なり、西山公仰られ候は、姫君の御方御幼少と申候へども、歷々御附属のもの御座候間、紀州居屋鋪へ御入候ても御氣遣御座有まじく候、御城同前の義と存候、それともに御氣遣に思召され候は、姫君御成人なされ候まで御婚禮御延引あそばされべく候、綱教事御城へ入候て、姫君御成人後御城を罷出、居屋敷へ歸候半節のやうす、いなものにて可_レ有_レ之候と仰られ候付、右の御相談相止候よし、又貞享年中、御城にて御三家の御方御對座の節、牧野備後守罷出被_レ申けるは、大樹公にも今以若君御出生不_レ被_レ遊候付、御養君の御相談

を被_レ遊候て可_レ然と奉_レ存候由被_レ申候處に、西山公他の了簡をまたせられず被_レ仰候は、其段は上意に候哉と御問候へば、備後守上意にては無_三御座_一候、私の了簡のよし被_レ申候得ば、西山公被_レ仰候は、御養子の事おそからざる事に存候、未大樹公御年も若く御座候間、若君御出生なされまじき事とも不_レ存候、萬一若君御出生なく候て、御養子あそばさるべきと思めし候は、甲府宰相_{綱豐公}、在_レ之候、もし理を非に御まげ甲府宰相いよと思召候は、尾州中將_{綱誠君}、在_レ之候、これをも理を非に御まげ尾州中將をいよと思めし候は、紀州中將_{綱教君}、在_レ之候、是をも理を非に御まげ紀州中將をいよと思召候は、不器量には候得共、世倅少將_{綱條君}、これあり候、旁以養子の事遅からざる義と存候と仰られ候へば、備後守口をとちて、後はとかふ申されず候よし、

一西山公常々御物語遊され候は、陣中にては酒を停止すべき事也、武士たる者の酒氣をかり勇をはげまし候事、本意にはあらざる義也、よつて自然のことも候は、かたく酒を停止すべきと仰られ候、

一西山公常々御はなし遊ばされ候は、馬は頭下_{ツチ}にて

ともものあしく候が用前にはよし、尤野あしが〔馬の

歩み馴れたる足並なれば平生も野足が〕◎以ニ本補、よ

しとて、拍子の馬は御好み不_レ被_レ成候、勿論筋など

のへ候事は第一不仁の至り、その上用まへの時用

にも立ぬ義なりと仰られ候、

一 御領分の獵師ども、前方は、支配と申事も無_ニ御座

候處に、西山公郷士にその支配を被_ニ仰付、一組何

十人づゝと御定め被_レ成候、

一 西山公那珂湊へ御越し御逗留のせつ、海上夥しく

鳴動いたし、繩波御殿の御門のきはまでうち揚申

候、此時の御殿は町並にて、銚子口一等于日、銚子とは
此方にて河水の海へ

落入際まで十町程有_レ之候、此節民屋人馬損申候、

御船大將村嶋與十郎正良、又高浪參候よし御注進

申上候得ば、御意なされ候は、是はまことのつなみ

にあらず、最早大波は來らざる物也と仰られ候

て、四海波閑かにて國も治ると言小うたひをゆう

ゆうと御謠ひ、少しも御座を御退不_レ被_レ成候、又或

時、大津と云濱より御船にて湊へ御越し候時分、海

上俄にあれ、惡風吹出し、大波御船をくつがへすべ

き様子也ければ、御供の者ども安堵不_レ仕、御水主

ども難儀仕候處に、此時も西山公は船ばたへ、御あ

しを御もたせ、御手拍子にて御平生のごとく御謠

をあそばされ、ゆふなる御ありさまにて御座なさ

れ候、又或とし、江戸小石川御屋形の御臺所に出火

有_レ之候時分、早速申上候へば、何と申と仰られ候

付、又初の通り申上候へば、御鼻にて御あいしらひ

御見向も遊ばされず、尤御座も御立不_レ被_レ成候、亦

押付火しめり候と申上候へば、又はじめのごとく

御鼻にて御あいしらひ、よきともあしきとも、とか

ふ不_レ被_レ仰候、勿論御近所急火御座候ひても、少も

御さわぎの御氣色なく候、むかし西山公御兼約に

て、細川越中守綱利朝臣の亭へ御入候筈にて、御供

の者共も白洲へ相詰候所に、御近邊に出火ありて

諸人周章仕候、御屋鋪もあやうく候間、定て御出は

止み申べきと、皆々存候處に、御かまひなく御出遊

され候、御出のあとにて出火も幸としてまめり候、

又或年御近邊出火あり、御屋敷は風下にて、けぶり

御長屋へ吹おほひ候、御手前の火消役の者ども屋

上へ取上り、こゝをせんど、ふせぎ申候、西山公

は例の物にさわがせ給はぬ御事にて、常の御座に、

いかにも閑に御座なされ候が、御屋鋪あやうき旨を御聞なされ、人を以て火消役の者ども方へ仰遣され候は、餘りつよく防ぎ候とて怪我仕候な、大方にふせぎ候てこらへにくき様子に成候は、早々其場を退き申べきよし、御下知あそばされ候、かゝる所へ、尾州紀州の御兩家より、彼火防ぎ候得とて、物頭役兩組宛被_レ遣候、西山公此段きこしめされ、彼の御兩家の火消物頭に仰出されるは、長屋の義は手勢どもふせぎ候間、御頼みなされまじく候、あなたに有て、塀垣に火うつり申ことも有べく候、火うつり候へば屋形のためあしく候まゝ、太儀に候へども引のけられ給はり候へとの仰也、御兩家の火消御下知にまかせ、右の塀垣打破り引のけ申候、とかく仕候内、火もしめり申候、件の御兩家の物頭へ仰付られ候塀垣は、何のかゝりもなき所にて、飛火も仕べき所にて御座なく候に、かく仰付られ候事は、御兩家の火消共一角はたらき可_レ申と存候に、むなしく御かへし候は、きよくなき事とおぼし召候ての御事かと、みなく申候、またあるとし出火ありて、御屋鋪いかにもたまるまじき躰

に御坐候處に、綱方君靖伯、御出馬なされ、士ども御下知によりて屋上へ取のぼり、身命ををします防ぎ候故、なんなくその火をふせぎ止申候、綱方君御自慢に覺しめし、件のおもむきを西山公へ仰上られ候へば、火事のために火防物頭并その手の足輕黑鍬中間等都合千人餘も兼て定め置候、そのもの共が手に叶難く候は、その儘さし置申べきこと也、家のやけ候は幾度もつくりなをされ候、士に疵つき候は何ともなをり申さず候、以來は其心得あるべしと仰られ候、このおぼしめしは、御父頼房公御治世の時、明暦三年丁酉正月、江戸大火にて、御屋形も焼失いたし候、その節御大事の御書物御坐候を、匂坂彌九郎後改彌右衛門いまた若年なりけるが煙の中へ駈入、からくして彼御書物取出し候、此段御家老甚感じ、彌九郎事比類なき劔に御坐候、御賞しあそばされゑかるべきよし申上候へば、頼房公仰られ候は、我も何分にも厚く恩賞申付度心底に候へども、火事には幾度びあふべきものはかられざる物也、此度彌九郎を賞し候は、又重てかやうのことあらば、我もくゝと煙の中火の中ともいは

す走り入、家財を出し候とて、あたらし共を家財の爲に損じ申べきやと思慮いたし候間、その方ども能程に褒申べし、そのことゝなく程過て遊され様有べしと仰られ候て、其節は何の御恩賞も不_レ被_レ下候、西山公もこの事を常々御心に懸られ候故かと、ふるきもの共申あへり、又曰、丁酉の大火のせつ、御父頼房公と御一所に駒込の御屋敷へ御退き遊され候處に、本郷の町へ御かゝり、米屋の前を御通り候とて、御供の者どもにあの米相調へ人々携へ申べきよし下知なされ候、依て我もわれもと立より白米をとゝのへ申べきよし申候へば、米屋の何某申候は、火既に甚近く罷成候間、此米は焼すて申より外は無_レ之候、如何様にも御めし候へと申に付、みなくこれを相調へ携候、扱駒込へ御入にて、當座早速御供のもの共の飢をば彼白米にて凌ぎ申候、さて頼房公と御一所に駒込に御座遊され候砌、紅葉山^野_{一説上}の方にて夜半に夥しく鐵炮の音仕候、頼房公御怪み候處に、西山公は御あやしみの御氣色もなく、寛々と頼房公の御前へ御出なされ、さしたることにては御座有まじきと仰られ候る

て、いかにも長閑なる御様子に御わたり候、頼房公此よしを御覽じ、心得ぬ有さま哉とおぼしめし候御氣色也しが、はたして西山公の御推量の通、させる事にてはこれなく、紅葉山の林の中へ盜賊どものかくれ候を、かり出し申とて、かく鐵炮を放ち候その響なりと翌日相知れ候、依て西山公の御靜り候段、却て頼房公もよろしく思召なをされ候、然共綱條公御在國被_レ成候せつは、季姫君の御方を御心元なくおぼしめし、駒込の御別莊に御座候へども、左様の時分は早速御見舞なされ、且御自身御働き遊され候事もこれあり候、

一貞享のころ、江戸神田の明神祭禮の日^{九月十日}、御三家の御方例のごとく御登城被_レ成候所に、御老中被_レ申候は、桂昌院様御臺様ひら川の見つけより祭御覽に付、大手の前を渡り候間、御下りの時分は御脇道なされ候様にと申され候得ば、西山公それは上意にて候やと仰られ候、右の人士意にては無_レ之候と申され候、西山公被_レ仰候は、左候は兼て諸大名の登城は御止めなざるべきことに御座候と仰られて、扱尾州綱誠君^{此時中將}、御向ひ、つゝに三家の

者ども祭に付まはり道致し候事これなく候と御申候へば、綱誠君も成ほど左様に候と御答被_レ成候、此段を承り、公儀の役人衆、御三家御下りの前に下知して、祭の渡物どもを片付させ、道を明置申候、さて御退出のせつ例のごとく大手の前に御出、渡り物の片付て片道をあげ候方へは御懸りなく、下馬の脇を竹を以てきびしく結切申候場所へ、わざと御かゝりなされ候ゆへ、その場を固め申候番人共、周章候て御道をあげあはせ兼候所に、御先供の者どもやらひを引破り申候、其所をつと御通り被_レ成、すぐに淺草の御川屋鋪へ御入遊ばされ候、その御道すら大名衆御旗本衆の固め候埒はひらき候間、おそきをば押破らせ御通りなされ、町人の町やくにて仕候やらいをば御斷なされ、ゆるゆると御待候て、とくと開候て御通り遊され候、御三家の御威光の衰申さず候儀、畢竟上の御爲と思召候御心なり、

一貞享元年三月晦日、西山公の御水主の者と、松平下總守良清の水主のものと、意趣を結び、總州の水主のもの共、江戸淺草川におゐて船十五六艘集め、備

を立て、此方の水主の者を相待候所に、此方の御水主のものは、かやうに待ぶせ可_レ仕とは思ひもよらず、折ふし纔四五人、小舟一艘に乗て彼所へ漕懸候處に、右の舟共前後左右より取巻、壹人もあまさず討留べしと仕候、此方の御水主どものがれざる所と存切り、身命を惜まず働き申候、推出庄八郎、第一働手相仕候然れども先は大勢と申、鎗長刀は申に及ばず、飛道具迄用意して責懸候ゆへ、此方は小勢と申、左様なる武器も所持仕らず、旁以始終叶ひ難き趣也、此だん早速小石川の御屋敷へ注進申者ありて、御加勢つかはされ候得と申候、御家臣ども存候は、西山公へ申上候は、一定めて早速御加勢の御下知これ有べきと存候、此日は御客大勢御招請なされ、御もてなし最中なりしに、岡崎平兵衛朝徳罷出、御用の儀御座候とて西山公を御勝手へ呼入れ奉り、扨件の趣申上候得ば、とかくの御挨拶もなく、又御座敷へ御出遊され、何げなき御様子にて、御機嫌よく御客衆と御咄し被_レ成候間、又申上べきやうもなく候故、御勝手御取もちに參られ候塀田宮内御旗本衆也へ頼み申候ひて、又西山公へいかゞ可_レ仕哉とかゝひ候得ば、

狂人に同ずるはともに狂人といふものなり、御城間近き所にて騒動の義、上への恐れ有、手前の水主ども不便には候得共、加勢は曾て遣し申べからず、其まゝに指置うちはたさせ申べしと仰られ候間、加勢の支度仕候侍ども、一人も不參候、扱彼所にては互に火花をちらし打あひ申候處へ、方々よりあつかひ舟ども乗入、雙方引分け申候、此段又御屋敷へ注進仕候間、其旨申上候へば、西山公仰られ候は、總州の水主ども兼々此方の水主どもに意趣有て、右のくはだて仕候處に、思ふ儘に鬱憤を遂ざる事残念に存じ、此方の水主ども方へおし懸り候か、又は夜討などのたくみ仕候もはかりがたく候、物頭數輩申付、足輕ども大勢密に川手の屋敷へ遣し、用心申付べく候、若總州より水主ども押よせ候て、飛道具持參申候とも、此方の者共曾て劔戟を用ひ申まじく候、棒を以打臥候様に下知仕べき旨、物頭共に申合候様にと、御家臣共に仰られ候、扱總州の水主ども大勢と申ながら、此方の御水主共必死にはたらき候故、手をおふせ候者ども多く有之候、此方の御水主も先よりはなち候矢三筋射立られ候

を、かなぐりぬぎ、證據のためその矢を小石川の御屋敷へ持參仕り候、其外のこらず手負申候、其後公儀にて右雙方の様子一々御聞なされ候、此時總州は在國なりけるが閉門を仰付られ、江戸家老切腹、并水主の者の内にて徒黨仕候者三人、其場所に礫に仰付られ、此方の御水主は別條なく事濟申候得ども、西山公御暇下され候に付、御領知の中に引籠罷在候、右のもの共に御内證より田畑を下し置れ候、一久慈の濱に風景よき山あり、亭を造らせらるべきと覺し召、山の名を御尋候へば、逃山と申由所民申上候、西山公其名を忘れ給ひて、御建不_レ被_レ成候、亦淡竹^{異に紫竹と云、淡竹と}と申竹の子を食し候得ば_{紫竹とは二種なり}、先負をいたし候と申はなしを御聞なされ、夫よりして淡竹の箏を聞しめされず、惣じて世上にて人の忌候事は御忌不_レ被_レ成候へども、少にても武道に害ある事は、かやうにつたなき事迄も、甚だ御忌被_レ成候、又都て人の忌事を御破り不_レ被_レ成、世なみに被_レ成候ゆへ、御氣質を存せざるものは、御物いまひなさるゝ様に存候者も有_レ之候へども、實はものいまひなされず、歳旦の御詩に、藏_二舟于壑_一

藏舟子鑿^ニなど、御作り被^レ遊、亦御謠ひ初にせ^ニは埋棺事也^ニなど、遊され候事もまゝ、在^レ之候、きせつたいなどを遊され候事もまゝ、在^レ之候、

一 西村玄春といふ扁鵲流の御針醫に、西山公仰られ候は、獅子の針の事年來聞及び候間、粗針醫どもに相尋候へども、玄かと存候者これなし、其方は存候やと御尋候得ば、成ほど覚え申候由、左候は具に談候へと御所望なされ候、玄春則滯なく詳に申述、扱獅子の義は針の上の至極秘事にて、一子たりとも其器量これなきものには、曾て以相傳仕らざる儀に候へども、御尋の上は秘し申べき様も御坐なく候故、のこる所なく申上候よし申候、西山公斜ならず御賞美遊ばされ、其節御前に朝比奈七郎右衛門、山田利見罷在候、西山公かの兩人に被^レ仰候は、玄春義、我が尋候故に止事を得ず大切の秘傳を申演候、右の段武の用にもなきものなるにと存べきかにて候得ども、玄春かたへの禮義に候間、乍^ニ無心^ニ他言すまじきとの神文を仕り、玄春に相渡し候へと仰られ候、兩人畏り奉り、早速御次の間へ罷立、堅く他言申まじき由、一札の神文相認、玄春に相渡し候、

一 西山公御世の時、尾州を御招請ありて、御居間にて終日御饗應被^レ成候、その翌日尾州の御城附菅野谷次郎兵衛、此方の御城附岡嶋藤左衛門幸忠^{老後號^ニ慮舟^ニ}に參會せしめ、昨日尾州殿其元より被^レ歸候と否や被^ニ申聞^ニ候事御座候間、皆々早速相詰候様にと申出され候付、是は唯事には有まじきと各あやしみ早々相詰候得ば、被^ニ申聞^ニ候は、今日水戸殿へ行候所に、居間にて語らんと申さるゝにつき、居間へ通り候、定て唐めきたる物好どもにて美麗をつくされ候成べし、夫を見せんとての事にやと推量せしに、案の外至極麗相なる普請にて、其上せばく、剩へ天井ならびに壁をば反古にてはられ候、我方より遣はし候文なども見え申候、扱是はあまり佗たる事かなと申候得ば、これにて事足り候、天井及壁はごみを落すまじきため、手自なぐさみに張候と被^レ申候、さて心安きまゝ、めしつかひの女子どもに、常のまゝにて給仕いたし候様にと申付候とて、女子どもを給仕に出され候、その女子どもを見るに、容貌のすぐれたるは一人もなく、其上皆麗相なる物を着し候、我が方にては次々の女子にても、

あのごとくなるは曾て是なし、大かた其方どもの召つかひも、あれほどにてはあらじとおもふほど也、かくのごとく飽まで内の奢を禁じ、色を好まれざる段、誠に感じ入たる事也、是等の趣其方共の心得の爲申聞せ候、尤此段いつにてもをそからぬことなれども、物忘れをする故、わすれざる内にし、早速申聞するよし被_レ申聞候、此段承り、恐ながら殊の外感じ奉候よし、次郎兵衛ものがたり仕候、實に御世の御時も、御内證の御様子は千石計取被_レ申候御旗本衆なんどの内證はども可_レ在_レ之歟、又夫よりもうちにはにも御坐有べきやと思ふほどにて有_レ之候、夏冬の御衣服も兎相なるを被_レ爲_レ召、垢付候へば御あらはせ、破れ候へば御繕はせ、玄きしのあたり候を召さられ候、御夜の物及び朝夕の御繕の上の輕さ、是に准じ思ひやり奉るべし、

一 西山公御隠居被_レ成候ひて、翌日御登城の節より、御供甚だ御減少なされ、無紋の御挾箱御持せ、御鍵も一筋になされ、御同朋も召つれられず候故、江戸中にて諸人誰とも見わけ不_レ申候ひし、

一 西山公御隠居の砌、御寶物并金銀等、及び萬の器

物、何にても西山へ御携へなされず候、但御書物は御預り候よし、綱條公へ被_レ仰候て、數多の御書物どもを西山へ御持せなされ候、西山公常は御茶湯も御好みあそばされ候が、數奇といふ物は器物の欲出来るもの也とて、御隠居後はふつと御止被_レ成候、又御能御仕舞も御止なされ候、西山にては、御世の時よりも萬の事猶さら輕き御事也、朝夕の御膳も一汁二菜三菜の淡薄なる兎食をきこし召、御小袖も絹紬ばかり御めし、御定紋も御もちひ不_レ被_レ成、丸の内に葵といふ文字御附なされ候、御夜服は昔より薄き絹の御夜着一つ、薄絹の御ふとん一つのみにて、外には何も御用ひ不_レ被_レ成候、御頭巾も、いつの比よりのか古きをあらため給はず召させられ候、茶縮緬の御頭巾也、久敷御近習の者申候は、此御頭巾四十年餘に成候と申候、御逝去のきはまで被_レ爲_レ召候、御隠居後、水戸へ御出又は御旅宿の節は、御自身御床の上におろし被_レ遊、御近臣には御かまはせなされず候、大方の事御手自被_レ遊候、かやうに被_レ成候事も、人に心を御付候半とての御事かと皆々申候、扨常は御領内の出家山伏社人を賓客となされ、御家士を友となされ、四時の風景を御樂、

詩歌を御もて遊び、御つれづれの折には、書を御相手に被_レ成候、西山にて歌舞等一度も無_レ之候、或は御領内を御めぐり、民を御恵みなされん事を思し召、或は寺社へ御入、本縁をを御正し、附會を御改、あるひは民に農業を御教へ候、

一 西山公御隠居後、御山莊にては正月御門松も建られず、五節供等その外何にても御祝儀これなし、唯正月十一日に御具足の御祝ひ計は、毎年嚴重に遊ばされ候、

一 西山公御隠居後、規式たち候節は、御道服御指貫をめされ、御烏帽子或は御燕尾を御冠り被_レ成候、又御旅行の時分は、御脇差計御指なされ候、但貳尺五寸

一 西山公御隠居後、西山へ御引込候ひては、つゝに江戸へ御登り被_レ成度との御事は、假初の御物語にもあそばされず候、或人申候は、少御參府被_レ成可_レ然など、申上候得ば、西山公仰られ候は、隠居の身として參府の伺ひ不相應の義也、自然めさせられ候はい、參府もすべしと被_レ仰候、然所に一年風と御めしありて、御隠居後一度江戸へ御出なされ候、

一 西山公御隠居後、水戸の内又は御領内御旅行の節、

御向より參候ものをとめ、或は除させ申事御嫌ひ被_レ成候、世にある者は、尊卑によらず用をかへあるくもの也、我は世に用なき身にて、往來の人を留させ除させ候事は、道にあらずとの御意也、尤御旅行の節、寄せ馬并掃除等仕候事御停止被_レ成候、

一 西山公御隠居後、なか川の上より御船にて御下り被_レ成候處に、川の内にて障物有_レ之、御船の通りかね申べきことを所のもの存候て、川へ飛込彼ものを引のけ候故、御船滞なく通り申候、西山公是を御覽じ、御近臣に被_レ仰付、彼働申候百姓どもに御褒美として鳥目を被_レ下候、御前に罷在候者ども、渠らに御褒美被_レ下候程の事に、ても無_レ御座候とつぶやき候を、西山公御聞付、我世にて候は、國中の者の事なれば、其通りにいたすべきことに候へども、今隠居の身と成候得ば、奉公を受けてその儘をくべきかと被_レ仰候、又御鐵炮などにて御うち候鳥獸あたりて沼川などへ落候を取て指上候者にも、必御褒美として鳥目を被_レ下候、是も右の御心なり、

一 西山公御隠居後、七十の御年賀の御祝儀御受なされまじく由、先達て被_レ仰出候、よつて綱條公より

の御祝物をはじめとして、何方よりの御祝物をも御受なされず、唯御孫菊千代君、後改徳川左衛門督吉字綱條公御子そたでなき故西山公菊千代君を御生れおちより御うけの御上げなとり、御養育遊され候、此時菊千代君御とし十三、の御上げなされ候御賀の御詩ばかり御とめ置なされ候、

同賦松契還年詩一首

正四位下右近衛權少將源朝臣吉孚

亭々清又秀 松樹玉庭中

壽々千年緑 仰高君子風

右の御詩を、御家士の中にて詩作仕候者共に、尊韻を和し奉るべきよし、西山公被_レ仰出候につき、御和韻仕候、

一綱條公四十の御賀の節、西山公より御便り被_レ成候御詩、

賀賢息九歲初度

西山

始仕富春秋官途挹大猷功名長不朽人世久難留勿謂顏回短奚爲彭祖壽我聞仁者壽何願亦何求

一西山公御隱居後、おほやけより黄金綺幣等御拜領の度毎に、御連枝の御方或は侍臣に御わから被_レ下、御貯不_レ被_レ成候、

一西山公常々御咄し被_レ成候は、世上にて我が事を學

問すきにて武藝は不_レ好と申げに候、武藝は武家の常なれば勧めずとても諸士みなたしなむべきこと也、學問をば多くは人の好まざる事に候へば、人の人たる道を少も知せ度おもふがゆへに、學文の義世話にする也と仰られ候、

一西山公、儒臣共に、五經の内を一人に一經充被_二仰付候、意味深長の所を精密に相究め候様にとの思召也、

一西山公、先年儒臣共に束髮被_二仰付候、其譯は、君臣ともに儒を學び候得ば、儒者と申者也、ミヤコゑかるを世上にて儒者とさへ申候へば、或は、惣髮或は剃髮致し候、此段尤におぼしめされず候に付、束髮仰付られ候、役義はそれ_二に御定め、學問の道相兼務_一之候、且公儀より御壁書に、乘輿御免の事儒者醫者陰陽師と御書出し候處に、儒者とは君臣共に儒を學候ものを申候得ば、重き事に候、御除然るべきと仰上られ候に付、醫陰の兩道と御壁書御直し、儒者は御除きなされ候、

一江戸忍岡聖堂の釋菜西山公御拜見なされ、祭の儀節ども色々思食有_レ之、御家士中村新八顧言を以

被_二仰進_一、數件御改候、その節迄は御祭の執役のもの、内、布衣に少き刀を帶し、堂内迄相勤候、此段大に不敬に思し召れ候よし仰られ候、新八申上候は、此義は内々心付、少刀無用可_レ仕由弘文院も制し申候へども、若き弟子ども武士の子にて無刀にては出勤仕まじきなど、申候付、制し難く候よし申上候得ば、西山公仰られ候は、武道の吟味は水戸が請合候、其上は誰も難じ申間敷候、無刀にても武士の志は別義無_レ之ものに候、堂上の帶劔は不敬の至り、禮義に叶_レ不_レ申候、禮義に背き候へば武士にては無_レ之と存候よし、何もへ此段申聞候様にと仰候付、新八則弘文院并門弟子どもに右之趣申談し候得ば、何も得心仕り、夫より以後堂上少刀帶不_レ申候、最前は樂人も堂上にて相つとめ候を、是亦よろしからず、回廊然るべきよし、仰遣され候ひて、相改り申候、

一諸士の中實子なき者、他姓より養子仕候事有之候、本姓に非ずして他姓にて繼候事筋目なき事也、此だん御停止なされ候、

一世上にて、婚姻に付土産として女の方より、金銀持參

申事有、此段士たる者におゐて仕間敷事也とて、西山公御停止被_レ成候、又古來より婚姻の者あれば、正月二日に水あびせとて、若きものども此事を催し、異形に出立、聲をとらへ、或は辻小路へ引出し、顔に墨を塗、水をあびせ申候、果は大方口論を仕出し、放埒なること共有_レ之候、夫婦姻は人の大禮なり、然るにかやうの非禮有まじき也、西山公仰られ候て、御家中をはじめ御領内をも御停止なされ候、是によつて、隣國、他郷、後には日本國まで、水あみせ相止候、

一西山公、御家臣中山風軒が七十の賀を賜ひ、その以後人見ト幽が七十の賀を賜ひ、御一門及び諸家へも縁につきて壽頌或は御詩歌并色々珍らしき式法の御音物御贈り候、是よりして諸人心付、今程は關東にて下々迄壽賀盛に行れ候、

一月待日待はかろき者の仕まじき事也、殊更世俗の月待日待と云は、替女座頭を呼び遊興を催し、或は博奕等を仕り候よし、非禮至極に覺し召候に付、月待日待無用と致すべし、玄ゐて念じ度存候は、念じ様外にこれあるべき事と仰出され候、

一西山公或とき御歩行の序に、何方善兵衛が祖母の家にあたよらせ給ひし、折節七月十三日なりし、彼老女盆棚をかざり置候が、位牌ども計をならべて、其前にいろ／＼の供物を備へ、本尊は何も見えざりければ、かやうにはせぬもの也／＼の供物を如來に獻じ奉り、其功德によつてそのこゝろがす所の靈魂昇脱することなり、板や有と御尋候に、玄かるべき板も御座なく候よし申上候へば、門にうち候大般若の札を御取寄、御小刀にて御削り給ひて、

ホウク
拘・休蘭羅佛

サツダモフンダリキヤソ
薩達磨芬陀利素多覽

天地萬靈有緣無緣

釋迦牟尼佛

かくのごとく御認め、盆棚へ懸候へとて下し置れ、玉まつりのいはれ御物語なされ聞せられし、は彼札

女死後善兵衛事久昌寺へ納め申候、

一世上にて熟瓜をむくに、肘をいからし瓜に指を付ずして皮をむく事、瓜をむくの禮とす、西山公かのむきやうは手をきる事有べし、あぶなきこととなり、増て賓客などの前にて手を切たらば不興の事也

ときらはせ給ひて、その瓜をむく者に、指を皮に添てむかせられける、惣じて世に無益のことを禮の様にいたし來候をば、御改め御用ひ不_レ被_レ成候ひし、

一西山公御逝去のとし、御病中に、馬場左五衛門高道、その外御前に相詰候者どもに仰られ候は、むかし世に汁講といふ事あり、その様子は、客を請候とては其客とも銘々に飯をめんつうといふ物などに入携へ來り、亭主は唯汁一色のみこしらへ、能時分汁を鍋のまゝ座敷へもち出、うち寄賞味もてはやして、此外には何のもてなしと申義一つもなければども、輿に入咄し候由、されば儉約の義は、もとより諸士および百姓町人まで堅く相守るべき旨、度々油斷なく申渡事にて候得ども、治世ゆへにやまゝ奢り、客受候せつは分限に過て、甚だ花麗をいたし候由相聞え候、それに付、大森典膳信一、西山にて御家老なり、汁講を再興仕り、其方共も順々に興行仕候は、自然と城下および領内にも廣まり、花麗なる振舞相止み申べきかと覺し召候由仰られ候、依_レ之御近臣ども仰のごとく汁講を初め申筈にいひ合候處、西山公

御病氣重らせ給ひ、間もなく御逝去なされ候故、汁講一度も興行いたさず、殘念のよし、左五右衛門度申出し候、

一頼房公御代に、役人どもより申上げる御用の書付共、長々だ一つ有けるを、御逝去後御覽被_レ成けるが、その中に頼房公御手自上ようじ遊ばし、上に少將が事、西山公の御事、刑部が事、播磨が事、御部屋住の内の事也、などと言御書付有けるを、西山公いぶかしきことに思召けれど、みな御若き時のあしざまなる御有様をば、つゝまず申上べしと頼房公より常に被_二仰付_一いさゝかの事にても御耳に入れるをえらせ給へば、みなさることならん、今其書付を御覽なされ、そのあしざまなる事を申上げる役人それがしと知り給はい、何ぞにつけて惡からんと思召て、其長々だに封をつけ給ひ、御代のうち三十年が間、終に御覽不_レ被_レ成、御隱居のときはじめて封をひらき、御覽被_レ成、ひとつゝかやうのことともれたりや、是こそひそかごとなれば、人ある事はゆめく有まじと思ひしが、さりととはとわらはせ給ひて、そのあらましも御物語有ける、誠に三十年の久しき間、

御身の事を書たる書付を見給はざること、人の成がたき御事也と御前にさぶらふ者ども感じ奉りける、

一蹴鞠は武士には似合ぬもの也、足にかけて頭上面部にいたるものなれば、遊藝といへども、士たる者のもて遊ぶべきことにあらずとぞ被_レ仰ける、

一草履をば、つねに踏そろへるやうに心がくべし、平生せぬ事はいそがしき時いでぬもの也、何ぞの時、人あはてたると見べしとぞ仰ける、

一六時の夜廻りに拍子木をうつ事、世上にて或は七五三など無數に打たるを、西山公御頓作にて、つゝでに時をうちたらば人の重寶になり候はんと仰られ、命じ給ふより、いつとなく世上にひろまりける、

一常州とうがさは、他領にて、御領のとなり村也、その村の名ぬしと、其となり村の名主と、境の論より遺恨をむすび、のちは互にその隣の人民出入もならず、たまゝしたしきもの有て忍びても行かよへば、うちたゝきあらそひ、けんくはに及びける事年月をかさね、往還終に絶たり、西山公かねて

此よしを聞し召、そのほとりへ至り給ふ時、わざとその近きさとへやどらせ給ひて、件の者ども召出給ふ、如何なる事にやとおぼつかながらも、さしも名高き公の、御前へ出ぬる事、物しらぬ賤の男なれども、本意なることに思ひ奉るを、いと懇に仰ごと有ければ、いよく有がたきためしになん恐入かしこまりにたへず、さる折に、右のあらまし被_レ仰出ければ、互に證據引て其理をあらそひ論じ申上けるを、聞せ給ひて、さもこそあらめ、おぼろげの事にはあらじと、もとより理と非とわかれたる事は、却てか程にはならぬもの也、人の人たる道は左にはあらず、兩人のゆへにて一さとのうれへとなる事、なげかはしからずやと、こまやかにさとさしめ給ふを、例のかたくなる田舎人なれば、爰を專に我理を立ていさかひの、しりけるを、いさゝかもいからせ給ふ氣色なく、御心ながになだらかにものし給ふて、つゐにわりほどかせ給ひければ、さしもの堅いぢなる田夫野人なれど、其理に屈し、よしなきことをあらそひたりと、互にはぢくゐて、公のめぐみにあらずば、ながく災ありなんものと、

はじめてさとりける、扱御盃を下し給ひ、それを其相手にさし候へと御差圖有ければ、其相手申上候は、御差圖のうへを恐れ多き御事には御座候へども、私こそあの者にさし申筈にて御座候、中々あの者の盃を取上可_レ申事は存も寄候はずと申ければ、其時西山公被_レ仰けるは、我が爲に和睦可_レ致と申うへは、左にてはあらず、それをたつればと、のはぬ也、いづれより成とも我が差圖に任せよかし、其上むかふへは我さしたり、其方の盃をば我取上のむべし、さればさすといたくと何れかおもきと被_レ仰ければ、忽ち平伏して申上けるは、うへもなき東照宮の御孫君と承り奉りけるに、御盃をいただき申さへ冥加恐しく奉_レ存也、いかにして差上可_レ申と申けるを、公又被_レ仰けるは、わが申事を能聞入て、數年月往還絶たる兩里の者ども和睦いたす事、何の歡びか是に過ぐべき、されば其禮むくひの爲にいたいくべきと仰られけれど、とかく恐入ていなみ侍りけるを、其おそれはさる事なれ共、年月のいこんを我がはからひを用ひて和睦しけるうへは、不_レ苦と被_レ仰ければ、おのゝ涙をながし、公の

御恩澤を感じ奉り、御前にて和睦し、それより後は互にむかしよりむつまじくなりけるを、ならびの村よりやうく遠き里々まで聞傳へて、あぶぎとうとみ奉るとぞ、

桃源遺事卷之五

一西山公御旅行之節、天下野村久慈郡なり、俗にデカノ、と云所へ御出、會澤縫殿助師乗といふ百姓の家に御旅宿被遊候、家主上座の床に、狩野常甫が筆の三幅對のかけ物を掛、下の床に心越禪師の自畫自讃のかけ物を懸たり、西山公是を御覽じ畫工の繪を上懸、僧の繪を下に掛候事、逆成事也、繪の善惡にかはらず、人の位を以次第すべき事也、懸直し候得と仰られ、且又貳幅對三幅對の懸やう、寸尺、細かに御教へ、御さし圖にて懸直し申候、

一越後の光長朝臣の御家中騷動につき、家臣荻田主馬小栗美作を江戸の御城へめし、御前におゐて對決仰付られ候節、綱豊卿甲府、御三家の御方も其席に御詰被遊候處に、其節の御座配は、御三家の下へ綱豊卿御着座の筈の處に、西山公達て仰られ、御座を綱豊卿へ御ゆづり、西山公は次の座に御着被成候、此時綱豊卿は三位、西山公は從三位にて御座被成によつて也、

一和歌の披講といふ事、堂上方にのみ被成候ひて、

武家の絶てもてあそぶざる事也、西山公御家士の中にて御えらみ、披講の稽古仰付られ、扨御母堂久昌院の御年忌の節、法華經一部及び開結二經の品品を題とし、御自らは申に不_レ及、綱條公季姫君の御方御連技をはじめ奉り、出家衆御家臣どもに迄、和歌一首宛御勸め候、西山公の御歌、

詠觀普賢菩薩行法經

露霜とむすひしつみもきえぬへし

わしの御山をてらす日かけに

一 扨稻木村久昌寺におゐて、初て披講御執行なされ候、此時西山公御衣冠にて御着座被_レ成、衆僧威儀をととのへ、御家臣ども或は大紋布衣素袍を着し、講師、讀師、發聲、樂人、其外役人數多、その式嚴重也、
(追加)其後磐船山惠明院におゐても行はれける、其式別にしるす、事長ければこれを略す、

一 寛文五年、西山公御領内の浮祠三千八十八御除なされ、又縁起のたしか成社をば御修復遊し、神職の者をも官位社料等夫々に被_二仰付_一候、又翌年、新地の寺院九百九十七御のぞき、三百四十四寺の僧の破戒なるをば御諭し被_レ成候て百姓に被_レ成候、古跡の廢寺等みな修葺興復被_レ成候、且能僧を御まねきな

され候、稻木村久昌寺へは、京都本國寺の僧正日隆住職いたされ、中河西村、那阿郡寶幢院へは、僧正以傳來られ、水戸吉田英木郡藥王院へは、僧正良運來られ、岩舟鹿嶋郡願入寺へは、惠明院瑛兼本願寺孫來られ、常盤郷茨城郡水戸城下天德寺へは、大明國の僧心越禪師住職せらる、あるひは談林を御開き、或は法式法衣を御改被_レ成候故、諸宗悉く是に歸し、碩學英才の出家、遠國他郷よりも被_レ參候、西山公常々御たわむれに、我が宗旨は釋迦宗也と仰られ候、

一本朝にて古き碑に、下野國那須郡之國造の碑那須郡湯津上村、ほど古きはなし、然るに今道路に倒れ、人のゑることなし、西山公此事を嘆じさせ給ひて、御家士佐々介三郎宗淳をつかはされ、地を御買せ堂を御造らせ碑を御安置なされ、田畑御附、御領内の馬頭村大法院といふ山伏を別當に被_レ遊候、

一 江戸御茶の水といふ處に、大樹公聖堂を御建被_レ遊候付、諸大名より書物奉納なされ候處に、皆唐國の書を御納候由、西山公には、日本紀、續日本紀、日本後紀、文德實錄、三代實錄、古事記、舊事紀、右七部の書を謬を正し、俗字等まで御吟味被_レ成、惣じて書

寫仰付られ、御奉納被_レ成候、

一水戸城西南に當て神先寺といふ寺あり、仙波の池つゞき也、彼寺の境内に妙法崎といひ傳ふる所あり、その所到大松有、此松枯候後大風にて吹倒申候に付、土人等その根を掘候得ば、からかねの筒を掘り出し申候、内の方に、

如法經筒長承二年法主聖

と三行に左文字に鑄付く、仍_レ之寺主宥賀西山公へ

御目に懸られ候得ば、御覽被_レ成、是を以これを思ふに、此寺往古の古跡分明也、昔は中河西寶幢院の末寺にては有_レ之まじき歟と御了簡のうへにて、色色御詮義被_レ遊候らへば、御了簡の通り、中古より寶幢院末寺に成り候事共、御詮義の上にて相知れ候、扨何かと御世話に遊ばされ、仁和寺御門主へ御願被_レ成、院家寺に被_レ遊、寺をも御建立仰付られ候、被_レ經筒の出候所へは堂を立て、右の松を以御手自立像の釋迦の尊像を御ささみ、鉢内へは、宥賀及び僧に仰付られ法華經一部書寫せさせ、并俗人どもの望候ものには、法花の首題一遍づ、御書せ、是を御籠め御安置遊ばされ候、右の經筒には、箱を被_レ

仰付、經筒の記を遊ばし、宮に御書付、神先寺へ御納めなされ候、妙法崎と申傳候名も茲に至て分明也、

一那珂郡市尾村は、水戸城の東北の角にあり、其間壹里計也、彼村に古き塚有、永祿三庚申年築之といふ寛文乙巳、地主古澤平之允圭重正件圭の塚をひらき候へば、其中より眞鍮の經筒を掘出し申候、内には何も無_レ之候、經筒の外がはに、

十羅刹女 常州之住光國

奉納大乘妙典一國三部聖

三十番神 番年今月今日

と斯のごとく三行に彫付候、右の經筒を西山公へ指上候得ば、久昌寺へ被_レ遣置候、御隱居後彼經筒の出候地へ御出、被_レ仰候は、法華經に云、經卷所住之處皆應_レ起_レ七寶塔云々、しかれば此地堂塔立べき地なり、且又茲に經筒納め候事、思ふに昔叢林の地成べし、幸御母御菩提の御爲、旁寺を建可_レ然とて、寺御建立遊ばされ候、件の經筒をば此寺へ御納可_レ被_レ成とて、莊嚴仰付られ、寺をば一乗山無二亦寺と號け給ふべきかと思召候よし被_レ仰候處に、御

病氣重らせ御逝去被_レ成候に付、綱條公右の御志をつがせられ、經筒の莊嚴未_レ終を何かと御世話にて成就致し、西山公の兼て遊ばし被_レ置候御裏書に、寺號山號を御加へ、是を厨子にゑるさしめ、勿論寺號山號は西山公の仰られ候を御用遊ばし候、京都本國寺權僧都日輝實父大炊御門大納言、養父菊亭右府、を開基と被_レ成、久昌寺の末寺に遊ばし、彼寺へ御扶持米毎年御寄進被_レ遊候、

一 西山公、茨城郡吉田の臺町藥王院にも、堂塔御取立、且談林に被_レ成候半の思しめしにて、所化寮をも御造らせ被_レ遊候、

一 西山公、稻木の久昌寺へ、十七箇條の律義御書出し、法式御改正被_レ遊候、

一 欲學法華者不論受布施不受布施一致勝劣富士門徒并他宗學徒盡可許掛錫若恣我意不改衣體返及法論之徒速可擯出寺門

一 修正會中興忌涅槃會佛生會孟蘭盆會祖師忌開山忌本願忌大衆可具威儀于佛殿嚴重修法事

一 毎月十三日十四日齋時大衆可搭七條衣展鉢之式如法行之

一 正月自元旦至三日除夜安居之始終毎月朔望大衆可具威儀拜住持

一 冬夏安居之暇可尋宿師碩德學他家宗義

一 僧房寮舍不可安佛像但掛曼陀羅

一 葬斂之儀常光菴主專掌之住持不可至葬處如其薦拔則當於佛殿行之

一 不論有緣無緣及斃於道路葬本山者住持當資其冥福

一 墓上石誌前刻法華首題及法名後刻姓名年月若墳墓碑石縱雖爲儒法可隨其檀越之求然禁祭之以酒肉

一 鬼簿錄法名其下記姓名鄉里年月及事實不論貴賤可薦冥福

一 近世薦亡者修法事出其牌位於佛殿香華茶菓備極供養而佛前供具不及其百分之一是大説也夫薦亡之法以諸供物奉獻如來勤修法事則依其功德亡者昇脫然不供如來而惟供亡者則豈理也哉向後薦亡法事當如法行之至亡者牌位則於其平生所安之處供養而可也

一 近世富人死則不論其門地下賤妄費財物高大其石

誌莊飾其牌位而無士庶人之別向後石誌牌位共可堅守所定之制量

一以香火寺名爲創建檀主之號乃本朝中古之風而名卿鉅公之稱也然近世僧徒不論士庶謾授院號是大訛也向後堅禁之且夫院號之下安殿字乃叢林禪徒所傳謬而甚無義理向後縱雖有官爵者有故稱院號亦不得安殿字

一近世書經文於布衫以爲死人服名曰經衫是大訛也夫經典當如法書寫尊重恭敬然書于布衫以纏臭骸遂至焚燒而爲灰燼非法之罪莫斯爲甚向後堅禁之一近世名曰橫被者古之覆肩也佛在世阿難一人有因緣聽覆肩今僧徒著之者大違佛制又五條小袈裟者給子之類乎給子者唐朝南方禪僧之所著也釋氏要覽引根本百一羯磨強爲會通雖曰實勝空身而非佛制而禪僧妄作則何爲用之又袈裟上色帶名修多羅者是亦後人謬制而古師所訶也又法服之領名曰僧綱者亦後人妄作也又名花帽子而褻頭者本是國俗尼女之所蒙也僧徒用之者其始起於禁裡御修法密徒之所蒙也是禦寒之服耳今當宗僧徒襲其謬競以蒙之遂冒祖師像甚至以綿帽代之非法之甚不足掛

齒牙向後著如上諸服者不許入寺門泥於共住之僧徒乎慎勿著非法之服

一念珠本是課佛號經咒而計其數之具也近世僧徒拜佛時揉以爲聲甚無謂矣夫揉以爲聲乃修外法者所作也當宗僧徒豈爲外法者流之態乎向後堅禁之一近世鬼子母神之像冒頭上以俗衣褻慢之甚殆似弄傀儡向後堅禁之當如法供養

右之律儀をば、甲州身延久遠寺、武州池上本門寺、京都本國寺等へ被_レ遣候、又本國寺の額妙法花院と云四字也を西山公御自筆に被_レ遊候、

一祈禱之儀、我が寺をさし置、他の寺へ頼申間敷候、息災滅罪ともに、手前々々の寺々にして可_レ仕よし、御領内の寺々及び諸民にも被_二仰渡_一候、

一日連上人の弟子日持と申僧、宗旨弘めんが爲に、朝鮮國へ渡られ候よし申傳へ候、西山公其志を甚御感有て、宗對馬守義直へ御頼み、日持の事を朝鮮へ被_二申越_一御聞届給はり候様にと御頼み被_レ成候、

一西山公御隱居後、一度江戸へ御登り候節、空間へ御掛り御上り被_レ成候迎、新治郡稻田の社を御拜見有て、此やしろは神名牒にものりて尊き社なるを、か

やうに零落いたし候段、痛ましき御事也とて、神主善太夫をめし、何かと御尋問、御懇意なる仰事有て、神道學可_レ申よしにて、則善太夫を御家士津田兵藏信貞が弟子に被_レ成、其後日月の幢を御寄進、祝詞を納させ給ひ、天下太平將軍家御壽命を御祈り被_レ遊候、

一西山公御家士吉弘左介元常、菅丞相の詩集を見るに、菊に題し給ふ御詩十に四五、梅松を賦し給ふ御詩より多し、天台の明公にたねをわかち給ふ、都にても於_二宰府_一も甚愛し樂しむとし給ふ、元常同僚と奇_ナ九會を始め、菅公菊をとるといふに題して、同僚詩を以て會す、其意、九日侍宴同賦、菊散一叢金、應_レ制不_二是秋江鍊_一白沙、黃金化出菊叢花、微臣把得_二籬中滿_一、豈若_二一經遺在_レ家_一といふ菅公の御詩にもとづき候、西山公彼詩卷を御覽じ、良御嘆美なされ、元常がやさしくも雅事をなすこと、被_レ仰、よつて御自ら菅公菊を愛し給ふ所の御下繪天神の尊像にはなを被_レ遊、狩野養朴に仰付られ彩色なつて、讃を勸修寺御門主へ御願ひ被_レ成候付、沙花家の韻の詩を讀に被_レ遊候て、表具結構に仰付られ、西山公も御追和をあそば

され候、

菊潭吉元常頃日求得菅右相畫像九月廿九日展軸設宴各餐次沙花家韻以賦菅公把菊云

源 梅里

公如猿鶴雜蟲沙希有人中優鈍花晚節德高菅氏菊流芳藏在于常家

侍臣にも追和を仰付られ、詩なりて翠岡水戸城西南間三十町計、此岡松多を以、翠岡之御名付くと云、其亦君子林と號給ひ、東の坂を羊腸坂と御名付候、と言御離亭にて、右の繪像を御掛新薦を敷、香燭桑酒を御備へ御祭り被_レ成、其後元常に右の畫像を被_レ下候、京都より有栖川幸仁親王大懷紙に、

いつれより先咲いつるいろを見ん

うゑてはなまつ庭のむら菊

御詠歌を遊ばしつかはされ、且江戸にても、大友孫三郎親里、石尾阿波守氏信、桃原野沂、順菴木貞幹、木下元高、井上玄徳等の鴻儒韻士輩、西山公の御追和を被_レ奉_レ次候、

一東坡詞曲の内に、不_二與_一梨花_二同_一夢の句有_レ之、夢の字平聲に押申候例とて、近來の學者時々平聲にも用ひ來り候、然處に西山公詩餘を御好み候に付、

とくと前後御考、韻律御吟味被_レ成候所に、此詞の格、平聲に交へて去聲を兩字押申候式にて、夢の字を平聲にて用ひたるにては無_レ之候、去聲に押したるに相極り候、

一今の世の道服といふもの拵やうあやまりし、是に仍て西山公御改め御仕立させられ、鷹司前關白房輔公有栖川幸仁親王へ御上げ候得ば、御貳方御同様に御稱美被_レ遊候、

一御先代より御城中に太鼓を懸、十二時を打候處、舜水先生へ御相談有りて、鐘に御改被_レ成、舜水是に銘を被_レ致候、

參議從三位行右近衛權中將兼左衛門督水戸侯源朝臣光國德亮

從四位行左近衛權少將水戸世子源朝臣綱方

寛文柒年歲次丁未拾二月穀旦建

夫鐘者所呂警君臣之逸豫而鼓勵上下於明作者也

洪鐘聲動遠邇咸聞

天子諸侯興求衣問治之思孤卿百僚振佩玉鳴騶之度賢妃不必塵會歸之憎群工不必聽絳幘之籌爲益弘己是故天子之都呂及侯封宮省膠庠省會莫不建

焉下而郡邑莫不建焉況

水戸大邦哉今

水戸侯參議公好學博古知此爲邦家重器君民之急需於是鎔精金巨鑄之懸於城中呂警有位呂警庶士庶民呂警庶人之在官者而先呂自驚其志亦大矣恃其制度之長短大小弁咻聲音之宏亮悠揚清咽手揣輕重未必盡協然而鐘虞不移夫故物勤民盜戒於夙興他日之爲效豈淺鮮哉 銘曰

天開地闢 斯鐘則鳴 萬籟猶寂 鐃鐃震驚

霽衣求治 嘖々鸞衡 君曰恣爾 如何民生

臣曰吁哉 王曰民情 文王追蠡 適駿有聲

邇求厥寧 適觀厥成 垂謨萬穰 永勒鴻名

明遺民 餘姚 朱之瑜 頓首拜撰

備前守從五位下行丹治真人信治

水戸侯國執政諸臣從五位下行土佐守源朝臣義賢

從五位下行石見守源朝臣重政

季姬君一とせ重く御煩ひ、御抱瘡の後也、夏に至りて暑さ

を御忍び兼候よし西山公聞召、早速唐箕を一つ二つ御取寄、御次の間にて廻させ給ひ候へば、涼風御座敷へ吹入、あだかも秋のごとくにて、忽ち暑を御

忘れ被_レ成候、然共世上にて主人たるものゝわづかの病氣、亦是をのが安樂の爲に、下の勞し痛ことを不_レ顧、榮耀にてほしむ儘に事を致候は、甚御嫌ひなされ候、

一妹君細川越中守綱利朝臣へ御婚禮の御祝儀の節、御酒宴に及び、みな萬歳を唱へ候最中に、御役者嶋屋吉兵衛^{御家の大夫也}、御酒に給酔、班女曲舞をうたひ出しぬ、西山公其先にひとり寢のといふ事有を覺し召付られ、箇様の文句は、婚姻のみぎり人の忌申に付、御指一つ御出し、その御指を伏て見せ給ひ、又二つを御出し、伏て見せさせ給ひ候へば、そのとき吉兵衛急度心付、その所に至りて、二人寢のと文句を直しうたひ申候、

一或とき、江戸小石川の御屋形のひあはひへ、見馴ぬ鳥落ける所に、翼大にして、せばき所を飛びあがる事を得ず、西山公人をして其吭を見せしめ給ふ、吭大にして俗のごとし、人みなその名をしらず、西山公御覽なされ、是は陶河、一名は鴉鵂といふ鳥也と被_レ仰候、

一南蠻人或年鳥を獻じ候、其鳥火を喰申候、人その名

ををらず、西山公、夫は駝鳥といふもの也と仰られ候、

一あるもの御咄しの序に申上候は、此比世上に胡椒木を持しものまれく有_レ之候よし申上候へば、西山公被_レ仰候は、胡椒山椒には種類多し、或は毒有もあり、或は毒なきもあり、吟味して用ゆべし、椒の類の中にむざと食し候へば、次第に辛味甚しくなり、果は死申事ありと被_レ仰候、

一西山公仰られ候は、黃瓜をば一名を胡瓜といふ、又癩瓜といふ、此瓜穢多し、食して佛神へ參詣すべからず、又毒多して能少し、何れにしても植べからず、不可_レ食との仰也、

一西山公むかしより、禽獸草木の類ひまでも、日本になき物をば唐土より御取寄被_レ成、又日本の國にて、其國に有て此國になきものをば、其國よりこの國へ御うつしなされ候、覺し召末にゑるす、

艸之類

朝鮮人參^{江戸駒込の御屋敷井水戸にも御種候}

薩摩人參

蘭

葵^{加茂のまつりにか}
葵くるあふひなり

ケンヤウ艸

落花生

唐鬼灯

ロウサ一名ハマタア俗云バマナスビ

唐チサ又云タウチシヤ

唐芥子

黑葡萄

阿蘭陀茄子

ハラスマレイナ一名ロウスサボンマレイナ

匏橋

朝鮮茄子

ヘンルウダ一名ヘンアルウダ俗云ルウタ艸

日蔭蔓

艸蓮華

絲蓮花

ツノ蓮華

金絲蓮

唐蓮紅白

烏芋

フツカウ艸

蓴菜

水戸城下及御領内所々の堀又西山の池へ御はなち候

南部薯蕷

何首烏

水松

眼茄

昆布

松前の海より御取寄大津濱那珂湊へ御はなち候

若紫

此艸は西山の山中へ出生仕候を西山公はじめて御見出し被成わむらさきと御號候二月に花咲

濱木

潮來の濱に御座候へども人不レ存候所にては濱芭蕉と申候也西山公御見出し候より人は是を存知候

木之類

難波早梅

咲やこのはな冬籠とよみし梅也

玉蘭

黑梅

江南所無梅也

木屋又云カツラノ木

シデ辛夷

雨椿アマツバキ

佛手柑

柚山椒青柚の香に同じきがゆへに名とす

冬山椒

唐杉ユキノキ

雪下躑躅也

メイサ

果李

楊梅

藤松

林檎

有檣橘ミカン

紀伊國橘

岩梨實

マテハ椎實

無花果

唐川練子

桐油木此實雨具の油によし

菩提樹

娑羅雙樹

紀州熊野杉

臘梅

槿梓

ソナレ松

白木蓮

ヤシヤノ木

カキウ

木樨子

新羅松子

會津林檎

沙菓リシギン

咬嚼吧橘ジャガトラミカン

大殿堂柚

赤梨實

白輪柑子

巴旦杏

鐵樹

香椿ヒヤンチンよく諸毒を消事妙也

唐枸杞

桐俗云唐桐

龍眼肉

リヤウブ 京都にては一名常若
ウ 常州にてはハダカボ

榼一名山漆俗云ハセノ木讃岐より來
榼實は蠟に宜く木は弓に用る木也

櫻欄竹

鳳凰竹

肉桂

甘蔗

胡椒

キンメイ竹 是は自然と江戸
駒込御屋敷に生

瓢木

葉はモチの木に似其實
は瓢箪の如し常盤木也

虎フ竹

要木

蟲之類

田蛙 大和國井出より取寄候様被_ニ仰付_ニ候に付役人共夏の中
三度迄取_ニ下_ニ候所に三河遠江駿河の邊迄來りてみな死失

候西山公これを聞し召長途をゆり持て來る故死る成べし
秋の末か冬の初方蟄したるを取て土をきせてつかはし候

へと仰ければ御さしづのごとくして下しけるに皆々無事
にて來りつきぬ則後樂園井西山の蓮池へ御はなちなされ

候

蜜蜂

螢宇治川のほたる也後樂
園の池邊へ御はなち候

魁蚶

武州より御取寄常陸
の海へ御はなち候

海螺 同斷

蛤 同斷

介并魚之類

龜 俗云ミノカメ又云キツカワカメ
後樂園井西山蓮池へ御はなち候

鯉 俗云水戸の御城の御堀
に御はなち候

鯉 同斷

海參 常陸の海へ
御放ち候

禽之類

孔翠

青鸞 御領内の山林
に御はなち候

白鸚 同斷

鵲 右同斷殊の外
ふへ申候

鸚哥

五色鸚哥 又ハハインコ
ハインコ

錦雞

鸞

鳴鶴

鸛 一名
鸛鶴ハハ鳥

高麗雉子

テウセウ 鳩 俗云
朝鮮鳩

サトウ鳥

キク鳥

鸚鵡

鳩クハンウ

紅雀

鴛鴦 日本にて鴛鴦と申は
鴛鴦唐にて鴛鴦と申候

鵲

吐鴉雞

鵲 世にいふ
おし鳥

獸之類

麋 北領の山に
御はなち候

豪猪 山林へ御
はなち候

羊 年々子を生餘
多に相成申候

綿羊 右同斷

羚羊 和名カモシ、
年々多相成候

唐猿 尾有長尺
餘也

栗鼠 山林へ御
はなち候

獅犬

靈猫 ジャコウネコ

豕 年々多生申候

白鹿 山林へ御はなち候

ハア 毛に小紋の形有類に似たり

驢馬

白猪 水戸より西北の遠林野へ御放ち候

牧

古來御領内には牧無^レ之候所、西山公多珂郡大能村に廣野の御座候を御見立被^レ成、其野へ馬ども多く御放ち候、且獵人共に御扶持方被^レ下、狼の用心被^レ仰付^二候、夫よりして野駒多く出來、大樹公へも御獻上被^レ成候、又常陸には、海參、白魚、昆布、洞沼浦に御まかせ、海參、海螺、魁蚶を武州より御取よせ、昆布の石に付候を、松前より御取寄、大津濱那珂湊へ御放候しより、はじめて白うを海參昆布出來、今は賣買仕^レ候、國に益有^レ之候、海螺、魁蚶等も段々出來申候、又常陸の海に蛤もとより有といへ共、風味不^レ宜を、是亦武州より御取寄、多く御放ち被^レ成候より、今は蛤もかくべつよく罷成候、又宇治川より螢を御取寄、後樂園の池へ御放候、其後年々彼所に出候螢は大きく光強く候、今以左様に御座候、また御領内に、漆、楮、櫨、多く御植させ、漆、紙、蠟燭の用、乏しかざるやうにと思召候、リヤウブをば、

上方にては糧^カに仕候を此國にてぞんじ申さず候處に、西山公北領の八溝山にて御見出し土民共へ御教へ被^レ成候、亦木槿三叉^{ミヤ}柳竹松の皮、麥稈、稻葉、銀杏、眞薦等にて、紙共を御漉せ候、又野路、山路、田畑の道、及び寺社の門前等、並木を植させ、然べき所へは、其所相應に松杉櫻檜椿、本名ハリノ木、一名大ハギ、或は茶の木を植させ給ひ、又暖國を好申艸木をば、伊豆駿河安房上總などへ被^レ遣候、依^レ之、いつとなく今世に相見え申物御座候、西山公常々被^レ仰候は、禽獸艸木やうの物迄、世話にいたしふえ候様にと存候事、全く身の爲にあらす、日本の爲を思ふ故也と仰せられ候、

一 西山公、御風雅なる御事も、今の世には稀なるべきか、その片端を申さば、或年、水戸城より南に當りて、小幡^{茨城}郡、といふ所の往還の傍に、類ひなき櫻有、一とせ花の比、春雨の時間もなくふりける日、この櫻の事を覺し召出され、雨中の花一玄ほにこそとて、御笠を召れ、遙々と彼木の下へ至り給ひ、宴を披き詩を吟じ歌を詠じ、終日御詠候、西山より此所迄は、行程五十七里、是は坂東道の積也、道のはるけさとい

ひ、雨中といひ、殊に年關齡も傾せ給ひ候御身に
て、御駕籠にさへ不_レ被_レ召、此日爰に至り、花御眺
め被_レ成候御深情のほど、花も心あらば一きは色香
を増ぬべしと覺ゆ、昔登蓮法師が簀笠借りて、人の
命は雨の晴間を待ものかは迎、走り出で、渡邊の聖
を尋て、三の薄を習給ひしとは、その品異也といへ
ども、其情は異なること有べからず、此事を公卿殿
上人などへゑらせ奉り候はい、必定御感有_レ之、
物の端にも書付さや給ひぬべくやあらん、此段御覽、居の後也
昔下總國小かね_{江戸より}六里、といふ所へ、狩に御出被_レ
成、數日狩暮させ給ひて、大瀬と云村家に御宿被_レ
成候、其夜宵より雪こぼつが如く降出けるに、西山
公風と思召よりて、武州小石川の御屋舗へ人を遣
され、世子綱條公へ被_レ仰候は、今宵此地を御立有_レ
之、明朝御着有べし、其節は直に御數寄屋へ入せ
らるべきとの御事也、扱西山公夜半に大瀬村を御
發駕被_レ成、千住の驛に御至り候得ども、未夜深な
りければ、民家へ御立寄、長左衛門と申御出入の百姓也、此
者西山公御逝去を承り、過世仕り
候、暫時刻を御見合、御上下を召れ、そこを御出、卯
刻に小石川の御屋形に御着被_レ成候へば、綱條公御

待請、直に御數寄屋へ被_レ爲_レ入候、御路次入之節、
綱條公へ、雪中ひだ笠のあいしらへ御傳授遊ばし
候、

一昔山城國にゑろし召候人有、彼御方へ都鳥を木に
て御作らせ御文を副て被_レ遣けるに、

よみ人ゑらす

思ひきやまつむみくつをみやこ鳥

こゝろにかけてことゝはんとは

と詠じ給ひて、御返事に卷入給ひけるを、西山公御
覽被_レ成、やがて御返しを遊ばし候、

都とりあさるなみ間にまつむとも

やかて雲井に立を歸らん

願書 山城の國に日比いひかわさせ給ふ人に、ほ
のうきすの浮世には、あしまの舟のさはりあれ
ばや、ゑばしがほど引籠り居給ふを聞せ給ひて、
都鳥を木にて香箱に作らせ給ひ、その中に名香
など入させ給ひてをくらせ給ふとて、

西山 公

都鳥あさるなみ間にまつむとも

やかて雲井に立やかへらん

御返し

よみ人知らず

思ひきやゑつむみくつを都鳥

心にかけてことゝはんとは

と詠じ給ひて御返事卷入給ひけるとぞ、

一明暦三年丁酉正月、江戸大火にて御屋形も焼失しぬ、その年の五月の節に、

思ひ掛ぬこと有て江戸の家焼失ぬ漸火を遁れ出て片田舎に知るよして侍りける年の端に

光 國

おのつからけふのもふけとひとや見ん

もとよりふきしくさのいほりを

とかやうに遊ばし、此御住居を却て面白事に覺しめし候、

■此時火を遁れ給ひて、馬上にてのかせ給ふ、

儒臣供奉し侍けるに、句をもふけ給ふとて、御道

すから、馬上にて、行着せ給ふまで聯句し給ひ

てさらせ給ふと、其節御供に侍ふ人々語りける、

一水戸城神崎といふ所に、若き時より數奇をたしな

み、友なき時も獨此業を友として年月を送る老翁

有、桑屋、よはひ既に八旬に餘れり、立居も叶はざれ

共、此事は尙昔に替らず、明暮翫び樂とす、西山公彼叟が事を聞召被_レ及、或時宅邊を過させ給ふ迎、人をして案内せさせ給ひ、頓て御立入候、家は藁を以葺、膝を入るに不_レ過と云まほしき程の住居なれば、増して數奇屋といふもの作べき力もあらねば、唯庵の内をかた計をかしくゑつらひ、爐を構へり、斯狭き家也ければ、御供のもの共はみな垣の外に留りて、内へは御近臣二人のみ參りぬ、彼叟足を痛みけるが、貴人の御前にて爭か無禮には坐可_レ申と、いたく侘候を御聞付、不_レ苦候間おり能様に坐し可_レ申と被_レ仰候へば、御免を蒙り、二三歳なる稚子の坐したる如にして、御茶を奉りける、茶入のこゝ様なるを御覽被_レ成、名を御尋候へば、名は無_ニ御座_一候由答申候、其茶入のかたのめぐりに、雲のやう成物有ければ、横雲と呼候へと被_レ仰候、御茶過て御歸りなされ、あしや釜を彼翁に被_レ下候、此段は御隱居後なり茨城郡八牟知山は、人家を去事良遠し、彼山中に櫻の老樹二もと有、されば好事の者ども有て、花に付、紅葉に付、深山幽谷にも分入尋求て賞するこゝとあれ共、此櫻をば未誰も知らざりしに、或としの

彌生の頃、西山公此山に分入せ給ひ、初てかの花を御覽じ付られ、甚御賞し、一木櫻二本櫻と名付させ給ひしより、人みな此櫻を去りて花下に至るもの多し、此段御隱居後也、月の比は那珂の湊へ御出有て、蚤賓閣亭の_{名也}にて海上の月を御眺め、都て城市の月をば嫌せ給ひ候、月は古より中秋晚秋のみ名月と賞する有て、初秋に名月と賞するなし、七月十五日は中元といひ、又この比の月色と秋色とを揚て賞せんに、その品不_レ少、唐土の蘇子が赤壁の下に舟を浮べし昔をも思ひやるべし、又或歌に、哀とも知る人さへや稀ならん下り行夜の秋の夕暮と詠るに付て思ふに、斯下る世の秋なれ共、此夕といへば靈祭るに付て、無_レ心野人樵夫も更に哀れを催すなれば、殊更末世相應の名月たるべし、仍て七月十五夜をも、中秋晚秋の月のごとく世と共に名月と賞し候やうに被_レ成度と願せられ候、御自らは毎年此夜賓客を招かれ、興を催、詩歌の御會を遊ばし候、或年の冬、水戸へ御出、一日二日御逗留有しに、雪夥敷降出ければ、その暮方御供人をも不_レ被_レ催、西山の雪囀有らん_レ、其儘御笠をめし、草鞋をはかせ給ひ、御出有

ければ、御前に候ひける者共、三四人隨ひ奉りぬ、御出の跡にて皆々承り、段々追付御供仕り候、西山公たうく御馬にも召れず、行路の雪に興御催し被_レ成、額田久慈郡水戸より是迄行程三里半是より西山へ二里といふ所にて、御供の者共に酒を被_レ下、その内暫焼火に當らせられ、夫より又御歩行被_レ遊、西山へは曉懸て御着遊ばし、西山の雪御眺なされ候、此段御隱居後也、むかし多珂郡大熊といふ所へ御出有しに、御歸さに風雨甚強かりければ、菅郡同上と言山家に御旅宿有べしと仰ける、然るに山家の事なれば、萬づ城市とは異なる事にて、食物も常に芋と云もの計食しける故、家々を尋ねて白米一升計漸求め、また夜は松のひでと_{京都にてはコヘマツといふ物をとすなれば、燈臺なんどは一つもなく、中々御旅宿難_レ成由御供の者ども申上ければ、却て興せさせ給ひ、そこに御泊り被_レ成候、彼求候白米をかしぎ、御膳をさし上候へば、少し御箸を付られ、御供のものどもに下され、御自は土民等が食し候芋計をきこし召、夜は御持せ候蠟燭をも御用なく、所から成松のひでを焼せ明りに遊ばし候、御國元にて御夜行の節、提灯をば御用ひ候事稀に}

て、多は明松を御もたせなされ候、

一 水戸城邊は不_レ及_レ申、御領内御旅行の御道などに、隠者の住候を御聞候へば、柴の扉へも立入せ給ひ候、

一 武州駒込の御別莊より、不忍池を見渡し、風色面白かりけるに、夫より御覽の爲、其趣を御門主へ御願ひ有_レ之、東叡山の麓に桃多く御植させ、御遠望なされ候、

一 昔夏の末、日光御門主守澄一品法親王、武州淺草の御別莊へ御光駕被_レ成、終日御饗、日暮て數千の蓮葉に蠟燭を立、川上より流し御覽に入られ候得ば、御門主にもことの外興せさせ給ひ候、

一 武州小石川の御屋形の後樂園と號し給ふは、御父頼房公の御代に、大樹度々此亭へ御駕を被_レ寄候付、御饗の爲作らせ給ふ御園也、其地廣くして様々の御物好き有、年經るに隨て木立繁り巖苔むし、誠に深山幽谷のごとく見え候故にや、御池には水鳥ども自然と住馴、巢を結び、子を生じ、花を見捨るならひも忘れて、四時ともに爰に住鳥多し、斯絶勝なる上に、西山公古を拾給はず、風雅を加へさせ給へ

ば、都て俗事をはなれ、唐めきたる事共也、園の入口には、唐様に門を立、後樂園の三字を明舜水に書しめて、額に懸させ給ふ、西山公元來寛仁の御度量故、衆人と樂を同じうし給ふべきの御心にや、賤者にても御園一見を望み候へば、誰となく御見せ候故、酒肴を携來り、御園に遊び申もの、年々春夏秋冬に渡りて不_レ絶、誠此御園を始めて見る者は、別世界の思ひをなさずといふことなし、されば御園を後樂園と號し給ふゆえんは、樂は天下に後れて樂しむの御心也、

一 水戸城下棚町といふ所に、三木之次が舊宅あり、彼庭に梅の大樹有、此木は、御母堂久昌院、西山公を御懷胎の内、御手自實を御うる、西山公御誕生のとし出生したる梅也、西山公も爰にて御誕生成ければ、旁謂れ有連、かの梅を誕生梅と御名付愛させ給ひ候、依_レ之西山公御逝去の後、かの梅を綱條公瑞龍の御墓所へ御移し植させ給ひ候、彼梅は世上にて座論といふ梅也、一 水戸城邊の仙波の池は、湖水ともいふべき程の池也、その中に堤有、長十、八町、此堤を行かふ人多し、されば炎天に木陰なく、行人暑に苦まんことを思召、又

其景色の爲に西湖の蘇堤に准へ、兩岸に楊柳をひしと御うゑさせ、柳が堤と御名付候、夫よりして夏日のあつき日も、柳陰連り、かげ涼しく、堤に休ふ者おほく、四時の景色またこと也、亦城邊國中の寺社等に至るまで、その地相應の樹木御うゑさせ、或は名の聞よからざると、文字などの正しからざるとを御改め、もとより名のなき所には名を御付遊ばし候、西山公の御山莊は取分佐たる御事也、御簷は萱を以葺るが上に、芝きり一名いちといふ草生茂り、御門牆には蔦葛這ひ懸り、表の方計に唯竹垣一重のみ有て、其外は山についき御園といふもの一重もなし、御砌の岩根より飛泉ほと走り、水聲間に清く、是ぞ此浮世の耳をも洗つべし、御家の前後に池有、紅白の蓮を植給へるは、彼花の君子なるを愛し給ふならし、御學の窓の前には、梅と桂一名木犀と玉蘭とを植ゑ、又西山の山口に白坂と云所は、民屋少々有り、その小徑を挾て、桃實桃は御好なく、只野もを御このみなされ候、數百株を植させ給ひ、増井川の流に柴橋を懸させ、桃源橋と號し給ふ、御垣のめぐりには、垂柳四五樹を御うゑ、御砌の山に鹿を御放ち候、彼鹿西山公に馴奉

り、常に御庭に來り戯れ候、御門田には鶴二つ結放させ給ふ、かの鶴も西山公へ能なつき奉り、御門を御出候得ば、遠方にあさり候ても忽ち御側へ飛來り候、また御砌の池へ下り立白鷺、いつとなく所をさらで、後は人馴、御座敷の内に來り遊び候、さて西山公召仕れ候者の家居は、爰かしこの谷々に有之候ゆへ、見渡しに人家なく、甚寂寥たる御山莊也、西山公御酒宴をば別春會と名付させ給ひし、されば若き御時より御老後に至るまで、四時の移り行に付ても、其折々の哀れを見すぐし給はず、都て御多情御風雅の程思ひやり奉るべし、又西山公常常仰られ候は、昔顯基の中納言とかやの願ひ給ひし如く、我も配所の月罪なすいして眺まほしきと仰られ候、

一 西山御山莊の圖

御家は皆二間梁也、柱はみな杉丸太にて、高サ八尺五寸なり、御屋上萱葺、廊は板也、梁間つまり、柱短く、御屋上かやぶきの上草生ひ茂り候故、樵家のごとく有之候、御家の式御すまひかくのごとし、圖卷末に

一西山公御編集、或は新撰、或は増補、或は後世の助けに成候事共を被_レ遊、又或は絶板致し候書、或は古來秘して世に稀なる書等、書寫及板行被_二仰付_一候、其書數今茲に記、もし書有なば、重て書加ふべし、

日本史記

禮典之類聚恒禮臨時五百卷

類聚は朝廷の禮義長くたえざらんことを覺し召候ゆへなり

扶桑拾葉集三十卷

保元平治物語參考

源平盛衰記

同源平盛衰記參考

太平記參考

神道集成

萬葉集解釋萬葉

系譜補

鎌倉日記

新編鎌倉志

花押藪

艸露貫珠

水城實錄

常陸國誌

同辻隆撰新カ

家乘日錄

視聽日錄

六國史

都史文集

惺窩文集

洪武正韻

南朝事跡

田村九事跡考

楠紀事

成憲摘要

新撰年中行事

歷代大臣考

月卿初任

記錄年代考

諸記年月考

日次記考證

慎終日錄

新撰文集日錄附

同詩集附錄日錄附

沈張蔣詩文筆讀(讀カ)附

張非文筆語

霞池省菴手簡

遂菴詩稿

和漢松梅百題

同採餘

萬葉類句

萬葉目安

山吹日記

新撰近代帝系

近代諸士傳略

甲寅紀行

諸國土宜備考

西行雜錄

南行雜錄

續南行雜錄

金澤蠹餘殘編

和蘭譯語

雜錄

書法纂要

致祭儀節

桑鮮筆語

瑞龍墓纂誌

禮樂疏釋奠儀

啓聖公祠祀

釋奠儀諺解

改定儀註諺解

祠堂時祭諺解

墓祭諺解

朱子談綺

文苑

新續南行雜錄

一 西山公御一代の中遊ばし候御詩文、并御歌、和文共を、御逝去の後、綱條公御集め、都合三十卷の書と被_レ成候、

常山文集二十五卷

常山詠草五卷

と名付させ給ひ、亦良材を撰び、能細工に命じて西山公の尊像を作らしめ給ふ、綱條公綿密に御吟味を被_レ遂、良工丹誠を抽しかば、不日に尊像成就いたし候、實に西山公御再來被_レ成候かと、かつは驚き、且は疑ひ奉る計に見えさせ給ひ候、枅稻木村久昌寺の寺内に、唐様の御堂を御建立なされ、彼尊像御安置被_レ遊候、もし後世西山公の御行實をくわしく知奉らまほしく思はん人、此桃源遺事を熟讀し、又其御面相御形容を床しみ奉らん人は、かの寺に詣で、彼尊像を拜し可_レ奉もの也、

西山にて召仕れ候者之覺

大森典膳 西山にての御家老也、御隱居の節より御逝去まで、初中終相務候、始の名は彌惣左衛門と申候、不老澤に住す、

佐々介三郎 格式小性頭也、西山を相務候、西山にて萬事御用共相達申候、宅は不老澤に有、御

逝去二三年前に死、

林肯休 初の名は甚右衛門、御隱居の節より相務候て、中頃病氣によつて退申候、初甚右衛門と申候時は、小普請觸頭なり、

鈴木宗與 御醫者、御隱居の節より御逝去迄、初中後相勤候、不老澤に住す、

井上玄桐 御隱居の中頃より勤、御逝去まで勤、儒醫なり、新左衛門平に住す、

三木幾右衛門 御小納戸、

秋山村右衛門 御小納戸、

朝比奈半次 初名平太郎、格式小納戸、御隱居の節より御逝去迄勤、不老澤に住す、

銀持與平 格式御小納戸、御逝去の前々年より勤、不老澤に住す、

馬場佐五右衛門 中比より御逝去迄相勤、御祐筆なり、新左衛門平に住す、

江橋六介 小吟味役、御隱居の節より御逝去の節まで務、白坂に住す、

〔鈴木元和御藥方〕

〔柳清友外科〕

多賀谷宗傳 中比より御逝去迄相務、御茶道也、

白坂に住す、

齋藤心退カイト 初の名作兵衛、中比死、御咄の衆也、

〔渡邊頼的〕

中野文左衛門 御步行、御隠居の節より相務、中

比死、

江橋林介 六介が子也、西山にて御步行に被_レ召

出、御逝去まで務、

鹿野文八カバヤ 御隠居の節より御逝去迄勤る、物書

役也、白坂に住す、

渡邊悦之進 御步行、初は西山に勤、中頃は江戸

勤、又後御逝去まで西山を勤、白坂に住す、

鯉木萬右衛門 御步行、中頃より御逝去まで勤、

寺ガ谷に住す、

岡山次郎介サカキ 御步行、中比より御逝去迄相務、櫻

谷に住す、

太田九藏 御步行並、御細工御用に付、御逝去迄

西山に相詰、白澤ササキに住す、

前田助十郎 九藏同斷、

井阪彦右衛門 御庖丁人、御隠居の節より御逝

去迄相務、

大嶋平九郎 西山にて御取立、御庖丁人になさ
れ候、

〔沼田武助〕

右御家老より初て、初中後都合人數廿三人也、

幾右衛門と村右衛門とは、交代一人宛西山と

江戸とを相務候、此外に儒臣壹人づゝ一月交

に相務申候、

右者、西山公御一代之事共、逐一證據を正し記畢
ぬ、此書之外種々様々之説を世に申ふらす者共雖
有_レ之、必以不_レ可_レ信用、たとへ證據正しきやう成
説を申もの候共、此書面を以西山公之御行實を察
し奉り、御性情より出不_レ出之趣を考て、猥に不_レ
可_レニ増補、穴賢、

元祿十四年辛巳十二月日

臣三木半左衛門源之幹
臣宮田半左衛門源清貞
臣牧野木工之助清原和高

〔山莊圖略之〕
〔西山圖略之〕

書西山遺事後

西山遺事水戶臣等紀其主義公之行實也義公剛方正大之氣孝友忠純之誠固出乎至性而至若其讓國以全葬倫之敍正嫡以立邦家之本與夫正閏皇統寓春秋之權辨裁禮儀折蠻夷之衝事皆關乎天理民彝之源意實根乎經綸建立之奧學問之功可謂大哉邇之古人弓兵政所之後蓋鮮矣抑後水尾帝在高天原東照宮再造區夏以來昇平百年教化薰治上則有若土津靈社有若義公○南漢按下字脫歟則有若垂加翁相與以正學原德始挽回斯道於千載之後發揮引重不遺餘力真可謂我朝之中興矣後世願治之君志學之士安知其不聞風而興乎是予所以三嘆於此編也重遠學術迂僻識非知德何足以與此顧前脩之遠不堪慨然竊併識平生所考敢附其後以俟百年論定之日訂焉

寶永七年庚寅十二月六日

土佐國鏡郡

大神重遠拜書

宗長居士傳

有間溫湯、祇翁肖柏柴屋三吟、

四十八歲明應四年乙卯夏六月、新撰菟玖波集成、居士

句多載之、

五十五歲、文龜二年壬戌七月晦日、祇翁自北越將

歸駿州、病路沒于湯本、葬定輪寺、居士深哀惜

之、作終焉記、事已詳悉、故不贅之、每到諱景連

句無不嗟悼、

五十七歲、永正元年甲子、是歲肖柏作獨吟百韵、始正

終二、乞批於柴屋、々々評之、相攸泉谷、作柴屋軒、

爲休憩之所、其境致也倒嶺橫峰、清流激湍、松杉岑

蔚、泉石吟呀、觀音薩埵堅座之地、行基大士建初之蹟

也、勝人奇士每有經歷、無不諮詢、千句獨三日

五十八歲、同二年乙丑、晚產一女子、

六十歲、同四年丁卯、誕一男子、初齋藤加守安元養

之爲子、後蒙慈香禪尼能勢因幡守源賴則之母之撫育、使出家、

居薪心傳庵、承齋喝食是也、

六十一歲、同五年戊辰六月、作百番連歌、乞評論

於槐陰逃虎子聽雪、夢菴老人兩翁、々々批之、

六十四歲、同八年辛未正月二十一日、懸河城主朝比奈

備中守泰熙號宗榮居士不祿、息泰能年最少、伯父左京亮泰

居士諱宗長、字久菴、號柴屋軒、以後花園院御宇文

安五年戊辰生於駿州嶋田邑、鍛冶義助子也、稟賦聰

敏、有出群拔類之氣象、初受業於醍醐善捨院僧某、

日驗河宰相、國主今川上總介義忠愛之、近侍左右、十六

歲、寬正四年癸未、初謁于見外齋宗祇、慕蘭新鍼筑

波跡、晞顏難波淺香道、鍊磨習修殆向四十霜、無不

隨逐東奧西阪北越南紀之行、

十八歲、同六年乙酉、雜染後遂受戒加行灌頂、

二十歲、應仁元年丁亥、羅世騷擾、交兵馬塵、流落十

有餘年、

三十三歲、文明十二年庚子冬十月、祇翁赴于多々良

氏政弘之佳招、遊防州山口縣、居士亦伴之、靈區奇

蹤收拾吟囊、素傾心於禪風、祖三月休純一休之法、往

來于城州薪邑酬恩菴紫野眞珠菴、寓梅屋

三十四歲、同十三年辛丑冬十一月、一休遷化、居士太慟

哭、是故每迎忌辰、必往無不香拜、其志可嘉尙矣、

四十四歲、延德三年辛亥冬十月廿日、相伴祇翁浴

以、叔父下野守時茂誘_レ掖之、素與_二居士_一締交殆軼_二等倫_一、是故連_二哀悼句_一、冬十一月三日、作_二山家連歌百韻_一、

六十九歲、同十三年丙子三月、中江土佐守藤原員純於_二月村齋_一有_二十花千句_一、秋八月十日、能勢因幡前司源賴豐卒、對_レ月深悼_レ之、

七十歲、同十四年丁丑臘月廿六日、作_二宇津山記_一、

七十一歲、同十五年戊寅秋八月、於_二洛陽東山長樂寺_一丸爲_二源賴豐第三回諱_一開_二千句連歌之筵_一、

七十五歲、大永二年壬午八月、於_二勢州山田_一爲_二管領細川右京兆高國_一與_二月村_一有_二法樂千句_一、發句、ナヒク世ハ雨ノトカナル中葉哉、

七十七歲、同四年甲申正月、列_二管領雅筵_一、有_二一日千句_一、又聽雪翁月村與_二居士_一有_二三吟千句_一、二月爲_二朝倉教景_一、依_二一華桂月舟_一請_二養鷹記_一、宇津山記、

七十八歲、同五年乙酉八月二十日、追_二慕豐雅樂頭統秋一周忌景_一、作_二十首和歌_一、聽雪翁亦親書_二自我偈_一、後冠_二妙法蓮華經五字於十首和歌_一、相俱悼_レ之、

七十九歲、同六年丙戌正月二十六日、龍寶山大德寺山門再興立柱、居士初募_レ緣竭_レ力捨財嚮以_二源氏物語_一、

是歲二月再修_二菅柴屋_一、庭湛_二池水_一、砌擁_二竹籬_一、中間立_レ石、植_レ杉移_レ梅、削_二松樹三尺許_一、題_二和歌_一以_二苦經句_一、夏六月十三、今川匠作氏親卒、號_二曾善寺_一居士時在_二酌

恩庵_一、七月計至、不_レ堪_二感慨_一、初願忌間營_二辨小齋供養香湯_一、至_レ若_二憑_一于聽雪翁_一請_二芬陀利經二十八品和歌於法名_一家資薦_二冥福_一、令嗣氏輝聞_レ之、賜_レ書感_レ之、是歲十月述_二老懷和歌十首_一、聽雪翁亦同賦_レ之、

或時作_二太神宮法樂千句獨吟_一、同月使_二宗信侍者_一摸_二寫一休和尚佩_一朱刀_一肖像、請_二于宗等沒倫_一、號_二墨齋_一自贊語爲_二一帳_一、曾請_二聽雪翁親筆古今集_一有_レ年_二于茲_一、

竟愜_二素望_一、與_二古今心法口授等_一盛_二一瓊_一呈_二之源氏輝_一、

八十歲、同七年丁亥七月、還_二柴屋軒_一、報_二諫草於朝比奈泰_一以_二一、

八十一歲、享祿元年戊子三月六日、以_二壽終矣_一、谷宗牧連句悼_レ之、隘夫居士爲_二人溫粹和煦、慈愛信義、不_レ忘_二本根_一、無_レ捨_二故舊_一、枯淡空寂、招搖自適、傳_二和歌道士林所宗_一、杖屨所至吟嘯遣懷、常嗜_二尺八_一、初號_二老

舊友、吹無_レ生_二一曲_一、則頓除_二老病_一、洒々落々、有時遊_二東山_一、謁_二于常菴舟月湘雪諸大老_一、于和漢于漢和抒_二

其情、素粵思連歌也、參禪也、到其悟入、則連歌之外無參禪、々々之外無連歌、是故遵遊自然之勢、恬淡無爲之場、居士平居也、倚畫窓、則藁箋簾笠掛壁間、堪顯隱情、坐吟揚、則蘿月松風繞砌下、足甘禪味、菜圃築後、瀑泉流前、其樂陶々、可謂一代偉人也、如其事實、自壬午迄丁亥、有手記、在昔日稱連歌七子者、種玉、宗祇、聽雪、逍遙院、月村、夢菴、宵柏、耕間、孤竹、柴屋、宗長、是也、不才丙午夏六月望、自東武歸、難波、路過柴屋寺、住持聞公座元傾蓋情舊、相語、咲無記、柴屋之復歷、是故探索遺稿、遂述其槩、而爲之傳、猶且使山本素程描其肖像、遠投柴屋、贊曰、

胸襟雪月絕纖塵

吟盡東西南北春

憑几到頭成底事

蒼頭白髮一閑人

寬文八稔龍輯戊申居士沒後百四十二年

如松子福住道祐謹記于浪華竹溪軒下

案大德眞珠點鬼簿享祿五年壬辰三月六日八十五歲、在柴屋軒亡、

考宗牧弔柴屋十七回忌、連歌、則沒于享祿元戊子、者必矣、

宗長在新酌恩庵、卜居曰待月軒、是亦一說也、

悼宗長

遠州長樂寺

名聽華夷老保身

豈量俄告訃音新

春花秋月好何益

可惜人間欠此人

宗長久菴居士生于文安五戊辰、卒于享祿元戊子三月六日、行年八十一歲、到于延寶乙卯百四十八年、

或云宗長十三歲ノ時始テ連歌ノ席ヘ出、執筆ヲス、

スエノ句ニ字ヲ書也、宗祇見テ後ニ名人ニナラント

褒譽アルト也、

又云、七人内デモ兼裁ナドヨリハ少シ後生カト也、

紙ニ句數モ大方少キト也、

惺窩先生行狀

先生、姓藤原、諱肅、字斂夫、播州細河邑人也、其父曰爲純、所謂冷泉家也、世食邑於細河、故先生生於此、永祿四年辛酉也、幼穎悟不常、甫七八歲、投龍野吳東明長老、誦心經法華等、皆諳焉、人呼爲神童、一旦祝髮爲浮屠、名曰薺、東明師景雲寺長老成九峯、姓大江氏、所謂儒而入佛也、先生從事筆研、其所出自可_レ知矣、博學禪教、兼見群書、弱歲來洛、洛之相國寺普廣院泉和尚者、先生叔父也、當時推泉爲強記、泉嘗謂衆曰、我對薺首座、則難開口、其所居曰妙壽院、後歸播、見赤松氏、赤松氏善遇之、故從赤松氏遊于洛于伏見之間、先生雖讀佛書、志在儒學、天正十八年庚寅、朝鮮國使通政大夫黃允吉金誠一許篈之來貢、豐臣秀吉公命館之紫野大德寺、先生往見三使、互爲筆語、且酬和詩、時先生自號柴立子、許篈之爲之說以呈焉、有二相者、見先生曰、公是精神滿腹、太聰明、曰唯自聰明可也、太字如何、相者曰、是公之癖也、先生笑而不_レ言、十九年卒卯、

博陸侯豐臣秀次令長老周保聚五山詩僧於相國寺、題詩聯句、先生初一會、而後不復赴、衆強之、不肯、或譏秀次旨而詰先生、先生掉頭曰、夫物以類聚、如韓孟相若、而後聯句可也、若否則如_レ隻麟著木履、隻脚著草鞋、歟、其不耦也必矣、吾不欲耦于侑也、秀次不悅、先生避之、赴肥州那護屋、見豐臣某金吾、金吾者、秀吉公之猶子、貴豪少年也、時時潑水激人、滿座如雨、以爲歡笑、每見先生、必敬之、停此戲、一日金吾拔童刀、削撤金匣厨金盤、如視艸芥、先生諫曰、公子雖富貴、而不宜爲之事、則不當爲也、金吾納其言、是時有朝鮮之役、秀吉公在那護屋、列國諸軍從之、源公御諱公、同事會、先生始獲謁見、既而先生行遊豐之後州、爲西壽之壯觀、文祿二年癸巳、赴武州之江戶、執謁於源君、命令讀貞觀政要、閑暇作四景我有文、爲東關之遊、又旋洛僑居、環堵肅然、讀聖賢性理之書、思世無善師、而忽奮發欲入大明國、直到筑陽、泛溟渤、逢風濤、漂著鬼海嶋、先生常慕中華之風、欲見其文物、雖然其盛志不遂而歸、先生以爲、聖人無常師、吾求之六經足矣、慶長之初、少將豐臣勝俊號長

嘯子、好詠、倭歌、且多藏書、聞先生名而招之、共語、評論六義風流蘊籍、又摘莊老數語、以告其崖略、朝鮮刑部員外郎姜沅來在、赤松氏家、沅見先生、而喜、日本國有斯人、俱談有日矣、沅曰、朝鮮國三百年以來、有如此人、吾未之聞也、吾不幸雖落于日本、而遇斯人、不亦大幸乎、沅稱先生所居、爲廣胖窩、先生自稱曰、惺窩、取諸上蔡所謂惺惺法也、本朝儒者博士、自古唯讀漢唐註疏、點經傳、加倭訓、然而至于程朱書、未之知、什一、故性理之學識者鮮矣、由是先生勸赤松氏、使姜沅等十數輩、淨書四書五經、先生自据程朱之意、爲之訓點、其功爲大、又取文章辨體、考之本集、加寫釋箋、且增其所未載者、數百篇、用捨隨意、撰定爲編、名曰文章達德錄、復以今時人不知作文規格、故招集古今名公詩話文評、撰著達德錄綱領若干卷、使田貞順栢允等繕寫之、世醫意庵宗恂見先生、先生問其術、相共語、屢及曆數運氣病論方劑之事、恂技術有進、以此先生戲語、人曰、我非問彼、彼來問我而已、先生以爲我久從事於釋氏、然有疑于心、讀聖賢書、信而不疑、道果在茲、豈人倫外哉、釋氏既絕仁種、又滅義

理、是所以爲異端也、於是赤松氏聞之、遣童男婢奴奉仕焉、先生不拒、又勸別構一室、安聖牌、以擬大成殿、試使貞順等諸生肆釋奠禮、此禮既絕久矣、庶幾以微漸而後遂大行也、四年己亥、治部少輔石田三成居佐保山、使戶田內記某召先生、將往而不果、明年庚子、三成敗死、於是赤松氏自殺、先生甚慟、秋九月幕下入洛、先生深衣道服謁幕下、欲聽其言、時有浮屠和尚承允及靈三者與先生舊相識、頗自負文字、嘗侍秀吉公、公歿仕于幕下、時允爲僧司錄、謂先生曰、有真有俗、今足下弃真還俗、我不唯惜執拂拈鉢手而已、又爲叢林惜之、先生曰、自佛者言之、有真諦、有俗諦、有世間、有出世、若以我觀之、則人倫皆真也、未聞呼君子爲俗也、我恐僧徒乃是俗也、聖人何廢人間世哉、允不悅、或人招先生承允靈三、壁間掛草書一幀、皆不能讀、先生即能讀之、或曰、凡草寫者難讀、真書者易讀、先生曰、不然、能讀真者、亦能讀草、衆益不悅、一座皆驚、一日先生在御前讀漢書及東萊十七史等、或時允謂先生曰、今若勘合船渡大明、則以足下一爲專對乎、曰、遣明使亦有利乎、曰有、曰、有利

則和尙自爲之、豈其使爲之哉、先生亦不欲出、意謂夷齊雖不仕周、亦當知武王之恩、四皓雖不仕漢、亦當知高帝之恩、況於草莽乎、遂隱居放言、人罕見者、九年甲辰、賀古宗隆偶居洛、道春初見先生于宗隆宅、論道學、評文章、床上有論語大全、開之、叩以數條、先生爲之辨拆、且告曰、今所問我亦十餘年前、嘗有此疑也、又曰、我非翹嘉其利智、只嘉其志而已、伶俐者、世多有、而立志者寡矣、又揭陸舟二字、令道春作說、不覺日之晚也、辭去、翌日寄手簡曰、深衣一領、道服一領、以備製法、深衣兼依國服之式、春遂製逢掖以著之、且作陸舟之說以呈之、先生語宗隆曰、近時皆驢鳴犬吠也、故久廢筆研、今夫道春起予者、韓山片石、可共語耳、自茲往還不絕、春呈四書知新目錄、先生曰、此吾未見之書也、不日而還、曰、道春且復注意而看歟、春同母弟東舟子永喜初見先生、先生曰、令弟亦志學乎、可謂奇矣、先生欲見象山文集、而世罕有焉、春始磨一通以示之、先生悅、使紹元者寫之、又欲見周禮儀禮全經、春復搜周禮全經于秘府、以呈之、先生愈悅、十一年丙午、長嘯子在東

山別墅、招先生、吟風弄月、信宿而去、此歲先生赴南紀、蓋太守淺野幸長招之也、其所待尤謹、弱浦有管神廟、太守請先生誌其碑銘、又爲太守抄經書要語三十件許、添倭字之註解、爲一小冊、便于冥禱、備於願謁、是爲政之存心、資治之守約也、太守甚喜、此時元古栢允從行、戶田帶刀爲春永原松雲等、屢來訊、請先生講古文真寶、其以太守聆陳渥厚、故遊于紀、冬往春還者有年矣、一旦道春惜別而餞、先生手自執延平答問書曰、此延平工夫之心法、紫陽傳習之門戶也、今我示之非無意也、乃謝去、旣而道春遊官赴于駿府、其後、意庵之子如見、杏庵、正意、得庵、玄東、道庵、三清等、有時而謁見先生、十八年癸丑秋八月、紀州太守淺野幸長不祿、先生哀之、乃往弔之、以埋太守齒骨於高野山、故先生遂登鼎峯哭、畢而歸、先生好山水、愛花草、嘗與貞順遊西山、順父了意有心匠、決桂川、漕自丹波、先生駕一葉以泝洄焉、所到所見、題其名而賦倭歌、所謂群書岩、氣象岩、浪花隈、鳥船灘、觀瀾磐陀是也、道春歸自駿州、往訪先生、先生植竹於南庭、庭前有都勾樹、故其往復尺牘、自稱曰竹處、又稱都勾墩、洛北

市原山中、有三百餘弓地、先生欲與道春俱行遊市原、春有公務而不果、先生時時獨往、乘興吟詠、春與後藤郎共奏白、請建庠序於洛、教授生徒、乃許、令相攸擇勝、以縱觀之、幕下請郎曰、道春自欲居庠序歟、別置誰歟、對曰、妙壽院歟、時適有大坂之軍、而其事遂閣不果、有省推寺某者、家頗藏書、來問先生者數矣、或時、某見窓前蜂窠欲殺之、先生以其無整故止之、其起揚扇頻欲撲之、先生遂放蜂、後與省推寺絕交、戶田左門氏鐵問通鑑綱目、先生開首卷、講溫公名分論、先生所居在相國寺東鄰、爲春道庵同里閨、故先生每病多飲道庵藥、嘗戲曰、我無藥價、彼不責價、道圓、新録白氏文集、先生每一二卷板成、不待全部、先取而見之、曰、我讀香山詩文、愛其風流、偶爾是可慰悅目下、先生常慕彭澤之爲人也、故古畫彭澤小影、往往題贊焉、一旦見林兆思桃源寓言、有云、武陵人捕魚爲業者、謂心之活潑如魚之悠然自樂也、山有小口、豁然開朗者、謂方寸地雖狹而心本廣大也、避秦時亂者、謂離俗塵也、後遂無問津者、謂心學之不明于後世、不行于天下也、先生讀之、至此

微笑曰、此所謂陶淵明有志於我道也、元和五年己未夏五月、源君御諱公發自東武而入洛、侯伯群卿大夫皆從之、細川越州太守忠利聞先生之言論甚慕之、忠利與淺野采女正長重相善、長重者幸長弟也、共會先生、忠利等請講大學、先生爲折衷衆說以告之、先生閱林子良背心法有云、背字從北從肉、北方屬水、陰也、南方屬火、陽也、南之而居前、北之而居後、今以心之火之南而洗之以背之水之北者、周易所謂洗心退藏於密也、先生以下良其背兼山良、故自號曰北肉山人、所謂不以其山而僻之、而以天下萬世之山以爲山者、天下萬世之山人也、斯其爲孔孟之山人也、豈巢許者流哉、此歲、道春以揭夕顏巷三字於小軒、告先生、先生曰、夕顏巷字奇哉、於是作倭歌并序、以寄道春焉、秋九月十二日、先生卒、歲五十九、先是戶田氏等、相謀請先生、而德通執事者徐白幕下、幕下亦嘗知之、然以時而未急發、先生易簀、嗚呼命矣哉、昔宋帝召程明道爲宗政寺丞、未至而告終、君子深惜之、又爲斯世惜焉、雖然、用則行、舍則藏、命不足言也、斯人如是、命耶非耶、先生幼學、至壯不怠、出入於

釋老、閱歷于諸家、兼習日本紀萬葉集歷代倭歌詩文等、其間、讀聖賢書、而後弃異學、醇如也、故精義拆理、殆如破竹、未嘗勞其力也、嘗曰、我所讀人所讀、其文義何異、然則諸儒註疏、凡識字者皆可讀、唯所貴、則得之言表而可也、凡知先生者、推稱中興之明儒、不知先生者、妄以爲無師無傳、夫道一而已矣、人能弘道、不可須臾離也、有見而知者、有私淑者、有百世之下而興起者、有千里之遠而一揆者、故百姓日用而不知、昔仲尼沒千有餘年、周茂叔獨接不傳之統、道不在茲乎、若先生則是歟、是又我朝之景運、天下文明五星聚奎之際歟、不亦盛乎、豈以一時一人之私言疑天下萬世之公論哉、春所見聞、僅記其略、而況於其所未及見聞者乎、先生已沒、其片言隻字、落子人間、或獲者珍藏之、其殘藁遺書纔存者、將行于世、先生左眉傍有黑點三寸餘、眼有童瞳子、平居雖斷髮不冠、然或餘其頂髮、不厭長、人甚異之、而憚其嚴、不能問其故、性嗜酒、然或經旬不沾唇、或痛飲輒醉、而不亂、常不好往來雜遝、然接人欣然、則竟日坐談不已、或有來問者、隨其人品、以教誨焉、然如撞鐘、則或

小鳴、或大鳴矣、先生不出而道益高、於當時、先生能言而道益行、於後世者乎、以此歲某月某日、葬先生于萬年山相國寺某院某地某林、壘石而封、樹之、細川氏、淺野氏、戶田氏、其外弔者多矣、先生有男、小字曰冬、有女、既笄矣、先生歿後、明年庚申某月某日、羅浮子道春謹狀、

羅山林先生行狀

先生姓林氏、實藤原之末裔、而其先加州之豪也、後爲紀州之族、其祖正勝有三子、曰吉勝、曰信時、曰周堅也、正勝沒三子共嬰稚、其母携之徙居攝州大坂、其既長成而乃士著于京師、吉勝隨俗削髮稱理齋、其室小篠氏無子、先生者信時之長子也、以天正十一年癸未八月某日降生于京洛四條新町、其母田中氏鞠拊未多日、而理齋養以爲子、小名菊松丸、小篠氏毓愛猶其實兒、先生孩提岐嶷早言、丙戌八月、母田中氏沒、先生幼慧不群、粗識通用俗字、甲州亡人德本偶在京師、屢讀太平記于理齋信時宅、先生側聞多所諸焉、時八歲、人以異之、文祿三年甲午先生十二歲、既解國字、誦演史稗說、且窺中華之錄記、見聞不忘、世稱此童耳如囊、明年改名又三郎信勝、登東山入建仁寺之大統庵、就長老慈稽而讀書、同室有吾伊蒙求者、先生不披其卷、傍聽背念、乃緇舊註五經、又覽唐宋詩編、偶得東坡全集、手加朱句、慶長元年丙申、先生十四歲、在建仁、一旦作白氏

長恨歌琵琶行鈔解、其援引詳精、僉言神童也、朝習夜課孜孜不懈、凡禪院之制、旦暮食時飯頭敲木板、以催之、合院聚至、先生亦在其中、勸讀之時、或將終卷、或將看盡一節、則木板雖觸耳、猶晏坐、課畢而赴之、厨喰散而竈煙冷、忍飢而止、其如此者數矣、古人讀書忘食信然矣、當時禪老施名于世者、亦問典故所出于先生多矣、明年東山僧侶議曰、此童使堅拂拈槌而爲他日之禪狀元、則可也、遂訴于京尹前田玄以、而理齋信時不肯拒之、先生掉頭歸家、誓不入禪門、然後遍讀四庫之書、由來不爲藏書之家、而世上板行甚稀矣、故借請于處處、而見之寫之、偶閱于市鋪而求之、蓋得一書不換萬金、讀之終編則天下之至樂也、聞某家有祕本、則多方尋索、或約以期限、一覽返之、或手自謄之、從顏之推家訓之法、而展閱最謹焉、冊葉不少則命傭書者、隨數葉寫成而先校正之、不擇筆者之精粗紙黑之良劣、唯以功之早就爲急務也、乃至末年亦然、其讀書五行俱下、日日概以寸餘爲之制、課業益進、學術光新、遂著眼於宋儒之書、而專精於六經四書、乃始讀朱子章句集註、時十八歲庚子之年也、六年

辛丑八月養母小條氏沒、七年壬寅之秋先生經過西海、到火前長崎、旅寓逾月、歸途入穴門國阿彌陀寺、歷見曩日平家群輩之墨痕、題詩句、乃歸洛、是行舟中亦不廢讀書、洪武正韻是其所點朱之一也、八年癸卯先生開筵、聚諸生講論語集註、戶外屢滿、外史清原秀賢娼疾之、奏曰、自古講書者皆有勅許、今則不然、請督責之、乃啓稟于東照大神君、大君哂曰、庸詎傷乎、各宜從其所好、何爲告訴之淺卑乎、是以事輟、先生講學愈勉、九年甲辰、先生聞惺窩藤敘夫有碩儒宏學之名、先與其徒吉田玄之論、朱陸異同并大學三綱領、以寄尺牘、欲達於惺窩也、玄之以呈惺窩、因代之作答簡、今秋先生初執謁於惺窩、評論道德文章、惺窩一見如舊識、而後雅談屢矣、啓東往復屢矣、一日揭陸舟字、使爲之說、先生卽成之、文詞粲然、惺窩告曰、本朝學業衰而嗜文字者殊少矣、況於讀經典乎、卿何自而及此乎、先生曰、某嘗年偶誦近世小說、解者以爲此語出于蘇黃、某句出于李杜韓柳、至讀李杜韓柳蘇黃集、而其所據用涉于文選于史漢者夥矣、至讀史漢文選、而其所以率由皆上世之文字也、至讀五經、而無出處之

前乎此、於是豁然知其爲衆說之邪郭浩然知其斯道之所基、聊慕程朱之餘教、仰望孔孟之盛蹟、惺窩大歎之、旣而先生著惺窩所寄之深衣道服、而講帷頻褰、今茲先生二十二歲、手記所已見之書目、以抒修業之實、且爲他日之左券、凡四百四十餘部也、十年乙巳、先生與惺窩師友之誼益熟矣、惺窩名之曰忠、字之曰子信、曾告曰、余信道學、係中華之文風、有年矣、然世無同志、故筆硯塵深、頃來得發舊業、卿是起予者也、先生不憚他之謗議、不避人之嫌忌、博聞講磨、日就月將、今夏讀春秋傳、惺窩寄書曰、古人讀春秋於羅浮、羅浮者是不在羅浮、而在足下明窓淨几之上、得古人羅浮之意、則隨處有羅浮而已、爾後常呼先生稱羅浮山人、昔羅仲素在羅浮山、讀春秋傳、故惺窩云爾、遂爲先生之家號、門客皆崇尚之、稱羅浮先生、先生所著詩文、自稱羅浮山子、或曰浮山、或曰羅洞、或拆之曰四維山長、又以胡蝶洞梅花村在羅浮山、故各拈出爲別號、其同及于惺窩之門者、稱先生爲林提學、以惺窩之所指諭也、惺窩謂人曰、林忠聰達、稟性最敏、朝不待晝、夕不待夜、夜課不延于明旦、當世

豈無_二捷悟強記之輩乎、然不_レ如_二彼之阻勉奮進、今之見_二韻書者、雖_レ辯_二平聲、而仄韻不_二分別、彼能使_二上去入聲之不_二混合、實是細事也、然其記識之精可_二類推焉、今歲大神君入洛在_二三條城、聞_二先生之名、俄召_レ之、即出奉_レ拜_レ之、經_レ日又登府、大君問_二光武於高祖之世系、時侍坐之官儒老禪皆不_レ能_二對、大君顧曰、汝記_レ之否、先生即應_レ之、又問_二漢武返魂香屈原愛_二蘭之事、應對如_レ流、大君感_レ之、洛中傳_二誦之、遂彰_二聞闔國、今歲大神君移_二居駿府城、讓_二征夷大將軍于台德院殿、居_二武州江戶城、十一年丙午、朝鮮國使僧惟政松雲來、拜_二大神君于伏見城、其留洛之間、先生往_二彼旅櫓而筆語、惟政稱_二其有_二讀書之眼、先生屢拜_二謁于伏見、大君歸_二駿府時、有旨曰、明歲可_レ到_二駿壘、直詣_二江府、先生告_二理齋信時、以下父母在不_二遠遊、遊必有_レ方、及韓昌黎論_二歐陽詹之意義、兩翁領_レ之、乃趣_二旅裝、今茲惺惺赴_二南紀、先生餞別、惺惺手提_二延平答問、授_レ之曰、此是延平之工夫、晦庵之心傳也、殊須_レ用_二思、十二年丁未三月、先生出_レ洛到_二駿府、四月出_レ駿赴_二江戶、奉_レ拜_二台德院殿幕下、讀_二漢書數卷及三略、逾_二半月而歸_二駿府、作_二東行日錄、既而朝鮮聘使呂祐吉、慶

還、丁好寬、赴_二江府、過_二駿府、晝憩之次、先生筆談忽忽辭去、其後賜_レ暇旋_レ洛、且不_レ能_レ拒_二官命、祝髮改名道春、又蒙_二旨赴_二長崎、而歸京、十三年戊申、赴_二駿府、日日奉侍、讀_二論語三略等、賜_二宅地并年支、又掌_二御書庫鑰、歷_二看官本、既而歸京、十四年己酉、先生在_二洛、娶_二荒川氏女、順淑攝人是也、合卺整備、逮_二秋赴_二駿、仲冬歸省、十五年庚戌、又候_二駿府、是年季冬、大明人周性如來、懇_二海上賊舟之事、乃有_二勘合之議、執事本多正純、蒙_二大神君之命、贈_二書於大明國福建道總督陳子貞、其作_レ之者先生也、其後正純遣_二書於南蠻船主及阿媽港父老、皆大神君之旨、而先生爲_レ之、十六年辛亥、大神君入洛、使_二國侯郡主獻_二誓詞、先生草_レ之、既而奉從到_二駿城、官賜_二洛外之八瀨、二瀨、田中、山本、祝園、梅畑村戶、以爲_二采地、佩_二戴印章、還_二故鄉、理齋信時大喜、十七年壬子、先生稟_二命、携_二宜人荒川氏、居_二住駿府、恒侍_二營內、以_二中華本朝古今之履歷、啓_二沃之、咨諷頻繁前_二席幾矣、夜話屢賜_二飲食、或至于_二親對_二爐前、告_二達儒書性理之義、而多協_二台慮、有_レ所不_レ合則再三演_二白之、遂雖_レ有_二不_二開通而未逢_二威怒、往往顧_二左右、曰、彼之博識固可_レ採焉、各宜_二遇_レ之、大神君

常使_三衆醫調_三和御藥、又喜_レ聽_三僧徒之論議、先生受_レ命預聞焉、家弟信澄宦遊有_三年、今茲蒙_三旨奉_三仕台德院幕下于江戶、削_レ髮改_三名永喜、十八年癸丑五月、長子叔勝產_三于駿府、大神君比年放_三應于駿府傍畔、又遊_三敗江戶近村、先生常供_三奉之、十九年甲寅、先_レ是、先生請_三建_三靈舍於京師、教_三育英才、台旨可_レ之、將_レ擇_三佳士、而大坂兵變起矣、業已不_レ行、今冬大坂之役、先生戎衣奉從、既而和平、元和元年乙卯、先生三十三歲在_レ洛、理齋舊冬罹_レ病、正月二十九日下世、年七十二、先生湯藥先嘗、至_レ是慟哭、葬_三於洛外某地、居_レ喪盡_三禮、信時薙髮改_三名林入、俗忌既除、先生赴_三駿府、奉_レ命監_三群書治要等刊板之事、且補_三足治要闕失之數卷、今夏大坂再舉而城陷、台駕留_レ洛、此度先生不_レ隨_三戎行、乃自_三駿府、向_レ洛、大君尋_三覓日本古記居_三多於官家、命_三五岳禪子_三書_三寫之、先生監_レ之、八月台駕出_レ洛、先生扈從、停_三御軺于江州水口、者三日、以_三霖雨_三也、先生侍講_三論語學而篇、乃入_三駿府、二年丙辰正月、大神君不豫、先生常候_レ之、屢侍_三御床、四月十七日遂薨、乃陟_三久能山_三拜_三神廟、而後送_三回宜人泊叔勝於京、而赴_三江戶、賜_三暇到_三駿城、頒_三附官書于義直、賴宣、賴房

三卿之家臣、而獻_三日本舊錄暨罕有之哮喘本於江戶、而歸京、丙辰紀行由_三是而作、今茲孟冬、次男長吉產_三于洛、三年丁巳春、赴_三江戶、夏之孟、東照大神自_三久能山_三遷_三座於下野國日光山、幕府登山、先生從_レ行、少住攀_三中禪寺、乃問_三鄉談、尋_三古記、作_三一荒山神傳、而還_レ洛、冬又赴_三江戶、四年戊午、賜_三宅地于江戶、五月三男春勝產_三于洛、後改_三名春恕十一月歸京、比年先生東往西還、席雖不_レ煖講誦不息、在洛之間、數面_三於惺窩、且教_三誘徒弟、凡平生之詩文、惺窩每_三見歎賞、或批_三點之、或貽_三札以德憑焉、一日示_三其所_三作南紀弱浦菅神廟碑、談及_三助字、先生之所_三云惺窩首_三肯之、其餘比比有焉、惺窩語_レ人曰、遊_三我門_三者可_三與談_三倭歌、可_三與說_三詩文、可_三與論_三史乘、可_三與話_三本朝、各有_三所_三好所_三得也、林忠則該_三兼之、況又格物志道之勤、固匪_三餘子之可_三企及_三乎、又曰、事理之疑滯、漢倭之故典、有_三欲問則悉質_三正于林忠_三而可也、何勞_三我乎、頃歲洛中自負_三之學者、其相語未_三必有_三雌_三伏于先生_三之意、在其座_三者以爲、彼此各無_三優劣、至于先生自_三駿返_三洛、而每_三其會集_三也、學術才調、固不_レ爲_三一般、於是皆知_三先生之高才超_三類也、五年己未、在_レ洛、一日謁_三惺

窩、告曰、江戶屋砌有瓠花、廼所謂夕顏花也、源氏物語、有五條夕顏巷之語、喧傳于世、今也洛之五條有宅一字、故去稔存、東武、揭夕顏巷三字于書堂、瓠瓢一也、顏子陋巷瓢飲、聊寓微意、惺窩大嘉之、裁倭歌并序寄之、乃以爲別稱、或曰顏巷、又曰瓢巷、先生家庭有石竹、故以蔚眠爲亭名、又堂稱尊經、又號雲母溪、然其膾炙人口者、羅浮及夕顏巷也、今歲九月惺窩卒、先生悲感作弔詩、他後爲之行狀、今般在洛也、依人之請、講春秋胡傳、書經蔡傳、每日開席、友生門人麇至、洛中學業熾昌、虛往實歸、以爲欣榮、迄冬又赴江戶、六年庚申十一月、次男長吉夭於洛、十二月先生有微恙、告暇歸洛、七年辛酉、在洛養痾、一夕喟然曰、壽夭脩短者命也、不足介懷、古人有云、但恨在世時、飲酒不得足、今我設無無妄之喜、則講學之不得足、斯所可恨也、旣而較愈、四月出京、周遊攝州紀州、洛於有馬湯泉、歷月還洛、西南行日錄之作在此時也、而後病痾、暇日披吉田兼好徒然草、演成其說、命示侍座者曰、其事在某書、某語在某卷、可援證之、可解辯之、講說話笑之際、不費安排、不煩搜索、而十四卷成矣、號野槌、

而槌行於世、一日勅賜宋朝類花新刻、今且以京尹板倉重宗傳詔旨、故謹加朱墨於勅本、附重宗就廷臣以達上之、十月赴江戶、八年壬戌四月、奉從台駕于日光山、九年癸亥夏、台德院殿大猷院殿入洛、先生扈從、大猷院殿任征夷大將軍、而後兩大臣還江戶、先生留洛、寬永元年甲子、先生四十二歲在洛、正月遊八瀨、有紀行、三月赴江戶、四月蒙旨奉仕大猷院幕下、自後日日候侍、或講論語、或讀貞觀政要、或說倭漢故實、又陪執政之、又預棠聽之事、今冬朝鮮信使來貢江戶、其副使恙弘重兼春秋館學士、先生因記疑問三則示之、弘重無答辭、又與進士李誠國筆語吟唱、十一月四男守勝產於洛、後改名靖、二年乙丑、幕府遊狩于河越子鴻樂子牟禮、先生無不從焉、三年丙寅五月、蒙命撰孫子諺解、六月撰三略諺解、又進大學倭字鈔、八月台席入洛、先生奉從還家時、外舅荒川宗意沒、卽會其葬、今度丁幸二條城、而後回台與于江戶、先生暫留洛、仲冬赴江戶、四年丁卯、叔勝旣成立、讀書穎悟、自洛屢致疑問、先生揚眉答之、五年戊辰四月、台駕躋日光山、先生供奉、九月遣入於京、問林入起居、而喚迎叔勝、

十月叔勝到江戶、六年己巳叔勝陪膝下讀藏書、五月有恙赴九相津溫湯、而篤劇、六月歸江戶、藥癯無效、十九日沒、齡僅十七、先生哭之慟、是月十六日、林入沒于洛、八十三歲、先生聞訃、與永喜同賜暇旋京、悲慕交加、十二月、又赴江戶、臘晦敍法印位、不其爲儒官故、先生作詩并序一解說之、七年庚午正月元日、披法服、獻一劍一馬、拜台顏、賜杯瀝、戴御衣一對而退、是爲恒式、五月聞宜人臥病、告暇發江戶、六月七日入京宅、此日振娘生矣、迨秋宜人快復、先生東行到伊勢桑名、時酒井忠世、土井利勝、爲使節上京、相值於茲、乃述鈞旨、使先生又入京、以今回有卽位之事也、登日先生入禁堀、窺見其儀、使畫手圖之、且作倭字記、與兩使同赴江戶、獻圖記、今冬兩大君、賜郭外上野之中百數十步之地于先生、爲其別莊、而將建學校、九年壬申正月二十四日、台德院殿薨、二月二日、先生稟命馳驛、五日入京、逢板倉重宗、相會廷臣、奏請前大君諡號、十三日赴江戶獻之、今冬尾陽大納言義直卿、搆一堂于上野別業、奉安聖像暨顏曾思孟像、且親書先聖殿三大字、以揭之、且納祭器件、先生創文庫藏群

書、又使畫工描伏羲神農黃帝堯舜禹湯文武周公孔子之聖容、顏曾思孟周子二程張邵朱子之賢影、凡二十一幀以藏之、頃來食祿加賜焉、十年癸酉二月丁日、初釋菜於先聖殿、四月十七日、台駕自東叡山過先生別野、御覽聖堂、先生蒙命講堯典首章、賜白銀若干、十一年甲戌三月、賜駿河大納言忠長卿舊館之中大厦一字、以移立于先聖殿側、是月執事酒井忠勝、登日光山、先生受旨副之、定彼山中之制、六月幕府入洛、先生供奉、作御入洛記、八月台轅旋江戶、先生留洛、十月携妻兒徙家于江戶、以官命也、十一月男恕初登營拜幕下、十二年乙亥正月、抄出倭漢法則獻之、凡三卷、今夏奉旨作武家法度十九條、并麾下諸士法度二十三條、十三年丙子正月、伊勢內宮外宮神官、拜禮前後事未決、廷臣之所議、以爲外宮可先之、幕下問之、先生謂內宮可爲先、因獻勘文、幕下可之、遣近臣持其勘文、入洛奏之、廷議無異論、二月獻倭漢荒政恤民法制二卷、四月日光東照新廟改造、幕下登山、先生從之、旣而作新廟記、以承教也、十二月朝鮮信使來聘、蒙旨與進士權僉一筆語、問朝鮮官制於信使、又舉彼

國書記之疑問數件示之、不能答、逮其歸國、先生草御書、且執政等復彼禮曹之簡、皆代作之、十四年丁丑春、幕府弗豫、夙夜侍營內、不還宅者日久矣、爾後貴體復故、七月執事堀田正盛傳命曰、揭經書之語爲論題、設問裁答、可以通台聞、先生乃製成之、待其日期、官事雜遷淹滯而有嶋原耶穌烏合之亂、遂不果、十五年戊寅八月十九日、永喜卒、年五十四、先生甚惜連枝之折、以儒禮葬之、十六年己卯七月、作無極大極倭字抄進之、依命也、十七年庚辰四月、正當東照大神二十五回忌、奉扈駕于日光山、十八年辛巳二月、有旨聚士林諸家系譜、使太田資宗監裁之、先生副之以訂正之、又別承命撰本朝神代帝王系圖、鎌倉將軍譜、京都將軍譜、織田信長譜、豐臣秀吉譜、十九年壬午、又別奉命撰中朝帝王譜十三卷進之、二十年癸未七月、朝鮮信使尹順之、趙綱、申儒來朝、先生與三使及進士朴安期贈答多矣、及其賜暇、御回簡并執政答札、先生作之、如丙子之例、八月十一日、嫡孫春信生、九月諸家系譜編纂成、命名曰寬永諸家系圖傳、以藏於官庫、是月執事酒井忠勝、松平信綱、爲使价入洛、依有讓位卽位之事、

也、先生副之、凡在洛四十餘日、先生年漸邵、而累歲不到京師、故洛人求紹价投刺來謁者數矣、匪嘗窺文字之輩而已、蓋以名聲籍甚之故、欲一見之幸也、仲冬歸江府、明年有革命之儀、菅氏之所奏上乃達江戶、召先生于御前被決之、十二月改寬永二十一年爲正保元年、先生六十二歲、是月中旬春常生矣、春信弟也、二年乙酉四月、幼君元服敍二品、任亞相、勅使來賀、先生作倭字記、去歲以來蒙命修本朝編年錄、隨成逐卷獻之、累年至宇多紀而輟、季夏而後、先生疾痛積久未痊、三年丙戌、宿痼未得神醫之助、每有諷謀、執事信綱屢來訊之、元老忠勝亦來談、而後信綱依命携官醫數員來議療養、時人以爲恩榮、旣而小效、偶有日光之一件、召先生於二丸便殿、聽乘輿入營內、到官食所而下之、進拜台顏、奉答顧問而退、識者謂、本朝嘗清公之後、又有此眷遇也、秋來鼎茵如常、遣振娘子京、嫁荒川宗長、臘月男恕加食祿、賜第舍、四年丁亥之春、恕造新宅居焉、先生授倭漢載籍一千餘部、以副本數百種二分畀靖也、其餘自藏之書、猶有鉅累焉、常告曰、他後可與春信也、宜人荒川氏最有內

助、故平生附以家事、而讀書自得焉、往往流憩別墅、乃構詩仙堂、慶安元年戊子、先生六十六歲、四月正當東照大神三十三回御諱辰、幕下登日光山、先生供奉、應命作其記、二年己丑二月、釋菜於先聖殿、邇歲公私多務、此儀暫闕、肆今再舉之、法式稍備、三年庚寅五月尾陽義直卿逝于江戶邸、先生慨歎、四年辛卯四月二十日、幕府薨、奉葬日光山、五月先生登山歸府、八月幼君任征夷大將軍、是度元老執政咨詢夥矣、其後作大學倭字抄、貞觀政要諺解、依執事阿部忠秋、爲獻幼君而請之也、臘月元老執政述先君之遺命、增賜武州之赤木村袋村柿沼村、以爲先生之采邑、承應元年壬辰、先生七十歲、二年癸巳四月、值大猷院殿三周御忌景、九月先生携男靖登日光山、拜新廟、因拜東照宮、歸程訪足利學校古蹤、閱上杉憲實父子寄納之五經註疏舊刊唐本、而僦得之、乃過其食邑而歸、有紀行若干篇、既而以彼舊本、與家藏五經正義、按離竄定之、三年甲午四月、靖也妻伊藤氏產男子、而後病不起、先生惻然、明曆元年乙未、先生七十三歲、今春承旨掄中華歷世名臣三十六人作之贊、又撰獻漢魏六朝唐宋百人一詩、今夏執事阿

部忠秋執達、賜銅瓦庫一字、建之家塾、匠人僉曰、箕伯不得摧之、屏翳不得陷之、回祿亦不可犯之、先生大悅、其未附恕靖之藏書、連篇累牘皆摺入焉、十月朝鮮聘价趙琦、俞瑒、南龍翼來貢、既到大坂、見先生所裁五花堂記、同感賞之、入府之後、拜禮畢而三使贈土宜數品于先生、亦是丙子癸未之舊例也、先生寄詩章而唱酬焉、既而御回簡執事之復書如前規、至將發府、而俞瑒號秋、投示扶桑壯遊百五十韻、以求嗣響、先生即辰燈下和之、靖隨其口占而筆之、一人在側、就其數句成而繕書之、翌日早竣、乃速馳達于小田原、秋潭愕然大稱譽之、作詩并序以謝之、先生復次來韻、追及於中途、世皆以爲曠古之偉事、日域之快談也、今茲宜人荒川氏、病患淹久、暫有驗而復劇、將不起而徵效者終年幾度矣、藥餌罔效、萬方求之、恕靖旦暮竭心、振娘亦自京來侍、先生自檢醫錄與衆醫胥議、二年丙申三月二日、宜人遂沒、葬以儒禮、下棺于別墅之隅、恕靖白先生私謚順淑儒人、五旬之後使恕臻洛、告諭姻族而歸、然後振娘旋洛陽、春信既十四歲、先生最鍾愛之、頃年口授四書五經等、先生既配昇家藏二

十一史于恕靖而後別得善本、有逐一考閱之起念、十二月應召出於御前、書格有大學、蒙旨講三綱領一段、三年丁酉正月十七日、任例詣紅葉山、還家氣宇乖恒、十八日江戶火起、恕宅燬矣、書倉獨存、十九日江戶又火、本城投煙、大君移御座于西城、氣焰漫天、先生宅亦焚如、銅瓦庫別庫皆成灰燼、靖文庫幸免而已、乃各赴別墅、先生輿中唯有所讀殘之梁書一冊、其不頃刻廢讀書者如此、先生以銅庫蕩盡、故嗚咽不止、曰百年累之一朝廢之、古人以爲他日子孫之誡、豈圖今在回祿氏也、因以病臥、官醫各羅災不辨其所、有偶呼一醫於近傍、用其湯藥、二十二日遣恕登西城、奉伺幕府之尊候、是夕先生痰壅、又呼他醫治之、二十三日恕告事由於執政、廼命官醫診之、未到先生精神不亂、被扶起猶啜稀粥、與所把刀圭之醫相語、且眷視嫡婦及諸孫、且命告家人也、恕靖春信春常不離其側、采邑之老民聞江府之災馳至焉、家人達之、先生曰善哉來也、其言語猶明、少焉吏部源忠次、聽其危篤、使脉子來問之、先生啓眼謝之、聲未甚啞、旣而氣息奄奄泊然而逝、是日未時之景也、其終焉之不變動也固如

此、春秋七十五、至是官醫漸及門、而空返、此夕小斂、而後、穿穴、灰隔、治棺、大斂、魂帛、銘旌等、徵文公家禮、恕靖同議私謚文敏先生、二十九日奉葬于別墅之隅、門生來會、而馬鬣封小石碑成矣、計聞貴卿侯伯元老執政群僚士庶等、相識之輩弔問甚多、而後西京畿內東州北陸南海筑紫、近者遠者、四方驚聽、述弔殊不尠、而閩國歎惜焉、旣而恕新厦甫就、建祠堂安神主、而祀祭盡誠、靖等預焉、嗚呼先生爲人恭遜謹恪、內外之出處常常固不改焉、以其和順優容、故歷事幕府四葉、未曾逢其忤責、而前後執政各無所謗害、以其不夸才、故凡百之人皆不嫌忌之、其宦遊多年、故貴介侯伯所相識者不少、其有偶遇之則不以貴高之、不以枉屈之、時措之宜、就中或有嚮學問事而所傾接之、則亦任其禮際而已、其家儀儉簡、周身之奉隨其所、當以不整飾、而或招賓客則治具盡意、至于尋常門客亦有特飲食之、則不爲粗率、凡其往往饋遺之禮、亦隨分而無所缺忘、其有所不平、則怒形於色、然而早解矣、不蓄積忿、不念舊惡、性不飲酒、不放假流歡、起居之候、寒暖之節、保養謹焉、故偶值微疾、而不至增重者時有

之、凡一生之際、讀書孜孜隨處展看、不_レ必芸房文案也、每披_レ件件之卷、乃無_レ不_レ終其顛末、臨_レ登營及他往、而猶握_レ鉛槧、監輿既設矣、奴僕既待矣、告_レ之再三而整束殘編、以出矣者比比然矣、迄_レ還宅而更服即執_レ朱墨、凡夜讀逮_レ中宵而不_レ罷、或坐睡、或盤寐、爲_レ其暫交_レ睫而復起也、故先不_レ解帶就_レ寢也、其臨_レ講筵也、舌端圓熟、是以文義昭晰、理趣貫究、且答_レ其問、質_レ其疑者、詳悉而靡靡不_レ倦、故執_レ經問_レ字之輩、皆如_レ群_レ飲河而各充_レ其量、譬_レ諸撞_レ鐘、其小鳴大鳴者、隨_レ彼堅木之力而已、惟其大扣_レ之者罕矣、可_レ以嘆也、其所藏之書初未_レ敢秘_レ之、壯歲嘗有_レ人借見而還_レ璧之、不_レ納篋、不_レ包貼、紙隅垢污、墨沫點染焉、於_レ是不_レ滿意、而後不_レ許_レ容易借_レ人、雖然依_レ其志之深腆、望之精勉、而乃喜而示_レ之、世俗以爲_レ一偏靳固、不_レ必然也、凡人呈_レ所作之詩文、以乞_レ批改、一見知_レ其可否、再覽以是_レ正之、加_レ兩三語而文主意一新矣、易_レ一二字而詩之精采頓異矣、口中之雌黃、筆下之妙削、點_レ鐵成_レ金、琢_レ石發_レ光者也、拙篇惡詩亦得_レ不_レ至唾擲者多矣、昔胡康侯其子弟或近出燕集、雖_レ夜已深猶未_レ寢、必俟_レ其歸、問_レ其所

集何客、所_レ論何事、有_レ益無_レ益、以_レ是爲_レ常也、先生之於_レ恕也靖也亦相同、其以_レ流光可_レ惜前修可_レ企、而耳_レ提面_レ命之_レ者在_レ友生門人_レ亦丁寧焉、先生之博學不_レ可_レ得言、既通_レ五經四書之舊註、而覃_レ思于程傳朱義也、朱子集傳也、蔡氏傳也、胡子傳也、陳氏集說也、朱子章句集註也、新加_レ訓點、且讀_レ易而有_レ羅山手記、讀_レ書而有_レ渾天儀考、讀_レ詩而有_レ六義考、讀_レ春秋而有_レ劈頭論、遍讀_レ三禮初而墨點于周儀二經、乃欲_レ特作_レ倭曲禮而不可_レ果也、有_レ論語解、孟子要語解、大學解、中庸解也、精誦_レ左氏而公穀之點訓始爲_レ之也、玩_レ索考經數家、惜_レ孔子傳之絕_レ失于中華而作_レ諺解也、熟_レ讀爾雅而朱_レ點之、乃欲_レ別修_レ倭雅而不_レ全就也、旁通_レ漢唐諸儒之說、而潛_レ心于濂溪明道伊川橫渠康節考亭之手澤、且宋元明儒之裨_レ道學、翼_レ聖經者莫_レ不_レ咨證也、象山姚江等、陽儒陰佛之學、亦能覷_レ破之、嘗輯_レ一書、以_レ陽明攢眉_レ名_レ之、先漢之史存_レ于世者繙_レ之釋_レ之、串_レ習三史、而陳壽以下之諸史亦轉_レ覽之、滴_レ露于朱文公之續春秋合部、往往講_レ之爲_レ之手抄、而續編前編等皆研_レ朱焉、涑水之通鑒、朱批者前後凡兩本、而劉氏之外紀、金氏之前編、薛氏

之宋元等、且古今之別乘、小史、史論、史評、悉讀過焉、老莊之衆家、審其得失、改其異同、以得其要旨、而管晏、列文、關尹、鵠冠、鬼谷、子華、楊墨、荀卿、申商、韓呂、淮南、楊子等諸子、皆披矚而區別之、蚤讀蘇黃集、知其語脈、乃閱李杜韓柳、廼誦楚辭文選、而歷代件件之類集、各家之別集、任所有以該觀之、風雅之正、騷賦之變、古文、古詩、樂府、四六、散文、律體、長短之製、大膽放心之分、五七雜言之品、世風之不一、樣、家法之無同途、凡文也詩也之錄則、筌式、辨法、評品、格眼、話談、大搜尋之、而得之心、應之手、高步于文壇、雄揚于詩場、凡鉅篇長韻咄嗟辨矣、如取室中物、述某事、就某題、而思之發于言、也油然、言之彰于筆、也沛然、而無所碍、無所斂、也、與彼尋常無平日該聞之勤、臨期忽忽點檢書冊、以爲一時之趣者、天淵不翅矣、其文成而更改、吟罷而長吟、亦在興寄之所從也、先生嘗曰、無材料、則屋舍不可得建矣、屬文亦然、古人取材建安之類是也、所謂行秘書也、胸中之國子監也、五鳳樓修造手也、不可不思焉、不可不勵焉、況有以匠師之良、爲進學之喻乎、況又成周之政教、有梓材之書堂構之語乎、

又泛覽兵家之書、其於七書也、孫註十一家、施氏講義、劉氏直解、委曲探窮爲之諺解也、又歷視醫書、提其綱、雖不啻咀診視、而病狀藥名諦察之、當時衛生家之子、陪書幌者不絕矣、先生時時諭之曰、中華鴻術者之遺事、粗見于醫說醫學源流醫學入門、然皆疎脫矣、近歲意庵宗恂之名醫傳略亦不備也、卿曹有意則余爲修醫家言行錄也、各稱諾于席上、而不起行之故不果也、字書韻書亦多攤展之、嘗曰、說文之行于今者、以五音爲次序、其卷數又與叔重之元本既不同也、孟氏之韻會百卷未見是恨也、今世通行之海藏韻略、其不採六經之字甚多矣、雖爲禪徒之所輯成、而胡然無眼睛之至此也哉、不足信焉、因寫黃氏韻會之正文、以實座右、又瞥看道書全集、而參同契時見之、壯年偶披空同道士鄒訴註本、而後欲再覽之、遂不得也、鄒訴是朱文公之匿名也、佛氏之書亦多見其頭腦者、初大神君之召諸宗群僧于駿城也、老苾芻、點沙門、逢先生而語其奧旨要義者有焉、故不求而得之、不勞而聞之、他後其書之觸目而參錯以愈該之、前輩有云、吾儒之闢佛氏、有三、有真知其說之非而痛闢之、

者、兩程子張子朱子是也、有_レ未_レ能_二深知_二其說_一而常喜聞_レ之者、篤信_二程張數子_一者也、有_レ陰實尊_二用其說_一而陽闢_レ之者、皆哉言也、其暫成_二援_レ儒之形勢_一、而中情直向_レ佛域、其陽關陰用滔滔是也、廼讀_二聖賢之經_一、廼信_二先儒之訓_一、而泛然以爲彼是異端也、儒佛不相爲謀_一也、不_レ由_二宋儒之門戶_一、而何處可_レ入乎、可_レ謂_二篤信_一耶、然而不_レ知_二彼爲_二何等之說話_一也、先生旣已如_レ此、瞿曇之初教云云、竺僧接承之意云云、漸入_二中華_一云云、羅什之舊譯云云、惠遠僧肇之才辨云云、教家之流別云云、龔齔氏之法派云云、玄奘之新譯云云、其剽_二掠老莊_一云云、其與_二吾道_一似而非者云云、果不_レ可_レ混同者云云、其所_二以迷_二陷之_一云云、其所_二以排_二斥之_一云云、皆歷_二歷粲粲于方寸地_一、故廓然不_レ紊、坦然不_レ疑、匪_レ真知_二其非_一而痛闢_レ之者乎、且夫周秦漢魏六朝唐宋元明之叢書、類編、稗說、雜錄、車載斗量、凡涉獵之功不_レ可_レ枚計、其於_二本朝_一也、以_二舍人親王之書紀_一爲_二正史_一、參_二諸馬子安麻呂之兩書_一、自_二眞道繼繩之所_一紀、至_二時平善行之實錄_一、從頭看_レ之、日本後紀之泯沒也、常以爲_二深憾_一、凡年代之記載、廷省之典章、官位之敘次、氏族之圖系、朝野之著述、倭字之群籍、隨_レ手而閱_レ之寫_レ之、

不_レ遑_二縷陳_一、抑清慎公之新國史今世不_レ存、是故寬平以後無_二實紀_一、一旦依_二尾陽侯源敬之懇請_一、而博訪詳考以作_二宇多紀略_一也、其欲_レ修_二本朝綱目_一之素志久矣、以_二載籍不備闕年欠_一考、故待_レ官家遣_二陳農于五畿七道_一之後、乃不_レ遂而止、可_レ歎也、可_レ惜也、嘗曰、本朝之神道是王道、王道是儒道、固無_二差等_一、所謂唯一宗源、所謂理當心地、最可_レ盡_二意_一、彼卜祝隨役之輩、謬傳_二譁說_一扇_二感流俗_一、矧又兩部習合本迹緣起之談、黷_二神誣_一民之甚乎、神社考之作以_レ此、又曰、官臣之文章不_レ出_二駢儷之窠臼_一、不_レ免_二詢膚之議_一、然而敦厚猶或近_レ古也、五岳風月之禪子、頗窺_二唐宋之藩籬_一、固有_二卓越之才_一、然而尖露儘乏_二餘味_一也、其於_二倭歌_一也、素不_二深屬_一意、然而萬葉之古調、古今集已下、世世之風、人人之體、固昭_二察之_一、往往自詠以遣_レ興、少小而後嗜_二於挾_一策、不_レ專_二於臨池_一、故其書體不_レ爲_二絕奇_一、然而不_レ野不_レ俗、惺窩云_レ爾、且其古文之波點、草字之分毫以了_二知之_一、中華名達之筆樣、本朝諸家之墨痕、多_レ所_二鑑賞_一也、加旂朝鮮國之世紀俗傳人物儒錄篇藻、併_レ其與_二中華本朝_一往來之故典、以歷_二視之_一、至_レ若_二南蠻耶穌之記_一亦電_二囑之_一推_二其邪端_一、所謂世間有_レ字之書、莫_レ不_レ見

者先生是也、吁嗟至廣矣、至備矣、壯歲口號有云、脚下風波千萬里、粟田仲滿是男兒、其慕華風者灼灼矣、本朝之古、遣唐使之名字煥發青史、粟田仲滿其尤也、是故及此、中世久廢、鹿苑相公治國之後、禪衲祇此役、嚮者慶長元和之際、事不出此、而不使先生膺其選也、命矣哉、平日間居歎曰、余非自以爲老于文學、然而得值文物之世、則誘導生徒、隨其所長、而卦爻象象之學、典謨訓誥之學、三經三緯之學、三百三千之禮節、勸善懲惡之四傳、宋儒之格言也、正史之學、編年之學也、文辭之科、詩律之品也、兵之律覽醫之課業、百家之腰列也、本朝之紀年神道等、各宜指授之、其如此、而負笈之徒日繁、執業之儔月盛、民俗一變、儒教渤興、庠序學校之大道、充盈于烏卯者、可以期乎、其不降生于中華、而與有德有才之人講習討論也、甚遺恨也、否則本朝昔在雖無服膺儒風、而用力之深者、亦是戶戶讀經典、人人携史籍、釋奠施于群國、文藝到處不爲石勒、倘得托胎于登時、則猶可也、吁夫近世文業墜地、其興起省察者、惺窩也、余固就而請益矣、下世已久矣、所相識所來從之、可以談論者、零落歸泉、方今無知己無同志、唯是上師聖人、下友群賢、優游卒歲、以忘老而已、嘗在病床、手不釋卷、有來訪者、曰、公今何不廢事、頤性乎、先生笑曰、世之喜歌舞者、不可一日無歌舞也、嗜技術者、皆然矣、病中亦以慰悅矣、彼哉彼哉、余之讀書、不獲暫歇、豈以爲勞煩哉、呂伯恭垂危、病中猶不怠于日業、況今不劇重乎、且夫痒癢疾痛之切、吾身宜念克己之戒也、先生性氣充實、處事不怠、兩眸明朗、久視不瞬、至老夜讀、細字不用眼鏡、其記憶亦無減失、而有所偶忘、則恬然不以係意、不耻下問、或有兒輩門生之省識、則欣然曰、汝善誦之、前程勉旃、其不娟猜而扶勸人之學也如此、見有術才誇能者、則警諭之曰、吾子精誦四書六經乎、弘覽世史通鑑乎、閱究諸子九流乎、博涉百家文章乎、撮知說文玉篇乎、普閱日域之事乎、其千萬之一端也、亦不得暗記決矣、明矣、假饒如所示、而固不可自贊、況其不然乎、以萬卷之中一事不知爲深耻者、難中之難也、吾子宜懲責、勿憚改過、謝良佐之立志、乃能去一矜字、得程子之稱美、信矣哉、見有懶放倦業者、則懇誘之曰、中道而廢是夫子之所責也、自暴自棄是孟子

之所歎也、懶不可不戒也、心不可以可放也、倦可移之于勤也、業豈可不修乎、且又余之少壯也、世上書史尤罕矣、儼之、之、辛苦佔畢焉、方今黃卷赤軸固不難得、而每歲新到長崎港者汗牛充棟、而慢散空閑、斷送烏兔、悲哉、昨非今是、須致思焉、其論學者之雅言曰、夫萬古一理、無古今之差異、夷之別也、天道靈默不爲諄諄、其代言者上古聖神也、聖神逸矣、其垂憲者墳典也、賢哲不常在矣、先聖夫子刪述六經、其功之過于堯舜也大矣哉、既而洙泗之間斷斷如也、有亞聖孟子出焉、而後道喪千歲、聖遠言湮、惟夫周公不繇師傳、默契道體、而授之兩程子、此時闢有橫渠、洛有康節、而程門之道南矣、道脉三傳乃至朱文公、其所以集諸儒之大成、固不費辭、統而論之、其大開斯道、全起聖學者、上之夫子下之文公也、末俗小儒、吹毛吠聲、妄議文公、固不足掛屑吻、凡學業者可深致思、抑博文約禮、博學審問、信是孔氏之善教也、根本固地位定、而強記多識固其所也、通天地人曰儒、不亦然乎、所謂反鏡索照、貫櫪還珠之前訓、莫草草看過也、先生之才名初彰、於洛宅之隣閭、乃聞於九重之四畔、以

發於他境、施東土、顯於西州、遍布於六十餘州、而兒童誦之、走卒知之、之、遂達於雞林、傳於中朝、偉矣哉、輿論僉云、本朝數百年來間出之碩才也、幕下之士阿部正之一日邂逅、語杏庵正意曰、聞今時博物者羅山子、而其次之者足下也、吁、難得之才也、正意答曰、羅山則誠然矣、以彼文學一生于方今之日域、而不得展布也、甚可惜焉、吾儕十餘輩雖累之、而豈望一羅山乎、匪所以可侔稱之、正之曰、予固不學無所辨知、今聞所告、彌知羅山之不可及也、足下之直說不夸不耀、最可感讚也、仄聞元和年中、大明福州人單鳳翔適來京師、想先生之風采、頗稱可之、寬永甲子丙子、朝鮮專使之不能答先生之問條者、有所素聞其治才、而且無遑于當務之多事耶、癸未之聘使、欲修交誼而不遂矣、進士朴安期一見筆語曰、不佞在海東、聞羅山之名久矣、而後詞札往復推之爲老先生、且逢此方之畫手圖其肖像、請先生爲之贊、攜歸以爲榮也、明曆乙未之信使趙珩、回簡于先生曰、嚮因使行、聞盛誼素矣、俞瑒曰、日域之文章以羅山爲第一、皆是不爲溢美、不爲虛譽也、嗟夫本朝之古、閎學之人世世不乏、

匪當流俗競唱菅丞相也、迨乎近世、猶有藤長親探海之學、藤兼良廣覽之務、雖然合併而試察之、其所觸手之牙籤軸軸、彼各未及此之甚多也耶、先生之琅琅瑩瑩、豈翅鄴侯三萬軸而已哉、抑又尊信孔孟道、迺彼之所不足也、闡揚程朱之旨、迺彼之所未得也、近來世敬聖賢一人知宋儒者、先生寔是嚆矢也、先鞭也、然則可謂高立獨立于扶桑國裏往古來今之際也、鈞之是人也、而其出類若茲、謂之人中鳳凰麒麟也、亦可不誣焉、世之瑞也、邦之傑也、其翼之不得張也、足之不得展也、時也勢也、人不_レ知而無_レ慍、不_レ見是而無_レ悶、先生有焉、然而歷仕之台眷未_レ必爲_レ不遇乎、含默恬靜終始如一、視夫躁進英銳之苟誇自矜者、大有逕庭、粵指揮經生槩人、而不_レ得_レ爲_レ校黌之宗主也、諒爲_レ先生惜焉、其剪脫蒼華者、往歲台旨之固辭而不_レ及、躲避而難_レ得也亦惜焉、懸車過_レ期內外繁務、白駒駸駸亦惜焉、先生既已高年也、然而世之入_レ毫涯_レ開_レ九帙_レ迫_レ于期頤而偶或超_レ之者亦不_レ爲_レ無也、先生聰明不_レ衰、眠食不_レ損、其以_レ黃髮鮐背_レ期_レ之者、不_レ獨我儕及族屬徒弟也、人望亦多然矣、亦是可_レ惜焉、先生平生詩文囊幾許

矣、一時之鳴_レ硯、卽席之走_レ筆乃無_レ稿草者、慶長元和之作想可_レ殊多矣、其勒成_レ冊子者若干編、罹_レ丁酉之災、恕也參_レ攷副本亂稿、而遍搜_レ于諸方、靖也助_レ其事、而後類_レ纂之、凡文集詩集各七十五卷、其逐年之事實、恕也作_レ年譜而委悉焉、且所_レ編著之書極衆矣、恕也別記備矣、今不_レ贅_レ於此、

萬治二年己亥季冬

小子靖謹狀

舜水先生行實并略譜

○行實

門生

今井弘濟謹撰
安穢 覺謹撰

文恭先生諱之瑜、字魯瑛、魯作楚非也、印章訛刻楚瑛、不復改刻、故人或稱楚瑛、姓朱氏、號舜水、明浙江餘姚人、其先封_レ邾、春秋所謂_レ子也、後改爲_レ鄒、秦楚之際去_レ邑爲_レ朱、漢興流_レ轉魯魏之間、在_レ東漢時曰_レ暉曰_レ穆、俱顯_レ于世、亦先也、元季明太祖高皇帝定_レ鼎金陵、當時遠祖某闕名、其帝之族兄也、雅不_レ欲_レ以_レ天潢、爲_レ累、帝物色累徵、而某堅臥不起、帝不_レ能_レ奪、家居終_レ身、改_レ姓爲_レ諸、漢音、朱諸、音相同、及_レ耐主入_レ廟、題_レ姓爲_レ朱、子孫復_レ今姓、高祖龍山處士、闕名、不_レ仕卒_レ家、高祖妣黃氏、曾祖諱詔、號_レ守愚、累歷_レ顯職、詰贈榮祿大夫、曾祖妣孟氏、詰贈夫人、祖諱孔孟、號_レ惠翁、詰贈光祿大夫、祖妣楊氏、詰贈夫人、父諱正、字存之、號_レ定寰、別號位垣、累遷_レ總督漕運軍門、及_レ卒詰贈光祿大夫上柱國、妣金氏、前封安人、詰贈_レ一品夫人、先生其第三子也、以_レ明萬曆二十八年庚子十月十二日申時_レ生焉、幼而穎悟絕倫、殆若_レ成人、九歲喪_レ父、哀毀踰_レ禮、初從_レ

慈谿李契玄_レ學、及_レ長受_レ業于吏部左侍郎朱永佑、永佑字爰啓、號_レ聞遠、登_レ甲戌進士第、歷_レ太常寺卿、松江華亭人、及東閣大學士兼吏戶工三部尚書張_レ肯堂、號_レ觀淵、爲_レ福建巡禮部尚書吳鍾繹、鍾繹字號_レ設舟、登_レ甲戌進士第、歷_レ廣東廣西等處提刑按察使司按察使、常州武進人、研_レ究古學、特明_レ詩書、初爲_レ南京松江府儒學學生、所謂秀才也、小抱_レ經濟之志、動輒適_レ禮、宗族及鄉先生多以_レ公輔_レ相期、弱冠見_レ世道日壞國是日非、慨然經_レ進仕之懷、而有_レ高蹈之致、每對_レ妻子云、我若第一進士_レ作_レ一縣令、初年必逮係、次年三年百姓誦_レ德、上官稱譽必得_レ料道、由_レ此建言必獲_レ大罪、身家不_レ保、自揣淺衷激烈不_レ能_レ隱忍含弘、故絕_レ志於上進_レ耳、鄉黨每有_レ疑難、先生片言折_レ之、嘗有_レ人携_レ家譜_レ來謂曰、我朱文公之裔也、文公之子爲_レ餘姚令、子孫因家焉、意欲_レ認_レ先生爲_レ同族_レ、及_レ閱_レ譜世系大同、而唯有_レ一世可疑者、宗族皆欲_レ從_レ之、先生正_レ色曰、一世不_レ明則餘不_レ足_レ據、方今九族尚不_レ能_レ敦睦、何用捨_レ近求_レ遠耶、狄青武人尚不_レ認_レ仁傑、若能自立自_レ我作_レ祖棄_レ其先德、則四凶非_レ聖人之後_レ乎、宗族皆服_レ其卓識、而從_レ其言、先生始娶_レ葉氏、先歿、繼妻陳氏志意克諧、事_レ姑盡_レ孝、能安_レ貧賤、有_レ短裳挽鹿之風、年至_レ四十、欲_レ

棄舉子業，退安耕鑿，諸父兄弟愛其器度可大用而不許，於是每逢大比，徒作遊戲了事而已，或有勸顯達者，則恬然不省，崇禎某年提督蘇松等處學政監察御史开某名聞，舉文武全才第一名，薦文於禮部，崇禎十六年癸未十月幕府辟爲監紀同知，不受，尋擢恩貢生，考官吳鍾巒貢簡稱爲開國來第一，十七年甲申詔特徵，不受，弘光元年乙酉正月又詔徵，亦受，四月卽授江西提刑按察司副使兼兵部職方清吏司郎中，就家拜官，監荆國公方國安軍，不拜，於是臺省交章論劾之，瑜偃蹇不奉朝命，無人臣禮，先生卽不別家人，星夜逃避海濱，此時左良玉之子夢庚背叛，報急羽檄張皇，故得免於逮捕，旣而自舟山至日本，轉抵交趾，未幾還舟山，隆武三年丁亥永曆元年，舟山守將招討大將軍威虜侯黃某名聞，承制授呂國縣知縣，不受，十月又題請監察御史管理屯田事務，亦不受，聘請軍前贊畫，不就，永曆五年辛卯舟山諸將互抱疑貳，欲相屠殺，清兵將至，先生豫料禍敗，欲自舟山至安南，而阻風轉至日本，先生素與經略直浙兵部左侍郎王翊號完深相締結，且與舟山諸將密定恢復之策，時王翊兵勢頗振，屢立戰功，

蓋先生所以屢至日本者，欲以王翊爲主將鄉導，而借援兵也，然在日本未嘗露情洩機，旣而王翊戰敗被擒，不屈而死，久之先生得聞其訃，然莫詳其月日，乃以八月十五日設祭祀焉，哀悼激烈發于其文，爾來每逢八月十五日杜門謝客，愴然不樂，終身廢中秋賞月，自是而後先生歸路梗塞，然以日本禁淹留外邦人，復過舟山，六年壬辰王五年，監國魯王駐蹕舟山，時安洋軍門劉世勳疏薦監紀推官，不受，吏部左侍郎朱永佑擬兵科給事中，旅改吏科給事中，亦不受，禮部尚書吳鍾巒擬授翰林院官，先生自書履歷曰翰林院官大則坊論贊允小則修撰編簡乘命未下再三力辭故不知係何官，辭而不就，時先生有浮海之志，偶在舟中，爲清兵所迫脅，自及合圍，欲使就降，髡髮先生誓以必死，談笑自若，同舟劉文高等七人感其義烈，駕舟送還舟山，因是巡按直浙監察御史王某閩名嘉其節操，薦舉孝廉，不受，上疏固辭，文在集中，時天下大亂，憲綱蕩然，先生雖有志於匡救，而時事不可爲，故累蒙微辟，十有二次，前後力辭，七年癸巳監國六年，七月復來日本，十二月復赴安南，先生雅有意於經歷外邦，而資恢復之勢，是故東南海外雖暹羅小夷亦曾至焉，

監國九年丙申三月、魯王特勅徵、勅書載在文集、勅書降自舟

山、而先生東漂西落、莫能速達、至明年丁酉正月、始

達交趾、先生特制處士衣巾、設香案、開讀叩頭謝

恩、獻歡慷慨、欲自海路起思明、而就徵、適遭

安南之役、不果、所謂役者、是時安南國王檄取中原

識字人、差官舉以先生、一時掩捕如擒寇虜、而使

先生面試作詩寫字、先生不作詩、但書、朱之瑜浙

江餘姚人、南直隸松江籍、因中國折柱缺維、天傾日喪、

不甘薙髮從虜、逃避貴邦、于今一十二年、棄捐墳

墓妻子、虜氛未滅、國族難歸、潰毫憂焚、作詩無取、該

體作色、該體交趾吏目、百般恐嚇、欲令屈服、而先生毫無沮

色、其間往復之言、忠憤義烈、激切慨然、夷人亦爲之

改容、遂將至外營砂、國王屯兵之所、即日命見、文武大臣悉

集、露及環立者數千人、意欲令拜國王、或慰諭焉、

或怒逼焉、先生故爲不解、其狀、差官舉仗畫一拜

字於砂上、先生乃借其仗、加一不字于拜字上、又

牽袖按抑、令拜、先生揮而脫之、國王大怒、令長刀手

押出西行、先生毫無顧眄、揮手即行、心決一死

耳、遂將赴該舫所、於是闔國君臣震怒、必欲殺之、

而先生執意彌固、有黎醫官者、從容勸諭曰、君必不

拜見殺無疑、何不_三自愛_三至此、先生厲聲曰、今日

守禮而死、含笑入地耳、何必多言、次日黎明、自取

牖下水洗沐、更衣撮土向北拜辭訖、埃天明、內

樓供奉勅書、拜附呂蘇吾、囑託後事、謂黎醫官

曰、我死後料爾輩不敢收骨、如可收、乞題曰明徵君

朱某之墓、國人稍稍探知其無辜遭難、乃有嘆服而

稱奇者、國王亦差人訪察舉動、知其履歷事實、於

是擅殺之計弛、而任用之心萌矣、然先生未之知

焉、獨在困厄之際、惟恐身名埋沒于外夷、而無達

于天朝、乃密草奏疏、且錄遭役本末、封付王鳳

使上於魯王、文在安南、數日國王致書于先生、令仕、

有太公佐、文在安南、周而周王、陳平在漢而漢興等語、先生復

書拒之、書見安南、自此而後、闔國君臣悉知先生貞

烈義勇凜乎不可犯、反相敬重、如國王之弟、亦至

稱爲大人、其敬服如此、時國王遣人書一確字來

問、先生解以堅確之義、遂使先生作堅確賦、文在安南

事、供役紀事、先生既無拘留之患、欲浮海而歸、乃作書辭

國王、文在安南、歸至會安、寓中盜竊聲空、親友皆言、

是居停所爲、顯有證據、而先生明察非寓主之所

涉、諸人嗟歎、謂非_二常人所能也、其後先生錄_二遭_一役
本末往復事實、名曰_二安南供役紀事_一、附于文集先生欲_二歸_一
桑梓、潛察_二中興之勢、而屢經_二窘迫、資裝價耗、乃又
上_二疏魯王、陳_二其情狀、文在安南供役紀事明年戊戌夏、又至_二日
本、蓋因_二魯王之召、而欲_二從_二日本_一抵_二思明、親據_二情
實而決_二去就也、是時海內幅裂、兵革鼎沸、欲_二從_二安
南_一直赴、則行路艱澁、是以欲_二取_二海路、而舟山既陷、
先生師友擁_二兵懷_二忠者、如_二朱永佑吳鍾繼等_一皆已死
節、先生聞_二之進退狼狽、然欲_二審_二察時勢_一密料_二成
敗、故濡_二滯沿海、艱厄危險萬死如_二髮、於_二是熟_二知聲
勢不_二可_二敵、壞地不_二可_二復、敗將不_二可_二振、若處_二內
地_一則不_二得_二不_二從_二清朝之俗、毀冤裂裳髡頭束手、乃
決_二蹈_二海全_二節之志、以_二明年己亥_一、日本萬治二年又至_二日本、
先_二是筑後柳川有_二安東守約者_一、號省庵欽_二其學植德望_一
師_二事之、深體_二先生忠義之心、知_二其歸路絕宿望沮、固
請_二先生留_二日本、先生從焉、乃與同志者連署白_二長崎
鎮巡、鎮巡許_二之、然先生流離屯蹇、四海空囊、孤身飄
然、不_二能_二自支、守約乃分_二祿奉_二其半、先生辭以_二過多、
守約曰、先賢有_二以_二麥舟_一救_二朋友之急_一者、古人稱師
與_二君父_一所_二在致_二死、況其餘哉、然則義當_二悉獻_二年

俸、自取_二其三之一、然辱愛深恐不_二許_一之、故今取_二其
中、以分_二其半、若非_二其義、非_二其道、則奉者受者猶之
匪_二人、老師高風峻節、必不_二受_二不義之祿、豈以_二守約
之所_二奉爲_二不義之祿乎、守約百事不_二如_二人、惟於_二取
與_二欲_一盡_二心以合_二理、若拒_二之則爲_二匪_二人也、豈相愛
之道哉、先生重辭以_二心不安、答曰、守約爲_二生豐_二於
老師、則豈於_二心安乎、縱使傾_二家奉_一之志則在矣、難以
致_二久、故酌_二其宜、以中_二分之、有餘則不_二在_二此限、不
足則亦不_二必如_二此、願不_二過爲_二慮也、守約尊_二信老
師、本非_二爲名、老師愛_二守約_一亦豈有_二私、惟欲_二斯道
之明而已、先生乃知_二志不_二可_二移、而許_二其所_一請、自
是守約仕宦之暇窮_二微探_二蹟、學術頓進、先生雖_二客寓
於茲、莫不_二日向_二鄉而泣血時背_一北而切_二齒、惟以_二邦
讐未_二雪爲_二憾、不_二以_二闔室既破爲_二悲、所_二恃者舊邦
二三之忠臣、所_二仰者明室累世之積德耳、辛丑歲_一
守約問_二明室致_二亂之由及恢復兵勢_一、先生乃撰_二書_一
卷_二答_一之、名曰_二中原陽九述略_一、附于文集先生幼時嘗夢_二
夜暖浴霜月風輕薄露水二句、因以_二溶霜_一名_二齋、而未
知_二其兆、及_二在_二日本_一習_二其風土、恍然自悟曰、吾漂_二
零海外命也夫、癸卯_一三年、春長崎大火、先生僑屋亦蕩

盡、因寄寓于皓臺寺廡下、風雨不蔽、盜賊充斥不保旦夕、守約聞之曰、我養老師四方所俱知也、使老師餓死、則我何面目立乎世哉、即時赴之、拮据綢繆而還、甲辰四年、我宰相上公遣儒臣小宅生順於長崎、採訪碩德耆儒、生順屢詣先生談論古今、謂先生曰、東武若有奉先生爲師者、能東遊否、先生曰、興學設教、是國家大典、而在貴國爲更重、我深有望於貴國、但以我才德菲薄、何遽足爲庠序之師、至若招我、不論祿而論禮、恐今日未易輕言也、惟看其意何如耳、及順歸、上公備聞先生才德文行、明年乙巳五年、稟明公廷聘、召先生、先生乃與譯者及門人議其去就、皆曰、上公好賢嗜學、特召先生、不可違拒、先生乃應其聘、七月至武江、自是禮接鄭重、待以師友、八月上公就邦、九月迎先生、至水戶、十二月歸武江、丁未七年、八月又至水戶、每引見談論、先生援引古義、彌縫規諷、曲盡忠告善道之意、上公亦與之論難經史、講究道義、冬上公鑄鐘簠于城樓、以備警時、乃使先生作銘、自書于鐘、及上公搆高枕亭于綠岡、又使志其亭、先是上公欲爲先生起第于駒籠別

莊、先生力辭數四、且曰、吾藉上公之眷顧、藏孤蹤於外邦、得養志守節而保明室之衣冠、感恩浴德莫之大焉、而不能報其萬一、至于衣之食之或豐或儉、則未嘗置之懷抱也、且吾祖宗墳墓喬木秀美、想必爲虜發掘剪除、每念及此、五內慘裂、耻逆虜之未滅、痛祭祀之有闕、若豐屋而安居非我志也、上公慰諭懇至、乃勉從之、甲申八年、二月歸武江新第、先生常念守約傾心之篤、每通書信、或寄黃金衣服、以摠情素、守約領其輕、還其重、先生乃代金以絹帛、書諭之曰、昔及相見、分微祿以爲其半、瞻不佞、賢契敝衣糲飯樂在其中、蓋以我爲能賢、以爲道在是也、豈有有道之人而忘人之德者乎、賢契而忘之則可也、不佞而忘之尙得謂之人乎、大凡賢者處世、既當量己、又當量人、賢契自居高潔、則不佞處於不肖矣、不幾與初心相紕繆乎、況非所謂高潔乎、自是不敢拒、而受之、己酉九年、先生歲七十、自以年老神耗、欲辭西歸、乃啓陳其意、上公嘉其肫篤、慰勉欵曲、先生不得已而從之、十一月十二日先生誕日、上公設養老之禮、饗先生于後樂園、授几杖而禮養焉、十六日親

臨其第、酒殺幣帛、禮接稠疊、新製屏風、畫以倭漢年邵德高者六人、武內宿禰、藤原在衡、藤原俊成、太公望、楠榮、文彦博、祝其遐壽、盡歡而歸、是歲先生作諸侯五廟圖說、博採衆說、通會經史、旁考古今、以理折衷、識者皆謂不朽之盛典、庚戌十年、先生以檜木作壽器、制度周密漆而藏之、先是每歲欲用油杉制之、而終無良材稱意者、故以檜木代焉、乃謂門人曰、我既老在異邦、自誓非中國恢復不歸也、而或一旦老疾不起、則骸骨無所歸、必當葬于茲土、然汝曹素不知制棺之法、臨期苟作、則工手不精、制度不密、數年之後必致朽敗、後來儻有逆虜敗亡之日、我子若孫有志氣者、或欲請之歸葬、而墓木未拱、棺槨朽弊、則非徒二三子之差、亦日域之玷也、吾之所以作此者非爲手足也、爲後日慮耳、況禮有七十月制之文乎、是歲上公使先生作學宮圖說、商確古今、剖微索隱、覽者若燭照而數計焉、上公乃使梓人依其圖而以木模焉、大居其十分之一、棟梁桁椽莫不悉備、而殿堂結構之法、梓人所不能通曉者、先生親指授之、及度量分寸、湊離機巧、教喻縝密、經歲而畢、文廟啓聖宮明倫堂尊經閣學舍進賢樓廊廡射圃門

樓牆垣等皆極精巧、及上公作石橋于後樂園、先生亦授梓人以制度、梓人自愧其能之不及也、又命造祭器之合古典者、先生乃作古升古尺、揣其稱勝、作簠簋饔豆登銅之屬、古意煥乎溢目、如周廟歌器、唐宋以來圖雖存、而制莫傳、先生依圖考古、研覈其法、巧思默契、指畫精到、授之工師、工師諮受、頻煩未罷、洞達乃爲之揣輕重、定尺寸、關機運動、教之、彌年卒得成之、壬子年冬、上公使先生率儒學生習釋奠禮、改定儀注、詳明禮節、學者通其梗槩、明年癸丑、延寶元年復於別莊權裝學宮、使再習之、於是學者皆精究其禮、甲寅二年、先是上公使先生製明室衣冠、至是而成、朝服角帶野服道服明道巾紗帽幘頭之類也、上公素遇先生以殊禮、寒暑風雨必帽幘頭之類也、上公素遇先生以殊禮、寒暑風雨必節厲操鄉信阻絕、而言不及子孫、乃諭先生寄書于家、問其家信、且召一孫侍養焉、先生作書寄之、先生之在鄉也、兄曰啓明、一名之琦、號蒼曙、登進士第、因忤閹宦、妄爲所劾、雖兩奉明旨、昭雪、而不賂權要、故十年不得復、後遭連缺御筆親除時、因流賊破北京、未得到任、遂歸、南京洋務

軍門缺理應啓明推補、而時相馬士英惟賂是圖、又起
姦黨阮大鍼、爲兵部侍郎、以爲羽翼、而共推劉安
行、補焉、啓明擯落、但奉朝請而已、清朝欲強用之、
不可、部院陳錦欲殺之、以操江唐際盛力救、得
免、後錮於南京、屏居灌園、及先生流離海外、莫
知其存亡、次兄某名閔、字仲琳、未弱冠而卒、先生
繼妻陳氏亦先沒、後聘胡氏、先是妻父胡公必欲配
之先生、而先生固辭者三、且作書苦辭、胡公不許、
聘後先生適會母喪、未娶、後值亂離、奔逃、數寄書
而使別許配、而胡公堅執不允、後亦莫知其存亡、
先生有二子一女、長大成字集之、次大成字咸一、
據先生與諸孫男書、有汝父元恒字士則否今忘之之語、則先生
之子不止此、是然平日所語只有二男、則元楷或是大成大咸之改
莫能詳、今
名者、女高字柔端、卽陳氏所生也、高忠孝性成聰明絕
世、兒時三歲便如成人、一言一動俱有矩矱、長者皆
愛之憚之、六歲喪母、哭泣之慘弔祭者哀不能起、
遇事先意承乏、先生藉以忘憂、變革以來年十二
三、嚴備利刃、晝夜不去身、其於駭焉問之曰、佩此
作何事、曰今夷虜犬羊豈知禮義、兒若有不幸、卽以
此自刎、寧肯辱身、其於與同臥起欲竊其刀、四
年不能得、幼字同邑何氏、因其舅爲滿官、日夜思

父、又愧憤其舅失節、忿遺遺疾、未嫁而亡、是時
先生在外不知其亡年、大約在壬辰癸巳間也、大
成隱居教授不就、清朝考試、以己酉年卒、大成先
沒無子、大成有二子、曰毓仁、毓德、孤貧養於外祖
姚泰家、泰字
口灝、先生所寄書達姚家、家人相與驚愕、始
知其尚在、天壤間、且悲且喜、然未審海外險夷禁
諱、是以切欲訪求、而不敢輕動、乃託外家親姚江
字咸、赴日本、候察邦憲及先生安否、泰謂、先生離鄉
年久、不識姚江、故授之以先生所嘗有一金扇及命
紙等爲證、而附以家書、丙辰四年、江至長崎、先生
覽書始知大成之死、泣然隕涕、江之在崎也、備識
先生與上公、相得而保、明室衣冠、及召一孫之意、
及歸被清朝官吏監察、而以犯禁充於軍、後泰及
毓仁毓德傳聞先生消息、明確、戊午六年、毓仁直來
日本、十二月至長崎、而礙法禁、不能詣武江、先
生亦老疾不能赴長崎、唯以書通情而已、上公聞
之閔惻、欲召毓仁侍養、而毓仁受母命而來當
歸報母、故踟躕不敢遵命也、於是上公諭先生、
使門人今井弘濟往長崎、賜資毓仁、甚優渥、先生
寄書審問祖宗之墳墓舊友之存亡、且警之以國亡

家破農圃漁樵自食其力。百工技藝亦自不妨。惟有虜官決不可爲耳。竟不及其他。己未七年。四月弘濟抵長崎。與毓仁一相見。備述先生之意。且諭毓仁侍養。毓仁謂弘濟曰。毓仁幼失父。家有母及弟。而無負郭之田。我之來也。欲問家祖安否。而陳情實歸告母及外祖。以慰其渴望。然後辭母再來。而終侍養之孝耳。前者姚江之來不及。至家中途遭事。而毓仁家貧不能贖之。居常鬱陶忽焉浮海。而長留不歸。雖有事祖之誠。而實缺倚門之望。今且歸而報母。必圖後舉。然則于祖于母孝心兩得矣。七月弘濟歸都。備述毓仁之意及桑梓之信。先生慨然感愴。是歲先生年八十矣。及先生誕日。上公又設養老禮。前一日親就第祝壽。奉以羔裘鳩杖龜鶴屏等。凡二十品。明日先生設香燭。拜告天地。祝以下逆虜未亡。故土爲墟。而身在異邦。遲暮衰疾久受上公隆恩。無以報之。獻欬流涕。感動傍人。是日上公命奏古樂。而樂之。庚申八年。先生素患咳血。二十餘年。精神俊爽。苟無情容。年逾八十一。老疾稍漸。膚燥體寢。因生疥瘡。不勝起坐。岑岑在床。明年辛酉天和元年。衰損日甚。上公屢使人問候。饋以菓殽。且使醫官與山玄建診

察進藥。先是先生每疾常服玄建之藥。至此先生辭曰。玄建者常在公侯之門。醫療權要者也。今吾之疾也。疥癩浸淫手足汚爛。而使診脈。恐傳染醫手。則累人居多。未必不由吾也。利己而損人。君子戒之。且犬馬齒既過。耄耋而欲用藥石。延旦夕之命。未爲知命者也。吾必不敢承命矣。上公爲之慰喻懇款。玄建亦屢至累請。而先生力辭不使診脈。玄建乃望聞而制藥。先生服之。意在重上公之命而已。壬戌二年。三月設宴招親友及門人等。力疾起坐。諄諄教誨。蓋永訣也。四月十七日無有他疾。語言聲色不異平日。未時奄然而逝。年八十三。先生既制棺。又逆備葬具。門人歛畢。上公歎惜不已。臨送其葬。親題神主。世子亦會焉。以四月二十六日葬於常陸久慈郡大田鄉瑞龍山麓。依明朝式成墳焉。癸亥三年。七月十二日。上公與群臣議。諡曰文恭先生。親詣墓薦少牢。文曰。嗚呼先生道德坤厚才望崧高。生于明季之衰。遭于陽九之厄。危行砥節。屯蹇隱居。鶴書連徵。確乎不拔。身陷賊窟。守正不移。流離轉蓬。經幾年所。衣冠慕古。未嘗變夷。歐血嘗膽。至誠無息。弢光肥遯。謝恩遠辭。鼓翼南溟。奮鱗東海。

風襲雪虐義氣益堅、寬文乙巳夏六月惠然寓我、我茲師資、終日諄諄論文講禮、嗚呼先生博學強記、靡事不知、起廢開蒙、孜孜善誘、敷我未半、天不假年、去歲夏初奄忽長逝、嗚呼先生有懿行、死不可無美諡、古言曰、道德博聞曰文、執事堅固曰恭、蓋先生之謂乎、故諡曰文恭、肅摠哀誠、敢告瑩臺、嗚呼哀哉、伏尙先生之靈來聽來饗、甲子^{貞享元年}、上公命構祠堂于駒籠別莊、十二月十三日遷主祭用少牢、自作文祝之曰、嗚呼先生明之遺民、避難乘槎來止秋津、寤寐憂國、老淚霑巾、衡門常杜、簞瓢樂貧、韜光晦迹、德必有隣、天下所仰、衆星拱辰、既見既覲、真希世人、溫然其聲、儼然其身、威容堂堂、文質彬彬、學貫古今、思出風塵、道德循備、家寶國珍、函丈師事恭禮蠶賓、嗚呼哀哉、齒超八旬、遽爾捐館、今及三春、情所不忍、結不能伸、相攸構廟輪奐維新、簞簋豆云設、云陳、牲醴粢盛克祀克禋、敢告微誠、焚香參神、神若有知、來綏來臻、尙饗、自是每忌日親舉祭禮、然是日適當東照公之忌日、有事于大廟、故移祭于明日、率以爲常、先生性質謹慎、強記神敏、雖老而疾、手不釋卷、凡所經覽、鉤深體實、博而

約、達而醇、嘗謂門人曰、學問之道如治裘、遴其粹然者而取之、若曰吾某氏學、某氏學、則非所謂博學審問之謂也、又曰爲學之道外修其名、者無益也、必須身體力行、方爲有得、故子貢天資穎悟、不得與聖道之傳、無他華而不實也、作文雄壯古雅、持論逸宕、筆翰如流、隨手成章、嘗曰、大凡作文、須本六經、佐以子史、而潤澤之以古文、內既充溢、則下筆自然湊泊、不期文而自文、若有意爲文、便非文章之至也、碩儒學生常造其門者相與討論、講習善誘、以道於是學問之方、簡牘之式、科試之制、用字之法、皆與有聞焉、先生飭身以禮、燕居儼若也、平居見客雖親、必具衣冠、謙而接物、不盡人歡、嚴而自持、苟無虛飾、治家以儉、量入爲出、離家四十年、不接婦女、或諭以置妾以備藥餌之奉、而先生不許焉、格物窮理、志慮精純、古今禮儀而下、雖農圃梓匠之事、衣冠器用之制、皆審其法度、窮其工巧、議者服其多能而不伐、該博而精密也、爲人剛毅方直、操履中規、擇交而慎言、晦迹以遠疑、如其祖宗官銜及身蒙微辟之榮者、雖親友門人未嘗與之言也、魯王勅諭亦不示人、及

卒有_レ古匣_一鎖而封焉、於_レ中得_レ所_二自書祖宗以下紙牌及奏疏履歷等_一、勅書別藏_二于描龍箱_一、於_レ是人皆服_二其深密謹厚_一、而知_二本末事實_一云、

○略譜

○龍山處士

諱某、娶黃氏、不仕卒家、

守愚

諱詔、字某、詰贈榮祿大夫、娶孟氏、詰贈夫人、

惠翁

諱孔孟、字某、詰贈光祿大夫、娶楊氏、詰贈夫人、

定寰

諱正、字存之、別號位垣、總督漕運軍門、詰贈光祿大夫

上柱國、娶金氏、前封安人、詰贈一品夫人、

蒼曙

諱啓明、一名之琦、登進士第、推補南京洋務軍門、爲_二

兵部侍郎院大錢、擯落奉_二朝請_一、不仕清朝、屏居卒_レ家、娶邵氏、

建功

諱某、

宏合

諱某、

敬武

諱某、

仲琳

諱某、舉茂才、未弱冠卒無_レ子、先生所書云、次兄字仲琳、天生所具云、二伯父號重林、而不載_二名字_一、今按、仲琳重林音相近、且流俗呼_レ字爲_レ號、疑非_二別號_一、

舜水

諱之瑜、字魯璵、舉恩貢生、崇禎弘_一間累蒙_二徵辟_一、

力辭不_レ就、及_二難起_一、流落海外、竟駐_二本邦_一、保全衣冠、西山公聘爲_二賓師_一、天和二年壬戌卒、諡_二文恭_一、初娶葉氏、生_二子大成大成、繼娶陳氏、生_二女高_一、

大成

字集之、隱居教授、不_レ就_二清朝考試_一、永曆二十三年己

酉卒、娶姚氏、生_二子毓仁毓德_一、(姚氏父名泰字、步瀛、泰有三子、曰長人、曰旭如、次即姚氏、二孫、曰江字虞山、曰景峨即天生之表兄也)、字成一號_二華鶴_一、早卒無_レ子、

大成

女子

譚高、字柔端、字同邑何氏、愧憤其
舅仕清朝、憂鬱成疾、未嫁而亡、

女子

名保姑、嫁姚氏、生子珠官、

毓仁

字天生、亦娶姚氏、姚氏父名顯明、兄名萬亭、延寶六年

戊午、天生來長崎、探知文恭消息、數年後又來時

先生已沒西山、公贈以下先生所自書祖先紙牌履

歷等及白金若干、感泣而歸、

坤郎

日得

字大生、

毓德

正函

右據下先生所嘗親書、先世緣絲履歷及天生所具
定之、先生父兄以上書以別號、子姪以下書以
名字、間有闕失、無所考質、天生所具有云、共
曾祖從兄景昭從弟百齡字公且鶴齡字公輔不書
誰子、今推族屬云、共曾祖則蒼曙之諸孫、而
天生之再從兄弟也、建功下注云、生從兄號
宏含、而不書名、疑宏含即景昭之字、而百齡鶴
齡或為建功敬武之子、然無確據、不敢附會、

且先生在、家時嘗閱譜牒、惟以一世不、清楚、
不欲認爲文公之裔、謹慎之至敢不遵奉、

門生安積覺謹撰

貞慧傳

貞慧性聰明好學、大臣異之、以爲雖有堅鐵而非鍛冶、何得干將之利、雖有勁箭而非羽括、詎成會稽之美、仍割膝下之恩、遙求席上之珍、故以白鳳五年歲次甲寅、○南溪按白鳳無甲寅、當作百雉、以下同而併考貞慧享年及次所記唐朝年紀以違筭一年、隨躬唐使、到于長安、住懷德坊慧日道場、依神泰法師、作和上、則唐主永徽四年、時年十有一歲矣、始讚聖道、日夜不怠、從師遊學十有餘年、既通內經、亦解外典、文章則可觀、隸則可法、以白鳳十六年歲次乙丑秋九月、經自百齊來京師也、其在百齊之日、誦詩一韻、其辭曰、帝鄉千里隔、邊城四望秋、此句警絕、當時才人不得續末、百齊土人竊妬其能、毒之、則以其年十二月廿三日、終於大原之第、春秋廿三、道俗揮涕、朝野傷心、高麗僧道賢作誄曰、夫豫計運推、著自前經、明鑑古今、有國恒典、絲綸紫闕、者以薦賢爲本、緝熙宗室、者以舉忠爲允、故以周公於禽躬行三筭、仲尼於鯉問用二學、斯並遠理國家、而非私者明矣、由此觀之、凡英雄處

世、立名榮位、獻可替否、知無不爲、或有寬猛相濟、文質互變、是則聖人之所務也、唯君子哉、若人景德行之高山仰之、有一於此、理固善、乃使法師遣唐學問、有教相近、莫不研習、七略在心、五車韜智、思甄否泰、深精去就、鬼谷再淚、恐分人士、韋編一絕、陶鑄造化、是力足以席上智囊、策才堪例、而忽承天勅、荷節命駕、又詔廓武宗劉德高等、旦夕撫養、奉送倭朝、仍逕海至於舊京、聖上錫命、幸蒙就舍、居未幾、何寢疾漸微、咨嗟奈何、維白鳳十六年歲次乙丑十二月廿三日、春秋若干、卒於大原殿下、嗚呼哀哉、乃作誄曰、

於穆不基、經綸光宅、懿矣依仁、翼修軌格、軒冤籍甚、謨宣廟略、惟岳惟海、如城如壑、諫魚諫鼎、乃倖乃伯、積善餘慶、貽厥哲人、問道西唐、練業泗濱、席間函丈、覃思秀神、荆山抱玉、辨氏申規、漢水藏珠、龍子報隨、賓于王庭、上國揚輝、爰受朝命、建節來儀、臂齒方新、橋父猶煥、近署多士、紫微壯觀、四門廓啓、三端雅毫、王事靡盬、將酬國寶、世路芭蕉、人間鬪城、鼠藤易絕、虵篋難停、蘭芝春萎、松竹夏零、風遭繳射、鸞掛網刑、嗚呼哀哉、顏回不幸、謂天喪予、延陵非子、稱其禮與、

書筆猶存、身精何處、親物思人、堂下莫敍、嗚呼哀哉、
車珠去魏、城碎辭趙、才之可惜、日還當暮、嗚呼哀哉、

本云

文和二年癸巳九月廿日儲之

外題也與押之イ元・紙イ

弘法大師御筆

阿闍梨朝尊

右家傳卷上者以弘法大師真跡之本不違文字行寫之三寶院大僧正
義範御累代本也從去十九日三箇日仁王經於家門御讀誦也當年甲
子御祈禱所也今日廿一日累代御物等戴之尤殊勝也

永祿七年甲子正月廿一日記之

但二月十日注寫之

行基年譜

(自卷首至此闕)

行基師、願勝師、利鏡師等、野田村大歲松樹下至集、
語諸刀禰云、率知識爲大神、修功德、以利鏡
師爲畫師、造七佛藥師像、在障子也、百嶋家南
作借屋、造件佛而收宿大神故內云、後和銅元
年戊申十月比、專掃清首麻呂家終成寺院、遷彼
佛像、今在西佛堂是也、今大鳥神宮寺神鳳寺是也、
文武天皇諱輕、天武天皇孫、草壁皇子第二子也、又
天津足、母元明天皇諱阿閉皇女、天智第四女也、即
位大化三年、丁酉治天下十一年、丁未六月十五、天
皇崩、年廿五、十一月丙午火葬先皇安古山陵、持統
天皇崩同年也、
行年卅七歲甲辰

文武天皇八年、甲辰、慶雲元年也、步從少年至卅七歲、棲

息山林云、如是等之間、或修行、或安居、築池掘

河度橋伏通樋掘溝云、

後日神闕誌

此歲掃清於本生家爲佛閣、卽家原寺是、修行時、

新羅國大臣惠基與行基共申阿彌陀佛諸國遊行、
號和泉國日根郡住人云、件大臣、和泉國日根郡
日根渚從新羅國被流天來云、今日根禪興寺本
願云、又彼國村祝奉法大臣云神是也、行基諸國
遊行給還舊里時、人々池側集魚取食、里人見行
基以鮒鱠奉之、卽食之、吐出彼鮒一小鮒從口
生入池、人驚敬答悔、今池見在云云、皆無片眼、右
京元興寺邑人大法會儲、請行基七日間法令說、
于時有一女人、完脂付額髮、人不知力不知人、行基獨
知之、大令慙之、女人欲出去、人彌奇驚敬禮無
極云、

堂一字一間四面

塔一字三重

金筒文云、今令衆生往生極樂頓證菩提數點此

所、亦於此所

於此所亦起立塔廟、但緣堂薄運在像末、若

有二人、如我起立、當知是人卽我身是、此文書金

筒埋古塔下云、後人得之留文、如本埋了、金

筒正文、

爲令衆生出離生死往生極樂頓證菩提數點此所起立
塔廟但緣猶薄運在像末亦於此所如我起立當知是人

即我身是結緣此者速得成佛□□此者敬當勤習發決定心勿生疑惑歲次戊寅沙門行基慇末代輩記貽來葉云(戊寅年、行年七十一天平十年戊寅乎)

行年卅八歲乙巳

文武天皇九年、慶雲二年乙巳、引導生母安居右京佐紀堂、盡力孝養、

大日忠院、高藏、十月始起、

在和泉國大鳥郡大村里大村山、

行年卅九歲丙午

文武天皇十年、慶雲三年

丙午、

天皇和泉國和泉郡橫山鄉內

以、橫山蜂田寺并四十九院修理料柚被施入、七月

八日、勅使正四位下犬上王、從七位下津守宿禰得麻

呂、正八位上出雲國勝等、點定四至云、

行年四十歲丁未

文武天皇十一年、慶雲四年

丁未、

移生馬仙房、彌盡孝養之

禮云云、

行年四十三歲

日本根子天津御代豐國成姬天皇

元明天皇三年、和銅三年

正月母從逝化、自爾以降

迄于和銅五年、口住生馬草野仙房、但着龜服嘗

苦食云、或云、指三祇之遠期、荷四弘之重誓、結願爲行、濟度爲心云云、

元明天皇、諱阿閉、天智天皇第四女也、卽位和銅元

年、戊申、治天下七年、在大和國添上郡陵、兆城東

西三町、南北五町、守戶五烟云云、養老五年元正七

年、二月四日崩、生年六十一、葬三椎陵云云、

行年四十九歲丙辰

日本根子高瑞淨足如天皇

元正天皇二年、丙辰

靈龜二年

元正又云飯高、

恩光寺

在大和國平郡床室村、十月五日起

元正天皇諱水高、文武天皇同母婦也、

卽位靈龜元年乙卯、六月三日、治天下九年、養老五

年辛酉、十二月四日大上天皇元明崩、年六十一云云、

行年五十一歲

元正天皇四年養老五年

戊午

隆福院、登美、四月廿三日起、

在大和國添下郡登美村、

行年五十三歲庚申

元正六年養老四年庚申

石凝院、九月十五日起、

石凝院、九月十五日起、

在河內國河內郡早村、

行年五十四歲辛酉

元正七年、養老五年辛酉五月三日、命^{モカ}交朝廷參上、京都二人得度、寺史乙丸以^ニ己居宅^ニ奉^レ施^レ安、即立^ニ精舍^ニ一號菅原寺、五月八日一百箇人依於^ニ大安寺^ニ得度之內和泉國云云、上記蜂寺奴云云、

行年五十五歲壬戌

元正八年、養老六年壬戌喜光寺

菅原寺 二月十日起、^{讀曰、最後涅槃所也、}

在^ニ右京三條三坊、九坪、十坪、十四坪、十五坪、十

六坪、

行年五十七歲甲子

^{天靈國押開豐櫻彦天皇}

聖武天皇元年、^{神龜元年}諱勝寶感神聖武皇帝、文武天

皇太子也、治^ニ天下^ニ廿五年、天平勝寶八年、丙申、孝

謙天皇八年五月二日崩、葬^ニ佐保陵^ニ云云、

清淨土院高落、塔十三層云云、

在^ニ和泉國大鳥郡葦田里、今口穴鄉

尼院 同郡早部鄉高石村、

行年五十八歲乙丑

聖武天皇二年、神龜二年乙丑、

久修園院、山崎、九月起、

在^ニ河內國交野郡一條內、

九月一日將^ニ彼弟子^ニ修^ニ杜多行^ニ到^ニ山崎川^ニ、不得^レ暇^レ挽留、河中見^ニ一大柱^ニ、^{天イ}夢問云、彼柱有^ニ知人^ニ一矣、或人申云、往昔老舊尊船大德所^レ渡柱云云、大夢發願從^ニ同月十二日^ニ始度^ニ山崎橋^ニ云云、天皇歸依給云云、

行年五十九歲丙寅

聖武天皇三年、神龜三年丙寅、

檜尾池院 在^ニ和泉國大鳥郡和田鄉、

行年六十歲丁卯

聖武天皇四年、神龜五年丁卯

大野寺 在^ニ和泉國大鳥郡大野村、二月三日起、

尼院 同所、今香琳寺歟、同年、

行年六十三歲庚午

聖武天皇七年、天平二年庚午、

善源院口堀 三月十一日起、

尼院

已上二院在^ニ攝津國西城郡津守村、

船息院 二月廿五日起、

尼院

已上二院同國免原郡宇治郷、

高瀬橋院 九月二日起、

尼院

已上同國嶋下郡穗積村在、

楊津院 在同國河邊郡楊津村、

行年六十四歲

聖武天皇八年、天平三年辛未、

狹山池院 二月九日起、

尼院

已上在河内國丹北郡狹山里、

嶋陽施院 三月廿日起、

在同國攝津國河邊郡山本村、

法禪院、檢尾、九月二日起、

在同國城國紀伊郡深草郷、

河原院 在同國葛野郡大屋村、

大井院 在同郡大井村、

山崎院 在同國乙訓郡山前郷無水河側、

隆福尼院 在同國大和國添下郡登美村、十月十五日

起、

行年六十六歲癸酉

聖武天皇十年、

天平五年
癸酉

閏三月、朝廷與轡車一兩得

度卅五人給、爰步和歌付勅使獻天皇云云、止不

久留未和禮仁多末部利以加仁東毛諸共爾古曾於

久利和多佐女云云、于時智光大法師云人有、智光

名高經疏造、傳法弘世被貴、妄誹、我智深大僧

也、行基智淺沙彌也、何因云家彼貴我捨、恨世、河

内國行、鋤田寺籠居、俄病受死、經二十日、甦云、閻羅

王使我召行、道見金口口造、使問、行基可生給

所也云云、更行熱煙來覆、又問、汝可生地獄也云云、

至着我打、鐵火柱令抱、解骨碎、苦受事無量、閻羅

王云、汝豐葦原水穗國坐行基誹謗、其罪勘給故召

也云云、今將返云、使副免送了、仍難波堀江橋渡給

所至、夢暗知喚云、何因來、智光悔咎云云、智光死後、

諸弟子等請奉奉爲導師、靈令報恩之日、行基登

高宣云、孟口施加修行仁以天示藤袴麻呂曾慈悲計

奉行袴宣即下了給云、

此ハ後七十六歳ノ記歟、

同年七月三日乘船下着善源寺、於寺内以二千

餘造花一庄嚴以二十餘造花一浮於河水、迎送於出

居、俄爾之間三人僧乘船到來、中大カヒラニ國アラ門菩薩也北天竺一人バラ門僧、一人

林邑僧、一人大唐僧云、

救方院 同年十月十五日起、

薦田尼院

已上在河内國茨田郡伊香村、

行年六十七歲甲戌

聖武天皇十一年、天平六年甲戌、

澄池院久米多 十一月二日起、

在和泉國泉南郡下池田村、

深井尼院、香琳寺、 在同國大鳥郡深井村、

吉田院 在山城國愛宕郡、

沙田院 不知在所、攝津國住吉云、

吳坂院 在攝津國住吉郡御津、私云住吉ノ社大海神ノ北ニ南向ノ小寺云云

行年七十歲丁丑

聖武天皇十四年、天平九年丁丑、

鶴田池院 二月九日起、

在^{里ハ名ニ鶴田里下ニ村ハ山田村也}和泉國大鳥郡九山田村、

頭施院、菩提、 九月一日起、

尼院 同年始起

以上在和國添下郡矢田岡本村、

行年七十一歲戊戌 私云、此年家原寺金簡銘文被ニ埋置ニ歟、

聖武天皇十五年 天平十年 正月十日、於中宮得度三

十二人、和泉國大鳥郡早部鄉早部里戶主從七位上

大鳥連史麻呂戶口、大鳥連夜志久爾、年分十箇人

例、沙孫秦證、年十九、未定寺、

行年七十二歲乙卯

聖武天皇十六年、天平十一年 已卯、

安^三居久修園院、得度百八十四人、

行年七十三歲庚辰

聖武十七年、天平十二年、

發^{橋カ}步院泉橋院 讚云、此院天王屢行幸、影像作テ安置給所也、

隆福尼院

已上山城國相樂郡大柏村泉橋院、

布施院

尼院

已上同國紀伊郡石井村、

行年七十四歲辛巳 或云、此記天平十一年云、

聖武十八年、天平十三年 三月、掩留山城國泉橋院、十

年辛巳、

七日申時、天皇行幸給、奉_レ拜_二大僧正_一矣、拜訖給御座、終日並談說給、爾時大僧正言、大國者有_二給孤獨園_一而養_二息孤獨徒_一、但吾日本國無_二給孤獨園_一、是以請_二爲奈野_一而爲_二給孤獨園_一ト、白_二支_一、是天皇答給、歸命宣旨、又演院々建立者、又天皇報答_テ建立院々堺地世々不_レ絶不被官司攝錄ト宣_二支_一云云、即奉_レ施_二食封一百戸_一、同日申時宣命、同年六月十六日、左大臣橘朝臣奉_レ施_二食封五十戸_一、又使_二工匠造_二變物頭_一現形像一軀侍從比丘像曰_{門カ}軀、安_二置於泉橋院_一、同月廿六日、天皇玉船如_レ馬巡_二於泉川_一、請_二大苳_一、終日讌樂、大臣彈琴云云、蓮葉_二湛禮留水ノ玉ノ如比加禮留人爾_一、安布曾_{古カ}古禮志佐云云、天皇感悅給大苳奉禮咲含悅テト云云、

天皇和歌云、

皇花如久仁未留人ニ吾_レ念部波故々仁相スル、但所_{白玉ノ花イ}施封戸聖人不_レ受、仍量_二大藏省_一曰、遷化之後大小寺誦經了云云、

天平十三年辛巳、記云、延暦廿三年三月十九日所司

記云、

宗橋六所、

泉大橋 在_二相樂郡泉里_一、

山崎橋 在_二乙訓郡山崎郷_一、神龜二ノ九月十二日

始起、

已上二所山城國云云、

高瀬大橋 在_二嶋下郡高瀬里_一、

長柄

中河

堀江 並三所西城郡、

已上四所在_二攝津國_一、

直道一所、在_二自高瀬_一生馬大山登道_上、

已上河内國茨田郡攝津國云云、

池十五所、

狹山池 在_二河内國北郡狹山里_一、

土室池 在_二大鳥郡土師郷_一、

長土池 在_二同所_一、

薦江池 在_二同郡深井郷_一、

檜尾池 在_二同郡和田郷_一、

茨城池 在_二同郡蜂田郷_一、

鶴田池 在同郡早部郷、

久米多池 在泉南郡丹比郡里、

物部田池 在同所、

已上八所在和泉國、

岷陽上池 同下池 院前池 中布施尾池、

長江池 已上並五所河邊郡山本里、

有部池 在豐嶋郡箕丘里、

已上六所在攝津國、

溝七所、

古林溝 長三千二百丈、廣六尺、深四尺、

在河內國茨田郡古林里、

岷陽上溝 長一千二百丈、廣六尺、深四尺、

在同郡河邊郡山本里、

同下池溝 長一千二百丈、廣六尺、深六尺、

在同所、

長江池溝 長六十丈、廣六尺、

在同國西城郡、

物部田池溝 長六十丈、廣六尺、

在泉國泉南郡、物部田池

尻申候、

久米多池溝 長二千丈、廣五尺、

在同國、

樋三所

高瀬堤樋 在茨田郡高瀬里、

韓室堤樋 同郡韓室里、

茨田堤樋 同郡茨田里、

已上三所在河內國、

船息二所

大輪田船息 在攝津國兔原郡宇治、

神前船息 在和泉國日根郡日根里近木郷内申候、

堀四所

比賣嶋堀川 長六百丈、廣八十丈、深六丈五尺、

在西城郡津守村、

白鷺嶋堀川 長百丈、廣六十丈、深九尺、

已上在西城郡津守里、

次田堀川 長七百丈、廣二十丈、深六尺、

在同郡下郡次田里、

已上三所在攝津國、

大庭堀川 長八百丈、廣十丈、深八尺、

在河內國茨田郡大庭里、

已上不_レ記年號、仍不審多、或遊行時、或寺院

之次、隨_レ便云、

布施屋九所 見三所 破損六所云云、

大江布施屋 在乙訓郡大江里、

泉寺布施屋 在相樂郡高麗里、

已上二所在山城國云云、

岷陽布施屋 在河邊郡岷陽里、

垂氷布施屋 在豐嶋郡垂氷里、

度布施屋 在_二西城津守里_一、

已上三所在_二攝津國_一、

楠葉布施屋 在_二交野郡楠葉里_一、

石原布施屋 在_二丹北郡在原里_一、

已上二所在_二河內國_一、

大鳥布施屋 在_二大鳥郡大鳥里_一、

野中布施 在_二同郡土師里_一、

以上二所在_二和泉國_一、

行年七十五歲_{壬午}

聖武十九年、_{天平十四年癸未}二月廿九日、使_二秦堀河ノ君足

記_二錄大孝遊行事一卷、同四月五日任_二大僧位_一、_{諱行法大}

正、

行年七十六歲_{癸未}

天皇廿年、_{天平十五年癸未}十月十五日、天皇信樂宮發_二大願、

造_二金銅舍那佛像_一云云、又云、天皇東大寺造給、供養

講師行基請奉、孝辭給云、從_二外國大師可_レ來、以

彼可_レ奉仕_一云云、供養比、攝津國難波迎_二大師_一云、

何給云、家申_二請百僧_一曳將僧次行基弟百也、治部玄

蕃雅樂等加天船乘、音樂調行、難波津至見無_レ人、行

基闕伽一具備_テ迎遣、花盛、香燒、湖上浮、無_レ亂事、

遙西海行、漸有_二小船_一、乘_二バラ門僧正名菩提云人_一來、闕伽又此小船浮無_レ亂返來、バラ門信稽_二首行

基云、南謨阿梨耶曼蘇悉里菩提薩埵婆耶摩訶薩埵

婆耶云云、大孝答拜云、南謨阿梨耶波魯吉帝世波羅

耶菩提薩埵波耶摩訶薩埵波耶云云、即バラ門僧正和

哥云、加毗_二ラ衛_一聞_二テ吾來_一シ日本ノ文殊ノ御跡今_レ知

ノ奴留_二ト云云_一、則設_二無數供具_一、以盡_二主客之禮_一、時大

和國有_二癡人_一俗營原臥云云、衆僧食時走來扣_レ札哥

云、六郎ノ位_二ヲ經_一リ三覺ノ顯給_二ヘル此ハ如來云_一ヒ天、

手_二ニ取_レハ穢_一レモソスル_二乍_一立_二チ三世ノ佛_一ニ花奉_二マツル

云云、或說、行基_二孝云云_一靈山ノ釋迦ノ御前_二ニ契_一テシ眞如

不朽相見_二ツルカナ云云_一、バラ門僧正答云、迦ヒラエニ

共_二ニ契_一シ甲斐有_二リテ文殊ノ御加保相見_一ツルカナ云云、

行年七十七歲

聖武廿一年、_{天平十六年甲申}

或云、天平十六年、行信僧都爲_二勅使_一、奉_レ施_二封戶九

百_一云云、

天平十七年正月十七日、以_二行基大德_一爲_二大僧正_一、

降_二玄昉僧正_一流_二于筑志_一、同廿年十一月廿六日、天皇

行幸菅原寺一度一百廿人、

大福院、御津、二月八日起、

尼院

已上在攝國西城郡御津村、

行信僧都爲勅使奉施封戸九百戸、夢不受返、信受天皇彌歸伏、

難波度院

枚松院

作蓋部院

已上三寺、攝津國西城郡津守村、

行年八十一歲

天皇廿五年、

天平廿年戊子、

十一月廿六日、天皇行幸菅原一

一百人得度、菅原改花光寺ト云額ヲ給フ、

行年八十二歲

開闢天皇日本第四十八代高野天皇

孝謙天皇卽位元年、

天平二十一年、天平勝寶元年、八月十八日改、

正月十四日

於平城京中嶋宮、奉請大夢、而太上天皇、中宮、

皇后、并三人、御出家、受夢戒一成夢御弟子也、太

上天皇御名勝滿、中宮御名德滿、皇后御名萬福是

也、卽日改大僧正號大夢云云、後高野姬天皇受

戒爲尼、法名法基、惣夢戒弟子緇素滿於天下云云、

又報恩院 在河內國交野郡楠葉郷、

長岡院 在菅原寺西岡、

已上兩寺、四十九院之外也、不記年號云云、

天平廿一年二月二日、於菅原寺東南院右脇臥、身

心安穩、數千弟子之中、特授光信摩頂告語、汝爲

世間眼、我建立諸院今付屬於汝、汝能々住持云云、

又數誡諸弟子云、

口虎破身、舌劍斷命、使口如鼻死後無過、又

云、過守如鼻令成、虎死シテ皮遺、人死名有、汝等

努力、卽和哥云、借染ノヤト由女加留奈今更ニ物ナ

念ッ佛トモナレ異本、借染ノハサシ加ルセシ今更ニ物ナ思ッ

更仁物那會佛トモナレ云云、或本云、借染之夜戸借吾會今

佛止遠成禮、卽日中夜入滅云云、行年八十二歲、已云云、

御葬送大和國平群郡生馬山東陵云云、

爰京條云、民縑素雲集啼哭云云、

大庭院 在和泉國大鳥郡上神郷大庭村、

孝謙天皇二年、天平勝寶二年庚寅、三月十五日追爲報恩

起立云云、如今者號行基院、以前記錄、任去延曆廿四年三月十九日、菅原別當

威儀師傳燈法師位、茲脫、大鎮傳燈法師位、福壽、少鎮傳燈大法師位、〇〇、等記錄、并皇代年代兩記等日記狀、粗略而記之、而我以管見之淺智、何及聖慮之深志、矣、寔步垂利生之跡本朝、及濟度之計於東陸、故和泉之生所、相似迦毗羅城之古所、大和之入滅、示提河沙羅雙樹之舊儀、云云、抑步入滅之三百餘歲之末、所々院々陵遲、或堂舍朽失、有名無實、或殿堂乍有破壞顛倒矣、傳聞、五竺八塔聖跡拜人皆滅、四重五逆之罪、震旦五山之靈、輻參者併遁、三途八難之苦、云云、然而彼者或蒼領弱水之道渺々、或滄湖濤波之海漫々、凡類尙難攀、況東夷人乎、只我朝人可拜於此聖跡、倩思、大步之利生濟度之方便、從在世利生之願至、于今无止矣、

所謂、在世入海底、尋五障、令傍生、滅後出泉州、度十善之人主、震旦下清涼山之靈輻、本朝宿神埼院之茅屋、從沙羅林月隱上茅城音止以來、弘經大士雖多、在々所々願生々世々能令助釋迦之化儀、云云、抑曰、依弘經之步者、出生有二緣、云云、所謂貴種善種也、高志者貞知者、漢朝爲貴種、日域爲善種、矣、但王胤雖貴他州客爲民、賤家雖

疎極位人已貴矣、譬如媼女產高祖、猶似鹿母宿獸腹、矣、抑齊朝養千驪、耻顯死後、首陽食紫蕨、仁傳後代者也、由余者戎之賢臣也、秦穆公賞以客禮、王仁者漢之文人也、我欽明願以能地、矣、自昔君惜於人、民仰於仁、云云、爰至聊有宿志、私馳本緣、卿公誰知、我及知命、獨憶聖唯是將慕年渡、一灑古人記文而已、昔時聖跡之傳方有於已、今日眼前記真慙於人、口達之士願嘲口之思失乎、于時安元元年乙未九月十日、氏司二千石泉山父宿禰、

本云

建保二年甲戌七月十日書寫了

弘法大師弟子傳卷上目次

東寺第二世實慧僧都傳

和州室生開山堅慧大德傳

東大寺杲隣禪師傳

高野山東南院智泉大德傳

元興寺泰範阿闍梨傳

和州超昇寺開山真如親王傳

城西高雄山真濟僧正傳

城南深草貞觀寺開山真雅僧正傳

和州牟漏寺真泰大德傳

東寺圓明律師傳

西山神護寺忠延大德傳

弘法大師弟子傳卷上

南嶽沙門智燈纂

竊惟我大師之應_レ世、恰似_二神農之作_一市、開_二法藏無盡之寶、飭_二九界聚落之市、交易荷去各得_二其所、其易得之廣大者、各張_二一市、鄺、待_二賈選_一者一十七人、員者三人錄廿人、

東寺第二世實慧僧都傳

少僧都實慧、讚州多度郡人、氏族在_二佐伯宿禰、延曆五年生、就_二家族書博士佐伯直葛野酒麻呂等人、初多受_二學儒術、後專耽_二玩佛經、欲_二質_二其教理、如_二南都大安寺_一謁_二泰基法師、基公語看度量非常人也、基公含笑示以_二唯識、性相通局之訣隨_レ聞而能持、往復發_レ論如_二珠網映、議論渾然無_レ所_レ可_レ破、基公歎伏、謂_二唯識極、粵大同中聞_二大師歸朝鬱唱_二密教、乃擔_レ筇到_二高雄之道場、大師熟見擇_二其機、尤金剛之獅子兒者也、乃披示_二祕經、誦得而無_レ失、終入_二道場、授_二灌頂、爰兩部祕奧、壇儀印契、經軌合明、顯密開會、而祕旨悉教、告曰、守如_二髻珠、勿勿_レ示_レ佗云々、弘仁帝延_レ宮而見焉、試

舉三教粗爲關鎖問、各有答釋、數句而盡、意帝從是有優幸、敬其道行、又天長帝卽位、崇重無減、前王、四年立河內觀心寺、勅四至長短合賜一千餘頃、舊記曰、承和元年春、依綸命、於神護寺修法、得効驗、有賞榮、考通史不得其端、認以俟博洽、同二年三月十五日、大師有順世之思、屬東寺之寺務、曰、我滅後諸弟子依實慧受教、吾道興專在此大德、以真言爲本宗、以顯教爲末教、佗有眼睛自在融通、人之師表國之寶財也、一大藏事一向附此大德云々、三年五月十日任律師、作東寺長者、詔曰、每歲三長齋月、於東寺灌頂院選三七僧、修息災增益法、鎮護國家爲永式、從是隨式爲恒例、又此月奉詔而真濟真然入唐、爰實慧與諸法弟寄書於青龍寺、報慧果和尚之墳墓、兼示諸密師、其書曰、

日本國真言道場付法弟子實慧等白、先師諱空海和尚受職號遍昭金剛、先年入唐求法、奉遇青龍寺內供奉諱慧果大和尚、受學胎藏金剛界兩部秘教、并貴持道具付屬等物、歸本朝、道高餘宗、教異常習、此頃法匠各爲矛盾、不肯服膺、十有餘年無得建立、法水漸浸、人機吐芽、諸宗法侶、良家子弟、灌頂受法者其

數稍夥、厥後密教之旨相尋上聞、中使往還詔問不絕、及天長皇帝受讓踐祚、灑掃禁闥、建立壇場、始嘗秘教之甘露、稍發興隆之御心、以帝城東寺爲真言寺、以我和尚爲大僧統、固辭不免、先太上天皇舉宮灌頂、卽其第三皇子卓岳出家入道、天縱精粹、三密洞融、旣而聖天后地、瓊枝玉葉、公卿大夫、道俗男女、不論尊卑、預灌頂者蓋以萬數、又胎藏金剛界曼荼羅、五大忿怒、十六護者等像、有御願刻畫、或信心勢家各分一會丹青寫焉、其後和尚卜地南山置一伽藍、爲終焉之處、其名金剛峯寺、以今上承和元年去都行住、二年季春薪盡火滅、行年六十二、嗚呼哀哉、南山變白雲樹含悲、一人傷悼弔使馳驟、四輩嗚咽如哭、父母嗚呼哀哉、實慧等心同吞火、眼若沸泉、不能死滅、守房者夥矣、是以人蒙傳法印可者、皇子禪師、及牟漏眞泰、東寺實慧、嶺東杲隣、神護忠延、弘福眞雅、東大圓明、入唐眞濟法師等、各隨居處、流傳秘教、一尊一契者數百人矣、外護大檀主今上陛下、北面后宮、及大納言二品藤原朝臣、右大辨四品和氣朝臣、近持我道場、遠宅懷四海、惟也遙加護之、今附上青龍大阿闍梨靈座料法服二襲、一夏是表一冬是表孫弟之志、

願獻_レ故和尚_一奉_レ供_二道場_一、時々着用袈裟一具同上、供養青龍曼荼之料、願永々勿_レ遺忘、亦贈_二那邊付法闍梨并同法侶、土毛色目如_レ列、自知輕鮮、但達_レ遠惟也垂_レ領之、真言宗請益沙門眞濟、留學僧眞然、遠浮_二巨海_一、尋_二師大邦_一、辭_二父母鄉_一就_二法地_一、是加_二獎飾_一、令_レ得_二實歸_一、雨夏濕熱、伏惟青龍同法師兄道體安和、此間法弟子等交蒙_レ遺忝、曰_二同法_一、何得_レ不_二相戀_一、滄浪森漫、夢裏往來、交_レ臂無_レ由、千齡萬恨、死生雖_レ隔、松柏不_レ凋、千々萬々、珍々重々、入使之次无_レ捐_二玉音_一、彼此同植_二佛因_一、必結_二大日之果_一、謹因_二便信_一奉_レ疏、不備、沙門實慧_等和南、承和三年五月五日、日本國眞言寺同法等奉_レ賜_二大唐青龍內供奉義明阿闍梨并先和尚內徒中_一土毛等色目、夏法服一襲九帖、紫胡桃染羅單袈裟一具、紫胡桃染坐具一條、同色羅單衣一領、白黃色標染綾_二衲衫_一一領、免裼袂肚一條、黑青橡染綾裳一腰、白絹綾上袴一腰、白絹中袴一腰、白絹袷_二禪一腰、白絹單袴_二一腰、已上納_二漆泥單文革莖一合_一、冬法服一襲、黃檀染甲袈裟袷袍一領、紫綾襖子一領、紫綾衲衫一領、綬帶一條、黑青綾裳一腰、白絹綾上袴一腰、白絹中袴一腰、白絹袷_二禪一腰、白絹單禪一腰、已上納_二漆泥平

文革莖一合、前件物等奉_二故法諱慧果大阿闍梨靈座_一、金緯袈裟一具、納_二漆單文革莖一合_一、右物奉_二青龍寺道場_一供_二曼荼羅之料_一、練束繩卅四疋、水精念珠十貫、右納_二小革箱_一、摠納_二大革箱一合_一、越州帖綿一百八十六帖、播州雜色薄紙卅帖、銀裝剃刀子十五函、銀裝出火鐵五十六枚、無裝出火鐵卅四枚、出火瑪瑙石二襲、就中銀裝木蘭刀子廿口、銀裝鑢椿刀子十口、銀裝桑沈刀子十口、銀裝檜木刀子十口、銀裝出火鐵廿枚、無裝出火鐵卅枚、已上刀子五十口、出火鐵五十枚、同納_二漆泥平文革莖一合_一、又刀子五十、出火鐵五十、並如_二上色_一、已上同納_二漆泥平文革莖一合_一、銀裝赤檀剃刀子二函、銀裝鑢椿剃刀子五函、已上納_二里葛紋莖一合_一、以_二前等物_一奉_レ贈_二眞言宗見存傳法阿闍梨及諸同內_一、毛物雖_二數多_一、船載有_レ限、聊以表_レ誠、海路難_レ斯、仍各半分付_二請益留學等法師_一、伏乞垂_レ檢到、承和三年五月十日、日本國大法師實慧、此年眞濟眞然二公八月太宰海中離_レ風、歸休再入唐、明年四月圓行入唐、重附_二此便_一而贈追加曰、夏法服事、赤紫羅甲袈裟一、加覆膊一、青褐綾裳一、免裼坐具一、黃赤羅袍一、同色

吳綾衫一、免褐袂肚一、白綾表袴一、白綾中袴一、白絹袷禪一、白絹單禪一、已上盛平文箱二口、右此表信、日本國弟子等謹獻大唐青龍寺阿闍梨故法諱慧果和上之墳墓、遙申孫弟之禮、伏願海會中垂哀納、美州雜色紙二十卷、播州二色薄紙廿二帖、並盛平文箱二口、鑢鐵剃刀子廿口、黃絁二十疋、並盛平文小櫃子二口、右物已輕之不可更言、禮貴申情、因奉送眞言道場見傳法阿闍梨及諸金剛佛子等、辱申同門之義、伏乞檢到、願知龕幣、深增悚耻而已、便發、忿忿不具、謹狀、承和四年四月六日、日本國律師傳燈大律師眞言道場沙門實慧等狀、傳燈大律師眞如、傳燈大律師眞泰、傳燈大律師杲隣、傳燈大律師圓明、傳燈大律師忠延、傳燈大律師眞濟、傳燈大律師眞雅、越圓行持此書及贈子去、達青龍寺、居乎二年矣、得義眞之傳燈、六年八月歸朝、帶此答書來、其詞曰、開成四年正月廿二日、得日本國傳燈大律師圓行歸、將實慧和尚等八人書報、圓鏡等十人謹還狀曰、開函見書信、增頂符雖鄉居海外人近日宮、知音之道不遺、重教之誠愈切、今我開成皇帝、化周四極八表來朝、聖德巍巍皇道蕩々、左衛功臣使驃騎爲股肱之濟々

實文武之鏘々、粵在鴻濱渤澥巨浪之東、金烏玄鳥始明之地、乃陽德之出處、國號日本、曠和之直上翔于天、乃輝赫之城也、國君命儀宰臣使朝、宗我大唐、因聞彼土大師八人等並習胎藏大牟尼法宗金剛界光明相會、學蘇悉地密嚴威儀、悉是故空海大師、去貞元中來此國、投之故內供奉灌頂教主慧果和尚處、習學、至永貞初還本國、弘三部大法、爲彼土大灌頂師、遂有門弟子八人、奉教流化、乃西望瞻我祖師之靈、遂奉冬夏法服、極羅綺之珍、媿不遠乎數萬里來寄之也、并練束絕廿疋、花綿一百屯、剃刀廿枚、錢素等物、敬以捧投之、皆到之故大師影前、一十人等垂涕寫塔拜首墳前、感鄉之重教、媿殊國之懇誠也、令相國使還、傳燈師歸國、當之今月春風習々鶯吟新聲流水涓々冰開舊沼、去々君情、遙々我心、謹附書於東國傳燈大德阿闍梨等、眷眷尙寒、伏惟動止康裕、圓鏡等與此國諸大德等並蒙國恩、悉安法儀、伏謝遠遺珍奇物乃方物頂荷之、誠翰簡難喻、此地亦奉酬之、信備如列紙、并經法道具等、俯望幸賜檢到、雲路阻遠、滄波淼然、望東日以瞻之、申西天之同志、既法無異源、亦期之於花藏、謹附狀、不

宣謹狀、開成四年正月三十日、大唐青龍寺內供奉三教講論大德沙門圓鏡、傳教內供奉持念大德當寺寺主沙門文正、傳教內供奉持念大德沙門令則、傳教內供奉持念大德沙門常明、傳教內供奉持念大德沙門義眞、傳教內供奉持念大德沙門法闍、傳教內供奉持念大德沙門義丹、傳教內供奉持念大德沙門常堅、傳教內供奉持念大德沙門義圓、傳教內供奉持念大德沙門文貢、傳教內供奉持念大德沙門契宗、狀、日本國律大德傳燈大法師實慧阿闍梨等座前、謹宣、青龍寺東塔院傳法灌頂承襲弟子義眞等十人上信物道具、注記等、五鈷鈴一、三鈷杵一、獨鈷杵一、已上三事、故大德慧果先師受持具、宛三海阿闍梨影前供養、金剛頂經眞言教法共五十卷、羯磨杵一、金剛輪一、獨鈷杵一、三鈷杵一、白金綾子二疋、黃屑異綾綾一疋、褐結紗一疋、雜綾四疋、色褐綺一疋、白熟滑州紗一疋、黃綾肚二、紫綾抹肚一、黃綾香畫褥子一、紫羅履一、量白疊手巾一、右件物伏望不責輕勘、遠國之信也、其物並請、實慧阿闍梨與圓行阿闍梨等九人同受用分散、謹狀上、開成四年閏正月三日、傳法阿闍梨義眞等、又承和七年九月作少僧都、八年二月請高野燈明料二座供養法料而成焉、又十年十一

月十五日、春秋二季爲二國家請修灌頂爲永式、帝制可、有勅言、勅爲護二國家、於東寺令下定眞言宗傳法職位并修灌頂、宜告諸寺嚴加提掇、若有違犯者、依養老六年七月十日格科罪云々、又初三年八月五日實慧奏言、今本朝流布日淺、眞言道場未徧、願下勅、諸國置講師、帝制可、其宣僧、諸國置眞言講師、流布密教、修鎮國法、從是教場徧諸國、十二年造一院、號檜尾法禪寺云、十四年十一月十三日、欲取滅、告徒曰、迦葉奉教住世二十年、我如今十三年、世緣云謝、法燈鼎新、是與世合、言訖化、一世六十二、嗣法有慧運眞紹、述作有檜尾記二卷、贊曰、佛般涅槃而迦葉當遺囑、乃與三千阿羅漢集經流行於闍浮、其法森漫能成海、今大師示滅、慧公受其跡、與諸法弟集德、流傳於和漢、王公外護、慧公內護、法城魏々滿國府、可謂重任得其擔、

和州室生開山堅慧大德傳

傳燈修行賢大法師位堅慧、本不知何處人、大師入唐之先、抖數相見於室生、語而不怪、伴來而共居焉、師資之道不言而成焉、入唐齊難歸朝同影、大師常呼稱公、世謂慧果分身、常居東大寺而禪焉、天長祈雨

時、公亦見善女龍王、大師末期願命曰、我今住金剛

峰、永護國家康、汝在貽藏嶽、遠興國家福云々、

受此遺教、居室生之青嶂、練行涉歲臥嶽雲、非

王事前不起山、菟鬼召神隨手不違、咒以說

願、應如鐘谷、王公指紳屨之如神、齊衡帝任內供

奉傳燈大法師位、貞觀帝崇加律師、慧公奏言、今皇帝

能護法、慈悲廣大能及物、設雖枯木朽草無阻雨

露、山僧世心灰、誤賜世燈名、位階非吾願、玉市亦不

盟、請抖世緣可下滄烟霞、隨物化之、又是天澤廣

大之德也、伏乞脫塵榮、得放身於林泉、帝慰喻不

許、同四年秋任傳燈修行賢大法師位、補東大寺之

寺務職、其勅記曰、眞言大德東大寺僧堅慧、右授傳燈

修行賢大法師位、勅企心福焰歸命慈光、室靜燈明、萍

明石火知無浮榮之塵、故有題拂之懷、仍授寵章周

旗、隨喜、貞觀四年七月五日、又有詔召乃入宮觀焉、

帝腆供之、歸投老於佛隆寺而入定、築墳葬室生

之林嶽、

贊曰、傳云、大德始出室生終入室生、其中間入唐歸

朝示種種神力、驚國家畏王公、此言未可也、大德無

出入無往來、無神變、是時機之感得也、全非于大德、諸人無誤焉、

東大寺杲隣大德傳

傳燈大法師位杲隣古德、無言其種姓、初在南部

居東大寺、學性相兩宗、粗得常奧、南北朝際衆所

知識、尤緇林之獐獅者也、聞大師宗風來而就會、大

師器許以兩部法、亦隨盡部類、經軌无遺、弘仁三年

作高雄之綱位、大師曰、汝爲上座、杲除雲霧於大

虛、滿光明於法界之稱、隣養德於法雲之宸宮、紹

位於大日之覺殿之名云々、弘仁十二年、大師求隱

居、書曰、往年自唐所請來經書、今上返賜、宣以教

授、今東大杲隣等稍得大法之旨趣、天長末共大師

來高野修禪、大師滅世後如富士之東、居豆州、造

走湯房、又交居修禪寺禪焉、又承和四年贈青龍寺

書曰、嶺東杲隣是也、嗣法弟子十禪師傳燈大法師位眞

際、少僧都傳燈大法師位圓行、

贊曰、隣師之所至必聞其法政、韓哉若人、

高野山東南院開山智泉大德傳

足智泉大德、菅原氏之家子、父者按高野東南院緣起、

讚州瀧宮宮使、聖武朝貫之來居讚州、嫌大師之家

姊所生之子也、延暦八年五月十四日誕、二歲春二月

十五日始發語言、父母知也不、今日佛涅槃、父母願可取涅槃、我出家度衆生、父母愕然問曰、汝阿誰、答曰我智泉也、言訖不亦語、父母敬如神、天性緊密不辭費、有事就勞能色養、父母所欲知而無違、大師見曰、此兒後起予者也、九歲附大師、去投大安寺勤操、隨事供給、常待巾瓶、不敢廢離、終日消慮、察師言行、十四而成近士、專志道行、乃與大師去、歷覽苦行、四威儀戰々、六和冥合焉、十六而髡髮受戒、此年延曆二十三年也、大師以奉詔入唐、附去侍留學、兩部經業學與師共長、歸來入朝、大同中受兩部灌頂、同末年在河州高貴寺、一夕怒然欲見父母、中心搖搖不得休息、翌旦發錫歸鄉而看焉、父家嬰沈疴、臥在床褥、見泉公握手曰、嗟公今來乎、我罹此疾而日不多、日々陟帖之情今正合也、公來看我、父子之緣尤深、我今永逝、囑身歸命于公、父子之恩永勿相忘、言畢氣絕、泉公悶絕、身心共喪乎百日矣、涕泣悲歎專勤經咒、遂使辭母去歸來、隨師在高雄之道場、秋橘嘉智子爲祈世子一創、相樂郡報恩院爲道場、泉公就呪願、大雨一法曼荼羅、披見乃法華全軸也、大師言、法華守護誓願專在普賢菩薩、造普賢

爲本尊、尤可得感應、於是求材亦咒願、夢境有人告曰、從是南方三里有靈木、香風常扇交吐瑞光、是汝所用之木也、言訖而覺、明日去求、果值一木、微風帶香從幹放光、祈願而剝見、有寶威德上王佛字、採材刻像、靈瑞多發、爰有師工椿井雙法眼者來見、資功未半矣、母氏又來見、恰遇此緣、刻像兩片、手濯暗得其全、法眼見之大驚異、刀工不日像成、遷堂禱之、翌年世子生、乃是仁明也、帝大尊重、稱爲神僧、三年十一月、傳教師致書於泉公、請力灌頂之教授、十二月作高雄上座、其制詞曰、智泉爲上座、金剛之智大悲之泉、既含自行化他二德、必須調和縑素、衆同入其俗二諦云々、又弘仁中、高野建立後、交隨大師而來、造東南院而住、十四年作東寺入寺、天長二年在高野山東南院嬰疾病、五月十四日丁取其滅、起座爲手印、從口出五色光明、須臾而化、春秋卅七、法臘二十一、大師築壙而葬、上立寶形塔、有追悼願文、其詞曰、念亡我法化金剛子智泉、俗家謂我舅、入道則長子、孝心事吾、一紀于今矣、恭敬稟法、兩部無遺、口密無非、豈唯嗣宗之不言、怒也不移、誰論顏子之不一、貳斗數與同

和、王宮與、山巖、影隨不離、股肱相從、吾飢汝亦飢、吾樂汝共樂、所謂孔門回愚釋家慶賢、汝即當所冀、轉百年之遺輪、驚三密於長夜、豈圖請棺槨乎吾車、感有慟乎吾懷、哀哉哀哉、哀中之哀云々歎惜如是人也、讚曰、妙幢夢感、偈文猶如來嘆之、泉公現感大經、又隨感佛樹、不轉肉身之法身菩薩、是非現難思之感應乎、加之孝心通達於會參、咒願妙昭乎王子、惜衆生滅此眼也、

論曰、釋書傳中謂下智泉母隨地獄、泉公救之、其餘求記、古人云、今考本傳記、此事不見、乃載母公事曰、母公慈仁而能好施、夫逝而作尼、勤專賴智泉一人、故慕泉公來相樂報恩院、補普賢像耳、退入道場、斷食七日、座觀滿日、召大師及智泉、告終曰、我今遇二師、逝、願心足、予惟親逝子弔是順之道也、智泉知短折、故我先而逝、我今歸命二人、言訖逝、大師造石塔、立鳴川上、智泉設齋薦福云々、由是觀之、母公非凡婦、又無墮獄事、釋書云孝逼附目連、非嫌而除之、今取記於本傳、故闕釋書事、

元興寺泰範大德傳

傳燈大法師位泰範、考書記一首尾闕而亡矣、拾以認

夷、本不知何處之成人、往々書錄之中見其骨量、器宇冲漠、教乘廣通、常居近州高嶋、傳教器重、以台教之同遊、範圍梨隨而唱台教乎有年矣、然大師歸朝盛唱金剛一乘、其聲非一代之鸞音、微妙無有類、範公凝情於獅絃、日夕忘滋味、自是弃台教專學秘密之道、弘仁三年大師在乙訓寺、泰公如馬州、歸、五月九日來在乙訓會裏、傳教憾之、投書言、公兼盟也、共住生死、荷負衆生、同遊四方、宣揚台宗、然今捨此取彼、法華一乘、真言一乘、有何優劣、夫如此等云々、範圍梨復之、其略云、三身佛有勝劣、教令亦隨之、其理如世間主、今真言教王諸佛加護、國王欽仰、四部耽翫、四海仰止、三千達者否足門、泰範自行未立、忙々火宅速求徑路、伏乞勿責狂執云々、自是鑽仰益學秘密道、今年十二月十四日、傳教大師受胎藏灌頂、傳教乃割範圍梨曰、比叡山老僧最澄謹狀、以去月廿七日頭陀之次、到乙訓寺投宿、空海阿闍梨教誨殷勤也、乃示一部尊像、具令得見曼荼羅、澄渴仰而請許入壇、阿闍梨告曰、空海生期向四十、報命知可盡、是以住山寺、常事念佛、豈有心東西乎、須傳真言法、屬累寂澄闍梨、

生死大而無常迅也、今年之中可受得、我去高雄山寺、於彼許授受者、顧其所許諸佛之加祐也、以十二月十日可始受法、伏乞大同法爲求法、故來我山、今月廿七日其備調度向高雄山寺、努力莫忍留、委曲令光仁佛子知、謹狀、高嶋旅同法範圍梨云、於是範圍梨看道胸无懷法味得同器、此會光定光仁等大僧廿二人與焉、又同四年三月四日與圓澄光定受金剛界灌頂、退學金界瑜伽觀智、弘仁七年七月上旬大師丁開高野、先造一兩卿庵、實慧泰範奉之、又同十二年十一月大師請隱居、書中泰公預四哲之一、書之爲獲麟、不知其終、

贊曰、嗟範公道傳教所追戀、德大師被寵_勳、終傳兩部之大法、作人天之範圍梨、粵惟道德如是、傳燈如是、福履不聞諸後世、惜矣乎哉、

和州超昇寺開山真如親王傳

皇子禪師傳燈賢大法師位真如、大同帝第三王子、弘仁帝之皇太子也、諱曰卓岳親王、觀世之無常、脫躍之情動、弘仁元年冬十月投大師出家受戒、名空理、在東大寺稟三論學、法隆寺道詮指授精微無蘊、教相博涉、三藏洽覽、又仰大師道、牆外窮年煉治化器、乃

當其質、天長二年登壇、受兩部及阿闍梨位灌頂、號真如、多隨大師修禪於高野、其經行之地剩存二所、一曰遍明院、明神影向談教乘場地也、其室現在謂神日格、一曰親王院、專修禪地也、承和元年當大師取滅、告禪師言、欲附高野之寺務、司之否、禪師言、我雖受兩部、未煉而今訣師父、由誰請治鑄、願滅世後之佗鄉得其人、今賜高野之師位、我未能信之、師可而免之、二年三月藏師骸、三年爲壹演由連隆海開壇授兩部、齊衡二年、東大寺大佛落御首、如公奉詔補之、貞觀二年從勅爲亭子皇子恒寂開壇、授兩部灌頂職位、冬十月十五日、上表曰、謹奏、大和國平城京中水田五十五町四段二百八十八步、右件水田大同舊時勅賜上毛野寂磐石上內親王、彼親王等偏謂種因不植、來果難求、捨私地以充功德物、而不許、盡屬收公、歷代由之俗務宜然、真諦之論義未慥也、當今慈雲廣覆、慧日更明、請施入超昇不退之兩寺、哀許佛事之莊嚴、若爾功救亡靈之宿心、德資聖朝之冥助云々、帝勅許焉、同三年如公喪師、二十七年恨恨遺恨在不滿器、上表奏入唐事、四年冬十月奏成入唐與宗睿泛坏而去、

乃到長安。謁青龍寺之法全阿闍梨。受兩部灌頂。改號曰遍明。搜與心未盡。又懷去天竺。乃負笈過流沙去。爰到羅越祇國。遷化道路。云。明年窮冬在唐留學沙門中。瑠寄書告來云。法化四人。壹演由運隆海恒寂。皆幢旗隆者也。

贊曰。嗟禪師獨樹于漢四枝梁。乎大家。雖然自恨根柢未千里。大師切囑固逋高野之幹事。乃入大唐。出流沙。欲得其長所。是大師獨絕而崑崙丘墟深遠之所化也。何則。若不見大師高大之德。禪師豈知我器之卑少乎。昔者孔子謂使漆雕開仕。開映孔子高大之德。觀我器之卑短。故曰。吾未能信之。孔子聞之。知開之可長悅之。諸人思茲力。諸求道。忘之取自足焉。惜矣乎哉。

論曰。師鍊作傳。贊助真如一稱氣志之壯大也。然如真如者能守德。非貴氣志之類。還是損真如。請試論之。師鍊曰。丈夫者貴氣志也。不言功業也。我問之。有人謂挾泰山越北海。是氣志膽大也。夫可貴乎。將功業可備歟。是鄙夫之大膽。而大人之不取者也。又鍊曰。功業者天也。氣志者德也。鍊誤也。功業者在我不非天也。又氣志者念力而非德

也。故以念力成功業。時成與不者天也。非人是以德者功業隨天而得者德也。不得者非德也。由是觀之。志氣之在德。其中間大遠矣。仲尼曰。驥稱其德。不稱其力。豈以念力爲德遺之爲乎。又鍊曰。海師居東場。仁公坐北壇。是韓愈以老聃類其弘師裏。天下之不許者也。然則贊中真如妙視我大師者。挾泰山越北海之類也。以圓仁對我大師者。以寸木比岑樓者也。如我大師者。傳教之所。師拜以圓仁望之。甚於岑樓。唯師鍊所謂中。自推古七百年中。跛印度者。只真如一人者。理之當然。而我所許也。

城西高雄山第二世真濟僧正傳

僧正傳燈大法師位真濟。左京人也。父巡察彈正紀朝臣御國也。濟公丁宿母胎夢室中建三層塔。覺而身焉。延曆十九年生。齠齡而受于句讀。成童而粹于儒術。善屬文章。詩賦金玉志學之後。始入大師門。專學佛教。乎數歲矣。涉大藏。閱章疏。而評論多發。悉到妙理。弘仁末年。大師器許。以兩部大法及傳法阿闍梨位。年二十五而入高雄峰。在禪關。乎十二年。道標高稱于天下。嵯峨太上皇帝感其苦行。舉爲內供。

奉十禪師、承和二年上表置高野年度、三年五月帝遣使聘唐、詔眞濟令入唐、七月二日太宰府出船、海中風荒、漂蕩二旬有餘、曳々掣々船爲波溺、於是判官文雄告諸人言、風波洄々船無由浮、徒自取死、不如任運浮去、乃毀船爲片版、令三百餘人泛去、濟公之所駕僅有三十餘人、在波上二十三日、悉餓死去、只剩濟然二人、波掣而至南嶋、嶋人遙見、海上每夜見有光明、尋之寄舡、乃見此二人、舡中謂佛人、恭敬而移舡、歸嶋加敬育、具丁聞來緣、舡舟送本朝、仁明帝聽嶋人說神異、竅幸殊甚、從是濟然二人畏天下之志、明年七月淳和王子源鎮入高雄出家、拜濟公爲師、十年十二月作權律師、十二月三日宮中妖怪、諸宮震懼、二日於宮中眞言院修陀羅尼法、妖怪忽止、十四年轉正、當文德帝取宇尊重尤異、它國家護持專憑此人、是以官爵日加、仁壽元年任少僧都、同三年九月轉大僧都、齊衡三年十月任僧正、眞濟師抗表請以僧正位讓大師靈、天皇感之、天安元年十月大師贈大僧正、眞濟賜僧正、其策命如載餘光傳中、天下稱之謂有仁義、又表請高尾建五重寶塔、造五大虛空藏像安置于

塔、置七口僧及年度三人、春秋二季讀虛空藏十輪等經、以鎮護國家爲永式、天安二年八月帝弗豫、然帝與濟公以峨岬相和入冷泉院、咒持帝身、雖然定業數極以不可轉、終昇遐於寢室、濟公嘆曰、曲終不人見、江上數峰青鬱々、不耐歎惜、永絕知音、絃臥身於實相寺之丈室、貞觀帝召而不起、二年嬰疾病、二月二十五日會徒告言、我今住本懷轍、汝等可供養、言了手作印契、安微而化去、春秋六十一、法算四十有六、

贊曰、古人曰、蛇化作龍不改其鱗、今濟公以三十二年之定力、得換骨之靈方、役神光召遠、誨佛咒蒐百怪、是內佛而外人、之面者也、又國家賴護持如父、君臣歸心、傍若無僧、朝爵日加、德化播隆者、是內龍而外雲從者也、非是文妄、考時史可審察焉、

論曰、史中著傳云、帝弗豫、濟公護之不得、從是失志而退、釋書論之曰、繫咒救有數、不知之累矣、其短可惜、嗟哉、二士評濟公不知其體、夫作史者、吠簑者也、立論者吠聲者也、棄體論形、安視其人、棄形着聲何劣、古往義者不言乎、君使臣以二

人、則臣報之以一人、今帝賴濟公一人、濟公報之以一人、心喪三年而逝、是義高古今者、然不知而評、爲師鍊及史者、喻其所感、歌曰瞻泰離々中心如醉、知我者謂我心憂、不知我者謂我何求、聞之可服膺、嗟惜矣哉、二士不知仁義、失世智矣、師鍊呵明逼、我謂知仁義、今人驅而納諸不仁義之中、而莫之知辟也、又師鍊云、濟公與慧亮爭法驗而不贏、是倡俳妄、傳曰、仁壽三年文德帝丁立世子、惟喬惟仁爭作世子、任所信相撲之勝負、此時惟喬以名虎爲力士、眞濟咒救之、惟仁以善雄爲力士、慧亮護持之、爰眞濟失利、善雄得勝、惟仁作世子、師鍊取之作慧亮傳、是乃作言全妄誕者也、惟仁越三兄作太子、嘉祥三年十一月也、到仁壽天安何爭之有、且名虎承和十四年死、仁壽天安時分此人不存焉、摘力豈有此理乎、加之惟仁眞濟法弟、而眞雅之祈子也、故爲眞雅、建貞觀寺遷位爲僧正、又眞濟從仁壽殊遇厚、除官三、不幾而到僧正、慧亮以法力謂立清和帝、其勳何揭之有、史傳中不記其事、眞雅眞濟事明、史傳、又師鍊曰、眞濟失色作魅、又是書流言以作相應傳、尤妄誕者也、其流言

倡俳中傳曰、寬平五年文德帝藤太皇妖病、不動尊語相應、私言、彼眞濟之靈也、惑色作魅云、不動若有此言、不動必似記者、惜不動離此難、是時濟公化去三十四年、藤后經帝五朝過六十歲、考時史不得其端、生日染三十餘歲作魅、古今史傳豈有此例乎、師鍊書此等烏有不勘、是何意乎、欲取而質、取笑於空響、欲措而止、遺惑於後人、我今議而喻焉、諸人察一二、我視古之好義行烈者、不好色、今濟公以德讓師、竭身報帝者、非是義士勵行之體乎、復圭之士熟察焉、又曰、仲尼曰、視其所以、觀其所由、察其所安、人焉廋哉、今濟公平居無耻、屋漏、獨步寰宇之僧、高尚四朝之帝者、常崆峒山林、能堪忍頭陀、永離五欲、心遊物外、史中舉行人不度之、朝幸日渥帝情斷金者、進退消息高潔而一點濁不揚也、采薇歌可省也、

城南深艸貞觀寺開山眞雅僧正傳

僧正法印大和尚位眞雅者、是大師之肉緣之高弟也、以延曆二十年辛巳、誕於讚州多度郡屏風浦、然大父田公化於大師之大造、弘仁中帝賜姓佐伯宿禰、改官貫京職、移家於洛之右京、或曰右京人蓋由之、天

資溫潤、耳目聖明、九歲出鄉、從於兄大師、傳道受業、如順流架棹、錯綜無所滯、十九歲登戒壇、受具足戒、學乃益進、該括內外、大成顯密、帝深有優幸、入宮而進席、令誦三十七尊之真言、音韻雅麗、隱々如鈴、聞者不覺而悅豫、帝大感動焉、天長二年三月、授兩部及唯受一人之師位、大師言、是授汝一人、其器以當也、鹹海雖廣、秘甘露一水、是三世諸聖傳教之術也、汝能擇機而傳之、法水生於無盡之澤、承和二年三月、於高野山中院、受大師之遺屬、統持東大寺之真言院及弘福寺、三年五月、依勅、東大寺真言院中立灌頂院、置勅願之修法、嘉祥元年、作東寺長者、帝勅任權律師、不幾轉正、三年三月廿五日、清和天皇生、是雅公與帝叔父忠仁公謀而自前年、於嘉祥寺內立精舍、號曰西院、就之修法、專祈降誕、修供早驗、乃生聖子、雅公入而加持、母子得無恙、仁壽三年九月、作少僧都、齊衡三年二月、轉大僧都、天安二年八月廿一日、始准諸宗補任諸國講讀師、貞觀三年三月十九日、表請嘉祥寺西院號、貞觀寺、六年二月十六日、二十七日、以嘉祥寺西院號、貞觀寺、六年二月十六日、雅公奏曰、律師已上侶秩稍尊、當不下與凡僧同位

階、於是朝議以法印和尚位爲僧正階、法眼和尚位爲大小僧都階、法橋上人位爲律師階、於是尊任雅公、賜僧正法印大和尚位、聽乘輦車出入宮門、三月四日、詔以內藏寮所領遠江上郡百六十四町入貞觀寺、八年三月勅曰、自今以真言宗僧任東寺三綱、歷階業、而器超出者任西寺三綱、永以爲例云、雅公入而禮焉、同十四年三月十四日、尊重爲法務、詔曰、置綱所以附印鑰、凡僧官進退法事、啓散皆管行、七月十九日、表請改正於貞觀寺年分度之官符、而成焉、十六年三月廿三日詔、於貞觀寺設大齋會、以賀道場新成也、以律師道昌爲導師、大僧都慧達爲祝願、延諸宗宿德僧百人、以備威儀、雅寮唐高麗樂、大安寺林邑、興福寺天人等樂、交奏、先是預教公子王孫年少者、此人時出遞舞、凡厥莊嚴幡蓋灌頂等之飾、微妙希有、奪人目精、親王公卿百官畢集、京畿士女都邑填噎、事畢後、賜導師以下百口之僧度者各一人、七月十一日上表、請解僧正、優詔不許、廿日又舉焉、更賜慰喻、廿六日亦舉焉、其表曰、沙門真雅言、小僧今月生期再露愚衷、頻降徧覆之仁、未賜允遂之命、小僧聞、隨功而受祿世不爲貪、藉才而升人

言其進否、今時論同口取喻於捕鼠之貓、物議聚唇假說於伺魚之鶴、小僧詰使山峻、愛著海深、放毒龍而不追、制魔鬼而難縛、況亦幹濟無術、統理非材、猥居法座之上頭、遠慙如來之右臂、加之、小僧去月遘疾將不復還、陛下致以懸蛇之醫、問以珥貂之使、故中陰之體感恩而更來、東岱之魂賴德而自反、今纔續絲髮却苦虛羸、容顏消損於昔年、志意衰落於恒日、薄劣事務惱發於心、聊且作勞汗流於額、餘憊如此、殘喘幾何、自厭煩於持領之任、詎味榮於提綱之寄、當今種智慧之樹、開功德之花、御紺馬而飛行、駕白象而遊戲、一十五德莫匪宿和尚之群、三十萬人皆是大比丘之衆、舉之而三、必益於治、豈使愚蒙久妨賢路、皎々者日、鑒小僧之素懷、蒼々者天、察小僧之丹懇、伏冀慈仁特賜哀許、若得退影巖岫歸老庵廬、則遙護紫殿傳禮誦於松風之聲、閑臥白雲、了禪觀於蘿月之曉、無任知止之情、謹重奉表、陳讓以聞、是日下勅答曰、勅、眞閣裂袈表悉之、公白業夙著、玄韻孤高、四無量之觀克明、三菩提之心彌固、朕之景慕豈只一朝、二十餘年賴其普濟、近曾聞公寢疾助憂于懷、私恨門光一收

不復相得、方今醫王下手保全上身、朕欲依禮接之便、議國家之事、而今更執辭退不統綱維、解累塵區、屬想風竇、雖虛己之讓、在公最高、利他之益爲朕不至、持領之任永以委之、燼不復嫌朕之願也、至如下待餘年於月壘、養衰疾於石泉、公自任其雲霞之心、朕不致以羈束之強、唯望臥治法務、暗鎮俗心耳、宜得此趣、莫重表請、於是止訴陳也、元慶二年二月五日、嘉祥寺僧等請置七僧爲定額、勤修御願、以報國家、作眞觀寺所屬受座主之管攝、制可焉、元慶三年正月三日、寂矣、自舊冬病乎數旬、帝候問數々至、不問醫藥、手作拳印、口誦蜜咒、心身泰然化、春秋七十九、法臘六十二、附法五人、眞然、源仁、載寶、慧宿、慧皎、皆幢旗隆榮者也、

贊曰、偉矣哉、屏風嶽鍾造化之神秀、拔此華矣、大師與雅公一根連枝也、幹于國都、四海遊其陰、梁于大厦、千歲不磨宇、尹吉甫歌曰、崧高維嶽、駿極于天、維嶽降神、生甫及申、維申及甫、維周之幹、四國于蕃、四方于宣、猶過之者與、連理生之、千歲蕃國、

和州牟漏寺眞泰大德傳

傳燈大法師位眞泰、記闕而無可操焉、大師東墨中有贈答二三章、又承和三年實慧贈青龍寺書中、謂得傳法印可者皇子禪師眞如及牟漏眞泰等、又隨作連署、其餘求進止、亡慮湮行跡、雖然實慧書中上足乎皎矣、剩大師書樣者、弟子中只存此一人、惜矣哉、若人而亡行實、

贊曰、器滿而不鳴、是不足恠者也、昔天台威緘默傳教、泰公二威爲性耶非歟、

東寺圓明律師傳

律師傳燈大法師位圓明、氏族生來無所聞焉、考史錄拾遺、初如南都學三論、後承事於大師、受密教、天長之初作東寺之入寺、天資峻邁、風格塞淵、大師許以兩部之祕法、擢以東寺凡僧之別當、大師入定後、仁明帝勅使補東大寺之幹事、處事增宜、承和四年實慧贈書於大唐青龍寺、明公爲連署、嘉祥三年七月廿七日任權律師、同十二月轉正、仁壽元年盡報命、眞雅追稱其人、

贊曰、明公我未知焉、拾以聚德、十五分而圓明者也、在時而天下仰止、雖不聞其聲音、不言而品物亨者歟、

西山神護寺忠延大德傳

傳燈大法師位忠延、不詳所生、大師在世日、爲先妣宗方氏請師設理趣會、修供養、天長初、於東大寺戒壇院受具足戒、其後在東寺、隨大師受兩部灌頂、從承和初入高雄、而修禪乎有年矣、同四年與實慧贈書於大唐青龍寺、而告大師之遷化、報慧果之墳墓、其餘闕行實、世遠失知識、雖然、從行三千中、十人達者得其一、尤其器可珍長者也、

弘法大師弟子傳卷上終

弘法大師弟子傳卷下目次

城西海印寺開山道雄僧都傳

嵯峨法輪寺開山道昌僧都傳

金剛峰寺第二世眞然僧正傳

洛東・輝林・奇開山眞紹僧都傳

城州小栗栖開山常曉律師傳

眞際法師傳

眞境法師傳

眞體法師傳

攝州六甲山神咒寺開山如意后尼傳

附餘光分

弘法大師弟子傳卷下

城西海印開山道雄僧都傳

少僧都道雄、姓佐伯、讃州多度郡人、童稚石老成量、投於法相之慈勝和尚出家、天性淨麗而陶染早成、粹于唯識因明、義論善發、酬對無敵、又就華嚴長歲和尚、聞賢首宗、長歲慇懃教盡靈奧、爰歇詢諮而投歸于大師、日夕渴仰承事有年矣、天長初年受灌頂職位、大師告曰、汝善花嚴、我亦示花嚴、乃自般若三藏所稟顯密開合軌悉屬了、曰、汝住持勿失、四年共大師應橘寺供養、雄公建道場伽藍、開壇祈好相、忽有境界告言、山城國木上山、土地尤舍靈而感應地也、翌日往而見焉、果得佳境、舉事奏成就之、剎功營宇合一十院、名曰海印寺、專轉祕密花嚴、衆生起信受化者夥矣、承和十四年十二月作律師、嘉祥三年十二月轉權少僧都、仁壽元年六月八日遷化、

贊曰、佛有無量三昧、皆是從眞言一體速疾力三昧生、是故若入一門、則入無量法界三昧、今雄公得海

印三昧、乃入法界燼哉、印現寶地、印現法身、普令無量衆生入法界三昧、

嵯峨法輪寺開山道昌僧都傳

少僧都法眼和尚位道昌、姓秦氏、讚岐國香川人、秦始皇六世孫融通王之苗裔也、延曆十七年生、幼歲欣出離、與群兒不_レ成隊、孳々自勇、初入三論、性相能通、後涉內外、流派海朝、弘仁七年拔萃洛試度之澤、始騰_二緒龍門_一、蛻骨之器所_二知識_一也、同九年、於東大寺受具足戒、爾後周旋南北京之知識、徵問釋疑驚愕於人、於是老成之講師知昌公之義龍、竊服其知識、時神護寺空海阿闍梨說餘宗理成佛自宗事成佛、聞天子尊信諸宗服膺、昌公與莫逆交語、粗挾角難、遂使弘仁十四年在清涼殿中得拜事成佛、自是歸命仰祕密教、天長五年於東寺受兩部灌頂職位、專唱金剛一乘、同七年奉詔作佛名懺悔導師、此日上問道昌言、今王臣信法修福、腥膳罪未除焉、輕重之分王臣有差否、昌言、王重臣輕、帝有疹中之色、左右見之甚輒靡、昌還自若也、帝良久言、爲啓沃焉、昌言、親見之、王者嗜魚肉、則動盡山澤、只非自有一罪、役人令作殺、臣庶不_レ然、只求口腹而已、故王

重臣輕、帝听而言、昌之言是也、自是舒漁獵省包宰、九年依大師教於法輪寺修聞持法、五月感明星來影虛空藏現衣袖、承和元年春、於東大寺眞言院請大師聞心經、三年大井川洪水浸堤、詔令監護其堤、昌力之、衆人悅而資之、河畔得無恙也、同六年作佛名導師、天安三年作興福寺維摩會講師、貞觀元年作大極殿御齋會藥師寺最勝講師、同六年作權律師、十六年改葛井寺爲法輪寺、三月廿三日作貞觀寺供養導師、昌公咒願文曰、夫貞觀寺者、先皇仁壽之初、今上降誕之日、星垂長男之光、日有重曜之慶、故太政大臣美濃公憂龍姿之不_レ免在襁褓、憐風德之未_レ得勝衣、與僧正眞雅和尚私相謀、使念諸佛之加持修眞言之秘密、庶幾飛天景福與日月而光華、表海元儀感風雲而眇遠、卽除荆棘漸夷涯險、成斯堂構爲一道場、及至貞觀之始一系統守文悟彼遠慮深謀、斯時遂成鴻業、寢食之頃不肯遺忘、當今無爲無事一切不_レ費無益國之用、一事不行有苦民之務、往欲酬彼私志、返慙乖此公議、重思將恐之雅言、復顧棄予之風刺、卽課梓匠爰命輪材、構毗盧舍那之寶塔、造尊勝如

來之金像、并立灌頂堂一字、太政大臣生存之日、更建一堂、奉造釋迦丈六梵釋四王像、皇太后別立西堂、安置金剛界曼荼羅、僧正眞雅和尚又立東堂、安置胎藏界曼荼羅、三摩地法苑如修天上、三昧耶界自然移於下界、始自嘉祥院之後園、今爲眞觀寺之初地、仍取其本號爲定額名、唯有足於性者天損不能入、貞於明者時累不淫、故不爲勸誘者增浮華、不因諫譏者廢塗飭、歷代規謨、前主典故、非外久執前懼、其中不誠者、遠則爲是秦繆勞若鬼神之勤、近則爲非漢文重中民十家之產、思茲在茲、去秦去甚、遂不弛國家慶費之功、猶恐後代處利圖之罪、然而帝釋安居之化不獨以自利爲上謀、輪王精進之宮唯斯以周弛爲業、故三千世界遠近歸依、百億群方幽明仰慕、況乎一人有慶、兆民賴之、因此而論、不言可知、天下黎甿、四方庶品、或錫力相持、或勞身共役、孰不進趣賴此吉祥、方今所修雖事起于一人、而爲德及兆民矣、何折彼功德信心淫費非謂金銀七寶之莊嚴、明德惟馨、何必黍稷百味之供養、原野旅生之樂、可施十方之僧、山林自笑之花、足供三世之佛、仍請僧徒一百人爲今日

之證者、設伎樂一兩部、代天人之妙音、先以功德上分奉鳴山陵七廟、崇之以春秋禴祀、覺路先迷、敬之以伏臘牲牢、玄津脫關、不如乘斯妙業、宣遊十地之前、記此勝因、馭蹕三天之上、故太政大臣志深輔佐、念切憂勞、專謀臣之福作、不顧我生之衰耗、天不愆遺、四海相怨、次願尋彼宿因、速歸依佛部、捧覺葉而大覺、乘化蓮而廣化、皇太后德懷千月、慈雲覆之彌明、功載萬方、法雷震之無動、朝廷歸依諸佛、乃父乃兄廻向法門、或權或正所願長期交奉、永保昇平、雨順風調年豐歲稔、東宮被金剛之愛護、增銀榜之精華、衆福雲聚、群祿星拱、九卿八座、內外百官、霑聖德之香霖、滅世間之煩惱、一切神祇、一切靈鬼、雨師風伯、水佐山精、攝此芳緣、俱脫苦業、含生有識、或飛或沈、同嘗法味、共趣覺路、依例修佛名、講談濯辨波、聞者起信、帝觀之賜手勅僧都記、始自天長、覃此晚年、佛名之導師无一年闕、復殿上法事每會道昌爲唱導師、又受壇越請登座講法花五百七十座、席下常數百人、同十七年二月九日卒於隆城寺別室、壽七十八、臘五十九、贊曰、夫力耕而積倉、三散萬金、怙然無畏者、范蠡

之富也、今力學而獅步、日散七財、無畏者、昌公之富歟、積聖財、能散、雖王公求、無畏而能施、誠行處化君子之人歟、

金剛峰寺第二世眞然僧正傳

後僧正眞然、譚州人、大師肉弟高子也、弘仁二年生、性溫潤、含照氣、秋霜高潔、慕大師之衣襟、悉附去、九歲乃出家、性習毗尼、而威儀不毀、舉十四而入神泉苑、見善女龍王、虹氣猛發、願念、我得金剛身、永不絕化緣、從是精進益事、苦行、大師常稱謂有崑泉之能、天長八年隨眞雅受兩部灌頂、退學兩部經業及瑜伽觀智、而日自省焉、尤能法力、若有問瑜伽者、曰、瑜伽唯無佗、內鑒冷然、則月加水、念无生滅、則成等持、承和元年甫二十四、十二月十五日大師會諸弟子、擇高野附屬之人、諸高弟各說志而違焉、然公獨不辭而言、願我奉司香、非謂能之、夫爲人也、不可不學而習焉、我隨師學修禪、願習之而永資利物之迹、到住持之法猷、待師兄之扶持、大師可而囑山、二年三月葬師、移住中院、皇帝賜慰問、諸官多贈使、八月廿日賜年度三人、澤山學爲式、三年五月思下法兄眞濟阿闍梨入唐、上言白、沙門眞

然言、我蚤投朝沐清化、十有七年師父掩化而早逝、不幸而作孤露、徒嬰先師之餘裔、空守山竈之殘火、請采薪於大邦、得然於我東域、若天慈賜允許、與法兄眞濟去、帝制可、於是五月五日拂衣就道、駕遣唐使第三使判官文雄船、七月太宰府艤舟、二日擇天氣、四船同時出舳、海中風大荒、船爲濤溺、判官文雄爲桴浮、濟然二公、漂泊二十三日、南嶋人眺望海上、見光明、嶋人寄舡見此一人、謂佛仙也、駕而歸嶋、敬育聞來緣、鳴咽益供養、送得歸本朝、承和帝聞神異及狄人敬、尤爲本朝之榮、承和八年二月二日、准定額諸寺、高野山寺賜燈明料并二座佛聖供、齊衡二年七月天野祠勅賜官社詔、天安元年元興寺增利貴、然公之道行、來求嗣法、利唯識論獅、然公曰、汝廣極教乘、所得法云何住持、利曰、如我所得唯識遮境、然公曰、其法異我、如我所得六大俱行、利立難、然公曰、辨攪心水還失、眸子、汝有器先入道場、心魔與佛俱行、乃開道場、授兩部灌頂、利之疑問於、是而止、貞觀帝舉而任律師、元慶帝卽位七年十月七日任權少僧都、明年作東寺長者、仁壽元年八月帝勅立仁和寺、勅然公爲落慶導師、咒願鋒法筵、

願旨微妙、歡情悅之、十月廿一日遷轉爲正、寬平元年以高野座主附壽長阿闍梨、二年春夏間高野造九丈多寶塔、大演供養、十月帝詔任僧正、三年九月十一日告徒曰、我奉先師之教、流行五十六年、今正歸山、汝等可代奉行、勿荒怠、於佛會必相見、跏趺住、印相、泊然蛻化、一壽八十歲、

贊曰、俯觀非那羅延之力、則不能抱持金剛山、仰察然公從少壯有那羅延力耶、從大師入定五十六年、持金剛峰寺、使能巍然、今云八百有五十年、伽藍聳諸峰、寺院滿林園、僧徒萬餘人、遵行教法而翼々濟々者、皆繫有父而有此子、懿矣哉、

洛東禪林寺開山眞紹僧都傳

少僧都眞紹、未詳何所人、大師遺記中、天長元年神泉苑祈雨場始著稱其名、於是知足化之選、眞雅言實慧嗣法也、又資有宗叡、所受阿闍梨位、承和十四年作權律師、嘉祥元年六月廿一日轉正、齊衡元年奉爲聖主、於河內國觀心寺造五智如來、三年而功成、爰祈修供之地乎有年矣、終貞觀五年相攸於山城國愛宕郡、買得從五位下藤原朝臣關雄東山舊宅、建立一院、造堂奉五佛、名爲禪林寺、請欲爲

官寺、九月六日上表而成、其詞言、律師眞紹曰、昔泰以愚蒙承和聖主之恩、不任慙愧之至、思致涓塵之効、行住坐臥未曾廢忘、當此時、至心發願、奉爲聖皇造毗盧遮那佛及四方佛像、奉報聖恩、護持國家、而每事闕短、資具未備、唯採材木未始鏤刻、爰逮于齊衡元年、於河內國觀心山寺謹奉造、三年之內其功既畢、竊慮山中寂寞住持難久、至于後代恐有頽毀事、須近移京華之邊垂、令易後代之修治、爰買故從五位下藤原朝臣關雄東山家、即便爲寺家造立一堂、安置五佛、夫僧買俗家者、律令之所制、私立道場者、格式之所禁也、犯此禁制立彼道場、非是敢狎法禁、故招罪名、誠欲下報先帝之鴻恩、果區々之至願、夫普天之下莫不王地、所作之功德皆悉資國王大臣、此則聖教之所明、非凡愚之私造、請預之定額、名禪林寺、永傳眞言法門祕要、師資相傳存於不朽、詔許之、六年二月十六日策命作法眼和尚位權少僧都、十一年補任轉正、貞觀十五年七月七日寂、嗣法有宗叡、贊曰、師有實慧公、而資有宗叡焉、法胤不忝者佛子之孝也、創官寺立護寺、國恩不喪者法臣之忠也、

忠孝本立德行道成、當爲佛門孝之模楷、

城州小栗栖法琳寺開山常曉律師傳

律師常曉、生來不知矣、生而在山州宇治郡小栗栖之路邊、入取而乳養者也、長而器宇不羣也、元興寺豐安法師得去令出家、性善習學、戒行以序至、實義龍律虎也、弘仁六年於東大寺受具足戒、其後從大師受學、天長初許受法、同六年作齋會導師、終帝選擢

月作權律師、十一月晦日化、
贊曰、鳳兒弃地豈徒朽乎、羽翼自成而可翔四海、今曉公、鳳兒而自長者歟、始雖爲弃子、自齊羽翼入唐歸朝、一年而得之者、豈非一日四海之鳳兒乎、加之、奉修供而置帝位於泰山之安、旱時奉霖濟時奉舟、可謂國家之寶臣也、

實際法師傳

請益、承和元年入大唐、到淮南廣陵館、遇栖靈寺文璿、文璿者不空三藏弟子、慧應徒、尤顯密軌該得粹者也、稟密教多開所蘊、又去謁花林寺三教授大德元照、更請益、照授以阿闍梨位灌頂、又有祕法、名大師法、彼國秘不出都下、然照喜曉之神器、欲播化於異域、乃授令委軌、則同二年附舶而歸、傳來書卷六十軸、入朝開受持、法驗尤顯、六年獻太元師像、七年返賜命鎮供、於是擇地、奏曰、入唐請益僧傳燈大法師常曉言、山城國宇治郡法琳寺、地勢閑燥、足修大法、伏乞安置自大唐所請來大元師像、爲國家修祕法、永祈寶祚之延長、有詔許焉、於是安元師、以爲修法院、齊衡之際大旱、勅於神仙苑修大元師法、白龍現幡上、大雨普灑、貞觀七年二

法師實際有顏淵賢、有顏淵命、先大師而逝焉、大師慟曰、念亡弟子、性是顏回、命則嚼菌、法味並養、忽闕一人、每思寫瓶之有在、何謂入泉再不歸、哀哉、哀哉、其器如此、吝惜矣哉、又杲隣嗣法有實際、別人歟、

真境法師傳

法師真境、石州錄事弓削氏子也、薦父之冥福、書金剛頂經、大師記功德、稱其孝、遺誡中、真曉見善女龍王、與之別人歟、可追考、

真體法師傳

法師真體、和氣朝臣之子也、早失怙、榮花灰眼、家妹一有焉、並影相悲、奮然拂世緣、憑大師祈出世、大師愍之、授戒令出家、給事有年、而妹家繼

法師真體、和氣朝臣之子也、早失怙、榮花灰眼、家妹一有焉、並影相悲、奮然拂世緣、憑大師祈出世、大師愍之、授戒令出家、給事有年、而妹家繼

逝、天長三年十月八日捨家地、爲佛物、其所寄附、土佐國久滿田村兩庄、美作國佐良庄、但馬國針谷庄、永爲神護寺傳法料、以薦諸靈、回向菩提道、身能護戒至心歸命人也、我見其隨逐、更不知其餘、右撰三人分有履歷之人、個餘有眞朗眞榮康守安行人、都闕行迹、唯大師之書中交見奉使乎之命、又足化之緒餘土且歟、舉名埃識者、史記弟子傳認名闕記、蓋此之意歟、次作如意尼傳、尼部別故、故不混而置、非後之、

攝州六甲山神咒寺如意后尼傳

天長皇后如意、自言吾始出丹州與佐鄉、未聞有其所生、性好山水、自幼獨游十歲、終來京師、柴居頂法寺之堂、日夕念如意輪而坐、運步無敢怪、弘仁十三年春初東宮有奇夢、頂法寺裏見一女、天資端嚴、風儀殊絕、進止堂々、望視如神、詰旦命官檢堂裏、果有一女、携宮來、東宮觀之、夢所見之女也、問其來由、果不偶然、東宮大喜、入以爲妃、性慈仁好施、體不浴而能淨、天香自然薰、粉花自然麗、常持如意輪咒、明年四月太子卽位作帝、本奉如意輪、與妃從大師受如意輪法、常自修供、一日帝誓像言、願

觀眞身、尅七日祈悉地、第六夜夢天童、彼告言、陛下願力深故、大悲爲帝迹焉、第四妃是也、覺帝大敬焉、寵遇從是無比倫、天長五年妃亦尅念七日修供、其願曰、我度末世衆生、思入佛界門、願大悲者示其淨界、我就闕之無墜念力、滿日持咒、座空中有聲曰、攝州有寶山、如意輪感應地也、寶珠祕峰、名曰摩尼峰、有神常擁護、於是造伽藍衆生可引接、開目見之、天女駕白雲飛西南去、爰二月十八日夜、率宮女二人潛出宮城、金吾校尉橋親守爲隨事、月下赴攝州、艤舟於河畔、明日到南宮浦、妃下詣神祠、神出接皇后、晤語說數事、只二女見之、妃云、辭神、又去詣廣田神祠、神對如南宮、乃宿廣田里、翌旦入山見、土地沃壤、百花開落、池中出五色雲氣、又到山前、大蛾吐黑氣、又登山頂、紫雲擁峰、忽然有女神、告曰、此曰究竟摩尼峰、我曾藏寶珠、每日出中無闕影向、以地施王妃、就之可建佛宇、言訖隱焉、是廣田明神也、妃正大喜、欲徧營功、有田獵者、見而傳之、郡縣之吏不召而至、皇后告求願、隨喜奉行之、乃爰徧功、然帝失如意、京城中求無處所、更勅畿甸、洽問聞、爰尙書右丞

眞王聞妃之所在、入宣宸襟、妃語眞王言歸而言之、妾本生山林、宮掖非我素、雕籠美餌豈敢樂乎、願放於山林、令我期身、帝嘗奉如意輪、我此崇之、日夕修念可報帝德、天皇雨露之息、分形賦德白焉、我不駕歸輦而止、眞王歸而奏焉、上潛然愍妃情、乃下勅扶其功、堂閣若干員、崢嶸峙山岫、三十餘日而落焉、妃及二女修如意輪陀羅尼三昧、平居無雜行、爰西山現一鳥、大如鸞鳥、身擁黑雲、交吐火焰、動遍堂廡、妃取散杖而洒之、火焰斂雲中、又雲中現可畏、八面八臂來欲破道場、妃亦咒忽退、此年十一月依妃之請、大師入山見焉、一七日修如意輪法、第三夜月輪乘紫雲下壇上、盡修供上、六年正月請大師受兩部受明灌頂、五月如吉野欲見大峰、僧徒語曰、大嶽壅途、不通乎尚矣、且山中諸尊深諱女人、何可得入、尼曰、我見此山女神交見、諸尊不禁乎的矣、嶮好穢肉不求淨軀、入山洽涉二旬餘而歸、備說狀、同山徒知、衆徒大驚、敬謂神女、供養尤厚、尼爰止肖像而去、山徒立之與役君等供、七年二月十八日受傳法阿闍梨位灌頂、又妃望見西山、有櫻樹放光、採欲造如意輪像、三月十八日

延大師躋見、大師言、此地險隘不便于斧斤、還就道場、咒而役神、中夜地震、須臾移平林、大師採而刻焉、用妃等身三十三日而像成、妃有祕籙以納像中、大師說偈誓利益、像點頭焉、以是奉堂爲神咒之淨刹、爰如曰、西山有鬼神王、名龜亂神、來欲厭堂宇、奈何鎮之、大師告曰、東谷有盤石、就上供神禍永無、妃所用之、次而無來、又問曰、令法久住守護何奉而可也、大師言、伽藍護法之要無如辨天、授供修之、妃烹而修之、第七夜天女降、十五童子羅列圍遶、盡供乃昇去、又三障神現前峰、妃供而鎮神、又大師修如意珠法、辨才天降而證明言、我從汝願、自今住此山、永利貧乏衆生、八年十月十八日延大師落慶伽藍、大師說偈贊本尊、妃亦說偈贊本尊、乃從大師薙髮、分爲三結、一分奉師、一分獻本尊、一分進帝、法諱曰如意、二女亦願作尼、落髮作出家、一曰如圓、不知族姓、一曰如一、和氣真繩之子、承和二年正月帝淳和有御幸、如意爲帝說山禪利益之要、悉適歡慮、帝乃歸而寧矣、三月二十日寅一點、向南方蓮華合掌、口誦如意輪真言、坐化、天壽三十三、帝勅宮賻賻而厚葬、嗣法有二尼、

如圓受其跡、如一居紀之妙樂寺、

贊曰、佛世龍女成佛、示化於南方無垢世界、其餘雖曇彌耶輸、皆記未來、猶未許開化、漢朝尼衆隆於秦、續梁唐、班居所々雖共住、未聞有堪濟世者、於我朝古今之尼衆中、適有此尼不測之人、入王之後宮、化王宮、出王宮、開會場、遇大師之證明、示即身成佛於摩尼峰之樹下、其伽藍七百餘歲、迄天正中、昌々者、德可繼佛世之龍女、嗟隣矣乎哉、論曰、師鍊曰、大師儼如意尼之紫雲篋、利神泉苑之法華、此言不然、釋書傳中書常曉勝覺等、神泉苑以法力一格龍致雨、有法作之則常曉勝覺猶能之、大師大聖不置何儼器爲、舍旃、苟亦勿然、

弘法大師餘光分

今撰大師之餘光、滅後百年間、其簡稍夥矣、矧百年之後不可卒舉、故其中拾王者之贈賜、僅得數事、以附行弟子傳、其餘諸宮之崇信、高僧之感稱、遺跡之靈驗、一向遺之者也、其餘光不滿故、題以分、

高野年度

仁明天皇承和二年正月廿三日、大師於東寺請年分度者三人而成焉、然三月十五日遺誠、以東寺年度改請可置高野云々、依是真濟於東寺高雄東大高野之四處請賜別度而成矣、其符云、太政官符、應試真言宗年分度者、學業并定、得度四處事、右大僧都傳燈大法師位空海表併案、太政官今年正月廿三日符併、真言宗年分度者准三密法門、每年三人度之者、其真言非傳法之人、不聽課試、伏請令傳法阿闍梨道屬相承者與彼許法一兩人相共不經省察、於金剛峰寺課試文義十條、准太政官去延曆廿五年正月廿六日符、通五條已上者、以爲及弟、子即使具狀申、官依例被裁下、但受戒之後六年令住、彼寺奉爲國家修三密法門上者、從二位行大納言兼皇太子傳藤原朝臣三守宣奉勅、依請、以八月廿四日永爲得度之日、承和二年八月廿日從是爲式、得度高野、

贈大僧正號

文德天皇天安元年十月、真濟阿闍梨賜僧正官、濟公請以官讓大師靈上表、其表曰、沙門真濟言、臣得一

善_レ必獻_二其君_一、子得_二一善_一、必輸_二其父_一、眞濟先師空海禪師、去延曆末年、遠入_二大唐_一、學得祕法、大風拔_二樹之災_一、雨襄_二陵之異_一、奉_レ詔結_二念應_一、期消滅_二上國之眞言自_レ此始興_一、聖邦之灌頂從_レ彼方行、眞濟每思、先師功大賞少、節屈名下、伏惟、皇帝陛下、大代_二天工_一、

成_二立世範_一、能得_二道中_一、亭_二育品物_一、伏乞_二賜_レ許_レ讓_二眞濟所_一、帶僧正_一、贈_二禪師之榮魂_一、然則陛下忽顯_二聖澤潤_一、

九泉_一之大惠、人天必竭_二禮_一、骸報_二主之深志_一、今不_レ任_二

懇誠追慕之心_一、謹奉表以聞、伏願鴻慈照_二察微誠_一、眞濟誠惶誠恐謹言、天安元年十月十七日、沙門僧正傳燈大

法師位上表、明年十月感_二其奏_一、大師贈_二大僧正、濟公

賜_二僧正_一、其策命云、天皇詔旨、法從等白勅命白、僧正

眞濟大師上表以爲、故大僧都空海大法師眞濟之師也

者、延曆年中渡_レ海求_レ法、三密教門從_レ此發揮、諸宗之

中功無_二與_二二_一、所_レ願以_二僧正號_一、得_レ讓_二于先師_一者、雖

知_二師資其志既切_一、而在_二於朕情_一、未_レ有_二許容_一、仍今先

師贈_二賜治_一、賜大僧正官、眞濟大法師如_レ舊任_二賜僧正

官事白勅命白、

贈法印大和尚位號

清和天皇追_二念大師之懿德_一、貞觀六年三月賜_二法印大

和尚位_一、其勅宣曰、傳燈大法師位空海、右贈_二可法印大和尚位_一、勅、智慧峰高菩提月朗、持_二三密之法印_一、爲_二四輩之儀戒_一、人亡道盛世舊名新、惟_二景慕之甚深_一、念_二追崇_一、而何止、肆贈_二寵章_一、式賞_二幽魄_一、可_レ依_二前件_一、主者施行、貞觀六年三月二十七日、

高野勅稱

陽成天皇元慶七年、眞然僧正入_レ宮而覲焉、帝語_二眞然_一言、朕聞古和尚誓言、金剛峰寺者前佛淨土、後佛化土、諸佛常住演_二說法_一、神祇擁護擇_二邪正人_一、重障凡夫不_レ許_レ住、是故毒獸不_レ懷而馴、示_二煩惱即菩提_一、高峰不_レ登而至、顯_二生死即涅槃_一、一運步去者去_二無始罪_一、假投_二緣者受龍華果_一、故和尚說_レ之、是也否、眞然答言、此言親聞、陛下無_レ怪、帝喜言、朕領_二國土_一有_二功_一和尚、和尚豈不_二值遇_一乎、眞然言、如_二敕詔_一、國恩夫重、帝悅焉云、

述作入_二大藏_一

延喜十九年、帝官_二按于大師之文章_一、入_二大藏_一、囑_二流行_一、所謂十住心論十卷、卽身成佛義一卷、祕藏寶鑰三卷、心經祕鍵一卷、三教指歸三卷、祕府論六卷、性靈集十卷等也、

請大師諡號表

醍醐天皇延喜廿一年十月二日、和州般若寺觀賢僧正請賜諡號而成焉、其表曰、請重被處分、追贈諡號眞言根本阿闍梨贈大僧正法印大和尚位空海狀、右空海戒行俱足、人天皆敬、虛鳥之翅自輕、水蚊之眼不溺、昔奉聖言於前朝、遠求佛語於震旦、一筆泛於萬里之外、三密詣於一心之中、於是蹈波問津、歸岸傳道、二百一十六部、習之者如對不空之前、四百六十一卷、受之者同入如來之室、濟世濟物、其勤深焉、斷惑斷機、其情至矣、故前年抽誠請賜諡號、而卑聽猶隔、懇志未披、空改槐壇、多過冷暖、阿闍梨深凝定水之心、兼究臨池之妙、縑素皆成倚賴、倭漢推爲楷模、夫以證者顯功、旌德之稱、引古試後法也、若令斯人埋其名者、則美玉潛於山巖之下、黃金瘞於沙泥之中、望請殊蒙天裁、被號本覺大師、將追賜諡號、猥信輕毛之心、偏忘逆鱗之畏、仍注事狀謹請處分、延喜二十一年十月二日權大僧都法眼和尚觀賢上表、

贈檜皮色衣

帝、今月廿一日夜、有靈夢、帝夢見大師、威曜凝龍

顏、語帝言、帝可知、之衣見世福田也、帝一損福若爲我造衣、福成不遠之廻向、言訖覺、帝爰有勅動、造檜皮色衣、廿五日贈大師入定之室、勅使中納言扶閑、廟使般若寺觀賢、奉之二人入山、奉天旨、具以述、歡情、欲奉法衣、雖入龕室、白霧燐燐不可叨前、雖熟窺不見、尊容、於是僧正投五體求哀曰、吾五欲界住塵境五十餘歲、未振欲境又不闕戒體、如教奉行、不違聖旨、懺悔無妄、尊容許見、我若失願、帝又失信、願言成已如月出霧、尊儀儼然顯霧中、爪髮周身生、法衣亦損、捫手即破、乃除爪髮、貸御衣、觀賢携二資而入、淳祐懺而不見、觀賢引手令撫膝、其手一生薰、所觸物亦爾、又召寬空、寬空曰、盤石隔我、謂不能過、乃封窟出歸報事、帝大悅之、

贈大師諡號

帝乃依靈夢、增厚歡信、廿七日賜諡號大師號之勅記、其詔曰、勅、琴絃已絕、遺音更清、蘭蕤雖凋、餘芳猶播、故贈大僧正法印大和尚位空海、消疲煩惱、拋卻驕貪、全三十七品之修行、斷九十六種之邪見、既而佛日西沒渡溟海、而仰餘輝、法水東流通陵谷、而

導_ニ清浪_一、受_ニ密語_一者多滿_ニ山林_一、習_ニ真趣_一者自成_ニ淵
藝_一、況太上法皇既味_ニ其道_一、追_ニ憶其人_一、誠雖_ニ浮天之
洪濤_一、何忘_ニ積石之源本_一、宜_レ加_ニ崇飭之典_一、諡_ニ號弘法
大師_一、延喜二十一年十月二十七日、

右貞享元年八月廿七日_{經記}

弘法大師弟子傳卷下終

大法師淨藏傳

釋淨藏、俗姓三善、右京三坊人也、其先百濟國速古王也、父參議從四位上守宮內卿兼播磨權守清行卿也、法師即第八男矣、母者弘仁皇帝孫也、母夢如天童一人手持獨股杵來入懷中、其後不幾妊身、至誕生日、母胎安全非如例產、及二三歲、性操岐嶷、異汎餘童、哥社鍾愛、僅四歲時讀千字文、顯悟拔萃聞一知十、年滿七歲、志在三寶、習誦普門品、稍見初覺、後遂辭儒林、竊飢斗藪、值葛川行人修練、忽遁親里、捨身山林、繫念佛海、偏好修行、敢不歸家、爰父母驚恠雖捕物之晴、期白雲時、父示子云、汝欲奉三寶、爲我宜示靈驗、則任汝本志者、小兒跪陳云、敬如教旨、啓三寶待靈驗云々、手時兒歲八歲、節屬正月、庭前有梅樹、花敷施濃艷、小兒祕遣護法、令折其枝、自飛來在兒前、相公問云、梅花飛來是何兆耶、兒報云、爲賞奇粧遣侍者所令折也、敢非恠異矣、父揮感淚、左右咨嗟、又十歲七月中旬、於葛川與本師對論、各向大瀧、互摘修驗、其時

或瀧水逆流飛鳥零落、或尸骸動搖樹木摧折、師弟咒力奇異若斯、年至二十一、在京之間、奉遇亭子禪定法皇之御行、或本此在松尾社退還之時、忽經叡覽、召爲御弟子、即被宣曰、吾檢曹器量、定佛法之瑚璉也、故以我爲師主、可得度受戒者、即以院宣附清涼坊玄照閣梨、令登壇畢、爰閣梨特加教諭、令修學、天性所稟欲遂周行、忽暗跡於叡峰、詣熊野金峰等諸靈地、精修苦節、如_レ此之間、學按不廢管絃勿息、四遠八極之地無_レ不運步寄身、十三歲獨入稻荷山深谷、難行苦行、不_レ令人知、其間仕者護法隱形摘花、化人天童互來汲水、或詣熊野到紀伊、御河洪水汎溢無人度船、此時自然小船出來得越河水、或於松尾社結夏安居之間、護法折松枝、以宛日用矣、齒滿十六、隨玄照受兩界三部之大法、傳諸尊天等之別行、律德云、鼓幽、法師遂寫瓶、慧燈自_レ此破無明之迷暗、法水自_レ此洗有習之塵垢矣、十八歲隨大慧大法師五大院安然和尚入室之弟子也、習學悉曇、法師元依_レ知絲竹之曲調、殊朗悉曇之音韻也、十九歲誓期三箇年、蟄居橫川苦洞、爲六趣群類拔苦與樂、每日誦法花經六部、三時修行法、六時備閑伽、每夜行六千反禮拜、其間侍

者現前打鐘採花矣、時有檀主施五條袈裟、法師着用之間、侍者大瞋從口吐火燒之、依不淨人裁縫也、但不燒他衣服、見聞者共異之、又滿廿之年秋八月、依京極更衣病惱、上皇下宣召之、依期未滿、恐惶固辭、然而度々敕旨難背、欲詣仙洞、本尊護法前進到着兼縛怨靈、所惱平痊矣、相次法師參仕法皇、整法服、進迎恭敬拜揖再三、見者伏地矣、又南院親王不豫、爲護持召請法師、頻雖辭遁、勅命屢降之間、法師以夜中到橫川菴、閉戶墊居、示弟子僧良頌云、親王必死之病也、雖法力如延命何、而間中納言藤原口顯爲使求請懇切也、依之愁參上、忽被始修調伏法、助伴入口、皆名匠也、至第三日日中時、親王已薨逝、此時宮中尊卑舉哀之聲、動天地、法師推壇上作法子助修、誦火界咒百八遍、主伴一心加持、經於半時、親王蘇息、忽整衣服、頂禮法師曰、依明王加護、忽得還生也、退下之時私語伴僧等曰、此親王命過是定業也、更不可平全、然而爲示法力、所令蘇生也、僅經四箇日、結願事訖、後五六日永以薨逝、見聞者拭悲淚矣、玄照律師奉修亭子院御修法之間、故眞濟僧正靈以鵲形出、現爐壇邊、律師以杓

攪入爐中、燒損其身、其後彼靈爲律師爲怨心、稍伺短而不能託惱、但時々現、寂小法師形、從暗宵下來見之時、律師心神不例、或時怖心成祟、經兩三月、法師以一寄女狩度伴靈、一旦擒縛、爰靈物大叫曰、吾依一念妄心、忽成怨靈、今依法師加持、被明王擒縛、妄執忽蕩、豈非師恩哉、而今而後永不託惱、若違此盟、彌沈惡道、無出離期矣、抑我依宿善力、轉此惡報、將生兜率、然則吾待慈氏下生、再值遇法師必報謝德矣、道俗在座者莫不悲泣也、爰尊師打掌敬重、更開眞言之祕藏、以授佛法之冲旨、自着法服、以致禮拜矣、又廿三歲獨入大峰、百日根、橫三升、廿四歲正月廿八日入葛木山、以其根也、二月晦到金剛山大谷、日已及晚、菴欲宿、傍有一屍骸、其形甚長大、髑髏手足支體骨節不亂、封苔爲服枕、石而臥、其左手持獨古杵、其杵金色赫奕、長可七寸也、法師見之太奇之、通夜精勤啓本尊欲達此事、一心加持數日、至第五夜丑刻、夢有人告曰、應知此尸是曹先身骨也、宜啓本尊、可取彼杵者、夢去淚下、自佛誦咒經一日夜、尸動開掌、法師敬屈移取金杵、卽積薪放火以葬其朽骨、燒香散花刻

石立塔、塔于今存矣、以三月十三日、着于二上窟、
此窟昔役行者之所住也、於此七日夜、遂以不眠臥、一心誦咒、見明王之影現矣、廿五歲隱居那智山、誓限三年、則瀧下結菴、以果大願、遂、則日讀蓮經六部、六時修、行法、又以繩曳瀧、每宵立瀧口、滿真言、洛又遍況、松葉爲食、口無鹽酢之味、蘿苔爲衣、身無防風之計、如此苦行、不可稱計矣、第二年八月、本師律德送書曰、魔風高扇、心水不靜、病痼屢侵餘喘、不幾乎、爭遂會面、蒙護持矣、法師披狀悲泣曰、弟子魔緣、只此事歟、唯以金剛山一古杵、代身獻大師、使者取返報、到本山之日、彼獨古隨從護法、着下法師二人、駭諸魔之伴類、一時調伏、其一人寄信法師、呼叫云、法師者三生勤修之行者也、吾今被傳無所遁、永々懲肅、更不着擾者、其後律師敢無惱氣矣、瀧山三年訖、已以出洛、于時醍醐內親王久煩腰痛、不能起居、已及三祀、大納言藤原元方爲勅別當、依令旨、請法師、々々願隱匿、召向及于再、及于三、遂以參上、卽飾調伏壇、修不動法、第三日之中時、以大納言長男致忠爲使、被命曰、當時更發、殊有苦痛、懇懃祈誓、宜令除差者、一本云、修法及于三日之間、法師從三日、中時出走云、公主之病令三年復云々、卽法師陳啓、夫佛

法以信爲先、后若一心凝信者、今時感通矣、致忠朝臣以事之趣啓達之、爰大法師并助伴等至心懃念、其間親王遍體舉動不覺佇立、傍屏障、或本云、握帳柱而起、左右遊行、見者奇異之、經半許時、復本心、自云起立遊行、敢不覺知、于時衆庶稱云、是匪直也、人暗知出堂示以平愈、甚以希有矣、則迎請法師、恭敬禮拜如佛世尊也、時勅祿無算、人感賀無極、其後公主病氣不再發矣、又依喚參圓成寺修式、殿上法師七々日羯磨、而間殿上法師十數輩參仕徘徊、爰大法師見能淨君示諸僧云、此仁今卽可頓死也、伴僧出門乘車之間、頓滅如符契矣、萬人驚怪、不言可知、之、又見野中安行云、汝有五品之兆、仕三寶者、定制符符乎、安行忽被召寵、果開五品榮、又任三川守、如此占相多如指掌、不遑毛舉焉、無動寺相應和尚兩三年之際、每歎之、老僧爭面謁淨藏、開肝葉、遂素念、爰法師側聞此事、自屈彼寺門、和尚大悅、敬屈曰、相應難列佛子籍、宿習厮下愚癡暗鈍也、老邁時至、殘喘不幾、悲吟之至爲之如何、依之爲滅罪生善、不動護摩三七許日、欲勤修之、而知識助修難得難值、大願于今未果、遂之願也、禪下垂慈愍、護念

助成乎、法師仰曰、左右隨命者、和尚喜悅修飾火壇、法師內外承仕如影不持念者去、亦在兩三、至結願期、和尚問持念衆云、頃日見何等相耶、衆都無所答、法師陳曰、行法時刻、許尺聖尊、爐中猛火交身出入、是常事也、和尚諾曰、老僧所見亦以如此者、結願以後送顯供養明王尊容、其長一尺許、擬爐中所現、安之不動堂矣、西塔平等房和尚延昌僧正、供養大原補陀落寺之日、法師爲聽法至會場、童子來告云、所騎之馬俄斃、法師云、汝卑去而守之、折柴掩目宜防鳥啄之、童子受命旨而待法師來矣、法會已畢、法師歸來、卽向死馬念誦加持一百八反、馬忽蘇息振身而立、童卽秣飲之、望者見羣獲一人不得開避、法師遂舉策而取道來庵、命童子云、早牽馬可出門、業報決定、童子引至閭外、果斃如言、又延長之比、五六年止住般若寺僧坊之間、仁和寺池上寬空內供與法師久結斷金約、爰內供到法師之庵、良久清談、漸及日映、于時法師再三召承仕、無人答之、法師又曰、侍者有耶、可設香火、言辭未靜、磬聲幽響、客人問云、法場無人誰鳴磬乎、庵主云、是侍者所爲也、卽法師開堂戶、將上之刻、客人望見壇上、四面火舍并手爐

香煙細登、漸薰堂中、于時客不覺淚下、整襟拜揖曰、此事希奇、未曾聞見、又秋八月中寬空律師拾謁法師曰、近日造顯不動明王形像、是爲滅罪也、而屬禪下欲遂供養新爲顯大聖冥會之相、彌仰二世之勝益也、法師諾曰、事在尊下之進止、但至眼前之異相者、季世頗難有歟、客人拜謝而去、以後撰吉辰迎請尊像、安法師密場、限以三七日、跋事理之供養、于時律師作意加行至心精勤、而至第二日初夜正念誦、真龍現出壇上、長二尺餘、背青、腹黃金色也、漸上本尊瑟瑟儼然尚存、期限已滿、律師提種種噯施臨法場、忽焉拜見真龍異相、歡喜渴仰無物所喻矣、結願事訖、迎像退歸、件像今尚在池上寶倉也、四十九歲夏於白山安居、七月下旬思量、故老傳言、往昔有苦行人、名釋景雲年中始開當山、自以法花之功力、驅毒龍惡鬼等、籠一大池、名曰御厨、依之頃年修行者不能力到彼池畔、若人自到、天地震吼四方晦冥云々、日來聞之思糾真僞、卽點晴天午時、忽至池邊、兼提竹筒、酌其水護身結界、將歸本宿之間、雷電霹靂、暴風盛雨、天地震裂、山川崩倒、毒龍現形、口吐黑雲、氣吸

草木、悉令向池、況雲霧重疊、既失三方隅、此時大法
師身心怛忽怖畏、且千口僅誦神咒、心竊立大願、適
到本所、遂負笈提水出入浴、後時以彼靈水授與衆
庶、新痊病恙矣、又堀川左相諱時平爲管丞相、靈有
託惱、因茲口請智行之僧、雖令加持、曾無其驗、內
供奉十禪師相應師檀年久、然而爲恐無靈、寧不加
持、於他僧者雖數十並肩更如無益、爰法師依請至
向懇加持之、其日午上丞相靈顯、然從左右耳一出
現青龍、或本云、守護女人從左右耳、青龍出現、則女託宣謨、父善相公、曰等云々、則謁於父卿云、不信尊閣之教誘、既得配流之重罪、
恩德之深何以報哉、今作申文、訴愁於帝釋、已蒙裁
許、欲報怨敵之處、尊閣男淨藏欲降伏擒縛、宜
加制止云々、因之密々注事、由被送之也、或本由注狀再三所聞達也、依之注上件事委聞殿上、及晚法師偷閑而出、大法師見了、漸及晚景
出去、即彼大臣薨逝、件丞相室家者、禪定法皇之御妹
也、翌日法皇有御幸、被奏件事之次、公家令以勘
當法師、遙承其事、自籠居首楞嚴三昧院、送三箇
年、其間奇事不遑委記、但爲恐非常、圖管家影
像四季供音樂、延喜年中事也、又橫川僧延豐頗有溫潤者
也、而法師山厨絕煙霞、浪隔日之時、可施齋飯之由、

示於延豐、々々稱無資糧之由、鑲封房戶而去、法
師遣護法取出延豐所納、置於韓檳之摩牙三裏、
不遺一粒、時散於彼房四面地邊山上、爰豐公還
來云、有如此之事乎、法師答云、已稱無一撮之資
貯、豈可散三碩摩牙乎、加以如聞者、韓檳并隔屋
鑲子已全懸而無開闔、然則時散之事又不可信云
云、於是豐公再三懺悔、則示護法令拾集、不留一
粒於地上、如本納填於韓檳云、抑無韓檳之開闔、
已有納物之出內、事之難思非神通變化者何乎、
豐公已感此事、炊件白米送供院僧矣、又以去年
月、法師與同法僧玄真智淵等共參於崇福寺、經
三箇日、退指竹生嶋參向之途、於三津邊、法師佇
立、於或宅邊乞食、爰驅仕女置米於折敷來施之、
于時法師默而去之間、持折敷之女更不動搖、強而
直立、主人男忽出來屈膝而謝、法師難忍懺謝、誠
於護法云、早可免之、女既被免捨折敷而走去、
宅主隨喜、艤船而送着彼嶋了、候於彼嶋、經三箇日、
乘舟還來、於湖上、法師命曰、我日者於權現實前、
隨分精勤、若有感喜者可顯一驗、咒杖誓云、今此
杖可投湖中、若有神感者、不入湖中、可立一波

上、卽拋下之處、湖上離水登立一丈許、神驗揭焉、同行感動視聽稱贊矣、又於金峰山安居薰修、已了還向之路、宿丹治坂下人屋之時、家女悲泣、問其故、答云、妾夫腹中脹滿三年、辛苦遂以亡沒、已經三日、法師殊成矜哀、卽立加持令蘇生之間、教護法踐其腹、迸出汗穢之物、臭香滿室、隣人迷悶矣、又法師詣熊野之時、單已無伴、成客作之陋行、於和泉國南郡隘狹深泥之途、騎馬之人五人經過之間、數令蹴懸泥水於法師、雖然敢無怨心、而相去之處、騎馬之客忽落陷於深泥、是則護法聖衆令降伏放逸自高之衆生也、又醍醐御宇法師爲定額參勤御佛名、而梵音頌之間、平塞比坐、密語人云、頌曲頗不例矣、法師自殿上退下、平塞來宿所談話之間、藏人公忠被宣旨云、以此酒酥菓等可賜導師大法師等、但今夜梵音尤美好也、導師等宜傳習後勤之者、平塞聞此宣旨、赧面矣、又仁和寺櫻花會、法師爲唄師、勤之間、中納言藤原朝成于時頭云、唄音大誤云々、法師奇思且干、法會事畢、亭子第八親王召法師、感唄曲殊有勸祿、又勸杯酒之次、法師啓親王、甚稱有興、卽召中納言令尋其誤之處、納言理伏啓云、唄曲事是臣等之狂言

也云々、天慶三年正月廿二日、依勅於首楞嚴院限三七日勤行大威德法、是爲調伏關東凶逆首平將門也、至二七月初夜分流通鐺聲指東出、又將門帶弓箭立燈明上、人々見之太以驚騷、法師曰、斯是將門被調伏之兆也、公家又被修大仁王會、法師爲待賢門講師、勤仕御願之間、人々皆云、將門軍衆已以入京、殿上陛下不靜、京兆合門擾動、于時法師奏曰、件賊首調伏先畢、敢不可入京、但人之所云是傳其頭於京師也、須臾果然所言不差、見聞莫不感歎矣、朱雀院太上皇依御藥召法師令卜筮之、申云、御惱者早可平復也、但明年有回祿災者、果然栢梁殿燒亡矣、又亭子院殿上法師寬修示維事還去、法師見其背呼反云、汝不久可滅度、偏可勤彌陀念佛、其後一月逝去矣、又仲算師嚴考面謁之日、法師云、與君相遇只可此時也、逝水在近云々、歸後十餘日遂以死亡、爰仲師奇之、問曰、吾有何相哉、答曰、公有貴相、定成國寶乎、但壽命短促不過卅七、若強祈乞延至四十二、是必死期也者、仲公驚早辭本寺、周行諸山、春秋四十二、果然卒亡、時人云、淨公說可非相、是只神所告歟、天曆年中、法師爲定額第二、

勤_二仕佛名導師、着_二禮板_一之冠、宣旨云、今夜作法以平調可_レ勤_レ之者、即任_二宣旨_一、自禮佛頌以平調唱之、則御帳中有_二箏聲_一一本云箏、六種之間、音韻暗合、不堪_二御感_一、則賜_二御衣_一、漸尋_二事情_一、爲試_二法師之絲竹之妙調_一、箏於平調隱_二置之_一、所_レ被_二仰下_一也、口樂器調之得猶以難也、矧乎暗出_二音合_一之、更所_二人々_一不知也、此道極妙、本朝絕倫矣、又法師住_二台嶺金輪院_一之時、旦朝示云、成道寺東光寺長谷寺皆有_二燒亡事_一、歟、是佛法陵夷之相也、果如_レ言皆有_レ之、於_二同院_一修_二三時行法_一之處、爲_レ供_二香花_一、召_二承事人_一、偷出行、故法師云護法可_レ供_レ之、時從_二香奩_一火忽燃、見者隨喜矣、又於_二長谷寺_一勤_二正月導師之間_一、從_二伊賀國_一參入之男、俄拔_二大刀_一狂亂欲_レ害_二堂中之人_一、于時法師暫閑_二如意_一曰、護法侍者可_レ撫縛_二惡人_一者、其言未_レ盡縛着_二禮堂之柱_一、終宵不_レ蠲免、早旦辟辭_二除之_一、解界以後彼男還復_二本心_一、集來緇素合掌恭敬矣、天曆四年夏住_二八坂寺_一、法號法觀寺、行基并建立結夏安居、仲夏下旬、強盜十餘人各帶_二弓箭_一闖入、依_レ之諸人周章驚愕、法師出_二大音聲_一云、守護者無歟、于時盜人等庭中僵臥、舉_レ聲大叫如_レ被_二杖捶_一、但不失_二本心_一、呼喚尤切也、鄰人應_レ響來集、法師云、寇

賊元愚癡也、願善神速可_レ免_二捨之_一、是時賊徒皆得_二尋常_一、慚謝而去、五年八月中旬、自_二八坂_一至_二九禁之間_一、四條川原有_二一屋形_一、中有_二病婦_一、辛苦尤切也、法師問云、所_レ患何病乎、答云、惡瘡深染也、醫家示云、此瘡者難也、已難_二治_一、口命期已迫_二今明_一云々、親友驚_レ之昨夜棄_レ之者、法師口慈心、踰居讀_二十二夜又咒滿_一、百八遍、瘡根忽拔如_二鳥之飛落_一、在_二師前_一、其形如_二肉團_一、其粧可_レ許_二袖也_一、病女迷悶、法師以_二器汲_一水、以_二甘露咒_一加_二持之_一、令_レ飲_レ之、病人噏_レ之身心無_レ恙矣、凡法師加_二持毒瘡_一拔_レ之數十般、不_レ遑_二毛舉_一矣、叡峰有無_レ躰行者稱_二修入_一、是郎善和尚入室之資也、七月十五日夜、於_二寶幢院_一有_二驗摘_一、爲_二三年事_一、舊矣、天曆六年安居終夜、法師與_二中堂衆_一共詣_二寶幢院_一、彼此衆僉議曰、宜_レ請_二修入_一淨藏兩人、令_レ決_二雌雄_一者、已及_二七八番_一之後、請_二迎彼兩人_一之處、淨公進出踟躕、形如_二師子_一、次修公步來安坐勢似_二象王_一、爰淨公云、弟子自_二幻日_一往_二來長老_一、今交_二山林_一不_レ愛_二身命_一、只爲_二佛法_一、若_二有_三寶加祐_一、早可_レ度_二縛石_一矣、于時縛石如_二鳥飛出_一而在_二佛前_一、乍上乍下如_二鞠如_一輪、爰修公稱云、甚以輕躁、暫可_レ閑靜、即隨詞而落居、修公斯時讀_二大威德真

言、淨公又曰、今依衆議旨、代大將對陣、口口登危臨深、況發心以來不退、住山、行業年老、觀心齡傾、相同在世迦葉、孰何滅後多矣、薰修之優劣非可_レ境之、三寶之冥助只仰_レ之、稱如此、已誦常在靈鷲山等之句偈、其聲遏雲、聞者拭淚、當于斯時、縛石震動半破相分飛至兩上人座前、停住不搖、兩人俱起同拜去了、天曆之比、法師寄住法觀寺、六年春三月、卿相重臣、實賴中將等朱紫貴客等、數十人依花而群來之、爰見_レ伴寺塔指_レ乾方傾斜、命云、塔傾方者不安云云、然此塔向王城而傾曲如何、法師云、年來欲直之塔也、集會上下可加_レ其料之由相定之處、法師云、必不可_レ用物矣、衆會聞之皆知_レ以_レ驗力可_レ直之由、法師又云、今夜直試者、衆庶聞已各以口還、法師以亥刻坐_レ於露地、加持寶塔、還於本坊、口弟子仁瑞奇、此事寄眼於塔、徘徊庭中、及至子刻、微風起、西北方來吹、塔婆寶鐸聲搖響和鳴、聞之而大底知_レ塔之端直也、然而當夜陰未見_レ其直否之跡、終宵不審、達旦得_レ明、已見_レ直峙空之形、因_レ茲庫車軟輿貴公主、香衫細馬豪家郎、上卿下品雲集禮拜矣、同年於橫川結夏、每日口如法堂供_レ香花、行_レ千拜、常

思何密拜見大師經、適得_レ其時、命侍者欲_レ披見之、有_レ小僧來告曰、吾推尋茲經由來、故慈覺大師爲_レ愍六道衆生、數年加行手自書寫安置之、依之地主山王赤山明神等列次宿直、而汝偏恃咒力、恣欲開見、事已不_レ宜、早止_レ其思、若不_レ然者、冥達大師之雅趣、顯_レ致衆徒之苛酷矣、法師吞_レ音怒無_レ所_レ述、事自披露衆僧頗傾、時人云、或貴或癡也、又唐僧長秀與父行波斯國、口口惡風吹_レ船忽以漂蕩、僅寄_レ燈鑑嶋、經廻口口自歷數月、風太爲_レ變重發_レ胸痛、適得_レ慮外之便船、未_レ到_レ筑紫之地人烟之邊、病痛未_レ除平愈難_レ期之處、自然來_レ着本朝、依_レ有_レ事緣、諮_レ重病之由於天台座主增命、證號靜觀、一本云、宿緣所引、登天台山于手院師事座主僧正、受戒得度爲_レ住山、修口口身、其後風病未平云增命云、我朝驗者有_レ十八人、其第三淨藏令_レ加_レ持之云々、于時法師以_レ藥師真言、日八反加_レ持之、多年病一時平、長秀歎云、我生緣之口口隣_レ印土、佛法頗揭焉、然而其國未_レ見_レ若_レ此之人也、此東海倭國聖人來生甚希事哉、定知無_レ第一第二歟、生々世々必得_レ值遇_レ座主和尚大感賜_レ法衣一襲矣、延喜年中事也法師弟子行練來云、今夜衣架上物爲_レ鼠所_レ損矣、法師云、藥師佛尊守護愚僧遣十口口常事也、去夕相當子神、故誤失歟、

父諫義大夫善居逸今來北也而爭藏請弗力願愛

拜而豐、其一、叢親相公者本朝賢相也、仍能知三憂

○環之理、又辨榮悴紀○之由、加以神經佐牒之秘詞
 ○蘇於檀臺之奧、易象爻變之微事已照於韋竹之篇
 記革命之期奏表○口時皇定尅賊之運送書於菅丞相
 也、事之○口口毫末無違、是又我嚴父也、入滅經五箇
 日依神咒加力而蘇生、即着位袍成拜、其二、或本云、又嘗相承
度々飛文藻、勒狀披示、淨藏事靈神所爲也、何不愼、受法師玄照律師者、慈覺大師入
 室寫瓶之弟子、三部都法之阿闍梨智德具足之人也、而
 爲紀僧正靈所惱之時、弟子加持擒縛、其後言氣無
 恙、仍律師着法服作禮、其三、然則依此三度之禮拜
 已窮二期之運致、自餘之榮復何有乎、只所期者往生
 極樂而已者、檀那拍掌而口口矣、抑生育子男二人也、
 一人者、出家入道、才藝口口異於他人、修行之間於
 奧州而亡、一人者、天曆御宇幼少昇殿、寵幸殊甚、隨
 分管絃頗不耻、昔童、稚名曰市嫗、及于成人、令
 列伯父式部權大輔大江朝臣之子、即名稱與光矣、
 聖人所爲口口量也、尋之異國、天竺羅什三藏有二
 子、姚興以口口所進也、一交而生二子焉、與常謂什
 曰、大師聰明、天下無二、何可使法種不嗣、遂以伎女
 十八逼令受之、爾後不住僧坊、別立淨舍、諸僧
 多傲之、什聚針盛鉢、引諸僧謂曰、若能見口口之

者乃可畜室耳、因舉鉢進針、與常食不別也、諸
 僧愧服乃止、戲乎天竺沙門以鉢針期齋朝口、日本闍
 梨以口口火燒法衣身業之犯、各有二子、而朝上人觸
 事所作更以難測、豈同凡緣哉、天口二年乙卯夏月本
 尊示終期、法師捨衣鉢之資口口修之善、又爲延其
 期、轉讀金剛般若經一萬卷法花經等、祈請炎魔天、
 至其告日三年三月廿日也、待其時新設音樂修念佛三昧、
 口期彌陀接引之間、忽半中風起居失度、漸經五六
 年、自曰此是本轉定業也、應和三年癸亥一本云、四年甲子、法師
 年七十口口冬十月、忽辭花洛一屈、東山雲居寺、即
 於途中命弟子云、此山是我終焉之地也、故今急登
 矣、左右嗚咽、十一月十七八日頻陳云、悲哉以破戒之
 身久受信施、每念罪報心神不安、命口期至可無
 遁處口口癸亥、同廿一日酉時正念念佛合掌西面安坐遷化、

淨藏法師傳

寬喜三年辛卯十一月廿七日午尅於北山庵爲依邇選代爲期引接合廣略二本成此一冊矣宗蓮

將門事 外記々云此日申三點信濃國飛驒使馳來其奏文云上野國去

十五日牒今日亥刻到來傳安陪忠良今日巳時馳來申云平良□□夜

半馳來申云平將門今月十三日於下總國辛嶋郡合戰之庭爲下野常

陸等國軍士平貞盛藤原秀鄉等被討殺畢者今日仁王會夕講未了之

前有此奏文云々

東大寺圓照上人行狀上

門人 凝然集

夫偉人處世事不虛焉、舉動有儀、止息致祥、法不孤立、由人得弘、人不單行、由法彰威、人法相依、感徵任運、抱德之人、不可不歎、僧錄之興基由此、東大寺戒壇院住持上人諱圓照、房號實相、俗姓藤原、南京人也、母氏是源武將之派、母夢靈光照懷有孕、月滿正產、字金光焉、容貌有奇、見者諮歎、等閑遊戲事出群童、尋常談論皆超傍輩、韶齒之齡、專仰佛僧、青襟之年、偏重法文、朝夕之勤、供以香華、晝夜之務、作以禮誦、慈親見之、愛翫尤深、懸知應作佛宗梁棟、十歲落髮、即預僧服、機宇冲逸、識慮寬和、聰敏敏利、携秀雅正、年至志學、研精有功、投良忠大法師、作師事之禮、忠公者、華嚴頓匠、有宗英德、發智六足解悟懸鏡、婆娑俱舍光輝瑩玉、東大寺有良忠聖禪、兩德俱舍飛名、爲衆所推、各立門輩、互競蘭菊、照公入忠師門、專學俱舍、于時同侶十餘、

要約誓期、點一千日、習學俱舍、即付忠公聽其講談、初皆精勤、後漸懈倦、照公一人遂滿千日、一日不缺點、志操決徹無有退轉、有宗法義甚獲玄致、大乘義學宗在三論、隨智舜大德、獲入宗旨、隨真空上人、深領意致、舜公三論英匠、研尋究蹟、與良忠聖禪義解諍鋒、三人並是東大寺之學德、馳名遐邇、飛譽古今、樹慶三論、舜公得旨、空公亦東大寺之碩才、東南定範法印之門人、公請名僧義解絕倫、俗姓藤原、藤原相定能之孫親衛少將軍定親之息、本諱定兼、官居權律師、號大納言律師是也、後厭世榮、閑寂思微、房號廻心、諱真空焉、照公于後常隨問津、龍樹提婆深探意旨、與皇嘉祥大領義味、東大寺佛法本弘華嚴宗、本願良辨僧正專傳華嚴圓宗、亦學義淵所傳宗旨、是故兼弘法相中宗、鑒真和尚來朝已後、弘學律藏、行受戒事、弘法大師弘通密教、尊師已後學三論宗、厥後舍附法相、成實附三論、鑒真法進學通台宗、而未必聞講敷弘傳、寺中所學無有所局、故東大寺號八宗兼學梵場、然近來所弘顯宗大乘、唯學華嚴三論兩宗而已、寺內學侶繁屬兩宗、照公元祖宗族累代連綿、皆爲東大寺之學侶、年序

久積三百餘歲、父氏三論號三千手院、母氏華嚴三論號三

唐禪院、近比祖父有寬豪已講、三論名匠、二明施

功、乃照上人之祖父矣、厥之眞子有嚴寬得業、內外

兼學、論說包貫、能藝多端、爲衆所推、男子四人、

女子一人、一男諱嚴海、房號伊豫、是他腹也、餘並當腹後住相州、

七十餘卒、二男諱寬乘、房號大輔、昇有職階、親父以

此立爲嫡子、年二十八、遁世入緇、諱聖守、房號中

道、密教聲奧、唱導絕倫、興眞言院、立新禪院、三

男乃照公也、本諱良寬、房號土佐、年二十一、值慈父

卒、卽厭世業、投入緇門、房號實相、本諱悲願、後改

圓照、四男諱賢舜、房號助焉、五師得業法橋法眼如

是、遂敍始終交衆、秀逸寺門、一女守公之妹、照公

之姊有息女、母子出家住法華寺、母諱圓性、房號

如眞、機識聰俊、講說有能、女子諱尊如、房號日圓、後

移于洛東、住持東林尼寺、照公母氏姊妹摠有三人、

大姉小姓並藏原氏、中女一人是源氏焉、母處分狀法源、吉祥女是也、

照、舜、眞、皆同母也、中女出家住法華寺、居一薦之

選、住持寺院焉、照公遁世之後、數事參遊、延曆園

城、洛中靈所東西名山、四天王寺、磯長、當麻、高野、長

谷、如是遊歷、催信養意、普勸道俗、專念彌陀、大

作籍帳、記錄名數、雖廣尋名所、而不如南都靈

跡並、臺佛法繁昌、卽還南京、住東大寺、于時籠春

日社、祈請美緣、第七日夜、感靈夢云、近日白毫寺

有良遍法印、辭本寺交衆遊心於閑寂、須早往

彼寺、投爲善知識、出世大緣以爲足矣云々、夢覺未

曉、往彼面謁歸投、作師事之禮、致常隨之忠、遍

公、興福寺之名僧、勝願院之英匠、明二二門究奧、五階歷

業、光古之明燈、耀來之赫日也、照公入彼門室、學

法非一、法相宗旨傳受、于時良遍上人請禪慧大

德、於竹林寺談行事鈔、照公同在講席、研尋陶練、

又勸化母氏、令住法華寺、富小路天皇後嵯峨法皇太子、御宇

寶治元年丁未、照公年二十七、從竹林寺、移住海龍

王寺、俗言角寺加護母儀、令務學業、每日講談、自筆書

寫比丘尼鈔、贈法華寺、母氏以此就席聽講、一日

不缺一部終功、居住角寺、摠及五週年、外護孝養

專誠如此、母誦尼戒、老骨不堪、年將七十經月不終、子

懇勸之、乃至試已若不暗誦、吾當入唐、母卽歎之

指日早誦、布薩之場、登高廣誦、又爲試、母堂淨土

信心、金旁金乘念佛、修餘業門再三、不從唯取淨土、

語以其絕母子之義、母將棄淨業、子辱以信弱、母

知試之勤、乃決固淨信、方便誘引如_二此之例、照公住海龍王寺、習律不懈、學戒有勇、菩薩戒宗究達巨細、彼寺有證學大德、是一方律匠也、恒講律部、被諸衆◎按有脫字、厥間照公在席久聽學、公爲衆講四分律、至本疏者不局一家、然震旦古來解四分律、將二十家傳、日域者、智首、法礪、懷素三家現行于世、定賓律師唯釋礪疏、講師聽衆於三家疏、各隨所樂、料簡律文、照公所持卽其一也、西大寺叡尊上人時於彼寺講菩薩戒宗要等章、照公就席大談意致、諸文開講皆有打集、立講設問、研覈往復、照每至打集必致一問、名之爲法成就、是恒之例者也、照公苦行修練經年不懈、身體疲勞、數受病惱、爲成興法利生大事、祈請角寺千手觀音、除愈病患、專一精誠、勤苦千日、病卽平愈、積功觀音感應有驗、彼寺學公受病卒逝、于時法匠兩三隨次講敷、名之周讀師、照公卽其之一也、于時建長三年辛亥、照師年三十一、四月安居已前從海龍王寺移住東大寺戒壇院、紹隆寺院、興行僧寶、隨從之人、圓空上人、禪碩大德、道本大德、實教大德等也、是等諸英並東大寺祖

宗、累世交衆之舊人而已、先有餘人、居住此寺、別意之輩屢數妨亂、故契本寺僧、同心興行、眞空上人、禪心上人俱住高野、請之令來、彼兩上人應請來住、聖守上人同心興行、眞空上人講法華義疏玄論等焉、東大寺戒壇院者、斯廼聖武天皇之御願、鑒眞和尚之草創也、孝謙天皇御宇天平勝寶六年甲午春二月、和尚來朝、大佛殿前新築戒壇、始行受法、太上天皇武聖光明皇后皇子百官老少僧徒四百餘人皆受戒法、無不歸仰、乃下勅詔、授大和尚位于唐僧鑒眞、日本和上以此爲始、後移壇於殿之西、建一院宇、今戒壇院是也、營造之間、土木功大、寄二十一箇國爲造營料、二箇年中造功已畢、十月廿日、供養調儀、法會揭焉、莊嚴巍々、講師咒願師俱進官途、勅施朝祿不可勝計、仍從件日點三箇日行受戒事、登壇之者其數甚多、自爾已後、契於退代、以此三日爲受戒之規矩、和尚住唐禪院并戒壇院、經六箇年後、至淡路廢帝御宇天平寶字三年己亥、始建唐招提寺、厥後和尚、東西兩京授戒弘律無有間絕、和尚門侶十有餘人、遠近諸寺競講律藏、和尚天平寶字七年癸卯終于唐招提寺、春秋七十七也、委屬戒壇并唐禪院于上足門

人法進大僧都、以唐招提寺、付于義靜、實載、如寶三人、此兩寺律法昌敷、僧宗綱網秉御甚明、加之、京城諸寺、畿內諸國、賞貲戒律、興行僧寶、百有餘年、受行無墜、六十餘州國分尼寺、戒律弘通、稟承不絕、世漸澆漓乃至末代、廢絕無行、人王第七十四代鳥羽天皇御宇保安三年壬寅、鑒眞和尚來期已後、摠經三百七十一年、其時中川本願實範上人酬興福寺西金堂衆欣西房號大德之請、廣檢律藏、專依律鈔、造戒壇式一卷、製別解脫一軸、中興戒法、秉御律宗、戒壇受法如說持行、鎮西觀世音寺戒壇受戒五人受法、此時極本規矩不背、其後安置貞慶上人起興律願、普命門人令講學之、即自披覽四分戒本、研定賓略疏、學南山事鈔、其大覺鈔批志鴻搜玄景霄簡正記元照資持記等、隨皆罄之、智首法彌玄暉等釋梵網大乘、太賢義寂等諸師解釋、皆咸研精、無不講練、彼門人有覺心大德房號慈心戒如大德、房號大小二律如懸日月、戒如大德門人非一、圓晴大德、覺盛大德、繼尊大德、覺澄大德、蓮覺大德、寂尊大德、禪惠大德、修禪大德、嚴俊大德、禪觀大德、蓮位大德、慈忍大德如是等也、俱講戒律、各生門輩、興福寺松春上人爲興隆

東大寺戒壇院受戒之事、南都諸寺安五人律師、令學戒律、乃東大寺、西大寺、大安寺、海龍王寺等也、興福寺立常喜院、寄進料庄、興行律法、是覺心大德所造立也、覺澄禪慧嚴俊等者、乃東大寺五人之内也、然治承四年源平兵亂、東大興福皆遇回祿、戒壇堂宇咸成灰燼、其後大和尚位重源上人隨行基菩薩之先規、補造東大寺大勸職、進大佛殿并廊等造功已畢、建久八年丁巳、造立戒壇金堂、次權僧正榮西補大勸進職、造金堂之廻廊并中門、次莊嚴房法印大和尚位任大勸進職、造立講堂并兩方廊宇、爰有蓮實上人者、房號西迎、伊勢國人焉、或山城國山崎之人云々、出家之後、隨都賀尾高辨上人房號明惠、給仕奉事久經年月、辨公後堀河天皇御宇季曆貞永元年壬辰入滅、春秋六十有一、厥次人王第八十六代聖主四條天皇御宇文曆嘉禎之間、蓮實上人亦來南京、元住興福寺轉經院住東大寺、勤大佛燈油調大會樂器等、又興隆戒壇、安置僧侶、戒壇一院回祿之後、雖造金堂并彼廊宇、講堂已北甬有礎石、未及建立、實公深祈佛神、欲興行之、數詣伊勢大神宮、志存興隆、遂勸大勸進嚴公令造講堂、彼講堂者、元是八幡宮之舊殿也、元在

東塔廊之西面、後遷神殿於東山羅索院之南、以彼舊殿爲本造戒壇講堂、斯乃蓮實公勸誘之力也、講堂東西廊宇同以造之、講堂已北有三面僧房、北室二十三間、東西兩房各是七間、唯有礎石、亦來建立、實公奔馳四方、欲建立之、興福寺西金堂衆有良詮大德、房號賢順、實公勸彼令昇綱位、遂經奏聞、即達所望、詮公昇僧綱位忽造北室、是律師之功也、口望正律師位、而久絕不行、無有勅許、仍寬元元年癸卯任權律師、于後寬元四年丙午任權少僧都、是戒壇第九十二代之和上也、仁治二年辛丑任戒和上、職壇務三年、即至寬元元年癸卯之曆、拜堂之時、出行之路、前驅二人、自身乘車、後車一兩、自外共奉、並超傍輩律宗前途壇法儀式、事事球妙、無並肩者、北室房宇二十三間、中央五間、元是食堂、東有三房、西有三房、此是北室食堂東西、昔寬平法皇御受戒時、於此食堂、就大小十師末座、令行供御、十師列座俱行饗膳、日本僧等食堂規模希代勝上唯是而已、雖是詮公成功、遂造營事、偏是蓮實上人之力、實公亦造東面七間僧房、西面七間末能企造、然仁治三年壬寅、蓮實北室東端立柱一本、于時照公還竹

林寺一路次往彼實公、實公語云、此寺造畢之時、可下以上人一爲長老職、須與律法、勿有改變、照公約諾無辭、實公喜躍無圖、即還生馬、對逼上人語以此事、逼公報言、造畢豈疾乎、立柱一本有經年月、造畢有期焉、戒律之地還興、戒法約諾喜焉、須法牀堅固成、遂此事焉云々、實公雖立柱一本、遂其年月、而詮公成功僧房已畢、寬元元年僧衆漸住、闕敷講席、仁治三年壬寅、照公舍兄聖守上人始住戒壇北室西第二房、後住西端、請僧行布薩、勸人營僧食、金堂講堂石壇四面、古瓦充塞、土壤狼藉、西端房北溝谷流下、坂岸岷峨、催寺鄉民平岸填谷、充以彼瓦、塞以其壤、上構築牆、固以成墼、遂於其內一種植果樹、建立僧廁、于今無壞、守公請海龍王寺迎願大德、以爲上座、一夏練行三時修營、彼大德者、元興福寺住僧、亦明遍僧都淨業弟子也、次諸海住山禪觀大德諱長聖、令講梵網古迹、彼大德者、戒如大德親承弟子、兼承覺心上人心、公居俗有才、事朝有忠、省在民部、乃戶部尙書、官處宰相、是諫議平章、後入緇門、大隆佛宗、海住山寺立五大院、顯密並行、化制兩興、禪觀大德住如意輪院、研菩薩戒、精大律

藏、處々受請、談_二彼古迹_一、初作_二三卷鈔_一、次造_二八帖鈔_一、後有_二十九卷文集_一、皆解_二太賢梵網古迹_一、守公諸_{請方}彼大德、令_レ講_二古迹_一、守上人古迹運_レ功、鑽仰不_レ倦、聽_二觀公講_一、摠經_二五遍_一、戒壇請_レ之是最初焉、又先與_二真空上人_一、於_二興福寺松院_一、聽_二覺盛和上講_一、迎願上人住_二戒壇院_一、一夏安居、厥後即還_二海龍王寺_一、又請_二修禪大德_一、令_レ住_二戒壇_一、即爲_二上座_一、修_二習法行_一、彼禪公者、笠置般若臺之住僧也、如_レ是之間、經_二數年曆_一、守公如_レ是戒壇有_レ功、建長三年、圓照等八人移住_二戒壇院_一、皆是顯密兩宗碩德、二諦之神鏡、三學之靈珍者也、八英同_レ志、興隆隨_レ思、化制嚴整、行學備足、禪心大德_三論名哲_一、後入_二大宋_一、修_二證禪法_一、真空、聖守、圓照、三般共議_二戒壇僧住之事_一、空云、當寺東西各有_二三房_一、一房一人、東西合六人住、守云、一房二人合十二人、照云、當_二百人住_一、如_レ是三人住寺共行、各有_二門輩_一、俱務_二修學_一、真空上人次住_二持於高野金剛三昧門院_一、厥後還_二木幡觀音院_一、聖守上人住_二白毫寺_一、後興_二眞言院_一、立_二新禪院_一、圓照上人獨住_二戒壇_一、開_二敷律藏_一、修_二練定慧_一、門輩甚多、各助_二化儀_一、于時照公入_二東福寺圓爾禪師門室_一、禪學修證、乃住_二普門寺_一、一夏功夫門人數輩隨從而住、爾禪師者、

遠度_二溟海_一、至_二大宋朝_一、入_二經山無準禪師之室_一、大傳_二禪法_一、歸朝弘_レ之、門人若干充_二于海內_一、照公隨從即受_二血脉_一、照公秉_二持佛法_一、攝_二御僧宗_一、三學圖備、二利具足、聖說規矩無_二有_一違失、常訓_二門徒_一云、身住_二佛戒_一、口作_二佛語_一、意住_二佛心_一、念々如_レ是、念々如來如說而行、如說而說、攝_二持威儀_一、名爲_二戒學毗奈耶藏_一、是故學知名_二之律師_一、通_二悟性相_一、名爲_二慧學阿毗達摩_一、所以精詳成立名_二之禪師_一、禪教律三唯在_二一身_一、非_二是別宗別行之法_一、不_レ兼_レ之者、非_二眞佛子_一、兼_二通之者_一、名_二眞學者_一、是故自身所學所行兼包貫括无_レ不_二諳練_一、畫_二律部_一、秉_二御戒相_一、夜澄_二自心_一、證_二悟覺性_一、南山三大律部梵網古迹諸章、隨要文籍、定慧法門、累_二年連日講敷開演_一、門人由_レ此開_二發慧解_一、聽徒是故增_二長學業_一、教戒儀中、食堂作法唱_二禮唄_一、匿_二始終方軌_一、事相難_二見_一、照公獲_レ之如說行_レ之、二時食法並皆行_レ之、自_二建長四年壬子_一、至_二康元々年丙辰_一、五箇年間、每日行_レ之、後略不_レ行、事繁人倦、唯順_二諸寺常途之事_一、然亦每年正月三日、于今行_レ之不_レ忘_二先規_一、照公自修_二道業_一、專精勇猛、滅罪請_二驗_一、得_レ見_二好相_一、勸_二僧令行_一、諸人同修_二行

業非一、方軌是多隨人所欣、各勵其行、或修懺法、或讀經卷、或以禮拜、或入禪觀、誦呪行法、唱號歎佛、旋遶長座、散華燒香、或七日百日、或半月一月、當得好相、知驗而止、照公建長五年癸丑年三十三、戒得九夏、門人請受未滿十夏、辭而不授、懇請不止、菩薩通受未必不可同、別受軌則何必待十、比例非一、時緣亦合、即授戒法、作和上職、最初受者、真性大德房號證脫、于時年滿三十一、元寶阿上人之弟子、貞慶上人之孫弟、性公承寶阿之跡、司三寶院焉、自爾已後、受戒弟子連綿頻多、乃安鏡、觀圓、寂入、玄智、忍空、眞照等也、照公說法開導教化、道俗聞者起信開心、貪者得旨入法、唱導之能、獲益絕倫、半月布薩、臨時佛事、聽徒成市、投輩作林、照公一族有唱導德、親父嚴寬大法師者、當時拔群之唱導焉、才包內外、譽通遐邇、智海深廣、不知涯底、辨河縱橫、致敵對、表白廻向深叶一時宜、法譬因緣大悅人心、多能之德、無時競者、言辨之勢、任放自在、東大寺信禪擬已誦語曰、嚴寬得業辨說第一、出言則似動山野、騰音則如搖草木云々、名僧唱導必用對偶、以法對法、以喻對喻、方角不違、

黑白無背、嚴寬說道深窮此事、厥嫡真子聖守上人、生年十八、始入說道、傳嚴親之躅、唱導無比、年經更巧、齡闌彌昌、名聲遠聞、稱譽遙通、對偶之詞、任運彰感、大悅人耳、深催物情、照公唱導未必事對、隨時獲旨、任節得意、責以道理、顯以所由、兄弟兩般事義小異、獨步遠近、各一人耳、南北之間、律門大會無如唐招提寺舍利會、斯乃鑒真和尚遠忌之法事也、唱導之職、兄弟兩德隨時之宜、勤之作之、多是照公所勤而已、兩德卒後、時之高僧隨次勤之、以爲規矩、照公解行熏積、業用蘊集、德彌普天、名滿率土、智慧深廣、威風偉大、廣學多聞、法義溢躬、俱舍成實、交衆之昔所習、法相淨土、遁世之後所學、三論祖宗重代本宗、自幼至長、曾無棄之、遁世之後、遇華嚴貫首權僧正宗性上綱、學五教章并香象梵網疏等、梵疏照公自筆書寫、遺弟釋爾展轉傳持、宗密禪師作禪源諸詮都序二卷、照公飭之、晝夜研覈、自寫持之、教章中卷會空有二宗云、色卽是空、清辨義立、空卽是色、護法義存、二義鎔融、舉休全攝、已上、照公專翫此文、深染心府、說法開化常講此義、清涼師云、有作之修多劫終歸敗壞、無心躋極一念便契佛家、已上、亦味此文、深

談法義、又禪源詮中以教三宗、對禪三宗、意謂得旨、常弘此義、梵網疏序香象大師陳經大意、照公翫之、講經之會、并常途談、誦之講之愛翫之、至律宗大部、本是所學、晝夜講談專在此宗、菩薩戒宗、溫習年深、法花林中表無表章、大乘義章三聚戒義、巨細研精、無不窮盡、對覺盛和上、隨其遍上人、受學鑽仰、服膺溫敷、真言祕教專所習學、初隨四恩院淨法大德、受三密法、次隨三輪上人、入兩部密壇、後就八幡唯心上人、窮五部祕奧、各罄宗旨、俱領淵府、教相宗旨普訪明師、自獲宗致、悟達廓焉、爲衆講大日疏、并談寶鑰祕鍵等要章、義門忽開、理路大顯、後於洛東金山院俗號慈尼請河內磯長御廟十乘上人、令講天台止觀、台宗法門獲旨入幽、雖聽講談、義出自見、印可述成以爲規模、照公常曰、東大寺戒壇院者、鑒真和尚之所建立、和尚者、是台宗之高德也、傳教大師傳云、鑒真和尚是天台宗第五祖師云々、惠思智顗灌頂弘景鑒真如是承來、故爲第五若從顗爲取即第四、最初大寶彼宗章疏來至此國、今既和尚戒律苗裔、故於定慧學天台宗弘止觀座禪、於戒壇院一事是宜焉、于時集衆於禪堂、普說丁寧、門人領旨、喜歎非一、照公一期所學、諸宗法門一身

所持、涯限難測、雖學諸宗、非無可存、諸宗之中、義理深奧悟達速疾無過真言、弘法大師所判炳焉、信心淳重歸投無貳、禪宗高誇宗不可爾、譬如世人有數子一矣、有嫡子一焉、有二男焉、有三男焉、真言是嫡子、禪法只三男、不及二男、況立爲嫡真言、諸根具足萬德圓滿、禪法無相無念無有目鼻云々、雖然隨機導人不簡彼此、隨遇卽訓、無_レ論空有者也、當是自己內證專以三密而已、身居律家、宗在三論、證味真言、報遊安養、照公佛法事只是也、康元元年丙辰之秋、往西海之邊、修放生之業、等侶多隨、門輩咸赴、或至難波之津、或遊住吉之濱、各拋財產而救生類、俱捨錢寶而助魚族、鯖鯛之輩免死是多、蚌蛤之類脫害非一、說法化物、道俗歸投、授戒利人、男女崇敬、正嘉元年丁巳之春、爲造元興寺僧房講說法華勸進道俗、聽衆雲集、滿殿塞庭、二明學侶來影列袖、三藏英匠往赴並肩、施財產而造僧房、捨資財而立衆菴、一日所施錢穀如山、功夫不久、造大小房、遂勸寄莊園爲談義料、講談唯識于今不絕、彼寺元弘三論法相、世漸澆薄、兩宗俱

廢、今依_二照公勸誘_一、一宗漸施_二光耀_一、照公名滿_二寰宇_一、譽聞_二都鄙_一、祈_二國安寧_一、思_二土豐饒_一、志存_二興法_一、念在_二利生_一、南北兩京檀主極多、一乘院法務大僧正諱實信、大乘院法務大僧正諱圓實、並感_二德垂_一賞、歎_二功發_一信、自外僧綱孝養院僧正親緣、佛地僧正良盛、中南院僧正玄雅、松林院僧正實懷、此等諸德並_二明英哲_一、六宗長官也、皆歎_二上人之德_一、各致_二檀主之禮_一、自外僧都已下三綱五師已講成業等師檀約諾不_レ可_二勝計_一、東大興福元興等寺、皆許_二德望_一、咸歎_二靈威_一、檀主大作_二供養_一之者、勝實院法務大僧正諱道證下_二二百石_一、每年作_二供_一、石清水檢按法印大和尚位官清年供_二百石_一、總州太守有_二百石_一供、並是照公一人食料、上人一期如_レ是充足、自外小施不_レ可_二勝計_一、施_二之戒壇僧侶_一、無_レ有_二所_一闕乏_一焉、人王第八十七代御宇後嵯峨天皇御治世四箇年、自_二寬元_一々々年癸卯_一至_二同四年_一丙午_一也、厥次_二九十八代_一富小路天皇御宇御治世十三年、自_二寶治元年_一丁未至_二正元_一々々年己未_一也、建長季曆已後、常承_二明旨_一祇_二候鳳闕_一、玉體不念祈念_二丁寧_一、大有_二効驗_一、御惱平癒、叡信彌深、勅詔無_レ間、恒對_二龍顏_一、念誦不_レ懈、玉體安穩、基由_二此焉_一、太上天皇叡威特深、恒侍_二射山之下_一、親候_二汾

水之邊、加持念誦無_レ違_二要約_一、加之、沁水姑射山東閣博陸家月卿雲客文武官職、或是受戒、或是加持、或唱導事、或知識法、兼_二包諸篇_一、貫_二括衆義_一、正嘉元年丁巳之冬、補_二造東大寺_一大勸進職、于時春秋三十有七、即企_二營造_一、作事無_レ絕、任十四年、國務靜謐、至_二禪林寺法皇在位御曆文永七年_一庚午、辭退上表、十四年間所_レ造寺宇三面、小子房之內二面半、二月堂、法華堂、拜殿、戒壇、西室七間、鐘樓、千手堂、又搥寺處處修理三面僧房內作、如是等事不_レ能_二具載_一、又洛陽檀那歸投非_レ一、鷹司女院受_二三密法_一、受_二菩薩戒_一、大宮女院專受_二五戒_一、三聚十重、西園寺大相國禪門、今出河大相國公相、德大寺大相國禪門、葉河亞相禪門子息儀同三司良教、四條亞相隆親卿子息善勝寺、亞相禪門、如是等並是菩薩戒弟子信心厚檀主也、正嘉元年丁巳之秋、石清水檢按法印宮清建_二立一寺_一、施_二入上人_一、興_二行律法_一、號_二善法寺_一、本有_二一堂_一、捨_二所住宅_一、以爲_二僧房_一、安_二置僧徒_一、結_二界清淨_一、清公歸_二戒律宗_一、信力堅固、拋_二財施_一僧、捨_二地入_一寺、照公爲_レ造_二竹林寺_一、勸_二進道俗_一、奉_二請行基菩薩舍利_一、拋_二錢百貫_一、作_二供養事_一、自餘施物不_レ可_レ知_二數_一、門族競施亦不_レ知_二數_一、行

基菩薩彼南立寺名善法寺、即取舊名、爲今寺號、始安六僧、圓空上人、以爲上座、後不限數、隨宜巨多、彼寺佛法弘、眞言教、所住僧侶無不皆學顯宗佛法、崇重三論、照公入寂之後、空公住持彼寺、檀那本願宮清上綱社務二十一年、先例是希、興行律法之所、致也、厥之嫡家法印尚清、連氣相繼、崇重戒法、前途早來、社務懇勤、文永四年丁卯之比、以八幡大乘院興爲律院、宮清法印社務之時、即寄料庄爲僧食分、圓照上人命門人倫海、爲彼上座、海公弘律安僧、興行丁寧、然彼所者、清公祖宗之氏寺係屬社務、事非私、宮清卒後、建治初曆、倫海棄寺作他管領、生馬大聖竹林寺者、照公遁世自初久住修練之處、由來是重、事義不輕、移住戒壇之後、日阿入西兩德來至戒壇、勸令管領、遂受寂滅後號明觀上人之讓、住持寺院、興行眞俗、鷹司禪定仙院信力堅固、作彼寺大檀主、修營建興基由彼力、修練眞言、講敷戒律、灌頂道具大小周足、照公常於彼寺一行灌頂法、庭儀堂上隨宜經數、正元々年己未之曆、四條亞相以洛東鷺尾法名號金山院寺院、施照上人、彼寺者、黃門家成卿草創建立之所也、代々聖主有臨幸焉、華月飾

處、眺望悅目、家成卿後、隆季、隆房、隆衡、隆親、隆顯五代並大納言如是傳來、至兵部卿隆親時、彼金山院施與上人、大令弘通顯密佛法、寺經時代、殿宇薨損、上人勸誘道俗、興復修造、施主寄進庄園、上人自住興法、開敷律部、弘通密教、照公住持彼寺、十有九年、厥間施作佛事、開敷法筵、修成行業、班宣化導、遂於彼所報命終焉、十乘上人酬請往彼、談演止觀、遍歷二年、一部過半、弘長嘉曆、圓珠、思順兩德移住鷺尾、修學顯密、助照公化儀、彼兩公者、泉涌寺智鏡道玄兩德門人、研精律藏、習學台教、專學眞言、解行積功、於金山院、開敷祕藏、談論連續日夜不絕、講通律鈔、養育學者、兩三年間、助化無懈、後居天王寺勝鬘院、弘通密教、開演宗戒、解行德高、朝野仰崇、飛譽遐邇、振威冥顯、門輩成林、徒屬作市焉、

東大寺圓照上人行狀上終

東大寺圓照上人行狀中

人王第八十九代聖主御宇文永初曆、於金山院大行灌頂、諸方律德行眞言者、預職衆選十有六人、謂竹林寺一薦日阿大德、德歎大安寺住持禪慧大德、唐招提寺住持證至大德、善法寺住持大德、勝鬘院住持圓珠大德、并思順大德、照公親度門人、重如、道本、忍空、倫秀、眞照、尊珍、圓光等也、圓珠誦經導師、思順教授、圓空護摩、如是等也、受者淨照比丘、乃上人顯密宗戒親度弟子也、勝寶院大僧正道證于時東寺一長者焉、即有光臨證明法會一奉寺十二天儀式嚴重無可_レ比者、厥後行灌頂會連綿有數、初是庭儀、後皆堂上、講訓法華不可_レ知數、開淨土法隨時是常、道俗說法、群集無量、貴賤歸德、奔馳靡窮、寺院上邊別立庵宇一號密嚴林、照公於彼修練成就念佛三昧一行口初乃千日不棄寸陰、即結徒衆連續口習、其後隨宜常時修練、行來迎儀一號影嚮講成就念佛有_二一卷作法、音曲雅亮、聞者起信、上人修行此法、即有_レ所證、法門自在非他所知、上人師資修習法

行、勇猛精進、俱有_レ所證、良遍上人修白毫觀、心眼開明現見彌陀、平生之間不語他人、記之威後顯之、照公修阿字觀住戒壇院、七年之中、晝夜修練唯在此事、有時中、心眼廓然開明、即見阿字素光顯現、凝心寂然任運顯現、出散亦有_二不見之時、善法禪室與諸門人連坐入禪、舉身有光明朗赫爽、門人之中一人見之、奇特想彌生深信、照公語予曰、心智入觀寂然常照、心體顯于外、是故舉體廓然明朗云々、一法既成、隨修何法不勞即成、事義必然、念力強盛、悉地速疾、有_レ所祈念、事業頓成、故靈祥數彰、効驗彌新、正嘉元年丁巳六月之天、炎旱連日、時雨無_レ下、于時照公引率門人、戒壇金堂轉讀講讀法花叢勝二經、并誦千手陀羅尼、後詣龍池一誦般若若心經、并誦千手陀羅尼、于時天陰雲覆、甘雨即下、暫雨即止、照公舉音摺珠、深歎雨少不滿人願、勵聲誦咒、甘雨天下國土皆潤、雨下數刻、寺僧見之、送空龍池、令僧着之、靈驗速疾、奇特炳然、後嵯峨太上皇臨幸南都、於法隆寺有御幸焉、其日大風、殆將延日、照公奉進御幸、奏可止風、御幸即成、大風即止、天下極靜、寂感無圖、諸卿奇歎、後嵯峨法

皇治政之暇、研精佛宗、究盡法理、名宗之英哲第_二各
各奧理、法相宗後著提口僧正尊信、并玄雅權僧正、宗
懷僧正、承範法印、實寬法印、實懷僧正等、各隨有召、
奉授法相唯識深旨、三論宗大僧正道實常侍、仙、奉
授宗旨、天台宗經海僧正、俊範法印、智圓法印、審承
法印、靜明法印、各候射山、奉授宗義、經海僧國
師、台宗奧旨研究精詳、即有師資血脈之譜、於嵯峨
御所、常有止觀等談義、華嚴宗權僧正宗性深預、叡
感、大有賞翫、山城國乙訓郡海印寺者、道雄權少僧都
草創之處、往古已來華嚴之宗領也、然道性法印院務之
時、口違亂、至宗性貫首之時、進見返口本宗、寵賞之
至、事義丁重、或時新調料紙六十帖、親下賜焉、爲賞
記述鈔書之德、眞言密教亦是道實僧正奉授其幽旨
焉、淨土法門證慧上人惠侍階下、恒奉授之、東福
寺圓爾禪師、數候仙宮、奉授禪法、圓照侍
仙洞、法相三論兩宗旨歸、眞言金剛奧意、親對指
示、委細陳述、叡解廓焉、究徹玄底、照公語予曰、太
上法皇召諸碩匠、尋問諸宗、甚深奧義、預勅問之
匠無不申其旨、然親對御、細奉授法、無如予
吾正陳淵底、叡感御解、實窮深致、斯廼法相之

旨、顯密化制之源、性相禪教之口、聖道淨土之奧、如是
等也、戒律大小、修證漸頓、括囊大體、示申奉授、吾究
玄致、叡感之至、親蒙綸言、此是吾身一期高名云々、太
上法皇究達諸宗、天台奧旨持_持盤御解、仙洞講談諸宗
口德事耻、叡聞、礪肝琢心、照皇嘉世、如思
建興一語、隨樂住持、三口是其幸矣、上人音備衆德、
雄朗清雅、縱橫自在、聞者心澄、信心純正、音曲之事無
不施作、辭辨自任、隨意樂欲、開導之德源由茲焉、
人王八十九代禪林寺法皇踐祚之時、文應元年庚申、
持法隆寺上宮王院、興行戒律、安置僧口、後讓
之寶金剛院英舜大德、安置門侶、興行連續、弘長季
曆、泉州家原寺佛法大德、以彼寺院施與照公、彼所
者行基菩薩降生之砌、菩薩即彼處建立伽藍、菩薩行
化根本之所、彼寺院主歸上人德、以施與之、即安僧
侶、建興佛宗、上人後讓之勝鬘院圓珠上人、彼之門
人于今興口通密教、敷演台宗、德大寺大相國祿門者、
累年法宅之師檀也、德大之內建一院宇、施入上人、
號大悲院、安僧興法、顯密兼行、上人滅後、遷之
他所、東大寺有一院宇、號知足院、上人傳之住持
興行、後讓之法爾大德、令興隆之、知足院房

號性舜諱覺澄矣、法相宗學者、於法華玄贊上生疏等、研覈精詳、大小戒律探、隨獲、與照公隨、澄公、受學玄贊、一乘宗旨獲、其源底、澄公有甥、房號本行、澄公以院宇、讓付于彼、行公讓之、照公、讓付之儀源由受、法子澄公、焉、上人積、行功於千手法、故爲病者、誦千手陀羅尼、患惱速消、又於不動法、運口業誦、慈救咒、自然被縛、誦火界咒、任運被燒、心住、諸尊三摩地、自然隨宜播、神驗、鬼病邪氣以、加持力、自然止息、身心平安、靈氣迴轉由念誦、消滅、支體

快樂、御產念誦

大臣家等檀主極多、無不下皆

由上人加持、安寧平愈果遂速疾、又炎旱祈雨大雨、祈日願念忽果、祈請早成、日蝕月蝕天變災孽如是等事、皆預宣下、加持念誦、天下安寧、蓮華王院供養之比、深雨連日、法會違亂、至于當日一指口止雨、御願供養速疾成辦、眼前散感無、千古百來不可如之、

此等威驗不遑具陳、文永六年歲次己巳四月四日、後嵯峨法皇於東大寺戒壇院、有御受戒之事、壇上莊嚴殊超先代、乃造立金銅多寶塔、安置壇上、自昔壇上安置塔廟、同祿之後、重源上人造立之時、安置寶篋印木塔、今照公奉爲法皇御受戒事、新立金

銅塔、是重舜法橋鼓、法眼和尚位之功也、文永六年己巳、請光明山智舜上人、於戒壇院、令講三論、住寺僧衆七十許人、多是方來學法英哲、乃重禪、聖然、見塔、道明、道學等、就中禪然塔三公、學包顯密、名通遠近、拔群出萃賢德者也、斯乃照公慇懃興行之功也、照公或時自講諸文、卽南山三大律部、是長時業、毗尼討要、菩薩戒宗、香象梵網疏、太賢梵網古述宗要、慈恩表無表章、義寂梵網疏、元曉持犯要記等、俱舍論光暉疏等、法相文籍、三論章疏、念佛諸章、弘法大師所作諸文、大日經疏等、隨宜講通、以授門侶、秉文立義、直入幽邃、領旨陳意、理拔常途、決斷之性無可敵者、或請他令講、是爲發揮門人智解、正嘉丁巳季秋已後、大勸進職造寺劇務多、請他德、亦命門人、於戒壇院等、一律等講談、相續流通、而以餘暇、常自講敷、禪誦共行餘暇亦爾、正嘉元年夏安居中有海龍王寺僧常住道號照寂、寄住戒壇、聽於知足院智舜上人講中論疏、夏竟孟中二秋請常住大德、令講表無表章、厥後令同大德講行事鈔下卷、季冬講竟、卽講戒疏初卷、正嘉二年戊午正月、請北洛三聖寺悟上人、令講戒疏、于時因公年四十二焉、口十四日始之、

至同年七月中旬、戒疏四下至半、因公受疾歸洛、而於中途住善法寺、醫藥治療然後歸京住三聖寺、因公本是泉涌寺首座、次住持三聖、後住持戒光寺、兼往關東、住持無量壽院、并開發飯山放光寺、於彼入滅、于時文永辛五十五也、昔俊仍法師來至南都、值勝願院運迎上人聽行事鈔、後往大宋、值如菴了宏律師大傳律藏、歸朝弘通、乃於北洛東山建泉涌寺、弘律并天台宗、嘉禎三年丁酉之春、請俊仍法師律宗上足門人道號來圓定舜大德、於海龍王寺令講大小律書等、摠終五部、布薩行儀食堂規式等並遷彼風芳、今戒壇院請因上人、自爾已來、南北律宗和通不二、殊無異儀、照公門人兼投因公、即忍空、眞照、凝然等也、忍公本住泉涌寺、投智鏡上人、學依因德、更住戒光、後住持彼寺、眞公入宋歸朝、住戒壇院、後住泉涌、入思允上人門室、然此兩德受戒授戒、專由圓照上人之功、正嘉二年初冬、照公將談業疏、而前方便請東大寺名哲信禪快圓定春三德、令講俱舍業品疏、照公始之、後諸三德、厥後命生馬心海大德、令講事鈔、有時命門人澄禪大德、令講事鈔、次照公自講表無表章古迹宗要等、文

應元年庚申、命門人照空大德、令講律鈔等、弘長元年辛酉、命門人忍空大德、令講業疏、初卷自講、後乃弘長二年壬戌之春、業疏終功、其年夏初、忍空大德講行事口、同三年癸亥半夏前年壬戌之秋、眞照大德自宋歸朝、住戒壇院、明年癸亥夏半已後、眞照大德講繼事鈔、自爾已後照公講律連續、律鈔終功、次講次講業疏、後還講繼律鈔、首尾六年、口南山三大律部後復講律鈔等、即迄至文永五年戊辰之秋、沙門凝然自正元二年已未至文永四年丁卯、首尾九年、雖有他口居寺之間即爲復師覆述被衆、六年、已已命門人澄禪大德、令同七年庚午自正月一日至十二月、命門人小僧凝然、令講戒疏一部終功、自同八年辛未之冬、至同九年壬申夏竟、命忍空大德、令講律鈔、自同年之冬、至同十年癸酉初冬、請唐招提寺住持證玄上人、令講律鈔、引率門人繁昌、同十一年甲戌初夏已後、命于凝然、令講律部、長日連續、講談不絕、文應年中命門人白毫寺道照大德、於善法寺、令講事鈔、又命忍空大德、於同寺、令講律鈔、又命澄禪大德、於講三論疏并法華疏等、樂學之住依投、

數年之間、智人多生、又有尾洲僧良敏法師、本學天台宗及眞言教、創入上人門下、受戒聽律、有時住善法寺、卽命凝然於彼寺別房、爲敏法師令講四分戒本定賓略疏、又八乘院既付門人琳海

大德、恒講菩薩戒古述宗要等、北洛鷲尾者、

上人常所住之寺、爲諸門人開法不絕、或召諸餘

人令講法律、或請泉州淨佛大德、令講鈔古迹等

章、又請泉州涌寺圓珠上人、令講律鈔、并談眞言教、

口有時珠公講菩提心論、凝然在會投聽彼講、尾洲

敏公久住鷲尾、卽命彼公令談天台文籍及眞言

書、或上人爲敏公自講表無表章等、又上人自講大

日經住心品疏、大開密乘、又爲住寺僧侶并東林律寺

尼衆講菩提心論、凝然列座聽講、東林住持者、

上人之姊、法華寺如眞比丘尼在俗時之女也、小年出

家、遂持東林、管領尼衆、投金山院、傳受密教、文

永九年十年之間、門人凝然依住金山院、上人自

講毗尼討要、後然講敷終部、後命凝然令

講業疏、上人差門人忍空大德爲生馬竹林寺講

主、空云常住彼寺、講敷律藏、鷲尾別峰有閑寂處、

上人於彼造堂立菴、以爲淨業練修最後終焉之處、

兩護摩堂影響堂念佛堂菴臨終所僧庫客菴種々

備足、號密嚴林、上人自作修行規式、製十段式、

名往生極樂講、行此講式、修來迎儀、名影向講、

亦修行業、名成三昧、上人於彼閑林三年千

日修此行業、證悟在心、奇瑞現外、道俗歸投發心

者多、內業外益無有並者、建治三年丁丑十月十五日

於金山院例式布薩、同日布薩已後受伯州守護兼

地頭職金、非是彼講之請到彼高辻宿宅、乃彼親父十

三年之追善也、供養堂舍、讚歎佛像等、說法開導事

義也、竟歸寺之後、身有疾患、醫師看視療治盡志、上

人深厭都無治身、或同侶來談法、或檀主詣口

患、雖在病床氣力強健、同二十一日、暫起病床、於

影向堂前說法化導、厭背生死、欣樂安養、祈念誓願、

向佛乞哀、見者悲歎、聽者啼泣、然後還本病床、

法染病之後、每日結願、略呈諸宗病中預日以

所管諸寺付與門侶、看病人中爲全大德執筆列

諸寺名、上人執筆於諸寺下、自題人名、門輩自遠

近而集、客人自都鄙而赴、廿一日更口請了性禪

教二德令修中夜禮讚、音曲雅亮極勉、物信念佛之

中誦來迎讚、上人忍痛、同音念佛、卽出讚頭、庵上

諸化佛云々、漏刻已遷、將過_二夜半_一、至_二寅刻_一忽見_二瑞光_一、西方空晴、光明赫奕、見_下佛菩薩感_二聖衆_一來、照公告看病_一佛光否、諸人不見、上人獨見、攝念凝念、稱佛思_レ法、上人言曰、元興智光已詣_二安養_一、禪林永觀亦生_二極樂_一、西方淨土殊勝奇特、後學須_二欣樂_一、豈不戀慕_二乎_一、恒慕_二古賢_一、策勵信心、照公于時聞_二賀茂大教_一上人圓寂_二秀句_一云、大教之網已破、實相之理將隱云々、看病之人并諸門內輩內外列坐、各念誦慈悲咒等、或同聲念佛、勵行者心、明相已現、日漸_一上人念佛稱名、至誠連續、手持念珠、端坐唱念、辰刻後分、寂靜遷化、所歷春秋五十有七、遠近有緣諸寺善法、戒壇、招提、或親告_レ之、或自得_レ聞、當日明日如_レ雲奔_二集洛中洛外_一、道俗男女來詣群集、禮拜讚歎、悲慟哀哭、貴賤來詣不可_レ比類、唐招提寺和上證玄上人者、累年一志之親厚也、深悲照公遷化、哀慟連綿無_レ止、彼寺僧衆不日上洛、玄公爲_レ訪_二病惱_一、先上_二華洛_一、當_二圓寂日_一、於_二鳥羽南_一聽_二此入滅_一、餘僧明日疾々_一戒壇、門侶日暮聽告、終夜上洛、東_二兩道_一任意奔足、明朝粥食竟時、上着大僧沙彌各拜_二遺顏_一、哀哭悲慟不可_レ勝計、此是二十三日朝也、凝然二十日之夕、聞_二上人病惱

之告、明朝二十一日_一上洛、僅唯一夜值_二子和上存日_一、詣_二卷即見_一和上病容、和上語云、此五六日被_二侵_一病患、今生報齡事是最後云々、二十四日未刻、致_二其喪禮_一、遠近_一諸來僧衆、十方檀那、見聞道俗、從_二殯喪_一者不可_レ知_二數_一、問_レ喪諸僧令_レ還_二遺菴_一、即行_二分亡物_一之作法、證玄律師判_二輕重物_一、表白和僧_二乘_一御羯磨、聞者_一無_レ不_二流淚_一、明律之譽事甚炳焉、諸口律德遇_二羯磨_一者、老少非_一、乘御飛美、謂尋竿、忍空、琳海、真性、眞照等也、答法、忍空、維那凝然、賞看病者圓晴、作法竟、哀慟退散、圓照和上年二十_一具足戒、齡三十三、作_二和上職_一、自_レ爾已來、受_二大戒_一者、本末諸寺員數極多、或他寺他所散在_二非_一、所謂眞性、道號證脫、大和國人、元興福寺衆、阿_二口上人_一之付弟、_{上之人上足}、道號勝願、諱亦眞性、住_二持彼寺_一、此諱不可_レ與_二彼相濫_一、覺願房住_二戒壇院_一、乘修房亦住_二戒壇院_一、安藝道號唯性、安藝國人、建長五年癸丑正月廿五日、受_レ志在_二興隆_一、助_二和上化_一、經營世俗、同沓婆事住_二戒壇院_一、取_二終焉_一矣、覺辨道號實口、洛人、住_二仁和寺_一、有_二能書藝_一、住_二戒壇院_一、修道、房性、本房、已上三人住_二戒壇院_一、同時受戒、乃建長五年也、大輔公、諱重專、住_二興福寺_一、學_二法相宗_一、住_二戒壇院_一、受戒學律、入

圓房諱道照、南京人也、東大寺口僧累代遺胤、居住戒壇、研尋精詳學、三論宗、稟子善、于律學、稟照和上習、學祕教、惠深并聖守弟子、通解教相、善于悉曇、稟于內山密蓮公、梵漢能書、有唱導德、住持白毫寺、弘通所學、而二十八隨沒故焉、真道房、口如房、北洛人也、學華嚴宗、實弘弟子也、觀圓房諱證海、大和國人、兼東福寺、好於座禪、於戒壇院、取於終焉、了達房、諱榮禪、道本房、諱圓海、東大寺累代寺僧、最初與照和上、自海龍王寺、移住戒壇、入照公室、重受具戒、志在華嚴、習學真言、乃聖守圓珠兩德弟子也、西忍房定空、後改號淵月房、道譽元是俗士、後入緇門、本住泉涌寺、隨智鏡淨因兩公、學四分律開遮持犯、一宗梁棟、後入照公門室、受具足戒、後於北洛、學天台宗、住持鎮西觀世音寺、後住藝州、獨居修練、慈觀房、伊賀國人、兼住吉野、慈淵房已上二人同時受戒、建長六年二月十八日也、佛日房、諱寂入、出羽國人、在俗有忠、入緇居禪、住戒壇院及東福寺、亦居木幡觀音院、後住北洛口條增福寺、彼寺本願寂心公後入大悲門、養育乞匄、弘安四年六月、隨于物故、諱真照、本清道號寂菴、是宋朝字也、本朝房號實乘、華洛人也、精通律藏、諱力練台宗、

往大宋朝、決通疑壅、宋和戒旨、南北律義指陳如鏡、照明同玉、受學密教、功業連積、住持增福寺、大弘所傳、照公和上請淨因律師、於戒壇院、令講戒疏、厥時學秀之一也、次移戒光寺、隨因公德、聽講業疏、于時度宋、歸朝之後、住戒壇院、六年之間講三大部、厥後住泉涌寺、十餘年中、隨思允上人、研究律部、兼通台教、在大宋者、謁妙蓮律師、傳受戒法、隨行居律師、決大部疑、拜靈芝之舊跡、訪如菴之古處、遊歷兩朝之者、當代雷一而已、師宗雖多、照公是本報恩之勤、于今彌新、遂畫和上等身真影、安之戒壇、爲永規矩、寂入真照同時受戒、即建長六年十月十五日也、進蓮房、諱圓心、北京人也、住仁和寺、建長七年四月九日受具足戒、唯寂房、山城國人也、西緣房、佛眼房、越前國人也、悟性房、諱妙然、常陸國人也、正因房、三河國人也、空明房、道守、南京人也、圓教房、後號圓戒諱正基、入大宋國、多傳律書、新度書籍此時彌多、玄智房、戒辨、丹波國人也、稟性不敏、學業極勤、數年稽古、隨分通利、諱忍空房、號空智、駿河國人也、初雖投禪院、而由緣入律、即勝鬘院圓珠思順兩德東遊之時、相隨上洛、遂入泉涌律場、珠順兩德者、本京

涌寺住僧也、忍公入智鏡上人_二之門、在淨因律師_二之下、學戒聽律、後移住戒壇、入照公門、受戒學律事、在精進、淨因大德戒壇開講、秀達之一、厥之明年、與眞照公俱移住戒光寺、聽因大德講羯磨疏、卽正元元年也、律相開遮明朗如懸日月、通別受隨秉御似向鏡玉、名譽流華夷、行德開都鄙、習學祕教、大致弘通、小野廣澤無不傳受、彼此諸流_{諸方}誦練積口、興隆室生山、住持生馬寺、勝鬘院珠順兩德之後、忍公卽厥法嫡也、度人受戒作梅檀林、入壇傳法成金玉市、傳戒之事由照師之功、講律之譽在因師之德、傳密之事豈非珠順之功乎、忍公中比、住持戒光寺、兩三年之間講三大部、門輩非一、是因公之餘芳也、自餘行業不能具陳、空本房源心、南京人也、戒辨忍空源心三人、同時受具、卽建長八年二月二十二日也、安淨房、肥後國人也、心操寂靜、好修坐禪、移東福寺、功夫秀逸、蓮覺房澄心、伊賀國人也、禪證房道海、伊賀國人也、二人同壇、建長八年三月九日也、佛明房、參川國人、真性房、駿河國人、佛光房後改字導西房、洛陽人、在藤原、乃朝隆四世之孫也、慶舜改號雙圓房、是重受也、本菩提山住僧、後住靈山院、次住

戒壇、後移寺、紹隆有志、於彼終焉、蓮觀房改號雙圓房、紀伊國人、本住高野金剛三昧院、受戒之後亦還高野、是真言師、事相教相學業有功、取終彼寺、阿實房上俊、越後國人、房號實相、彼弟子、名中道、入戒壇時、俱改易之師號、阿實弟子號聖意、俊公本有學口習天台宗、兼通釋論首楞嚴經、坐禪有功、解行貫通、後移善法寺、值中風勞、不瘳物故、覺然房口駿河國人、機宇俊爽、問難縱橫、要觀房本空、北洛人也、本住泉涌、後移戒壇、勸學房俊西、鎮西人也、本聽天台、功成三遍、機識不敏、功業不見、後住鷺尾、終還本國、淨信房良尊、攝津國人也、專蓮房和州人也、住東小田原、習學真言少沾音曲、現良房倫秀、和州人也、住東小田原、習學祕教、音曲有口、後住善法寺、終時有祥瑞、道一房順達、鎮西人也、覺靜房適然、和州人也、稟性聰敏、律學有功、本海龍王寺、聽禪慧上人講律、後就智舜上人、習學三論、正嘉元年、聖守上人請光明山智舜上人、於知足院分講中論疏、諸方學侶住戒壇院、聽彼講談、乃海龍王寺照寂房、證禪房、淨禪房、後移覺靜房、白毫寺入圓房、實教房、當麻寺生觀房、_{滿願房弟子、淨土學者}、又有觀聖房唯心者、本

良遍法印弟子、學法相宗、兼聽三論、卽住戒壇院也、曇導房、北洛人也、行能之息、是能書也、住園城寺、圓滿院之房官、後住長樂寺隆寬遺跡、正嘉元年之冬受具足戒、正圓房道意、和州人也、正嘉二年二月八日受戒、後住鷺尾、義勝房口範、三川國人也、後住鷺尾、戒印房正乘、北京人也、本住泉涌寺、後亦還泉涌、或住戒光寺也、自證房隆口、出羽國人也、本住泉涌、後移戒壇口行房憲政、是重受也、覺解房口心後改法一房、北洛人也、本住醍醐寺、習學祕教、後住泉涌寺、通宋音曲、覺圓房已上三人同時重受、乃正二年四月三日也、良忍房靜照、北京人也、敏利稟性而學不勲、隨照和上、傳受真言、和上於金山院、爲口行灌頂法、庭儀巍々、作法嚴重、示觀房凝然、受生與州、正元々年口五日受戒、後住持戒壇院、靜宣房觀空、伊賀國人、眞照上人有入宋事、爲伴俱往、醉船不果、正印房良意、北京人也、初附良智上人、住海龍王寺、後住戒壇、受戒學律、律念佛務口後住建長寺、於道隆禪師下訪食禪法、次住高野、習學眞言、後住戒壇、披通律藏、唯空房經照、北洛人也、興福寺住僧、學法相宗、後厭世榮住戒壇院、暫移西

大寺、受沙彌戒於叡尊上人、後還戒壇、受比丘戒於圓照上人、厥後或住善法寺、或住金山院、住東福寺、修習禪法、乃彼開山圓示禪師之時也、後住菩提山、爲唯觀上人眞言上足付弟、爲衆所推、卽作山灌頂大阿闍梨、拔群之德事甚巍々、禪空房如性、南京人也、本住興福寺、稟性敏利、亦有學業、後住菩提山、與經照上人一處口住、習學密教、教相義巧、隨智舜上人、學三論宗法華義疏等、研尋不棄、立破縱橫、物難敵對、高野體日公者、菩提山之學頭也、性公難之、恒亂講匠之意、遣破之事如是等也、殊照、如性、居住一雙受戒、亦同壇、乃正元々年三月二十三日也、日蓮房重如、本號舜觀房瞻秀、大和國人也、年方六歲、入東小田原、作胎蓮上人弟子、久學祕教、研精運功、蓮公所傳三流皆習、金剛王院三寶院、理性院以金剛王院爲本所學、彼所弘事如是故、普訪知識、求學祕教、本流他流無不研究、乃眞空上人、唯口上人、聖守上人、圓珠、思順兩上人等、顯密音曲居先達位、書字筆跡大有功業、兄弟三人皆善書筆、如公是弟、次兄二人、次第能書、如公少欲知足極上清潔、居處數多、而不定處、數還戒壇、聲明被衆、凝然音曲顯密俱稟、東

山寒林自營石塔、因居白毫寺、受病終報、乃正安元年己亥五月十八日也、春秋七十八、彼父母亦七十八卒、本心房澄海、北京人也、本長樂寺重代別當職、住延曆寺、卽道西公之舍弟也、次住戒壇院、受戒學問、住東福寺爾禪師下、修練禪法、後住菩提山、研精秘教事相教相、鑽仰溫習、智德難思、爲衆所推、門輩有數者也、上來暫中雖有不言、皆是居住戒壇之人、

東大寺圓照上人行狀下

圓照上人親度門人有琳海大德、道號信覺、攝津國人、志操寬和、紹隆在懷、本住勝尾寺、行業勇進、入律門之後、移住戒壇院、受戒研律、晝夜無倦、口戒光寺、聽淨因公講敷律藏、住寺、修練陶甄、彼寺之內別造大堂移之、此間蓋有脫文、大乘院、彼院宇者、社官累代之氏寺、照公和上差琳海公爲大乘院長老職、海公管領彼院、大致營造、興行數年後、棄往他所矣、先於海人崎建大覺寺、後興行北洛東北院古跡、秉御建興祕教、禪音房圓海、大和國人、本住安倍寺、來住戒壇、受戒學問、住竹林寺、後還安倍寺、坐一蒲選居有職位、空行房、南京人也、住戒壇院、次居建長寺、作隆禪寺之侍者、後還戒壇、住金山院、如空房理然、南京人也、本興福寺住僧、圓緣大法師弟子、辭交衆事、入戒壇院、本還暫還交衆、經一兩年亦來戒壇、本研法相、通達因明、學識敏利、鑽仰飛名、雖大小並學而善菩薩戒、太賢梵網古迹、宗要、研究弘通、往越前國永平禪寺、入佛法上

東大寺圓照上人行狀中終

人遺門、禪法旨歸存、彼宗義、隨賀茂空願上人、研真言教、後於丹波國建寺、弘口口口行密教、大播餘芳、然公善于口口立破縱橫、知法房、不知何國人、了性房、北京人也、住戒壇院、後移鷲尾、信戒房正慧、北洛人也、自少年之始住泉涌寺、摠在智鏡之下、別入淨因之室、南山三大律部、研究精詳、歷年累日、于今無他持犯、開遮決斷明白、口中建寺弘所學法、戒信房伊口口口、禪如房湛照、北京人也、本是天台經口僧正之門人、壯年遁世、住招提寺、彼寺衆主附之、照公令住戒壇、稟識聰敏、慧解縱橫、覺法房行祐、後改觀照房、鎮西人也、住戒壇院并善法寺、學通律相、住高野金剛三昧院、習學密教、累年稽古、住木幡寺、傳受口口事相教相、研尋有功、已上三人同壇、文應元年四月十三日也、唯脫房信口南京人也、住戒壇院、次暫居大安寺、後往東國、空信房、河內國人也、住戒壇院、後住鷲尾或竹林寺、觀律房觀重、南京人也、本住菩提山、入律門時、始住招提、後住戒壇、明願房、南都人也、住興福寺、暫學法相、後住口口受戒學律、觀一房、高野住僧、住戒壇院、圓光房良舍、越後國人、住戒壇院、發心受戒、後就洛

陽大宮明了房、受學悉曇、稽古水藍、遂謁小河上綱、重學悉曇、小河者、卽了公之本師也、遍隨善友、受學真言、東寺諸流究小野廣澤、又延曆園城磬與獲極、兼包之德、無有競義、門弟非一、各授一方、證佛房、備中國人、本是俗士、武勇有譽、出家入緇、就淨土教證入上入學念佛法、就高野道範阿闍梨、受學真言、次入戒壇、受戒學法、華洛建寺、弘淨土教、後住八幡、口口化有功、慧靜房性圓、信濃國人、住戒壇院、文應元年十二月受戒、後入禪院、專好坐禪、又住鷲尾、受和上訓誘、蓮性房源意、北京人也、先住戒壇、還鄉居家、後來戒壇、受戒學律、機性敏爽、立破嚴峻、是空如房舍弟也、禪寂房、南京人也、住東大寺、後住戒壇、與性公同壇受戒、乃文應元年十一月也、慈雲房信慶、紀州人也、籠居那智、經十二年蹲居苦行、一字三禮書寫五部大乘經、學天台教、摠經數年、識慮龜魯、旨歸易濫、一圓房一如、出羽國人、住戒壇院、摠寂房真慧、北京人也、本綾小路尊性法親王之房人也、發心受戒、住戒壇院、金山竹林遊住經年、音曲獲骨、和才在身、理真房尊珍、本洛陽人、住園城寺、次住高野金剛三昧院、真言搜與、聲

曲獲旨、音律之路隨分通利、善忍房善濟、大和國人、多武峰住僧也、辭彼交衆、住戒壇院、後移金山、專好坐禪、隨道房元晴、大和國人、十二住戒壇、學業大成、通解律藏、兼學三論、音聲雅亮、顯密精曲、後住善法寺、致講口業、機識敏爽、義解任運、隨照和上入三密壇、信慶已後六人同時受具足戒、乘願房、鎮西人也、本是俗士、住戒壇院、發心受戒、明善房智辨後改道智、常陸國人、本忍性上人之門人、住戒壇院、重受具戒、寂意房、北京人也、住高野山、居戒壇院、後入禪院、入宋歸朝、正乘房、鎮西人也、住戒壇院、好學易、忘習字難成、禪性房後改空月房、洛陽人也、悉曇明了房之甥也、住戒壇院、明律懸鏡、學三論宗、丁公悉曇漸學傳之、住高野山、學真言教、闡誦稟性是人所依、真戒房性融、上野國人、照公任大勸進職、口口關東上洛之時、隨逐而來、住戒壇院、學業不懈、三大律部研精周盡、後還本國、不復音信、了覺房玄空、北京人也、住戒壇院、學業精勤、三大律部研覈究盡、爲物所依、而早物故、意公已後五人同受、妙覺房朗然、周防國人也、住戒壇院、理觀房性真住戒壇院、智月房、出雲國人、住戒壇院、口教房智

真、大和國長谷人、住戒壇院、已上三人同壇受戒、實法房道慧、洛陽人也、住延曆寺、初住戒壇、次住鷲尾、次住大谷速成就院、後往關東、圓行房良基、常陸國人、住戒壇院、圓戒房智照華洛人、住戒壇院、顯實房靜尊、常陸國人、住戒壇院、已上四人同受、弘長二年也、正願房經舜、攝州人也、住戒光寺、受戒、因公次住戒壇、重受具足戒、即弘長二年五月廿二日也、後住善法寺、習學真言、兼包諸流、稽古積年、于時秀逸、松橋上綱作法之一、唯覺房了一、遠江國人、住戒壇院、源性房後改圓月房、北京人也、誠智房圓信、備前國人、已上二人同受、俱住戒壇、禪一房照阿、紀州人也、住善法寺及竹林寺、後入宋朝、蒙古國人伐取宋國、彼人行國、聞日本人彼極不口、一公隱山、顯露不遊、近比和人入宋、一公尋值、語以此事、具聞本國種種之事、喜踊罔極、寂忍房出羽國人、房改圓性房、口了房入空、元俗大力、已上二人同受、弘長三年十月十二日也、觀林房道雄、河內國人、住竹林寺、後住口倉山寺、福分秀逸、司接待處、往還客僧無不寄住、修習祕教、清潔不懈、願乘房性海、和州人也、習學真言、解行秀逸、近所退方人多稟受、弘通甚昌、不可勝

計圓聰房、大和國人、已上三人重受具戒、實圓房慈性、安藝國人、住戒壇院、後學三輪、音曲巧妙、久住善法寺、後住洛東風早別所、觀實房、信濃國人、已上二人同受、文永元年五月二日也、如圓房聖範、周防國人、住戒壇院、真願房後改本有房、大和國人、初住西大寺、次住戒壇院、即稱念佛俗時之息、後往關東、言大夫法眼是人也、已上二人同受、文永元年二月三日也、道圓房長照後改圓晴、受生越前國、成長于南京、母氏者、東大寺累代之後胤、近比有大法房五師慶俊者、是華嚴宗之英匠、乃華嚴貫首辨曉法印、權大僧都學法之師匠也、探玄記二十卷、作若干軸鈔記、舉世翫之、晴公母氏即彼孫也、晴公年始十三、落髮入照公門、隨逐給仕、晝夜不懈、齡登十七、交衆學業、即隨照公受學真言、年至二十一、入兩部密壇、灌頂之日、先受具戒、顯戒圓備、次受三摩耶密戒、乃文永元年甲子十一月二十六日也、於竹林寺行灌頂法、衆英列袖、庭儀巍々、晴公和上所傳真言妙義、異流兼傳、慇懃精詳、屢隨和上、報恩奉給、乃至最後看病送終、照公侍者隨時非一、良忍房、戒本房、勸學房、常心房、乃至空性房、順覺房等、雖有諸人、事非

常隨、晴公奉給、始終不改、觀實房、遠江國人、本實房性憲、信乃國人、受戒之時、附慧淨公、住戒壇院、受戒學律、後住勝鬘院、隨圓珠上人受學真言、研尋慇懃、學解拔出、入大宋朝、於彼物故、了智房、尾張國人、本妙房見塔、北洛人也、即思順上人甥也、機識敏利、立破縱橫、學解兼貫、顯精詳、隨珠順兩哲、大受祕教、遍訪名師、義道該通、隨智舜上人受學三論、又天台教觀、通包無壅、祕宗教相義辨如泉、諸教旨歸、破立懸鏡、以三論爲顯中所歸、以真言爲智內玄極、仙洞竹園屢蒙召命、槐門棘路常通知音、世俗勝義無不包括、諱信忍、道號智生、居俗有忠、厭世求法、年二十二落髮、登高野山苦行、入招提寺學律、隨玄上人受戒、海龍王寺、不退寺、光臺寺、彼此遊住、修大悲行、入照公門、住戒壇院、勤維那役、攝僧一周、移住金山、大助照公化儀、即文永二年八月二十五日、重受具戒、宋人歸德、洛東靈山建一堂菴、施與上人、後住持金山院、建興二諦、內裏、春宮、女院、后宮、仙洞、梁園、執柄、蓮府、三槐、九棘、文武諸家、洛中洛外、或是說法、或是受戒、屢蒙召請、常通知音、皆是照公和上餘潤之所

致也、是本房道爾、上總國人也、幼年出家、在隆禪師門下、年登三十七、住戒壇院、後住善法寺、研尋三論、究詳祕教、習學諸流、功業極深、人欣傳受、多生門輩、年二十二、受具足戒、即文永二年八月二十五日也、證道房、諱實融、北洛人也、初住泉涌寺、隨思融後改、上人、移住鷲尾、後住高野金剛三昧院、是意教上人真言之付法也、研究事相、精覈教相、謁華嚴貫首權僧正宗性上綱、聽五教章、華嚴義旨、領會在心、作金剛三昧院首座、門輩甚多、並從融公智胎一生也、理覺房有心、駿河國人、住戒壇院、志操懇懃、學業難成、暗憶甚鈍、經年誦戒、圓一房、伊勢國人也、本住泉涌寺、次住戒光寺、後來戒壇、聽眞照講、三大律部研精明朗、機識聰敏、學業不倦、深領宗旨、兼通華嚴、深養神解、專立南山宗、大興三觀教、勢州建寺、忽遇回祿、後常建興、不成而止、乘一房、南京人也、住戒壇院、唯心房後改本乘房、周防國人、住戒壇院、學識通途、已上四人同壇受戒、即文永二年九月也、如蓮房教辨、大和國人、本布施山寺住僧、音曲有功、苦行清潔、初住西大寺、次住戒壇、受戒學法、後住川原寺、建興二諦、造食堂、立僧房、請僧

講密教、勸人營紹隆、年齡滿八十、門人中高騰、嘉元唯一房照遠、播磨國人、住戒壇院、專營學業、後住竹林、建興二諦、隨日阿大德、受三密法、慈心房、安藝國人、初住西大寺、後住戒壇院、與照遠公一同壇受戒、文永三年三月二十一日也、觀佛房心性、北京人也、祐宗法印之堂弟、讀經有功、聽者悅耳、住戒壇院、受具足戒、良敏律師、道號寂忍、尾張國人、機宇和順、學識深廣、本學天台教觀、乃本州淨心、美州照寂兩上人之弟子也、隨勸證寺大圓上人、習學真言、顯密兼究、講授無休、遂於本國建寺安僧、多生智人、大興宗旨、後住持洛東吉水別處、禪心房、尾州人也、乃良敏公之弟子、師資同日受戒、文永三年十一月也、寂然房、尾州人也、文永三年十二月受戒、如性房定秀、周防國人、住戒壇院、成信房、大和國人、住戒壇院、後移住布施羅索院、聖忍房定圓、大和國人、住戒壇院、智信房北京人也、住戒壇院、已上三人同壇受戒、圓覺扇安藝國人、住戒壇院、觀聖房唯心、北京人也、就良遍上人、住竹林寺、住元興寺、學法相宗、照公勸進道俗、造元興僧房、配置供料、始長日談義、預精選之人、專英法印、實筆僧都、貞弘律師、

圓緣得業等、六年之間講唯識疏、至第七年、講七
 卷章四般、名哲次第談之、其間心公聽學無懈、多能
 之性、兼包貫括、諸宗奧旨無不諳練、和漢兩才蘊積
 身中、住金山院、時往鎮西、文永四年九月受戒、蓮
 願房堯實、大和國人、教智房良睦、北京人也、順忍房圓
 意、紀州人也、本念佛圓誓、大和國人、通觀房諱承憲、
 南京人也、通憲四世之孫、與福圓憲法印之舍弟也、學
 識兼包、唱導傳道、遁世住鷺尾善法等、文永五年正
 月八日受戒、于時齡四十六、長信房永尊、大和國人、
 住戒壇院、道明房照源、北洛人也、於金山院落髮
 入緇、住戒壇院、受戒學律、住真言院、習學三
 論、卽就光明山智舜上人、研精琢磨、得宗旨焉、明
 心房良照、南京人也、識性寬和、溫良清雅、隨照和上
 受具足戒、受三密法、住勝鬘院、入融公門、并得
 同寺順公印璽、久住竹林寺、訪日阿祕壇、廣求知
 識、精勤難量、受通門具戒、卽文永五年三月也、唯照
 房、南京人也、文永五三月晦日、受具足戒、五尊房雲
 海改、佛心房、丹後國人也、受戒文永五年五月八日也、
 戒圓房、信乃國人、文永五年十二月二十六日受戒、次
 日沒故、覺性房光遍、尾州人也、隨良敏公、學天台

宗、覺一房觀海、尾州人也、悟忍房定祐、亦尾州人、音
 律台宗多能之性、淨達房證圓、亦尾州人、上之三人並
 良敏門人、已上四人同壇受戒、文永六年四月也、禪智
 房蓮眼、越前國人、住高野、學真言、次住戒壇、受
 學戒律、久住鷺尾、行學密藏、雖習數流、而西院
 清流以爲所宗、弘通在此、鑽仰無懈、頓照房尊如、
 讚州人也、至道靜海、出雲國人、如觀房圓海、安藝國
 人、淨日房良空、尾張國人、照月房堯融、遠江國人、了
 圓房良範後改興實興州人也、隨良敏師、習學真言、
 隨周防僧郡、習聲明道、照公和上於鷺尾別菴修
 成就念佛法、千日共行其一也、愛染明王專運功業
 威驗、由茲舉世崇敬、於清水坂建愛染堂、慈日
 房覺怡、尾州人也、教觀房良圓、已上圓海已後六人同
 受、文永六年五月十五日也、淨印房公聖、北洛人也、
 住中川山寺、習學真言、明音曲道、仁和醍醐勸修寺
 等諸流真言誓旨傳受、多生門輩、解行兼備、文永六
 年十二月受戒、發心院々主中納言阿闍梨者是也、道性
 房按此間靜觀房禪辨改一心房鎌倉人也、禪禮房靜
有脫字、歟、靜觀房禪辨改一心房鎌倉人也、禪禮房靜
 照、伊賀國人、住白毫寺、文永七年隨照和上、受具
 戒、道覺房、大和國人、禪林房尊空、伊勢國人、住金山

院、勸人圖三十六羅漢真影、安置之金山院、實淨房蓮淨、南京人也、在公有禮、居私有計、對客巧言、向人轉色、初住戒壇、次居鷲尾、後移生馬竹林寺焉、最後栖洛、好念彌陀、空性房、北洛人也、隨事和上、奉給有功、與蓮淨公同時受戒、文永八年七月十四日也、淨慶房圓喜、鎮西人也、就仁和寺淨音上人、學淨土教、世情强悍、有隨轉、初住戒壇、後還本國、真乘房爲全、平阿相時繼公之舍弟也、本住洛東小坂、念佛音曲巧妙獲旨、隨從照公、久經三年序、成就念佛傳之積功、照公病中、與圓晴公看視懇勸、卽作上人臨終之記、道日房快尊、出羽國人、住戒壇并鷲尾、後隨勝鬘圓珠上人、傳授祕宗、遊化東國、弘通所傳、顯日房道憲、讚岐國人、住戒壇鷲尾生馬、專營學業、後隨珠公、傳受眞言、遂建寺讚州、弘敷顯密、道意房、越中國人、已上四人同受、文永九年三月二十九日也、了印房、豫州人也、道印房安藝國人、已上二人同受、文永八年也、唯圓房改住空房、讚州人也、住竹林勝鬘院、修學眞言、斷證房下總國人、照本房、南京人也、初住戒壇、後住白毫、卽作彼寺住持之選、習學律藏、傳受眞言、專善聲典、兼

好書字、後作異門、徒埋所學、觀智房下總國人、住戒壇院、習學律藏、聽受華嚴、雖非大器、事極遲成、唯心房改覺賢房、江州人也、住大覺寺大乘院、隨琳海公、受沙彌戒、隨照和上、受具足戒、暗誦稟性、義解龜弱、口不好言、強力勇悍、已上唯圓公下五人同受、文永九年八月十二日也、稱念房、大和國人、俗士、出家住戒壇院、與隆世諦、致僧庫務、後作東大寺石壇造營職、圓觀房、下總國人、心寂房、鎮西人也、觀道房、尾張國人、覺庵房宗振、下野國人、攝道房、北洛人也、覺慧房淨胤、尾張國人、圓智房公鑒、尾張國人、證道房賴圓、信乃國人、如淨房賢祐、八幡人也、住善法寺、好學能書、暫示退跡、卽時還發、隨禪慧上人、重受諸戒、精研淨教、習學祕宗、照嚴房覺悟、尾州人也、空藏房觀海、關東人也、習學淨教、一方梁棟、傳持眞言、導化門輩、唱導勸誘、歸宗如林、洛陽三條建大光明寺、弘通淨教、開敷義筵、卽長樂寺隆寬律師五世之法孫也、後入照公門室、受具足戒、傳受祕宗、文永十一年十二月受戒、琳宗房道憲、北洛人也、住善法寺、移戒壇院、西信房、鎮西人也、雖謝智藝而播福祐、善性房有海、與州三嶋人也、住山院、

住戒壇竹林寺、真言諸流研尋積年、生處建寺、弘通所傳、圓戒房中一後改禪爾、北洛人也、十九落髮、就大乘琬琳海大德、歸入律門、年二十一、住金山院、隨于凝然、創學華嚴、俊爽叡敏、義解縱橫、至二十三、隨照和上受具足戒、與有海同壇、即文永十一年甲戌四月也、次住戒壇院、律藏華嚴研精積功、次住賀州無量壽福寺、爲衆講敷華嚴宗諸章等、後移住泉州久米田寺、彼寺者、本行基菩薩創草建立之所也、法名隆池院、五條平右金吾禪公中興彼處、建堂安佛、造房供僧、置一切經、納華嚴書、以顯尊上人爲長老職、尊公讓之禪爾、檀那歸宗莊嚴世諦、講宣華嚴、弘敷律藏、多生學者、頻出智人、隨真言院聖然上人傳受密藏、好修坐禪、法行甚昌、說法開導遠近皆歸、華嚴律藏秉持弘傳、乃凝然之上足門人也、良忍房、常陸國人、住戒壇院、欣淨房、洛陽人也、住戒壇院、本念佛者、專好閑居、後學真言、鑽仰積功、禪忍房、洛陽人也、本念佛者、住戒壇院、居一切經谷、乘願房、豫州人也、住善法寺、十佛房、圓意、本名堯禪房、次號乘道房、南京人也、音曲清雅、誦經有功、住于關東、建寺安衆、道俗雲集、化導有

功、空行房、南京人也、住戒壇院、後住鷲尾、空日房、乘圓房、大和國人、住戒壇院、後住布施三寶院、本惠房、洛陽人也、本住大原、聲明有功、後住泉涌寺并草河寺、道慧房、洛陽人也、來戒壇院、出家學問後、住泉涌木幡勝鬘高野等、律藏真言諳練研尋、上來並是三聚通受、其別受門、門人非一、正嘉元年六月於戒壇院壇上、行別受法、圓照上人爲和上、照寂房爲羯磨阿闍梨、空印房、實教房、相替爲教授阿闍梨、其受者、佛光房、進蓮房、實乘房、三人同壇、玄智房、覺然房、要觀房、已上同壇、唯性房、空智房、西忍房、已上同番、阿實房、蓮覺房、正圓房、已上同番、六月二十五日兩夜行之、照公一期行別受法、唯此一遍、比丘尼衆通受門者、亦非一二、念性房則然重受、日圓房尊如重受、圓觀房生心、圓智房智心、蓮性房淨智、專信房照慧、願性房顯如、善光房、修善房、淨忍房、慈行房、妙法房、妙性房、如是等也、此僧尼中唯受沙彌沙彌尼戒又尼戒、未受具戒者、其教非一、受十重者、其數極多、並不能錄之、五戒八戒數亦極多、仙宮、仙院、三公、雲客、如是等宅、皆是五戒八戒十重禁等、又和上存日始終形同沙彌一者、或後隨他

人受具戒者、並是上人門人、俱卽慕先師德、如道寂房、眞了房、智覺房、禪忍房等、卽其人也、或隨他人受具戒人、歸上人德作門人者、或元親厚助化儀者、如善法寺住持圓空上人、寶金剛院園覺上人等、卽其人也、或敎道扶持、或眞言受法者、如重禪大德等是也、照公專以眞言爲心所歸、自行化他、靈驗非一、灌頂弟子、其數非一、謂良忍房、聖圓房、現量房、相寂房、現眞房、圓光房、寂忍房、中觀房、隨道房、禪聖房、眞戒房、了覺房、道圓房、是本房、證道房、善法、明眞房、悟忍房、如是等也、轉經院法印權大僧都公信隨照公受灌頂、尼衆之中、東林寺住持日圓房并其弟子施野圓觀房及其同法等也、二位之局德大寺大相國禪門之亦隨上人受灌頂法、照公旣傳小野廣澤兩流之法、隨人所樂訓之授之、諸方檀那充滿南北、其數甚多、如三前略列、自餘之人、南都之間、東門院權僧正公圓、戒壇地藏每日備共、其事于今三代不絕、孝養院禪尼、其息已講報恩寺禪尼、施野禪尼、東大寺月蓮房、塔下、同寺內春月房、南水門、尊勝院乃登法眼、正法院播磨得業、曹同院武藏法眼、野田筑後公、并子息少輔公、太子三位公、桶井播磨公、墓田讚岐公、竹林院重舜法眼、中御門延宗房五師并其禪

尼、西金堂勤信房、顯乘房、如是等也、華洛之間、其數甚多、後嵯峨法皇、上、常葉井法皇、宣陽門女院、鷹司女院、近衛禪定殿下、北殿、西園寺大相國禪門、其息今出河大政大臣公相卿、京極左府公基、公相舍兄、德大寺大相國禪門、其息公考卿、四條大納言隆親卿、播磨局、善勝寺大納言隆顯卿、平大納言時繼卿、葉河亞相禪門、儀同三司良範卿、并舍弟藤井中將、大宮宮長者并其禪尼、小宰相局尼見智房、四條京極遠江法橋、下總前司行經、清水坂禪尼實阿、其弟禪門道意、山僧眞範僧都、并賢海僧都、定範僧都、竹禪尼、長井因幡守、并其後家及子息等、笠間攝取禪尼、今小路禪門、并其禪尼、田原禪尼、八幡大納言局、其息善法寺尙清法印、如是等僧俗男女諸大檀那並是受戒弟子、祈禱親好者也、其管領所總有九寺、戒壇院、竹林寺、善法寺、金山院、法隆之側上宮王院、家原寺、八幡大乘院、德大之內大悲院、東大寺內知足院是也、在生之間、管領提接隨其宜緣、各付門人、於元興寺勸建僧房、長日談義于今不絕、去正嘉二年戊午、法爾大德其時道號是光國房位在形同一住戒壇院、其年諸圓悟淨因上人令講戒疏、爾公列座聽聞講談、爾時、凝然年十有九、位在法同、蒙

衆所差給仕因公、安居將終、因公受疾、卽還洛陽、凝然受疾、不堪隨逐、于時爾公被衆僧差、隨從因公、上洛給仕、卽入門室、受戒學律、爲上足門人、住持無量壽院、爾公昔住戒壇、是舊好緣、仍照公上人、以知足院委付爾公、令與行之、圓覺上人雖非受戒弟子、化導興隆偏投、照公門下、仍以宮王院付之、令與八幡大乘院雖付海公、々々捨之不、住持焉、家原寺付圓珠大德、大悲院付眞敏大德、而檀那不用、寄付他人、金山院任檀那意、不付門人、于後鳴瀧上綱管領、卽檀那隆親卿之弟也、于後照公門人靈山信忍智生房住持彼寺、忍公本證玄上人親度授戒弟子、歸上人德、投作重戒門人、忍公付之門人、增口淨雲房口公付之增福寺眞照大德、而眞公聞檀那有異心、棄不、住持、戒壇院、竹林寺、善法寺、此三箇所、俱是照公門人管領住持、上人十歲落髮、其後登壇、以此爲僧臘次、々々極高四十餘廻、二十五受通門比丘戒、是三十一臘、三十一受別門戒、是二十七臘也、住持戒壇院二十七年、自建長三年辛亥、至建治三年丁丑也、照公一期五十七年、逢七代世主、爲兩帝之門師、順德天皇季曆、後堀

河天皇初蓮、承久三年辛巳誕生、天皇御治世十有二年、其年號承久第三、貞應二年、元仁一年、嘉祿二年、安貞二年、寬喜三年、貞永一年也、次第八十六主四條天皇御治世十年、天福一年癸巳、文曆一年、嘉禎三年、元年乙未、曆仁一年、延應一年、仁治三年元年庚子也、次第八十七主後嵯峨天皇御治世四年、先師奉授戒法并諸宗奧義、寬元四年、元年癸卯也、次第八十八主富小路天皇御治世十有三年、先師奉授戒法等、寶治二年、元年丁未、建長七年、元年己酉、康元一年、正嘉二年、元年丁巳、正元一年己未也、次第八十九主禪林寺法皇御治世十有五年、文應一年庚申、弘長三年、文永十一年、元年甲子也、次第九十代聖主御治世十三年、其中初是建治摠有三載、初年乙亥、二年丙子、三年丁丑、此年十月二十二日入滅、一期生涯五十七也、夫上人去世二十六年、今至第九十三代聖主正安四年壬寅、其間先師門人逝者極多、今存在者、圓空、如蓮、忍空、琳海、眞照、澄禪、禪智、凝然、正願、照遠、是本、圓晴、良照、見塔、澄道、祐海、禪爾等十餘輩也、先師一期所作所施、自行化他、無量無邊、今舉萬之一略讚行德、以贈孫弟、以報鴻恩、拜觀德顏一定在

寶樹之下、_二淦_三受慈訓_一必期_二德水之上_一而已、

于時正安四年壬寅三月六日於東大寺戒壇院記之遺弟沙門凝然春秋六十有三也予年三十八值先師之寂經二十六年今至此齡生涯不幾奄化在近願生安養早見先師耳

右圓照上人行狀三卷然公親蹟在東大寺戒壇院不許他人見之吾師連年懇求今歲幸獵借覽命余寫之以備僧史之纂也

貞享元歲次甲子孟夏十四日

師點謹識

東大寺圓照上人行狀下終

存覺上人一期記上

イナシ

〔常樂臺主老衲一期記上〕於御前口筆學、

九十一伏見院在位十年即位三年也、
正應三年庚寅六月四日生、

永仁三年慈俊生、

同五年八歲時、從五位下親綱、此時前伯耆守親顯爲
子、親顯卒後親業卿又爲子、仍出家之時實名親慧、
父親顯者親業卿子、顯盛朝臣之弟也、

九十二後伏見院即位、

正安元年己亥大谷南敷地被買副畢、彼地主者長樂寺

隆寬律師弟子慈信坊澄海能説覺生、舊迹也、彼眞弟禪日坊

良海相傳居住、雖無沽却之志、特可買得之由懇望

之間、以直法萬疋買得畢、根本覺信御房御寄進地

者、口五丈與十丈、是一戶主也、後買副地大敷以同、唯

善坊者本山戒也、仁和寺相應坊守助僧正弟子也、號大

納言阿闍梨弘雅、而落墮之後、與郡河和田嫁、成仁子

息等出來、無足窮困之間、大々上被喚上令同宿

給、北敷地闕少、被加南敷地者可宜之由、唯公於

門弟中連々被相語之間、夏頃與郡人々有上洛、
及沙汰而禪日坊欲書買券之時、沽却誰人之由可
書哉云々、充唯公可書之由申人少々有之、其時大
々上被仰云爲被廣上人御敷地者、沽却門弟中
之由被載之條、可叶覺信御房御素意歟、被充二
人者未來之牢籠、勿論爲衆中之官領、唯公居住不
可有子細之由、被仰之、其時唯公在座反顔色、
腹立無極、然如大々上仰充載門弟中畢、其後造
坊唯公居住、同行參御堂之後、必先參北殿參南
殿、大々上安慧也、後號覺異坊、◎異本無本註、
十二歲、正安冬頃、長井道信鹿嶋門徒、依黑谷傳卷九新草所
望在京、仍大上令草之給、其次道信申云、唯公稱
有禪念坊讓狀、充唯公身被掠賜院宣之由有
其間、隨被捧官領之所存歟、此事不可然、其故當
敷地爲建立上人御影堂、覺信比丘尼於門弟中可
官領之由、寄進狀顯然也、而構謀書被稱禪念坊
讓與狀之條、母子敵對未來之牢籠也、此事爭不被
申披哉云々、仍大々上入御左大辨宰相有房亭、是千
種先祖也、宗眞法印引導也、被申述上件子細之處、

彼卿云、任禪念讓狀一畢云々、被申云、讓狀事不實也、若令備進一者是謀書也、於門弟中、覺信寄進狀顯然也、若彼狀被御覽一歟之由、被仰之處、無其儀禪林寺長老規庵、依被申沙汰无左右一勅許、被出府案、可書進院宣之由、被仰下之間、仕案計也、重被申披者、定可歸正理一歟之由返答也、仍令歸坊一畢、

十三歲^{寛元}、爲^{シテ}三大々上御使節、大上爲勸進可申披之料足、御三下向東國、无幾則御歸洛、仍被申上院宣於當方了、其詞云、

親鸞上人影堂敷地事、依山僧濫妨唯善嘆申之間、雖被^レ下院宣、所詮任尼覺信置文、門弟等沙汰不可^レ有^ニ相違^一者、仍院宣所仰如件、

正安四年月日

參議有房卿判

親鸞上人門弟中付々、此充所事彼卿被申云、可進貴邊如何云々、爰大々上被仰云、當方唯公共以非可自專、覺信置文顯然之上者、可充門弟中云々、爰彼卿云、所被^レ申廉直之至、最可然、但彼上人門徒、一向在家下劣輩也、然者書門徒中一之條、不可^レ叶云々、其時被申云、以前所被^レ下唯善之院宣、以可^レ爲同前、強

彼門徒一向非爲下劣、況唯公又門徒之隨一也、然者彼時所被^レ載唯公與此門弟、更不可^レ有^ニ勝劣^一之由、詳被申之間、伏理任望被書下門弟等中一畢、十月日和州中河成身院^{更範住持寺}、同宿東北院圓月上人、慶海、

十四歲^{嘉元}、童躰之時、於發心院殿禪師覺意御房、每日有講筵、每度問者勤仕、慶海上人諷諫之、上伯法印實伊扶持之、又三位法印良寛^{于時已諱}、西南院同宿之時、連々入寺之間、彼仁論議等事被^レ加扶持了、彼良寛者慶海上人之祖師、兼賣律師之弟子也、其時號經實^{實イ}、而好顯宗一致興福寺交衆了、

十月十日出家、同十日於東大寺遂受戒了、更名興親、假名中納言、十一月廿八日、十八道加行至金剛傳授、於關東有專修念佛停廢事、其時唯公竊馳下、以巨多之料足被^レ申成安堵之御下知了、横曾禰門徒木針智信出三百貫、其外勸進所々、以數百貫被^レ申之間、无相違、其文章假名、於親鸞上人門流者、非諸國橫行之類、在家止住之士民等勤行之條、爲國无^レ費爲人无^レ煩、不可^レ混彼等之由、唯善爲彼遺迹^跡所^レ申非无^ニ其謂^一之間、所被^レ免許一如件、

嘉元元年月日加賀守三善判、此下知无_二兩所判形、號_一政所下_一云々、文章又非_二遺迹_一成敗、然爲_レ混_レ事於_二遺迹_一申_二成之_一歟、

十五歲_二嘉元_一四月之頃、爲_レ奉_レ拜_二父祖等_一令_二上洛_一

畢、幼少之時連々煩_二邪氣_一之處、心性院僧正經慧_{子時}

奉_レ渡_二慈悲大師御影_一時々被_レ致_二加持_一、仍平復之間成_二師弟之約_一可_二同宿_一之由往日契約、然_二中川東北院附

弟相續之儀、依_レ爲_二大切父祖之御計_一雖_レ令_二下向_一、往日

之舊好難_レ忘、山門之交衆猶本望之由、依_レ被_レ存_二申

子細之刻、可_レ任意之由面々被_レ仰之間、五月五日入_レ彼

法印之坊磯嶋引接坊_一了、其時改_二親慧_一、五月若有_レ憚

歟之由雖_レ有_二其沙汰_一、日吉小五月會日也、殊可_レ宣之

由、法印依_レ被_レ申_二遂_一其節、故爲_二引出物_一、弘法大師御

筆如意輪大咒被_レ與_レ之、自_レ其以來同宿之後、法華經一

部八卷一日傳_二受之_一、又十八道加行同傳_二受之_一、又依_二

懇望_一爲_二心性院吹舉_一入_二尊勝院僧正_一支智_{子時}了、八

月十五日夜先面謁不_レ及_二同宿_一、密宗之受法等追_二日勵

之_一、十一月於_二山門_一受戒之牒、清書大納言法印淨賢_{實イ}

師主青瀧院二品親王、慈道_{子時}法性寺座主無品親王、僧正參仕之上有_二

奉公之號_一間、如此僧正相計者也、仍_二當年十一月十

三日十樂院准后大僧正_支道御入滅、青瀧_{院イ}御相續、

十六歲_三、正月廿日同宿尊勝院光慧僧正_{子時}阿闍梨、兄

弟之約可_レ爲_二大切_一之由、頻相勸之間、二月六日令_二同

車_一向_二日野大納言_{子時}中亭_一、則成_二猶子之約_一了、於_二其

席_一謁_二右衛門權佐資冬_一、光慧_{舍兄}其後改_二光_一、其養父之名

字顯宗師匠之名字可_レ宜之由、僧正所_レ被_二相計_一也、今

日參_二仕十樂院_一、三月廿日被_レ補_二有職_一號_二中納言_一新阿闍梨_元

十七歲_二德治_一今年唯善房騷亂漸更發、霜月頃大大上

受_二重病_一御平臥最中、奉_レ乞_二御影堂鑑_一、嗽々之間、竊

逃出_レ令_レ移_二住衣服寺_一給了、

十八歲、同_二入_一四季講、夏季入_レ衆、秋季可_レ勤_二講師_一之

處、四月十二日大大上御入滅之間、依_二世論_一之難治_二不

勤_一之、仍令_二離坊_一了、四月十一日夜大大上被_レ仰_二云、

縱雖_レ不_レ入_二隱遁之門_一、可_レ爲_二當所管領_一之上者、故可_レ

有_二房號_一之由被_レ命、則被_レ授_二之尊覺_一云々、但依_二

爲_二中山宮御名_一、改_レ尊爲_二存覺_一、先考之御許也、大大

上御入滅之地者、二條朱雀衣服寺也、彼所者僧教佛宿

所也、是又先妣者、奉_レ宮_二仕大大上_一、初幡磨局、後太

夫、予兄弟誕生之後號_二御上_一了、四十六歲入滅、自_二十

月_一至_二十二月_一經_二廻樋口安養寺_一、于時長老阿_{阿イ}日上人

彰、爲法聞也、自玄義至定善義了寧了、十一月伊達那野邊了壽并子息了意于時九節兩人、上洛衣服寺、奉見世諦御无力奉同道大上一下向奥州、予御留主也、

十九歲、同延慶元四月御上洛已後、御居住法興院辻子、於是即御同宿、依御籠居三室戶、御離別已後翌年十二月他界云々、即生房之息女者、嫁中納言阿闍梨光助光圓卿、後伺候大原青蓮院一品親王、尊助成坊官、號中納言上座、子息中納言律師源伊者、山門堂僧也、上人御舍弟尋有僧都者、東塔善法院坊主也、依由緣源伊一相傳此坊了、舍弟中納言上座光昌、竹內僧正慈順坊人也、常壽院宮御治山之時、於上人之遺迹者、源伊卿可致官領之由出沙汰、仍執事兵衛督法印可尋後至僧正爲奉行、被成問狀之令旨、然被申披无別事、來善者即生坊下人也、仍子孫等源伊卿相傳、間奉讓大々上被買得云々、相副彼調度文書直目、大々上被讓與于予了、御門弟三方使者上洛、法興寺子同宿鹿嶋順性順慶父、使淨信、高田顯智定尊會、使善知、和田信寂使寂靜子息也、各申云、巨多之以料足、申改院宣、門弟多年致官領之處、唯公一

向押領被置山僧等於北殿之間、門弟等參入且有憚、又背本意、早被申披令安堵之樣可有沙汰云々、其時洛中雜訴等不及勅裁、偏可爲使廳沙汰之由、被定法之間、任法經其沙汰了、于時大理三條坊門宰相中將通顯、後至內大臣、刑部卿入道顯盛朝臣、于時宮內大輔、細々讀書之師範也、大理內大臣通重于時大、者、右少辨有正于時同前甲斐、无雙之文友知己也、仍叔姪父子所緣異他之間、被申下安堵之應裁了、如此當方雖令安堵、敵方之山徒不及退出、然使廳下部等非可致嗽義之間停滯、此人々申云、重又不申賜伏見于時中納言、被述子細之處、可伺試之由領狀、仍經七八箇月、後爲催促、隨身小酒肴渡御彼亭之時、彼卿云、先日經奏聞之處、使廳成敗之由被聞召之旨、仰下之條不可有子細之由、勅答也、仍畏悅无極、然者則拜領可爲何樣哉之由、被仰之間、於當座渡了、其詞云、親鸞上人影堂并敷地事、任正安院宣使廳成敗之由、被聞召者、院宣如此、仍執達如件、延慶元年月日判、表書親鸞上人門弟等中、俊光云々、如此致沙汰之處、唯公又廻異方便、申青蓮院令申成院宣、於門跡大旨妙香

院領_ニ法樂寺敷地_ニ事、任_ニ先規_ニ一圓可_レ有_ニ計御沙汰_ニ之由、院宣所_レ候也、仍言上如_レ件、俊光恐惶、首_イ謹言、延慶元年月日判奉、表書云、進上青蓮院法印御坊、俊光云々、此青蓮院者、慈源、後光明峰寺攝政家經、御息、僧正後御遁世號_ニ海律僧正御坊_ニ、御師、大衆院此院宣以後、自門跡被仰當方之樣、自_レ元於_ニ門跡_ニ可_レ有_ニ成敗之處、及_ニ院宣使廳之沙汰_ニ之條、存外之次第也、於_ニ本所_ニ可_レ究_ニ訴諫_ニ之由、被_レ仰之間、仰天无極、仍三方使節大略退屈、其上无足之在京無_レ詮之間、先歸國了、此沙汰不慮延引、九月之頃、老母經_ニ曆處々_ニ、器量聰敏、僧若有_ニ所_レ守衛事_ニ者可_レ舉之由被_レ示處、至_ニ毗沙門谷寺務證聞院僧正觀高坊_ニ、被_レ述_ニ上件子細_ニ間、大切之由反答、自_レ元爲_ニ日野中納言殿御猶子_ニ者、被_レ付_ニ彼卿狀_ニ、於_ニ寺務僧正_ニ者不_レ可_レ有_ニ子細之由、弟子俊覺_{于時少}相計之間、令_ニ悅喜_ニ、仍九月九日大上有_ニ御同道_ニ、被_レ仰_ニ家督卿之間、无_ニ左右_ニ領狀、翌日被_レ遣取_ニ之時、无_ニ相違_ニ被_レ書寫_ニ了、其狀云、光玄阿闍梨爲_ニ一門之上_ニ、猶子候、御同宿候者可_レ爲_ニ本望_ニ候、且内々可_レ申_ニ九條殿_ニ候、恐々謹言、九月十日俊光、表書中納言法印御坊、仍帶_ニ此狀_ニ向_ニ證聞院坊法印并僧都_ニ對面、無_ニ幾

程被_レ補_ニ尊勝供僧朝遍阿闍梨遁世闕_ニ也、然年内不_レ及_ニ三人寺移住_ニ、廿歲、延慶自_ニ正月_ニ居_ニ住證聞院_ニ、次第受法等遂_レ之了、去年三方使節、夏頃上洛、爲_レ執_ニ沙汰此事_ニ也、仍罷_ニ向門跡奉行伊與法眼泰任宿所_ニ、連々問答、所詮不_レ可_レ及_ニ訴諫_ニ、兩方參_ニ候門跡_ニ、參候以_ニ雜掌_ニ可_レ遂_ニ對決_ニ之由治定、仍大上自_ニ三室戸_ニ御出京、七月上旬之頃出對、青蓮院被_レ置_ニ兩方之正員於別所_ニ、以_ニ雜掌_ニ重々對決、不審之事等各被_ニ正員_ニ、兩方申狀悉被_ニ記置_ニ退散_ニ、此時不_レ及_ニ是非之評判_ニ、其後當方預_ニ本所御下知_ニ了、其詞大途者、任_ニ正安院宣_ニ、廳宣又重_ニ院宣_ニ領掌不_レ有_ニ子細_ニ之由、御下知也、如_レ此及_ニ嚴密之御沙汰_ニ間、唯公沒落之_ニ關東_ニ之時、奉_レ取_ニ御影御骨_ニ、奉_レ安_ニ置鎌倉常葉_ニ、田舍人々群_ニ集彼所_ニ云々、御留主職_ニ事_ニ可_レ爲_ニ何樣_ニ哉、如_レ此落居上者、可_レ移住_ニ歟如何之由、被_レ尋_ニ使節之處_ニ、吾等无_ニ左右_ニ難_ニ計申_ニ之間、以_ニ門徒一同之衆議_ニ、可_レ有_ニ沙汰_ニ之由返答、仍御景堂御留主性善也、

イナシ
〔常樂臺主老衲一期記上終〕

存覺上人一期記中

〔常樂臺主老衲一期記中〕於御前口筆畢、

廿一歲同三、正月大上御下向東國、其故者、御留主職

・事若不_レ可_レ叶、談_三有_二志_一・人_一別建立一所、可_レ終_二生

涯_一之由、內々御所存也、勸進帳草試哉之由、含_レ仰之

間、自_三毗沙門谷_一草進了、假令四五日間思案也、予艸

削之最初也、殊勝之由被_レ感仰了、此時、御影堂相續

之事、并若州伊賀國久多莊等事條條、悉被_レ載_二讓狀_一

賜_レ之了、秋頃御歸洛、安積鹿嶋殊共許_レ之間、御入洛

以後即御_三居住御影堂_一、但就_レ被_レ帶_二文書_一、連々如此

煩出來、悉可_レ被_レ出_二門弟中_一之由、面々令_レ申之間、雖

有_二御斟酌_一、不_レ被_レ出者御居住難_レ治之間、留主職相

承券契、覺信御坊御狀被_レ出了、其上條々懇望狀事等、

寂靜令_レ申之間、被_二書出了_一、十月頃予辭_二退證聞院供

僧_一離了、所勞之上、當所安堵之初、爲_二相續付第_一之上

者、可_二同宿_一之由、大上被_レ仰之間、應_二嚴命_一之故也、

雖_レ令_二離寺_一、與_二彼僧正并弟子俊覺僧正_一、生涯和睦无_二

相違_一、

廿二歲、_{應長元}五月之頃、大上御_三下向越前國_一、則奉_二扈

從_一了、二十餘日御居住、大町如道許_レ奉_レ傳_二受教行信

證_一候間、依_二御與奪_一予大略授_レ之了、閏六月二十三日

慈俊法印_{十七歲、童名光珠}、向_二毗沙門谷證法印_{九條禪閣}坊_一可_二

引導_一由、頻被_レ仰_二間_一、予秘計_レ之、而先妣廿五日逝去、

仍告示之間令_二歸坊_一、冬頃歸參、遂出家了、實名光眞、

假名右衛督也、改_二名度々_一、所詮光眞光楯光尋、慈俊

也、秋頃、大上御_三下向勢州_一、十月與_二今出川上薦_一大上

御同宿、同下旬被_レ離別_一被_レ迎_二御領殿_一、_{從三位爲信卿女、法名相知、十九}

歲、廿三歲_{正和元}、青蓮院宮門跡三方_{良助親王、尊圓親王、御相}

論、大上最可_レ宜之由、依_レ被_レ仰、訴諫事勞功異_二他_一、此

時改_二光玄_一爲_二光顯_一、夏頃爲_二法智發起_一、被_レ打_二額_一、寺

號_二專修寺_一、同人計_二申之_一、勘解由小路二位入道經尹卿

_{法名家}書_レ之、予申_二錦小路僧正_一詔_レ之、秋頃山門事書

到來、其旨趣、一向專修者往古所_二停廢_一也、而今專修

之號不_レ可_レ然、早可_二破却_一云々、座主裏築地僧正什

也、附弟慈什僧正者、鷹司禪尼_{冬雅卿伯母}、曾孫之間、以_二彼

緣_一令_レ談、座主仍无爲也、然猶定不_レ休歟、枉可_レ改_二寺

號_一、然者先可_レ撤_二額_一之由、座主并玄智僧正相計之間、

被_レ撤_二其額_一、後日法智申_二下吾等_一、用_二彼寺號_一打也、云

云、此折節仙墓隨光玄、

廿四歲、正安春頃大上御下向尾州、奉扈從了、廿餘

日御逗留、大上連々御所勞之間、當寺官領事自御存

日可被讓與之由、自秋頃連々雖被仰下、奉

固辭之處、於身者可退、當寺於官領事、不隨命

者、以聖迹可掛牛馬之蹄歟、可在意之由被仰

之間、此上固辭无據歟之間、奉承諾、仍十二月廿五

日請取之、其時絹一疋用途百疋賜之、年內無可上

洛之人、越年已下令周章之處、法智當年燈明遲引、

仍廿八日、到來之間、叶冥慮之由御感、以之如形

致越年等之沙汰了、御渡世之料足、上下四人衣

食被定員數了、

廿六歲、正和春頃、大上令供住窪坊給了、

廿七歲、同五十二月奈有迎之、大上御計也、

廿八歲、文保八月下旬之頃、大上御夫婦子奈有、密々

參詣天王寺住吉等、今年御領殿御離別也、

廿九歲、同二二月之頃被迎善照坊、房于時十九

卅歲、元應二月廿八日光安誕生、圓興寺長五月之頃、大上

御下向參州、奉伴了、自參州令越信州給、入

御飯田寂圓許、御歸洛之時、予癰痛橫吹也、嶮路乍

乘馬打立了、善教奉扈從之後拾師匠、寂圓直參

寂圓預御勘氣了、

卅一歲、同三佛光寺空性初參、俗鉢綱六波羅之南方越後

守維真家人比留左衛門太郎維廣之中間也、初參之時

申云、於關東承此御流念佛知識者、甘繩丁圓是、

阿佐布門人也、而雖掛門徒名字、法門已下御門流事

更不存知、適々令在洛之間、所參詣也、每事可

預御諷諫云々、其時大上御座向窪、依申入此由、

雖有御對面、於必然之扶持者、一向可爲予沙

汰之由、被仰附之上、直此旨被仰含彼男之間、

其後連々入來、依所望、數十帖之聖教或書寫入其

功了、九月之頃光童九生、幼字栢庭也、

卅三歲、元亨五月最勝講被行、先皇御治天之始也、仍

殊有清撰之御沙汰、錦小路僧正始被召證義、兼講

師、仍就初座表白事爲相續被招引之間、罷向

彼坊、終夜草之、翌日光勝法印令同車歸坊了、此

兩事口舌事相續遂預御勘氣之間、六月廿五日令退

出、寄宿牛王子辻子、七月廿日出京著江州瓜生津、

是年於奥州越年、是東國同行等和睦口入之爲也、

來秋必可申云々、

卅四歲、同三、三月晦日、自_三奧州_三著_三江州_三茨生津、五月趣_三歸洛_三、丁_三原所_三建之寺_三山科也、奧州人々上洛以_三連署_三被_三申、長井明源道信_三鹿嶋順慶成田信性以下也、此後數年信海門流不_レ及_三參詣_三、近年上洛、此後對_三所被_三來之同行達_三如_三此有_三連署_三爲_三後證_三被_三載_三署哉之由、令_三申之間、四十餘輩上足加判、然不_レ及_三進覽_三、世上擾亂之時燒失了、无念也、

卅五歲、_正中元、七月二十四日愛光誕生、_{在所佛光寺也、}八月_{中日イ}時正

山科與正寺_{寺號大上被_レ付寺、空性建立寺也イ}、予致_三供養_三了、裝束鈍色甲

袈裟也、

卅六歲、同二、八月晦日光德丸誕生、

卅七歲、_{嘉曆元、}

卅八歲、同二、秋頃取_三立住坊_三爲_三空性沙汰_三、此時今出

川上薦被_レ致_三隨身_三助成爲_レ取_三訪菩提_三由被_レ示也、

四十一歲、_{元德二、}二月時正中日供_三養佛光寺_三、_{本寺興正寺也、}◎六字據_三異

本_一一兩年前自_三山科_三移_三之、予改_三佛光寺_三、導師子、聖道出仕儀式也、夏頃武

藏守貞將辭_三官領_三、

四十二歲、_{元弘元、}正月廿二日進_三發關東_三、_{汁谷矣後_レ以イ窮困之故也、}

・著_三瓜生津_三、奈有光御前光德令_三同道_三預_三置彼所_三了、

柏庭_三者無住和尙同宿之處、塔主辭_三仁和寺_三龍居之刻、

住_三東福寺_三普門院_三二月十一日著_三甘繩願念_三海誓宿所_三三

月八日於_三江州_三瑠璃光女生、十二月頃爲_三倉柄沙汰_三、

留_三置江州_三、大海日著_三倉柄宿所_三、傳聞今月大上御_三下

向東國、爲_三如信上人卅三年御忌_三之間、爲_レ被_レ詣_三彼

遺跡_三云々、其御_三主之時慈法被_レ嫁_三按_三云々、_{于十三歲、}

九十六光嚴院即位、

四十三歲、_{正慶元、}今春付_三眞俗_三有_三御用_三、大上御_三經廻關

東_三之由傳_三聞之_三、於_三大佛陸奧守貞有亭_三有_三禪尼_三、

長樂寺_三是彼息女介戚也、父者花山院師_三藤卿也、仁和寺

妙光寺塔主無住禪師下_三向關東_三之間、就_三予申承_三彼

禪尼與_三塔主_三親昵之間、依_三其引導_三光女爲_三長樂寺禪

尼養子_三同宿、

四十四歲、同二、關東沒落之後、予黨住_三大倉谷_三是靜照

法印下_三向關東_三之間、依_三申通_三也、於_三光德丸者預_三彼

法印、予兩人京上之時、念性一人召具了、是空性同朋

也、後日聞_三之、念性預_三置阿護於沼戶_三上洛、長途痢病

間、於_三遠江國麻田_三佛光寺_三之下、又定專預_三置奈有於彼所_三、

一身上洛、六月九日立_三鎌倉_三至_三四十九院_三、四十餘日

也、自^瓜生津^書佛光寺、愛光女去年十一月十五日
他界之由始聞^之、九歲、霜月之頃刑部禪門^{京大夫、時有}與

予^子令^同道、向^{萬里}小路一品宣房、亭、光德丸爲^中

恩賞、稱^右少辨有正、子息有^{建立}之子細、帶^二條大

閣^{南方前}、御書^了、

四十五歲、^{建武}佛光寺本尊開眼、夜陰內^々儀也、春頃

光女上洛、同^{二月也}七日於^彼寺、光威丸生、

四十六歲、同^二光德丸上洛、二月時正光女自切^髮禪尼^永

四十七歲、同^三夏頃大上御^二下向溝杭邊^{云々}、行^二

幸坂本^二時、大谷殿上下相^具數十人、御^歸洛^瓜生津^一

御越年云々、此御留主大谷殿堂御留主、御影堂^{井御等}

回祿了、光德丸住^鹽小路烏丸與國寺、

四十八歲、同^四春頃大上御歸洛、御^{居住}西山^{久遠上}

前^{十六}源中納言同宿之間、大上等御^{同宿}彼亭^了、

四十九歲、^{曆應}二月於^{備後國府}守護前、與^{法華宗}對

決了、御門弟依^望申、忌^其憚^改名字^號一^悟一^出

對了、法華宗屈、仍當方彌繁昌、其次作^決智抄^了、^假

名、報恩記、至道抄、^{各二}帖、選擇註解抄、五帖、等也、顯名抄

者、明光於^{京都}所望之間、於^彼境^一遣了、閏七月

歸京、九月依^愚咄坊口入^預大上御免、同十八日相^二

伴^愚咄坊^{參了}、其時御^{在京}八條源中納言雅康卿亭^一

也、可^同宿^之由被^仰之間、參住也、十月之頃御堂歸

座之事、唯善坊遺跡令^承諾^之由、依^有其說、高田

專空等爲^御迎^下向彼境、此上者爭不^動座^之由被^仰

於^{尾州}參會之間、御上洛、予又同前、御下向候時

者、先著^瓜生津、彼坊主奉^伴大和性空同道、

十一月日爲^專空沙汰^買得今御堂^{本願寺、廿六貫}、建立了、

其時和田寂靜令^上洛、同致^其沙汰^了、

五十歲、同^三二月之頃、光德丸入^室新熊野瀧尻智蓮光

院教空、四月十二日、大々上三十三廻忌辰也、仍於^二

條亭^被行^法事讚^无足之間名僧等无^之、慈法光德

十五歲、共行、予病惱之間不^及出現、其後奈有病惱^{亭主}

中納言、令^恐怖^一歟之由、推量之間、移^住大谷、其時未

及^二坊舍造立之沙汰^仍寄^宿御堂北局、秋頃大上御^二

入寺南局、慈法居^住後戶挺^一也、

五十二歲、同^四正月日光威丸自^{粟津}上洛、八月二十

八日下^向溫泉、爲^平療治^一也、凡九月三日歸京住^大

谷、

五十三歲、康永元爲湯治宿五條坊門室町旅所、其最中御義絕之由被仰之間、不_レ及歸參大谷宿鹽小路、油小路顯性宿所越年也、

五十四歲、同、五月日光威丸向毗沙門室住證門院、九月之頃依隨心院前大僧正坊命、參住彼門跡、

其時被遣俊覺僧正御書云、光玄法師即イ眞弟小童彼同宿之由承及候、召給而遂出家、羯磨沙彌可_レ令隨之

由候也、僧正賜此御書無左右領狀、其時予居住和州、仍不及談合、其子細且談遣中納言公房宋、其

時勘解油小路大納言兼綱繩イ卿、于時藏人學士成猶子之約、仍綱字

彼卿字、嚴者門主經嚴之嚴字也、彼卿猶子之儀、俊覺

僧正媒介也、十月十七日出家、戒師門主僧正坊也、十

月廿日付弟禪師御坊通嚴南都於東大寺受戒之時、

爲羯磨沙彌同登壇受戒、取度緣了、

五十五歲、同、二月日下向和州居住、十二月頃上洛

居住大宮寺上洛之後不_レ幾、鹿嶋順慶、長井道空、飯

田頓妙等上洛、

五十七歲、貞和二六月廿七日竊退六條寄宿綾小路町、

道性宿所、其時目所勞以之外間、數日休息、而柏木願西等種

種依有申旨、七月廿五日歸住、其後和談事面々雖

申_レ之、遂不_レ許容、九月之頃濟々令上洛、和睦之事頻雖申_レ之不_レ許、同十一月御報恩別時之時、又重願西等尚雖申_レ之、不忠之子細再住宣說之時、伏_レ理承諾、則面々下國之刻、於磯嶋鄉修別時之由、教願令_レ申之間、悉以下向、

五十八歲、貞和三二月上旬之頃、綱嚴退出隨心院、可_レ歸

參之山雖被仰固辭申、于今同宿和州攝州之輩、

至_レ栢木來、當方之族今年治定了、錦織寺慈空坊於當

宗有學問之懇志之由、令_レ示之間、遣舉於安養寺、

爲_レ彼引導寄宿圓福寺、十二月之頃皆悉下向和州、

越年了、

五十九歲、同、夏頃以慈空坊口入、寶塔院數イ齡憲律師

誂信貴鎮守講式之間、草遣了、

九十八崇光院即位

六十歲、同、五月二十一日、善照坊御往生、御悲欲之最

中、御免之事種々雖申_レ之不_レ叶、同頃奉訪善照御

坊、慈公寂公上洛、此由申入之處、慈公者大官方緣者

也、不_レ可_レ叶、寂公者參入不_レ可有_レ子細云々、仍慈

公失_レ面目空下向、寂公者入見參了、九月七日自和州上洛著六條大宮、大谷御免之事爲秘計也、仍

相_二大理_{時光、于時}之間、晦日彼卿奉_二召請_一申_二此事_一之處、難治之由御返答、無念之旨十月二日示_レ之、又十月之頃遣_二學圓_三三河和田道場門徒口入之事談_レ之、領狀可_レ伺_二便宜_一云々、同十一日向_二藏人佐西大路亭_一、終日談_二此事_一、猶便宜可_レ被_レ得意之由懇_二望_一之、

存覺上人一期記下

〔常樂臺主老衲一期記下〕於御前口筆畢_{（四）}六十一歲_{元、觀應}五月之頃書_二寫一行_一於教願爲_二使者_一遣_二西大路、大谷御義絕事猶可_レ有_二口入_一之由、申_二驚之_一、可_レ申試_二之由領狀、仍教願自_二六條大宮_一連日催促往反、今月二日先親亞相_{資名}、十三廻忌、同十日亡祖亞相俊光、忌日也、旁被_レ休_二人憂_一者、可_レ爲_二臣善之潤色_一歟、大谷又故禪尼_{善照坊}、一廻也、當此時_二赦免可_レ爲_二慈悲之最詮_一之由、口入最被_レ得_二便宜_一候由、就_下盡詞、及_二種々述懷_一有_二慇懃之最負_一、仍於_二本人_一者強_二无_二子細_一、是天性之理歟然、_而口不_レ絕候間、无_二左右_一不_レ及_二許諾_一、送_二日月_一、將亦舊冬示遣之趣、和田不_二忘却_一差_二專使_一勤_二連署_一申_レ之、三人加署送_レ之、真俗如_レ此扶助之上、性圓禪尼内々隨逐和談之間、機感純熟時節到來、遂御許諾、七月五日被_レ出_二免許御狀_一、藏人佐廷尉以_二自筆_一書_二銘_一、喜悅無_レ極之由送_二予於狀_一、六日教順又爲_二催促_一參向之時與_レ之、仍請_二取之_一、不_レ廻時刻_一、即下_二攝州磯嶋_一、其夜一宿、同七日自_二彼所_一發_二使者_一

大和一相觸之、同日自身者帶彼狀、午刻許來着豐嶋、披閱之處喜悅千廻、乃至八日上洛、予奈有綱嚴僧都酉刻大官着、同九日早旦先向西大路、且賀入服、且相伴可向大谷之由示之、同道領狀之間、所乘之輿返大宮、奈有駕之先被向僧都、同道爲一獻二百正用意之、兩國同朋各貪笑歡呼之餘參集此所了、

同十日樋口大宮法事讚之時、予并僧都參向慈俊法印、俊玄律師供奉、十一日參入奉伴向彼宿所詠吟、人々亭主先人信光朝臣、子慈法光養、又明日恒例御報恩行法也、最可構法筵之由、嚴命之間、件日參行、九月十四日故光長丸往事等被仰之、御詠等被取出之間、和之、一獻後歸參、以下十一月恒例、七箇日御報恩參籠、二十八日結願了、後晚歸大宮、而世上動亂興盛之間、自河州大枝妙光以下參洛、招引刻申此子細之處、如此之時一所居住、最可爲本意、然自他依不階互相扶背本意了、然各全身命者不可過之、但老齡於今者不可期後會、今生面會限今歟之由、被仰之、則御落淚千行、愚朦又不堪離憂、頗濕雙袖、翌年御入滅之後思出此事、誠

以最後、最可悲之、廿九日則下國、先着妙性宿所、暫逗留後移妙光宿所了、

六十二歲同於妙光宿所越年、都鄙動亂雖驚耳、鄉內近邊輩參集、時々念佛不懈、連々法談無廢、正月八日尊老御禮法心持下之、新拜祝言、殊含喜悅、但天下騷動、河西北不靜、仍御坊中窮困至極之由被仰之、寮申之間、於表志之條者雖無其力、動靜之式朝夕不重之間、欲申愚報之處、路次塞之間、行人往反不叶之由、依令謳歌、送日數、然愁吟之餘、只任天運、憑冥助可歸洛之由、勸法心之刻、同十三日歸京法心、其牀帷一之下着紙衣、予偷廻思按入鵝眼十疋、縫衣中、予自以續飯一々押付之、進入之、被召寄一提一旦可被慰御心勞之由申也、又二十一日爲光長丸一廻之間、追修之時如此爲加一燈、五疋送母堂、同押也、其外爲袈裟絹粥、摩牙最少分送尼衆、而於山崎軍勢奪小米、又雖剝所着之帷、於紙衣者不掛手存由也、仍无爲京着、雖然京都路次猶不輒之間、法心於六條大宮暫休云々、移日之後十七日持參之處、被仰云、此芳志最以難有、即被召御坊人被述

事由、被_レ省_二滴_一云々、而自_二其晚頭_一有_二御違例之氣_一、後日聞_レ之、彼一_滴爲_二最後之御受用_一云々、同十九日夕自_二大谷_一專使、實壽丸_下着、照心坊送_レ狀、其趣大上自_一昨_二日_一御不豫、白地御風氣歟之由、雖_二思給_一爲_二御老躰_一之間、爲_二用意告之旨也_一、仍翌日廿日上洛、當時將軍方_二陣山崎、錦小路禪門_一以_二八幡爲_一城之間、上下往反之路難義、難_二輒通_一之由、面々雖_レ令_レ申、成_下凌_二大千火之思_一、忘_二身命_一進發、經_二河內地_一揚_レ鞭、近日餘寒以之外之上、今朝烈風拂_レ袖頗難_レ向_レ面、馬蹄渡_レ河之處、混尾之滴卽結_二氷之式也_一、人馬共以疲極、上下雖_レ及_二退屈_一、處々休_二馬足_一時々續_二入息_一、西斜希有著_二六條大宮_一、不_レ及_二休息_一、卽馳參之處、去夕御往生云云、緯之楚忽頗以迷惑、唯恨不_レ拜_二平日恩顏_一、不_レ逢_二最後刹那_一、廿三日葬禮、二十四日收骨、予慈俊法印光養丸各供奉、廿五月初七日愚_二御修善_一之後廿六日又下_二大枝_一、二月廿二日令_レ當_二五七日_一給之間、自_二廿一日_一上洛、法事讀爲_二予沙汰_一勤修了、予奈有已下也、四月七日仰_二圓寂_一、圖_二父祖兩所之御影_一、各作_レ讀、六月二十三日香園院姬宮御父_一、_{文蓋非}向_二淨華院_一謁長老、是爲_二望_一綱嚴僧都住寺聞法也、卽領狀、仍七月七日本

人向_二彼寺_一向顏、其後列_二門弟_一得_二指授_一了、七月七日江州錦織寺主席慈空入滅、同十三日奈有爲_二訪先被_一下向、同十五日歸洛、八月十八日予下_二向證禪尼元_一、自居住、愚咄大德廿日來臨同宿、此時且_{爲_二妄言之_一}爲_二自身之安立_一、此遺跡一向致_二官領_一可_レ繼_二法命_一之由申、兩人命_レ之、爰予餘命不可_レ有幾、綱嚴僧都相續可_レ宜之由、就_レ示_レ之有_二慰勸之約語_一、其儀今無_二相違_一、宿緣之所_レ追歟、參_二籠大谷_一逢_二七箇日_一御報恩、自_二彼報恩結願_一、上牀病臥、十二月十二日早世、又廿日下_二向彼境_一、六十三歲、_{文和}正月十八日上洛、逢_二一廻御佛事_一之後、又下國、十月之頃、性覺明光等於_二御廟參詣之所_一申云、大宮經廻遶遠不_二甘心_一、枉只可_レ住_二大谷四壁內_一云云、雖_レ固辭、面々異見之間約諾了、十一月大谷恒例御報恩念佛、予又參籠、十二月朔日又下_二向木部_一了、_{九十九後光嚴院即位}六十四歲、同_二年_一始勤行等如_レ例、正月十七日上洛、逢_二第三廻御追修_一、廿三日自_二六條_一下_二向和州_一、奈有同道、木部開山大德第三廻之間招引、六月廿七日柳原前大納言資明卿逝去、今小路地之事、自_二孟夏之頃_一問答、大略承諾之後、爲_二此事治定_一、八月十八日上洛、買_二得之_一、於_二大宮半作堂_一、堂沾却之車渡_二樋口油小路道場_一

燒跡云々、房并北坊等渡之造之、運送車等大略出雲路乘專助成也、引地塗壁以下事、教願奉行之間、桂里輩盡力致勤厚了、十一月廿七日御報恩參籠如前々、

六十五歲、同三、於新居迎春、每事祝着、朔參御廟、二日房主召請、

六十六歲、同四、十一月御報恩中參籠又如前々、

六十七歲、延文元正月朔日詣御廟、十四日經嚴阿闍梨

任權律師、三月十八日宮參仕之事、御本意之由御返事、八月十七日光誦丸生、十二月廿五日光助任權律師、

六十八歲、同三、三月七日空還上洛、源海一期行狀可記、

講式由、致望之間、在京四五日之間元草書畢、清書綱嚴僧都也、自四月十四日栢庭違例、十六日招引當臺、

同二十二日亥刻圓寂、六月九日光助律師來入峰、第二度

下向之次也、同廿二日歸國、大谷念佛不參籠往反、

六十九歲、同三、大谷念佛不參籠往反、十二月十八日

綱嚴、任權少僧都

七十歲、同四、正月十四日光助轉任權少僧都、青蓮院

大德四月十九日御入滅、五十二十日夜御葬、予綱嚴共

雖隨御與御後、不入荒垣內、廿二日御收骨、老骨退屈之間綱嚴參了、霜月御報恩、今年又復舊參籠、七十一歲、同五、六月廿日慈俊法印入滅、百箇日以後眞影讚俊玄律師令調之間、艸書了、門主被染御筆云々、

七十二歲、同六、元日參廟、近年雖用夜陰之義、新房主律師頻申之間、朝喰以後兩人參詣、其次祝着如

例、二日兩人招引、是又如前々、四月頃空還上洛之

次、予先年所草之謝德講式、聊有存分旨、條々可書

改之旨趣令申之間、楚忽加添削了、前後兩本依

詩可用云、清書俊玄律師染筆也、

八十二歲、應安四十二月御三下向錦織寺、

八十三歲、同五、六月御影奉圖之、良圓法師筆也、

八十四歲、同六、二月廿八日御往生、

右此一期記者、存覺上人御在世之時、綱嚴僧都於御

前一口筆之旨、被載端書畢、但七十三歲以後者綱

嚴所書加給歟、爰去大永之頃、予參洛、砌謁兼忠法

師、聞此旨、則以彼一卷與予、給暫時頃刻之

間、取要抄出之、早奉返貴邊、然所享祿晚年依世

上擾亂、常樂寺炎上之後、彼上人御前作文眞筆等若

干篋、令燒失云々、然舊冬予參會之刻、兼智大僧都示此趣、有嚴命、不遑固辭、殊彼草書隨身之條、應御懇望之旨、疎墨之草本奉清書所也、辭以楚忽、而不審事等雖有之、既正本紛失之上者、重不及校合、抑彼御在世、園城寺御經曆、諸徒之談法東關御化行、萬民之懇志可爲肝要也、文段所除是多歟、然今在任現行本書寫之、唯恨此一冊悉不終其書功、因茲千萬言中纔呈其一二矣、蓋聞彼中庸遇秦皇焚書、只殘十餘章、以行于世、是併達子思之本心者乎、況明師之金言豈廢一句乎、仍不顧掛鈔、忘卑跡、染愚筆、訖芳秘、染窻不可有外見而已、

于時天文廿年陸月五日記之、

青蓮院三方御相論公事訴諫之事於園城寺評論事於青蓮院御讓狀草書之事慈俊講式艸書之事寫本有之荒木道空上野岡野上方荒木木下覺一乘院前門主意九條禪閣忌堯海西塔一方成慶下野法印始豎者成澄

〔常樂臺主老衲一期記下終〕

黃檗開山普照國師年譜卷上

大明神宗皇帝萬曆二十年壬辰

師福州福清東林氏子、父德龍、母龔氏、有賢行、喜施濟、兄弟三人、師其季也、生於是冬十一月初四日戌時、按師誕日上堂云、天地爲爐、一火鑄成、生鐵漢、須彌作壽、孤光返照、本來人、雖言離說超羣象、無慮無思、絕點塵、不是渠儂賣、淨潔都緣默契、自天真、諸人會麼、敲空作響、要覓知音、指葉爲金、惟憐赤子、全副熱腸、懸窗半開、冷眼對晴陰、這回揭盡迷雲夢、獨露寒潭一片心、這裏有個受用處、有個敗闕處、生鐵漢子、最初不合打、入紅爐、惹得通身紅爛、又向寒潭出身、凍得七花八裂、雖然冷暖、自相爭奈、寒溫之氣未除、那堪受人慶讚、慶讚且置、作麼生是開爐一句、烈燄光中開、隻眼、舉頭誰是熱心人、又按參藩沁齋陳公祝師壽文、略曰、黃檗隱大師、其生也與予同年、其長也與予同、艱苦、及其壯也、予則浮沈宦海之波、而師獨佩少林之印、不振宗風、

普利羣品、宜其慧命法身超乎天地而長存者也、又按東閣大學士魯菴劉公祝文、曰、萬曆壬辰冬、一陽初動、二氣始交、見天地之心、位貞元之會、靈根美而妙用涌、是謂隱大師初度之辰云、

二十一年癸巳

二十二年甲午

二十三年乙未

二十四年丙申

二十五年丁酉

師六歲、父客於楚、未歸、雖家業淡素、與兄同受甘苦、常自怡然、

二十六年戊戌

二十七年己亥

二十八年庚子

師九歲、初就學順朱、作對具有夙根、與諸兄不同、

二十九年辛丑

師十歲、按行實云、是年冬廢學、漸習耕樵爲業、常謂左右曰、吾歎少失學、汝等有志於道者、宜早勉勵、無貽後悔、

三十年壬寅

三十一年癸卯

三十二年甲辰

三十三年乙巳

三十四年丙午

三十五年丁未

師十六歲、嘗靜夜與二三侶坐臥松下、仰觀天河、運轉星月流輝、誰繫誰主、躔度不忒、心竊異之、且謂、此理非仙佛難明、遂起慕佛之念、自是無_レ心_二於世_一、志恒超然、物表云、

三十六年戊申

三十七年己酉

師十八歲、按行實、三五年來日視世味、淡然、無_レ心_二生計_一、故所爲頗多顛蹶、時徑江有念佛會、師預焉、每逢僧必咨出世之要、

三十八年庚戌

三十九年辛亥

師二十歲、母與長兄欲爲定嫂、師云、男兒生_レ世、親恩爲_レ重、今父遠遊未歸、不_レ知_二處所_一、豈人子議_レ娶時耶、願面父後娶之、未_レ晚、母不_レ奪_二其

志_二許_一之、

四十年壬子

師二十一歲、志切尋父、謀_二於母_一、將嫂金爲路費、直抵豫章、至金陵、值母舅龔泉字勸諭還家、師不_レ聽、復往寧波舟山、見族叔、叔亦勸歸、師以未_レ得_二面父弗_一從、

四十一年癸丑

師二十二歲、有方先生者善畫、浙中士紳多重之、師有舊與同遊一載、凡紹興各縣名勝俱歷盡焉、亦爲尋父之由、

四十二年甲寅

師二十三歲、是春附進香舟、至南海普陀山、朝禮觀音、意謂、菩薩神力必能陰助尋父之願、及到山忽見佛境殊勝大非人世一時凡念冰釋、遂發心投潮音洞主、爲道人、領茶頭執事、日供萬衆、不_二以爲勞_一、洞主嘆曰、此佛子真菩薩之使也、其信心不怠懈、如此、按師晚錄云、予昔因朝禮普陀大士、遂發心出家、今五十餘年矣、近聞遭紅夷之厄、不_レ能無感_二於哀焉_一、

四十三年乙卯

師二十四歲、寓普陀、竊念此處乃菩薩在人福報之所、苟非精修實學者、曷足爲吾師、乃往茶山、尋祇園老宿、過飢飽嶺、忽值老僧、龐眉鶴髮、懷中取糗與師、師嘗一飽、擡頭禮謝、老僧隱矣、疑爲神僧、是春三月附香船歸閩省、母喜從天降、卽勸母事佛持齋、日常念佛爲課、
四十四年丙辰

師二十五歲、欲再往普陀、出家、母不許謂、吾年風燭俟百歲後、出家未晚、遂聽母言、居家清修、第見生命必贖放之、不逾年家資殆盡、

四十五年丁巳

師二十六歲、志決出家、別母徑往普陀路、至福寧州、被盜行囊、路費一空、不得已復回家、母云、早聽吾言不至是也、仍畊樵供母、

四十六年戊午

師二十七歲、常慮出家緣弗就、一日登石竹山、九仙觀祈夢、々遊深山、山岩崖中有三僧坐盤石上、方食西瓜、剖而爲四、見師來忻然以一分與之、師食畢、遂寤、竊自喜曰、四沙門果吾預其一、吾事濟矣、

四十七年己未

師二十八歲、是年母終、請黃檗大德禮懺修薦、會鑑源壽公於印林寺、公知師有出家南海之志、因委曲引諭曰、人之學道何必擇地、因緣在處卽是道場、師曰、恐檗山近俗、嫌疑未便、公曰、人俗心不俗可耳、師然之、

光宗皇帝泰昌元年庚申

師二十九歲、按皇明通紀、是年七月神宗登遐、八月初一光宗卽位、故以萬曆四十八年爲泰昌元年、是春二月十九日、師詣黃檗禮紫鑑源壽公剃度、或者嘲曰、東林亦有佛耶、師應之曰、嘗聞佛性徧週沙界、豈獨外東林、昔廬山東林有慧遠焉、知今日東林無遠公乎、聞者嘆賞、師遂默願云、此處落髮、若不下精修梵行、興崇法門、生陷泥犁、自是常持疏走民間募貲、冬聞道亭法師講楞嚴經於海口瑞峯寺、特往聽之、初不解其義、至第四卷、略有領會云、

熹宗皇帝天啓元年辛酉

師三十歲、按行實云、時黃檗道場荒圯、師志在興修、乃領疏之燕京募化、至杭州聞京都有

警、暫往紹興雲門、參湛然和尚、聽涅槃經、是時始聞本師費和尚之名、心竊慕之、六月會時、仁師京回、談及京中多故、緣事不就、因問仁師、依經解義、三世佛冤離經一字、如同魔說、如何消釋、仁云、三十年後向汝道、師意憤然、以爲欺人太甚、這兩句經有其難會、而待三十年耶、遂不回山、徧參諸方、時自激勵、凡一德可稱者必咨依之、

二年壬戌

師三十一歲、是春至嘉興興善寺、聽法華經、期滿關主玄微留爲檀越、誦金光明經、々畢告行、主云、經資未至、且伺幾日、師云、衲僧家要行、便行、豈爲些利所繫、遂行、主嘆服、

三年癸亥

師三十二歲、至峽石山碧雲寺、聽楞嚴經、見講席涵濫、乃與慈然禪友論及經中意旨、實乃徑路示人要行即到家、否則聽到驢年、無益、正如說食不療飢也、聞天台通玄有密雲和尚、乃臨濟下尊宿、當往參謁、因緣相契、即依之以了生死大事、不然向山頂修行去、慈然之、

四年甲子

師三十三歲、按行實云、是春同慈然禪友往海鹽、次張王廟、上秦住山、過積善菴、菴主景西問、路中還曾見有好人否、師云、試指個不好的出來看、西擬議、師云、不見、道仁者見之謂之仁、西默然、又問七處徵心、畢竟心在甚麼處、師云、請坐將茶來、下文還長付在來日、西又默然、因留過夏、五月初正欲理策、上天台、忽聞密老和尚來、應金粟、喜不自勝、私謂符我所願、遂造金粟、參見、便問學人初入禪門、未知向甚麼處做工夫、求和尚開示、密云、我這裏無工夫可做、要行便行、要住便住、要臥便臥、師云、蚊子多臥不得、時如何、密云、一巴掌、師禮退、置疑不決、七晝夜、經行坐臥無有間斷、第七日下午、密和尚在康祖堂前過、師擡頭一見有省、便禮拜云、某甲會得和尚掌中意、密云、道看、師便喝、密云、再道看、師又喝、密云、三喝四喝後如何、師云、今歲鹽貴如米、密云、走開不得、儼人路頭、師禮退、自此日常自作主宰、活潑々地、亦不請問、亦無疑情、其用工夫發如此、

五年乙丑

師三十四歲、在三禪堂、夜坐達旦、脇不沾席、至漏深人定、則搭衣禮佛、并禮東西大衆、嘗語左右曰、我在金粟時、自揣東林凡夫耳、今入聖賢法會、深生慶幸、日夜究已事、尙自不暇、那有閒工夫與人較短長耶、

六年丙寅

師三十五歲、是年金粟衆滿五百、分爲兩堂、五峯學破山明居版首、師轉堂主、述自警偈、一日與峯相見次、豎拳云、識得這個天下太平、識得這個天下爭競、如何決斷、峯云、這個從甚麼處得來、師便喝、峯云那裏學得來、師又喝、峯便打、師再喝、峯又打、師喝再喝、峯連兩打、衆謂老隱今日敗闕、師云、非汝境界、由是坐臥不安、氣憤々地平目而行、千人之中不見有一人、亦不知有身、次日早課維那鳴磬一聲、始覺身在此立、復自經行、至第三日上午、忽意外一陣風吹入、寒毛卓豎、通身白汗、大徹源底、便知三世諸佛歷代祖師天下老和尚情與無情盡在一毫頭上、了了分明、無二無別、不可舉似於人、惟自證乃知、心中喜甚、逢

人卽笑、衆謂老隱著魔了、師云、非汝所知、忽記經云丙若作聖證卽入羣魔甲遂無喜色、同參續知公知師所證、謂五峯曰、老隱徹也、峯乃對衆勸云、汝有悟處、試道看、師云、道卽不難、只恐驚群動衆、峯云、但說何妨、師打筋斗而出、峯云、真獅子兒善能吼哮、尋出堂作火頭、一日密和尚室中與衆論下敬鬼神而遠之、衆答、已師在門外立、密云、汝進來說看、師進前豎火叉云、離不得這老賊、近不得這老賊、密便打云、汝作賊會那、師卽拂火叉出云、賊々、師與密和尚機語契合多如此、

七年丁卯

師三十六歲、在金粟、尙未知名、一日續知禪友會諸同參云、今夏在此不得空過、已分上事自家了卻、古人差別機緣恐有錯謬、大家結個頌古社、二日一次一炷香爲限期、畢呈上方丈、或取捨是非了然明白、庶不虛同住一會也、衆曰可、師頌三十則、密和尚卽點出二十七則、一衆嘆服、始知有隱元矣、

毅宗皇帝崇禎元年戊辰

師三十七歲、按、與徑江林護法書、略曰、山僧自是東林一介凡夫、廿九歲出家、黃蘗貴族老幼莫不駭然、山僧頗知其意、克志精修、徧參諸方、後在金粟五年、徹法源底、乃省己分中日用事無別之旨、苟非仁者警發、焉有今日之事乎、贈達潏禪師偈、時金粟開戒期、師爲證戒阿闍黎、二年己巳

師三十八歲、春金粟解制辭密老和尚、偈云、水裏有、天藏、世界、潭中無、物映、山河、錦鱗破、浪翻、身去、敢借、風雷、意若何、密默爲首肯、尋抵嘉善縣、狄秋菴戒子無邊延過夏、菴傍有錢相國書院、公子等日來問道、師示以捷徑、又與戒徒檀信等作念佛放生會、述淨土詩十二首、八月福清黃蘗耆宿同護法居士詣金粟、請密和尚開法、和尚念斷際祖庭、遂許焉、有書相招、師仍回金粟、冬同浮石禪師爲知浴、公務之餘拈提偈頌、無虛日、時海衆雲興好爭勝負、師則恬然、人皆嘆美謂有古尊宿風、

三年庚午

師三十九歲、春從密老和尚應黃蘗請、三月廿七

日進山時、角立之士、如天童慈雪、寶雲、古南門等、皆在座下、未幾和尚命師領疏南行募化、五月至漳州、見大司憲東里王公、道密和尚入院詳細、七月之潮州寓草菴、時師衣單蕭索、菴主疑非黃蘗化士、緣事弗就、述偈見意云、試將冷眼向南看、世道紛紛化道難、三十年來無取捨、相逢盡是鐵心肝、因訪樵雲公於芝山、贈以偈、及回山則密和尚已於八月歸浙矣、

四年辛未

師四十歲、按行實云、是年龔夔友夏象晉一居士請住獅子岩、剃度、性常性樂性善等刀畊火種併力合作、攻苦食淡人所難堪、師怡然自得、嘗述偈云、結個茅菴石竹西、喝天棒、月走雲、寬猶憐路半未歸客、拂々春風浪馬蹄、又按與中上座書云、獅岩係吾手闢、汝能守之、前後有光、吾念足矣、五年壬申

師四十一歲、居獅子岩絕頂、萬仞壁立、作岩中自敍偈、有眉堆三尺雪、身護萬年藤一句、時有僧問、如何是山中語、師云、野鳥傳古韻、僧云、如何是山中、師卓然而立、僧云、怎麼則壁立千仞去也、師便

打、

六年癸酉

師四十二歲、是年冬、黃檗請費隱容和尚主席、舉師首衆、師不獲辭、因問、打著昔時舊痛處、於今猶恨棒頭輕、請和尚末後一頓、費打云、舊瘡癢上著艾、師云、怎麼則徹骨髓去也、費云、如何是汝徹底意、師便喝、費云、喝後響、師云、時清休唱太平歌、費云、祇引得一半、師禮退、

七年甲戌

師四十三歲、在黃檗西堂寮、一日因衆頌百丈再參馬祖、一喝三日耳聾、黃檗聞舉不覺吐舌、因緣師目之俱未妥、乃頌云、一聲茶毒聞皆喪、徧界觸體沒處藏、三寸舌伸安國劍、千秋凜々白如霜、呈上費和尚、即圈出貼法堂前示衆、遂鳴鼓陞座云、我有二一枝拂子、是從上用不盡的、願師云、汝作麼生奉持、師喝云、放下著、費云、再道看、又一喝、便出、費下座、師進方丈禮拜云、適纔觸忤和尚、費舉拂云、汝且將去行持、師接得便打一拂、費云、將謂報恩那、師又打一拂、便歸寮、二月仍回獅岩住靜、按孝廉王谷語錄序、略云、隱元禪師首

入費老人之室、觀體承當全身擔荷、掃去支離、絕無依倚、室中得入師爲翹楚矣、秋闕團瓢於重岩之上、扁曰遶天居、遂移錫居之、

八年乙亥

師四十四歲、岩居孤峻迴絕、塵喧、春元夏獅岩文學龔士龍嘗來問道、辨論儒釋一貫之旨、按春元請上堂有云、寒岩戲約幾經秋、此日光臨信有由、岳面回容山骨煖、頂門迸出凍雲流、大衆還覺胷中熱、煖麼、其或未、然、再看明年三月裏、馬蹄重踏滿山川、又輓文學偈、有吾道一貫之千古爲標格、願君亟再來勿忘獅岩迹之句、二居士蓋師之方外交也、爲守勤龔居士薦父法語、除夕示徒偈三首、

九年丙子

師四十五歲、住山頗久、四方仰重、一夜夢一老人長眉皓首、荷鉢負囊而入、師云、老大大負累若此、不亦勞乎、老人放下行囊、出書幅單條并所負之物、見贈而去、醒以所夢告侍者玄生、生云、斯乃吉夢、必有徵應、未幾果法通費和尚專使齋源流法衣至、師之道化往々徵兆如此、作曹谿源流頌三十五則、挽印初著舊卓龍吟居士偈、

十年丁丑

師四十六歲、是夏五月、黃檗耆宿同侍御心弘林公等、請師接席當山、師卻之、而請益堅、遂應、先是岩側有三塊石、如舟、遊客每以不平爲嘆、師云、時節若至自然平矣、一夕跣趺石上持咒、默祝龍天、此去、黃檗法道果行此石可平、端坐炷香歸室、次早侍僧報云、奇哉石已平矣、師云、不必說吾祝已徵、因名曰自平石、作銘記之、遂於十月初一日入院、遠近雲衲望風而至、物慮數千指、卽日開堂拈香、以酬法乳、時密和尚據天童、費和尚董法通、師主黃檗、三代同時唱道、稱法門盛事、延法弟旦和尚居第一座、策勵衲子、題當寺開山正幹洎斷際癩安鴻休月輪大休諸禪師贊、臘月於尉斗山臥雲菴、種松數萬株、改額曰萬松、說偈識之、

十一年戊寅

師四十七歲、春建千日期場、開閱龍藏、答神廟賜藏恩也、按寺志云、三世祖中天圓公、於萬曆辛丑年赴闕請藏、居燕八年、未蒙諭旨、以疾卒京中、其徒孫興壽與慈復力懇請、閱六載會相

國葉文忠公爲奏聞、甲寅歲始頒藏至、師平時每語先人請藏艱辛之故、未嘗不惻然哽咽、至是翻藏仰酬世德、上堂略云、今日登臨此座、開大寶藏、敷演真乘、言言見諦、句句朝宗、舜日昭回、山川顯煥、中天祖丹心畢露、葉相國洪護儼然、了三十年前未了之公案、翻五千餘卷爛熳之葛藤、用酬祖德、以報皇恩、且道正當此際如何著力、等閒舒出娘生手、撥轉如來正法輪、孟秋巳侯鏡訥公入山參謁、問如何是不與萬法爲侶、師震威一喝云、會麼、公云、未委、師云、還要第二杓惡水麼、公默然、少頃進語云、畢竟如何是不與萬法爲侶、師云、百花叢裏過、一葉不沾身、公領旨、冬修天中祖塔、并建菴、以奉香火、扁曰梅福、復海徵曾文長居士問道書、題黃檗十二峯、壽中台林檀越、輓曇域耆德偈、

十二年己卯

師四十八歲、春重興殿宇、送諸化士上堂、題請藏賜紫中天圓公鑑源壽公鏡源慈公像讚、復處州司理鏡訥凌公問道書、略曰、台下昔日一問不帶枝葉、山僧答處直截、根源如徹證也、便能獨踞公堂、

應機接物、大用現前、不存軌則、正是沒量大人境界、非凡小可_レ知也、冬獅岩、夏春元、至_レ山請_二上堂_一、復請遊_二龍鳳寺_一、有_レ苟不_レ探_二龍窟_一焉知_レ有_二鳳毛_一之句、

十三年庚辰

師四十九歲、是年正月初八、建_二大殿_一上梁、陞座云、托_二出脊梁_一橫_二法界_一、大開_二眼目_一耀_二乾坤_一、都盧一座空王殿、八萬四千解脫門、正當興廢時、撐持者撐持、蓋覆者蓋覆、且道阿那個作_二得其中主_一、良久云、兒孫卓立如_二麻華_一、沒量大人獨個尊、喝一喝下座、示_二公奎丘居士_一法語、題_二天童悟金粟容_一二和尚像贊、冬結制、立_二無得寧_一爲_二西堂_一、臘八、爲_二天柱空_一雜染、空問、昨日嚴家居士、今朝黃檗弟子、普現_二百億化身_一、頭々皆合_二本據_一、如何是頭々本據、師云、新出牛兒不_レ怕_二虎_一、空云、某甲不_レ恁麼、師云、汝又作麼生、空云、據_二本去也_一、師云、切莫_レ假_二虎威_一、復_二王鼓思龔天目_一二居士問_レ道書、示_二徽州程學菴居士_一偈、

十四年辛巳

師五十歲、正月解制、日閱藏圓滿、上堂略云、此一期、佛事有煩_二諸上座佐助_一、徹_レ始徹_レ終、今日分手

豈悟_二一言爲_レ別_一、各希來聽、個個師僧擺_レ手遊、行藏豈可_レ混_二常流_一、臨_レ機不_レ用頻々舉、自有_二春風起_一杖頭、二月之_二溫陵羅山_一、訪_二法弟亘和尚_一、敍_二同門之誼_一、按請_二上堂_一、有_レ不_レ耐_二折腰應_一世間、輕風扶_二我上_一羅山、高々峯頂平如_二掌_一、同氣連枝盡破顏、之句、題_二羅山十四景_一、所_二經詣_一曹山開元報親延福平山諸刹、俱請_二陸座_一、語載_二全錄中_一、夏造_二費隱容老和尚壽塔_一、復營_二報恩塔_一、葬_二母龔氏及衆父母_一、立_レ石爲_レ記、冬建_二鐘樓於藏閣之右_一、範_二銅鐘_一一千觔、以備_二禪林禮樂_一云、

十五年壬午

師五十一歲、玉融邑侯請_レ禱_レ雨、答以_レ偈云、抱_レ病寒岩待_二晚年_一、賢侯何事慕勾牽、頭陀不_レ是人間物、拽_二向人間_一不_レ值_二錢_一、題_二母龔氏真贊_一、壽_二溫陵餘道婆七旬_一偈、七月初、密雲老和尚示_二寂於天台通玄_一、訃至、師設_二位展_一哀、是後凡遇_二諱辰_一、必竭_二誠獻_一供、示_二不_レ妄_一法之源委_一也、冬造_二大佛_一畢、開光上堂、答_二二木張相國來韻_一、贈_二永泰徐總戎_一偈、復_二池不凋居士問_レ道書、刻_二黃檗語錄二冊_一、晉昌大中丞唐世濟、及山陰孝廉王谷爲_レ序、

十六年癸未

師五十二歲、春付無得寧、應潮州王檀越請、是年、山門寮舍皆竣工、按師規文、略曰、予住黃檗、七載、同諸衲子、辛苦萬狀、興建殿宇、頗得歇工、爲重此法席、故也、撰禪林實訓序題、同門柴立已禪師贊、贈鴈湖葉太守詩、臘月旦信和尚至、師上堂云、進以禮退以樂、暖日和風響殿閣、出則弟入則孝、青山綠水慶雲罩、兩相扣擊破砂盆、千古長空浩浩闊、若將耳聽終難會、眼處聞聲無不到、汝等諸人各々有眼、必也堪聞、且道羅山黃檗兩口無一舌、撞頭磕額所談何事、夜半太陽輝宇宙、天明黑漆布乾坤、

十七年甲申

師五十三歲、春太封君洪甫宇延師至萬安福善堂、爲中天祖立牌位、合城善信執香結彩望塵而拜、按師上堂云、這個所在、乃是中天老人出身之處、山僧今日入祖之門、陞祖之堂、爲設牌位、不忘其本、普願大衆、年々此日、熱炷名香、薰破老人鼻孔、圓明自己心田、便是黃檗徹骨兒孫、然老人說不到處、山僧今日說到、老人行不到處、山僧今

日行到、更有未了之事、一一爲其了卻、山僧亦有未了之事、請問大衆、如何爲我了卻、衆無對、乃云、啼得血流無用處、不如緘口過殘春、所經城山鎮海茶林護國東金等刹、各請說法、備載全錄中、三月請同門亘和尚住黃檗、往金粟省觀費和尚、擢居前堂首座、特爲立僧、上堂略云、搶旗奪鼓、拆角衝鋒、湏是宿將登壇、纔能捉敗從上老古錐、掀天關、翻地軸、開發西來命脈、展托衲僧巴鼻、誠爲人天眼目、照明于世、只如今日人天交接一句、作麼生道、獅子窟中獅子吼、梅檀林裏現梅檀、時座下四方騰踏之士川委、師秉拂、一聞提唱、靡不服膺、五月造天童、掃密雲老和尚塔、述偈志感、同客卿張廣文、謁心章徐侍御、爲密和尚求塔銘、十月崇德邑侯解學周同鄉紳錢部錢元懋方伯顧玄鏡儀部閔及申等、請住福嚴寺、是月十七日、進院法語五則、復刑部沈戢穀居士問道書、唐祈遠孝廉請題、乃尊都憲存憶公像贊、殘臘賦白雲歸四首、見意、撰臣農卽事篇序、

弘光皇帝元年乙酉

師五十四歲、按是年南北兵戈紛擾、語溪道屬要衝、

上元解制後、侍御曹谷請住棲真、卻之、二月回
閩、至福州東郊、掃瑞天祖塔、所經神光南禪天
寧諸刹、各請說法、三月大贊國還初馬公泊春元林
正昇陳天錫等、請住長樂龍泉寺、師念係百丈遠
祖發足處、遂應之、是月廿二日入院、法語五則、禪
林規制一新、遐邇請法、殆無虛日、僧問、如何是龍
泉境、師云、山々起白雲、曰如何明境中人、師云、老
僧獨踞孤峯頂、曰人境已蒙師指示、向上宗乘事如
何、師云、腦後見腮、秋付玄生珠、八月碧居上人請
遊龍峰寺、爲題三賢祠卷後、壽悟菴大德偈、次
過連江淨雲盤谷石門等處、各有紀詠、冬爲黃檗
能監院請一作規文警衆、一晚師問衆云、打破虛
空大地平、沈向甚處、安身立命、西堂慧門云、和尚
試道看、師云、莫扯山僧好、門打師一下云、這裏
也不可放過、師休去、

隆武皇帝二年丙戌

大清世祖皇帝順治三年

師五十五歲、春付慧門沛刊龍泉語錄一冊、大學
士劉白雲爲序、人日應君迪林檀越齋示以偈、
有和風生意氣、杲日發心光之句、解制後值時

有警、福唐護法同合山耆宿、簽議黃檗祖席非師
莫主、復請回山、正月廿五日進院、述偈云、一別
寒岩閱兩春、五湖佳景眼中塵、佛恩奚啻丘山重、世
事渾無半點真、雪鬢難忘親勅賜、青山豈昧舊時
人、故園松竹依然在、待得予歸翠又新、夏付也嬾
圭回盤谷、復天水廣禪師書、八月金粟費和尚應
天童請護法、蔡子穀欲延師補席、師作書辭
之、

四年丁亥

師五十六歲、春付良治樂住旗山、二月鎮東海口二
城陷、殺者數千人、師盡然傷心、六月會岱山法姪
時學禪師入覲、師擢爲座元、遂同詣東嶽、建水陸
普度者兩月餘、上堂法語二則、偈五首、有兩城人
物今何在、一陣悲風起、闕體之句、次造瑞岩禮
慈氏石像、過塔寺一輓、棲雲期主偈、及回山而海
上之寇又起矣、誕日上堂云、方纔因地是嬰兒、眨
得眼來兩鬢絲、五十六春如一夢、幸然不昧未生
時、題耆舊潔公貞烈吳氏道婆楊氏真讚、輓石齋黃
忠介公殉節詩、復作小溪十詠、蓋慨時也、

五年戊子

師五十七歲、春靈機和尚南旋過訪、敍同門之禮、師優欸之、夏三山宮保尙書鄭公漢奉、同玉融參藩陳沁齋封君夏龍岡、入山參謁論道、信宿而去、一夜、師夢遊龍潭、有、道者、謂曰、和尚能詩、此潭獨無何也、師頷之、乃授一絕云、峭壁何勞動素琴、空岩無耳孰知音、不來以踐蒼龍信、恐負寒潭一片心、冬脩海會塔、是年世界紛紜、師規警倍嚴、清淡自守、率衆挑柴于市、以給日用、見者無不敬慕、山門得以無虞、誠道化所感云、

六年己丑

師五十八歲、春付中柱砥製中天祖萬安福善堂碑記、置田爲香燈、封君甫宇洪公與有力焉、公嘗謂師云、六雪和尚乃文字禪、打發人不、得、某曾豎拳問云、三千諸佛向某甲這裏乞命、彼竟無答、師云、汝的性命卻在山僧手裏、公復豎拳、師云、果然、公乃禮退、冬舉慧門沛首衆秉拂、薦葉子暄居士偈、子暄文忠公四世孫也、茂年而卒、其母太夫人陳氏鍾愛、爲作佛事、一夜夢其子告曰、不孝向肄儒業、自迷真性、今蒙和尚薦拔、大得善利、望吾母爲我謝之、明日使至述其所夢、一衆駭服、

七年庚寅

師五十九歲、春付木菴瑄示陳道人法語、復張起南居士問道書、時有附亂仙人、入山謝雨、師云、聞仙翁會作詩、是否、仙云、佛何用詩、師云、天上無空腹神仙、今日試與聯句一首、亦是勝事、仙云、請和尚起句、師云、仙翁冒雨入山家、仙停亂、措、師震威一喝云、擬議停機、白雲萬里、本是水作成、靈從何來、聖從何起、莫瞞山僧、好、乃自續云、仙翁冒雨入山家、何事當機縮爪牙、不獨渾身泥水溼、片心攪擾亂如麻、少頃仙和云、仙翁冒雨入山家、爲喫趙州一碗茶、莫怪無言爲擬議、春霖洗落滿山花、師云、好個春霖洗落滿山花、祇是遲了、五月同門蒼霞禪師將之、吳省費和尚、來告別、師贈以偈、有助揚師道、始稱賢、愧我無能敢近前、之句、秋付虛白願、施雲翼方伯林阜如博士詩、是年搆翠竹菴三楹於寺之左、以存舍衛之風云、

八年辛卯

師六十歲、春付即非一重修上善塔於桑池園之左、夏鳳山也嬾圭長老應日本崇福請、舉爲座元、

乘拂、未幾東渡厄於水、師悼以偈曰、悶來窻底嘆離騷、衆角何殊鳳一毛、不忍睡餘泥細整、通身手眼出洪濤、是後師應日本一段因緣、實基於此、爲三山歐全甫、雍染、法名性幽、字獨往、幽素有節操文名、命修黃檗誌八卷、八月莆中緇白請遊仙邑九鯉湖、所經詣資福曹山永慶高田南林天湖龍華報恩諸刹、各請上堂、九鯉龜山南院仰天孤山香潭俱有紀詠、是年結冬衆將萬指、分爲兩堂、立慧門沛木菴瑤爲座元、虛白願卽非一爲西堂、兩堂下喝之風、儼然猶在室中、嘗設垂語問衆、金剛圈如何跳得出、栗棘蓬如何吞得下、日午打三更、甚麼人得聞、夜半日頭紅阿那個見得、復云、此四轉語、一一答得、相應出得陰界、下爲生死之所、羅籠、衆下語少契機者、六句誕日、鯢江諸檀越請上堂、有滴水福滄海、點塵壽泰山、豁開正法眼、萬古剎那間、之句、爲一座元題自讚、壽參議乾菴陳公六十一偈、公與師同年月而生、卽本山外護也、是年建獅子水月二菴、近寺之鄰、以存舊蹟云、

九年壬辰

師六十一歲、春付心盤橋回萬歲題介石圖、壽東閣大學士魯菴劉公七十一、贈放生會陳允寧居士一偈、夏徑山費老和尚六十、時閩浙兵戈未寧、不遑躬祝、乃命監院大猷代之、復呂本仁居士書、秋回獅岩舊隱、沛首座請小參、略云、十五年前點鐵成金、重樓傑閣一時幻出、十五年後敲邪打正、驢兒馬子四面雲臻、逼得山僧口閣壁上、鼻孔遶天無言可對、無理可伸、如何得個轉身句子、以赴來機、喝一喝云、道是賓耶、還作主何妨、下榻待諸公、臘月八日、開戒宣疏、至開戒於洪武十年、善述於成祖昭世、列聖恩深、今皇德重、一時傷感、涕泣不能仰視、衆愕然久之、後有僧微叩其故、師云、吾聆太祖年號、中心惻然、不覺傷悼耳、未幾劉魯菴嚴白海諸名公聞是事、各以頌言致贈、爲海寧姚興公、雍染、法名性日、字獨耀、命掌記室、是年門弟子等以師臘逾六旬、各捐衣盃資爲營壽塔、師以歲僅常住清談、命充供衆曰、大衆忍飢不暇、老僧何用塔爲、衆皆感服、

十年癸巳

師六十二歲、是年山海兵戈復起、民不遑居、師惟

鎮之以靜、一日有暴客至、師危座不動、客稽首而去、按答徐觀周孝廉書、略曰、今時世道亂離、衆生盡在三大夢之中、竟日撼搖不醒、聞台下有醒夢錄、亟當梓出以開迷蒙、庶成大覺世界、否則羣生易有醒日、而山僧說夢亦無了時也、示金潤道人法語、秋八月、師染恙月餘、既愈述偈見意、有「天留餘喘在岩丘、想是人緣應未週、之句」、未幾、日本興福住持逸然、奉王命差僧古石、齎書帛聘師、東渡開化、先是數請、未決、茲見其誠懇、特爲上堂許之、冬結制、舉卽非一座元、秉拂、復日本諸護法啓逸然上座書、示默子蘊謙二禪德偈、爲錢希聲相國營葬東坂、作文祭之、師自丑冬主席當山、前後凡十七年、共置田四百餘畝、時值歲艱、衆賴以安、山鄰每與寺爲難者、師亦憫之、每給衣食以濟、可謂以德報怨、冤親一體、益見師仁慈廣大云、

跋言

大悲之譜指事成文天童之譜繁言皆道日遠涉亂離荒遐既久入門恨晚鹵鈍孔多又惡能譜所幸從事師門親承譬欵指顧之下一刻千春謹遵行實編錄成文盛德難名聊綴數言亦猶以蠡測海闡揚萬一云如其備述敬俟君子門弟子性日百拜謹識

黃檗開山普照國師年譜卷下

十一年甲午

師六十三歲、上元日、兩序同衆護法、以師有東應之事、詣方丈哭留、師憫衆誠、爲躊躇久之、但法語已出欲踐其言、遂有決應之意、二月付王非微回溫陵、爲都院熙公題其像曰、此老綿々密々端々的々、備知黃檗苦心、終日爲人不息、待我東遊歸來、與君一頓柳栗、福城諫垣張田中銓部林涌齋孝廉鄭康成謝雷震文學陳匡生等二十餘人、以師遠應、各爲頌言、預致祝慶、贈山曜殿下偈、別福唐諸檀護啓、舉慧門沛座元繼席黃檗、五月初十日、辭衆上堂云、老僧事々無能、濫主黃檗、十有七載、有負檀信者多、茲乃卽日啓行、聊敘言別、以慰衆念、所以三請而來、一辭便去、遵上古之風規、爲今時之法則、未有長行而不住、未有長住而不行、行旣行也、且道途中得力一句、作麼生道、撥盡洪波千萬頃、拈花正脈向東開、下座便行、是日汶石晃法姪迎宿資福、經上生抵莆城、

寓鳳山、駐駕五天、滿鎮臺錢參軍厲指揮各請上堂咨詢法要、二十日至泉州、木首座迎入、開元寺、大學士東崖黃公造謁致禮甚勤、按公賀師七十壽文、有云、甲午夏、正紫雲、晤和尚、別今八載矣、一室自扁、三嘯誰侶、用斯祝壽之章、爲催九九之約、是又不能已也、旣而南山亘和尚率法姪輩來敘別、六月初三、至中左寓仙岩、藩主送齋金爲供、建國鄭公暨諸勳鎮絡繹參謁、師以平等慈接之、各盡歡心而去、爲欽臺許公題列祖圖序、壽止安耆德八句偈、廿一日藩主備舟護送、江頭別諸子有偈、卽日啓棹而東、舟中夜懷云、萬頃滄浪堪濯足、一輪明月照禪心、可憐八百諸侯國、未必完全得到今、一夜夢圭首座領千餘衆參謁、問如何是末後句、師云、前三三後三三、數日風浪大作、師書免參二字貼船頭、其浪遂平、昔有巨鱗數萬、隨舟而行、七月初五、晚抵長崎、是夜海上漁人咸見崎中紅光亘天、意謂人家失火、各操舟救援、及至其光隱矣、始知師入國之瑞應也、次早、寺主逸然同檀越、請進興福寺法語五則、卽日二鎮主謁見、謙恭致禮、各贈以偈、八

月朔日、林大堂居士請薦嚴小參、士問、先父三十年前善能彈唱書畫、三十年後彈唱不來書畫不得、請和尚指示、師云、一曲無腔古到今、士云、謝師證明、師云、知恩方解報恩、賜紫虛樞大德參謁、問答、機緣一則、是多結制立、獨言聞爲西堂、封拂子二枝、寄囑廣超宣良照杲、一晚師謂衆云、結制之中、諸人眉毛與虛空厮結、忽然撞破虛空、大地平、沈向何處、著脚、無夢無想時、主人翁在甚麼處、水牯牛過窓櫺、因甚尾巴過不得、衆下語少契其旨、復肥前鍋嶋信濃太守惠衣書、復得峰愚谿諸居士問、道書、歲暮大雪、嶋中耆老有三多之謠、謂多船多僧多瑞雪也、師因呼童堆雪彌勒一尊、賦詩三絕、數日瞻禮者如市、時有僧問、如何是祖師西來意、師指雪彌勒云、通身掛玉袍、僧打師一拳、師云、那裏學得來、僧無語、師打云、再添一領、僧擬議、師云、冷殺閻黎、

明曆元年乙未

師六十四歲、解制後差僧通書、候徑山費老和尚、略曰、日本所請、原爲鳳山圭首座弗果其願、再請於某、似乎子債父還也、前承座下嚴訓、卽脩

書辭之、不意去冬復差僧親到黃檗、懇請再四、念其誠至、故許之、第某生平雖無過人、惟一味率真爲人、亦有率真者從之、故遠遊異域與人家舍無二、在此在彼無非擴充和尚之道也、老和尚得書喜甚、顧謂衆曰、元長老遠應無虞、吾道東矣、特書正法眼藏一幅、如意一枝、法帖一函、併手簡、以復、二月建興福山門扁其山曰東明、復細川越中太守書、題虎關禪師像讚、蘊謙禪德請遊福濟、爲題自贊、旣而春德禪林金谷諸刹皆延隨喜、各有紀言、復賜紫湛月永源如雪二大德書、三月廿二日、受崇福檀越請、以丁圭首座先年公案、按師上堂、有云、不昧初念、便是佛祖之心、力行先言、乃成菩薩之願、又有一點水墨兩處成龍之語、五月廿三日、進寺、法語五則、是夏與福崇福兩處安居、海衆雖多、規令肅然、洞宗鐵心大德參見問答、機緣一則、復示以偈、答鎮主黑川與翁八問、示薩州絕岳長老法語、題臥遊居偈、七月望日、兩處解夏、會竺印上座齋、賜紫龍谿大德等書、請師住攝州普門、師曰、老僧年邁、遠涉洪濤、以踐長崎之信、足矣、那堪又遠應乎、卻之、至再、旣

而二鎮主及竺印懇請不已、乃許之、按復龍谿大德、書略曰、接公等書、以普門見召、然老僧老矣、風燭不定、安能效遠祖風穴高風、欲圖重望、非其志也、蓋爲本澳二檀越爲法之誠、公等簽名稟上、默識濟下、有人可起三百年前之祖風、故老僧雖老、亦必勉強而行、至於歸期、聽老僧自便也、爲何一粟居士題東坡像贊、并書聖壽山額、蓋居士爲當山檀越有功於山門也、八月初九日、應普門請辭衆上堂、是夜宿諫早、鍋嶋信濃太守命舟迎接、渡江偈云、我是支那老比丘、隨緣應化赴東遊、相知惟有江頭月、一夜清光伴客舟、十四日至豐州開善寺、留信宿、瞻禮者衆、師厭煩、十六日推舟下關待風、偶閱西湖圖、嘆曰、諒此生不能再到矣、九月初五、至大坂江口、會高麗國朝貢至、觀者如堵、師不及登岸、易小舟沿河而上、明早龍谿大德牽衆迎、進普門說偈示衆、忽有靈鳥遶座數匝、止屏上頻鳴、移時方去、一衆嘆奇、未幾京尹板倉防州太守造謁、謙恭致重、恨相見之晚、尋同寺主等講師開堂祝國、由是頌德高士聞風而至、一日太守設茶

次問曰、和尚昔坐禪時、有石自平、甚奇特、近來路中還有奇特事麼、師云、禪門下不作奇特、但要人明心見性成佛、然奇特神妙小乘之事、非大道也、往坐禪時默祝其道行否、偶見有徵誠之所感、非奇特也、今日一會有大奇特事、還信麼、太守大笑、師云、一盞清茶能醉人、遂從起法名、篤信斯道、示藤資清尚書法語、江州八十一翁岡本喜菴謁、自師到普門、四方道俗疑信相半、是非蜂起、師曰、鼻祖西來有服毒之事、蘭谿東渡有流言之謗、古人尙爾、而況於今、無足怪矣、

二年丙申

師六十五歲、春贈防州太守歸第詩、示木菴首座龍谿禿翁南山諸禪德法語、贈酒井空印閣下偈、圓光院求薦壬生院皇太妃偈、爲東福僧題無準範和尚眞讚、四月坂城三鎮主、曾我丹波守、松平隼人正、小濱民部少輔、同造謁、各示以偈、一日坐西來亭、有懷西詠、尙未脫穎、忽報無上侍者齋黃檗暨諸宰官書迎師回山踐三年之約、有聊萌一片念家音至、始信天涯在一倪之句、由是有回邦意、會寺主從江府一回懇留再四、姑許

之、七月起蓋禪堂、上堂法語一則、復國部劉魯菴、家宰唐梅臣、大參陳乾菴、太史葉震丞、少司寇林石竹、左給諫林燮城太守林戒菴、孝廉唐洞倦官右敏、併嗣法無得寧慧門沛虛白願等一書凡三十餘封、寄拂子一枝付常熙、爲酒井雅樂頭閣下、題維摩讚、加州太守書瑞龍寺額、答建國鄭公寄懷詩、孟冬禿翁竺印二禪德請遊京師仙壽龍華二刹、次過妙心入南禪禮大佛、歷東福、各有偈言、冬立慧林機爲西堂、一晚師見衆誦怡山願文、因謂之曰、不用讀三藏玄文百家諸子、只此一篇力而行之、便是菩薩之因、佛果可期、所謂說得一丈、不如行得一尺、說得一尺、不如行得一寸、說而不行虛願、奚益、一失人身萬劫難復、慎之慎之、

三年丁酉

師六十六歲、見此方信緣未稔、許結一期將告回、聞武昌火變遂止、因建千佛道場、七日以薦火亡、偈云、生逢燒劫可悲傷、世界身心一夢場、返照回光三昧火、亘天烈燄也清涼、二月逸然監院請刻五燈嚴統以酬徑山老人素願、師嘉其志、

爲跋其後、爲松平豆州閣下題政黃牛郁山主二讚、示永井日向守、松平若州守、及道詮劉譯士法語、四月復命寺主之江府、告辭、送以偈曰、年來自覺愈龍鍾、撥轉船頭始見功、珍重普門々內主、暗吹江上一帆風、五月福濟蘊謙琬公來省候既回、送以偈、重刻天童悟徑山容二老人全錄、時亢陽萬民憂瘁、師日夜不安、乃率衆誦咒禱之、旬日果雨、八月寺主江府回、陳上意、且賜僧糧、留師弘法、師不得已許之、先是七月若一禪人齋徑山老和尚書至、略云、吾徒弘法已經三載、聞亦甚盛、當急流勇退之際、宜思古人之訓、且故邦法道濫觴之極、尤望急來扶樹宗綱、綿遠慧命、免得老僧朝夕注念也、崎主檢書中言切、恐動師念、祕至十月、聞師許留始發出、師讀之歉然、第以前言既出、卽復書慰候、爲無上侍者一題、釋迦讚、撰列祖圖序、跋正法禪師墨卷後、

萬治元年戊戌

師六十七歲、春示慧林西堂丹羽玉峰居士法語、作南禪開山大明國師眞讚、大坂性印諸檀信請藏經至、師說偈云、杖藜指處印文開、寶藏三千特送

來、一句廣合無量義、法輪常轉在蓬萊、六月黃藥住持慧門沛公同檀越等復命使致書、延師回山、而徑山老和尚催簡亦至、師一一裁答、七月寺主江府回欲延師彼中行化、師力拒之、堅請至再、勉從其誠、九月初六啓行、夫馬皆從上發也、十八日至江府、寓天澤寺、士民參謁無地以容、師母論貴賤以平等慈接之、十一月朔旦、國主延見於西宮、未幾辭回、承賜衣金、師爲放生作福用綿國祚、酒井空印閣下值考遠忌、延師至長安寺拈香、問法要、又稻葉美濃守閣下勸養源寺落成、請爲世尊安座、次過海福寺、獨本上座請師爲開山、示以偈、廿八日離天澤、雲谷大德延至紹泰寺、臘月八日抵參河州、水野監物居士接入城、留宿問答、機緣一則、十四日到普門、師向有相州鎌倉禮塔之念、時逼歲暮不果、乃作東渡諸祖讚十二則、以表同志也、

二年己亥

師六十八歲、春照侍者請遊義山直指菴、謁西芳夢窓國師像、過天龍陟高雄、登愛宕禮清涼、各有紀言、示駒馬太尉基熙藤公尙書資慶藤公偈、

二月青木端山居士新建寺宇、請安佛座、師爲題額曰佛日、蓋取佛日重光之義也、未幾永井信齋居士備舟請遊宇治、宿寶林、登朝日山禮石大士、過平等院、舟回、士迎至別業、乞示末後生死大事、自謂世間之法悉備無惑、但恐死後茫無知覺、望大師說破、師豎拂子云、卽今作麼生、士云不知、師云、未知生焉知死、臨別示以偈、題興聖開山道元禪師真贊、示卽首座吼侍者一法語、六月承上旨留附京、開創龍谿寺主請擇地、師擬太和山、上卽允許、復福唐諸護法書、九月大坂秋野信士請遊天王寺、禮佛舍利、旣而三鎮主延齋府中、各有示語、冬龍峰提宗大德謁見、呈偈、依韻答之、

三年庚子

師六十九歲、正旦祝聖、有咸資和氣力、共祝聖明天之句、三月登應頂山、禮白檀大悲像、頌黃藥運和尚隔江度母因緣、示岩城伊豫守偈、五月無上侍者下世、師嘆惜久之、悼以偈、撰三籟集序、十月木首座來省親、命首衆、刻樽桑三會錄、吳郡嚴髻珠頭陀序之、冬至日青木甲斐守建佛日中殿

成、請_二陞座、以證_二一代開山_一云、

寬文元年辛丑

師七十歲、解制後、命_二西堂慧林機_一之_二江府、謝_二賜_一地、與_二空印閣下洞院大德_一書、二月甲州太守延_二佛日寺、結_二七日期_一、小參、跋_二雲樓大師戒殺放生文_一、題_二雪菴禪師十八羅漢贊_一、付_二慧林機住_一佛日、五月初八日、太和開創、仍以_二黃檗山萬福禪寺_一名_レ之、志不忘_レ舊也、故有_二東西兩黃檗之語_一、八月廿九日進山、法語三則、題_二雙鶴亭_一偈、亭在_二當山右崙_一、師始擇_レ地時、見_二雙鶴飛_一鳴于松頂、嘆曰、奇哉此鶴、乃吾前導也、因以爲_レ名、仲冬師七旬大誕、唐黃檗主席慧門沛公命_二高泉激曉堂收_二二法孫_一、齋_二閣部魯菴劉公_一、參_二藩沁齋陳公_一、暨溫陵文淵閣大學士東崖黃公等壽文_一、至、是日合山兩序營_レ齋申_レ慶、師作_二古稀歌_一、以答、嘗謂_レ衆曰、汝等不用_二如何若何_一、但將_二太和二字_一、蘊_二在胷中_一、道義二字貼_二在額上_一、則事無_レ不_レ辨、旨哉言乎、撰_二王振鵬五百尊者圖序_一、謝_二松平土佐守送_二大木_一書、獨健道人同_二性印道詮_一二信士_一送_二西域木_一偈、有_二一豎_一宗門千古振、不_レ孤格外棟梁材、之句、自_レ是有_二不豫之色_一、無_レ何福嚴費老和尚計

至、師始聞不_レ能_レ言者久、旣而設_レ位掛_レ眞、法語一則、祭文一則、至_二終七_一安_二神主_一、法語一則、

二年壬寅

師七十一歲、仲春建_二法堂_一、廣十一間、深十間、上梁日有_レ偈、復_二百癡和尚_一書、題_二蓮池大師像_一贊、師自_レ入_二國所_一見_二梵像_一不_レ甚如法、適閩南有_二范道生者_一、善_レ造、命_二眉監院_一督_二造觀音章駄迦藍祖師監齋等像_一、開光日各有_二法語_一、四方瞻禮、嘆爲_二希有_一、七月空印閣下捐館、輓以_レ偈、遣_二送黃金千顆_一以充_レ布_レ地、蓋閣下當日參_レ師時有_レ所_二契證_一、誠不_レ亞_二裴休之於斷際_一也、八月丹羽玉峯居士命_二法印探幽等_一、繪_二十八羅漢併列祖像_一、奉_二鎮當山_一、因著_二佛祖像贊_一一卷、九月成就院主僧請遊_二京師清水寺_一、有_レ偈、題_二高峯日禪師像_一贊、示_二月潭侍者_一法語、復_二松浦肥前守_一書、冬近藤語石居士施_二黃金百顆_一、爲建_二竹林精舍_一、以存_二舍衛之風_一、侍者惟一血_二書華嚴_一、晝夜禮_二經_一以_レ飢、故另食_レ飯、忽夢_二監齋使者索_二飯錢_一、天明如_二數納_一庫、因述_二警語_一示_レ衆、其略曰、凡常住粥飯果蔬等物、一一皆從_二信施_一而來、不可_二浪費私用_一、然刺_レ血書_レ經功行頗大、夜食_二碗飯_一止_レ飢、尙有_二索_一錢

之事、泥私濫之極、無有譴責乎、老僧無德及人、但要汝等戒根清淨、因果分明而已、所謂淨因必招淨果、若泛濫汚濁之輩、而能成正果者、無有是處、且看、日常銜鐵負鞍、牽犁拽耜、抵償人債、底、誰之置歟、誰之置歟、師以臘逾七旬、冬夜以湯濯足、即命侍者、取錢納庫、償常住薪火之費、嘗謂衆曰、老僧德行無過人者、但因果二字、不敢自昧、汝等宜慎之、

三年癸卯

師七十二歲、上元日承大將軍令旨、爲國開堂祝聖、是日王駕臨筵、諸山領德咸集、嘆爲希有、僧問、萬福門庭開八字、曇花瑞現太平春、如何是太平春、師云、百草頭邊獅子吼、僧便喝、師云、驚殺野狐狸、尋蒙國主賜僧糧四百石、述偈致謝、有靈苗秀發三冬實、一衆飽參祝聖人之句、五月衆請登石山寺禮觀音、諸信士以舟接湖中、放生有紀言、廿五日、太上法皇委龍谿公請師示法要、其略云、單傳直指之道、別無言說、惟要放下身心、覷破無位真人、自徹自悟而後已、既徹悟了、生死去來自由自在、處富貴不爲富貴之所羅籠、處

人天不爲人天之所留礙、可謂能爲萬象主、而作四生父也、上覽之悅、復三山戶部郎中素庵鄧公書、丈室後有萬々蟲、穴於庭際、師晏坐時輒衝出、因示之曰、既有君臣之義、豈無敬法之心、翌日視之、烏有、八月廿三日、禪堂上梁、適卽首座來省覲、志喜偈二章、是冬衆近五千指、立兩堂首座二分攝、舉龍谿潛、獨湛瑩爲西堂、諸門弟子以師臘高、爲營壽藏於萬松岡、造法像於開山堂、誕日請上堂、江府有性溫夫人、遺囑捨所居第、海運至、師念其難捨能捨、爲建於萬松岡下、扁曰松隱堂、臘月朔日、設爲戒壇、用資恩有、計師開堂將三十載、說戒一十六度、受戒弟子不知其數、而此土則成初會、爲開戒之祖、四方見聞莫不歸心、至有感激流涕而不已者、嘆戒法之難遇也、

丙辰

師七十三歲、春付龍雞潛、示後堂獨照圓堂主獨本源法語、加賀州有清信士、親屬患心風卒、求師追薦、既歸、夢亡人謂曰、自我謝世三十餘載、未蒙解脫、茲承和尚薦拔、始得安樂、既覺復造山

禮謝、自述其夢、如_レ此、五月付_二獨漢聲應_一、請初山并示_二法語、本多野州太守爲造_二本山十八大阿羅漢、資_二母太夫人冥福_一、請_二開光、八月外護牧野吉峯居士至、贈_レ以_レ偈、又有_二守城官員等、入_レ山放生脩福、問曰、和尚萬福否、師曰有_レ煩、台照、守曰、某自_レ奉_二放生之教、知和尚爲_二肉身菩薩、喜不_レ勝_一言、回思某等身居_二城府、不_レ得_二自由、有_レ如_二籠中之鳥、因知放生功固不_レ淺、但某現操_二殺罰之權、民有_二罪濫、不_レ得_レ不_レ殺、未_レ審有_レ過否、師曰、爲_下奉_二天命_一、警_中於重罪_上、非_レ過、但當_二恤_レ刑以_レ重歸_一、輕可也、守歡悅禮退、師自_レ開_二山黃檗、多放_二禽鳥、但闕_二放生池以縱_二水族、是夏洛中有_二二信士_一捨_レ金、卽命_二工山門內鑿_レ池、池成放生、有_二池成初放十千生、流水風高今復萌、之句、九月退居_二松堂、辭_レ衆上堂、卽日命_二木菴瑠座元_一繼席、送_二高泉法孫應_レ請偈、爲_二作州太守薦_レ母拈香、題_二太公望讚_一、

五年乙巳

師七十四歲、春建_二通玄門_一并書_二頌其上_一、示_二高野眞政律師南源侍者偈、五月應_二法光院獨妙禪德請_一爲_二檀越遠忌_一拈香、次詣_二桂宮院禮佛舍利_一、謁_二聖德太

子遺像、獨照靜主請過_二直指菴_一信宿而回、接_二福唐黃檗書_一、知_二法屬等相繼告_レ寂者四十餘人、師嗟嘆不_レ已、設_二位致_レ祭、按_下復_二卽座元書_一曰、近得_二故山書、知慧門沛公等去_レ世、誠法門不幸十餘年來正人碩士告_レ往殆盡、老者不_レ無_二慨嘆_一也、茲聞_二虛白長老接_二席當山、而公開_二化此方、東西互照庶安_一老懷也、示_二法雲孫回_二廣壽_一偈、鍋嶋甲斐守石丸石見守造謁、各示_二以_二伽陀、中秋日付_二東林大眉善、九月嗣法慧林機請遊_二佛日寺、有_二擡_レ眸不_レ覺九秋霜、特地重臨選佛場、之句、十月太上法皇欽_二師道化_一降_二賜御香兼金_一存問、師述_レ偈進謝、復_二豐前源忠真太守_一書、

六年丙午

師七十五歲、春承_二旨題_二渡江達磨贊、悼_二曉堂法孫_一偈、遠州有_二信士道廣者、嘗蓄_二師手書觀音號_一、偶遭_二回祿、舍宅俱盡、獨師筆跡如_レ故、特來禮覲、師示_レ偈、有_二眞名火不_レ燒之句_一、夏贈_二源忠真太守_一造謁偈、六月廿九日、太上法皇以_二佛舍利五顆_一貯以_二寶塔_一、賜_レ師、師忻嘆不_レ已、命_二衆備_二香花旛蓋_一、迎置_二松堂、又賜_レ金、勅建_二舍利殿_一、師作_二記頌_一進謝、皇情大悅、題_二天台智者大師讚、蘭谿道隆禪師讚、師

自_レ退休_一四方參謁者麇至、皆隨_レ機應接、未_二嘗辭_一
_レ倦、

七年丁未

師七十六歲、春香林信士請遊_二南都_一、首詣_二東大寺_一禮_二大像_一、以至_二興福春日二月堂_一、眉間寺及西京西大招提樂師三古刹、各有_二紀言_一、凡所_二至處_一、四衆追隨參禮者日以_二萬計_一、按_二師紀遊序_一、略云、曩予入_レ邦時、卽聞有_二南都名勝_一、心竊慕焉、未_レ暇遊也、丁未春二月下浣、有_二清信士_一作_二東道主_一、延_レ予、隨_二喜諸刹_一、則十餘年積思一旦了然矣、四月長門太守遣_レ使入_レ山祈_レ嗣、請_二法語_一、師諭以下_二正信_一、_二三寶_一、戒教放生以福_二家國_一、則所求如_レ願、示_二鐵牛法孫_一偈、五月廿五日、師晏_二坐丈室_一、忽覩_二白蓮花開清香可_レ掬_一、尋報_二大將軍令旨到發_一、白金二萬兩及西域木等、爲_二本山_一建_二殿宇_一、故有_二令音_一、一撈玉蓮開之句、又按_二與_二端山獨廣_一二護法_一書、曰、老僧開_二關此山_一、迄今七載、未_レ獲_二大觀_一、茲蒙_二國主賜_一金鼎、建佛殿等、可_レ謂法門盛典、山林有_レ光、老僧雖_レ邁、敢不_二勉_一衆薰脩以答_二國恩_一云々、六月十九日、舍利殿告_レ成、有_二拈香法語_一、復_二稻葉閣老_一、書中元日八十一翁信齋居

士過訪問_レ道、答以_レ偈、
八年戊申

師七十七歲、是年本山締構經始、三月廿五大大殿上梁、有_二老夫撈_一入蓬萊會、托出轉桑第一枝之句、旣而天王殿應供堂鐘鼓樓等次第告_レ竣、題_二大殿_一聯云、宗門肇啓廓_二天心_一、祇樹林中、十聖三賢皆景仰、紺殿莊嚴光_二佛日_一、寶華座上、千枝萬葉永流芳、先是嘗謂_二左右_一曰、此山之興必在_二丁戊二歲_一、今果驗、爲_二智積泊如僧正_一題_二文殊贊_一、製_二逸然融公所_一畫十八應眞讚、會_二公告_一寂、命_二衆作_一佛事、設祭、命_二本山_一豎_二石塔_一、用表_二請法之功_一云、壽_二無住者_一舊八十一偈、臘月八日興建畢、啓_二佛會_一者七日、拈香祝_レ國有_二落成歌一章_一、

九年己酉

師七十八歲、春豎_二大雄寶殿額_一、師手書也、字大如_二車輪_一、筆法奇古、觀者嘆賞、五月松平薩摩守、立花飛驒守、大村因幡守、相繼造謁、各示以_レ偈、爲_二關梅岩居士_一題_二舍利贊_一、秋鐵眼上座請_レ刻_二藏經_一、師示_レ偈、有_二徹_一始徹_レ終爲_二法利_一、能成_二萬古不磨功_一之句、十月朔旦、太上法皇以_二御製佛舍利讚_一、親洒_二宸翰_一曰、

賜隱元禪師、師欽和御韻進謝、十一月初五夜、師夢有巨舟上、豎大紅旗、駕海而來、乃喚待者南源一看船、及旦源來禮足、師述所夢、源曰、此係法舟而樹勝旗、將非法脈相通之兆歟、是日果福唐黃檗新命虛白願公專使來謝法、使回寄祭先老和尚塔文、輓林月樵護法偈、

十年庚戌

師七十九歲、眼尚精明、常閱華嚴、有五十參總頌、夙夜間鐘鳴必起坐、持心經、至老不怠、即非首座爲師造髮塔於崇福、師嘉其誠敬、復以書贈作州太守森內記造謁偈、爲圓光院梅檀像開光、秋南源侍者建師影堂於華藏、落成日營齋會、師有偈以嘉其誠敬、偶閱西堂龍谿公臨終偈、即韻悼之云、忽見墨痕疑盡消、不孤生鐵鑄藤條、臨行一喝全賓主、涌起滔天四海潮、願謂衆曰、這漢向白浪滔天處一喝、便行可謂得法自在也、示松嶋洞水大德參謁偈、師常念家山兵燹之後先祀將絕、特立先父母木主於松堂、師之孝敬至老不衰、

十一年辛亥

師八十歲、春付義山獨照圓、爲京兆珍長者、跋御版法華經、題明菴西東岩覺禪師像讚、贈關太守六句偈、有老漢者年君耳順、共成百四十春秋、之句、中秋日付南源派、爲松平陸奧太守題維摩讚、仲冬師誕辰、嗣法門人暨四方碩德、各以詩文爲祝、師感其誠敬、述耆齡答響一卷、詞源滾々、無異盛壯時、是日潮音法孫、以美濃州小松寺奉師開山、造法像一至、師示以偈、題徑山老人法語後、爲曇瑞法孫題自讚、直指菴釋迦文佛開光法語、歲暮預作遺囑語并規約、爲本山將來龜鑑、語載黃檗清規中、

十二年壬子

師八十一歲、春天圭大德請遊東山泉涌寺、謁太廟過戒光寺、禮梅檀瑞像、各有紀言、贈一乘青蓮二殿下造謁偈、製六代祖師贊、善導寺佛牙贊、法苑北天王讚、重陽日作祭中天祖塔文、其略曰、山之有宗、水之有源、尋源溯本、豈不知恩、猗歟偉哉、吾祖之德、七衆歸崇、千秋亘赫、猶日中天、光被遐域、琦自東來、深惟追憶、墓木驚秋、幾經星曆、拜掃無能、暗興哀感、茲值鴻歸、因附香帛、虔備

伊蒲、恭奠大寂、惟祖之靈、洞觀八極、不離正定、俯垂昭格、又作祭報恩塔文、付獨吼獅、爲海福寺撰鐘銘、題殿額、示俗姪汝默書曰、去夏聞汝平安到家、是爲大幸、莫非吾祖宗積善所致也、今後切不可妄動、當安貧守分、知足爲樂、歸敬三寶、以爲根本、根本既固、枝葉必茂、此是世間第一等福田也、否則未免業緣繁累、自取沈淪、老僧縱有法力、無奈汝何矣、越明年師告寂、汝默聞訃奔喪而至、及歸果遭水厄、衆嘆服、製黃檗鐘銘山門聯、書妙高峰等額、自師逸老松堂、不費常住分毫、間有移用、皆倍價酬償、每誡衆曰、常住物切不可私、一涉私則三途難免、聽者凜然、除夕作辭年偈、有一室安居、密密不妨、能始又能終之句、而師離世之意見矣、

十三年癸丑

師八十二歲、正旦書偈囑獨本源、齋後杖笠巡寮云、老僧托鉢行脚去、侍者柏岩云、與和尚一文錢、師呵呵大笑、二月三日、上皇降旨問法、師奏答稱旨、賜錦織大悲像、副以御香、師謂衆曰、老僧最初在普陀發心、今日普陀聖像至、始末與大士一

段因緣可謂奇矣、是月當大士誕日、師坐龕中、謂衆曰、老僧他日委息、當停龕三年、然後入塔、下午示微疾、廿二日爲嗣法獨照圓題自贊、侍者梅谷題彌陀像、三月朔日、門弟子并護法宰官問候者接踵而至、師應答如常、初六日示梅嶺侍者偈、忽顧衆云、汝等許多來者裏作麼、總無一人替得、正是父子上山各自努力時也、遂作遺語并偈、寄福唐黃檗及諸護法、勉其護念祖庭、三十日上皇遣使存問、進謝恩偈云、廿年行化寓東方、屢受洪恩、念不忘珍、重上皇增壽算、西來正法仗敷揚、下午囑左右散道具、乃曰、老僧去後汝等有志扶持法門者、當下以法門爲重、以道自貴、不可循俗、苟求聲利、自喪至德、若不依吾訓、非吾眷屬、四月朔日、師念行化此方蒙大將軍賜地開山檀恩不淺、特書偈致謝云、西來萬里老桑門、賜地開宗感國恩、今日功圓恭致謝、河山位鎮永長存、初二日、上皇特賜大光普照國師之號、聞師病不起、嘆曰、師者國之寶也、倘世壽可續、朕願以身代之、其尊崇如此、下午示月潭法孫偈、初三早刻謂左右曰、今日不得遠離、吾

行期逼矣、至午刻一起坐、衆請遺偈、師奮筆漫書云、西來柳栗起雄風、幻出礪山不宰功、今日身心俱放下、頓超法界一真空、書罷、適不二與石二居士來問候、師舉目顧視、已泊然長逝、實寬文癸丑四月初三日未時也、留身三日、容色如生、四部衆持香花、而供者靡不悲哀而戀慕焉、三日後鎖龕、百日內諸弟子伴龕坐禪、二時誦誦上供以酬慈蔭、遵治命停龕三年、乃於延寶乙卯夏四月三日、當大祥之期、備法仗奉龕入塔、塔坐癸向、丁、在開山堂之左、嗣法門人無得寧等二十三人、剃度弟子河陽常等五十餘人、他如宰官居士清信士女歸依求法諱圖像供事者、指不勝屈、兩國景瞻有如一佛出現也、蓋師主張法門三十餘年、至公至正、重法尊師、事之是必屈己從之、事之非必觀面叱之、極燥辣處極其慈悲、極慈悲處極其燥辣、雖在方外義篤君親、見人悖於情理、必怒形於色、見人敬於長上、則喜生於懷、應機說法縱橫無礙、垂手接人直截痛快、故自東渡開化二十年間、上自王臣國戚、下逮走卒市童、莫不尊仰而起敬馬、嗚呼濟北之道、自南宋蘭溪隆始

唱此方、迨元明極後、後遂無聞矣、三百年來禪林灰冷化令失張、而師間出其後、樹赤幟於覺場、起宗風於末運、使普天之下復覩漢官威儀者、師之力也、謹按歲月次第、略敘師之平昔梗概、庶天下後世當有所徵、至於密行潛德、曷能述其萬一、師世壽八十二、法臘五十有四、自四十六歲開堂黃檗、歷福嚴龍泉、再住黃檗九載、六十三歲應化日本、初開法興福、轉崇福、移普門、七十歲開山黃檗、最後示寂松隱、凡八坐道場說法廣錄三十卷、隨大藏流行、

嗣法門人 無得寧 玄生珠 西岩光 慧門沛

也嬾圭 良治樂 中柱砥 木菴瑄

虛白願 卽非一 心盤橋 三非微

廣超宣 良照杲 常熙燄 慧林機

龍谿潛 獨湛瑩 大眉善 獨照圓

南源派 獨吼獅 獨本源同稽首刊

跋言

先師住世八十二春開法三十餘載平昔言行滴水滴凍近代尊宿罕見其儔故其應化道跡獨耀日公編爲年譜壽梓久矣第惜其中不無脫略又公參侍左右僅及兩載先師卽東渡公亦西旋未能詳載一代化儀以成全譜令人不能無憾於斯文也故自甲午之後予不量力重加編續遺者補之繁者略之日與高泉禪師校閱始得無訛蓋予兩人同在師門最久凡師履歷皆從耳聞目擊非徒事於空言也噫大慧之譜祖詠所編後有宗演爲之訂正先師之譜耀公首輯予竊爲之增修今古雖殊事同一轍覽者毋以續貂爲誚則幸矣天德嗣法門人性派拜述

黃檗開山普照國師年譜卷下終

楠木合戰注文 正慶二年分

河內道

大將軍遠江彈正少弼殿、治時

軍奉行長崎四郎左衛門尉高眞、

大和道

大將軍陸奥右馬助殿、

軍奉行工藤二郎右衛門尉高景、

但此外出羽入道爲二使節一向レ之、

紀伊手

大將軍名越遠江入道殿、

軍奉行安原藤内右衛門入道圓光、

河內道

河内、和泉、攝津、美濃、加賀、丹波、淡路、

大和道

山城、大和、伊賀、丹後、但馬、伯耆、播磨、近江、

紀伊道

尾張、美作、越前、因幡、備前、備中、備後、紀伊、安藝、
阿波、伊豫、

大番衆 紀伊手

佐貫一族、江戸一族、大胡一族、高山一族、足利藏人二
郎跡、山名伊豆入道跡、寺尾入道跡、和田五郎跡、山上
太郎跡、

一宮檢校跡、嘉賀二郎太郎跡、伊野一族岡本介跡、重
原一族、小串入道跡、連一族、小野里兵衛尉跡、多相宗
次跡、瀬下太郎跡、高田庄司跡、伊南一族、荒卷二郎
跡、高井余三跡、

大番衆 大和道

新田一族、里見一族、豐嶋一族、平賀武藏二郎跡、飽間
一族、園田淡路入道跡、綿貫三郎入道跡、沼田社別當
跡、伴田左衛門入道跡、白井太郎跡、神澤一族、綿貫二
郎右衛門入道跡、藤田一族、武二郎太郎跡、

關東御事書

一合戰事、三方一揆可二發向一、在二陳頭一不レ守二約諾一、
有レ爭先發之輩者、可レ處二不忠一之儀也、

一一人被レ疵之刻、從類退散之條、非二失節一、夫之名
可レ招二惡徒之嘲歟一、或子孫或親族、縱殆レ命縱被
疵、不二引退一可二戰勝一、且雖レ不レ被レ疵、殊抽二忠節一、
者、隨二其振舞一可レ有二恩賞一也、

一 狼藉事、押買押捕不可不誠、仍三字勢分者、高眞、高景、圓光各一人、於其手可制止、若違犯者、於凡下輩者、直可行罪科、於待以上者、可注申事由、於罪名者、盡難定下、早隨事辦、可計沙汰、次於兵糧者、爲六波羅計、可下行也、

一大塔宮御事、

廻籌策、可奉捕之由、先日雖被仰、於向後者、須奉誅罰、縱雖爲諸寺諸山非職員外之住侶、縱雖爲凡卑放埒與黨賊徒之輩、有致忠節之輩者、可宛賜近江國麻生庄也、

一 楠木兵衛尉正成事、

於下加誅戮之仁者、可被宛行丹後國船井庄、不可依其身也、不可品秩之卑賤之子細同前、

一 爲楠木被取籠湯淺黨交名、正慶元年十二月日

安田次郎兵衛尉重顯、阿矢河總六入道定佛、

藤並彦五郎入道、石垣左近將監宗有、

生池藏人師澄、宮原孫三郎、

湯淺彦次郎時式、糸賀野總五郎被擒、

一 今年正慶正月五日、於河內國甲斐庄、安滿見致合

戰、打死人々、紀伊國御家人井上入道と、口上入道、

山井五郎以下五十餘人、皆爲楠木被打畢、一同年正月十四日、楠木於河州致合戰、被追落人々、

河內守護代、在所丹南同國丹下、池尻、花田地頭侯野、和

泉國守護、并田代、品河、成田以下地頭家人、

同十五日、同國御家人、當器左衛門尉、自放火、中田地頭、同橘上地頭代同、

一 自京都天王守下向武士交名人等、

兩六波羅殿代、一方竹井、一方有賀繼殿將監、伊賀筑後守、一條

東洞院、五條東洞院、春日朱雀、四條大宮、四條堀河

トカミ、姉小路西洞院、春日東洞院、同大宮水谷、中條

嚴嶋神主、芥河、此外地頭御家人五十騎、天王寺搦

城墩、

一同正月十九日巳時、寄來天王寺致合戰、交名人等、

大將軍四條少將隆貞、中納言隆亮子、楠木一族、同舍弟七郎

石河判官代百餘人、判官代五郎、同松山井子息等、

平野但馬前司子息四人、四郎天王寺ニテ打死ス、平石、山城五郎、

切判官代平家、春日地同、八田、村上、渡邊孫六、

河野、湯淺黨一人、其勢五百餘騎、其外雜兵不

知數、自十九日巳時、一日合戰、戊亥時不時追落、

楠木渡邊責下御米少々押取、同廿二日申時、葛城引歸、同廿三日、宇津宮五百餘騎、天王寺に寄來、宇津宮家子に相近、藏人舍弟右近、藏人、并大井左衛門以下十二人、楠木城打入被_レ生取_二畢、

一同二月二日、宇津宮歸洛、佐々木判官、伊賀常陸守、天王寺留、

一同二月二日、吉野執行被_レ打落_二口、此外湯淺一黨所、押寄々々、致_二合戰_一由其間々、

一二月廿二日、大將軍阿蘇遠江左近太夫將監殿、長野四郎左衛門尉、既楠木之城被_レ寄之由披露之間、本間一族、須山人々、猪俣懸_二大將軍前_一、押_二寄楠木本城_一、及_二散々合戰_一、就中本間又太郎、同舍弟與_二爲_二先陣_一、一_二二三之木戸_一ヲ打破テ、四ノ木戸口近押寄、既及_二太刀打_一之處、又太郎者弓手之肩ヲ被_レ射、與三者タカモ、ヲ被_二射通_一引退畢、其後本間九郎父子打死、同一族阿口與一、同兵衛四郎、都合四人打死、一門計七十餘人手負、若黨下部共百餘人被_レ打畢、

次須山之人々、同時戰、是殿原已一族八十餘人中、六十一人手負、家子若黨四人打死、

次猪俣人々正員十一人打死、手負六十餘人、其中人見六郎入道、同甥總二郎入道と、主從十四人、於_二同所_一被_レ打畢、次結城白河、村雲前司之手物手負二百餘人、打死七十餘人云々、

一齋藤新兵衛入道、子息兵衛五郎、佐介越前守殿御手トシテ相_二向奈良路_一、是ハ搦手之處、去月廿七日楠木爪城金剛山、千早城押寄相戰之間、自_二上山_一以_二石礮_一、數箇所被_レ打畢、雖然今存命、凡家子若黨數人手負、或打死云々、既楠木所_レ搦城皆以被_レ打落了、於_二今者三四箇所云々_一、大手本城判平野將監入道、既三十餘人參_二降人_一畢、此内八人者逐電、或生捕或及_二自害_一、彼所又以被_レ落之由、閏二月一日風聞、楠木之舍弟、同此城中在_レ之、是非左右未_レ聞、去月廿八日大手如_二着到_一者、手負死人共既一千八百餘人云々、凡大手搦手奈良路、紀伊路、信仰人々同道之時、衆雖_レ及_二二百餘人_一、於_二今者一人モ無_二其難_一、此外伊豫國播磨國之惡黨蜂起、言語道斷候、近日群勢守護閑、此合戰彼所馳向、去月廿二日ヨリ以前注進、委細令_レ申之間、其後分被_レ申上_二候、

一俣野彦太郎、并藤澤四郎太郎、若黨十餘人、楠木相

向之處、去月廿六日合戰、五人手負了、我身者爲本在京人固、内裏ヲ可ニ守護之由依被仰也、

正慶二年閏二月二日

正慶二年三月十一日、肥後國菊地二郎入道舜阿博多付畢、同十二日出仕之時遲參候間、不_レ可_レ付_ニ着到_一之由、侍所下廣田口左衛門問答之間、及_ニ口論畢、十三日寅時、博多中所々ニ付_レ火燒拂、舜阿カ筑州、江州立_ニ使者申云、宣旨使に罷向_ニ忿可_レ有_ニ御向_一之由觸廻_ル、筑後入道殿は、堅糟ニテ此使二人ガ頸ヲ切、十三日夕方被_レ進_ニ匠作方_一、江州は可_ニ打止_一之由被_レ仰之間、彼使逐電畢、サテ菊池捧_ニ錦旗_一、松原口辻堂ヨリ御所に押寄之處、辻堂ノ在家ニ火付タル間、不_レ及_ニ押寄_一シテ、早良小路ヲ下リニヲメイテ懸、宣旨之御使七人ニ參テ可_レ付_ニ着到_一之由ノ、シリテ、櫛田濱口ニ打出、錦旗一流、菊地旗、并一門等旗アマタ捧テヒカヘタリ、爰筑州祇候人饗場兵庫殿相向尋_ニ申事_一、子細之處、即兵庫筑併若_{（同前）}黨一人被_レ討畢、次武藏四郎殿、武田八郎以下、燒失は菊地所行トテ、相_ニ向息濱、菊池宿之處、早ク菊池打出タル間、息濱ノスサ、ヨリ廻テ、横田濱口ニ菊池引ヘタル處ニ近懸タリ、即及_ニ合戰_一、武田八

郎ハ負_レ手、竹井孫七、同舍弟孫八、并安富左近將監等被_レ討畢、サテ御所に押寄及_ニ合戰_一、菊池入道、子息三郎二人ハ、犬射馬場ニテ被_レ討、菊池舍弟二郎三郎入道覺勝以下若黨等打_ニ入御所中_一、既ニ御壺ニ責入致_ニ合戰_一之間、敵七十餘人被_レ討止畢、菊池嫡子二郎、并阿蘇大宮司落畢、匠作御方モ或討死、或數輩負_レ手畢、サテ合戰過テ筑州、江州以下、鎮西人ニ被_レ參、御所即菊池入道、子息三郎舜阿、舍弟覺勝頸以下、若黨等頸被_レ懸、犬射馬場、舜阿、三郎覺勝三人ガ頸ハ、始四五日ハ不_レ被_レ懸、後ニ被_レ懸之、舜阿、并子息三郎覺勝頸ハ別ニ被_レ懸、夜ハ取テ被_レ並_ニ御所_一、十箇日計アテ以_レ釘被_レ打付、札銘ニ云、謀叛人等頸事、菊池二郎入道舜阿、子息三郎、舜阿舍弟二郎三郎入道覺勝云々、菊池方手負人等落行之處、國々ヨリ博多ニ馳上_ル勢共、行向打取之頸ヲ取進之間、犬射馬場ニ三重ニ被_レ懸之、五所ニ木ヲユイワタシテ被_レ懸、其後亦連々ニ自_ニ所々_一取進、落人頸二百餘也、糸田殿即御所ニ御入、參川殿十三日御登アル處ニ、筑後國横隈ニテ菊池孫子兒童并若黨十人計行合奉_ル間、即被_レ討畢、頸ハ御持參アリ、同日肥後國菊池城に被_レ向_ニ打手_一、

同十五日規矩殿御入、

同十六日丑時、規矩殿并肥後國地頭御家人ヲ相具、肥後ニ御向アリ、阿蘇大宮司、菊池ニ一具由、虜ノ自狀アル間、阿蘇に御向、別紙、注文在ニ筑州、江州以下、大名、并御家人等御所ニ參籠ラル、筑州ハ、前執事周防五郎入道跡ニ取レ陣、江州ハ、東門ニ被レ取レ陣、其外大名地頭御家人等、四方ニ取レ陣被レ宿、

同十六日長門ヨリ早馬到來云、閏二月十一日、上野殿伊豫國ニ御渡之處、船津ニ兵糧米ヲ上置御向アル處ニ、河野土居九郎通益只一騎打出申様、此ニ御向悅入候、只ノ大將ニテ御坐バ心地アシク存候はんズルニ、御一門ニテ御坐バ心地能候、又我身モ河野ニテゆへハ敵ニハヨモ嫌給ハジ、今日ハ日モクレ候、又明日可レ入見參ト申テ引退畢、上野殿御方ニハ明日ハ勢モ可レ集、今夜可レ寄トテ、一千五百餘騎ニテ土居九郎ノ城邸ヲ搆タル處ニ被レ寄、其夜上州御方ニハ勢ヲ所々ニ陣ヲ取リテ被レ居之處、厚東以下少々心ガワリシテ、ウシロヤヲ可レ射之由聞ヘケル間、豐田ガ再三申ニヨテ、卽落サセ給畢、馬鞍以下兵糧米皆悉被レ捨間、土居九郎取レ之、爰長門周防御家人百騎計申云、我等

ハ重代者ハ上州ノ御共シテ落スル物ナラバ、浮名ヲ流ベシトテ留テ打死ス、

正慶二年三月十一日、伊豫國水居津ニ付テ、同日申時ニヤガテ寄テ、同十二日平井城ニテ被レ討人々、

長門國分

一タスノ三郎父子若黨已上四十一人、

一山中七郎兄弟若黨已上十一人、

一佐々木八郎入道父子若黨已上十人、

一同馬場入道若黨已上五人、

一同又九郎若黨已上十人、

一厚東彦太郎入道若黨已上九人、

一同崎父子已上四人、

一原已上三人、

一稗田孫四郎入道上下三人、

一兼富又九郎上下三人、

一豐田手人々上下十人、

一光富ノ日野又太郎上下三人、

一同部小六、同孫六、上下四人、

周防國分

一深野彌太郎入道懸出テ、晝ノ戰ニ打死已上八人、

一柳井父子親類已上七人、

一右田父子若黨親類已上三人、

一中野兄弟三人、

周防長門地頭御家人打死ヲ注トイヘドモ、此外ハ名字ヲ不_レ知之間、不_レ及_レ注、

十七日自_二肥前國彼杵_一早馬到來、去十四日江串三郎入道起_二謀叛_一、彌次刑部房明慶、并甥圓林房、并了本房等ヲ相具テ、先帝ノ一宮御坐アリ、人々可_レ參候由申_レ之、着到ヲ付云々、着到奉行ハ丹林房者、自_二去年冬比_一彼宮ヲバ了本ガ千綿ノヲクノ木庭ニ隱置タテマツルト云々、十四日江串甥上四郎ガ本庄ノ八幡宮ノ錦ノ戸帳ヲ申ヲロシテ、旗ニ差上テ、本庄今富大村ヲ馳廻、宮ノ御方ニ可_レ參之由觸廻也、江串入道は遠江守、子息三郎ハ式部太夫ニ任テ、十七日即被_レ向_二討手_一、佐志二郎、值賀二郎、波多源太、多久太郎、高木伯耆太郎云々、

同十八日、平戸峰源藤五不_レ參博多_一之間、被_レ召之處、去々年須置大山寺々務律僧覺應ヲ相具テ、壬二月十七日京上云々、仍爲_二檢見_一自_二守護_一御代官被_レ下_二使者_一云々、

同日菊池加江入道三十五騎、宰府ニ隱居タルガ、降人ニ江州方ニ參、即被_二召進_一之間、人々ニ被_レ預_レ之、十九日、筑後國赤自彌二郎、於_二博多_一可_レ被_二召置_一之由聞_レ之、遂電之間、仰_二于筑州方_一被_レ向_二打手_一、遂電之由申_レ之云々、

廿日、清水又太郎入道父子三人、并若黨二人被_二召捕_一之、菊池落人籠置云々、若黨雖_レ及_二拷訊_一不_レ及_二白狀_一即被_レ預_二筑州方_一畢、

同日、日田肥前權守入道五百騎ニテ博多ニ參到、探題ノ御見參ニ可_二入ル_一由雖_レ申_レ之、無_二御對面_一、江州同前同夕方有_二御對面_一、

一凡今度合戰ニ不慮儀事アリ、炎御所ニ懸リ、既アブナク見ケル所ニ、御所中ニ光物出來、煙中ニ白鳩二飛來ト見ケル程ニ、本ノ風ハ西風ニテアリケルガ、ニワカニコチ風ニ吹ナフリテ、御所不_レ燒、爰菊池旗サシ錦旗ヲウチステ顛畢、菊池モ旗指ヲ失テ仰天ス、其上自_二櫛田濱口_一打_二入櫛田宮_一、此ハ御所カト云テ、二三反宮ヲ打廻、即人二人打コロス、サテ御所ニハ大手ハ寄タルカト人ヲ以テミセケレバ、使走返テ、サル事モ候ハズト申ケレバ、腹ヲ立テ、御所ニ押寄ケリ、神罰ヲ

蒙カト披露アリ、

廿二日、自_二鎮西關東ニ上ル早馬、雜色ノ五郎三郎云云下着、金剛山ハイマダ不被_レ破、赤松入道可_レ打ニ入京之由披露云々、

廿三日、自_二長門早馬到來、自_二豫州進_二使者_一之、馬物具ニ事闕之處ニ、給_二事悅入候、但來廿二日必可_レ參ト申間、鎮西ニ可_レ成由被_レ仰云々、其後自_二豫州落留下部數輩、送_二長門一畢、自餘殘モ又可_二送遣_一由申_レ之、田スキノ入道イマダ豫州ニアリ云々、同日院宣所持仁、八幡彌四郎宗安ト云物被_レ切、頸即被_レ懸畢、銘云、先帝院宣所持人八幡彌四郎宗安頸云々、此ハ去廿日御所陣内ニシテ、院宣ヲ大友殿ニ奉_レ付之間、即召_二捕之云々、院宣ハ通帶_二持之_一、大友、筑州、菊池、平戸、日田、三窪、い上六通云々、

廿四日、如_二風聞_一者、北國ヨリ高津道性ヲ大將トシテ、十箇國兵ヲ相具、長門ト石見ト堺、三隅ト云所ニテ責下云々、

同日彌次刑部殿、并息又五郎、六郎七郎ガ頸到來、嫡子安藝殿は并舍弟二人生取シテ進_レ之、去廿日刑部殿逐電シテ、大村山ニ追上之處、大村永岡三郎入道追ニ

懸之_二討留云々_一、

廿五日、刑部殿并子息等頸被_レ懸_レ之、殘子息二人ハ幼稚之間被_レ放_レ之、安藝殿ハ後ニ十日計アテ逐電畢、同日長門ヨリ上州御臺以下御内人々女房付ニ宮崎津一畢、廿六日、薩摩國大隅式部小三郎、野邊八郎、澁屋太郎左衛門尉等、仰ニ松浦黨以下、廿六日曉可_レ打之由被_レ仰之處、逐電之間、不_レ及_レ力、

廿七日、自_二規矩殿早馬到來、頸一持來、去廿五日大宮司館ニ被_レ寄_レ之、雖_レ付_レ火終以不_レ燒、鷹ニシテ守護之間、成_レ恐退畢、サテ召取案内者被_レ寄之處、大宮司領阿蘇内在家等ヲ燒拂、鞍馬山ニ引籠、其道間ニススレマヘ、ハチキヤウ、マメアシ、此等難所也、日向道ヨリ搦手ノ案内者ヲ被_レ申シ間、仰ニ日向國、柴原、桑内二人ニ仰テ進_二案内者_一、同日彼人等下人下向云々、城内勢兵五十餘人、以上ノ勢五百人計は其外隠_レ村ヲ、大宮司知行之間、其所ニ引退ナバ不_レ可_レ被_レ打之由披露之、

廿九日、自_二肥後早馬到來、阿蘇大宮司、并菊池二郎鞍岡城ヲ落畢、生捕并頸等在_レ之由告申ラル、

同日、自_二長門早馬到來、石見國ヨリ吉見殿ヲ大將ニ

テ、三千騎ニテ向間、大峰ト云所ニ豐田、厚東以下勢ヲ被_レ向、廿九日卯起ニ矢合由告來、

卅日、三川守殿_口隈取、文字關ニ御向ノタメニ宮崎マ

デ御出、四月二日長門ニ御立、

四月分

一日彈正次郎兵衛尉、去月廿八日長門ニ越之處、今日

歸參畢、長門ノ大峰ニテ合戰及ニ度々ニ云々、

同日、野邊八郎親父六郎左衛門尉以_ニ起請文_ニ無_レ誤由

陳申之間、蒙_ニ御免_ニ出仕畢、

同日、自_ニ門司關_ニ三川殿_ニ告申シ、長門國厚東由利

大峯地頭伊佐人々與力高津道性、去一日辰時、押_ニ寄長門

殿御館_ニ畢、堀ヲホリ切、カイダテヲカキタル間、無_ニ

左右_ニ不_ニ打入_ニ、寄手射シラマサレテ引退、道性子息、

厚東子息痛手ヲ負畢、敵重寄時ノ聲ヲツクル間、見

之_レ之告申云々、同二日參州大隅國御家人日田肥前權守

入道、宗像大宮司、并豐前國宇佐、築城、上津、妻毛、上

津毛ノ四郡人々ヲ被_レ向畢、

四日、雜毛宗九郎自_ニ關東_ニ打返、金剛山ヲバ近日可_ニ

打落、赤松入道京都七條マデ打入ヲ、自_ニ六渡羅_ニ追返

大勢被_レ打テ逐電了云々、備後鞆ニハ自_ニ四國_ニ打渡之

處被_ニ追返_ニ畢、平戸峰源藤五、四國之勢ニ對面シケル

由見了云々、菊池若黨宮崎太郎兵衛入道、鞆ニテ自

害、所持文書ハ燒失畢云々、其下人生取シテ參ル、

長門ニハ敵百餘人打_ニ取_ニ之_ニ畢、自餘ハ逐電畢、昨日三

日マデハ無_ニ別事_ニ云々、

同日、規矩殿自_ニ肥後_ニ御通、鞍岡山ニテ所_レ取頸三十

二、生取二人持參、此外比丘尼一人生取、肥後ニ被_ニ預

置、此ハ大宮司若黨ノ妹也規矩殿ヲテライマイラセ

ントスル間召捕云々、

同日自_ニ長門_ニ早馬到來、敵雖_ニ押寄_ニ、射シラマサレ引

退、敵百餘人打止、切_レ頸被_ニ懸畢、城内ハ手負十三人、

死人二人由申_レ之云々、

一或人ノ從女、去四日懸置頸ヲ見_ニ行テ見程ニ、身毛

ヨダチ覺ケルガ、ヤガテ勞ヲ付ケリ、カ、ル程ニ或僧

一兩人、彼家主許ニ行、對面シケル時、彼從女勞シケ

ルガヲキアガリ男ノ風情シテアフキ取ナヲシ、僧ニ向

色代シケリ、僧ヲ上ニ請シ、下ニ坐シテカシコマリケ

ル間、彼僧アヤシミテ問云、何ナル人ニテ御坐スゾト

尋ケレバ、答テ云、我ハ菊池入道ノ甥ニ左衛門三郎ト

申者也、童名菊一トテ、有智山ニテ候シ、人皆知テ候、

但菊池ニテ新妻ヲ迎テ、十六日ト申時菊池ヲ罷出候之時、相搆今度ノ合戰ニ無_ニ別事_一シテ、返テ二度見タテマツラバヤト申候シカバ、彼妻モ涙ヲ流シ、ハカマヲキ候之時、ハカマコシヲアテ、候シ面景于今不_レ忘、我ヒタイノカミヲ切テ、彼妻女ニトラセ、彼ノ妻ノ髮ヲバ我マホリニ入テ頸ニカケ、犬射馬場ニテ死候之時マデ持テ候也トカタリ申テ涙ヲ流ケリ、但敵ヲトラデ死タルコソ口惜シケレト申ケリ、妻女ノ事ヲ申出時ハ哀傷ノ氣色ヲ顯シテ涙ヲ流シ、合戰ノ事ヲ申出時ハイケル色ヲ顯ス、又申テ云ク、我が息濱ヲ打出之時、夜フクルマデ酒ヲノミ、水ノホシクク候シヲ、吞ズシテ打出テ死テ候間、水ガホシク候トテ、水ヲコヒ小桶ノ二桶ノミケリ、又我ハジャウゴニテ候、酒ヲノミ候ハントテ、酒ヲ提ノ一提ノミケリ、水ヲノマズシテ死テ候シ間、我ニハ常ニ水ヲマツリテ給へ、又後世ヲ訪テ給候ヘト彼僧達ニ語申ケリ、其又或日僧申云、カ、ル、疋弱ノ女性ノ許ニ御ワタリ候ハタガイ候ト申ケレバ、家ヲモタズ候テ如此候ト申ケレバ、家ヲツクリテマイラセ候ハント申テ、卒都婆ヲ作テ、相原ニ立ニ行ケレバ、御共可_レ仕ト申テ、タフレフ

シテシバシアリテヲキアガリ、彼勢サメ、又殊ニ漢字ヲカク時、我名ヲソトバニカ、レ候ハ又ト申ケレバ、ヤガテ名字ヲソトバニカキテ立ケリ、

六日、京都ヨリ下向人申云、去三月十二日赤松入道、京都七條マデ打入トイヘドモ被_ニ追返_一畢、帝ハ六波羅ノ北殿ニ御入云々、赤松ハ本ノ布引ノ城ニ籠云々、其後八幡ニ陣ヲ取云々、

同日、如_ニ風聞_一者、長門國厚東、秋吾、岩永、由利、伊佐、アロマツヤ、河越、アサ、皆參_ニ先帝御方_一云々、

七日、三川殿自_ニ門司_一御返、長門ニハ敵厚東ヲ始トシテ、今月一日押寄テ、至_ニ五日_一毎日合戰、矢戰計ニテ無_ニ太刀打_一、敵大勢被_レ射候處、自_ニ鎮西三川殿御向_一之由聞_レ之、厚東ガ宿所ニ引籠聞_レ之、日田入道等相_ニ向厚東城_一、即厚東又逐電云々、

去月十三日赤松入道壹岐前司ト
以下切て見へす

忽那一族軍忠次第

伊與國所々合戰

一喜多郡根來城宇都宮家人、元弘三年二月發向、
一府中守護參河守貞宗館合戰後二月十一日、
一重喜多郡根來城自二月一日至三月十一日合戰、

一周防長門兩國探題上野前司時直、星岡城郭之間數輩討留畢、

一野本式部大夫貞政、并河野四郎通任自府中寄來、建武二年二月十六日、

一當國赤瀧城、同建武二年三月至五月、
一會原城自建武二年十二月廿九日至二年二月、

一足利上總入道代當嶋合戰、延元二年三月六日責落畢、

一和介濱大將細河三位懸合戰追返畢、

一河野彥四郎入道桑原城懸合戰、延元二年四月廿四日、

一井門合戰自延元二年四月至五月、

一高井城自延元三年六月至同七月合戰責落畢、

一河野城發向、同四月廿六日、

一和介濱合戰、同年七月十日、河野對馬入道善惠同十二日宮山城押寄、即責落畢、同十三日道前西條城責落畢、

一延元三年九月廿九日、播磨塚合戰、同十三日左河々原合戰、

一延元五年二月十二日、大濱城後措、

一興國元年十月十日、當嶋泰山城安藝國守護武田寄來、或討留追返畢、

一同二年十二月廿日、道後合戰、同惠良城籠、

一同三年三月、湯築城責、

一同年七月十四日、道前土肥城後措、

一同九月三日、中道前懸合戰、

他國合戰

一元弘三年、讃岐烏坂合戰、大將河野通綱、通増、

一紀伊國飯森城大將足利尾張守、建武元年、

一山道海道合戰、大將洞院故大將殿、于時左衛門督、

建武二年至三年、

一山門兩度臨幸、祇候京都度々發向、

一淡路合戰、

一和泉堺濱合戰

一京八幡城籠、

一周防國加室合戰、延元四年七月七日、

一安藝國波多見合戰、

一周防國屋代嶋大將中院殿、

一備後國鞆合戰、

一供御析足事、

一御佛事析足事、

一征西將軍宮當嶋渡御、供御并御手人々兵糧事、

一同宮御服調進事、

一同宮鎮西御下向、御出立并路次供御以下事、

一同御手人十二人衣裳兵糧沙汰事、三箇年、

一勘解由次官父子鎮西渡海事、

一中院內大臣法眼御房渡海事、

一大將四條中將殿宇和庄御迎事、兩度、

一同大將當嶋渡御、御手人御兵糧以下事、

一吉野殿連々御使祈糧事、此外不_レ違_二注進_一、

一同大將去年九月當嶋渡御兵糧以下事、

一熊野勢當國下向、兵糧兩度、

一大濱城兵糧沙汰事、

一新田脇屋殿兵糧事、

一勅使大藏大輔口倍渡島兵糧事、

一方々上下向押送并兵糧事、

忽那嶋開發記

大日本國南海道伊豫州

忽那嶋開發記

于時人皇六十八代後一條院、攝政御堂關白太政大臣正一位藤原道長卿裔孫、右大臣藤原親賢朝臣秀博藝、被_レ舉用、往延久四年、因_二勅命_一、爲_二坂東鄉司_一、令_レ補_レ之、然祖父關白世榮以_二法城二字_一、王位僭望、因_レ讒奏、應德元甲子夏四月、所_二遠流_一、其砌於_二此嶋_一、維_レ艦眺_レ陸、幽谷周景、雖_レ然絕論無人聲、清嵐烈梢唱、雲呼夕陽、西零唯森々、從_レ渚至_二山頂_一、高樹生繁、嘆々嗔形、時々聲響_レ山、闇中頻放_レ光燄、更行小夜淋、郭公一聲亦唇、及_二伍更_一、明_二青清_一、如_レ得_二龍水_一、親賢敢不_レ厭_二其囁_一、客中閑暇餘興、隨臣_一供、開_レ躋登_レ山、作_二狩獵_一、其時於_二山中_一、一點光明輝輝、映_二親賢眼_一、仍就_二于彼光_一而尋覓、掃_二一堆濕葉_一、設_二千手觀音金像_一、因於_二此嶋_一、住緣純熟、義了得_レ爲_二開發領主_一、稱_二忽那_一號_二遊場_一、云_二山狩_一、建_二立一字梵刹_一、長隆寺、奉_レ安_二彼尊像_一、而后大浦鄉館、玆河

野四十代爲綱一類、新居住橋六郎清時子、天台宗越後阿闍梨華滿房招請爲_二開山_一、於國以人集、應德三四開_二作田圃_一、六浦定_二名_一、謂_二大長師、神浦、熊田、吉來、粟井是也_一、同年卯春任_二先規_一、奉_レ勸_二請鎌倉若宮八幡宮_一、爲_二鎮守_一、嫡三郎大輔親朝、枝嶋開發、搆_二農家_一、謂_二牟須岐嶋、野嶋_一、利根島云怒和嶋、津和嶋、柱嶋、都而忽那七嶋云々、喜保年中、各六嶋奉_レ遷_二八幡宮_一、職掌事務當家某、則以_二山狩山_一爲_二別當_一、大阿闍梨雲溪房神供、當家之直道誠信不_レ惑、矧家臣偕仰、而一族經_レ日繁榮、名田圃始略_レ之、

忽那嶋開基祖 應德元 甲子年四月

藤原親賢朝臣 右大臣正二位

法名

長福寺殿前右大臣正二位月盛西廳大居士

長治元 甲申年秋九月十六日薨ス、大浦岡ノ

岩ノ陵葬埋ス

家臣

三條式部卿家綱 有_二子孫_一

古野左衛門尉行之 有子孫

三橋藏人 友政 有子孫

橋六郎次 有季 有子孫

俊成九郎太夫範元 有子孫

長隆寺 山狩山 尊像閣浮壇金御尺壹寸捌分

御影大佛
開基住僧

越後阿闍梨華滿房

若宮八幡宮

應德四卯春大浦、岩原勸請

事務藤原朝臣神供内證者山狩山

東 武藤庄 大浦、長師、神浦

西 松吉庄 栗井、吉來、熊田

名田岡山林名坪附略之、

傳曰、親賢朝臣忽那嶋流着之剋、澳漕漁夫問國、

與伊與答、朝臣大欽、越知之人瞻望之、成思

經日送玉筍、河野爲綱薰誦舊職昕夕不忘、船

旅之無虞持悦、只氷炭違洒鬱至迎、丁寧遍翰、

井種々預惠投、因之成膠漆之交、適爾令芳

盟、點頭之外山穀野親、士民之人數呼集、開作田

圖、紺圓云々、

是故有哉、其昔河野浮穴四郎爲世在京之節、
祖父關白道長卿被撰出、遂被任伊與守、
累代之守護相續安堵人也、互其子孫亦者爲
東照緣者之間、不他人、

藤原親朝 忽那長者 號三郎太輔

當嶋貳代領主 母者伊勢經遠女
法名

永久院嚴山西入大居士

大治二年二月五日遊場前堂山葬ス、

寛治年中六嶋開發、嘉保之頃、大浦八幡奉遷

六嶋、

藤原親則 忽那長者 號太郎太輔

當嶋三代領主 母者河野親孝女
法名

德有院靜淨西性大居士

長寛元 未年四月十日大浦里ニ葬ス

天養元 甲子年設藥師如來尊像、祖父右大臣殿陵

直上、二宇小堂造立、彼邊尊像堂上施行、

東 難波郷 定、

西 粟井郷 定、

藤原俊平 忽那長者十郎權守
後但馬守

當嶋四代領主 母者宇治大納言長盛女

法名

大嗣院通覺西頼大居士

寛應元 午年三月九日向山葬ス

壽永元 壬寅年長講堂建立、米麥貳百斛

寄進、寺領施行、山狩谷々兒屋坂國久迄、

與力士

林五郎左衛門 重行

高木四郎五郎 延定

垣生右衛門祐 實光

嶋田 藤三郎 常秀

古田角左衛門 義政

三嶋大明神宮 壽永二卯年八月廿二日長師姫ケ

原勸請事務 藤原兼平、内證

法式者山狩山靜慶房、

馬頭大明神 同年粟井浦建宮、兼平草創、

牛頭大明神

別當 山狩山、
同年神浦虎ケ瀧宮、兼平草創、
別當 山狩山、

藤原兼平 忽那長者十郎號武者所、

當嶋五代領主 母者河野太郎保家女

法名

南藤前武者所沙彌西輝大居士

嘉祿二戌年九月二日

本山城 文治三未年爲三戰國一筑

長福寺 泰王山本尊藥師如來

建仁三亥年爲三元祖一百年忌再建立、供養

施行、號長福寺、開山導師山狩山四世靜慶

房、

泰山城 文治五酉年筑

渡口出張

高嶋 長師

能磯 神浦

九多兒 熊田

梅兒 牟須岐

家臣井與力守護之、

忽那別兩家

東 武藤
西 松吉

清和天皇十二代

一鎌倉右大臣源實朝卿、地頭職安堵御下文、

元久二乙丑年五月六日

執權北條遠江守平時政判也、

一同御所御教書、

建永二丁卯年五月

一同御所御下文、

承元二戊辰年閏四月廿七日

六代 法名西信母者二階堂吉村女也

忽那左馬允藤原國重

一大織冠十六代二階堂隱岐入道行村法名沙彌行西用書、

一建長五年七月廿九日、從三關東二御教書、山狩山賜三

長龍寺、

一同年九月四日、長龍寺江從三六波羅殿二御施行、

一同六年預所願惠申下御教書、本山房 靜慶時

一同年國重法師西信跡兄重俊、依三相論、同年三月八

日、從三宗尊將軍二安堵御下智、

執權相摸守時賴陸奥守判也、

七代東浦地頭 法名西順

忽那左衛門大夫藤原重俊

同 西方地頭

同名左兵衛尉藤原重虎

八代重俊嫡 法名西應

同名治郎左衛門尉久重

一建長六年京都大番之用書、二階堂前常陸佐藤原行顯、

西方地頭通重嫡童名於龜丸
忽那左兵衛尉氏實重

一建長八辰丙年七月九日、西浦總追捕使賜_二御下文、

宗尊將軍別當陸奥守平朝臣相摸守時賴、御判也、

西方地頭重康嫡

忽那左衛門治郎藤原遠重

正應元戊子年九月十七日、地頭職依_二相論、從_二關東

久明將軍、爲_二御下智_一賜_二奉書_一、丹波守判也、

永仁三年五月三日、從_二關東_一御教書賜_二長隆寺、

德治三戊申年五月廿日賜_二西浦地頭安堵之御教書、

北條陸奥守同相摸守判也、

同年沙彌性運地頭讓書

七嶋一分地頭

法名法蓮
忽那左近將監藤原忠重

延慶二己酉年二月廿二日、一分地頭職賜_二御下知、

守邦將軍別當越前守判也、

同年十一月廿五日、感久利用賜_二御教書、

正和四卯年、永園寺殿賜_二御教書、山狩山江

同年十二月十日、御教書、秀蓮御判、

元應元己未年六月五日、大佛殿避書、

一分地頭
法名西忠

忽那修理大夫藤原盛重

嘉曆二丁卯年六月廿二日、永園寺殿避書、

同年刈麥狼藉爲_二御法度、越後守御判賜、

元德元己巳年九月廿三日、賜_二相摸守殿御教書、

此文者長龍寺爲_二關東御祈願所_一安堵之御狀、

九代重賴長子

法名道覺大福定門
忽那孫治郎藤原重明

官軍號得能、

元德二庚午年四月十六日、松吉名田畑爲_二御下知、

延成名
駿河守武藏守御判、

一伊豆國在應時政子孫高時入道企_二返逆、爲_二御征伐、

官軍始河野對馬守一族御身方參、此時當家一統、官

軍雖_二馳參、先祖恐謂、對馬守一手成、於_二戰場_一得能

孫治郎名乘、此由被_二聞召、大塔宮元德三未四月、

從_二陣中_一賜_二令旨、

九代左少辨藤原朝臣
官軍號得能、

忽那孫治郎入道重義

法名前左少辨從五位相興道一大居士

元德三辛未年四月十九日、綸旨 下賜從_二伯州戰

場_一勘解由殿、

元弘三癸酉年、伊豫國嘉多郡地頭、字都宮遠江守、

根來山搆_二城墾_一致_二朝敵、自_二三月一日_一出陣、數日

戰畢、

防長兩國探題前司時宣、引率軍勢、發向所々燒亡刻、同三月十二日申、剋件城散々合戰、時宣以下責落畢、廿八日御判賜、

同年十二月十七日、河野殿御書、

元弘三酉年十月十日綸旨、皇太后宮權大進清原御判

同年十二月十二日院宣、中務大輔源朝臣吉良殿御判

仙洞御染筆、長隆寺斷溪成公時賜

同年重義被任左少辨官宣旨 萬里小路權大納

言從一位宣房卿之御裏判、

從中院内大臣法眼殿賜御判、同年四月廿三日

建武三乙亥年正月廿日、細川散位殿軍忠催促之御書、

後醍醐天皇勅筆御綸旨、建武元甲戌十二月十日
彌次郎重清拜戴ス

十代 法名一應院道教大居士 始彌治郎
忽那伊勢守重清 中次郎左衛門
後伊勢守

父重義爲勸賞、被任左少辨官、我亦

勅筆下賜事、關白殿子孫故也、

軍忠之次第

旗印 藤流三ツ巴

幕紋 獅々牡丹

木茂
定紋魚揚牡丹

此抱牡丹者菊桐之裏

於陣中

挂皇子十一代藤原嫡流左少辨入道重義、名乗ル、新田義貞公爲下知、建武二乙亥年十二月、自京都發向、小笠原信濃前司村上源藏人以下凶徒等誅伐之刻、同廿三日於信州大井庄致合戰畢、

嶋津上總入道 木村三郎入道 東條圖書祐

見知後廿五日、義貞公賜御判、

建武三年正月、因綸旨、大將軍洞院左衛門尉殿

附御手發向、山陽道次令參洛畢、

自山門西坂本、正月廿七日、爲同御手馳向榻

手、賀茂河原責下、上北小洛河原口而捨身命、致

合戰、被射乘馬畢、同廿八日馳向大手、同晦日

馳向榻手致散々畢、重四條河原向、爲朝敵入

高橋黨散々責落畢、次依大將軍之仰、火口河原口

在家懸火、續馳向內野責附、丹州江追山畢、此時

二月三日、

義貞公御判賜

同年五月上旬、吉見參河三郎後氏賴附着到、同廿八日追落洛中、同六月五六兩日發向、軍奉行五井右衛門尉打續抽軍忠、同七日無動寺馳向、同九日十一日十九日廿日合戰、捨身命、每度致散々戰畢、

同晦日合戰、於只須河原、令分捕一畢、野間三郎左

衛門、新屋太郎左衛門見知、後七月朔日、賜御判、

錦小路足利左兵衛督征夷大將軍源直儀公、

清和天皇七代足利衛門督征夷大將軍源尊氏公賜

御教書、建武三丙子年六月廿九日、

同年九月廿一日、謀叛人爲退治、越智氏通重用狀、

同四年丁巳七月一日、豫州之凶徒爲誅伐、御發向、

卽屬御手、附御着到、同十日馳向當國和氣濱、致

散々戰一畢、後廿九日軍奉行御判賜、

同五戊寅年三月、小早河民部太夫八道之相須、同左

近將監景平以下輩起謀叛、安藝國沼田庄内楯籠

妻高山城之間、爲誅伐、同七日御發向、直附御着

到、抽軍忠、後三月十一日楠多門兵衛尉正成殿賜

御判、

重清弟神浦館法名全大居士

忽那下野法眼藤原義範

常々多門天信仰、應長元亥年鞍馬山之影寫、建

精舍、後神浦殿云、

貞和六庚寅年七月廿八日、足利右兵衛佐源直冬殿

賜御教書、

同年十月朔日、直冬殿賜御教書、

同年十一月廿日、重季殿賜御教書、

同年十二月廿六日、直冬殿賜御教書、

同七年正月、息討死之剋、同月十三日、賜北畠大納

言入道殿御教書、

正平二年三月廿二日、細川家氏殿御催促、

同年三月廿二日、左近太夫殿御催促、

同年四月五日、御同所御催促、

同年五月十三日、御同所御催促、

同三年四月、讃岐國鹽飽之嶋城墾追落之剋、忠賞之

御教書賜大藏大輔殿、

同年五月十四日綸旨下賜左中辨殿、

周防國柱嶋地頭職安堵之御教書、

同年九月廿七日、從平朝臣右馬頭殿賜、

同年十二月廿九日、於藝州忠節之條、賜足利殿

御教書、

備後國灰田鄉地頭職被宛行、

綸旨 左少辨 正平四年三月九日

長隆寺

關東御祈禱所安堵之御教書、正平四年八月廿二日長譽上人宛、

右細川散位清氏殿御判、

同四年十二月、屋代嶋合戰、并忽那ノ内由里嶋并屋代ノ内家室、皆瀬所々軍忠、

大將軍中院內大臣殿御教書賜、同月十四日

兵部卿親王令旨 正平五年二月十六日

周防國長野郷地頭職安塔

十一代彈正左衛門 法名西窓

忽那美濃權守重勝

正平六年三月八日兵部〔卿〕親王 令旨

右少將御判

同十一年三月九日、直冬殿御教書賜、

延元二巳年二月卅日、一宮中務大輔親王賜 令旨、

同年三月十三日、左少將殿御教書、

同年六月、河野入進善慧成ニ朝敵、爲ニ誅伐ニ之御催

促、左少將殿御判、

於ニ忽那嶋ニ構ニ城墾、凶徒可ニ退治ニ之旨延

文三戌年十一月九日、

左京權太夫正雄殿御催促、

征面將軍 令旨、同四年卯四月廿八日、

同 令旨、同六月廿九日、

於ニ忽那嶋泰山城墾、近來兩度合戰記レ之、

建武三年八月安藝國守護武田之伊豆守當國江亂入剋、寄來、以ニ諜石ニ散々追歸畢、

興國元卯年十月十日、伊豆守寄來有ニ其聞、一族不レ餘楯籠、大將下野法眼義範相續而、嶋末

兵衛四郎近行、同次郎近重、了義房始、矢野一

門、松吉六郎、俊成九郎治、西久右衛門、高橋善

治、溝田一類被官等都而貳百餘人船順シ一蒐討

勝、船追事至ニ波多見、爰ニ而高木佐渡守討死ス、

右凶徒討散事被ニ聞食、征面將軍 令旨賜、同月廿

二日、

重ニ東浦合戰、興國三巳年河野對馬入進善慧當

嶋亂入剋、喚ニ一族野嶋一類、梅兒、護ニ中嶋本

山ニ楯籠ル、大將忽那美濃權守藤原重勝、同左近

將監忠重、牟須嶋地頭七郎則久、同神浦義嗣

始、與力者林一類、花瀬、法華須、黒岩、高木、高

橋之一統、石崎、矢野、垣生、嶋田、俊成、古野、

長隆寺之與力都合三百餘人、三月廿一日廿二

日廿三日、野嶋、梅兒、長師三箇所合戰、討ニ勝

散々畢、

興國三巳年四月十八日、右凶徒退治爲勳功之賞、至社嶋西方領家職被_ニ宛行、足利右兵衛佐直冬殿御判、

同四年午二月四日左少辨御教書、

備後國安田郷地頭職加増ス、

同年十一月八日、左中將殿御教書、豫州名越之城市

同五年七月卅日、三州殿御文、

同年九月十一日、越後守殿軍勢御催促、

同七年七月廿二日、大藏大輔殿御教書、

左少辨弟 法名道行

忽那雅樂佐重澄

正平廿二年十二月日、河野通直殿御教書、

觀應六乙未年十二月三日、河野刑部大輔殿軍勢催促、高顯殿軍忠合力啓來、

讃岐國伊賀野領家職并郡家内公文職被_ニ宛行、

天授_元辰年十一月十三日、正氏殿御判、

重勝弟 一分地頭 法名道全

忽那法師九大炊頭親重

元中八年四月八日、南朝宣旨下給、忽那嶋一分

地頭職、本領安堵、

南北兩朝戰國之剋、重勝跡衰來、此時十三歲而粟井地、長福寺、越中法橋慶詮房相具、下_ニ鎌倉、義滿將軍爲_ニ下智_ニ重來安堵者也、

十六代河野氏

忽那三郎左衛門尉通則

當國守護河野通能爲_ニ戰國_ニ衰來家門不順故軍緩忠怠_ス、此時爲_ニ義滿將軍御下智_ニ越智家成_ニ緣_ニ令_ニ契諾_ニ、定紋并通之字讓賜、應永十二酉年、祖父親重既漸從_レ繼_レ家以來、出陣無_レ止、唯長隆寺法橋慧藏主、忽那七嶋預_ニ決斷成敗等_ニ、從_ニ開_方白_ニ寺地者、雖_ニ遊場_ニ山高山故、通路有_レ間障_ニ領務_ニ、因今應永十八卯年、長隆寺_ヲ山狩_ニ下前陵彌預_ニ領務_ニ、院主忽那久盛孫越前法橋泰方慧廓西堂、河野彦四郎通里殿、材木寄賦有、

十七代實通弟

忽那六郎治郎通經

應永廿一年十月十五日、從_ニ越智通久殿_ニ賜_ニ本知行安堵之御判_ニ、

於國久枝名、大内光永名任、先例被宛行、河野通元殿御判、應永廿四年十二月九日、

同廿四年十月廿九日、忽那之野嶋入立之事、河野通元殿御書、

同廿六年十月廿九日、忽那嶋本知行井和氣郡内本郡郷三郎九名、同久枝名、但別府之内福角名田除之、次土内九郎三郎名田、右任先例可知行一旨、越智通元殿御判、

同十二年九月廿一日、河野對馬守殿御判、同廿五年九月三日、河野通久殿御判、

十八代 實河野通里子也

忽那因幡守藤原通定

松吉庄屋形 五箇所城主

本山城主 忽那重代

泰山城主 忽那重代

銜山城主 温泉郡吉田

湊山城主 和氣郡三津

能磯城主 神浦

當嶋若宮八幡宮再建立、應永廿五年戊辰八月十五日遷宮、

同廿六年八幡宮、三嶋宮社領安堵御狀、河野通久殿、社職溝田中務、

同年七月廿日、通基殿御文、同年十月廿九日、通元殿御文、

於國四松之跡、山崎、小湊、松前、此分可知行一旨、文安元甲子年五月十九日、河野教通殿御判、

文安元子年四月廿九日、忽那嶋成敗可任先例一旨、教通殿御判、同年九月六日、教通殿御判、

十九代 始又九郎 九郎治郎

忽那治郎左衛門尉通賢

忽那之内有恒名田職安堵御判、此分長福寺持分也、田參町貳段餘、山林畠不殘、河野通明殿御書、文安五年三月、

於國桑原、枝重名、行正一跡等被宛行、長祿三年二月十日、河野通生殿御判、

寺家社家當知行分

禪宗

長隆寺 拾五町

山狩谷々兒屋坂國久名

任先例一

山狩山正智院現住仲俊西堂、

同宗

長福寺

國友名子坂

壹町六段

同斷

泰山王

同宗

實際寺

友重名之内

壹町

同斷

同宗

大德寺

御堂之内

陸段

同斷

同宗怒和浦

圓福寺

船越名宮浦之内

壹町

同斷

同 牟須賣

皇善寺

有恒名之内

陸段

同斷

眞言宗

眞福寺

古屋名之内

壹町

同斷

久米寺流

八幡宮御供田浦々御修理田卜號

神料

壹町

溝田中務

任三先例一諸役免、

三嶋宮御供田長師沼

同

壹町

溝田高太夫

桑原久太夫

松埜六太夫

右寺社當知行之地、可任三先例一之旨、長祿三卯年

六月朔日、河野通生殿之御判物、

於國河野之鄉内、亮安分并得能肥前守跡之地、被三宛行、長祿三卯年六月朔日、河野通生殿御判、

長祿三卯年八月、豐田彌三郎事、二神嶋住宅願、正

岡信濃守徯孝殿任仰彼嶋差置者也、

寛正五卯年七月廿三日、刑部大輔殿御書、

同六年七月廿三日、通秋殿御書、

文正元年七月十一日、徯孝殿御書、

忽那嶋決斷成敗可三先例一之旨、文正元戊年四

月十日通生殿御書、

通生殿讓賜品下着小袖二ツ、長刀 長船勝光作、

同寛正六酉年九月二日、

同年十一月十二日、教通殿御書、

於國出作、鹿子分被三宛行、

徯孝殿

應仁元年八月廿二日、

通親殿

應仁二年二月十二日、刑部大輔殿御下智、

同三年正月廿五日、房景殿御狀、

忽那東浦檢斷職可任三先例一、教通殿御判、應仁三月十二日、

同年十二月十六日敎通殿御書、爲使者重見隼人佐當嶋渡海、

通賢謹書(花押)

廿代

通賢早世持家督弟也

忽那新右衛門尉通光

於國國永分、湯月分并東三位等、被宛行、

敎通殿御判、文明六年正月廿二日

枝城之輩江條目左之通、

掟

一任久田子以來之法、彌々方々無餘義、可專

當城事、

一如前々掟何笏之儀茂、拾人者六人可准申

方江、但於敵方一弓矢口輩者、其同心有間敷

事、

一於衆中喧嘩之儀者、親子兄弟成共任道理、

堅可成敗、就私少用他行之時者、可得衆

中之儀事、

右掟條々如件、

明應八年十二月七日

通宣判

文龜四年二月九日、通宣殿御判、

永正二年十二月四日、通定殿御判、

廿一代法心院道知全尊大居士

忽那伯耆守藤原通葉

國家亂敵多不止戰、我常神道修、就中高野山了盛

沙門秘密法傳受、因茲長隆寺、長福寺眞言改、則舍

弟宥盛房秘密之開山也、是天文元壬辰年、

二神嶋豐田彌治郎事、任先例可宛行之旨、

享祿三年六月十三日、河野通宣殿御奉書、

武藤庄屋形壹町餘井政所被官之者共、諸公事

免許、

大永元十一月廿九日、通直殿御判、

大永元年十二月九日、政國殿軍勢催促、

豐後國守護大友豐後守表簀申之間、右京大夫入

道被仰付畢、此由平子啓來、

同二年六月一日、通直殿御狀、

天文元辰年肥前守屋敷江會合ノ儀申來、四月卅日、

通直殿御狀、

本山城作事、當七嶋人夫八百人申觸、天文十一

年調儀ス、

同十一年通春殿用書、

廿二代 久光院夏香全道大居士
忽那式部少輔藤原通著
常溫泉郡吉田城居

天正七年四月十四日、同國於ニ花瀬ニ合戰討死畢、
自ニ河野屋形通直殿ニ賜ニ感書於嫡男龜壽丸ニ訖、

廿三代 一乘院永刃門全西大居士
忽那新右衛門尉通恭

通著討死之后、國嶋共本領安堵、河野十八箇將ノ
三番、

天正十三年、高峠城合戰之剋、爲ニ小早河ニ討死ス、
同年五月七日、嫡衛門治郎通景若年、十二歳也、

同年小早河忽那嶋寄來、一門不レ餘爲レ彼亡、所々落
城ス、

忽那龜壽丸謹書(印、花押)

抑當家者 天兒屋根命廿一世大織冠藤原内大臣
十四代挂皇子御堂關白裔孫、右大臣藤原親賢朝
臣稱ニ忽那ニ、廿三代都而五十九代、忽那嶋所々堅
城郷内館神社佛堂崩落、末世智者希成事口惜次
第也、

于時天正十五亥年

忽那嶋發開記終

瑠璃山年錄殘編上

延慶三年庚戌

應長元年辛亥

正和元年壬子

正和二年癸丑

正和三年甲寅

正和四年乙卯

正和五年丙辰

文保元年丁巳

文保二年戊午

文保三年己未

元應二年庚申

元亨元年辛酉

裏書

此年本尊之座光之修造、二月四日初テ十四日

終、同十五日御殿入、

元亨二年壬戌

元亨三年癸亥

裏書

此年溫屋之造、二月十四日宗上柱立也、

元亨三年 癸亥二月十三日仁米本三斗可ニ悉賣

定、此年四斗八升ニナル寄進蓮阿、

元亨四年甲子

裏書

此年治部卿、阿日房此年子ノ年七斗六升八合、

正中二年乙丑

裏書

此年堯日房、行念へ、丑年一石二斗二升四合、

正中三年丙寅

裏書

此年大進公助公年行仕、丑年一石九斗五升六

合、

嘉曆二年丁卯

裏書

此年道覺房、禪了房、年行仕、卯年二石五斗二

升六合、

嘉曆三年戊辰

裏書

此年顯道房、堯空房、年行仕、辰年四石四升之

内五升、

嘉曆四年己巳

元德二年

裏書

年行仕 大進公三位公

元德三年辛未

裏書

年行仕助公
眞圓房

元德三年辛未九月、大上天皇御謀反、笠置城御

籠畢、關東軍兵大勢上畢、追落進フ

カスノ五郎入道御生取云々、

元德三年辛未五月廿八日、鎮守立柱上棟、同十

三日、上葺畢、番匠大工橋本二之阿眼四

百人、錢六十貫文入、

同日御殿入、同金物如ノ形畢、

錢三十貫文造營

元弘元年壬申

裏書

年行事淨心房
侍從公

此年楠木判官城ニ籠ル、
關東ヨリ多勢上テ責落ス、

庚未

五百文改名
所々荒彦二郎

五百文阿闍梨事淨心房

三百文改名
所々荒彦五郎

三百文改名彌太郎入道

三百文阿闍梨事堯房

壹貫文出家實宰相公

壹貫五百文律師事光信房壹貫文出家實松夜父丸

正慶二年癸酉

裏書

元弘元年十月八日拜殿造營山入、十一月事始、

同十四日棟上、五月上旬ニタカトキ□×、年行

事阿闍梨道覺大夫公、

此年金剛山城是ヲ責ム、遂ニ不レ叶、

元弘四年甲戌

裏書

此年御拜殿造營了、年行仕、阿日房、良智房、

六月先代ヲコル、同七月六日左馬高殿鎌倉落給、

先代橋本ニテ責登、足利殿橋本ヲ追落、十一月

二十四日新田殿下ヲ八橋ニテ合戰畢、十二月

下旬大唐宮流罪畢、箱根山ヨリ足利殿、新田殿

ヲ追返テ、十二月二十八日近江國ニ着給、明ル

正月一日、宇治勢多ヲ追落テ都ヘ入給、

建武二年乙亥

裏書

此年年行事、三位公覺日房、

建武三年丙子

裏書

此年年行事、淨心房、大和公、

三月都ヲ將軍落給、同八月又責登テ都ヘ入給、

同九月下旬井責ニ美□太郎下テ、中條殿ウチ

□、

建武四年丁丑

裏書

此年年行事、道覺房、堯忍房、

七月六日井ノ城ニ押寄テ是ヲ責、同十二月北

畠殿鎌倉ニウチ入給、

建武五年戊寅

裏書

此年出家饗分用途壹貫文、上

年行事、大夫公、石見公、

正月十二日大納言殿橋本マテ責登ル、同廿一

日ヨリ二十八日尾張國ニテ合戰畢、國俊勢ウ

チマケテ伊勢國落、

虫

裏書

曆應二年己卯七月廿二日、爲ニ井責ニ越後殿下

大平ニ向給、尾張殿濱各手向給、カモヘノ城廿

六日追落畢、同十月卅日、千頭峯城追落畢、同

次正月卅日ミタ^虫城追落畢、同次年八月廿

四日夜大平城口落^虫、但當國守護新木殿落

給、

上四十貫文入畢、大工赤座郷孫三郎、

阿日房、刑部公、

月廿日、井野臥大福寺へ亂妨

ス、

曆應三年庚辰

裏書

年行事、良智房、宰相公、

朱樓上フキ畢、錢五貫文、

曆應四年辛巳

裏書

從ニ此年一始不可^レ除^レ禁忌當病、但二親之忌、

可^レ除^レ之、

年行事、三位公、安藝公、

曆應五年壬午

康永二年癸未

裏書

此年年行事、大夫公、教密房、

康永三年甲申

裏書

此年年行仕、良智房、少貳公、

康永四年乙酉

裏書

四月七日火雨フル、大ナルコホリ草木カレヌ、

此年出家饗錢壹貫文千壽丸上、壹貫文幸松丸

上、壹貫文松夜叉丸上、

此年年行仕、三^{付カ}口公、刑部公、

本堂カラン改畢、覺口阿闍梨大勸進、仁王堂ノ

上フキ畢、

貞和二年丙戌

裏書 此年年行仕、阿日、石見、

貞和三年丁亥

裏書

此年年行事、大和公、安藝公、此年專藏造宮畢、

此年土藏入米三石一斗九升二合、

錢分四貫七百文、

貞和四年戊子

裏書

貞和四年戊子正月十八日ヨリ鎮守上葺入錢事、

以上卅二貫八百文、米分十九石五斗六升、

竹代五斗一升、

番匠三百六人、小番匠二百八人、

此年年行事、大夫公、佐渡公、

貞和五年己丑

裏書

此年年行事、良智、兵部、

不_レ爲_二出家之饗人者、出家之饗之時者不_レ可

出、

貞和六年庚寅

裏書

此年年行事、三_位口公、土佐公、

觀應二年辛卯

裏書

此年年行事、刑部公、下野公、

觀應三年壬辰

裏書 此年年行事、阿日房、義性房、

文和二年癸巳

裏書

此年年行事、石見公、式部公、

文和三年甲午

裏書

此年年行事、大和公、兵部公、

文和四年乙未

裏書

此年年行事、良智房、淨照房、

甲申年十二月ヨリ、兵衛介殿入洛之由風聞之

間、將軍近江武者寺御退、次年正月末ニ介殿入

洛、將軍清水將軍塚ニ御詰之由聞也、同三月初

マテハ介殿東寺御座、將軍清水ニ御座之由有

聞、但宰相中將殿攝津國ニ御座候由有_二其聞、

文和五年丙申

裏書

此年年行事、大夫公、義圓房、

此年八月十四日、鹽風吹、

延文二年丁酉

裏書

此年年行事、三位、教蜜房、

此年麥ニソフ入、

延文三年戊戌

裏書

此年出家郷一貫文、大智房主、

此年年行事大寶坊、燈明坊、

延文四年己亥

裏書 出家饗、壹貫文淨泉房、壹貫文竹王丸、

延文五年庚子

裏書 此年年行事燈明坊代實相坊、實性坊、

此年坊院役定、

此年年行事、眞如坊、大日坊、

延文五年庚子

裏書 辛丑二月四日夜戌刻、大地振動、同廿六日夜丑

刻、地振捷事如_レ先、

此年年行事、大寶坊、東光坊、

延文六年辛丑

裏書 年行事、實性坊、東光、

裏書 三千佛二月廿一日_{後力}ニ下進畢、先一千佛過去佛

中_{後力}口何彌口

瑠璃山年錄殘編下

康安二年壬寅

裏書 年行事、眞如坊、大寶坊、

貞治二年癸卯

裏書 年行事、松元坊、實相坊、

貞治三年

裏書 年行事、法義坊、 坊、

貞治四年乙巳

裏書 年行事正明坊、圓口坊、

出家饗一貫文竹房丸、

貞治五年丙午

裏書 此年年行事、密教坊、
密坊、

貞治六年丁未

裏書 此年年行事、_{大智房、}一乘房、

丁未仁王堂上葺、同拜殿上葺、

板員數七千枚歟、

貞治七年戊申

裏書 此年佛旦ノ米貳石六斗二升八合四無_ニ分也、

此年義性房負物一錢一粒不殘上畢、六月十三日、寶治坊坊地相續人負物ニ可出事定也、

經藏不動堂造作畢、年行事、良智、淨照、

應安二年己酉

裏書 年行事、良覺房、宗賢房、

應安三年庚戌

裏書 饗五百文同年淨智房、

饗一貫文大隅公、出家饗一貫文山城公、

應安四年

裏書 永德二年壬戌閏正月日、出家饗一貫文幸壽丸、

出家饗一貫文同年虎壽丸、

永和四年

至德三年丙寅

明德二年辛未

明德四年癸酉

應永四年丁丑

裏書 永德二年壬戌閏正月八日事始、御影堂建立、同

湯屋造立畢、

應永四年丁丑

年辛巳

年癸未

裏書 閣梨、富賀寺、地坊、

裏書 應永十二年乙酉弘法大師御影、自京都作下申

畢、大檀那伊勢阿闍梨弘圓、

十三年丙戌三月廿一日、建儀灌頂御殿入畢、

裏書 〇十四年丁亥十一月十二日、湯釜取越、三州一

宮ヨリ鑄貨八貫文、引物少々、二貫文、北原地

藏講ヨリ施入、

應永十八年辛卯

應永廿一年甲午

裏書 此造營ニ經堂 ヨリ米錢下行、

米六斗四升二合、錢四貫百四十七文傳代、

應永廿四年丁酉

應永廿五年戊戌

應永廿六年己亥

同年己亥

裏書 〇行事、燈明坊、寶藏坊、

〇永卅年癸卯

應永卅年癸卯

應永卅三年丙午

口永卅四年丁未

正長二年己酉

永享二年庚戌

永享七年乙卯

右瑠璃山年錄殘編二卷上起延慶三年下終永享七年其記事雖略可
以見大概矣紙背或記他邦之事數十條蓋當時記者所聞見所以備遺
忘也

文政十年丁亥春製成

現住法印快雅識（印）

河州錦部郡天野山金剛寺古記寫

釋論、第九愚草、

自元弘元年辛未八月廿五日笠置合戰、至今年今、都鄙處々合戰不遑三毛舉之間、國土騷動人民不祥、親死、子討、夫別、世間哀傷、佛閣寺塔、御所內裏民屋燒失破損、財物奪取事無限、然間財寶等隱置無所、肝胸常焦、貴賤上下之費無申計者也、妄念造業時々現起、未來永々生死遁何時、可悲々々爲奈々々矣、沙門禪惠五十三、

正平七年壬辰閏二月廿五日、相當金剛寺寂勝卅講配文加一見了、

今月廿日、當今帝與足利子息若將軍、於京都合戰、若將軍京中沒落、石山寺引籠了、正學頭法印禪惠六十九

釋論、第六愚草下、

建武二年乙亥十二月八日、於河州天野寺文殊院書寫了、

自十一月、當今與足利殿合戰始、于今不止、同三年正月十日帝落給入御山門、同十六日日田殿折下京中散々合戰、同廿六日七日晦日三箇日之間、楠木判官大將計足利殿追下、足利兵庫ヨリ逃下備後土毛マデ、又同年五月廿五日兵庫へ責上テ楠木判官被討了、禪惠五十三、

同年六月一日、足利殿京都エ責登テ、當帝山門ニ引籠給ラ責之、六月十九日晦日、和泉河内紀伊國帝ノ御軍勢、東寺鳥羽合戰、同卅日、和田左衛門大將シテ合戰被討了、又同七月二日、山徒京中へ打入合戰、

釋論、第十愚草末、

于時延元年丙子八月七日於河州天野山文殊院令書寫之了、禪惠行年五十三、

足利殿自五月廿五日兵庫楠木正成判官被討了晦日入京籠東寺、至八月七日無勝負之間、世間動亂無申計、雖然隙々漸々書寫此文了、

南無阿彌陀佛、今度合戰死去人爲始、三世一切衆生往生極樂矣、

同十二月廿三日、帝王入_ニ御阿那宇、同廿八日吉野へ行幸給、

正平三年戊子正月五日、於_ニ河内國四條、楠木帶大刀左衛門正貫、足利執事高武藏_ニ被_レ討了、

同九年甲子三月廿二日、持明院_三院當寺御幸、御所觀藏院

禪慧七十一歲、

帙一枚物、

正平六年辛卯春季卅講配文此卷也、學頭權律師禪惠

六十八、

去年十一月、足利義直入道^{ヱカ}加_ニ辨、阿那帝、今年二月廿六日、足利殿執事師直兄弟并子息、西宮_ニテ討死了、

日經疏第三愚草本、

正平十一年丙申二月廿一日、爲_ニ當季談義_一一見了、持明院

持明院主上食堂摩尼御兼帶御座、仙洞持明院法皇新院ハ觀藏院_ニ御座之間、寺中坊々不_レ殘_ニ一字、諸家上薦寺_ニ宿坊、

殿下二殿中院父當殿下御息塔坊御座、高瀬下里在家悉宿、日野高向上原橫山マテ官軍下部宿住、

釋摩訶衍論眼精鈔卷第一、

于時延慶三年庚戌十月廿日、於_ニ河州天野金剛寺別獨住所、修禪院如法經次書寫畢、伴抄心者、先師修禪院本願開山也、當山學頭阿闍梨忍實草也、入滅七十歲、元應元年己未七月廿二日沙門禪慧廿七歲、正平十三年戊戌三月一日、今年春季卅講論義廻合、當帝至_ニ今年_一五箇年爲_ニ皇居_一之間、山林坊舍悉損失、學頭法印禪慧七十五歲、

釋論第六抄出、三花苑院記、

自_ニ元弘元年_一己未_ニ至_ニ于興國六年_一己酉、十五年之間、世上動亂不_レ止、剩思身新造坊舍延元二年武士亂_ニ入于當寺_一被_レ燒失_ニ之、成_ニ流浪身_一彼此坊移住之間、心苦惱亂無_レ隙、是先世罪業歟、將又今生因業歟、後生果報奈爲矣、

◎原本是處有_ニ梵字十字_一今略_レ之速證大覺位
堅橫抄第五、疏二本、

正平十九年七月七日、持明院殿法皇江州山里ト云處_ニテ御隱、禪僧ニテ御座云々、御年五十二、惠信、同九月八日天野山_ニ御骨納奉了、此法皇ハ无量壽院ノ上乘房禪惠法印學頭御房有_ニ御授法_一、依_ニ御隱_一印信ヲ有_ニ御還_一也、

同十月十六日禪慧圓寂、

應永卅年癸卯三月上旬書寫之、求法舜惠卅三、

一薄草子口決第四與書曰、從是以下ノ書現ニ藏ニ不レ見散失歟、○此說非カ薄草子口決第廿與書ノ如キハ現存セリ後記

正平十三年五月十二日、於河州天野无量壽院一拭

老眼一交了、學頭法印禪惠七十五、

此五年之間、主上當寺ニ御座、山木皆切失、坊舍佛閣悉損亡矣、

同十五年庚子三月十七日、將軍大將畠山入道辰時亂

入、大門往生講堂并坊舍卅坊當院持佛堂坊共ニ燒

失、同十六年四月五日鬼宿建持佛堂、住坊七月廿

五日造營、禪惠七十八、

一薄草子口決第廿與書曰、

正平九年甲午自三月廿二日、至同十二年丁酉二月

十七日、持明院法皇并新院當寺御寺住御幸也、モリ自

正平九年十月廿八日至同十三年戊戌六月〇一主

上當寺成行幸御寺住、同十四年十二月廿三日觀心寺行幸成給、首尾六年御

座、坊舍山木皆切拂、損亡無_ニ申計、結句同十五年庚

子歲御敵寄來、大門坊舍持佛堂等半分燒失了、畠山

同十六年辛丑四月持佛造進、無量壽院同六月當坊造營、

同七月廿五日、堂坊同日棟上了、同十七年壬寅六月

四日堂上曼荼羅供養行_レ之、學頭法印禪惠七十九、

正平十九年甲辰八月廿三日、時正多治米村道場無量

壽寺四壁屏等皆造營了、禪惠春八十一歲、夏六十八歲、

一秘鍵開藏抄上與書曰、

正平九年歲次甲午九月十一日、於河州天野寺觀藏院持

明院太上法皇御前、予爲秘鍵談儀一加一見了、學

頭法印禪惠七十一、

同下卷與書曰、

正平九年甲午十月七日於河州天野寺觀藏院持明

院御所行宮、觀藏院、予大上法皇御前一部談了、學頭法印

禪惠、

一菩提心論下段當書出_ニ曰、與書、

從去々年戊午以來、一天動亂更無安時、殊此比

高屋城へ寄衆、柳本三好神五郎、細川五郎殿、畠山

右衛門助殿、遊佐殿、都合三萬計在陣、内ニハ畠山

尾張守殿、遊佐河内殿、丹下備後守、其外歷々衆三

千計閏九月始ヨリ于今相支、

享祿元年戊子十月卅日書_ニ寫之、當年十講、今執筆人預ノ箱ニ入成範五十二、

一秘鍵論議雙紙ノ與書ニ、

天中二年五月六日、於河內國天野山全剛寺東谷門坊砌之、雖一文不遍身也、爲興隆利生之、如形書寫了、僧實秀生年廿八、

當年二王山合戰、

一練若、寂靜之地、練若、梵云、阿蘭若、唐云、無諍、智度論云、遠離處、去村十二丁、則天竺二里也、出家修行之地靜ナル山寺之所ナリ、山阿、阿於何切、曲也、隈也、又大陸也、深山義、

一往昔天野澤田、昔ヨリ當地天野ト云名有リ、澤之事ハ當所ノ秘所也、

一山峙三面表三部之高徳、峙ハ山ノ高キヲ云、三面ハ御社ノ峯ト塔ノ尾ト御影堂ノ上ト三所ヲ云、卽佛部、蓮花部、金剛部之三部ノ高徳ヲ表ト云、

一水聚一流示不二之深奥、西谷川ハ胎藏界、上院內ノ川ハ金剛界、明神ノ前ヨリ一流ニ聚ルハ、卽胎金兩部不二ヲ表ス、不二ハ甚深密義可レ知、

一誰知右秘所、神仙遊戲、古佛說法處、鐵塔奉納處、大師經行等ノ故事、外ニハ知ル者有ルマジク、爾ル所ニ本願始テ御登山ノ時、一人ノ老翁出デタマヒテ、昔ノ因縁具ニ告タルマデハ知ル者無之、況末代

之凡夫惡業深キ故ニ、若シ知ルトモ疑ヲ起シ、種種ノ誹謗ヲ申故ニ、一二相傳ニ此事第一ニ秘シ玉フ、一神仙遊戲之靈嶋、神仙ハ持明仙人ト云テ、眞言陀羅尼ノ咒力ニテ仙人トナリ、不ニ入滅、彌勒出世マデ虛空ニ住シ、方々ノ靈地ニ居ス、凡夫ノ眼ニハ不見、箇様ノ神仙等ノ居シ玉フヲ云、

一古佛轉輪之舊跡、釋迦以前拘留孫拘那含迦葉等チ古ノ佛ト云、當山ニ箇様之古佛說法處ト云義、

一虞人ハ何方ニテモ其山ヲツカサドル主タル者チ虞人ト云、上ノ人老翁モ同人、古老ノ傳水分明神也ト、

一鐵塔奉納之勝地、阿育王奉納南州八萬四千ノ舍利塔、當地塔尾モ八萬四千處ノ内也、

一中興開山阿觀上人、姓大和氏、泉州大鳥郡貞平之兒也、幼稚ニシテ志ニ佛法、高野山エ御登山、或青嚴寺ニ學文御或夜明神御夢想アリ、河內國天野ト云處、密教相應之地、末代相續之處也、伽藍建立護國利民可有ト、具告有之故、永萬元年始テ此天野エ御登山、忽一人老翁出、阿觀ニ告テ曰、此處昔古佛說法之舊跡、鐵塔奉納之勝地、弘法大師經行靈場也、其以後聖跡久荒、狐兔空走、上人偶々至ニ于此、夫開ニ佛土ニ

衆生利益可有ト、具告テ老翁去不見矣、

阿觀神告彌感悅、實ニ地勢モ密教相應之處、高野山ニテ御夢想都合有之故、蒙ニ地主之命、承安二年壬辰三月廿一日大師御影供始メ玉フ、堂ハ先ニ建立、此日堂供養也、

同年十二月十六日、丹生高野兩大明神御勸請也、大師明神共高山野ニテ御夢想故、高野ヨリ御勸請、天野山金剛寺ト、寺號山號御定、承安二年ヨリ享保十四年マデ、

一弘法大師經行之靈場、大師横尾山ニテ御剃髮以後、南都東大寺御住居之間、横尾山ニ御登山之時分、此天野昔ヨリ靈地御見及ヒ被レ成、少々之庵室ヲ拵立置、淺時之間度々御修行之處、則經行之靈場、又修歷之靈場トモ云、

一三善右馬允源貞弘卿、本願御初入之時分地頭也、天野之靈地神告奇特、阿觀之挺特ヲ被ニ聞召、信仰歸依甚深故、境內四室契券ヲ以テ本願ニ永代御寄進、治承四年八月日享保十四年マデ、

壽永二年五月十一日、三善貞弘木曾合戰之時、越中砥浪山ニテ討死、又ハトガミ山トモ云、享保十四年

マデ、

阿觀傳記、高野山寶光院
雲石堂寂本作、貞弘當地始テ御寄進ハ、依尋ニ仙院ノ寄進ノ様ニ見タリ、此義甚誤ナリ、貞弘自發心ニテ當地御寄進也、外ノ上意等無之委細貞弘御寄進狀可レ見、

一右大將賴朝御下知狀、被テ禁ニ斷山内殺生ニ停止武士狼藉ト由事、元暦二年三月十三日、此狀本紙大衆院
家ニ有リ、當寺
ニ寫シ
有リ、

一建久二年四月後白河院御下文、寺中四至内田畠山野所當官物等御免除之、此時ヨリ公義御直ノ拜領地ト成ル、

一人皇七十七代後白河院ハ、鳥羽院第四皇子、大治二年九月十一日御誕生、保元々年ヨリ御在位三年ニテ、位ヲ御實子二條院江御讓、其後御剃髮ニテ法皇トナリ、天下ノ政務ヲ執リ行ヒ玉フ、二條院六條院高倉院ノ三代ハ幼帝之故、後白河ノ御計ニテ天下ノ事相納ル、當山之義本願先達テ此法皇江奉表以聞有之、依之諸伽藍并寺領之御免之狀宣旨等被ニ下置焉、誠當山大施主帝王也、
每年十月九日平曼茶羅供、後白河院八條女院代ニ

御室法親王御吊也ト、古老秀任鏡嚴等ノ傳、

建久三年三月十三日後白河院崩御、六十七歲、

一源賴朝治世二十一年、清和天皇十代左馬頭源義朝三男也、

元暦元年甲辰十月賴朝鎌倉ニ置ニ問註處、文治元年乙巳

賴朝被補ニ六十六箇國惣追捕使、諸國立ニ守護、庄

園置ニ地頭、將軍記ニハ、文治二年三月ト見タリ、

建久元年十一月賴朝上洛參内、同三年壬子七月賴

朝任ニ征夷將軍、同六年二月賴朝又上洛、賴家政子

同上洛、同三月十二日東大寺大佛供養ニ參詣、六月

鎌倉歸ル、正治元己未正月十三日右近衛大將賴朝

薨、年五十三、

一賴朝子息賴家實朝二代ノ狀無レ之、此間禁中ニテ當

山義相濟、次北條九代執權役ニテ、將軍京ヨリ親王

家鎌倉ヘ下リ將軍ニ成玉フ、九代狀モ代々ハ無レ之、

三卷ノ内、武家書、相摸守武藏守并六波羅ノ下知狀ハ

九代ノ内ナリ、九代ノ間ハ京ハ六波羅ニテ納ル、奉

行ハ鎌倉北條家ヨリ代ニ京エ上ル也、六波羅九代之

間計也、

一八條女院ハ、人皇七十四代鳥羽院御女子ナリ、暉

子内親王ト宣下アテ、二條院養母ニ成玉、御母美福

門院、人皇七十六代、近衛院ト同母、後白河院御兄弟ナリ、

一寬平法皇ヨリ第六代御室喜多院守覺法親王ハ、後白

河院第二御子ナリ、御母大納言季成卿御女、承暦元

年二月十七日ニ御出家、十一歲、嘉應二年閏四月廿

八日親王宣下、廿一、安元二年三月六日直敍ニ一品、

廿七、

此御代ヨリ當寺ヲ末寺トス、後白河院當寺御建

立故也、八條女院御信仰モ同、

一禪尼淨覺、始八條女院第二局ナリ、本願之御直弟

子ト成ル故、寺務御讓、承元々年七月四日淨覺御入

滅、本願ト同年ナリ、

寺中二季講ノ本尊、和僧黑衣ニテ釋迦ニ拜被レ成、則

淨覺也、

三十反講田、淨覺時代被ニ定置ト古傳也、

一覺阿、淨覺妹六條局ト號、出家シテ淨覺之寺務御

讓、阿親淨覺同年御入滅之後、覺心ト覺阿ト寺務諍

論、承元元年ヨリ承久二年マデ十四年、承久二年於ニ仁和寺々務ハ覺心ニ

被ニ仰付、覺阿并寺僧共評定上可ニ治山ニ之旨御下

知、爾レドモ覺阿寺務不レ叶義心ノ外ニ存、終離山被

レ致、其則、本願由來之書物記錄繪旨院宣武家書等

數通、覺阿持去、

一正和二年、阿闍梨忍實、御影堂ヨリ塔尾ニ光明上ルノ義拜見、依レ之塔尾江行根元御尋有之處、往昔御奉納鐵塔出現感得有レ之、此時マデハ鐵塔奉納處ト名ルノミ、何レノ處ト云コト不分明此度始テ時至出現、感得鐵塔速奉入ニ堂内、終日燒香散花三密修行有レ之、喜歎未曾有ハ今度始テ光明拜見、鐵塔感得ノ義ヲ云、

此鐵塔、慶長十一年再興マデ、塔ノ眞柱ニ有レ之、伽藍御普請人夫方大坂ヨリ參、此塔恣盜取大坂ニ歸リ、金子ニテ可有ト陶冶シテ見ルニ、塔終ニ不レ治、其後此者家内災難多之故、此塔早速當山ニ持參シテ懺悔スト、是故塔ニ治癒有レ之、

一忍實ハ、本願ヨリ九代目學頭ニテ、中院一代ノ住持也、元應元年七月廿二日入滅、

或人、高野山奥院ニテ大師之御面躰直ニ拜見ノ誓願ニテ、三七日籠リ居ル、三七日ノ夜御夢想之告有リ、河内國天野山ノ塔ニ勤行ノ僧則大師同前也、天野山ニ參リ其出家ニ拜可ト有具夢之告アリ、因レ之當寺ハ參リ、塔ニ其時忍實勤行被ニ致居、

高野山マデ夢想之旨趣申上ケ遂ニ禮拜、具上密教之大事共傳受仕退出之由、古老傳也、

一延元元年丙酉十二月、後醍醐天皇忍ニ出京都ニ潛ニ幸吉野、楠木正行守ニ護皇居、是ヨリ南朝ノ始リ、曆應元年八月十六日、後醍醐天皇於ニ吉野ニ崩御、年五十一歲、

同年後村上天皇即位、諱義良、後醍醐天皇第七皇子、在位三十年、

南朝ニハ興國元、己卯此年號七年ニテ終、次ハ正平元、丙戌京ニハ貞和二年ナリ、正平ハ廿四年ニテ終、正平七、壬辰北畠顯能楠正儀等奉ニ南帝勅ニ奉レ取ニ北朝光嚴法皇光明院崇光院ニ押ニ籠阿那、収ニ三種神器南朝、

正平九年午十月廿九日、後村上帝天野山御幸、六年御坐、主上^{後村}上帝、食堂摩尼院兼帶、仙洞持明院法皇

ト新院ハ觀藏院御坐、殿下中院殿下息塔之坊ニ御坐、其外坊舍一字不レ殘宿、高瀬下里在家悉宿、日野高向上原横山マデ官軍下部宿住、

一和田楠木於ニ天野殿ニ戰評定事、太平記ニ見ヘタリ、天野殿南帝後村上天皇ヲ云、

一持明院法皇奉_レ授_二灌頂_一事、无量壽院太子講表白ノ文ニ有リ、

一阿觀僧贈正覺心法印并六人之僧官位、後村上天皇綸旨有_レ之、

管絃大鼓羯鼓鉦鼓笛笙琴琵琶、南帝御所持被_二殘置_一、

伽藍古木、櫻クロ松、中門紅梅等、南帝自被_二植置_一、南帝六年皇居ノ次、觀心寺御幸、

一南朝長慶院、正平廿三年卽位、諱寬成、後村上帝皇子也、在位廿五年、

同廿三年二月十一日、後村上崩御、觀心寺ニ陵有リ、南朝建德元、庚戌京ニハ應安三年ナリ、建德ハ二年ニテ終、次ハ文中元壬子京ニハ應安五年ナリ、文中ハ三年ニテ終、

一南朝長慶院、文中二年八月讓_二位熙成王_一、熙成長慶院弟ナリ、長慶院ハ沒_二落吉野_一テ、天授元乙卯京ニハ

永和元ナリ、天授ハ六年ニテ終、弘和元辛酉京ニハ永德元、弘和ハ三年ニテ終、元中元申子京ニハ至德、

一北朝明德三年壬申十月、大内義弘蒙_二義滿命_一繕_二南朝和睦ノ義_一、閏十月二日和睦事調、南帝熙成王到_二

着嵯峨大覺寺、同五日被_レ渡_二三種神器於禁中_一、蒙_二太上天皇尊號_一、號_二後龜山院_一、自_二延元元年_一後醍醐帝潛_二幸吉野_一至_レ是五十七年、南北一統シ天下平均ナリ矣、

一足利尊氏將軍十三代_{或十}、相續京ニテ納、尊氏義詮

二代狀寺中無_レ之、此間ハ南朝ヨリ當山ノ義下知アリ、楠一家ノ狀此間ノ事也、此外南帝綸旨等此間ノ義、足利三代義滿之時代管領畠山基國ノ狀アリ、

河内守護畠山家ヨリ勤之遊佐河内守神保齋藤家ハ畠山家來也、畠山斯波細川三家足利十五代ノ管領也、執事トモ云、

寺中ニ畠山ノ狀數通有_レ之、京足利殿ヨリ下知ニテ畠山ノ狀被_二下置_一、

河内高安城古市城ハ、畠山居處也、

一按_二道春撰將軍家譜_一、畠山基國足利三代義滿時代管領也、又古今雜記ニハ十一代義澄時代永正年中上總助狀ヲ畠山基國ノ狀ト註ス、應永ト永正ト百十年計モ間有_レ之、但永正時分モ畠山基國ト云者有_レ之哉、

一三卷ノ内武家

寛正四年六月廿日尾張守、足利八代將軍義政時代之管領 高山政長也

文明十八年十一月九日右衛門佐、雜記ニハ金胎寺城主 島山右衛門佐就ト

註ス、將軍家諸ニハ義就、

明應七年十二月十二日尾張守、十一代將軍 義澄ノ時代、

永正六年十二月廿七日上總助ノ狀ノ事上ニ有、

永正十六年十二月上總助右同斷、

極月廿日基國、此狀ハ應永年中ニ可、有歟、但三卷ノ外也、

天文十一年三月十三日備後守ハ、信長父織田信秀

ヲ、永祿元年卯月廿一日次郎ハ、島山尙誠、

永祿二年七月日筑前守、三好筑前守長慶ナリ、

永祿三年二月日彈正少弼藤原、松永彈正久秀ナリ、

信貴城主

永祿三年七月日沙彌實休、三好筑前守長慶弟、三

好豊前守元康、永祿三年三月八日剃髮、號物外軒實

休、三好家本國阿波、京江時々上リ放火合戦ヲス、

ニ堺モ且ク居、

永祿四年八月日源高政、河内守護代、天正四年十月

廿五日卒、

天正五年十二月廿八日、甚九郎ハ、佐久間右衛門佐信盛子、甚九郎信榮ナリ、

一天文十年頃ヨリ天下大亂合戦無レ已、三好一族及其家人松長彈正久秀等振ニ逆威、畿内南海近國押テ下知ス、依レ之當山ニモ三好松永狀アリ、將軍足利ノ末義輝義昭也、

一天文三年於ニ尾州古渡城ニ信長誕生、父備後守信秀築ニ尾州古野城ニ居ニ信長ニ中頃美濃國岐阜ト云處ニ信長居、其後近江安土ト云處ニ居城、度々京ニ出寺々ニ宿シ、禁中其外諸事義埒明、此時代モ將軍ハ義昭也、

一二條城信長築レ之、將軍義昭ヲ居ク、

一信長、近江美濃尾張加賀越前丹波播磨五畿内、此國國大方支配、

一天正十年六月二日、京寺町於ニ本能寺ニ信長切腹、子息信忠モ同日死去、是則明智光秀謀叛故也、信長子息信雄信長ノ筋ヲ續、然レドモ位輕、當分ハ秀吉モ信雄ヲ主分トシ玉フ、信雄後ニハ織田常眞ト号、大和宇田ニ居ル近代ノ織田家ハ常眞筋也、
一天正三年十月廿三日、當寺領田島山林仕當知行之

旨全領知不_レ可_レ有_二相違_一之狀、信長ヨリ當寺被_二下置_一、其外樽禮狀三通アリ、

一太閤秀吉、尾張國愛智郡中村郷筑阿彌子、始名木下藤吉郎、永祿元年ヨリ信長家人ト成、次第々々出世、此時分モ將軍ハ義昭也、信長存生之間秀吉播磨姫路ノ城ニ居ル、名ニ羽柴筑前守、將軍義昭ノ養子ヲ秀吉願、爾レドモ義昭同心無_レ之、故禁中ニテ關白ヲ願關白位ニ上ル、後ニ三位法師カ子ヲ秀吉ノ養子ト成、關白ヲ讓リ、秀吉太閤ト成ル、

右秀吉養子秀次ト名、此人惡逆多故、秀吉ノ意ニ違、高野山ニ登シ青巖寺ニテ秀次切腹、寺中ニ美濃守秀長ノ狀アリ、秀長太閤弟也、和州郡山城主也、

一天文以來諸國大亂合戰不_レ已、秀吉一代之間天下一同平均、諸大名京ニ上テ禁中禮義有_レ之、其上秀吉朝鮮マデ切入、大明國王ヲ望ム、

文祿元年受_二秀吉命_一ニ西國大名入_二朝鮮_一、秀吉ハ東國大名肥前ノ名護屋ニ居ル、是ヲ太閤ノ唐入ト云、七年間也、

一天正十年十一年之間ニ、當寺領檢地入高六百七石、内三百石被_二召上_一、今ノ下里是也、殘三百七石寺納

分、天正十一年九月朔日秀吉ノ寄附狀アリ、

一彼調略於_二相調_一者、去年召上候三百石可_レ令_二寄進_一候、成_二其意_一粉骨肝要候也、天正拾貳九月十二日筑前守秀吉印 天野山惣中、

此狀ノ文之意ナラバ、下里ヲ被_二召上_一ハ天正十一年也、檢地モ其節ナルベシ、秀吉ノ代也、

一文祿三年又檢地有、百四拾三石八斗之出米高被_二召上_一、本高三百七石寺納分、下里モ同時ニ檢地有、高四百五拾石餘ニ成ル、是秀吉ノ代也、

一慶長三年八月十八日、太閤秀吉於_二伏見城_一病死、六十三歲、同四年四月十八日勅_二賜秀吉社_一豐國大明神ト諡ス、

一慶長十一年伽藍御再興、權現様ヨリ秀賴ニ被_二仰入_一、片桐市正惣奉行、

古傳云、秀賴抱瘡時、當寺中門ニ天秀賴ニ夢想告玉フ、天野山伽藍修復有_レ之者、當病可_二平愈_一、因_レ之片桐市正家康公ヘ御窺ノ所、迎_レ義皆造營可_レ有_レ之御上意故、惣伽藍御再興、權現様御影也ト、老僧方ノ傳、

題續南行雜錄首

天和改元歲臣常臣宗澤等奉命往南京搜索遺書此行多閱寺社舊記鈔其足徵者纂爲冊子命曰南行雜錄文雖零碎其載皆實參校紀傳多賴此編元祿二年善緣事在京春二月告假間外舅於南京近地因再使善就春日若宮神主家乘以求南朝事迹留幾三句數詣其家其先祐茂以降歷世皆有日記卷軸稠疊充積箱篋近長者殿下命神主及其族祐舍相臨印封自非有事不得輒開重我公命因盡鈔所藏縱意歷覽然皆唯記社中祭禮及私家平生其他都無所見殊至南朝事迹隻字亦亡惟南京逼近吉野應能知其動靜必有述記蓋騷擾之際散亂就滅良可惜之甚也而諸記所載雖社中之事其體大係邦家者採撫若干條因乃標書顯示間又私加旁考庶幾可備紀傳之考仍附載大宮社司今西東地井興福寺主二條等家記拔萃并南京地方寺社故事若干條欲以續前編因命曰續南行雜錄若有可採者又臣善奉命之微効云元祿己巳夏五下泝彰考館生臣善書于洛陽邸

續南行雜錄

祐茂記抄

安貞二年、四月十七日、兩堂衆、并國中武士、向多武峯、此事發者、委細在_二去年之日記_一、依_二御寺訴訟_一所_二召籠_一寺僧免除之間、去年者無_二沙汰_一、而今年又依_二被_一召籠_一寺僧所_レ令_レ多武峯也、十九日多武峯ニテ有_二合戰_一、五月四日、御寺務停止之長者宣、同廿七日、社司皆參_二八講屋_一、有_二集會評定_一、仍亥時、門々不_レ論_二大小_一閉畢、七月廿日、京都大雨、鴨河出_二天橋_一流人數百人死_レ爪、六波羅西門依_二大水_一顛倒、假屋流云々、日吉十禪寺、八王子、等流、春日大明神御祟之山有_二沙汰_一、八月十三日開門、十九日、寺家御還著、廿日所_二召籠_一寺僧者、無_二御免_一流罪云々、三藏院法印者解官シテ下_二遣之_一、侍從得業、并五師修學者者、流罪也、十二月二十三日、長者殿下太政大臣家實御得替之由風聞、嘉禎二年、正月一日、宇治旅所御強飯云々、三日、今日長者宣下著、

社司等奉_レ弃_二神櫛_一各下向之由有_二其聞_一、尤所_二驚聞_一

食、也、僧綱衆徒雖_二下向、於_二社司_一者不_レ殘_二一人_一、各付_二御神木_一可_レ令_二祇候、若不_レ隨_二御定_一者、定有_二後悔_一歟之由、所_レ被_二仰下_一也、仍執達如_レ件、

左大辨

春日神主館

關東初度御教書、

八幡宮寺與福寺喧嘩事、今月十九日御教書廿八日到來、兩方申狀謹下預候畢、大住庄住人等、居置山守於薪庄之間、御節供薪不_レ可_二合期_一者、言上事由可_レ蒙_二聖斷_一歟、將又竊可_レ伺_二見實否_一者、使者之人不_レ可_レ過_二一兩輩_一之處、春日神人注進狀云、爲_二宗輩七八人也、從類及四五十騎云々、宗清法印之沙汰、頗猶似_二無_一思慮、爰如_二南都衆徒解狀_一者、兵衛尉宗種無_二左右_一出_レ箭射_レ之、拔_レ刀突_レ之、仍神人貞弘立逝去、爲_レ次被_レ疵半死半生、然者被_レ遠_二流宗清棟清_一、又可_レ被_レ禁_二獄下手人等_一云々、如_二宮寺所司解者_一、大住庄民加_二制止_一之外可_レ採_二之木有無事_一、遣_二實檢使_一之間、加_二巡見_一罷歸之時、於_二切堤邊_一待_二請之_一、貞弘取_二宗種之髻_一依_レ令_二蹂躪_一、爲_レ遁_二當座之耻_一令_レ突畢、就中貞弘者、宮寺神人宗末法師

子息也、背_二本所_一現_二奇怪_一之間、逢_二其殃_一歟、縱雖_レ損_二命_一不_レ能_二他社之口入_一云々、兩方申狀參差、尤遂_二一決_一可_レ被_レ裁下_二之處_一、依_二南都鬱訴_一、春日御賢木已可_レ有_二御入洛_一之結構云々、先被_レ相_二鎮之_一、退可_レ被_レ糺_二明是非_一候也、所謂先々御成敗、偏有_レ所_レ宥如_レ無_レ所_レ誠、傍輩彌蜂起之基候歟、且使者率_二人勢_一罷向事、濫觴似_二不_レ顧_二彼煩_一、加之貞弘雖_レ爲_二宮寺神人_一、於_二大住庄方_一被_レ殺害_二了_一、然者因幡國務被_レ罷_二宮寺之沙汰_一、被_レ召_二禁宗種_一者、南都爭不_レ慰_二鬱陶_一候哉、其後兩方之申旨、一々被_レ糺明_二可_レ被_レ行_二所當之罪科_一候、若猶_レ及_二發向_一者、被_レ處_二違勅_一、以_二武士_一被_レ相_二禦之條_一、且非_レ無_二先規_一、可_レ被_レ計_二仰下_一候歟、抑宗友者、先日被_レ召候之時、々跡逐電之由風聞之處、如_二宗末法師白狀_一者、今度聞_二諍之時_一、爲_レ誘_二宗末_一加_二種々之下知_一云々、積習之傍輩之惡行何相_二鎮候乎_一、凡宗友與_二貞弘_一、本自爲_二敵人之間_一、連々喧嘩向後更不_レ可_レ絕_二之旨_一其聞候、兩人共_レ可_レ被_レ召候、若不_レ應_二召者_一、可_レ被_レ居_二地頭_一於彼兩庄候哉、以_二此等之趣_一可_レ有_二御披露_一之由、按察殿御消息所候、恐惶謹言、

十二月廿九日

武藏守泰時
相摸守時房

大住御庄春日神人等申、

神人貞弘、爲次、被_レ殺害及傷_二間子細狀、

件子細者、去年十二月二日申刻許、宮寺別當侍所司下部郎從數輩使者等、罷_二入當庄_一、最中奪_二取斧鎌等_一之由、小童部少々馳來告申之後、折節御庄民等在一所、羣集相議云、無_二左右_一出向事尤可有_二思慮、帶_二弓箭兵杖_一、數多人勢結構之爲_レ舂輒難_二出合_一、神人等令_レ著_二黃衣_一、相_二尋沙汰_一之次第、所_二奪取_一之斧鎌等可_二乞返_一之旨已評定、如_レ是之間不_レ經_二時刻_一、速疾打_二廻山野_一、令_レ出_二大住庄內切堤_一、仍神人十餘輩罷_二逢彼所_一、於_二井水相論_一者、既以蒙_二御裁許_一了、今使者亂入何事哉、被_レ帶_二宣旨_一長者宣等_二歟_一如何云々、返答云、無_二宣旨_一モ、無_二長者宣_一モ、依_二只宮寺別當御房仰_一、如_レ此加_二沙汰_一云々、然者甚無_二其謂_一、速所_二奪取_一、鎌等可_二返給_一之由令_レ申之處、彼使者交野右馬允_{實名_二不知_一}、無_二左右_一取_二直弓箭_一懸_レ手之間、春日神人箭_二取付之處_一、右馬允之孫兵衛尉不_レ及_二子細_一射_レ之突_レ之、於_二貞弘_一者即座逝去、於_二爲次_一者雖

被_レ疵半死半生、事之次第、只可有_二御景迹_一、相對乘_二龍蹄_一帶_二弓箭_一之類、爲_二庭弱神人_一、爭無_二左右_一取_二其警誤_一事哉、勿論申狀也、凡八幡申狀皆悉奸謀也、御節供薪、大住庄加_レ制山之外者、無_二可_一取木山之由、庄民訴訟之間、爲_レ不_二有無_一、實檢令_二巡見_一之旨言上之條、極僻事、臨時陳詞也、御ホタ山ト稱テ、採_二御節供之薪_一、御ホタヲ切進山者、自_二相論山_一以南經_二廿餘町_一有_レ之、薪在最中敢無_二異論_一、大木繁茂無_二差影_一者、今相論山者、自_二彼山_一以北、野山而無_二指木_一、只萱許有_レ之、無木ニシテ年序尙經了、大木繁御ホタ山ヲ闊テ、向_二無毛山_一令_二巡見_一、可_レ取薪有無之由令_レ申之條、誰信_レ之誰用_レ之哉、只是去年夏比、任_二舊例_一被_レ伺_二井水於大住庄_一之間、鬱陶奸濫之餘、任_二自由_一引_二率數多人勢_一、踏_二回當庄之界_一、取_二斧鎌_一欲_レ致_二押妨_一、用意之爲_レ舂、有_二出會之輩_一者、致_二陵礫蹂躪_一欲_レ令_二欺誑_一之趣、是造意之本旨也、今雖_二申旨_一一々不_レ可_レ然哉、次貞弘又爲_二春日神人_一之條、不_レ能_レ申_二子細_一、離_二父母家_一來_二住松井_一、經_二六七箇年_一了、自_レ彼移住之初、加_二神人_一、大住庄神人自_レ昔以降、正員十二人、脇十二人也、雖_レ爲_二真

之脇自_二近比_一備_二正真_一、其子細春日神主定被_二存知歟、宮寺御綱引、五代相傳神人之由、搆申之條、勿論之次第也、先交野右馬允者、宮寺神人之沙汰物也、定見_二貞弘歟、寧不問_二子細哉_一、貞弘_三可_二恐畏_一、右馬允_三不_二宥恕_一哉、如_二八幡申狀_一、者貞弘無_二左右_一取_二髻之間_一、爲_二遁_一當座耻突_二之云々_一、若爲_二八幡神人之者_一、何數輩春日神人之中、貞弘一人殊進出無_二左右_一取_二髻現_一奇怪哉、景迹在_二暗者歟_一、別當法印結構之趣、敢無_二可_一諍、爲_二春日神人之條_一、條條又無_二其疑_一、殺_二害之_一刃傷之、被_二糾_一定何事、可_二被_一明何事哉、若不_二被_一行_二所當罪科_一者、當庄神人旁難_二安堵_一者歟、仍言_二上子細_一矣、

長者宣

被_二長者宣_一、稱、我朝者神國也、天照大神以_二皇孫_一定_二象中制御之主_一、八幡大菩薩者、稟_二餘裔_一而爲_二國之宗廟_一、春日大明神者、起_二殿內防護之誓_一、爲_二家之宗社_一、通_二三儲貳之君出_一自_二我家_一、一日萬機之政屬_二于我家_一、君臣合體之義不_二相忤_一者歟、衆徒縱雖_二知_一我神之爲_二我神_一、爭不_二憶_一宗廟之爲_二宗廟_一哉、於是兩社之諍論濫觴起_二自_一兩庄之水論、自_二去年_一至_二今

春喧嘩相繼而不_二絕_一、都鄙因_二茲無_一安、其間所_二行之裁斷_一、多優_二寺社之訴_一、如_二忘_一宗廟之鬱、所謂衆徒不_二待_一御使之實檢、燒_二拂薪庄_一、剩殺_二害宮寺神人_一、彼時宮寺守護武士郎從所_二召取_一之四人之輩、武家頻雖_二怯惜_一、任_二衆徒申請_一被_二厚免_一畢、於_二衆徒張本_一者、于今不_二進_一之宗知、又募_二寺威_一不_二隨_一其召、又秋光庄民搦_二取大隅神人之由_一、寺家中_二之_一、宮寺又有_二諍申之旨_一、證據互雖_二不_一分明、依_二彼罪科_一被_二捕_一地頭於秋光、各雖_二爲_一宮寺之大訴、于今不_二被_一正之、其上彼下手人暗_二跡逐電_一、退雖_二可_一運_二召_一出其身之計、先被_二處_一主人右衛門尉康助於流刑畢、雖_二誠_一宮寺之所過、如_二不_一誠_二吾寺之所過_一、是優_二寺社_一之餘也、而宮寺依_二神事之闕忘_一、爲_二檢_一知薪之有無、下_二遣使者於薪庄_一之處、互有_二喧嘩_一、申狀水火也、衆徒驚_二刃傷殺害之聞_一、訴訟出_二自_一楚忽、不_二經_一次第沙汰_二欲_一及_二入洛_一、僧綱具雖_二承_一子細不_二達_一御定之旨歟、重不_二述_一旨趣、忽勸_二神木發_一向宇治、剩拋_二御櫛_一衆徒退散、寺社樞畢閉塞、佛神事悉退轉、事之猛惡雖_二起_一衆徒之結構、且依_二恐_一神威、且依_二思_一寺事、宗清解_二別當職_一被_二止_一所務、下手人

宗種以禁其身、其上也、被付宮寺之因幡國又被召加之、裁許之所及無、訴訟之不足歟、而稱非本訴、衆徒猶不承伏、凡公家之斷罪法令有限、人有罪之時、先仰法家勘罪名、隨罪狀之輕重、有罪科之淺深、律令之所裁向今無異、而中古以來、衆徒之訴訟異他之時、不勘罪名、押而斷罪間、貽其例、則寬治爲家朝臣、建久宗宣等之類也、彼者非常之斷、人主之所專、皆是月卿雲客已下甲乙人也、依他社之訴、宗廟總官斷罪之例、曾未聞之、且長治、光清相語帥季仲卿、射危竈戶宮神與殺害山門宮仕神人之時、逐官底之間、雖有造意之露顯、雖及罪名之沙汰、即被召返之、季仲卿雖不遁流刑、光清齋務之停止猶无一日遵行之實、明時之聖斷定有由歟、以彼思之、宗廟總官輒不可被行刑之由、已以炳焉、彼度經次第沙汰、雖有罪猶如此、何況今度自遁對決、於眞僞未決哉、只猥訴申流罪、太雖乖道理、偏怖神威、准勅勘而被停任、所職已希代之裁報也、是只祖神勝于他社之所致也、此上以難治之朝議、送訴訟之日數、殆非危朝家之謀哉、抑條々

裁許之上、且爲下增神威、謝神鑒、爲寺社爲要樞事、可被計行之由被仰下了一、其中始於宇治所被仰出之三箇條、故菩提山前大僧正之諡號、春日社臨時祭同奉幣公卿使等是也、此內於二箇條者、雖何隨申請可被行之由又被仰下了、此條宗清之罪科都不可被行之時之議也、於今者宗清已被停任了、其上者、三箇條內一事、可被計行之由被仰下了一也、而始二箇條可被行之由被仰下了一之處、今又爲一事者、其沙汰次第減少之由、寺僧稱之云々、於御定旨者、始終之斟酌更不相違、今度爲顯吾神之尊崇、奉幣使可被用公卿、上雖有稻荷之靈社、超而有此儀者、社壇之眉目可足歟、凡今度事難治之子細、已以至極、御定雖盡理衆徒不離伏、偏爲達濫訴、如亂理、致長者有何過、衆徒可存蠹害哉、我寺建久之再昌者、故禪定相國獨爲檀那、入力運功並覺開樞、伽藍之復舊基莫非被懇誠、爲寺僧思寺事之輩、爭不憶其遺德、燕民不伐甘棠、豈非思邵伯之德乎、今稟彼餘慶、爲氏之長、爲帝之外祖、秉周公之政、是祖神之擁護也、三寶之冥助

也、爲社爲寺有粉骨之志、然而聖斷之非據不可讓于人、冥顯之恐不遑欲謝、寺僧若思長者之安然者、察此旨可歸其理之處、猥結煙鬱欲亂議朝、爲神有何益、爲衆徒似无要、昔則長者有賢政有感應、衆徒思道理思寺事、今則時世澆季也、長者又不肖也、衆徒不辨物情不思寺事、當此時逢此事、進退惟谷、怖畏臨淵、翻諸衆之心、伏一言之理者、反邪歸正道也、不可背神鑒、自可叶冥慮歟、以此趣猶可被仰含衆徒者、長者宣如此、悉之、謹狀、

正月廿七日

左大辨爲經奉

謹上 東北院前僧正御房

追申、一切經供料河口庄事、禪定院僧正内々被申之旨如此、供料事住衆有愁之由、日來聞食、庄務事經衆相議定其仁、全供料惠寺僧者、可爲興隆之一分歟、懇志之餘被計申衆徒、爭不允容乎、

二月廿一日、着御本社、

三月三日、戊申、御祭被行、二月九日者、依開門一延引也、

七月一日、御神事以後、以西刻御社閉門、對八幡宮

別當宗清御寺之訴訟依不開、閉寺門、寺僧逐電、社頭同可有其沙汰之由、以中綱衆徒觸遣之故也、十九日、御山木又枯之由依風聞、以三方神人見之、即枯云々、廿三日、衆徒召神人五十人、長谷河等男子向衆徒放矢、仍悉燒屋、可令追放云々、仍神人下向、但被制中綱、廿八日、依衆議金堂御遷座、十月廿九日、寺門被開了、十一月二日、大明神御歸座、廿九日、公卿勅使官幣立宗平宰相勅使讀宣命云、

天皇我詔旨度掛畏岐春日乃廣前爾恐美恐毛申賜者久申久秋初以降多天下不靜須南北乃衆徒屢起底寺社乃門戸不開須或者賢木乎奉移寺中或者神與乎奉振山上留因茲氏收穫之利評延怠是久志今屬無爲之化氏欲果有例之勤布其期雖推移止此事難止多且者大神厚御助介廣爾惠乎令施給氏自今以後毛五穀垂穎禮萬姓成娛乎古有度所念行氏奈故是以吉日良辰乎擇定氏參議從三位藤原朝臣宗平散位從五位下惟宗朝臣盛基等乎差使氏禮代乃大幣乎令捧持氏奉出給布大神此狀乎平久安久食聞氏雪表豐年之瑞志風扇治世之德氏天皇朝廷乎實位无

動久常磐堅磐子夜守日守爾護幸位奉給氏神鑒忽及
比聖曆無疆奈御代度護恤美給度恐美恐美申賜者久申
辭別恐申賜者久去三日喜神木之歸座氏差行季雖
謝申度猶爲增冥威免又爲致宿養免始自今
般氏至向後氏專以公卿氏可爲敕使之兼又若
宮之祭禮者當社之壯觀奈殊凝叔襟氏可奉官幣志
十二月十七日、若宮祭、依度々閉門報謝、自今年
每年不闕、可被奉內藏寮官幣、

祐春記抄

祐茂孫
祐賢子

弘安四年、十月六日、神木御入洛、御法成寺金堂、
同五年、四月三日、天變出現、則大臣以下火急之御愼、
兵亂并諸人疾病、四五六月中不可殘人云々、
八月十二日、新院之御舍兄圓滿院宮御閉眼、
同日、新院之姬宮九御閉宮云々、彼宮者御祖母大宮女
院御同宿也、御母左大臣實雄公女、
院宣案文、

興福寺訴訟間事、大隅薪兩庄之界、連々確論、度々
珍事、職爲由斯、仍云大隅庄云薪園、以關東一

園之地、可被立替、可爲永代靜謐之基歟、賴重
職直罪科事、任申請處流刑云々、此上不日奉
歸座神木、可遂行寺社佛神事之由、可有御
下知之旨、

院宣所候也、以此趣可被申關白殿之狀如件、
十二月七日
權大納言經任奉

權右中辨殿

追申配流國、賴重越後、職直土佐、如此候也、

十二月廿一日、御歸座、

正應四年、正月十七日、遷座金堂、同廿日、出金堂、
著木津、同廿一日、敕使左大辨兼
仲氏院也下向、但木津河ノ

南へ、不可入之旨、衆徒以神人相觸之間、河ヨリ

北邊ニ在之、

二月三日、爲勅使、新宰相雅藤、并頭中宮亮仲兼、下

向問答、同廿三日、自木津御歸座、寺訴條條公家御

成配、所謂吉田庄預所當寺々僧ニ被返付事、轉法

輪料庄同被付事、興福寺造營條條任ニ寺申請御沙汰

事、同國司改易事、同被付新國司雅藤卿事、同爲造

營淀闌米二箇年被寄事、權別當印寛法印被補僧

正事、凡人僧綱維摩遂講、寺訴無所殘者也、

四月廿日

春宮大進師親上

三月六日、今度御歸座爲御報謝、被立_二勅使、

十二月廿一日、補_二理移殿、其故者、五箇條訴訟云々、條
條者、社頭造殘、寺造殘、神人及傷事、一切經檢校大乘

院不可_レ被_レ奉_レ替事、龍花院々務不可_レ被_レ進_二他方、
則大乘院可_レ有_二御進止事等也、

同月廿七日、御遷座移殿、

同五年、正月十三日、自移殿遷_二座金堂前、

二月一日、可放_レ氏諸卿在_レ之、白馬節會衣笠宰相中
將、冬良卿踏歌節會鷹司宰相、宗嗣卿同出仕、并法勝寺修

正奉行左中辨俊光朝臣、九日御方違行幸供奉、右兵衛
督長相卿、元日節會參右少辨爲行、御齋會奉行藏人治

部大輔雅俊、踏歌節會權右中辨顯宗朝臣、

四月十六日、關東使者近日入洛、攝津入道、攝津前司、
大間判官、已上三人、廿一日御歸座、西刻出御金堂、同刻着御本社、

今度御成配繪旨、

龍花院、并傳教院、宇野庄等事、如元先可_レ被_レ返_二
付慈信僧正也、此上事、任道理追可_レ有_二其沙汰、

於_レ今者不可_レ奉_レ歸_二座神木之由、可_レ有_二御下
知旨、天氣所_レ候也、以_二此趣可_レ令_レ申給、仍執

達如_レ件、

祐世記抄

嘉應二年、十月廿一日、長者殿與_二小松大納言衆_二合

同、廿八日酉時、多武峯御墓頂月許シテ二光テ雲登、

同日、又京中飛、又將軍墓同日戌時鳴、又廿九日酉時、

卅日酉時、御墓鳴、又同日、四條西洞院光天飛、酉時ニ
破散也、

注進春日御神木御歸座事、弘安五年十、二月廿一日、

訴條々開_二眉目事、

神木御入洛之日致_二狼藉之武士内、伊藤左衛門尉
能兼、國、安藝河原口二郎兵衛尉政保、加賀國、拓殖新左衛

門尉清繼、國、備後大瀬藤内兵衛尉知國、伯耆國、已上四人、

去年二月之比被_二配流_二畢、其上所_レ被_二召置_二之大隅

庄神人五人被_レ宥_二免之、加之或被_レ付_二相論界於當

口領大隅庄、或被_レ止_二八幡檢校妙清法印社務事、可

被_レ寄_二附安藝國於當寺_二之由雖_レ被_レ下_二院宣、本訴

條々猶稱_レ無_二勅許、寺門不_二落居_二者歟、仍被

仰_二下事由於關東之處、同年六月下旬之比、武家

御使三人、甲斐備前々司時秀、佐々木對馬前司氏信、口藤民部承葉連、令上洛、云當

寺云宮寺、被尋究兩方是非之後、葉連一人同九

月下旬之比馳下關東、畢、而十二月五日歸洛、同六

日被申武家御返事、歟、仍七日被下院宣、偁、與

福寺訴訟間事、大隅薪兩庄之界、連々確論、度々珍

事、職而由斯、仍云大隅云薪園、以關東一圓之

地、共可被立替、可爲永代靜謐之基、歟、賴重職

直罪科事、長者宣云、御歸座日次被相尋之處、

來十七日爲吉日、其外前後皆以不快云々、件日無

相違之樣、可有其沙汰之由、同所被仰下也

云々、雖然妙清法印改補、并源家公卿流刑事、猶依

無勅許、寺門不落居之間、於妙清法印者、即

解官、以別常守清法印被轉任檢校、畢、仍十七

日御歸座事、重被勸仰下一間、寺門少々雖有承

諾之氣、猶依不一揆、色々供奉人不及參向之

間、長者殿下已下氏諸卿者、既雖有御出仕、法成

寺御旅所旁依爲難治、十七日御歸座事臨時俄令

延引畢、然間、同日午刻源氏公卿資平具房等卿、可

被配流之由、重被下院宣畢、此上者、條々大

訴、一事無所殘預、聖斷之間、同廿日衆徒皆悉

參御迎者也、

祐植記抄曆應口年、

注進當社造國司事、

承曆三年御造替、廿四年、國司丹後、

長治元年御造替、廿六年、國司上總守藤師保、

永久三年御造替、十二年、長門守高階能遠、

大治二年御造替、廿四年、相模守藤盛重、信濃國功、

長承元年御造替、十八年、阿波守秀行、

康治二年御造替、十二年、上總守藤季兼、

永曆元年御造替、十八年、殿下法性寺殿御沙汰、土左國功、

治承二年御造替、二十年、遠江守藤原盛實、

建久七年御造替、十九年、左馬頭藤忠綱、

嘉禎二年御造替、廿二年、和泉守顯方、攝磨國功、院御分國、

弘長元年御造替、廿六年、四條大納言隆親卿、

弘安十年御造替、廿五年、造國安藝、

永仁六年御造替、十二年、左少辨雅藤、

元應二年御造替、廿三年、

堀川中納言光藤卿、造國上總飛騨伯耆、淀津升米荒地中山駿實、

德治三年、七月十三日、自法成寺、神木御歸座、

歷應二年、五月廿一日、南都大將仁木兵部大輔明日出

門、廿九日長者殿下伯父妙香院殿入滅、晦日國母宣政

門院御出家、

同三年、六月廿日、神木自金堂前御歸座、

院宣案

河内國楠葉關所、被^充光^充春日社造營料所也、不^レ嫌^ニ

神社佛寺權門勢家、領土責任^ニ先例^ニ可^レ致^ニ其沙汰^ニ

者、院宣如^レ此、仍執達如^レ件、

曆應三年七月廿四日

權中納言判

祐辰記抄

文明十七年、炎旱、

就^ニ病事流布、御祈事一七箇日、一社一同可^レ被^レ抽^ニ

精誠^ニ之旨、被^ニ仰下^ニ所候也、仍而執達如^レ件、

五月四日

右京亮賴廉奉

祐維記抄

永正三年、五月廿四日、卯刻初點、古市播州澤藏軒自^ニ

陣所、武家衆ヲ相具、筒井方籠居井戸城ヲ責落畢、筒

井方雜兵已下二百人計生涯了ト云々、同郡山城衆落退

ヲ、般若寺文殊堂西北邊播州子丹後并伯東相語、國中

へ出頭ト行合、戊亥脇衆廿人計生涯了、於^ニ筒井方^ニ

根本之衆共也、

九月四日、多武峯籠居武士共、子刻ニハッシ了、仍火

懸退之間燒失、中々難^レ記^レ之、明^ル五日、一口中燒畢、

武家衆四萬人許有^レ之云々、大織冠ハ奉^レ出^レ之、御神殿

ハ燒失云々、六日、三善多武峯ヨリ歸陣^ニ、以^レ次當社

參詣^ニ、惣奈良中亂妨不^レ致^ニ狼藉^ニ、若伴々者物惣ヲ現

者、三文キリノヨシ加^ニ成敗^ニ云々、參社以後直ニ宇治迄

上洛云々、九日赤澤新次郎社參、

同十七年、正月小二月小三月大四月小五月小六月大閏六月小

二月五日、傳説云、津國コシ水ノ城、去三日夜落了、大

將ハ河原林也、勢ハ不^レ損云々、池田イタミ迄細川方ノ

人勢悉以引退云々、

十六日、酉刻、津國細川方陣破、一細川方勢散々打死

了、則細川右京大夫富國近江へ落行給云々、公方様ハ

無殊儀京都ニ御座候也、六郎殿同三好ハ未津國在
ノ之次河内尾張殿御曹司、并遊佐、タカヤノ城ヲ未_レ迴
之者也、總州并越智大和衆、悉以タカヤノ城ヘ打寄
了、雖然尾州無_ニ合力_一又筒井順興モ陣立無_レ之、赤
澤新兵衛ハ西國ニ在_レ之、一圓ニ三好ニ令_レ屬、一萬事
令_ニ成敗_一之由、其聞有_レ之、

三月十六日、河内高屋城落畢、御曹司、同遊佐、越智請
取落シ被_レ申訖、當國一圓ニ越智進止ナリ、武家一向
ニ不_レ及_ニ入部_一者也、六郎殿ハ、去二月十六日夜尼崎
舟沈テ御他界云々、未諸人六郎殿ヲ見ル者一人モ無
レ之云々、

三月十六日、河内高屋城以_ニ屢之儀_一ハツシ畢、尾州御
曹司、同遊佐、越智令_ニ同道_一ノガレリ、但時刻相違シ
テ、御曹司并遊佐手負ル、ト云々、同御間廻衆、究竟ノ
衆共、八十人餘打死了、津國陣、去月十六日破之後、三
十箇日之間、彼城タマリ了、

十七日、大和衆自_ニ河内_一悉以歸陣也、赤澤大和ヘ亂入
之事自_ニ細川六郎殿_一上總殿ヘ、三好大和神國之儀有_ニ
其恐_一之間、赤澤亂入不_レ可_レ叶之旨申付候間、於_ニ其
方_一可_レ被_レ成_ニ其心得_一旨、其案内有_レ之、此旨古市播州
公胤方ヘ、上總殿ヨリ又被_ニ申送_一云々、當國ヘ武家不

入之儀珍重々々、

五月朔日、去十六日ニ細川高國江州守山ノ八日市迄
出頭、今日少々高國勢於_ニ洛中_一合戰有之由、有_ニ其
聞_一三好ハ細川高國ノ屋形ニ在_レ之云々、爰六郎殿ハ未
上洛無_レ之、去二月十六日尼崎合戰ノ時海ヘ被_レ沈歟
云々、

六日、辰刻傳說云、昨日五日戌刻ニ、三好陣公方様御近
所ニ野陣張有之處、無_レ戰破_レ之山階寺ヘ落行云々、細
川高國七萬騎餘有_レ之云々、吉田ニ高國ハ被_レ取_レ陣、諸
勢ハ京中ヘ入、一爰三好ガシウト界敷ハ打死ニト云々、
其外高國ヘ裏歸面々十人餘有_レ之云々、次六郎殿ハ未
レ被_レ見_レ之、去二月十六日ニ海_レ沈給事一定々々云々、

七日、筒井足輕少々令_ニ出頭_一、超昇寺山村柴屋燒之、古
市ハ山ノ城ニ被_レ座々超昇寺矢田番條同心ニ其勢千
餘有_レ之云々、同日傳說云、總州河内八尾ヘ被_レ座之處、
昨六日沒落云々、片岡向ニ被_レ出云々、

八日、筒井衆イハ井河迄、物數千バカリ詰寄燒_レ之、古
市衆ハ油山ニ少々有_レ之、不_レ及_ニ一向戰_一兩方引退了、
九日、古市山ノ城昨夜落_一畢、自_ニ未明_一筒井勢押寄、
古市鹿野園郷燒破_一、古市内衆筒井ヘウラガヘリ

衆有^レ之云々、井上九郎山林藤原此面々ト云々、次古市山ノ城ヲ被^レ破云々、筒井自身ハ未^レ被^レ出頭、并十市モ出頭ノ沙汰無^レ之、

細川高國モトノ屋形ヘ歸着之次、公方樣并式部少輔無^レ殊儀^ニ者也、勢州ヨリ公方樣ヘ不^レ可^レ有^ニ御仰天^一旨被^レ申云々、津國ニ六郎殿方ノ勢一人モ無^レ之、悉以退散之間、高國方者共還住之間、寺社本所々領等不^レ可^レ有^ニ相違^一旨、有^ニ其間、珍重々々、

十日、河内ヘ尾州御曹司并遊佐還住之也、總州ハ昨日九日吉野迄落給云々、越智調法云々、次筒井ハ桃尾マデ出頭也、與^ニ越智^一和睦之儀ヲ、遊佐取合之云々、

十二日、實說曰、三好曇花院殿ニ去五日ヨリ忍テ有^レ之處、細川殿トリマハサレ、可^レ被^レ出之旨、嚴重被^レ申之間、無^レ力被^レ出之處、三好子兄弟兩人、并ヲイ、以上四人出之、兩人子ヲ三好申云、高國ニ被^ニ召置^一末代御被官ニ被^レ成候テ可^レ被^レ下由、佗事申之間、先以ハカマ着ニテ細川殿ヘ參、三好ハ小川百萬返ノ講堂ニテ可^レ被^ニ生涯^一旨一諾之間、彼ヲイト兩人同道^一、三好ハ令^ニ出家^一、道フクヲ着テ彼講堂ヘ出^一、既及^ニ其時刻^一之處、三好ヲクレテ有^レ之ヲ、ヲイカイシヤクニ

寄テ頸ヲ打落テ、其後彼ヲイタチナガラ高聲ニ我コソ三好ガ内者ヨ、自害コレミヨトテ、立ナガラ腹ヲ切ルト云々、大強ノ者ナリト云々、昨十一日午刻事也云々、三好頸ハ、同キ未刻ニ細川殿ヘ參ト云々、次六郎殿ハ、去二月十六日海ヘ沈給フ、主從共以終畢、サンシウハ、アハノカミ殿ヘ、高國ヨリマイラセラレ了、次三好跡ヲバ、今度ウラガヘリノ面々ニ被^レ下、ト云々、

十三日、傳說ニ、三好子兄弟、昨十二日於^ニ百萬返講堂^一被^ニ生涯^一云々、實說也、

廿三日、古市内衆出頭之三百餘有^レ之、一院地藏堂陣ニ取之、夜詰ノカ、リ、國見嶽其外白豪寺邊勝願院前ニ燒^レ之、筒井方中坊美作大將ニテ、宿院ノ町ニカイタテヲアケ、小家共少々取退テ陣取、其勢千二百餘有^レ之、未^レ及^ニ合戰^一、筒井ハ井戸ニ着陣^一、十市ハ田邊ニ着陣^一、下長ニテ野フシ有^レ之、未越智ヨリノ勢不^レ上云々、明廿四日兩方共以可^レ有^ニ合戰^一由風聞、廿四日、古市之軍勢共悉以退散也、自^ニ越智^一合戰之事不^レ可^レ被^ニ沙汰^一旨、嚴密ノ音信有^レ之ト云々、子細ハ何共不^レ知^レ之也、未箸尾衆ハ毎日出、合戰、ト云々、廿五日、筒井方軍勢宿院着陣之面々少五六百人、一院

并白毫寺へ二手ニ上テ、夙ニ箇所新古焼ニ破之、子細ハ古市之人勢令出入之故ト云々、

廿九日、中坊陣所宿院郷へ、自ニ古市ニ令ニ夜討、シンセウ院郷悉以焼破畢、宿院モ少々焼レ之、兩方及ニ合戦之處、中坊衆同與力百許、古市衆并高山超昇寺衆、合五百餘有レ之、及レ鍵五箇度有レ之、柱松明ヲ令用レ之、立置テ戰、終無勢ニヨリテ中坊打負、宿院ヲハツシ畢、打ル、人數七人云々、古市方ニハ無レ之、但鹿野園重手ヲ負ト云々、次奈良中ニ古市軍勢悉入、仍宿院郷每家令ニ亂入、雜物等悉以取レ之、剩筒并被官衆家へ亂入シテ物ヲ取事多々也、次不空院辻下高島ニ、古市衆陣ヲトリ、地下人家ニ亂入、雜物取レ之、或ハ錢ヲカケ、種々ノ惡逆言語道斷也、社頭之出入、并商賈以下珍事無レ極之者也、或者往反之者ヲハギ、五錢三錢ニ及迄商賈ノ物ヲ奪取之間、各愁嘆無計、先代未聞之儀也、筒井ハ井戸城ニ着陣之、無ニ殊儀ニ者也、奈良中ニハ筒井衆一人モ無レ之、古市一圓ニ知行之也、未古市ハ東山内大平尾ニ被レ居テ不出頭、内衆バカリ奈良ニ在レ之、

六月二日、中坊出頭也、法蓮郷ニ着陣、

三日、筒井軍勢二千餘奈良へ入、并中坊衆出合、不空院并一野院ニ着陣候、古市軍勢共追拂之、大平尾へ悉以古市衆退候、筒井方ヨリカマトキノ上迄送之處ニ、不レ及ニ合戦ニ古市衆ハツシ了、

十日、中坊大將ニテ今市城ニ入候、奈良中ノ筒井衆悉以入レ之了、越智ヨリ井戸へ可レ被寄詰ニ旨一定ト云云、次古市者奈良へ可レ有出頭云々、則内衆各出一、三條郷ニ中坊矢藏ヲアケヲクヲ、悉以破之、剩亂入シテ酒ヲカケ、種々ノ惡行言語道斷也、明十一日井戸筒井本陣へ、自ニ越智ニセメアガルベギ由、有ニ其沙汰也、未京勢者一人モ不レ下候、爲ニ神國之間、不レ可レ被レ成ニ其綺ニ旨、細川高國被レ申レ之云々、然上者、越智方合戦ニ可レ被レ得ニ勝利ニ者歟、次越智者佐味迄出陣候、筒井軍勢平等坊城へ被レ入了、

十二日、古市出頭也、ハフセニ着陣、野陣云々、但白毫寺堂并庫裡ヲ打破テ、モトノ山ノ城ニ木屋ヲ被レ懸候云々、惣奈良中令ニ亂入、惡逆共言語道斷也、越智ハカキカラコ迄陣立レ之、雖レ然合戦於ニ于今ニ無レ之、

十九日、越智與ニ筒井和睦之事、尾州御曹司、河内二郎殿、并細川殿被レ仰レ之、遊佐使者ニ雪松、并御曹司

一家之僧、同道シテ入御云々、筒井返事ニ、一切和與ノ儀不_レ可_レ叶之旨被_ニ申放_一云々、

廿二日、越智與_ニ筒井_一、和與之儀、遊佐強テ屢之間、大略兩方承諾歟云々、則兩方之軍勢少々歸陣也、自_ニ越智_一以下、左馬允、古市之陣所山ノ城へ、各和與之屢之間、先以可_レ有_ニ御歸陣_一旨被_レ申、則古市今夜歸陣_一、大平尾迄歸陣云々、

廿三日、中坊奈良へ入、三條ニ被_レ座、ト云々、

傳説云、林堂於_ニ廣城_一令_ニ萬歲_一ト云々、生涯スト云々、併當國知行之神訓云々、

八月、近日筒井順興在_ニ奈良_一、一國和睦者未_ニ治定_一、但與_ニ筒井越智古市_一此兩三人者和與歟云々、十市ノ跡ハ未越智知_ニ行_一之也、近日十市在京之身上口住□□□□ト云々、

尾州内衆ト被_レ及_ニ合戰_一、打負テ人二三十人ニテ泉界迄没落候ト云々、仍廣ノ城大將之事、尾州御曹司河内ニ被_レ座、弟□内衆トノ相定云々、尾州近年當國ヲ林堂熊野衆以下ニ被_レ出_レ之、及度々寺社領押領、併大明神之御訓云々、

十月九日、越智與_ニ筒井和談_一、於_ニ法隆寺_一參會了、

河内遊佐取合、則法隆寺へ遊佐方出、取合、ト云云、次筒井方與力超昇寺、高山根尾番條嶋、各越智へ引汲之處、只今被_ニ返付_一、ト云々、雖_レ然先以河内遊佐方預之所領等百姓ニハラ□セヲクト云々、次箸尾只今筒井へ禮ニ可_レ被_レ出支度之處ニ、上野方近日萬歲之間無_ニ其儀_一、是モ筒井へ如_ニ先年_一可_レ被_レ屬旨被_ニ申定_一云々、次古市者和談無_レ之、雖_レ然所領等者悉以無_ニ相違_一知_ニ行_一之、次十市跡越智一圓ニ知_ニ行_一之、則牢人也、是モ當年計越智へ河内屋形ヨリ被_レ出_レ之、來年ヨリハ十市出頭サセラルベキ旨堅固ニ被_ニ約諾_一云々、

閏六月之事、去明應十辛酉年ニ在_レ之、其時モ以外ノ亂也、萬人窮困無_ニ其限_一、當年閏六月有_レ之、天下ニ亂有_レ之、萬民窮困先年ト同前也、

當國關所地十市郷バカリ也、自_ニ當年_一越智民部少輔一圓ニ知_ニ行_一之、仍奈良戌亥者雖_ニ相迦_一無_ニ其實者_一也、

是年八月廿三日、改_ニ永正十八年_一、爲_ニ大永元年_一、依_ニ三月御即位_一也、

大永元年辛巳、正月小、二月小、三月大、四月小、五月小、六月大、七月小、八月大、九月大、十月小、十一月大、十二月大、

三月七日、公方樣式部少輔ヲ被_ニ召具_一、京中ヲ御出ア

ルト云々、界迄御出アツテ、尾州ト御同心アル歟之由
風聞也、淡路嶋へ御出ト云々、

廿二日、今日御即位有之云々、昨日廿一日御治定之
處、大雨之間、廿二日へ延引也、

五月、近日俱戸羅還住之數年伴堂山城守令闕所之處、
片岡方越智民部少輔方へ被ニ相屈、今度越智承諾云々、
伴堂方へ替地ニ、林堂跡ヲ被レ出レ之云々、十市跡越智
一圓ニ知行之處、河内遊佐方爲レ屢、近日可レ被ニ還
住ニ旨有ニ其聞、越智へ替地ニ、河内ノ十七箇所ヲ可
レ被レ出之由、有ニ其沙汰、十市令ニ出頭ニハ、當國可レ爲ニ

一統ニ者也、寺社大慶也云々、尾州ハ紀國廣城ヘカチヲ
ラヲ相語入給處、散々ニ打負テ、淡路嶋へ被ニ引退ニ云

云、公方様ト御同所ニ被レ居歟之由風聞也、

六月五日、筒井順興越智へ智入一、聽而六日夜歸宅云

云、彌當國可レ爲ニ無事ニ旨及ニ風聞ニ了、

七月二日、今日、播州ニ御座アル若君様ノ御迎、細川

ノ典廐、其外アマタ被レ參云々、當年十一歳ニテ御座アル
ト云々、是ハ江州ニテ御萬歳ノキヤウケンシ殿ノ御

息云々、公方様ニ細川高國被ニ居申ニ云々、次アハチノ公

方様モ御出陣アルベキ由其聞有レ之、

八月廿三日、大永元年年號ナリ、將軍御替目ニ、必以ニ
年號ニ改レ之云々、諸家撰被レ進中ニ、高辻殿勅點是也ト

云々、此年號スマシテ讀レ之、大永元讀レ之也、九月、近
般、嶋ノ公方様可レ有ニ御上洛ニ之由、以外之物云在

レ之、國中サハギ此事也、

十月十三日、平郡嶋方沒落、也、自筒井被失之者也、

十八日、猿澤池見之處、以外ニ濁リ了、今度程濁タル

事先代未聞也云々、

十九日、大地震有レ之、

廿三日、嶋ノ公方様、泉界迄御上洛之由、筒井へ自ニ所

所ニ注ニ進之、

御教書折帶御黒染也

地震御祈事、從ニ來廿七日一七箇日、殊可レ抽ニ精

誠ニ之由可レ令レ下ニ知春日社ニ給ニ之旨被ニ仰下ニ候

也、仍執達如レ件、

十月廿三日 右少辨尹豐奉

廿四日、上總殿與ニ尾州ニ和睦有レ之、而河内次郎殿へ

トリカケレテアマ野迄御出頭之免燒レ之畢、越智筒井

風森迄、河内ノウシロツメニ可レ被ニ陣立用意ト云

云、次河内ノ屋形ハ、マサシキ尾州ノ御息也、然ニ攻

殺サントノ御所行、不思議ナル題目ナリ、公方様者、界ノカタキ屋ニ御座ト云々、京ノ公方方ト御和談ノ隙有レ之云々、内郡焼レ之了、上總方遊佐出頭シテ燒レ之云々、

十一月朔日、筒井自ニ奈良、我館迄陣立ト、内衆者八木迄出陣之、自ニ河内二郎殿、衆内郡迄被ニ出陣、總州ト可レ被ニ合戰ニ支度云々、

公方様、界ノカタ木屋ヲ退キ給云々、泉ノカゾノヲ迄御出之由風聞、公方様ヘ引汲諸大名一人モ無レ之、然間淡嶋ノ面々界迄送捨テ、此間御座アル御所ニ火ヲ懸ルト云々、總州内郡マデ御出頭之處、御陣破テ散散ニ成給フ、自ニ河内并當國、越智筒井大軍ニテアル間、總州被ニ退散了、次尾州ハ無ニ出陣シテ、讚州六郎殿ノ後室ノ許ヘ聲入ト云々、當國衆少々、總州ト引汲有レ之、去月廿六日、白土中方廻文狀共卅通餘、古市内衆一人所持シテ上洛スルヲ、取レ之テ中方筒井ヘ被ニ遣之處、自ニ筒井細川殿同河内次郎殿ヘ被ニ遣レ之、當國ノ引汲衆以外之仰天也、先以風聞說、古市、萬歳、岡、箸尾、片岡、此五人根本歟之由其沙汰アリ、嶋ノ公方様者、泉ノマキヲ迄御出アルト云々、

三日、風聞云、總州陣破ル事必定也、則筒井昨二日歸陣也、當國之物急早速ニ令レ靜ニ諡之了、

十四日、爲ニ筒井、古市鹿野園ハチフセ藤原ヘ大軍ニテ押寄燒拂了、子細者、今度總州ト引汲之故也、越智ヘ付テ種々雖レ爲ニ佯事、越智返條ニ、此間十市跡三箇所迄闕所ヲ進置知行アリナガラ、敵方ト引汲ミアリテ剩十市トモ種々被ニ申談ニ之事一段ノ所存也トテ、不レ及ニ返事、文箱ヲ被ニ返云々、尾州ハ六郎殿ノ後室許ヘ聲入之隙有之處、六郎殿ノ内ノカイフタハカツテ尾州ヲ打ニ實說云々、依レは今度公方様モ界ヘ御出候、又總州ノ陣モ破レ了、當國彌安穩之基也、

同二年八月四日、大平邑地兩郷ヘ、自ニ筒井、押寄ラルル者也、人勢數五千人有レ之云々、

五日、筒井人勢悉以歸陣ト、邑地郷攻伏テ燒破、即時ニ屬ニ本意ニスト云々、此元來ハ錢ヲ被ニ懸之處、此方ヘ御出アリテ可レ召之由令ニ返答、慮外云々、

十六日、南曹奉書、

就ニ變異連續、自ニ來十九日、一七箇日、一社一同別而可レ被ニ抽ニ丹誠之懇祈ニ之由、被ニ仰下ニ旨、南曹辨殿所レ候也、仍執達如レ件、

左衛門尉光泰

廿七日、去十七日、尾州於淡國^ニ頓死云々、必定也、去年此說有^レ之、雖^レ然雜說也、近般當國^ヘ可^レ被^ニ打入^一旨用意之處、萬歲也、偏神慮^{云々}、

同四年、九月廿七日曉、笠置^ヘ、仁義七郎江州九里一タウヲ相語、夜打入之小柳生方古市實川各同心也、狹川ヲウシナフベキ支度也、神戶四箇郷、神供料并寺門領、違亂可^レ爲^ニ必定^一者歟、

河州ト總州ハ日野ニ着陣、遊佐ハアマノ、仁王山ニ、アマノ、寺坊ヲヒキテ城ヲ構テ有^レ之、次總州方勢七千餘有^レ之云々、

同日未刻、笠置亂入ノ勢其數二三百人有^レ之、狹川自身セメ上テタ、カフ處ニ、仁義七郎方人衆散々打負テ、人衆ハテ了、打死アマタ有^レ之、

十一月十三日、筒井龍田迄出陣ス、越智衆同河内次郎殿^ヘノ合力也、同日總州ノ陣所仁王山^ヘ、河内コンタ井寺城衆ツメヨスルト云々、次河内遊佐ハ又コンタ井寺^ヘ入之ト云々、次次郎殿身方根來一山悉以總州後^ヘ出陣云々、吉野衆長藪城衆トヒトツニ成テ、是モ同總州後^ヘ取寄スト云々、

十六日、筒井越智、河内^ヘ可^レ越之旨及^ニ風聞^一了、

十七日、筒井ヲ始テ、布施、萬歲、越智、各當國衆悉以河内ノ國分迄被^ニ出陣^一云々、

十二月九日、傳說、總州陣破了、去六日夜、高野^ヘノキ給云々、河内次郎殿エボシカタト^{云々}所^ヘ寄詰給故ニ、總

州人勢無人之間、不^レ叶ノキ給ト云々、

細川殿御サワシ津國トシタ迄御出陣候、旁以^ニ三叶給^一ト云々、當國衆各歸陣候、次越智ハ無^ニ出陣^一候、總

州ト同心之由風聞了、

享祿二年、四月廿一日辰刻、古市陣破テ奈良中ヲ退散

一、柳本彈正之内四人衆、富森越中、後藤、木之嶋、能勢若狹、同以令^ニ退散^一了、筒井ヨリ以^ニ禮錢^一被^レ屢如

此ト云々、柳本ヨリ早々可^ニ上洛^一旨飛脚ヲ下ト云々、應而巳刻ニ筒井衆奈良^ヘ入了、

廿七日、柳本彈正忠當國ニ亂入^一、則五箇庄高樋椿尾等攻^ニ落之^一、今市ニ着陣^一、彌寺社之諸年貢等可^レ令^ニ無足^一者也、

七月三日

近日炎旱以外之間、請雨御祈、從^ニ來六日^一七箇日、一社一同被^レ抽^ニ懇誠^一者、可^レ爲^ニ神妙^一候之由、藏人

辨殿御奉行所候也、仍執達如件、

散位景元奉

祐園記抄

永正八年、七月大十四日、筒井箸尾十市牢人、此子細ハ、河内守陣ヤブレ、則遊左河内守、十三日初夜ノ時分、筒井迄落畢、仍越智方ハツボ坂并タカトリ山ノ城ヘ入、布施檜原伴堂等同、仍古市牢人、今日鹿野園迄出頭了、

廿三日、古市與力之衆、鹿野園ノ上六寸ニ構、城被居了、上總殿ハ高屋ノ城ニ被入了、印叟其外ノ衆、大都津國ハ猶向、ハリマ赤松殿印宗合力ニ被立了、其軍二萬計有之由其聞有之、

廿六日、筒井箸尾十市寶來アキシノ大和ヘ入國了、雖^レ然無^ニ殊事^一、戊亥脇ノ衆我々ノ館ヘ被入畢、筒井ハ井上ニ被入、箸尾ハ十市其外ノ衆イチノモト乙本竹内ニ被居畢、其子細ハ高田ノ城ニ前高田上總殿ノ兩奉行衆有之、箸尾ノ城ニハ萬歲クシラ多武峯ノ衆有之故也、

八月小二日、古市ノ陣六寸ヲ、筒井十市箸尾戊亥ノ衆狹川等申合セメ了、未刻ニ落了、古市衆其外中山内吐山多田小夫、其外ノ衆大都合力之衆打死、其數七十人云々、セメ衆ハ一人モ不^レ死、手ヲイマデ也、古市其外少々春日山ヘニゲ入了、

十六日、京都破了、公方様大内殿細川殿、一萬計ニテ丹波迄被^レ披畢、印叟京ニ入テ前公方様江州御座之間、可有^ニ御上洛^一之由令^レ申云々、

廿四日、公方様重而京都ヘ彼丹波ヨリ入御、先陣大内殿細川殿其外御方二萬五千人アリ、件ノ印宗舟岡山ニ出向陣ヲ取、大内衆細川衆丹波口ヨリ切テ出、度々太刀打有之、終ニ印宗方切マケ、二萬計ノ者共悉ニゲチリ、彼舟岡山ヨリ北野、紫野ヨリ上京一條迄ノ間ニ、五千人計ハ打死、公方様懸^ニ御目^一之三千人云々、御方大内方細川方合三百人計打死云々、印叟ハ生執ニテ、同廿五日生涯アリ、

同十四年四月十七日、筒井牢人出頭云々、則奈良迄被^ニ出陣^一了、然處京ヨリ上使ヲ被^レ下處、其上使ヲ不^レ待筒井罷出候條、上意ヲ不^ニ承引^一歟、言語道斷、聊爾之由、上意以外御腹立之間、所々宇治邊迄下京衆悉歸

了、筒井ノ上次遊佐沙汰之處、上意以外之間、六條道場通世云々、仍廿二日卯刻ニ、筒井ハ奈良ヲ被_レ放_レ了、卅日、去廿七日號ニ公方様上使、爲_ニ和州ニ無爲之儀取合ニ下向_レ了、同大内殿ヨリ神代紀頭下向_一、則十市岡白土戌亥脇之衆無爲々々、筒井之儀未_ニ一途無_レ之、然間官符之儀、古市ヘモ無一定了、然處官符之事、彼式部少輔方可_レ存之由奈良中ヲ觸_レ之云々、仍寺門成_ニ集議、郷人ヲ大鳥居ヘ召出下知云、今度式部少輔方官符之事申懸云々、言語道斷之儀也、所詮爲_ニ彼方_一如何様之子細雖_ニ申懸_一、一切不可_ニ承引_一候、萬一物忿之儀申之者、貝鐘ヲ以打止ベキ之由、被_レ加_ニ下知_一了、則式部少輔方ヘモ被_レ申事ニ、寺門官符之事、筒井出頭之時ハ、筒井ニ令_ニ存知_一、古市出頭之時ハ、古市ニ令_ニ存知_一之處、官符之事可_レ被_ニ存知_一之由、言語道斷、先代未聞也、所詮急度被_レ止_ニ其儀_一者、可_ニ目出_一之由被_ニ申遣_一云々、雖_ニ兎角申_一、色々嚴密ニ被_レ申事依_レ有_レ之、重而申事無_レ之、

五月三日、畠山式部少輔方參社_一、

大永元年三月、近日京ノ公方様京中ヲ御開之由申_レ之、子細ハ細川家ヘ被_レ仰事有之由風聞云々、珍事重

事此事也、十日ノ早朝ニ聞_レ之、

天文五年、七月廿三日、山門ト京ノ法華衆ト取合出來也、山門ノ末寺越前兩寺江州ノ一國同心、數萬ノ勢云云、京都ノ法華衆ヲ可_ニ退治_一云々、子細ハ去春ノ末事歟、山門ノ阿闍梨於_ニ京都_一法華ノ談義ヲ被_レ致_レ之、其砌法花衆ト號シ彼談義ニ種々ノ答ヲ入之間答之處、件談義者少落日ニ成處、散々ニ失_ニ面目_一畢、ソレヨリ談義破了、然バ山門失_ニ面目_一之間、京ノ法花衆ヲ可_ニ成敗_一云々、去五月初頃事歟、然バ彼法花衆取出テ及_ニ合戰_一了、所々ノ法華宗合力云々、二萬騎餘モ有_レ之歟申_レ之云々、山門ノ勢十五萬騎モ有_レ之由風聞_一、廿五日六日大合戰アリ、廿七日ノ合戰ニ、法華衆切負、數千人打死云々、然バ上京下京大都燒失了、言語道斷之事也、但又傳聞、内裏其外上京三分一計ハ無_ニ大事_一、人死スル事三千人トモ四千人トモ數ヲ不_レ積也、又内裡ヘニゲ入者數千人アリ、女童部押コロサレ、又ハ水ニカツエテ死ス、四方ノツキツノ外ヘナゲ出シ_一スル間内程廻死人數百人有云々、

祐文記抄

東地井祐園子

永正三年、七月南曹奉書、

彗星出現御愼不_レ輕、別而抽_二精誠_一可_レ被_二祈禱_一之

由、被_レ仰候之間、南曹辨殿所候也、仍執達如_レ件、

七月廿一日

右兵衛尉元園奉

八月四日、去廿八日ヨリ、澤藏軒大和へ出陣ノタメ、

山城木津迄立之由風聞云々、二日戌亥、脇之衆被_レ落

了、言語道斷次第也、四日筒井被_レ落了、

九月十九日、澤藏軒上洛、

同四年、六月廿三日子刻、細川左京大夫生涯之打手、

同廿四日大和ニ在_レ之京衆浪人和田源四郎蘆田助次

郎ヲハジメテ、大和ニテ打死云々、其數七百餘人、同

廿五日、廿六日、大和牢人各出頭也、

祐磯記抄

辰市

天正三年信長朱印寫、

春日若宮拜殿領宇多郡宇賀志庄、同五節供料所

西殿庄之事、澤秋山令_二押妨_一由、不可然候、彼當

知行無_レ紛候旨、可_レ止_二違亂_一由、對_二兩人_一堅可

被_二申付_一事專一候、恐々謹言、

十一月朔日

信 長御朱印

信箋殿

當社若宮拜殿領宇多郡、同五節供料所西殿庄事、

澤秋山依_二違亂沙汰_一、北畠殿彼兩人可_レ止_二競望_一

之由被_レ成_二御朱印_一候條、全社納可_レ不_二相違_一之

由被_二仰出_一候、恐々謹言、

原田備中守直政

村井長門守貞勝

宮内卿法印但宗

春日社家御中

宇多郡南都領儀被_二仰出_一候、御意之通堅申付候、

但紛々申樣於_レ有_レ之者、御理可_二申上_一候、可_レ然

樣御披露賴入候、恐々謹言、

十一月五日

信 意判

大津傳十郎殿

御朱印持下候、則披露申候、宇多郡南都領之儀、

澤秋山違亂之由、堅御茶箋樣被_二仰付_一候間、別紙

御座有問敷候、紛々子細御座候者、重而可_レ被_二仰

候條、其御心得ニテ可_レ有_二御取合_一候由、御意候、

將又御普請之儀、大方出キ申、可_レ安_二御心_一候、恐
恐謹言、

霜月五日

吉 長判

深井左衛門尉

澗川左近殿御返報

宇多郡宇賀志庄、并西殿庄事、被_レ對_二御茶箋_一被_レ
以_二御朱印_一候處、于今不_レ被_レ止_二競望_一之由、不_レ
可_レ然候、早速退_二其亂_一可_レ有_二社納_一由候、恐々
謹言、

霜月十三日

原田備中守直政

村井長門守貞勝

宮内卿法印但宗

澤 殿

秋山殿

芳野殿御宿所

祐範記抄

元和四年、十月、此比卯刻東方彗星出現、星一段大也、
彗星餘光二丈餘也、先段辰巳方ニ出現也、光滅了、度

度天變希有也、不思議共也、

中臣社司補任記云、中臣正賴祐乘、建武四年四月二日
解官、無_二指科_一、但十九日披露、近衛殿御代、但南山入
御之砌、如此及_二御沙汰_一了、京都御攝錄者、近衛西
殿_{號可}、即祐永京都御攝錄辭申了、依_二天下動亂_一殿下
兩方御座故也、殿下吉野御座、京都五日出御也

嘉禎二年七月廿八日、金堂御遷座、同十一月二日、御
歸座、

文永元年八月二日、金堂御遷座、九月廿一日、御歸座、
建治元年六月廿二日、金堂御遷座。

弘安五年十一月廿七日、夜院御所、常葉井_{乃德治元}燒亡、

嘉元四年_{丙午}六月廿六日、御遷座移殿、七月十六日、自_{乃德治元}

移殿遷座金堂、同廿六日、御歸座、

永長二年三月廿八日行幸、

天永二年二月十一日、行幸、

保安二年十月廿八日、行幸、

大治三年四月廿七日、行幸、

嘉禎四年三月廿八日、行幸、四條院、

寬元四年正月十七日、行幸、嵯峨法皇、

建長七年十月十九日、〔御幸〕、本院、

弘安九年三月廿七日、行幸、着御着到殿、廿八日還御、

弘長元年九月一日、後嵯峨院御幸、七箇日、

文永四年七月十六日、後嵯峨院新院御幸、七箇日、

弘安六年十二月七日、中院御幸、五箇日、

正應元年四月廿日、御幸、七箇日、

同三年正月廿七日、本院并東二條院御幸、七箇日、

承元三年三月六日、御幸、女院、同、

同四年九月十八日、御幸、

嘉元二年十月二日、法皇御幸、

同三年正月十六日、法皇御幸、

同年三月廿三日、本院御幸、

元亨三年正月廿九日、明日廿日、還御之時可有御宮廻一、

永治元年二月廿二日、御幸、

寬元三年古曆

九月大丙辰 十月大丙辰 十二月小丙寅

同四年

正月大辛卯 二月小辛酉 三月大庚戌

四月小庚申 閏四月小己丑 五月大戊午

六月戊子 五日、夜京之町五條已上四條已下燒失、
同八日、建仁寺燒失、

建長元年

十一月大壬戌 廿八日、東北院僧正圓玄入滅隆房之内言子、 十二月大壬辰

同三年

九月大壬午 十月

二條寺主家記拔萃

寬正元年、畠山右衛門佐義就背_レ上意、被_レ逐_二下河州、
八月中旬、同九月廿六日、次郎正長雖_レ令_二安_二堵總領
職、義就不_レ渡河州之間、爲_二加_二對治_二政長下_二着南都、
閏九月十六日、於_二龍田_二陣替、同十月十日夜、義就手

勢夜ニ打龍田之陣、始ニ遊佐、譽田、滿田、甲斐庄兄弟、越智、備中彦三郎父子三人、其外打死軍兵不_レ知_ニ其數_一云々、

同四年、十二月廿二日、神訴之事御動座、兵庫關所落船事也、

同五年、四月十三日、御歸座、寺訴五箇條屬ニ無爲、一乘院領宇智郡歸渡、阿州佛地院領山田庄、田那部庄越前大乘院領藤澤郷、落船停止、合五箇條、

同六年九月廿一日、室町殿南都御下向、御宿所一乘院、若宮祭禮御見物、同廿九日還御、

應仁元年正月十八日、畠山尾張守政長與_ニ同右衛門佐義就_一、依_ニ家督相論_一於_ニ九重之内_一合戰、尾張守沒落、禁裏仙洞室町殿御幸行幸有_レ之、九月二十日夜、◎應仁以來年

代記作赤松次郎法師之手放_レ火南禪寺燒失、十月三日相國寺煙上、於_ニ彼寺_一公方方御勢楯籠處、山名方與力衆畠山右衛門佐、并武衛内朝倉勢以下、寄來放火云々、

但於_ニ僧衆中_一引級鉢合戰最中、自_ニ寺内_一立火云々、當年洛中神社佛閣、其外在家、燒失不_レ知_ニ其數_一、

同二年、四月十八日、稻荷社燒失、文明元年、二月廿六日、多武峯煙上、依_ニ寺中確執_一、一

宇不_レ殘悉燒失、於_ニ大織冠御影像_一者、無_ニ相違_一忽然トシテ出玉ヒ畢、◎全文與_ニ興福寺略年代記_一同、但燒失下年代記有_ニ了字_一、七月十日、清水寺燒失、八月三日、長谷寺燒、

同四年、二月ヨリ六月マデ炎旱、十月於_ニ山城_一大内勢筒井勢ニ懸負也、

同七年、五月十七日、於_ニ山城木津_一大内勢筒井勢懸負、大内勢多死也、◎興福寺略年代記曰、五月十四日木津合戰、六月八日、於_ニ萬歲_一筒井箸尾勢多死、

長享元年、九月十二日、江州六角爲_ニ御對治_一坂下迄室町殿御動座、御陣所皮峯所ト云處ニ御座、併寺社本所諸年貢抑領ニ付御動座也、

明應二年、二月十五日、今出川殿八幡社參、其次二月廿六日、河州正覺寺へ御動座也、終公方御陣破、畠山左衛門督遊佐父子腹切、公方生捕申_ニ御上洛_一云々、

同八年、正月廿七日、畠山少弼殿於_ニ河内伴拔_一腹切、宗益和州へ入國、越智古市同心、十二月十八日、尾州沒落也、

同九年、八月廿八日、尾州出張、九月三日、河内高屋取向、九月十三日、細川衆宗益高屋後詰尾州方退散云々、

次郎殿始一家七人生捕誅也、

文龜二年、五月三日、依_二柳下事_一澤藏軒內堀和州入、

七月十八日、卯刻、南都閉門、依_二京訴_一也、

五月六日、內堀陣拂、西大寺炎上、

永正元年、和州南北和談、天下飢饉餓死多、和州時多死、

同二年、十一月廿六日、澤藏軒河州入了、

同三年、正月廿九日、河州高野城落畢、八月四日、澤藏

軒和州入國、一國知行、九月四日、國衆多武峯迄落行、

同四年、三月、義澄春日參電、七箇日神樂、◎南溪按、興福寺略年代記

日、三月十七日、陪_二從神樂_一義澄沙汰之山本枯槁之御祈云々十七日ヨリ七箇夜、

同八年、七月二日、河州合戰初、明十三日、尾州方沒落、

遊佐筑前其外野尻以下打死、大和衆十四日ニ山内へ

取退、古市出頭、八月二日筒井方被_レ出_二鹿打城_一呵落

了、諸侍打死、八月十六日公方丹波へ御退、同廿四日

御入洛、細川右京大夫大内左京御供、敵方即時沒落、

馬頭游佐印宗以下、其外諸侍千餘人打死了、

十六年、從_二四國_一六郎殿上洛、攝州へ細川右京大夫下

向、自_二阿波_一上洛衆へ、神呪寺鷲林寺陣取、川原林城

者從_二京方_一モツテ日々夜々及_二合戰_一ト云ヘリ、自他

無_二勝負_一、

十七年、於_二攝州_一有_二合戰_一、細川殿沒落、二月十七日、

六郎殿ハ於_二攝州_一違例ニテ他界、先代未聞事也、三

好一人令_二在京_一、同五月三日、自_二江州_一高國入洛、五日

三好衆陣破了、ウラガヘリ衆_二六七人_一有_レ之云々、公方

ハ、三好ト同心ニテ無_レ退散、高照院殿へニグ入カク

レ居ヲ召取リ、三好親子三人、ヲイ以下生害了、

大永元年三月七日、今出川公方京都御ノキアリ、御供

式部少輔西郡、杉原四郎、下津屋修理、畠山七郎、御供

云々、淡路ニアタ木ト云海賊ヲ御頼アリテ御座云々、尾

州總州被_二仰合_一可_レ有_二御入洛_一御用意云々、六月六日、

◎南溪按、二水記、足利官位記、歷仁以來年代記、作_二七月六日_一似可、自_二播州_一狂言院殿_二若公御

入洛、御歳十一歳云々、ヌリ興、チャウケン御袴下計

被_レ召了、岩栖院へ渡御、

二年、八月十六日、畠山殿ト山他界、國ニテ死去也、

三年、五月十三日、大洪水、佐保田庄悉令_二破損_一、在々

所々破了、八幡御參社以來洪水云々、

五年、筒井順興被_レ成_二法印_一、從_二御門跡_一ハ衣ノ御重衣

被_レ下_一、京都下ノ御所ヲ上へ被_レ引、十二月十三日、

大樹御移徙也、

六年、二月十六日、室町殿石清水御社參、◎按年代記、依_レ造替遷宮也

十月、依_二柳本謀叛_一京物忿、

七年、波多野柳本依_二謀反_一從_二西國渡海_一、二月五日、自_二丹波_一取出、山崎へ打入、藥師寺九郎左衛門、同與次、兩郡代、雖防不叶而落了、仍柳本鳥羽公方樣道永、二

月十日御動座、公方樣ハ本國寺、道永ハ東寺、御供武田殿、河州ハ、クホ、◎南溟按、江州ノミクモ歟、馬淵、三千計ニテ被

立了、同十一日合戰、京衆打死數多、武田方アツヤ親

子、熊谷父子、其外數百人打死、道永馬廻ニハ、荒木以

下卅人計打死云々、西國衆ニハ、香西赤澤新二郎以下

打死云々、公方樣十四日曉御沒落、江州へ御退云々、去

年無_レ故香西依_レ被_二生害_一、兄弟之間波多野楊本發_二謀

反_一丹波へ被_レ退了、去年從_二京都_一丹波へ諸勢雖_レ被

立、皆以逃上了、波多野ハ八神城、柳本ハ神尾ニアリ

ト云々、十月十三日、從_二坂本_一御入洛、御供道永典厩、

并六角、一萬五千、朝倉庶子太郎左衛門人數一萬二千

ニテ致_二御供_一畢、同廿二日御陣替、公方樣ハ東寺、道

永カラ橋、六角下鳥羽、朝倉太郎左衛門山中ト云所ニ

陣取、西國衆三好攝州伊丹城ヲ攻ム、然者西國雞冠井

城ヲ可_レ被_レ攻之間、爲_二後攻_一三好伊丹城ヲ打捨テ、

同廿九日山崎へ上洛、十市衆以下級シテ爲_二御和與

屢_二御勢共引了_一、然ニ令_二違變_一、公方樣道永又沒落也、公方樣ハクツ木ト云所ニ御座、道永ハ伊勢へ被_レ落、六角西國六郎殿ラムコニ可_レ取屢ニ依テ如此沙汰シ被_レ下了、言語道斷事也、

享祿元年、閏九月五日、柳本彈正忠和州入國、越智同心、七月二日、高野御影堂供養、弘法以來一度也、并大塔心柱立、

二年、二月廿七日、於_二奈良_一赤澤生害、四月廿七日、柳本彈正和州入國、一國皆以燒了、內山寺へ込入了、寺法師數多打死、其後法華寺陣取、四五日有テ上洛云々、木嶋爲_レ屢筒井柳本和與、三千貫之禮云々、一國柳本反錢相懸被_レ出了、

三年、五月十五日、柳本播州へ出陣、爲_二小寺後詰_一東條谷ノ玉連寺ト云寺ニ陣取、然處ニ內者忍入テ、六月二十九日夜、彈正ヲ一刀突了、腸ワタ以外出了、然間擲ニテ退處ニ、敵ヲツカケ柳本生害、則陣破了、常桓播州ヨリ御出、七月六日ニカタカミト云所ヲ立テ、高砂ニ着陣云々、

四年、從_二去年_一於_二攝州_一數度有_二合戰_一、六月四日、天王寺陣破了、子細者、浦上掃部助悉皆常桓取立出陣也、

然ニ浦上ハ、赤松親ヲ生害サセ申間、親ノ敵也、於レ國雖ニ調法ニ不レ成間、以レ次西國衆申合ウラガヘリ了、然間不レ及ニ合戰ニ陣被了、赤松二郎者、西宮ニ陣取、六千計、浦上常桓衆生害云々、ワタエ^{◎後鑑作}渡邊川^三ノ川ヘ皆以落入了、頸ハ堺ニハ百計有レ之云々、常桓尼崎京屋ト云所ニ忍テ在ニ御座、三好山城打入奉ニ生捕、同八日卯刻御腹被レ召了、御辭世歌御發句アリ、其外伊勢ノ又七、和泉守護以下皆以打死、浦士ハ舟ニテ退ト云々、雖レ然川ニ入テ死ス、

天文元年、六月十五日、河州土一揆蜂起、同十七日、畠山義高御自害、十九日、三好筑前於ニ和泉堺ニ生害、七月十日曉、奈良中一揆令ニ蜂起、寺僧悉以沒落、早朝、菩提院方、惠心院、阿彌陀院以下焼拂了、十七日未刻、寺中焼失悉以落了、觀音院、清淨院、南角院、瓦坊者殘置壞取了、三藏以下切破、一切經并法事道具悉以取、散々一時頓滅、同春日社ヘ込入、藏并五箇屋以下悉打破、神物皆取、其外福宜社家住屋破却了、前代未聞也、寺僧兩人殺云々、雖レ然伽藍ハ無ニ焼失ハ、此段歎ノ中ノ悅也、同八月九日夜、寺僧出張、皆以日中ヨリ落了、九日夜奈良中不レ殘ニ一字ニ被ニ焼拂了、高島計殘了、^{◎南}漢按、

九日夜當^レ作十日夜、興福寺略年代記云、七月十七日、南部一揆蜂起、興福寺僧坊燒同八月十日、寺僧出頭、奈良地家焼拂之、一揆越智高取城爲^レ攻、七月卅日被^レ懸了、八日ニ寄衆崩了、奈良衆皆以吉野ヘ落云々、八月廿二日^ニ中出^{弗イ}籠シ、吐田ニテ越智衆ト合戰、一揆數百人被^レ打了、頸共南都ヘ上セラレ被^レ梟者也、從ニ越智ニ被^レ上頸十一、奥村玄蕃、中市雁金屋、スガハラ、願了、カサ、ギ又七、與五郎入道圓覺父子、室院ノ新九郎、油ウリ與七、タカマノ賢丞、其外八百人計、又此比江州ニモ土一揆多死云云、八月廿四日、自ニ江州山階ニ發向、悉打破燒了、

二年、九月十二日、伊勢タマル亡、本願寺大坂ニ居住、木澤大和衆、京ノ法華宗以下、立テ及ニ數日ニ攻ト云ヘドモ不レ落間、以ニ和睦之儀ニ引退了、

三年、閏正月、有^{符カ}之、如^{符カ}形祝言ノ儀式有^{符カ}之、九月三日、公方從ニ江州ニ御上洛、建仁寺御座、六角息四郎殿御供云々、御臺所次日上洛云々、摠命殿八月廿八日上洛、相國寺陣取了、

四年、大旱魃也、不^レ植不^レ刈、二月十二日、雨下、以後者不^レ降者也、七月五日戌刻、筒井順興法印死去、五十二歲、息藤松殿十三歲、

五年、三月十日子刻、公方若君誕生、御母ハ近衛殿姫

君也、六月廿九日未時、長谷寺燒、秋山亂入、而自樓門上悉燒畢、二月之比、於京都叡山花王院阿彌陀經之談義有之、日蓮宗仁杉本ト云者、談義ノ座江望テ不審ヲ立、一句以非道致詰儀、被問訊ト云ヘドモ、頗與耻辱間、山内ニ聞レ之、大衆怒テ花王院山上ヲ追出云々、依レ之江州少弼殿、其外四箇本寺觸催、六月廿三日京都押寄、東山ニハ六角殿衆三萬計ニテ陣取、白川ヨリ北、勝軍地藏ノ上迄ハ、叡山衆本寺末寺都合其勢三萬餘騎、其ヨリ北ノ方ハ、三井寺ノ衆三千餘騎ニテ陣取、廿四日、五日、九合戰、廿七日曉日蓮衆沒落、三條口ヨリ初テ、下京ハ悉以燒失、上京三分一程燒了、

六年

七年、筒井藤松於門跡得度、十六歲、西御評定所、戒師愛染院、

八年、

九年、八月十一日、大雨風烈、城州八幡塔上重吹落、其外所々破損云々、春日日本宮嶽五町計崩、

十年、八月十一日ノ曉、自寅初一大風、六時分迄吹了、春日御間大木倒、石燈以下亡、其外御拜殿ノ上、拜屋

ノ上、大宮殿御廊坤角ヘ、木倒懸ル、并民屋僧房以下令破損、奈良中田舍人多死了、◎年代記文略與是同、尼上嶽ニ城作所爲云々、此年又、木澤左京亮笠置城ヲ借テ、七月廿八日ニ入城、處々用害超過云々、彌勒ノ上ノ大木ヲ切ノケル處ニ、下ニ石ノ唐櫃ニ、ナンリヤウノ塔アリ、其内ニ金ニテ奉レ鑄釋迦御座アリ、過分ノ錢直ノ由及ニ沙汰者也、

十一年三月十七日、河州太平寺合戰、長政生害、◎年代記云、閏三月十七日、木津長政被討、同夜、信貴山尼上兩城沒落、同廿八日、尾張殿高屋ヘ御入城、同十五日、興福寺五社七堂閉門事、此年公方ノ若君近衛殿御養子被レ召、南都一乘院殿ヘ御下向、

十二年、

十三年、和泉屋形御曹司、細川殿御猶子也、然處和州越智依レ无子息、申請讓家督、四月卅日下向、木津丹兩人御共也、八月廿六日、近衛殿大閣御閉眼、九月七日、於東福寺海藏院御葬禮、

十四年、

十五年、二月十二日、於南都成身院著尾爲政生害、八月十九日、細川氏綱河内被取出、遊佐同心、廿日、筒井

與力衆被_レ立_レ界、東金田陣取云々、天王寺山中城ヲ持和泉界ニ陣取、四國衆三好以下界ヲ退、河内衆玄蕃頭被_ニ打入_一、屢ニテ山中城九月四日迦、同中嶋三好宗三父子ハッシ畢、同九月十三日、京都へ典厩玄蕃頭入洛、公方様東山へ御退、御勢二千計、江州長原三千計ニテ御迎ニ參、戶津坂本ニ陣取、細川嵯峨ヨリ高尾へ被_レ迦了、大和衆一條着陣、玄蕃頭以下淀へ陣替、同十八日、芥河城ヲ河内衆攻了、清元一萬計ニテ被_ニ沙汰_一、河内衆主殿助三寶院以下合戰、清元切_ニ負侍分_一之頸五百餘、其外切_ニ捨八千計_一、芥河伊丹以下降參、八月廿一日順昭立野迄出陣、同卅日歸、九月十九日之夜、十市藤勝殿ヲツレ、森本喜三七八人ニテ城ヲ忍出、多武峯へ退出、殘ル所ノ與力一撥降參了、廿日ノ夜城ヲ筒井へ渡了、

十六年、五月箸尾城破却、七月、於_ニ天王寺表_一、烏山衆與_ニ四國衆_一合戰、兩方二千人計打死云々、

十一月、城州守護筒井ヨリ入_レ之、

十七年、

十八年、卯月廿六日、筒井順昭從_ニ初夜時分_一在所ヲ出、坂本へ被_レ越了、供奉衆春良房、其外野口カ子金菊

ト云者仲間一人召具、廿六日四時分、至_ニ山城伯_一送ヲ乞被_レ越云々、與力衆へ書狀ヲ書置、家ノ事ハ藤勝ニ讓間、爲_ニ各與力衆_一可_レ被_ニ相計_一由被_ニ書置_一云々、依_レ之同廿七日内衆少々越了、廿八日、與力衆皆以可_レ越由申合、南都へ上了、然者敵蜂起シテ當所以下可_レ令_ニ物恐_一間、有_ニ延引_一可_レ然由、從_ニ兩門_一被_レ仰了、當時板並以下天魔ノ所行也、一向狂亂之由沙汰共也、十月ノ比東大寺大佛殿ノ後ニテ鹿死了、無_ニ注進_一從_ニ彼寺_一被_レ捨了、依_レ之及_ニ申事_一順昭被_ニ相拘_一置處ニ、順昭發心叡山ニ被_レ居、依_レ之及_ニ申事_一大佛堂童子正清ト云者不_ニ注進_一間、住屋可_レ有_ニ進發_一由被_レ申、同年預五師妙嚴院可_レ有_ニ罪科_一由、講衆被_レ申處、東大寺ニハ可_ニ相防_一由遵意也、然間、興福寺學侶衆、筒井衆、種々様々雖_レ被_レ申屢無_ニ承引_一、大和山城ノ人數相語、彼寺所々方々掘切亂伐逆茂木引用害無_ニ是非_一者也、興福寺ニモ國中相催、七月廿八日早朝、諸軍勢馳上、然其屢ヲ不_レ捨雖_レ被_ニ沙汰_一、終ニ無_ニ承引_一、破テ未刻彼寺へ押寄、正清家進發妙嚴院へ押寄有_ニ合戰_一、山城衆數百人東大寺ニ籠ト云ヘドモ、皆物具ヲ捨逃散、或籠所ノ坊舍ノ財物奪取テ、四聖坊ヨリ人數ヲ出シ合戰有、妙

嚴院ヨリ寺衆以下切テ出テ、治部卿ト云寺僧打死、其外少將ト云寺僧手負了、其儘妙嚴院ヲ破却シテ諸勢引間、殘所之坊舎以下無事ナリ、此申事ノ最中、廿五六日ノ比、又大佛ノ後前ノ在所ニテ鹿死了、非ニ直事、言語道斷也、仍廿七日ノ曉、東大寺悉以閉門、凡笑止事共也、興福寺ヘ馳上人數一萬五千計云々、東大寺ニ籠人數ハ皆以呼トラレ了、從ニ兩御門跡ニ被レ出御内衆講衆ニ御合力、皆以武具美麗也、

十九年、五月四日辰刻、義晴將軍御他界、坂本穴太ト云所ノ寺ニテ御死去、御歳四十歳、御葬禮事ハ東山慈照院殿ニテ被ニ沙汰了、同廿一日丑刻、御葬禮、若君義藤坂本ヘイッシ寶泉寺ニ御座、依ニ難說ニ夜番日番キビシキ事無ニ申計、

弘治元年、庖瘡以外ハヤリ、近國小兒死事數千人、自ニ冬比ニ明年春迄ハヤリ、

二年、正月、彗星出、

永祿二年、七月十五日、箸尾爲綱入城、八月十日、松永彈正爲三好大將三好人數和州亂入、箇井十市萬歳沒落、越智出張、

四年、南都眉間寺破壊造レ城了、松永彈正少弼沙汰

之、

五年、三月五日、於ニ泉州三好實休討死、人衆二千餘死、五月廿日、於ニ河州教興寺ニ合戰、湯河宮内大輔討死、根來寺衆已下千餘人死、同廿六日、矢田寺悉放火畢、七月十六日、伴堂金剛寺兩城破却畢、箸尾ヨリ沙汰之、箸尾城再造、

九年、九月廿五日、箇井奈良ヘ出張、一乘院殿ヨリ御禮御樽代百匹、八條五疋、飯田甚十郎二疋、中坊ニテ御禮被ニ請畢、同井戸ヘ御樽代三十匹、廿七日ニ向井備後守ヘ爲ニ御禮ニ御樽代三十匹、廿八日、箇井得ニ度於成身院、大乘院殿ヨリ御衣ヲ被レ下、廿五日ニ西口害ニテ合戰、多聞衆打死、太刀打有レ之、井戸無類高名也、

春日社司◎按、此條蓋宗淳所記

春日社司有ニ兩流、曰大中臣、曰中臣先祖時風、秀行、初從ニ神駕ニ來、自ニ鹿嶋、因爲神官、二人之後、見有ニ九家、曰稱ニ辰市者二、曰大東、曰東地井、曰新、曰今西、曰富田、曰南、此爲ニ南郷、每先補ニ新預、依レ闕

遷權預、次第轉任、以正預爲最、其加任預神宮預者、自初任卽有此號、不復轉任、唯依巡直補正預、正預此謂修行、以下社中事無大小皆專修行上、大中臣者、後世朝廷權差其人奉仕本社、猶伊勢祭主、其後子孫代當其選、遂爲世家、其支庶見有七家、此謂北鄉、曰中東、曰正眞院、曰西、曰中西、曰向井、曰奧、曰奧田、皆初補新權神主、轉權神主、終于神主、大中臣朝廷所命、固雖崇貴、而中臣從駕遠來奉神亦久、故以故家自居、不肯讓彼、又有若宮神主、亦中臣氏、乃大宮社司之別也、一家一職、子孫相代、不傳他家、不置副貳、初以其居近新藥師寺、以新藥師爲號、中葉有祐臣、善和歌、其千鳥作尤稱于世、故子孫遂號千鳥、至今不改、列當今社司補任於後、使其別自氏人、以至仕丁、亦各以族係屬、南北鄉及若宮、此謂三卿、或又曰三方、

神主

正三位大中臣師直、西左近、

權神主

從三位大中臣時雅、中西左京、

新權神主

從四位上大中臣家知、奧田圖書、

修行正預

正三位中臣祐俊、新兵部、

權預

從三位中臣延相、大東右近、

加任預

正四位下中臣延英、富田內膳、

神宮預

正四位下中臣祐舍、今西舉人、

權預

正四位下中臣祐友、南木工助、

權預

正四位下中臣延尙、大西大藏、

次預

正四位下中臣祐宣、東地井主殿、

新預

從四位下中臣祐用、辰市淡路守、

新預

從四位下中臣祐當、辰市上總介、

若宮神主

興福寺諸堂間數、但京間、

金堂十八間、

鐘樓七間、

講金堂廿一間、

鞍馬堂三間、二尺五寸、

北堂六十二間、

西金堂十三間、四尺八寸七分、

北圓堂六間、

南圓堂七間半、

東金堂十一間半、

五重塔四間半、

食堂十八間、

禮堂十八間、

中門十二間五尺、

禮堂四間三尺五寸、

同 廊門ヨリ西へ十五間、西表三十五間、北金堂迄十二間五尺、金堂ヨリ東十四間一尺五寸、東表三十五間、南側中門ヨリ東十七間一尺五寸、

湯屋門 一丈四尺五寸、

東不開門 六間、

北八足門 四間四尺、

西不開門 五間五寸、

西御門 三間、

圓城坊門 二間二尺、

三藏 十一間、

南大門 十一間四寸五分、三間三尺、前ノ芝居西東四十八間、薪能ノ時石堀根ヨリ南へ七間半西ハ門ノハツシ東ハ門ノ外三間許、

大和國中廻文次第

上通道

古市 長井 山村・窪城 今市 菩提山年預 高樋
椿尾 興隆寺 米谷 櫟本一黨 井戸 森本元林院
萩別所 豐田 豐井 布留氏人宮本 龍福寺桃尾年預 永久寺
内山年預 長岳寺年預 福智堂 長原 長柄 竹田 岸田
柳本 平等寺年預 大佛供 戒重 櫻井 吉備 長谷
寺執行 安部

箕田 番條 管田乾 梶本東南 宮堂 平等坊

相塙北堀 井戸堂中乾 奄治ヲシテ一黨 法貴寺一黨 檜垣

有野 六條 江堤中 八條 十市 池田下司 白土

味門 美濃庄 新賀 森屋

結崎 下長 唐院 箸尾 金剛寺 佐味 飯高

俱尸羅 檜原 吐田 越智 玉手 坊城 五條野

松山 子嶋 池尻 宇賀尾 伴堂 鳥屋

平田八庄官

布施 高田 細井戸 岡 萬歲 中村 北角

岡崎 曾我 戌亥脇

筒井 龍田 小泉 小南 丹波庄 池内 梶 窪田

田中 額田部 小林 立野 片岡 目安

西脇 西山内

大安寺 辰市 法華寺 藥師寺年預 超昇寺下司

琵琶小路 郡山辰巳金刀中 寶來 秋篠 法隆寺

山陵 生馬根尾俵口奥中村 平郡馬場嶋角歩ニ桐谷 矢田中村庄屋

鳥見今中和田 曾步 櫟原 幸前下司 山田 鷹山奥

坂上 魚殿庄屋

東山内付山城

福住 小山戸 多田 長谷 仁興 小夫ヲフ 笠門上

山田 深河 荳原 助命 鞭田 柳生 萩上 小倉

丹生 檜牧 澤 吐山三ヶ谷 勝原 秋山 木津行

椿井 賀茂一族 碓原一族 狛野下司 高林 相樂新

當尾一黨 福智一族 狹川 箕河 笠置中川 岩船 小田原

諸末寺別當等事

興福寺 清水寺 西大寺 法隆寺 大安寺 法華寺

藥師寺以上號二七大寺一

戌亥方

安位寺 高尾寺 置恩寺 當摩寺 仙間寺 伏見寺

菩提高天寺 向谷寺 牟尼谷

丑寅方

長岳寺 富貴寺 信貴山 香具寺 千光寺金寺 興善寺

鶴林寺

辰巳方

明王寺 慈明寺

菩提院方

室生寺室田 極樂寺 永福寺 雪別所 東小田原以懸

中川西田原 淨瑠璃寺 忍辱山 海住山寺 安養寺片岡 觀音寺

灌頂寺 鹿山

龍花院方

菩提山寺 龍福寺 圓樂寺 平等寺三橋 長谷寺

法花寺 永久寺 萱生寺 靈山寺 金峯山寺吉野

南都七鄉事

南大門郷 食堂 武賴 東城戸 西城戸 腰戸

高御門 鳴川 花園 井上

新藥師郷 塔郷 爲延 上高畠 下高畠 新藥師

京終 肘塚 中辻 二坂

東御門郷 金堂郷 友光 友長 中村 上大路

西野田 東里 東野田 芝 重持院

北御門郷 講堂郷 武行 菖蒲池 北小路 南法蓮

宿院 新乘院 押小路 吐田 山留木

穴口郷 北圓堂郷 武次 符坂 高天北方 阿彌陀院

内侍原 二條 東芝辻 西芝辻

西御門郷 西金堂郷 武房 小西 角振北方

林小路 高天南方 府坂南方 今辻子北

不開門郷 南圓堂郷 行延 爲次 今辻子南

下三條 角振南方 橋本 椿井橋爪 餅飯殿

上三條

興福寺惣末寺

秋篠寺 正覺寺 飛鳥寺 明王寺 安養寺

海住山寺 稱名寺 室生寺 善鐘寺 新樂師寺

一乘院殿末寺

清水寺 龍福寺 松尾寺 忍辱山 神童寺 在原寺

金剛山 靈山寺 南法貴寺 淨瑠璃寺 岩舟寺

龍蓋寺 喜光寺 根本成身院 般若寺 不退寺

信貴山 鶴林寺 金勝寺 千光寺 慈明寺

大乘院殿末寺

長谷寺 安位寺 菩提山寺 永久寺 圓樂寺

長岳寺 平等寺 隨願寺 橘寺 中山寺 己心寺

新禪院 極樂坊 正法寺 新淨土寺 楊樂寺

竹林寺

法貴寺 藥師寺 吉田寺

春日社領并興福寺領

千五百五拾四石二斗餘

千六百五拾一石八斗餘

千四百九拾五石二斗

九百五拾一石七斗餘

二百八拾石

二百九拾石

七千七百廿一石餘

三千四百七拾五石九斗餘

千石

千七拾一石

千百九拾五石三斗餘

三拾三石二斗餘

三百八拾石

拾九石九斗餘

都合二萬千百拾九石五斗餘

春日御供御修理祭禮諸下行并學問領五師領分

神供田但社家方

燈明田但禰宜方

一乘院領

大乘院領

喜多院領

院家中領

諸院諸房

五師預神宮領

學問領五師預

修理方五師預

祈禱所六箇屋
會式法事入用

禰宜屋敷

衆徒分

辻將監并正法

院廊承仕屋敷

一高五千五百八拾七石五斗餘、大和國所々散在、

一納方寺務、井多院院權別當、以差圖、一年替從寺

中三人光

○南冥按、宛縣

、五師之内、時々觸口出合百姓前物

成相窮、春日御藏唐新坊へ納之、相符可付置事、

一御神供者、一箇月ニ五拾七石二斗七升充、以納俵、

來月分者、前之月廿八日何茂立合可相渡事、

一所々破損御修理事、當寺務喜多院權別當、其外右之

役人不殘出合令相談可相窮事、

一諸方へ音信物右同前事、

一拂勘定、毎年十月廿一日出合可相窮事、

一五師田、共仁高百五拾石分、隨其年物成可爲三五

師領事、付口米、五師可爲代官給事、

一衆僧三人仁現米三拾石、但一人ニ拾石充可遺之事、

一承仕四人仁現米拾二石、但一人ニ三石充可遺之事、

右條々、任三元和三年九月七日、寛永十年四月廿

一日下知狀之趣、不可有相違者也、

大乘院日記目錄第一(自治曆元年
至應永卅二年)

延久四 正月廿八日、宇治殿賴通御出家、八十御法

名蓮花覺、改三寂覺、

承保二 九月廿五日、大二條殿〔教〕通薨、八十、十月

六日薨送、

康和元辛 立覺出生、京極大閣息、六月廿八日、舍兄

後二條關白薨、廿八、(○按當作三
廿八)御出家、

三辛 尋範出生、京極大閣息、二月十三日、父大

關薨、六十、正月廿八日、七月廿三日祇園塔供養、導師範

俊少僧都、

永久二甲 惠信出生、法性寺大閣息、春日々次神供、

依三託宣、被備三置之、知足院殿御願、

大治三 三月十三日、白河殿女院御願供養、導師立

覺、

四 七月七日、白河院崩、

保延二 今年春日若宮鎮座、〔五〕月十二日花山院

左大臣家忠出家、同廿四日薨、五十

三 正月十日、春日神木入洛、十三日、歸三座于

本社、九月十七日、若宮祭禮始行、之、

康治元壬戌 五月五日、丁 太上法皇 鳥羽院、去々年三月十日御出家、

并彌定殿下 知足院、去々年十月二日御出家、法名圓理、 於三東大寺、御受戒、

法皇着三御布法服、先戒壇院北面石壇敷三高麗疊、

爲三御座、圓融院例三候、御供人壇下爲三座、入道殿

下布三中門內、爲三御座、沙彌定遍 左大臣雅定息、權守顯定于云々、 參着

也、和上并大小十師入堂着座、

二 二月廿六日、待賢門院出口金剛院御出

家、○南溪按、百錄抄及女院小傳作三康治元年出家、似是、

保元元 七月二日鳥羽法皇崩、十一日主上與引誥

合戰、廿二日六條口口爲義被三誅也、廿七日尋範法

印籠三居于小田原、依三左府殿下御事也、七月十四日、宇治殿下至三

奈良坂薨、三十七、

平治元 十二月廿九日、左馬頭義朝被三殺害、

永曆元 正月二日、中宮右近朝岳被三誅也、廿二日

惡源太義平於三六條河原三誅之、五月廿二日、惠信

口平宣口、廿五日策勝明御口惠信、○矢野南溪按宜參照興福寺別當次第、

應保二 六月十八日、知足院入道關白薨、八十六月

八日、法性寺殿御出家、圓觀、

長寛二 二月十九日、法性寺關白薨、六十惠信、信

圓重服、十二月十三日、尋範任權僧正、十七日法住

寺三十三回御忌供養導師、同日轉僧正、一月兩度

轉任、希代面目、

永萬元 七月廿八日、二條后崩、廿三、八月七日御

薨カ送於香證寺、◎南溪按二條后諡三條院二香燈寺當作三香隆寺、

仁安元 七月廿六日、二條關白薨、廿四贈太政大臣

正一位、

二 五月十日、法務僧正惠信遠流伊豆國、去

長寛二年三月十日夜半、以千口◎按、與福寺別當等依

燒喜多院松室圓城坊、◎南溪按、年月日與三別、

嘉應二 三月廿二日、春日行幸、◎百錄鈔信圓直任

少僧都、

承安四 七月八日、平重盛任右大將、

安元二 三月六日、鎮西八郎爲朝被誅候也、

治承元 正月廿四日、平重盛移左大將、三月五日

任內大臣、二月廿一日、山門神輿入洛、四カ同廿八日大

極殿以下燒失、五月廿三日、前座主明雲配流、

三亥 五月廿五日、內大臣平重盛出家、法名證

空八月一日入滅、四十五十月十七日、前攝政以下四

十餘配流ナリ、十六日新攝政□□殿、十一月五日、

松殿止攝政任、◎按、此條備前國緣、一月日多誤、

四庚 十二月十七日松殿京上、十八日流罪鎮

西、十九日出家、善觀、◎按同上、

〔壽永元〕□□□日、平宗盛爲一家惣領、閏二月四日、

六波羅太政大臣入道清盛公薨、八月、鎮倉賴朝謀叛、

壽永二 七月廿五日、平家都落、八月六日、同解官四

十餘人、木曾義仲任大將軍、田村九口□□□十二

月十九日、義仲與法皇合戰、□□寺探題信圓大供

不及分配、俱行違亂之故也、義仲行家入洛故也、

元曆元 正月廿一日、義仲自害、二月七日、一谷合

戰、打落平家一門了、

文治元 二月、信貴山初□□供養塔婆導師、三月廿

四日、安德天皇入海、四月內侍所入主、五月一日、建

禮門院出家、真如覺、六月廿一日、前內大臣平宗盛公

誅候也、廿九、六月廿三日、平重衡於□□誅之、八月

廿八日、東大寺大〔佛〕開眼導師覺念、◎南溪按、專

寺探題信圓、

二 蒲生冠者範賴於伊豆國誅了、

四 五月五日、興福寺金堂□一乘院上棟、

建久三 三月十三日、後白川院崩、

正治元 正月十三日、大將軍賴朝薨、五十九去十一日

出家、大將軍賴家、

二 正月廿日、梶原平三景時、同息源太景季、

被誅了、四月一日、北條四郎時政任遠江守、三從

五位下、

建仁二 正月廿七日、月輪殿御出、家圓證、九月三日

一萬麿誅之、賴家卿一男、時政承、

三 九月七日、賴家出家、重病自躰不安、時政

爲執事別當三箇年、大將軍實朝、

元久元 七月廿八日、賴家入滅、廿三、於伊豆國修放

寺浴室被殺害、

二 六月廿二日、平畠山重忠一家滅亡、四十時

政承、閏六月廿日、北條時政出家、六十八、關東執權平

義時、

建永元 三月七日、後京極攝政薨、廿八、

承元元 二月十五日、普賢寺殿御出家、行理、

四

建曆二 二月廿日、平義時時房爲執事別當、

建保元 二月三日、上人眞鸞入滅、六十、廿日、建禮

門院崩、五十、五月二日、和田三浦以下押寄將軍家

再執事義時館、同三日、和田左衛門尉義盛被誅了、

六十七、執事平義時時房□□□□□□、六箇年、

三 正月六日、北條時政入道入滅、七十八、

四 二月五日、於水無瀨殿被供養震筆瑜

伽論、導師大僧正信圓、十月廿一日、上件震筆論奉

上件權大師藤師經奉行頭右大辨藤定高九月十二日執務被下

送北圓堂、每日讀經之僧侶三十口、口所大和國番條

院宣奉行右大弁宗行六ヶ庄庄、伊豆七條庄、淨照田庄、古木所本兩庄、玉手庄、

福口淨生口田口田口庄、篠俣庄、赤口庄、御願拾扶

大僧雅緣、御願之起因者、貞口一人蟄居笠置寺之後

正治二年□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

間退出以後□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

承久元 正月廿七日、實朝公於鶴岡八幡宮拜賀

砌被殺害、廿九日、惡禪師公曉誅了、四月十二日、

賴經、二歲將軍宣下向關東、光明峰寺關白御息、口

陸奥守義時六箇年、七月十三日、大內裏炎上、自

恒武天皇至五代御大內、

三 關東成敗兩六波羅置之、五月十五日、被

誅光季、并義時可追討宣下、六月五日、關白口

口入落、南溪按、六月十五日關東武士入落歟、七月九日、改帝位攝祿、十

三日、配_二流_三院_二了、

貞應元 八月十六日、義時辭_二陸奥守_一、十月十六日、

辭三右京權大夫

二 五月十四日、後高倉法皇崩、

元仁元 六月十三日、右京大夫從四位下平義時入

滅、六十二、

嘉祿元 七月十一日、鎌倉尼從二位如雲入滅、八十

九、故時政之女、賴家實朝公母儀、號_二尼將軍_一、執事

相摸守時房十六箇年、

安貞元 四月廿二日、大内裏炎上、承久之以後少々

建立、是以後不_レ及_二造營_一、

六月十八日、鎌倉修理介平時氏卒、六波羅

管領泰時息也、◎本書中管領之管或作^レ管或作^レ官、今不ニ々改^レ之、九月十六日田

樂頭圓實、十二月廿八日、松殿入道關白薨、八十七、

三
十月十一日、土御門院崩、

貞永元 九月六日、天王寺關白師家御出家、大心、奉

號二中山

天福元 五月廿九日、普賢寺關白薨、七十實信重服、

文曆元 五月九日、先帝崩、七月十七日、竹御方他

界、將軍賴家女、將軍賴經室也、八月六日、後堀川院

崩、

曆仁元

執事時房武藏守泰時六箇年

二月十七日、將軍賴經自關東上洛、四月

廿五日、光明〔峯〕寺殿御出家、法名行惠、七月廿九

日、知足院內大臣道經薨、五十五十月四日松殿關白

◎南溪按當薨、六十號天王寺入道殿下、宥尊舍兄、

延應元
二月廿二日、後鳥羽院崩、

仁治二 十一月十三日、尊信□□□□一乘院正

倉院炎上、同廿八日猪熊關白出家、圓信、

三 正月九日、四條院崩、六月十五日、左京權

大夫從四位下泰時卒、六十、執事平經時一人、四箇年

九月十二日、順德院崩、四十六、十二月廿七日、猪熊

關白薨、六十四、

寬元二 四月廿八日、賴嗣將軍宣、七月二日、七條

將軍賴經出家、行賀、

四 四月十九日、左京權大夫經時出家、閏四月

廿一日入滅、廿三、執事平時賴、

寶治元 十月□□尊信□□□□執事平重時

時賴、

建長元 執事平重時、時賴、八箇年、

四 二月廿一日、峰殿關白入道薨、六十、三月

十九日、宗尊親王將軍宣、閏四月三日、時氏入滅、

康元元丙辰

八月十一日、七條將軍薨、○將軍執權次第同日卒、百鍊抄作二十

日、九月廿四日、同將軍賴嗣薨、十七、○百鍊抄作廿五日、執權次第八月廿四

十八、十一月廿三日、相摸守平時賴出家、法名道宗、

○崇(執權次第)西明寺、執事平政村、長時、八箇年、

正嘉二 五月八日、玄經口口爲上座、十二月十七

日、穗心院內大臣薨、廿九、

正元元 五月四日、岡(屋)殿薨、五十、

弘長三 十一月廿二日、平時賴入道入滅、三十七、號二

文永元甲子 執事平政村、時宗、

三 七月廿四日、惟康親王將軍宣、

九 二月、後嵯峨院崩、八月九日、皇后宮崩、

十 五月廿七日、平政村卒、六十執事時宗、平義

政、

建治元 六月九日、一[音]院殿薨、四十諡信文、

三丑 四月四日、平義政出家、廿六、執事時宗、平

業時、

七 四月四日、平時宗出家、法名道果入滅、號二

隆信知行由宣下

四、法立寺、執事業時、貞時、口口、七月十八日、圓明寺殿薨、六十去五月十九日御出家、行難、改行祚、

十 十月、慈信大僧正任、法務、執事貞時、宣

時、

正應二 十月十六日、久明親王將軍宣下、

三 三月廿日、○南溪按、公卿補任作廿日、〔稱念〕○南溪據尊卑分脈、補攝關補任

永仁元 十二月十一日、後光明寺殿薨、四十尋覺重

服也、關東成敗鎮西探題置之、

二 八月八日、〔稱念〕院殿薨、六十八、○攝關補任作六十七、實

信舍兄、十一月廿九日、香固院御殿出家、

四甲 六月十九日、高山寺殿薨、廿六、信助父也、

正安三 八月廿三日、平貞時出家入道、法名崇曉、

廿五日、勸嘉尙院、○南溪按當作薨、四十、廿二日御出家、執事時村、師時、

嘉元二 正月廿一日、東二條院崩、七月十五日、後

深草院崩、七月山木枯稿、

三巳 九月十五日、龜山院法皇崩、執事師時、宗

宣、

德治元^{丙午}

七月廿五日、後宇多院法皇崩、

延慶元

七月廿日、光明照院御出家、圓空、八月四日、

將軍久明親王自關東上洛、十日、同御息守邦親王爲將軍、廿五日、後二條院崩、十月六日、尋覺寺再任、十一月十六日、花園院御即位、

正和二

七月七日圓光院關白薨^{六十七}、

三

正月十七日、町太政大臣實家薨、^{六十八、○公卿補任作六十六}、常樂舍自貞觀二年始之、至六年四百

五十五年也、所奉行之事者、自寬弘二年至當年一四百年也、是ハ口口中綱奉^力行之、

五

執事貞次、高時、

文保元

九月三日、伏見院崩、

二

二月廿三日、後醍醐院踐祚、廿一、八月三

日、立后、西園寺太政大臣實宣女、弘徽殿、六月廿四日、後淨妙寺左大臣經平薨、其覺舍兄、

元應二^{庚申}

六月七日、己心院殿薨、廿四、奉號淨土寺

殿、

元亨三

九月十九日、六波羅勢蜂起、土岐左近藏人

賴直參謀事、故也、主上與關東相摸守左馬權介高時御間事、珍事到來也、

正中元

五月十日、資朝卿、俊基朝臣、自六波羅

召取之、廿七日、關東下向、此時主上以宣房卿御語文被^レ下關東一畢、先以天下無爲、十四日、^{○續史愚抄作二十}五、前關白岡本家平薨、覺實爲三重服、去三月廿九日御出家、四十二、六月廿五日、後宇多院崩、

二

六月廿五日、口口神木奉^力入金堂、寺家口

也、覺尊僧正押落稱定院、御移住間、爲不被奪取之奉^レ取神木、或記云、七月、聖信燒拂稱定院

嘉曆元

三月十二日、左馬權頭高時出家、法名崇

鑒、

三月十六日ヨリ、四月廿四日ヨリ、^力執事貞顯、維顯、守時

二

正月十九日、後照念院薨、^{五十四、夏信舍兄、}三月八

日、興福寺金堂以下諸堂悉以燒失、大乘院門主相論間、聖信之坊人口口于金堂候故、自覺尊僧正門徒方押寄金堂、致合戰、故火事自然到來、聖信方打負候旨、覺尊聖信共以在京留守之所行也、然依火事、

七月十九日聖信配罪隱岐國、三月十四日、^{○公卿補任作二十日}

攝關補任廿日、

續史愚抄十三日、後一〔音〕院薨、廿七、○續史愚抄廿八、

元德元

執事守時、義時、

二

三月八日、南都行幸、廿七日、延曆寺行幸、

五月十一日、法勝寺圓觀上人、小野文觀僧正、南都智渡、淨正寺忠圓僧正、智勝僧正門弟也、文觀ハ幡磨國法花山

法師也、圓觀ハ西谷黒谷法師也、召關東、

元弘元

八月廿二日、東使上洛、廿四日、主上都落、

東大寺行幸

廿六日、鷲峯寺和泉行幸、廿七日、笠置山行幸、

以本堂爲皇居、九月一日、東軍於平等院差列、

二日、笠置城城責之、七萬五千騎也、數日合戰、磐

若寺本性房參上御方、十日、依召河内楠正成參

上、九月五日、貞氏入滅、康永二年八月廿一日、贈從三位於關東、十月、主上

奉入平等院、笠置城備中國住人駒山藤三義高小

見次郎落之了、十三日、楠木楯籠赤坂城以三萬餘

騎責之、九月廿日、光嚴院踐祚、廿一、

正慶元

前帝奉遷隱岐國了、

二◎按是元弘二也

三月五日、左近將監時益、越後守、仲時二字脫

爲三兩六波羅上洛、此間六波羅、常葉駿河守範貞

一人之成敗也、四月三日、楠與湯淺孫六入道定佛

合戰、定佛打負降參、五月十七日、楠出陣住吉天王

寺邊、同六波羅勢仕、廿一日隅田高橋打負上洛、七月

十九日、宇都宮治部大輔出陣、依楠引退畢、廿七日、

宇都宮上洛高名ニ候、楠又入替也、八月三日、楠住

吉社參詣之次拜未來記、太平記說也、赤坂圓心自大唐宮給令旨興義兵、廿日、關東上洛、三十萬七千五

百餘騎云々、十月八日、東勢京着、十日維摩會依大

亂不能修行者也、

三◎按是元弘三也

正月晦日、吉野城、大塔宮、赤坂城、平野入道

入道々蘊、六萬餘騎、案内者口口岩菊、十八日矢合

口戰、村上源氏彦四郎自害、其間大唐宮沒落、金剛山

責手大將兵奉行長崎四郎左衛門二百萬騎云々、晦

日、吉野城、大塔宮、赤坂城、平野入道、金剛山城、楠以關東

大勢被責之、八十萬騎云々、新田以下口、二月二

日、赤坂寄手矢合、十三口間被責之、平野入道以

下三百八十二人降參、則被召取之、本間打死、四

日、自關東口口之使到來畢、可責落金剛山、由云々

十一日、新田小太郎義貞自大唐宮綸旨給之、下向

下野國、赤松圓心峰起、伊豫河野謀叛、後二月四日

内注進候、後二月、佐々木富士名判官義綱還幸事內

内奏聞之、廿三日夜、自隱岐行宮出御、廿四日隱

岐判官奉迎、佛口舍利之靈驗在之云々、伯耆國名和

又太郎源年長兄弟并依御口奉入船上山寺奉

守護之、出雲守護鹽冶判官高貞富士名判官義綱

以下馳集了、三月七日、六波羅勢摩耶城赤松、發向、責手打負上洛、十日又發向、十一日、主上光嚴院兩院、後伏見院、花園院、以下、行幸六波羅、廿七日、關東大勢重而上洛、大將足利尊氏兄弟、吉良、上杉、仁木、細川、今川、荒川等、卅二人大名、次日、名越高家同爲大將上洛、四月九日、在々所々炎上、淨住寺律院號葉室佛舍利有之、嵯峨天皇御安置云々、炎上□一也、十六日、關東大勢京着、廿七日合戰、赤松圓心則祐、千種殿、伊勢中將雅忠、與三名越足利相戰、但足利內通參宮方、兩六波羅打負云、五月二日、千壽王丸竹王丸鎌倉沒落、於□嶋原、竹王丸打之、長崎勘解由左衛門息也、五月七日、足利赤松責六波羅、奉相具主上兩院沒落、仲時於路次被射殺了、於番場辻子堂一時益以下四百卅二名同時自害了、作々木判官引返參宮方了、主上兩院奉入生吹山〔泰平護國寺〕了、先帝五宮之官軍息也、八日、新田義貞於五品明神旗上之、爲責鎌倉也、十日金剛山責手十一日□引退テ南都長崎、十八日、□橋相門自害了、廿二日、鎌倉相摸入道長崎入道以下一門自害云々、廿三日、前

帝自一般□御所還幸、頭大夫行方、勘解由次官光守、各衣冠、其外月卿雲客狩衣、鹽治判官高貞千餘騎、前陣、□山次郎左衛門景遠五百騎、後陣、金持大和守錦御旗、右、伯耆守長年帶劔役、右副、廿八日、於鎌倉相摸大郎打之、船田入道息也、法花山行幸、晦日兵庫福原着御、福嚴寺爲御所、六月一日、鎌倉事新田義貞之注進狀到來於兵庫、二日還幸、楠參先陣、七千餘騎、三日、大唐宮御坐信貴山、四日、着御東寺爲御□堂御所、六日、關白殿以下諸卿御參內、二條內裏還幸、能時宣下、足利治部大輔尊氏任治部卿、舍弟直義任左馬頭、大唐宮自信貴山還八幡爲大將軍、七日、二條大納言師基任大宰帥、菊地小貳大友注進、探題責落云々、九日、聖信爲大六月自隱岐國上洛故也乘院門主、十二日、後見補泰深上座、十三日、大唐宮入洛、赤松、千騎、□法印、七百騎、四條少將隆資、五百騎、中院中將定平、八百騎、千種中將忠顯、千騎、合二十萬七千騎、妙法院宮自四國入洛、被召具讃岐國勢、萬里小路中納言藤房自常陸國上洛、圓觀上人、文觀上人、忠圓僧正、又各自國々上洛云々、八月三日、軍勢恩賞事、上卿洞院左衛門督實世、後

後ハ萬里小路中納言藤房招、後々ハ九條民部卿光經、

建武元年

元ハ内牌 前關白 氏長者左大臣道平、大納言師基、經道、右大臣經忠、東宮大夫師平、

正月、大内裏建立事被_レ仰下、正月廿九日、新院御幸始、十一月三日、大唐宮奉_レ召取之、於口間邊也、結城判官伯耆守兩人承云々、伊豆國遠流云々、五月五日、大唐宮於_二鎌倉_一籠者直義息、秋比、西蘭寺公宗卿被_レ誅之、伯耆守承、相摸入道舍弟相摸次郎時行_{左馬權頭}口口口大輔時興事故也、第八皇子成良親王爲_二將軍_一下_二向鎌倉_一、直義執權、八月八日、光明照院薨、六十九、

二 二月四日、後光明照院薨、四十八、四月十二日、今上皇子玄圓法親王爲_二覺實大僧正弟_一◎子字脫歟、御

下向、十三日、同御社參、則入_二室一乘院_一、十四日、同御得度、八月十日、天口神事於_二天滿社_一在_レ之、依故一條口口御方御事再世上儀也、八月廿六日、將軍宮并直義自_二鎌倉_一沒落、其次大唐宮奉_二殺害_一云々、淵邊甲斐守息、依_二直義下知_一也、則相摸次郎時行亂_二入鎌倉_一云々、口口日、尊氏關東下向、相摸次郎時行

自害、名越時益於_二越前國_一打、尊氏東八箇國守護宣下、十月口日、尊氏訴狀到來、十一月口日、義貞申狀到來、十日尊氏叛發、十九日、尊氏追罰宣下、義貞給_レ之、一宮、中務親王尊良_關東八箇國守護云々、大乘院宮、彈正尹宮、洞院實世、持明院入道、蘭中將基隆、二條少將殿、信濃勢以下七萬騎出陣、廿三日、直義朝臣以下自_二鎌倉_一責上、_{六千餘騎}廿七日、於_二三河國八橋々東之宿_一廿六日失合云々

三年延元元年也、正月十日、東坂本行幸、内裏炎上、

卅日還幸、二月口日改_二元元年_一、四月六日、後伏見院崩、五月廿七日、又山門行幸、六月十六日、尊氏以_二東寺千手堂_一爲_二陣所_一、同日仙洞并新主自_二八幡男山_一移御、以_二小師房_一爲_二御所_一、八月十九日、左大臣經忠任_二關白_一、九月二日、猪熊一位入道兼教薨、覺照舍兄、十月十日、自_二山門_一還幸、號_二先帝_一、光明院殿御即位、止_二延元號_一、號_二建武三年_一、十二月廿日、先帝_{後醍醐院}吉野行幸、密儀也、帝位如_レ元、年號如_レ元、延元元年、京都、建武三年也、一天兩帝南北京也、
四 四月五日、關白殿、_{左方}右大臣經忠、被_二參_一南朝、同十六日、前大臣基嗣爲_二關白_一、

五 正月十一日、以武家數千騎、高三河守師

冬、并高越後守師康、押寄南都勸嘉心院、奉取前

大僧正覺尊、畢、十九日、配流淡路國、畢、四月廿七

日、改元曆應元年、五月十九日、左大臣經通爲關

白、

曆應二年 正月第二日、午刻出仕、逐日武士充滿洛

中、狼藉過法候間、被申請白晝云々、北野番論儀

三、八月十五日、南之後村上院御卽位、延元四年十

六日、後醍醐院崩、

三 四月廿六日、神木遷座、覺實寺務辭之、八

月三日、八幡神鏡紛失、同四日朝、於左女牛河邊井

中見付之、十五日、遷座延嘉御門、奉鑄銀鏡云々、

十月廿四日、神木木津遷座、寺務辭退之、同口

日、南方年號改元興國、延元五年也、京都曆應三年也、

五年 正月廿七日、左大臣道故○按當作補關白、

十月廿一日、改元康永元年、十一月十八日、右大臣

師平爲關白、八月六日夜、土岐七郎頼遠於樋口東

洞舍弟舍、○南溪按 牢舎歟御幸依及狼藉云々、

康永四年 二月廿六日、改元貞和元、

貞和二年 二月廿九日、右大臣良基爲關白、口月口

日、南方年號改元正平元、興國七年也、

三年 口月口日春日○以下闕文、

四年 十月十一日、花園院崩、

五年 八月十一日、直義與師泰以下口口露顯、

赤松四國下向、直冬直年備後國下向故也、十二日、

師泰師直與軍兵、十四日、尊氏御所取卷、直義出家

入道、則隱居、法名惠源、廿四日、上杉伊豆守、畠山

大藏少輔直宗、於配所道打之、九月口日、直冬備

後國治尉御口書被成之、十二月廿六日、崇光院御

卽位、

六年 一月廿七日、改元觀應、九月廿七日云々、九月廿九

日、直冬蜂起之由、肥後國注進、十月廿五日、直冬

爲凶徒退治、再可任鎮守府軍、由院宣被下尊

氏、權中納言國俊奉、口日、正二位大納言尊氏爲將

軍、中國追發、師直師泰兄弟相共、十一月十九日、備

前國福岡着給、口月口日、左兵衛督入道惠源召

具右口左馬助頼春落給、相次大和國越智伊與守

了、十二月九日、惠源入道南方降參由捧書狀、十

三日繪旨、凶徒治尉由也、南方正平五年也、

觀應二年 正月七日、惠源入道八幡出陣、十五日、義

詮都落、自桂川邊、尊氏與成一郎歸京、桃井與合戰、十六日將軍以下、丹波路沒落、口坂本ニ着給、二月三日、幡磨惠源口光明寺押寄、將軍尊氏方赤松相資引退、籠楯白旗城、十三日、尊氏兵庫湊川ニ馳向、廿七日夜、畠山石塔以下合戰打負テ、尊氏以下松岡城ニ引籠、饗庭命鶴丸依申沙汰、惠源寺御合躰無爲、師直師泰兄弟出家入道、尊氏上洛之於路頭、被_{武藏入道}打_{師直}師直師泰了、師直之子武藏五郎生取之、赤松口則祐吉野殿ニ申入、故兵部卿親王御息若宮一所口江下成敗西國、而可責_三京都、廿八日、光明院殿崩、七月三日、大乘院大僧正孝覺與一乘院禪師實玄兩門口執事到來、日々及合戰、于時孝覺寺務也、晦日夜、惠源入道京落、差北國敦賀津_{ツルカ}云、八月十八日、爲高倉入道左兵衛惠源治爵給_三宣旨、尊氏下向江州境宿、十月八日、惠源越鎌倉、廿三日、尊氏追發鎌倉、義詮京都ニ口之、十一月七日、奉廢崇光院御位、義詮降參故也、各公卿以下參南方、十二月十五日、於薩埵山合戰、惠源彌門降參、廿三日、三種神器等奉渡南方、三位殿院號_三新待賢門院、云々、北畠入道親房卿蒙_{以下}闕文、

三年 正月六日、兄弟口鎌倉口、後七日法於真言院、文觀上入_{修カ}略之、十五日、自武將軍金鈔以下宮々被_三追南方、二月廿六日、惠源入滅、毒害云云、_{六、四}廿八日、改元文和元年、閏二月十五日、天王寺行幸、伊勢國右京顯能率三千騎參向、十九日、八幡行幸、廿日、四主御同車、_{光嚴院、光明院、崇光院、東宮直仁、}幸南方、義詮被_三責之、京都沒落、江州ニ下、三月十一日、自江州四十九院義詮追發于京都、十五日、東山ニ追發、十六日、遷_三下京、廿四日、責_三八幡御陣、五月十一日、赤松尊氏奉責_三八幡御陣、主上沒落、內待所同口行幸河內東條、光嚴院以下四主奉_遷吉野奧加那生_三了、六月口日、山名右衛門佐竹氏落_{別カ}京都參南方、右兵衛佐直冬同參、八月十三日、堀川前關白經忠薨_五、實玄禪師父、覺實舍兄、九月晦日夢窓國師入滅_{七十}、十月、維摩口口研學口口範忠、春日山木枯稿、御神樂行之、八月十七日、後光嚴院御元服、_{四、十}則踐祚、文和二年 四月八日、後岡屋殿基嗣薨_五、同日後光嚴院即位、六月口日、主上行幸美濃國小_嶋、依_三南主軍一也、義詮同沒落、八月六日、昭光院殿薨_{四十}、

十一月廿八日、御即位、

三年 十二月十三日、直冬爲責_レ京都、自_二伯耆國上落、

五年 三月廿九日、改三元延文元、○月○日四辻善盛_◎按_{成歟}、賜_二源氏姓_一、七月十七日夜半、東大寺神輿入洛、同十八日、東寺奉_レ入_レ之、_{在洛五箇年、}

延文二年 二月十八日、四主自_二賀名生_一還幸也、光

嚴院_{伏見殿}、崇光院_{同大光}、光明院_{小倉}東宮直仁、_{萩原殿}、四

月十九日、南都兩門合戰事、將軍書狀到來、六月廿

七日、南方中務親王息_{十三歲}、二條關白御猶子南都下

向、可_レ爲_二一乘院門主_一着御、○多院法名良玄云々、

○月○日被_レ仰_二下新千載集撰者爲定卿_一、十月廿五

日、實玄禪師引_二率良玄禪師并越智伊豆守吐田_一○

時綺春定等_一亂_二入禪定院_一數百箇所燒_二拂之_一了、印

覺洛圓賴乘等所爲也、十二月十九日、將軍書狀_{可力}來

使信綱利盛、

三年_{戊戌} 正月四日、天龍寺炎上、_{供養以後十三年、夢窓國師寂以後八年也}

塔_○九_○、四月十八日、新待賢門院崩、同廿九日夜半、

將軍尊氏薨_{五十}、號_二等持院_一、五旬以後贈_二從一位左大臣_一、五月二日、梶井二品法親王入滅、八月廿二日、

義滿御誕生、十二月十八日、義詮將軍宣、廿九日左大臣經_{〔教〕}爲_二關白_一、

四年_{己亥} 正月一日、關白拜賀、七月○日、鎮西征

將軍宮、菊地以下發向、八月十六日、菊地小貳合

戰、小貳打負、十月十日、新田左兵衛佐義與自_二害於

武藏國鎌倉、左馬頭_○、十月八日、自_二鎌倉_一爲_二使

者_一、畠山上洛、爲_レ責_二南方_一云々、廿八日京着、道_{可力}彌

門、南方河内天野御座、楠左馬頭正儀、和泉守正武、

南方遷_二都觀音寺_一、依_二畠山上洛_一也、十二月廿三日、

將軍義詮以下、爲_二南方追發_{可力}下向、不_レ及_二合戰_一、

五年 二月十三日、將軍義詮、吉野將軍ハ故大唐

宮御息、_{赤松口口也、但馬口口出宮也}、○三月十六日、東大寺神輿歸

座、源氏公卿供奉、四月廿五日、赤松_○將軍謀反、吉

野賀名生_エ寄給也、義詮與同心也、主上御方大將、

二宮、前關白殿也、宮打負沒_二落南都_一、廿八日、和田

楠責_レ之沒落云々、五月八日、赤坂城落_レ之、仍南主金

剛山向_二觀音寺_一御座、二條關白號玉_クレ殿下、廿八

日將軍義詮引退了、七月十八日、仁木義長責_二京都_一

落了、十九日將軍引歸、八月畠山道_○鎌倉下向、

六年 三月廿九日、改三元康安元、_{九月廿三日云々}、明日、京

都大燒亡、三月八日、上醍醐寺、如意輪堂、五大堂、導師影堂、鐘樓、燒失、外本尊、□□□□□月□日、仁木義長參吉野方、赦免、六月十八日ヨリ十月十八日至、大地振、七月三日、被下牛車□頭中將□□畢、八月十七日、大風、後九月廿一日、今熊野行幸、將軍參給、山名清氏謀反故也、廿三日沒落、□清氏爲南方參、十一月九日、左大臣通嗣爲關白、十二月三日、南方勢住吉天王寺ニ打寄、二日◎按五將軍陣取東寺、七日南方勢都ニ亂入、八日主上將軍江州武佐寺ニ沒落、依細川相摸守清氏事也、廿六日南方勢引退、廿七日東坂下ニ還幸、廿九日、將軍入京、

康安二年 正月十三日、朝卯刻雷動、東寺塔燒失、二月十八日、改元貞治元九月廿三日云々、二月□□彗星出現、客星同、客星ハ用明天皇御宇、守屋佛亡時出來以後、至今年十四箇度、其内二度ハ、祥瑞無之、十二箇度ハ大凶也、彗星ハ、皇極天皇御宇、豐浦大臣蘇我入鹿亂起ニ現、中大兄皇子中臣鎌子合戰時出現、至今年八十五箇度、仍災難也、四月□日自江州還幸、内裏修理之間先御座西蘭寺、◎南溪按宸記及東寺長

者補任自江州還幸二月十日也、至四月廿一日自西園寺還幸、内裏本文蓋混同二者歟五日東寺道□□御渡西園寺佛舍利奉鑄云々、五月十七日以後、連々地振、六月ヨリ十一月至旱、五穀無之、人民餓死、江州湖三丈六尺乾ク、去年七月以來地振日々二三度、未休云々、同十七日八幡神輿入洛、八月廿九日歸座、源氏供奉、廿六日前左大臣良基爲關白、四十◎南溪按公卿補任皇年略紀良基爲關白在翌四年六月二十七日、又本年男山神輿入洛事似誤、□月□日、光嚴院法皇高野山以下御修行、於吉野南方御對面、御物語在之、九月十六日、楠以下宮方打勝、廿三日仁木山名大内降參、

貞治二年 □月□日、山本枯稿、六月〔十七〕日、◎據皇年代略記男山神輿入洛、八月九廿日、歸座、

三年 四月、山名左京大夫時氏降參上洛、□月□日、後拾遺□之撰者爲明、七月七日、光嚴院崩於丹波國山中也、五十十二月廿日、夜神木入洛、造替社頭西門跡訴申入御息□□武家執事權大夫入道道朝河□□事及大訴、

四年 正月廿六日、南朝關白□□殿下師基薨、閏正月二日、六條坊門邊燒失、今年連々火事、自去冬

疱瘡遍天下、三月十日、前關白經通薨、四十後芳池利花院、十月ヨリ十一月至、京都疾病流布死滅云々、十一月八日、夜平等院廻廊燒失、廿餘、依神木事天下不吉事不絕、

五年 八月十二日、神木歸座、關白以下供奉、口

口神輿無入洛、敵陣故也、九日僧正懷惟爲權別當、權大夫入道々朝没落北國、依南都口口◎按訴也、訟歟、

六年 正月三日、法輪寺炎上、三月三日、北野社

炎上、八月廿七日、左大臣冬通爲關白、十二月七日、將軍義詮逝去、廿七、息義滿正五位下左馬頭十歲、

七年 二月廿七日、改元應安元年、正平廿三年也、三月、

後村上院崩、在位三十年、四月十五日、義滿御元服、十于時左馬頭正五位下、加冠細川賴之朝臣、同廿七日、評定始御出、八月廿九日、日吉神輿入洛、

應安二年 正月一日、義滿爲征夷大將軍、

三年 口月口日、南方改元建德元年、正平廿五年也、

四年 三月廿三日、後圓融院即位、禪閏三月廿一日、口口◎南溪按新院歟、御幸西園寺、二條關白以下供奉、

四月五日、男山社壇内、神人自害數輩、九月十六日、實玄口信和口之狀出之、十二月二日、神木入洛、奉

入長講堂、兩門跡訴申、仍口等如之、大乘院々務、自今年將軍義滿在西、

五年 正月廿二日、實玄口信兩門主配流宣下、口月口日、南方改元文中元、建德三年也、十二月四日、男山遷宮、

六年 九月二日、大風、自口、永祚以後無其例、

七年 正月廿九日、後光嚴院崩、疱瘡、廿八、天下諺聞、二月二日、泉涌寺奉送、三月四日、廿五日、仙洞七僧會、口

信禪師配流讃岐國宣下、十一月口日、光濟僧正配流、十二月十七日、神木歸座、四箇年在洛、希有事也、口信實玄惡

行之與力、三寶院光濟、并榮緣僧正、遠流事、訴申、此外數十箇條御裁許、口歸座、御在洛中、天下不吉

條々數多也、神木入京者、去四年十二月二日也、天竺人來相國寺、名字聖、楠葉入道西忍之父也、將軍常召口之、十月廿八日、御即位、

八年 正月廿四日、仙洞御佛事、口口口實遍口

口良念、三月廿三日、改元永和元年、廿七日將軍八幡詣、口月口日、南方改元天授元年、九月廿七日、神木着宇治、十一月廿三日、大嘗會、廿七日自大内還幸、口日神木歸座、

永和二年丙辰

七月七日、光嚴院御佛事、於安樂光院

七僧會、十一月廿日、義滿從三位、

三年丁巳 九月廿六日、神木遷座宇治、十一月廿

六日、御歸座、寺門靜謐云々、

四年戊午 三月廿四日、義滿任權大納言、同八月

廿七日、兼右大將、十三日夜大風、十月九日、遷座

神木金堂、爲十口以下國民等訴訟治罰云々、寺門口、

十一日學口六方內山、下向、爲發向十口遠康入道

也、十二月上旬、先以引歸申入京都云々、十二月十

五日、將軍移住東寺、廿三日歸宅、南方發向云々、

五年己未 正月二日、武家佐々木下向、南都、四日

五日、榴慳、赤松、吉見、土岐、玉堂、數千騎下向集議

之由、二月廿日、京都措亂之間、武家上洛、三月廿

二日、改元康曆元、閏四月三日、勅願三十口口神

木金堂遷座中也、十四日、細川武藏守賴之沒落口口

出家、八月十三日、神木入洛、武家下向事訴申口口

入道遠康可追發一事、十五日左大臣師嗣爲關白、

十二月四日、東寺西院炎、不動尊取出之、大師像

同、

康曆二年庚申 三月六日、勅願三十口口口神木入洛

中、六月廿四日、光明院崩、十月廿八日成口師衆徒

龍田口口山田重文管田盛弘成口脇屋率人勢、南都

上洛、十一月廿五日、勅願口口神木入洛中、

三年辛酉 二月廿四日、改元永德元年、口月口日、

南方改元弘和元年、四月十一日、後小松院即位、受

禪、◎南溪按、後小松受禪事當在翌年四月十一日、大乘院前門主口信爲衆徒

方、南都亂入、七月廿三日、義滿任內大臣、

永德二年 正月廿六日、義滿任左大臣、閏正月廿二

日、社頭燒失、相殘分、一切經藏口口口御供所等也、

四月十一日、太政大臣良基爲攝政、五月口日、

武家使者兩人下向、六方口口和與、前兩門主上洛、

寺門無爲、六月上旬、和與也、十三日兩門主眞昭歸

寺、五月一日、是心院關白薨、

三年、正月十四日、義滿爲源氏長者、同六月廿

六日、口口口口口大乗院新門主與成家卿衆徒與

口八月廿二日落口口口成家卿口口口口口日新拾

遺集之撰者爲重卿口、

四年 八月廿三日、改元至德元、

至德二年乙丑 口月口日、南方改元元仲元年弘和五年也、口月

廿七日八幡神與入洛、

三年丙寅 二月十二日、義持誕生、五月十九日、

前關白冬通薨、五十八號一心院殿、大乘院孝尋父也、

四年 二月七日、右大臣兼嗣爲攝政、九月改三元

嘉慶元年、六月廿六日、前關白通嗣薨、五十八號後深心院

也、良昭父也、

嘉慶二年 三月廿六日、前關白兼嗣薨、後六條殿良兼父也、

四月八日、前太政大臣良基爲攝政、六月六日、稜普

光園院薨、○南漢按、公卿補任以下諸書作三十三日、但常樂記爲三十二日、歷代皇紀爲三十三日、十二日

前左大臣師嗣爲關白、

三年 三月十六日、改三元康應元年、

康應二年 三月十六日、改三元明德元年、晦日於相國

寺七間大堂等持院殿三十三廻御八講、一座講儀孝

尋大僧正、寺務、二座前別當僧正圓守、權別當、法印權

大□□、法印權——良壽、凡山、法印權大房淳、寺、□□講

師、權少——義寶、東大大僧都□□權大——凡定惠□□、法印權

大心兼、凡山、權大——心尊、凡山、叡俊、凡山、聽衆、凡辨玄、凡東大、

房顯、凡東大、修俊、實雄、玄覺、圓範、光曉、尋俊、凡業也、

權少——良譽、凡山、忠口、凡山、法眼實圓、凡山、權僧都叡隆、

山、幸圓、凡山、內供奉、賴深、寺、房口、寺、

明德二年 十二月廿六日、京都以外京上、自宇治歸

參、廿七日供目代□□、晦日山名奥州氏清被討了、

三年 三月二日、管領武衛圓寂、廿二日慈會□

□、八月廿八日、相國寺供養、夕程夕立云々、閏十月三日、南

方主行幸大覺寺、則出家、南北御合躰、一天平安、

南方元中八年也、○南按八當作九、十二月廿六日、義滿遷任

左大臣、□月□日、相國寺建立、

四年 四月廿六日、後圓融院崩、仍五月五日不

葺菖蒲、

五年 二月廿三日、大覺寺殿尊號太上天皇、六

月十三日、義持別力誕生、七月五日、改三元應永元年、八

月一日、大覺寺法皇崩、五十八號長慶院、九月廿四日、

相國寺炎上、十一月六日、左大臣經嗣爲關白、七、十

二月十七日、義持爲元服、九、廿五日、義滿爲太政

大臣、

應永二年乙亥 四月七日、武家八講一座、十七日前將軍

南都下向、六月廿日、前將軍出家、法名道義、廿八南主

尊號太上天皇、凡八月凡六月凡六凡日凡前關白經凡教

出家、法名祐圓、○凡內凡續凡愚凡抄凡補凡九凡月凡十四凡日凡入凡道凡將軍

南都御下向、十六日於東大寺受戒、廿日御上洛、

□月□日、信貴山本堂燒失了、

三年 九月十三日、義持任參議、十月〇日、九條禪閣、大將殿、考尋、同道、丹後國海士橋立一見、

四年 正月五日、義持從三位、四月十六日、北山殿立構上棟、〇月〇日、建仁寺炎上、九月七日、元〇寺名鐘京上、被釣相國寺、十月二日、將軍入道南都御下向、春日詣、入道三人、殿上人十八、四日上洛、

五年 正月十三日、崇光院法皇崩、三月九日、前左大臣師嗣爲關白、五月十四日、萩原東宮入道崩、六十四、◎南溪按、崩當作薨、入道蓋指直仁親王、享年續史愚抄作七十四、氏滿入滅、四十、

六年 二月十一日、興福寺諸堂上棟、北圓堂、長者以下不及御下向、三月八日、一條殿前關白南都御下向、着大乗院、十四日御上洛、十一日興福寺供養、導師良昭、前カ孝圓、左口頭、長者殿下、再將軍御下向、四月十九日、一條殿經嗣爲關白、五月八日、義持母入滅、九月十二日、相國寺塔供養、維摩會加行者光曉定有爲返辨上洛、十月十日、講師光曉、加行中、相國寺供養爲宮口上洛、十二月廿一日、大內入道於和泉堺打死了、

七年 五月廿一日、前關白經(教)薨、七、號後報恩院、七月十三日、成、子守社遷宮、御神寶三人、◎南溪按、合歟、在之、此外唐櫃濟之、自東第一殿ハ寧川、第二ハ子守、第三ハ住吉、

八年 二月廿九日、內裏燒失、行幸室町殿、自天德至建武三年、內裏炎上卅五箇度、五月十三日、將軍遣大唐書狀、

九年 二月十七日、彗星口口正月十七日ヨリ出現、口月口日、相國寺炎上、六月廿三日、神人闘爭事出來、草道口相論、八月三日、入道將軍下向兵庫、爲唐船也、十一月十九日、遷幸土御門殿、南主尊號、

十年 五月六日、將軍多武峯參詣、七日出京、次長谷寺參詣、六月三日、相國寺大塔炎上、口口口延供養者也、八月十九日、將軍西大寺光明口口參詣、

十一年 三月廿三日、口◎南溪按、善歟、宰相爲贈大納言正二位、同息淨藏貴僧爲贈僧正、四月三日、北山大塔立口、五月三日、唐船着兵庫、六月廿八日、第二皇子誕生、八月十五日、中山右大臣薨、四十、十二月

十五日、九條殿滿輔元服、十一、

十二年 三月廿二日、將軍南都御下向、廿六日歸座、五月〇日山木枯稿、至六月十三日、六千六百卅四本、廿六日、御神樂行了兩度、〇月〇日、北山女院准后宣、

十三年 正月十八日、畠山右衛門佐入道德元入滅^{五十一}、二月十九日、十郎發向、三月廿三日北山女院

准〔后〕女御入内、閏六月十八日、神樂行^レ之、七月廿三日、唐人南都下向、九月十二日、清水寺西門炎上、廿三日春日木作始、十二月二日、北山八講於青蓮院修^レ之、北山作事故也、講義隆俊忠慶講師、

十四年 三月五日、北山殿准三后宣、七月二日、最勝〇タラ〇會、廿六日春日下遷宮、十九日將軍右大將拜賀、義持[◎]以下闕文、

十五年 二月、修理大夫義種入滅、^{五十三}三月八日、

北山殿行幸、四月廿日、左大臣忠嗣爲關白、廿五日新御所元服林光院殿、五月六日入道將軍入滅、號鹿蘭院、^{五十一}

十六年 三月九日、內大臣滿基爲關白、四月廿六日、一條殿炎上、七月廿二日、鎌倉滿兼入滅、同廿

三日、義持任內大臣、十月廿六日、將軍三條御所遷任、〇月〇日、淨花院四條道場炎上、〇〇二條殿持基元服、

十七年 八月十八日、前左大臣經嗣内口、^{五十二}十二月卅日爲關白、十一月十七日、寺務〇〇法印被切腹、執官之事無^三勅許^二故^二候、〇〇鎌倉殿持氏、^{十三歲}云々、

十八年 後十月十五日、春日二基塔、東金堂、五重塔、大湯屋〇〇等、燒失了、十一月廿八日、親王御元服、將軍、內大臣、拜賀、

十九年 四月十六日、北山御所遷三條殿邸了、十九日、一條殿事始、十一月十九日遷住、廿八日、兼良御元服、十一、八月廿九日、稱光院卽位、受禪、〇月〇日常光院堯阿彌入滅、歌人、

廿年 六月十三日、興福寺口門兵庫關事、十九開門、十二月十九日、〇〇殿房嗣御元服、十二、

廿一年 七月二日、青蓮院准后義圓口、九月十二日、中御門大師宣俊薨、^{◎補在}十三日、

廿二年 八月十九日、伊勢國司可^レ被責^レ之、國司沒落、〇〇歸陣南方、上野親王宮々被^レ取申畢、

廿三年 正月九日、夜北山大塔炎上、雷火、未

遂供養、九月十一日、將軍南都下向、十六日歸京、

廿四年 〇月〇日、常樂會修行、九月廿四日、將

軍南都下向、廿九日社參、八月、大佛御身以黃金

奉^レ祈之、願主將軍、細川京兆禪門道觀御供、十月

廿九日、琳光院殿逐電、

廿五年 正月廿四日、琳光院逝去、被^ニ殺害、二月

十五日、御寶法尊准后入滅、^廿歲、將軍舍弟也、十一月

十七日、關白殿經嗣薨、^六十二、十二月二日、大臣滿〔教〕

爲^ニ關白、

廿七年子二月九日、法口寺供養、關白左大臣着

座、一座宣、太政大臣公俊、右大臣、以下公卿着座、

將軍出仕、〇月〇日、管領畠山入道、^送瑞、

三十年卯四月廿五日、將軍前內大臣出家入道

^{三十八、法}名道詮、〇月〇日、前關白良嗣出家、

三十一年辰四月廿日、左大臣持基爲^ニ關白、

三十二年巳二月廿九日、新將軍長德院入滅、^義量、

父入道將軍御在口無實不^レ躰云々、五月〇日、後一心

院右大臣冬家御出家、^{昭圓}父、

關東執事書下 署衆

正 遠江守平 時政^{自正治}。遠江守判^{元年}

正 相摸守平 義時^{自元久}。相摸守判^{二年}。武藏守判

合判 武藏守平 時房^{自承久}。右京大夫兼相摸守判^{四年}。武藏守判

右京權大夫兼相摸守義時 〇右京大夫兼陸奥守判

右京權大夫兼陸奥守義時 〇相摸守判

前陸奥守 義時 〇武藏守判

相摸守 時房 〇左京權大夫兼武藏守判

正 武藏守 泰時 〇前武藏守判

修理權大夫兼相摸守時房 〇修理權大夫兼相摸守判

左京權大夫兼武藏守泰時 時房

修理權大夫 時房

前武藏守 泰時

正 左近衛將監 經時^{泰時孫也}。修理亮時氏子、^{爲二人四箇年執事、}

武藏守 經時

〇左近衛將監 時賴^{經時舍弟也、}

正 左近衛將監

時賴^{經時舍弟也、}

時賴^{經時舍弟也、}

時賴^{經時舍弟也、}

合判
○相摸守

重時泰時舍弟也

宣時

平業時

陸奥守

重時

時村

平宣時

合
相摸守

時賴

師時

平時村

合
陸奥守

政村重時舍弟也

時村

平師時

合
○武藏守

長時

宗宣

平宗宣

相摸守

政村

熙時

平熙時

正
○左馬權頭

時宗

貞顯

平貞顯

左京權大夫

政村

基時

平基時

左馬權頭兼相摸守

時宗

貞顯

平維貞

相摸守

時宗

修理權大夫

平維貞

合
○武藏守

義政

維貞

平守時

○駿河守

業時

守時

平義時

○左馬權頭

貞時

守時

以上十人

相摸守兼左馬頭

貞時

守時

平義時

陸奥守

業時

守時

平義時

合
○武藏守

宣時

義時

平義政

相摸守

貞時

平義政

合判仁

平時房

平重時

平正村

平長時

平義政

一春日社每日不退一切經讀誦事、白川院勅願也。口所越前前國河口庄、御經衆自三大僧正至法師等一百口、每月爲五番、一巡分二十口、此內眞言宗已灌頂御供加持、此外承仕一口、就中百口之內、其闕分有之者、以三輪轉衆十五口、一座讀誦也、但除眞言經衆一如闕則乞三補任之故也、聞御經藏事惣藏司役也、御藏事悉皆未行之藏司代有之、別藏司四口、每日着到、口惣藏司出之、一箇月一帖宛、眞言經者年中一帖宛、墨筆損次第同出之、硯以下替物損次第爲衆議經伺納所云々、

一同諸下行物事自三納所配分云々、

供行、米代一口別每月九斗六升宛、

絹四丈本八丈云々、一口別每年、

綿九十目、一口別每年本口二箇年一度百八十目宛云々、

以上一口別分也、

佛供燈明事、五人口請取之、并供行衣服有之、藏司五人供行衣服如一口、於惣藏司者死闕分衣服九月轉衆配准經衆一人如一口、

內大臣正二位大織冠

藤原氏長者右大臣從二位不比等贈太政大臣正一位

淡海公

氏長者左大臣從一位贈太政大臣武智麿

氏長者參議中衛大將從三位贈太政大臣正一位房前

參議正三位贈太政大臣正一位宇合

權參議從三位左京大夫麿

左大臣從一位永手

氏長者大納言正三位贈太政大臣正一位眞樞

氏長者長岡右大臣從二位贈太政大臣內麿

氏長者閑院左大臣正二位贈太政大臣正一位冬嗣

枇杷權中納言贈太政大臣長良

氏長者白川攝政太政大臣從一位良房贈正一位忠仁

公

氏長者堀川准三宮攝政關白太政大臣從一位基經贈

正一位昭宣公

左大臣正二位良世

氏長者本院內覽左大臣正二位贈太政大臣正一位時

平

氏長者小一條准三宮攝政關白太政大臣從一位忠平

贈正一位貞信公

氏長者小野宮攝政太政大臣從一位實賴清愼公

九條右大臣正二位贈太政大臣正一位師輔

氏長者一條攝政太政大臣從一位伊尹贈正一位謙德

公

氏長者堀川關白太政大臣從一位宣通宣力贈正一位忠義

公

氏長者三條關白太政大臣從一位賴忠贈正一位廉義

公

氏長者東三條攝政關白太政大臣從一位〔兼〕家入道

准三后法興院如實

氏長者南院攝政內大臣正二位道隆

氏長者栗田關白右大臣正二位道兼

氏長者法成寺攝政太政大臣從一位道長

京極太政大臣從一位爲光贈正一位〔恒〕公

閑院太政大臣從一位公季仁義公

內覽內大臣正二位〔伊〕周

氏長者宇治准三宮攝政關白太政大臣從一位賴通入

道蓮花覺

改來覺
◎按尊卑分脉作「寂覺」

氏長者京極准三后攝政關白太政大臣從一位師實入

道法覺

號後
字治

明德二年十二月廿八日山名奥口氏清打死同三年

正月四日後口國共口大名

山城國山右衛門元國 丹波國細川右京大夫賴元 丹後國 一宮右馬頭秋利

并今水庄若狹國美作國守吉利 泉和 兩國大内左京大夫義弘

但馬國山名宮内少輔時鷹 因幡國山名中務大輔 伯耆國山名右馬頭代幸 讃岐

出雲兩國佐々木治部少輔高詮 以上十一箇國

應永六年十二月廿一日大口口入道口口國

大乘院日記目錄第二 自應永廿三年至寬正六年

應永三十三年丙午

正月十八日、自興福寺令發、向東大寺、別當坊尊勝院堂舍以下悉以破却、口口聖教道具等不殘一物、取散了、前代未聞之進發也、去三日於大佛殿清舜延賢、當失故也、不知何人所行、云々南溪云、後鑑無見者皆云武家事等、而後鑑所不記也、

三十四年丁未

五月廿日、崇賢門院崩、八十贈左大臣兼綱公女、後圓融

院國母、無所見

九月八日、春日社新三十講始也、五箇日、無所見

廿日、赤松兵部少輔義則法名性松入滅、薩戒記目錄爲廿三日之事、赤松系圖

八月廿四日

十月廿六日、赤松左京大夫滿祐俄沒落上、向播磨國

了、屋形自燒、同越後守總領職事致所望、故云々、寵

故也、准后記廿八日、薩戒記目錄廿七日、

十一月十三日、越後守自害、畠山入道道端、申沙汰云、

三十五年戊申

正月十八日、將軍入道、四十三歲、號勝定院殿、

十九日、青蓮院門主前天台座主准三后大僧正義圓、

世◎按十九日之下、恐有脫字、三月十二日御還俗、御名義宣、任

左馬頭、於裏松權中納言義賢卿亭、在此儀、依諸

大名申勸也、畠山、細川、斯波、山名、京極、六角等、

于時管領職畠山、三月廿一日移住室町殿、

四月十一日、將軍御口始、評定御乘馬始、同十四日後

四位、

廿一日、改元正長元年、

五月廿五日、鷹司左大臣入道冬家薨、號後二(心)院殿、

七月廿一日、皇年代略記廿日主上崩、御於黑戶御所、廿八歲、號稱光

院殿、皇子無之故非諒闇儀也、

廿八日伏見殿貞成王若宮十歲踐祚、於三條前右大

臣亭、在此儀、禁裏觸穢故也、或又上皇御猶子分云

云、然者可爲受禪歟、所詮他流之繼祚也、崇光院

法皇御彥也、三種神器者、禁中御座、不渡三年帝者

也、關白左大臣持基公爲攝政、

廿九日已於泉涌寺前帝御葬禮、

晦日御骨奉納深草法花堂一畢、皇年代略記爲入月四日本書仍正

九月口日、一天下土民蜂起、號德政一合、破却酒屋

土倉寺院等、雜物等恣取之、借錢等悉破之、官領

成敗之、凡亡國之基不可過之、日本開白以來、

土民蜂起是初也、

十二月廿一日、伊勢國司逝去、月日無所見、但春日若宮神殿宇記同

正長二年己酉

三月九日、將軍御元服、同日禁色、

十五日左馬頭義宣御改名義教、任參議兼左中

將、蒙將軍宣下、廿三日、將軍御參內、院參、初度、

廿九日、任權大納言從三位、

四月十二日將軍口口公家、

八月口日將軍八幡詣、

四日將軍爲右大將、

廿九日、遷幸土御門殿、黑戶御所新造、自餘如元、

九月五日、改元永享元年、御代初例也、無杉長治

十二日、將軍日吉社詣、延曆寺三座申慶賀、

廿二日、將軍南都御下向、著一乘院給、三輩衆申

慶賀、延年在之、

廿三日春日社并八幡宮御參詣、一乘院大乘院見物

之、還御後一乘院大乘院松林院仁渡御、内々議、御板輿也、

廿四日、興福寺七堂以下御巡禮、自南大門入御、寺中先達佛地院僧正教俊、次東大寺御巡禮、悉皆彼寺別當申沙汰、

廿七日、若宮祭禮在之、別當僧正以下出仕、將軍於黑木屋御見物、一獻進物等三輩儀定、

廿八日、曉雨下、自未刻一晴、四座猿樂如例、於白木屋御見物如昨日、御臺御棧敷并一獻等兩門

跡沙汰黑木屋、

廿九日御上洛、方々進物數千貫云々、

千貫并腹卷五兩、寺門、

二百貫、腹卷一兩、一乘院、

百貫、腹卷二兩、大乘院、

百貫、東北院、百貫、松林院、

五十貫、腹卷一兩、越智、百貫、十市、

腹卷一兩、筒井、三百卅貫、所々進物、

十二月廿七日、新主御即位、十一歲、太政官廳、

十三日、將軍從二位、

口日將軍受衣、池海國師、池當、作絶、口口、法名道興、道

號慈山、

永享二年庚戌

七月廿五日、將軍右大臣拜賀、臣字恐將之誤、

十月廿六日、御禊行幸三條末、即按下右大臣房嗣、節歟

近殿衛、

十一月九日、將軍直衣始、

十六日、大嘗會於宮廳、近江丹波、

永享三年辛亥

三月廿四日、上皇御出家、御戒師仁和寺弘助法親王、後小松院

口禪信僧正、先被辭尊號、

四月廿八日、東寺長者職事三寶院准后滿濟宣下、

十四日、將軍御受衣方口夢意國師口口、法名道慧、道號

光山、后改善山、

五月八日、將軍母儀勝萬院殿卅三廻佛事、

十月十三日、室町殿立柱上棟、

十二月十一日、室町殿御移住、

永享四年壬子

七月廿四日、將軍任内大臣、右大將如元、、足利官位記爲大饗同日、

廿五日、同於_二室町亭_一大臣大饗在_レ之、尊□□□□□左、

八月十三日、一條殿右大臣兼_レ良爲攝政氏長者、廿一

十六日、渡唐船出_二攝州兵庫岸_一、將軍下向給、_{所見_二無_一船}

人數大乘院初而被_レ加_レ之十三人、

廿八日將軍爲_二左大臣_一、

十月廿七日、二條殿攝政氏長者再任、

十一月廿七日、大和國民爲_二越智治曆、赤松勢下向、條

條緩意子細、成身院光宣法師申立故也、

十二月_八日、東寺長者職事、地藏院僧正持圓宣

下、

永享五年_{癸丑}

正月三日、主上御元服_{十五歲}、加冠攝政太政臣持基、理髮

將軍左大臣義教、

十四日、心經會始行、所々講布施減少、

二月十一日、將軍北野社參籠、一萬句連歌在_レ之、御會

所二十箇所、大乘院大僧正初而爲_二御人數_一、奉行山

名右衛門督入道常熙、

四月廿一日、河原勸進猿樂始_レ之、三箇日、觀世三郎、

棧敷六十二間、將軍以下御見物、大乘院大僧正初而爲_二其數_一、

八月十六日、鎌倉中大地振、

廿七日、星出_二西方_一、光白□色、

九月_{十九}日、畠山入道道端、圓寂、號_二眞觀寺_一、

十月廿日、法皇崩御、_{七十}天下諒闇、號_二後小松院_一、

廿七日、同於_二泉涌寺_一御葬禮、御骨奉_レ納_二深草法花

堂_一、三十箇日天下觸穢、一廻天下諒闇、

十二月十七日、春日若宮祭禮、諒闇儀也、仍口頭屋能

口後日猿樂無_レ之、田樂頭屋、西南院重覺、蓮花院專

成、三十箇日觸穢之間、祭禮延_二引當月_一了、

永享六年_{甲寅}

三月十五日、於_二室町殿_一延年在_レ之、興福寺三輩儀定、

兩門徒僧綱以下例立、然而一乘院僧正不參候間失

面畢、去正月口日御臺御下向候時、於_二內傳_{持力}原坊_一三

輩延年在_レ之、寺務奉_二行之_一、

五月廿四日、將軍兵庫御下向、唐船來朝故也、_{○南漢云、薩戒記以_二}

本件爲_二廿一日_一之事、猶可_レ考、

七月一日、唐人入都、

八月□日、唐人歸國、并日本船重而渡唐、

十四日、筒井□□於道明寺被_レ打止之、

十五日、筒井館發向、自□□方、

十一月十一日、大乘院領四十八箇所土民等蜂起、依_二

渡唐反錢事也、

永享七年乙卯

二月三日、圓明杉生以下被_レ打、延曆寺根本中堂悉皆

炎上、本尊藥師三軀燒_レ了、希代珍事、依□□圓明坊

等御治罰也、書爲_二四日_一、_二後鑑引_一諸

六月十三日、三寶院准后滿濟入滅、

九月□日爲_二越智御治罰_一官軍下向、大和成身院光宣

申□沙汰云々、所見_二無_一、

畠山□和泉守護、□備中守護、□伊賀守護、□□□

近江守護以下、

十二月□日、大和御勢上洛、少々手者相殘畢、

永享八年丙辰

正月□日、一色武田大和國下向、去年下向、大名同出陣、

六月廿六日、唐船歸朝、

七月□日、將將軍御□□大覺寺門主義照還□越智内通、

十月十六日、傳奏日野中納言□□失_二面目_一了、坪江□□名事被_レ仰_二付_一云々、

中山定親一

永享九年巳丁

正月十八日、武衛勢甲斐入道以下差_二南都_一、所見_二無_一、

廿日、武田勢安藝石見等衆入_二和州_一、所見_二無_一、

二月九日、越智與_二武衛勢_一合戰、負手打死等五百人云々、所見_二無_一、

所見_二無_一、

三月十七日、細川□武衛勢三百餘騎立南都進發、行日_二執_一、

記爲_二西_一日之事_二、廿二日、京極勢進發、

十月廿一日、行幸將軍室町亭、

永享十年戊午

四月廿八日、大乘院大僧正經□尋歟_二按經_一、上洛、廿九日

舞御覽、俗人下_二行物事_一、以_二中山宰相定親_一御問答、

天下大儀連續致_二其沙汰_一候旨、私々被_二歎申_一畢、

於_二一乘院_一者領内、地口錢依_二之五十貫進上_一了、

八月廿九日、多武峰發向、堂社坊舍拂_レ地炎上、大織冠

御影奉入三橘寺、定慧和尚建立以後是□□越智

引汲故也、越智逐電了、○諸書廿八日

九月□日武衛勢自三和州進三發關東了、

永享十一年己未

二月十五日、鎌倉兵衛督持氏自害、四十大藏谷御所以

下關東悉以發向畢、十日、按當作三

三月十五日、武勢分三入吉野山、相州越智在々所々糺

明、○無三所見

廿四日、於三雪別所越智舍弟次郎自害、或被三打殺

云々○同上

廿七日、於三長谷寺宿屋之柴中越智自害、實者被三

打殺云、○同上

四月十一日、箸尾次郎左衛門被レ打レ之、○公名公記十

御勢分三入熊野與小泉以下越智引汲輩被レ尋之、○無三所見

十月□日、熊野御勢歸三陣和州、○同上

永享十二年庚申

二月十三日、於三禁裏三諸大名□□在レ之、一天下大儀、

見物不可レ過レ之、先代未聞云々、自身盡三熱能、

四月十六日、八坂塔供養、將軍出仕、五山僧沙汰也、

五月十五日、於三和州鴻一色左京大夫義範自害、武田

奉云々、

十六日京都一色屋形官人等自害、放三火於三輪、土

岐與安自害、○與安東寺執行日記作三世安應仁略記世保、

十九日、於三檜原所三市自害、○無三所見

六月二日、武田以下自三和州三悉以歸京、越智引汲輩大

略被レ失レ之、越智遺跡事檜原拜領之了、號三越智

○公一名記三日、

永享十三年辛酉

二月十七日、改三元嘉吉元年、依三病氣草命一也、

三月十三日、大覺寺門主義昭之御頭於三室町殿御實

檢、去月廿四日於九州嶋津館御自害云々、○後繼以生害係三

十三日、

四月十六日、持氏息三人自城沒落、被レ虜、

六月廿四日、將軍前左大臣於三赤松館三奉レ打レ之、御頭

給レ之下三向播州、木山城一門輩自燒了、後日相國寺

長老下向、御頭乞レ諸、於三等持院御葬禮、號三普光

院贈太政大臣、

廿五日、西院大夫法眼見賢下_ニ向南都、至_ニ木津、越智以下爲_レ迎罷向_ニ丁、

廿六日、卯刻、若君自_ニ伊勢守屋形_ニ奉_レ入_ニ室町殿、諸大名奉_レ守_ニ護之、今日、東北院、松林院、西南院、筒井順弘、成身院光宣以下上洛、京都儀無_ニ心元_ニ由相存儀云々、

廿七日、於_ニ室町殿_ニ可_レ有_ニ治_ニ罰赤松入道_ニ由、大名評定、○無所見

東大寺事、來月二日、自_ニ興福寺_ニ可_レ有_ニ發向_ニ由、六方以下同心集會、在々所々相_ニ觸之_ニ云々、

廿九日、東大寺別當僧正今日自_ニ京都_ニ下向、亥刻自_ニ興福寺_ニ別當坊發向放火、僧正沒落、大夫法眼同不_レ知_ニ行方_ニ者也、近年建立之西院悉以炎上_ニ了、

七月朔日、東大寺三面僧坊以下在々所々破却、希代珍事、如_レ此例無_レ之、顯密聖教道具悉以粉失、爲_ニ一天下珍事_ニ不_レ可_レ過_レ之、法滅至也、

大夫法眼披官人住屋、并亥慶寺、向聖賢寺內寐轉經院等破_ニ却之_ニ、六方沙汰也、

十日六方蜂起、東門院坊事如_レ元可_レ被_レ返_ニ付佛地院由問答隆秀僧正了、可_レ返渡云々、此間儀者爲_ニ

上意_ニ故無_レ力云々、次寺務職事可_レ被_ニ辭退_ニ由、同申_レ之、得_ニ其意_ニ云々、

大夫法眼所持料足、奈良中在々所々在_レ之、悉以納_ニ唐院_ニ、大綱注進分一萬四千四百廿五貫文、米二千石云々、惣京坂本以下十方里料足十餘萬貫、此外七珍萬寶不_レ知_ニ其數_ニ、

十四日、故越智息出頭、蜂起申_ニ合河內國畠山德本_ニ云々、當越智智原、在所仁押寄合戰浸落了、此外御罪科之衆徒國民等罷出者也、

八月二日、前畠山德本自_ニ河內國_ニ上洛_ニ由、○後鑑右馬佐弟尾張守以下一門迎向、當畠山右馬佐_弟德本沒落、遊佐以下不_レ知_ニ行方_ニ、德本可_レ成_ニ管領_ニ由云々、當管領者、細川右京

大夫持之也、所々安堵等成敗也、大乘院門主職事、如_レ此間禪師御房不_レ可_レ有_ニ相違_ニ云々、

三倉庄給々職事、成身院光宣法師所望之間、一期之間不_レ可_レ有_ニ相違_ニ由、爲評定衆成_ニ奉書_ニ了、給々分外不_レ可_レ有_ニ違亂_ニ云々、

三日、故十市實子加賀壽丸一跡安_ニ堵之_ニ、管領成敗也、

四日、上北面實盛御免除、同管領成敗、

十日、春日若宮神主息安堵、祐村此間執行、正領祐時兼帶之了、

十五日、興福寺別當職事、法雪院法印實意宣下、權別當職事、東北院法印俊圓宣下、

廿日、大乘院方木門田令御領人夫大略參申二百九拾人、海智小升兩庄不參了、

廿一日、多武峯御影可有御歸山由治定、自去年當山被口榮河上關少々被付之、

九月三日、南都山僧蜂起始之、

十日、赤松入道性具於木山城自害、彼頭自山名之相摸守手渡惣領山名手了、仍赤松之闕國兩人知行之、希有面目不可過之云々、

赤松伊與守降參、去春比在國之間、今度天下儀一切不存知一條分明候故、雖令降參不可叶云々、仍自害、

赤松入道息彥次郎今度帳本也、沒落、左馬助同沒落了、

廿一日、赤松入道性具之頭被渡京中大路、被懸獄門判官以下隨其役了、

閏九月五日、彥次郎以下十三人、於伊勢國司館自

害、此間相資國司、緣者故云々、雖然上意之間無力云々、日似是、後鑑二

畠山右馬佐於攝州邊打止之、成高野取生云々、頭渡德本入道方了、所見無

廿六日、筒井順弘、光宣、尊覺、以下沒落、筒井自燒了、先日成身院名木之松顛倒、不吉及其沙汰了、如按大凶出來了、

十月二日、寶壽寺殿自立野御上洛、免除事雖被申

之、於進退者不可有殊儀、於門主之職者不可叶云々、仍御隱居、令治定、御下向了、

五日、筒井順弘相資立野沒落、緣者故也、光宣以下兄弟背惣領故也、就中光宣之弟相國寺僧罷出成惣領之望云々、是順永事也、

筒井順永房惣領職令安堵了、京都事榮清春圓房計略云々、光宣以下口以吞之、後々順永與光宣以下和與合牀、然之間榮清房失面目退了、

十一月十三日、新筒井順永衆徒蜂起始、

嘉吉二年壬戌

三月十五日、十市加賀壽丸俗名遠清、三ヶ井口以下安堵仰

付之、五十貫馬一疋上進十貫
太刀名圭五貫奉行

十六日、興福寺別當職事、東北院權僧正俊圓宣下、

權別當職事、慈恩院法印兼曉宣下、

五月廿五日、皇子降誕、從三位和氣卿息女腹、臨讓位之期大御炊

門入道相國猶子、改姓名號信子云々

廿七日、越前國坪江鄉春日新卅講料所、政所職事和田美濃守

補任也、下地清俊法眼知行畢、

六月二日、新宮社覺尊大僧正、社遷、猿樂在之、於修造者

去永享年中也、猿樂宇治藤松大夫、

八月四日、細川弘源寺持之逝去、

十一月十二日、前筒井順弘令引率立野衆以下、夜前金

堂引籠、相違子細有之間、則楯籠負間寺、可責

光宣之坊彌勒院支度云々、則筒井順永以下手者、

光宣手者等、打寄負間寺、順弘以下責落了、定宗房

并立野衆以下十方沒落、事了以後爲合力、木津襲

來、般若寺坂邊、木津父子泊下司以下被打了、光宣

方ハ山村郡山辰已等打死了、終日合戰也、又豐田

賴美自南方襲來、光宣之手者以下岩井川邊馳向

合戰、豐田引退了、五箇關事順弘與光宣相論、故

云寺門云六親不和出來、所詮順大未練不足

取也、◎無所見

嘉吉三年癸亥

二月口日、前筒井順弘於筒井被殺害了、去正月雖

歸宅、云一族內者悉背之故也、光宣以下沒

落、順永同逐電、則面々歸宅了、◎無所見

七月十一日、十市率大勢罷上、比與中々無是非發

向也、先日俄令搥觀禪院早鐘、是興立爲打古市

孤仙云々、色々雜說古市與光宣之間在之、東大

寺發向ハ此故歟云々、隨而發向非殊子細者也、且

爲天下不言事也、

廿一日、將軍右中將義勝十歳、他界、送號慶雲院殿、開若大原

御舍弟可被繼之云々、

九月十六日、豐田賴美父子責上、奈良光宣責落、彌勒

院、光林院、大興院、鶴地藏堂近所在家、今口門寺林以

下在家燒亡了、古市井戸以下申合豐田云々、實憲

以下筒井衆來三條邊、兩方合戰、實憲引退、光宣ハ

下向筒井館云々、就五箇關務事號惣寺門方帳

本輩七人在之、爲光宣方之寺門加罪科下人住屋

進發了、彼七人輩令沒落、相憑豐田賴美候故、輕

一命了、後日六方學侶以下蜂起、光宣以下加罪科了、奈良中雜務事、小泉重弘、豐田賴美、古市孤仙、此三人自前僧正經尋被仰合、德本被仰付之了、寺社物忿爲一天下不吉也、

廿四日^{按當作夜}、內裏炎、惡黨所爲也、神璽等紛失、南方金藏主、日一品入道父子、其外濟々、於山門并京都被殺害了、其夜

主上有行幸密左大臣亭賢所同之、寶劍紛失、翌日出現、今度儀大略者赤松黨所爲也^{第廿七箇度炎別當、入滅了、此孝俊ハ}

十一月六日、佛地院僧正孝俊^{別當、入滅了、此孝俊ハ}南方日野息也、大乘院大僧正孝尋之弟子也、佛地院中興也、

嘉吉四年^{甲子}

二月五日、改元文安元年、依革命也、

廿六日、筒井并光宣以下爲治討、越智勢等雖押寄于筒井館、不及責落退ノ間、剩松山以下被打殺了、以外時宜也、隨筒井方蜂起了、
廿八日、前大僧正、筒井方事以外御怖畏之間、俄入御北山嵯峨與彌生院了、以前七人衆各怖畏沒

落輩在之、

三月二日、大豆小豆以下如兩降下、^{日本國中}

十三日、實憲以下筒井勢雖責與善院、不叶故於嘉多院、自害了、其外責手大略被打了、古市勢沙汰也、七人衆以下得其力了、

四月十三日、北野社悉以回祿、神人籠居故、別當竹內大僧正良計、

十九日、前大僧正自京都御下同、著禪定院給、去月自嵯峨押小路室町行願寺一出御了、

廿六日、武家使者下向、松田對馬入道、飯尾大和入道、同新左衛門、爲光宣以下治討也云々、

六月五日、禪定院之內鬼蘭山被城搆、奈良中不謂

自他門人夫悉以被催之、數千人罷出、六方學侶并衆中沙汰也、陣屋共打也、六方陣屋者、令破光

宣之母儀之住所立之、希代事也云々、衆中三人陣

屋三字、沙汰衆中坊懷尊陣屋一字、前大僧正陣屋

一字、各兵糧米籠倉在之、唐院新坊寺物隨所用

取之、大水桶數十、同以寺物遣之、珍事也、南市

鐘自三方借用遣之、借書在之、

十三日、自畠山德本方令責高山與、小泉重弘

爲_二畠山方_一被_二打殺_一了、不便々々、畠山勢同退了、筒井勢以下高山合_二力_一之、

廿一日、自_二鬼蘭山城_一令_レ發_二向池田今市窪城_一了、竹木等爲_二城搆_一召_二寄_一之、奈良中人夫數千人罷出了、

後六月十九日、武家使者上洛、筒井等治罰事難_二成立_一

云々、各失_レ色云々、

口日小泉息今力丸成人之間、伯父法隆寺法師被_レ成_二小泉_一了、後號_二口_一也、

文安二年乙丑

三月廿日、一條殿、前攝政殿、同御方御所、春日詣、著_二禪定院_一給、御共五條爲賢、冷泉爲富以下、

六月二日、大風、藥師寺金堂以下顛倒、在々所々破損、希代事也云々、春日大鳥居之内下松顛倒了、鬼蘭山

城陣屋共如_レ其也、重被_レ取_二立_一之、

九月十三日、曉鬼蘭山城自燒、悉以沒落、不_レ知_二行方_一、前大僧正入_二御安任寺_一、今度筒井與合戰處、豐田賴

美之息檔松以下并布施等被_二打取_一、當方失_レ力、得_二

筒井方力_一間迷惑歟、自燒了遁_二禪定院_一、火難了、門

主上行_二向成就院_一、則歸_二禪定院_一、

十九日光宣率_二大勢_一罷上、爲_二用心_一鬼蘭山城又搆_レ之、筒井順永官府如_レ元、五箇關所光宣知行事如_レ元、敕免綸旨後之日到來、前方悉以罪科、彼七人衆

以下楯_二籠古市_一、以後十餘年之間日々夜々古市與_二

鬼蘭山_一及_二合戰_一了、南鄉在々所々放火、

十一月三日、關白殿下_二條_一薨給、五十號_二後福照院殿_一、十

三日、左大臣殿_{近衛}爲_二關白氏長者_一、

文安三年寅

十一月廿八日、皇子著袴、

文安四年卯

四月二日、南禪寺悉以炎上、雖_二以後建立之有_一名、無

實也、

六月十五日、一條殿前攝政殿下爲_二關白氏長者_一、

七月五日、天龍寺悉以回祿、以後雖_二建立之有_一名、無

實也、

十九日、土民蜂起、如_二嘉吉元年_一、

口月口日、春日社上遷宮、

十一月廿七日、伏見親王真一奉授太上法皇尊位、當今實父、

十二月廿六日、關白殿下御拜賀、御初任、攝政御時不及御拜賀、

文安五年

辰

十月晦日、學侶六方歸陣、雖令發向不叶故也、旁以失面目了、長谷寺參詣輩押留之云々、路次停止也、

文安六年

巳

五月四日、九條前關白殿下薨、號後三緣院、

十二日、大地震、

七月廿八日、改元寶德元年、依去年七月洪水并今年地震疫病飢饉也、

八月十日、多武峰御影遷宮自橋寺也、勅使經顯朝臣、自去永享十年至當年十二箇年御橋寺、

寶德三年

辛未

九月一日、春日神木遷座于別殿、今度關務惡行、德本

入道所行也、隨而大明神種々御託宣在之、三箇年內畠山一家可滅亡云々、希代不思議事共在之、近日畠山權勢無雙也、何事可有之哉、如按一家物怨、三箇年內出來、一向如無成下了、

廿四日、神木歸座、寺所悉以無爲、武家使者下向、條條成敗之、長谷寺發事向六方鄉申入之、雖然先以成歸座畢、今日歸座儀、自金堂前御歸座儀先例且被用之、大方不審事共也、就中珍事出來、俊圓貞兼兩僧正令列當官之上了、各法眼平袈裟、五師三綱等同前、

今月洛中土民蜂起、如正長嘉吉也、隨而當國蜂起了、

十月十四日、依土民蜂起、小塔院坊堂塔悉以炎上、其火元興寺金堂燒之、依餘炎禪定院廻祿、所殘彌勒御堂西門三也、大乘院得業遷住成就院畢、智光法師西方了、於禪定院燒失了、末代至也、就中元興寺召連立以後火事、

十一月十七日、男山放生會始行、依南都訴訟延引了、

十九日、六方等長谷寺發向執行住屋井坊等也、

卷向山年貢每年二十貫文、分爲觀音、辨可、付三六方云々、

廿一日、斯彼千代德丸元服、名字義武、

寶德四年^{壬申}

二月廿四日、去朔日飛鳥井中納言入道逝去云々、

四月廿六日、禁裏舞御覽、南都伶人參申、祿物百貫文事、兩門跡可沙汰^{由云々}、近來計會之由申入之、不沙汰進之、萬里小路前內府奉書及度々伶人持參了、兩門共以不沙汰者也、

七月廿五日、改元享德元年、依天下庖瘡并三合也、
閏八月廿二日、春日社司與神人御供相論事出來、故晨神供令闕如了、依此事社家逐電、廿一日神人等開籠社頭故也、自廿六日神供備之、其儀新例、依此事口口祐識館衆中進發也、神護廣室御口向以來、此在所三黨等亂入、希有初也、

享德二年^{癸酉}

三月晦日、渡唐船九艘出日本、^{後鑑錄、陸涼軒日錄爲廿九日}長谷寺多武峰天龍寺等申請云々、同九月一艘、合九艘也、

四月廿六日、二條右大臣任關白氏長者、令超越鷹司左大臣給、仍關白蒙一座宣給、於攝家一列者如此無御例云々、

十二月廿六日、關白殿御拜賀、

廿七日、

一唐船十艘積色々、西忍入道註分、後日記^之

油黃三十九萬七千五百斤加進物一萬斤定、^{此內二萬三千斤、則申請自帝王給了、}

銅十五萬四千五百斤、寶黃十萬六千斤

太刀九千五百振加進物定、長刀四百十七振ヤリ五十一

扇千二百五十本、^{カ子}薛繪物大小六百卅四色

一號船四萬三千八百斤、^{カ子}三萬四千二百斤

二號船七萬七千斤、^{カ子}四千二百斤

三號船二萬七千四百斤、^{カ子}一萬四千四百斤

四號船三萬四千四百斤、^{カ子}二萬二千二百斤

五號船^{大內申請カ子}不渡之、六號船九萬二百斤

一萬五千四百斤、^{カ子}七號船五萬三千二百斤

一萬八千四百斤、^{カ子}八號船四萬四千二百斤

三萬二千斤、^{カ子}九號船二萬三千百斤

十号船一萬一千斤
一萬三斤

享德三年甲戌

正月十六日、九條大納言御拜賀、

三月五日、將軍母儀大方殿春日詣、御宿所東北院、

十二日、大方殿御上洛、

五月廿八日、伊勢守入道眞蓮入滅、眞兼僧正兄也、

六月三日、畠山一家動亂出來、神室切腹、伊與守與彌

三郎相分畢、春日大明神託宣不違者也、所無見、

廿日陽明禪園薨、號後普賢寺殿、

七月一日、鷹司左大臣任關白氏長者、

九月廿九日、八方大衆蜂起、宇治郡事云々、御成敗無

爲、宇野庄大乘院知行、東北院奉行也、

口日、土民近日蜂起、在々所々放火、珍事旨、

十月十三日、唐船歸朝、宣德錢到來、後鑑十五日、

享德四年乙亥

正月五日、敍位、執筆九條大納言殿、

十六日、關白殿御拜賀、陣下初例也、

三月廿四日、一條御方、內大臣御拜賀、

廿七日、畠山德本入道入滅了、五十號孝教院、

六月五日、二條殿關白再任、

七月二日、畠山伊與守義就與彌三郎合戰、光宣并筒

井順永以下爲彌三郎方打負了、

八月十日、七大寺關門宇治郡以下事、筒井箸尾片岡光

宣以下所行也、自伊與守方彼面々可發向山及

其沙汰、

十九日、箸尾片岡筒井以下自伊與守方責落了、光

宣以下逐電、

七大寺開門了、宇治郡等伊與守知行、鬼蘭山城破

取禪定院了、

十月一日、畠山伊與守手者共引退了、

廿八日、仁和寺口寺宮御元服、家門推后申沙汰也、

十一月十三日、春日祭行、之、

廿七日、若宮祭禮、

康正二年丙子

正月十五日、陽明鷹司兩關白家燒亡了、陽明御領殿

爲御所、鷹司淨南院爲御所、

廿八日、久我殿文庫回祿了、舊記以下悉以燒了、

六月五日、就御用錢事、上使宇治大路下津屋下向、六

方峰起追_上之一畢、

七月六日、六方喧嘩出來、國中衆少々上洛、御用錢事衣賴也、懷實、善乘

房被三印判

八日、官鑑渡_三之於興西院_二也、六方無爲、

廿日、土御門殿遷幸、

廿五日、將軍右大將拜賀、

八月廿九日、伏見法皇崩、號_二後崇光院殿_一、近日彗星出

顯云々、

〔康正三丁〕◎南溪云、五字原本無而連行而書次條者誤、今訂補之、

九月廿八日、改_三元長祿元年_一、依_二病患旱損等_一、

十二月口日、南方宮兄弟於_二吉野奧_一奉_レ打_レ之、赤松黨

所爲、近日彗星出現了、於神璽者奉_レ取_二小河手_一云々、

十九日、若宮親王宣下、成仁、

將軍兄僧御還俗、御名政弘、任_二左馬頭_一下_二向鎌倉_一、

長祿二年_{戊寅}

四月十七日、若宮成仁御元服、加冠左大臣、

十二月五日、左大臣教房爲_二關白氏長者_一、

長祿三年_{己卯}

正月一日、關白御拜賀、陣外、

五日、關白敍_二從一位_一、室町殿事始、烏丸御所被_レ行

_レ之、

二月廿三日、九條殿元服、政基云々、後三緣院毀實千、當九條殿之御伯父也、

三月廿七日、若宮敍_二三品_一、

六月一日、箇井順永、光宣以下御免、越智方川退了、兩

畠山於_二河內國_一合戰、彌三郎他界候間、舍弟彌次郎

令_二相續_一了、光宣計略故云々、然間此相論不_レ可有_二

盡期_一、一天下可_レ爲_レ亂云々、

十九日、日雙出、

七月一日、小泉金刀丸同所重榮、龍田美舜、自害、責手箇

井順永、

八月一日、番條萬歲沒落、責手箇井順永、

十三日、日雙出、

十九日、日雙出、

十一月十六日、室町殿御遷住、普光院殿御所、室町殿先年被_レ引_二鳥丸_一、今度又自_二鳥丸_一如

元被_レ遷_二了_一、少々御新造在_レ之云々、

長祿四年庚辰

八月廿七日、内大臣義政任左大臣、

九月廿日、畠山右衛門佐義就失三面目、下三向河内國、

則閉三籠嶽山城、畢、爲三責手、諸大名并彌二郎政長出陣、

廿二日、故民少輔經仲息右兵衛佐爲仲他界、

廿九日、大風、諸國損亡、

閏九月十七日、西園寺殿燒失、記録三百焼失、

十二月十五日、左大臣御拜賀、

近日於三嶽山、弘川等合戰及三度々、諸國之餓者共於三京都、餓死如山岡、

廿八日、改三元寛正元年、依三五穀不熟、旱損蟲損飢饉二也、

寛正二年辛巳

十二月廿五日、一條殿若君御元服、政房、大閣御孫、

寛正三年壬午

七月五日、元興寺金堂立柱上棟如、形勸進云々、寶德三年炎上以後始也、

廿七日、陽明右大臣教忠薨、四十、

九月口日、土民蜂起京中亂入、

寶正四年癸未

四月三日、二條殿爲三關白氏長者、

十一月口日、畠山義就御免除云々、子細何事哉、但三箇國等事者不可、叶云々、吉野奥山住了、○南溟按、大乗院舊

記廿五日條云、於三義就者御免除由風聞、

寛正五年甲申

正月一日、關白御拜賀、故大納言政嗣内辨云々、神木動

座中、非、例也、爲三天下不吉事云々、

十三日、二階堂修正行、○無三所見、

十四日、畠山政長自三河内上洛、○見三所無、

廿六日、六方與三國民檜原一確執、依三名字籠事二也、國中私交錢爲三寺門停止之處、不三承引、故也、

四月十二日、神木歸三座本社、

五月十七日、春日若宮祭禮、去年分、田樂頭、覺慶律師、宗賢、

七月十六日、主上行三幸仙洞御所、九條殿鷹司殿供奉、十九日、讓三國第一皇子、廿三歲、

□□日、先帝太上天皇尊號、四十六、

八月廿三日、新院御幸始、將軍亭、

十一月廿七日、春日若宮祭禮、

十二月二日、淨土寺准后義辨御弟子義尋僧都還俗、御

名字義視、號今出川殿、

寛正六年乙酉

正月五日、義視敍從四位、下院方

廿一日、和歌勅撰事被仰出之、

三月四日、將軍花頂花御覽云々、京中燒亡、

四月五日、御百首和歌院宣被成之、中御門辨宣胤

奉、

八月十五日、男山放生會、將軍爲上卿、大雨大風、淀

橋流了、國々損亡、

九月十日、九條内大臣隱居云々、辭退内大臣、

十三日夜、天狗流星一天下振動、日本開白以來始也

云々、何事可出來哉、

廿一日、將軍南都下向□□□□公武出立折花、

廿二日、春日詣、兩門跡見物立合、門從大乗院方大鳥居、一乘院方

東門、

同日、一乘院大乘院御成、板輿、内々儀也、

廿三日、兩寺御巡禮、當寺引道東北院僧正、

廿四日、光明院僧正隆秀入滅、先以不及披露、清

水寺別當補兼雅僧止云々、又辭退之、

廿六日、法花寺殿御成云々、

十月十六日、後小松院三十三廻宸筆御八講始之、一

座大僧正俊圓、講衆光淳、信圓、尊譽、等也、講義前大僧正

俊圓、僧正能譽、夏春、權僧正房什、公惠、

十一月廿日、義視御元服、元淨土寺御門主也、

廿三日、室町殿若君誕生、御臺御腹、御産所和泉守

護所、

文正元年戊、二月廿八日改元也、當上

御在位三年也、十二月大嘗會、

應仁元年、天下大亂、當上院兩帝室町殿ニ行幸、文明

二年院崩給、同八年室町殿悉以炎上、行幸北小路

左亭、同十一年皇居左亭炎上、行幸日野亭、一條室町、又遷

幸土御門殿、同十三年室町殿御隱居、長谷、後號東山

殿、至同十七年、云京都云諸國無正躰之間、山南都所々訴訟等、此事略之、然則寺社領本末寺悉以無正躰、越前國河口坪江兩庄ハ、朝倉或甲斐方以別段敬神儀、半分致其沙汰通也、其餘木田庄以下一切無之、

併天狗流星之所爲無力次第也、當大亂日本初例也、海星是又日本初也、

大乘院日記目錄第三

自文正元年
至文明十五年

寬正七年丙戌 文正元也

正月一日、關白殿下於室町殿被成拜禮、希有事、前代未聞珍事、一天下沒落不可過之云々、仍自餘大臣以下、馳參躰上不吉云々、

二月廿八日、改元文正元年、代始歟、藤大納言任右大臣、改詞、○南溪按、公卿補任作二十六日、一條中納言任權大納言、政言、○按據公卿補

任政房之誤歟、政房二月十六日任權大納言、

閏二月九日、夜忍辱山悉以燒失畢、本尊奉出之、

三月十七日、將軍伊勢詣、

廿日、御參宮、大雨大風、希有事云々、凶事云々、

廿三日、御下向、廿六日、爲御禮參賀、諸家僧侶與昇事被仰出、召進之一、

四月廿二日、國郡卜定、

八月四日、前殿下御下向南都、京都物忿故也、

畠山政長、山名、細川、斯波、京極、六角以下諸大名、

分國軍勢召上、京中珍事云々、自去月一事也、近日

□可出來云々、不知子細云々、

廿五日、畠山義就自吉野出陣河內國云々、
九月二日、義就入部河內國、

山名三河今出川殿等事沙汰

甲斐朝倉中沙汰等希有

六日、伊勢守貞親朝臣、斯波義敏等、沒落了、
京中酒屋土藏破却、新大納言殿義視入御細川屋
形、

十一日、春日第四御殿千木落了、

十三日、新大納言還御三條亭、夜光物飛云々、

十月十二日、布施發向、隨而智恩寺悉以燒亡、自畠山
義就方沙汰也、

十一月十四日、前殿下御上洛、高山越云々、

廿六日、御禊行幸、三條末以北、野◎南溪按節歟、下右大臣

政嗣依觸穢、去月延引、

十二月十二日、祇園塔炎上、

十四日、明年法花會、口口昌懷、

十八日大嘗會、近江、備中、十月依觸穢、御禊延引十二月大記例追天武舊例、

廿六日、畠山義就上洛、相要力資山名入道云々、着三千

本釋迦堂云々、

廿八日、興福寺東宮燒失、土民沙汰、希有事、

文正二年亥應仁元也

正月二日、畠山義就出仕、御對面、三箇國大安塔、

五日、御成申入之於山名亭、時宜快然云々、希有也
云々、光宣法印今日上洛、畠山間事可令申合細
川云々、

六日、畠山政長于時官領也、可開屋形由被仰下之、
御返事可申合細川云々、珍事出來、

八日、被改官領職、被仰付斯波治部大輔義廣、
云、政長失面目了、

十五日、可被責政長、山名入道、義就、一宮、
◎南溪按以下大名同心、楯籠于室町殿了、新大納言
一色歟、同馳參、

十七日、政長自燒沒落、但楯籠上御靈社、御所近邊、
取寄儀也、其間二町計也、主上天皇俄、御同車行、
幸室町殿、車伯三位之車云々、落三日月地云々、一日
一夜合戰散火花、希有見物也云々、

十九日、曉鐘政長打負沒落、但依計略、光宣法印
也、内々細川屋形仁隱置之云々、猶以天下大儀可
出來歟、諸國群勢口歸國云々、

廿一日、兩帝還幸、此日、朝倉與斯波修理大夫合
戰、大夫打負沒落、義敏親父也、上池院民部卿法印

戰、大夫打負沒落、義敏親父也、上池院民部卿法印

戰、大夫打負沒落、義敏親父也、上池院民部卿法印

戰、大夫打負沒落、義敏親父也、上池院民部卿法印

戰、大夫打負沒落、義敏親父也、上池院民部卿法印

戰、大夫打負沒落、義敏親父也、上池院民部卿法印

戰、大夫打負沒落、義敏親父也、上池院民部卿法印

戰、大夫打負沒落、義敏親父也、上池院民部卿法印

戰、大夫打負沒落、義敏親父也、上池院民部卿法印

戰、大夫打負沒落、義敏親父也、上池院民部卿法印

坊悉以發向、義就之下知也、法印沒落政長負最故也、後日居伊賀國云々、京中義就并山名入道無事任我意云々、

二月六日、日野大納言勝光任內大臣、九條殿關分

當家任大臣初例、希有事云々、凡近來有德無雙仁也、如三大福長者、天下衆人號之押大臣、

三月七日、改元應仁元年、◎諸本作五日、

十一日、內大臣拜賀、出立等見物云々、

廿七日、般若寺內坊令燒失、土民惡行云々、自去年木津馬借蜂起故也、

四月十一日、朱雀院堂塔不^燃燃一字燒亡、土民沙汰也、

廿五日、將軍入御鷹司前關白亭、時宜快然云々、是以後、諸家以下御成、內外無之、大亂故也、

廿七日、石清水臨時祭、

五月九日、大關關白御口口、第三度、◎南溪云、關字還任歟、兼其還任關白者十日也、本書誤之、

研學仁芙複請了、

十六日、天滿社宮遷云々、口輩沙汰也、

廿五日、一色貢落之、光宣法印并細川計略云々、珍事既以出來、諸大名兩方ニ相分者也、畠山政長方

者、細川右京大夫一家、京極入道一家、赤松次郎法師、政利、六角四郎、政高、武田大膳大夫、山名彈正、此等輩以室町殿爲城構、

以上號東方、

畠山義就方者、山名入道以下一門、斯波義廉、六角龜壽丸、高賴、土岐、一色、

此等輩堀切小路大路爲城構、

以上號西方、

六月七日、竹內僧正良鎮登山、天下物忿故也、于時北野別當也、

八日、內大臣身上難說出來、義就方引汲云々、俄馳參室町殿、以後不出御所中、

十一日、飯尾爲數被^レ打^レ殺於室町殿東門前也、細川沙汰也、

十二日、京中在々所々院寺以下燒失、數百箇所燒亡連續、

十八日、等持寺八講無^レ之、大亂故也、此後一向無^レ始行、

廿二日、春日社千座講、問一天祈禱云々、於山內在^レ之、所々隨意、

七月廿日、大内周防助政弘着三兵庫、山名入道合力志

云々、其勢數萬人、不知_レ數云々、政弘生年廿二歲

也、◎後鑑
無_二所見_一

八月三日、大内立三兵庫、上洛云々、

十日、春日下遷宮用敕使下向、山川坊城
俊顯也、天下觸穢故三

十箇日可_レ在_二奈良_一云々、

十六日、陽明鷹司兩御所燒失、

廿二日、大内入洛了、山名與一郎東方安否也、

廿三日、曉上皇末上御同車、俄_ニ室町殿_ニ行幸、大

雨下、此夜五番近習者數輩被_ニ退出_一、御所中珍事出

來、三種神器同動座云々、

新大納言殿沒落後聞_レ御_ニ座伊勢國司館_一、

東御方當所御下向、此間京中物忿之間、八幡_ニ御座

云々、

廿五日、前關白殿御下向、此間九條隨心院_ニ御座、

同大納言殿自_ニ一條_一被_レ遷_ニ隨心院_一云々、

廿七日、太箸尾入道宗信入滅、

廿九日、關白殿入_ニ御隨心院_一云々、大納言殿同所、

九月十八日、春日下遷宮、於_ニ作事_一者下遷宮自_ニ以_一口_前作_レ之、新例也、無_レ力故也、

日野内大臣家并關白家等悉皆燒失了、關白家數代
記錄等燒失了、百合計ハ被_ニ取出_一、峯殿云々、

廿日、上皇俄手自被_レ切_ニ御本鳥_一、上下仰天也、世上

給_レ被_ニ歎思召_一故也、無_レ力俄_ニ御出家_一、戒師實相院

大僧正、

後日出家輩、萬里小路儀同冬房、四條大納言等也、

各出修行云々、

十月三日、山名入道口罰院宣、

十一月十二日、春立棟上棟檜皮葺相論事出來、珍事被

儀也、

十八日、春日正遷宮、

廿八日、神主從三位家德他界、

應仁二年

戊子

正月一日、主上法皇三種神器、自_ニ去年_一御_ニ座室町殿_一、

節會以下一切公事無_レ之、關白以下諸卿東西南北之

國々_ニ隱居了、

三月十五日、氷降、其勢如◎以下闕文、

廿一日、稻荷社悉皆燒亡、山木等悉切_ニ取_一之、希代事
也、義就方所爲云々、

七月四日、吉田社炎上拂_レ地、西方所爲、

十日、細川爲_二官領_一云々、於_二西方_一者以_二義廉_一構_二官領_一者也、

八月三日、御忌日不_レ始行之、木田庄口支配無之故也、

不_レ及_レ廻_二請之_一、以後一向不_レ始行、

四日、東山諸門跡悉以燒亡了、

十四日、峰殿悉以燒失了、關白家記錄三十餘燒了、

其餘召_二南都_一御影御_二座禪定院_一、

十九日、關白殿俄下御下向、御_二座禪定院_一、自_二九條

隨心院坊、

廿三日、九條前內府御下向、御_二座古市_一、安住寺殿住所、

廿六日、泉涌寺炎上、舍利米取出云々、座主坊炎上、

妙法院登山云々、於_二山神堂_一云々、

廿七日、上御靈炎上、

九月六日、前關白殿自_二成就院_一御出向、土佐御下向、

彗星現三十箇日也、

廿四日、新大納言殿自_二伊勢_一御上洛云々、御使聖護

院准后、法勝寺五大堂發向云々、義就所爲、

廿五日、鷹司前關白御下向、御_二座內侍殿_一、

前關白自_二和泉堺_一乘船、土佐御下向、廿六日着_二四

國_二給云々_一、希代巡風也、

閏十月二日、三寶院准后義賢入滅、

十一月廿三日、新大納言沒落、御_二座延曆寺_一云々、後

日御_二座西方_一云々、

口日鷹司御方任_二內大臣_一、同御所也、於_二奈良_一也、

口日長谷寺口司五師兩座相論事出來、別當下向無

爲也、

閏十二月也、依_二大亂_一京都曆博士難_二安堵_一間不下

及_二曆奏_一、於_二南都_一幸德井三位以_二私料簡造_一曆候

間、閏月可_レ爲_二十月_一歟云々、然而其後京都新曆到

來、閏十二月也、仍十一月朔日冬至也、

應仁三年已文明元也、

正月一日、主上以下如_二去年_一節會一切無_レ之、

廿七八日多武峰悉以燒亡、院內確執事故也、自滅

也、於_二御影_一者奉_二取出_一也、

四月廿八日、改_二元文明元年_一、於_二京洛外行宮_一例初也、

稱_レ右_二先例_一不分明事云々、

八月二日、長谷寺本堂以下燒亡、於_二觀音堂_一無爲、希

有事也、

十月十七日、大納言殿政房於兵庫横死、大内赤松手亂入故也、

文明二年庚寅

正月一日、主上三種神器、以下闕文、按如去年歟、

十六日、筒井順永任權律師、去年田樂頭賞云々、

自學侶申入大閣下之間、按閣之下、脫三辭字歟、宣下事被

申之、

三月廿日、於陣中行幸儀有之云々、將軍申沙汰、

四月廿七日、氷降、

八月十日、二條御方、左大臣政嗣、爲關白氏長者、七、

十月口日、陽明前關白并大納言殿御下向、御座内侍

殿、於鷹司殿者、五寺坊ニ奉遷之、各一乘院僧

正計申云々、

十二月廿日、陣中公武百日御歌會結願云々、

廿六日、南都傳奏事日野辭退云々、

廿七日、早旦法皇崩、二十奉出聖壽寺、於悲田寺、

御茶火云々、諒闇奉行勸修寺中納言、御佛事奉行執

權柳原大納言、號後文德院云々、後日改之、後花

蘭院云々、御中陰如形、

文明三年辛卯

正月一日、主上三種神器如去年、諒闇也、關白未拜

賀也、

三日、故院御葬禮、

四月廿八日、伊勢守貞親、萬里小路春房俄遁世、

六月十二日、大内手者於山城合戰、山城衆自害了、

朝倉參御方降參云々、下向越前國了、甲斐與連

々合戰、

十四日、東大寺祇園會在之、就山城事、奈良中群

勢在之、

廿三日、於和泉國甲斐庄兄弟打死了、無所見、

八月廿八日、布施自河内出陣云々、

後八月六日、布施引退云々、比興事也、無所見、

九日、自十市責殺楊本父子三人了、一庄發向

了、其外所々責隨了、同上、

十月二日、釜公責過錢二百貫文進之、十市申沙汰、

十一月廿六日、春日若宮祭禮、田樂頭屋文正忌日故引

上了、

十二月廿六日、自當月初彗星出現、光長十丈計、初

曉現東、近日初夜時分西方出現、

廿七日、故院一廻御佛事、無殊儀、五部大乘經書寫供養云々、

文明四年_{壬辰}

正月一日、主上三種神器如此間、節會等一切無之、關白未拜賀也、

七月廿一日、夜前大風、一言主社并拜殿大杉顛倒之間、打破之、以外事、如此例無之云々、當宮棟木秘事云々、神跡南圓堂ニ飛給了、其時自然ニ南圓堂南方門開了、此外在々所々破損、不及是非、社頭大木共顛倒了、元興寺新金堂顛倒、本尊打破之、_{◎無所見}龍益寺塔婆顛倒云々、爲寺門之不吉事也、但久女以下所々塔婆顛倒云々、不限一所、歟、

八月七日、大閤春日詣、御淨衣、殿上人一人、布衣、

十六日、千部論、

廿三日、供養、松林院修南院不仕、

廿五日、禪定院念佛在之、依炎旱、同供無之、於

中院、幽贊談義始之、_{禮師定清僧都}

鷹司前殿御出家、法名眞性、六十二、

卅日、西尅、光物飛南方、

十月十六日、下狛合戰、杉十郎自害、士民藥師寺之救使坊放火了、近所地下人沙汰、

廿五日、東御房美濃國御下向、

十一月五日、一言主新造遷宮、

十六日、善秀爲供目代興弘研學、得請了

廿七日、若宮祭禮、田樂頭胤清僧都實心口講、願主

八田遠勝等父子、

廿八日、口日無之、去十六日鷹司入道關白薨故也、

廿六日、頭屋慈舜一同無之、三綱隆乘爲一乘院之

御共、籠居間、不出競馬、

十二月廿九日、節分、若君御元服、九歲、冬、於成就

院、加冠大閤、理髮勸修寺中納言經義、公卿四條前

中納言隆量也、閑院大臣於南都元服之例、今度初

也、被用彼例云々、

文明五年_{癸巳}

三月五日、於大湯屋神鹿殺害人強問、衆中沙汰白

狀之趣、講衆檢知云々、希有之訴儀云々、

廿二日、山名入道宗全圓寂_{七十}、西方大將也、_{◎親長記十八日、}

應仁記十九日、

五月二日、大閣殿下美乃國御下向、同廿八日還御、

十一日、午刻、細川右京大夫勝元逝去、四十于時官領、東方大將也、

六月一日、天變御願事七大寺被仰付之、去月中旬事歟、

十三日、心經會始行、世間病口故也、幡予一流出之、合五本立之云々、三綱泰弘宣舜、

廿六日、西方諸大名會々合、今出川殿申入大内館云々、

十月廿一日、夜在々所々放火、貝吹之、去八月四日、十三人衆之内、三人罪科返報云々、又五人返報罪科了、◎無所見、

廿三日六方蜂起、被口十人加罪科、從所三箇所進發了、今日兩門跡於中院會合、申合學侶濟召出之了、根源ハ宇多藤原關代官相論事也、各内心別々意知云々、

十二月十九日、室町殿御元服、公家儀也、御名義尚、直任左中將、將軍宣下、五位、◎按親元日記正五位下、

文明六年甲午

二月廿日、源秀房賜光入滅、上臈也、

廿八日、講衆蜂起殺害人一事云々、

四月三日、山名細川和與對面、天下亂、上無爲、

十五日、山名小弼之息八歲參室町殿、天下上無爲、

七月三日、伏見殿式部卿親王薨給、御自害云々、此間後花園第二十一、

主上同所室町殿被上西云々、◎南溪按舊記云、御座去月十九日、室町殿之殿上之西端、若君邦高親王口口口新將軍敍四位口資世卿任權大納言、

廿日、堯弘爲供目代、

廿六日、山名陣與大内及合戰、義就方遊佐舍弟口口被打了、越智古市手相加云々、

八月五日、去月廿五日北野神輿奉取出之、奉遷山名陣云々、社家沙汰也、

九月十九日、畠山義就息沒落于越智館、十八歲、◎無所見、

十月晦日、於東大寺禪花坊八幡大菩薩御託宣在之、於末代希有事也、

十一月十三日、大内周防助政弘敍從四位下、任左京大夫、廿九歲、◎無所見、

文明七年乙未

三月九日、小除目在之、任大臣等、左大臣政基、九條殿、右

大臣行平、鷹司殿、內大臣政家、陽明御家、左大將公敦、轉法輪、左

大將信量、大炊御門、權中納言冬良、家門今、北野御奉幣等、

去月十九日、陣中火事故□□、

五月十四日、大鳥居并木津天神川原合戰、神威嚴重、

不可謂末代者也

六月八日、布施與萬歲合戰、布施方打負、福住并密

尾之一族中以下數輩打死、惣而四百餘人被打殺了、

大略筒井披官人共也、

檜原沒落了、四月十六日了對陣也、自吐田高神社

燒拂之云々、

八月廿二日、去六日近國大風大水、大和國一切不吹、

希有事也、

九月一日、筒井入部福住館了、山田與及矢軍云々、

文明八年丙申

四月五日、筒井舜良房律師順永五十入、滅了、

五月十七日、九條左大臣政基爲關白氏長者、同日日

野前內大臣勝光任左大臣、清華外無其例、希有事

也云々、

八月三日、陽明御方任右大臣給、應司殿任左大臣給、轉法輪御方任內大臣、菊亭御方任左大將、

文明九年丁酉

正月五日、右大臣殿任左大將給、將軍宰相中將敍

正三位、此外昇進數輩、

十一日、夜筒井本城燒失、

七月一日、矢田逝去、廿五云々、但昨日云々、

二日、去月廿四日長谷寺□□寺門所々爲禮罷上云

々、去寶徳三年十一月請中卷向山年貢二十貫文事、

如元彼山事返付長谷寺、由、六方一統出之禮也云

々、故筒井律師取繼之依歎、成身院順宜申次云

々、

九月廿一日、畠山右衛門佐義就入部河內園了、

廿四日、三河國東條落南都了、

十月七日、譽田城責落、八日嶽山城沒落、九日□□院

城責落、若江城沒落、遊佐河內守長直沒落、和州平

郡嶋沒落、

十三日、寶來、木津、筒井、以下自燒、成身院沒落、大

內勢寄來般若寺邊、古市馳上無爲了、

十四日、飯高自害成、衆八十三人自滅、

十五日、越智兩寺社參入堂、當年願主治定云々、

十七日、定清僧都亂入大幡經院了、

廿日、杉次郎右衛門兩堂入堂社參、

十一月五日、高山邊成家鄉馬借蜂起、日々夜々放火、

以外儀也、◎無三
所見一

十日、水牛進上東陣云々、二條殿燒失、仙洞燒失、

了、各足輕沙汰也、

十九日、社頭三箇日大般若群參云々、

文明十年戊戌

正月十八日、西尅當西方星二出現、合而天ニ入了、

五箇條凶云々、◎無三
所見一

三月八日、氷室社造營料、奈良中棟別人別錢切之、龍

花院方又爲方光院修理、自方棟別切之畢、

四月十七日、清水寺鐘鑄之、

廿二日、口願寺勸進猿樂、公方御見物三箇日、

五月五日、天口神輿延引、去月廿四日於成就院喧嘩

之間、口穢故也、

廿五日、天滿神輿渡之如例、

六月三日、鷹司左大臣宣下內覽事云々、

六日、光明皇后御忌日修之、

八日、畠山右衛門佐、當國越智館出云々、

九日、正願院本尊彌勒口人取之、

十二月廿八日、自土佐御所若君事被仰下、畏入由

申入之、當年二歲也、

文明十一年己亥

正月一日、雷光吉野上社ニ落給、夜前春日山鳴動驚

耳云々、

十三日、寺門心經會如例、書寫大塔萬火燒了、元日事也、

二月廿七日、關白御上表、

卅日、陽明右大臣任關白氏長者、右大將任權大納

言一

三月六日、二條前殿御上洛、

七日、兵庫打之懸、九日十市沒落、

十二日、新關白殿御下向、當所京都御宿舊冬燒失ノ

故也、

四月廿九日、關白殿今日御上洛、實期院殿同廿六日、

大覺寺殿同上洛云々、

五月十七日、赤松披官甘草爲山名披官梅ノ湯屋之沙汰_一打_二殺之_一、赤松失_二面目_一了、大儀可_二出來_一歟前表

由申云々、

六月廿九日、夜皇居燒失了、仍行幸白雲菴、

八月十五日、伊勢國司息於八幡元服、

閏九月二日、山名在國、

四日、武衛在國、

晦日、法花會始_二行之_一、

十四日、榮口以下沒落、

十月廿二日、赤松在國手者相殘云々、

十一月三日、佐川入滅、惡瘡云々、大明神御罰也、

八日、當月朔旦冬至也、去應仁二年不吉例歟、

十月大被_レ成_二小月_一了、仍當月小被_レ成_二大月_一由宣旨、

十二月三日、細川九郎在國丹波國了、一宮宮内大夫

訴訟故也、本小笠原黨也、

七日還幸土御門殿、自應仁三年八月廿三日_一至

當年_一十三箇年行宮、

文明十二年庚子

正月十八日、宇治橋五間自_二三室戶_一燒_二落之_一、通路無_レ之、通_二槇嶋_一云々、

三月廿三日、於_二丹波國_一、一宮宮内大輔父子被_レ打了、

一宮備後子共沙汰云々、

三月廿六日、細川九郎自_二丹波國_一上洛、一宮宮内大輔

頭以下六人分京着云々、

關白殿御奏慶、

廿九日、除目入眼、新將軍任_二大納言_一給、

四月一日、夜京都燒亡、廣口院以下燒了、四日又燒亡、

則打滅、

廿八日、將軍父子、御臺、御參内、

興福寺別當職事、東林院權僧正宣下、權別當職事、

光明院法印宣下、各廿一日宣旨也、

廿九日權別當口參_二於竹林院_一書_レ之三箇日、

五月二日、新將軍權大納言殿元鳥_レ被_レ切也、希有事

也、親子確執候故云々、◎南謁按舊記、醉狂之故云々、

九月二日、卯刻、二條御房前關白殿、夢給、廿七、

十一月十九日、今夜丑刻十三口以下炎上、自_二建保

三年十一月十日供養_一至_二今年_一、經_二二百六十六年_一

了、土民所爲也、

文明十三年辛丑

七月廿六日、朝倉孝景入滅云々、

九月廿二日、新將軍參_三因_一幡堂七箇日、◎按親元日記廿二日當作廿一日、

十月十三日、山内新城催_レ之、越智古市沙汰也、山内口

衆迷惑也云、

廿日、長谷_{山内}、責落、

十一月三日、高樋_{山内}、責落、

文明十四年壬寅

二月七日、白馬節會、内辨大炊御門云々、

三月九日、細川九郎攝州出陣、官領同道云々、

四月十八日、横川中堂焼失、

十六日、二條御方御元服、十二、尙基、

五月五日、◎續史天滿神輿入御、

九日、宇治祭禮、

六月十九日、細川九郎替陣札井原本邊、官領陣吹田

邊云々、大和衆同云々、爲_レ責_三河内右衛門佐_一歟云

云、官領島山同陣替所存在_レ之、

廿九日、成身院案坊以下大和衆入_三鷹山_一了、鷹山裏

歸故也、匹田城焼_三拂之_一了、

七月九日、細川九郎使者長壇拂了、萩野兩人行向、越

智口口馬太刀等在_レ之云々、攝州事也云々、

閏七月廿六日、細川九郎歸陣、上洛迎安筒一_宮甲三百

計云々、於_三官領_一者相_三殘尼崎_一了、可_レ責_三河内國_一

云々、◎無所見

廿九日、大風大雨、官領入_三部和泉國_一、

八月十日、天滿神事、

十九日官領入_三部堺南庄_一云々、廿日河内合戰、◎無所見

廿七日、筒井十七箇所_二入部、小和田以下濟被_二先

死_二了、不_レ及_二入部_一由難說共有_レ之、

廿八日、十七箇所沒落了、筒井知行云々、大將小和

田父子也、

十一月五日、高山入部、朔日合戰、打負、自燒故也、自_三

河内合戰云々、去月廿八日裏歸了、

文明十五年癸卯

二月廿九日、◎按當作鷹司殿關白宣下云々、

三月十六日中春日祭也、上卿權中納言經義、茂カ

八月廿日、大風、

小泉

憲 芙

憲 芙

芙 寬

重尋

於高山打死

重弘

爲筒井被責死龍田同自害

今力丸

延敷房法印

清舜

阿ミタ院

元修學者

重祐

延定房

矢田繼之

元法隆寺法師

號新爲筒井被責殺與今力同時

重榮

阿ミタ院觀音院觀禪院

圓進房權律師

專秀

御願寺

法勝寺

寂勝寺

成勝寺

圓勝寺

圓宗寺

法金剛院

法性寺

淨妙寺

極樂寺

平等院

法成寺

蓮花王院

得長壽院

東北院

普賢寺

泉涌寺

案光院

則成壽院

成菩提院

彌生寺

淨花院

圓福寺

佛眞寺

遍照心院

寶積寺

圓明寺

惣持院

勝樂院

金剛壽院

金剛院

尊勝寺

法興院

寶藏嚴院

勝光明院

觀音院

寂勝金剛院

鳥羽
金剛心院

寶藏嚴院

寂勝光院

永福寺

寂勝四天王院

六條
長國院

觀
院

萬賢寺

大多勝院

法琳寺

男山
護國寺

西征日記卷之一

自笑眉裡之事

天正二十年壬辰

三月十二日、小西攝州率壹岐平戶有馬大村之衆而

渡海、泊船於對之府浦、

十三日晴、柳野州引余見西攝州、此日太守命余以隨

行、自先下十日不記

廿三日晴、攝州陸行而起對之豐崎、太守留在府、已下四日不記

不記

廿八日晴、余西尾自一虛庵移乾德院、而窺便風、

舡主不理舟揖、故留一宿、

廿九日晴、太守陸行而赴豐邑樓船、俗曰宮丸、與長郡內、午日發府

浦、而子刻泊船於大浦、辰刻回棹以入大方

浦、自子刻細雨、至翌日申刻止、

晦日朝雨暮晴、午日解纜自大方浦泊船加毛瀬浦、

波動船而不得安眠、戲賦小詩曰、

若有舟神能護此船、何事騷動攪吾睡眠、

四月朔日晴、卯刻發加瀬浦、酉刻至泉浦、余與一童

一僕控漁戶、則釣叟蟹婦捻星散、而一村鎖空屋、

有一老僧引余宿里長之宅、橫一破席與一僮雙枕臥、子刻老僧來問安否、余曰、雞未鳴犬未吠、老僧甚麼大早計、老僧笑曰、公未知麼、日々軍吏擒雞犬一剝皮拔毛、安得全報晨乎、余聽此語、嗟嘆而已、

二日晴、發泉浦、未刻至大浦、此日攝州之軍士與太守之軍士私鬪、刎攝州軍士主張一人之首、太守之軍刎主張一人之首、梟兩首一處、兩軍和親而散矣、此時太守在鰐浦、攝州在營、自執戟出于鬪處、

三日晴、攝州訪太守之營、

四日自寅刻雨、家書并青州一壺至、余亦整兩書、一封寄長壽主宰、一封答家兄、

五、日半陰半晴、佐須奈之僧携酒壺來、

六日晴、訪省也北堂、一村悉成軍營、破壁擢床、無

處容膝、可憐生、申刻太守移船於浦口、七百餘

船都從之、

七日朝暮雨、自朝鮮送使之舡二隻來、一隻二人、一

隻三人、合五人、漂波來、此日脇坂中移到、大浦看

兵船、

八日朝雨暮晴、午日應仙巢老人之招、遷船而清話卒、綴半倡賀降誕、

我今灌沐蓬窓雨、江上數峯淨法身、

老人和云、

說兵父母所生口、今我官軍百憶身、

九日晴、上陸之次主馬公延余船窓以觴矣、扣民舍

乞浴、歸程上二姪之船、各勸盃、既醉上樓船、

十日晴、晴日柳野州招余而飯于舡、

十一日晴、風自東北來、太守兵船者欲解纜、攝州之

兵船不欲解纜、是故雖順風不張帆、

十二日晴、兵船七百餘艘、辰刻發大浦、申尾到釜山、

太守直赴岸上、余隨之、初更之後上船、

十三日、半陰半晴、卯刻圍釜山之城、而辰刻拔之、城

中之軍盡授首、即時赴東萊一距城半里許而屯、

午刻歸釜山之營、今夜太守告余以留守釜山之

營、

十四日半陰半雨、卯刻發釜山、辰刻圍東萊城、同刻

拔之、斬首三千餘級、虜五百餘、鮮軍懼曰、東萊諸

軍乃飛擒城、疑有戮乎、神乎鬼乎、余應太守之

命、留于釜山、

十五日晴、東萊東南有城、曰機張水營、二城此日敗亡、余酉刻到東萊城、

十六日細雨、梁山之城敗亡、

十七日晴、官軍卯刻發東萊、已刻過梁山、密陽之東

五十里許宿、此日密陽敗亡、杜預曰、兵威已振、譬破竹數節之後、迎刃而解、無復著

手處也、誠哉、

十八日晴、午刻入密陽城中、庫藏自放火、樓觀門廊

存矣、太壯麗、

十九日晴、發密陽而六七里許有驛亭、今夜宿于

茲、

廿日晴、發驛亭二里餘而有城、不記名城之西三里許

有城、曰大工、見力二城一日潰、

廿一日晴、大工之西距三里許而宿村家、仁同城敗亡

矣、

廿二日晴、發村家、已刻入仁同城、代太守書榜

曰、令大字、散民還于本宅、而男耕田稼苗、女採

桑畜蠶、士農工商各修家業、若吾軍士有犯法以

妨汝之業者、必罰矣、年月太守在河、

廿三日晴、發仁同三里許而有河、沒馬之半腹、余

從太守駕舡、諸軍並騎截流而渡、午刻過善山、

二里許而宿村家、

廿四日晴、發村家、午刻入尙州城、城中之兵敗亡、城

中大將李旭敗亡、李旭卽李鎔之誤、從事官朴虎尹暹死、官軍逐

北而斬首三百餘、太守陣于城中、余距城西半里

許而宿、

廿五日晴、辰刻訪太守之陣、已刻歸宿、

廿六日晴、寅刻發尙州宿處、午刻過咸尙、酉刻到聞

慶、聞慶之城自放火而亡、

廿七日晴、寅刻發聞慶、而辰刻過安保、安保今延豐也、午刻

達忠州、自洛將軍來而率數萬之兵、府之北半里

計陳松山、官軍舉旌旗馳馬向、松山之陣敗走、

對州攝州之兵逐北、刎首三千餘級、虜數百人、大

將申立石死、或作申祿、先登者對州也、此夜太守去、城五

町許而陣、余在城中、

廿八日朝晴、暮陰、午日攝州訪太守之營、招仙巢與

余、而論朝鮮地圖、

廿九日朝晴、暮陰、辰刻發忠州、而午刻過嘉興、嘉興

之西有兩岐、一軍失路、或西或東、初更之後迅雷

甚雨、雖咫尺步不看泰山之形、不簔笠、暗昏

昏地而坐路傍、以待旦、

五月朔日半雨半晴、朝鮮四月晦日也、此日王及太子大臣等出城敗走、申刻到驪州、

水漲而不得渡、各搆船筏、以運濟矣、先軍者在

彼岸、後軍者在此岸、隔水陣矣、

二日晴、吾軍結筏而渡江、驪州對州騎而渡、此時水未漲、戌刻兩將陷京城、

三日晴、發驪州而三里許、而水漲以不得渡、村氓

盡藏船、吾軍士探得五三隻而運濟衆卒、余辰刻

到渡頭、戌刻渡河而宿河邊、辰刻賀藤入京、

四日晴、午刻余輩入京、不解裝腰、見攝州、攝州差

一士卒而爲南針、到太守之營、還卜宿於王宮東

南市廊之中、

五日晴、已刻應攝州之招到彼營、有大明通事小

解文字、攝州命余筆談、問大明里數、河之大小、

路之平險、彼答其大概、彼問我答、我問彼答、墨十餘

紙、座仙巢竹溪在、午日賀藤公來、互禮謝、申尾歸

宿處、此日賀藤相議、以定移陣於城外、四方城門立榜而示民以歸路、

六日晴、已刻立本公贈手翰、卽從使价以訪公之

營、話會遊以移晷、借公之先容而見賀藤公、

座有馬大村兩人在、互獻酬、既醉歸矣、

七日晴、入禁中、宮殿盡爲焦土、可謂一咸陽矣、

傍有漏院、實火後一莖艸也、

八日晴、訪太守之營、歸程扣俗淫兵之宿、午日柳右

馬持新釀來、德阿亦携瓶來、

九日甚雨、作詩寄仙巢老人、

今朝逢麴要新釀、新釀熟時宜酌君、君有酒生前須我、古來此物不霑墳、

老人惠濁醪、書冊二束、收於太守之倉、

十日雨終日寂々、糧料十八石、收于太守之倉、

十一日雨、移宿於舊宿之西三町許、與佐狩野之宿相接、今夜宿狩野之宿、

十二日雨、太守移陣於舊營之北一町許、午日訪營、

十三日半晴半陰、午日柳野州扣客舍、而告攝州之命、即刻促裝以從野州、酉刻到坡州之府、自洛八里

十四日半陰半晴、辰刻在坡州府客館、代野州製短書、

日本國差來先鋒秘書少監平調信謹啓、朝鮮國某大人足下、臣先是奉使於貴國、于再于三、許廷下者、今日之事也、雖然貴國不容臣之言、故及今日之事、非不祥亦宜也、今吾殿下起干戈者不敢怨于貴國、唯爲報怨於大明也、伏願還國王之駕於洛陽、講和於大明、則臣等所欲也、然和之不

行者、獨非貴國之罪也、可謂天命矣、亮察、皇恐不宣、

年號月日 此短書添削而十五日遣之

某

已刻到臨津江、朝鮮人張陣於江之西、吾軍在江之東、東山而西平原也、敵屯于五處、多者四五千、少者一二千許也、備兵於江岸、如連珠、至四五里而不斷、吾軍者賀藤兵也、在江之東岸而發矢石、是故雖欲通短書、不可得也、午刻歸坡州府、十五日半陰半晴、在江邊賀藤之軍解陣退、於是得通短書、敵軍受書而歸本營、移時還書曰、縱死江邊不行和、但大將來共議云々、其書曰、

日本國差來先鋒秘書少監平調信謹啓、朝鮮國執事足下、臣今日來于此退吾軍者無他、爲講和也、軍士在渡口、則貴國之人疑之、故先退兵矣、先是屢使于貴國、陳以成敗之事、貴國不聽臣之言、今也至敗亡、蓋吾殿下假道於貴國、復怨於大明、去歲審告貴國通信使、臣亦達書於廷下、雖然貴國藩臣梗邊以不通吾道路、加之動干戈、於是乎吾軍擊破之、遂到尙州、奉書於廷下、不敢賜回教、却聞國王已出洛陽矣、於是諸將之兵

入洛陽、由是觀之、夫滅朝鮮者朝鮮、非日本、亮察亮察、臣竊慮之、還國王之駕於洛陽、以講和於大明、則貴國之策莫良焉、此則解吾軍陣、待命於畿外者必矣、若疑之、出質子以爲證、然則日本之與大明和親、貴國亦復國、不然則貴國長矣國亦未可知也、伏願足下熟計之、今日在江邊以待翰回、速送之、自愛不宣

年號月日

名

十六日半陰半晴、辰刻發坡州、同刻之尾到臨津江、在江上製書、書曰、

再啓、昨日呈愚書、以陳講和之事、貴國不信之、亦宜哉、吾軍經萬里風波之難、江山之險、直入洛陽、今也無故而欲講和、貴國不信之、亦宜哉、臣爲貴國解之、吾殿下欲假道而擊大明、雖諸將奉命來于此、不欲自此經數千里入大明、是故先與貴國和親、而後爲借貴國一言、以講和於大明也、貴國亦以一言大明講和於日本、則三國平安、良策莫良焉、諸將免勞、萬民蘇甦、是吾諸將之議也、殿下亦不欲與貴國絕交、貴國失隣好之道、拒吾軍、故吾軍亦動干戈而

已、臣虛受貴國大職、豈忘鴻恩乎、奉國命以先諸將、因不獲止也、今也傾盡肝膽陳縷々、足下察之、尙不信之、則是亦可也、傳義智行長兩人一紙之書、自愛不宣、

年號月日

名

昨日所作之書、及兩人一紙之書、三封一手傳之、鮮軍棹小舟來受書、未刻甲士一人泛舟來曰、吾濟小生私不能呈回報、轉啓承政院以呈回報、兩國本無怨讎、孰不欲講和、期三日歸矣、

十七日朝陰暮晴、辰刻發坡州、而未刻入洛、柳野直到小攝州之營、告講和之事、余歸吾宿、晚日大川和尙來訪余之宿、

十八日半陰半晴、辰訪太守之營、移宿於舊宿之北五町許、隣于太守之營、午刻立本爲賀藤移書以招余與仙巢、即從使价到立本營、賀藤稱病不見、終日在立本營雜話、大川和尙在座起座、仙巢歸吾宿、余從大川到彼宿、蹈昏鐘歸矣、今朝臨津江之約變、鮮軍渡江而圍吾水上之陣、坡州之軍救水上之陣、奮擊破鮮軍、在洛諸將連旌旗馳馬赴津江去洛三里許、而聞鮮軍敗走、即回

旗歸洛、

十九日雨、小攝州及太守聞鮮軍聚、散卒、又赴津江、諸軍盡從行、余在洛、

廿日細雨、午刻大浦半公携朝鮮圖來、雜話移刻而歸、預約告還鄉於太守、

廿一日半陰、應立本之需、以作一書、

示論境內之黎民、及鰥寡孤獨、僕奉吾殿下之命、撫當境、要下除苛政、而布善政、救民於塗炭、速還舊居、以各修家業、勿疑勿疑、

年號

姓名

呈示境內之文武官僚、奉吾殿下之命、安撫此境內、雖不敏、要布善政於境內、各還本宅、以精我藝、則必應其器、以授職矣、先服者賞之、不服者罰之、請計之、

年號

姓名

廿二日晴、無事、僮探園摘杏子胡瓜來、朝鮮散民還市以賣酒、惠余酒一瓶、

廿三日雷雨、欲下作詩寄大川和尚、無便而終止矣、

詩曰、今夜挑田氏
携酒來、

一別花飛二十春、誰知此地逐兵塵、乾坤盡入戰

圖去、何處江山著我身、

廿四日晴、左內家裏者調綠豆、甚佳也、作詩書廳之壁、

借問漢陽城裡人、興亡變化幾千春、檀君箕子去何在、今日須知更新、

廿五日晴、無事、良也赴臨津江而訪太守之陣、淵山早介從隆景宗虎而之慶尙道、就余需短書、即書以與之、

廿六日雨、無事、

廿七日半晴、大伴兵惠酒燒一瓶、臨津江鮮兵潰、對州攝州之兵渡江逐北、俗姪左內蒙瘡而歸洛矣、

廿八日半晴、午日、姪左內調綠豆、

廿九日半晴、無事、酉刻、大判兵送鮮人之書、余代答之、

晦日朝鮮六日、晴、訪太守留守、留守設酒、移刻而歸、

申刻、尋大川和尚之宿、清話、履昏鐘而歸矣、

六月朔日朝陰暮晴、大川老訪余之宿所、先是五月廿日所作之詩、今日說之、大川和之者二首、

二日半晴、午刻、大判兵以鮮人之書示余、書中借孔孟之語、說五倫五常刑法之事、余即走筆云、

君臣父子夫婦、◎二字恐顛倒兄弟長幼之倫、仁義禮智之常、禮樂刑政之法、天地之間、所二日月照臨、盡知レ之、然

爾今言レ之者、以爲二日本獨不レ知レ之乎、禽獸之譬亦不遜乎、天地開闢以來、幾億兆年、豈待三孔孟之言一而後行レ之乎、爾之意如何、更論レ之、

此日、午日孝仁也鮮人携湯餅來進、余以木綿十匹謝レ之、

三日四晴、鮮民失三妻子貨財一者、或百人十人五人、捧短書告二訴于太守之留守、留守讓レ余、余各作書答レ之、

午日酒家也、日々問問力鮮人安、名曰三季孝仁一、携燒酒並黃醅來進、余、少焉持二半身戎服一、黃色有紅線來惠レ余、拒辭者二、

固請不レ止、遂受レ之

四日五無事、

五日六晴、鮮人李孝仁記二反寇九人名字一以示レ余、余告二太守留守一、々々即擒二九人一、以送二備前宰相公一、公即行レ法、午日鹽七公訪レ余、

六日七晴、食時孝仁惠酒肴、午日大伴兵來訪、語及二朱印之下一、余舊客舍主人之奴婢四人來、告以下二如二舊主事一、余容レ之、孝仁持二朝鮮内外官案並曆書一來、

七日八半晴、無事、

八日九晴、卯刻、孝仁携酒來進レ余、午日、訪二太守留守一、大伴兵次扣宗建之宿、留守又請レ余而飯矣、歸程

問二姪左之宅一、姪痛瘡甚、移レ刻歸矣、

九日十晴、午刻、孝仁携酒來、余亦送二糙米一石一、

十日十一晴、設二粥於姪之宿一、鹽七來訪、宗建來、

十一日十二晴、申刻、從兄源左衛持酒來、

十二日晴、鹽七公來、語次及二日本軍兵一、昨日入洛首將

十八人、孝仁携酒來、

十三日十四晴、午日大伴兵持二榜札之案一、日本遣使之案

也、語二侏僂一而不レ得讀、命レ余以改書、

十四日十五晴、大伴持書來、求二通事一之書也、午日筆

匠來、賣筆三雙、孝仁惠朝供

十五日十六晴、左須奈左近惠酒、鹽七次來訪、市人惠

酒肴、申刻、武本諒方濫物時酒來、初更鹽七公寄二和之發句一、

日本方ノ方モコイシキ今夜哉余即以二和與漢二句一答レ之、

和云、コマモロコシノ月ソ涼キ

漢云、月涼萬里天、翌日又次二句、送余答以不能

十六日^{十七}晴、太守留守大半兵與^二日本醉客^一爭^二論鮮

女、今夜古屋吉衛聞^二母之訃^一、以就^レ余請^二吊祭^一、余名^二

亡母^一曰^二妙鮮^一、

十七日^{十八}晴、請^二宗建^一祭^二古屋亡母^一、宰相公遣^二使諸

營、點^二檢軍料^一、孝仁再携^レ酒來、

十八日^{十九}晴、七公來雜話、市人惠^二水圍^一、殿下朱印下^二

降于太守^一、

十九日^廿晴、無事、夕日塵林携^レ酒來、

廿日^{廿一}晴、宰相公奉行人携^二單書大伴兵^一、大伴兵召^レ

余以讀^レ之、即代^二相公^一而作^二反書^一、

廿一日^{廿二}晴、炎蒸甚矣、辰刻、鹽七公贈^二書並佳菓^一、晡

時孝仁進^レ酒、晚日孝仁持^二短書來^一、書中略曰、母八

十餘人病、廿日死、葬出^二城門^一云々、朱氏四生指伴

余告^二奉行人^一而容^レ出^二城門^一、^{廿三日葬之、余}

廿二日^{廿三}晴、殿下奉行人來、再開^二米倉^一、其使有^レ知^二

余名^一者、招^二余大廳^一見^レ面、則在^二濃州^一時舊識也、

^{一柳牧村兩將}
^{麾下之士也、}

廿三日^{廿四}晴、對州麾下之兵在^レ洛者赴^二平安^一、太守陷^二

平壤之事傳^レ之、午日、孝仁調^二綠豆^一携^レ酒來、夕日

佐護左送^二酒一瓶^一、

廿四日^{廿五}晴、姪左家裏者請^二余設^一粥、

廿五日^{廿六}晴、午刻、濃州綾野桑原兵四郎來訪、余東遊

之時相識也、舊話移^レ晷歸、余即訪陣之次、問^二牧村

兵部公之營^一、多見^二書籍^一、及子昂墨跡、履^二昏鐘^一歸

矣、孝仁送^レ酒再、

廿六日^{廿七}晴、午刻、孝仁携^レ酒來進^レ余、鹽七公龍源主

來訪、圍碁終日、

後

廿七日^{廿八}晴、已刻訪^二太守留守^一、午刻應^二鹽七公之招^一

詣^二陣所^一、有^二晚餐^一、酉刻、孝仁携^二蜜酒來勸^レ余、

廿八日^{廿九}朝時、^{◎恐}晚時雨、孝仁携^レ酒來勸^レ余、

廿九日^卅半陰、夕日小雨、大伴兵來話、盡^レ晷歸、

晦日^{朝鮮七月朔}晴、無事、孝仁携^レ酒來、贈^二孝仁白亭衣一

襲^一、

七月日晴、無事、孝仁進^二卯酒并饌^一、午日佐護七家中長

崎神左携^二酒並青梨來^一、晚日、孝仁亦携^レ酒來、

二日晴、訪^二太守留守^一、自^二平壤之陣^一使來、良七歸來、

孝仁携^レ酒來、

三日晴、孝仁惠^レ銀、午日、鹽七公來話、

四日晴、無事、爲^二松隱忌齋^一、兵衛留守送^レ酒、左內送^二

酒菜、

五日晴、招_二親屬_一而營_二考父之齋_一、

六日午日雨、無事、

七日晴、無事、卯刻、孝仁携_二酒肴_一、午市人携_二酒來_一、

八日晴、午刻、大隼人送_二酒_一、

九日晴、姪左設_二亡父之忌辰之齋_一、

十日時雨、姪左設_二亡妣忌之齋_一、孝仁亦贈_二朝食_一、

十一日半陰、天浦戶部之家僮携_二酒及紬布一匹_一來、

營_二戶部之蘭盆_一、

十二日晴、訪_二太守之留守_一、大伴昨日之晚中_二流失_一、余

自_二太守之營_一直到_二宿所西北之山礪_一、水潺湲、山嵯

峨、與可_レ愛矣、市人携_二酒來進_一余、醉裏題_レ詩、

山破一條水、國亡二百年、暫時回_レ首看、東海變_二

桑田_一、

對州搃衛門來、

十三半陰、良也設_二齋_一、

十四日晴、姪左設_二齋_一、

十五日晴、不_レ被_二袈裟_一而行_二孟蘭盆會_一、

十六日半晴、無事、石田治部少輔、増田右衛門尉、大谷

刑部少輔、三人入洛、分地之使也、

十七日朝晴暮陰、省藏主來鄉話一宿、

十八日半陰、孝仁携_二酒來進省_一、

十九日、松尾氏來鄉話、設_二藥石_一、

廿日雨、無事、遣_二良子於増田_一而代_二余禮_一、

廿一日雨、無事、良子受_二立縣公米五石_一、

廿二日半晴、増田石田大谷之使三人來、而檢_二太守藏

庫_一、

廿三日晴、牧村公約_レ惠_二糧_一、遣_二人馬_一則違矣、更約_二後

日_一三使之一价來、而點_二檢財物_一、

廿四日無事、今夜宗壽家兄送_二酒_一、

廿五日晴、孝仁携_二酒來而進_一余、余亦惠_二之以_二貂皮帽

二首、羊裘貂裘各一領_一、

廿六日晴、孝仁告_二國夫人之婢及奴來求_二糧衣_一以出_二

城_一、余遣_二人逐_二擒一婢一奴_一、

廿七日半陰、宰相公召_二昨之奴婢_一、第_二問國王及夫人王

子之行李_一、奴婢曰、不_レ知_二國王之逃處_一、但知_二國夫人

及母兄之所_一逃、免_レ死則吾告_二其處_一、

廿八日、無事、

廿九日、無事、津江次趙州來訪、孝仁携_二酒來_一、

晦日晴、欲_二朝鮮軍侵_一吾河口之營、吾軍擊而奔_レ之、増

田右金吾麾下之士旅庵來、彼少知文字、余章句曰、
奔^レ土高麗扇、葉翻日本風、聯句者廿餘句、軍奇會也、
八月朔日細雨、孝仁携^レ酒來、

二日半陰、増田左金吾惠^ニ衣一襲、其一隻細葛、其一隻
綾羅、杜市之端午恩榮不^ニ敢多讓^一矣、良子贈^ニ書十
二部、良子亦賜^レ衣、

三日晴、無事、孝仁謁^ニ増田公^一、而賜^ニ夏衣^一領、孝仁易^ニ名^一日本、稱^ニ田公^一名^レ之、
今付新助、増田公名^レ之、

四日晴、孝仁送^ニ酒及餅果^一、扇總兵持^レ酒來、今二日炎^ニ風市三里^一、

五日晴、作^レ詩以謝^ニ増田惠^一衣、即賜^ニ手翰^一、

六日晴、無事、松尾又兵來訪、省也來、

七日晴、西攝州自^ニ平安^一入洛、對州留^ニ平安^一、曰^ニ玄吉兵
長緣內勘自^ニ平安^一來、

八日朝陰暮晴、請^ニ曰^一玄吉兵內勘^一而設^ニ刀剪麵^一、

九日晴、姪左內兵衛二人、綿子各一十斤、柳權求^レ之、

命^ニ其從者^一渡^ニ與^一之、

十日晴、無事、病重終日平臥、作^ニ家書^一二、

李景福 李富榮 李大福 李得宗

鄭元宗 鄭禮宗 鄭孝宗 達勿伊

臣加應伊 市中反人九人姓名

張雲翼醫者吳井

洛陽曰漢陽城

開城府曰平壤城 此說非也、平壤城即王險城也、

明治十二年三月以前田利嗣藏本謄寫

明治廿一年五月十八日就原本再校讀谷時敏

本書著者ノ名ナシ其朝鮮渡海記朝鮮往還日記ト字體全ク一筆ニ
出ルヲ以テ之ヲ見レバ釋^ニ荆天ノ作ナルコト疑ナシ

天荆ハ妙心寺ノ僧ナリ渡海記ニ見ヘタリ

明治廿一年五月十九日

時敏

田邊城合戰記

慶長五庚子年七月、上杉中納言景勝卿御謀叛之由、家康様被_レ爲_二聞召_一、爲_二奥州征伐_一御進發可_レ被_レ遊之旨被_レ仰出、依_レ之御先陣として、越中守様_{羽柴忠興様之御事也}玄蕃

頭様_{忠興様之御弟細川興元様也}與_二十郎様_{玄蕃頭様之御弟也、後長岡中務様又佐齊様ト申上}、與_二一郎

様_{長岡與十郎様御子也}御四方様御軍兵七月初旬關東江御出陣被_レ遊候、依_レ之宮津之御城には幽齋様、嶺山之御城には

妙庵様_{幽齋様之御弟也}被_レ爲_レ入候、然るに於_二上方_一、石田治部少輔三成殿被_レ企_二謀叛_一、中國九州之被_レ催_二軍勢_一、恐多

くも家康様と可_レ被_レ及_二一戰_一旨にて、關東江被_レ致_二發向_一其頃大坂表に被_レ爲_レ入候越中守様御奥様を、毛

利中納言輝元卿より擒に可_レ致由にて頻に雖_レ被_二仰越_一、被_二附置_一候家老衆小笠原少齋河喜多石見之兩人

中々承引不_レ仕、再三御返答申上候内、御奥様如何被_二思召_一候哉、七月十七日御自害被_レ遊候に付、家老衆始

其餘之衆御館江令_レ放_レ火、各切腹被_レ致候段、宮津御城中江御飛脚參着、幽齋様具に被_二聞召_一、御殘念に思

召、御思慮被_レ遊候内、最早石田治部少輔殿一味之衆

當國江亂入被_レ致候段粗風聞に付、越中守様御出陣之儀に付、萬端幽齋様御下知被_レ遊候て、國中之武具馬具玉藥兵糧等盡田邊御城中江被_レ寄、宮津嶺山廢城、其外所々地焼して、一國御一城に被_レ遊候て、田邊之御城江上方之大軍を御引請、可_レ被_レ遂_二御合戰_一之旨被_レ仰出、專御籠城之御覺語被_レ遊、御城中固塲夫々御定御渡有_レ之に付、右御軍令を相守、御城郭嚴重に相固被_レ申候、

越中守様御出陣御留守中に付、御城中之御人數は纔に五六拾騎之内外と覺申候、寄手は大軍、凡其勢一萬五千餘騎と承_レ之、敵將肝煎には、小野木縫殿介殿、從二位法印紹英家定卿、谷出羽守殿、木下右衛門太夫殿、石川備後守殿、川勝右兵衛殿、藤掛三河守殿、長谷川丹後守殿、高田河内守殿、森勘八殿、早川主馬殿、中川修理太夫殿、竹中源助殿、杉原伯耆守殿、別所豐後守殿、小出播磨守殿、生駒雅樂頭殿、赤松左兵衛殿、山崎左馬介殿、并御使番二頭、都合貳拾壹頭と申由承_レ之、

七月廿日、最早敵方之大軍國境迄亂入、廿一日には御城近郷山々峰々江幟被_レ差建、各陣所を被_レ定候躰に

被_レ見受_二候段、物見之衆被_レ及_二言上_一候、

寄手之衆頻鐵炮被_レ打發_二候に付、御城中よりも鐵炮名譽之衆、御櫓狭間より中筒小筒等打發被_レ申候、

因_二御下知_一、三刀谷四兵衛、山本三郎左衛門、日置善兵衛、各組衆引纏、大手素戸口より討て出、福井之山鼻江出張、凡敵間拾町を不_レ過、夥敷鐵炮打發被_レ申候内、三刀谷四兵衛孝和之家來分、佐方吉右衛門元昌、佐方與左衛門友信、拔群之働依_レ有_レ之、福井之本村江は敵衆入兼申候、

一組は、上林助兵衛、北村勘太郎、北村勘三郎等也、此衆も同じく福井江出張、大筒等打發被_レ申候内、三刀谷四兵衛、山本三郎左衛門、日置善兵衛等、備之面々一手に相成、各相働被_レ申候、山本三郎左衛門前立物は、金之一枚紙にて日に耀、克相見へ候故歟、頻に三郎左衛門を目當に鐵炮嚴敷打被_レ申候、然共三郎左衛門運強、横腹をかすり、玉それ申候、

一組は、坂井半介、大野彌十郎、加藤新助等也、此衆は乗船にて福井ヶ濱へ押出し、大筒打發被_レ申候、敵方よりも嚴敷鐵炮打被_レ申候内、坂井半介郎黨之足に中り、於_二船中_一即死被_レ致候、此旨幽齋様被_レ聞召、御使

として千家七藏、藤本猪右衛門兩人、三刀谷四兵衛被_レ居候所江被_レ參、急ぎ御人數引取候様にとの御沙汰に付、早々御城中江被_レ繰入_二候様被_レ相達_一候に付、船も陸も急ぎ御城中江引入被_レ申候、

御城より南之方九文明と申在郷に陣所を被_レ相構_一候、木下右衛門太夫殿、赤松左兵衛殿之陣中より、夥敷鐵炮打發人數繰出候、其備より幌武者之數多御城之方江馬を駄足に進め、士卒發_レ鬨音貝吹を群參候を、妙庵様御櫓より被_レ遊_二御覽_一、諸將江依_二御下知_一、三刀谷四兵衛、大野彌十郎、村野勝介、上林助兵衛、日置善兵衛、北村勘太郎、加藤新介、北村勘三郎等、各素戸口より押出_二二手に別れ_一、一手は二つ橋江出張、一手は伊佐津村江出張、夥敷鐵炮打發被_レ申候、敵方よりも頻と鐵炮打被_レ申候、北村勘太郎、北村勘三郎は、大河之川下より越渡り、各より一町餘も進み出、兄弟替る替る大筒打發被_レ申しに、玉行嚴敷、敵方九文明之方江退候、妙庵様より御使として吉山福萬被_レ參、急ぎ味方を引纏、御城中江繰入候へとの御意に付、各御城中江引入被_レ申候、

同廿二日、西南之山嶺より夥敷谷々江幟差下し、敵方

之面々陣所を被_レ替候_レ駉に相見へ申候、然に辰巳之方に相當り、若狹街道に大内と申在郷有_レ之、其山之上山崎左馬助殿、小出播磨守殿之幟被_レ建申候、山崎左馬助殿之幟者、黑白段々筋にて、はきとわかり相見へ申候を、妙庵様遙に被_レ遊_二御覽_一候て、北村勘太郎に被_レ命、御櫓より大筒三はなし打被_レ申候得共、敵衆少しもさわがず、御櫓はさまぐ_一の物見之衆數多被_レ居候得共、玉行見届不_レ被_レ申候由、四發目之玉能圖江打込候と相見へ、幟持之者共さわぎ立申_レ駉に相見候に付、又其かげんに打發候と、人數殊之外さわぎ立、幟等元之山々へ引揚げ申候、後には敵衆竹束にて寄來被_レ申候、

同廿三日、西之方より小野木縫殿介殿之人數押寄、鐵炮頻に被打發候に付、御城中よりも夥敷鐵炮打發申候所、因_二御下知_一宮津衆各搦手素戸口より押出、大橋向江備を構、大筒中筒取交打發被_レ申候内、北村勘太郎、坂井半介、因_二御下知_一下卒を纏、宮津衆と一手に相成、頻と鐵炮打發被_レ申候所、坂井半介各江打向ひ、味方大橋之手前江引退き、大橋之渡り板打放可_レ申に付、各尤と橋之板色々に打破り候得共、俄之儀、殊に

道具はなく、破れ兼候所、坂井半介あなたこなたに有合候大石又は杉丸太坏引寄、散々に打破り、凡渡り板貳參間程も打放し、是にては馬も渡り兼候_レ駉に相見へ候に付、各大橋之こなたへ備を構、鐵炮打發被_レ申候所、敵衆竹束にて大橋より遙向江寄來り町家江入、夥敷鐵炮打發被_レ申候、中には戸口より打も有_レ之、或は窓又は格子土藏之窓より打も有_レ之、味方之衆各河端に船を引揚、大橋之こなたに高さ五尺餘之石垣を小楯に取、鐵炮打發被_レ申候、凡敵間八九町と覺申候、然るに坂井半介石垣江登り、大筒打發被_レ申候所、坂井半介兜之眞向を討拔れ討死被_レ致候、此旨幽齋様被_レ聞召、御使として千家七歲藤木猪右衛門被_レ參、町口へ火をはなち、敵も味方も相引に致され、各御城中江引入被_レ申候、坂井半介骸は、最初番屋江入置、後に御城中江入被_レ申候、又敵方數多打留被_レ申候、

同廿四日、東西より敵衆夥敷鐵炮打發被_レ申候、然共御城中江者左而已玉も參らず、尤御城中よりも夥敷鐵炮打發被_レ申候、

同廿五日、敵衆西之方より鐵炮頻に被_レ打發、巳之刻之頃搦手町口江押寄、夥敷大筒被_レ打發候に付、御城

中よりも鐵炮打發被_レ申候、因_ニ御下知_ニ宮津衆各搦手素戸口より討て出、暫時防戰被_レ致候所、御使として、石寺勘介、藤木猪右衛門之兩使急ぎ御人數引纏、御城中江可_ニ引退_ニ段御意に付、各御城中に入、持口相固被_レ申候所、敵衆大橋通を一文字に押寄來候所、兼て大橋之渡り板貳三間程も打破置候に付、敵衆川端に扣、鐵炮打發被_レ申候所、小野木縫殿介殿之人數、松山權兵衛御預之大草櫓を目當に大筒被_ニ打發_ニ候、妙庵様より御使として、小林勘右衛門を以、北村勘太郎江被_ニ仰渡_ニ候者、大草櫓江_ニ罷越_ニ、松山權兵衛申談、大筒打發小野木勢退_レ候へとの御意に付、北村勘太郎小林勘右衛門同道にて、大草櫓へ罷越、松山權兵衛兩人にて大筒打發被_レ申候所、七八人打倒し被_レ申候と、殘る敵衆散々に引退れ被_レ申候、七八人之内、壹人は士大將と相見へ、黒き兜に黒革威之鎧着て幟被_レ指申候、大手には、北村父子三人相詰、大手竝之御櫓には、荒木善兵衛、丸山助左衛門、宮部市左衛門、同所右之方御櫓には、大塚源次、佐野三之丞、加藤新介等也、各御預り之持場要害堅固に相守被_レ居候所、小出播磨守殿山崎左馬介殿之人數幟押建發_ニ関音_ニ、大手杉之馬場江

押寄來候に付、北村石見入江淡路等諸將へ御下知を相傳へ大手竝之御櫓狭間々々より夥敷鐵炮被_ニ打發_ニ候所、先駈被_レ致候山崎左馬介殿之昇指之武者七八人打倒被_レ申候所、跡勢進兼、道路に立止り、或は溝にかがみ、又は木陰にすくみ、木の切かぶを小櫓に取、矢玉を防ぎ被_レ居候躰に見受申候、然るに赤松左兵衛殿之軍兵、赤白段々筋之昇押立、幌武者之一騎木陰より顯れ出、大手杉之馬場口江馬を駈足に進め、あなたこなたへ馬を順逆に乗廻し、堀溝木陰にかゝみ引簾たる者共を引纏、馬上に探を取、黒き兜に卯之花威之鎧着て、幌は赤白段々筋、幌の出しは同色にて、二ッはこまに蛇の目有_レ之、馬は鹿毛共栗毛共見へわがち不_レ申候、御城中よりねらい打に夥敷鐵炮被_ニ打發_ニ候得共、運強打所之玉中り不_レ申、泰然として被_ニ引退_ニ申候、此仁後にぞ思ひあはすれば、寄手之衆散亂之後被_ニ召抱_ニ候、赤松左兵衛尉殿之物頭役井門龜右衛門重行にて有ける、後豐前江被_ニ召連_ニ候、豊前にて被_ニ物語_ニ候由に承申候、今日之合戰敵衆敗北、手負死人舉てかぞへがたし、味方は手負候者も無_レ之候、今日有_レ功之者、宮津衆各北

村勘太郎、松山權兵衛、大塚源次、北村勘三郎、佐野三之丞、加藤新介等也、扱又今晚搦手より久代右近右衛門久代太之助申達預取て差上られ候、大手にても大塚源次岡本源内に申達預取て被差上候、

同廿六日敵衆鎮り何之沙汰も無之所、申の刻頃東之方より敵將杉原伯耆守殿、別所豊後守殿、西之方よりは谷出羽守殿、石川備後守殿、長谷川丹後守殿、藤掛三河守殿、川勝右兵衛尉殿等之軍勢、發閔音御城間近く被攻寄候に付、御城中之面々要害堅固に相守、各持口御櫓狭間々々より鐵炮釣瓶打に被打發候所、敵衆楯之板或は竹束をもつて被攻寄候に付、北村石見入江淡路等諸將江御下知を傳へ候に付、大手よりは嶺山衆、各搦手よりは宮津衆、各身命を投捨、各功を勵み働れ候、敵衆容易に進兼、暫時ためらふ所に、大筒中筒取交被打發申候、敵衆敗北して散々に被引退申候、

北村勘太郎、工夫を勘考して射貫玉を拵、松田忠右衛門を以入御覽候所、殊之外御感被遊、則忠右衛門江被仰付、諸將江玉配りして、様子を違ひ被打發候所、敵衆容易に寄兼、自是して八月申迄はしらみ

あい、させるせりあいは無之候、

八月中頃より敵衆東西に石火矢を仕懸被申候、東之方は二つ橋川端に柵を結、堤を小楯に取、箕田甚之丞御預り之やそぐ櫓を目當に敵衆番手替に被打發候、西之方は大橋向に柵を結、大川端之土手を小楯に取、松山權兵衛御預り之大草櫓を目當に被打發候、後には櫓を打破被申候、東之方は數多被打發候へ共、皆玉は越して、壹つ櫓に當り、塀幾重も打破、後之塀扣柱に中りて玉留りしを、物見之衆彫出し見候へば、其玉壹貫三百目有之候由噂承申候、

忠興様去る七月上杉景勝卿退治之御先陣として此表御出馬、下野國小山に御宿陣被爲在候所、石田三成殿因謀叛、家康様御廻軍、九月十四日濃州へ御着陣、忠興様石田征伐被爲蒙御先陣之列、同赤坂江御着、九月末に赤坂より御籠成之御見舞御使、中住五郎左衛門、小嶋六左衛門、此表御城近江被參候所、敵番嚴敷、容易御城中江可忍入一鉢無之、雨使迷惑被致居候所、元來郷里之事に候得者、篤と様子を窺ひ、海邊へ廻り、鯉と申所より夜半之頃搦手へ相廻り、北之御門打叩候所、宮津衆各要害堅固に相守、容易に可

入鉢無_レ之故、關東より之御使之由申達、漸に忍入、御書被_ニ差上_ニ候由、後に中住五郎左衛門尊被_レ致候段及_レ承申候、

御城中よりは、法師雲龍齋、當時此表之御様子忠興様江可_ニ申上_ニと關東を志し、竊に御城中を忍出、夜に日に關東江到着、忠興様江御目見、田邊御籠城之趣逐一被_ニ申上_ニ候由、然るに此旨如何して敵方洩聞候哉、御城東西南北江一夜之内に御城より五町計も置て、一丈毎に柱を建返り菱垣虎落を結、竹繩にて結、一町毎に番屋を建、海手磯邊の方には虎落竹を結廻し、福井之沖には番船數艘嚴重に相構、石火矢等被_ニ打發_ニ候に付、御城中之面々無_ニ油斷_ニ各持口相固め御櫓狭間より鐵炮被_ニ打發_ニ候、

關東御勝利被_レ爲_ニ在候段寄手之衆被_レ及_ニ聞、彼是百日餘りも被_レ攻候敵衆追々退散被_レ致候、從_ニ禁中様_ニ勅使、八條様より家老職大石勘介殿御書を以御城中に入、幽齋様御對面、種々御變應御料理等被_レ進、其後八條様へ幽齋様御自筆之古今集江短冊壹枚御添御進上被_レ遊候、右御歌、

いにしへもいまかはらぬ世の中に

こゝろのたねを残すことの葉

石田治部小輔殿依_レ被_ニ誅罰_ニ此表寄手之衆退散、最其已前關東御勝利之由傳聞、石火矢其餘軍器數多拾置、追々被_レ退候、

御城中之面々御本丸へ被_レ爲_ニ召、久々之防戰何れも太儀、各之軍功満足に被_ニ思召_ニ銘々屋敷へ出休息可_レ致旨被_レ仰出、夫々金銀齋木御手當被_ニ下置_ニ尙亦有_ニ功之面々には御懇之御意有_ニ之、拜領物等被_ニ仰付_ニ各元屋敷江出、俄に古屋敷江小屋打懸、一國泰平を奉賀候、幽齋様御落可_レ被_レ遊旨、此表には妙庵様可_レ被_レ爲_ニ入段被_ニ仰出_ニ無_ニ程幽齋様御當所御出馬、丹波國龜山江被_レ爲_ニ入、馬堀江御着陣、御要害尤堅固に相守候、忠興様には關ヶ原御勝利、石田三成殿被_ニ誅_ニ大手之晒物等被_レ遊_ニ御一覽_ニ之上、大津江御着被_レ遊候由注進有_ニ之、翌朝馬堀江御着、御陣を被_レ爲_ニ据、越中守様、與十郎様、玄蕃頭様、與一郎様、御四方様共幽齋様江御對面、萬端御物語相濟候て、龜山之城可_レ被_ニ攻落_ニ御覺悟之所、忠興様龜山に三日御在陣中、幽齋様江御訖被_ニ仰上_ニ且法印紹英卿よりも使者被_ニ差出_ニ旁幽齋様御仁恕以、龜山之城は其儘被_ニ差置_ニ自_ニ是同國福知山

江御軍勢を被_レ差向、無_レ程御着陣有_レ之、福知山城郭を取巻、諸將嚴重に被_二相構_一、小野木衆田邊江被_二取寄_一候、石火矢此度爰元江御引寄、福知山大手へ差向、石火矢被_二打發_一候、諸將怨敵と心得、幽齋様江各奉_二身命_一、隨_二御軍令_一被_レ勵功、凡十日餘りも被_レ爲_レ攻候所、城中之士卒大半討死被_レ致候由傳へ承り候、不_レ歴日して守將小野木縫殿介殿城中より使者差出、頻と被_レ乞和、當城可_二明渡_一之旨再三依_レ被_二申越_一、幽齋様御聞届被_レ遊、福知山城附之品々無_レ恙御請取相濟、其後家康様江被_レ爲_レ及_二言上_一、小野木縫殿介殿江切腹被_二仰達_一、萬端相濟、丹後江御歸陣被_レ爲_レ遊候事、害手陣所之次第凡軍兵壹萬五千餘騎と傳へ承る

丹波福知山

小野木縫殿介公卿殿

御城より遙北子の方に當り、鰐採と申在郷の山之後より乾之方に、愛宕山有_レ之、御城より行程四拾町餘、愛宕山之麓に桂林寺と申禪寺有_レ之、御城より行程四十町、此地一圓敵將肝煎小野木衆爲_二本陣_一、此地一山小野木衆先勢出張、

小野木衆先勢

御城より西の方、圓城寺江行程三拾八町餘、此地兩將爲_二本陣_一、

初三藏殿と申候

谷出羽守衛友殿
石川備後守

越前

藤掛三河守永勝殿
長谷川丹後守勝富殿
川勝右兵衛秀氏殿

御城より西申酉之間に、白淨寺と申大寺、御城より行程凡三拾八九町餘、此地三將爲_二本陣_一、

讃岐高松

生駒雅樂頭一政殿

御城より遙西戌の方に當り、引出と申在郷、行程凡五拾町、此所爲_二本陣_一、

生駒衆先勢

御城より南之方、柳の水と申所、行程三町七八反餘、池之築山を小楯に取、生駒衆先勢出張、

羽柴家定卿也

二位法印紹英卿

御使番衆二頭

御城より南申の方に寄、七日市と申在郷、凡行程貳拾七八町餘、此所三將爲_二本陣_一、

家定卿三男

播州 木下右衛門太夫延俊殿

赤松左兵衛廣道殿

御城より南末の方江寄、九文明と申在郷、御城より凡行程三拾四五町、此地兩將爲本陣、

豊後杵筑

杉原伯耆守長房殿

丹後綾部

別所豊後守重友殿

御城より南東の方江寄、若狭街道に大内と申在郷、行程御城より凡貳拾四五町餘、此所兩將爲本陣、亦後には馬出口江張陣、

泉州岸和田

小出大和守吉政殿

攝州三田

山崎左馬介宗盛殿

御城より東巳之方に當り、若狭街道に大内と申在郷、竝に小城之古跡有之、御城より行程凡貳拾六七町餘、此所兩將爲本陣、

初森勘八殿

森勘八高政殿

高田河内守殿

豊後府内

早川主馬助長政殿

中川修理太夫秀成殿

初源助殿

竹中源助重門殿

御城より北之方、輝と申在郷、御城より行程凡三十

餘町、此邊五將爲本陣、

輝^{ヒトリ}探との間は入江海手明き也、亦福井ヶ浦には番船數艘嚴重に被^レ相構、敵衆替々大筒被^レ打發申候、

續々群書類從第三終

矢野 太郎
黒川 眞道 校
御橋 恵言

明治四十年九月二十日印刷

明治四十年九月廿五日發行

非賣品

東京市京橋區南傳馬町一丁目十二番地

國書刊行會代表者

編輯者
發行兼

市島謙吉

東京市本所區番場町四番地

印刷者

本間季男

東京市本所區番場町四番地

印刷所

內外印刷株式會社

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03043 6737